鳥取県埋蔵文化財センター調査報告書 67

一般国道９号（鳥取西道路）の改築に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書ＸＸＸⅦ

鳥取県鳥取市青谷町

青谷横木遺跡 Ⅰ

AO YA YOKO GI

遺構編

２０１８

鳥 取 県 埋 蔵 文 化 財 セ ン タ ー

道路 1 検出状況（北西から）

巻頭図版２

古代山陰道復元イラスト

１　Ｐ10区道路１路肩改修礫状況（北西から）

２　Ｐ10区道路１道路盛土土層断面（南東から）

１　Ｐ10区道路１敷葉・敷粗朶検出状況（北東から）

２　５・７区条里遺構検出状況（上が北東）

１　５区条里25検出状況（南から）

２　Ｐ12区道路１道路外盛土と条里37交点盛土内礫検出状況（北西から）

巻頭図版６

木　簡

『女子群像』板絵

巻頭図版８

木製祭祀具

序

山陰自動車道は、一般国道９号の交通渋滞の緩和、災害時や緊急時における緊急輸送路の確保を目的として、国土交通省により整備が進められている自動車専用道路です。この道路は山陰地方を東西に結ぶ大動脈として、地方都市間の連携を強化し、環日本海交流の一翼を担うことも期待されています。

鳥取県埋蔵文化財センターでは、鳥取市本高から同市青谷町を結ぶ事業区間である「鳥取西道路」の改築に伴う発掘調査を、（公財）鳥取県教育文化財団及び（公財）鳥取市文化財団とともに、平成２０年度から実施してきました。

本書に掲載した、鳥取市青谷町に位置する青谷横木遺跡は、平成２５年度から平成２７年度にかけて発掘調査を行い、縄文時代から近世にかけての遺構や遺物を数多く確認しました。

なかでも、奈良・平安時代では、古代山陰道と考えられる大規模な道路遺構や条里遺構が確認され、数多くの木簡や２万点を超える膨大な木製祭祀具が出土するなど、当時の地方社会を解明するうえで重要な成果を挙げています。また、古代山陰道では国内初となる柳の街路樹を発見し、『女子群像』が描かれた板絵は国宝高松塚古墳に次ぐ発見となるなど､我が国の飛鳥時代から平安時代を代表する遺跡としての評価が高まりました。

青谷横木遺跡では現地説明会に加えて、『女子群像』板絵の一般公開やシンポジウムを開催し、県内外から多くの方々に御参加いただき、その素晴らしさを実感していただきました。発掘調査により明らかとなった遺跡や出土品の情報を整理・検討し、その普及啓発に努めることも当センターの重要な業務であります。本書は、その調査結果を報告書としてまとめたものであり、こうした成果が郷土の歴史を解き明かしていく一助となることを期待しています。

本書をまとめるにあたり、国土交通省中国整備局鳥取河川国道事務所並びに、地元関係者の方々には、一方ならぬ御指導、御協力をいただきました。心から感謝し、厚く御礼申し上げます。

平成３０年３月

鳥取県埋蔵文化財センター
所　長　中　原　　斉

例　言

1　本報告書は、国土交通省中国地方整備局鳥取河川国道事務所の委託により、鳥取県埋蔵文化財センターが、一般国道９号(鳥取西道路)の改築に伴う埋蔵文化財発掘調査事業として、平成25年度から平成27年度にかけて行った青谷横木(あおやよこぎ)遺跡の発掘調査報告書である。

2　一般国道９号(鳥取西道路)の改築に伴う埋蔵文化財発掘調査のうち、鳥取県が受託したものは、県埋蔵文化財センターと県教育委員会(公益財団法人鳥取県教育文化財団へ再委託)が分担して実施した。

このため、両者が刊行する発掘調査報告書を一連のものとするため、巻次を下記のとおり振り分けている。

巻次 Ⅰ、Ⅱ、ＸＸＸⅡ～：発行者　鳥取県埋蔵文化財センター

巻次 Ⅲ～ＸＸＸⅠ：発行者　鳥取県教育委員会

なお、このほかに一部の発掘調査については公益財団法人鳥取市文化財団が受託し実施したものがある。

3　本報告書に収載した遺跡の所在地及び調査面積は以下のとおりである。

鳥取市青谷町青谷　調査総面積：14884.9　㎡

表１　調査区別平面積

調査区名	平面積	調査年度	調査区名	平面積	調査年度	調査区名	平面積	調査年度
１区	348.8㎡	平成 25 年度	Ｐ１区	278.6㎡	平成 27 年度	Ｐ９区	278.6㎡	平成 27 年度
２区	400㎡	平成 25 年度	Ｐ２区	278.6㎡	平成 27 年度	P10 区	278.6㎡	平成 27 年度
３区	563.4㎡	平成 25 年度	Ｐ３区	278.6㎡	平成 27 年度	P11 区	323.5㎡	平成 27 年度
４区	105㎡	平成 25 年度	Ｐ４区	278.6㎡	平成 27 年度	P12 区	559.1㎡	平成 26・27 年度
５区	712.7㎡	平成 25 年度	Ｐ５区	278.6㎡	平成 27 年度	P13 区	596.7㎡	平成 26 年度
６区	685.8㎡	平成 25 年度	Ｐ６区	278.6㎡	平成 27 年度	P14 区	518.1㎡	平成 26 年度
７区	898.9㎡	平成 25 年度	Ｐ７区	328.4㎡	平成 27 年度	P15 区	572.0㎡	平成 26 年度
８区	538.7㎡	平成 25 年度	Ｐ８区	257.1㎡	平成 27 年度	P16 区	697.9㎡	平成 26 年度
９区	2000㎡	平成 25 年度						
10 区	2550㎡	平成 25 年度						

4　本報告書の執筆及び編集は濵隆造、下江健太、福島雅儀、八峠興、原田克美、坂本嘉和、梅村大輔(以下、「調査担当職員」)が分担して行った。執筆者名は、目次に記した。

5　発掘調査のうち、平成26年度のＰ16区、平成27年度のＰ１～12区の調査は支援業務委託を以下のとおり実施し、掘削作業や記録作業、測量作業は埋蔵文化財センターの指示のもと、支援業者が行った。

表２　支援業務体制

調査区名	調査年度	支援業者
Ｐ１～３区	平成 27 年度	株式会社大成エンジニアリング・株式会社ダイニチ技研共同企業体
Ｐ４・５区	平成 27 年度	株式会社アート
Ｐ６区	平成 27 年度	株式会社アコード
Ｐ７～９区	平成 27 年度	株式会社イビソク・株式会社ティー・エム・エス共同企業体
Ｐ 10 ～ 12 区	平成 27 年度	株式会社アート・株式会社大地企画共同企業体
Ｐ 16 区	平成 26 年度	株式会社アート

6　本報告書に掲載した遺物の実測・浄書は埋蔵文化財センターが行った他、土器や木製品の一部について、業者委託により下記のとおり実施した。また、遺構図のトレースについても一部業者委託とした。

平成28年度　木製祭祀具のトレース：株式会社エイ・テック

Ｐ13 ～ 15区遺構図トレース：株式会社アコード

平成29年度　土器のトレース・編集図：株式会社アコード

木製品の実測・トレース・編集図：株式会社ナカシャ・クリエイテブ

7　本報告書で使用した遺物写真は調査担当職員が撮影した。ただし、木簡や墨書土器、板絵、人形の一部の写真撮影(赤外線写真を含む)は独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所の中村一郎氏による。

8　発掘調査によって作成された図面・写真などの記録類、出土遺物は鳥取県埋蔵文化財センターで保管している。

9　本報告書で示す標高は、東京湾平均海面(T.P.)を基準としている。本文中ではT.P.は省略している。方位は公共座標北を示し、磁北は、座標北に対し、7° 30′ 西偏する。なお、X：、Y：の数値は世界測地系に準拠した公共座標第Ⅴ系の座標値である。

10　本報告書に掲載した地形図には、下記の地図を使用した。

「鳥取市都市計画図」鳥取市作成、「1/25,000地形図『鹿野』『浜村』『青谷』『松崎』」国土地理院発行

11　遺構や遺物の評価にあたり下記の方々に御指導いただいた(敬称略、所属は当時)。また、百橋明穂氏と渡辺晃宏氏、保阪善真氏には玉稿を賜った(第6・7章)。記して深謝いたします。

官衙遺跡としての評価に係る調査指導：稲田孝司(岡山大学名誉教授)・山中敏史(独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所名誉研究員)

道路遺構に関する調査指導：近江俊秀(文化庁記念物課文化財調査官)・木本雅康(長崎外国語大学外国語学部教授)
工楽善通(大阪府狭山池博物館館長)・小山田宏一(奈良大学文学部教授)
藤村尚(鳥取大学名誉教授)

木製祭祀具・祭祀遺構に関する調査指導：大平茂(ひょうご歴史学研究室研究員)

木簡・墨書土器の釈読指導：渡辺晃宏(独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所副所長)

板絵・仏教関連遺物に関する調査指導：百橋明穂(神戸大学名誉教授)

堆積環境に関する調査指導：村田泰輔(独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所アソシエイトフェロー)

施釉陶器に関する調査指導：高橋照彦(大阪大学大学院文学研究科教授)

須恵器に関する調査指導：岡田裕之(山口県埋蔵文化財センター主任)

獣骨に関する調査指導：保坂善真(鳥取大学農学部教授)・門脇隆志(公益財団法人鳥取県教育文化財団調査室文化財主事)

12　遺跡の評価にあたり下記機関と受託調査研究を行った。

独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所(以下、奈良文化財研究所)：(1)木簡の釈読や保存処理、墨書土器の釈読に係る調査研究、(2)遺跡の景観復元に係る調査研究

国立大学法人鳥取大学：獣骨に関する形質学的研究

なお、木簡や墨書土器の釈読にあたっては奈良文化財研究所の馬場基、山本崇、桑田訓也、山本祥隆の諸氏にも御指導、御助言いただいた。

13　本報告にあたり、自然科学分析(放射性炭素年代測定、樹種・種実同定、塗膜分析、土壌分析)及び鉄製品と木製品の保存処理を業者委託により実施した。

14　現地調査及び報告書作成にあたっては、下記の方々に御助言、御支援及び御協力をいただいた。記して深謝いたします(順不同)。

国土交通省中国地方整備局鳥取河川国道事務所、鳥取県土整備局鳥取県土整備事務所、鳥取市教育委員会、大橋泰夫、増田美子、猪熊兼勝、西谷正、眞田廣幸、中村太一、梶谷亮治、深澤芳樹、降幡順子、田尻義了、独立行政法人国立文化財機構独立行政法人奈良文化財研究所、網伸也、広島県府中市教育委員会、和田一之輔、浦容子、森田喜久男、関和彦、鈴木靖民、星野安治、江角健、花谷浩、宍道年弘、大日方克己、小田裕樹、渡辺貞幸、兵庫県立考古博物館、高島英之、米田克彦、角田徳幸

凡　例

1　遺物の注記における遺跡名には「ヨコキ」の略語を用い、その前に調査年度を付すことで「H25ヨコキ１」などと『表記した。また、併せて「遺構名、遺物番号、日付」を記入した。

2　青谷横木遺跡では本調査における遺構番号（新）は発掘調査時のもの（旧）と変更している。新旧の遺構名・番号の対応は遺構名新旧対照表（表３）で示すとおりである。

3　本書における実測図の縮尺については、特殊なものを除き基本的に以下の縮尺としている。

遺構図　調査区土層断面：1/60・1/80、各調査区遺構分布図：1/150・1/200・1/300、道路遺構・条里遺構：1/80　1/100、溝・河道：1/80・1/100、土坑1/40

遺物実測図　土器・土製品：1/2・1/4、石器・玉製品：1/1・3/4・1/2・1/3、金属器：１/2、1/3、骨角器：2/3・１/3、木製祭祀具：1/2・1/4、木製品：1/2・1/4・1/6・1/8・1/10、木簡：1/2

4　本書における土層名称は、基本的には『新版 標準土色帖』による。

5　本書における遺物番号は算用数字を種別毎に付している。ただし、土器以外の遺物には数字の先頭に以下のアルファベット等を付している。木簡については「１号木簡、２号木簡・・・」などとした。

石器：Ｓ、木製品：Ｗ、鉄製品：Ｆ、銅製品：Ｂｒ、ガラス製品：Ｇ、骨角器：Ｂｏ

6　遺物実測図の断面は須恵器を黒塗り、施釉陶器を灰色（アミかけ60％）とし、それ以外のものは白抜きで示している。また、遺構図や遺物実測図におけるトーン及び記号は、各図に凡例を示す以外は下記のとおりである。

遺構図　土器・土製品：●　　木製品：□　　石器：△　　金属器：★　　骨角器・獣骨：⊗

地山：　　砂層：　　礫層：　　貝層：

遺物実測図　　炭化範囲：　　赤色顔料範囲：　　漆範囲：　　墨範囲：

→：ケズリの方向（砂粒の動き）　⟷：石器の使用痕範囲　　⟝：石器の側縁の潰れ範囲

7　遺物観察表の法量記載における※は推定復元値、△は現存値を示す。

8　本報告書における遺構・遺物の時期決定については下記の文献を参照した。

清水真一　1992 「因幡・伯耆地域」『弥生土器の様式と編年－山陽・山陰編－』木耳社

牧本哲雄　1999 「古墳時代の土器について」『長瀬高浜遺跡Ⅷ・園第６遺跡』財団法人鳥取県教育文化財団

田辺昭三　1981 『須恵器大成』角川書店

岡田裕之・土器検討グループ　2010 「出雲地域における古代須恵器の編年」『出雲国の形成と国府成立の研究』島根県古代文化センター

岡田裕之・八峠興　2014 「鳥取における古代から中世前期の土器編年－須恵器と回転台土師器を基に－」『調査研究紀要５』鳥取県埋蔵文化財センター

西弘海　1986 『土器様式の成立とその背景』真陽社

表３　新旧遺構対照表

調査区	新遺構名		旧遺構名	調査区	新遺構名	旧遺構名	調査区	新遺構名	旧遺構名	調査区	新遺構名	旧遺構名
Ｐ１区	石積１		１石積み	Ｐ３区	木造構造物２	15 木造構造物	Ｐ８区	条里 21	３盛土	P12 区	盛土 30	７盛土
Ｐ１区	水路１		２溝	Ｐ３区	河道１	16 流路	Ｐ８区	条里 22	４盛土	P12 区	河道 14	10 溝最上層
Ｐ１区	柱列１	柱穴１	５掘立柱建物Ｐ１	Ｐ３区	盛土３	18 盛土	Ｐ８区	条里 23	５盛土	P12 区	河道６	10 溝上層
Ｐ１区	柱列１	柱穴２	５掘立柱建物Ｐ２	Ｐ３区	河道２	21 流路	Ｐ８区	条里 24	６盛土	P12 区	河道 15	10 溝中層
Ｐ１区	柱列１	柱穴３	５掘立柱建物Ｐ３	Ｐ３区	盛土４	19 盛土・20 整地遺構	Ｐ８区	溝 10	７溝	P12 区	溝 12	12 溝
Ｐ１区	柱列２	柱穴４	64 掘立柱建物旧４SBP３	８区	集石３	礫群１	Ｐ８区	畦畔 14	８畦	P12 区	杭列 15	17 杭列
Ｐ１区	柱列２	柱穴５	64 掘立柱建物７柱穴	８区	杭列５	杭列１	Ｐ８区	畦畔 15	９畦	P12 区	杭列 16	19 杭列
Ｐ１区	柱列２	柱穴６	64 掘立柱建物 58 柱穴	Ｐ３区	杭群１	23 杭群	Ｐ８区	畦畔 16	10 畦	P12 区	河道 18	10 溝下層
Ｐ１区	柱列２	柱穴７	64 掘立柱建物 62 柱穴	Ｐ３区	杭群２	24 杭群	Ｐ８区	畦畔 17	11 畦	P12 区	畦畔 18	13 畦
Ｐ１区	柱列３	柱穴８	65 掘立柱建物 19 柱穴	Ｐ３区	杭群３	25 杭群	Ｐ８区	土坑５	12 土坑	P12 区	河道 19	10 溝最下層
Ｐ１区	柱列３	柱穴９	65 掘立柱建物 10 柱穴	Ｐ４区	盛土５	２盛土	５区	条里 25	道路遺構	P12 区	河道 20	15 溝
Ｐ１区	柱列３	柱穴 10	65 掘立柱建物 29 柱穴	Ｐ４区	条里 11	４盛土	５区	条里 26	畔２	P12 区	木造構造物 10	18 木造構造物
Ｐ１区	柱列３	柱穴 11	65 掘立柱建物 51 柱穴	Ｐ４区	条里 12	１盛土	５区	盛土 21	畔１	P12 区	耕地段差１	14 耕地段差
Ｐ１区	柱列３	柱穴 12	65 掘立柱建物 30 柱穴	Ｐ４区	条里 13	３盛土	５区	盛土 22	畔３	P12 区	杭群８	16 杭列
Ｐ１区	柱列３	柱穴 13	65 掘立柱建物 32 柱穴	Ｐ４区	畦畔８	５木造構造物	５区	盛土 23	畔４	１区	条里 38	盛土
Ｐ１区	柱列４	柱穴 14	66 掘立柱建物 21 柱穴	Ｐ４区	畦畔９	７盛土	５区	溝 11	溝１	１区	条里 39	盛土
Ｐ１区	柱列４	柱穴 15	66 掘立柱建物 20 柱穴	Ｐ４区	畦畔 10	８盛土	５区	木造構造物４	木製構造物	１区	条里 40	盛土
Ｐ１区	柱列４	柱穴 16	66 掘立柱建物 30 柱穴	Ｐ４区	畦畔 11	９盛土	Ｐ９区	石積２	１石積	P13 区	道路１	５盛土
Ｐ１区	柱列４	柱穴 17	66 掘立柱建物 27 柱穴	Ｐ４区	畦畔 12	12 盛土	Ｐ９区	道路１	６石敷・７盛土	P13 区	道路１側溝	６溝
Ｐ１区	柱列４	柱穴 18	66 掘立柱建物 26 柱穴	Ｐ４区	畦畔 13	18 盛土	Ｐ９区	道路１側溝	４溝	P13 区	道路１外盛土	４盛土
Ｐ１区	柱列４	柱穴 19	66 掘立柱建物旧 24SBC３	Ｐ４区	溝５	10 溝	Ｐ９区	道路１道路外盛土	５盛土	P13 区	条里 38	１盛土
Ｐ１区	柱列４	柱穴 20	66 掘立柱建物 28 柱穴	Ｐ４区	溝６	11 溝	Ｐ９区	条里 25	３盛土	P13 区	条里 39	２盛土
Ｐ１区	柱穴 21		38 柱穴	Ｐ４区	河道３	13 流路	Ｐ９区	河道 10	13 溝	P13 区	盛土 31	３盛土
Ｐ１区	柱穴 22		旧 SB２　4C１	Ｐ４区	河道４	14 流路	Ｐ９区	河道６	10 溝	P13 区	河道６	７溝
Ｐ１区	柱穴 23		旧 24SB　A１	Ｐ４区	河道５	15 流路	Ｐ９区	河道 11	10 溝古段階	P13 区	溝 13	８溝
Ｐ１区	柱穴 24		51 柱穴	Ｐ４区	杭群４	17 杭群	Ｐ９区	河道 12	11 溝	P13 区	杭列 17	14 杭列
Ｐ１区	柱穴 25		旧 24SB　A２	７区・Ｐ５区	条里 14	１盛土	Ｐ９区	盛土 24	12 護岸状遺構	P13 区	杭列 18	15 杭列
Ｐ１区	柱穴 26		旧 24SB　B１	７区・Ｐ５区	条里 15	２盛土	P10 区	道路１	１道路	P13 区	杭列 19	16 杭列
Ｐ１区	柱穴 27		14 柱穴	７区・Ｐ５区	盛土６	３盛土	P10 区	道路１側溝	側溝	P13 区	杭列 20	17 杭列
Ｐ１区	柱穴 28		旧 24SB　A３	７区・Ｐ５区	盛土７	４盛土	P10 区	道路１道路外盛土	外盛土	P13 区	杭列 21	18 杭列
Ｐ１区	柱穴 29		41 柱穴	７区・Ｐ５区	盛土８	５盛土	P10 区	条里 27	２盛土	P14 区	道路１	12・16・19 盛土
Ｐ１区	柱穴 30		59 柱穴	７区・Ｐ５区	盛土９	６盛土	P10 区	条里 28	３盛土	P14 区	道路１外盛土	８盛土
Ｐ１区	柱穴 31		22 柱穴	７区	盛土 10	土手状遺構７	P10 区	条里 29	４盛土	P14 区	条里 41	１盛土
Ｐ１区	柱穴 32		31 柱穴	Ｐ５区	杭列６	９杭列	P10 区	河道 13	５溝最上層（石列外）	P14 区	条里 42	14 盛土
Ｐ１区	柱穴 33		Ｐ１	Ｐ５区	杭列７	７杭列	P10 区	河道 14	５溝最上層	P14 区	河道 14	18 溝
Ｐ１区	柱穴 34		61 柱穴	Ｐ５区	杭列８	８杭列	P10 区	河道６	５溝	P14 区	河道６	13 溝
Ｐ１区	柱穴 35		Ｐ２	Ｐ５区	溝７	10 溝	P10 区	土坑６	６土坑	P14 区	杭列 22	17 杭列
Ｐ１区	柱穴 36		52 柱穴	Ｐ５区	木造構造物３	11 矢板列	P10 区	盛土 25	８盛土	P14 区	杭群９	20 杭群
Ｐ１区	柱穴 37		60 柱穴	Ｐ５区	土坑４	12 落ち込み	P10 区	盛土 26	10 盛土	P14 区	杭群 10	22 杭群
Ｐ１区	杭列１		６杭・56 杭	Ｐ５区	小穴１～４	13 ～ 16 ピット	P10 区	河道 15	９溝	P15 区	道路２	16 盛土
Ｐ１区	杭列２		23 杭列	Ｐ５区	杭群５	17 杭群	P10 区	土坑７	７土坑	P15 区	条里 43	１石敷
Ｐ１区	土坑１		９集石	Ｐ６区	条里 16	４盛土	P10 区	石敷１	11 石敷	P15 区	条里 44	11 畔
Ｐ１区	溝１		11 溝	Ｐ６区	盛土 11	１盛土	３区	条里 30	（盛土１）	P15 区	盛土 32	２畔
Ｐ１区	溝２		17 流路	Ｐ６区	盛土 12	２盛土	３区	条里 31	（盛土２）	P15 区	盛土 33	６畔
Ｐ１区	溝３		36 流路	Ｐ６区	盛土 13	３盛土	３区	条里 32	（盛土３）	P15 区	盛土 34	９畔
Ｐ１区	土坑２		63 土坑	Ｐ６区	盛土 14	５盛土	P11 区	道路１	１道路	P15 区	溝 14	４溝
10 区	包含層		礫盛遺構	Ｐ６区	盛土 15	11 盛土	P11 区	道路１柱列	７掘立柱建物	P15 区	河道６	14 溝･14- ２溝
10 区	条里１		道路遺構	Ｐ６区	盛土 16	９盛土	P11 区	道路１側溝	側溝	P15 区	阿古山 24 号墳	阿古山 24 号墳
10 区	条里２		畔１	Ｐ６区	盛土 17	10 盛土	P11 区	道路１道路外盛土	外盛土	P15 区	木造構造物 11	木製構造物１
10 区	集石１		集石遺構	Ｐ６区	河道６	12 流路	P11 区	条里 33	２盛土	P15 区	木造構造物 12	木製構造物２木器集中
Ｐ２区	木器溜まり１		-	Ｐ６区	盛土 18	15 整地土ａ・ｂ	P11 区	条里 30	３盛土	P15 区	集石４	15 集石
Ｐ２区	木器溜まり２		-	Ｐ６区	杭列９	13 杭列	P11 区	条里 34	５盛土	P15 区	杭列 23	17 杭列
Ｐ２区	杭列３		１杭列	Ｐ６区	盛土 19	25 盛土	P11 区	盛土 27	４盛土	P15 区	杭列 24	18 杭列
Ｐ２区	溝４		２流路	Ｐ６区	杭群６	17 杭群	P11 区	河道 16	８溝	P16 区	道路２	７道路
Ｐ２区	木造構造物１		３杭列・４木道	Ｐ６区	杭列 10	14 杭列	P11 区	河道 14	６溝最上層	P16 区	条里 45	４畔
Ｐ２区	木器溜まり３			Ｐ６区	杭群７	28 杭群	P11 区	木造構造物５	１道路木造構造物	P16 区	盛土 32	２畔
９区	畦畔１		畦２(新畦)	Ｐ６区	河道７	33 流路	P11 区	河道６	６溝	P16 区	盛土 35	３畔
９区	集石２		３礫群	６区	条里 17	-	P11 区	木造構造物６	10 木造構造物	P16 区	集石５	５集石
９区	畦畔２		畦１(旧畦)	６区	条里 18	-	P11 区	整地土１	橙色粘土範囲	P16 区	集石６	６集石
９区	条里３		４盛土	６区	条里 19	-	P11 区	河道 15	15 溝	P16 区	土坑９	１土坑
９区	条里４		５盛土	Ｐ７区	石積２	１石積	P11 区	木造構造物７	11 木造構造物	P16 区	河道６	８溝
Ｐ３区	条里５		１盛土	Ｐ７区	道路１	２盛土	P11 区	木造構造物８	14 木造構造物	P16 区	杭列 25	10 杭列
Ｐ３区	条里６		３・４盛土	Ｐ７区	道路１側溝	３溝	P11 区	木造構造物９	16 木造構造物	P16 区	集石７	12 集石
Ｐ３区	条里７		26 盛土	Ｐ７区	道路１道路外盛土	７盛土	P11 区	杭列 12	12 杭列	P16 区	集石８	13 集石
Ｐ３区	条里８		６盛土	Ｐ７区	条里 18	４盛土	P11 区	杭列 13	13 杭列	P16 区	土坑 10	９土坑
Ｐ３区	条里９		７・８盛土	Ｐ７区	条里 20	５盛土	P11 区	土坑８	18 土坑	P16 区	杭列 26	17 杭列
Ｐ３区	条里 10		５盛土	Ｐ７区	条里 17	６盛土	P11 区	盛土 28	19 盛土	P16 区	杭列 27	20 杭列
８区	盛土１		盛土１	Ｐ７区	溝８	８溝	P11 区	杭列 14	20 杭列	P16 区	河道 21	18 溝
Ｐ３区	盛土２		２盛土	Ｐ７区	河道８	９溝	P11 区	河道 17	21 溝	P16 区	集石９	15 集石
８区	土坑３		落ち込み状遺構１	Ｐ７区	盛土 20	10 畦	P12 区	道路１	８石敷	P16 区	杭列 28	14 杭列
Ｐ３区	畦畔３		９盛土	Ｐ７区	河道６	12 溝	P12 区	道路１側溝	４溝	P16 区	杭列 29	16 杭列
Ｐ３区	畦畔４		10 盛土	Ｐ７区	河道９	13 溝	P12 区	道路１外盛土	３盛土	P16 区	杭列 30	19 杭列
Ｐ３区	畦畔５		11 盛土	Ｐ７区	溝９	14 溝	P12 区	条里 35	２石敷	P16 区	杭列 31	21 杭列
Ｐ３区	畦畔６		13 盛土	Ｐ７区	杭列 11	15 杭列	P12 区	条里 36	５盛土	P16 区	杭列 32	11 杭列
Ｐ３区	畦畔７		14 盛土	Ｐ８区	道路１	１盛土	P12 区	条里 37	９盛土			
Ｐ３区	杭列４		12 杭列	Ｐ８区	道路１側溝	２溝	P12 区	盛土 29	６盛土			

目　次

（第１分冊：遺構編）

巻頭図版
序
例言
凡例
目次
第１章　調査の経緯
第１節　調査に至る経緯……（濵・坂本）１
第２節　調査の方法と経過……（濵・坂本）２
第３節　調査体制……８
第２章　位置と環境
第１節　地理的環境……（八峠）11
第２節　歴史的環境……（八峠）11
第３章　遺跡の基本層序と概要
第１節　遺跡の地形と古環境……（坂本）15
第２節　基本層序……（坂本）16
第３節　遺跡の概要……（坂本）19
第４章　各調査区の成果
第１節　Ｐ１区の調査……（坂本）27
第２節　10区の調査……（福島・梅村）40
第３節　Ｐ２区の調査……（坂本）49
第４節　９区の調査……（原田）56
第５節　８区・Ｐ３区の調査……（原田）60
第６節　Ｐ４区の調査……（原田）86
第７節　７区・Ｐ５区の調査……（八峠）105
第８節　Ｐ６区の調査……（八峠）126
第９節　６区の調査……（梅村）146
第10節　Ｐ７区の調査……（梅村）149
第11節　Ｐ８区の調査……（梅村）168
第12節　５区の調査……（下江）179
第13節　４区・Ｐ９区の調査……（梅村）187
第14節　Ｐ10区の調査……（坂本）203
第15節　３区の調査……（坂本）231
第16節　２区・Ｐ11区の調査……（坂本）233
第17節　Ｐ12区の調査……（坂本）266
第18節　１区・Ｐ13区の調査……（梅村）294
第19節　Ｐ14区の調査……（原田）310
第20節　Ｐ15区の調査……（下江）324
第21節　Ｐ16区の調査……（下江）344

（第２分冊：遺物編）

目次
凡例
第５章　出土遺物
第１節　土器・土製品…… （八峠・梅村）1
第２節　木製祭祀具…… （坂本）81
第３節　木製品…… （坂本）159
第４節　出土文字資料…… （梅村）237
第５節　金属器…… （坂本）272
第６節　骨角器…… （坂本）276
第７節　玉製品・石器…… （坂本）277
遺物観察表…… 282
報告書抄録

（第３分冊：自然科学分析・総括編）

目次
凡例
第６章　自然科学分析
第１節　平成25年度放射性炭素年代測定…… （株式会社加速器分析研究所）1
第２節　平成25年度放射性炭素年代測定及び種実同定…… （株式会社加速器分析研究所）5
第３節　平成26年度木製品樹種同定…… （株式会社吉田生物研究所）23
第４節　平成27年木製品樹種同定…… （株式会社東都文化財保存研究所）29
第５節　平成28年度放射性炭素年代測定・樹種・植物遺体同定…… （株式会社パレオ・ラボ）30
第６節　平成28年度木製品樹種同定及び塗膜分析…… （株式会社東都文化財保存研究所）106
第７節　平成29年度木製品樹種同定及び塗膜・顔料分析（一般社団法人文化財科学研究センター）122
第８節　平成29年度木製祭祀具の放射性炭素年代測定及び樹種同定…（株式会社パレオ・ラボ）137
第９節　土壌分析…… （株式会社古環境研究所）151
第10節　青谷横木遺跡出土動物遺存体について…… （門脇隆志）162
第11節　青谷横木遺跡より出土した動物骨のミトコンドリアDNA D-loop領域の塩基配列解析
…… （鳥取大学農学部　保坂善真・割田克彦）171
報告書抄録
第７章　総　括
第１節　出土土器の検討…… （梅村）175
第２節　青谷平野における駅路の構造と特質…… （坂本）184
第３節　青谷平野における条里地割の復元…… （坂本）206
第４節　木製祭祀具からみた律令的祭祀の特徴…… （坂本）212
第５節　出土文字資料からみた青谷横木遺跡…… （奈良文化財研究所　渡辺晃宏）227
第６節　新発見の女子群像～鳥取県青谷横木遺跡出土の板絵～（神戸大学名誉教授　百橋明穂）244
第７節　総　括…… （坂本）254
報告書抄録

（第４分冊：写真図版編）

目次
写真図版
報告書抄録

挿図目次

第１図　鳥取西道路関係遺跡位置図…… 1
第２図　青谷横木遺跡調査地位置図…… 3
第３図　遺跡位置図…… 11
第４図　遺跡周辺地質図…… 12
第５図　周辺遺跡分布図…… 13
第６図　青谷平野の地形分類図…… 15
第７図　基本層序柱状図…… 17
第８図　縄文時代後・晩期遺構分布図…… 19
第９図　弥生時代前期～中期遺構分布図…… 21･22
第10図　弥生時代中期後葉～古墳時代前期遺構分布図…… 21･22
第11図　古墳時代中期～飛鳥時代遺構分布図…… 23･24
第12図　飛鳥時代～平安時代遺構分布図…… 23･24
第13図　Ｐ１区土層断面図（１）…… 28
第14図　Ｐ１区土層断面図（２）…… 29
第15図　Ｐ１区Ⅱ層相当上面遺構分布図…… 30
第16図　Ｐ１区石積１立面図…… 30
第17図　Ｐ１区Ⅳ層相当上面遺構分布図…… 31
第18図　Ｐ１区柱列１…… 32
第19図　Ｐ１区柱列２…… 32
第20図　Ｐ１区柱列３…… 33
第21図　Ｐ１区柱列４…… 34
第22図　Ｐ１区柱穴群…… 35
第23図　Ｐ１区溝１…… 36
第24図　Ｐ１区溝２…… 37
第25図　Ｐ１区溝３…… 38
第26図　Ｐ１区杭列１・２…… 38
第27図　Ｐ１区土坑１…… 39
第28図　Ｐ１区Ⅴ～Ⅶ層相当遺構分布図…… 40
第29図　Ｐ１区土坑２…… 40
第30図　10区北壁土層断面図…… 40
第31図　10区中央土層断面図…… 41
第32図　10区南壁土層断面図…… 42
第33図　10区Ⅴ層上面遺構分布図…… 43･44
第34図　10区条里１・２…… 46
第35図　10区条里１・２土層断面図…… 47
第36図　10区条里１粗朶検出状況図…… 48
第37図　Ｐ２区土層断面図…… 50
第38図　Ｐ２区Ⅳ層相当遺構分布図…… 51
第39図　Ｐ２区土層断面位置図…… 51
第40図　Ｐ２区Ⅶ～Ⅷ層相当遺構分布図…… 52
第41図　Ｐ２区溝４…… 53
第42図　Ｐ２区杭列３…… 53
第43図　Ｐ２区Ⅷ～Ⅸ層相当遺構分布図…… 54
第44図　Ｐ２区木造構造物１…… 55
第45図　Ｐ２区Ⅸ層相当遺構分布図…… 55
第46図　Ｐ２区編物状木製品出土状況図…… 55
第47図　９区土層断面図…… 57
第48図　９区遺構分布図…… 58
第49図　８区・Ｐ３区土層断面図（１）…… 61
第50図　８区・Ｐ３区土層断面図（２）…… 62
第51図　８区・Ｐ３区Ⅴ層上面遺構分布図（１）…… 63
第52図　８区・Ｐ３区Ⅴ層上面遺構分布図（２）…… 64
第53図　８区・Ｐ３区条里５～10・盛土１・２土層断面図…… 65
第54図　８区・Ｐ３区盛土１･土坑３土層断面図 …… 66
第55図　８区・Ｐ３区条里５～７…… 67
第56図　８区・Ｐ３区条里８～10 …… 68
第57図　８区・Ｐ３区条里８･10遺物出土状況図 …… 69
第58図　８区・Ｐ３区盛土１遺物出土状況図…… 70
第59図　８区・Ｐ３区Ⅴ層遺構分布図…… 73
第60図　８区・Ｐ３区畦畔３…… 74
第61図　８区・Ｐ３区畦畔４…… 74
第62図　８区・Ｐ３区畦畔５～７土層断面図…… 75
第63図　８区・Ｐ３区Ⅵ層上面遺構分布図…… 76
第64図　８区・Ｐ３区Ⅶ層上面遺構分布図…… 77
第65図　８区・Ｐ３区木造構造物２…… 78
第66図　８区・Ｐ３区河道１…… 78
第67図　８区・Ｐ３区Ⅷ層遺構分布図…… 79
第68図　８区・Ｐ３区盛土３土層断面図…… 80
第69図　８区・Ｐ３区河道２ …… 80
第70図　８区・Ｐ３区Ⅸ層上面遺構分布図 …… 81
第71図　８区・Ｐ３区Ⅸ層遺構分布図 …… 82
第72図　８区・Ｐ３区盛土４ …… 83
第73図　８区・Ｐ３区杭群１ …… 85
第74図　８区・Ｐ３区杭群２ …… 85
第75図　８区・Ｐ３区杭群３ …… 85
第76図　Ｐ４区土層断面図（１） …… 87
第77図　Ｐ４区土層断面図（２） …… 88
第78図　Ｐ４区Ⅳ層遺構分布図 …… 89
第79図　Ｐ４区盛土５ …… 90
第80図　Ｐ４区盛土５土層断面図 …… 90
第81図　Ｐ４区Ⅴ層上面遺構分布図 …… 91
第82図　Ｐ４区条里11 …… 92
第83図　Ｐ４区条里12 …… 93
第84図　Ｐ４区条里13 …… 94
第85図　Ｐ４区Ⅴ層遺構分布図 …… 95
第86図　Ｐ４区畦畔８ …… 96
第87図　Ｐ４区畦畔８土層断面図 …… 96
第88図　Ｐ４区畦畔９～11土層断面図 …… 97
第89図　Ｐ４区Ⅵ層上面遺構分布図 …… 99
第90図　Ｐ４区畦畔12 …… 100
第91図　Ｐ４区畦畔12・13土層断面図 …… 100
第92図　Ｐ４区溝５・６ …… 101
第93図　Ｐ４区河道３～５ …… 102
第94図　Ｐ４区河道３～５土層断面図 …… 103
第95図　Ｐ４区Ⅸ層遺構分布図 …… 104
第96図　Ｐ４区杭群４ …… 104
第97図　７区・Ｐ５区土層断面図（１） …… 106
第98図　７区・Ｐ５区土層断面図（２） …… 107
第99図　７区・Ｐ５区土層断面図（３） …… 108
第100図　７区・Ｐ５区Ⅴ層上面遺構分布図 …… 110
第101図　７区・Ｐ５区条里14・15・盛土６～10検出状況図 …… 111･112
第102図　７区・Ｐ５区条里14・15下層礫・粗朶検出状況図 …… 113
第103図　７区・Ｐ５区条里14・15・杭列６土層断面図 …… 114
第104図　７区・Ｐ５区盛土６ …… 115
第105図　７区・Ｐ５区盛土７・杭列７・８ …… 117
第106図　７区・Ｐ５区盛土８～10 …… 118
第107図　７区・Ｐ５区Ⅵ層上面遺構分布図 …… 120
第108図　７区・Ｐ５区溝７・木造構造物３ …… 121
第109図　７区・Ｐ５区Ⅶ層上面遺構分布図 …… 122
第110図　７区・Ｐ５区土坑４ …… 123
第111図　７区・Ｐ５区Ⅷ層上面遺構分布図 …… 124
第112図　７区・Ｐ５区小穴１～４ …… 125
第113図　７区・Ｐ５区Ⅸ層上面遺構分布図 …… 125
第114図　７区・Ｐ５区杭群５ …… 126
第115図　Ｐ６区土層断面図（１） …… 128
第116図　Ｐ６区土層断面図（２） …… 129
第117図　Ｐ６区Ⅳ層下面遺構分布図 …… 130
第118図　Ｐ６区条里16 …… 131
第119図　Ｐ６区盛土11・13・16 …… 132
第120図　Ｐ６区盛土11・13・16土層注記 …… 133
第121図　Ｐ６区盛土12・14・15・17 …… 134
第122図　Ｐ６区Ⅴ層上面遺構分布図 …… 136
第123図　Ｐ６区河道６土層断面図・杭列９ …… 137
第124図　Ｐ６区盛土18土層断面図 …… 138
第125図　Ｐ６区河道６・盛土18古段階 …… 139
第126図　Ｐ６区河道６・盛土18新段階 …… 140
第127図　Ｐ６区Ⅵ層上面遺構分布図 …… 142
第128図　Ｐ６区杭列10・杭群６・盛土19 …… 143
第129図　Ｐ６区Ⅶ層上面遺構分布図 …… 144
第130図　Ｐ６区杭群７ …… 145
第131図　Ｐ６区Ⅷ～Ⅸ層遺構分布図 …… 146
第132図　６区遺構分布図 …… 147
第133図　６区土層断面図 …… 148
第134図　Ｐ７区土層断面図（１） …… 150
第135図　Ｐ７区土層断面図（２） …… 151

第136図　Ｐ７区石積２ …… 152
第137図　Ｐ７区Ｖ層上面遺構分布図（１） …… 153
第138図　Ｐ７区道路１ …… 154
第139図　Ｐ７区道路１土層断面図 …… 155
第140図　Ｐ７区道路１側溝土層断面図 …… 155
第141図　Ｐ７区道路１道路外盛土 …… 156
第142図　Ｐ７区条里17・18・20 …… 157
第143図　Ｐ７区条里17粗朶検出状況図 …… 158
第144図　Ｐ７区Ｖ層上面遺構分布図（２） …… 159
第145図　Ｐ７区溝８ …… 159
第146図　Ｐ７区溝８肩部遺物出土状況図 …… 160
第147図　Ｐ７区盛土20 …… 161
第148図　Ｐ７区河道６ …… 162
第149図　Ｐ７区河道６杭 …… 163
第150図　Ｐ７区溝９土層断面図 …… 163
第151図　Ｐ７区河道９ …… 164
第152図　Ｐ７区河道９土層断面図 …… 165
第153図　Ｐ７区Ⅸ層上面遺構分布図 …… 166
第154図　Ｐ７区Ⅶ層上面遺構分布図・杭列出土状況図 …… 167
第155図　Ｐ７区Ⅸ層上面遺構分布図 …… 168
第156図　Ｐ８区土層断面図 …… 169
第157図　Ｐ８区Ｖ層上面遺構分布図 …… 170
第158図　Ｐ８区道路１側溝土層断面図 …… 170
第159図　Ｐ８区道路１ …… 171
第160図　Ｐ８区道路１土層断面図 …… 172
第161図　Ｐ８区条里21 ～ 23 …… 173
第162図　Ｐ８区Ⅴ・Ⅵ層上面遺構分布図 …… 174
第163図　Ｐ８区Ⅴ・Ⅵ層遺物出土状況図 …… 175
第164図　Ｐ８区Ⅶ層上面遺構分布図 …… 176
第165図　Ｐ８区Ⅶ層上面杭検出状況図 …… 177
第166図　Ｐ８区土坑５ …… 177
第167図　Ｐ８区Ⅷ層上面遺構分布図 …… 177
第168図　Ｐ８区Ⅸ層上面遺構分布図 …… 178
第169図　５区土層断面図 …… 180
第170図　５区Ⅳ層上面遺構分布図 …… 181
第171図　５区盛土21 ～ 23、26土層断面図 …… 182
第172図　５区Ⅴ層上面遺構分布図 …… 183
第173図　５区条里25土層断面図 …… 184
第174図　５区溝11 …… 185
第175図　５区木造構造物４ …… 186
第176図　Ｐ９区土層断面図 …… 188
第177図　Ｐ９区石積２ …… 189
第178図　Ｐ９区Ⅴ層上面遺構分布図（１） …… 190
第179図　Ｐ９区Ⅴ層上面遺構分布図（２） …… 190
第180図　Ｐ９区道路１ …… 191
第181図　Ｐ９区道路１土層断面図 …… 192
第182図　Ｐ９区道路１側溝土層断面図 …… 193
第183図　Ｐ９区道路１道路外盛土 …… 193
第184図　Ｐ９区河道10 …… 194
第185図　Ｐ９区河道10土層断面図 …… 194
第186図　Ｐ９区河道10遺物出土状況図 …… 195
第187図　Ｐ９区条里25 …… 196
第188図　Ｐ９区河道６ …… 197
第189図　Ｐ９区Ⅵ層上面遺構分布図 …… 198
第190図　Ｐ９区河道12 …… 199
第191図　Ｐ９区河道12土層断面図・杭 …… 200
第192図　Ｐ９区Ⅷ層上面遺構分布図 …… 201
第193図　Ｐ９区盛土24土層断面図 …… 201
第194図　Ｐ９区Ⅸ層上面遺構分布図 …… 202
第195図　Ｐ10区土層断面図（１） …… 204
第196図　Ｐ10区土層断面図（２） …… 205
第197図　Ｐ10区Ⅴ層上面遺構分布図（１） …… 206
第198図　Ｐ10区Ⅴ層上面遺構分布図（２） …… 207
第199図　Ｐ10区Ⅴ層上面遺構分布図（３） …… 208
第200図　Ｐ10区道路１ …… 209
第201図　Ｐ10区道路１土層断面図（１） …… 210
第202図　Ｐ10区道路１土層断面図（２） …… 211
第203図　Ｐ10区道路１敷葉・敷粗朶検出状況図 …… 212
第204図　Ｐ10区道路１第２次盛土路肩改修礫検出状況図 …… 213
第205図　Ｐ10区道路1第2次盛土杭検出状況図 …… 213
第206図　Ｐ10区道路１第４・５次盛土路肩改修礫検出状況図 …… 214
第207図　Ｐ10区道路１盛土内遺物出土状況図 …… 215
第208図　Ｐ10区道路１側溝 …… 217
第209図　Ｐ10区道路１道路外盛土（１） …… 218
第210図　Ｐ10区道路１道路外盛土（２） …… 219
第211図　Ｐ10区道路１道路外盛土粗朶検出状況図 …… 220
第212図　Ｐ10区条里27 ～ 29 …… 221
第213図　Ｐ10区河道13 …… 222
第214図　Ｐ10区河道６・13 ～ 15 …… 224
第215図　Ｐ10区土坑６ …… 225
第216図　Ｐ10区Ⅶ・Ⅷ層遺構分布図 …… 226
第217図　Ｐ10区盛土25 …… 227
第218図　Ｐ10区盛土26 …… 228
第219図　Ｐ10区土坑７ …… 229
第220図　Ｐ10区石敷１概念図 …… 230
第221図　Ｐ10区Ⅸ層上面遺構分布図 …… 230
第222図　Ｐ10区石敷１立面図 …… 231
第223図　３区土層断面図 …… 231
第224図　３区遺構分布図 …… 232
第225図　２区・Ｐ11区土層断面図（１） …… 234
第226図　２区・Ｐ11区土層断面図（２） …… 235
第227図　２区・Ｐ11区Ⅴ層上面遺構分布図（１） …… 236
第228図　２区・Ｐ11区Ⅴ層上面遺構分布図（２） …… 237
第229図　２区・Ｐ11区Ⅴ層上面遺構分布図（３） …… 238
第230図　２区・Ｐ11区Ⅴ層上面遺構分布図（４） …… 239
第231図　２区・Ｐ11区Ⅴ層上面遺構分布図（５） …… 240
第232図　２区・Ｐ11区道路１ …… 241
第233図　２区・Ｐ11区道路１土層断面図 …… 242
第234図　２区・Ｐ11区道路１第２次盛土路肩礫改修状況図 …… 243
第235図　２区・Ｐ11区道路１第４・５次盛土路肩礫改修状況図 …… 244
第236図　２区・Ｐ11区道路１柱列周辺遺物出土状況図 …… 245
第237図　２区・Ｐ11区道路１盛土内遺物出土状況図 …… 246
第238図　２区・Ｐ11区道路１側溝 …… 247
第239図　２区・Ｐ11区道路１道路外盛土（１） …… 248
第240図　２区・Ｐ11区道路１道路外盛土（２） …… 249
第241図　２区・Ｐ11区道路１道路外盛土遺物出土状況図 …… 249
第242図　２区・Ｐ11区道路１道路外盛土敷粗朶検出状況図 …… 250
第243図　２区・Ｐ11区条里30・33・34、盛土27(1) … 251
第244図　２区・Ｐ11区条里30・33・34、盛土27(2) … 252
第245図　２区・Ｐ11区条里30・33 …… 253
第246図　２区・Ｐ11区河道16 …… 254
第247図　２区・Ｐ11区河道16下層遺物出土状況図 …… 255
第248図　２区・Ｐ11区河道14 …… 256
第249図　２区・Ｐ11区木造構造物５ …… 257
第250図　２区・Ｐ11区河道6・15・17土層断面図(1) … 258
第251図　２区・Ｐ11区河道6・15・17土層断面図(2) … 259
第252図　２区・Ｐ11区木造構造物６ …… 260
第253図　２区・Ｐ11区Ⅶ層上面遺構分布図 …… 261
第254図　２区・Ｐ11区杭列12・13 …… 262
第255図　２区・Ｐ11区木造構造物７ …… 262
第256図　２区・Ｐ11区木造構造物８ …… 263
第257図　２区・Ｐ11区土坑８ …… 263
第258図　２区・Ｐ11区木造構造物９ …… 263
第259図　２区・Ｐ11区Ⅷ層上面遺構分布図 …… 264
第260図　２区・Ｐ11区盛土28 …… 265
第261図　２区・Ｐ11区杭列14 …… 266
第262図　Ｐ12区土層断面図（１） …… 267
第263図　Ｐ12区土層断面図（２） …… 268
第264図　Ｐ12区Ⅴ層上面遺構分布図（１） …… 269
第265図　Ｐ12区Ⅴ層上面遺構分布図（２） …… 270
第266図　Ｐ12区Ⅴ層上面遺構分布図（３） …… 271
第267図　Ｐ12区道路１ …… 273
第268図　Ｐ12区道路１土層断面図（１） …… 274
第269図　Ｐ12区道路１土層断面図（２） …… 275
第270図　Ｐ12区道路１道路外盛土内礫・粗朶検出状況図 …… 276
第271図　Ｐ12区条里35・36 …… 278

第272図　P12区条里35・36粗朶検出状況図 …… 279
第273図　P12区条里36・37 …… 280
第274図　P12区盛土29・30 …… 281
第275図　P12区河道６・15・18・19・20土層断面図（１）…… 282
第276図　P12区河道６・15・18・19・20土層断面図（２）…… 283
第277図　P12区河道６遺物出土状況図 …… 284
第278図　P12区Ⅶ層上面遺構分布図 …… 286
第279図　P12区溝12 …… 287
第280図　P12区杭列15 …… 288
第281図　P12区杭列16 …… 288
第282図　P12区Ⅶ-４・５層上面遺構分布図 …… 289
第283図　P12区畦畔18 …… 289
第284図　P12区Ⅷ層上面遺構分布図 …… 291
第285図　P12区木造構造物10 …… 292
第286図　P12区Ⅸ層上面遺構分布図 …… 293
第287図　P12区杭群８ …… 294
第288図　１区・P13区土層断面図（１）…… 295
第289図　１区・P13区土層断面図（２）…… 296
第290図　１区・P13区Ⅴ層上面遺構分布図(1) …… 298
第291図　１区・P13区Ⅴ層上面遺構分布図(2) …… 299
第292図　１区・P13区道路１ …… 300
第293図　１区・P13区道路１土層断面図 …… 301
第294図　１区・P13区道路１側溝断面図 …… 301
第295図　１区・P13区道路１道路外盛土 …… 301
第296図　１区・P13区条里38・39 …… 302
第297図　１区・P13区条里38 …… 303
第298図　１区・P13区河道６土層断面図 …… 305
第299図　１区・P13区Ⅵ層上面遺構分布図 …… 306
第300図　１区・P13区溝13土層断面図 …… 306
第301図　１区・P13区溝13木造構造物 …… 307
第302図　１区・P13区Ⅷ・Ⅸ層遺構分布図 …… 308
第304図　P14区土層断面図（１）…… 311
第305図　P14区土層断面図（２）…… 312
第306図　P14区Ⅴ層上面遺構分布図 …… 313
第307図　P14区Ⅴ層上面～Ⅶ層遺構分布図 …… 314
第308図　P14区道路１ …… 315
第309図　P14区道路１土層断面図 …… 316
第310図　P14区道路１道路外盛土 …… 317
第311図　P14区条里41・42 …… 318
第312図　P14区河道６土層断面図 …… 320
第313図　P14区Ⅸ層上面遺構分布図 …… 323
第314図　P14区杭群10 …… 324
第315図　P15区中央壁土層断面図（１）…… 325
第316図　P15区中央壁土層断面図（２）…… 326
第317図　P15区南西壁土層断面図 …… 327
第318図　P15区Ⅴ層上面遺構分布図（１）…… 328
第319図　P15区道路２ …… 329
第320図　P15区条里43 …… 330
第321図　P15区条里44 …… 330
第322図　P15区盛土32 …… 331
第323図　P15区盛土32・34土層断面図 …… 332
第324図　P15区盛土33 …… 333
第325図　P15区盛土34 …… 334
第326図　P15区Ⅴ層上面遺構分布図（２）…… 335
第327図　P15区河道６(古段階) …… 336
第328図　P15区河道６土層断面図 …… 337
第329図　P15区木造構造物11 …… 337
第330図　P15区木造構造物12 …… 338
第331図　P15区溝14 …… 338
第332図　P15区阿古山24号墳 …… 339
第333図　P15区阿古山24号墳調査前平面図 …… 339
第334図　P15区阿古山24号墳土層断面図 …… 340
第335図　P15区阿古山24号墳石室 …… 341
第336図　P15区Ⅸ層上面遺構分布図 …… 342
第337図　P15区丸木舟出土状況図 …… 343
第338図　P16区北西・南西壁土層断面図 …… 345
第339図　P16区南東壁土層断面図 …… 346
第340図　P16区Ⅳ層上面遺構分布図 …… 347
第341図　P16区土坑９ 集石５・６ …… 348
第342図　P16区Ⅴ層上面遺構分布図（１）…… 350
第343図　P16区道路２ …… 351
第344図　P16区条里45 …… 352
第345図　P16区盛土32（１）…… 353
第346図　P16区盛土32（２）…… 354
第347図　P16区盛土32（３）…… 354
第348図　P16区盛土32構造部粗朶検出状況図 …… 355
第349図　P16区盛土35 …… 356
第350図　P16区Ⅴ層上面遺構分布図（２）…… 356
第351図　P16区河道６上層下部 …… 357
第352図　P16区河道６土層断面図 …… 358
第353図　P16区河道６内綱・木端検出状況図 …… 359
第354図　P16区土坑10 …… 360
第355図　P16区杭列25 …… 361
第356図　P16区杭列26 …… 362
第357図　P16区杭列27 …… 363
第358図　P16区Ⅴ層上面遺構分布図（３）…… 364
第359図　P16区集石７・８ …… 365
第360図　P16区最終遺構面遺構分布図 …… 365
第361図　P16区杭列29～31　集石９…… 366
第362図　P16区杭列31 …… 366

巻頭図版目次

巻頭図版１　道路１検出状況（北西から）
巻頭図版２　古代山陰道復元イラスト
巻頭図版３　１　P10区道路１路肩改修礫状況（北西から）
巻頭図版３　２　P10区道路１道路盛土土層断面（南東から）
巻頭図版４　１　P10区道路１敷葉・敷粗朶検出状況（北東から）
巻頭図版４　２　５・７区条里遺構検出状況（上が北東）
巻頭図版５　１　５区条里25検出状況（南から）
巻頭図版５　２　P12区道路１道路外盛土と条里37交点盛土内礫検出状況（北西から）
巻頭図版６　木簡
巻頭図版７　『女子群像』板絵
巻頭図版８　木製祭祀具

挿表目次

表１　調査区別平面積
表２　支援業務体制
表３　新旧遺構対照表

文中写真目次

写真１　冬季におけるテント設営状況…… 4
写真２　「女子群像」板絵記者公開…… 5
写真３　P13区噴砂痕跡 …… 296

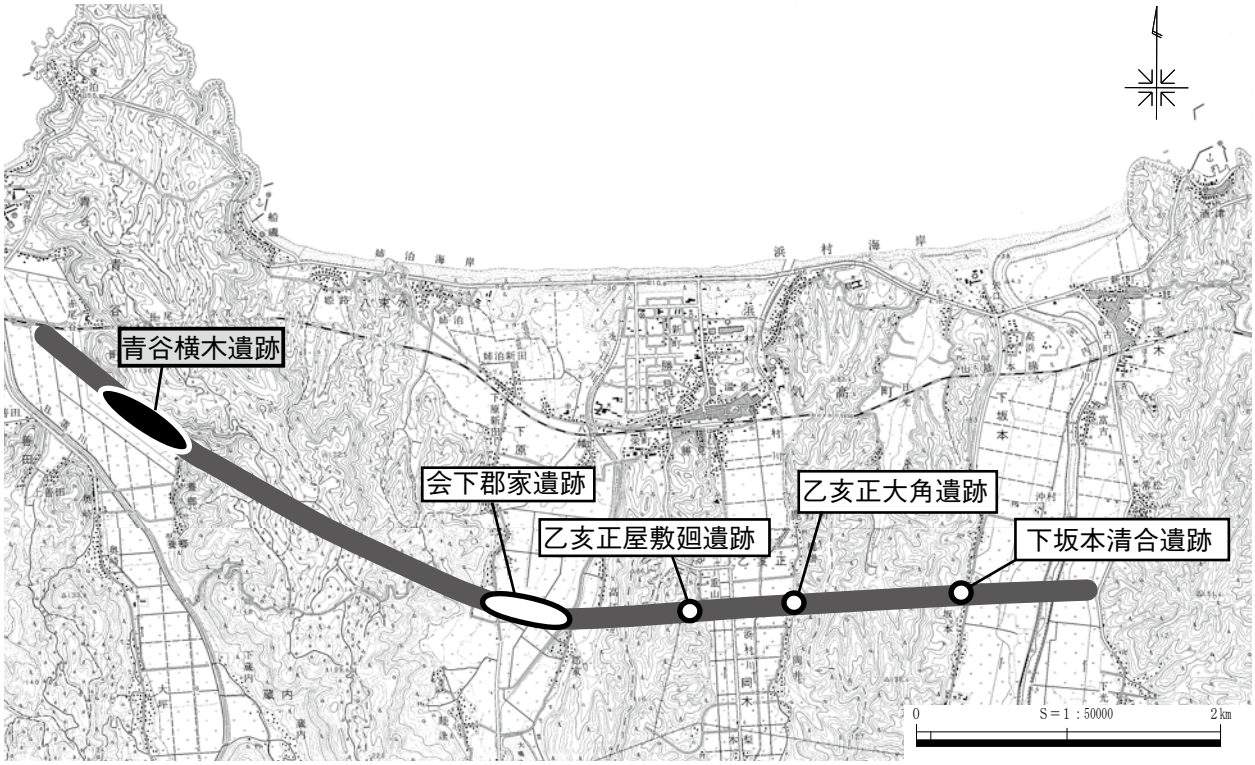
第１章　調査の経緯

第１節　調査に至る経緯

山陰自動車道は、鳥取県鳥取市を起点とし、山口県美祢市を終点とする、延長約 380 キロメートルの自動車専用道路である。この道路は、鳥取・島根・山口３県の主要都市を東西に結び、山陰地方の産業経済の発展や観光振興、交通渋滞の解消と緩和、災害時の緊急輸送路の確保を目的として、国土交通省により整備が進められている。「鳥取西道路」は、山陰自動車道のうち鳥取市本高と鳥取市青谷町青谷を結ぶ全長 19.3 km の区間で、鳥取インターチェンジで鳥取自動車道（中国横断自動車道姫路鳥取線）に、青谷インターチェンジで国道９号「青谷・羽合道路」に接続し、高速道路ネットワークの一翼を担う。

「鳥取西道路」の計画地内には周知の埋蔵文化財包蔵地が数多く認められていたため、道路建設工事に先立って国土交通省、鳥取県、鳥取市で協議し、計画地内に存在する埋蔵文化財の状況を把握する必要性が確認された。そこで、平成 17 年度からは計画地内の踏査（分布調査）や鳥取市教育委員会による試掘調査及び確認調査が進められた。調査結果に基づき道路事業と埋蔵文化財保護との調整が図られている（第２節２項参照）。

青谷横木遺跡は鳥取市青谷町、日置川下流域の沖積平野に位置する（第１図）。遺跡は平成 24 年３月１日から３月 22 日、４月 19 日から７月 19 日まで青谷町青谷、養郷で行われた試掘調査によって新たに発見された遺跡で、当初は養郷所在遺跡と呼称された[1)]。その結果、記録保存のための発掘調査が行われることになり、文化財保護法第 94 条による手続きを経た後、平成 25 年度から平成 27 年度にかけて鳥取県埋蔵文化財センターが国土交通省中国地方整備局鳥取河川国道事務所の委託を受けて発掘調査を実施した。調査面積は 14,884.9㎡である。



第１図　鳥取西道路関係遺跡位置図

平成 26・27 年度の発掘調査にあたっては、発掘作業や調査記録作業等について以下のとおり支援業務委託を実施した。

平成 26 年度

P16 区：株式会社アート

平成 27 年度

Ｐ１～３区：株式会社大成エンジニアリング・株式会社ダイニチ技研共同企業体

Ｐ４・５区：株式会社アート

Ｐ６区：株式会社アコード

Ｐ７～９区：株式会社イビソク・株式会社ティー・エム・エス共同企業体

P10 ～ 12 区：株式会社アート・株式会社大地企画共同企業体

【註】

１）鳥取市教育委員会 2011『平成 24（2012）年度鳥取市内遺跡発掘調査概要報告書』

第２節　調査の方法と経過

第１項　調査区の名称と調査方法（第２図）

調査地内の遺構の分布や土層の堆積状況を広く把握しつつ調査を進めるため、平成25年度は10ヵ所の調査区を設定し､北西側から南東側へ１～10区とした。平成26･27年度は橋脚範囲を調査地とし、橋脚名に準じて南東側から北西側へＰ１区～Ｐ16区とした。調査地内には、長尾鼻溶岩台地の丘陵裾及び工事用道路沿いに４級基準点を設置した。また、各区を囲む位置に世界測地系国土座標第Ⅴ系に載るように10m方眼の基準杭を設定し、グリッドを設けた。グリッド名は、東西南北軸交点の北西杭名を採った。座標は遺跡南東Ｐ１区のAI51杭（Ｘ：－54540m、Ｙ：－29140m）、遺跡南西P16区のＣ４杭（Ｘ：－54220m、Ｙ：－29610m）、などとなった。

検出した遺構・遺物の記録には、光波トランシット及び自動レベルを用い、簡易遣り方測量及び光波トランシットによる座標測量を行った。平成26・27年度の支援業務委託においては、上記に加え写真測量等を行っている場合がある。また、平成25年度５区の条里25、７区の条里14、10区の条里１については、支援業務委託による写真測量を行っている。

現地での写真撮影(及び遺物写真撮影)は、35mm判、ブローニー（６×７判）、及び４×５判カメラを用い、白黒ネガフィルム並びにカラーポジフィルムを使用し、適宜デジタルカメラ(1眼レフカメラ及びコンパクトカメラ)も使用した。撮影は主に地上又は写真用足場上から行い、７区及び10区、Ｐ７～Ｐ９区については高所作業車上からも行った。調査前後等の航空写真撮影については６×６判カメラ(白黒ネガフィルム並びにカラーポジフィルム)、あるいはデジタルカメラを使用した。

出土遺物は、取り上げ時に地区ごとに1から通し番号を与え、遺物カードを付した。出土地区を示すために番号の前に地区名を記している(1区出土№１を「１－１」と表現)。多量に出土する木製品は土器などの他の遺物とは別に通し番号を与えた。年度によって表記が異なっており、平成25年度は地区名の前にさらに「W」を冠し(1区出土木製品№１を「Ｗ１－１」と表現)、平成26年度以降は地区名の後に「W」を冠した(P16区出土木製品№１を「P16－Ｗ１」と表現)。

遺構の名称については、地区ごとの通し番号を用いているが、年度によって表記が異なっている。平成25年度は遺構名の後に番号（７区土手状遺構１など)を、平成26年度以降は遺構名の前に番号(P15

区2畦など）を付した。

第２項　発掘調査の経過

平成 25 年度

現地調査は平成25年４月５日に着手し、12月27日に終了した。調査は、４月５日の業者委託による調査前航空写真撮影から開始した。続いて４月８日から４月18日まで１・２・３・５・６・７区の表土剝ぎを重機を用いて行った。また、当初予定していなかった９・10区を調査する必要が生じたため、表土剝ぎを追加で行った。その後、８・９・10区では、一部の堆積層（Ⅲ層）についても重機により除去した。調査地は低湿なため、重機掘削による掘削は沈み込まないよう養生する必要があり、安定した地盤に比べ難航し、多くの時間を要した。

発掘作業員の稼働は４月19日に開始し、12月17日まで遺構検出及び掘り下げ作業を行った。各調査区とも湧水が激しく、排水溝を掘削し、水中ポンプによる排水を24時間体制で行った。それでもなお、雨量が著しい時には、調査地周辺の水路があふれ調査区が水没することが頻繁にあった。

７月11日以降、10区で石敷遺構（条里１）を検出すると、国史跡青谷上寺地遺跡から続く古代山陰道である可能性が生じたため、慎重に調査を進めることとなった。また、この石敷遺構の周辺からは人形や馬形などの木製祭祀具が多量に出土し、古代の祭祀遺跡としての重要性も高まった。これらの調査成果を受け、９月５日には記者公開、９月８日には一般の方々を対象とした現地説明会を開催し、県内外からあわせて160名の参加者があった。

10月18日には高所作業車を用いて７・10区の全景写真撮影を行い、10月28～30日には５・７・10区のＵＡＶ（いわゆるドローン）を用いた写真測量を行った。調査が進捗した12月２日には調査後航空写真撮影を行った。また、12月９日には、貝層であるⅨ層以下の堆積状況を把握するため、ロングアームを取り付けた重機により８区を部分的

第２図　青谷横木遺跡調査地位置図

に深掘りした。12月27日には発掘作業を終了した。

平成25年度の調査は、遺構や遺物の広がりや、土層の堆積状況を把握することが主たる目的であり、いずれの調査区も完掘していない。調査対象地は、当初全面を発掘調査する予定であったが、県教育委員会文化財課と国土交通省鳥取河川国道事務所が協議を行い、検出した遺構や遺物の重要性や工期短縮の観点から、建設する道路の設計を変更し、橋脚・脚台による工法に変更となった。それにより、平成26年度以降の発掘調査は暫定供用開始となる上り車線の橋脚・脚台範囲のみ対象とすることとなった。

平成26年度

平成26年度の調査は、橋脚部分のＰ11 ～ 16区までの６調査区が当初予定された。埋蔵文化財センターでは、調査を行う遺跡数の増加による発掘調査関係職員の不足などに対応するため、開発事業に伴う受託発掘調査について民間調査会社による支援業務委託を導入することとなり、調査着手の６月に合わせ、支援業務委託の入札を行った。ところが、応札する業者がなく、再度入札することとなったが、それでもＰ16区が落札されたのみに留まった。加えて、橋梁構造変更による調査面積の増加も明らかとなり、Ｐ11区の調査は次年度に送り、P12 ～ 15区は支援業務委託を行わず、当センターが調査(いわゆる直営調査)を行うこととなった。

さらに、事前に完了予定であった調査地内の鋼矢板打設も遅れたため、各地区の打設完了を待って順次調査に着手した。調査着手遅延の問題のほかに、調査体制の変更により調査を担当する職員数の不足を補う必要も生じた。そのため、他遺跡から当遺跡への担当者の配置変更や、年度途中での新規職員の採用によって調査員数を補い、調査補助員や測量補助員、発掘作業員などは派遣職員によって確保した。

発掘作業員の稼働は、P16区が7月1日から、P12区～ P15区が6月23日から開始した。前年度同様、湧水は激しく、24時間体制で排水しつつ調査を行った。調査が進み、おおよそ古代の遺物包含層を除去後に　掘削深度が鋼矢板の許容する深度付近に達した。そのため、調査の途中段階で鋼矢板が土圧で崩落することを防ぐ腹起し・切り梁設置工事を行った。また、矢板打設の遅延に伴う調査着手の遅れなどから、冬期の作業を行う必要が見込まれたため、P12 ～ 14区には調査地の大半を覆うテントを設置することとなった。それでも冬期の発掘調査は吹雪や積雪により、しばしば中断し難航を極めた。

P12区を中心として山際で確認された石敷遺構が大規模な道路遺構をなし、平野側で確認された盛土遺構の多くが条里地割を示す可能性が生じた。これにより、平成25年度に確認された５・７・10区で検出された石敷遺構の性格は道路ではなく、一町方格の条里地割である可能性が高まり、遺構の評価を大きく見直す必要性に迫られた。

平成27年度

平成27年度はＰ１～11区、及び前年度に着手済みのP12区の調査を実施した。引き続き民間調査会社による支援業務委託を導入し、入札を行うも一部応札がなく、再度入札を行い、最終的には調査区を５つ(Ｐ１～３区、Ｐ４・５区、Ｐ６区、Ｐ７～９区、Ｐ10～12区)に分割し支援業者を決定した。調査の開始時期は環境整備の遅れ等により多少前後するものの、４月17日にＰ11区で重

写真１　冬季におけるテント設営状況

機による表土剝ぎに着手して以後、順次開始した。表土剝ぎ中には、鋼矢板が倒れ込む事態がＰ２区～Ｐ６区で発生し、１t土嚢などによる対策に迫られた。その後は４月24日のＰ８区を皮切りに、各地区とも掘削深度に応じて順次、腹起し・切り梁設置工事を行った。９月10日には、現場稼働していない時間帯にＰ８区で丘陵斜面から落石があり、Ｐ７～９区では１ｔ土嚢の設置や防護フェンス設置などの安全対策を行った。

調査が進み、前年度確認されていた山際の道路遺構（道路１）が調査区を横断して検出され、規模や特徴から古代山陰道である蓋然性が高まった。また、条里地割も想定された箇所で盛土が検出されるなど、平安時代の道路改修に合わせて一体的に構築されたことが判明した。古代官道と条里地割がセットで確認されたのは青谷上寺地遺跡に次いで全国２例目であり、７月10日に記者公開、７月12日には一般の方々を対象とした現地説明会を開催し、県内外から合わせて132名の参加者があった。その後も、道路１で古代の先端的土木技術である敷葉・敷粗朶工法が確認され、７世紀に遡る木簡や木製祭祀具が出土するなど、古代の地方社会を考えるうえで重要な調査成果が数多く得られた。

Ｐ２区とP12区の調査は10月30日に終了した。一方で、他の地区については予定期間内に現地調査が完了せず、12月まで調査期間を延長し、Ｐ８・９区は12月10日、Ｐ６区は12月11日、Ｐ１～５・７・10～11区は12月25日に現地調査を終了した。

第３項　整理作業の経過

平成28年度

整理作業は発掘調査中も並行して行っていたが、木製品を中心とする遺物の出土量が膨大であり、発掘調査終了後、報告書作成まで２カ年を要した。平成28年度は土器の接合作業から取り掛かり、続いて、前年度はほとんど手付かずの状態であった、平成27年度調査で出土した木製品の洗浄作業に入った。木製品は、洗浄と同時に、本遺跡を特徴付ける木製祭祀具を分離することから始め、木製品の実測資料も合わせて抽出した。さらに、既に洗い終えていた木製品のうち、保存処理が必要なものについて実測作業を並行して行い、早急に保存処理に取り掛かれるよう心掛けた。最終的に木製品の洗浄が終了するまでに、10月下旬までの長期間を要した。その後、木製祭祀具については器種別の分類と同時に実測資料の抽出に着手し、人形と馬形については属性毎に詳細な観察も行った。その間、鉄製品や木製品の保存処理委託、道路遺構や堆積環境、木製祭祀具、動物骨に関する調査指導、木簡の釈読指導なども随時実施した。

９月６日にはP９区から出土した木製品の中に人物らしきものが墨描きされた板片を発見し、赤外線画像による観察などで人物群像が描かれていることが判明した。その後、未洗浄の木製品が残っていたため、板絵に接合する資料の有無を確認しつつ洗浄作業を慎重に進めた。木製品の洗浄がほぼ終了した10月25日には、神戸大学名誉教授百橋明穂氏に調査指導を仰ぎ、国宝高松塚古墳に類似する『女子群像』が描かれていることが判明するに至った。12月14日には記者公開を行い、12月17日には埋蔵文化財センターで一般公開を行ったところ、410名の見学者があり、全国的な注目を集めた。

写真２　「女子群像」板絵記者公開

また、樹種同定により道路１の外盛土で検出された樹木が柳であることが判明し、古代山陰道に街路樹が植えられていたことが明らかとなった。そのため、平成29年2月21日には鳥取市歴史博物館やまびこ館で開催された展示に合わせて、報道機関に資料提供を行い、街路樹のある古代山陰道の復元イラストも公開した。古代の街路樹が発掘調査で発見されたのは国内で初めてであり、文献資料を考古学的に裏付ける重要な成果として板絵と並び注目を集めた。

平成29年度

平成29年度の整理作業は人的・時間的制約などから、埋蔵文化財センターでの整理作業（直営）に加え、土器のトレースや木製品の実測・トレース・編集図作成については業務委託を取り入れ、作業の効率化を図った。また、前年度に引き続き自然科学分析や木製品の保存処理業務委託、緑釉陶器や須恵器、堆積環境に関する調査指導を適宜実施した。

反響の大きかった『女子群像』板絵に関しては、６月４日に大阪でフォーラムを開催し、百橋明穂氏、京都橘大学名誉教授猪熊兼勝氏に講演いただき、160名の聴講者があった。また、９月９日には鳥取市とりぎん文化会館にて「描かれた女子群像の謎」と題してシンポジウムを開催し、板絵の樹種や放射性炭素年代測定結果についての中間報告も併せて行った。こちらも320名の聴講者があった。

出土遺物の実測・トレース作業終了後には、版下や編集図の作成を行い、平成29年3月末に報告書を刊行した。

調査・整理日誌抄

平成25年度（現地調査）

４月５日　調査前航空写真撮影
４月８日　１～３・５～７区重機による表土剝ぎ開始
４月22日　調査前測量作業開始
５月７日　８区～10区重機による表土剝ぎ開始
　　５区で石敷遺構（条里25）を確認
５月９日　７区で石敷遺構（条里14・15）を確認
６月10日　10区で道路遺構（条里１）を確認
６月14日　長崎外語大学教授木本雅康氏による調査指導
６月19日　雨天増水により調査区水没
７月２日　７区で「自此一段嶋北古」木簡出土
７月８日　10区にて「黒稲一石」木簡出土
７月９日　播磨町郷土資料館学芸員大平茂氏による調査指導
７月10日　奈良文化財研究所都城発掘調査部史料研究室室長渡辺晃宏氏による調査指導（第１回）（於 奈良文化財研究所）
７月11日　10区道路遺構（条里１）検出開始
７月18日　奈良文化財研究所名誉研究員山中敏史氏による調査指導
７月19日　大阪府立狭山池博物館長工楽善通氏による調査指導
７月22～23日　鳥取県文化財保護審議会委員亀田修一氏、松本直子氏、高田健一氏が現地調査
９月４日　雨天増水により調査区水没
９月５日　記者公開
９月８日　現地説明会開催参加者160名
10月２日　韓国三江文化財研究院調査課主任蘇培慶氏が現地視察
10月７日　岡山大学名誉教授稲田孝司氏による調査指導
10月17日　８区作業開始
10月18日　高所作業車による７・10区全景撮影
10月21日　２区作業開始
10月28日　５・７・10区条里遺構写真測量作業開始
12月２日　調査後航空写真撮影
12月５日　２区調査区全景写真撮影
12月９日　８区重機によりⅨ層以下の堆積状況を確認
12月27日　現地作業終了
３月８日　善田地区での遺跡説明会
３月20日　養郷地区での遺跡説明会

平成26年度（現地調査）

６月２日　P16区調査前地形測量
６月10日　P16区重機による表土剝ぎ開始
６月12日　P12区～P15区調査前測量開始
６月23日　発掘作業開始
６月25日　P16区切梁工事
７月30日　奈良文化財研究所山本崇氏調査指導
８月18日　大雨増水によりP13・15区水没
９月10日　P16区「蘇民将来子孫家」木簡出土
10月14日　台風19号による雨天増水により調査地水没
　奈良文化財研究所都城発掘調査部副部長渡辺晃宏氏による文字資料調査指導（第1回）（於 奈良文化財研究所）
11月13日　奈良文化財研究所アソシエイトフェロー村田泰輔氏による調査指導

11月14日　P15区切梁工事(11月16日終了)
12月１日　P14区テント設置工事(12月３日終了)
12月17日　大雪のため作業中止
12月18日　P12区テント設置工事(～12月22日)
12月16日　P16区現地作業終了
１月13日　P12区道路遺構(道路１)検出写真撮影
２月17日　長崎外国語大学教授木本雅康氏による道路遺構に関する調査指導
３月５日　P15区出土丸木舟検出写真撮影
３月19日　播磨町郷土資料館学芸員大平茂氏木製祭祀具調査指導

平成27年度(現地調査)

４月17日　P11区から重機による表土剝ぎ開始
４月24日　P8区から切梁工事開始
５月25日　奈良文化財研究所都城発掘調査部副部長渡辺晃宏氏による調査指導(第１回)(於 奈良文化財研究所)
６月13日　P７～11区道路遺構検出状況を高所作業車上から撮影
６月22・23日　奈良文化財研究所アソシエイトフェロー村田泰輔氏による第１回調査指導
６月26日　文化庁文化財部記念物課文化財調査官近江俊秀氏による道路遺構に関する調査指導
６月30日 長崎外国語大学教授木本雅康氏による道路遺構に関する調査指導
７月10日　記者公開
７月12日　現地説明会開催(参加者132名)
７月21日　鳥取大学名誉教授藤村尚氏による道路盛土構造に関する調査指導(第１回)
９月４日　三木市金物資料館館長大平茂氏による祭祀遺構調査指導
９月10日　P７・８区間で径１mの落石を確認
10月17・18日　鳥取中部震源地震発生。わずかに矢板内倒れが確認される(許容範囲内)
10月27日　大阪府立狭山池博物館長・青谷上寺地遺跡発掘調査委員会委員長工楽善通氏による道路敷葉・敷粗朶工法に関する調査指導
10月30日　P２・12区現地作業終了
11月27日　出土木簡記者公開(於 埋蔵文化財センター)
12月11日　P８・９区現地作業終了
12月25日　P１・３・４・５・７・10・11区現地調査全て終了

平成28年度(整理作業)

４月７・８日 奈良文化財研究所アソシエイトフェロー村田泰輔氏による調査指導(第１回)
４月８日 鳥取大学名誉教授藤村尚氏による調査指導
６月16日～10月31日 自然科学分析業務委託(受託者 パレオ・ラボ)
７月14日 奈良大学教授小山田宏一氏による道路遺構の敷葉・敷粗朶工法に関する調査指導
８月25・26日 (公財)鳥取県教育文化財団調査室文化財主事門脇隆志氏による獣骨調査指導
９月６日　木製品の洗浄、分類作業中に『女子群像』板絵を確認
９月６日～２月３日 鉄製品保存処理業務委託(受託者 大阪文化財研究所)
10月４日～３月21日 木製品保存処理業務委託(受託者 東都文化財保存研究所)
10月７・８日 奈良文化財研究所都城発掘調査部副部長渡辺晃宏氏による調査指導
10月25日 神戸大学名誉教授百橋明穂氏による『女子群像』板絵等調査指導
11月９・10日 奈良文化財研究所アソシエイトフェロー村田泰輔氏による第３回調査指導
11月28日 奈良文化財研究所都城発掘調査部副部長渡辺晃宏氏による木簡釈読指導と女子群像板絵写真撮影(於 奈良文化財研究所)
12月13日 神戸大学名誉教授百橋明穂氏による調査指導
12月14日『 女子群像』板絵記者公開
12月17日『女子群像』板絵一般公開(見学者410名)
12月28日～３月６日 遺構図トレース業務委託(受託者 アコード)
１月19日 ひょうご歴史学研究室共同研究員大平茂氏による木製祭祀具調査指導
２月21日　古代山陰道(道路１)に柳の街路樹が植えられていたことについて報道機関に資料提供
２月25～３月26日　鳥取市歴史博物館やまびこ館で街路樹の調査成果と復元イラストを展示公開
３月８～10日 奈良文化財研究所都城発掘調査部副部長渡辺晃宏氏による木簡釈読指導(於 奈良文化財研究所)
３月14日 鳥取大学教授保阪善真氏による動物骨調査指導
３月28～30日 土層サンプル軟Ｘ線写真撮影(於　奈良文化財研究所)

平成29年度(整理作業)

４月３日～10月30日　木製品実測・トレース業務委託(受託者 ナカシャクリエイティブ)
４月３日～10月30日　土器実測・トレース及び編集図作成業務委託(受託者 アコード)
４月19～21日 土層サンプル軟Ｘ線写真撮影 (於 奈良文化財研究所)
５月16日 大阪大学教授高橋照彦氏による緑釉陶器調査指導
６月４日　『女子群像』板絵フォーラムを開催(於　読売大阪ビル１階ギャラリーよみうり)(聴講者160名)
６月８・９日 奈良文化財研究所アソシエイトフェロー村田泰輔氏による調査指導(第４回)
７月３・４日 山口県埋蔵文化財センター主任岡田裕之氏による調査指導
７月12日～９月４日 木製祭祀具自然科学分析業務委託(受託者 パレオ・ラボ)

７月20日～３月12日 木製品保存処理業務委託(受託者 文化財科学研究センター)
９月９日　シンポジウム『描かれた女子群像の謎』を開催(於 とりぎん文化会館小ホール)(聴講者320名)
９月27日～10月４日 遺物写真撮影
10月12日～10月23日 遺物写真撮影
10月30日～12月25日 土壌分析業務委託(受託者 古環境研究所)

第３節　調査体制

下記の体制で発掘調査、報告書作成を行った。

平成２５年度

鳥取県埋蔵文化財センター

所　　長　　久保　穣二朗
次　　長　　中村　靖浩(兼総務係長)
総　務　係
　係　　長　　白岩　準市
　主　　事　　松浦　広美、水本　裕子
　事務職員　　足田　一江、山本　真寿美、坂本　真奈美、治部　潤子、
　　山本　友以(12月まで)

発掘事業室

室　　長　　山枡　雅美(兼調整係長)
調　整　係
　発掘調査員　　岩垣　　命
　事務職員　　渡邉　ゆきえ
調査担当(気高調査事務所)
　青谷横木遺跡
　係　　長　　濵　隆造
　文化財主事　　福島　雅儀、原田　克美、加藤　裕一、下江　健太、
　　勢村　茉莉子、荒川　和哉(10～12月)
　発掘調査員　　石賀　太
　発掘調査測量補助員　　井本　修一(６～12月)、門脇　靖(６～12月)
　事務職員　　近堂　智香、井上　章(４月)、平田　芳子(５月～)

平成２６年度

鳥取県埋蔵文化財センター

所　　長　　中原　斉
次　　長　　中村　靖浩(兼総務係長)
総　務　係
　係　　長　　白岩　準市
　主　　事　　松浦　広美、水本　裕子
　事務職員　　高橋　優、坂本　真奈美、市村　篤則

発掘事業室

室　　長　　山枡　雅美(兼調整係長)

調　整　係
発掘調査員　　長谷　琢也
事 務 職 員　　中村　ゆかり
調査担当(気高調査事務所)
青谷横木遺跡
係　　長　　濵　隆造
文化財主事　　福島　雅儀、原田　克美(８月～)、荒川　和哉(８月まで)、
下江　健太、坂本　嘉和(11月～)、梅村　大輔(６月～)
堀　寛之(7月～)
発掘調査補助員　　淀谷　政弘(６月～)、波多野　芳郎(６月～)
発掘調査測量補助員　村上　学(６～12月)、山崎　嘉之(６～12月)
事 務 職 員　　竹内　努、新　ともみ

平成２７年度

鳥取県埋蔵文化財センター
所　　長　　中原　斉
次　　長　　近藤　健(兼総務係長)
総　務　係
係　　長　　白岩　準市
主　　事　　岡　梓、松浦　広美、水本　裕子
事 務 職 員　　高橋　優、坂本　真奈美、植木　朋子
発掘事業室
室　　長　　山枡　雅美(兼調整係長)
調　整　係
文化財主事　　岩垣　命
発掘調査員　　平井　克知
調査担当(気高調査事務所)
青谷横木遺跡
係　　長　　濵　隆造
文化財主事兼係長　　下江　健太
文化財主事　　福島　雅儀、八峠　興、原田　克美、坂本　嘉和、梅村　大輔、
堀　寛之
事 務 職 員　　田淵　由樹子、中谷　沙織

平成２８年度

鳥取県埋蔵文化財センター
所　　長　　中原　斉
次　　長　　近藤　健(兼総務係長)
総　務　係
係　　長　　港　浩二

主　　事　　松浦　広美、水本　裕子
事 務 職 員　　中森　貴子、坂本　真奈美、西澤　直子(11月まで)
発掘事業室
室　　長　　松井　潔(兼調整担当係長)
調 整 担 当
係　　長　　濵　隆造(４月)
文化財主事　　岩垣　命
発掘調査員　　平井　克知
調 査 担 当
青谷横木遺跡
文化財主事兼係長　　下江　健太
文化財主事　　八峠　興、原田　克美、坂本　嘉和、梅村　大輔

平成２９年度

鳥取県埋蔵文化財センター
所　　長　　中原　斉
次　　長　　近藤　健(兼総務係長)
総　務　係
係　　長　　港　浩二
主　　事　　松浦　広美
事 務 職 員　　高橋　優、原田　康孝
発掘事業室
室　　長　　松井　潔
調 整 担 当
文化財主事兼係長　　小山　浩和
発掘調査員　　平井　克知
調 査 担 当
青谷横木遺跡
文化財主事兼係長　　下江　健太
文化財主事　　八峠　興、原田　克美、坂本　嘉和、梅村　大輔

第２章　位置と環境

第１節　地理的環境

鳥取市は鳥取県東部に位置する中核的な都市で、人口は約19万人である。青谷横木遺跡の位置する旧青谷町は鳥取市西部、旧国では因幡の西際で、伯耆との境に位置する。平成16年の合併で鳥取市となる。青谷海岸は鳴り砂で知られ、山陰海岸ジオパークの西端にあたる。内陸には標高920ｍの鷲峰山を望む。海岸の地形は中国山地から日本海に続く長尾鼻の丘陵を境に東西で様相が異なる。

長尾鼻から南に延びる標高200ｍ弱の丘陵は、中軸は大山上部と中部火山灰、周縁は稲葉山安山岩で形成される。長尾鼻に続く丘陵の東側は北西からの海岸浸食が遮られて泥層や砂層が発達し、東西約５㎞、幅約２㎞の浜村砂丘を形成し、海沿いには複数の砂丘列が発達する。

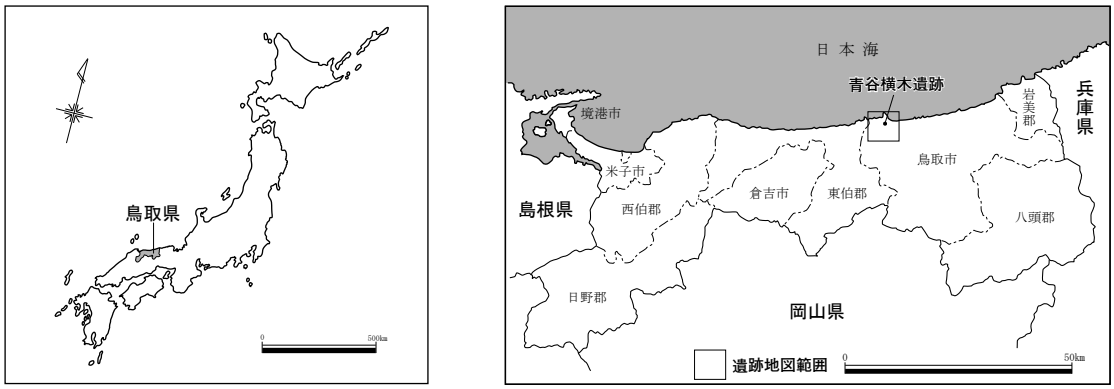
長尾鼻に続く丘陵の西側では、縄文海進末から大量の土砂が供給されて海に埋積した。さらに南西から北東に向かう勝部川と南東から北西に向かう日置川が丘陵の端部で合流して氾濫原となり、礫層が平野を形成した。両川では堆積状況に差があり、西側の勝部川では谷が狭く土砂の供給も多いため、縄文時代後期には谷の出口から北東方向に陸化するが、日置川流域では土砂は谷の幅や出口も広いため途中で沈積して陸化は遅れたとされる。現在、青谷横木遺跡（本遺跡）から海までの距離は２㎞程あり、海岸は東西、南北とも約0.5㎞と小規模ながら青谷砂丘がある。

本遺跡は長尾鼻に続く丘陵西際の安山岩層と日置川の形成した堆積礫層の東側丘陵の際で、平地から丘陵に向かう標高が２ｍ前後とやや高い位置にあるため、平野の北西から南東までを見渡すことができる。そのためP7区以西の調査区では、丘陵南東側の崖状の岩礫層と接する地区も多い。また東西に長いため東側のP2区より以東は、東に延びる丘陵がやや南に向きを変える屈曲部にあり、谷地形の「滝尻」と呼称される東から西に向かう小扇状地状の出口付近にあたる。

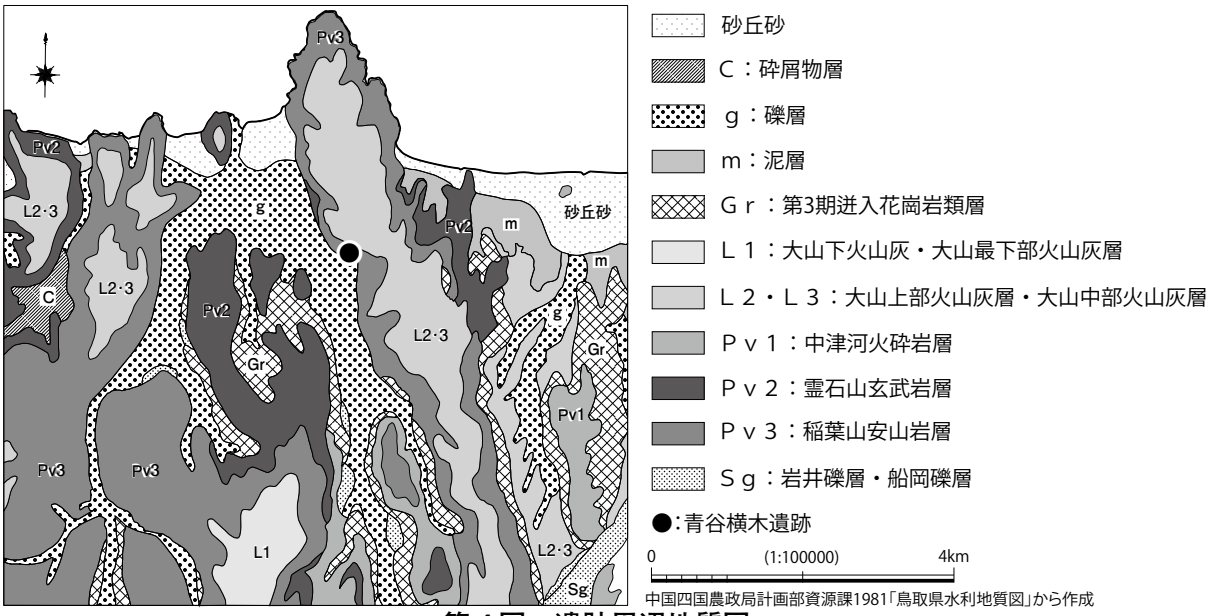
第２節　歴史的環境

1：青谷横木遺跡（本遺跡）を含め、遺跡の多くは西から勝部川、日置川、永江川流域の東西の段丘上や島状の低丘陵地に散在する。丘陵際から平地を見下ろす丘陵上や丘陵際には多数の古墳があり、歴史時代には丘陵上に連なるように中世の城が築かれる。

縄文時代　　縄文土器や遺構が確認されるものの時期が特定できる遺跡は少ない。



第３図　遺跡位置図



第４図　遺跡周辺地質図

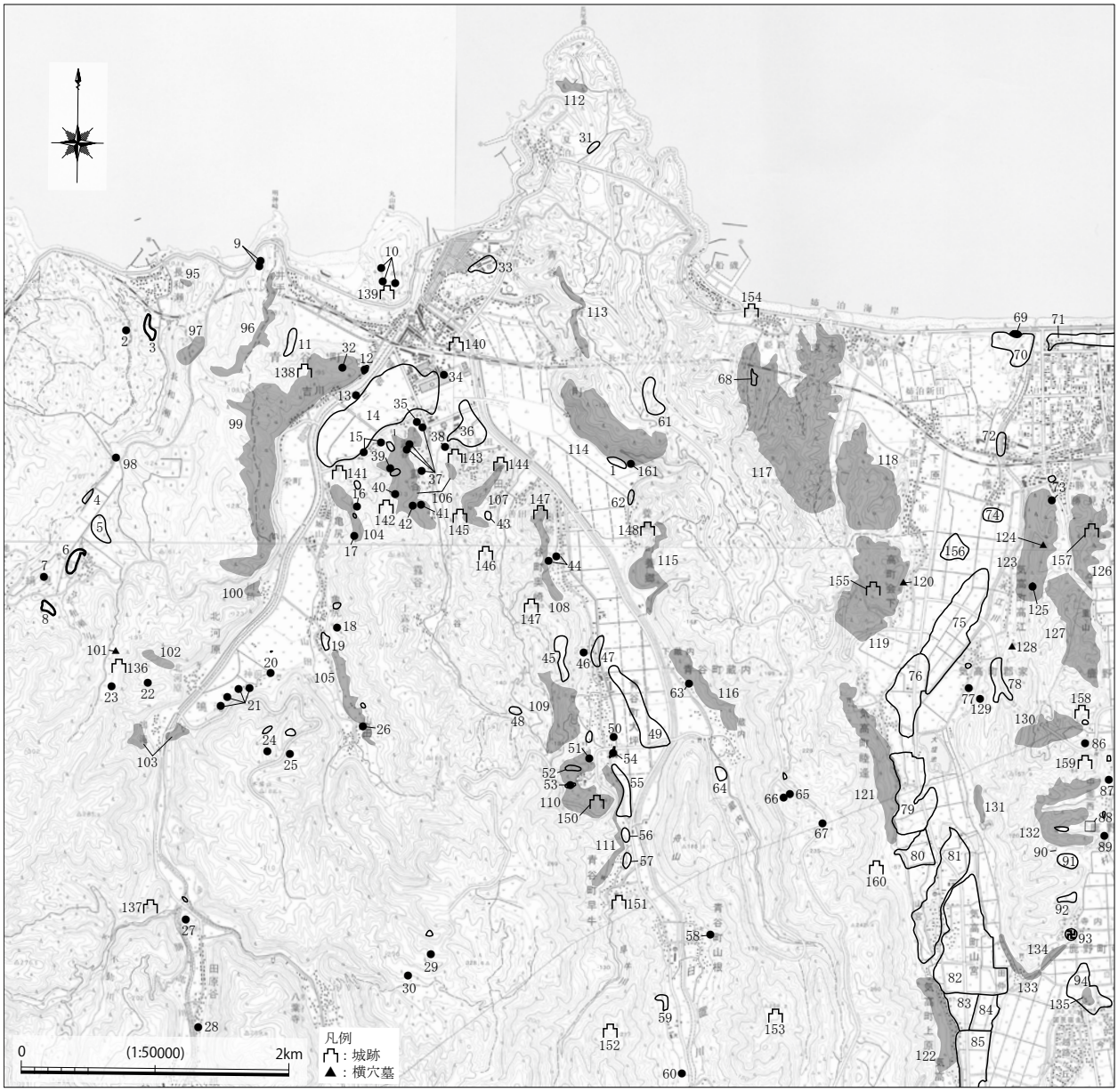
前期の遺跡は 66：蔵内上長谷第２遺跡がある。長尾鼻に続く丘陵の山間にあり、土器が出土した。中期の遺跡は 33：青谷第１遺跡がある。ボーリング調査ではあるが中期の土器が出土した。後期の遺跡は 67：蔵内上長谷第４所在遺跡がある。土器が出土した。晩期の土器が出土した遺跡は 14：青谷上寺地遺跡、日置川上流の 47：大坪イカウ松遺跡、土坑を検出した 49：大坪大縄手遺跡がある。東隣の逢坂谷では 75：会下・郡家遺跡で谷間の小丘陵地から落とし穴が、永江川上流の 80：山宮笹尾遺跡でも落とし穴や、後期の土器を含む土坑が調査された。

弥生時代　弥生時代には前期の遺跡は少ないものの、中期以降、集落遺跡が広がりをみせる。青谷平野に位置する青谷上寺地遺跡は弥生時代から古墳時代前期にかけて、日置川と勝部川によって形成された沖積平野に立地する遺跡で、大量の土器や木製品、骨角器、玉類や金属製品等、大陸との交流を示す遺物もあり「地下の弥生博物館」と称される。平成 20 年に国史跡に指定された。

本遺跡からは前期の土器、32：青谷第４遺跡ではほぼ完形の中期の土器が出土している。弥生時代の集落遺跡は、勝部川上流域では 27：田原谷宮下所在遺跡、日置川上流域には 52：大口第２遺跡、53：大口第１遺跡、55：カヤマ遺跡、支流の蔵内河流域には 64：蔵内水船遺跡がある。

長尾鼻東側では海浜部に 70：短尾遺跡、永江川中流域から上流にかけて東西の丘陵際や南北に延びる低丘陵上に中期から後期の遺跡が広範に分布する。会下・郡家遺跡では棟持柱を有する大型の掘立柱建物をはじめ、竪穴建物、掘立柱建物、袋状土坑、木棺墓等を調査した。同時代の遺跡は永江川上流に向かい 79：山王尻遺跡、81：山宮茶山畑遺跡、82：山宮阿弥陀森遺跡、84：上原遺跡、85：上原南遺跡に竪穴建物や掘立柱建物、袋状土坑等がある。

古墳時代　前方後円墳は２基ある。112：長尾鼻古墳群の１号墳、113：青谷古墳群の２号墳で、いずれも長尾鼻の丘陵上にある。ほか古墳群が西から勝部川、日置川、永江川の両岸の丘陵上に分布する。勝部川下流の西丘陵上には百基以上からなる 99：吉川古墳群がある。勝部川と日置川が合流する南側丘陵には 104：亀尻古墳群、106：露谷古墳群、107：善田古墳群がある。本遺跡の東丘陵には二十数基からなる 114：阿古山古墳群があり、後期に造られた 161：阿古山 22 号墳では平滑な一枚岩の安山岩で壁を建てて玄室とし、２枚の天井石で架構する。石室の内面には船などの線刻壁画がある。同じ丘陵の南には、115：養郷古墳群、116：蔵内古墳群があり、対岸の西側丘陵上には上流まで 108：



1:青谷横木遺跡(本遺跡)　2:長和瀬寺田所在遺跡　3:長和瀬谷田遺跡　4:長和瀬中田遺跡　5:長和瀬稲葉尾遺跡　6:絹見尾崎遺跡　7:絹見中尾出土地　8:絹見大谷所在遺跡　9:井手馬込所在遺跡　10:青谷一本松散布地　11:井手野上遺跡　12:岩本遺跡　13:青谷飯田所在遺跡　14:青谷上寺地遺跡　15:吉川北谷田遺跡　16:亀尻虎尾遺跡　17:亀尻下家ノ前遺跡　18:亀尻上家空遺跡　19:亀尻南谷遺跡　20:鳴滝宮ノ前遺跡　21:鳴滝上神崎遺跡　22:北河原釿跡　23:絹見千龍寺経塚　24:鳴滝宮坂散布地　25:山田横道遺跡　26:山田保珍場遺跡　27:田原谷宮下所在遺跡　28:田原谷東村内遺跡　29:山田淡谷東平所在遺跡　30:八葉寺カラ川遺跡　31:青谷第２遺跡　32:青谷第４遺跡　33:青谷第１遺跡　34:青谷ｲﾀﾗｽﾞ遺跡　35:小丸山遺跡　36:善田傍示ヶ崎遺跡　37:露谷鳥越遺跡　38:露谷漆ヶ坪出土地　39:露谷第１遺跡　40:露谷第２遺跡　41:露谷上露宮遺跡　42:石畑遺跡　43:善田才ノ尾遺跡　44:奥崎中村廻遺跡　45:大坪天神第２遺跡　46:大坪天神出土地　47:大坪イカウ松遺跡　48:露谷第３遺跡　49:大坪大縄手遺跡　50:大坪岸ノ上遺跡　51:大口第３遺跡　52:大口第２遺跡　53:大口第１遺跡　54:ｶﾏﾔ遺跡(藤田地区)　55:ｶﾏﾔ遺跡　56:早牛宝免遺跡　57:早牛中瀬遺跡　58:山根愛宕山遺跡　59:山根地堂遺跡　60:河原下飯田遺跡　61:青谷ｶﾞｱｶﾞ谷遺跡　62:養郷岩手遺跡　63:蔵内かあか遺跡　64:蔵内水船遺跡　65:蔵内上長谷第１所在遺跡　66:蔵内上長谷第２遺跡　67:蔵内上長谷第４所在遺跡　68:姫路所在遺跡　69:北短尾墳墓　70:短尾遺跡　71:西浜遺跡　72:八幡第1遺跡　73:勝見谷奥所在遺跡　74:八幡第2遺跡　75:会下・郡家遺跡　76:睦逢遺跡　77:郡家遺跡　78:郡家口三谷遺跡　79:山王尻遺跡　80:山宮笹尾遺跡　81:山宮茶山畑遺跡　82:山宮阿弥陀森遺跡　83:上原西遺跡　84:上原遺跡　85:上原南遺跡　86:木梨遺跡　87:中園所在遺跡　88:西中園所在遺跡　89:西中園遺跡　90:谷田遺跡　91:中園遺跡　92:宮方宮谷遺跡　93:寺内廃寺跡　94:寺内京南遺跡　95:長和瀬古墳群　96:井手古墳群　97:長谷古墳群　98:釜ノ口３号墳　99:吉川古墳群　100:川積古墳群　101:絹見千龍寺横穴墓　102:北河原古墳群　103:鳴滝古墳群　104:亀尻古墳群　105:山田古墳群　106:露谷古墳群　107:善田古墳群　108:奥崎古墳群　109:大坪古墳群　110:大口古墳群　111:早牛古墳群　112:長尾鼻古墳群　113:青谷古墳群　114:阿古山古墳群　115:養郷古墳群　116:蔵内古墳群　117:八束水古墳群　118:下原古墳群　119:会下古墳群　120:会下1号横穴　121:睦逢古墳群　122:上原古墳群　123:谷奥古墳群　124:谷奥1号横穴墓　125:乙亥正合谷所在横穴墓　126:勝見古墳群　127:重山古墳群　128:郡家寺ノ上横穴墓群　129:郡家1号墳　130:岡木古墳群　131:山宮古墳群　132:西中園古墳群　133:田仲古墳群　134:寺内古墳群　135:今市古墳群　136:絹見千龍寺城跡　137:鳴滝不動山城跡　138:青谷大平城跡　139:青谷鑓畑本陣跡　140:青谷国屋城跡　141:亀後城跡　142:露谷城跡(鉢伏城)　143:大平田城跡(北西部)　144:大平田城跡(北東部)　145:大平田城跡(南)　146:善田すけたい城跡　147:奥崎丸尾城跡　148:小平田蔵谷城跡　149:養郷小丸城跡　150:早牛矢島城跡　151:早牛矢島城跡　152:山根式田城跡　153:河原高座城跡　154:姫路城跡　155:会下城跡　156:会下の土囲　157:勝山城跡　158:藤山城跡　159:観音山城跡　160:篠尾柵跡　161:阿古山22号墳

第５図　周辺遺跡分布図

奥﨑古墳群、109：大坪古墳群、110：大口古墳群、111：早牛古墳群がある。永江川の両岸丘陵上には海岸近くまで古墳群が分布する。西側には 117:八束水古墳群、118:下原古墳群、119:会下古墳群、121：睦逢古墳群、122：上原古墳群があり、東側には 123：谷奥古墳群、131：山宮古墳群、133：田仲古墳群、河内川西側の丘陵にかけて 134:寺内古墳群、132:西中園古墳群等がある。このうち、吉川、睦逢、西中園の古墳群には線刻壁画をもつものがあるほか、谷奥１号墳から銅椀が出土している。古墳以外の遺跡は、弥生時代から続く青谷上寺地遺跡、大口第２遺跡、大口第１遺跡、カヤマ遺跡があるほか、長尾鼻に続く丘陵の東側にあたる永江川流域で会下・郡家遺跡、山宮阿弥陀森遺跡、上原南遺跡で竪穴建物を調査した。

古　代　古代での気多郡の領域は不明瞭ではあるが、『和名抄』では東から大原･坂本･口沼･勝見･大坂・日置・勝部の七郷があり、逢坂谷一帯が大坂郷、日置谷は日置郷、勝部川流域は勝部郷が比定されている。気多郡は因幡国でも西端に位置し、伯耆国との国境にあたる。郡内を山陰道が東西に延び、『延喜式』にある東の「敷見駅」と西の伯耆国「笏賀駅」との間に「柏尾駅」が想定されている。

遺跡は、西側、日置川の上流の左岸に大坪イカウ松遺跡が、下流の左岸に 36：善田傍示ヶ崎遺跡があり、人形や馬形をはじめ多数の木製祭祀具が出土した。平野の北西に位置する青谷上寺地遺跡では、古代山陰道と考えられる道路遺構と同時期に構築された条里区画を確認し、付札木簡や牓示木簡などが出土している。そのほかカヤマ遺跡では土馬、23:絹見千龍寺（経塚）跡では経筒が出土した。

長尾鼻に向かう丘陵を隔て東側には、永江川流域の逢坂谷があり、谷の西側と中央の低段丘上には、北から会下･郡家遺跡、睦逢遺跡、山王尻遺跡、80:山宮笹尾遺跡、山宮茶山畑遺跡、山宮阿弥陀森遺跡、83：上原西遺跡、上原南遺跡等が気多郡衙とされる上原遺跡に向かい帯状に連なる。このうち会下・郡家遺跡では長尺建物や区画溝が、上原遺跡・上原西遺跡・山宮阿弥陀森遺跡では大規模な掘立柱建物や二面廂掘立柱建物を含む多数の建物が検出され、「郡家一」と記された墨書土器も出土している。東側の丘陵裾には官寺と推測される 93：寺内廃寺跡が隣接し、塔心礎や礎石が残り、調査では軒丸瓦や軒平瓦などが出土している。

中・近世　鎌倉時代以降、中世前期の遺跡は僅かである。青谷平野の南側丘陵に 29：山田淡谷東平所在遺跡があり、礎石建物や鍛冶炉等が調査されているほか、古代から中世にかけての遺物が出土している。20：鳴滝宮ノ前遺跡では中世の土坑や溝を検出し、柱状高台を含む土師器の坏や皿、瓦質土器の鍋等が出土した。中世後期には西から勝部川、日置川、永江川の各谷を見下ろす丘陵状に、連なるように山城が築かれる。合戦の伝承や『因幡志』、『因伯古城跡図志』、『因幡民談記』等の史料にも記される城もある。近世初頭にかけて亀井氏の支配地となり、青谷では亀井畷、逢坂谷では大堤池等、領内の開発や整備が進んだとされる。

【引用・参考文献】

赤木三郎・岡田昭明1981「鳥取県水利地質図」中国四国農政局計画部資源課
鳥取県埋蔵文化財センター 2011『青谷上寺地遺跡景観復原調査研究報告書』
鳥取県埋蔵文化財センター 2015『青谷上寺地遺跡発掘調査研究年報2014』
鳥取県埋蔵文化財センター 2016『青谷上寺地遺跡発掘調査研究年報2015』
気高町教育委員会2003『上原遺跡群発掘調査報告書』気高町文化財報告書第30集

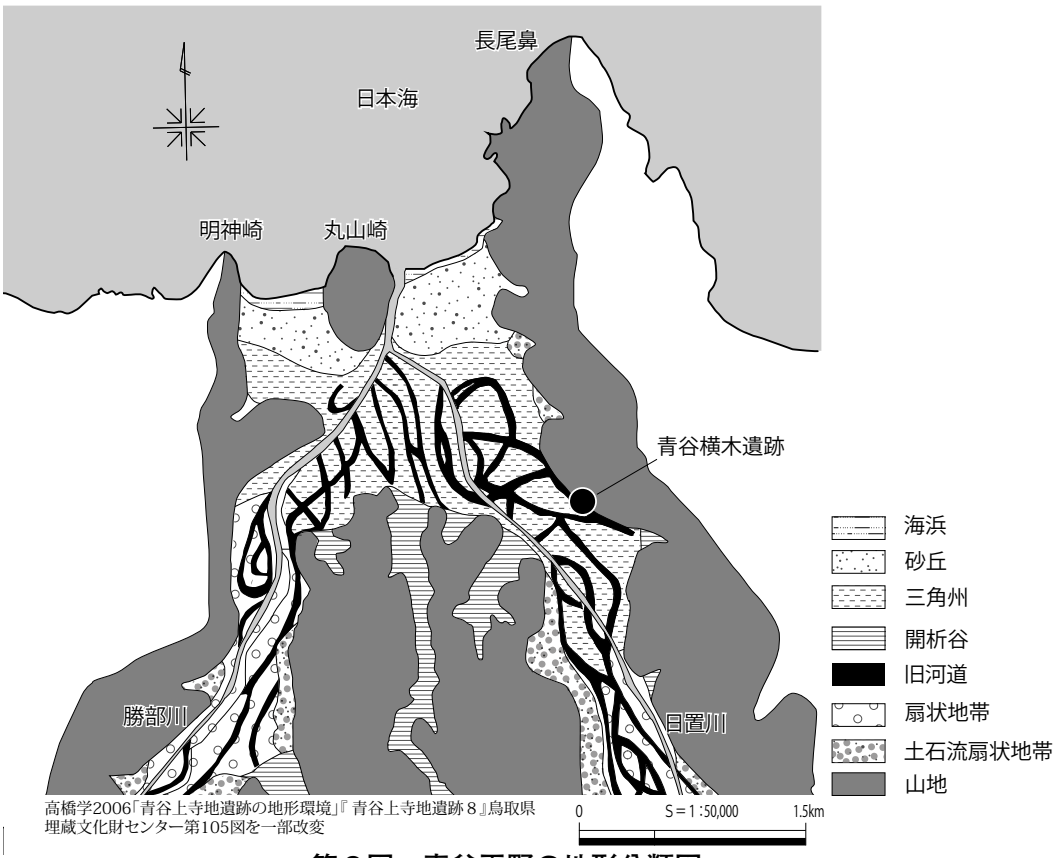
第３章　遺跡の基本層序と概要

第１節　遺跡の地形と古環境

第１項　立地と地形

青谷横木遺跡が位置する青谷平野は小富士山や鍋割山、飯盛山、鉢伏山などの山地から派生した溶岩台地によって三方を遮蔽された、小規模な沖積平野である（第６図）。溶岩台地の標高は300m前後で、その北端は長尾鼻、尾後鼻と呼ばれる急激な海食崖に囲まれた岬を形成し日本海へと突出している。青谷平野は山陰地方に通有の平野前面に砂州が発達するバリアー型平野であり、日置川と勝部川の２本の河川が流れ込み、両河川は最下流部で日置川が勝部川に合流し、日本海へと注いでいる。日置川下流域は、勝部川下流域に比べると標高が２～３mほど低く、ほぼ海抜高度に近い低平な平野、つまり三角州帯が谷奥まで広がっている点に最大の特徴がある。青谷横木遺跡はこの日置川下流域に位置し、長尾鼻へと伸びる丘陵帯の裾部にあたる。遺跡の南東には小規模な谷が開析されており、10区やＰ１・２区はその開析によって形成された扇状地の扇端部にあたる。また、Ｐ9～12区付近の東側にもさらに小規模な谷が入り組み、丘陵裾は比較的起伏のある複雑な地形をなしている。地質をみると、遺跡が面する長尾鼻の丘陵は鉢伏板状安山岩からなり、斜面下方では一部露頭となる。発掘調査でも丘陵裾に築かれた近世の石垣や、古代山陰道と考えられる道路盛土の補強材、阿古山24号墳の石室にもこの安山岩が多用されている。

調査地の地形は大部分が丘陵裾から平野にかけての平坦面であるが、先述の通りＰ１区付近は開析谷の緩斜面となる。標高は前者が1.8～2.0m前後で、後者は3m前後となる。調査前は水田、もしくは畑として利用されていた。



高橋学2006「青谷上寺地遺跡の地形環境」『青谷上寺地遺跡８』鳥取県埋蔵文化財センター第105図を一部改変

第６図　青谷平野の地形分類図

第２項　青谷平野の古環境

青谷平野にはかつて潟湖が存在し、国史跡青谷上寺地遺跡の調査研究では青谷平野における古環境の詳細な復原が試みられている（鳥取県埋蔵文化財センター 2011）。これに基づくと、縄文海進により約8000年前に青谷平野全体を埋め尽くすほどの内湾が形成された。その後、縄文時代後期の約4400年～ 3600年前には気候の寒冷化に伴う海水準の低下等により、内湾は急速に埋め立てられたものの、日置川の下流域に取り残される景観となった。約3600 ～ 2100年前には勝部川下流域では河川の氾濫原となり、沼沢地や湿地が拡大したのに対して、日置川下流域では依然として内湾が維持され、三角州をなす堆積物が堆積していった。青谷上寺地遺跡に繁栄をもたらした内湾は平安時代の約1000年前に至り、漸く埋積により陸化を遂げ、日置川の氾濫低地となって沼沢地、あるいは湿地に移行した、と考えられている。

翻って、青谷横木遺跡の堆積環境を概観すると、この復原された古環を概ね敷衍することができる。まず、縄文時代後期から晩期では貝密集層や海成粘土が遺跡のほぼ全域で確認され、この時期まで日置川下流域の大部分が内湾であったことが窺える。続く弥生時代から古墳時代ではしだいに陸化し、湿地を利用した水田が営まれる。古墳時代後期から終末期になると、遺跡を縦断し、弥生時代前期から連綿と形成され続けた大規模な河道が上流域から運ばれた砂礫により短期間のうちに急速に埋め立てられ、大きな環境変化を看取できる。その後、平安時代の10世紀後半に入って漸く条里遺構が構築されているが、このことはこの段階において潟湖が消失し、広域での耕地化が可能となったことと必ずしも無関係ではないであろう。中世になると泥炭層が全域に広がり、耕地は一旦放棄されて、水はけの悪い沼沢地に戻るが、近世以降再び水田開発が行われている。

第２節　基本層序

遺跡の基本層序は堆積構造の類似性とともに形成時期から並行関係を見出し、Ⅰ～Ⅸ層の９層に大別した（第７図）。ただし、沖積平野の水成堆積物であることに加え、調査範囲が長さ400m以上と長大であり、さらには、調査区が細切れであることから調査区間で基本層序が一致しない、もしくは、隣接する調査区であっても堆積が不連続となることも多い。そこで、堆積構造が明確に異なる場合はⅠ層相当、Ⅱ層相当…などと呼称することとし、土層断面図では各調査区、もしくは図毎に算用数字を付している。また、各層が細分される場合は、調査区毎でⅣ－１、Ⅳ－２…と枝番を付しているが、この枝番は調査区を超えて対応しない。

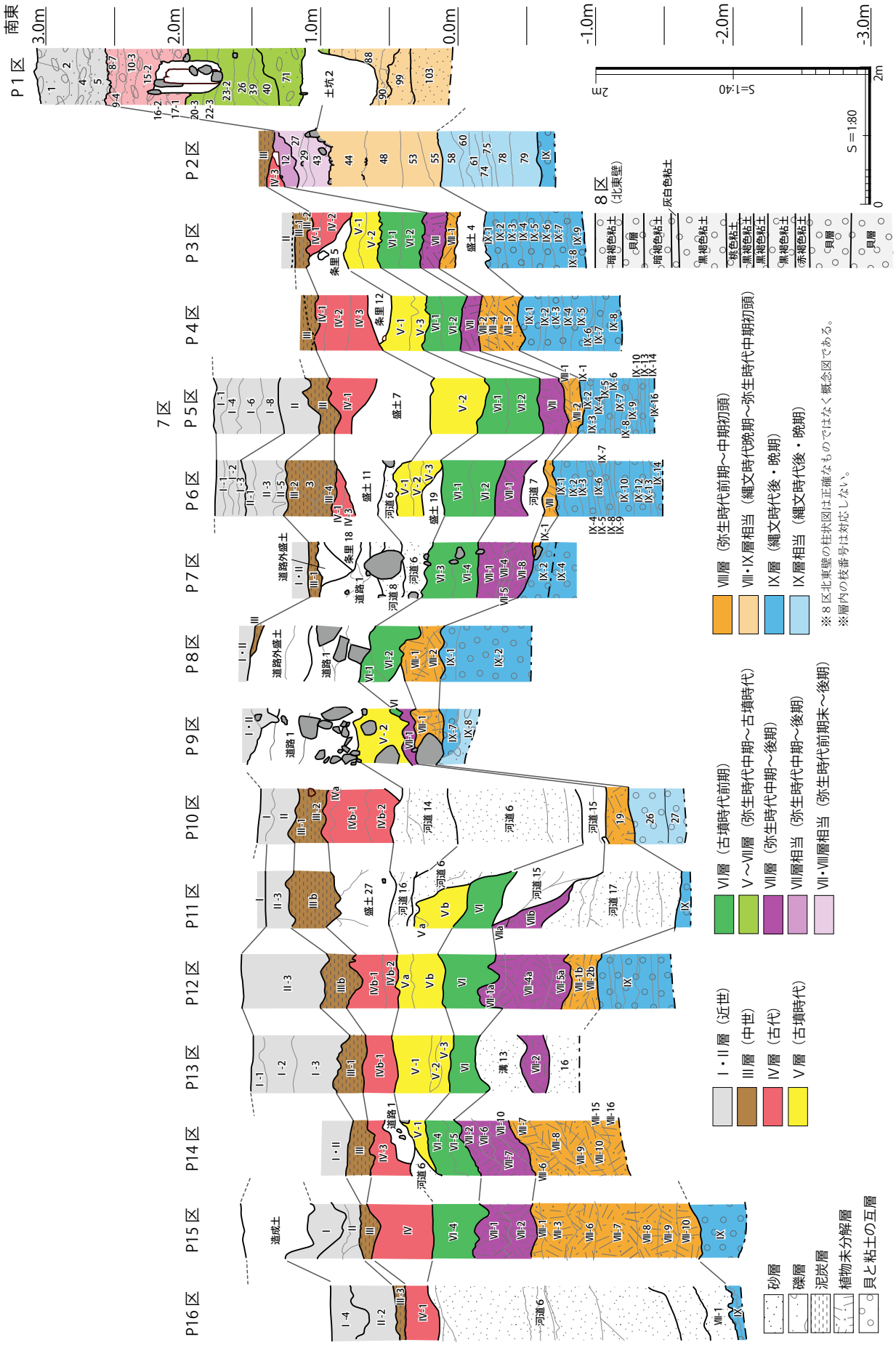
以下、基本層序について概略を述べる。なお、基本層序以外の堆積層や各調査区における堆積の特徴については調査区毎の報告の中で詳述することとする。

Ⅰ層

近世以降の表土、もしくは作土である。

Ⅱ層（近世以降）

Ⅰ層と同じく近世以降の作土、もしくは造成土である。暗褐色から褐灰色を呈するシルトを主体とする。Ｐ１区では東丘陵に入り組む谷の開析により堆積した砂礫層が相当し、層厚は最大１ｍ程と厚い。一方で、Ｐ10・11区などの山裾では小礫を多く含む黒褐色シルトが相当し、造成土の可能性が高く、山裾に沿って確認された大規模な石垣（石積２）に伴う造作と考えられる。出土遺物は陶磁器片を僅かに含む。当層上面が近世以降の遺構検出面となる。


南東
北西
P1区
P2区
P3区
P4区
P5区
P6区
P7区
P8区
P9区
P10区
P11区
P12区
P13区
P14区
P15区
P16区
7区
8区（北東壁）
S=1:40
S=1:80
I・II層（近世）
III層（中世）
IV層（古代）
V層（古墳時代）
VI層（古墳時代前期）
V～VII層（弥生時代中期～古墳時代）
VII層（弥生時代中期～後期）
VIII層相当（弥生時代中期～後期）
VII・VIII層相当（弥生時代前期末～後期）
VIII層（弥生時代前期～中期初頭）
VIII・IX層相当（縄文時代晩期～弥生時代中期初頭）
IX層（縄文時代後・晩期）
IX層相当（縄文時代後・晩期）
※８区北東壁の柱状図は正確なものではなく概念図である。
※層内の枝番号は対応しない。
砂層
礫層
泥炭層
植物未分解層
貝と粘土の互層

第７図　基本層序柱状図

Ⅲ層（中世）

中世に堆積した植物未分解層、いわゆる泥炭層である。最も地形が高い、Ｐ１区を除きすべての調査区で確認された。色調は黒褐色を呈し、層厚は最大40㎝を測る。層をなす植物遺体はイネ科の草本類が主体とみられる。出土遺物は僅かしかないが、青磁や鉄鍋、馬鍬などが出土している。時期は出土土器から12世紀から16世紀にかけてと推定され、この間、日置川下流域の遺跡周辺は沼沢地、もしくは湿地に戻り、人間活動は極めて希薄となる。当層上面が近世の遺構検出面となり、９区で水田の畦畔が確認されている。

Ⅳ層（古代）

古代の泥質堆積物である。黒褐色を呈する均質なシルトから粘土で、草本類が多く含まれる。10世紀後半に構築された条里遺構を被覆し、植物珪酸体分析はＰ３区でイネが10,600個/ｇ検出されていることから、水田の作土が主体と考えられる。上層はⅢ層の浸食による土壌化が著しく、一町方格を示す条里遺構の上部に敷かれた礫の下層まで達している。層厚は最大50㎝程で、Ｐ３～４区付近の堆積が最も厚い。堆積時期は10世紀後半から12世紀にかけてと推定される。ただし、条里遺構や道路外盛土などは基本的に当層を盛土の材料として利用しており、盛土と包含層の判別が極めて難しい。このことは、Ⅴ層上面から立ち上がると判断した、10世紀後半の条里遺構等が本来、Ⅳ層がある程度堆積した後に構築されたことを示している。その場合、堆積時期の上限が８～９世紀まで遡る可能性もある。遺物は土師器や須恵器、木製祭祀具や木簡が数多く出土している。当層上面が古代末から中世の遺構検出面となる。

Ⅴ層（古墳時代）

古墳時代前期から後期にかけての泥質堆積物である。オリーブ黒色を呈する均質な粘土からシルトで、草本類を含む。層厚は最大30㎝程である。出土遺物は少ないが、須恵器や土師器、木製品が出土している。当層上面が古墳時代後期から古代にかけての遺構検出面となる。

Ⅵ層（弥生時代後期～古墳時代前期）

弥生時代後期～古墳時代前期にかけての泥質堆積物である。オリーブ黒色を呈する均質な粘土からシルトで、草本類を多く含む。基本的な堆積構造はⅤ層に類似し、層厚は最大30㎝程である。遺物の包含は僅かで、土師器や木製品が出土している。当層上面が古墳時代前期の遺構検出面となる。

Ⅶ層（弥生時代中期後葉～後期）

弥生時代中期後葉から後期にかけて堆積した植物未分解層である。畦畔等の遺構が検出されており、水田耕作等の人為的な攪乱を多く受ける。色調は暗褐色から黒褐色を呈し、包含される植物遺体は草本類が主体であるが、木本も含む。層厚は最大65㎝程を測る。P11区の河道15など肩部付近では層間に溢流堆積に由来する粘土層が目立つ。出土遺物は弥生土器の他には木製品が数多く出土している。層内が弥生時代中期から後期の、層上面が弥生時代後葉から古墳時代前期の遺構検出面となる。

Ⅷ層（弥生時代前期～中期初頭）

弥生時代前期から中期初頭にかけて堆積した植物未分解層である。色調は暗褐色から黒褐色を呈し、包含する植物遺体は基本的にⅦ層と同じである。ただし、Ⅶ層に比べ植物遺体の含有率が高く、人為的な攪乱は少ない。出土遺物は少なく、弥生土器や木製品が出土している。当層上面が弥生時代前期から中期初頭の遺構面となる。

Ⅸ層（縄文時代後期～晩期）

縄文時代後期から晩期にかけて堆積した、いわゆる貝層である。遺跡の基盤となる層で、青谷平野に形成されていた『古青谷湾』と呼ばれる潟湖の堆積物と考えられる。貝密集層と灰色を呈し、海性粘土層とみられる緻密な粘土層が互層状に水平堆積し、両層とも層厚は２～10cm程度と薄い。Ⅸ層全体の層厚は最下層まで掘削していないが、80cm以上を測る。包含されている貝化石は巻貝や二枚貝など複数種に及ぶ。Ｐ９区の丘陵裾では下層で基盤となる無遺物の礫層が確認されており、丘陵沿いでは貝層中に指頭大から拳大程度の角礫が流入している。出土遺物は縄文土器や木製品が僅かながらみられ、Ｐ15区で丸木舟が完形で出土している点が特筆される。当層上面、または層内が縄文時代後期から晩期にかけての遺構検出面となる。

Ⅸ層以下（縄文時代後期以前）

調査は基本的にⅨ層まで行い、無遺物層に達した段階で終了したが、８区では部分的にⅨ層以下の掘り下げを行っており、堆積状況を確認している。標高－3.0m付近まで確認し、Ⅸ層と同じ潟湖の堆積物で、貝密集層と粘土が互層状に堆積する。遺物は出土していない。

第３節　遺跡の概要

青谷横木遺跡では縄文時代後・晩期から近世に至る遺構や遺物が数多く確認されている。本節では確認された遺構の特徴や性格について時代毎にその概略を述べる。

縄文時代後期～晩期（第８図）

縄文後期から晩期の遺構は杭列や杭群が中心で、それ以外ではＰ２区で木造構造物や木器溜まり、Ｐ３区で盛土遺構が確認されている。
杭は遺跡全体で200本以上を数える。列をなす部分も散見されるが、規則性は見出せず乱雑に打設されている部分も多く、打設が複数時期に

第８図　縄文時代後・晩期遺構分布図

及ぶ可能性が高い。分布は２ヶ所に集中し、一つは遺跡の北西半、Ｐ12区北西からＰ16区にかけての平野部、もう一つはＰ３区からＰ５区にかけてである。後者はＰ４区では杭が僅かしか確認できないが、Ｐ３・５区のいずれも地形のやや高い山裾側に集中することから、Ｐ４区の北東側を含めた帯状の範囲に連続して打設されている可能性が高い。

これらの杭群はⅨ層、つまり貝層に打設され、潟湖の湖底に構築された構造物であるが、山裾に近い立地から、内湾のなかでも水深が浅い汀線付近に設けられたとみられる。性格については漁撈に関連した施設の可能性もある一方で、Ｐ15区で杭列とともに丸木舟が出土している点が注目される。丸木舟は完存し、舟内には縄文土器や被熱礫などが乗せられており、湖岸に停泊した状態をほぼ保っているとみられる。このことから、杭群は舟着き場などの接岸施設をなすと同時に、水深を維持し舟の接岸を助ける水制の機能を果たしていた可能性もある。

Ｐ３区の盛土８は杭群の上部に築かれており、汀線がやや後退した後、湖岸に築かれた護岸施設の一部と考えられる。また、Ｐ２区の木造構造物１は水辺にアクセスするために施された木道の可能性があり、近接する大木の樹根周辺から、縄文土器がまとまって出土している点も湖畔における生業活動の一端を示すものと評価できる。

弥生時代前期～中期（第９図）

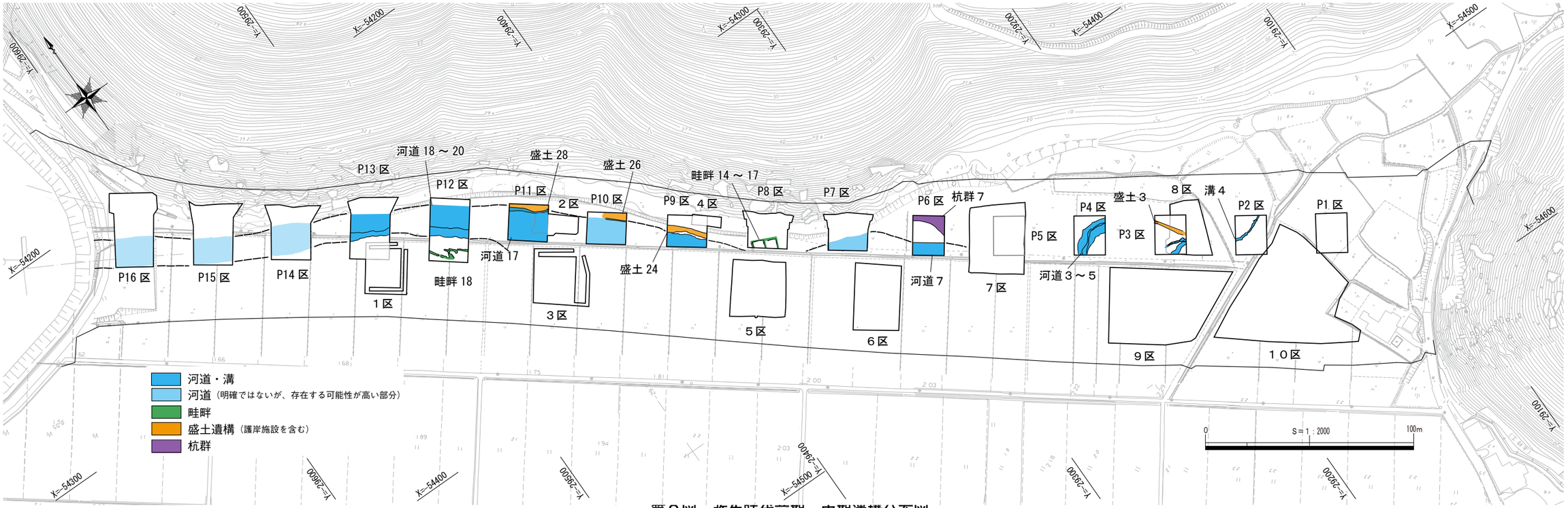
弥生時代前期から中期にかけての遺構は、畦畔や盛土遺構、木造構造物、自然河道などが確認されている。内湾は次第に縮小し、平野部は河川が流れ込む氾濫原となり、Ｐ６区～Ｐ16区にかけての山裾には、幅10m以上の大規模な河道が確認されている。日置谷側から流下し、Ｐ６・７区付近で丘陵にぶつかり山裾を蛇行しながらＰ16 区の北西側で潟湖に注いでいたと考えられる。河道の出現は弥生時代前期まで遡り、古墳時代後期に至るまで流路を変えながら連綿と形成され続ける。河道には盛土や木造構造物による護岸施設が伴う。とくにＰ９～ 11区にかけての山裾には盛土24・26・28が築かれ、中期を中心として護岸が手厚く施されている。この部分の山裾には、谷の開析により平坦面が形成され、護岸施設は河道が平坦面を浸食するのを防ぐ目的と考えられる。土器や木製品の出土もＰ10 ～ 12区かけて集中し、山裾の平坦面から丘陵斜面にかけて小規模な集落が営まれた可能性が高い。集落の出現は少なくとも弥生時代前期末まで遡りうる。Ｐ12区の畦畔18やＰ８区の畦畔14 ～ 17などは集落に近接する平野部に営まれた小区画水田と考えられる。

遺跡の南東側はＰ２～４区にかけて小規模な河道が複数形成され、土地利用は低調である。ただし、Ｐ３区の盛土３は畦畔の可能性があり、弥生時代前期には湿地を利用した水田が営まれた可能性を示唆する。

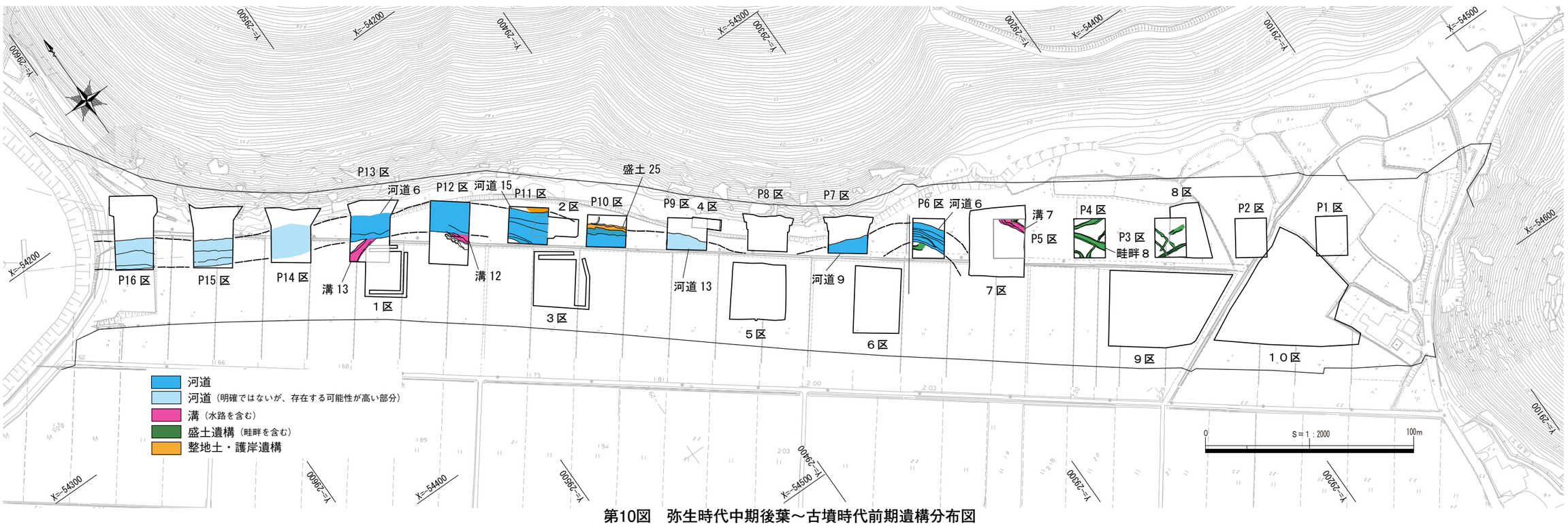
弥生時代中期後葉～古墳時代前期（第10図）

弥生時代後期から古墳時代前期の遺構は、畦畔を中心とする盛土遺構や溝、木造構造物、廃棄土坑、河道などが確認されている。Ｐ10区付近の山裾に想定される集落は継続して営まれるが、古墳時代前期には衰退した可能性が高い。

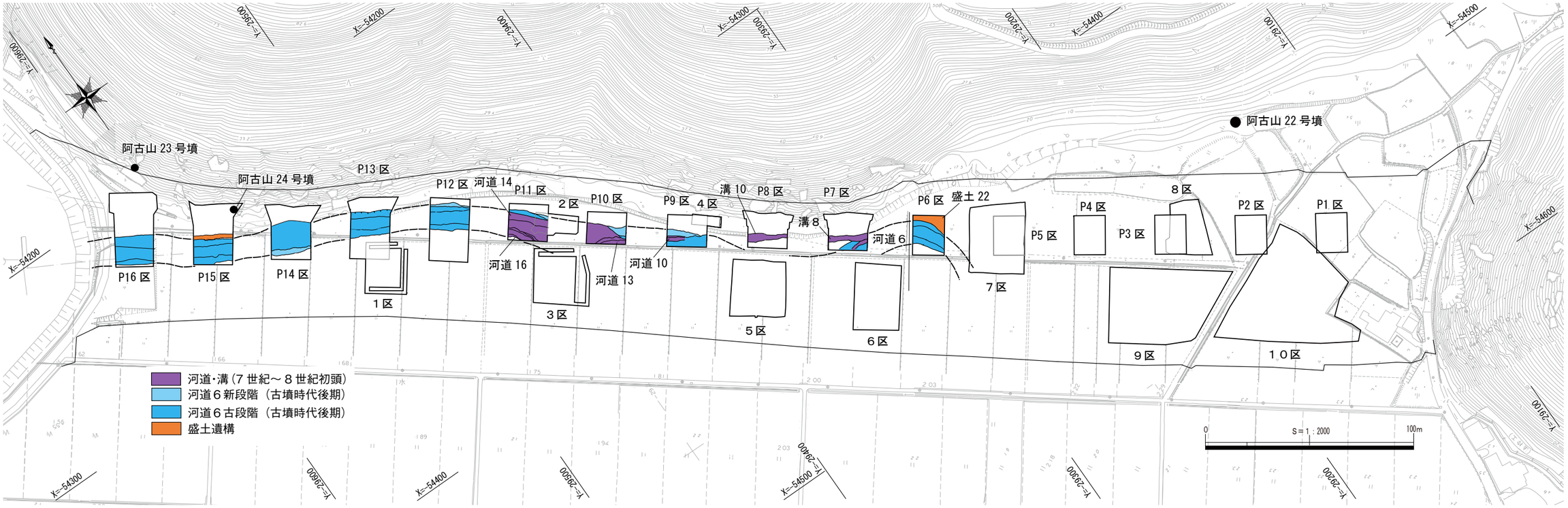
山裾の大規模な河道も引き続き形成され、Ｐ10・11区付近の山側を中心に護岸施設が構築される点も変わらない。Ｐ11区では整地土が施され、河道は木っ端などを多量に投棄することで埋め立てが繰り返されるなど、山裾の平坦地は狭小でありながら重要な土地であったことが窺われる。



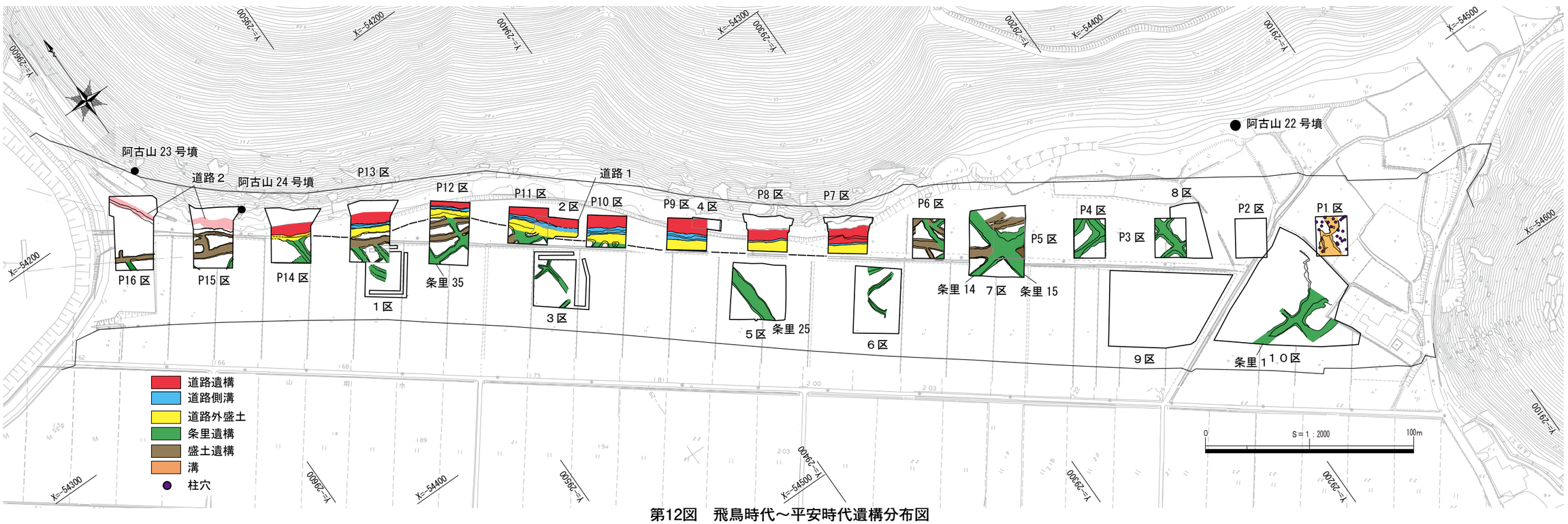
第９図　弥生時代前期～中期遺構分布図



第10図　弥生時代中期後葉～古墳時代前期遺構分布図



第11図　古墳時代中期～飛鳥時代遺構分布図



第12図　飛鳥時代～平安時代遺構分布図

平野部の低湿地は前代に比べ、水田開発が積極的に行われるようになる。Ｐ３・４区では区画規模は明確ではないが、畦畔と考えられる盛土遺構が重複して検出されている。Ｐ５区の溝７やＰ12区の溝12、Ｐ13区の溝13は灌漑用水路と考えられ、矢板や杭と横板等による木造構造物を伴う。出土遺物は前代と同じくＰ10 ～ 12区に集中し、垂木や屋根葺材など建築部材や出土は集落の存在を示唆する。銅鏡の出土が特筆され、Ｐ３区で内行花文鏡の破鏡、Ｐ11区で放射状区画珠文鏡が出土している。弥生時代中期に比べ後期の資料が少なく、古墳時代前期に再び増加する傾向が看取される。

古墳時代中期～飛鳥時代（第11図）

古墳時代中期から飛鳥時代にかけては、盛土遺構や溝、土坑、河道が確認されている。山裾に形成された大規模な河道（河道６）が洪水により埋没し、遺跡周辺の環境が一変する時期である。山裾には船の線刻壁画で著名な阿古山22号墳をはじめとする阿古山古墳群が展開し、Ｐ15区では阿古山24号墳が確認されている。円墳で、板状安山岩を用いた横穴式石室を持つ。

山裾の河道６は幅12 ～ 13m、深さ最大1.4m程の規模を持ち、Ｐ６区やＰ11・12区では貼石や杭による護岸施設が構築されている。いずれも流水により攻撃斜面が浸食されるのを防ぐ目的で施されており、保護された山裾側に何らかの施設が存在したと考えられる。Ｐ11・12区の河道底面から山側の肩部にかけて完形に近い須恵器や土師器が多量に出土している点もこれを示唆する。河道は弥生時代以来、河川交通に用いられ、河岸に接岸施設が存在した可能性もある。一方で、この時期になると、河道内からミニチュア土製品やＰ７区で瑪瑙の勾玉が出土するなど、水辺の祭祀が執り行われた様子も垣間見える。

古墳時代後期に埋積を遂げた河道６であるが、飛鳥時代の７世紀後葉から末にかけても完全には埋没しておらず、重複する位置に小規模な河道や溝が数多く形成される。これらの河道や溝は人形や馬形など多量の木製祭祀具が出土している点に特徴があり、遺跡周辺で祓えなど大規模な律令的祭祀が執り行われた。木製祭祀具の出土はＰ10・11区が最も多く、Ｐ11区の河道16では木製祭祀具に加え、ウシやウマなどの獣骨や多量の土器も共伴する。これらの河道が埋没、もしくは一部が未だ機能している段階で、山裾に大規模な道路遺構（道路１）が敷設される。この道路１は規模や特徴から古代山陰道の駅路と考えられ、律令祭祀の導入も駅路建設を契機とした可能性が高い。Ｐ10 区の河道13は小規模でありながら、貼石や杭による丁寧な護岸が施されており、軟弱地盤である道路敷を保護する目的があったものと推察される。

飛鳥時代～平安時代（第12図）

飛鳥時代から平安時代にかけての遺構は、道路遺構や条里遺構、盛土遺構、河道、柱穴などが確認されている。遺跡の中心となる時期で、遺構密度が最も高く、出土遺物の量も突出する。

山裾を直線的に延びる道路遺構（道路１）は、先述の通り古代山陰道の駅路と考えられる。敷設時期は７世紀末から８世紀初頭で、改修を繰り返しながら少なくとも11世紀までの長期間維持された。道路は盛土で築かれ、道路敷の大部分は前代に埋没した河道６上にあたる。最も軟弱地盤とみられるＰ10･11区の道路盛土には敷葉･敷粗朶工法が用いられている。道路構造は10世紀後半に大きく変化し、道路側溝の外側に道路外盛土と呼ばれる盛土が構築され、さらにその外側の平野部には条里地割を示す盛土遺構が取り付く。道路外盛土上では樹木根が列状に検出され、樹種同定により柳の街路樹が存

在したことが判明している。
条里遺構は一町方格と、その内部区画を示す東西南北の盛土遺構が検出されている。復元される条里地割の規格は約109mと推定され、一町方格内の地割形態は一般的な半折型や長地型ではなく、長幅とも約21m(12歩)四方に分割されていたと考えられる。その他に、条里地割とは方位の異なる盛土遺構が数多く検出されているが、その性格は不明である。

柱穴はＰ１区で数多く検出され、掘立柱建物で構成される施設群が谷奥の微高地に営まれたとみられる。建物の具体的な性格は明らかではないが、木簡や墨書土器などの出土遺物から古代山陰道沿いに営まれた官衙関連施設とみなしうる。その一方で、出土遺物が最も集中する、Ｐ10 ～ 12区付近の山裾の僅かな平坦面、もしくは丘陵斜面にも官衙関連施設が営まれた可能性が高い。

出土遺物は木簡や墨書土器の他に刻書土器、緑釉陶器、銅鈴具、木製祭祀具など官衙関連遺物が多く出土し、木簡は80点、木製祭祀具は約22,500点にも及ぶ。土器や木製品の出土量も多く、木製品は漆器や曲物、田下駄、下駄、檜扇、経巻具、糸枠、アカ取り、櫂、舟、弓、建築部材など各種が一通り揃う。その他では、木とんぼや高松塚古墳に類似する『女子群像』が描かれた板絵や仏教芸術のモチーフである山岳文様が描かれた銅板が特筆される。古代の遺構や遺物については第７章総括にて詳細な検討を加えることとする。

中・近世

中世の遺構は、９区などで中世初頭とされる畦畔２が僅かに検出されているのみである。基本的には沼沢地化が顕著となり、耕作地としても放棄される。人間活動の痕跡が最も希薄な時期である。

近世以降の遺構は、石垣２基と水路が確認されている。Ｐ１区では棚田に伴うとみられる石垣(石積１)と水路１が検出されている。それに対して、Ｐ７～９区では山裾で高さ最大２ｍ程の石垣(石積２)が確認されている。この石垣は調査前の現地形でも確認することができ、阿古山22号墳のやや北西側から山裾に沿って構築されており、全長は500m以上に及ぶ。この石垣によって造成された上平坦面は幅が僅か10m程しかない。文政年間(1818 ～ 1830年)作成の絵図を明治20年(1887年)に縮写した『因幡国八郡絵図』の『気多郡全図』によると、畑として利用されていたことが分かるが、平坦面の狭さや石垣の丁寧な造りからみて、当初から畑の造成に伴う構築物とは考えにくい。当初の性格としては道路などの可能性が考えられる。

【参考文献】
鳥取県埋蔵文化財センター 2011『青谷上寺地遺跡景観復原調査研究報告』

第４章　各調査区の成果

第１節　Ｐ１区の調査

第１項　調査区の概要

１　地形と土層堆積（第13・14図）

Ｐ１区は遺跡の南東端にあたり、東側丘陵裾に開析された、小規模な扇状地の扇央部に位置する。遺跡内では最も標高が高く、地形は西へ下る緩斜面である。発掘調査は平成27年度に実施し、調査区の平面積は278.6㎡である。調査区西隅は10区東壁と僅かに接している。

基本層序は他の調査区と大きく異なり、共通する堆積層はみられない。Ｐ１区で主体をなすのは砂礫層であり、東側に入り組む谷の開析に起因する土砂が基盤となっている。Ⅱ層に相当するのは１～７層で、基本的に自然堆積と考えられるが、上面は造成により平坦化されている。時期は陶磁器片が僅かに出土し、近世以降と考えられる。Ⅳ層に相当するには８～19層で、各層はさらに細分される。やはり、砂礫層が主体となるが、10－1、10－4層など砂礫層間に砂層が流入している。礫層内には数多くの柱穴が営まれることから、整地土が含まれている可能性が高いが、人為的な堆積と自然堆積を明確に判別できていない。時期は出土土器から上層の８～10層が岡田・八峠編年ＫⅤ～ＣⅠ期、10～11世紀代、下層の14～19層がＫⅢ－1～ＫⅢ－3期、７世紀末から９世紀前半と推定される。

Ⅴ～Ⅶ層に相当するのは20～73層で、Ⅳ層相当に比べると砂層やシルト層を多く挟む。Ⅷ・Ⅸ層相当層も基本的にⅤ～Ⅶ層と同じく、礫層と砂やシルト層が互層状に堆積している。とくに南西の低地側で砂層が厚く、河川等による流水の影響を強く受けている。縄文晩期の土器が一定量出土している。Ⅷ・Ⅸ層相当層の下層は確認できていないが、他の調査区と同じく潟湖の堆積物である貝層が堆積している可能性が高い。

２　遺構の概要

Ｐ１区では、弥生時代から古墳時代の土坑１基、古代の柱穴群、杭列２基、溝状遺構３基、土坑１基、近世の石垣、溝状遺構１基を確認した。

とくに古代では遺構の内容が他の調査区とは異なり、柱穴が密集して検出されている点が特筆される。木簡や墨書土器の出土からも本調査区周辺に何らかの公的施設が存在していたことが窺える。

第２項　Ⅱ層相当上面の遺構（近世）

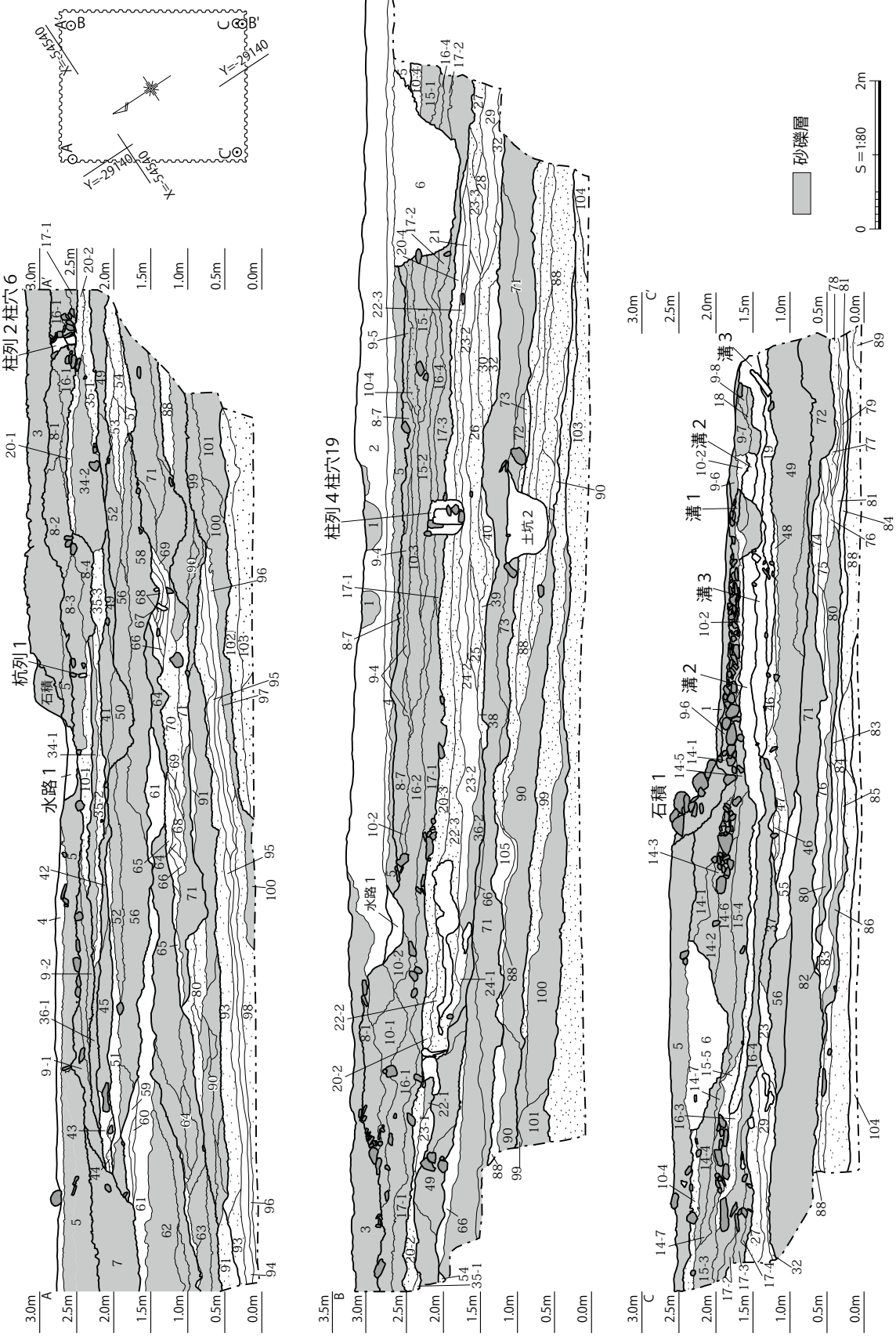
１　概　要（第15図）

Ⅱ層相当上面が近世の遺構検出面である。遺構は石垣１著、溝１基を検出している。調査区内では地形に沿って狭小な平坦面が２段にわたり造成され、両遺構はその区画施設とみられる。造成された平坦面は水田など耕作地として利用された可能性が高い。詳細な時期は特定できないが、陶磁器片が少量出土していることから近世以降と推定される。

２　石垣

石積１（第15・16図　ＰＬ.３－２）

調査区北西隅で検出された石垣で、南北方向に延びる。方位はＮ－10°－Ｗである。水路１との間



第13図　Ｐ１区土層断面図（１）

Ⅱ層相当
- 1　砂礫。黒褐色砂質シルト(10Y3/1)と鶉～鶏卵大礫多含。
- 2　暗褐色砂質シルト(10YR3/3)
- 3　砂礫。しまり弱。黄灰色粘土(2.5Y4/1)含。水平方向に脈理。
- 4　黒褐色粘土質シルト(10YR3/2)板石多含。粘性強。
- 5　砂礫。にぶい赤褐色粘土(5YR4/3)、鶏卵～掌大丸い亜角礫含。
- 6　砂礫。灰黄褐色砂質シルト(101YR4/2)と拳～人頭大平石よりなる。山砂含。人為的か。
- 7　砂礫。暗褐色細砂(10YR3/3)と鶏卵よりやや大きい亜角礫よりなる。

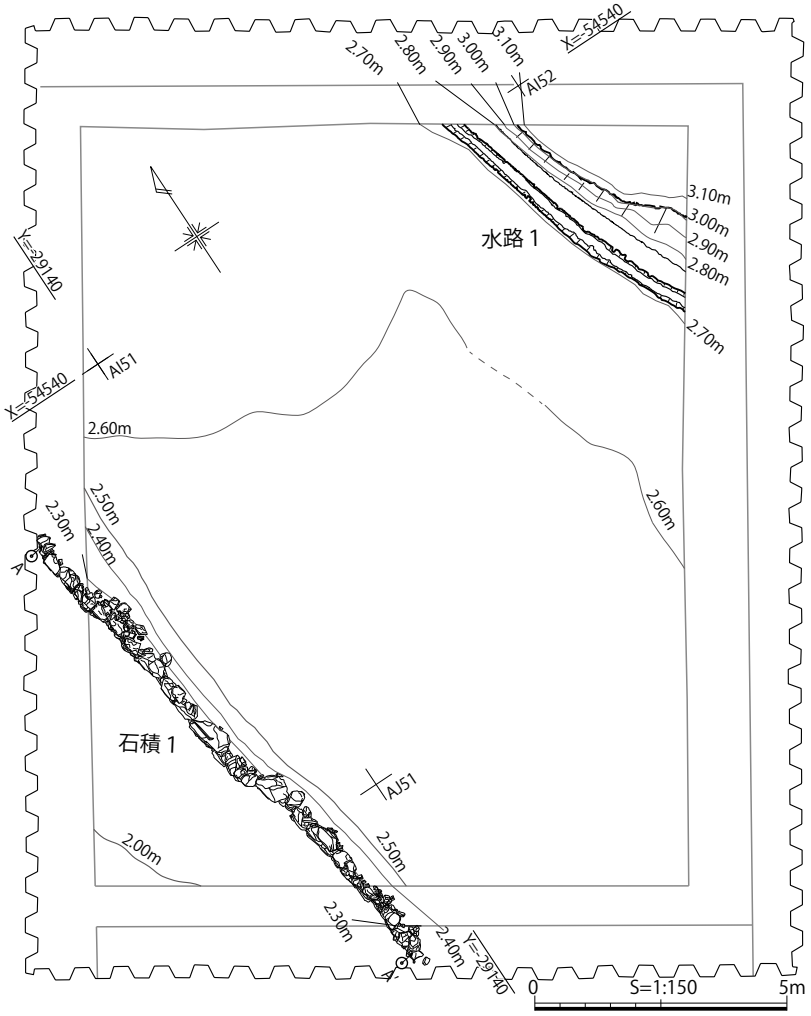
Ⅳ層相当
- 8-1　礫。鶏卵大円礫主体。黒褐色砂質シルト(10YR3/1)含。
- 8-2　砂礫。暗オリーブ褐色細砂(2.5Y3/3)と豆粒～拳大よりやや大きい亜角礫、拳大板礫よりなる。
- 8-3　礫。鶏卵～拳大亜角礫主体。にぶい黄褐色微砂(10YR4/3)含。
- 8-4　礫。豆粒～鶏卵大板礫に黒褐色細砂(2.5Y3/1)含。
- 8-5　砂礫。掌大平石多含。灰黄褐色粘土(10YR4/2)含。
- 8-6　砂礫の一部。灰黄褐色粘土(10YR4/2)含。
- 8-7　砂礫。黒褐色砂質シルト(10YR3/2)と鶏卵～掌大の亜角礫よりなる。
- 9-1　砂礫。にぶい黄褐色微砂(10YR4/3)と鶏卵～拳大の亜角礫よりなる。
- 9-2　砂礫。黒褐色砂質シルト(2.5Y3/2)とやや丸い板石よりなる。
- 9-3　砂礫。黒褐色細砂(10YR3/2)と角の取れた板石よりなる。
- 9-4　砂礫。平石、礫多含。黒褐色砂質シルト(7.5YR3/1)、細砂含。
- 9-5　砂礫。平石、礫、細砂含。
- 9-6　礫。鶉卵大円礫主体。灰黄褐色粗砂(10YR4/2)含。
- 9-7　砂礫。黄灰色極大粗砂(2.5Y4/1)、鶏卵大円礫含。
- 9-8　砂礫。オリーブ黒色砂質シルト(5Y3/2)、粘土含。
- 10-1　黒褐色微砂(2.5YR3/1)有機物含。
- 10-2　砂礫。平石多含。黒褐色砂質シルト(7.5YR3/1)、細砂含。
- 10-3　砂礫。黒褐色シルト(2.5Y3/1)含。ほぼ均一。
- 10-4　砂。黒褐色シルト(2.5Y3/1)礫含。ほぼ均一。
- 10-5　黒褐色微砂(2.5YR3/1)有機物含。
- 14-1　砂礫。黒褐色粘土質シルト(2.5Y3/1)、拳～乳児頭大の比較的大きな礫含。
- 14-2　砂礫。黒褐色粗砂(2.5Y3/2)と掌大板石よりなる。しまりあり。硬い。
- 14-3　砂礫。褐色粗砂(7.5YR4/4)と掌大板石よりなる。
- 14-4　砂礫。暗オリーブ褐色細砂(2.5Y3/3)主体。しまりあり。硬い。鶏卵大礫多含。
- 14-5　砂礫。暗褐色粗砂(10YR3/3)、拳～鶏卵大亜角礫、シルト含。
- 14-6　砂礫。暗褐色粗砂(10YR3/3)主体。シルト、鶏卵大亜角礫含。
- 14-7　砂礫。オリーブ黒色砂質シルト(7.5Y3/1)含。細かな植物遺体多含。
- 15-1　砂礫。オリーブ黒色砂質粘土(5Y3/1)、微砂、鶏卵～小鳥卵大礫よりなる。
- 15-2　砂礫。灰黄褐色粗砂(10YR4/2)と鶉卵大円礫によりなる。しまりあり。硬い。
- 15-3　砂礫。灰黄褐色粗砂(10YR4/2)と鶉卵大円礫よりなる。しまりあり。硬い。
- 15-4　砂礫。灰黄褐色粗砂(2.5Y3/2)と鶏卵大前後円礫よりなる。
- 15-5　灰黄褐色粗砂(2.5Y3/2)植物遺体含。
- 16-1　砂礫。黒褐色砂質シルト(2.5Y3/2)と鶏卵大前後丸い亜角礫よりなる。部分的に灰色微砂(5Y4/2)集積。
- 16-2　砂礫。黒褐色砂質シルト(2.5Y3/2)と鶏卵大礫よりなる。
- 16-3　暗オリーブ褐色細砂(2.5Y3/3)有機物(木の葉・小枝)多含。平石含。
- 16-4　砂礫。暗褐色粗砂(10YR3/3)と多量の拳大程度平石よりなる。
- 17-1　砂礫。暗褐色細砂(10YR3/3)と拳大より大きな角礫よりなる。
- 17-2　砂礫。オリーブ褐色粗砂(2.5Y4/3)と小鳥～鶏卵大亜角礫よりなる。
- 17-3　砂礫。黒褐色微砂(2.5Y3/2)と鶏卵大～掌大角礫、板石よりなる。
- 17-4　砂礫。褐色微砂(10YR3/2)と鶏卵大～掌大角礫、板石よりなる。
- 18　砂礫。オリーブ黒色細砂(5Y3/2)含。有機物多含。
- 19　オリーブ黒色砂質シルト(7.5Y3/1)均一。

Ⅴ～Ⅶ層相当
- 20-1　黒褐色微砂(2.5YR3/1)有機物、拳大亜角礫含。
- 20-2　黒褐色粗砂(2.5Y3/2)有機物、拳大亜角礫含。
- 20-3　黒褐色砂(10YR3/1)粗砂と細砂が交互に堆積する互層堆積。
- 20-4　オリーブ黒色粘土質シルト(5Y3/1)ほぼ均一。
- 21　黒褐色砂質シルト(10YR2/2)細砂含。有機物少含。
- 22-1　砂礫。暗褐色粗砂(10YR3/3)亜角礫含。
- 22-2　暗褐色細砂(10YR3/3)一部極大粗砂含。有機物含。
- 22-3　黒褐色砂(10YR3/1)粗砂と細砂が交互に堆積。

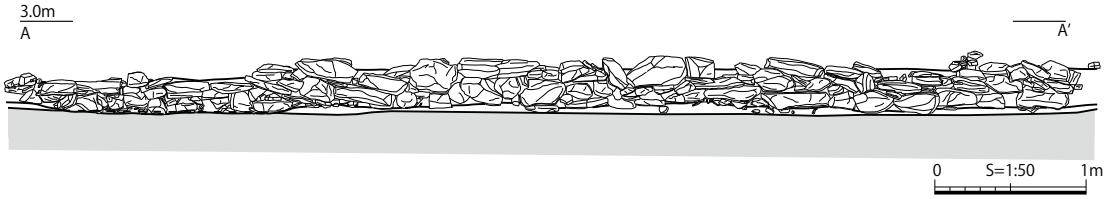
Ⅴ～Ⅶ層相当
- 23-1　黒褐色砂質シルト(2.5Y3/1)粗砂多含。有機物含。
- 23-2　黒褐色砂質シルト(10YR2/2)微砂多含。
- 23-3　暗褐色極大粗砂(7.5YR3/4)
- 24-1　黒褐色砂質シルト(2.5Y3/1)黒褐色粗砂(10YR3/1)、小豆大小礫含。
- 24-2　黒褐色シルト(10YR2/2)粘土、有機物含。均一な堆積。
- 25　暗褐色細砂(10YR3/3)粘土含。
- 26　暗褐色極大粗砂(7.5YR3/4)有機物含。
- 27　黒褐色微砂(10YR3/2)均一。有機物含。
- 28　黒褐色砂質シルト(10YR2/2)均一。微砂含。
- 29　黒褐色砂質シルト(2.5Y3/1)粗砂含。植物遺体多含。
- 30　褐灰色粗砂(10YR4/1)極大粗砂含。
- 31　黒褐色砂質シルト(10YR2/2)微砂、有機物含。
- 32　黒褐色砂質シルト(2.5Y3/1)植物遺体多含。Ⅴb1より粗砂やや多含。
- 33　黒褐色砂質シルト(2.5Y3/1)粗砂含。植物遺体多含。
- 34-1　砂礫。砂質シルトと円礫よりなる。豆粒大凝灰岩粒含。
- 34-2　砂礫。鶏卵大～豆粒大の円礫と暗褐色粗砂(10YR3/3)よりなる。
- 35-1　黒褐色粗砂(2.5Y3/2)均一。層下位に炭化物含。縞状ラミナが水平に入る。
- 35-2　黄灰色粗砂(2.5Y4/1)含。
- 35-3　黄灰色細砂(2.5Y4/1)シルト含。
- 36-1　砂礫。黄灰色粗砂(2.5Y4/1)含。
- 36-2　砂礫。鶏卵大～掌大亜角礫、板石、砂質シルトよりなる。
- 37　砂礫。黄灰色粗砂(2.5Y4/1)と鶏卵大円礫よりなる。
- 38　褐灰色粗砂(10YR4/1)均一。
- 39　褐灰色粗砂(10YR4/1)
- 40　黒褐色粘土質シルト(10YR3/1)小鳥卵大円礫含。
- 41　砂礫。オリーブ黒色粗砂(5Y3/2)と鶏卵大円礫よりなる。
- 42　黄灰色砂質シルト(2.5Y4/1)粗砂含。一部砂に変化。
- 43　黒褐色砂質シルト(10YR3/1)粘性あり。ほぼ均一。
- 44　暗褐色粗砂(101YR3/3)鶉卵大円礫含。
- 45　砂礫。黒褐色砂質シルト(10YR3/2)と円礫、亜角礫よりなる。
- 46　黄灰色細砂(2.5Y4/1)シルト含。
- 47　黒褐色細砂(2.5Y3/1)均一。
- 48　黒褐色シルト(2.5Y3/1)微砂含。均一。
- 49　砂礫。黒褐色砂質シルト(10YR3/2)と円礫、板状亜角礫よりなる。
- 50　砂礫。黒褐色砂質シルト(10YR3/2)と円礫、板状亜角礫よりなる。
- 51　黒褐色砂質シルト(10YR3/1)ほぼ均一。
- 52　砂礫。黒褐色砂質シルト(10YR3/1)、亜角礫含。
- 53　黒褐色砂質シルト(10YR3/1)ほぼ均一。
- 54　黒褐色細砂(10YR3/2)鶏卵～拳大亜角礫、板礫含。
- 55　黒褐色砂質シルト(2.5Y3/1)微砂多含。
- 56　砂礫。黒褐色砂質シルト(10YR3/1)と鶏卵大前後円礫よりなる。有機物含。
- 57　黒褐色砂質シルト(10YR3/2)粗砂多含。
- 58　砂礫。暗オリーブ褐色細砂(2.5Y3/3)と鶏卵大の比較的大きな円礫よりなる。
- 59　灰褐色砂質シルト(7.5YR4/2)微砂多含。均一な堆積。
- 60　黒褐色砂質シルト(7.5YR3/2)粘性あり。粘土多含。
- 61　オリーブ黒色粘土質シルト(5Y3/1)均一。
- 62　砂礫。オリーブ黒色極大粗砂(5Y3/1)、鶏卵～拳大板石、亜角礫よりなる。粗砂、オリーブ黒色粘土(7.5Y3/1)含。
- 63　オリーブ黒色砂質シルト(5Y3/1)砂質シルトと粗砂が互層堆積。
- 64　砂礫。オリーブ黒色細砂(10Y3/1)と鶏卵大円礫よりなる。
- 65　黒色シルト(5Y2/1)ほぼ均一。微砂含。植物遺体多含。
- 66　オリーブ黒色砂質シルト(7.5Y3/1)細砂多含。
- 67　暗灰黄色砂質シルト(2.5Y4/2)細砂多含。
- 68　黒褐色粗砂(2.5Y3/2)極大粗砂、ビー玉大円礫含。
- 69　オリーブ黒色細砂(5Y3/1)円礫含。
- 70　オリーブ黒色微砂(5Y3/1)均一。
- 71　砂礫。豆粒大円礫主体。粗砂(2.5Y3/2)と鶏卵大円礫よりなる。
- 73　砂礫。オリーブ黒色粗砂(7.5Y3/1)と鶏卵大前後亜角礫、鶉卵大円礫よりなる。

Ⅷ・Ⅸ層相当
- 74　黒褐色極大粗砂(10YR3/2)～鶏卵大亜角礫含。礫はかなり丸くなっている。
- 75　黒褐色粘土質シルト(10YR3/1)均一。灰褐色シルトがラミナ状に水平に入る。
- 76　黒褐色砂質シルト(2.5Y3/1)ほぼ均一。有機物含。
- 77　オリーブ黒色粗砂(5Y3/1)鶏卵大円礫含。
- 78　砂。灰オリーブ色細砂(5Y4/2)～粗砂で構成。
- 79　オリーブ黒色砂質シルト(5Y3/1)細砂多含。
- 80　砂礫。黒褐色細砂(2.5Y3/2)に円礫少含。
- 81　黒褐色砂質シルト(2.5Y3/1)細砂多含。南西側で鶏卵大円礫を含み、砂礫層となる。
- 82　砂礫。オリーブ黒色細砂(5Y3/2)と鶏卵大角礫よりなる。
- 83　灰色シルト(5Y4/1)に選択の進んだ細砂多含。均一な堆積。
- 84　黒褐色砂質シルト(2.5Y3/1)微砂多含。有機物多含。
- 85　オリーブ黒色細砂(5Y3/1)微砂含。
- 86　砂礫。オリーブ黒色細砂(5Y3/1)と鶏卵大前後亜角礫よりなる。
- 88　オリーブ黒色細砂(7.5Y3/1)円礫含。流水堆積。有機物含。
- 89　黒褐色粗砂(2.5Y3/2)鶏卵大よりやや大きい円礫含。
- 90　砂礫。暗灰黄色細砂(2.5Y4/2)、オリーブ黒色微砂(7.5Y3/1)、鶏卵大円礫含。黒色シルト(5Y2/1)含。
- 91　オリーブ黒色粗砂(5Y3/2)円礫含。
- 92　オリーブ黒色粗砂(10Y3/1)。
- 93　灰色細砂(7.5Y4/1)均一。
- 94　暗オリーブ灰色微砂(2.5GY3/1)ほぼ均一。
- 95　灰色砂質シルト(10Y4/1)均一。
- 96　黄灰色砂質シルト(2.5Y4/1)均一。
- 97　灰色砂質シルト(10Y4/1)均一。礫含。
- 98　黄灰色細砂(2.5Y4/1)円礫含。
- 99　砂礫。黄灰色細砂(2.5Y4/1)若干の粗砂、黒褐色砂質シルト含。鶏卵大～拳大の亜角礫、円礫含。
- 100　砂礫。黄灰色細砂(2.5Y4/1)、円礫含。鶏卵～拳大亜角礫、小鳥卵大円礫よりなる。
- 101　砂礫。オリーブ黒色細砂(10Y3/1)と鶏卵大～拳大亜角礫、円礫よりなる。
- 102　灰色細砂(7.5Y4/1)均一。
- 103　暗オリーブ灰色微砂(2.5GY3/1)ほぼ均一。
- 104　黒褐色シルト(10YR3/2)層内に上下の層と同一な、細かな互層堆積が認められる。
- 105　黒褐色砂質シルト(2.5Y3/1)粗砂含。植物遺体含。

第14図　P1区土層断面図(2)



第15図　Ｐ１区Ⅱ層相当上面遺構分布図



第16図　Ｐ１区石積１立面図

に造成された平坦面に伴う石垣と考えられる。検出した長さは11m程で、高さは30～40cm前後である。人頭大から一抱え大以上の角礫が２、ないしは３段に積まれている。礫の積み方はＰ７～９区で確認された石垣と類似する。水路１との間に造成された平坦面は幅11.5mで、標高は2.6m前後である。

時期は石垣の裏込め土から陶磁器が出土しており、近世以降と考えられる。石垣により造られた平坦面は、占有面積等から棚田など耕作地であった可能性が高い。

３　溝状遺構

水路１（第15図）

調査区東隅で確認された、南北方向へ延びる区画溝である。方位はN－10°－Wである。石積１に並行し、平坦面の造成に伴う。検出した長さは3.5m程で、幅は１m、深さは最大20cmほどである。断面形は逆台形状で、壁面の立ち上がりは急である。本遺構を境に東と西側に造成された平坦面では

最大50㎝の段差が生じている。埋土は砂が主体で、常時流水していたと考えられる。遺物は埋土から須恵器や土師器、加工板材が出土している。

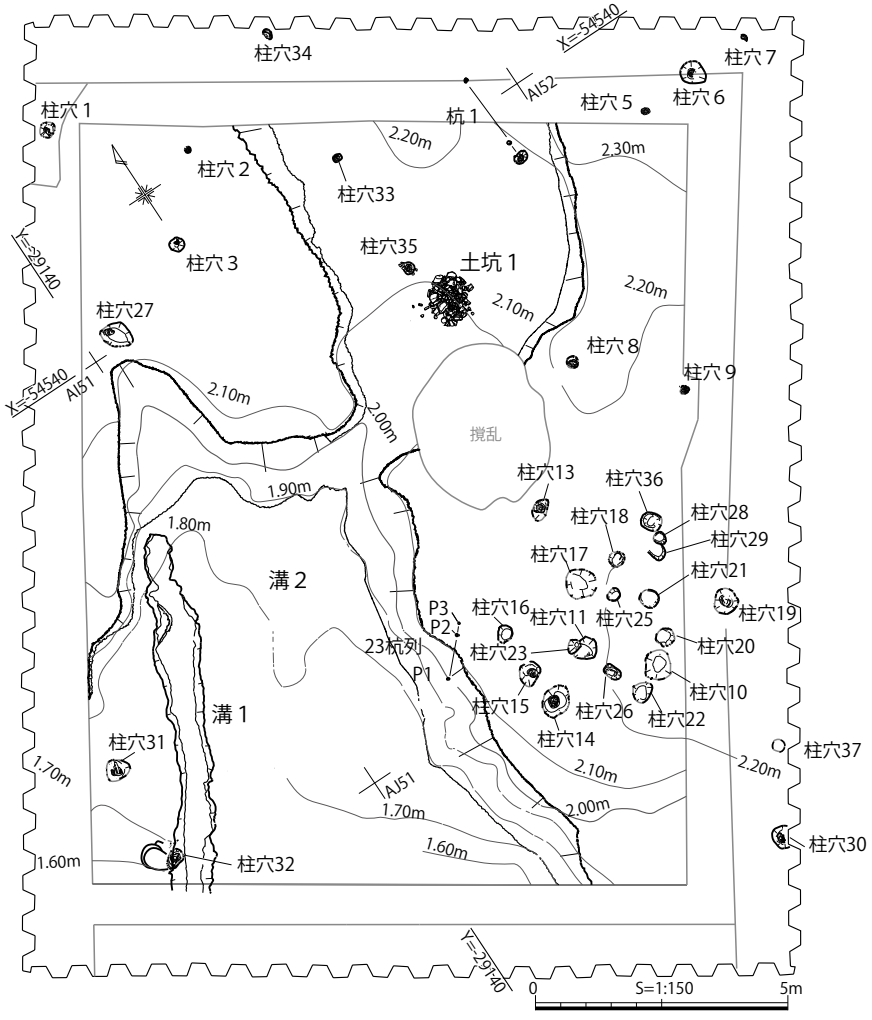
時期は石積１との関係から近世に帰属すると考えられる。溝の東側肩部をみると、僅かながら平坦面がみられることから、本来は石垣が存在し、後世に抜き取られた可能性が高い。仮に石垣が存在したとすれば、本遺構は石垣と一体で構築された用水路として機能していたと考えられる。

第３項　Ⅳ層相当の遺構（古代）

１　概　要（第17図）

Ⅳ層相当層で古代の遺構面が確認されている。遺構は柱穴群、杭列２基、溝状遺構３基、土坑１基からなる。遺構検出面の標高は2.0 ～ 2.8m前後である。柱穴は比較的密に検出されており、建物を規模や構造を明確に復元しえないが、開析谷の出口にあたる高所に施設群が継続的に存在していたことが窺える。遺構の時期は概ね７世紀末から９世紀代前半にかけてと考えられる。

遺物は須恵器や土師器に加え、墨書土器や木簡、木製祭祀具、漆器や曲物などの木製品が一定量出土している。



第17図　Ｐ１区Ⅳ層相当上面遺構分布図

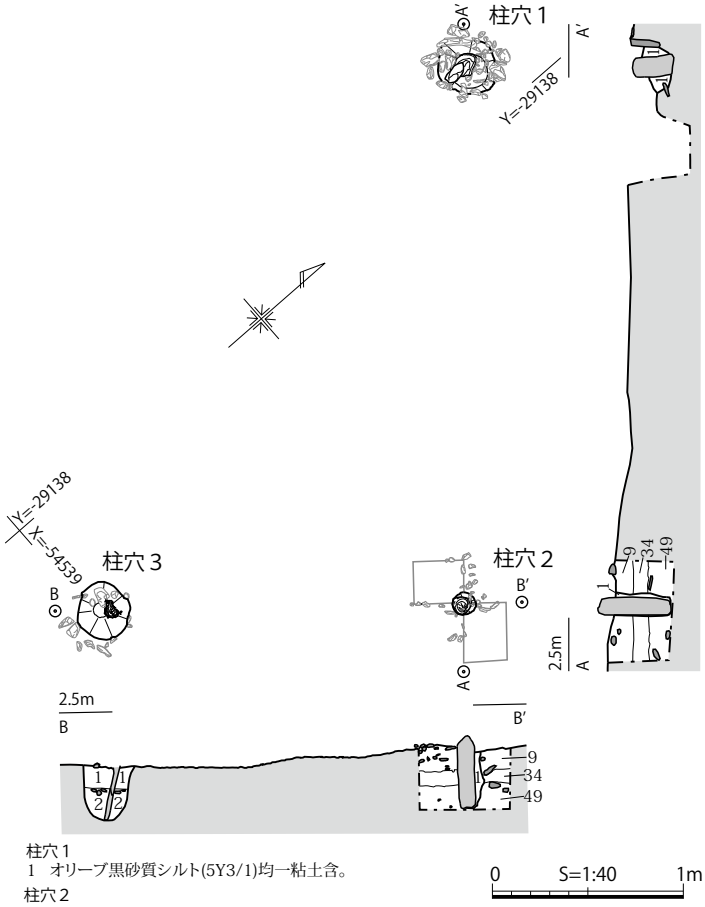
２　柱穴

柱列１（第18図　ＰＬ.３－３・４）

調査区北隅で確認された柱穴列で、柱穴３基からなる。遺構検出面は9－4層上面である。柱間寸法は柱穴１と柱穴２が2.8m、柱穴２と柱穴３が1.8mを測る。柱穴１は掘方が径30cmの円形を呈し、深さは24cmほどである。柱根が遺存し、径10cmの丸太材で、樹種はスギである。柱穴２は掘方が径12cmと小さく、深さは60cmほどである。遺存する柱根は径10cmの丸太材で、樹種はクリである。柱穴３は掘方が径25cmの円形を呈し、深さは26cmほどである。柱根が遺存し、径８cmである。

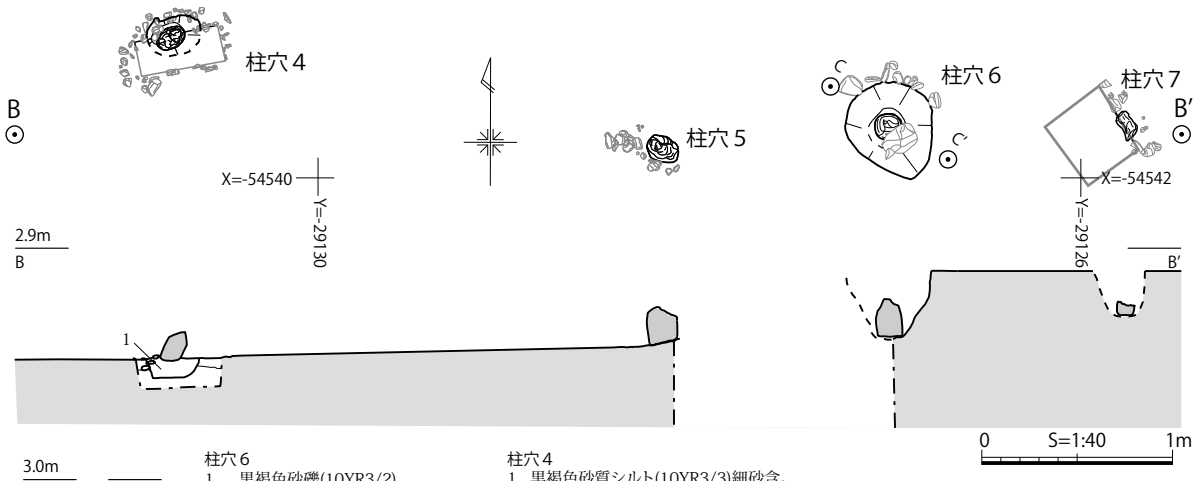
柱穴内から詳細な時期を示す遺物は出土していないが、層位から10世紀代以降と推定される。放射性炭素年代測定では２σ暦年代範囲で柱穴１の柱根が414－537calAD(95.4％)、柱穴２の柱根が614－664calAD(95.4)％という値を示している。

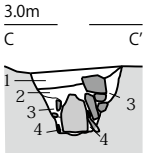
柱穴はL字に配置され、調査区外へと延びる掘立柱建物を構成する可能性もあるが、柱穴の規模や柱間寸法にばらつきが大きく、明確にしえない。



柱穴１
1　オリーブ黒砂質シルト(5Y3/1)均一粘土含。
柱穴２
1　黒褐色細砂(10YR3/2)小礫含。
柱穴３
1　黒褐色シルト(2.5Y3/2)微砂含。
2　オリーブ黒シルト(5Y3/1)小円礫含。

第18図　Ｐ１区柱列１

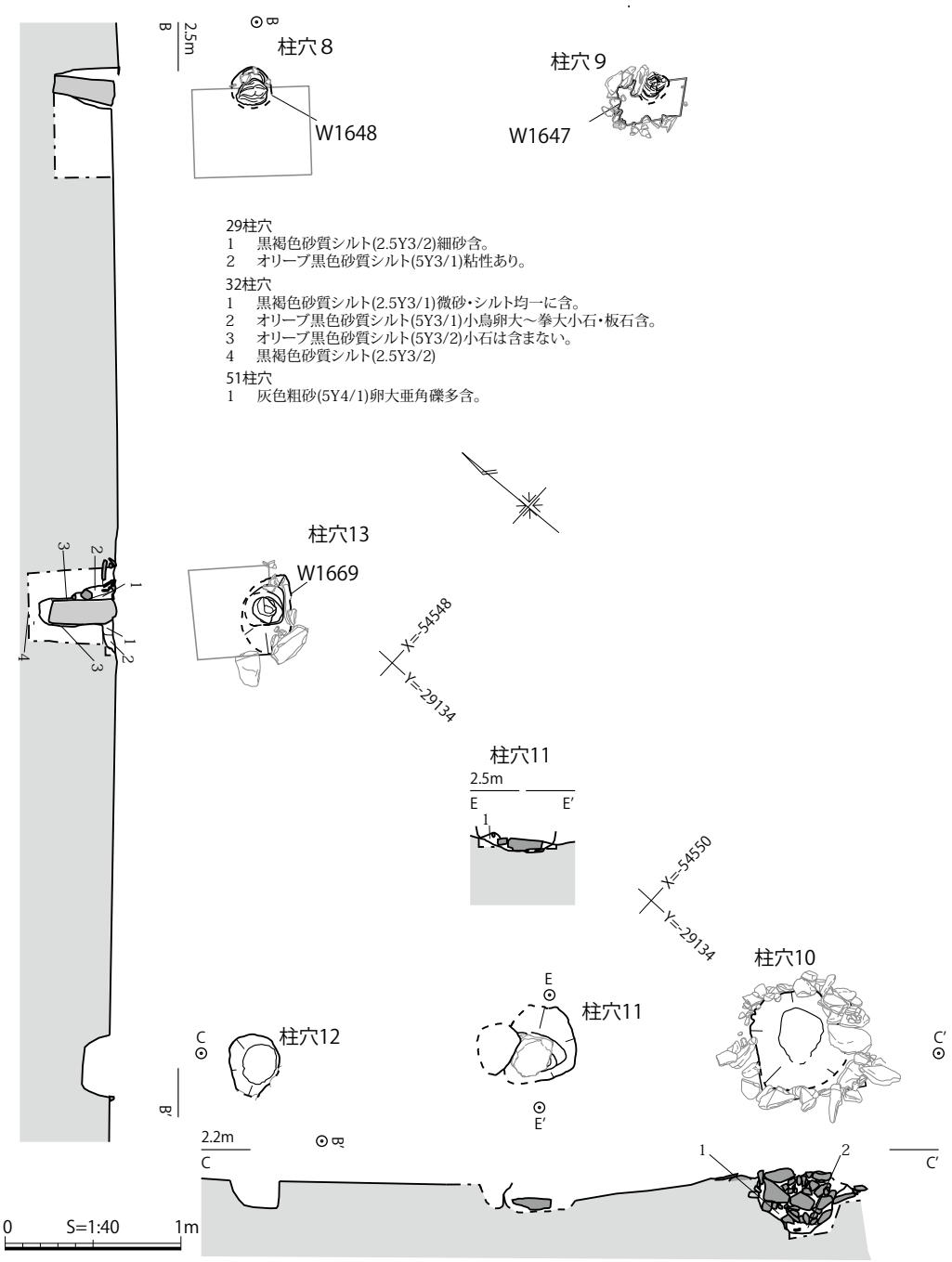




柱穴６
1　黒褐色砂礫(10YR3/2)
豆大～卵大円礫多含。
2　オリーブ黒色シルト(5Y3/1)粘性あり。
3　黒褐色砂礫(2.5Y3/1)微砂含。
4　黒褐色微砂(2.5Y3/1)粘性なし。

柱穴４
1　黒褐色砂質シルト(10YR3/3)細砂含。

第19図　Ｐ１区柱列２

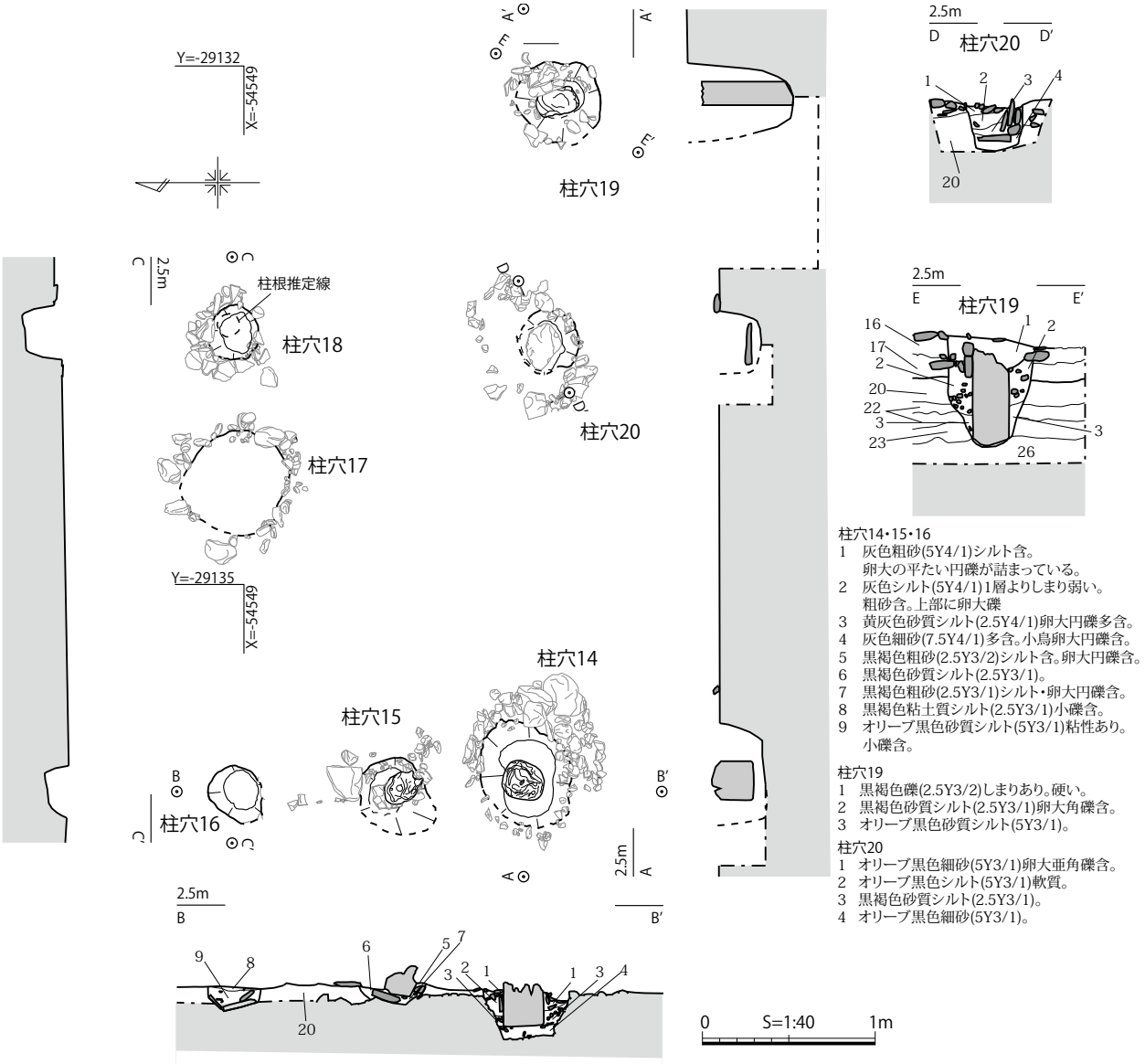


第20図　Ｐ１区柱列３

柱列２（第19図）

調査区東隅で確認された柱列で、柱穴４基からなる。遺構検出面は16－1層上面である。柱間寸法は柱穴４と柱穴５が2.6m、柱穴５と柱穴６、柱穴６と柱穴７が1.2mを測る。柱穴４は掘方が径28cmの円形を呈し、深さは10cmほどである。残存する柱根は径12cmほどの丸太材で、樹種はヤナギ属である。柱穴５は掘方を認識できていないが、残存する柱根は径16cmの丸太材である。柱穴６は掘方が45cmの円形を呈し、深さは36cmほどである。残存する柱根は径14cmの丸太材で、樹種はクリである。掘方埋土には裏込めとして礫が充填されている。柱穴７は掘方が認識できず、柱根が掘方底面に僅かに遺存している。

柱穴内から詳細な時期を示す土器は出土していないが、時期は層位から８世紀末から９世紀前半と推定される。放射性炭素年代測定では２σ暦年代範囲で、柱穴４の柱根が427－560calAD(95.4％)、



第21図　Ｐ１区柱列４

柱穴７の柱根が669－729calAD（58.8％）の値を示している。

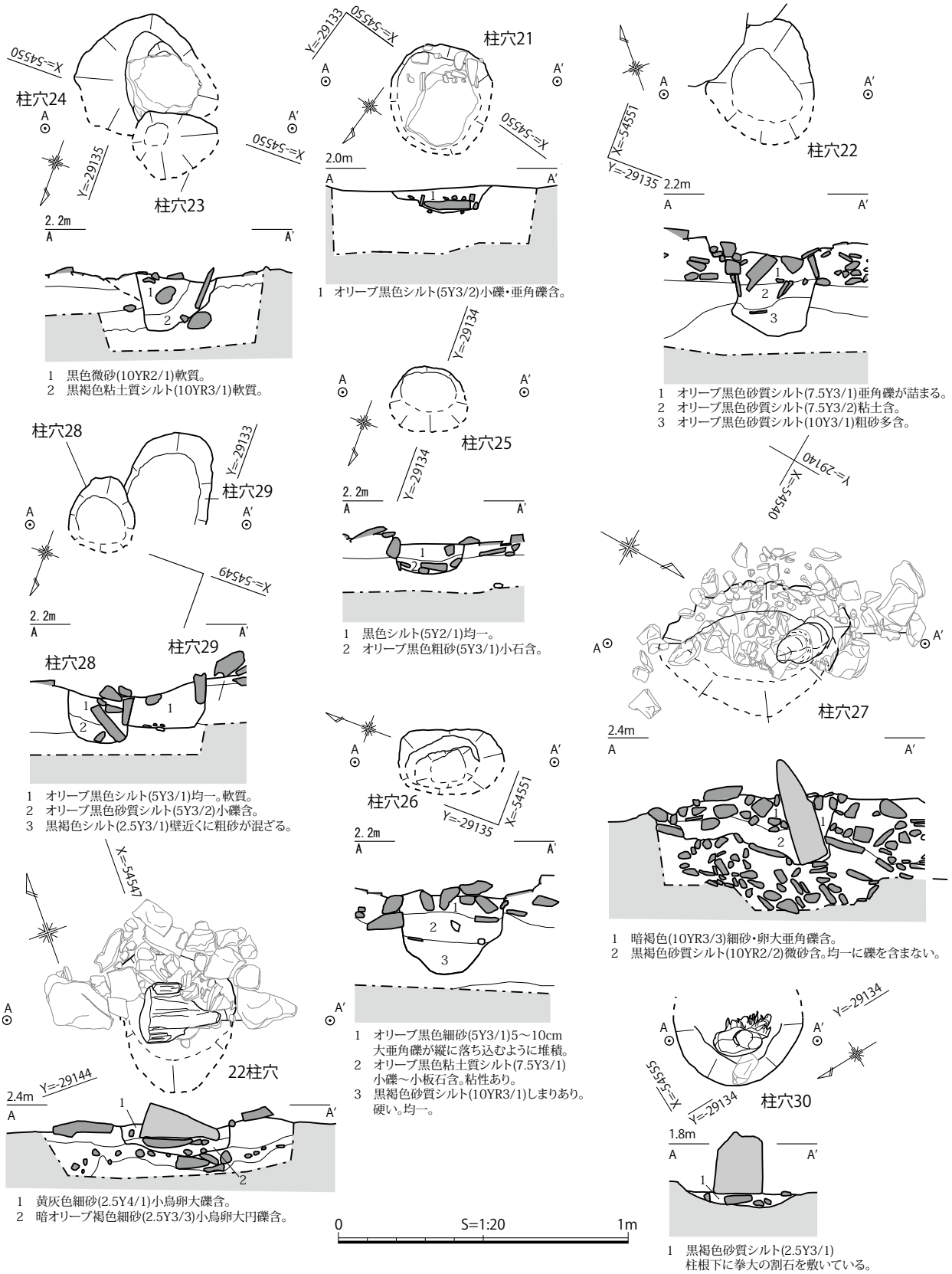
調査区へと延びる掘立柱建物となる可能性があるが、柱間寸法にばらつきが大きく明確にしえない。

柱列３（第20図）

調査区南東側で確認された柱列で、柱穴６基からなる。遺構検出面は16－4層上面である。柱穴はコの字状に配置され、調査区外へと延びる掘立柱建物となる可能性もある。その場合の方位はN－40°－W となる。柱間寸法は柱穴10から柱穴13までが1.6m、柱穴12と柱穴13が2.5m、柱穴13と柱穴８が3.0m、柱穴８と柱穴９が2.3mで、ばらつきが大きい。

柱穴10は掘方が径50cmの円形を呈し、深さは30cmほどである。柱痕跡は確認できず、掘方内には礫が充填されており、柱を抜き取った後に埋め戻されている可能性が高い。柱穴２は掘方が明瞭ではなく、礎盤石のみが遺存している。柱穴４は掘方が径40cmの円形を呈し、深さは44cmほどである。残存する柱根は径14cmの丸太材である。柱穴５は掘方が径22cmの円形を呈し、深さは38cmほどである。残存する柱根は径16cmの丸太材で、長さは36cmほど遺存する。柱穴６は堀方が20cmほどで、径12cmの柱根が遺存し、表面は加工されず、樹皮がそのまま残っている。柱穴８・９の柱材の樹種はいずれもクリであることが判明している。

遺物は柱穴13から須恵器が僅かに出土している。時期は層位から８世紀末から９世紀前半と推定される。放射性炭素年代測定では２σ暦年代範囲で、柱穴８の柱根が545－630calAD（95.4％）、柱穴９の柱根が427－570calAD（95.4％）の値を示している。



1　黒色微砂(10YR2/1)軟質。
2　黒褐色粘土質シルト(10YR3/1)軟質。

1　オリーブ黒色シルト(5Y3/2)小礫・亜角礫含。

1　オリーブ黒色砂質シルト(7.5Y3/1)亜角礫が詰まる。
2　オリーブ黒色砂質シルト(7.5Y3/2)粘土含。
3　オリーブ黒色砂質シルト(10Y3/1)粗砂多含。

1　黒色シルト(5Y2/1)均一。
2　オリーブ黒色粗砂(5Y3/1)小石含。

1　オリーブ黒色シルト(5Y3/1)均一。軟質。
2　オリーブ黒色砂質シルト(5Y3/2)小礫含。
3　黒褐色シルト(2.5Y3/1)壁近くに粗砂が混ざる。

1　暗褐色(10YR3/3)細砂・卵大亜角礫含。
2　黒褐色砂質シルト(10YR2/2)微砂含。均一に礫を含まない。

1　オリーブ黒色細砂(5Y3/1)5～10cm
大亜角礫が縦に落ち込むように堆積。
2　オリーブ黒色粘土質シルト(7.5Y3/1)
小礫～小板石含。粘性あり。
3　黒褐色砂質シルト(10YR3/1)しまりあり。
硬い。均一。

1　黄灰色細砂(2.5Y4/1)小鳥卵大礫含。
2　暗オリーブ褐色細砂(2.5Y3/3)小鳥卵大円礫含。

1　黒褐色砂質シルト(2.5Y3/1)
柱根下に拳大の割石を敷いている。

第22図　Ｐ１区柱穴群

柱列４（第17・21図　PL.４）

調査区南東側で確認された柱穴列で、柱穴７基からなる。調査区外へ延びる掘立柱建物を構成する可能性がある。建物とすれば、方位はほぼ真北を取る。遺構検出面は15－2層上面である。

柱穴14は掘方が径50cmの円形を呈し、深さ30cmほどである。柱根が残存し、径24cmの丸太材で、本調査区で確認された柱の中で比較的太い。樹種はクリである。柱穴15は掘方が径38cmの円形を呈し、遺存状況は悪い。残存する柱根は径18cmで、樹種はクリである。柱穴16 ～ 18では柱根は遺存していない。柱穴19は掘方が径50cmの円形を呈し、深さは64cmほどである。残存する柱根は24×15cm角の角材で、樹種はスギである。柱穴20は、柱根は遺存していないが、礎盤石が確認されている。礎盤石は径26×20cmの扁平な角礫が利用されている。

第23図　Ｐ１区溝１

遺物は柱穴18・20から須恵器や土師器が僅かに出土している。時期は層位から８世紀末から９世紀前半と推定される。放射性炭素年代測定では２σ暦年代範囲で、柱穴14の柱根が671－770calAD(95.4％)、柱穴19の柱根が530－599calAD(64.3％)の値を示している。

柱穴群（第22図）

ここでは、列状の配置などがみられない柱穴について個別に記載する。なお、図示したのは主要な柱穴のみである。

柱穴21は掘方が35cmの円形を呈し、底面に礎盤石が遺存している。柱穴27は掘方が径60cmの歪な円形を呈し、柱根が遺存している。径10cmの丸太材で、樹種はヒノキである。柱穴30は掘方が径45cmの円形を呈し、残存する柱根は16×8cmの角材は用いられている。樹種はスギである。柱穴31は掘方が径40cmの円形を呈し、柱根が遺存するが、横に倒れた状態で出土している。柱は角材で、樹種はスギである。その他、図示していないが、柱穴32でも柱根が遺存しており、樹種はヤナギ属と判明している。

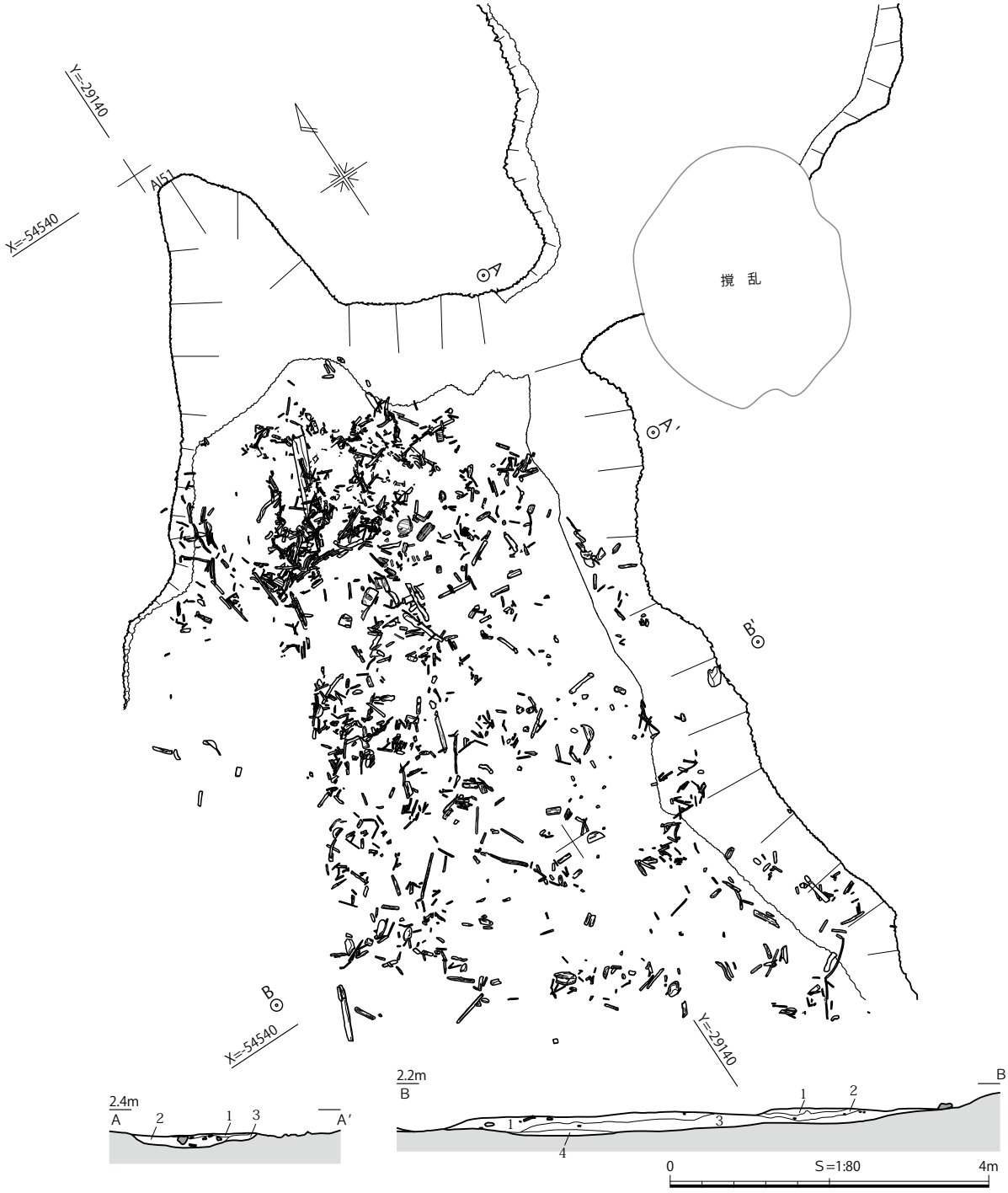
出土遺物は柱穴31と柱穴22から須恵器が僅かに出土している。放射性炭素年代測定では２σ暦年代範囲で、柱穴30の柱材が330－413calAD(91.9％)、柱穴32の柱材が660－719calAD(69.8％)という値を示している。柱群の時期は層位から概ね８～９世紀と考えられる。

３　溝状遺構

溝１（第17・23図）

調査区西側で検出された、北東から南西へ延びる直線的な溝状遺構である。遺構検出面は10－2層上面で、溝２に重複する位置にある。検出した長さは4.5m、幅は24 ～ 60cmである。深さは最大10cmほどで、壁面の立ち上がりは緩やかである。埋土は粗粒砂で、流水環境にあり、北東から南西へ流下していたと考えられる。遺物は須恵器や土師器、木製祭祀具などの木製品が少量出土している。

時期は層位から10世紀代と考えられる。深さは浅いが、直線的に延び



1 オリーブ黒色砂質シルト(5Y3/2)しまりあり。微砂・卵大亜円礫含。
2 褐色粘土質シルト(7.5YR4/3)粗砂・細砂含。シイの実～卵大円礫含。
3 黒褐色細砂(2.5Y3/1)粘土若干含。

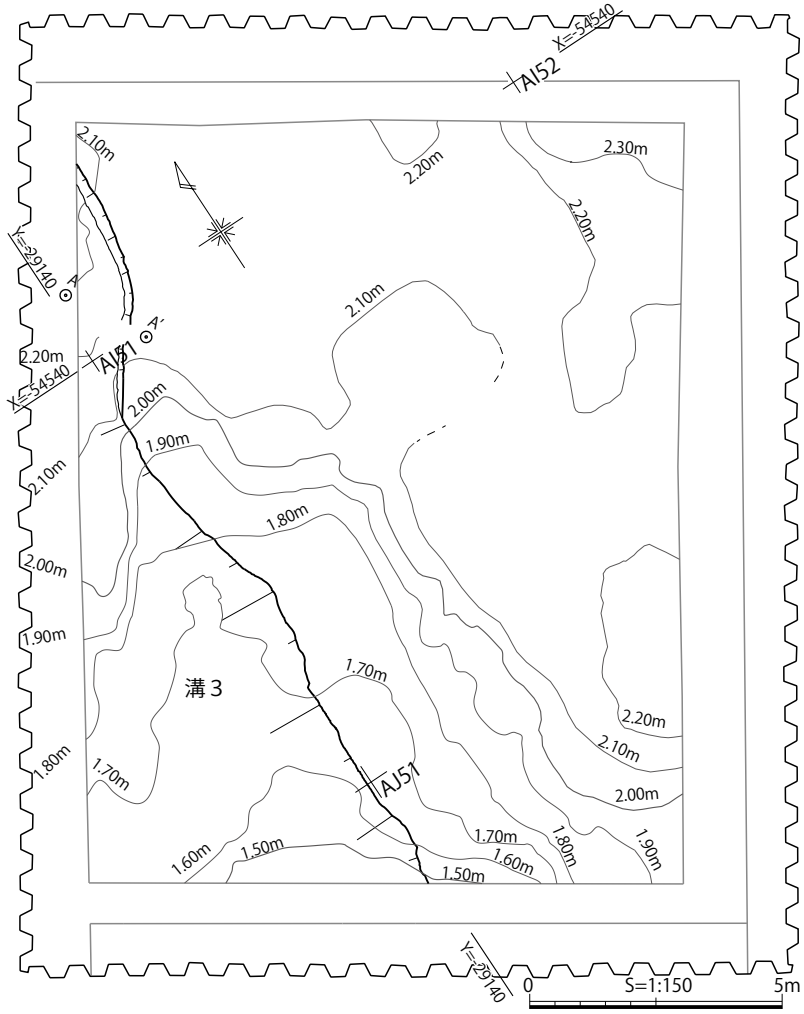
1　黒色シルト(2.5Y2/1)有機物多含。
2　黒褐色砂質シルト(10YR3/1)細砂含。
3　オリーブ黒色粘土質シルト(7.5Y3/1)均一。
4　黒褐色軟質シルト(10YR3/2)卵大～拳大礫多含。

第24図　Ｐ１区溝２

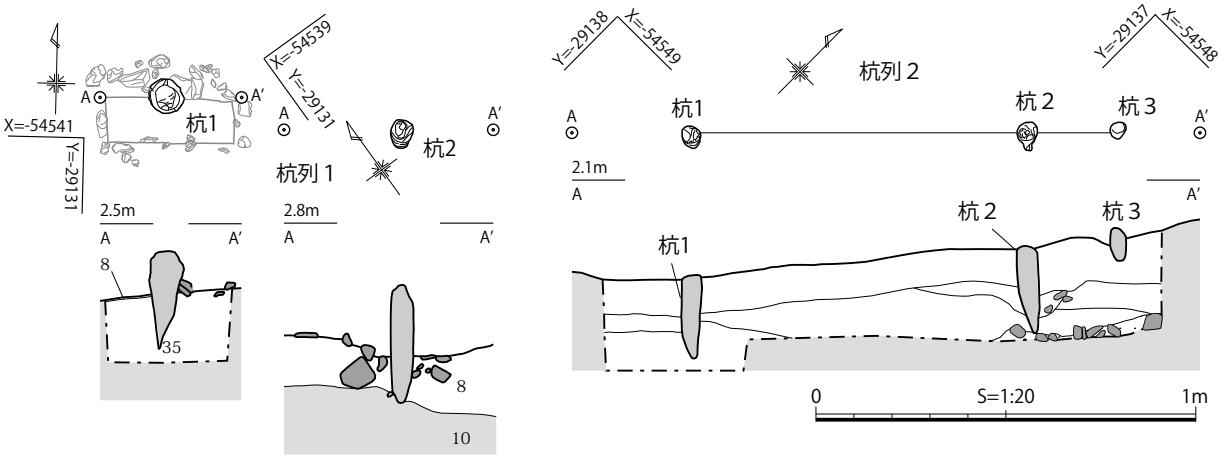
ることから人為的な開削による溝の可能性を考えておきたい。

溝２（第24図　ＰＬ.６）

調査区中央を地形に沿って、北東から南西へ流下する溝状遺構である。遺構検出面は15－4層上面である。平面形は歪で、中ほどで急激に幅が狭くなり、括れている。検出した長さは15mで、幅は南西側が7.5m、北東側が5m、括れ部が1.2cmほどである。深さは最大25cmと浅く、壁面の立ち上がりも明瞭ではない。埋土は砂質シルトや粘土質シルトが主体であるが、砂を比較的多く含んでおり、緩やかな流水の痕跡が窺える。



第25図　Ｐ１区溝３



第26図　Ｐ１区杭列１・２

遺物は埋土から須恵器や土師器に加え、曲物や漆器などの木製品や人形や馬形などの木製祭祀具が多量に出土している。とくに木製品や木製祭祀具は括れ部より南西側で集中して出土している。時期は層位や出土遺物から８世紀末から９世紀前半に収まると考えられる。

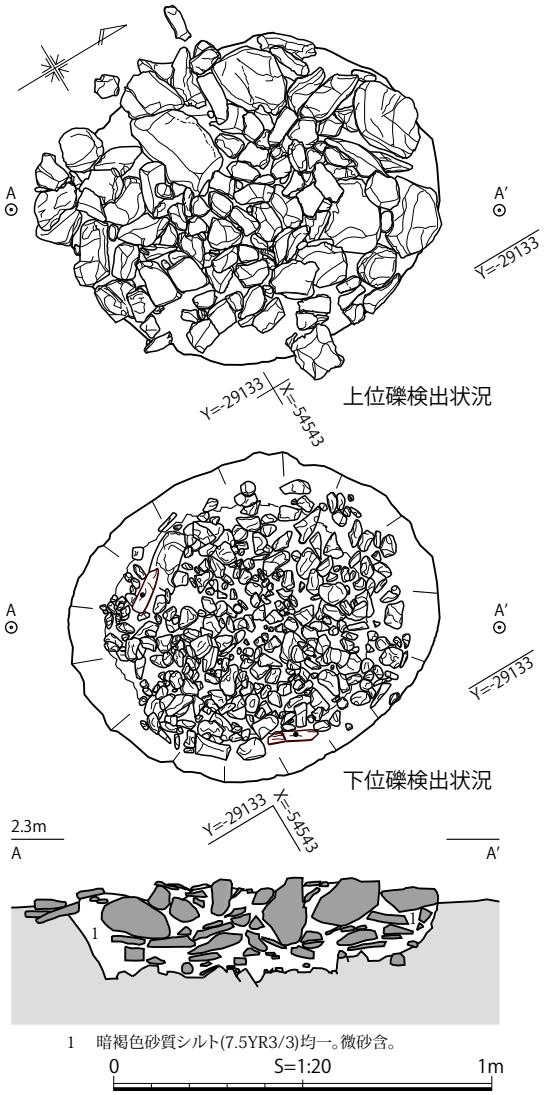
人為的な開削かどうかは明確にしえないが、祓など祭祀行為に用いられた流路と考えられる。

溝３（第25図）

調査区西側で検出された溝状遺構である。溝２の下層を北から南へ流下する。東側の肩部しか確認できていないため、規模や全体形状は不明である。検出した長さは15mで、幅は5.6m以上を測る。

深さは最大25cmと浅い。埋土は砂、または砂質シルトで、緩やかな流水環境にあったと考えられる。

出土遺物は土器や木製品が少量出土している。詳細な時期は明らかにしえないが、溝２に先行することから７世紀後半から８世紀代と推定される。



第27図　Ｐ１区土坑１

５　杭・杭列

杭列１（第26図）

調査区北東隅で検出された杭列で、確認されたのは２本のみだが、調査区外へ延びる可能性がある。8－3層に打設されており、打設間隔は1.5mである。方位はほぼ真北である。杭１は径８cm、杭２は径６cmの丸太材で、杭２の樹種はツバキ属である。時期は明確にしえないが、層位から10世紀以降と考えられる。

杭列２（第26図）

調査区南西側で確認された杭列で、確認されたのは３本のみである。打設間隔は杭１と杭２が90cm、杭２と杭３が25cmと等間隔ではない。方位はＮ－45°－Eである。杭１は径５cm、杭２は計６cm、杭３は径3.5cmで、樹種は杭２がサカキである。

時期は明確にしえないが、層位から８世紀末から９世紀代と推定される。杭２の放射性炭素年代測定では２σ暦年代範囲で427－561calAD（95.4％）という値を示している。杭３は打設間隔も短く、杭の径や底面レベルも大きくことなることから同時期とは考えにくい。

４　土坑

土坑１（第27図　ＰＬ.５）

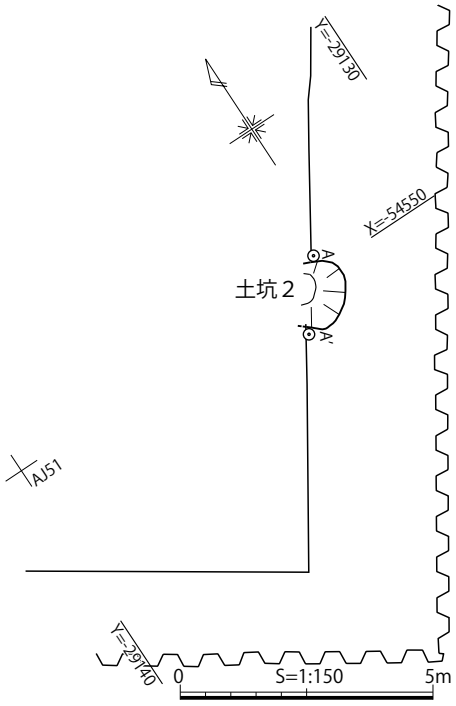
調査区北東側で検出された土坑である。遺構の重複関係から溝２に後出する。長軸96cm、短軸86cmの円形を呈し、検出面からの深さは23cmほどである。内部には礫が密に充填されている。上位が掌大から人頭大ほどの大型の礫であるのに対して、下位は指頭大から拳大ほどの小礫である。埋土は砂質シルトの単層である。

遺物は木製品が僅かに出土している。詳細な時期を示す遺物はないが、層位や溝２に後出することから８世紀末から９世紀前半と推定される。性格は不明である。

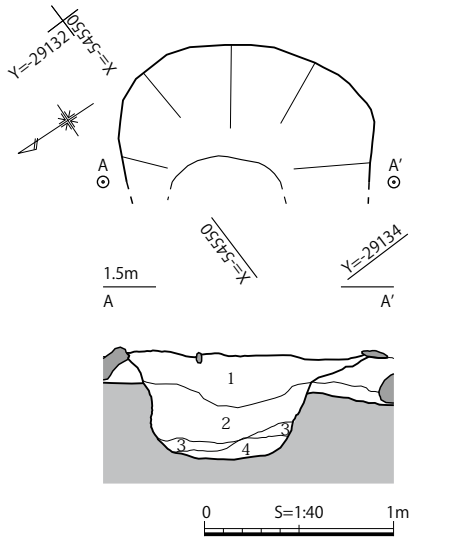
第４項　Ⅴ～Ⅶ層相当層の遺構（弥生時代～古墳時代）

１　概　要（第28図）

Ⅴ～Ⅶ層相当層で弥生時代から古墳時代の遺構面が確認されている。遺構は希薄で、土坑１基のみ



第28図　Ｐ１区Ⅴ～Ⅶ層相当遺構分布図



1　黒褐色砂礫(2.5Y3/2)鶏卵大円礫、丸い亜角礫よりなる。
2　黒褐色粘土質シルト(10YR3/2)細かい木片多量含。
3　黒褐色粘土質シルト(10YR3/2)
4　黒褐色粘土質シルト(10YR3/2)黄灰色細砂、粗砂含。

第29図　Ｐ１区土坑２

である。

土坑２（第29図）

調査区南東隅で検出された土坑である。遺構検出面は72、73層である。径1.3mほどの円形を呈し、深さは56㎝前後である。埋土は粘土質シルトが主体で、最上層の１層のみがいわゆる礫層となる。遺物は埋土から木製品が僅かに出土している。

詳細な時期は不明ながら、層位から弥生時代から古墳時代の土坑と考えられる。性格も不明である。

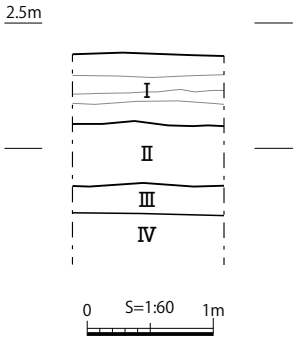
第２節　10区の調査

第１項　調査区の概要

１　地形と土層堆積（第30～32図）

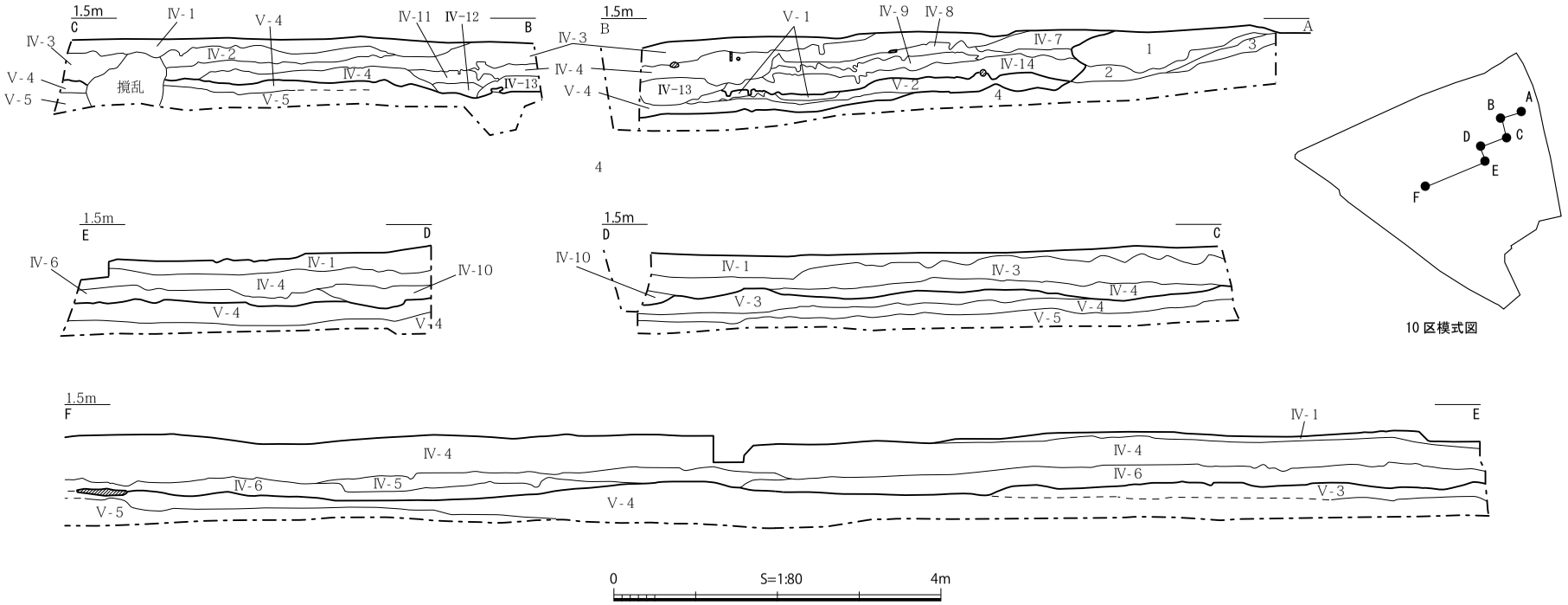
10区は遺跡の南端部にあたる。平成25年度に調査し、調査面積は2550㎡である。日置川の川谷平野の東縁にあたり、長尾鼻丘陵の西裾線に接した地点である。調査区の東側には、地元で養郷谷と呼ばれている日置川下流域では最も大きな谷がある。この谷に沿った、近世以前の峠越え古道が丘陵東側の会下郡家地区に向かって造られる。養郷谷は鉢伏板状安山岩を伴って扇状地を形成している。10区は、この扇状地扇端から日置川によって形成された自然堤防の間に形成された湿地帯に立地する。調査を開始する直前も、耕作が放棄された水田は沼地と湿地状を呈していた。

調査区の標高は、谷川に沿った下流端で標高2.1m、上流



Ⅰ層　10YR3/4　暗褐色シルト　砂礫・粗砂を含む。表土
Ⅱ層　2.5Y3/2　黒褐色粘土質シルト　均一な土層
Ⅲ層　2.5Y3/1　黒褐色シルト　繊維質の草根状植物遺体を多量に含む
Ⅳ層　2.5Y3/1　黒褐色粘土質シルト　均一な土層
　　Ⅲ層とは漸移的に移行する　この土層内で、さらに細層に分かれる

第30図　10区北壁土層断面図



Ⅳ-1　2.5Y3/1　黒褐色粘土　均一な土層　静水域沈殿堆積層　5Y2/2 オリーブ黒粘土質シルト

Ⅳ-2　2.5Y3/1　黒褐色砂質シルト　粘土分も比較的多い。静水域沈殿堆積層。

Ⅳ-3　5Y4/1　灰色砂質シルト　層の上端に近づくに従い植物遺体の含有が多くなる。
Ⅲ層下端とは明確な分層線は形成されていない。下に向かっては 5Y3/1 オリーブに近く、次第に黒味が増す。また粘土質シルトとなる。静水性堆積

Ⅳ-4　5Y4/1　灰色砂質シルト　均一。微砂を多く含む。

Ⅳ-5　5Y3/1　オリーブ黒色粘土質シルト

Ⅳ-6　5Y3/2　オリーブ黒色砂質シルト　粗砂をブロック状に含む。

Ⅳ-7　5Y5/6　オリーブ色砂礫　φ5～10㎝程度の角礫が主体。
流水による堆積で、上流側に向かって層厚を増す。

Ⅳ-8　5Y8/3　淡黄色粗砂　粒に角があり、大きさも一定しない砂。7と一体化して形成された土層。

Ⅳ-9　5Y4/2　灰オリーブ色細砂　シルトを多く含む。小礫も若干含む。小礫は山側に多い。

Ⅳ-10　5Y6/2　オリーブ黄色粗砂　自然流路の流水堆積層

Ⅳ-11　5Y3/2　オリーブ黒色砂質シルト

Ⅳ-12　粗砂

Ⅳ-13　5Y2/1　黒褐色砂質シルト　上部は粒が粗になる。自然流路の堆積か。

Ⅳ-14　5Y3/1　オリーブ黒色粘土質シルト　微砂を多く含む。静水状況に形成された土層。

V-1　5Y5/2　灰オリーブ色微砂　部分的な堆積層　弱い流水環境下に形成。

V-2　5Y3/2　オリーブ黒砂質シルト　土層の中程で砂の割合が多くなる。

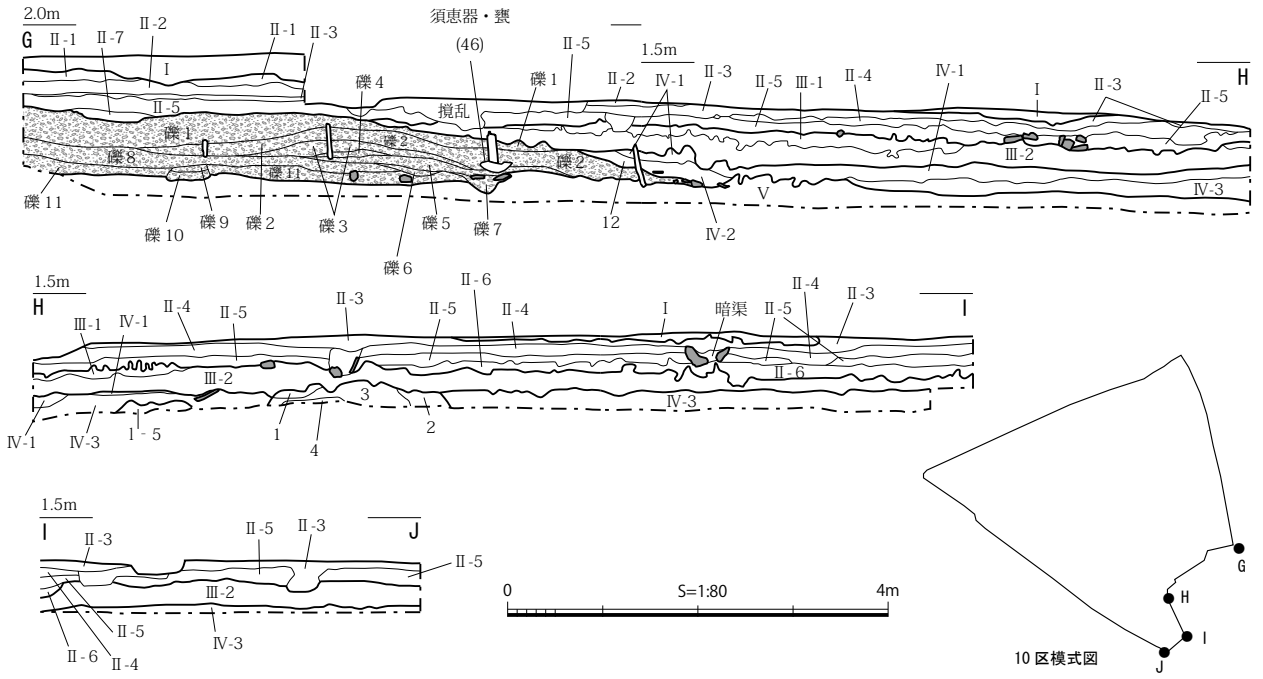
V-3　5Y3/1　オリーブ黒粘土質シルト

V-4　5Y2/2　オリーブ黒色粘土質シルト

V-5　5Y3/1　オリーブ黒色粘土

礫包含層
1　5Y6/2 灰オリーブ色砂礫 5㎝大程度の平石を主体に拳大から人頭大程の亜角礫を含む。下部に黒ぽい粗砂がある。
2　5Y5/2 灰オリーブ粗砂　種子類など森林機嫌の植物遺体を多量に含む。流水環境下で形成された層。
3　5Y5/3 灰オリーブ粗砂
4　5Y7/4 浅黄礫　平たい亜角礫を主体に拳大から人頭大の円礫で構成。

第31図　10区中央土層断面図



Ⅰ層
Ⅱ-1　10YR3/3　黒褐色砂質シルト
Ⅱ-2　10YR3/2　黒褐色微砂
Ⅱ-3　10YR2/3　黒褐色シルト　旧耕作土
Ⅱ-4　2.5Y3/1　黒褐色粘土質シルト
Ⅱ-5　10YR2/3　黒褐色砂質シルト
Ⅱ-6　10YR3/2　黒褐色砂質シルト
Ⅱ-7　10YR3/4　暗褐色粗砂
Ⅲ-1　2.5Y4/1　黄灰色粘土質シルト　木炭片、植物遺体などの有機物を多量に含む。湿地環境形成土層。
Ⅲ-2　10　2.5Y2/1　黒色粘土質シルト　多量の植物遺体を含む。湿地環境形成土層。
Ⅳ-1　2.5Y4/1　黄灰色細砂　有機物を含む　ラミラあり。
Ⅳ-2　2.5Y4/1　黄灰色粘土質シルト　細砂・植物遺体を含む。細砂は塊となって混ざる。
Ⅳ-3　2.5Y3/3　暗オリーブ褐色砂質シルト　木枝等を含む

礫1　2.5Y3/2　粗砂に円礫φ３㎝程。大量の木片を含む。
礫2　2.5Y3/1　円礫・割れた板石を含む。木炭・桃核果・須恵器片を含む。
礫3　2.5Y4/2　粗砂　礫を若干含む。
礫4　2.5Y3/1　砂質シルト　微砂を含む。多量の木端・削屑を含む。
礫5　10YR3/1　粗砂・粗砂を主体に礫を含む。
礫6　2.5Y3/1　砂礫層。粗砂と小石（φ１～２cm）を含む。須恵器を多く含む。
礫7　10YR5/1　砂質シルト
礫8　2.5Y2/1　砂質シルト。大型礫および木片炭化物を大量に含む。
礫9　2.5Y3/1　粘土。植物遺体を含む。
礫10　2.5Y3/　粗砂
礫11　10YR3/1　黒褐色細砂。礫・木片・炭化物を含む。
Ⅴ層　2.5Y3/1　黒褐色砂質シルト　微砂を含む。遺物はほとんど出土しない。

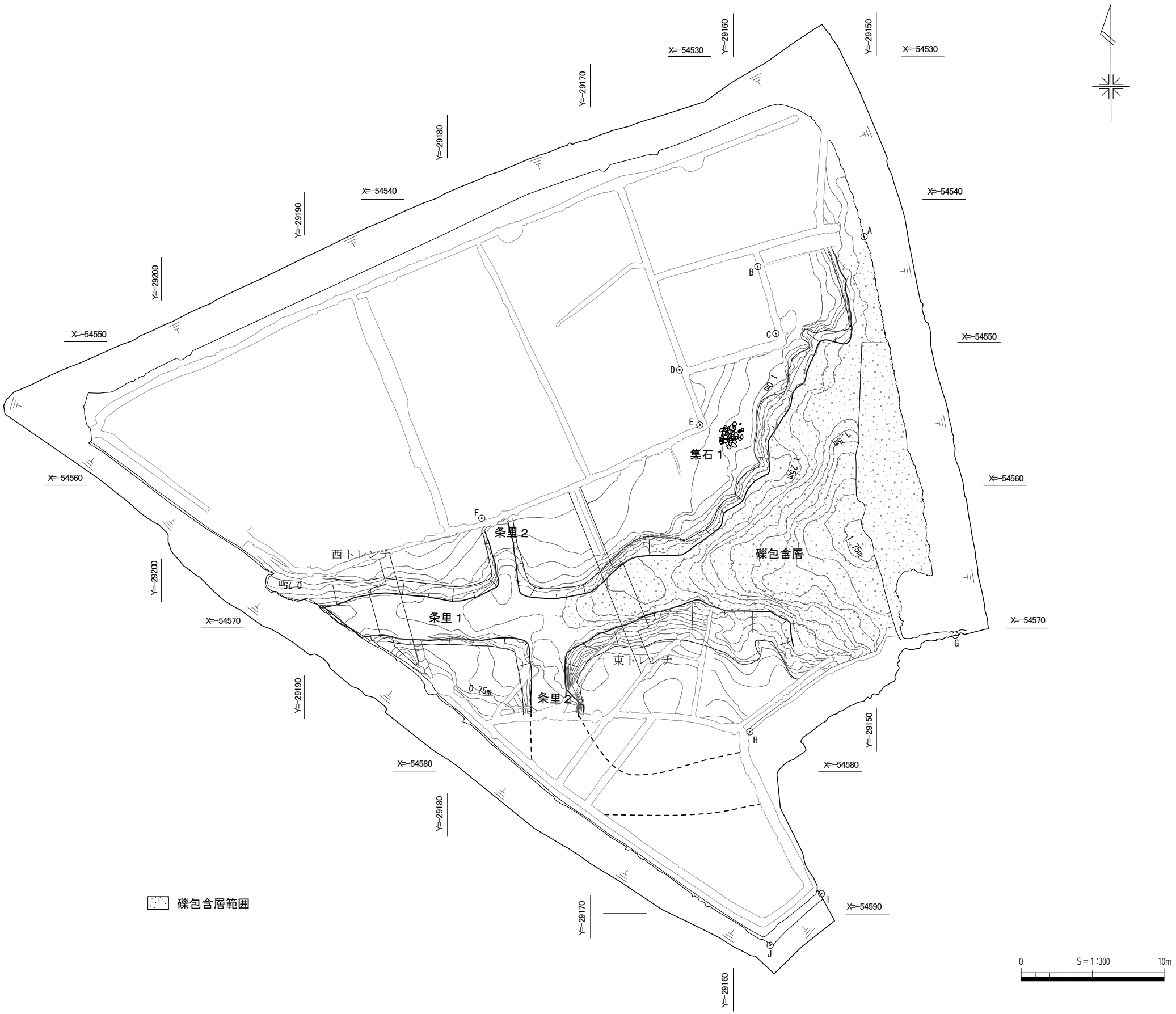
盛土
1　2.5Y3/2　シルト　若干の有機物を含む。
2　2.5Y3/1　粘土質シルト
3　2.5Y3/2　砂質シルト　多量の細かい木枝を含む。
4　2.5Y3/1　黒褐色シルト　微砂を多量に含む。　1～4は盛土。
5　10YR4/1　褐灰色砂質シルト　細砂を含む。

第32図　10区南壁土層断面図

端で3.4mである。Ⅰ層及びⅡ層を重機により掘り下げ、Ⅲ層下は土器類の出土を確認したことから人力による掘削とした。調査期間と優先度から、Ⅳ層下で確認した遺構の検出と遺構周辺の掘り下げに注力した。したがって、調査はⅤ層上面にて留めている。

第30図には、調査区北壁の土層柱状図を示した。表土層は地形に沿って山側の東部が厚くなっていた。Ⅰ層では現代まで利用されていた水路の痕跡もあった。水路の堆積土には、農業用シートが含まれていた。Ⅱ層の下部からは近世期の陶器類も出土している。旧表土層直下では調査区の北東部を中心に、山土と礫の盛土が施され、近世期に大規模な造成があった可能性を示す。Ⅱ層とⅢ層との境界は不明瞭であった。漸移的な環境変化のなかで、地層の形成条件が変化した結果である。Ⅲ層は多量の植物遺体が含まれている。とくに調査区の谷上流部側には、草本植物の根塊が多量含まれていた。この土層からは、10世紀代の土師器坏が数点出土している。Ⅳ層は、Ⅴ層上面に構築された盛土を覆う層である。多量の木製祭祀具・木製品が含まれていた。10区ではⅣ層からⅢ層へ漸移的に変化したと考えている。

第Ⅴ層も、第Ⅳ層と近似した静水環境下の堆積層である。このうち調査区の南半部では、植物遺体が比較的多く含まれていた。一時的に陸地化した時期もあったのであろう。Ⅴ層中からは、古墳時代



第33図　10区Ⅴ層上面遺構分布図

前期の土器片が数点出土している。

北半部、条里１の北側では、Ｖ層の上面に粗砂と細砂やシルトの混ざった薄層が形成されていた。途切れ途切れになっていたが、谷上流側のＶ層上面の全体を覆うように分布していた。とくに調査区の北東部分で顕著であった。流水環境で形成された土層である。堆積範囲は扇端付近に偏り、層厚も谷上流側に厚くなっている。谷川の営力により形成されたのであろう。条里１及び関連する盛土は、第Ｖ層の上面に構築されていた。また扇状地礫層に近い地区では、中央部土層断面の第Ｖ層中にピンク色のシルトが水平に堆積した箇所もあった。Ｖ層の下部には、調査区の北東部では礫層が形成されていたのを確認した。

２　遺構の概要（第33図）

本調査区ではＶ層上面で条里２基、条里１に接続する礫包含層、集石１基を確認した。

調査当初は規模や位置関係から条里１を道路遺構と理解していたが、他調査区で見つかった盛土遺構を含めて条里の一町四方を構成する盛土と判断するに至った。

礫包含層からは須恵器の中型甕がほぼ完形で出土している。

第２項　Ｖ層上面の遺構

１　礫包含層（第33図）

Ｖ層上面から丘のように盛り上がり、礫を主体とする堆積層が確認され、「礫包含層」とした。検出した礫は、掌大程度の板石である。人頭大ほどの転石も散見されるが、中央部では少ない。礫層中には、粗砂・細砂とともに須恵器片や木片が混ざっていた。調査区の北側では土石流等による自然堆積と認識できる箇所もあり、人為的な造成土との見分けは明確にできなかった。礫包含層の表面は、礫が一様に広がり、水平方向に礫が重なっていた。礫包含層の表面から採取した須恵器は、最も新しいのは平安時代前半代で、高台坏が含まれていた。北端を底辺として西の条里１に向かってすぼむように続いていた。条里１と礫包含層との境界は明確ではない。礫包含層の縁辺形は北辺と南辺では様子が異なっていた。北縁辺は角をつけてＬ形をつなげたような形の造作がなされたようである。北端は長さ６ｍにわたって南北方向の線で区画されている。この部分の礫比較的小さい。これからＡＩ49 グリッド南西端近くで直角に曲がって西方向に延びている。縁辺の礫はやや大きめで、第５層上面とは 0.2 ｍ程度の段がある。礫包含層の南辺線に沿った部分からは、礫層に混ざって人形などの木製祭祀具が出土した。

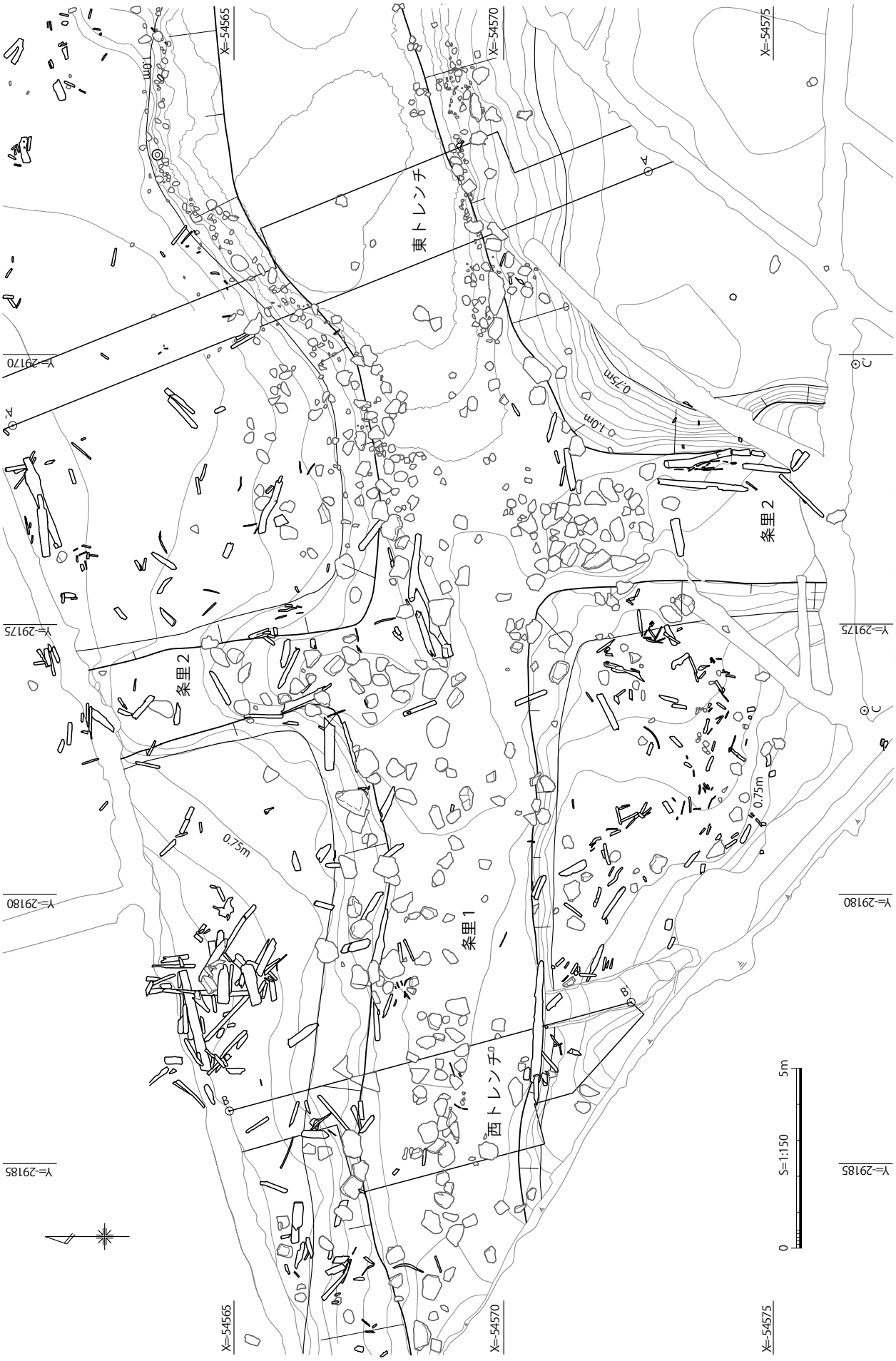
調査区壁際に設置した南トレンチでは、13 層の上面に須恵器甕が据え置かれた状態で出土している。砂を撒いた上に、角礫を配して基礎にし須恵器の底部を安定させる造作されていた。

２　条里遺構

条里１（第34 ～ 36図　ＰＬ.７・８・10－1,2）

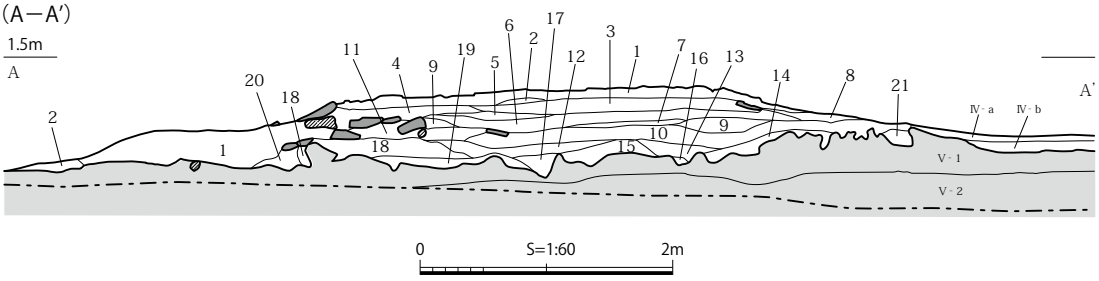
礫包含層と条里１の境界線は不明瞭であるが、ＡＫ48グリッドの東端線より西側からは条里１と考えられるので、これより西側を条里１、東側を礫包含層とした。

検出した盛土の長さは、約28mである。盛土の上面幅は3.1m、基底部幅は4.2m、盛土の高さは、最大約70cmである。方位はＮ－87°－Ｅである。



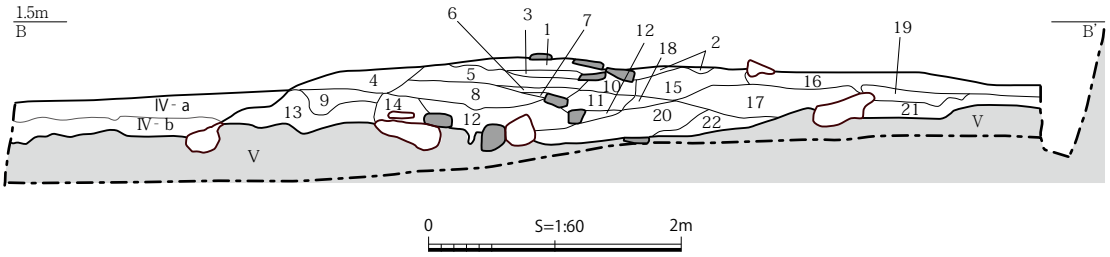
第34図　10区条里１・２

条里１（A－A′）



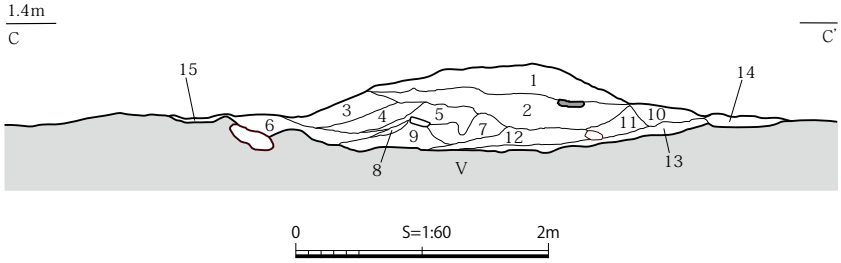
1　2.5Y3/2 黒褐色シルト　亜円礫と角礫混じる
2　2.5Y3/1 オリーブ黒色細砂～粗砂　亜円礫含む
3　2.5Y3/1 オリーブ黒色細砂混シルト～粗砂　亜円礫含む
4　2.5Y3/3 暗オリーブ褐色亜円礫混細砂
5　2.5Y3/2 オリーブ黒色細砂
6　2.5Y3/1 オリーブ黒色細砂
7　2.5Y4/4 暗オリーブ色細砂　亜角礫含む
8　2.5Y3/1 オリーブ黒色細砂　亜角礫含む
9　2.5Y4/1 灰色細砂　亜角礫含む
10　5Y3/1 オリーブ色中粒砂混礫層
11　2.5Y3/1 オリーブ黒色細砂　多量の自然木、枝類を含む
12　5Y3/1 オリーブ黒色砂質シルト　木材含む
13　5Y3/2 黒褐色砂質シルト　細砂～微砂を多く含む
14　2.5Y3/1 灰色細砂　割り板材と枝多く含む
15　2.5Y3/2 オリーブ黒色細砂　割り板材と枝多く含む
16　5Y3/2 黒褐色細砂　割り板材と枝多く含む
17　5Y3/1 オリーブ黒色粗砂　割り板材多く含む
18　5Y2/2 オリーブ黒色細砂混シルト
19　5Y2/2 オリーブ黒色細砂
20　5Y3/1 オリーブ黒色細砂
21　5Y2/1 オリーブ黒色細砂　枝片多く含む

条里１（B－B′）



1　2.5Y5/1 灰色細砂　選択の進んだ均一粒　部分的に木枝束を含む
2　2.5Y4/1 灰色細砂　選択の進んだ均一粒　泥土の汚染がある　木枝は少ない
3　2.5Y4/1 灰色細砂　木枝を多く含む
4　2.5Y5/1 灰色細砂　2.5Y3/1 オリーブ黒粘土が混ざる　木枝・割木を多く含む
5　2.5Y5/1 灰色細砂　中央部近くで木片・木枝が多くなる
6　2.5Y5/1 灰色細砂　砂粒は均一
7　2.5Y5/1 灰色細砂　細い木枝が多くなる
8　2.5Y5/1 灰色細砂　薄層の重なり。しまりあり。割木片を含む
9　2/5Y3/1 オリーブ黒色砂質シルト　均一
10　木枝が主体。これに 2.5Y3/1 オリーブ黒色粘土と細砂が混ざる
11　2.5Y4/1 灰色細砂　割木・木枝を多く含む
12　2.5Y4/1 灰色細砂　木枝を含む
13　木枝・割木が集中　砂は少ない
14　2.5Y3/1 灰色粘土　木枝は少ない
15　2.5Y3/1 灰色砂質シルト　微砂を多く含む
16　2.5Y3/1 灰色粘土質シルト　均一
17　2.5Y4/1 灰色細砂　粗砂も少量含む。木枝・割木片を含む
18　2.5Y4/1 灰色細砂　粘土を含む
19　2.5Y5/1 細砂に粗砂が混ざる　大小の木枝を含む　割木片は少ない
20　2.5Y4/2 灰オリーブ細砂　均一　木枝等はほとんど含まない
21　2.5Y3/1 オリーブ黒粘土　均一
22　2.5Y4/1 灰色粘土
Ⅳ-a　2.5Y3/2　オリーブ黒粘土
Ⅳ-b　2.5Y2/1　黒色粘土

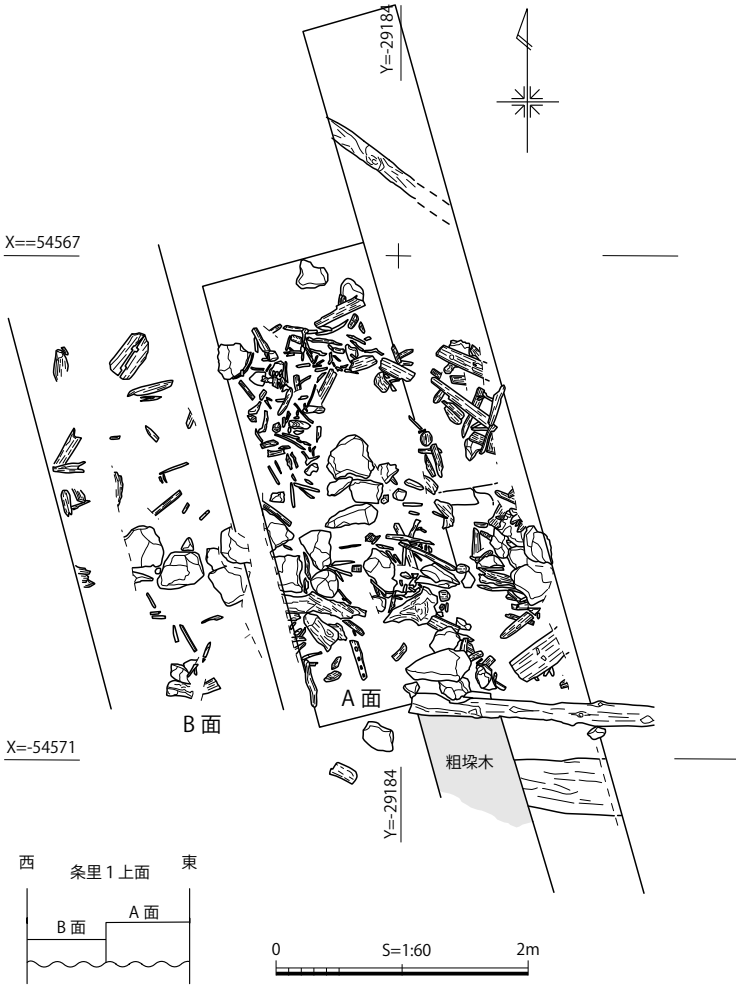
条里２（C－C′）



1　2.5Y3/3　暗オリーブ褐色シルト　木細枝を含む。
2　2.5Y3/1　黒褐色シルトと細砂の混土
　多量の割木片を含む。
3　2.5Y4/1　灰色砂質シルト
4　2.5Y3/2　黒褐色砂質シルト　微砂を多く含む。
　細枝を少し含む。
5　2.5Y3/3　暗オリーブ褐色シルト
6　2.5Y3/2　黒褐色微砂
7　5Y3/1　オリーブ微砂
8　2.5Y4/4　暗オリーブ細砂
9　2.5Y3/1　オリーブ黒微砂　多量の細枝を含む。
10　2.5Y3/1　オリーブ黒シルト　木枝を少し含む。
11　2.5Y3/2　オリーブ黒シルト　微砂を多く含む。
12　2.5Y4/1　灰色シルト混細砂　木片を含む
13　2.5Y 4/1　灰色粗砂
14　2.5Y2/1　オリーブ黒シルト　一部粗砂含む　木枝を含む
15　2.5Y3/1　細砂
V　5Y2/1　黒色粘土　植物遺体を多く含む

第35図　10区条里１・２土層断面図

条里１は最上部でⅢ層に覆われている部分もあったが、大半は第Ⅳ層に覆われていた。条里１東半部の上面標高は1.05mで、東に向かって緩やかに上昇している。礫包含層との堺付近で標高1.3m、礫包含層の最高所で標高1.45mである。北縁辺は弧状を描いて大きく飛び出すのに対して、南縁辺は直線的になっている。条里１の表層は東側が礫敷、西側が砂敷となる。特徴が大きく異なることから、砂部分の約15mを条里１西半部、礫部分の約13mを条里１東半部とする。礫敷層と砂層の境は確認し



第36図　10区条里１粗朶検出状況図

ていないので、この部分の造作は不明である。両者の構造的違いを知るために、東トレンチと西トレンチを設定した。東トレンチの条里１上層は１～９層である。１層は礫主体層で、水平に施されている。礫は拳から掌大の角礫や亜円礫を多く用いている。平置きを基調とする。礫間には、粗砂や細砂が混ざり、細砂層も含まれていたが、部分的で１cm以下の薄層で細分することはできなかった。上層に含まれていた黒褐色シルトから大型の獣骨が出土した。東トレンチの条里１中層は11～14層で、盛土の左右に土堤状の施設が造られていた。第36図Ｂ面は土堤状施設上面の状況を示している。下層は15～21層である。細砂に砂や木枝を混ぜた土層である。中央部に太い幹材があり、割板材が散在していた。軟弱な第Ⅴ層の上に盛土を行う造作である。条里２から条里１東半部にかけては頭大の転石がまとまって置かれていた。法面を構成した石材である。法面の高さは、約0.2mである。礫敷面から緩やかに傾斜する緩斜面である。転石の一部は、さらに条里１の北側に散在していた。条里２の北部から西側法面は、幅広く浸食を受けて本来の形状を失っていた。条里１平坦面から続くなだらかな傾斜面である。第Ⅳ層を除去した段階で、転石と割板が散在し、斜面に表層の木枝や割材が露出していた。斜面の割材や建築部材は、出土状況に規則性はなく、流出した状況である。このなかで、ＡＫ46グリッドの北東部には、大型板材が直径３ｍの範囲にまとまっていた。この部分は湧水による軟弱地盤で、人が立てば沈み込む場所である。これを防止するために、大型木材が投入されたのであろう。ただし、排水溝として掘り下げたため、記録を残せていない。条里１西半部の南肩部は比較的旧状を遺していた。東半部の肩部に置かれた礫列からつながる肩部を追うことができた。

西トレンチは調査区中央部の西側、ＡＫ 46 グリッドを中心に、盛土方向と直交する位置に設定した。表層上面は細砂である。西トレンチの盛土は大きく３層に区分した。まず、第Ⅴ層上面に、細砂を主体にして水平方向を基調にした盛土が施されている（17～22 層）。次に粗砂・木枝・割木を混じえた細砂（３～16 層）が盛られ､最上層は均質な粘土質シルトである（１, ２層）。これらを上･中･下の３層とした。下層の下部は細砂が主体で割木や小枝は少ない。中層は上層との中間層で、細砂層を基本にしている。中央部の２－２･２－５層は、水平を基調に積まれている。基本的に東トレンチと同じ盛土構造である。上層は、細砂層で、水平方向に積みあげられている。硬く締まった細砂層で

ある。西トレンチの周辺をみると、条里１南端線と条里２西端線の間に、第Ⅴ層上面より約0.3ｍ高い平坦面が形成されている。

条里２（第34・35図　ＰＬ.９）

北側で崩壊が進んで、形状が不明瞭である。

規模は幅が基底部幅が約4.9m、盛土の高さは約65㎝である。方位は条里１を挟んで北半がＮ－10°－Ｗ、南半はＮ－４°－Ｗを示す。南側は比較的良好に遺存し、人頭大の転石が南北2.2m、東西1.6mの矩形に集中している。石材の頂部は頂部の高さに凹凸があり、平坦ではない。やはり細砂を基盤にしている。条里２南側の南端に続いて、盛土が南に続くことを確認した。長さ4mまでは確認した。これより先は掘り下げていないため全形は不明である。第Ⅳ層上面では南突出部の南端から10m付近までは直線的に延び、これから先は東に向きを変えているらしい。調査区南東壁の土層断面で、その一部を確認した。

３　集石

集石１（第33図）

集石１のほか、可能性のある集石を４カ所で確認している。すべて礫包含層の北東側である。礫包含層の縁辺から離れて点在している。完掘していないので、遺構と判断するのが不明な集石もある。このなかでも集石１は、中央部の石材が重なって集中していること、周囲に杭が配置されていることから人為的な集石遺構と判断した。

集石１は、ＡＪ48と49グリッドの境界線上の南部にまたがっている。南北３ｍ、東西1.2mの範囲に拳大から人頭大の亜角礫・転石が集中していた。第４層に覆われていた。基盤層は、掘削を行っていないので不明である。集石の南側には、大きめの平石や転石が散在するようにあった。礫包含層から集石遺構に至る飛び石状の配置である。また西側には、細長い割板が軸を並べて敷き置かれたような状況で出土している。最も長い割板は、長さ3.1m、幅0.2mである。集石１の北部で、礫間から土師器が出土している。石間に挟まれて出土している状況から、集石遺構の造られた時期を示す資料であろう。10世紀代と推定できる。

ＡＪ48グリッドの南東部でも拳大から頭大の平石が集中していた。礫包含層の縁辺近くである。飛び石状の配置にもみえるが、要因は特定できなかった。

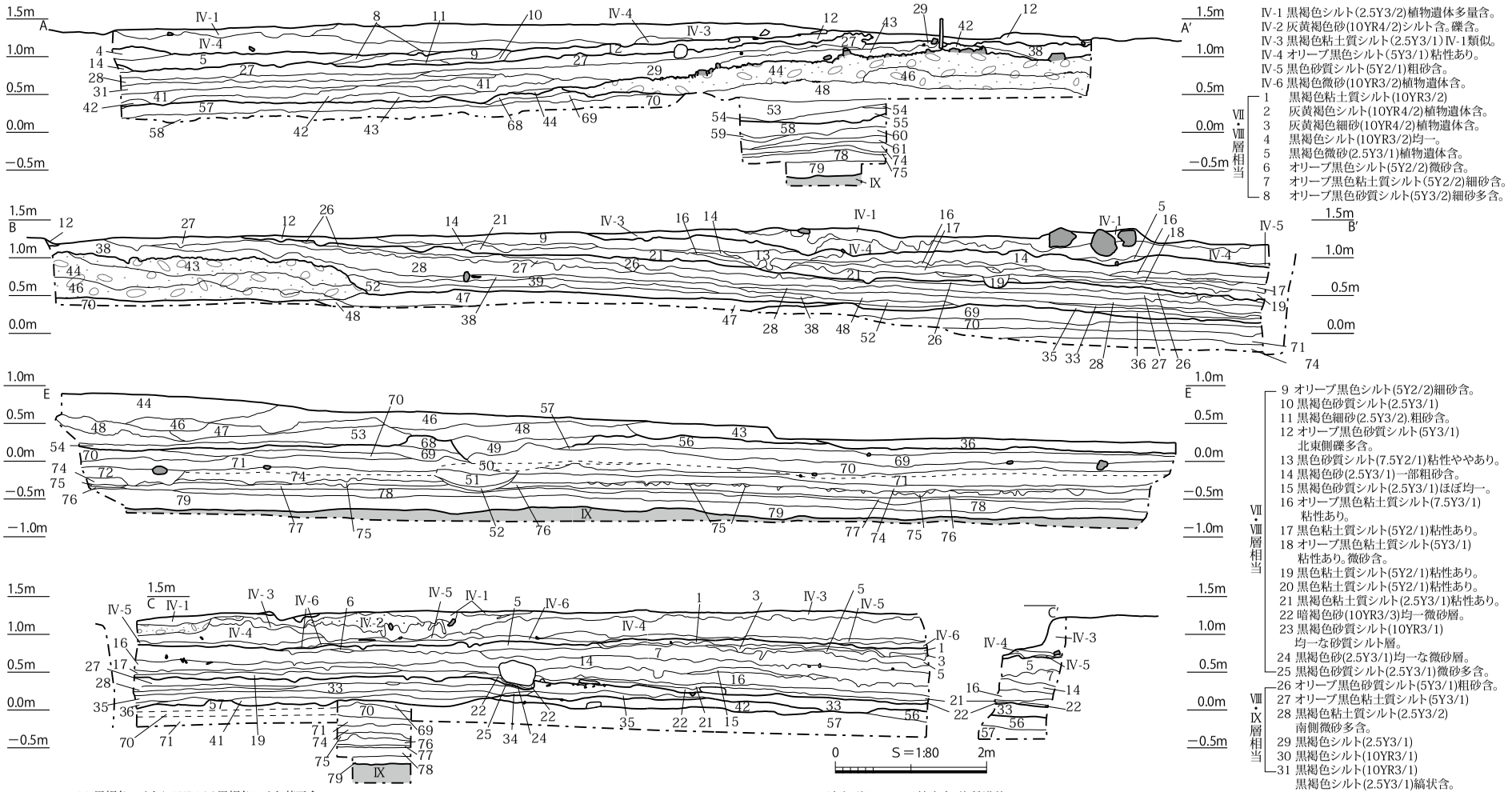
第３節　Ｐ２区の調査

第１項　調査区の概要

１　地形と土層堆積（第37・39図）

Ｐ２区は遺跡の南東端にあたり、東側丘陵裾に開析された、小規模な扇状地の扇央部に位置する。地形は西へ緩やかに下っており、他の調査区に比べ、調査区内での比高差が大きい。発掘調査は平成27年度に実施し、調査区の平面積は278.6㎡である。

土層堆積は、全体として流水堆積物が多くみられるが、Ｐ１区とは異なり、いわゆる礫層は調査区東隅のみに堆積している。Ⅰ～Ⅳ層までは他の調査区と同じであるが、Ⅳ層では、Ⅳ－２・５・６層の砂層や砂質シルト層が入り混む。Ⅴ層以下は他の調査区と大きく堆積が異なり、まず、Ⅴ・Ⅵ層に対応する層がみられない。



Ⅳ-1 黒褐色シルト(2.5Y3/2)植物遺体多量含。
Ⅳ-2 灰黄褐色砂(10YR4/2)シルト含。礫含。
Ⅳ-3 黒褐色粘土質シルト(2.5Y3/1)Ⅳ-1類似。
Ⅳ-4 オリーブ黒色シルト(5Y3/1)粘性あり。
Ⅳ-5 黒色砂質シルト(5Y2/1)粗砂含。
Ⅳ-6 黒褐色微砂(10YR3/2)植物遺体含。

Ⅶ・Ⅷ層相当
1　黒褐色粘土質シルト(10YR3/2)
2　灰黄褐色シルト(10YR4/2)植物遺体含。
3　灰黄褐色細砂(10YR4/2)植物遺体含。
4　黒褐色シルト(10YR3/2)均一。
5　黒褐色微砂(2.5Y3/1)植物遺体含。
6　オリーブ黒色シルト(5Y2/2)微砂含。
7　オリーブ黒色粘土質シルト(5Y2/2)細砂含。
8　オリーブ黒色砂質シルト(5Y3/2)細砂多含。

Ⅶ・Ⅷ層相当
9　オリーブ黒色シルト(5Y2/2)細砂含。
10　黒褐色砂質シルト(2.5Y3/1)
11　黒褐色細砂(2.5Y3/2).粗砂含。
12　オリーブ黒色砂質シルト(5Y3/1)
　　北東側礫多含。
13　黒色砂質シルト(7.5Y2/1)粘性ややあり。
14　黒褐色砂(2.5Y3/1)一部粗砂含。
15　黒褐色砂質シルト(2.5Y3/1)ほぼ均一。
16　オリーブ黒色粘土質シルト(7.5Y3/1)
　　粘性あり。
17　黒色粘土質シルト(5Y2/1)粘性あり。
18　オリーブ黒色粘土質シルト(5Y3/1)
　　粘性あり。微砂含。
19　黒色粘土質シルト(5Y2/1)粘性あり。
20　黒色粘土質シルト(5Y2/1)粘性あり。
21　黒褐色粘土質シルト(2.5Y3/1)粘性あり。
22　暗褐色砂(10YR3/3)均一微砂層。
23　黒褐色砂質シルト(10YR3/1)
　　均一な砂質シルト層。
24　黒褐色砂(2.5Y3/1)均一な微砂層。
25　黒褐色砂質シルト(2.5Y3/1)微砂多含。

Ⅷ・Ⅸ層相当
26　オリーブ黒色砂質シルト(5Y3/1)粗砂含。
27　オリーブ黒色粘土質シルト(5Y3/1)
28　黒褐色粘土質シルト(2.5Y3/2)
　　南側微砂多含。
29　黒褐色シルト(2.5Y3/1)
30　黒褐色シルト(10YR3/1)
31　黒褐色シルト(10YR3/1)
　　黒褐色シルト(2.5Y3/1)縞状含。

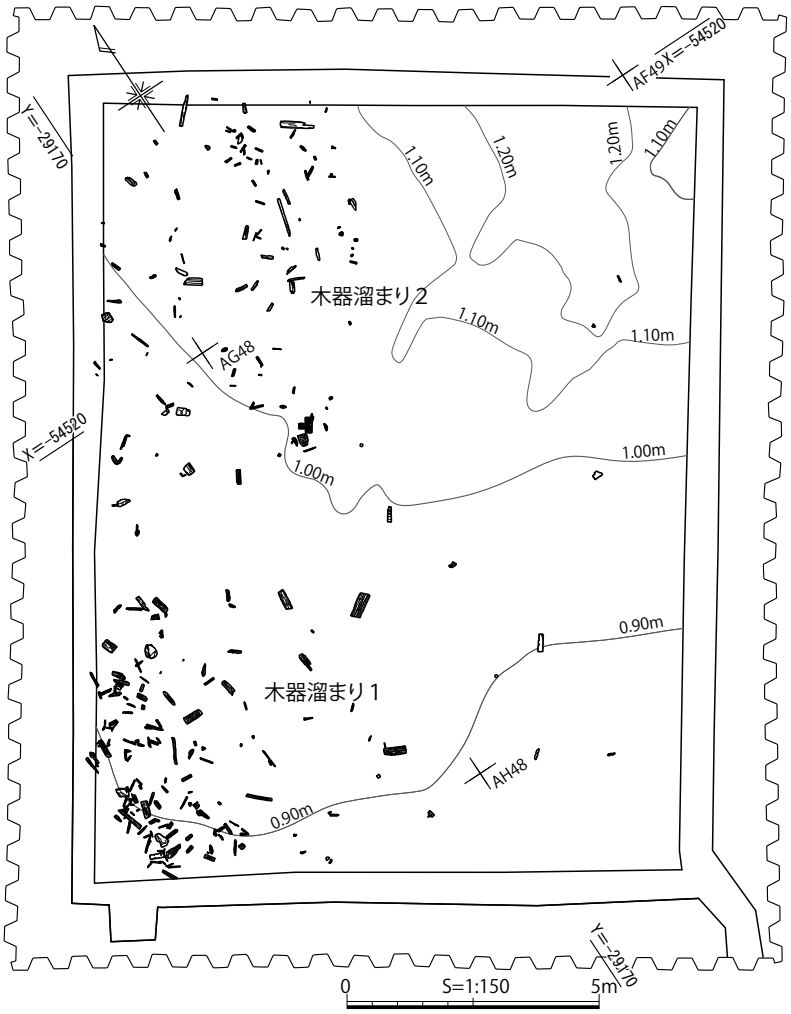
Ⅷ・Ⅸ層相当
32　黒褐色シルト(10YR3/1)黒褐色シルト若干含。
33　オリーブ黒色砂質シルト(7.5Y3/1)植物遺体多含。
34　黒褐色砂(2.5Y3/2)
35　オリーブ黒色細砂(7.5Y3/1)
36　オリーブ黒色砂質シルト(7.5Y3/1)植物遺体多含。
37　黄灰色微砂(2.5Y4/1)砂均質堆積。
38　黒色砂質シルト(10Y2/1)植物遺体含。
39　黒褐色砂質シルト(2.5Y3/1)
40　黒色シルト(5Y2/1)植物遺体含。
41　黒褐色砂質シルト(2.5Y3/1)粗砂含。水平堆積互層構造。
42　黒褐色粗砂(2.5Y3/1)豆粒大円礫、植物遺体含。
43　オリーブ黒色粗砂(5Y3/1)小円礫含。
44　黒褐色砂質シルト(2.5Y3/1)粗砂含。
45　オリーブ黒色粗砂(5Y3/1)ほぼ均一粗砂層。

Ⅷ・Ⅸ層相当
46　黄灰色粗砂(2.5Y4/1)。粗砂含。人頭大礫含。
47　黒色シルト(2.5Y2/1)細砂微砂含。多量の植物遺体、枝屑多含。
48　黒褐色シルト(2.5Y3/1)粗砂と微砂の互層堆積。
49　黒色シルト(7.5Y2/1)含。鶏卵大礫主体,有機物含。
50　オリーブ黒色粗砂(7.5Y3/1)鶏卵大円礫含。
51　灰色粗砂(7.5Y4/1)
52　黒色砂質シルト(7.5Y2/1)
53　オリーブ黒色砂質シルト(5Y3/1)植物遺体多量含。円礫、砂含。
54　暗灰黄色粗砂(2.5Y4/2)礫含。
55　暗灰黄色粗砂(2.5Y4/2)粘土含。上流側細砂含。
56　黒色砂(7.5Y2/1)植物遺体多量含。
57　黒褐色細砂(2.5Y3/1)下位小礫堆積。

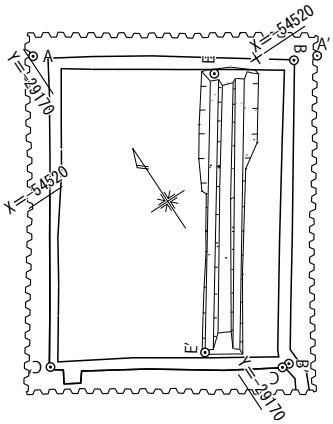
Ⅸ層相当
58　灰色細砂(7.5Y4/1)粘土含。均質堆積。
59　灰色細砂(7.5Y4/1)北東側大円礫含。極大粗砂含。
60　オリーブ黒色砂質シルト(7.5Y3/1)細砂含。豆粒大円礫含。
61　オリーブ黒色砂質シルト(7.5Y3/1)ほぼ均一な堆積。
62　オリーブ黒色砂質シルト(7.5Y3/1)上部植物遺体多量含。
63　灰色粗砂(7.5Y4/1)自然流路③。
64　黒色砂質シルト(7.5Y2/1)自然流路④。
65　オリーブ黒色砂質シルト(5Y3/1)植物遺体多量含。円礫、砂含。
66　暗灰黄色粗砂(2.5Y4/2)礫含。
67　暗灰黄色粗砂(2.5Y4/2)粘土含。上流側細砂含。
68　黒色砂(7.5Y2/1)丘陵性植物遺体多量含。
69　黒褐色細砂(2.5Y3/1)下位小礫堆積。
70　灰色細砂(7.5Y4/1)粘土含。比較的均質堆積。

Ⅸ層相当
71　灰色細砂(7.5Y4/1)大円礫含。
　　極大粗砂含。南側豆粒大円礫多量含。
72　オリーブ黒色砂質シルト(7.5Y3/1)細砂含。豆粒大円礫含。
73　オリーブ黒色砂質シルト(7.5Y3/1)ほぼ均一な堆積。
74　オリーブ黒色砂質シルト(7.5Y3/1)上部植物遺体多量含。
75　オリーブ黒色砂質シルト(10Y3/1)砂含。ほぼ均質堆積。
　　植物遺体含。
76　黒褐色砂質シルト(2.5Y3/2)均質水平堆積。
77　黒褐色粘土(2.5Y3/2)均質堆積。上位植物遺体多含。
78　黒色粘土(5Y2/1)均質堆積。植物遺体含。
79　オリーブ黒色粘土(5Y3/2)締りあり。
Ⅸ　オリーブ黒色粘土(7.5Y3/2)締りあり。貝層ブロック含。

第37図　Ｐ２区土層断面図



第38図　Ｐ２区Ⅳ層相当遺構分布図



第39図　Ｐ２区土層断面位置図

Ⅳ層の下層はⅦ・Ⅷ層に相当する層となり、層厚は最大75cm程と厚い。19層に細分され、基本的に植物遺体を多く含む湿地堆積であるが、砂層や砂質シルトが目立つ。Ⅷ・Ⅸ層に相当する層は、さらに砂層が顕著となり、頻繁に流水が繰り返される環境下あったことが窺える。Ⅸ層に相当する層も、貝層の上層に砂や砂質シルトが互層状に堆積している。とくに標高の高い調査区東側では43・44・46層など砂礫層が地形に沿って帯状に堆積しており、土石流によると堆積物とみてよいだろう。Ⅷ・Ⅸ層相当層やⅨ層では、縄文時代晩期の土器が比較的多く出土している点も他の調査区ではみられない特徴である。貝層から出土した自然木１点の放射性炭素年代測定では、２σ暦年代範囲で1129－1100calAD(93.2%)という値を示し、齟齬のない結果が得られている。なお、Ⅸ層相当層以下については、調査南東側に設定したトレンチによる確認にとどまっている。

２　遺構の概要

Ｐ２区では、縄文時代晩期の木器溜まり１ヶ所、木造構造物１基、弥生時代の杭列１基、流路１、古代の木器溜まり２ヶ所を確認した。遺跡の中でも遺構、遺物とも希薄な調査区である。

第２項　Ⅶ層相当上面の遺構（古代）

１　概　要（第38図）

Ⅶ層相当上面が古代の遺構検出面である。Ⅶ層相当上面の標高は0.9 ～ 1.2mほどで、東から西へ下

る地形となる。遺構は木器溜まりを２カ所検出している。木器溜まりのうち、木器溜まり１は出土状況から、本来は条里盛土に伴うものである可能性がある。遺物は須恵器や土師器は少量であるが、木製祭祀具や曲物、田下駄、下駄、櫛などの木製品が一定量出土している。

２　木器溜まり

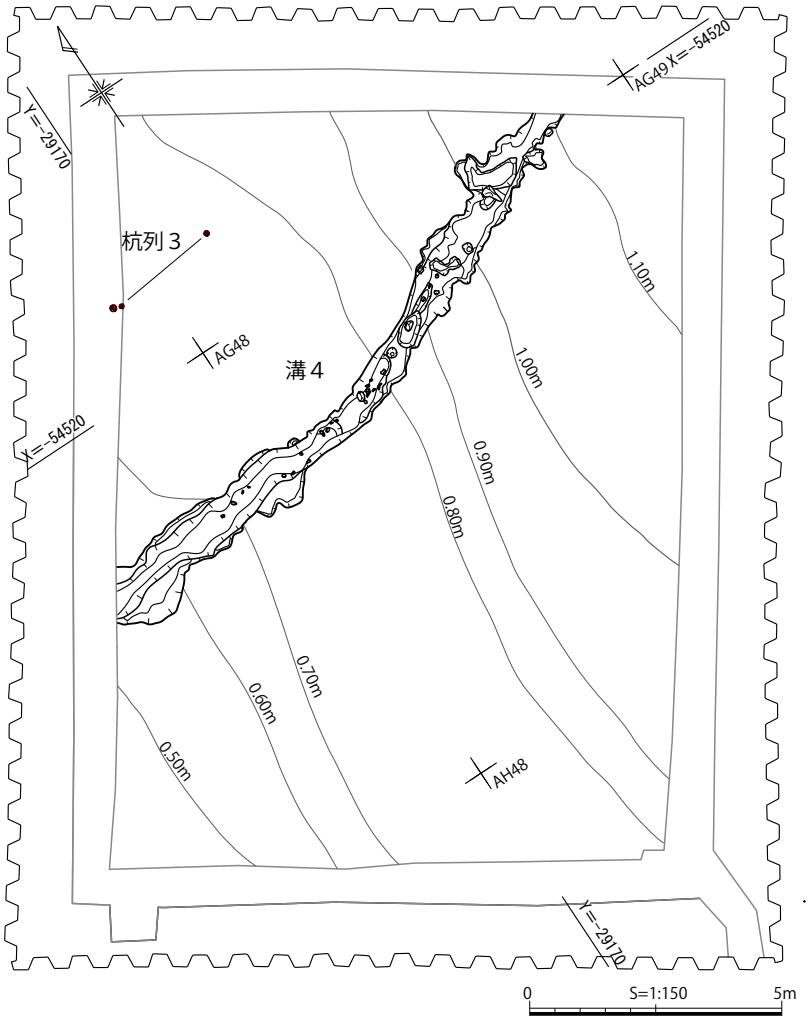
木器溜まり１（第38図　ＰＬ.11－２）

調査区西端、Ⅳ－４層中で検出された木器溜まりである。木器が集中する範囲は幅2.5ｍの帯状を呈し、南北方向の調査区外へと続く可能性が高い。出土した木製品には人形、馬形、舟形などの木製祭祀具や田下駄や曲物などの木製品が含まれている。

詳細な時期を示す土器は出土していないが、古代の範疇に収まると考えられる。木製品の出土分布が帯状を呈し、隣接するＰ３・４区でも条里遺構内に盛土芯として木製品を充填していることなども勘案すると、本遺構も土層断面では確認できなかったが、本来、盛土芯を形成していたと考えられる。その場合、南北方向を示し、復元される条里地割の位置とも合致することから一町方格内を12歩（約21ｍ）に分割する条里地割である可能性が高い。

木器溜まり２（第38図）

調査区北側を中心に検出された、木器溜まりである。検出範囲は径10ｍ程で、木器溜まり１に比べ、



第40図　Ｐ２区Ⅶ～Ⅷ層相当遺構分布図

分布密度は低い。出土した木製品には人形、馬形などの木製祭祀具や田下駄や曲物などの木製品が含まれている。

詳細な時期を示す土器は出土していないが、古代の範疇に収まると考えられる。木製品の出土分布が帯状を呈さず、木器溜まり１とはやや性格を異にする可能性がある。

第３項　Ⅶ～Ⅷ層相当上面の遺構（弥生時代）

１　概　要（第40図）

Ⅶ層もしくはⅧ層相当上面が弥生時代の遺構検出面である。Ⅶ層上面の標高は0.5 ～ 1.1m程である。遺構は流路１基、杭列１基を確認している。溝４と杭列３は方位が揃っており、関連する可能性が高い。

２　溝状遺構

溝４（第41図）

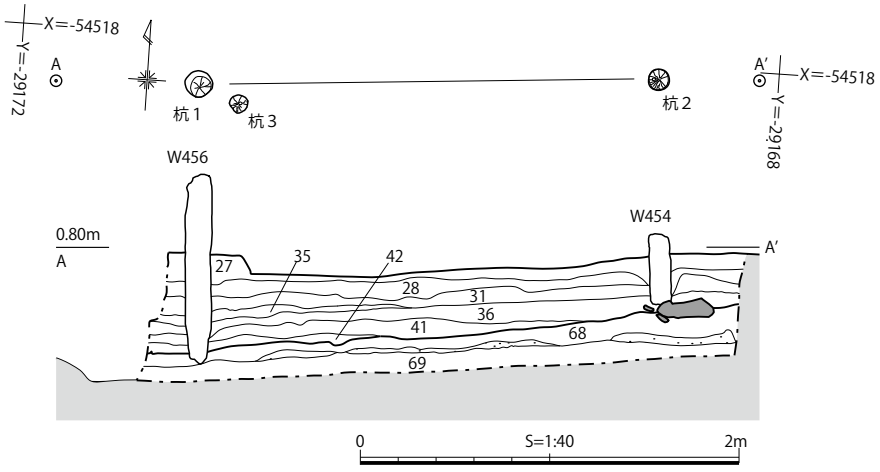
調査区北側を東から西へ弧状に流下する流路である。遺構検出面は７層上面である。検出長は15m以上で、幅は0.55 ～ 1.26mほどである。断面は台形状を呈し、壁面の立ち上がりは比較的急である。深さは最大22cm程と浅い。東端と西端で底面の比高差が75cmほどみられる。埋土は西側で検出面から盛り上がるように小礫と砂の堆積がみられ、最終的には比較的強い水流によって一気に埋没したことが窺える。

遺物は土器片が僅かに出土している。詳細な時期は特定できないが、遺構は弥生時代に帰属すると考えられる。地形に沿って形成されているが、断面形などから人工で開削された可能性が高い。

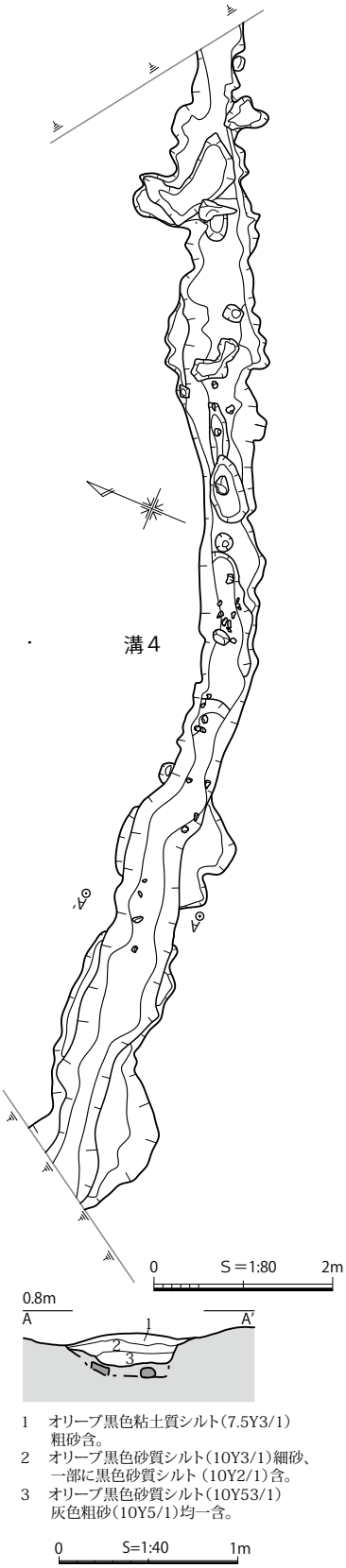
３　杭列

杭列３（第42図　ＰＬ.11－３）

調査区北隅で検出された杭列である。杭の頭はⅣ－４層中から検出されている。杭は３本からなり、東西方向を示す。杭１と杭２の間隔



第42図　Ｐ２区杭列３



第41図　Ｐ２区溝４

は2.4ｍを測る。杭は径10 ～ 14㎝程の丸太材が利用され、杭１の樹種はツバキ属である。

時期は明確にできないが、層位から弥生時代と考えられる。杭１の放射性炭素年代測定では２σ暦年代範囲で357－282calBC(57.5％)という値を示し、弥生時代早期から前期の結果が得られている。

第４項　Ⅷ～Ⅸ層相当上面の遺構（縄文時代晩期）

１　概　要(第43図)

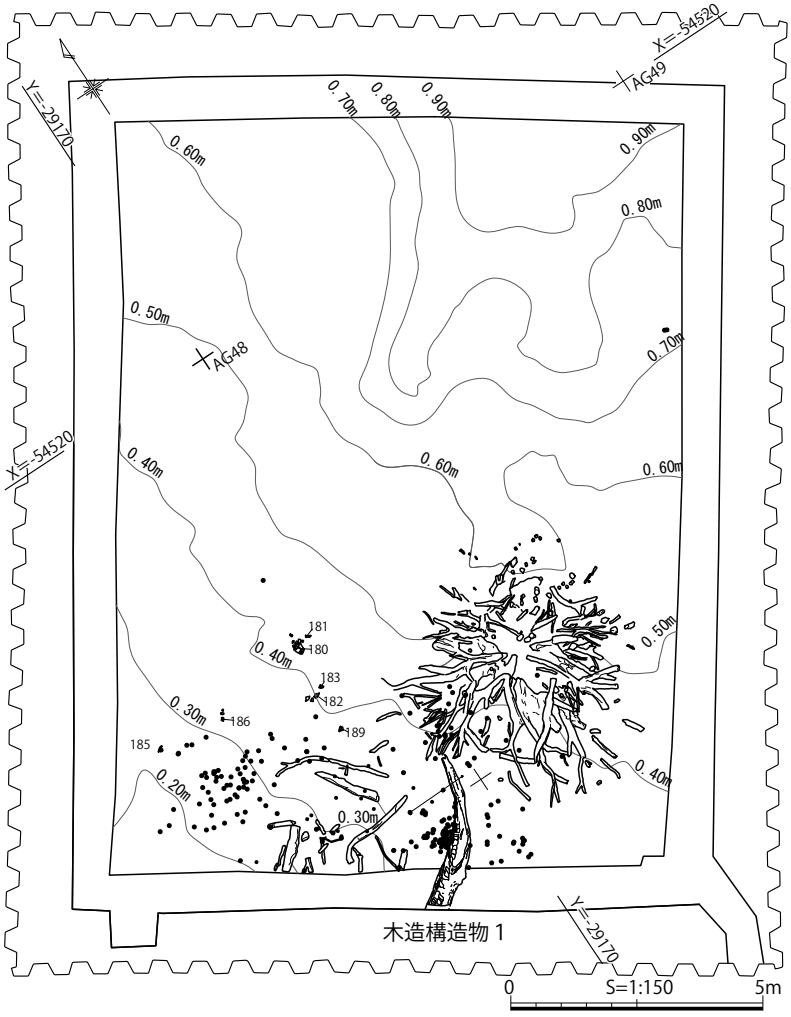
Ⅷ層もしくはⅨ層相当上面が縄文時代晩期の遺構検出面である。遺構は木造構造物１基を確認している。木造構造物１に隣接する東側には樹木根が確認されている。幹の太さは50㎝前後と大木で、張り出した根は径５ｍの範囲に及ぶ。また、周囲では縄文晩期の土器が数カ所でまとまって出土しており、大木を中心とした何らかの活動痕跡が窺える。

２　木造構造物

木造構造物１(第44図　ＰＬ.12－１,2)

調査区南西で検出された木造構造物である。杭列とそれに直交する横木からなる。杭列は３本からなり、打設間隔は西から80㎝、47㎝である。杭は杭１と杭２が径６㎝であるのに対して、杭３は径２㎝と極めて細い。樹種は杭２がムクノキである。

横木は径50㎝の大木で、長さは4.2ｍ以上である。北東端は先細りとなり、南西端は調査区外へと



第43図　Ｐ２区Ⅷ～Ⅸ層相当遺構分布図

延びる。上面は平滑で、人為的に加工された可能性がある。樹種はトネリコ属シオジ節である。

時期は周辺から出土した土器から縄文時代晩期と考えられる。放射性炭素年代測定では２σ暦年代範囲で杭２が592－413calAD(50.7％)、横木が565－410 calAD(58.5％)という値を示しており、齟齬はない。

杭と横木の関係は不明ながら、横木については上端が平滑であることなどから木道となる可能性がある。

第５項　Ⅸ層相当上面の遺構（縄文時代晩期）

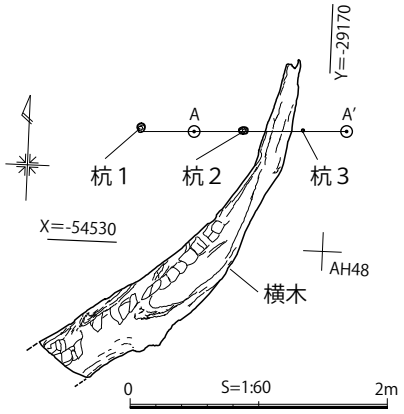
１　概　要(第45図)

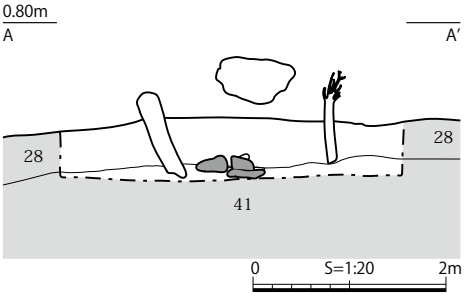
Ⅸ層相当上面は縄文時代晩期の遺構検出面である。Ⅸ相当上面の標高は0.0 ～ 0.3 mであるが、下層にある貝層上面は－0.5 ～－ 0.7 mとなる。遺構は木器溜まり１基を確認している。

２　木器溜まり

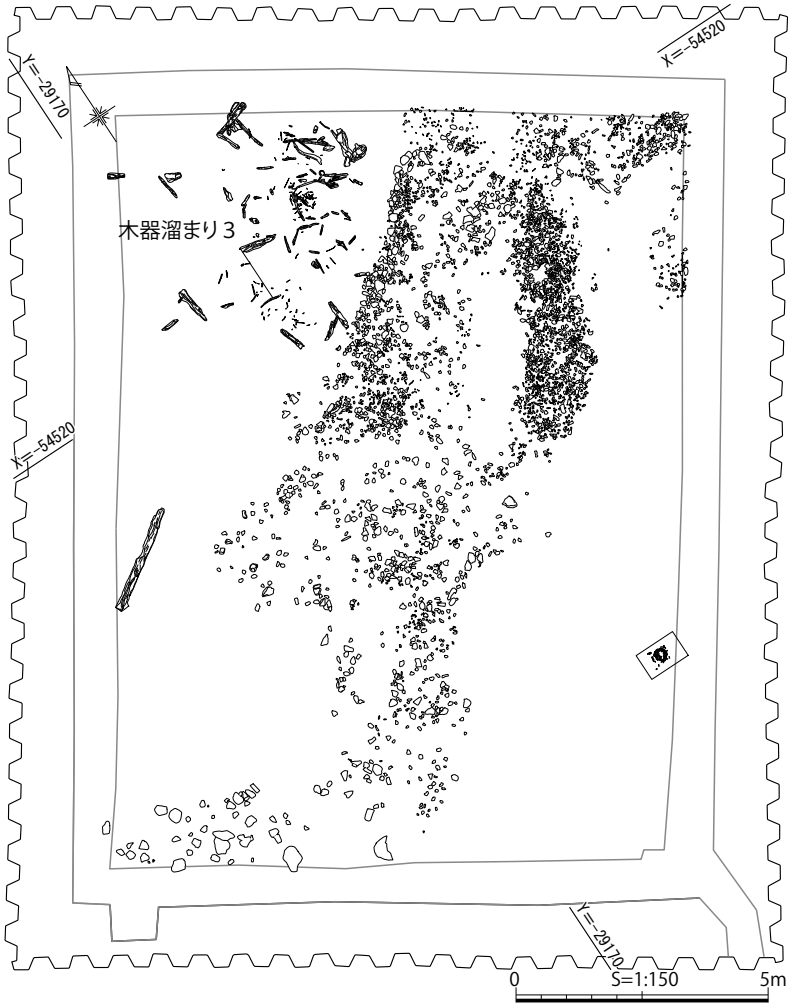
木器溜まり３(第45図　ＰＬ.12－３)

調査区北東側、Ⅸ層上面で検出された木器溜まりである。検出範囲は径４ｍほどの範囲で、分布密度はそれほど高くな

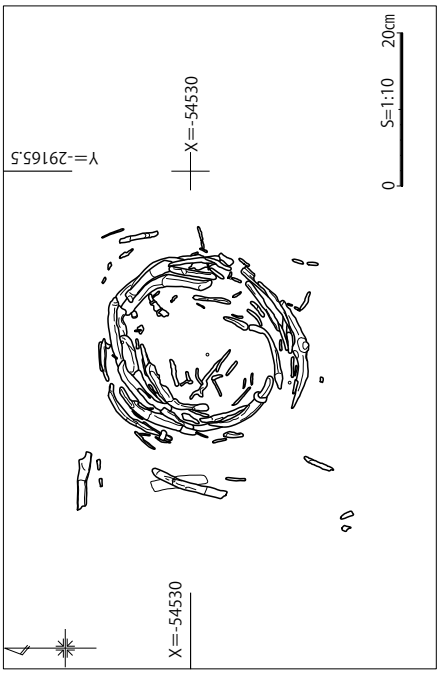




第44図　Ｐ２区木造構造物１



第45図　Ｐ２区Ⅸ層相当遺構分布図



第46図　Ｐ２区編物状木製品出土状況図

い。基本的に自然木を主体とし、用途が分からない加工木が少量みられる。時期は周辺から出土した土器や層位から縄文時代晩期と考えられる。

第４節　９区の調査

第１項　調査区の概要

１　地形と土層堆積（第47図）

９区は北西から南東に細長く延びる遺跡の南東寄りに位置する。調査実施年度は平成25年度で、調査面積は2000㎡である。東方向の谷から派生する扇状地の延長にある低湿地で、近年まで水田として利用されていた。この谷から通じる用水路が９区南東壁際を通り、これに隔てられた南東側に10区が位置する。

土層堆積の確認は、９区南東壁面及び南西壁面とその壁面際に掘削した排水溝壁面で行い、基本層序のⅠ～Ⅳ層までを確認できた。

２　遺構の概要（第48図）

９区では古代から近世の遺構と遺物を確認した。重機によるⅢ層掘削後、人力による遺構検出や土層断面の観察から、Ⅲ層上面とⅣ層上面で盛土遺構を確認した。遺構は中世の畦畔１基、近世の畦畔１基と集石１基を確認した。このほか、土層断面のみの確認にとどまったが、古代の条里地割を示す可能性が高い盛土遺構も２基確認できた。ただし、９区では調査区周囲に設けた排水溝を除いてはⅣ層上面までの掘削にとどまり、Ⅳ層より下層の調査は行っていない。そのため、Ⅳ層上面以下の遺構や遺物については断片的な成果からの所見である。

遺物は土器や木製品、古銭が出土している。木製品は排水溝掘削中にⅣ層以下から出土のものが多かった。建築材と思われる板材のほか、周辺調査区に比して数量的には少ないものの、曲物や刳物、漆器といった木製品や斎串など木製祭祀具も出土した。

第２項　Ⅲ層上面の遺構（近世）

１　概要

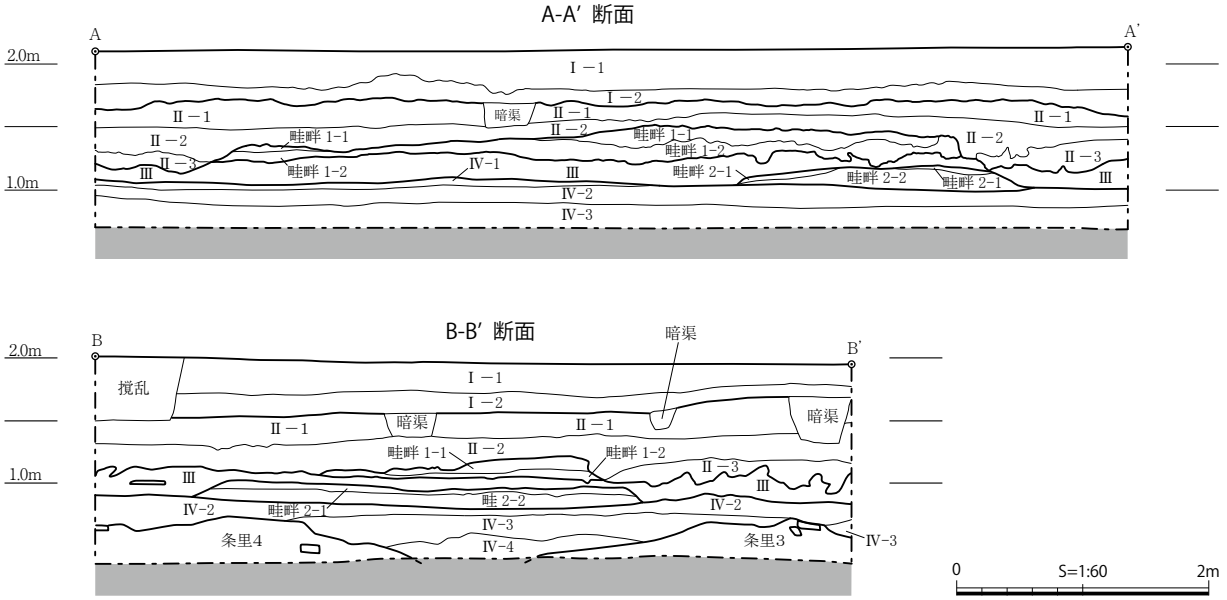
Ⅲ層上面では畦畔１基と複数の平礫が配置された集石１基を検出した。集石２は畦畔１に付随する可能性がある。遺構から土器などの遺物は出土していない。Ⅲ層から北宋銭『治平元宝』（11世紀後半初鋳）、Ⅱ層から17世紀の陶磁器が出土している。

２　畦畔

畦畔１（第47・48図　ＰＬ13－１）

AG40～42、AH42～44、AI44グリッドにかけての範囲で、調査区南西壁西寄り付近から調査地中央付近を経由して南東壁中央部付近に至る。南西･南東方向とも調査区外に広がる。標高は1.1～1.5mで、Ⅲ層上面で検出した。本遺構の下層には畦畔２が重複する位置に築かれ、北東へ約10mの地点には本遺構と同じように弧を描く形状をなす近世以降の溝も確認した。

本遺構は、概ね北西－南東方向に軸をもつ大畦部分と、大畦から概ね北東から南西方向に軸をもつ小畦部分からなる（以下、「大畦」、「小畦」）。平面形は、北西寄りの部分は西方へ緩やかに弧を描いて



Ⅰ-1　にぶい黄褐色粘土質シルト (7.5YR5/3) 粘性やや強。径 1~10mm の砂礫混。所々に植物によるもろい部分あり。鉄分混。表土及び現代耕作土。Ⅰ層。
Ⅰ-2　灰褐色粘土質シルト (7.5YR5/2) 粘性強。締まり強。径 5~20mm 程度の砂粒少混。10mm 以下の炭粒混。現代耕作土床土。Ⅰ層。
Ⅱ-1　褐灰色粘土質シルト (10YR5/1) 粘性強。締まりやや強。径 2cm 以下の礫混。径 5mm 以下の炭粒混。近世～近代の耕作土か。Ⅱ層。
Ⅱ-2　褐灰色粘土質シルト (10YR4/1) 粘性やや強。締まりやや強。径 1cm 以下の礫少混。径 5mm 以下の炭粒混。下層に黄褐色粘土質シルトブロックが斑状に混。近代～近世の耕作土か
Ⅱ-3　黒褐色粘土質シルト (10YR3/2) 粘性やや強。植物遺体多混。近世の耕作土か。Ⅱ層。
Ⅲ　黒褐色シルト (10YR3/1) 締まり弱。植物遺体多混。長さ 5cm 以下の木片少混。径 5mm 以下の礫粒少混。泥炭。Ⅲ層。
Ⅳ-1　灰黄褐色粘土質シルト (10YR4/2) 粘性強。締まりやや弱。微細植物遺体混。若干の植物侵食兆候あり。湿地堆積か。Ⅳ層。
Ⅳ-2　黒褐色粘土質シルト (10YR3/2) 粘性強。締まり弱。微細な植物遺体少混。湿地堆積か。Ⅳ層。
Ⅳ-3　黒褐色粘土質シルト (10YR2/2) 粘性やや強。締まりやや弱。微細植物遺体多混。板状木材、自然木小枝混。径 5mm 以下の炭粒少混。Ⅳ層。
Ⅳ-4　黒色粘土質シルト (10YR2/1) 粘性強。締まりやや弱。微細植物遺体少混。４・５盛土崩落土か。
畦畔 1-1　暗褐色シルト (10YR3/3) 植物遺体多混。径 5~10mm 程度の礫粒混。径 1~5mm の炭粒混。泥炭。畦上層。
畦畔 1-2　黒褐色粘土質シルト (10YR3/2) 植物遺体混。径 5~10mm 程度の礫粒混。1~5mm の炭粒少混。畦下層。
畦畔 2-1　黒褐色粘土質シルト (10YR2/3) 粘性やや強。締まり弱。植物遺体混。畦上層。
畦畔 2-2　褐灰色粘土質シルト (10YR4/1) 粘性強。植物遺体少混。畦下層。
条里３　黒褐色粘土質シルト (10YR2/2) 粘性やや強。上部に径 2cm、長さ 5~20cm 程度の枝材粗朶状に混。下部に長さ 30cm 以上の板材多混。Ⅳ層中またはⅣ層より下からの盛土。
条里４　黒褐色粘土質シルト (10YR2/2) 粘性やや強。上部に径 2cm、長さ 5~20cm 程度の枝材粗朶状に混。下部に長さ 30cm 以上の板材多混。Ⅳ層中またはⅣ層より下からの盛土。

第47図　９区土層断面図

おり、南東端は南方へ僅かに弧を描く。規模は、検出長で大畦が46.7m、小畦が2.5 ～ 5.5mである。幅は、大畦の上端と下端がそれぞれ1.0 ～ 3.1m、2.1 ～ 4.0m、小畦が0.6 ～ 1.0m、1.0 ～ 1.9mを測る。遺存する盛土の高さは大畦が10 ～ 30cm、小畔が5 ～ 13cmで、断面形はほぼ台形である。

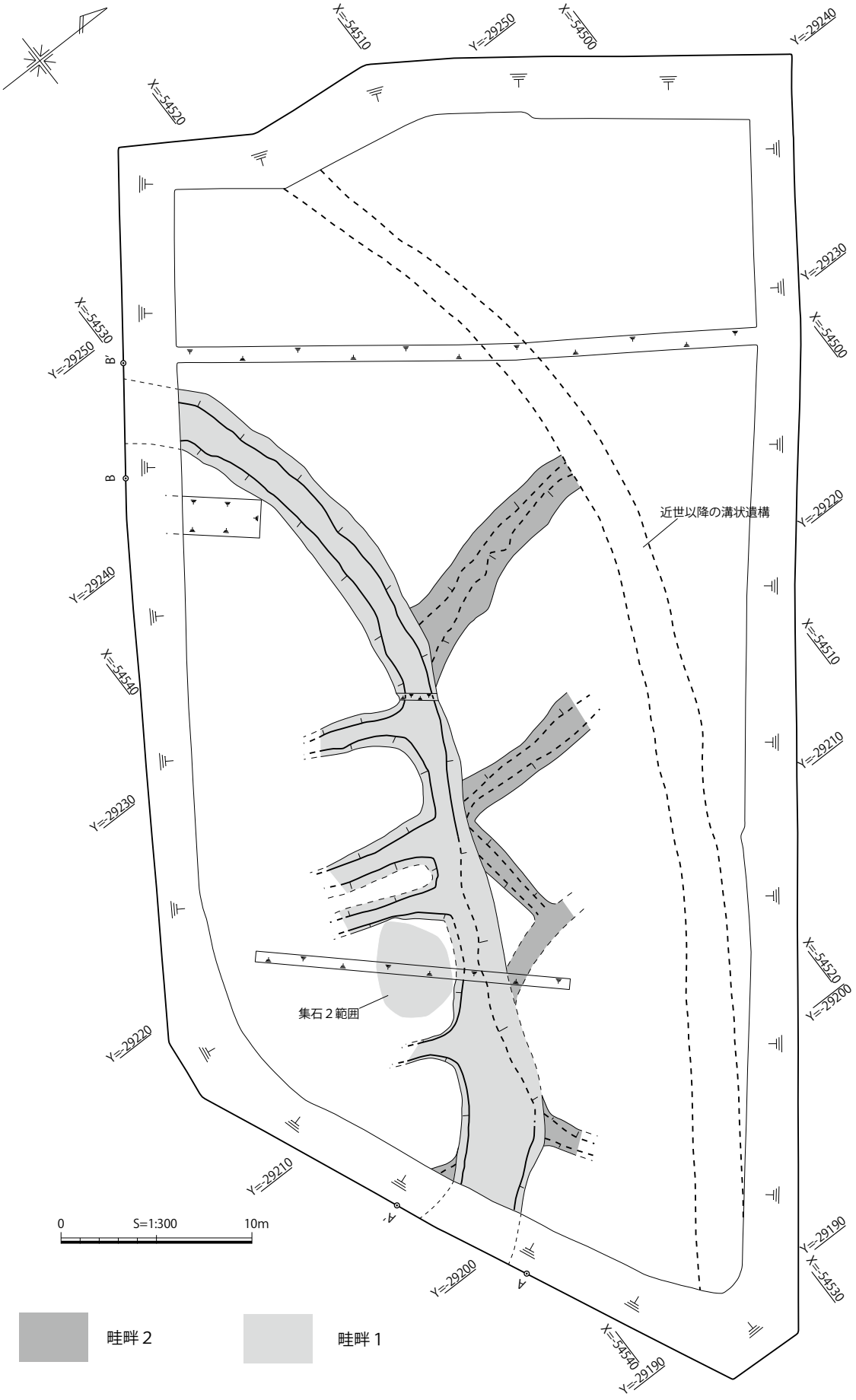
盛土は炭化物の混じる黒褐色粘土質シルトが主体で、上部には植物遺体が多く混じる褐色がかった泥炭層が薄く存在する。小畦は大畦の南方向で確認されたが、北方向では確認されていない。盛土内から遺物は出土していない。

本遺構の時期は検出層位から16世紀以降と考えられる。本遺構周辺の立地や堆積環境から本遺構の南側では低湿地を利用して水田耕作が行われていたと考えられる。山側からの流水を隔てる土手としての役割と通路としての役割を担っていたことが推測される。

３　集石

集石２（第48図　ＰＬ.13－１）

畦畔１の南西際、大畦と小畦に囲まれる場所に位置する。表面が比較的平らな径20 ～ 30cm程度の礫が疎らに配置される範囲が確認できた。平面形は北西－南東軸がやや長い不正楕円形を呈し、長径が約4.9m、短径が約3.9mである。礫はⅢ層上面に配され、柱の痕跡等は確認できず建物の柱穴に伴



第48図　９区遺構分布図

う遺構とは考えにくい。礫が配置されている範囲と大畦の間に径20cm程度の樹木根が残っていたが、その性格は不明である。

本遺構は、畦畔１とほぼ同時期の16世紀以降に構築されたと考えられる。畦畔１と近接する位置関係にあることから何らかの関連が考えられるが、詳細は不明である。

第３項　Ⅳ層上面の遺構（中世）

１　概要

Ⅳ層上面では畦畔１基を検出した。平面的にはⅢ層上面検出の畦畔１に覆われている部分が多い。一見すると複数の盛土に分かれるようにも見受けられるが、トレンチの土層断面観察から、一体の遺構とみなすことができる。包含層の掘削時に盛土上部を削平してしまったため、遺構構築面の確認も土層断面に基づき行った。

遺構から遺物は出土していない。

２　畦畔

畦畔２（第47・48図　ＰＬ.13－１）

AF41・42、AG41 ～ 43、AH43・44、AI44グリッドにかけての範囲で検出した。調査地中央やや西寄り付近から南東壁中央部付近に至り、調査地外まで広がると思われる。標高は1.0m前後で、Ⅲ層下面で検出した。本遺構上にかなりの範囲で重なりをもつ畦畔１が南西直近にあり、北東には本遺構を一部切る形で近世以降の溝が掘削されている。

南北軸の盛土と東西の盛土からなり、それらが一体で構築されていることから、同一の畦畔とみなすことができる。

検出範囲での規模は、最長部分が13.0m、最短部分が1.8m、幅は上端が0.5 ～ 1.2m、下端が1.0 ～ 2.7mを測る。遺存する盛土の高さは3 ～ 20cmで、断面形はほぼ台形を呈する。盛土はⅣ層由来する可能性が高いやや植物遺体の混じる褐灰色粘土質シルトが主体で、上部には有機物を含む暗い色調の層が薄く存在する。Ⅳ層と類似するが、凸状の断面形や堆積構造から人為的な盛土とみて間違いない。本遺構から遺物は出土していない。

本遺構の時期は検出層位から12世紀以降と考えられる。本遺構の盛土裾部から出土した自然木を放射性炭素年代測定したところ、２σ暦年代範囲で897－926calAD（25.7%）、942－1016calAD（69.7%）の結果を得ており、矛盾はない。本遺構は畦畔１の前身的な畦畔と推測されるが、本遺跡ではこの時期の畦畔は本遺構以外に見つかっていない。

第４項　Ⅳ層以下の遺構（古代）

１　概要

既述の通り、排水溝の掘削部分を除くとⅣ層上面までの調査にとどまった。そのため、Ⅳ層より下層の平面的な調査は行っていないが、調査区際に設定した排水溝の断面観察により条里遺構である、条里３・条里４を確認した。

遺物は遺構から加工木が出土しているが、土器は出土していない。包含層からは木樋、漆器や加工木が出土し、土師器がわずかにみられる。

２　条里遺構

条里３・４（第47図）

AH40 グリッド南西壁断面で検出した。規模は、盛土に直行する断面ではないため参考値にとどまる。条里３が幅 3.5m、条里４が 3.3m である。盛土の高さは底面を正確に確認できていないため、これも参考値になるが、いずれも約 35cm である。盛土上面の標高は 0.8m 前後である。

条里３・４ともに下層に長さ 30cm 以上の板材が配される一方で、上層には長さ５～ 20cm の自然木が密集しており、敷粗朶が施されていたと考えられる。

土器は出土していないが、検出層位から盛土の構築時期は 12 世紀以前と推定される。他の調査区で検出された条里地割との類似性から、10 世紀後半に帰属する条里遺構の可能性が高い。

第５節　８区・Ｐ３区の調査

第１項　調査区の概要

１　地形と土層堆積（第49・50図）

８区とＰ３区は、調査区の一部が重複する位置にあることから両調査区を併せて報告をする。両調査区は遺跡東方の谷出口から約150 ～ 160m、北東の山裾から約25 ～ 30mに位置する。調査実施年度は８区が平成25年度、Ｐ３区が平成27年度で、調査面積は８区が538.7㎡、Ｐ３区が278.6㎡である。

現況の地形は平坦で、調査前までは水田として利用されていた。扇状地の縁端部にあたり、東方の谷から脈々と供給される大量の湧水は枯れることがない。土層の堆積状況は概ねⅠ～Ⅸ層までの基本層序と対応する。両区にはいくつかの調査区でのみ確認されている氾濫による溢流の堆積が存在し、Ⅴ層中とⅨ層中で確認できた。８区ではⅨ層よりも更に下層の堆積状況を確認するため、調査区内の北部で重機を使用して標高－3.0m辺りまで深掘りを行った。その結果、Ⅸ層より下層においても貝を多量に含む層を時折挟みながらⅨ層に類似する粘土質の堆積を互層状に確認できることから、汽水域であったことが窺える。

２　遺構の概要

８区・Ｐ３区では、縄文時代後期から晩期の杭群３、杭列１、集石遺構１、縄文時代晩期の盛土遺構１基、弥生時代前期の盛土遺構１基、自然流路１基、弥生時代中期の自然流路１基、木造構造物１基、弥生時代後期の杭列１基、古墳時代前期の畦畔５基、古墳時代から奈良時代前期の土坑１基、飛鳥時代から平安時代の条里遺構６基、盛土遺構２基を確認した。

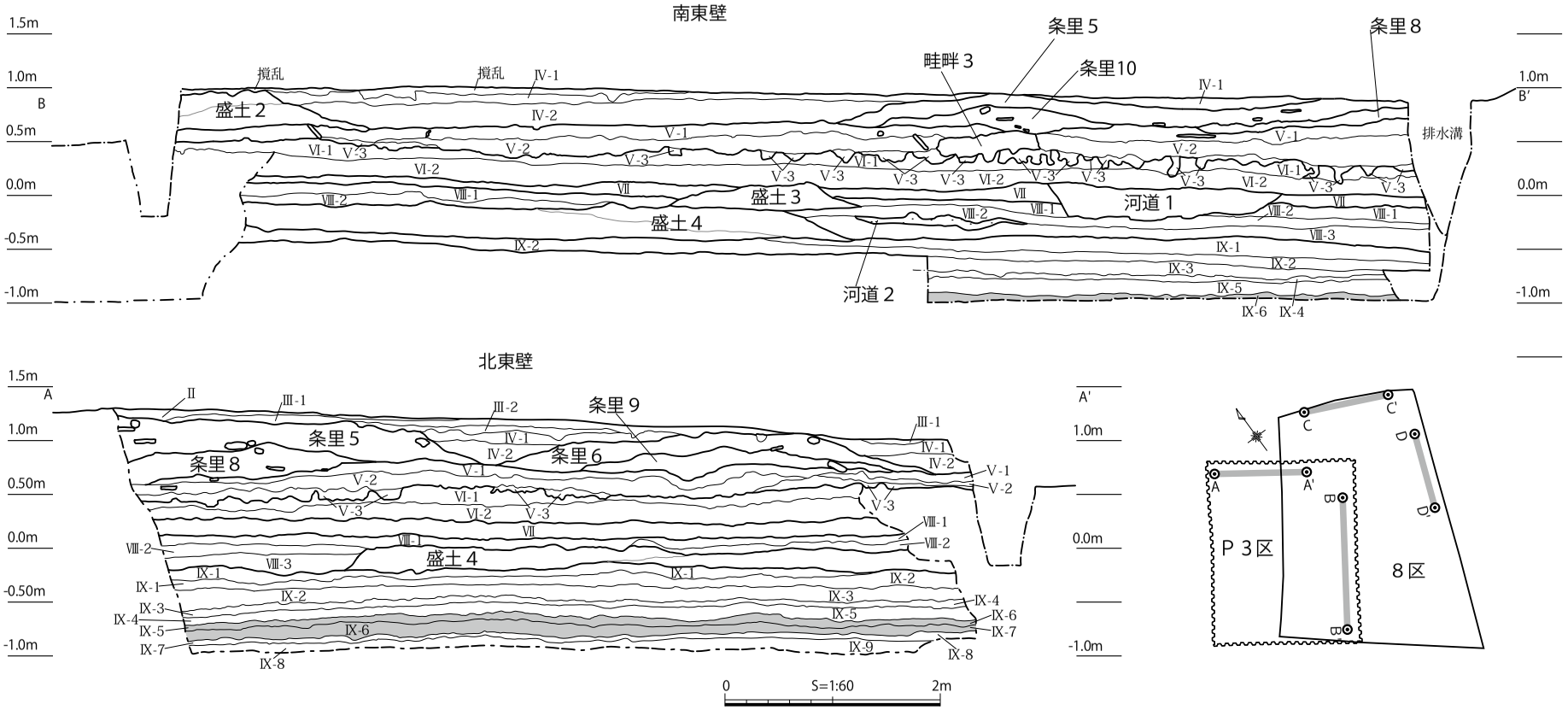
縄文時代では他の調査区と同様に杭群、杭列が検出されているが、本調査区では他の調査区には見られない細い杭が多数密集している杭群を確認している。弥生時代前期から中期の盛土遺構では、長さ５ｍ以上の自然木が盛土の芯材として利用されている。古墳時代前期の５基の盛土遺構は溢流堆積土を多く含んでおり、北西隣のＰ４区と本調査区のみで確認されている。

本調査区では他の調査区とは異なり10世紀前半以前に遡る可能性がある条里遺構が確認されている点が特徴として挙げられるが、時期比定など判然としない部分が多い。

第２項　Ⅴ層上面の遺構（古墳時代～平安時代）

１　概要（第51・52図）

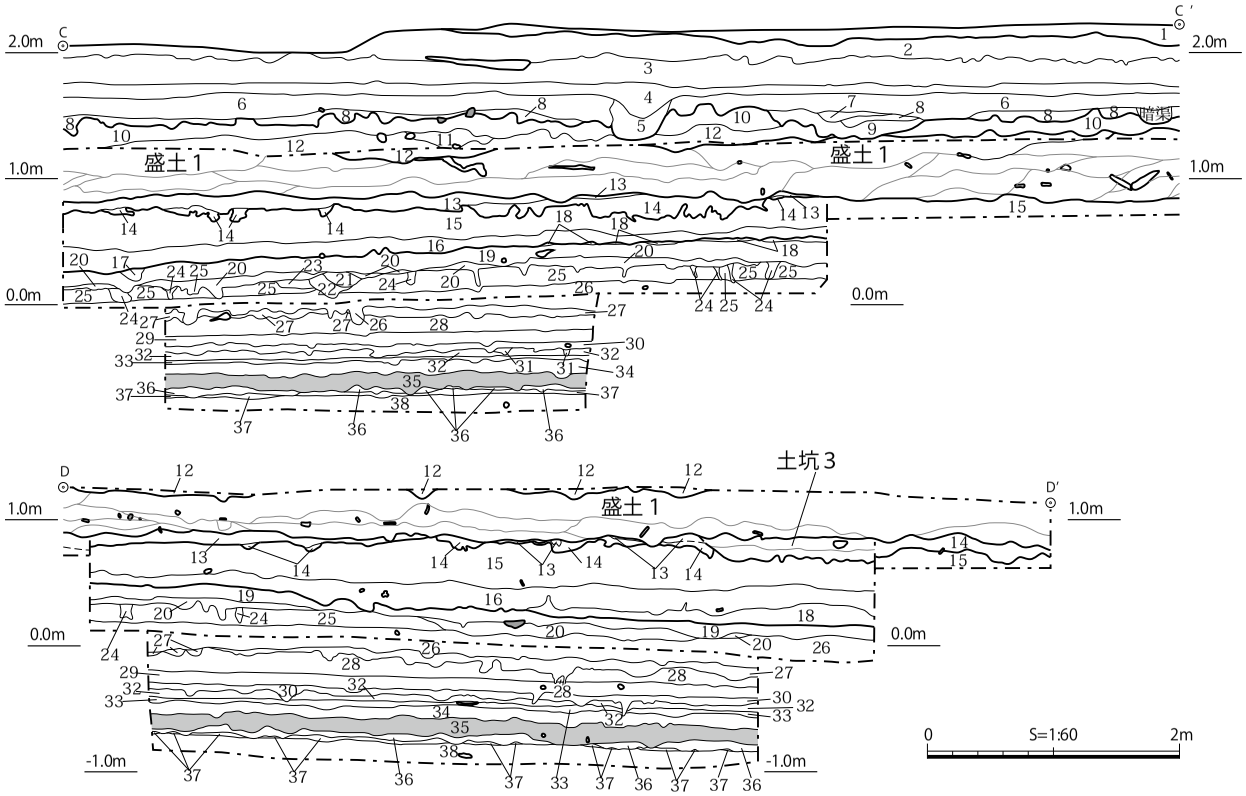
Ⅴ層上面では条里遺構６基、盛土遺構２基、土坑１基を確認した。区毎の内訳は８区が盛土遺構１



Ⅱ　暗褐色砂礫質シルト。(7.5YR3/3)粘性弱。締まり強。径1～3cm程度礫多混。
Ⅲ-1　黒褐色粘土質シルト。(10YR2/2)粘性やや弱。締まりやや弱。径1cm以下有機物多混。径1cm以上有機物少混。植物遺体多混。泥炭。
Ⅲ-2　黒褐色砂質シルト。(10YR3/1)粘性弱。径1cm以下有機物・植物遺体多混。
Ⅳ-1　黒褐色粘土質シルト。(10YR3/1)粘性やや強。径1cm以下有機物・植物遺体混。湿地堆積。
Ⅳ-2　黒褐色粘土質シルト。(7.5YR3/2)粘性強。締まりやや弱。径1～2cm木片・有機物少混。植物遺体多混。径1cm以下炭粒混。耕作土。
Ⅴ-1　黒色粘土質シルト。(10YR2/1)粘性やや強。締まりやや弱。径1cm以下有機物多混。径1～2cm程度灰褐色粘土ブロック少混。径・幅5cm以下自然木・加工木少混。径1cm以下炭粒少混。植物遺体混。耕作土か。
Ⅴ-2　褐灰色シルト質粘土。(10YR4/1)粘性強。径1cm以下有機物混。径1～2cm程度灰褐色粘土ブロック混。径1cm以下炭粒少混。植物遺体混。耕作土。
Ⅴ-3　暗赤褐色シルト質粘土。(5YR3/2)粘性強。締まりやや強。径1～5cm程度灰褐色粘土ブロック多混。径1cm以下有機物少混。植物遺体混。
Ⅵ-1　黒色粘土質シルト。(10YR2/1)締まりやや弱。植物遺体多混。径1cm程度有機物混。径1cm以下炭粒少混。細砂少混。やや土壌化。耕作可能性あり。
Ⅵ-2　黒褐色粘土質シルト。(7.5YR2/2)粘性やや強。植物遺体多混。径1～2cm程度有機物混。径1cm以下炭粒混。細砂少混。湿地堆積。耕作可能性あり。
Ⅶ　黒色粘土質シルト。(7.5YR2/1)粘性やや強。植物遺体多混。径1～2cm程度有機物混。径1cm以下炭粒混。細砂少混。湿地堆積。耕作の可能性あり。
Ⅷ-1　黒褐色粘土質シルト(7.5YR3/1)粘性強。植物遺体混。細砂少混。湿地堆積。
Ⅷ-2　黒褐色粘土質シルト(7.5YR3/2)締まりやや弱。植物遺体多混。径1～2cm程度有機物混。粗砂・細砂少混。部分的に径・幅2~10cm程度自然木・加工木多混。
Ⅷ-3　黒褐色砂質シルト(10YR3/1)粘性やや強。締まりやや強。植物遺体多混。径1～3cm程度有機物混。径1cm以下炭粒混。木の実皮混。径5mm以下の礫粒・粗砂少混。流土堆積。部分的に径・幅2~15cm程度自然木・加工木多混。
Ⅸ-1　暗赤灰色砂質粘土(2.5YR3/1)粘性やや強。締まりやや強。植物遺体混。径1～3cm程度有機物多混。径1cm以下炭粒混。木の実・皮混。粗砂多混。径5～10mm礫粒混。部分的に径・幅2~10cm程度自然木・加工木混。流土堆積。
Ⅸ-2　暗赤褐色砂質粘土(5YR3/2)粘性やや強。締まりやや強。植物遺体混。径1～3cm程度有機物混。径1cm以下炭粒少混。粗砂多混。径5～10mm礫粒少混。灰褐色粘土ブロック多混。径・幅5cm以下自然木・加工木少混。流土堆積。
Ⅸ-3　黄灰色粘土(2.5YR4/1)粘性強。締まりやや強。径1cm以下有機物混。径5mm以下炭粒少混。本層上層部分ににぶい黄橙色粘土混。植物遺体少混。
Ⅸ-4　にぶい黄橙色粘土(10YR7/2)と褐灰色粘土(7.5YR5/1)の混土
粘性強。締まりやや強。上半がにぶい黄橙色粘土、下半が褐灰色粘土で形成。上半はやや撹拌を受ける。径1cm以下有機物少混。
Ⅸ-5　褐灰色粘土(10YR4/1)粘性強。径1cm以下有機物混。上部に植物遺体少混。
Ⅸ-6　黒褐色粘土質シルト(10YR3/1)粘性やや強。灰褐色粘土多混。一部層状をなす。径1~2cm巻き貝多混。カキ殻?少混。径1cm程度有機物混。植物遺体少混。
Ⅸ-7　黒褐色粘土質シルト(10YR3/1)粘性やや強。径1~2cm巻き貝多混。二枚貝少混。
Ⅸ-8　灰褐色粘土(7.5YR5/2)粘性強。層状をなすが、部分的にブロック状箇所あり。
Ⅸ-9　褐灰色粘土(10YR4/1)粘性強。締まりやや強。径1~2cm有機物混。

第49図　８区・Ｐ３区土層断面図（１）

報告書
8区・P3区の調査



Ⅰ層相当
1　暗褐色シルト (10YR3/3)。土壌化激しい。表土・現代水田。
2　にぶい黄褐色粗粒砂混シルト (10YR5/4)。径 1cm 以下礫少含。現代旧水田。
3　にぶい褐色粗粒砂微混シルト（薄層の互層）(7.5YR5/4)。近現代水田。
4　にぶい褐色粗粒砂混シルト (7.5YR6/3)。径 1~3cm 礫含。近現代水田。
5　灰褐色粗粒砂多混粘土質シルト (7.5YR5/2)。径 1~5cm 礫含。近現代水田関係の遺構。
6　灰褐色粗粒砂混シルト (7.5YR4/2)。径 1~5cm 礫多含。近現代水田。
7　黒褐色粗粒砂混シルト (10YR3/1)・８層の混土。炭化物粒含。近現代水田。

Ⅱ層相当
8　灰黄褐色粗粒砂少混シルト (10YR5/2)。植物遺体含。近世水田か。
9　黒褐色シルト (10YR3/1)・黒褐色砂礫 (10YR3/1) の混土。径 6cm 以下礫含。植物遺体含む。炭化物粒含む。近世水田関係の遺構か。

Ⅲ層相当
10　黒褐色シルト (10YR3/1)。腐食した植物遺体含。
11　黒褐色粗粒砂混シルト (10YR3/2)。細粒砂少含。ウツギ様の植物遺体多含。直下の盛土由来か。
12　暗褐色細粒砂質シルト (10YR3/3)。径 1cm 前後の礫少含。腐食した植物遺体含。

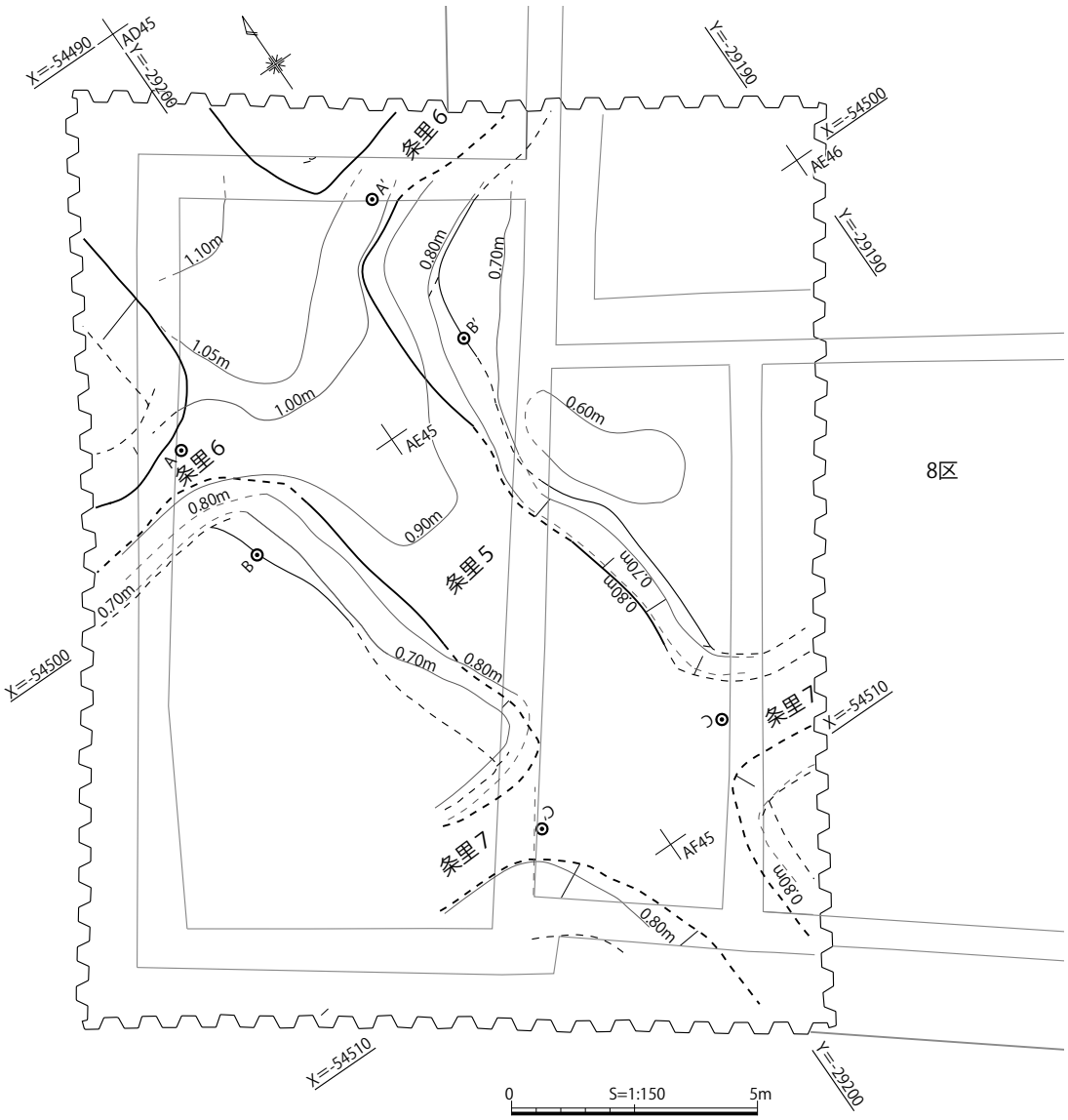
Ⅴ層相当
13　黒褐色細礫～中粒砂混細粒～極細粒砂質シルト。(10YR3/2) 径 2cm 以下褐灰色シルト質粘土 (5YR4/2) ブロック少含。径 2~3cm 礫含む。植物遺体(木本)含。14 層を攪拌した層。
14　黒褐色砂混シルト (10YR2/2)・褐灰色シルト質粘土 (5YR4/2)・黒褐色極細粒砂混シルト (10YR3/2) の混土。植物遺体(木本)少し含む。攪拌層。

Ⅵ・Ⅶ・Ⅷ層相当
15　黒褐色有機質に富む砂混シルト (10YR2/2)。植物遺体(草本・木本)含。加工木(棒状・板状)含。
16　黒褐色有機質に富む中粒砂までの砂混粘土質シルト (10YR3/2)。下部に 18 層斑状に含。植物遺体(草本・木本) 含。人為的な攪拌層か。

Ⅵ・Ⅶ・Ⅷ層相当
17　暗褐色細粒砂までの砂混シルト (10YR3/3)。暗灰黄色中粒砂までの砂と葉層との互層。植物遺体(木本：小枝・葉)密に含む。
18　黒褐色シルト (10YR3/2)。植物遺体(木本：葉)密に含む(葉層状)。

Ⅸ層相当
19　暗褐色細礫～粗粒砂混中粒～極細粒砂質シルト (10YR3/3)。所により暗灰黄色シルト質細粒～極細粒砂の葉層・薄層との互層。径 5cm 以下礫わずかに含。植物遺体 (木本・小枝・葉) 密に含。縄文土器 (突帯文) 含む。
20　暗褐色有機質に富む細粒～極細粒砂質シルト (10YR3/3)。植物遺体(草本)含む。
21　暗褐色細粒砂までの砂混シルト (10YR3/3)。暗灰黄色細粒砂までの砂の葉層との互層。上部に暗褐色有機質に富むシルトの偽礫(径 2cm まで)含む。植物遺体(木本：小枝・葉)密に含。
22　暗灰黄色中粒砂までの砂 (2.5Y4/2)。暗褐色粗粒砂混シルトの葉層との互層。砂混シルトに植物遺体(木本：小枝・葉)密に含む。
23　25 層の斑土主体。径 1.5cm までの砂礫を部分的に含む。
24　25 層の粒・斑土主体。極粗粒～中粒砂を部分的に 含む。生物擾乱。
25　灰褐色極粗粒～中粒砂混細粒～極細粒砂質シルト (7.5YR4/2)・黒褐色極細粒砂混シルト (10YR3/1) の薄層ににぶい褐色シルト質粘土・黒褐色粘土質シルト・黒褐色シルト質粘土の葉層の互層を挟む。葉層の最上部は黒色極細粒砂混粘土質シルト。植物遺体(草本：立ったままの葦)含む。
26　黒褐色有機質に富む砂礫(径 8mm ～中粒砂)混シルト (10YR3/1)。黒褐色細礫～中粒砂を斑状に含む。径 2cm までの礫含む。植物遺体(木本：小枝・葉、草本)含む。縄文土器(突帯文)含む。
27　灰褐色極細粒砂混粘土質シルト (7.5YR4/2)・灰褐色粗粒～中粒砂多混粘土質シルト (7.5YR4/2)・黒褐色極細粒砂混シルト (10YR3/1) の混土。極粗粒砂・径 2cm までの礫含む。木本：小枝含む (一部炭化)。
28　灰褐色粗粒～中粒砂質シルト (7.5YR4/2)・灰褐色極細粒砂混粘土質シルト (7.5YR4/2)・灰褐色シルト質粘土 (7.5YR4/2)・黒褐色極細粒砂混粘土質シルト (10YR3/1) の細互層(厚さ 1.5cm まで)。黒褐色粗粒砂～極細粒砂混シルト・黒褐色シルトで充填された巣穴痕多い。
29　黒褐色極細粒砂質シルト (10YR3/1)・黒褐色粘土質シルト (10YR3/2) の薄層(厚さ 2cm 前後)の互層。上部に褐灰色粘土の薄層(厚さ１ｃｍ前後)を挟む。分解された木本・草本を砂質シルトに多く含む。
30　黒褐色シルト質粘土 (10YR3/1)。木本：小枝・木片含む(一部炭化)。
31　32 層の粒主体。生物擾乱。
32　褐灰色粘土 (10YR5/1)。上位の褐灰色粘土、下位の灰黄褐色粘土の薄層(厚さ 2cm 前後)に挟まれる。30 層・黒褐色シルト質粘土で充填された巣穴痕多い。
33　黒褐色極細粒砂混粘土質シルト (10YR3/1)。所により砂は斑状に混じる。木本：小枝多く含む。
34　黒褐色シルト質粘土 (10YR3/1)。木本：小枝・木片含む(一部炭化)。
35　黒褐色シルト質粘土 (10YR3/1)。主に上部に灰黄褐色粘土の扁 平なブロック(長径 5cm まで)を含む。貝殻を密に含む。木本：小枝・木片・種子含む(一部炭化)。
36　黒褐色シルト質粘土 (10YR3/1)。植物遺体(木本：小枝)含む。
37　灰黄褐色粘土 (10YR5/2)。
38　黒褐色粘土質シルト (10YR3/1)・黒褐色粘土質シルト (10YR3/2) の互層(厚さ 2 ～ 3cm)。植物遺体(木本：小枝・木片)含む。

第50図　８区・Ｐ３区土層断面図（２）



第51図　８区・Ｐ３区Ｖ層上面遺構分布図（１）

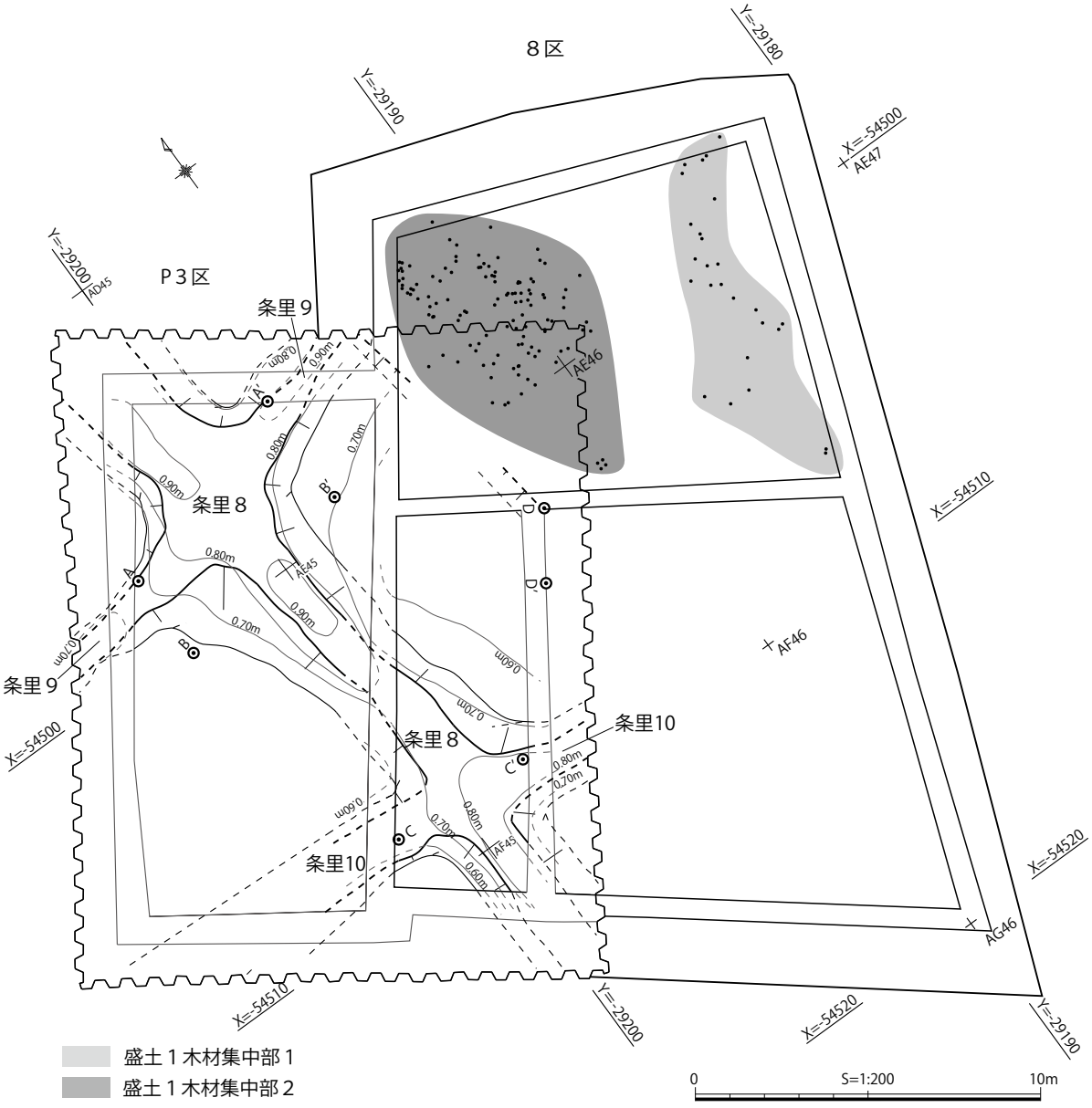
基、土坑１基で、Ｐ３区が条里遺構６基、盛土遺構１基である。８区の盛土１とＰ３区の盛土２は同一遺構の可能性が高い。条里遺構６基はすべてＰ３区で検出し、新旧２時期に分かれる可能性があり、３基が同一位置に重複する。条里・盛土遺構からは加工木や木製品、木製祭祀具が多数出土しており、とくに８区の盛土１、Ｐ３区の条里５・８・10は密度が高い。土器は須恵器、土師器の小片を含めると各遺構それぞれ数点から十数点程度と少ない。

２　条里遺構

条里５（第53・55図　ＰＬ.14－2,3）

Ｐ３区の北隅と南隅を直線的に結ぶように延びる盛土遺構である。方位はＮ－４°－Ｗで、南北方向に延びる。本遺構を東西方向に横切るように同時期の盛土遺構条里６と、条里７がある。構築順は土層断面の観察から、条里６、７よりも本遺構が先に構築されている。

規模は、上面幅が約３ｍ、基底部幅が約５ｍで、盛土の高さは最大約40cmである。盛土上面の標高は1.0m前後である。盛土は上層と下層の２層に分類される。両層とも黒褐色粘土とシルトを主体とした土質で、微細な有機物を多く含む。上層には粗砂や細砂、径が５cm以下で比較的小型の加工



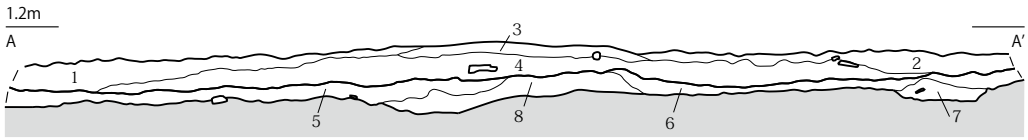
第52図　８区・Ｐ３区Ⅴ層上面遺構分布図（２）

木や自然木が含まれ、北側の一部では敷粗朶を確認できた。下層では上層よりも粗砂や細砂の量は少ない。含まれる木材は上層よりも大型のものや板材が目立つ。構造的な特徴として、前身とみられる条里８を盛土芯として利用し、その上部に土を盛り上げる点が挙げられる。盛土内に混和された木材が下層では大型の加工木や板材が中心であることから、構造的に盛土の強度を高めようと意図されていたことが分かる。遺物は田下駄や用途不明の加工木、馬形や斎串など木製祭祀具が多く出土している。土器は少量ながら須恵器や土師器が出土している。

遺構の時期は出土遺物や他調査区との関係から10世紀後半と推定される。盛土上層から出土した粗朶について放射性炭素年代測定したところ、２σ暦年代範囲で891－982calAD（95.4%）の値を示し、出土遺物とも概ね一致する。一町方格内を12歩（約21m）に分割する条里地割と考えられる。

条里６（第53・55図）

Ｐ３区の北隅付近で先に構築された条里５に接続する盛土遺構である。方位はＮ－78°－Ｅで、東西方向に延びる。

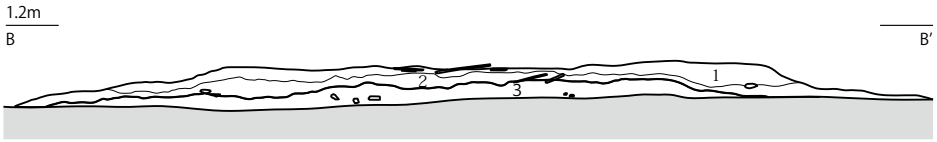


条里６
1　黒褐色粘土質シルト。(10YR2/2)　粘性やや弱。径1㎝以下有機物・植物遺体多混。径5ｍ以下礫粒・粗砂・細砂少混。径5㎜以下炭粒少混。径3㎝以下木片混。
2　黒褐色粘土質シルト。(10YR2/2)　粘性やや強。径1㎝以下有機物・植物遺体多混。径5㎜以下礫粒・粗砂・細砂少混。径5㎜以下炭粒少混。径3㎝以下木片混。

条里５
3　黒褐色粘土質シルト。(10YR2/2)　径1㎝以下の有機物・植物遺体多混。径5㎜以下の礫粒・粗砂・細砂多混。径5㎜以下炭粒少混。径5㎝以下木片混。径1㎝以下灰褐色粘土ブロック微混。粗朶構造あり。
4　黒褐色シルト質粘土。(10YR2/2)　粘性やや強。径1㎝以下有機物・植物遺体多混。径1㎝以下礫粒・粗砂・細砂混。径5㎜以下炭粒混。径10㎝以下木片板材(加工材)混。

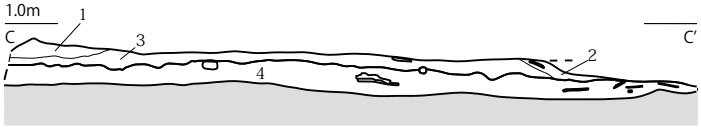
条里９
5　黒色粘土質シルト。(7.5YR2/1)粘性やや強。径1㎝以下有機物・植物遺体多混。径5㎜以下礫粒・粗砂・細砂少混。径5㎜以下炭粒混。径及び幅15㎝以下加工木材混。径1㎝以下灰褐色粘土ブロック少混
6　黒色粘土質シルト。(7.5YR2/1)粘性やや強。径1㎝以下有機物・植物遺体多混。径5㎜以下礫粒・粗砂・細砂少混。径5㎜以下炭粒混。径及び幅15㎝以下加工木材混。径1㎝以下灰褐色粘土ブロック少混

条里８
7　黒褐色粘土質シルト。(10YR2/2)粘性強。締まりやや弱。径1㎝以下有機物・植物遺体混。径1㎜以下粗砂・細砂少混。径5㎜以下炭粒少混。幅5㎝以下加工木材混。
8　黒色粘土質シルト 。(10YR2/1)粘性強。径1㎝以下有機物・植物遺体多混。径1㎝程度礫少混。径5㎜以下礫粒・粗砂・細砂少混。幅10㎝以下加工木材多混。3㎝以下灰褐色粘土ブロック少混。



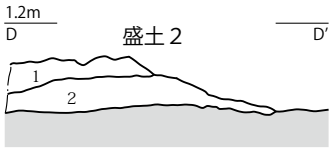
条里５
1　黒褐色粘土質シルト。(10YR2/2)　粘性強。締まりやや強。径1㎝以下有機物・植物遺体混。径5㎜以下礫粒・粗砂・細砂多混。径1㎝以下炭粒少混。径1㎝以下灰褐色粘土ブロック少混。径5㎝以下木片・小枝混。径10㎝以下板材混。粗朶構造あり。
2　黒褐色シルト質粘土。(10YR2/2)　粘性強。径1㎝以下有機物・植物遺体多混。径1㎝以下礫粒・粗砂・細砂少混。径1㎝以下炭粒少混。径1㎝以下灰褐色粘土ブロック少混。径1㎝以下小枝多混。径10m以下の板材少混。

条里８
3　黒色粘土質シルト 。(10YR2/1)粘性やや強。径1㎝以下有機物多混。径2㎝以下自然混。径10㎝または幅10㎝以下丸木及び板材多混。径5㎝以下灰褐色粘土ブロック少混。径1㎝以下炭粒微混。

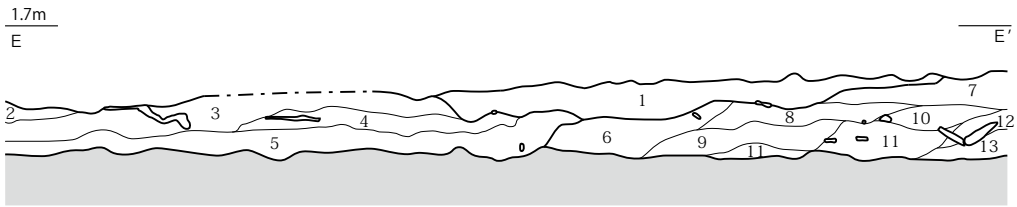


条里５
1　黒褐色シルト質粘土。(10YR2/2)粘性強。径1㎝以下有機物・植物遺体多混。径1㎝以下炭粒少混。径1～3㎝程度木片混。　径2㎜以下粗砂・細砂少混。
2　黒褐色シルト質粘土。(10YR2/2)粘性強。径1㎝以下有機物・植物遺体多混。径1㎝以下炭粒少混。径1～3㎝程度木片混。径2㎜以下粗砂・細砂少混。
3　黒褐色シルト質粘土。(10YR2/2)粘性強。径1㎝以下有機物・植物遺体多混。径1㎝以下炭粒少混。径1～3㎝木片混。幅2～10㎝丸材・板材混。径2㎜以下粗砂・細砂少混。径3㎝以下灰褐色粘土ブロック少混。

条里８・10
4　黒色粘土質シルト。(10YR2/1)粘性やや強。締まりやや弱。径1㎝以下有機物・植物遺体多混。径1㎝以下炭粒混。径1～5㎝木片多混。径3～10㎝板材多混。細砂少混。下層由来の黒褐色・灰褐色粘土混。



1　黒褐色粘土質シルト。(7.5YR3/1)締まりやや強。径1㎝以下有機物少混。植物遺体混。径1㎝ 以下炭粒混。粗砂細砂少混。
2　黒褐色粘土質シルト。(7.5YR3/1)粘性やや強。締まりやや強。径1㎝以下有機物混。植物遺体混。径1㎝以下炭粒混。径1㎝以下灰褐色粘土ブロック少混。粗砂細砂少混。２盛土１層よりやや暗い色調。



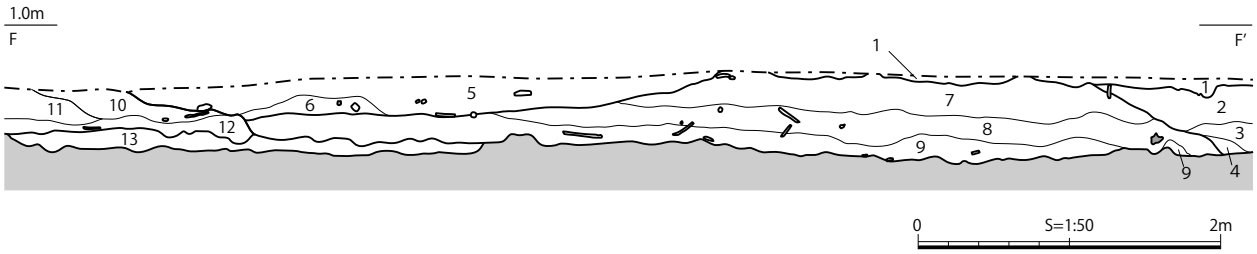
盛土１構築段階３
1　にぶい黄褐色細粒砂少混シルト (10YR5/3)。植物遺体少し含む。炭化物粒少し含む。加工木(板状)含む。

盛土１構築段階２
2　灰黄褐色細粒砂少混シルト (10YR4/2)。径 1~3cm 礫少し含む。植物遺体含む。炭化物粒含む。
3　にぶい黄褐色細粒砂混シルト (10YR4/3)。径 1~3cm 礫わずかに含む。植物遺体多く含む。炭化物粒含む。
4　灰黄褐色細粒砂混シルト (10YR4/2)。径 1~3cm 礫わずかに含む。植物遺体含む。炭化物粒少し含む。加工木(板状)含む。
5　灰黄褐色細粒砂少混シルト (10YR4/2)。褐灰色シルト質粘土ブロック(径 1~3cm)含む。植物遺体含む。炭化物粒少し含む。

盛土１構築段階１
6　灰黄褐色細粒砂混シルト 10YR5/2。黄灰色中粒砂までの砂を薄層状(厚さ 2cm)・斑状に含む。径 1~3cm 礫わずかに含む。植物遺体少し含む。炭化物粒少し含む。加工木(棒状)含む。
7　黒褐色極細粒砂質シルト (2.5Y3/1)。黄灰色中粒砂までの砂・砂礫(細礫～中粒砂)を斑状に含む。径 3cm までの礫少し含む。植物遺体(草本・木本) 含む。炭化物粒含む。
8　にぶい黄褐色細粒砂少混シルト (10YR5/3)。径 1~3cm 礫少し含む。植物遺体多く含む。炭化物粒少し含む。加工木(棒状)含む。
9　灰黄褐色細粒砂少混シルト (10YR4/2)。径 1~3cm 礫少し含む。植物遺体含む。炭化物粒少し含む。
10　灰黄褐色細粒砂少混シルト (10YR4/2)。径 1~3cm 礫わずかに含む。植物遺体多く含む。炭化物粒少し含む。加工木(板状)含む。
11　黒褐色細粒砂少混シルト (10YR3/2)。褐灰色シルト質粘土ブロック(径 1cm 前後)含む。植物遺体含む。炭化物粒少し含む。加工木(板状)含む。
12　にぶい黄褐色細粒砂少混シルト (10YR4/3)。褐灰色シルト質粘土ブロック(径 1cm 前後)少し含む。径 1~3cm 礫わずかに含む。植物遺体含む。炭化物粒わずかに含む。加工木(板状)含む。
13　灰黄褐色細粒砂少混シルト (10YR4/2)。褐灰色シルト質粘土ブロック(径 1cm 前後)少し含む。植物遺体少し含む。炭化物粒わずかに含む。加工木(板状)含む。

0　S=1:50　2m

第53図　８区・Ｐ３区条里５～10・盛土１・２土層断面図



Ⅲ層相当
1　暗褐色細粒砂質シルト (10YR3/3)。径 1cm 前後の礫少し含む。腐食した植物遺体含む。

Ⅳ層相当
2　灰黄褐色極細粒砂混シルト (10YR5/2)。細礫～細粒砂少し含む。植物遺体(木本・草本)少し含む。加工木(板状)含む。
3　黒褐色極細粒砂混粘土質シルト (10YR3/2)。褐灰色シルト質粘土粒少し含む。径 3cm までの礫わずかに含む。植物遺体(木本・草本)少し含む。加工木(板状・棒状)含む。
4　黒褐色砂少混粘土質シルト (10YR3/1)。5YR4/2 褐灰色シルト質粘土ブロック(径 3cm まで)含む。径 3cm までの礫わずかに含む。植物遺体(木本・草本)含む。加工木(板状・棒状)含む。

盛土１構築段階３
5　黒褐色粗粒砂までの砂混シルト (10YR3/1)。植物遺体(木本・草本) 含む。炭化物粒含む。加工木(板状・棒状)含む。
6　灰黄褐色粗粒砂までの砂混シルト (10YR5/2)。径 3cm までの礫わずかに含む。植物遺体(木本・草本) 含む。炭化物粒含む。加工木(丸太状)含む。

盛土１構築段階２
7　灰黄褐色粗粒砂までの砂混シルト (10YR5/2)。植物遺体(木本・草本)含む。加工木(板状)含む。
8　黒褐色粗粒砂までの砂少混シルト (10YR3/2)。径 3cm までの礫含む。草本・木本を含む。炭化物粒含む。板状加工木含む。
9　黒褐色極細粒砂混シルト (10YR2/2)。黒褐色粘土質シルト・褐灰色シルト質粘土ブロック(径 3cm まで)含む。植物遺体(木本・草本)含む。加工木(板状)含む。

盛土１構築段階１
10　黒褐色粘土質シルト・ブロック状シルトの混土 (10YR3/2)。径 8mm までの砂礫含む。植物遺体(木本)含む。炭化物粒含む。加工木(板状)含む。
11　黒褐色極細粒砂混シルト (10YR3/1)。極粗粒砂～細粒砂・径 5mm までの礫少し含む。植物遺体(木本)含む。炭化物粒少し含む。加工木(棒状・板状)含む。
12　灰黄褐色細礫までの砂礫混粘土質シルト (10YR4/2)。径 3cm までの礫少し含む。植物遺体(木本)含む。炭化物粒少し含む。加工木(板状・棒状)含む。

土坑３
13　黒褐色シルト質粘土 (10YR3/2)。径３cm 以下褐灰色シルト質粘土ブロックわずかに含む。撹拌による窪みか。

第54図　８区・Ｐ３区盛土１・土坑３土層断面図

規模は上面幅約0.7 ～ 1.5m、基底部幅約2.5 ～ 3.5mで、盛土の高さは最大約30cmである。盛土上面の標高は1.0m前後である。盛土は黒褐色粘土とシルトを主体とした土質で、微細な有機物を多く含む。粗砂・細砂を少量含み、径３cm以下の木片も混じる。構造的な特徴として、前身とみられる条里９を盛土芯として利用し、その上部に土を盛り上げている点が挙げられる。遺物は用途不明の加工木が多く出土しており、木製祭祀具の馬形も１点出土している。土器は須恵器や土師器の小片がわずかに出土している。

遺構の時期は、周辺遺構との関係から10世紀後半と推定される。一町方格内を12歩(約21m)に分割する条里地割の中をさらに細分する地割と考えられる。

条里７（第53・55図）

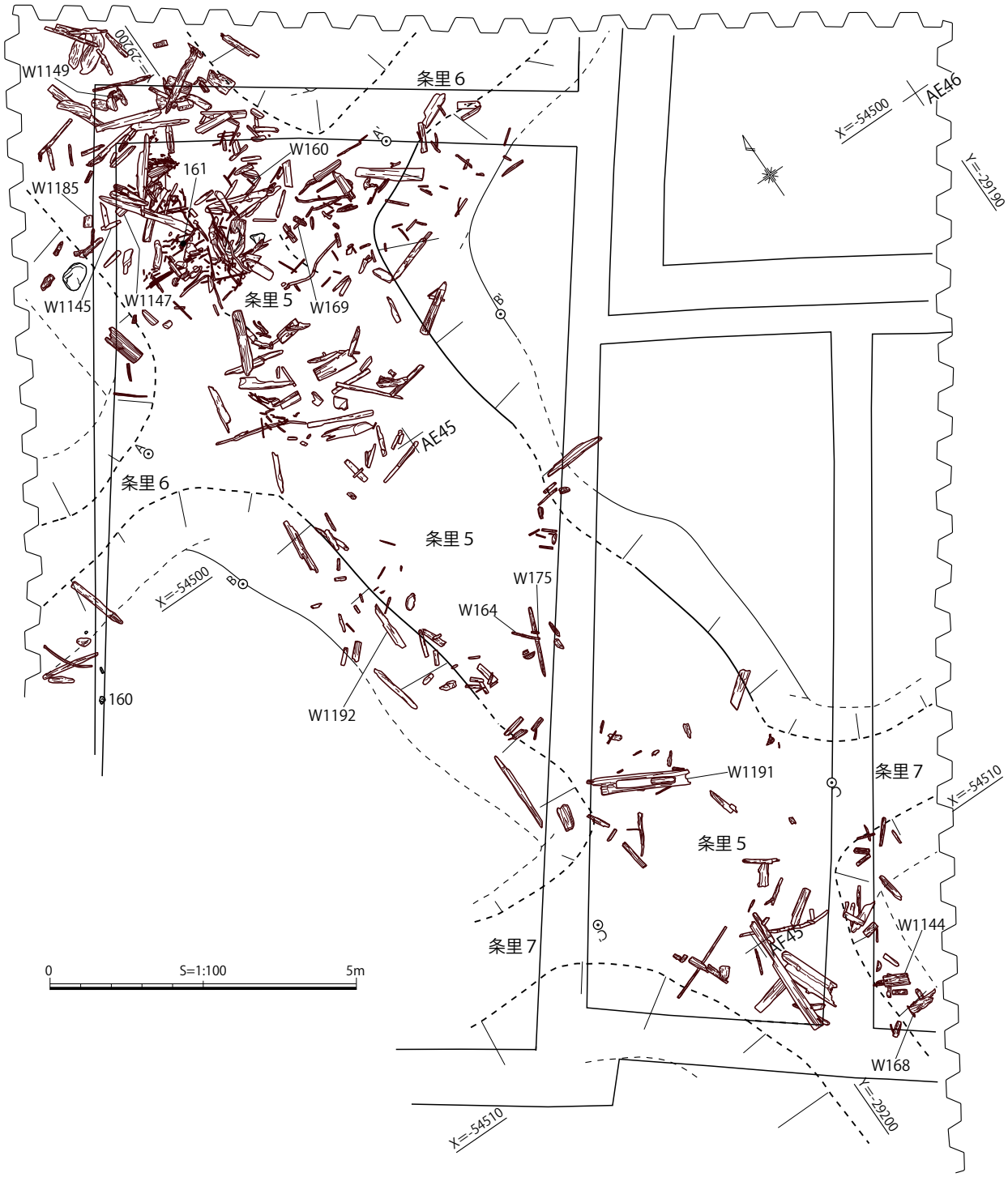
Ｐ３区の南隅付近で、先に構築された条里５に接続する盛土遺構である。方位はＮ－83°－Ｗで、東西方向に延びる。

規模は上面幅が約1.2 ～ 1.5m、基底部幅が約2.5 ～ 3.5m、盛土の高さは最大で約30cmである。盛土上面の標高は0.8m前後である。盛土は黒褐色粘土とシルトを主体とした土質で、微細な有機物を多く含む。粗砂や細砂も少量含み、径３cm以下の木片も混じる。構造的な特徴として、前身とみられる条里10を盛土芯として利用し、その上部に土を盛り上げている点が挙げられる。遺物は杭や用途不明の加工木が出土しており、馬形や斎串といった木製祭祀具も出土している。土器は須恵器や土師器の小片がわずかに出土している。

遺構の時期は、周辺遺構との関係から 10 世紀後半と推定される。一町方格内を 12 歩（約 21m）に分割する条里地割内をさらに細分する地割と考えられる。

条里８（第53・56・57図　ＰＬ.15－１,２）

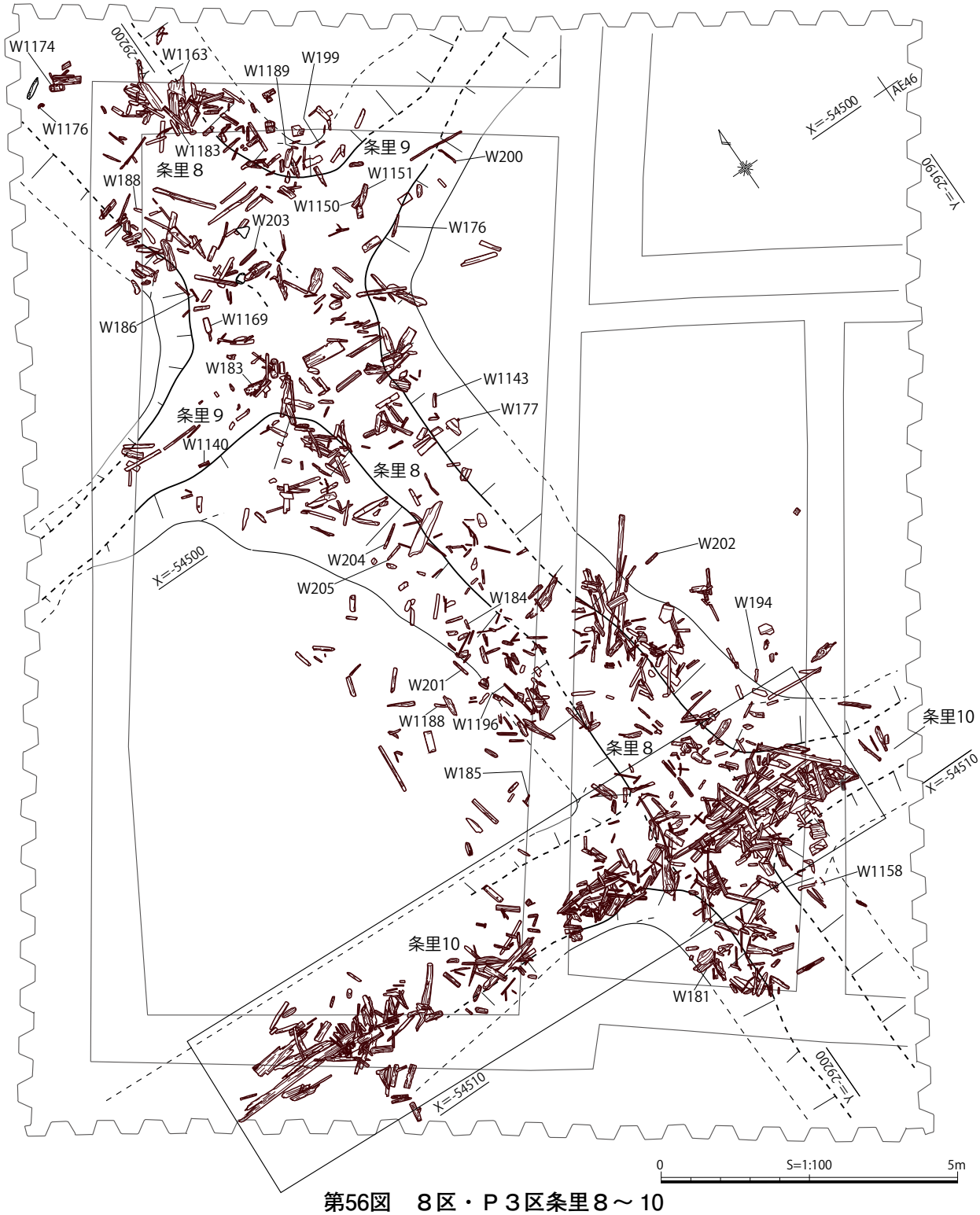
Ｐ３区の北隅と南隅を直線的に結ぶように延びる盛土遺構である。方位はＮ－４°－Ｗで、南北方向に延びる。同時期の条里遺構、条里９・10が本遺構に直交して築かれる。構築順は土層断面の観察から、条里９よりも本遺構が先に構築されている。条里10との先後関係ははっきりしない。条里５と重複し、条里５は本遺構を芯のように利用して築かれている。本遺構は条里５の前身的な盛土遺構で



第55図　８区・Ｐ３区条里５～７

ある可能性がある。

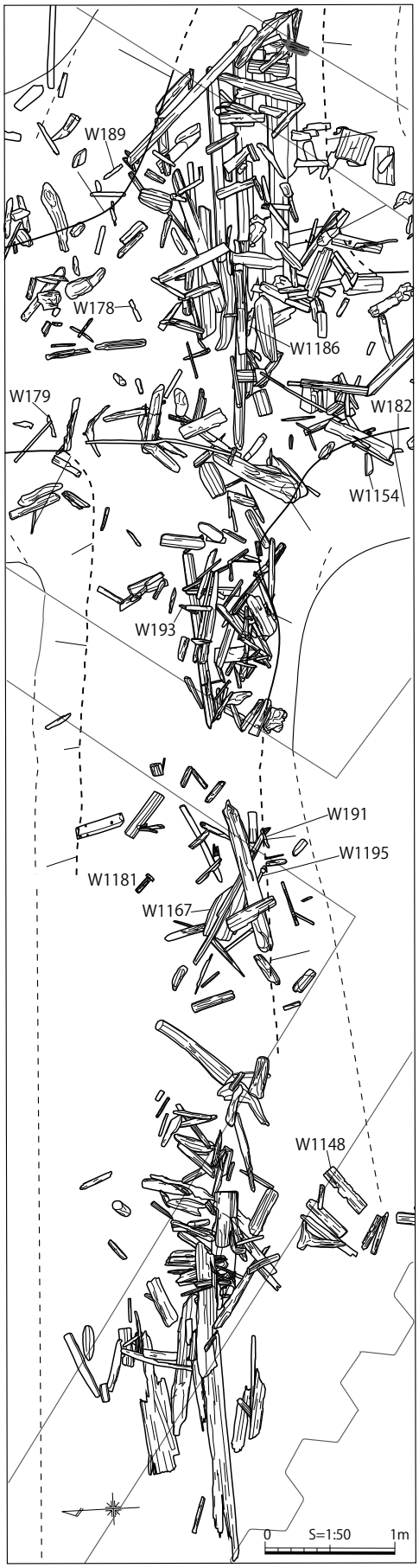
規模は上面幅約1.2 ～ 2.2m、基底部幅約3.0 ～ 4.5m、盛土の高さは最大で約20cmである。盛土上面の標高は0.8m前後である。盛土は黒色の粘土質シルトを主体とした土質で、微細な有機物を多く含み、小礫粒や粗砂、細砂が少量含まれる。径または幅が３～ 10cm程度の加工木材や板材、自然木が多く含まれ、調査区南寄りの条里10との交差点付近がとくに多い。構造的な特徴として、盛土量が少ない割に比較的大きめの加工木が多量に混和されている。盛土内を堅固にし、盛土が流出するのを防ぐ意図があったものと推測される。遺物は用途不明の加工木を主として、建築材、田下駄、曲物、アカ取り、馬形や人形、舟形といった木製祭祀具など、多量の木製品が出土している。とくに木製祭祀



第56図　８区・Ｐ３区条里８～10

具では舟形が本遺構だけでも８点出土していることが特筆される。土器は少量ながら須恵器小片が出土している。

本遺構は条里５との関係から10世紀前半以前に構築された可能性がある。ただし、詳細な時期は特定できない。盛土から出土した粗朶について放射性炭素年代測定したところ、２σ暦年代範囲で619－666calAD（95.4%）の値を示している。10世紀前半以前に遡る条里地割の可能性はあるが、他の調査区では対応する条里遺構は確認できないことから、やや躊躇される。



第57図　８区・Ｐ３区条里８・10遺物出土状況図

条里９（第53・56図）

Ｐ３区の北隅付近で先に構築された条里８に接続する盛土遺構である。方位はＮ－78°－Ｅで、条里８と交差する。条里６に重複する位置に構築され、本遺構は条里６の盛土芯として利用された可能性がある。

規模は上面幅が約0.8 ～ 1.0m、基底部幅が約2.0 ～ 2.5mで、盛土の高さは最大約20cmである。盛土上面の標高は0.8m前後である。

盛土は黒色の粘土質シルトを主体とした土質で、微細な有機物を多く含み、小礫粒や粗砂、細砂が少量含まれる。径及び幅が５～ 15cm程度の加工木も含まれる。本遺構は盛土中に入れ込まれている木材の量は条里８ほど多くなく、特徴的な盛土構造は見られない。残存している盛土の高さが条里８よりもさらに低いのは、強度不足によって盛土がかなり崩壊してしまっているためであろう。

遺物は用途不明の加工木を主として、建築材、田下駄、アカ取り、木製祭祀具の馬形など、条里８ほどではないが、木製品が数多く出土している。土器は須恵器の小片がわずかに出土している。

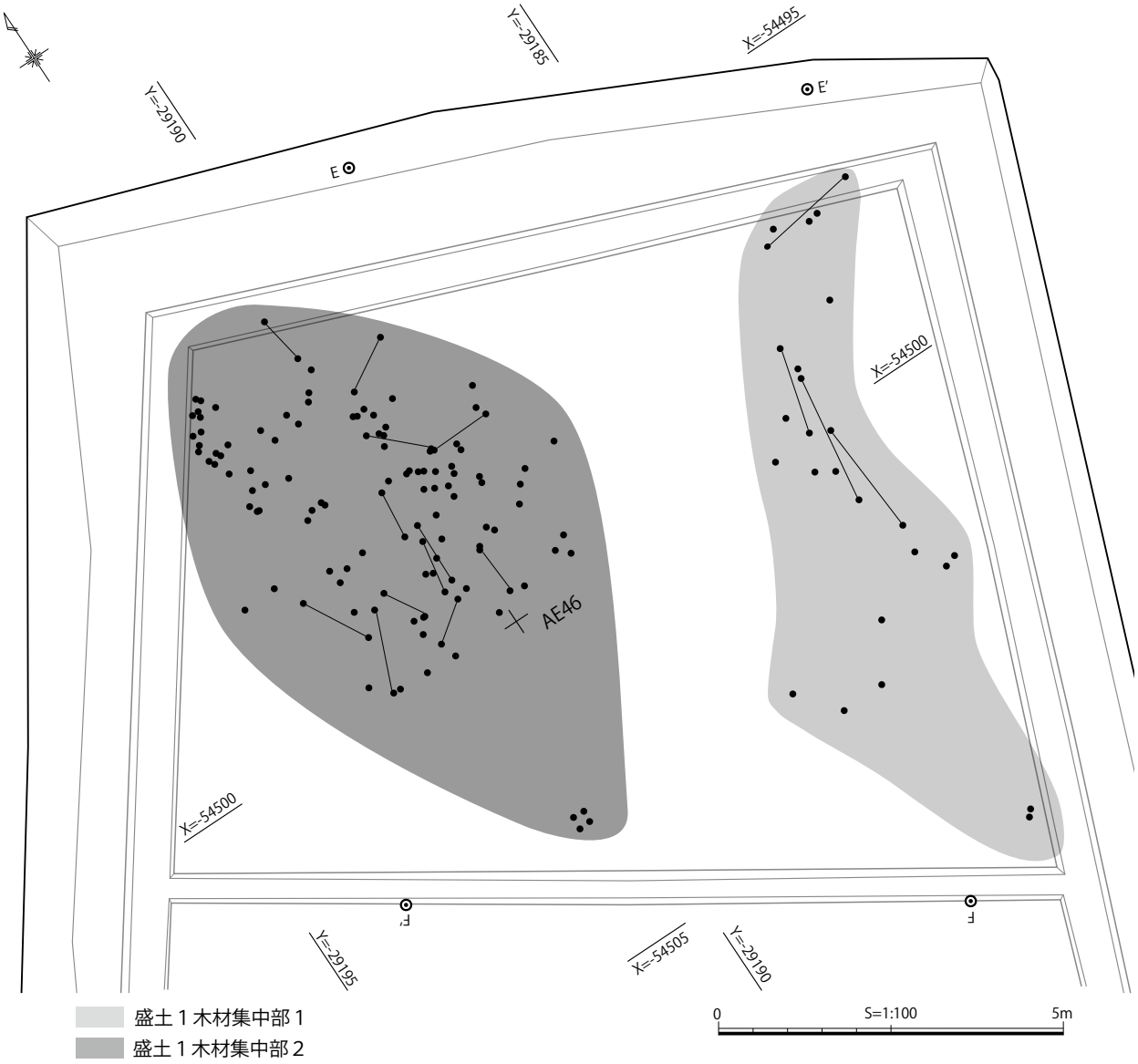
本遺構は条里６との関係から、10世紀前半以前に遡る可能性がある。ただし、他の調査区では対応する条里遺構が確認できないことから明確にしえない。

条里10（第53・56・57図　ＰＬ.15・16－１）

Ｐ３区の南隅付近で条里８と交差する盛土遺構である。方位はＮ－83°－Ｗで、東西方向に延びる。条里７と重複し、本遺構は条里７に被覆され芯のように利用されている。条里７の前身的な盛土遺構の可能性がある。土層断面の観察からは条里８との構築先後関係は判然としないが、ほぼ同時期に構築されたと推定される。

規模は明確に把握できた箇所がないため推定値になるが、上面幅が約1.0 ～ 1.5m、基底部が幅約1.5 ～ 2.0mで、盛土の高さは最大約20cmである。盛土上面の標高は0.8m前後である。

盛土は黒色の粘土質シルトを主体とした土質で、微細な有機物を多く含み、下層由来の黒褐色や灰褐色の粘土が混じる。盛土内に径１～５cm程度の加工木材・自然木が多く含まれる。盛土構造は、幅３～ 10cm程度、長さ１ｍ以上の板材が盛土の延伸方向と向きを合わせるように盛土内



第58図　８区・Ｐ３区盛土１遺物出土状況図

に敷設されている点に特徴がある。さらに、本遺構と条里８の交差点においては、盛土下部に本遺構の延伸方向へ向きを揃えるように板材が敷かれ、その上部では条里８の延伸方向へ向きを揃えたような木材が目立ち、格子状を呈する。盛土量が少ない割に盛土内には大型の板材など木材が密に混和されている。条里８と同じく、盛土内を堅固に補強し、流出を防ぐことを意図したものと推測される。遺物は用途不明の加工木を主として、建築部材、木製祭祀具の馬形など、多量の木製品が出土している。土器は須恵器の小片がわずかに出土している。

本遺構は盛土７との関係から10世紀前半以前に遡る条里遺構である可能性がある。ただし、他の調査区では対応する条里地割は確認されておらず、明確にしえない。

３　盛土遺構

盛土１（第53・54・58図　ＰＬ.13－３）

８区北東半のほぼ全域に広がりが認められる盛土遺構で、さらに南方向にまで広がると推測される。Ｐ３区の南東壁面で確認された盛土２とは同一遺構の可能性がある。

遺構全体の平面形状や規模の把握ができなかったため、調査区内で確認できた部分のみの参考値にはなるが、東西長は盛土上面で約12m、基底部で約13m、南北長は盛土上面、基底部ともに約15m、盛土の高さは最大約60cmである。盛土上面の標高は1.2m前後である。

盛土は黒褐色ないし暗褐色で細礫や砂が混じるシルトを主体とした土質で、拳大以下の礫を含む。部分的に砂がブロック状に含まれ、基盤土の褐灰色シルト質粘土ブロックも混じる。本遺構は当初包含層の認識で掘削を進めたために盛土自体の平面的な検出はできていない。芯材と考えられる木材や木製品が集中する部分を二箇所（木材集中部１・２）検出し、調査区壁面の土層断面観察から、盛土の存在を認識することができた。木材集中部１・２は並列するように位置しており、これらを盛土芯として盛土が構築され、最終的にその盛土間を埋め平坦地を造成した可能性がある。Ｐ３区の６盛土などと同様に、盛土を補強することを目的とし大量の木材が混和されたと考えられる。

遺物は建築部材や加工木、曲物、田下駄、木製祭祀具の人形、舟形など木製品が大量に出土した。土器は須恵器や土師器などが出土した。

本遺構の時期は出土土器から８～10世紀前半に収まると推定される。遺構の時期比定の参考にするため、木材集中部から出土した木材と種実１点ずつ、放射性炭素年代測定を行い、２σ暦年代範囲で534calAD ～ 606calAD（87.4％）、542calAD ～ 636calAD（95.4％）の結果を得た。

調査範囲内での形状からは畦畔とは考えにくく、具体的な性格は明確にしえない。

盛土２（第53図）

Ｐ３区の南東壁断面Ｂ－Ｂ’で確認した。平面的に検出できなかったため、全体の規模や形状は不詳である。断面Ｂ－Ｂ’で上面幅が80cm、基底部幅が1.8m、盛土の高さは最大40cmである。盛土上面の標高は1.0m前後である。既述のように８区盛土１と同一遺構の可能性がある。

盛土は黒褐色の粘土質シルトが主体で、微細有機物が多く含まれる。粗砂・細砂が混じり、下位には径1cm以下の灰褐色粘土ブロックが含まれる。径及び幅５cm以下の加工木や板材も含まれる。特徴的な構造は断面からは確認できていない。

遺物は用途のはっきりしない加工木が疎らに出土した。盛土のほぼ上面から木簡が１点出土している。土器は出土していない。

８区の盛土１の位置と本遺構は重なることから、両遺構は同一の遺構である可能性がある。よって、本遺構の時期も８～10世紀前半に収まると推定される。盛土１と同様に畦畔とは考えにくいが、その具体的な性格は不詳である。

４　土坑

土坑３（第54図）

８区の断面Ｆ－Ｆ’で確認した。平面的に検出できなかったため、全体の規模、平面形は不詳である。規模は幅が3.15m、深さは最大で17cmで、Ｄ－Ｄ’では幅が1.4m、深さは最大22cmを測る。

埋土は褐灰色シルト質粘土ブロックをわずかに含む黒褐色シルト質粘土で、Ｄ－Ｄ’では埋土上層に黒褐色極細粒砂混シルト質粘土と黒褐色シルト質粘土の混土が堆積する。埋土に帰属する遺物は確認できなかった。

遺構の時期は、盛土１とＰ３区及び他調査区との層位関係から古墳時代ないし奈良時代前期に比定できるが、詳細な時期は不詳である。性格も不明である。

第３項　Ｖ層中の遺構（古墳時代前期～後期）

１　概要（第59図）

Ｖ層中では古墳時代の畦畔を５基検出した。いずれもＰ３区で確認されており、溢流堆積土を多量に含む盛土が構築されているのが特徴的である。５基とも小規模な盛土で全体的に遺存状態が悪かった。そのため、畦畔３・４以外の３基は平面検出ができておらず、わずかに基底部を確認できたのみである。盛土を構成する土も似通っており、大きな時期の隔たりはないものと思われるが、盛土の延伸方向や間隔から多少の時期差をもって機能していた可能性も考えられる。北西隣のＰ４区からも類似する盛土遺構が確認されている。

２　畦畔

畦畔３（第60図　ＰＬ.16－２,３）

Ｐ３区の南隅付近で検出したほぼ東西方向に延びる盛土遺構で、方位はＮ－83°－Ｗである。Ｖ層上面構築された５盛土のほぼ直下に位置し、５盛土の前身的な盛土と考えられる。

規模は上面幅が約 30 ～ 50cm、基底部幅が約 1.3 ～ 1.5m、盛土の高さは最大約 15cm である。盛土上面の標高は 0.5m 前後である。

盛土は下層の溢流堆積由来と推測される褐灰色シルト質粘土と灰褐色粘土の混土を主体とし、微細な有機物を含む。盛土の表面には部分的に表土化の痕跡が見られる。盛土内に多量の木材を入れ込むなどの盛土を補強する手立ては確認できなかった。盛土直下の基盤層は凹状を呈しており、盛土の自重が軟弱な基盤層にも及んだためと考えられる。

遺物は用途不明の加工木が複数出土したが、土器の出土はなかった。

Ｐ４区で、同一の遺構検出面から古墳時代前期の畦畔が検出されて、検出層位も考慮すると、本遺構の時期は古墳時代前期と推定される。盛土中から出土した木材について放射性炭素年代測定を行ったところ、２σ暦年代範囲で207－106calBC（85.2%）の値を示し、齟齬がみられるが、分析資料は本遺構構築時に下層から混入した資料である可能性が高い。規模や形状、周囲の遺構検出状況から判断して、水田畦畔としての性格が考えられる。

畦畔４（第61図）

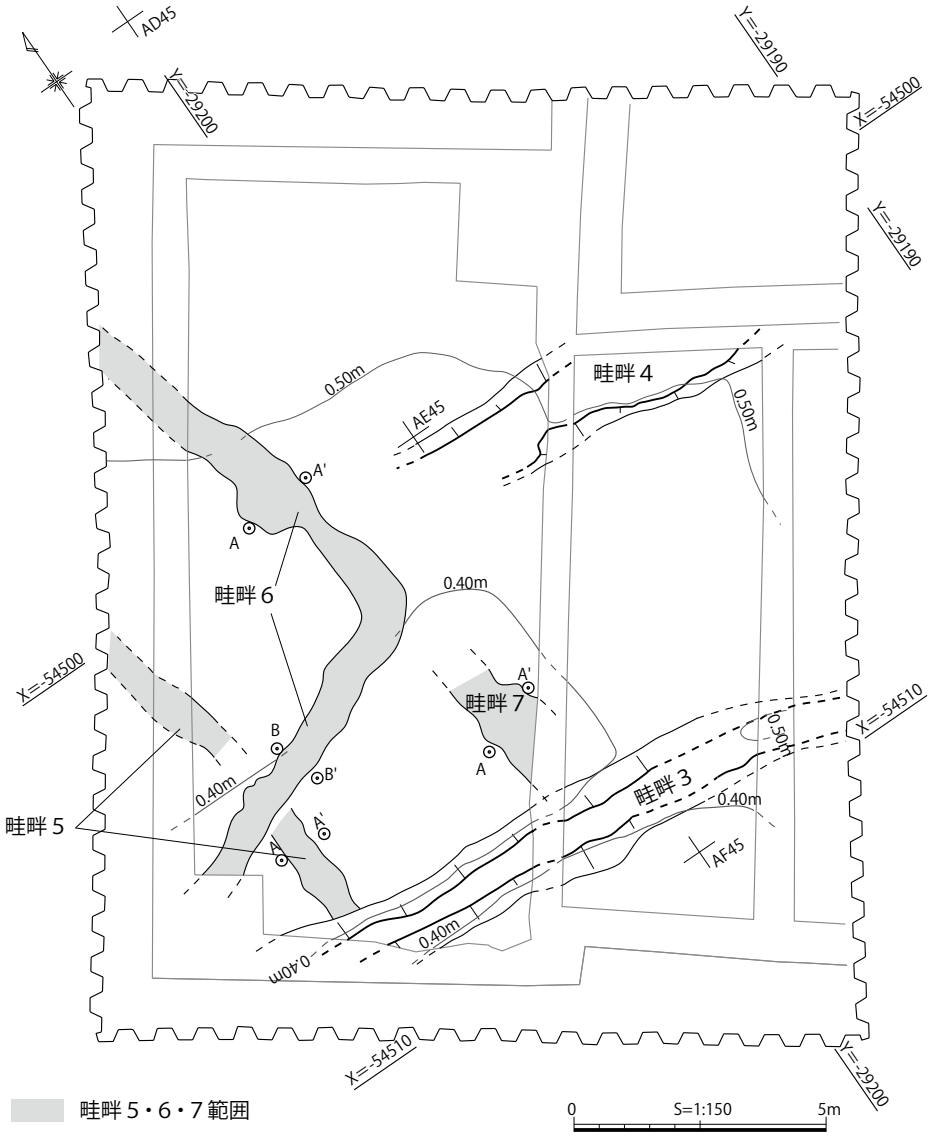
Ｐ３区ＡＥ45グリッドの北端部で、調査区中央付近から東方にかけて検出した。方位はＮ－90°－Ｗである。西方への平面的な検出はできなかったが、調査区の北西壁断面で本遺構と推定される断面を確認した。遺存状態は悪く、構築時の盛土形状をとどめていない。

規模は上面幅が約80 ～ 110cm、基底部が幅約1.6 ～ 1.8m、盛土の高さは最大約10cmで、ある。盛土上面の標高は0.5m前後である。

盛土は下層の溢流堆積由来と推測される褐灰色シルト質粘土と灰褐色粘土の混土を主体とし、微細な有機物を含む。盛土上部が削平によって失われており、残存部分からは特徴的な構造などは窺えなかった。

遺物は自然木が多少混じる程度で、木器や土器等の出土はなかった。

遺構の時期は、畦畔３と同時期と推定されることから古墳時代前期と考えられる。遺構の規模や形状、周囲の遺構検出状況から判断して、水田畦畔としての性格が考えられる。



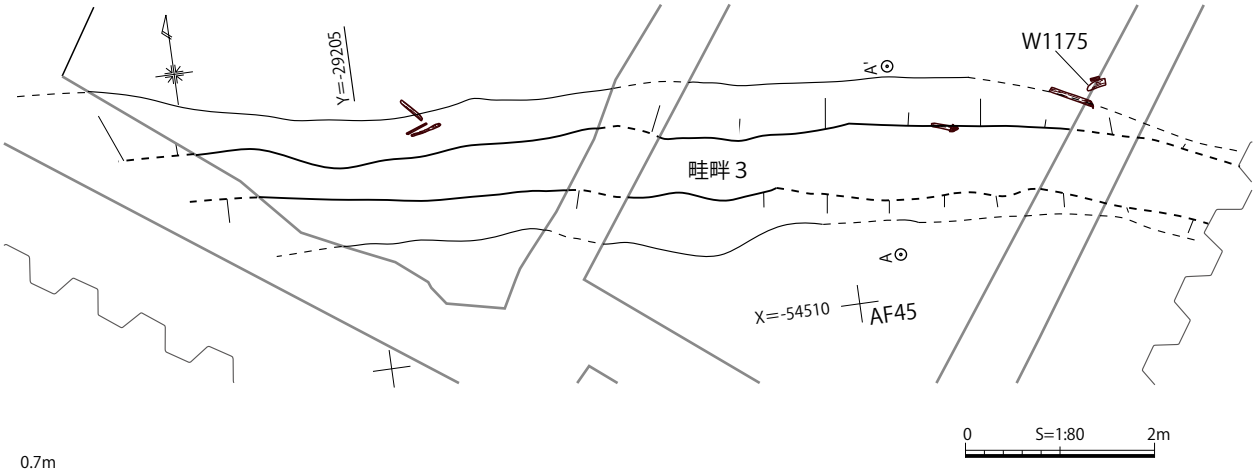
第59図　８区・Ｐ３区Ⅴ層遺構分布図

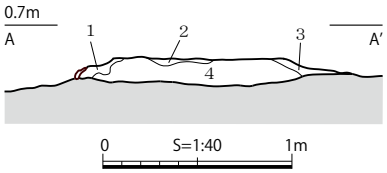
畦畔５（第59・62図）

Ｐ３区ＡＥ44グリッド、調査区西隅付近で検出した盛土遺構である。平面形は概ね南北方向に直伸する形状で、方位はＮ－７°－Ｗである。遺存状態は悪く、盛土基底部をわずかに確認するにとどまった。平面的に明瞭な確認はできなかったが、畦畔６と交差するものと推測され、畦畔３に接続していた可能性も考えられる。

規模は、盛土上部の確認ができなかったことから参考値になるが、基底部幅は約0.5 ～ 0.6m、基底部の標高は0.4m前後である。盛土は、下層の溢流堆積由来と推測される褐灰色シルト質粘土と灰褐色粘土の混土を主体とし微細な有機物を含む。盛土部分の検出がほとんどできず構造の特徴は把握できなかったが、畦畔３を参考にすると粗朶構造や芯材を入れ込むなどの工夫は施されていないと考えられる。盛土の自重が軟弱な基盤層にも及ぶためか、全体的に盛土直下の基盤層は撓みを生じている。自然木片がわずかに混じるが、遺物は確認されていない。

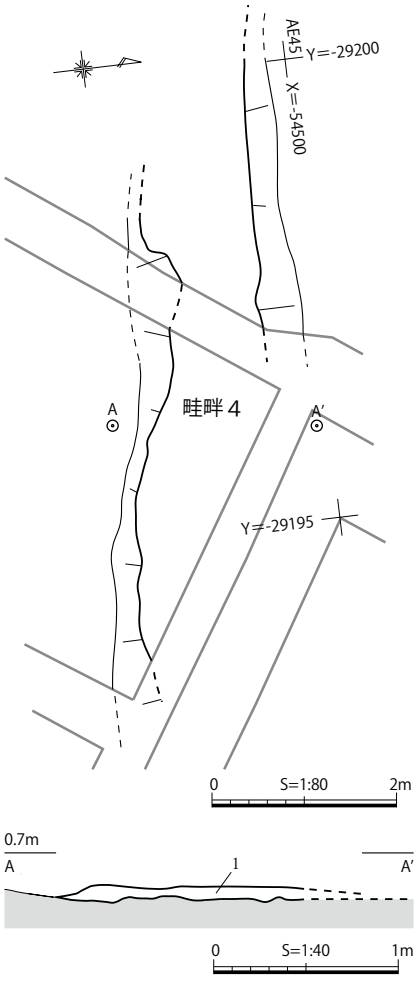
遺構の時期は、畦畔３と同時期と推定されることから、古墳時代前期と考えられる。　遺構の規模や形状、周囲の遺構検出状況から判断して、水田畦畔としての性格が考えられる。





1　黒褐色粘土質シルト(7.5YR3/1)。粘性やや強。径5㎜以下炭粒少混。植物遺体少混。
2　黒褐色粘土質シルト(7.5YR3/1)。粘性やや強。締まりやや強。径5㎜以下炭粒少混。植物遺体少混。
3　黒褐色粘土質シルト(7.5YR3/1)。粘性やや強。径5㎜以下炭粒少混。植物遺体少混。
4　褐灰色シルト質粘土(7.5YR4/1)と灰褐色粘土(5YR4/2)の混土。粘性強。締まりやや強。径5㎜以下炭粒少混。植物遺体少混。黒褐色腐植土少混。

第60図　８区・Ｐ３区畦畔３



褐灰色シルト質粘土(7.5YR4/1)と灰褐色粘土(7.5YR4/2)の混土。
粘性強。締まりやや強。径5㎜以下炭粒少混。植物遺体少混。
黒褐色腐植土多混。

第61図　８区・Ｐ３区畦畔４

畦畔６（第59・62図）

Ｐ３区ＡＤ・ＡＥ44グリッド、中央付近から北西壁にかけての範囲で検出した盛土遺構である。平面形は南北方向に延伸する盛土が途中で東西方向に屈曲し、くの字が反転した形状を呈する。方位は南北方向部分がＮ－11°－Ｗ、東西方向部分がＮ－66°－Ｗである。遺存状態は悪く、盛土基底部をわずかに確認するにとどまった。畦畔５で既述のように、畦畔６と交差するものと推測される。

盛土上部の確認ができなかったことから規模は参考値になるが、基底部幅は約0.5 ～ 1.5m、基底部の標高は0.4m前後である。

盛土は下層の溢流堆積由来と推測される褐灰色シルト質粘土と灰褐色粘土の混土を主体とし、微細な有機物を含む。盛土部分の検出がほとんどできず構造の特徴は把握できなかったが、畦畔３を参考にすると粗朶構造や芯材を入れ込むなどの工夫は施されていないと考えられる。盛土の自重が軟弱な基盤層にも及ぶためか、全体的に盛土直下の基盤層は撓みが生じている。

自然木片がわずかに混じるが、遺物は確認されていない。

遺構の時期は、畦畔３と同時期と推定されることから古墳時代前期と考えられる。遺構の規模や形状、周囲の遺構検出状況から判断して、水田畦畔としての性格が考えられる。

畦畔７（第59・62図）

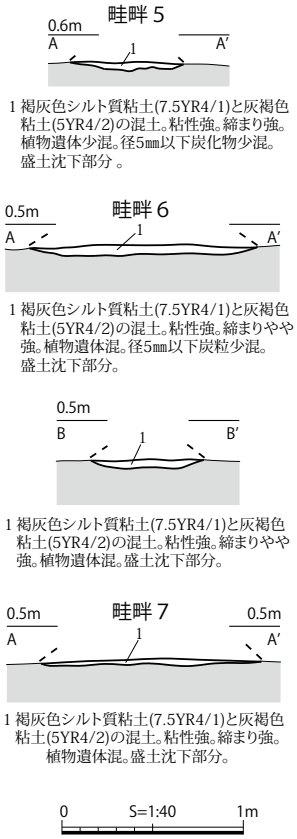
Ｐ３区ＡＥ44グリッド、調査区中央部やや南寄り付近で検出した盛土遺構である。検出範囲は狭いが、平面形は概ね南北方向に直伸する形状と推測される。方位はＮ－11°－Ｗである。遺存状態が悪く、盛土基底部をわずかに確認するにとどまった。平面的に明瞭な確認はできなかったが、本来は畦畔３、畦畔６と接続していた可能性も考えられる。

盛土上部の確認ができなかったことから規模は参考値になるが、基底部幅は約0.8 ～ 1.2m、基底部の標高は0.3m前後である。

盛土は、下層の溢流堆積由来と推測される褐灰色シルト質粘土と灰褐色粘土の混土を主体とし微細な有機物を含む。盛土部分の検出がほとんどできず構造の特徴は把握できなかったが、畦畔３を参考にすると粗朶構造や芯材を入れ込むなどの工夫は成されていないと考えられる。盛土の自重が軟弱な基盤層にも及ぶためか、全体的に盛土直下の基盤層は撓みが生じている。

自然木片がわずかに混じるが、遺物は確認されていない。

遺構の時期は、畦畔３と同時期と推定されることから古墳時代前期と考えられる。遺構の規模や形状、周囲の遺構検出状況から判断して、水田畦畔としての性格が考えられる。



第62図　８区・Ｐ３区畦畔５～７土層断面図

第４項　Ⅵ層上面の遺構（弥生時代後期～古墳時代前期）

１　概要（第63図）

Ⅵ層上面では８区から遺構は検出されず、Ｐ３区で杭列を１基のみ検出した。本遺構周辺から遺物は出土しておらず、土器は検出面及びⅥ層中からも出土していない。遺構は希薄であり、杭列の性格も明確にしえない。

２　杭列

杭列４（第63図）

Ｐ３区ＡＥ44・45グリッド、調査区南西部で検出した。６本の杭から構成されている。東から５本は多少のずれがありつつも直線的で、西端の１本のみが北向きに屈曲した配列である。

杭列の全長は約6.8m、杭の打設間隔は約0.8 ～ 2.4mとばらつきがある。杭の長さは、残存値で約11 ～ 30cmで、検出時にすべての杭が既に検出面付近より上部は欠損しており、後世に排除されたと推測される。杭間距離が長い部分は、元々は杭が存在していた可能性がある。

既述のように、検出面及びⅥ層中から土器の出土はないが、杭列から抽出した１本の杭について放射性炭素年代測定を行ったところ、２σ暦年代範囲で105calBC ～ 21calAD（95.4％）値を得た。他の調査区の層序とも比較検討すると、帰属時期は弥生時代後期から古墳時代前期と推定される。杭列は西端の１本を除いて概ね直線的ではあるものの、千鳥状に打設されているようにも見える。板材を固定した土留め的な構造物であった可能性はあるが、杭のみの検出のため根拠に乏しく明確にしえない。

第５項　Ⅶ層上面の遺構（弥生時代中期）

１　概要（第64図）

Ⅶ層上面では８区から遺構は検出されず、Ｐ３区で木造構造物１基、河道１基を検出した。両遺構は流路からの引水や流路への排水に関連する構造物の可能性を推測するが、その関係性ははっきりしない。遺物の出土は加工木・板材が多少ある程度で、Ⅶ層を含めて土器の出土はない。

２　木造構造物

木造構造物２（第65図　ＰＬ.17－１）

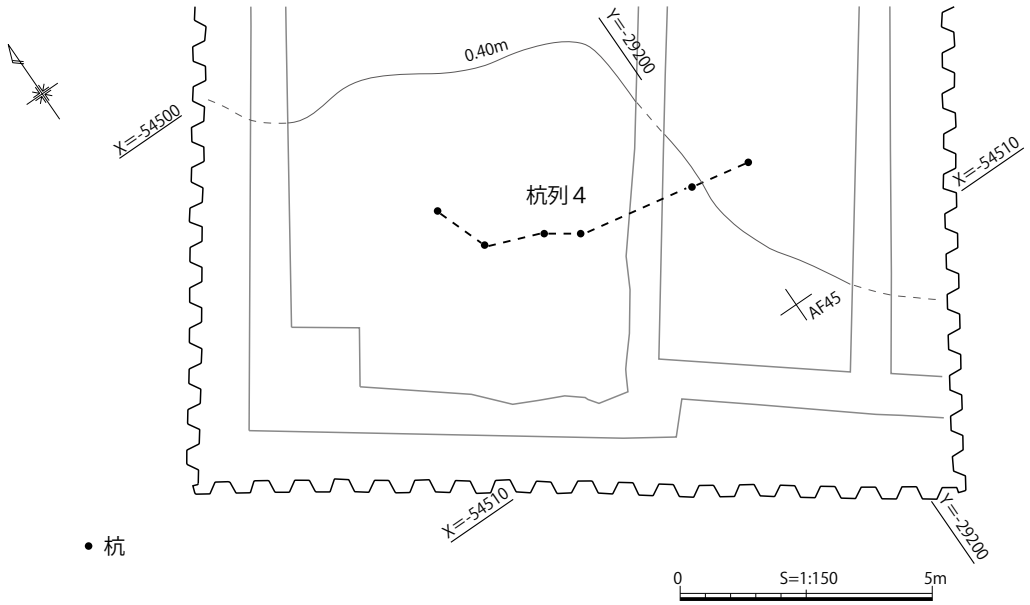
Ｐ３区ＡＥ44グリッド、調査区西隅付近で検出した。多少の間隔をとって矢板状に地中へ差し込まれた２枚の板材と、その間を塞ぐような横向きに付随する板材によって構成されている。木の小片もいくらか付着しているが、破損した板材の一部だと思われる。差し込まれた板材はともに板面は東西方向に向き、上端部が西方にやや傾いている。

規模は地上部分の全体幅は約45 ～ 60cm、地中部分を含めると最大幅は約65cmで、上端から地面までの高さは約40cmである。板材の大きさは、矢板状の板材が全長約60 ～ 65cm、幅約12 ～ 16cmである。付随する板材が全長約25cm、幅約10cmである。矢板状の板のうち一方は元々の位置をほぼ維持しているが、もう一方は本来の位置より傾いていると思われる。付随する板材についても原位置を留めているとは考えにくいが、構築時の状態は定かではない。

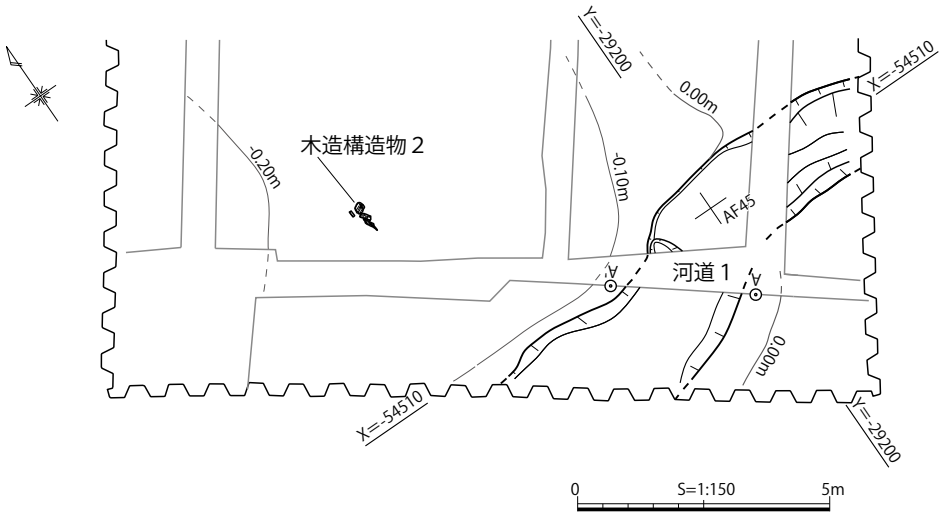
本遺構との関連が想定される遺物は出土しておらず、Ⅶ層中を含めて土器の出土もない。

下層のⅧ層試料での放射性炭素年代測定で弥生時代前期の結果が得られており、他調査区の層序とも比較して検討すると、帰属時期は弥生時代中期と推定される。

本遺構の約４m南に河道１があり、本遺構の検出状況から水田等の灌漑に伴う構築物の可能性や、土留めなどの機能を果たしていた可能性もあるが、根拠に乏しく詳細は不明である。



第63図　８区・Ｐ３区Ⅵ層上面遺構分布図



第64図　８区・Ｐ３区Ⅷ層上面遺構分布図

３　河道

河道１（第66図）

Ｐ３区ＡＥ・ＡＦ44・45グリッド、調査区南隅で検出した自然河道である。検出長が短く方向は正確に把握できないが、若干蛇行しながら東から西へと流れる。東西ともに調査区外にも延びている。

規模は検出長が約８m、幅が約 1.8 ～ 2.3m で、深さは最大約 55cm、検出面の標高約 － 0.02 ～ 0.07m、底面比高差約 16cm である。

埋土は最上層が褐灰色の粘土質シルト主体、上位層は褐灰色の粗砂主体、中位層はにぶい黄褐色の礫粒･粗砂主体、下位層は褐灰色の細砂主体の堆積で、所々に黒褐色砂質シルトの堆積を挟んでいる。水量の変化はありつつも継続的な流水状態にあったことが窺える。

埋土中への自然木の混入以外に遺物の出土はなかった。

遺構の時期は、下層のⅧ層試料での放射性炭素年代測定で弥生時代前期の結果が得られており、他調査区の層序とも比較検討すると、弥生時代中期と推定される。人為的に改変された痕跡はなく、自然河道と考えられる。

第６項　Ⅷ層の遺構（弥生時代前期）

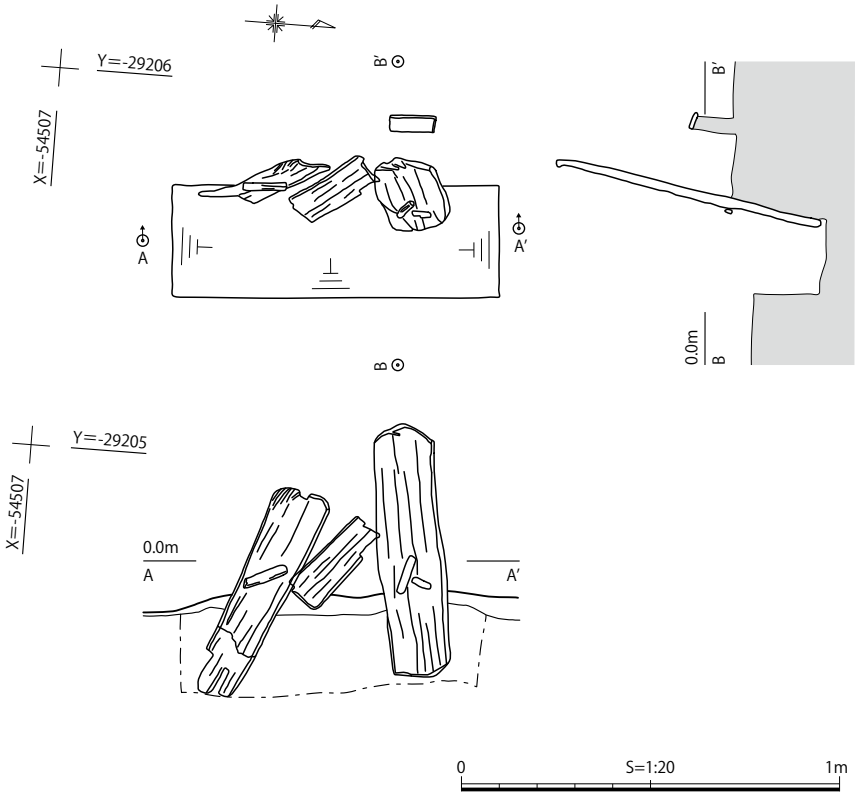
１　概要（第67図）

Ⅷ層では８区から遺構は検出されず、Ｐ３区のⅧ－２層上面で盛土遺構を１基、Ⅷ－３層上面で自然河道を１基検出した。検出面が異なることから両遺構には時期差がある。盛土３は、枝を落とした程度の伐採木を丸ごと盛土の芯材に使用して盛土が構築されており、他の調査区には例がない。河道２は浅い自然河道で人の足跡の可能性がある痕跡が確認されている。遺物は前記の芯材以外に数点の加工木が出土している。土器は出土していない。

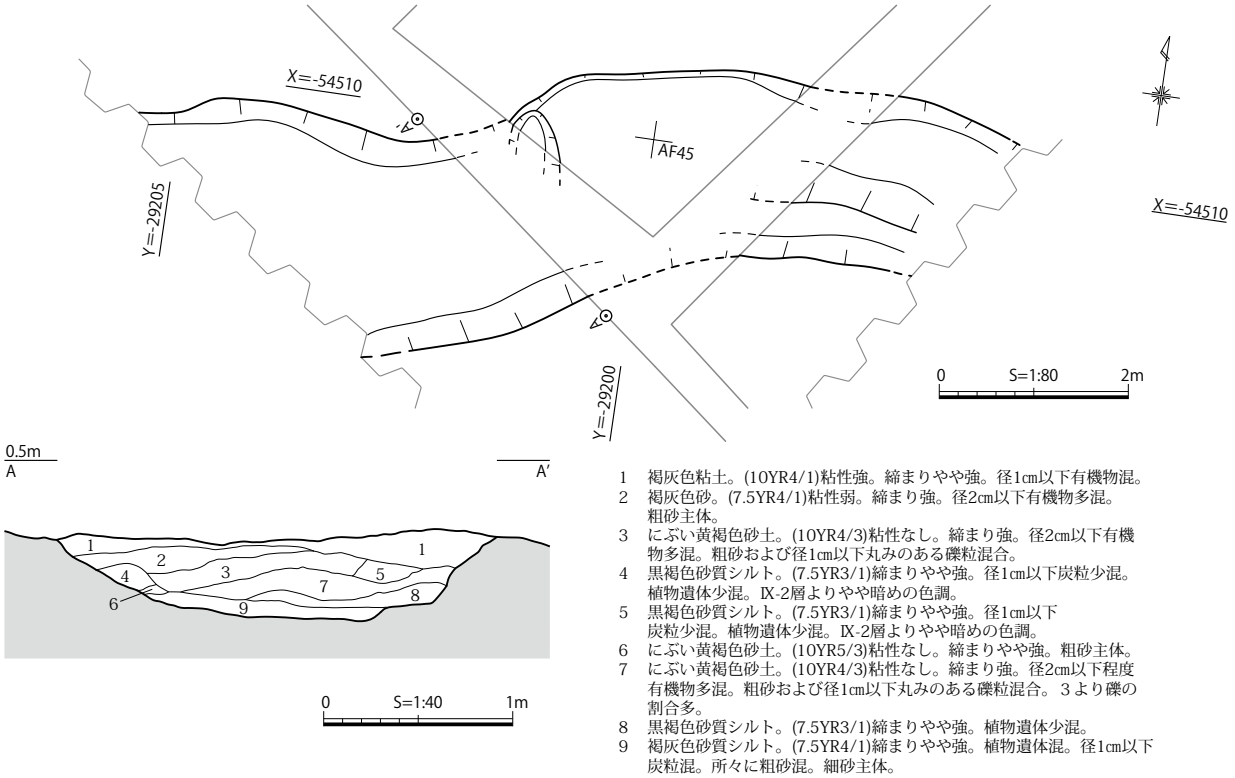
２　盛土遺構

盛土３（第67・68図　ＰＬ.17－２）

Ｐ３区ＡＤ44・45、ＡＥ45グリッド、調査区北隅付近から南東壁中程付近にかけてほぼ直線的に位置する。平面的な検出は調査区壁面近くの一部のみだが、調査区北西壁と南東壁の断面でも確認して



第65図　８区・Ｐ３区木造構造物２



1　褐灰色粘土。(10YR4/1)粘性強。締まりやや強。径1㎝以下有機物混。
2　褐灰色砂。(7.5YR4/1)粘性弱。締まり強。径2㎝以下有機物多混。粗砂主体。
3　にぶい黄褐色砂土。(10YR4/3)粘性なし。締まり強。径2㎝以下有機物多混。粗砂および径1㎝以下丸みのある礫粒混合。
4　黒褐色砂質シルト。(7.5YR3/1)締まりやや強。径1㎝以下炭粒少混。植物遺体少混。Ⅸ-2層よりやや暗めの色調。
5　黒褐色砂質シルト。(7.5YR3/1)締まりやや強。径1㎝以下炭粒少混。植物遺体少混。Ⅸ-2層よりやや暗めの色調。
6　にぶい黄褐色砂土。(10YR5/3)粘性なし。締まりやや強。粗砂主体。
7　にぶい黄褐色砂土。(10YR4/3)粘性なし。締まり強。径2㎝以下程度有機物多混。粗砂および径1㎝以下丸みのある礫粒混合。３より礫の割合多。
8　黒褐色砂質シルト。(7.5YR3/1)締まりやや強。植物遺体少混。
9　褐灰色砂質シルト。(7.5YR4/1)締まりやや強。植物遺体混。径1㎝以下炭粒混。所々に粗砂混。細砂主体。

第66図　８区・Ｐ３区河道１

おり、調査区外まで延びる。方位はＮ－32°－Ｗである。

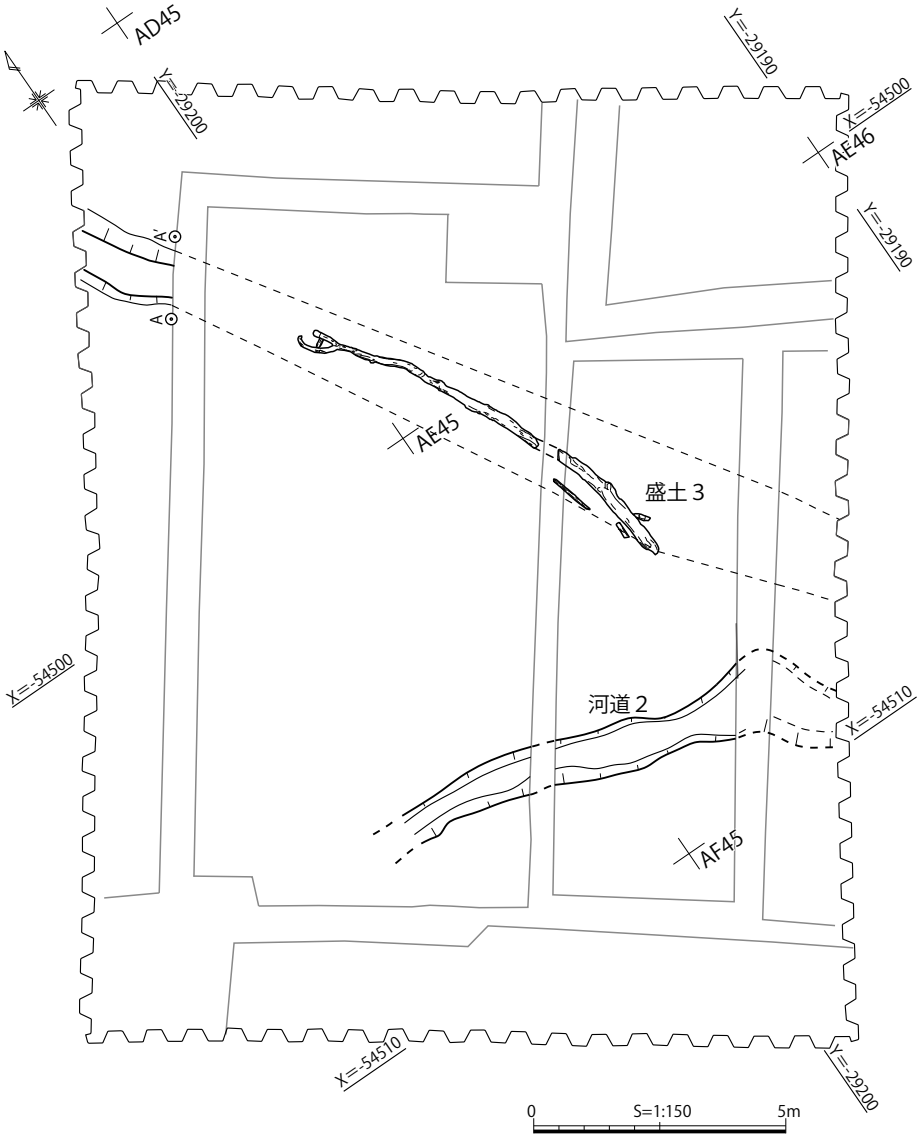
検出範囲の規模は上面幅が約60 ～ 70cm、基底部幅が約1.2 ～ 1.4m、盛土の高さは最大で約20cmである。盛土上面の標高は－0.1m前後である。

盛土は粗砂や細砂が混じる黒褐色粘土質シルトが主体で、微細有機物が多く含まれる。盛土の中に

は枝を落とす程度に粗く加工した伐採木が入れ込まれている。盛土の芯として配置し、その上に土を盛り上げて構築したと考えられる。盛土の構築位置の目印にするとともに、軟弱な土質を補完し盛土の強度を上げる狙いがあったと考えられる。

遺物は芯に使用された伐採木以外に加工木片を数点確認した程度で、土器の出土はなかった。

盛土中から出土した盛土芯材について放射性炭素年代測定を行ったところ、２σ暦年代範囲で591－412calBC(54.2%)の値を得た。下層のⅨ層上面で検出された盛土遺構から出土した試料で行った放射性炭素年代測定は縄文時代晩期の結果が得られており、他調査区の層序とも比較検討すると、本遺構の時期は弥生時代前期と推定される。境界や通路などの可能性が考えられるが定かではない。



第67図　８区・Ｐ３区Ⅷ層遺構分布図

３　河道

河道２（第69図）

Ｐ３区ＡＥ44・45グリッド、調査区の南寄り部分で検出した浅い自然河道である。概ね東西方向に延び、方位はＮ－76°－Ｗである。西方は途中で確認できなくなり、調査区外まで延びているかはわからない。

規模は、検出長が約７m、幅が約0.6cm ～ 1.1mで、深さは最大で約６cm、検出面の標高は約－0.45 ～ 0.26m、底面比高差約18cmである。

埋土は、にぶい黄褐色粗砂が主体で有機物を少し含む。埋土中には人の足跡痕跡の可能性がある範囲を確認した。流水状態にあったことは窺えるが、規模から考えてその期間は比較的短かったものと思われる。

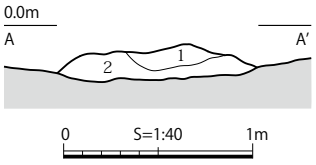
遺物は埋土中から用途不明の加工木が数点出土しているが、土器は出土していない。

遺構の時期は、上位層の盛土３と下位層の盛土４との層位関係から、弥生時代前期と推定される。本遺構は主流から派生した自然河道と考えられる。

第７項　Ⅸ層の遺構（縄文時代後期～晩期）

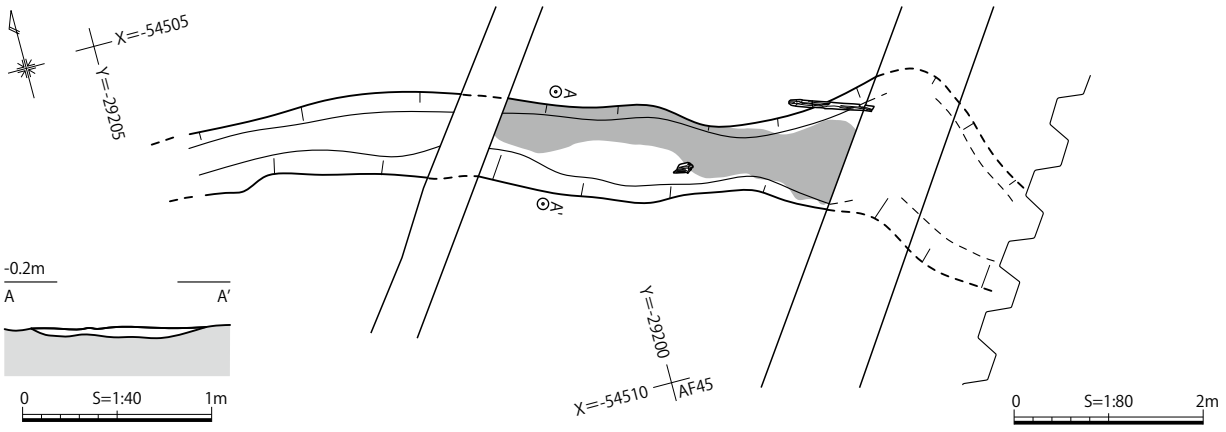
１　概要（第70・71図）

Ⅸ層上面では８区からの遺構検出はなかったが、Ｐ３区からは盛土遺構を１基確認した。Ⅸ層中では８区から杭列１基、集石１基、Ｐ３区から杭群３基を確認した。８区の杭列５は３本の杭が直線的に並ぶ。集石３は、疎らに配置された20個前後の人頭大までの大きさの礫からなる。Ｐ３区の杭群１は密集した杭と横たえた杭を組み合わせた構造物のようにも見える。杭群２は遺存状態がやや悪い。杭群３は本遺跡ではやや特異な杭群で、一定の範囲内におびただしい数の細い杭が密集しており、全調査区の中でこの一群しか確認されていない。遺物は、盛土４底部から弦がない以外はほぼ完形の弓１点と加工木・板材が数点出土しており、土器は縄文時代晩期の深鉢が出土している。



1　黒褐色粘土質シルト(7.5YR3/2)粘性やや強。締まりやや強。植物遺体多混。径1cm以下有機物混。径1cm以下炭粒混。粗砂・細砂混。
2　黒褐色砂質シルト(10YR3/2)粘性やや弱。締まりやや強。植物遺体多混。径1cm以下有機物多混。径1cm以下炭粒混。粗砂・細砂多混。

第68図　８区・Ｐ３区
盛土３土層断面図



褐灰色砂壌土(10YR4/1)粘性弱。締まりやや弱。にぶい黄褐色粗砂主体。動物または人の足跡らしき痕跡あり。径5cm以下有機物少混。

足跡範囲

第69図　８区・Ｐ３区河道２

２　盛土遺構

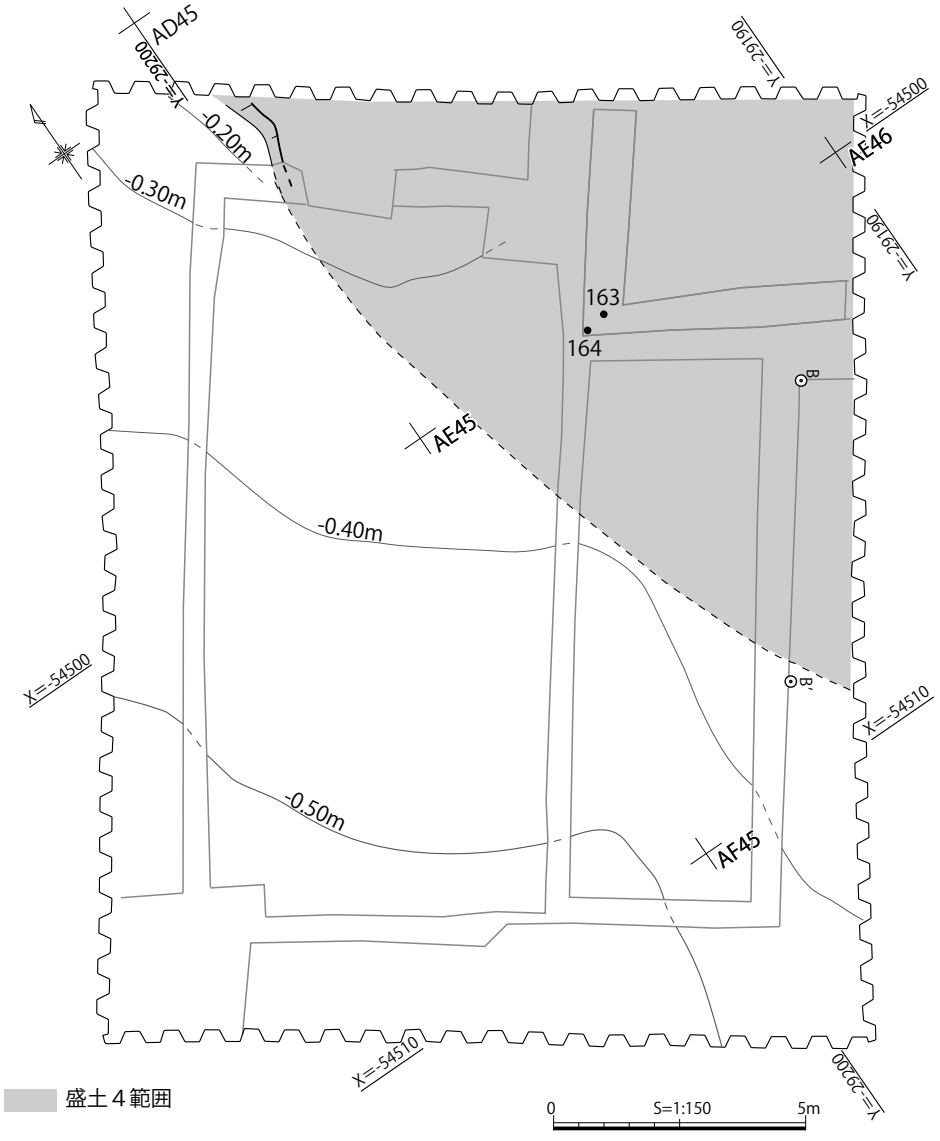
盛土４（第70・72図）

Ｐ３区ＡＤ・ＡＥ45グリッド、調査区中央付近から東方向にかけて広範囲に盛土された造成地である。平面的な検出は調査区北東壁際と南東壁付近の一部に限られるが、調査区北東壁・南東壁の断面と併せて確認できた。Ｐ３区でしか確認されていないが、８区にも広がっていた可能性がある。

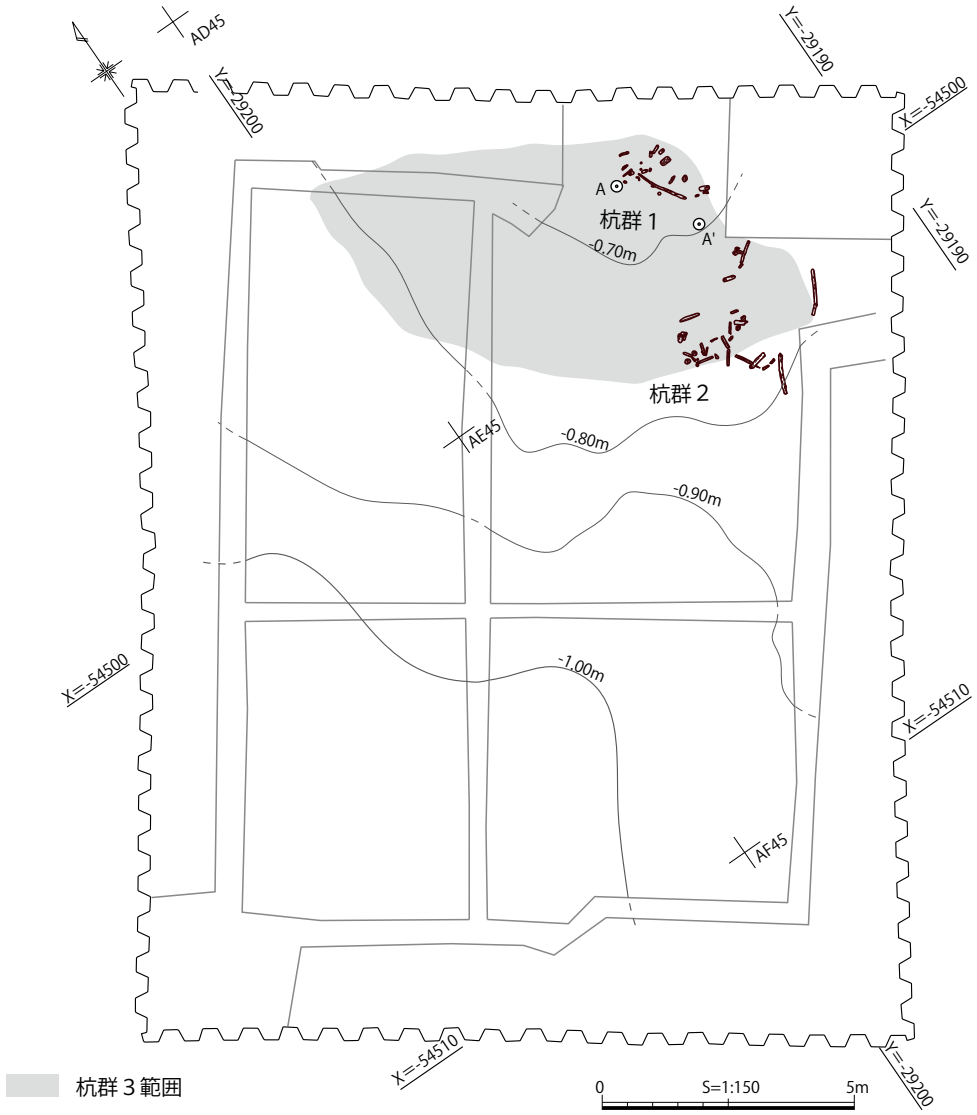
全体の平面形状、規模は不詳のためＰ３区範囲内だけの参考値になるが、東西長は盛土上面で約８m、基底部推定で約9.5m、南北長は盛土上面、基底部ともに推定でそれぞれ約15m、約17mである。盛土の高さは最大約35cmである。盛土上面の標高は－0.1m前後を測る。

盛土は黒褐色で、細礫や砂の割合が多く、粘土及びシルトの混じる土質をしており、微細有機物を含んで締まりが強い。盛土の縁端に近い部分は、粗砂を多く含むが、粘土及びシルトの割合も多い。

遺物は、漆塗りの弓が１点と数点の加工木や板材などの木製品と、縄文時代晩期の深鉢や土器片が出土している。弓は調査区北東壁際の盛土辺縁部底面付近から、板材の上に載るような状態で出土した。すぐ側に長さ40cm程度で細い植物の蔓も出土しているが、弓の弦として使用されたものかどうかは定かでない。



第70図　８区・Ｐ３区Ⅸ層上面遺構分布図



第71図　８区・Ｐ３区Ⅸ層遺構分布図

遺構の時期は、出土土器から縄文時代晩期と推定される。盛土中から出土した木材について放射性炭素年代測定を行ったところ、２σ暦年代範囲で791－741calBC(34.1％)、687－664calBC(14.6％)、646－549calBC(46.7％)の結果を得ており、齟齬はない。遺構は部分的な確認にとどまっており、性格を特定するのは難しいが、ある程度の広がりが考えられる平地が造成されていることから、居住や祭祀等に関連する空間であった可能性もある。

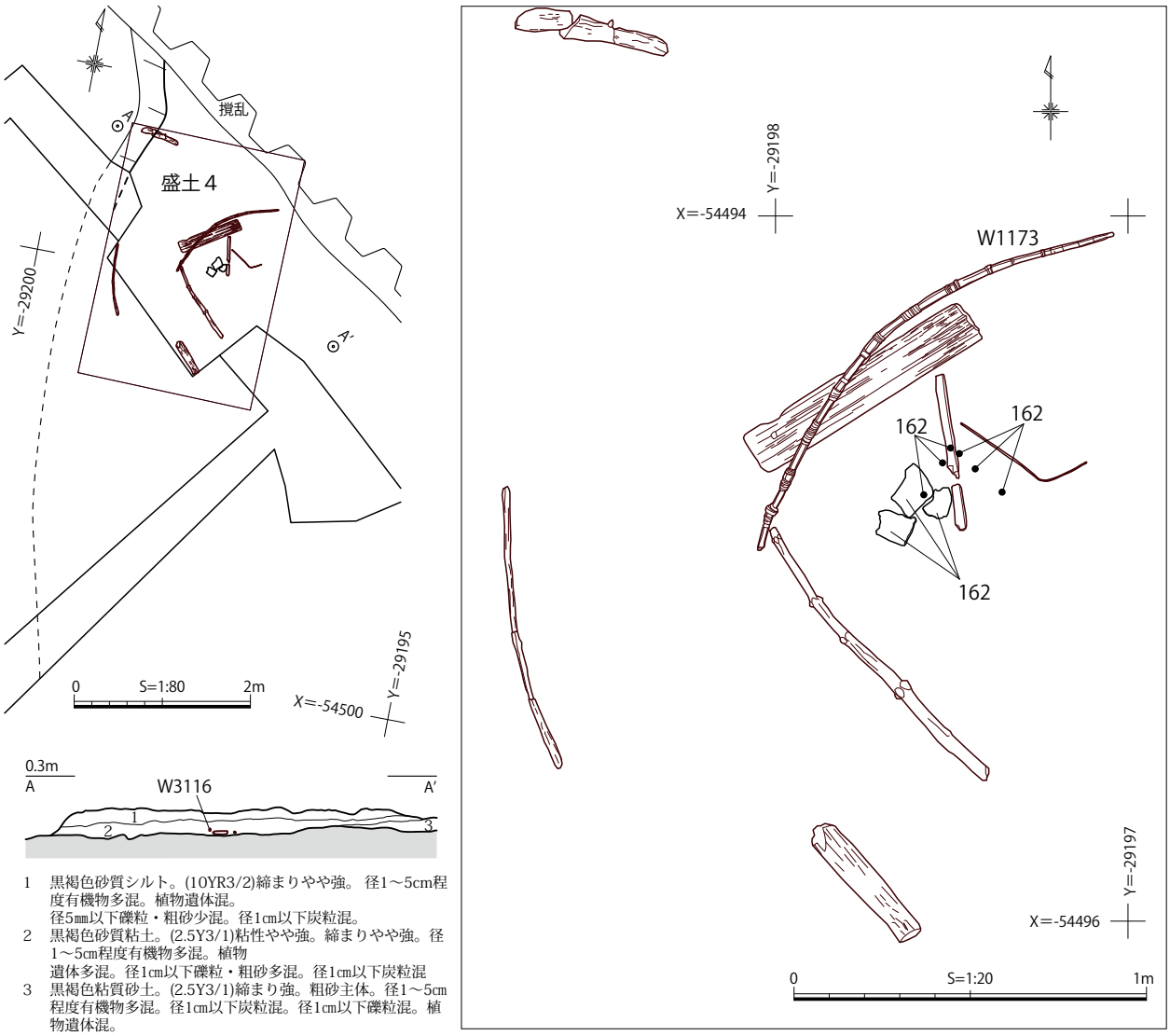
３　集石

集石３

８区のＡＤ45・46、ＡＥ45グリッド、調査区内北方のⅨ層相当35層(貝層)の上面ないし層中で、20個前後の人頭大までの礫を検出した。

確認できた礫の範囲は、南北約４m、東西約3.5mの大きさである。調査区際の排水溝掘削中にも礫が出土していることから、本来の範囲は更に広いことが推測される。

大ぶりな礫には扁平なものが多く、礫のいくつかは火を受けて煤が付着していた。礫の出土状況から、礫は人為的に配置されたものと考えられる。礫の出土位置に多少の高低差が生じているが、低湿



第72図　８区・Ｐ３区盛土４

地における足場として利用された可能性が考えられる。

遺物は遺構検出面で一部が炭化した長さ約80cmの角材が出土した。土器は出土していない。

本遺構の基盤層から出土した種実４点について放射性炭素年代測定を行ったところ、２σ暦年代範囲で最古の値が1887－1743calBC(94.4％)、最新の値が1442－1372calBC(62.3％)という値を示した。やや年代の開きが大きいが、本遺構の時期は縄文時代後期前葉から中葉と推定される。

本遺構は足場としての性格が考えられ、漁撈など水辺における生業活動に関わる遺構と考えられる。

４　杭列

杭列５

８区のＡＤ45グリッドでほぼ一列に並ぶ杭３本を検出した。排水溝の掘削時にⅨ層相当層中の35層（貝層）よりも上層で１本、貝層上面の検出時にも１本を検出していたが、その後、調査区壁面が一部崩落した時にもう１本出土した。この３本の杭は、南東－北西方向に直線的に並ぶことから一連の杭列と判断した。Ｐ３区で検出された杭群１とは位置的に極めて近く、検出層位もほぼ同じである。

杭の打設間隔は約60 ～ 70cmである。杭の頂部には高低があり、２本が35層(貝層)よりも上位層中、他の１本が35層(貝層)のほぼ上面にある。杭列の位置より北西側は調査区外側に至るため、全体の規模は不詳である。

３本の杭のうち、１本の放射性炭素年代測定を行ったところ、２σ暦年代範囲で1984－1890calBC（79.7％）の結果を得た。35層（貝層）の測定値と遺構検出状況も踏まえると、本遺構の時期は縄文時代後期前葉から中葉と推定される。漁撈等の活動に関連するものと推測するが、その用途や性格は判然としない。

５　杭群

杭群１（第73図　ＰＬ.17－３）

Ｐ３区ＡＤ45グリッド、調査区東隅付近で検出した10数本の杭の一群である。杭の頂部を検出した層位はⅨ－３～Ⅸ－６（貝層）上面である。８区の杭列５が至近する位置関係にあり、関連する可能性が高い。

杭の範囲は半径１m程度の中に密集する。掘削停止面より上方に露出した杭は掘削停止面よりもさらに下方まで刺さっていたが、安全掘削深度の限界で掘削を停止したため、杭の長さの把握はできなかった。杭に使用されている木材は原木の枝を落とした丸太材で、ほとんどが径５～８cm程度である。木材は、杭の役割を担ったものや、杭の間に意図的に横たえられたものがあると推測され、簡易な構造物の形態を有する部分が確認できる。

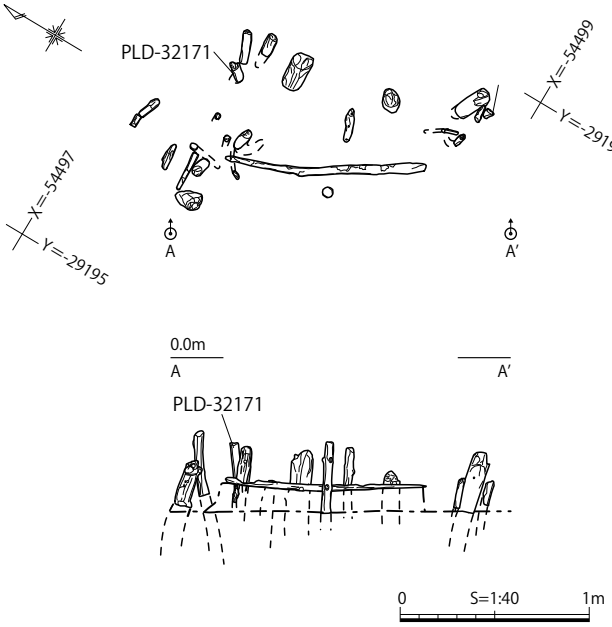
杭以外の木製品や土器などの遺物は出土していない。

本遺構から抽出した１本の杭について放射性炭素年代測定を行ったところ、２σ暦年代範囲で1965－1876calBC（89.2％）の値を得た。８区の杭列５、35層（貝層）の測定値及び本遺構の検出状況も踏まえると、本遺構の時期は縄文時代後期前葉から中葉と推定される。漁撈等の活動に関連するものと推測するが、その用途や性格は判然としない。

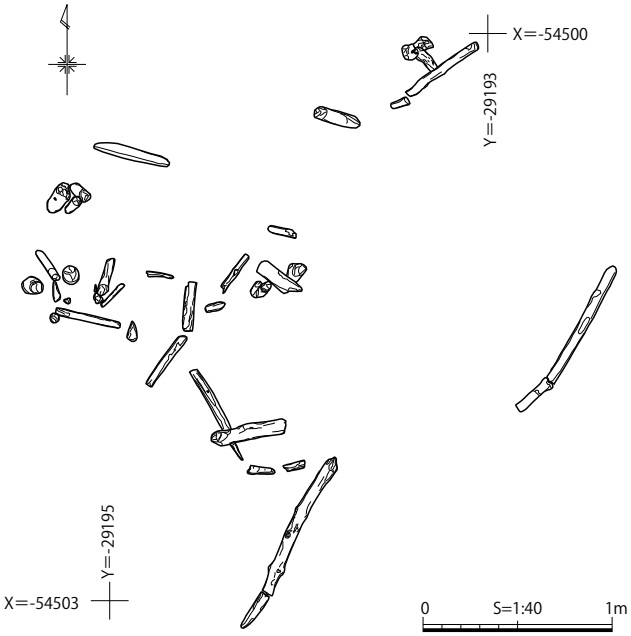
杭群２（第74図）

Ｐ３区ＡＥ 45 グリッド、調査区東隅付近で検出した 20 数本の杭の一群である。杭の頂部を検出した層位はⅨ－３～Ⅸ－６(貝層) 上面である。杭群１と検出層位が同じで、１m 弱の間隔を置いて隣接することから、本遺構と杭群１及び８区の杭列５は一連の遺構の可能性がある。

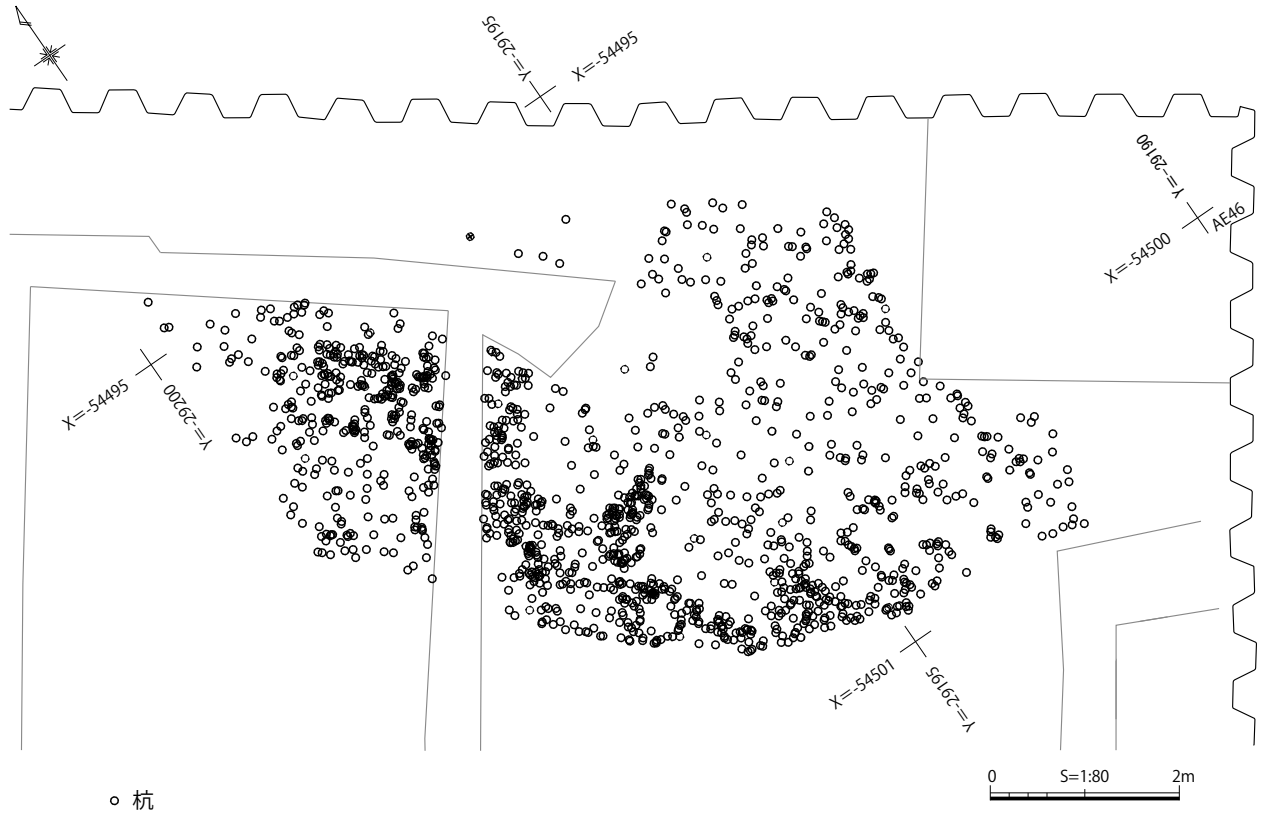
杭の範囲は南北の幅約 2.5m、東西の幅約 3.5m の中に収まる。掘削停止面より上方に露出した杭は掘削停止面よりもさらに下方まで刺さっていたが、安全掘削深度の限界で掘削を停止したため、杭の長さの把握はできなかった。既述の杭群１は自立している杭の割合が高いのに対し、本遺構は自立している杭の割合がやや少なく、横たわる木材が目立つ。これは構築時に横たえた構造材が移動したり、自立していた杭が折れたりするなどした結果、原位置を留めていない木材が混在しているからだと推



第73図　８区・Ｐ３区杭群１



第74図　８区・Ｐ３区杭群２



第75図　８区・Ｐ３区杭群３

測される。杭群１同様、一部に簡易な構造物の形態が窺える。

杭以外の木製品や土器などの遺物は出土していない。

検出状況から本遺構は杭群１とほぼ同時期に帰属すると考えられる。よって、本遺構の時期は縄文時代後期前葉から中葉と推定される。漁撈等の活動に関連するものと推測するが、その用途や性格は判然としない。

杭群３（第75図）

Ｐ３区ＡＤ・ＡＥ 45 グリッド、調査区内北東部で確認した。正確な杭本数は把握できていないが、数百に及ぶ杭の一群である。平面的には、杭群１・２の大部分は本遺構の範囲内に入る。

本遺構の範囲は、北西－南東の幅約 10m、北東－南西の幅約５ｍの中に収まる。杭は径２～３cm 程度である。杭群１・２の杭頂部がある程度露出するまで平面的に堆積土の人力掘削とテストピット掘削を併せて行い、他に杭の広がりがないことを確認した上で周辺の堆積土については重機掘削を行った。その後の検出作業中に杭上部を欠損した状態で本遺構を確認するに至ったが、安全掘削深度の限界に達しており、杭の長さ等は確認できていない。自生植物の可能性も想定されたが、杭の横断面が草本ではなく木本であり、検出範囲の境目が明瞭であることから人為的な杭群と判断した。杭以外の木製品や土器などの遺物は出土していない。

遺構の時期は検出層位から杭群１とほぼ同時期に帰属すると考えられる。よって、本遺構の時期は縄文時代後期前葉から中葉と推定される。漁撈等の活動に関連するものと推測するが、その用途や性格は判然としない。

第６節　Ｐ４区の調査

第１項　調査区の概要

１　地形と土層堆積（第76・77図）

Ｐ４区は、東方の谷出口から約200m、北東の山裾から約30mの所に位置する。平成27年度に調査を実施し、調査面積は278.6㎡である。現況では概ね平坦な地形で近年まで水田として利用されていた。扇状地の周辺部にあたり、東方の谷から脈々と供給される大量の湧水は枯れることがない。土層の堆積状況は概ね基本層序Ⅰ～Ⅸ層と対応する。いくつかの調査区でのみ確認されている氾濫による溢流の堆積が存在し、Ⅴ層中とⅨ層中で確認できた。また、Ⅷ層の遺構検出中に調査区の中央付近で噴砂の痕跡を確認した。

２　遺構の概要

Ｐ４区では、縄文時代後期から晩期の杭群１基、弥生時代前期の自然流路３基、弥生時代後期から古墳時代前期の畦畔２基、溝２基、古墳時代前期の畦畔４基、奈良時代から平安時代の条里遺構３基、盛土遺構１基を検出した。

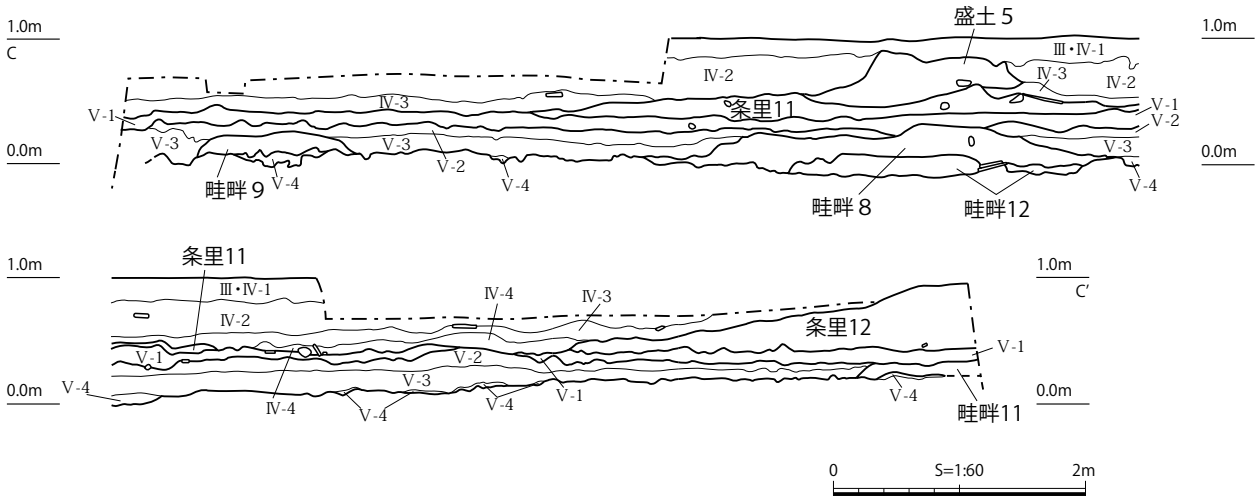
古墳時代前期の畦畔４基は溢流堆積物を多く含む盛土で築かれており、隣のＰ３区と類似した特徴を示す。本調査区ではＰ３区と同様に他の調査区とは異なり、10世紀前半以前に遡る可能性がある条里遺構が確認されている点が特徴として挙げられるが、時期比定など判然としない部分が多い。また、条里地割とは方位を異にする11世紀以降の盛土遺構も確認している。

第３項　Ⅳ層の遺構（平安時代）

１　概要（第78図）

Ⅳ層中で平安時代の盛土遺構を１基検出した。古代の条里地割とは方位がずれた位置関係にあり、地形に即して敷設された可能性が考えられる。Ｐ４区では同時期の遺構は他に存在しないが、他の調

第76図　Ｐ４区土層断面図（１）



Ⅲ　黒褐色シルト質泥炭(10YR2/2)粘性やや弱。しまりやや弱。1cm以下有機物・植物遺体多混。径1cm以上有機物少混。かなり攪拌。泥炭。
Ⅳ-1 黒褐色粘土質シルト(10YR3/1)粘性やや強。しまりやや強。径1cm以下有機物・植物遺体混。径1cm以下灰褐色粘土微混。径2mm以下礫粒・粗砂・細砂微混。攪拌される。
Ⅳ-2 黒褐色粘土質シルト(7.5YR3/2)粘性強。径1cm以下有機物・植物遺体混。径5mm以下礫粒・粗砂少混。湿地堆積。やや攪拌あり。耕作の可能性あり。
Ⅳ-3 黒褐色粘土質シルト(7.5YR3/1)粘性強。径1cm以下有機物・植物遺体多混。径1cm以上有機物混。径1cm以下炭粒少混。加工木混。粗砂・細砂少混。耕作の可能性あり。
Ⅳ-4 黒褐色粘土質シルト(10YR2/2)粘性やや強。径2cm以下有機物・植物遺体多混。径1cm以下炭粒少混。細砂少混。径1～3cm木片、幅1~5cm板材多混。1盛土造築時又は直後に整地した可能性あり。
Ⅴ-1 黒色粘土質シルト(10YR2/1)粘性やや強。しまりやや弱。径2cm以下有機物多混。幅15cm以下木材・加工材混。径1cm以下炭粒混。細砂少混。やや攪拌。
Ⅴ-2 褐灰色シルト質粘土(7.5YR4/1)粘性強。しまりやや強。植物遺体混。径1cm程度有機物少混。径1cm以下炭粒少混。径1cm以下灰褐色粘土少混。やや攪拌。
Ⅴ-3 褐灰色粘土質シルト(7.5YR4/1)粘性やや強。植物遺体多混。径1～2cm程度有機物少混。径1cm以下炭粒混。径1cm以下灰褐色粘土混。耕作土か。
Ⅴ-4 褐灰色シルト質粘土(5YR4/1)と黒褐色粘土質シルト(7.5YR3/1)の混土　粘性やや強。植物遺体多混。径1cm以下炭粒少混。細砂少混。溢流堆積。所々に人又は生物の踏みあとか。
Ⅵ-1 黒褐色粘土質シルト(10YR3/1)粘性やや強。しまりやや弱。植物遺体混。径1～2cm程度有機物混。径1cm以下炭粒少混。細砂少混。径・幅3～10cm程度自然木・加工木少混。
Ⅵ-2 黒褐色粘土質シルト(7.5YR3/1)粘性やや強。しまりやや弱。植物遺体混。径1～2cm程度有機物混。径1cm以下炭粒混。細砂少混。径・幅2～10cm程度自然木・加工木少混。
Ⅶ　黒褐色粘土質シルト(7.5YR3/1)粘性やや強。植物遺体多混。径1～2cm程度有機物混。径1cm以下炭粒混。細砂混。
Ⅷ-1 黒褐色粘土質シルト(7.5YR3/2)粘性強。植物遺体混。細砂少混。径1cm以下炭粒少混。弥生前期壷1点含。
Ⅷ-2 褐灰色砂質シルト(7.5YR4/1)粘性やや弱。径1cm以下有機物混。植物遺体混。径1cm以下炭粒少混。細砂混。湿地堆積及び越流堆積か。
Ⅷ-3 黒褐色砂質シルト(2.5Y3/1)粘性やや弱。しまりやや弱。植物遺体多混。径1cm程度有機物混。径1cm以下炭粒混。粗砂・細砂多混。越流堆積か。
Ⅷ-4 黒褐色砂質シルト(2.5Y3/1)粘性やや強。径1cm以下有機物混。植物遺体混。径1cm以下炭粒少混。粗砂・細砂多混。湿地及び越流堆積か。
Ⅷ-5 黒褐色砂質シルト(2.5Y3/1)粘性やや強。径1cm以下有機物少混。植物遺体混。径1cm以下炭粒少混。粗砂・細砂多混。径1～2mm程度礫粒混。湿地堆積及び越流堆積か。Ⅷ-4よりやや明るめの色調。
Ⅸ-1 褐灰色粘土(7.5YR4/1)粘性強。粗砂・細砂混。径1cm以下炭粒少混。植物遺体少混。(上層に目立つ)径2cm以下灰褐色粘土混。(中・下層に目立つ)
Ⅸ-2 暗赤褐色砂質粘土(5YR3/3)粘性強。粗砂・細砂混。本層底部に層厚5mm程度の暗色粘土質堆積あり。
Ⅸ-3 黄灰色粘土(2.5Y4/1)粘性強。しまりやや強。(上層～中層にかけて)径3cm以下のにぶい黄橙色粘土多混。径2cm以下程度有機物・植物遺体少混。本層底部部分的にⅨ-2 層に類似する堆積あり。
Ⅸ-4 にぶい黄橙色粘土(10YR7/2)と褐灰色粘土(7.5YR5/1)の混土　粘性強。しまりやや強。本層上半は主ににぶい黄橙色粘土で構成。径5mm以下炭粒少混。やや攪拌。層下半が主に褐灰色粘土(7.5YR5/1)で、ほぼ攪拌なし。
Ⅸ-5 褐灰色粘土(10YR4/1)粘性強。しまりやや強。径1cm以下有機物、径5mm以下炭粒少混。
Ⅸ-6 褐灰色粘土(7.5YR4/ 1)粘性強。灰褐色粘土多混。径1cm以下程度有機物(自然木)少混。貝殻混。(1～2cm巻き貝。1 ～5cm二枚貝。細片。)
Ⅸ-7 黒褐色粘土質シルト(10YR3/1)粘性やや強。径1cm以下程度有機物(自然木)混。貝殻多混。(1～2cm巻き貝)
Ⅸ-8 褐灰色粘土(10YR4/1)粘性強。しまりやや強。上層に灰褐色粘土がうすく堆積した痕跡あり。径1cm以下有機物、木の葉片少混。

第77図　Ｐ４区土層断面図（２）

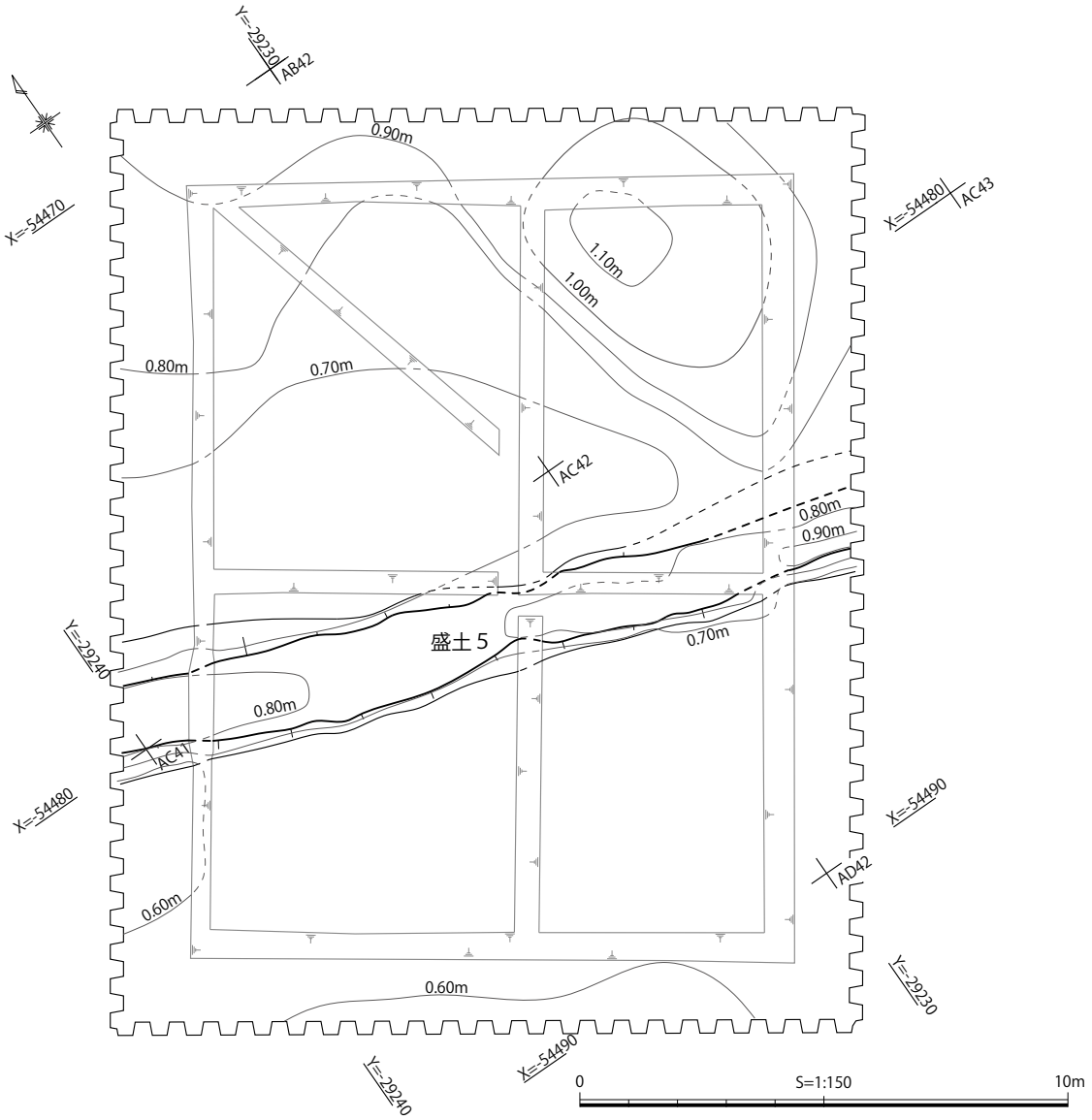
査区では地形に即した盛土遺構が確認されている。遺物は加工木や板材などが出土しており、長さ１m程度の大型のものも若干数含まれる。土器は須恵器片が数点出土している。

２　盛土遺構

盛土５（第79・80図　ＰＬ.18－３）

Ｐ４区ＡＢ・ＡＣ41グリッド、ＡＣ42グリッド、調査区ほぼ中央を通り北西－南東方向へ直線的に延びる盛土遺構である。方位はＮ－70°－Ｗである。

規模は、上面幅が約1.2 ～ 1.7m、基底部幅が約1.7 ～ 2.8mで、盛土の高さは最大約55cmである。盛土上面の標高は0.9m前後である。盛土は黒褐色の粘土質シルトを主体とする土質で、微細有機物、礫粒や粗砂、細砂を含み、下層由来の粘土質シルトブロックも混じる。加工木・自然木が疎らに含まれるが、方向や密度に規則性は感じられない。盛土の構造や構築方法に特に目立った特徴は見られないが、盛土の法面が崩れやすかったと思われ、断面からは法面に土を盛り上げて補修が施されたた様



第78図　Ｐ４区Ⅳ層遺構分布図

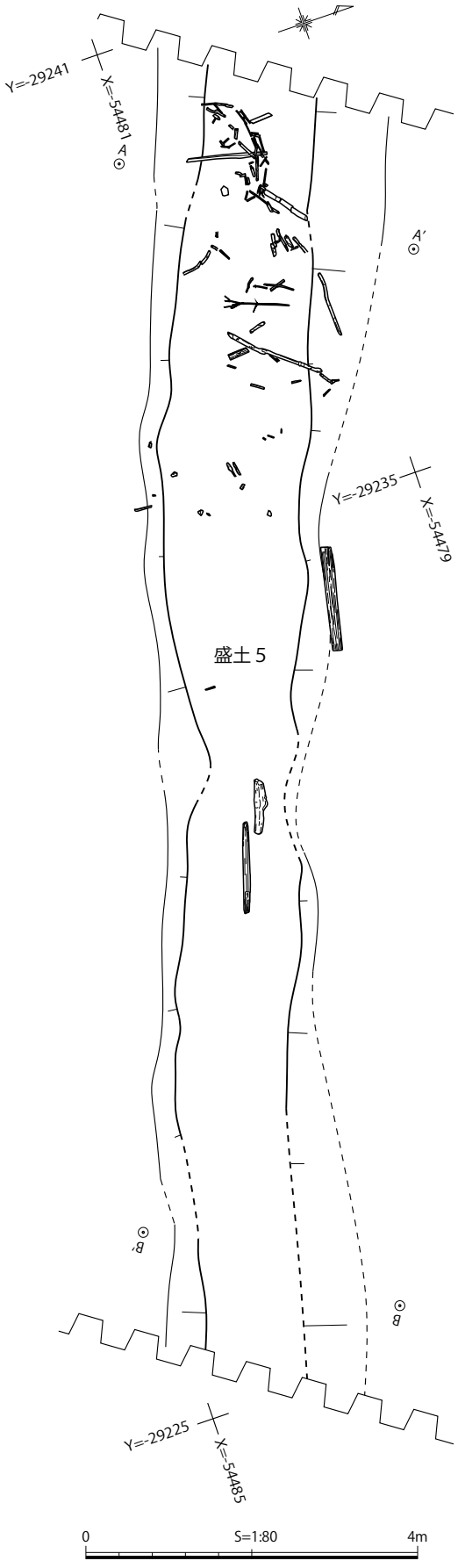
子が窺える。本遺構は条里11の上位にあって、一部、条里11の直上に土を盛り上げて構築されている箇所もある。遺物は加工木や板材、須恵器片が出土している。

本遺構は条里11・12・13よりも上位のⅣ層中に構築され、上面はⅣ層最上であるⅣ－１層に被覆されている。盛土内から８世紀中頃から９世紀初頭の須恵器片が出土しているが、下層にある盛土遺構などからの混入と考えられる。本遺構の時期は11世紀から12世紀の範疇に収まるものと推定される。遺構の性格を明確にしえないものの、立地や形状から畦畔など地割としての性格が考えられる。

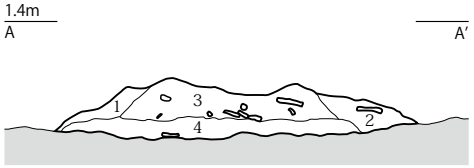
第２項　Ⅴ層上面の遺構（奈良時代～平安時代）

１　概要（第81図）

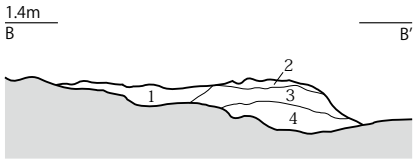
Ⅴ層上面では条里遺構を３基検出した。これらのうち２基は他の調査区と同様に10世紀後半の条里遺構と推定されるが､残りの１基は10世紀前半以前に遡る可能性もある｡いずれの遺構からも加工木、木製祭祀具が多数出土しており、田下駄などの農工具のほか、紡織具も出土している。土器は８世紀から10世紀の須恵器、土師器が少量出土している。



第79図　Ｐ４区盛土５



1　黒褐色粘土質シルト(7.5YR3/1)粘性やや強。径1cm以下有機物混。径1cm以上有機物少混。 径1cm以下礫粒少混。灰褐色粘土ブロック少混。
2　黒褐色粘土質シルト(7.5YR3/1)粘性やや強。径1cm以下有機物混。径1cm以上有機物少混。 径1cm以下礫粒少混。灰褐色粘土ブロック少混。
3　黒褐色粘土質シルト(7.5YR3/1)粘性やや強。径1cm以下有機物多混。径1cm以上有機物混。
4　黒褐色粘土質シルト(10YR3/1)粘性やや強。しまりやや強。径1cm以下有機物混。径1cm以上有機物少混。径1cm以下炭粒少混。



1　黒褐色粘土質シルト(10YR3/2)粘性強。しまりやや強。径1cm以下有機物・植物遺体混。径2mm以下礫粒・粗砂・細砂少混。径1cm以下炭粒少混　　。
2　黒褐色粘土質シルト(7.5YR3/2)粘性強。径1cm以下植物遺体少混。径1～3cm灰褐色粘土ブロック混。粗砂・細砂少混。
3　黒褐色粘土質シルト(7.5YR3/2)粘性強。しまりやや強。径1cm以下有機物・植物遺体混。径2mm以下礫粒・粗砂・細砂混。2層よりやや暗めの色調。
4　黒褐色粘土質シルト(7.5YR3/1)粘性強。しまりやや強。径1cm以下有機物・植物遺体混。径2mm以下礫粒・粗砂・細砂混。径1～2cm黒褐色粘土ブロック少混。

0　S=1:60　2m

第80図　Ｐ４区盛土５土層断面図

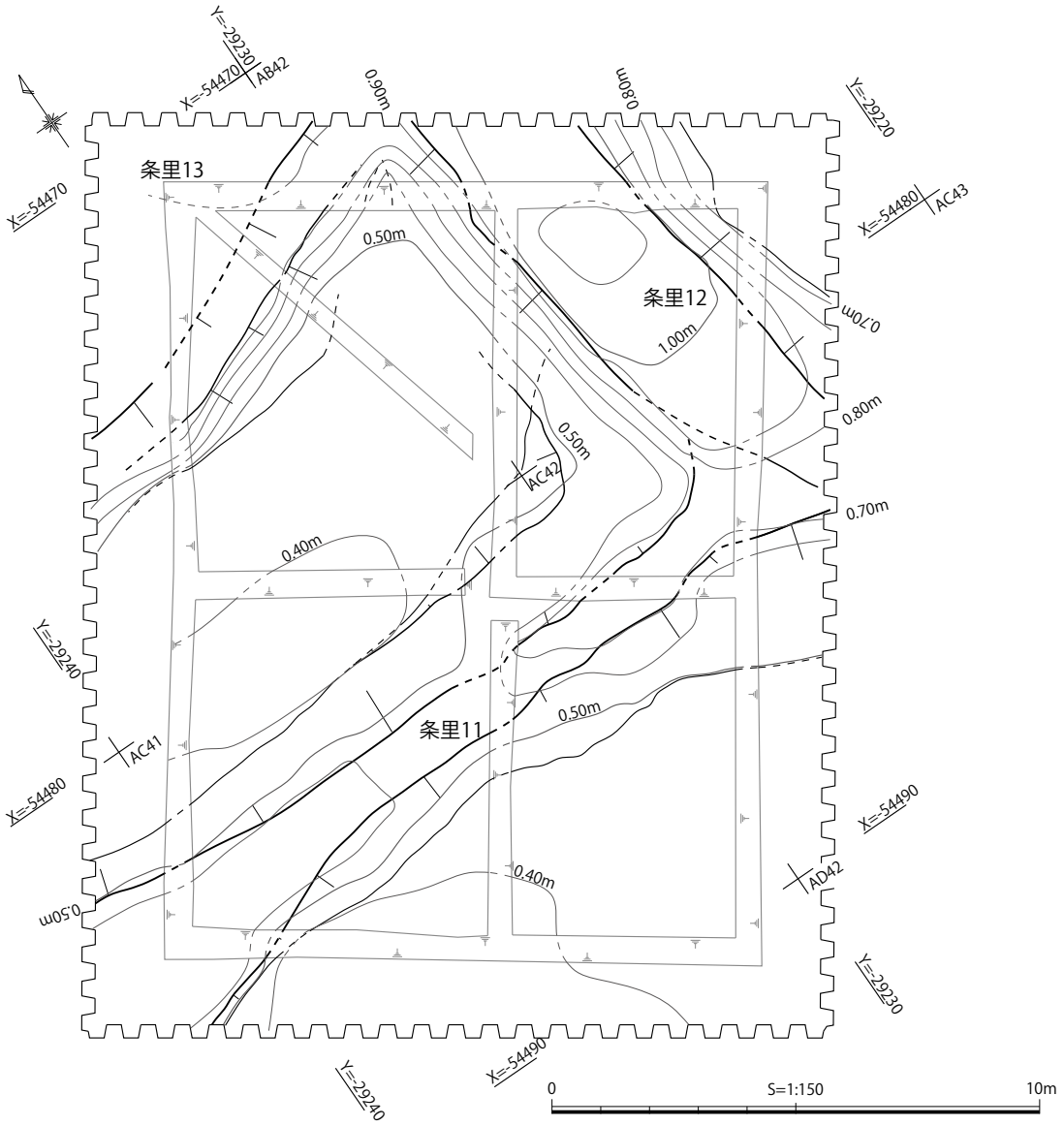
２　条里遺構

条里11（第82図　ＰＬ.19－１,２）

Ｐ４区ＡＣ40～42グリッド、調査区西隅から南東壁にかけて、ほぼ東－西に延伸し調査区外まで続く。方位はＮ－88°－Ｅである。南東壁付近では、同じ条里遺構である条里12と接続する。

規模は、盛土の崩壊等により全体的に高さが低くなり横に広がった印象を受けるが、現存値で上面幅が約1.0～3.0m、基底部幅が約3.5～4.3mで、盛土の高さは最大約25cmである。盛土上面の標高は0.6m前後であるが、盛土の構築時の高さは検出時よりも高かったと思われる。徐々に崩壊したり、河道の氾濫によって盛土が流出したりしたことも想定されるが、それに加え、後に本遺構より上位で盛土５が築かれた際にかなり損失したことが推測される。

盛土は黒褐色の粘土質シルトを主体とする土質で、多くの微細有機物や下層由来の粘土ブロックが混じる。加工木・自然木を含み、特に条里12との接続部近辺では加



第81図　Ｐ４区Ⅴ層上面遺構分布図

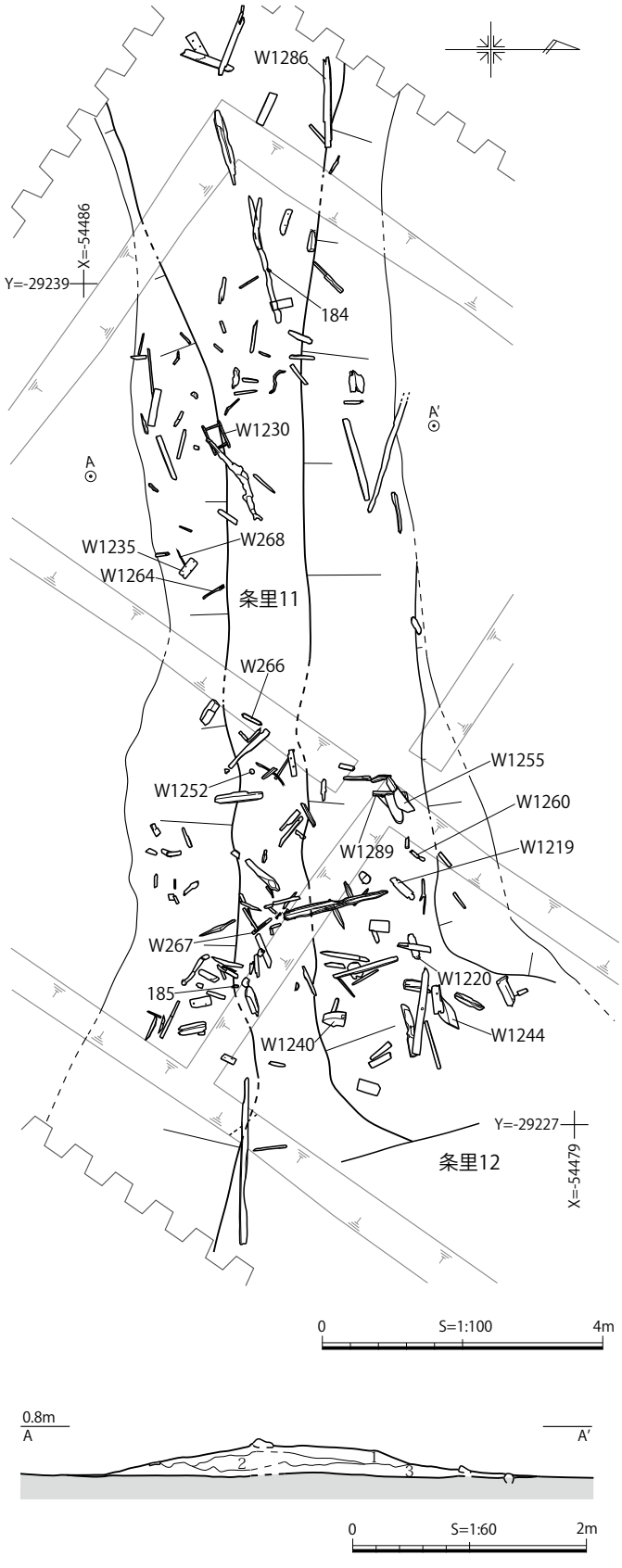
工木や板材が密に含まれる。盛土は、基本的に芯の部分を先に造り、その芯を中心にさらに土を盛り上げて構築されている。敷粗朶は確認されていないが、盛土下部に幅広の加工木や板材が比較的多く使われており、盛土の補強を図った可能性が考えられる。

遺物は建築材などの加工材の他に、田下駄や紡織具、斎串や舟形といった木製祭祀具など、大量の木製遺物が盛土内から出土した。田下駄の中には完形に近い高下駄式田下駄が１点含まれる。土器は須恵器の高台付坏転用硯、土師器の坏などが出土している。

本遺構は条里 12 の後に構築されており、構築時期は 10 世紀後半と推定される。本遺構から出土した土器の多くは８世紀中頃から９世紀初頭のものだが、盛土構築時に下層から混入したものと推測される。本遺構は一町方格内を 12 歩（約 21m）に分割する条里遺構と考えられる。

条里12（第83図　ＰＬ.19－３・20－１,２,３）

Ｐ４区ＡＢ・ＡＣ42グリッド、調査区東隅付近で南北方向に延伸する盛土遺構で、調査区外まで続く。方位はＮ－３°－Ｗである。南東壁の中央付近で、同じ条里区画の条里11と接続する。また、北東壁際の中央付近では条里13と接続する。



1 黒褐色粘土質シルト(10YR2/2)　粘性強。径1cm以下有機物多混。径1～2cm木片混。径2～10cm木片少混。径1cm以下炭粒混。
2 黒褐色粘土質シルト(10YR2/2)　粘性強。しまりやや弱。径1cm以下有機物多混。径1～2cm木片少混。径1cm以下炭粒混。
3 黒色粘土質シルト(10YR2/1)　粘性強。径1cm以下有機物多混。径1～2cm木片少混。幅3～10cm板材混。径1cm以下炭粒混。径1～3cm灰褐色粘土ブロック微混。

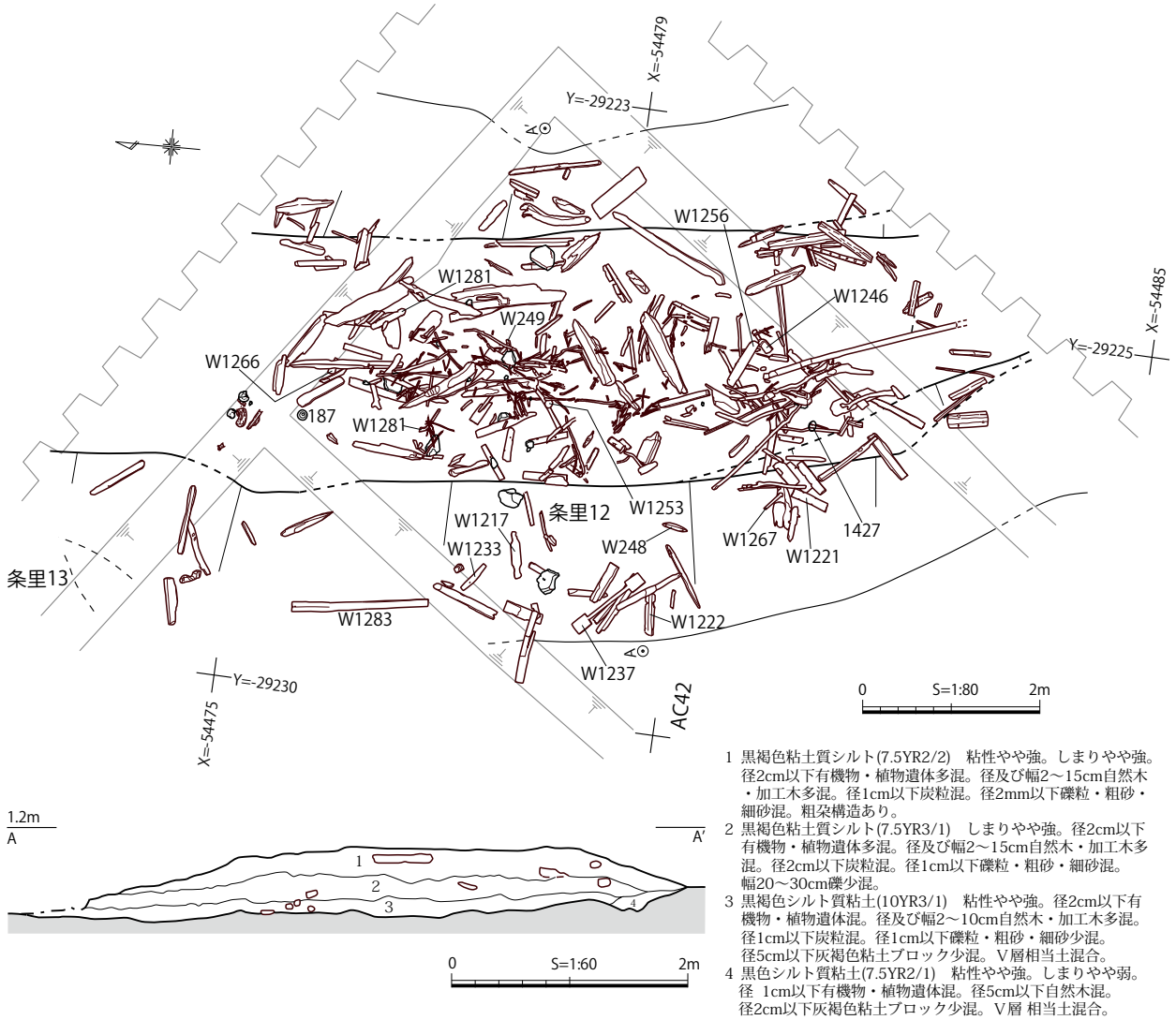
第82図　Ｐ４区条里11

規模は調査区隅の狭い範囲での値になるが、上面幅が約1.8 ～ 2.8m、基底部幅が約5.5 ～ 5.7mで、盛土の高さは最大約60cmである。盛土上面の標高は1.0m前後である。 盛土は黒褐色の粘土質シルトを主体とする土質で、多くの微細有機物や礫粒、粗砂、細砂、下層由来の粘土ブロックが混じり、大小の加工木や自然木を多量に含んでいる。盛土の自重が軟弱な基盤層にも及ぶためか、全体的に盛土直下の基盤層は凹状を呈する。

盛土の構築は下層から中層、上層の順で断面台形の盛土単位となる。やや大雑把な印象を受けるが、盛土の上層では敷粗朶を確認することができた。盛土上面両端部には板材が、その内側には枝を除去した程度の小自然木や枝材が盛土の延伸方向に沿って配置されている。中層以下では自然木も多少含まれるものの、大型の木製品や大きめの加工木の割合が高くなる。軟弱な土質を補完すべく、多量の加工木や木製品を積極的に盛土に混和しているのが特徴である。このような大小の加工木材を密に盛土内に混和する構造は本調査区の南東隣に位置するＰ３区、８区の盛土とも共通する。この特徴はそれ以外の調査区における条里遺構ではみられない特徴で、Ｐ３・４区に近接した部分に転用材を供給しうる施設が存在した可能性が高い。

遺物は田下駄や曲物、紡織具、馬形や人形といった木製祭祀具、建築材、板材、用途不明の加工木など、多様な木製品が大量に出土している。土器はほぼ完形の刻書土師器坏など、小片を含めると須恵器、土師器が30点程度出土している。

遺構の時期は盛土内や盛土上面から10世紀後半の土師器坏が出土していることから、10世紀後半と推定される。盛土上層から出土した粗朶について放射性炭素年代測定を行ったところ、２σ暦年代範囲で886－975calAD



第83図　Ｐ４区条里12

(95.4%)の値を示し、出土遺物とも概ね一致する。本遺構は一町方格内を12歩(約21m)に分割する条里遺構と考えられる。

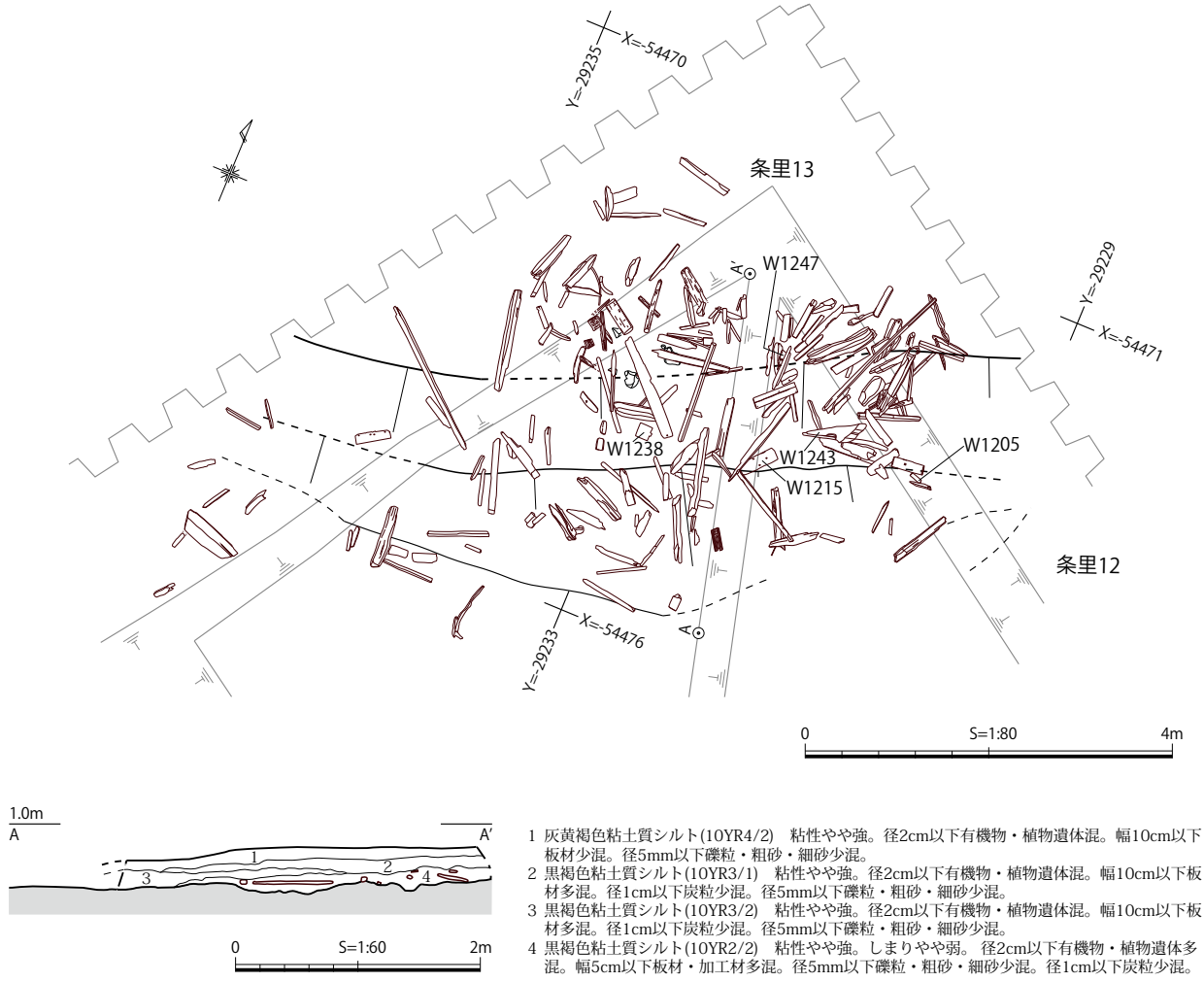
条里13(第84図　ＰＬ.20－４)

Ｐ４区ＡＢ41・42グリッド、調査区北隅で検出した盛土遺構で、調査区外にも広がる。方位はＮ－75°－Ｅである。北東壁際の中央付近で条里12と接続する。

検出範囲が調査区隅の狭い範囲のため、規模は参考値になるが、上面の最大幅が約2.7m、片側の法面を含む最大幅が約4.3mで、盛土の高さは最大約50cmである。盛土上面の標高は0.8m前後である。

盛土は黒褐色の粘土質シルトを主体とする土質で、多くの微細有機物や礫粒、粗砂、細砂が混じる。大小の加工木や自然木を多量に含んでいる。条里12と同様に、盛土下層から中層、上層の順で断面台形の盛土単位となる。盛土内には全体的に加工木材が多量に混入されているのが特徴で、とくに中層から下層部分には幅が広めの板材や長い棒状の木材が敷かれるように多量に混入されており、格子状に配された様子が所々に窺える。軟弱な盛土基盤を補強して盛土の沈下や崩壊を防いだり、盛土の排水性の向上を図ったものと考えられる。

遺物は田下駄、紡織具、アカ取り、馬形・人形といった木製祭祀具、建築材、板材、用途不明の加工木など、多様な木製品が大量に出土している。土器は須恵器の壺口縁部など、小片も含めると10数



第84図　Ｐ４区条里13

点の須恵器、土師器が出土している。

遺構の構築時期は盛土内から８世紀代の須恵器壺口縁部などが出土していることから、８世紀以降と推定される。盛土から出土した粗朶について放射性炭素年代測定を行ったところ、２σ暦年代範囲で661－716calAD(72.0%)、743－766(23.4%)の値を示し大きな齟齬はない。

10世紀以前の条里遺構である可能性もあるが、検出範囲が狭く、盛土が帯状に延伸する形状か判断が難しい。

第３項　Ⅴ層の遺構（古墳時代前期）

１　概要（第85図）

Ⅴ層中（Ⅴ－４層上面）で古墳時代前期の盛土遺構４基を確認した。下層の溢流堆積土が多量に混ぜ込まれた盛土が構築されているのが特徴的である。畦畔８は他の３基よりも規模が大きい。いずれの遺構も遺存状態が悪く、畦畔９・畦畔10は平面的にはわずかに基底部を確認できた程度で、畦畔８・畦畔11についても部分的な検出にとどまる。遺構の形状や地形などから、水田を区画する畦畔であったと推測される。盛土も類似しており、時期に大きな隔たりはないものと考えるが、盛土の延伸方向や間隔から多少の時期差をもって機能していた可能性も考えられる。

遺物は、畦畔８を中心に田下駄や建築材と思われる板材など多くの木製品が出土している。土器の

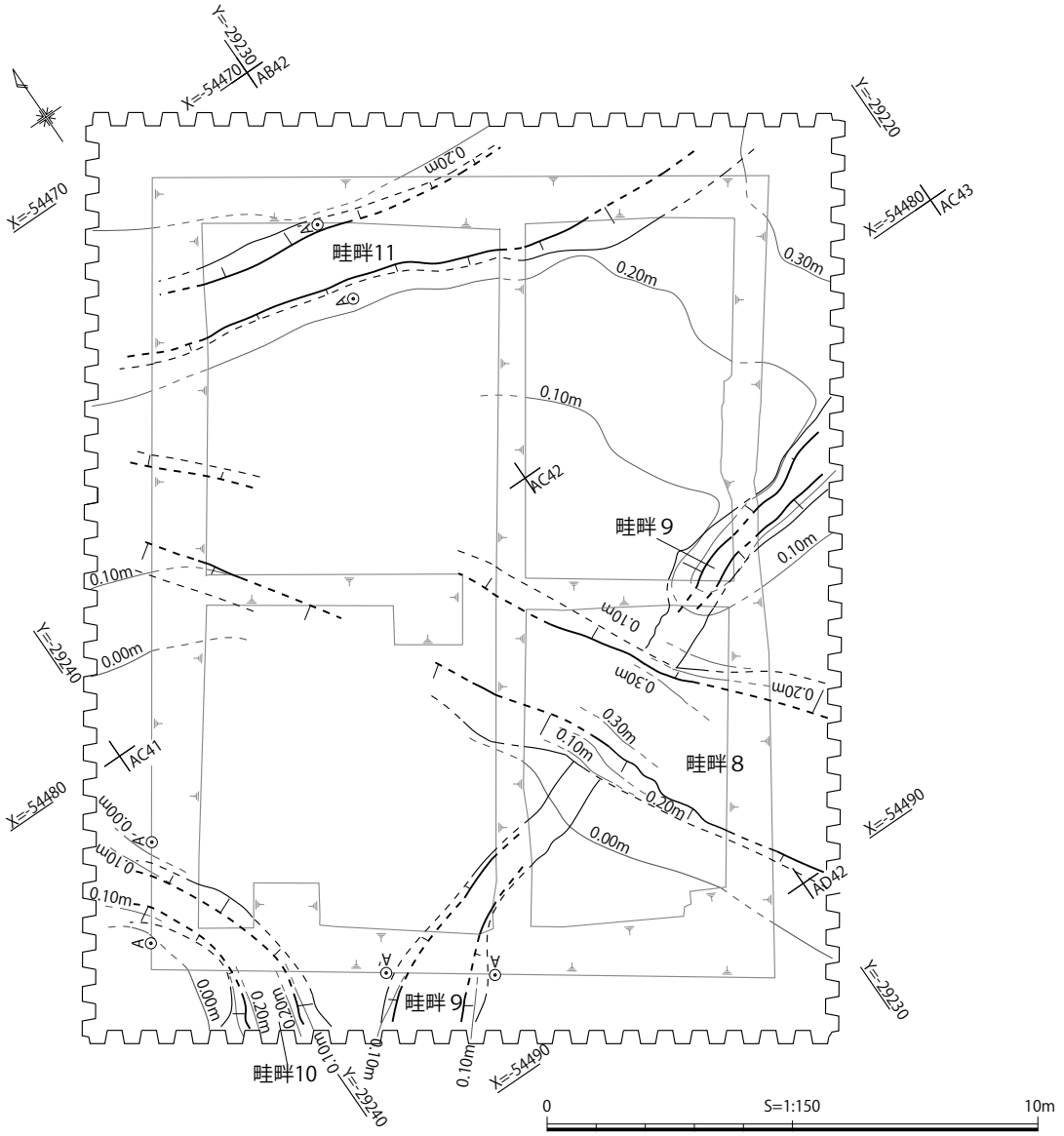
出土はなかった。また、南東隣のＰ３区でも同時期の類似する盛土遺構が確認されている。

２　畦畔

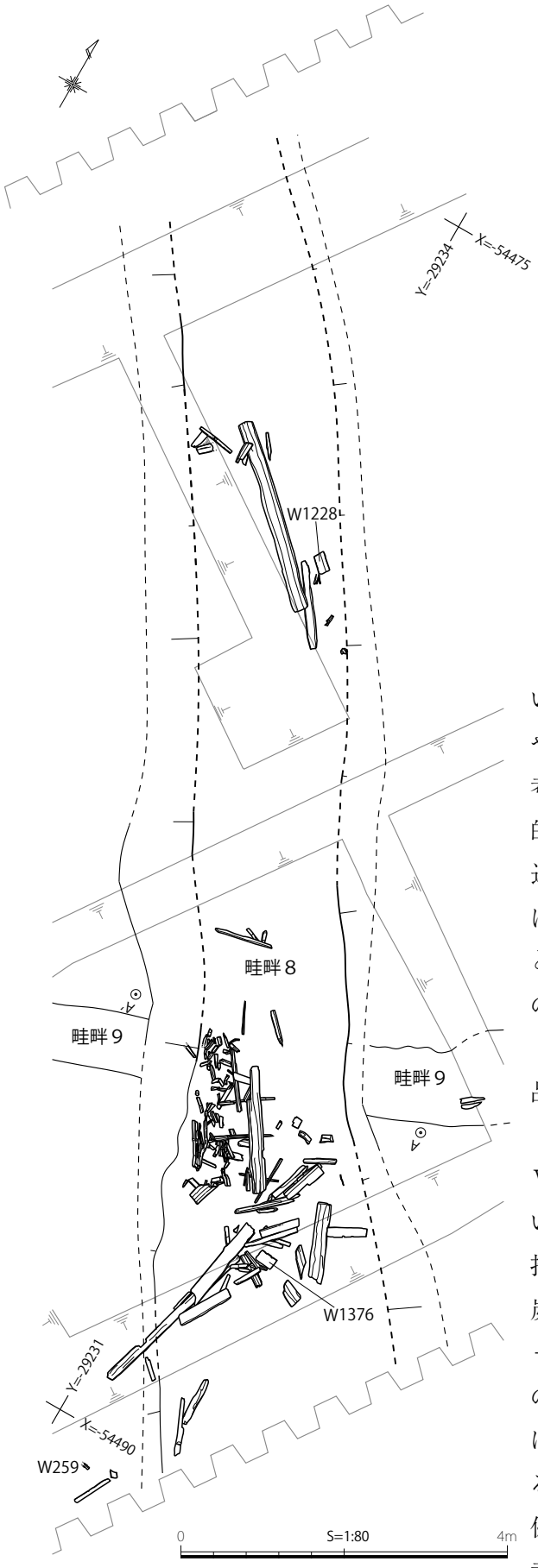
畦畔８（第86・87図　ＰＬ.21－１）

Ｐ４区ＡＢ 41、ＡＣ 41・42 グリッド、調査区の北西壁と南東壁の間で確認された盛土遺構で、調査区外にまで延伸すると推定される。方位はＮ－ 32°－Ｗである。調査区南部付近で本遺構に畦畔９が接続する。本遺構の直下には下位層のⅥ層を基盤とする畦畔 12 が存在し、本遺構はそれを踏襲し、修復することで築かれている。

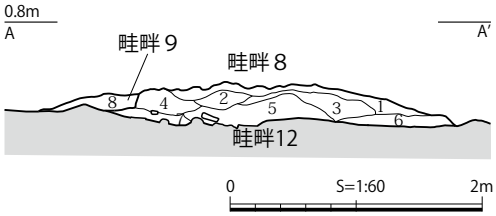
遺存状態が悪く、規模は確認部分での参考値にはなるが、上面幅が約 1.8 ～ 2.8 m、基底部幅が約 2.6 ～ 3.5 mで、盛土の高さは最大約 35cm である。盛土上面の標高は 0.3m 前後である。盛土は黒褐色ないし褐灰色のシルト質粘土が主体で、下層の溢流堆積由来と推測される灰褐色粘土が混ぜ込まれており、微細な有機物を含む。本遺構の南東寄りでは盛土内に大型の板材や小型の加工木・自然木が混和されており、一部格子状に配された様子が窺える。他には、幅広の板材が矢板状に差し込まれて



第85図　Ｐ４区Ｖ層遺構分布図



第86図　Ｐ４区畦畔8



1 黒褐色シルト質粘土(10YR3/2)　粘性強。しまりやや強。径1cm以下有機物少混。植物遺体混。径1cm以下炭粒少混。径1cm以下灰褐色粘土ブロック微混。
2 黒褐色シルト質粘土(7.5YR3/1)　粘性強。しまりやや強。径1cm以下有機物少混。植物遺体混。径1cm以下炭粒混。径3cm以下灰褐色粘土ブロック少混。
3 黒褐色シルト質粘土(10YR2/2)　粘性やや強。径1cm以下有機物混。植物遺体混。径1cm以下炭粒少混。径1cm以下灰褐色粘土ブロック少混。径・幅1～5cm自然木・加工材混。
4 黒褐色シルト質粘土(10YR3/1)　粘性強。しまり強。植物遺体混。径1cm以下炭粒少混。径1cm以下灰褐色粘土ブロック少混。幅5cm程度加工材少混。２層よりやや明るめの色調。
5 黒褐色シルト質粘土(10YR2/2)　粘性やや強。径1～5cm程度の自然木・有機物多混。植物遺体多混。径1cm以下炭粒混。径2 cm以下灰褐色粘土ブロック混。３層よりやや暗めの色調。
6 黒褐色シルト質粘土(10YR2/2)　粘性やや強。径1～5cm程度の自然木・有機物少混。植物遺体混。径1cm以下炭粒少混。径1cm以下灰褐色粘土ブロック少混。３層よりやや暗めの色調。
7 黒褐色シルト質粘土(10YR2/2)　粘性やや強。径・幅5～15cm加工材混。植物遺体混。径1cm以下炭粒少混。径1cm以下灰褐色粘土ブロック混。３層よりやや暗めの色調。
8 黒褐色シルト質粘土(10YR3/1)　粘性やや強。しまりやや強。径1cm以下有機物混。植物遺体混。径1cm以下炭粒少混。径3cm以下灰褐色粘土ブロック混。４よりやや暗めの色調。畦畔９の一部。

第87図　Ｐ４区畦畔８土層断面図

いる箇所があり、軟弱な土質を補完して盛土の崩壊や不同沈下を防いだり、排水機能の向上を図ったと考えられる。遺構の北西寄りは遺存状態が悪く平面的な検出ができなかったため、盛土内に木材を入れ込むなどの構造は明確に確認できていないが、一部に大型の板材と小型の加工木や自然木がみられることから、構築当初は類似する構造が存在していたものと推測される。

遺物は建築材や大小の加工木、板材といった木製品が多量に出土している。土器の出土はなかった。

本遺構から時期を示す土器は出土していないが、Ｖ－２・３層から古墳時代前期の土師器が出土している。したがって、本遺構の時期は古墳時代前期と推定される。盛土から出土した木材について放射性炭素年代測定を行ったところ２σ暦年代範囲で171－51calBC（95.4%）の結果を得た。齟齬が生じたのは、本遺構の構築時に下層にある盛土遺構あるいは包含層帰属する資料が混入したためと考えられる。周囲で検出されたその他の盛土遺構との位置関係や規模、形状などから、水田畦畔としての性格が考えられる。

畦畔９（第85・88図）

Ｐ４区ＡＣ41・42グリッド、南東壁の中央付近から南西壁の中央付近の間で確認された。ほぼ直線的で調査区外まで延びると想定される。方位はＮ－70°－Ｅである。畦畔８のＡ－Ａ’断面から、本遺構は先に構築された畦畔８に接続している。遺存状態が悪く、平面的には盛土基底部のみの確認にとどまった部分が広範囲を占める。

規模は確認部分での参考値にはなるが、上面幅が約0.3 ～ 1.0 m、基底部幅が約1.0 ～ 1.9mで、盛土の高さは最大約25cmである。盛土上面の標高は0.2m前後である。盛土は黒褐色の粘土質シルトと褐灰色シルト質粘土の混土が主体で、下層の溢流堆積由来と推測される灰褐色粘土が混ぜ込まれており、微細な有機物を含む。盛土内に多量の木材を入れ込むなどの構造を強化する手立ては確認できなかった。盛土の自重が軟弱な基盤層にも及ぶためか､盛土直下の基盤層は若干の撓みが生じている。

遺物は加工木がわずかに出土しているが、土器の出土はなかった。

遺構の時期は、同一検出面の畦畔８とほぼ同時期と考えられることから、古墳時代前期と推定される。周辺で検出された他の盛土遺構との位置関係や規模、形状などから、水田畦畔としての性格が考えられる。

畦畔10（第85・88図）

Ｐ４区ＡＣ40・41グリッド、調査区西隅で確認された。遺存状態が悪く、平面的にはほとんど検出できておらず、断面での確認が主となった。

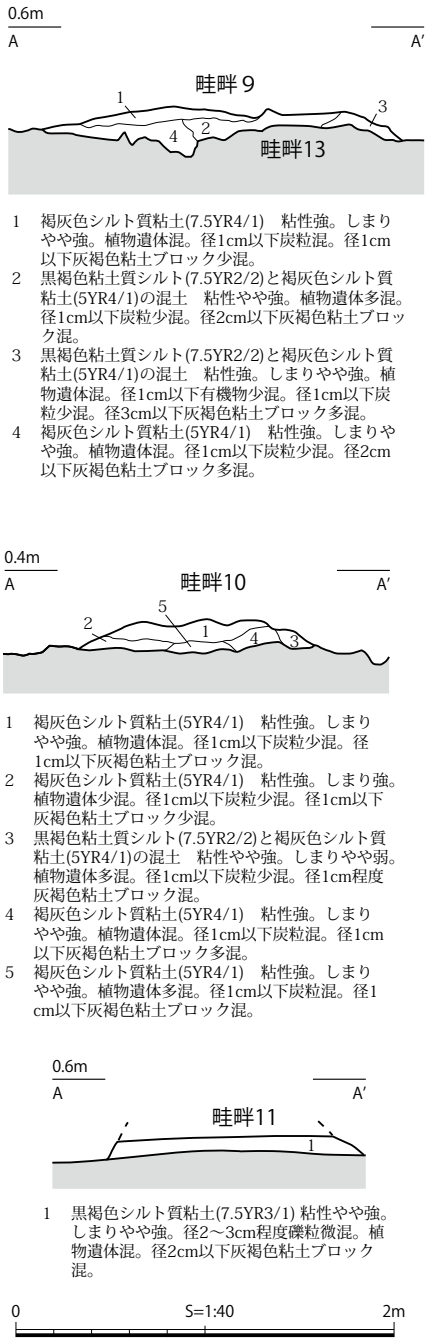
断面部分だけの参考値になるが、規模は上面幅が約60cm、基底部幅が約1.2mで、盛土の高さは約15cmである。盛土上面の標高は0.2m前後である。盛土は黒褐色粘土質シルトないし褐灰色シルト質粘土が主体で、下位層の溢流堆積由来と推測される灰褐色粘土が混ぜ込まれており、微細な有機物を含む。盛土内に多量の木材を入れ込むなどの構造を強化する手立ては確認できなかった。

自然木を若干含むが、遺物は出土していない。

遺構の時期は、同一検出面の畦畔８とほぼ同時期と考えられることから、古墳時代前期と推定される。周辺で検出されたその他の盛土遺構との位置関係や規模、形状などから水田畦畔としての性格が考えられる。

畦畔11（第85・88図）

Ｐ４区ＡＢ41・42グリッド、調査区の北隅付近から北東壁際付近で検出し、調査区外まで延びる。方位はＮ－77°－Ｗである。ほぼ直線的ではあるが、緩やかに湾曲している可能性も否定できず、確



第88図　Ｐ４区畦畔９～11土層断面図

認範囲だけでは判断が難しい。

規模は削平を受けていることから残存値になるが、上面幅が約0.9 ～ 1.1ｍ、基底部幅が約1.5 ～ 1.8ｍで、盛土の高さは最大約20cmである。盛土上面の標高は0.3m前後である。盛土は黒褐色シルト質粘土が主体で、下層の溢流堆積由来と推測される灰褐色粘土が混ぜ込まれており、微細な有機物を含む。細かい礫粒も多少混じる。盛土中に多量の木材を混入するなどの構造を強化する手立ては確認できなかった。

遺物は用途不明の加工木が数点出土している程度で、土器の出土はなかった。

遺構の時期は、同一検出面の畦畔８とほぼ同時期と考えられることから、古墳時代前期と考えられる。ただし、削平を受けていることから、本遺構はこれら３つの畦畔よりも若干古い時期に機能した可能性はある。規模や形状などから水田畦畔としての性格が考えられる。

第４項　Ⅵ層上面の遺構（弥生時代後期～古墳時代前期）

１　概要（第89図）

Ⅵ層上面で弥生時代後期から古墳時代前期の畦畔２基と溝２基を検出した。いずれの遺構も全体的に遺存状態は悪く、畦畔12は原形を留めている箇所が部分的である。畦畔13は南西壁際のわずかな部分でのみ確認している。両遺構ともⅤ層中で検出された畦畔の前身的な畦畔と考えられる。２基の溝、溝５・６は平行する細い溝状の窪みで用途は不明だが、耕作痕等の可能性が考えられる。畦畔と溝の関係ははっきりしないが、水田耕作に関連することが推測される。他の調査区で畦畔12・13と溝５・６に類似する例は確認されていない。遺物は畦畔12から舟の廃材をはじめ建築材と思われる大型の板材や田下駄など多くの木製品が出土している。土器は少なく、弥生土器小片がわずかに出土した程度である。

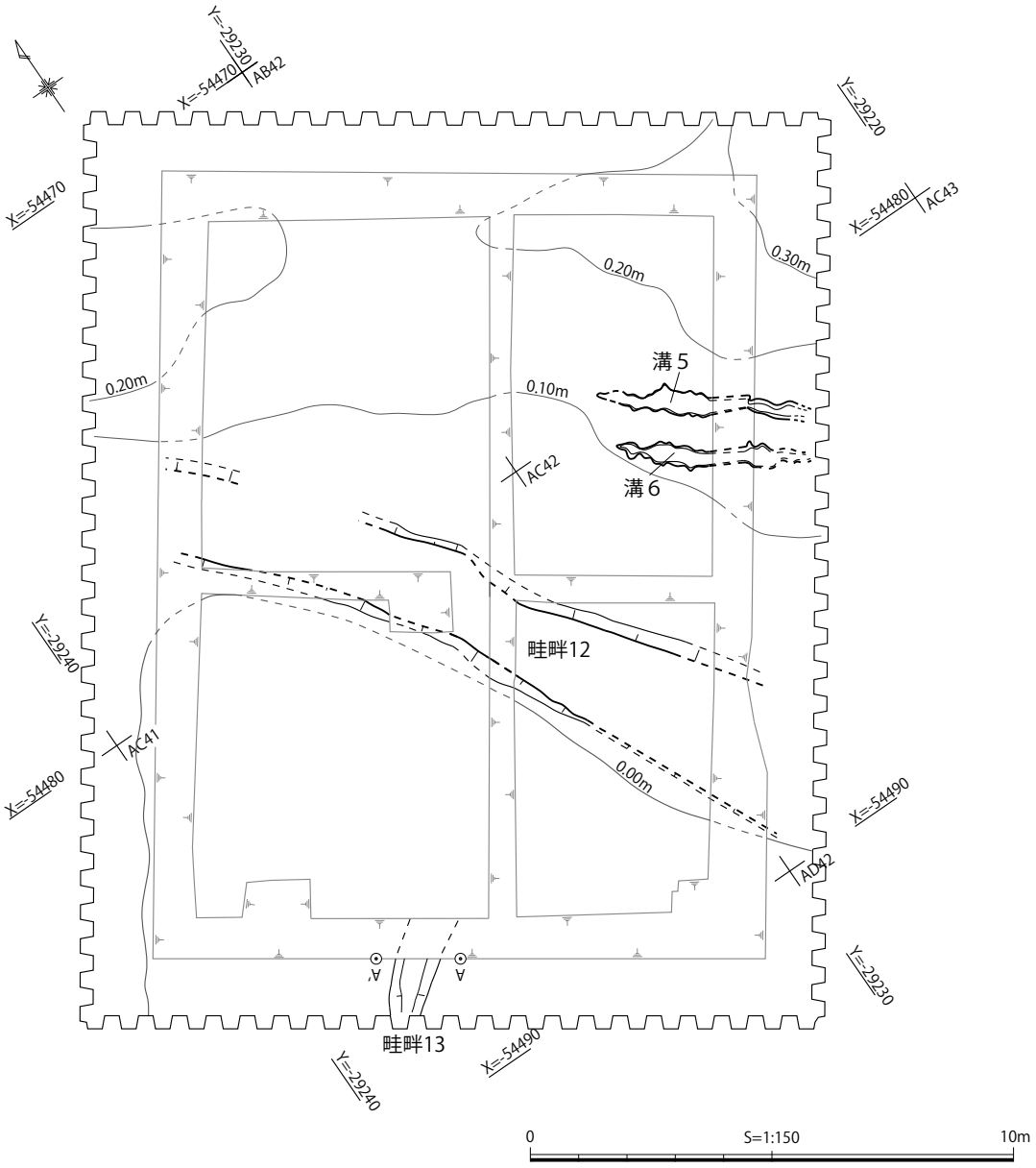
２　畦畔

畦畔12（第90・91図　ＰＬ.21－２）

Ｐ４区ＡＢ41、ＡＣ14・42グリッド、調査区北西壁と南東壁の間で確認された盛土遺構で、調査区外にまで延伸すると推定される。方位はＮ－32°－Ｗである。本遺構の直上には上位層のＶ－４層を基盤とする畦畔８が存在し、本遺構は前身的な畦畔として築かれている。

遺存状態が悪く、確認できた部分だけの参考値になるが、上面幅が1.5 ～ 1.8m、基底部幅が約1.8 ～ 2.3ｍで、盛土の高さは最大約20cmである。盛土上面の標高は0.1m前後である。盛土は黒色粘土質シルトを主体とする。微細な有機物を含み、細砂が少し混じる。本遺構の南東寄り部分では、盛土中に木材が入れ込まれていた。盛土の基底部に小型自然木の細断木を敷いている様子が一部で確認できた。その中には炭化している木材も含まれていた。盛土中層から上面にかけては大型の板材や小型の加工木、自然木が入れ込まれており、一部格子状に配されたようにも見受けられる。使用されている木材の中には、破損した丸木舟廃材の一部と思われるものも含まれる。盛土の崩壊によって芯材が露出したものか、あるいは畦畔の表面に敷設していたものと推測されるが、本遺構を修復する際に使用した足場材が過重により沈み込んだ可能性も否定はできない。

本遺構は断面からは一見溝埋土と見間違うほど盛土部分が沈下している。本遺構が機能していた当時に沈下したものか、後に修復された畦畔８が機能していた当時に沈下したものか定かではないが、



第89図　Ｐ４区Ⅵ層上面遺構分布図

このことからも極めて地盤が軟弱であったことが窺える。

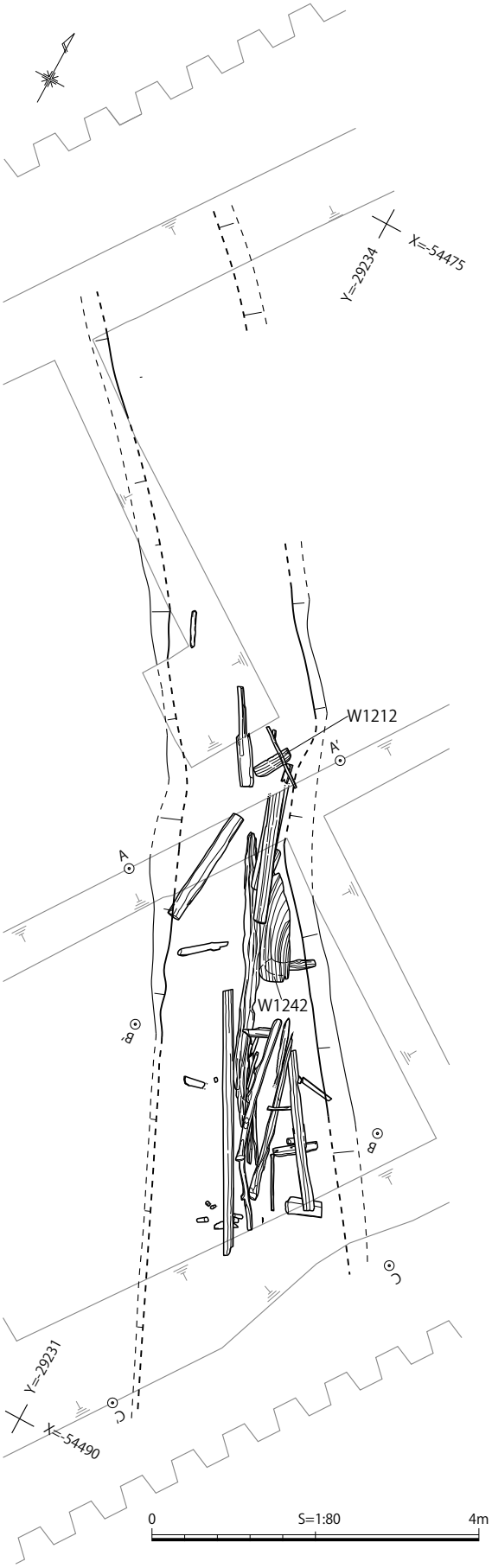
遺物は既述の丸木舟廃材をはじめ、大型板材や棒材が多く出土し、土器は弥生土器小片がわずかに出土している。

遺構の時期は、出土土器や検出層位から弥生時代後期から古墳時代前期と推定される。盛土から出土した木材について放射性炭素年代測定を行ったところ２σ暦年代範囲で201－90calBC(92.3%)の結果を得た。齟齬が生じたのは、本遺構構築の際に本遺構よりも下層から混入した資料あったためと考えられる。規模や形状、周辺で検出された遺構の状況から水田畦畔としての性格が考えられる。

畦畔13(第89・91図)

Ｐ４区ＡＣ41グリッド、調査区南西壁際で確認した盛土遺構で、南西は調査区外まで延びると推定される。方位はＮ－60°－Ｅである。遺存状況が悪く本遺構の北東側では延伸部分の検出はできなかったが、本来は同一面検出の畦畔12と接続していたと考えられる。

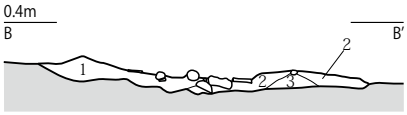
西壁際の狭い範囲での検出であり、規模は参考値になるが、上面幅が約40 ～ 50cm、基底部幅が約



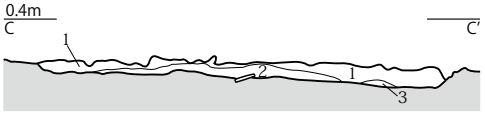
第90図　Ｐ４区畦畔12

畦畔12

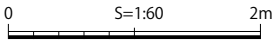
1 黒色粘土質シルト(7.5YR2/1)　粘性やや強。しまり弱。径1cm以下炭粒少混。植物遺体混。細砂少混。
2 黒色粘土質シルト(7.5YR2/1)　粘性やや強。しまり弱。径1cm以下炭粒少混。植物遺体混。細砂少混。径1～2cm程度有機物・加工木材混。
3 黒色粘土質シルト(7.5YR2/1)　粘性やや強。しまり弱。径1cm以下炭粒少混。植物遺体混。細砂少混。
4 黒色粘土質シルト(10YR2/1)　粘性やや弱。しまり弱。径1cm以下炭粒少混。植物遺体混。細砂少混。



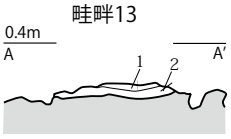
1 黒色粘土質シルト(7.5YR2/1)　粘性やや強。しまり弱。径1cm以下炭粒少混。植物遺体混。細砂少混。
2 黒色粘土質シルト(7.5YR2/1)　粘性やや強。しまり弱。径1cm以下炭粒少混。植物遺体混。細砂少混。杭材風の丸太木混。１層よりやや明るい色調。
3 黒色粘土質シルト(10YR2/1)　粘性やや弱。しまり弱。径1cm以下炭粒少混。植物遺体混。細砂少混。



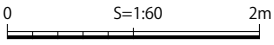
1 黒色粘土質シルト(7.5YR2/1)　粘性やや強。しまり弱。径1cm以下炭粒少混。植物遺体混。細砂少混。
2 黒色粘土質シルト(7.5YR2/1)　粘性やや強。しまり弱。径1cm以下炭粒少混。植物遺体混。細砂少混。径1～2cm程度有機物・加工木材混。
3 黒色粘土質シルト(10YR2/1)　粘性やや弱。しまり弱。径1cm以下炭粒少混。植物遺体混。細砂少混。



畦畔13



1 黒色粘土質シルト(7.5YR2/1)　粘性やや強。植物遺体少混。径1cm以下有機物少混。径1cm以下炭粒少混。
2 黒色粘土質シルト(7.5YR2/1)　粘性ふつう。植物遺体混。径1cm以下有機物少混。径1cm以下炭粒混。



第91図　Ｐ４区畦畔12・13土層断面図

70 ～ 90cmで、盛土の高さは最大約15cmである。盛土上面の標高は0.1m前後である。

盛土は黒色粘土質シルトを主体とする。微細な有機物を含み、細砂が少し混じる。盛土中に木材を入れ込むなどの工法や構造の目立った特徴はみられず、遺物の出土もなかった。

畦畔12と同時期の遺構であると考えられることから、遺構の時期は弥生時代後期から古墳時代前期と推定される。規模や形状、周辺の遺構検出状況から、水田畦畔としての性格が考えられる。

３　溝

溝５（第92図）

Ｐ４区ＡＣ42グリッド、調査区の南東壁付近のⅥ層上面で検出したほぼ直線的な溝状遺構である。遺構南東部は調査区外にまで延びると推測される。約１ｍ南西に類似する溝６が平行して存在する。

規模は、検出長約4.5m、幅約20 ～ 45cm、深さは最大約10cmで、断面形は歪な逆台形ある。埋土は黒褐色の粘土質シルトとＶ－４層に類似する溢流由来の灰褐色粘土を多量に含む。遺物は出土していない。

遺構の時期は、同一面検出の畦畔12・13の時期からＶ－４層が堆積するまでの間と考えられ、弥生時代後期から古墳時代前期と推定される。遺構の性格は、平行して位置する溝６とともに耕作に関係する痕跡とも考えられるが、詳細は不明である。

溝６（第92図）

Ｐ４区ＡＣ42グリッド、調査区の南東壁付近のⅥ層上面で検出したほぼ直線的な溝状遺構である。遺構南東部は調査区外にまで延びると推測される。約１ｍ北東に類似する溝５が平行して存在する。

規模は、検出長約4.0m、幅約15 ～ 50cm、深さは最大約12cmで、断面形は歪な逆台形ないし逆台形である。埋土は黒褐色の粘土質シルトとＶ－４層に類似する溢流由来の灰褐色粘土を多量に含み、遺物は出土していない。

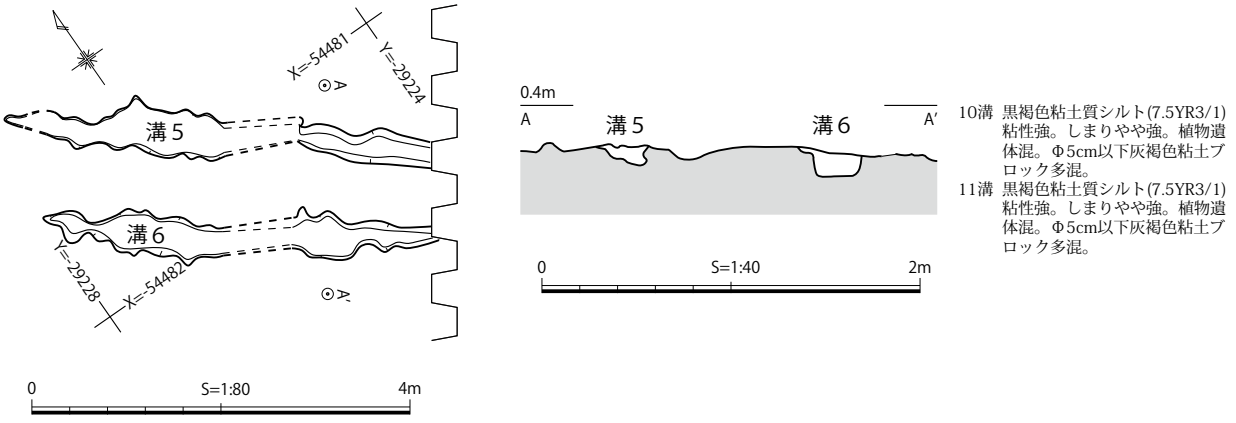
遺構の時期は､同一面で検出された畦畔12･13の時期からＶ－４層が堆積するまでの間と考えられ、弥生時代後期から古墳時代前期と推定される。遺構の性格は、平行して位置する溝５とともに耕作に関係する痕跡とも考えられるが、詳細は不明である。

第５項　Ⅷ層の遺構（弥生時代前期）

１　概要（第93図）

Ⅷ層中で弥生時代前期の自然河道３基を検出した。３基は基本的に同一河道の段階差と考えられる。これらの遺構はＰ４区内で東から南西に湾曲し、他の調査区へ延伸している様子も窺えない。他調査区で同時期の関連遺構は確認されていない。

遺物は杭材や加工木などの木製遺物や弥生時代前期の土器甕口縁部などの土器が出土している。



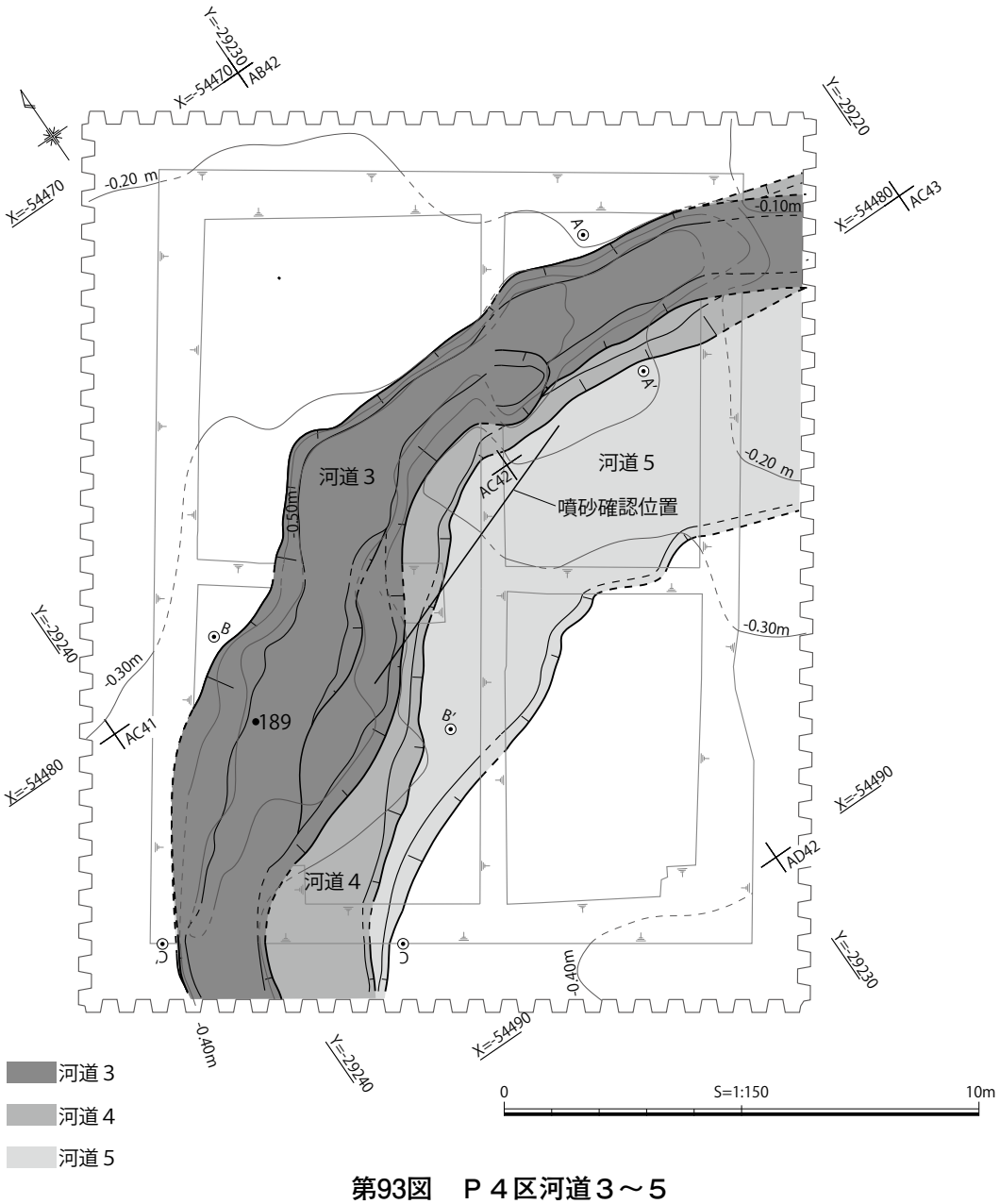
第92図　Ｐ４区溝５・６

２　河道

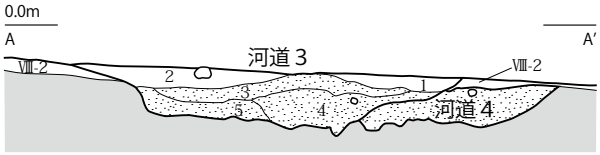
河道３・４・５（第93・94図）

Ｐ４区ＡＣ40、ＡＢ・ＡＣ41、ＡＢ・ＡＣ42グリッド、調査区東隅付近から西隅付近にかけての広範囲で確認できた。平面形は調査区内で東から南西方向に湾曲している。それぞれの河道は基本的には同一河道が拡縮したものと考えられる。重複関係から河道５、河道４、河道３の順に第１段階、第２段階、第３段階となり、幅は段階ごとに狭くなる。

河道３は河道４・５を切り込むかたちで検出された第３段階の河道である。規模は幅が1.8 ～ 4.0m、深さは最大約40cmである。底面レベルは約－0.4m ～ －0.6mで、高低差は東端よりも南西端が20cm程度低い。断面形は歪な逆台形で、壁面の立ち上がりは湾曲している河道の外側法面で傾斜が急になっている。埋土は灰黄褐色の粗砂と黒色砂質シルトの互層堆積が主体で、流水や滞水を繰り返していたことが窺える。河道内には木杭が打設されている箇所があり、人為的な構築物が築かれた可能性はあるが、性格は明らかにしえない。遺物は埋土中から木杭や加工木、弥生時代前期の甕口縁部などが出



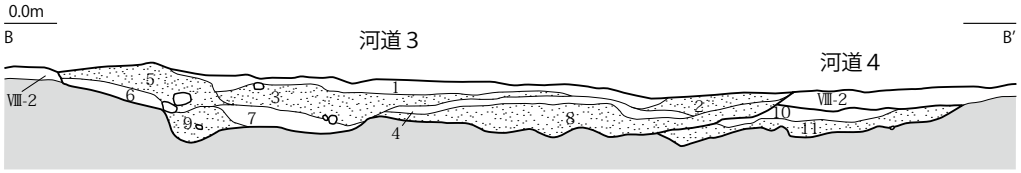
第93図　Ｐ４区河道３～５



河道３
1 黒色砂質シルト(10YR2/1)　粘性やや弱。しまりやや弱。灰黄褐色粗砂混。径1cm以下有機物少混。径1cm以下炭粒混。ラミナ堆積。
2 灰黄褐色粗砂(10YR5/2)　粘性なし。しまり強。径1～5mm礫粒多混。径1cm以下有機物混。径7～8cm程度自然木少混。径1cm以下炭粒少混。ラミナ。
3 黒色砂質シルト(10YR2/1)と灰黄褐色粗砂(10YR5/2)の混土　粘性弱。しまり強。灰黄褐色粗砂主体。径1cm以下有機物混。径1cm炭粒少混。径5mm以下礫粒混。ラミナ。
4 黒褐色砂壌土(10YR3/1)　粘性弱。しまり強。灰黄褐色粗砂多混。径1～2cm有機物混。径1cm以下炭粒混。径5mm以下礫混。径5cm以下自然木少混。ラミナ。
5 黒色砂質シルト(10YR2/1)と灰黄褐色粗砂(10YR5/2)の混土　粘性弱。しまりやや強。灰黄褐色粗砂主体。径1～2cm有機物少混。径1cm以下炭粒少混。径5mm以下礫少混。径5cm以下自然木少混。ラミナ。

Ⅷ-2
褐灰色砂質シルト(7.5YR4/1)粘性やや弱。径1cm以下有機物・炭粒少混。粗砂・細砂混。植物遺体混。湿地堆積及び越流堆積か。

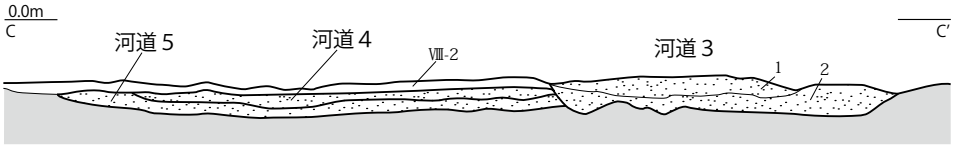
河道４
黒色砂質シルト(10YR2/1)と灰黄褐色粗砂(10YR5/2)の混土　粘性弱。径1～2cm程度有機物多混。径1cm以下炭粒混。径5mm以下礫粒多混。径5cm以下自然木少混。



河道３
1 黒色砂質シルト(10YR2/1)　粘性弱。しまりやや弱。灰黄褐色粗砂混。径1cm以下有機物多混。径1cm以下炭粒混。ラミナ。
2 黒色砂質シルト(10YR2/1)と灰黄褐色粗砂(10YR5/2)の混土　粘性弱。しまりやや強。灰黄褐色粗砂主体。径1～2cm程度有機物混。径1cm以下炭粒少混。ラミナ。
3 黒色砂質シルト(10YR2/1)と灰黄褐色粗砂(10YR5/2)の混土　粘性弱。しまりやや強。灰黄褐色粗砂主体。径1～10mm程度礫少混。径1cm以下炭粒混。径1～5cm有機物混。ラミナ。
4 黒色砂質シルト(10YR2/1)　粘性弱。しまりやや弱。灰黄褐色粗砂混。径1cm以下有機物少混。径1cm以下炭粒混。ラミナ。
5 黒色砂質シルト(10YR2/1)と灰黄褐色粗砂(10YR5/2)の混土　粘性弱。しまり強。灰黄褐色粗砂主体。径1～5cm程度有機物多混。径1～10mm程度礫少混。径1cm以下炭粒少混。ラミナ。
6 黒褐色砂質シルト(10YR3/2)　粘性弱。しまりやや弱。灰黄褐色粗砂混。径1cm以下有機物少混。径1cm以下炭粒少混。ラミナ。
7 黒色砂質シルト(10YR2/1)　粘性弱。しまりやや強。径1～2cm程度有機物多混。灰黄褐色粗砂混。径1～10mm程度礫少混。径1cm以下炭粒少混。ラミナ。
8 黒色砂質シルト(10YR2/1)と灰黄褐色粗砂(10YR5/2)の混土　粘性弱。しまり強。灰黄褐色粗砂主体。径1～10mm程度礫多混。径1cm程度有機物混。径1cm以下炭粒少混。ラミナ。
9 黒色砂質シルト(10YR2/1)と灰黄褐色粗砂(10YR5/2)の混土　粘性弱。しまりやや強。灰黄褐色粗砂主体。径1～10mm程度礫多混。径1～5cm有機物混。径1cm以下炭粒少混。ラミナ。

Ⅷ-2
褐灰色砂質シルト(7.5YR4/1)　径1cm以下有機物少混。径1cm以下炭粒少混。粗砂・細砂少混。植物遺体混。

河道４
10 黒色砂質シルト(10YR2/1)　粘性弱。径1cm以下有機物混。灰黄褐色粗砂混。径1cm以下炭粒少混。径1cm以下礫粒少混。
11 黒色砂質シルト(10YR2/1)と灰褐色粗砂(10YR5/2)の混土　粘性弱。灰黄褐色粗砂主体。径1cm以下有機物少混。径1cm以下炭粒少混。径1cm以下礫粒混。

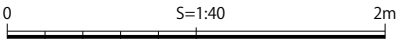


河道３
1 にぶい黄褐色砂土(10YR5/3)　粘性なし。しまり強。径1～3cm程度有機物多混。径1cm以下炭粒少混。径1～5mm程度礫粒混。粗砂主体。
2 黒褐色シルト質砂土(7.5YR3/1)　粘性弱。径1cm以下有機物混。植物遺体混。径1cm以下炭粒少混。径1～3mm程度礫粒少混。細砂主体。

Ⅷ-2
褐灰色砂質シルト(7.5YR4/1)　径1cm以下有機物少混。径1cm以下炭粒少混。粗砂・細砂少混。植物遺体混。

河道４
黒褐色シルト質砂土(7.5YR3/1)　粘性弱。径1cm以下有機物混。植物遺体混。径1cm以下炭粒少混。細砂主体。粗砂混。径1mm程度礫粒少混。

河道５
灰黄褐色シルト質砂土(7.5YR3/2)　粘性弱。しまりやや強。径1cm以下有機物少混。植物遺体混。径1cm以下炭粒少混。粗砂主体。径1～2mm程度礫粒少混。

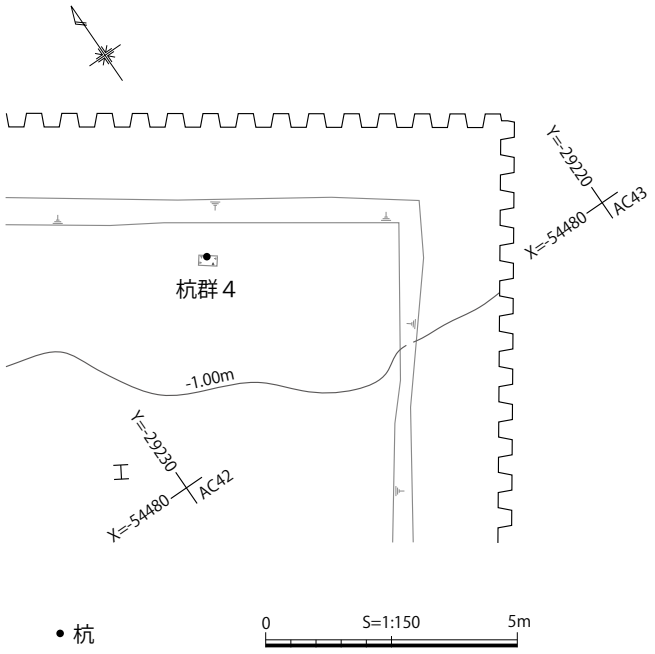


第94図　Ｐ４区河道３～５土層断面図

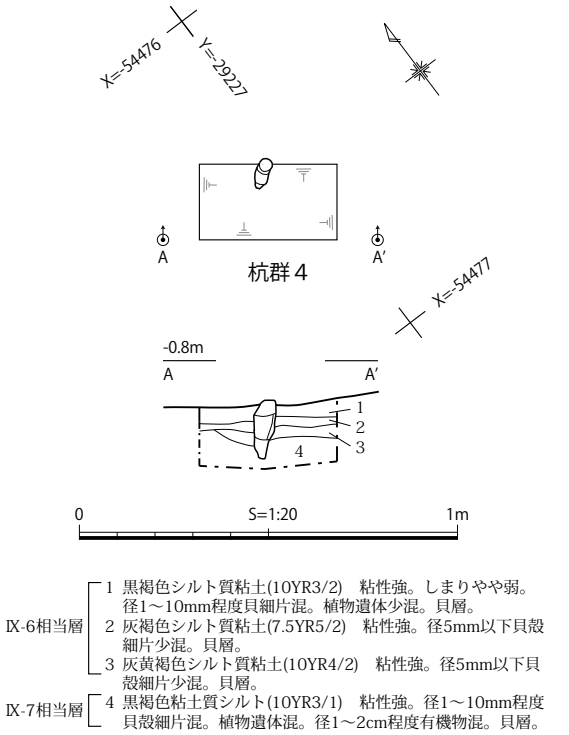
土している。

時期は出土遺物から弥生時代前期の河道と推定される。河道内に打設されていた杭材について放射性炭素年代測定を行ったところ２σ暦年代範囲で493－397calBC(92.7%)の値を示し、出土土器の年代観とも矛盾はない。

河道４は河道３に切られる第２段階の河道である。河道３に侵食されている部分が多く、湾曲している河道外側の壁面はほとんど確認できない。そのため、規模は埋土が確認されている部分のみの参考値になるが、最大幅が2.2m以上、深さは最大約20cmで、底面レベルは約－0.4～－0.6mである。断面形は皿状を呈する。埋土は主に黒色砂質シルトと灰褐色粗砂ないし黒褐色シルト質細砂で、水量や流速の変化を繰り返していたことが窺える。遺物はわずかながら埋土中から加工木、弥生土器の壺口縁部などが出土している。



第95図　Ｐ４区Ⅸ層遺構分布図



第96図　Ｐ４区杭群４

出土遺物から弥生時代前期の河道と推定される。

河道５は河道４の古段階とも考えられる第１段階の河道である。河道４同様に湾曲している河道外側の壁面は侵食されていてほとんど確認できない。そのため、規模は埋土が確認されている部分のみの参考値になるが、最大幅が4.0m以上、深さは最大約10cmで、底面レベルは約－0.4 ～－0.5mである。断面形は皿状と思われる。埋土は灰黄褐色のシルト質粗砂が主体で、河床が浅く凹凸も少ないことから、比較的穏やかな流水もしくは滞水状態であったことが推測される。遺物はわずかながら埋土中から加工木、弥生土器小片が出土している。

出土遺物と河道３・４との関係から弥生時代前期の河道と推定される。

第６項　Ⅸ層の遺構（縄文時代後期～晩期）

１　概要（第95図）

Ⅸ層中で縄文時代後期から晩期の杭群１基を検出した。南東隣調査区のＰ３区やその他複数の調査区でも縄文時代の杭群が確認されている。遺物は土器は出土していないが、木匙など木製品がわずかに出土している。

２　杭群

杭群４（第96図）

Ｐ４区ＡＢ42グリッド、調査区東隅付近の貝を多く含むⅨ－６層の上面で検出した。遺構名は杭群だが、検出した杭は１本のみである。

杭の規模は、長さは約18cm、径４cmである。頂部は欠損しており、もともとの杭長は検出時よりも長いことが推定される。遺物は、周辺の本遺構検出面直上層から木匙や加工木などの木製遺物がわずかに出土している。周囲から土器は出土していない。

遺構の時期は、検出層位から縄文時代後期から晩期と推定される。杭の基盤層であるⅨ－６層中に含まれていた種実について放射性炭素年代測定を行ったところ２σ暦年代範囲で1321－1228calBC(59.5%)、1391－1337calBC(35.9%)の結果を得ている。本来は周辺に複数の杭が存在していたものと推測される。

第７節　７区・Ｐ５区の調査

第１項　調査区の概要

１　地形と土層堆積(第97 ～ 99図)

平成25年度の７区の調査面積は898.9㎡である。安全確保のため周囲から階段状に掘削し、概ねⅣ層を掘り下げ、盛土遺構を検出して出土状況の実測を行い、養生した後埋め戻した。平成26年度の調査は設計変更のためＰ５区の橋脚部分のみ調査した。Ｐ５区の調査面積は278.6㎡である。７区と南東側で重複したため、南東壁面の土層は７区と同じ壁面を記録した。

基本層序は７区の調査ではⅤ層から上を記録し、P5区の調査では重複する南東壁を併用してⅨ層までを記録した。層厚の相違はあるものの基本的な層位は周辺の調査区と共通する。

Ⅳ層は厚さ0.8mと厚く堆積して盛土の肩部付近までを覆う。Ⅴ層は厚さ0.4m程の堆積があり、Ｐ５区中央付近が標高－0.3mと周辺よりも低い。Ⅵ層は植物遺体を多く含み、厚さはＰ５区南東壁で0.5mある。北東側に向かい堆積は薄くなる。標高は西側が0mで周囲よりも高く、東に向かい緩く傾斜して、溝の周囲では－0.8m程になる。

Ⅶ層は層厚が0.2mとやや薄いもののＰ５区全体に堆積する。南東方向に傾斜するものの標高－0.5m～－0.7mと平坦にちかい。Ⅷ層は粘土を含むシルト層で、概ね0.2m程の厚さであるが、シルト主体の上層と粘土主体の下層がある。遺構を検出したシルト主体の層はP5区の南東際から調査区外に広がり、北西側には堆積せず、遺構も検出しない。地形は南東方向に傾斜するものの、標高－0.7m～－0.9mとほぼ平坦である。Ⅸ層は白色や灰色、褐色等の薄い粘土層とともに貝を多量に含む粘土層が互層に堆積する。北から南方向にわずかに傾斜するが、標高は－1.0mから－1.2mでほぼ平坦である。

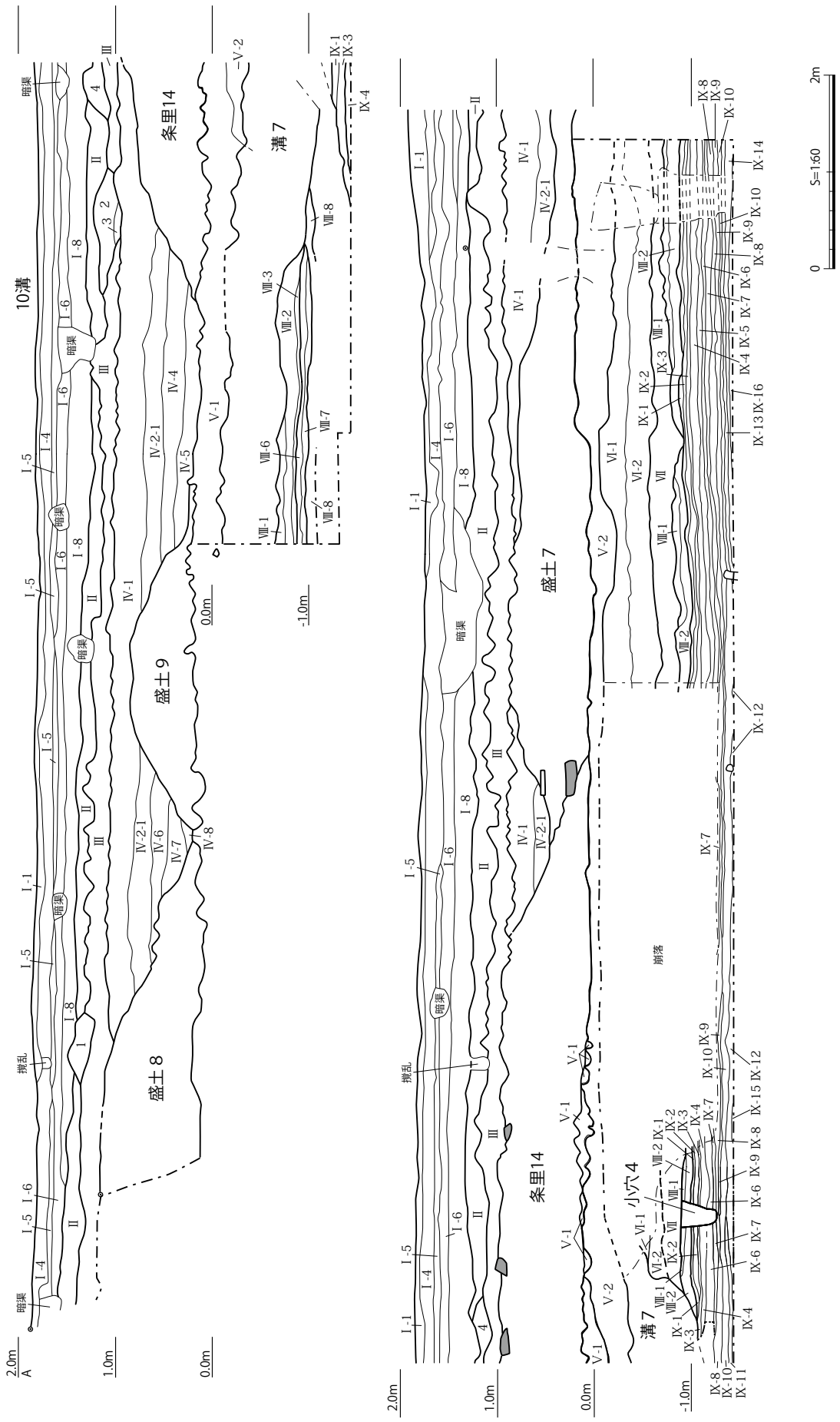
２　遺構の概要

７区はⅣ層まで、Ⅴ層以下はＰ５区のみの成果である。Ⅳ層までは古墳時代後期から平安時代の条里を含めた盛土遺構７基と杭列３基、Ⅴ層以下は弥生時代中期から古墳時代中期の溝１基とそれに伴う導水施設とみられる木造構造物１基、弥生時代中期から後期の土坑１基、弥生時代前期から中期の小穴４基、縄文時代晩期以前の杭群を調査した。

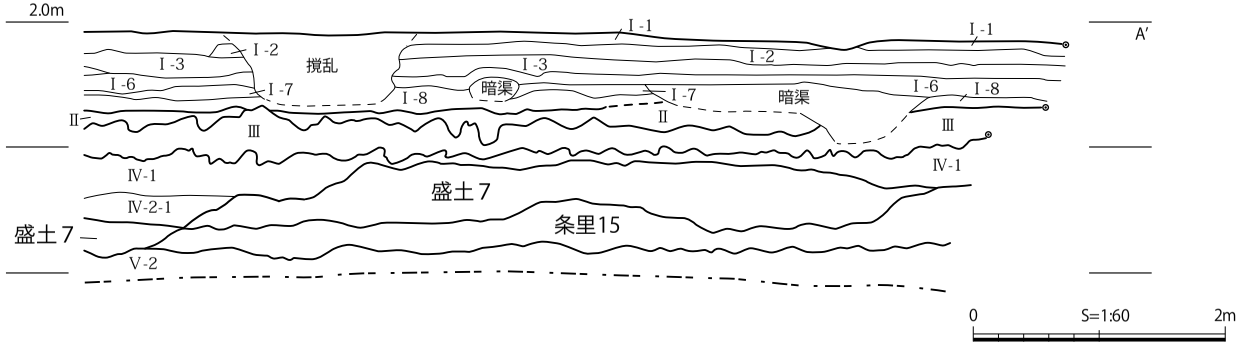
第２項　Ⅴ層上面の遺構（古墳時代後期～平安時代）

１　概要(第100図)

７区の南西側で東西軸の条里 14 と南北軸の条里 15 の一町方格の条里遺構が直交する。盛土上位には敷粗朶を行い、敷粗朶の上には石を敷く構造をなす。他の遺構はいずれも盛土を主体とし、条里 14・15 の交点から北西側に盛土６、南東側に盛土７が築かれる。７区の北西側には東西軸をもつ盛土９、北西壁際には盛土８と下層に盛土 10 がある。条里 15 には杭列６が伴い、盛土７の下層には杭



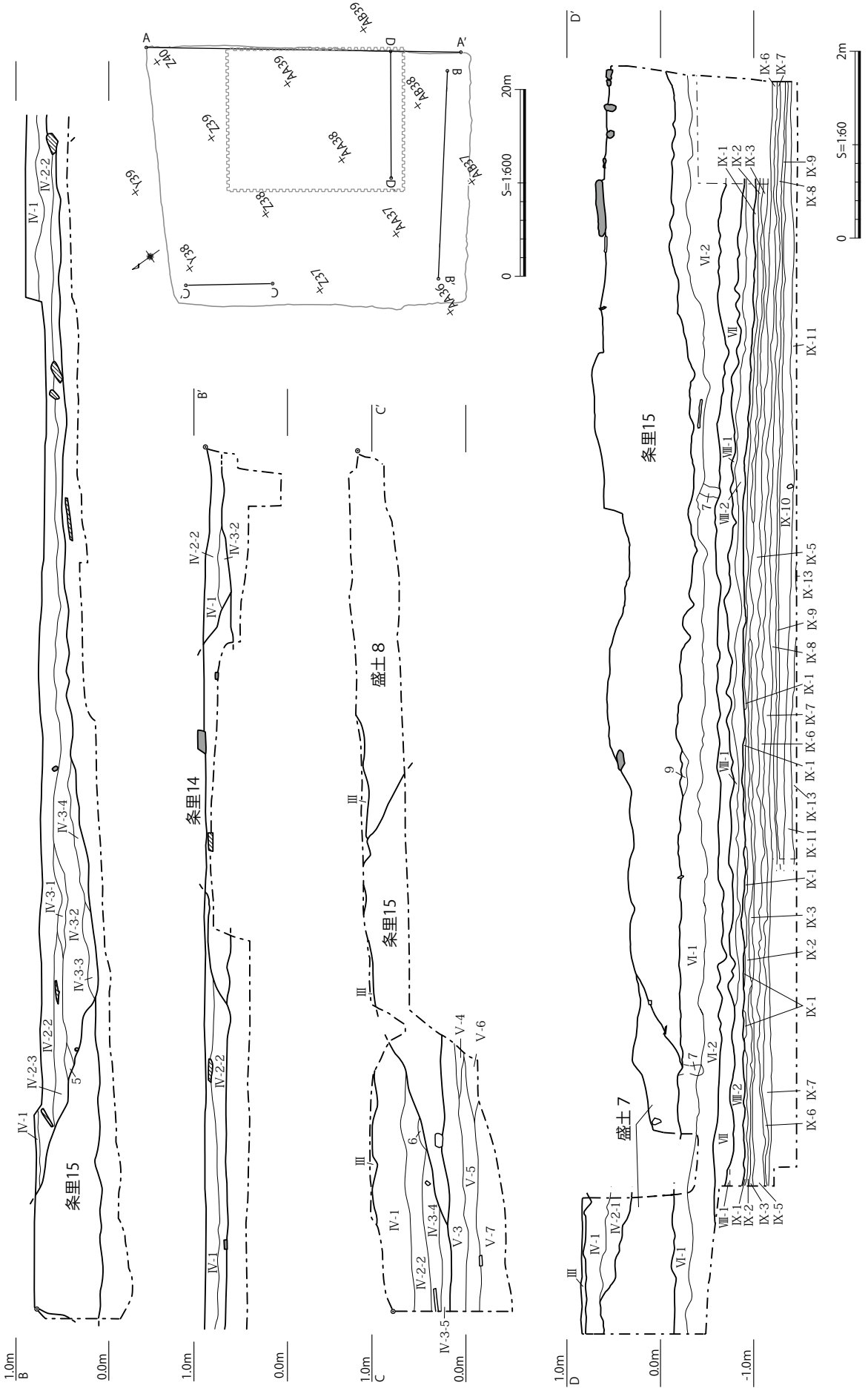
第97図　７区・Ｐ５区土層断面図（１）



Ⅰ－1　にぶい黄褐色土(10YR5/3)。粘性やや弱い。しまり弱い。土壌化が進行した表土及び造成土。
Ⅰ－2　褐灰色シルト(7.5YR6/2)。粘性やや弱い。しまり強い。
Ⅰ－3　にぶい褐色シルト(7.5YR6/3)。粘性やや弱い。しまり強い。
Ⅰ－4　褐灰色シルト(7.5YR6/2)。粘性やや弱い。しまり強い。植物遺体多く含む。
Ⅰ－5　灰褐色シルト(7.5YR6/2)。粘性やや弱い。しまりやや強い。夾雑物は少ない。
Ⅰ－6　褐灰色シルト(7.5YR5/1～10YR6/2)。粘性やや弱い。しまり強い。小礫～人頭大までの礫少量含む。暗渠関連のものも含む。
Ⅰ－7　褐灰色シルト(7.5YR6/1)。粘性やや弱い。しまり強い。
Ⅰ－8　褐灰色小礫混シルト(7.5YR4/1)。粘性やや弱い。しまり強い。水田の基盤をなす層か。
Ⅱ　黒褐色(10YR3/1)～褐灰色シルト(10YR6/1)。粘性やや強い。植物遺体多く含む。径～１cmの炭化物粒少量含む。腐食した植物遺体(Ⅲ層由来)多く含む。
Ⅲ　褐灰色(10YR4/1)～褐色(10YR4/4)～にぶい黄褐色シルト(10YR5/3)。粘性やや強い。しまり弱い。径１～３cm程度の小礫及び粗砂少量含む。植物遺体多く含む。砂粒少量含む。径～１cmの炭化物少量含む。
Ⅳ－1　灰黄褐色(10YR5/2～6/2)～にぶい黄橙色シルト(10YR6/3)。粘性やや強い。植物遺体を含む。径１～３mm程度の小礫及び粗砂含む。砂粒含む。径～１cmの明褐灰色粘土(5YR7/2)少量含む。径～１cmの炭化物少量含む。
Ⅳ-2-1　灰黄褐色(10YR4/2～5/2)～にぶい黄褐色シルト(10YR5/3)。植物遺体少量含む。径～１cmの炭化物少量含む。
Ⅳ-2-2　にぶい黄褐色(10YR5/3)～灰黄褐色シルト(10YR4/2)。粘性やや弱い。しまりやや強い。植物遺体少量含む。砂粒少量含む。径１cm以下の炭化物少量含む。
Ⅳ-2-3　褐灰色シルト(10YR4/1)。しまりやや強い。植物遺体少量含む。砂粒少量含む。径～１cmの炭化物少量含む。
Ⅳ-3-1　褐灰色砂質シルト(10YR5/1)。粘性やや弱い。植物遺体少量含む。砂粒多く含む。径～１cmの炭化物少量含む。砂粒は細砂が主体。
Ⅳ-3-2　褐灰色(10YR5/1)～灰黄褐色シルト質細砂(10YR5/2)。粘性やや弱い。しまりやや強い。植物遺体多く含む。砂粒(細砂主体)多く含む。中砂含む。水平・斜行ラミナ多。径～１cmの炭化物少量含む。
Ⅳ-3-3　褐灰色砂質シルト(10YR4/1)。粘性やや弱。しまりやや強い。植物遺体含む。砂粒(細砂・中砂含)多く含む。粗砂多く含む。径～１cm以下の炭化物少量含む。
Ⅳ-3-4　褐灰色(10YR5/1)～灰黄褐色シルト(10YR4/2)。粘性やや弱い。植物遺体少量含む。砂粒(細砂主体)含む。径～１cm以下の炭化物粒少量含む。
Ⅳ-3-5　にぶい黄褐色シルト(10YR4/3)。しまりやや強。植物遺体含む。径～１cmの炭化物少量含む。
Ⅳ-4　灰黄褐色シルト(10YR4/2)。粘性やや強い。
Ⅳ-5　褐灰色シルト(10YR4/1)。植物遺体少量含む。砂粒少量含む。径～１cmの炭化物少量含む。
Ⅳ-6　にぶい黄褐色シルト(10YR4/3)。植物遺体少量含む。径～１cmの炭化物少量含む。
Ⅳ-7　灰黄褐色シルト(10YR4/2)。植物遺体含む。砂粒少量含む。径～１cmの炭化物少量含む。
Ⅳ-8　灰黄褐色シルト(10YR5/2)。植物遺体少量含む。砂粒微量含む。
Ⅴ-1　褐灰色(10YR5/1)～灰黄褐色小礫、シルト混粗砂(10YR5/2)。粘性弱い。しまりやや強い。植物遺体含む。径～１cmの炭化物少量含む。
Ⅴ-2　暗褐色シルト(10YR3/4)。しまりやや弱い。植物遺体多く含む、卓越する。径～１cmの炭化物少量含む。
Ⅴ-3　にぶい黄褐色シルト(10YR5/3)。粘性やや強い。植物遺体少量含む。径～１cmの炭化物少量含む。
Ⅴ-4　黒褐色シルト(10YR3/2)。植物遺体含む。径～１cmの炭化物少量含む。砂粒少量含む。
Ⅴ-5　暗褐色シルト(10YR3/3)。植物遺体多く含む。径～１cmの炭化物微量含む。
Ⅴ-6　褐色砂質シルト(7.5YR4/3)。粘性やや弱い。植物遺体多く含む。砂粒多く含む。径～１cmの炭化物少量含む。砂粒は細砂主体。
Ⅴ-7　暗褐色シルト(10YR3/4)。粘性やや強い。植物遺体多量含む。砂粒微量含む。径～１cmの炭化物微量含む。
Ⅵ-1　オリーブ黒色シルト～粘土(7.5Y3/1)。シルト主体。粘性やや強い。径0.5～5cmの植物遺体含む。径0.5～2cmの礫少量含む。
Ⅵ-2　黒褐色シルト(2.5Y3/1)。径0.5～5cmの植物遺体多量に含む。径0.2～1cmの炭化物含む。径0.5～3cmの礫含む。
Ⅶ　暗灰黄色シルト(2.5Y5/2)。径0.5～5cmの植物遺体含む。径0.2～2cmの炭化物含む。径0.5～3cmの礫含む。
Ⅷ-1　褐灰色シルト～粘土(10YR6/1)。シルト主体。径0.5～5cmの植物遺体含む。径0.2～5cmの炭化物含む。径0.5～1cmの礫少量含む。
Ⅷ-2　灰色粘土(7.5Y7/1)。粘土主体。粘性やや強い。径0.5～2cmの明褐灰色粘土ブロック(7.5YR7/1)少量含む。径0.5～5cmの植物遺体少量含む。径0.2～0.5cmの炭化物少量含む。径0.5～1cmの礫少量含む。
Ⅸ-1　明褐灰色粘土(5YR7/1)。粘性強い。径0.5～10cmの黄灰色粘土ブロック(2.5Y4/1)多量に含む。
Ⅸ-2　黄灰色粘土(2.5Y6/1)。粘性強い。径0.5～5cmの明褐灰色粘土ブロック(5YR7/1)含む。径0.2～0.5cmの炭化物少量含む。
Ⅸ-3　明褐灰色粘土(7.5YR7/1)。粘性強い。径0.5～10cmの黄灰色粘土ブロック(2.5Y6/1)多量に含む。
Ⅸ-4　褐灰色粘土(10YR4/1)。粘性強い。径0.5～3cmの植物遺体少量含む。径0.2～2cmの炭化物含む。径0.5～5cmの灰白色粘土ブロック(7.5Y7/1)少量含む。
Ⅸ-5　灰白色粘土(10YR8/1)。粘性強い。径0.5～10cmの黄灰色粘土ブロック(2.5Y4/1)多量に含む。径0.2～5cmの炭化物少量含む。
Ⅸ-6　褐灰色粘土(7.5YR4/1)。粘性強い。径0.2～1cmの貝少量含む。径0.5～5cmの明褐灰色粘土ブロック(7.5YR7/1)含む。径0.2～2cmの炭化物少量含む。
Ⅸ-7　褐灰色粘土(10YR5/1)。粘性強い。径0.5～5cmの植物遺体少量含む。径0.2～2cmの炭化物含む。径0.2～1cmの貝少量含む。径0.5～2cmの明褐灰色粘土ブロック(7.5YR7/1)含む。
Ⅸ-8　褐灰色粘土(10YR4/1)。粘性強い。しまりやや弱い。貝を多量に含む。径0.5～2cmの明褐灰色粘土ブロック(7.5YR7/1)含む。径0.2～2cmの炭化物含む。径0.5～5cm植物遺体含む。
Ⅸ-9　灰白色粘土(10YR8/1)。粘性強い、しまりやや弱い。径0.5～5cmの明褐灰色粘土ブロック(7.5YR7/1)多量に含む。径0.2～2cmの炭化物含む。径0.5～3cmの植物遺体少量含む。
Ⅸ-10　褐灰色粘土(7.5YR5/1)。粘性強い。しまりやや弱い。貝を多量に含む。径0.5～2cmの明褐灰色粘土ブロック(7.5YR7/1)含む。径0.2～1cmの炭化物少量含む。
Ⅸ-11　明褐灰色粘土(7.5YR7/1)。粘性強い。径0.5～5cmの褐灰色粘土ブロック(7.5YR5/1)多量に含む。径0.2～2cmの貝少量含む。
Ⅸ-12　褐灰色粘土(10YR5/1)。粘性強い。径0.2～2cmの貝少量含む。径0.2～2cmの炭化物少量含む。径0.5～5cmの植物遺体少量含む。
Ⅸ-13　明褐灰色粘土(7.5YR7/1)。粘性強い。径0.5～5cmの褐灰色粘土ブロック(10YR5/1)多量に含む。径0.2～1cmの貝少量含む。径0.2～1cmの炭化物少量含む。
Ⅸ-14　灰白色粘土(10YR7/1)。粘性強い。径0.5～5cmの褐灰色粘土ブロック(10YR5/1)含む。径1～5cmの灰色粘土ブロック(7.5YR7/1)少量含む。径0.2～3cmの貝含む。
Ⅸ-15　明赤灰色粘土(2.5YR7/1)。粘性強い。径0.5～5cmの褐灰色粘土ブロック(7.5YR5/1)含む。自然木少量含む。径0.2～2cmの炭化物含む。
Ⅸ-16　黒褐色粘土(7.5YR3/2)。粘性強い。径0.5～5cmの灰色粘土ブロック(7.5YR7/1)含む。径0.5～5cmの植物遺体含む。径0.2～2cmの貝少量含む。

1　黒褐色シルト(10YR3/1)。粘性やや強い。しまりやや強い。植物遺体多量含む。径～1cmの炭化物含む。腐敗した植物遺体(Ⅲ層由来)多く含む。褐灰色(10YR6/1)シルトとの混合層。
2　褐灰色シルト(10YR6/1)。粘性やや強い。しまりやや強い。植物遺体多く含む。径～1cmの炭化物少量含む。黒褐色(10YR3/1)を呈する植物遺体との混合層。
3　黒褐色シルト(10YR3/2)。粘性やや強い。植物遺体多く含む。径～1cmの炭化物少量含む。
4　褐灰色シルト(10YR6/1)。粘性やや強い。しまりやや強い。植物遺体多く含む。径～1cmの炭化物少量含む。
5　黒褐色シルト(10YR3/1)。粘性やや強い。しまりやや強い。植物遺体多量含む。径～１cmの炭化物含む。腐食した植物遺体(Ⅲ層由来)多く含む。褐灰色シルト(10YR6/1)との混合層。
6　褐灰色シルト(10YR6/1)。粘性やや強い。しまりやや強い。植物遺体多く含む。径～１cmの炭化物少量含む。黒褐色(10YR3/1)を呈する植物遺体との混合層。
7　褐灰色シルト(7.5YR5/1)。粘性やや弱い。しまりやや弱い。径0.5～3cmの植物遺体含む。径0.2～0.5cmの炭化物含む。径0.5～1cmの礫少量含む。
8　黄灰色シルト(2.5Y4/1)。粘性やや弱い。しまりやや弱い。径0.5～3cmの植物遺体含む。径0.2～0.5cmの炭化物含む。径0.5～1cmの礫含む。
9　黒褐色シルト(2.5Y3/1)。径1～10cmの黒褐色シルトブロック(7.5YR3/1)含む。径0.5～3cmの植物遺体含む。

第98図　７区・Ｐ５区土層断面図(２)



第99図　７区・Ｐ５区土層断面図（３）

列７・８がある。

一町方格の条里遺構の粗朶層や盛土内、盛土周辺からは土師器や須恵器、墨書土器、墨画土器、木製祭祀具、木製品、獣骨、鉄製鋤先が出土した。

２　条里遺構

条里14・15（第101 ～ 103図　PL.22・23・24・25－１,２・26・27－１,２）

７区の南西側を中心に、東西方向の条里14、南北方向の条里15とが交差する石敷きの一町方格の条里遺構である。検出面では盛土の肩部付近までⅣ層が堆積し、盛土頂部はⅢ層で覆われていた。

条里14の規模は４の上面幅が5.1ｍ、基底部幅が6.5ｍで、盛土の高さは92㎝である。条里15の規模は上面幅が5.9ｍ、基底部幅が7.1ｍ以上で条里14よりもやや大きく、盛土の高さは101㎝である。方位は条里14がＮ－83°－Ｗ、条里15がＮ－7°－Ｗである。

交点から北東方向は早い段階で最大幅4.5ｍの三角形状の張り出し部が構築され、条里14の東側には沈み込んだ石の上に拳大の礫を並べ、再度盛土を施す。なお、交点から南東方向には条里14の際と条里15の上に不規則な形状の盛土７がある。

古段階　任意の中央から各縦方向にベルトを通して断面を検証した。基礎の部分、粗朶層、石敷きいずれも条里14・15では新旧関係はなく、一体で構築されている。まず、北東方向の張り出し部を含め共通する盛土の基礎部を盛り、一定の高さに揃える。その上に多量の粗朶を含む砂混じりのシルト層で覆い、最終的には礫敷きを行う。

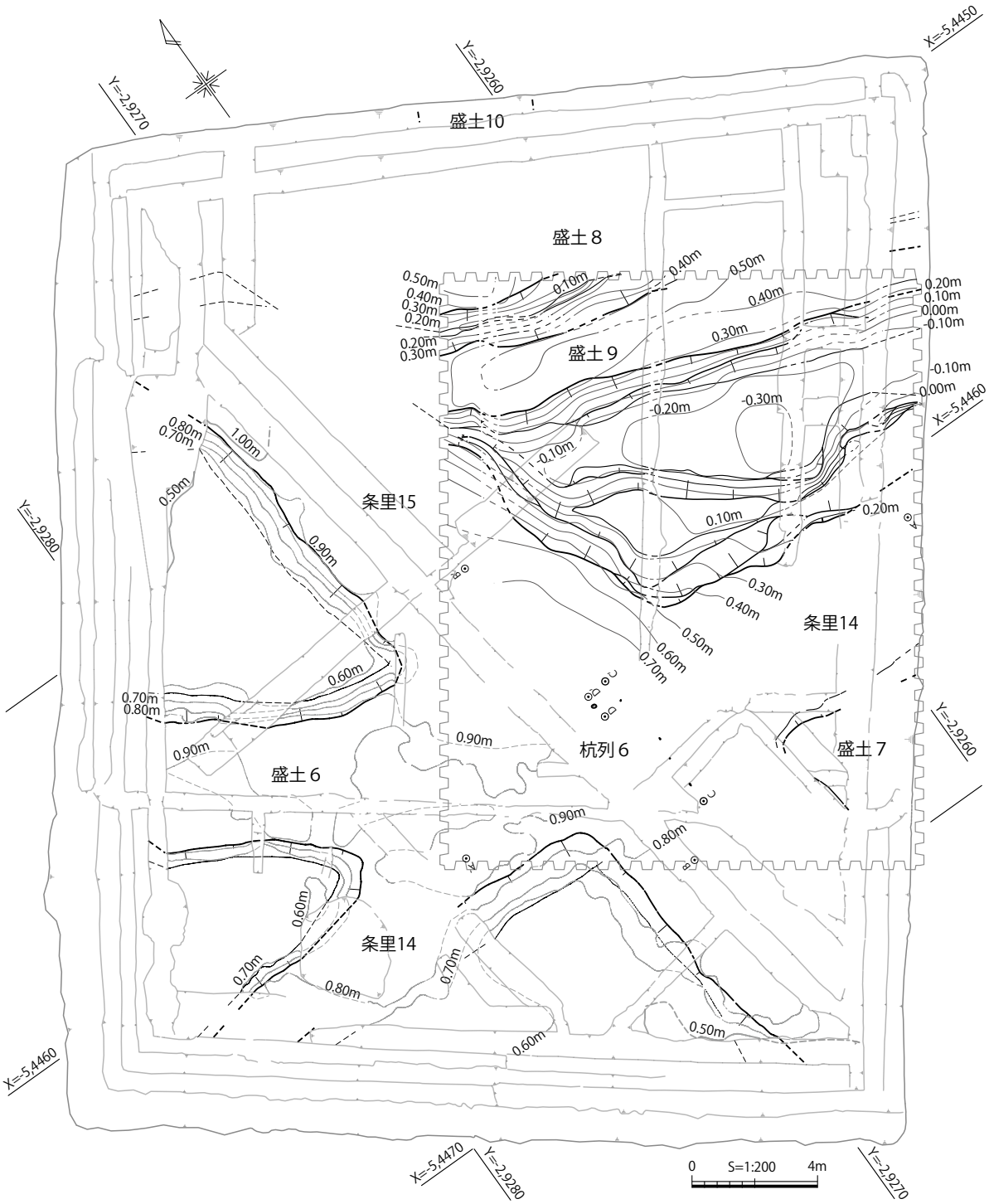
新段階　交点から東側から南側にかけて盛土の頂部が0.75ｍから0.3ｍに下がり、地形の傾斜を考慮したとしても荷重によるとみられる沈み込みが顕著である。条里14の東側の一部には多量の粗朶と砂混じりのシルト層を重ね、拳大の石群を集積させていた。沈み込みへの対処であろうことは一町方格の条里交点南側を保護するかのように北東側にテラス状の張り出し部が築かれ、盛土７が構築されていることからも窺える。７区のおいても、交点から条里14の東側では他の箇所に比べて礫や粗朶、木製品が密に出土しており、最終的に埋没するまで落ち込みは続いたようである。

遺物は土器や木製品、木製祭祀具、鉄製品、動物骨等が出土した。石敷の下にある粗朶を含む砂混じりのシルト層からは檜扇、曲物、挽物、樋、火鑽臼、農工具や漁労具、垂木を含む建築部材等、多量の木製品が、盛土の交点付近西側からは完形の鉄製鋤先Ｆ10が出土した。

条里14・15から出土した木製祭祀具には人形、馬形、舟形がある。土器には須恵器の蓋、坏、高台坏、皿、土師器の坏、高台坏、甕等があり、墨書土器や墨画土器も含まれていた。いずれも古墳時代後期から平安時代前期を主体とする。上位の粗朶層中から土師器高台坏198が出土し、これが盛土補修段階に最も近い。時期は岡田・八峠ＫⅤ期のうち、概ね10世紀中葉から後半にあたる。

獣骨は７区の調査で取り上げたB7 ～ B13と、P5区の調査で取り上げたB28 ～ B36がある。種別の明らかなものは全てウシである。条里14でB9・B28 ～ B33・B36の８点が出土している。盛土交点から南東の１盛土の南でB28・B31の中足骨２点、距骨、踵骨、調査区の南東壁付近からB9の不明部位焼骨が出土した。盛土15ではB7・B8・B10 ～ B13が出土している。７区のZ37からは頭蓋骨、遊離歯が、盛土交差部からやや北西で橈骨、上腕骨が、また盛土の交点付近からは中手骨、肩甲骨が出土した。他の条里遺構に比べて獣骨の出土が目立ち、盛土内に意図的に埋められた可能性がある。

盛土の時期は出土土器から新段階の補修が10世紀中葉から後半と考えられる。



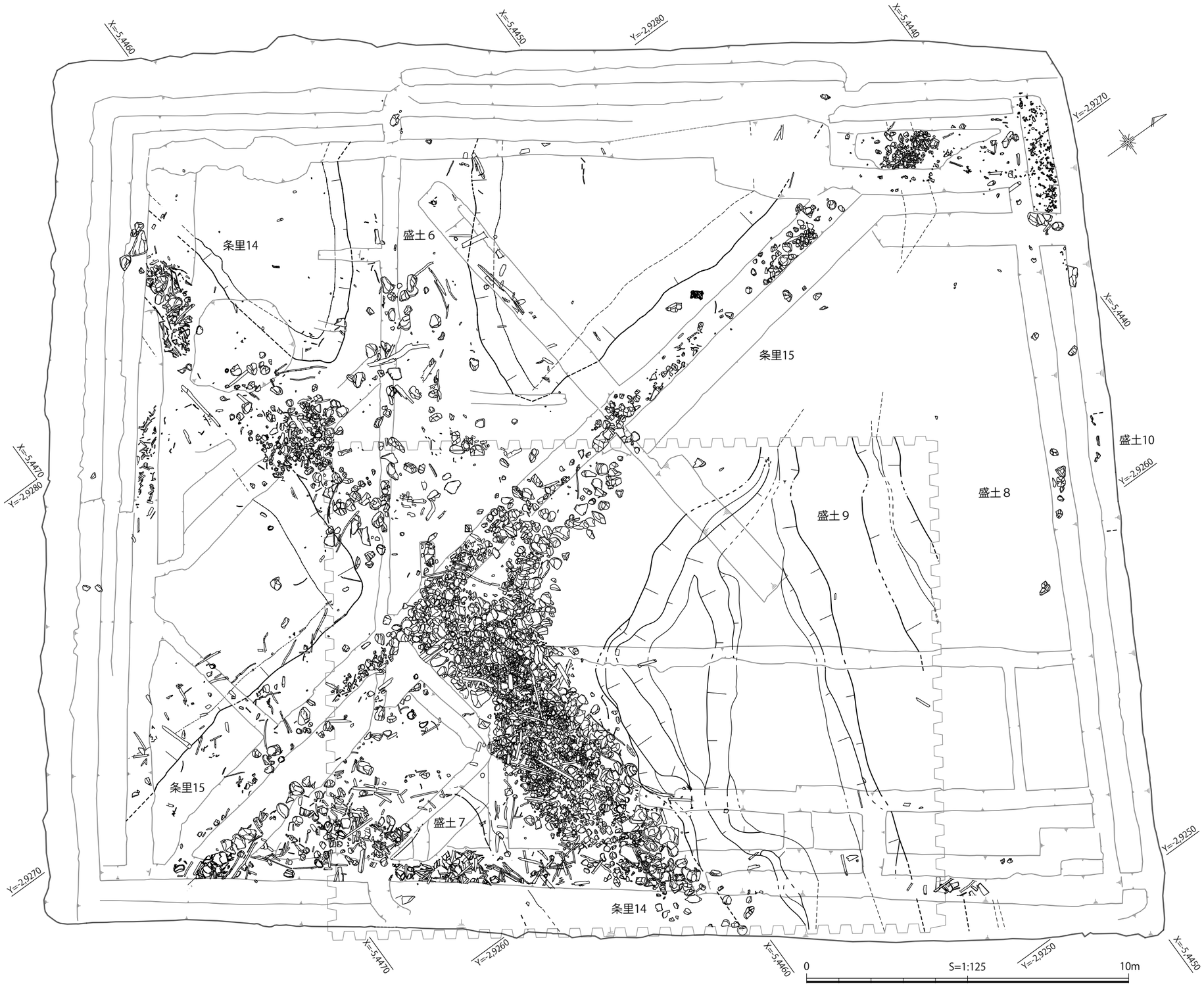
第100図　７区・Ｐ５区Ⅴ層上面遺構分布図

３　盛土遺構

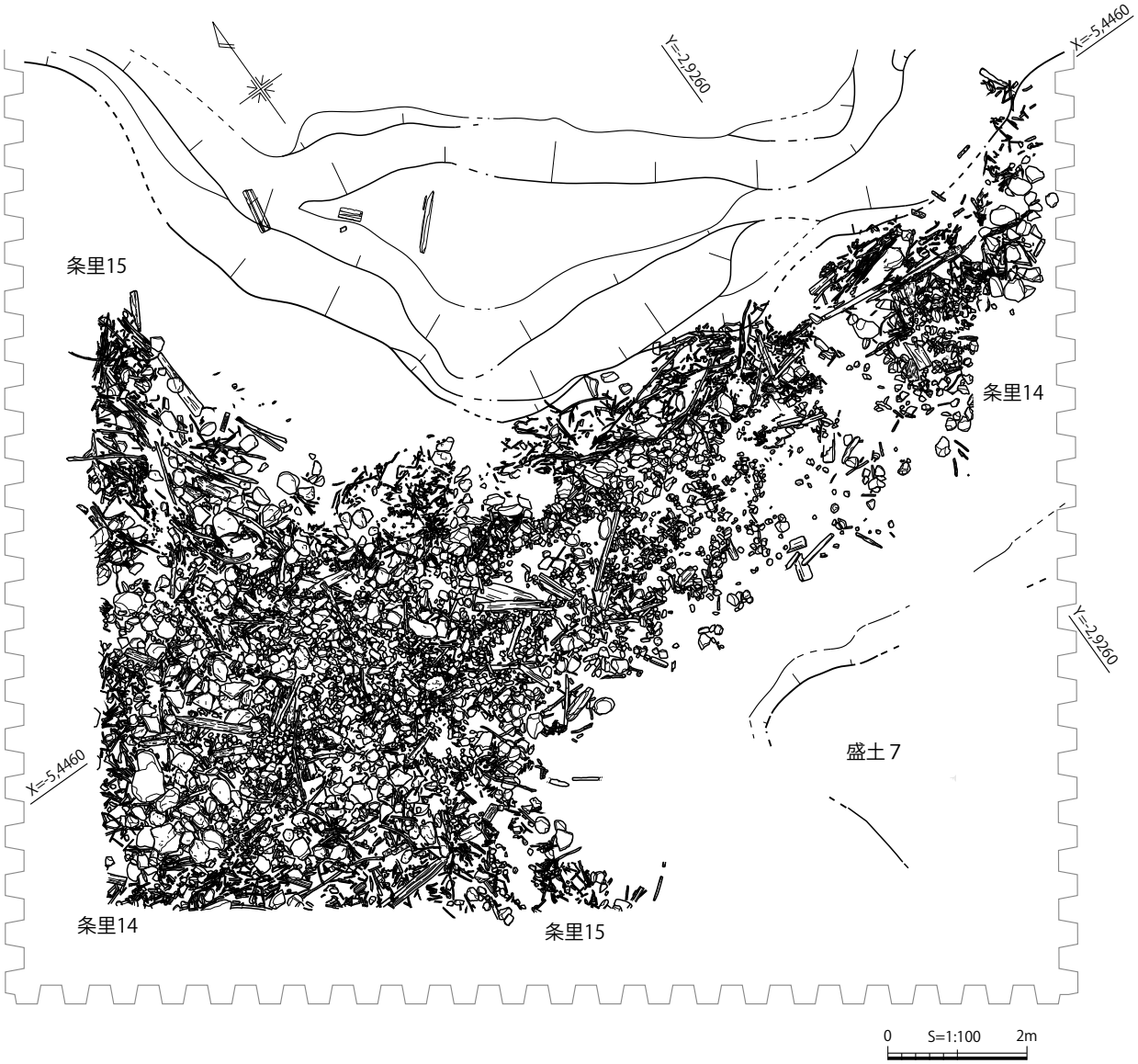
盛土６（第104図　PL.22）

７区の西側で、一町方格の条里遺構である条里14・15の交差点から北西に続く。検出面では盛土の肩部までⅣ層が堆積し、頂部はⅢ層で覆われていた。Ｐ５区の範囲内では検出していない。

規模は上面幅が4.7m、基底部幅が5.6mで、盛土の高さは49㎝である。方位はN－52°－Wである。一町条里の交点付近から北西方向に向かう。出土した土器は少なく木製祭祀具の人形のみ図化した。土層切り合い関係でみると一町方格の条里遺構である条里15が形成された後、Ⅳ－9～12層が堆積し



第101図　７区・Ｐ５区条里14・15



第102図　７区・Ｐ５区条里14・15下層礫・粗朶検出状況図

てから盛土６が構築される。西隣に位置するＰ６区も同じく南西に向かう盛土11が確認されおり、規模や方位が近似することから、一体の盛土である可能性が高い。

遺構の時期は検出層位などから10世紀後半と考えられる。具体的な性格は不明である。

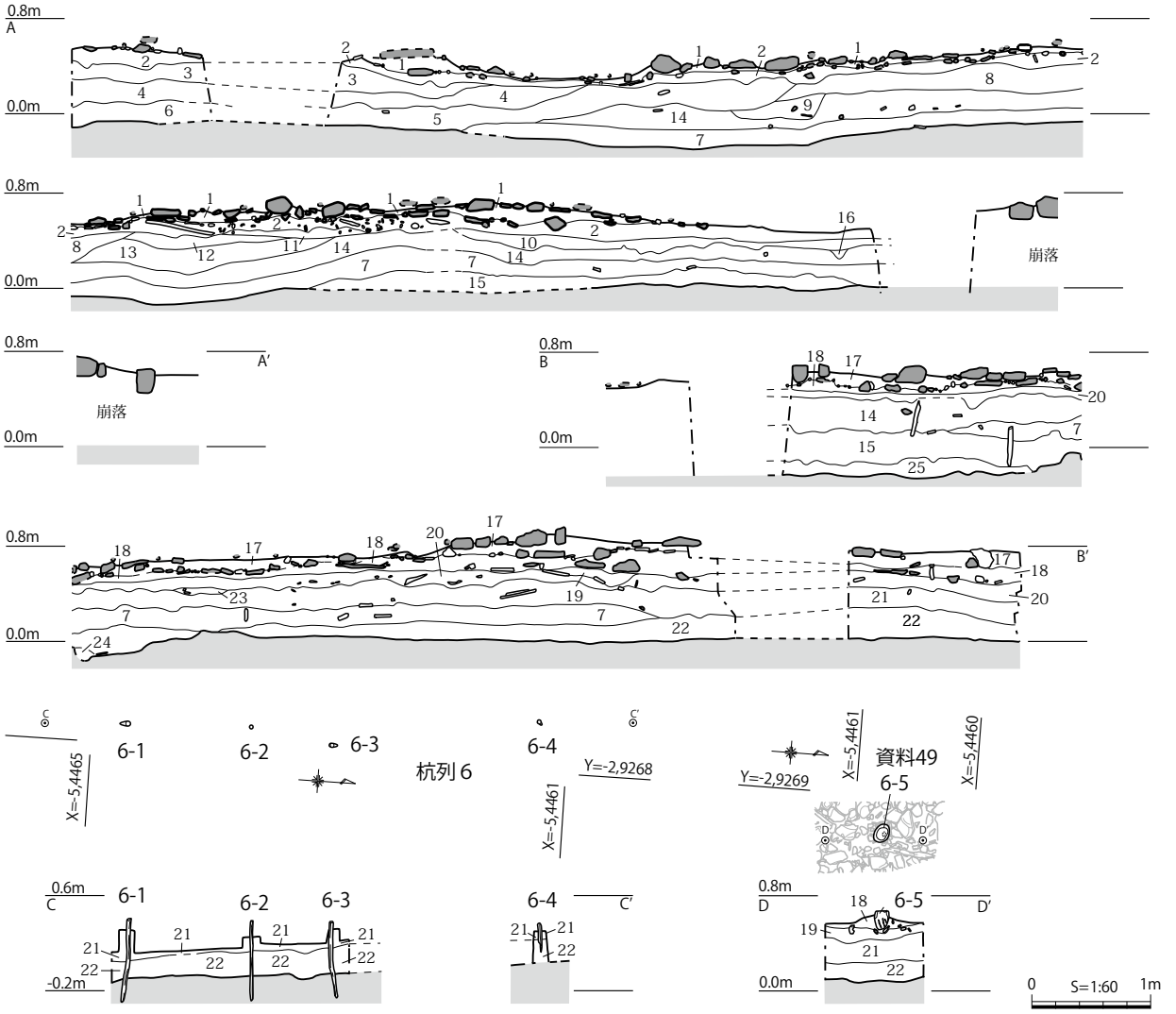
盛土７（第105図　PL.27－３）

７区の南東、P5区の調査で確認した盛土遺構である。一町方格の条里遺構の交点南東側に位置する。検出面では一部を除きほぼⅣ層に覆われていた。

規模や方位は一部のみの検出であるため、明らかにしえないが、盛土の高さは61㎝である。南東壁をみると、条里14と条里15の間を埋めるように盛土が施されており、前後関係は条里14・15よりも新しい。また、盛土内から杭列７・８を検出したが、盛土に伴うものではない。

遺物は盛土内から須恵器の坏身、高坏、土師器の埦･甕や、木製祭祀具の馬形、木製品の方形曲物、(有頭)棒状品、木錘、工具柄、把手、鋤柄、田下駄が出土した。このうち杭列７・８周辺からは正位置で須恵器高坏の坏部219が出土したが、古墳時代後期の所産である。

条里14・15より構築時期が新しいこと、基盤となる層が脆弱で、隣接する条里14の東側に多数の拳



1　褐灰色砂混じりシルト(10YR4/1)。砂主体。粘性弱い。しまり弱い。木製品を含む。粗朶を含む。 径1～5cmのにぶい黄褐色砂のブロック(10YR5/3)多く含む。径0.2～5cmの植物遺体含む。径1～10cmの礫多く含む。径10～30cmの石あり。径0.2～0.5cmの炭化物含む。径1～3cmの鉄分ブロック多く含む。

2　褐灰色砂混じりシルト(10YR4/1)。砂主体。粘性やや強い。しまりやや強い。木製品含む。粗朶を含む。径0.5～5cmの植物遺体含む。1～5cmの礫含む。径0.2～0.5cmの炭化物含む。

3　灰色シルト(5Y5/1)。粗朶を含む。径0.5～5cmの植物遺体含む。0.5～2cmの礫少量含む。径0.2～1cmの炭化物少量含む。径0.5～2cmの鉄分ブロック含む。

4　黒褐色シルト(2.5Y3/1)。木製品含む。径0.5～1cmのにぶい黄橙色粘土ブロック(10YR7/2)少量含む。径0.2～0.5cmの炭化物少量含む。径0.5～1cmの鉄分ブロック少量含む。

5　灰色砂混じりシルト(5Y4/1)。シルト主体。粘性やや強い。自然木を含む。径0.5～2cmのにぶい黄橙色粘土ブロック(10YR7/2)含む。径0.5～3cmの礫少量含む。0.2～0.5cmの炭化物少量含む。

6　灰黄褐色シルト(10YR4/2)。径0.5～5cmのにぶい黄橙色粘土ブロック(10YR7/2)多く含む。植物遺体多く含む。径0.5～3cmの礫少量含む。径0.2～0.5cmの炭化物含む。

7　灰黄褐色粘質シルト(10YR4/2～5/2)。シルト主体。 径0.5～1cmのにぶい黄橙色粘土ブロック(10YR7/2)含む。植物遺体多量に含む。径0.2～0.5cmの炭化物少量含む。径0.5～1cmの礫少量含む。

8　灰黄褐色砂混じりシルト(10YR5/2)。シルト主体。径0.5～2cmのにぶい黄橙色粘土ブロック(10YR7/2)少量含む。径0.5～1cmの植物遺体含む。径0.5～1cmの礫少量含む。径0.5～1cmの炭化物含む。径0.5～2cmの鉄分ブロック含む。

9　褐灰色シルト(10YR4/1)。木製品を含む。径0.5～1cmの植物遺体含む。径0.5～5cmの礫含む。径0.2～0.5cmの炭化物含む。

10　黒褐色シルト(10YR3/2)。径0.5～1cmのにぶい黄橙色粘土ブロック(10YR7/2)少量含む。木製品含む。径0.5～2cmの植物遺体含む。径0.5～1cmの礫少量含む。径0.2～0.5cmの炭化物含む。

11　灰色シルト(5Y5/1)。粗朶を含む。径0.5～1cmの植物遺体少量含む。径0.5～2cmの礫少量含む。径0.2～1cmの炭化物少量含む。径0.5～2cmの鉄分ブロック含む。

12　暗灰黄色シルト(2.5Y5/2)。径0.5～2cmの植物遺体少量含む。径0.5～1cmの礫少量含む。径0.2～0.5cmの炭化物少量含む。径0.5～2cmの鉄分ブロック少量含む。

13　黄灰色シルト(2.5Y4/1)。径0.5～2cmの植物遺体少量含む。径0.5～1cmの礫含む。径0.2～0.5cmの炭化物少量含む。0.5～2cmの鉄分ブロック少量含む。

14　灰黄褐色砂質シルト(10YR5/2)。シルト主体。木製品含む。粗朶を含む。径0.5～10cmの植物遺体多く含む。0.2～0.5cmの炭化物含む。径0.2～1cmの礫含む。

15　オリーブ黒色シルト～粘土(7.5Y3/1)。シルト主体。褐灰色シルト(10YR4/1)を含む。径0.5～2cmの灰白色粘土ブロック(10YR7/1)少量含む。径0.5～2cmの植物遺体少量含む。径0.5～1cmの礫少量含む。径0.2～0.5cmの炭化物少量含む。

16　褐灰色砂質シルト(10YR5/1)。シルト主体。粗朶を含む。径0.5～2cmの植物遺体含む。径0.5～1cmの礫含む。径0.2～1cmの炭化物含む。

17　褐灰色砂混じりシルト(10YR4/1)。シルト主体。粘性やや弱い。しまりやや強い。木製品含む。粗朶を含む。径0.5～5cmの植物遺体多く含む。径5～20cmの石多く含む。径20～30cmの石あり。径0.2～0.5cmの炭化物含む。

18　褐灰色砂混じりシルト(10YR5/1)。木製品含む。粗朶を多く含む。径0.5～10cmの植物遺体多量に含む。径0.5～2cmの礫少量含む。0.2～1cmの炭化物含む。0.5～3cmの鉄分ブロック多量に含む。

19　灰黄褐色砂混じりシルト(10YR4/2)。シルト主体。粘性やや弱い。粗朶を多く含む。径0.5～20cmの植物遺体多量に含む。径0.5～2cmの礫含む。径0.5～1cmの炭化物含む。

20　黄灰色シルト(2.5Y4/1)。木製品含む。径0.5～2cmの植物遺体少量含む。径0.5～2cmの礫少量含む。径0.2～1cmの炭化物少量含む。

21　褐灰色シルト(10YR4/1)。粘性ややあり。木製品を含む。径0.5～1cmの植物遺体含む。径0.5～5cmの礫含む。径0.2～0.5cmの炭化物含む。

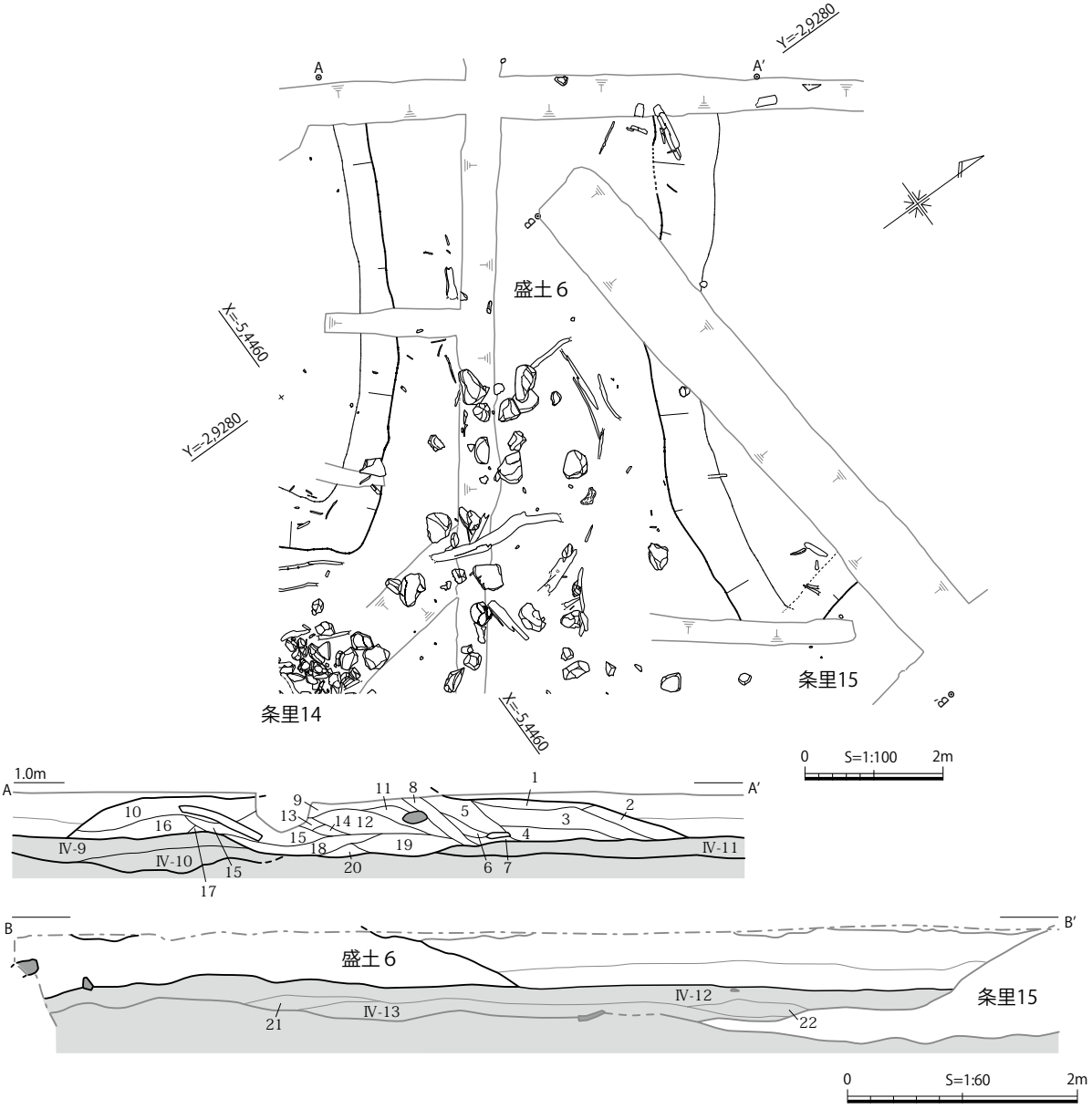
22　黒色シルト(2.5Y2/1)。粘性ややあり。径0.5～1cmのにぶい黄橙色粘土ブロック(10YR7/2)含む。径0.5～3cmの植物遺体少量含む。径0.5～5cmの礫少量含む。

23　黄灰色シルト(2.5Y4/1)。粗朶を含む。径0.5～5cmの植物遺体少量含む。径0.5～1cmの礫少量含む。径0.2～0.5cmの炭化物含む。

24　黄灰色シルト(2.5Y5/1)ブロック。径0.5～2cmの植物遺体含む。径0.5～1cmの礫含む。径0.2～0.5cmの炭化物少量含む。

25　灰黄褐色シルト(10YR4/2)。粘性やや弱い。径0.5～1cmの灰白色粘土ブロック(10YR7/1)少量含む。径0.5～5cmの植物遺体多量に含む。径0.5～2cmの礫少量含む。径0.2～1cmの炭化物含む。

第103図　７区・Ｐ５区条里14・15・杭列６土層断面図



1　にぶい黄褐色シルト（10YR5/3）植物遺体含む。砂粒微量含む。径１㎝以下の炭化物少量含む。
2　にぶい黄褐色シルト（10YR5/3）植物遺体含む。砂粒少量含む。径１㎝以下の炭化物少量含む（１より植物遺体多い）。
3　にぶい黄褐色シルト（10YR4/3）しまりやや強い。植物遺体含む。砂粒微量含む。径１㎝以下の炭化物少量含む。
4　灰黄褐色シルト（10YR4/2）植物遺体少量含む。砂粒少量含む。径１㎝以下の炭化物少量含む。
5　灰黄褐色シルト（10YR4/2）植物遺体多く含む。砂粒少量含む。径１㎝以下の炭化物少量含む。
6　灰黄褐色シルト（10YR4/2）粘性やや弱い。植物遺体少量含む。砂粒含む。径１㎝以下の炭化物含む。砂粒は細砂主体。
7　褐灰色シルト（10YR4/1）植物遺体少量含む。砂粒含む。径１㎝以下の炭化物少量含む。砂粒は細砂主体。
8　暗褐色砂質シルト（10YR3/3）粘性やや弱い。植物遺体多く含む。砂粒多く含む。径１㎝以下の炭化物含む。砂粒は細砂主体。
9　にぶい黄褐色シルト（10YR4/3）植物遺体多く含む。砂粒含む。径１㎝以下の炭化物含む。砂粒は細砂主体。
10　にぶい黄褐色シルト（10YR4/3）粘性やや強い。植物遺体含む。砂粒微量含む。径１㎝以下の炭化物少量含む。
11　灰黄褐色シルト（10YR4/2）粘性やや弱い。植物遺体多く含む。砂粒含む。径１㎝以下の炭化物含む。砂粒は細砂主体。
12　灰黄褐色砂質シルト（10YR4/2）粘性やや弱い。粗朶を多量に含む。砂粒多く含む。径１㎝以下の炭化物多く含む。砂粒は細砂主体。
13　灰黄褐色シルト（10YR4/2）植物遺体少量含む。砂粒微量含む。径１㎝以下の炭化物微量含む。
14　暗褐色シルト（10YR3/3）植物遺体含む。砂粒含む。径１㎝以下の炭化物少量含む。砂粒は細砂主体。
15　灰黄褐色シルト（10YR4/2）植物遺体少量含む。砂粒含む。径１㎝以下の炭化物少量含む。砂粒は細砂主体。
16　灰黄褐色シルト（10YR4/2）植物遺体少量含む。砂粒含む。径１㎝以下の炭化物少量含む。砂粒は細砂主体。
17　にぶい黄褐色シルト（10YR4/3）植物遺体少量含む。砂粒含む。径１㎝以下の炭化物微量含む。砂粒は細砂主体。
18　褐灰色シルト（10YR4/1）粘性やや弱い。植物遺体含む。砂粒含む。径１㎝以下の炭化物含む。砂粒は細砂主体に中～粗砂まで混じる。
19　灰黄褐色砂質シルト（10YR5/2）粘性やや弱い。しまり強い。植物遺体多く含む。砂粒多量に含む。径１㎝以下の炭化物含む。砂粒は細砂主体。
20　灰黄褐色砂質シルト（10YR5/2）粘性やや弱い。しまりやや強い。植物遺体含む。砂多く含む。径１㎝以下の炭化物少し含む。砂粒は細砂主体。
21　褐灰色シルト（10YR4/1）植物遺体少し含む。砂粒少し含む。
22　褐灰色シルト（10YR5/1）植物遺体少し含む。砂粒含む。砂粒は細砂主体。
Ⅳ-9　灰黄褐色砂質シルト（10YR5/2）。粘性やや弱い。植物遺体含む。砂粒含む。径１㎝以下の炭化物を少し含む。砂粒は細砂主体。
Ⅳ-10　褐灰色シルト質砂（10YR6/1）。粘性弱い。しまりやや弱い。植物遺体含む。砂粒は細砂主体。黄褐色シルト（10YR4/2）と一部ラミナ状を呈する。径１㎝以下の炭化物少し含む。
Ⅳ-11　褐灰色シルト（10YR5/1）。粘性やや弱い。植物遺体少し含む。砂粒含む。径１㎝以下の炭化物少し含む。砂粒は細砂主体。
Ⅳ-12　灰黄褐色シルト（10YR4/2）植物遺体含む。砂粒含む。砂粒は細砂主体。
Ⅳ-13　黄灰色シルト（2.5Y5/1）植物遺体少し含む。砂粒少し含む。径１㎝以下の明褐灰色粘土粒（5YR7/2）微量含む。

第104図　７区・Ｐ５区盛土６

大の礫が集積していること、盛土の範囲が条里14・15に沿うように広がること、盛土中に多量の木製品を含むことからみて条里14・15の北東部と同様に、周囲の沈下に対応した盛土と考えられる。

盛土８（第106図　PL.25－２,３）

７区の北東壁際を東西方向に延びる盛土遺構である。南隣には盛土９がある。検出面では肩部までⅣ層が堆積し、頂部はⅢ層に覆われていた。

規模は基底部幅が7.4m以上で、盛土の高さは102cmである。７区北隅の北西壁トレンチでは盛土基底部に礫敷を検出したものの、部分的であるため全体の様相は明らかではない。北東壁中央では盛土10を埋めているほか、北西壁から３m東の第106図Ａ－Ａ’では、条里15の盛土裾に盛り上げる。

遺物は礫敷や盛土内から須恵器や土師器の小片が出土した。須恵器は蓋・坏身・高坏・甕、土師器の坏・埦、土玉239、木製品の部材が出土した。遺構の時期にちかいのは黒色土器228と土師器の底部230で、岡田・八峠編年Ⅳ期、９世紀後半から10世紀初頭で、条里14・15の古段階より新しい。

盛土９（第106図）

７区の南東壁、Ｐ５区の北東側で検出した。複数に分層されるⅣ層により覆われており、上層から掘り下げつつ検出を行った。

規模は上面幅が2.3m、基底部幅が3.6 ～ 4.9mで、盛土の高さは48cmである。方位はN－71°－Wで、東西方向からやや北に振れる。Ｐ５区の北西側延長上で条里15に接続するとみられるが、推定での接点は７区の範囲であるため関係性を明確にできない。

出土した土器に図化し得るものはない。木製祭祀具は人形と馬形、斎串、木製品の容器、部材、角形曲物、本遺構の時期は７区の北西壁で土層が確認できないため、条里15と同時期、もしくは新しいと考えられる。丘陵裾の地形に沿うように東西方向に延びる盛土遺構であるが、具体的な性格は特定できない。

盛土10（第106図）

７区の北東壁面で断面のみ確認した。規模は幅が 3.5 mで、盛土の高さは５～ 13cmである。上部を盛土８に覆われているためそれより古い時期に築かれている。性格は不明である。

４　杭列

杭列６（第100・103図）

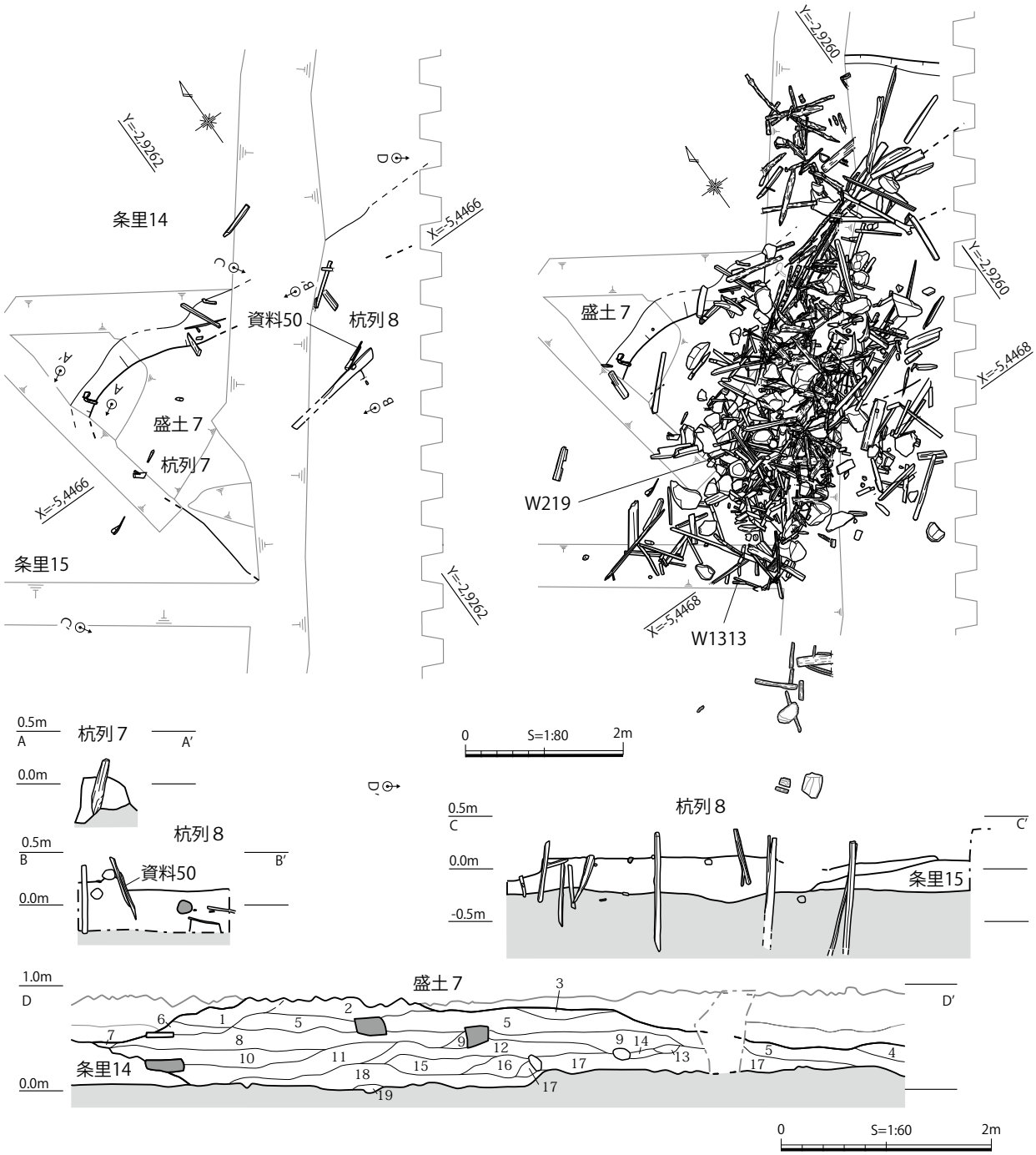
Ｐ５区の南西側に位置する。条里 14・15 の交点付近に構築された杭列である。Ｃ－Ｃ’は方位がＮ－４°－Ｗで、杭４本（６－１～４）からなる。打設間隔は南から 1.05 m、0.7 m、1.75 mである。Ｄ－Ｄ’は単独のやや太い杭（６－５）で、径 15cm、長さ 20cm程である。表面は炭化している。前者が基盤層に打設されているのに対して、後者は杭の下端が基底部に達していない。

基底部に打設された６－１～４は条里14・15の交点付近に位置し、条里15の中軸ラインに沿うことから、条里地割を基準として打設され、６－５については条里14･15の改修段階に伴う可能性がある。

杭６－５、資料49の放射性炭素年代測定では、２σ暦年代範囲で673－770 cal AD(95.4%)で、７世紀後半から８世紀後半の暦年代を示す。最終形成年輪を含めて測定が行われているため、建物等に使われていた古材等の転用が考えられる。

杭列７・８（第105図　PL.28－１）

杭列７はＰ５区の南東にある。盛土７の掘り下げ中に検出した。10 本の杭が５～ 80cm間隔に並ぶ。



1　灰黄褐色シルト（10YR5/2）。粘性やや強。しまりやや強。植物遺体少含む。砂粒少含む。径１㎝以下の炭化物粒微含む。径１～５㎝程度の小礫微含む。径１㎝以下の明褐灰色（5YR7/2）粘土ブロック粒少量含む。

2　にぶい黄褐色シルト（10YR4/3）。植物遺体含む。砂粒微含む。径１㎝以下の炭化物粒少含む。

3　灰黄褐色シルト（10YR5/2）。しまりやや強。植物遺体少含む。砂粒少含む。径１㎝以下の炭化物粒微含む。

4　灰黄褐色シルト（10YR4/2）。しまりやや強。植物遺体含。砂粒微含む。径１㎝以下の炭化物粒少含む。

5　にぶい黄褐色シルト（10YR5/3）。粘性やや強い。植物遺体少含む。砂粒微含む。径１㎝以下の炭化物粒少含む。径１～５㎝程度の小礫少含む。径１㎝以下の明褐灰色（5YR7/2）粘土ブロック粒少含む。

6　灰黄褐色シルト（10YR5/2）。粘性やや強い。植物遺体少含む。径１㎝以下の炭化物粒微含む。径１㎝以下の明褐灰色（5YR7/2）粘土ブロック粒微含む。

7　灰黄褐色シルト（10YR5/2）。粘性やや強い。しまりやや強い。植物遺体少含む。径１㎝以下の炭化物粒少含む。

8　灰黄褐色シルト（10YR4/2）。しまりやや強い。植物遺体含む。砂粒微含む。径１㎝以下の炭化物粒少含む。径１～５㎝程度の小礫少含む。径１㎝以下の明褐灰色（5YR7/2）粘土ブロック粒微含む。

9　灰黄褐色シルト（10YR4/2）。植物遺体多含む。砂粒微含む。径１㎝以下の炭化物粒少含む。径１～5㎝程度の小礫少含む。径１㎝～人頭大程度の礫含む。棒・板状の木材含む。

10　灰黄褐色シルト（10YR5/2）。粘性やや強い。しまりやや強い。植物遺体少含む。径１㎝以下の炭化物粒少含む。径１～５㎝程度の小礫微含む。径１㎝以下の明褐灰色（5YR7/2）粘土ブロック粒少含む。

11　にぶい黄褐色シルト（10YR5/3）。しまりやや強い。植物遺体含む。径１㎝以下の炭化物粒含む。径１～５㎝程度の小礫含む。

12　褐色シルト（10YR4/6）。植物遺体多含む。砂粒微含む。径１㎝以下の炭化物粒含む。径１～5㎝程度の小礫含む。植物遺体多数含む。

13　暗灰色シルト（10YR4/5）。植物遺体微含む。径１㎝以下の炭化物粒微含む。径１～５㎝程度の小礫微含む。

14　にぶい黄褐色シルト（10YR5/3）。粘性やや強い。植物遺体微含む。

15　暗褐色シルト（10YR3/4）。植物遺体非常に多含む。砂粒微含む。径１㎝以下の炭化物粒少含む。径１～５㎝程度の小礫少含む。

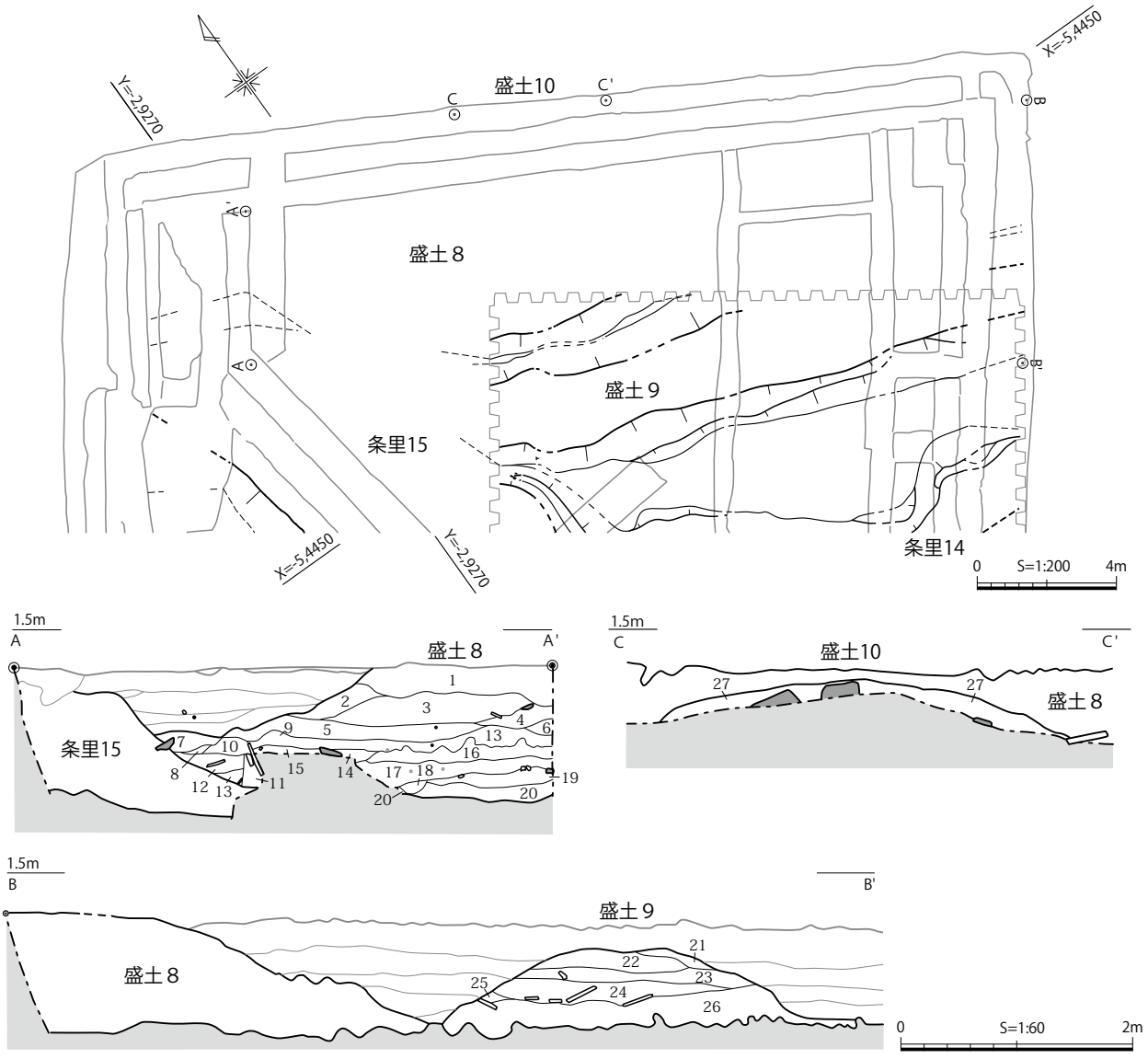
16　暗褐色シルト（10YR3/3）。粘性やや強い。しまりやや強い。植物遺体多含む。径１～５㎝程度の小礫微含む。

17　黒褐色シルト（10YR3/2）。粘性やや強い。しまりやや強い。植物遺体含む。径１㎝以下の炭化物粒微含む。径１～５㎝程度の小礫微含む。径１㎝以下の明褐灰色（5YR7/2）粘土ブロック粒少含む。

18　灰黄褐色シルト（10YR4/2）。植物遺体多含む。砂粒多含む。径１㎝以下の炭化物粒少含む。径１～５㎝程度の小礫少含む。砂粒は細砂主体。

19　黒褐色シルト（10YR3/2）。粘性やや強い。植物遺体少含む。砂粒微含む。径１㎝以下の炭化物粒少含む。

第105図　７区・Ｐ５区盛土７・杭列７・８



盛土８

1　にぶい黄褐色シルト（10YR5/3）。植物遺体少量含む。砂粒少量含む。径～１cmの炭化物少量含む。

2　灰黄褐色シルト（10YR4/2）。植物遺体少量含む。砂粒少量含む。径～１cmの炭化物少量含む。

3　にぶい黄褐色シルト（10YR5/3）。植物遺体少量含む。砂粒含む。径～１cmの炭化物少量含む。

4　灰黄褐色シルト（10YR4/2）。しまりやや強。植物遺体少量含む。砂粒多く含む。径～１cmの炭化物少量含む。

5　灰黄褐色シルト（10YR5/2）。粘性やや強。しまりやや強。植物遺体少量含む。砂粒多く含む。径～１cmの炭化物少量含む。

6　灰黄褐色シルト（10YR4/2）。粘性やや強。植物遺体含む。径１～10cm程度の小礫少量含む。砂粒微量含む。径～１cmの炭化物少量含む。

7　灰黄褐色シルト（10YR4/2）。しまりやや強。植物遺体含む。砂粒含む。径～１cmの炭化物少量含む。

8　暗褐色シルト（10YR3/3）。しまりやや強。植物遺体少量含む。径１～10cm程度の小礫少量含む。砂粒少量含む。径～１cmの炭化物微量含む。

9　にぶい黄褐色シルト（10YR4/3）。しまりやや強。粘性やや強。植物遺体少量含む。砂粒少量含む。径～１cmの炭化物少量含む。

10　灰黄褐色シルト（10YR4/2）。植物遺体少量含む。砂粒微量含む。径～１cmの炭化物微量含む。

11　にぶい黄褐色シルト（10YR4/3）。粘性やや強。しまりやや強。植物遺体少量含む。砂粒微量含む。径～１cmの炭化物微量含む。

12　黒褐色シルト（10YR3/2）。粘性やや強。しまりやや強。植物遺体含む。砂粒少量含む。径～１cmの炭化物少量含む。

13　褐色シルト（10YR4/4）。粘性やや強。しまりやや強。植物遺体少量含む。径１～10cm程度の小礫少量含む。砂粒微量含む。径１～cmの炭化物微量含む。

14　灰黄褐色シルト（10YR4/2）。粘性やや強。しまりやや強。植物遺体少量含む。砂粒微量含む。径～１cmの炭化物微量含む。

15　暗灰色シルト（10YR4/1）。粘性やや強。しまりやや強。砂粒微量含む。径～１cmの炭化物含む。

16　灰黄褐色シルト（10YR4/2）。粘性やや強。しまり強。植物遺体少量含む。径～１cmの炭化物少量含む。径１～10cm程度の小礫微量含む。

17　灰黄褐色シルト（10YR5/2）。粘性やや強。しまり強。植物遺体少量含む。径～１cmの炭化物微量含む。

18　褐灰色シルト（10YR4/1）。しまり強。植物遺体少量含む。径１～３cm程度の小礫多く含み、固くしまる。砂粒多く含む。細砂主体。径～１cmの炭化物少量含む。

19　灰黄褐色（10YR5/2）～にぶい黄褐色（10YR5/3）シルト。粘性やや強。しまりやや強。径～１cmの明褐灰色（5YR7/2）粘土粒多量に含む。植物遺体多く含む。砂粒少量含む。径～１cmの炭化物微量含む。

20　褐灰色（10YR5/1）～にぶい黄褐色（10YR4/3）シルト。粘性やや強。しまりやや強。植物遺体少量含む。砂粒少量含む。径～１cmの炭化物微量含む。

盛土９

21　にぶい黄褐色シルト（10YR4/3）粘性やや強。しまりやや強。植物遺体少含。砂粒含。径１cm以下の炭化物粒微含。

22　灰黄褐色シルト（10YR5/2）粘性やや強。しまりやや強。植物遺体少含。砂粒多含。径１cm以下の炭化物粒微含。径１～10cm程度の小礫微含。

23　灰黄褐色シルト（10YR4/2）粘性やや強。しまりやや強。植物遺体少含。砂粒含。径１cm以下の炭化物粒微含。径１～10cm程度の小礫少含。

24　にぶい黄褐色シルト（10YR4/3）しまりやや強。植物遺体少含。砂粒微含。径１cm以下の炭化物粒少含。

25　にぶい黄褐色シルト（10YR4/3）植物遺体少含。砂粒微含。径１cm以下の炭化物粒少含。

26　灰黄褐色シルト（10YR5/2）粘性やや強。しまり強。植物遺体少含。砂粒微含。径１cm以下の炭化物粒微含。

盛土10

27　褐灰色シルト（10YR4/1）。粘性やや強。しまりやや強。植物遺体含む。径～1cmの小礫から人頭大礫を含む。径～1cmの小礫、砂粒含。径～1cmの炭化物少量含む。

第106図　７区・Ｐ５区盛土８～10

方位はＮ－59°－Ｅである。主軸は条里や盛土の向きとは対応しない。

杭列８はＰ５区の南東隅にある。４盛土の掘り下げ中に検出した。６本の杭が５～65㎝間隔に並ぶ。方位はＮ－９°－Ｅである。主軸は条里や盛土の向きとは対応しない。

杭列８のP5－W761、資料番号50（PLD－32184）は２σ暦年代範囲で418－537 cal AD (95.4%)、紀元後５世紀前半～６世紀前半の暦年代を示した。これは、古墳時代中期から後期に相当する。ただし、これは芯材で古木効果の影響を受けるため、時期はこれよりも下る。

盛土７内で検出したものの、時期差が大きいため、盛土に伴うとは考えにくい。周辺から古墳時代中期から後期の須恵器が出土しており、杭の年代とも共通しているため、何らかの木造構造物の一部と考えておきたい。

第３項　Ⅵ層上面の遺構（弥生時代後期～古墳時代中期）

１　概要（第107図）

Ｐ５区の北東側で東西方向に軸をもつ溝と北東岸で木造構造物を検出した。木造構造物の北側には北東方向に向かう溝状の落ち込みがあり、溝の水を北東側に引き込むための導水施設と考えられる。

遺物は少量ではあるが弥生土器、土師器、木製品が出土した。

２　溝

溝７（第108図　ＰＬ.28－２）

Ｐ５区東隅で検出された溝である。方位はN－25°－Wで、南北に延びる。規模は幅3.7ｍで、深さは最大で0.97ｍを測る。南東と北東壁面の断面観察では、南東壁では溝に遡る段階で－1.1ｍの落ち込みに丸太を芯に－0.75ｍまで盛土し、北端で－0.9ｍの方向に水を流し、水面を上げるために底面をかさ上げし、侵食に対応して溝の東岸も整え、盛土と矢板を立てる。

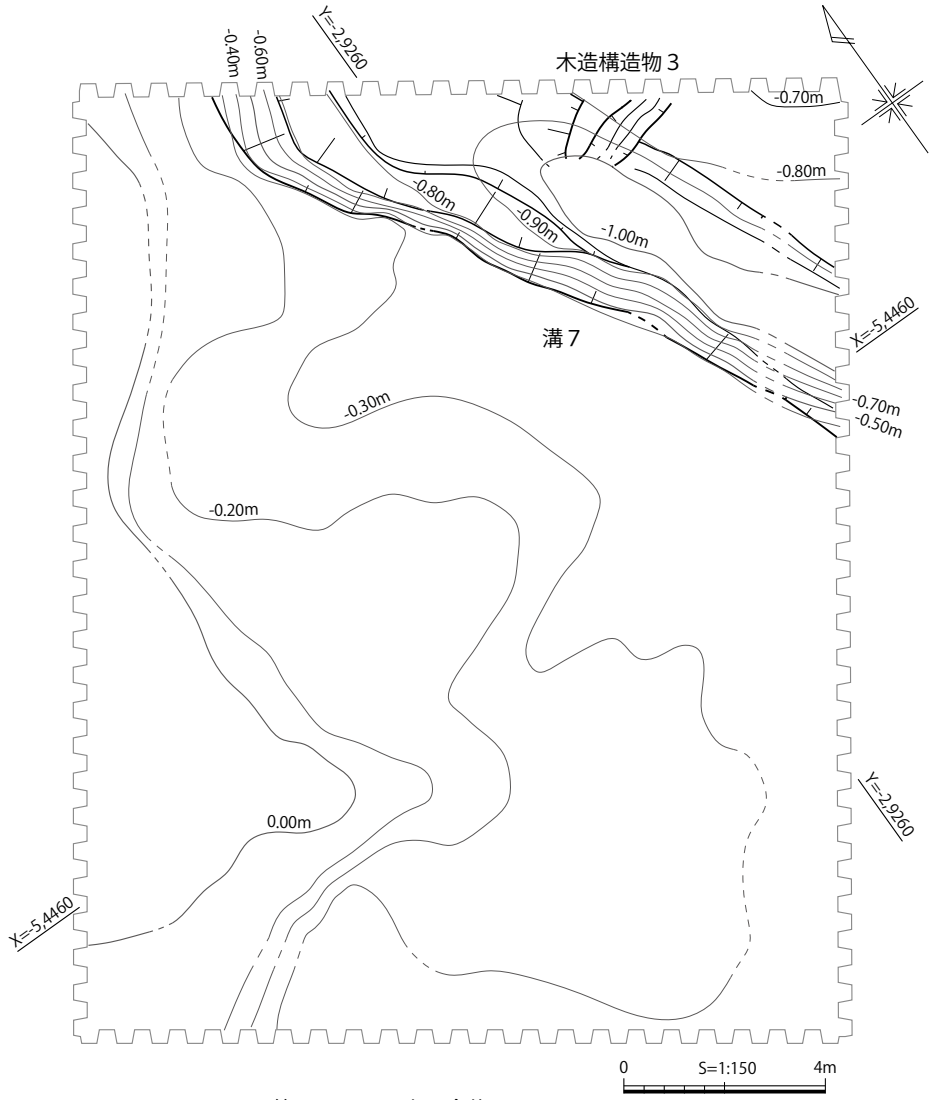
溝の改変を復元すると、木造構造物３の北側に丸太２本を流れと直角方向に入れ、上流側に拳から人頭大の礫群を芯として川の西岸を埋める。南東から溝の北東側に沿うように拳から人頭大の礫を列状に並べて芯とし､溝の東岸を埋める。東西両方向の川岸を狭め､木造構造物３の直後で水位を高め、木造構造物に伴う溝から必要な水を東方向へ流すと考えられる。15層は砂礫を含むシルト層で、水が流れていることを示す堆積である。

出土遺物は弥生土器と土師器、木製品の田下駄、櫂W1317がある。弥生土器の無頸壺241は溝の底と下層との境付近から出土し、溝が機能した段階はこれよりも下る。また矢板列の年代測定の結果は弥生時代中期以降であり、年代的にも矛盾はない。埋土中から古墳時代中期以降の土師器埦240が出土しており、これが埋没段階に近い遺物であろう。性格は自然流路を改変した溝である。

３　木造構造物

木造構造物３（第108図）

Ｐ５区の北西際、溝７の東側で検出した。溝とほぼ直行するように10枚程の矢板を列状に立て、盛土で固定していた。矢板の向かいは木根を芯とした盛土があり、両遺構の間は北西方向に向かい溝状に窪む。木造構造物３の方位は溝７と同じN－65°－Eであるが、木造構造物３は平面からみると北を凸とするアーチ状に立てられているため、溝７から離れるにつれて東に向きを変える。



第107図　７区・Ｐ５区Ⅵ層上面遺構分布図

盛土内から出土した矢板について年代測定を行った。資料番号 51（PLD － 32185）は 2 σ暦年代範囲で 201 － 88 cal BC（91.3%）及び 76 － 58 cal BC（4.1%）で、紀元前 3 世紀末から 1 世紀中頃の暦年代を示した。弥生時代中期に相当するものの芯材で古木効果の影響を受けていると考えられるため、時期はこれよりも下る。

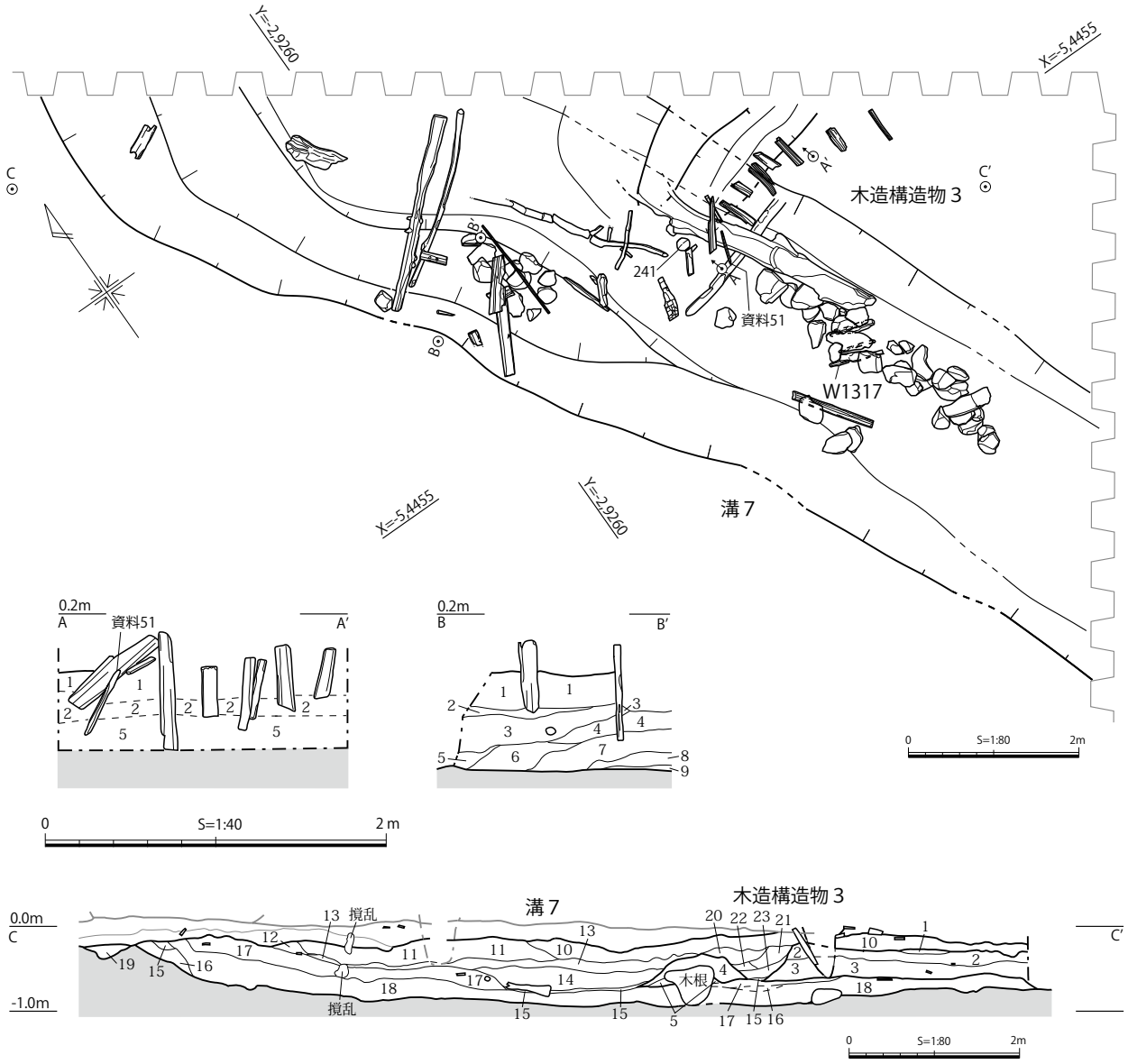
遺構の性格は溝を流れる水の一部を右岸、東方向に流すための施設と考えられる。

第５項　Ⅶ層上面の遺構（弥生時代中期～後期）

１　概要（第109図）

Ⅶ層はシルトを主体とし、Ⅵ層と異なり植物遺体をほとんど含まない。厚さは0.15 ～ 0.3mで、調査区のほぼ全域に堆積し、標高－0.5 ～－0.7mまで北西から南東方向に向かい緩く下がる。

Ｐ５区北東隅から浅い土坑を１基検出した。Ⅶ層中からは突帯文土器と弥生時代前期の土器が少量出土した。



1　褐灰色シルト(10YR4/1)。木製品含む。径0.5～5cmの植物遺体含む。径0.5～5cmの礫含む。径0.2～2cmの炭化物含む。
2　灰黄褐色シルト(10YR6/2)。木製品含む。径0.5～5cmの植物遺体含む。径0.5～3cmの礫含む。径0.2～3cmの炭化物含む。
3　褐灰色シルト(7.5YR4/1)。径0.5～2cmの明褐灰色粘土ブロック(7.5YR7/1)含む。自然木含む。径0.5～5cmの植物遺体含む。径0.5～2cmの礫少量含む。径0.2～1cmの炭化物少量含む。径0.5～2cmの鉄分ブロック少量含む。
4　灰色シルト(5Y5/1)。径0.5～1cmの明褐灰色粘土ブロック(7.5YR7/1)少量含む。径0.5～3cmの植物遺体少量含む。径0.2～1cmの炭化物少量含む。径0.5～2cmの鉄分ブロック少量含む。
5　黒褐色シルト(10YR3/1)。径0.5～5cmの植物遺体含む。径0.2～1cmの炭化物少量含む。径0.5～2cmの鉄分ブロック少量含む。
6　褐灰色シルト(7.5YR5/1)。しまりやや弱い。径0.5～5cmの植物遺体含む。径0.5～3cmの礫少量含む。径0.2～1cmの炭化物含む。径0.5～2cmの鉄分ブロック含む。
7　黄灰色シルト(2.5Y5/1)。径0.5～5cmの植物遺体含む。径0.5～3cmの礫少量含む。径0.2～2cmの炭化物含む。径0.5～2cmの鉄分ブロック少量含む。
8　褐灰色シルト(7.5YR4/1)。径0.5～5cmの植物遺体少量含む。径0.5～3cmの礫少量含む。径0.2～0.5cmの炭化物含む。
9　明褐灰色粘土(7.5YR7/1)。粘性強い。径5～10cmの褐灰色粘土ブロック(10YR6/1)多量に含む。径0.2～1cmの炭化物少量含む。
10　褐灰色シルト(7.5YR4/1)。径0.5～3cmの明褐灰色粘土ブロック(7.5YR7/1)含む。径0.5～3cmの植物遺体含む。径0.5～1cmの礫少量含む。径0.2～0.5cmの炭化物含む。
11　灰黄褐色シルト(10YR4/2)。しまりやや弱い。径0.5～1cmの明褐灰色粘土ブロック(7.5YR7/1)含む。径0.5～5cmの植物遺体含む。径0.5～1cmの礫少量含む。径0.2～3cmの炭化物含む。
12　褐灰色シルト(10YR5/1)。しまりやや弱い。径0.5～1cmの植物遺体含む。径0.5～2cmの礫含む。径0.2～1cmの炭化物含む。
13　褐灰色シルト(7.5YR5/1)。しまりやや弱い。径0.5～1cmの明褐灰色粘土ブロック(7.5YR7/1)少量含む。径0.5～5cmの植物遺体多量に含む。径0.5～2cmの礫少量含む。径0.2～2cmの炭化物含む。
14　にぶい黄褐色砂質シルト(10YR5/3)。シルト主体。粘性弱い。しまり弱い。径0.5～10cmの植物遺体多量に含む。径0.5～2cmの礫含む。径0.2～0.5cmの炭化物含む。
15　灰黄褐色シルト(10YR4/2)。径5～20cmの自然木多く含む。径0.5～10cmの植物遺体多量に含む。径0.5～2cm砂礫含む。径0.2～1cmの炭化物含む。
16　にぶい黄褐色シルト(10YR5/3)。径5～30cmの自然木含む。径0.5～5cmの植物遺体多量に含む。径0.5～3cmの礫含む。径0.2～2cmの炭化物含む。
17　黄灰色シルト(2.5Y5/1)。粘性弱い、しまりやや弱い。径0.5～5cmの植物遺体含む。径0.5～2cmの礫含む。径0.2～0.5cmの炭化物含む。
18　褐灰色シルト(7.5YR5/1)。径5～10cmの自然木含む。径0.5～5cmの植物遺体含む。径0.5～2cmの礫少量含む。径0.2～2cm炭化物多量に含む。
19　灰黄褐色シルト(10YR4/2)。自然木含む。径0.5～5cmの植物遺体含む。径0.5～2cm礫少量含む。径0.2～2cmの炭化物含む。
20　暗灰黄色粗砂～シルト(2.5Y5/2)。粗砂主体。粘性弱い。しまり弱い。径0.5～5cmの植物遺体多量に含む。径0.5～2cmの礫含む。径0.2～2cmの炭化物含む。
21　黄灰色細砂～シルト(2.5Y4/1)。シルト主体。粘性やや弱い。しまりやや弱い。径0.5～3cmの植物遺体多量に含む。径0.3～2cmの礫含む。径0.2～3cmの炭化物含む。
22　黄灰色細砂～シルト(2.5Y5/1)。シルト主体。粘性弱い、しまり弱い。径0.5～5cmの植物遺体多量に含む。径0.5～2cmの礫含む。径0.2～2cmの炭化物含む。
23　灰黄褐色細砂～シルト(10YR5/2)。シルト主体。粘性やや弱い。径0.5～3cmの植物遺体含む。径0.5～1cmの礫少量含む。径0.2～1cmの炭化物含む。

第108図　７区・Ｐ５区溝７・木造構造物３

２　土坑

土坑４（第110図）

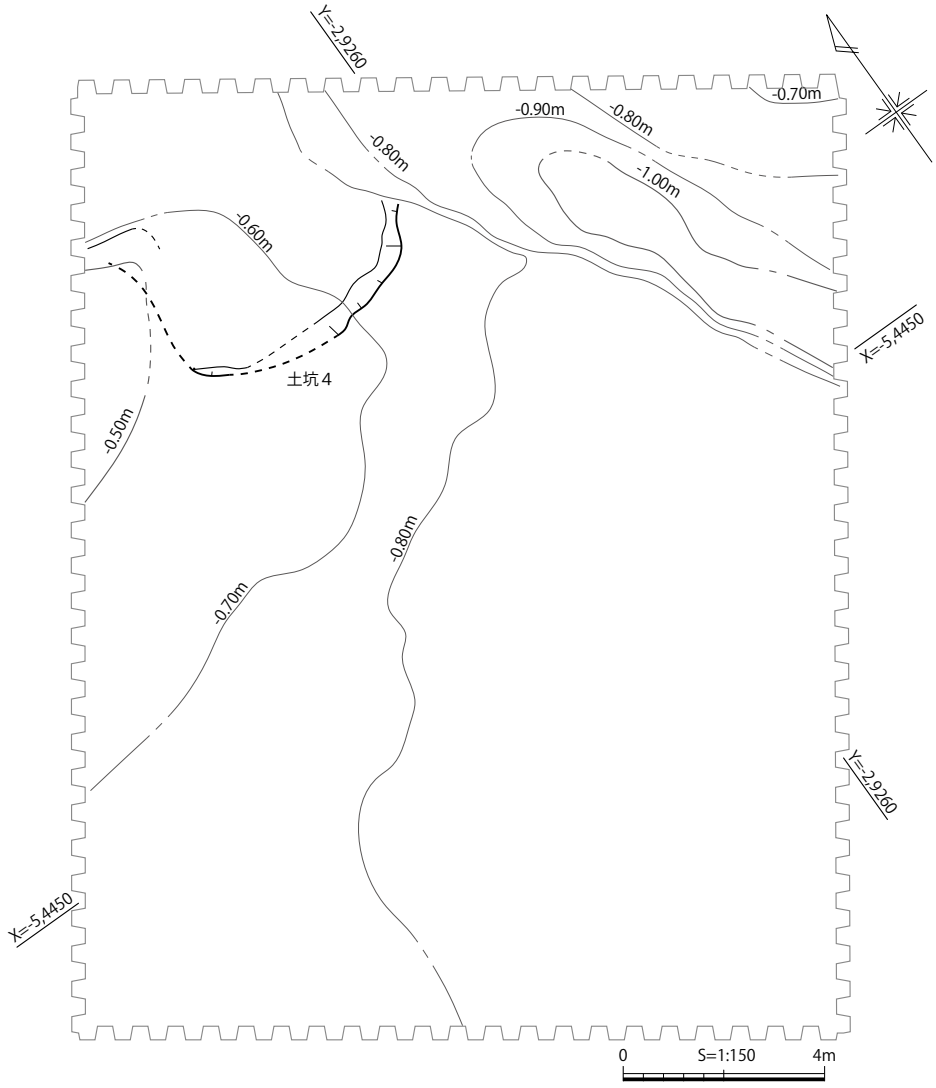
Ｐ５区の北隅付近にあり、北東側は溝７に掘削され、北側は調査区外となる。平面は不整形で、東西約4.8m、南北5.4m以上、深さは最大で0.28mを測る。北側の立ち上がりは調査区の北端にあたるため検出していない。平面形が一旦は括れるため土坑と判断したが、北に向かい再度広がる可能性もある。土坑の南側に径約0.3m、長さ約3.8mの半截された丸太が遺構外まで延びる。その他に、建築部材や田下駄W1301・W1302、多数の自然木とともに弥生土器が出土した。

243は弥生時代中期の壺である。性格は不明である。

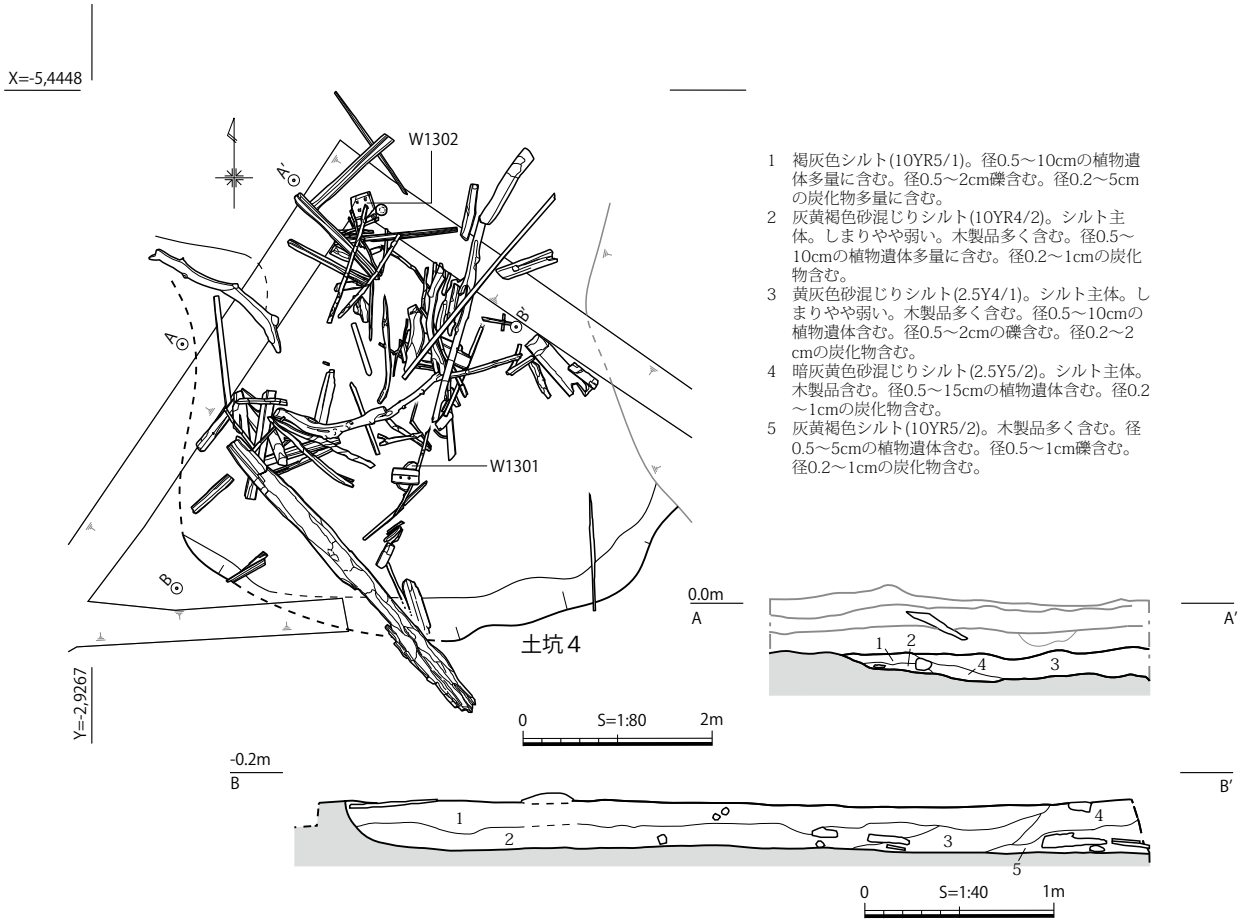
第４項　Ⅷ層上面の遺構（弥生時代前期～中期）

１　概要（第111図）

Ｐ５区南東から小穴を４基検出した。検出面であるⅧ層は調査区の南東側を中心に最大10㎝程薄い層で、北に向かい緩く傾斜する。東側にシルト質の微高地が広がることが推測できる。西に向かい薄くなり、P5区の中央付近で堆積が終わる。遺構は小穴のみ４基、Ⅷ層の範囲内で検出している。Ⅷ



第109図　７区・Ｐ５区Ⅷ層上面遺構分布図



第110図　７区・Ｐ５区土坑４

層中から遺物は出土していない。

２　小穴

小穴１～４（第111・112図）

Ｐ５区の南東、標高－0.9 ～－1.0mにかけて４基のピットを検出した。小穴１～３は調査区の南東壁の東側付近にまとまり、小穴４は南東壁の断面で確認した。規模は径21 ～ 29cmで、深さは18 ～ 37cmで、埋土はシルトが主体である。小穴４では柱状の掘り方を確認した。埋土中から遺物は出土していない。

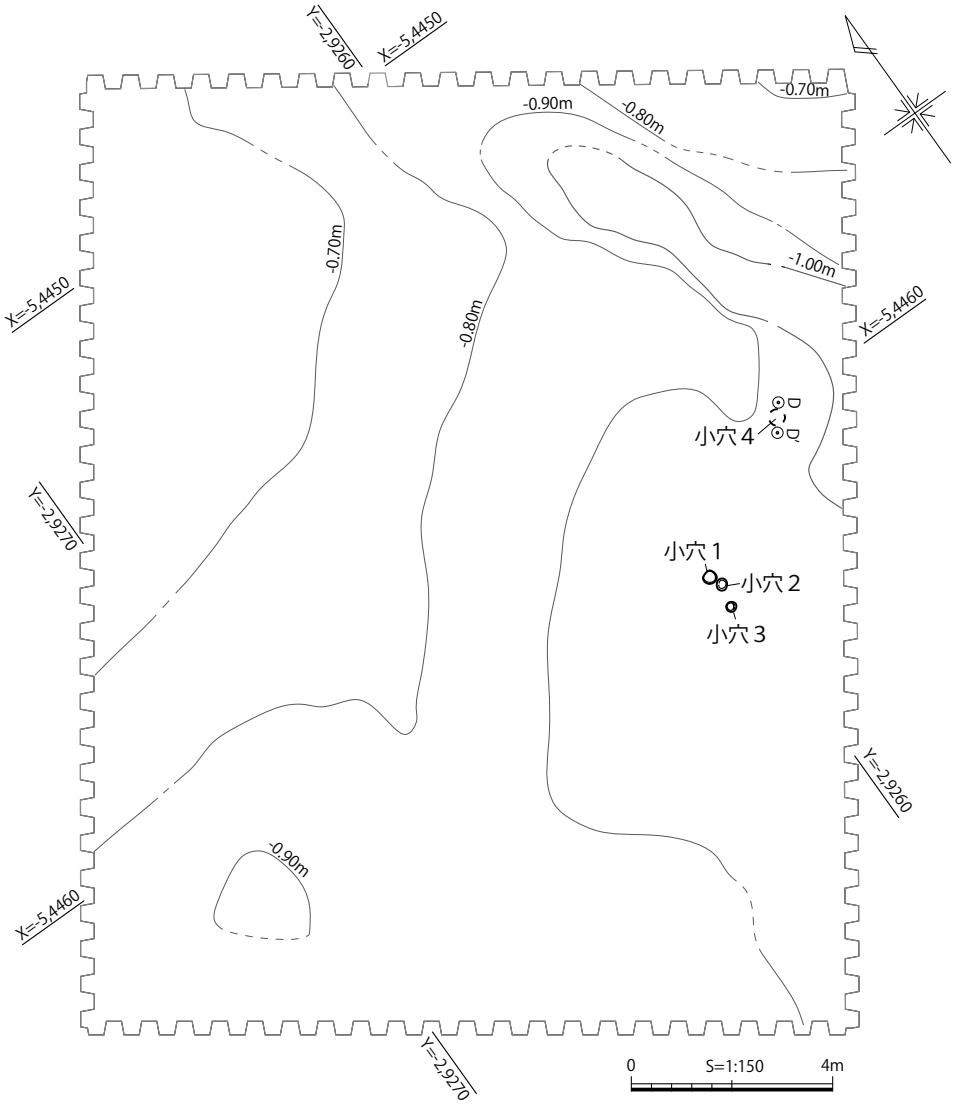
性格は不明である。

第５項　Ⅸ層の遺構（縄文時代晩期以前）

１　概要（第113図）

Ⅸ層は貝層で、灰色や灰白色、灰褐色等の数cmから 10cm程の薄い層が、－ 1.0 ～－ 1.2 m程の標高で堆積する。西隣のＰ６区の北隅付近の土層断面をみると、Ⅸ層には貝を多量に含む層が複数あるが、層の堆積から判断して最も上の貝層が対応すると考えられる。

Ｐ５区の北東から南東側を中心に貝層上面に打設された杭群と貝層上面に貼り付いた木皮を検出した。遺物は縄文土器 268 が出土した。



第111図　７区・Ｐ５区Ⅷ層上面遺構分布図

２　杭群

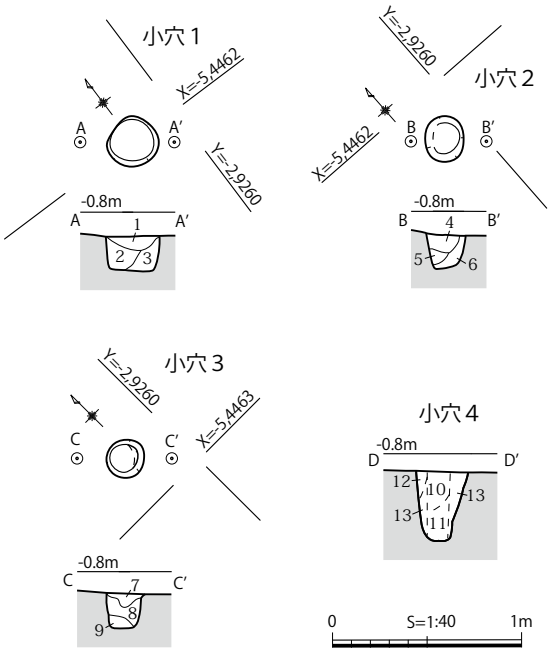
杭群５（第114図　PL.28－３）

Ｐ５区の北東から南側にかけて、Ⅸ層の中でも薄くやや暗い灰色粘土層に覆われた貝層上面が検出面となる。

杭はいくつか調査区の南東側でも検出しているが、多くは調査区中央から北東側にかけて無秩序に分布する。列等の規則性はないものの、まとまりをもつものを図示した。

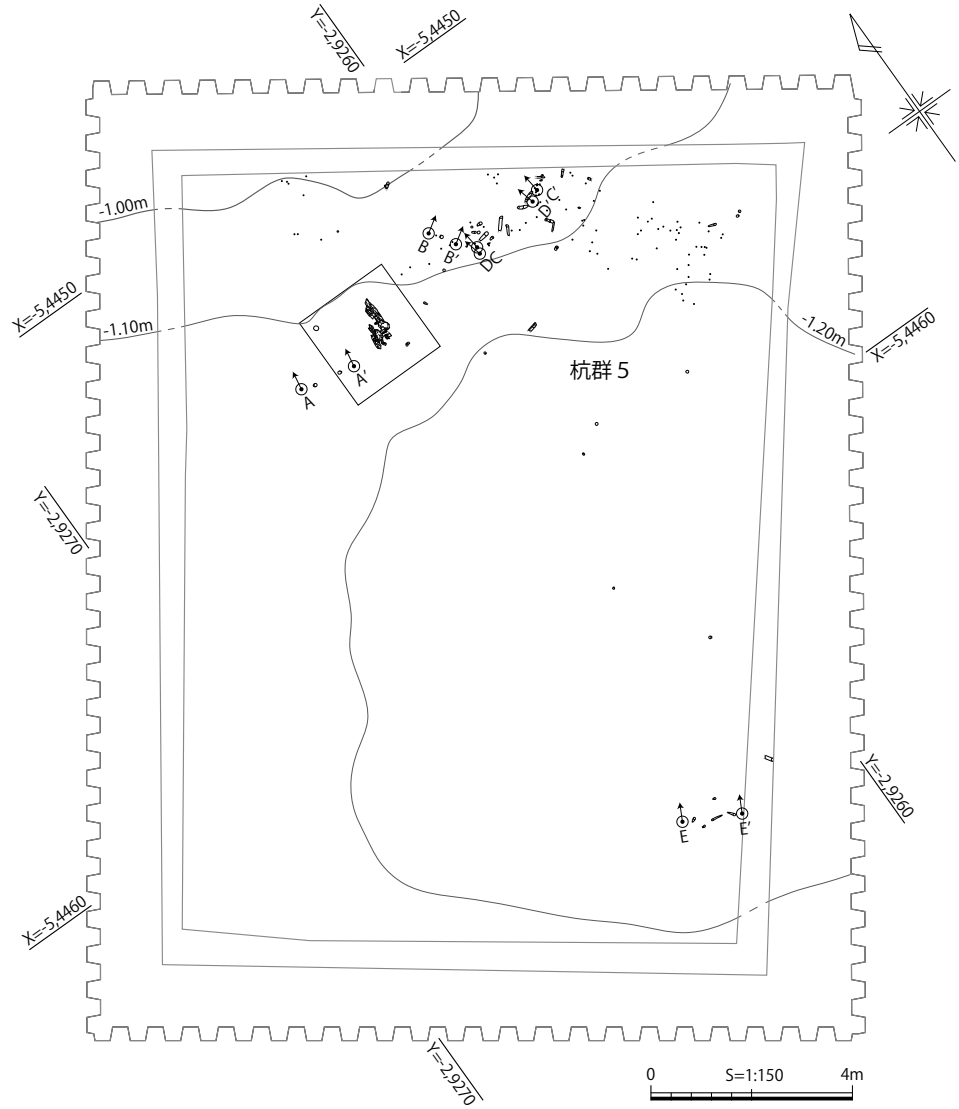
Ⅸ層上面で精査したところ中央やや北東側で貝層直上から幅0.4m、長さ0.9m程の木皮の一部が出土した。この資料番号52(PLD－32186)は14C年代で3465±20 14Cyr BP、2σ暦年代範囲で1880－1738 cal BC (89.2%)および1714－1698 cal BC (6.2%)の暦年代を示した。これは、縄文時代後期中葉に相当する。最終形成年輪を含めて測定が行われているため、測定結果は枯死もしくは伐採年代を示す。調査区東隅の排水溝掘削の段階でも、貝層上面から木皮の一部が出土した。

土器は木皮の東隣から縄文土器の粗製の深鉢268が出土した。木皮の年代とも矛盾していない。杭列の性格は不明である。

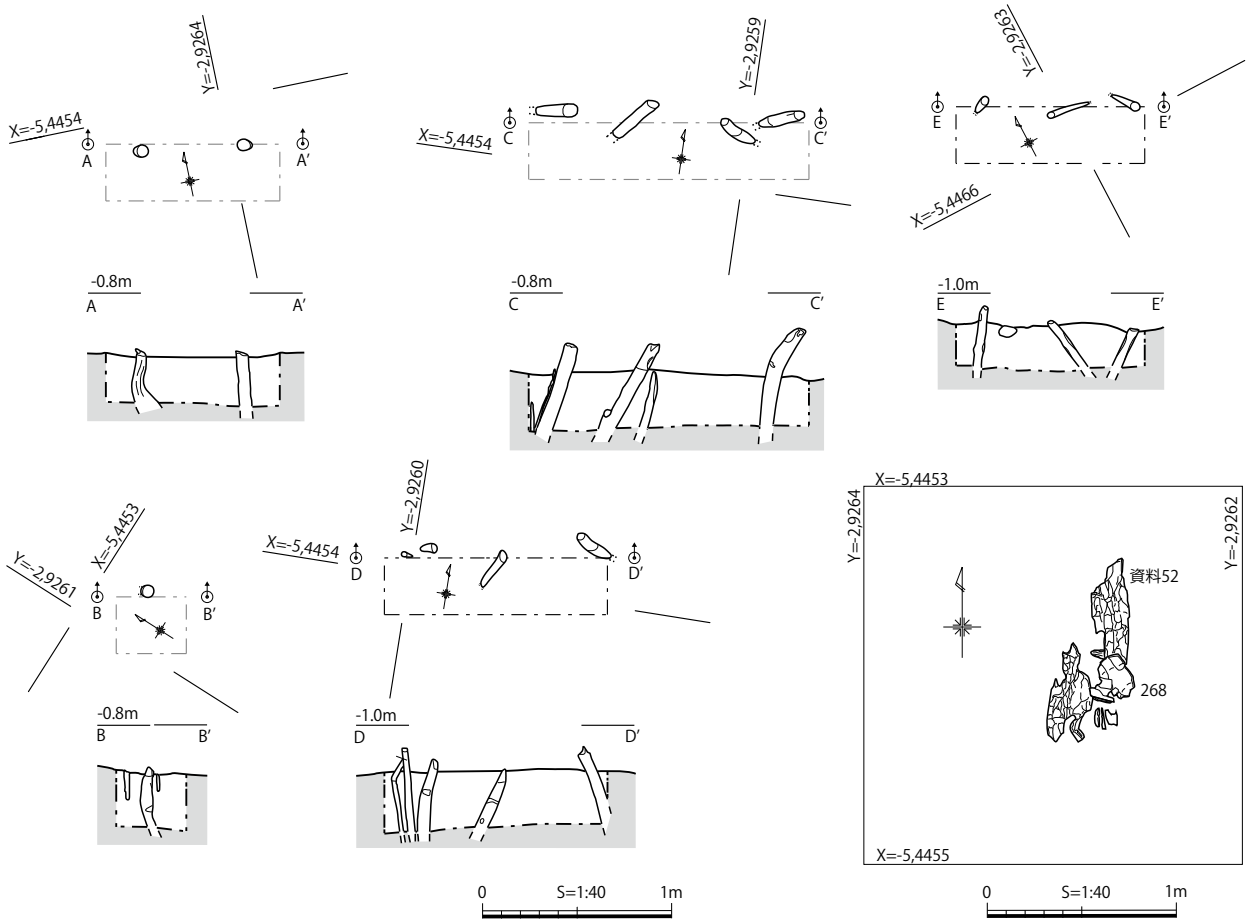


小穴１
1　暗灰黄色砂混じりシルト(2.5Y5/2)。シルト主体。粘性やや強い。径0.5～5cmの灰白色粘土ブロック(2.5Y7/1)含む。径0.5～1cmの礫含む。径0.2～0.5cm炭化物含む。
2　褐灰色シルト(10YR4/1)。粘性やや強い。径0.5～3cmの灰白色粘土ブロック(2.5Y7/1)含む。径0.2～0.5cm炭化物含む。
3　灰黄褐色シルト(10YR4/2)。粘性やや強い。径0.5～5cmの灰白色粘土ブロック(2.5Y7/1)含む。径0.2～1cmの炭化物含む。
小穴２
4　灰オリーブ色砂混じりシルト(5Y4/2)。シルト主体。粘性やや強い。径0.5～2cmの植物遺体含む。径0.5～1cmの礫少量含む。径0.2～1cmの炭化物含む。
5　灰オリーブ色砂混じりシルト(5Y5/2)。シルト主体。粘性やや強い。径0.5～2cmの植物遺体含む。径0.5～1cmの礫少量含む。径0.2～0.5cmの炭化物含む。
6　灰色砂混じりシルト(7.5Y6/1)。シルト主体。粘性やや強い。径0.5～1cmの礫少量含む。径0.2～0.5cmの炭化物含む。
小穴３
7　灰色砂混じりシルト(7.5Y5/1)。シルト主体。粘性やや強い。径0.5～1cmの灰白色粘土ブロック(2.5Y7/1)含む。径0.2～0.5cmの炭化物含む。
8　オリーブ黒色砂混じりシルト(7.5Y3/2)。シルト主体。粘性やや強い。径0.5～1cmの礫少量含む。径0.2～0.5cmの炭化物含む。
9　オリーブ黒色砂混じりシルト(7.5Y3/1)。シルト主体。粘性やや強い。径0.5～1cmの礫少量含む。径0.2～0.5cmの炭化物含む。
小穴４
10　褐灰色シルト(7.5YR4/1)。しまりやや弱い。径0.5～3cm植物遺体含む。径0.2～0.5cmの炭化物含む。
11　褐灰色シルト(10YR5/1)。しまりやや弱い。径0.5～1cmの灰白色粘土粘土ブロック10YR7/1)含む。径0.2～2cm植物遺体含む。径0.2～0.5cmの貝含む。
12　灰黄褐色シルト(10YR5/2)。しまりやや弱い。径0.5～3cmの植物遺体含む。径0.2～0.5cmの炭化物含む。
13　褐灰色シルト(7.5YR5/1)。粘性弱い。しまりやや弱い。径0.5～5cmの植物遺体含む。径0.5～2cmの礫少量含む。径0.2～0.5cmの炭化物含む。

第112図　７区・Ｐ５区小穴１～４



第113図　７区・Ｐ５区Ⅸ層上面遺構分布図



第114図　７区・Ｐ５区杭群５

第８節　Ｐ６区の調査

第１項　調査区の概要

１　地形と土層堆積（第115・116図）

Ｐ６区の平成27年度に調査し、調査面積は278.6㎡である。河道の堆積以降、Ⅳ層より上はほぼ平坦で、Ⅲ層には植物遺体を多く含む。Ⅴ層はほぼ河道６で浸食される。Ⅵ層は比較的多くの植物遺体を含む層で、流路の南西側で認められた。Ⅶ層は調査区のほぼ全域に広がる薄い層で、南西から北西に緩く下がる。Ⅶ層直下では調査区の南西側で旧流路の北東肩になる砂層を検出した。

Ⅷ層は調査区の南西側の一部で検出された層で、シルトを主体に粘土ブロックを多く含む。標高は北西から南東に向かい緩く下がる谷状の地形である。Ⅸ層は明灰色、明褐色等の粘土に貝を多量に含む層がラミナ状に堆積する。Ⅷ層までと異なり北隅の標高が－0.5m、南に向かい－1.3mまで大きく下がる。北隅ではⅨ層の下に灰白色、黄灰色、褐灰色の粘土が互層に堆積し、複数の貝層が検出された。このうち最上位の貝層は、東側のＰ５区の貝層に対応する。

２　遺構の概要

飛鳥時代から平安時代では、条里遺構１基と盛土遺構７基、古墳時代中期から後期では河道１基のほか護岸施設の盛土１基と河道の南西側で杭列１基、弥生時代後期から古墳時代前期では、南西側で

河道に向かう杭群１基とそれに伴う盛土遺構１基、河道北東側の対岸に杭列１基、弥生時代中期から後期では、調査区東側で両端を尖らせた杭群１基、弥生時代前期以前では河道１基等を検出した。

第２項　Ⅳ層下面の遺構（飛鳥時代～平安時代）

１　概要（第117図）

Ｐ６区のほぼ全域で盛土遺構を検出した。盛土の立ち上がりは調査区全域に広がる河道の砂層上で、上部はⅣ層に覆われている。

盛土遺構は南北軸の条里16、東西軸の盛土15、調査区北東隅に位置し、丘陵裾の地形に沿う盛土12・17である。この他にＰ５区の一町条里の交点に向かう盛土11、そのほか盛土13・14・16がある。盛土の構築順序は、盛土11・12→条里16→盛土13・14・17であるが、必ずしも時期差を伴うとは限らない。盛土11・12の前後関係は不明、盛土15・16も他の盛土遺構との重複関係は明確ではない。

遺物は須恵器や土師器、木製祭祀具、木製品が出土した。盛土11の盛土内から人形３点が重ねられた状態で出土した。

２　条里遺構

条里16（第118図　PL.29－１,３・30－１）

Ｐ６区の中央やや東側で検出した南北方向に主軸をもつ条里遺構である。検出面では肩部までⅣ層が堆積し、頂部はⅢ層に覆われていた。

盛土で構築され、上面幅が2.2m、基底部幅が2.5m～3.0mで、盛土の高さは51cmである。方位はN－６°－Wで、南北方向から若干西に振る。北端は盛土12に、南端は盛土11に接続する。

盛土中央には礫や粗朶を多く含む芯となる層があり、両側に拡幅されている。粗朶は0.1m程の短いものは不規則に、２mに及ぶ長いものは盛土の主軸の方向に沿って入れられていた。

盛土内から出土した木材の小片について放射性炭素の年代測定を行った、資料番号54（PLD－32188）は432－490 cal AD（18.0%）及び532－600 cal AD（77.4%）で、紀元後５世紀前半から６世紀末の暦年代を示した。古墳時代中期から飛鳥時代に相当する。芯材のため、古木効果の影響を受けていると考えられる。

遺物は盛土内から土師器の脚付皿、須恵器、木製祭祀具の馬形・舟形・斎串、木製品の下駄・容器・部材が出土した。盛土11･12より新しい。盛土の向きと幅､構造から性格は一町方格内を12歩（約21m）に分割する条里地割と考えられる。

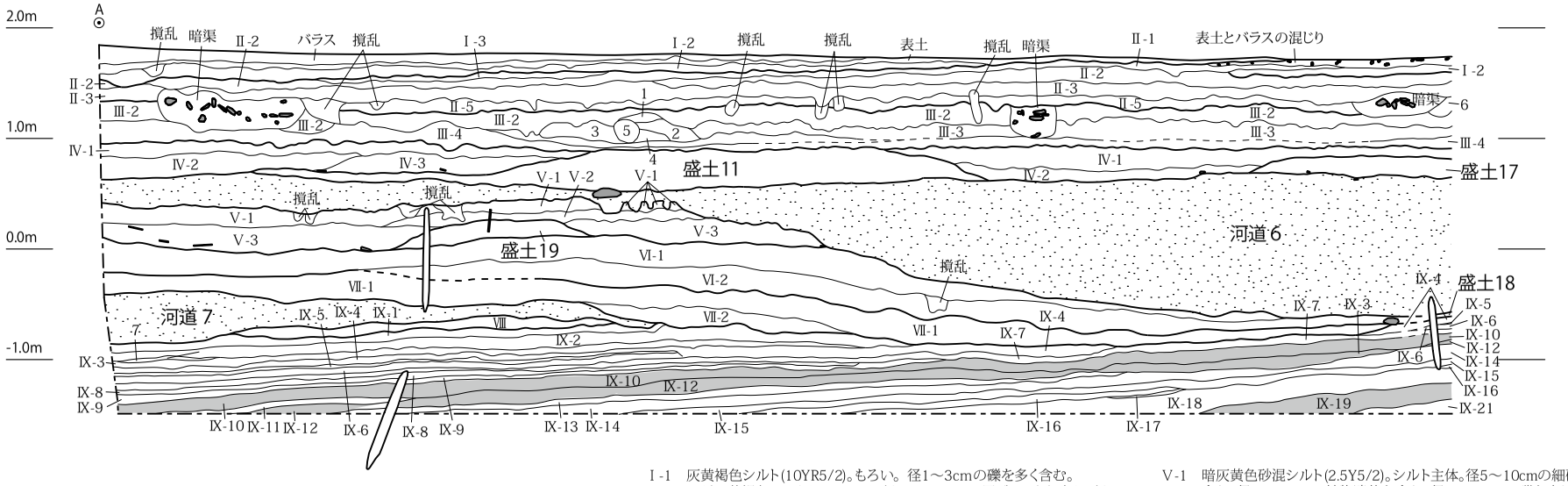
２　盛土遺構

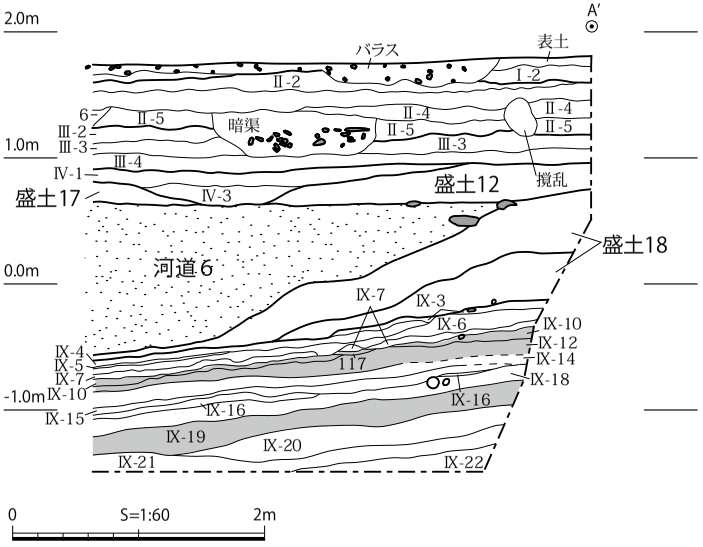
盛土11（第119・120図　PL.29－２・30－２）

Ｐ６区のほぼ中央で検出した北西から南東方向に主軸をもつ盛土遺構である。検出面は概ね肩部までⅣ層が堆積し、頂部の大部分がⅢ層に覆われていた。

規模は上面幅が3.2m､基底部幅が4.5～4.6m､盛土の高さは51cmである。方位はN－48°－Wを測る。丘陵に概ね平行し、延長状には７区・Ｐ５区の盛土６がある。南東側には盛土13、東側には南北軸の条里16があるがこれらよりも古い。他の盛土と比較して高さは低いものの幅はやや広い。

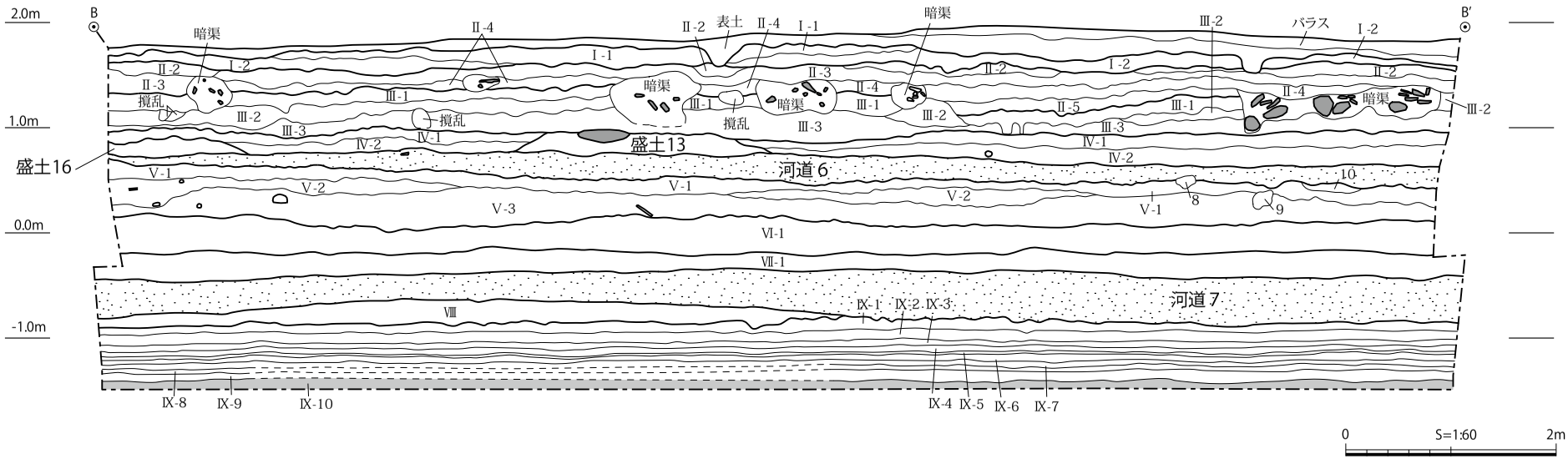
土層では水平方向に複数回にわたり粗朶を入れて盛り上げる。表土除去の段階から比較的多くの粗





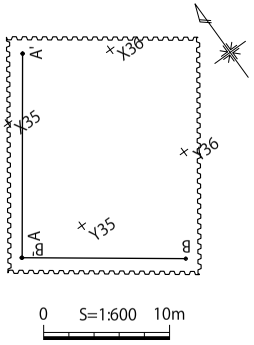
Ⅰ-1　灰黄褐色シルト(10YR5/2)。もろい。径1～3cmの礫を多く含む。
Ⅰ-2　にぶい黄褐色シルト(10YR5/3)。径5～10cmのⅡ層ブロックを含む。径1～3cmの礫を含む。近現代の耕作土。
Ⅰ-3　灰黄褐色シルト(10YR5/2)。径0.5～1cmの礫を含む。
Ⅱ-2　褐灰色シルト(10YR6/1)。炭化物を少し含む。径0.2～3cmの礫を含む。径0.5～1cmの鉄分ブロックを少し含む。
Ⅱ-3　褐灰色粗粒砂混シルト(10YR5/1)。シルト主体。径1～5cmの礫を多く含む。径1～2cmの鉄分ブロックを含む。近世以降の堆積層か。
Ⅱ-4　灰褐色粗粒砂混シルト(7.5YR4/2)。シルト主体。径0.5～1cmの礫を多く含む。径3～5cmの礫を含む。
Ⅱ-5　褐灰色粗粒砂混シルト(7.5YR4/1)。シルト主体。径1～5cmのⅢ層ブロック含む。径0.5～1cmの礫を含む。
Ⅲ-1　褐黄色粗粒砂混シルト(10YR4/1)。植物遺体を含む。径0.5～3cmの礫を含む。
Ⅲ-2　灰黄褐色シルト(10YR4/2)。径5cm以下のⅢ層のブロック含む。植物遺体を含む。径0.5～1cmの礫を含む。
Ⅲ-3　灰黄褐色シルト(10YR4/2)。径5cmまで(径5mm以下主体)の褐灰色シルトブロック(10YR4/1)含む。植物遺体を多く含む。
Ⅲ-4　黒褐色シルト(10YR3/1)。粘性弱い。しまり弱い。径0.5～5cmの植物遺体を多く含む。径0.5～2cmの礫を多く含む。径0.2～0.5cmの炭化物を含む。
Ⅳ-1　灰黄褐色シルト(10YR5/2)。径0.1～0.2mmの砂粒を少し含む。径0.5～2cmの植物遺体を少し含む。0.2～0.5cmの炭化物を少し含む。径0.5～5cmの鉄分ブロックを多く含む。
Ⅳ-2　褐灰色シルト(10YR5/1)。木製品を少し含む。径0.5～10cmの植物遺体を少し含む。径1～5cmの礫を少し含む。径0.5～1cmの炭化物を少し含む。径0.5～2cmの鉄分ブロックを多く含む。Ⅳ-1層よりやや明るい。
Ⅳ-3　灰黄褐色砂混シルト(10YR4/2)。粘性やや弱い。シルト主体。径3～10cmの灰色(N4/)砂混シルトブロック(シルト主体)を多く含む。径0.2～3cmの植物遺体を少量含む。0.2～0.5cmの礫を含む。径1～5cmの鉄分ブロックを含む。
Ⅴ-1　暗灰黄色砂混シルト(2.5Y5/2)。シルト主体。径5～10cmの細砂ブロックを含む。径0.5～5cmの植物遺体を含む。径0.5～5cmの礫を少し含む。径0.2～1cmの炭化物を含む。径0.5～2cmの炭あり。
Ⅴ-2　黄灰色砂混シルト(2.5Y5/1)。粘性やや弱い。シルト主体。径0.5～1cmの灰白色粘土ブロック(10YR7/1)を含む。径5～10cmの細砂ブロックを少し含む。木製品を含む。径0.5～5cmの植物遺体を含む。径0.5～3cmの礫を含む。径0.2～2cmの炭化物を含む。
Ⅴ-3　灰色シルト(5Y4/1)。木製品を含む。径0.5～10cm、径0.5～2cm主体の植物遺体を多く含む。径0.5～10cmの礫を少し含む。径0.2～1cmの炭化物を含む。
Ⅵ-1　褐灰色(5YR5/1)シルト～粘土(シルト主体)。粘性やや強い。しまり弱い。径0.5～2cmの明褐灰色粘土ブロック(7.5YR7/1)を少し含む。径0.5～10cm、径0.5～10cmの礫を少し含む。
Ⅵ-2　黒褐色シルト(7.5YR3/1)。粘性やや弱い。しまりやや弱い。径0.5～10cmのにぶい黄褐色シルトブロック(10YR5/3)を少し含む(植物遺体主体)。径0.5～5cmの植物遺体を含む。径0.5～3cmの礫を含む。径0.2～1cmの炭化物を含む。
Ⅶ-1　褐灰色シルト(10YR5/1)。径0.5～5cmの明褐灰色粘土ブロック(7.5YR7/1)を含む。径0.5～10cmの植物遺体を含む。径0.5～5cmの礫を少し含む。径0.2～2cmの炭化物を含む。
Ⅶ-2　褐灰色シルト(10YR4/1)。径0.5～5cmの植物遺体を含む。自然木を含む。径0.5～3cmの礫を少し含む。径0.2～2cmの炭化物を含む。
Ⅷ　褐灰色シルト(7.5YR5/1)。径0.2～2cmの明褐灰色粘土ブロック(7.5YR7/1)を含む。径0.5～5cmの植物遺体を含む。径0.3～3cmの礫を含む。径0.2～2cmの炭化物を含む。
Ⅸ-1　明褐灰色粘土(7.5YR7/1)。粘性やや強い。径5～15cmの黄灰色砂混シルトブロック(2.5Y6/1)を含む。径0.2～1cmの炭化物を含む。
Ⅸ-2　黄灰色粘土(2.5Y5/1)。粘性強い。径0.5～5cmの明褐灰色粘土ブロック(7.5YR7/1)を含む。径0.5～5cmの植物遺体を少し含む。径0.2～2cmの炭化物を含む。
Ⅸ-3　明褐灰色粘土(5YR7/1)。粘性強い。径0.5～10cmの黄灰色粘土ブロック(2.5Y5/1)を含む。径0.2～1cmの炭化物を含む。

第115図　Ｐ６区土層断面図（１）

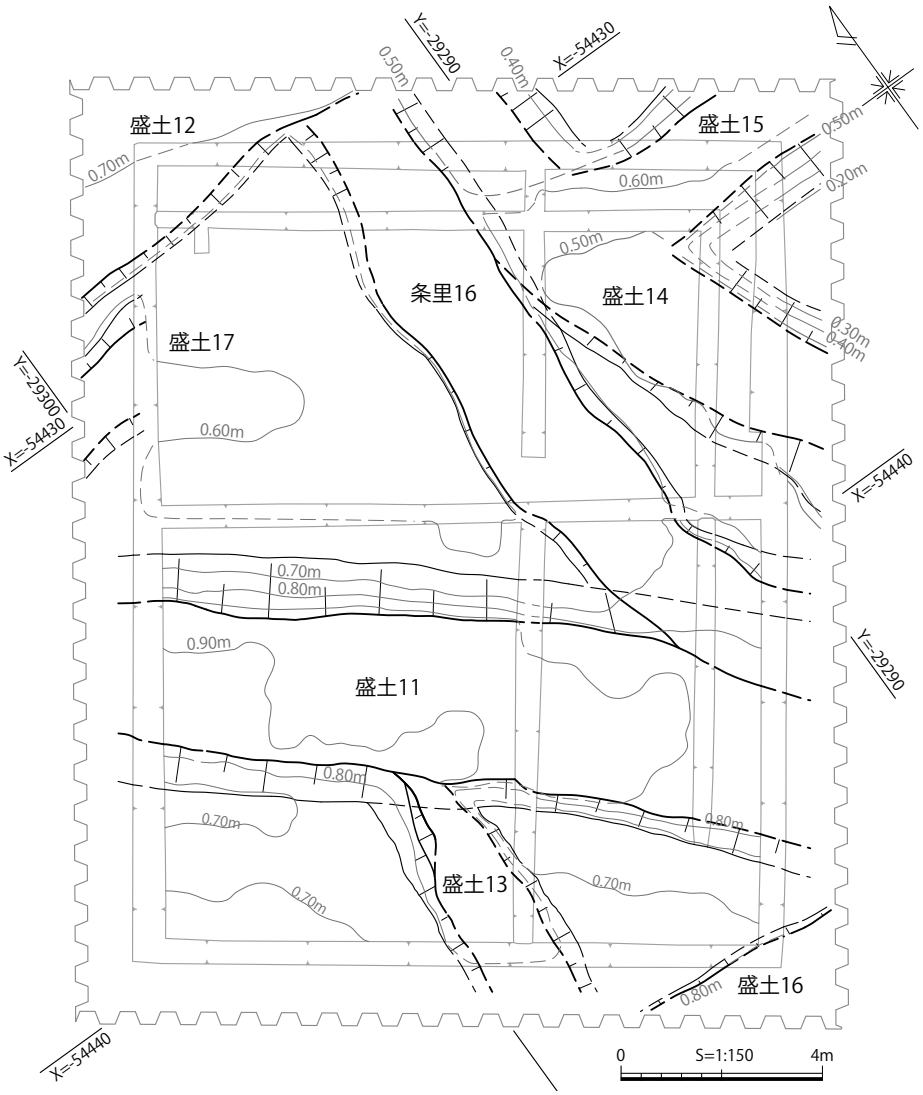


Ⅸ-4　褐灰色粘土(10YR4/1)。粘性強い。径0.5～5cmの植物遺体を多く含む。自然木を含む。0.5～2cmの礫を少し含む。径0.2～2cmの炭化物を含む。
Ⅸ-5　褐灰色粘土(7.5YR6/1)。粘性やや強い。径0.5～5cmの褐灰色粘土ブロック(10YR5/1)を多く含む。径0.2～0.5cmの炭化物を少し含む。
Ⅸ-6　黄灰色粘土(2.5Y5/1)。粘性強い。径0.5～3cmの明褐灰色粘土ブロック(7.5YR7/1)を含む。径0.5～5cmの植物遺体を少し含む。径0.2～2cmの炭化物を含む。
Ⅸ-7　灰白色粘土(10YR8/1)。粘性強い。径0.5～5cmの褐灰色粘土ブロック(10YR5/1)を多く含む。径0.2～2cmの貝を少し含む。径0.2～3cmの炭化物を多く含む。
Ⅸ-8　褐灰色粘土(7.5YR4/1)。粘性強い。径0.5～5cmの褐灰色粘土ブロック(10YR5/1)を含む。径0.5～3cmの植物遺体を少し含む。径0.2～1cmの貝を少し含む。
Ⅸ-9　灰白色粘土(10YR7/1)。粘性強い。径0.5～5cmの植物遺体を多く含む。径0.2～0.2cmの貝を少し含む。径0.2～2cmの炭化物を多く含む。
Ⅸ-10　褐灰色粘土(10YR4/1)。粘性強い。しまり弱い。径0.2～5cmの貝を多く含む。径0.5～10cmの植物遺体を多く含む。径0.5～5cmの礫を含む。径0.2～2cmの炭化物を含む。
Ⅸ-11　灰白色粘土(10YR8/1)。粘性強い。径0.5～5cmの明褐灰色粘土ブロック(7.5YR7/1)を含む。径0.2～2cmの貝を含む。径0.2～2cmの炭化物を含む。
Ⅸ-12　褐灰色粘土(7.5YR5/1)。粘性強い。しまりやや弱い。径0.5～10cmの植物遺体を多く含む。径0.5～5cmの礫を少し含む。径0.2～5cmの貝を多く含む。径0.2～2cmの炭化物を多く含む。
Ⅸ-13　灰白色粘土(2.5Y8/1)。粘性強い。径0.5～10cmの褐灰色粘土ブロック(10YR5/1)を含む。自然木を含む。径0.2～2cmの貝を少し含む。径0.2～2cmの炭化物を含む。
Ⅸ-14　褐灰色粘土(7.5YR5/1)。粘性強い。しまり弱い。径0.5～10cmの植物遺体を多く含む。径0.5～5cmの礫を少し含む。径0.2～5cmの貝を多く含む。径0.2～2cmの炭化物を含む。
Ⅸ-15　明褐灰色粘土(7.5YR7/1)。粘性強い。径0.5～5cmの褐灰色粘土ブロック(10YR5/1)を含む。径0.2～1cmの貝を少し含む。径0.2～1cmの炭化物を少し含む。
Ⅸ-16　灰色粘土(5Y6/1)。粘性強い。径0.5～10cmの明褐灰色粘土ブロック(7.5YR7/1)を少し含む。自然木を含む。径0.5～5cmの植物遺体を多く含む。径0.5～2cmの礫を少し含む。径0.2～2cmの貝を少し含む。径0.2～2cmの炭化物を含む。
Ⅸ-17　灰色粘土(5Y6/1)。粘性強い。自然木を含む。径0.5～10cmの植物遺体を多く含む。径0.5～2cmの礫を少し含む。径0.2～2cmの貝を含む。径0.2～2cmの炭化物を含む。
Ⅸ-18　褐灰色粘土(10YR4/1)。粘性強い。径0.2～2cmの植物遺体を含む。径0.5～5cmの礫を少し含む。径0.5～2cmの貝を少し含む。
Ⅸ-19　褐灰色粘土(10YR5/1)。粘性強い。しまり弱い。径0.2～10cmの貝を多く含む。径0.5～10cmの植物遺体を含む径0.5～10cmの礫を含む。径10～30cmの石を含む。径0.2～2cmの炭化物を含む。
Ⅸ-20　黄灰色粘土(2.5Y4/1)。粘性強い。しまり弱い。自然木を含む。径0.5～5cmの礫を少し含む。径0.2～5cmの貝を多く含む。径0.2～2cmの炭化物を含む。
Ⅸ-21　褐灰色粘土(7.5YR4/1)。粘性強い。自然木を含む。径0.5～3cmの礫を少し含む。径0.2～3cmの貝を少し含む。径0.2～3cmの炭化物を含む。
Ⅸ-22　褐灰色粘土(7.5YR5/1)。粘性強い。しまり弱い。自然木を含む。径0.5～3cmの礫を少し含む。径0.2～5cmの貝を多く含む。径0.2～2cmの炭化物を含む。

1　灰黄褐色シルト(10YR4/2)。径1～2cmの鉄分ブロックを含む。
2　褐灰色シルト(10YR4/1)。径3～5cmの灰黄褐色シルトブロック(10YR6/2)を含む。
3　黒褐色シルト(10YR2/2)。径0.5～1cmの礫を含む。
4　黒褐色シルト(10YR2/1)。径2～3cmのⅢ層ブロックを含む。
5　黒褐色シルト(10YR3/1)。しまりやや弱い。径5～20cmの自然木を多量に含む。
6　褐灰色粘土(10YR6/1)。粘性強い。しまり弱い。自然木を含む。径0.2～5cmの貝を多く含む。径0.2～2cmの炭化物を含む。
7　褐灰色粘土(5YR5/1)粘性強い。しまり弱い。径0.5～2cmの細砂ブロックを含む。径0.2～1cmの炭化物を少し含む。
8　褐灰色シルト(7.5YR5/1)。径1～3cmの細砂ブロックを少し含む。径0.2～1cmの炭化物を少し含む。
9　黒褐色シルト(7.5YR3/1)。径0.5～2cmの植物遺体を含む。径0.5～2cmの礫を含む。径1～3cmの炭化物を少し含む。
10　灰褐色シルト(7.5YR6/2)。径0.5～2cmの植物遺体を少し含む。径0.5～5cmの礫を含む。径0.2～1cmの炭化物を含む。



第116図　Ｐ６区土層断面図（２）



第117図　Ｐ６区Ⅳ層下面遺構分布図

朶片が出土した。粗朶は数回にわたり、いずれも盛土の向きに入れられていた。また、盛土下面では木製祭祀具の人形・鳥形・舟形・琴柱・斎串、木製品の椀・田下駄が出土した。

盛土内から出土した粗朶、資料番号53(PLD－32187)は718－743 cal AD(13.0%)及び766－882 cal AD (82.4%)で、紀元後８世紀前半から９世紀後半の暦年代を示した。これは、奈良時代から平安時代前期に相当する。最終形成年輪を含めて測定が行われている。

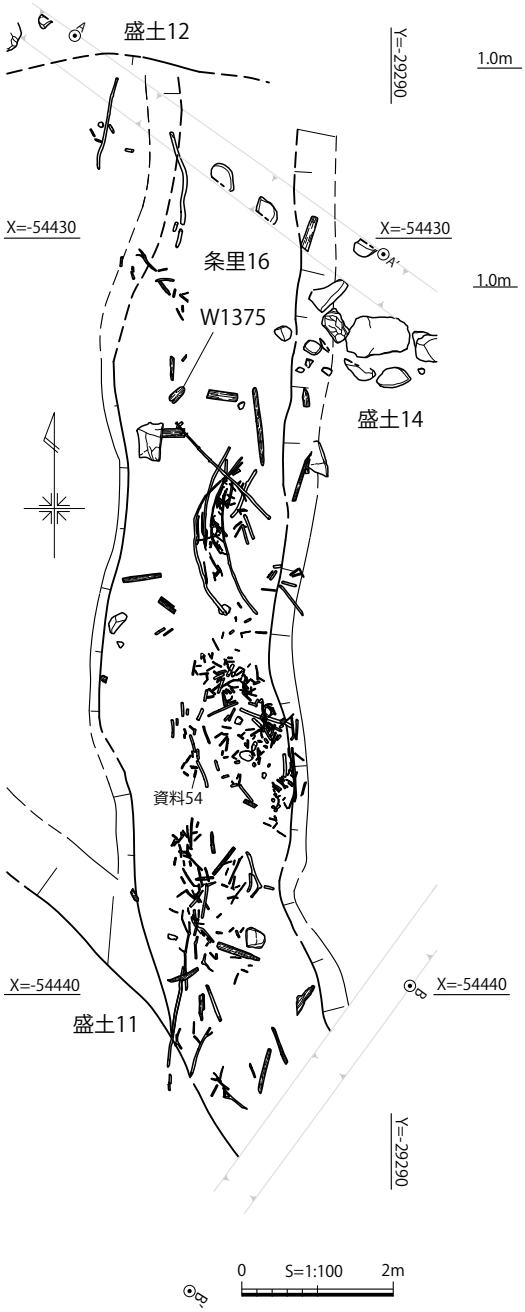
盛土中位の粗朶とともに大型の人形３点(W376 ～ 378)が重ねられた状態で出土した。人形の頭から足の向きはN－79° －Wで、盛土の主軸よりも31°西に傾く。

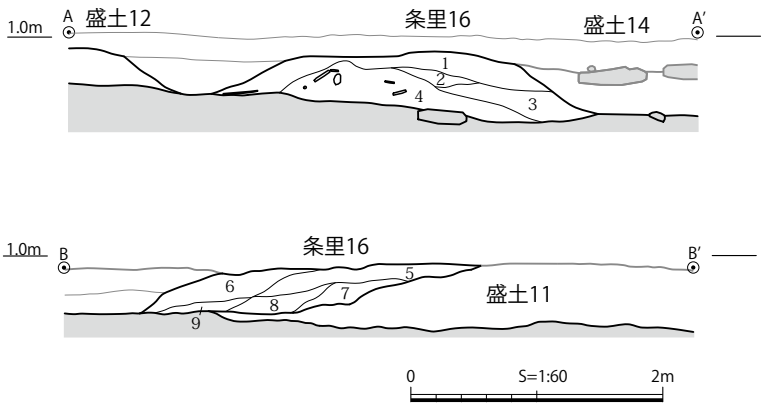
須恵器の坏・高台坏・高坏と土師器の坏を図化した。土師器坏279は盛土内の中位で、多数の細片に分かれたものが接合した。時期は岡田・八峠編年ＫⅤ期、10世紀代と考えられる。

東隣に位置する７区でも北西に向かう盛土６があり、一体の盛土である可能性は高い。ただし、具体的な性格は特定しえない。

盛土12(第121図　PL.30－３・31－１)

調査区の北隅を斜めに横切るように検出された盛土遺構である。盛土の表層は礫が密に確認され、砂混じりのシルトで硬くしまっていた。下層にある盛土18の石敷は南東から北西であるのに対して、盛土12はほぼ東西方向である。両遺構の間には河道６が氾濫したとみられる薄い細砂層が介在する。





1　灰黄色シルト(2.5Y6/2)。しまりやや弱い。径0.5～5cmの粗朶を含む。径0.5～3cmの植物遺体を含む。径0.5～3cmの礫を少し含む。径0.2～0.5cmの炭化物を少し含む。
2　黄灰色シルト(2.5Y6/1)。径0.5～3cmの植物遺体を含む。径0.5～5cmの礫を含む。径0.2～0.5cmの炭化物を少し含む。
3　暗灰黄色シルト(2.5Y5/2)。径0.5～5cmの植物遺体を多く含む。径0.5～2cmの礫を少し含む。径0.2～0.5cmの炭化物を含む。
4　黄灰色シルト(2.5Y5/1)。自然木、木製品を多く含む。径0.5～10cmの植物遺体を多く含む。径0.5～10cmの礫を多く含む。径20～30cmの石を含む。径0.2～0.5cmの炭化物を含む。
5　黄灰色シルト(2.5Y6/1)。径0.5～5cmの植物遺体を含む。径0.5～1cmの礫を少し含む。径0.2～0.5cmの炭化物を少し含む。
6　黄灰色シルト(2.5Y5/1)。径1～5cmの植物遺体を含む。径0.5～1cmの礫を含む。径0.2～0.5cmの炭化物を含む。
7　黄灰色シルト(2.5Y4/1)。径0.5～5cmの植物遺体を含む。径0.5～1cmの礫を少し含む。径1～5cmの鉄分ブロックを含む。
8　黄灰色シルト(2.5Y5/1)。径0.5～3cmの植物遺体を含む。径0.5～1cmの礫を含む。径0.2～0.5cmの炭化物を含む。
9　褐灰色シルト～粘土(7.5YR4/1)。シルト主体。径0.5～1cmの植物遺体を少し含む。径0.2～0.5cmの礫を少し含む。

第118図　Ｐ６区条里16

規模は基底部幅は0.4m以上で、盛土の高さは29㎝である。方位はN－89°－Eである。

北西隣のP７区で検出されている道路遺構の延長部分は確認されておらず、道路遺構は向きを東側に変えている可能性がある。その場合、本遺構が道路遺構にあたる可能性があるが、判然としない。

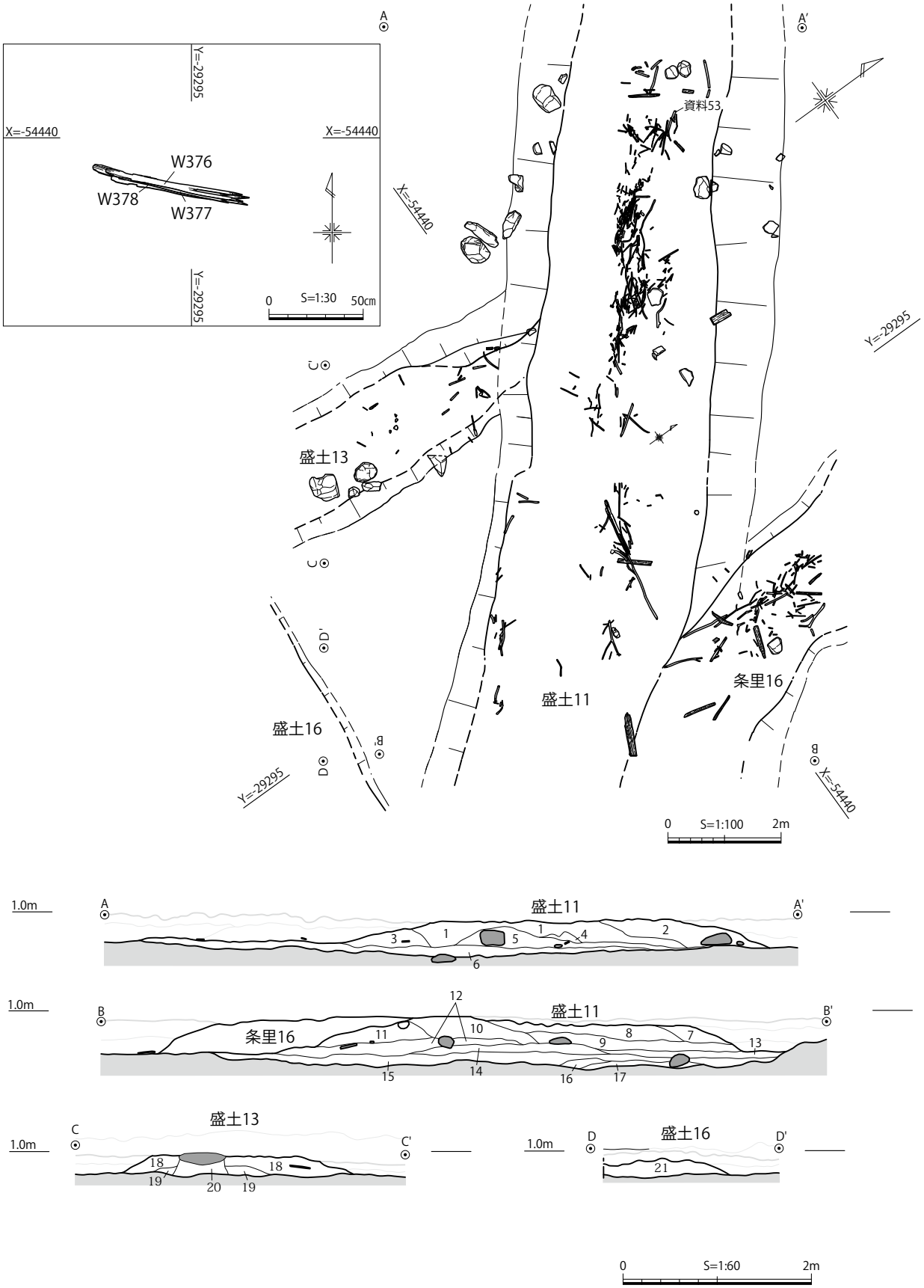
遺物は須恵器や土師器が若干出土するものの、図化し得る遺物はない。条里16よりも古い。

具体的な性格は不明である。

盛土13（第119・120図）

Ｐ６区の南東側に位置する盛土遺構である。規模は上面幅が約 1.5 m、基底部幅が 1.9 ～ 2.2 mで、盛土の高さは 21㎝である。方位はＮ－２°－Ｗである。北端は盛土 11 に接続して途切れ、北側には続かない。盛土内からは人頭大程の礫が複数出土したが、礫の下部にのみ河道６に由来する砂層が凸上に取り残されていたことから本来は河道６に伴うもので、周囲の砂層を除去したため石の下の砂層は残され、その後に盛土を構築したと考えられる。同様の状況は本遺構だけでなく、盛土 17 でも確認できた。

土器は少量出土したものの、時期を特定し得る遺物はない。盛土 11 よりも後に構築する。ほぼ南北方向に主軸をもつことから、条里地内をさらに細分する区画の可能性もある。



第119図　Ｐ６区盛土11・13・16

盛土11
1　灰黄褐色砂混シルト(10YR5/2)。粘性やや弱い。シルト主体。径0.5～5cmの植物遺体を多く含む。径0.5～1cmの礫を少し含む。径0.2～0.5cmの炭化物を含む。
2　褐灰色シルト(10YR4/1)。木製品を含む。径0.5～5cmの植物遺体を含む。径0.5～1cmの礫を少し含む。径20～30cmの石あり。径0.2～0.5cmの炭化物を含む。
3　灰黄褐色シルト(10YR4/2)。木製品を含む。径1～5cmの植物遺体を多く含む。径0.5～1cmの礫を少し含む。径0.2～0.5cmの炭化物を少し含む。
4　褐灰色シルト(10YR5/1)。粘性弱い。径0.2～0.5cmの礫を多く含む。径0.2～0.5cmの植物遺体を少し含む。
5　灰黄褐色砂混シルト(10YR5/2)。粘性弱い。砂主体。径0.5～5cmの植物遺体を多く含む。径0.5～5cmの礫を含む。径30～40cmの石あり。径0.2～0.5cmの炭化物を含む。
6　灰黄褐色砂混シルト(10YR5/2)。粘性弱い。しまりやや強い。径0.2～0.5cmの礫を多く含む。
7　褐灰色シルト(7.5YR4/1)。径2～3cmの粗朶を含む。径0.5～2cmの植物遺体を含む。径0.5～1cmの礫を含む。径0.2～0.5cmの炭化物を少し含む。径1～2cmの鉄分ブロックを含む。
8　灰褐色シルト(7.5YR5/2)。しまり弱い。径1～2cmの鉄分ブロックを含む。径1～5cmの粗朶を含む。径0.5～2cmの植物遺体を多く含む。径0.2～2cmの礫を含む。径0.2～0.5cmの炭化物を少し含む。
9　褐灰色シルト(10YR5/1)。径0.5～3cmの植物遺体を少し含む。径0.5～1cmの礫を含む。径0.2～0.5cmの炭化物を少し含む。径0.5～1cmの鉄分ブロックを含む。
10　褐灰色シルト(10YR5/1)。しまりやや弱い。径1～3cmの粗朶を含む。径0.5～3cmの植物遺体を含む。径0.5～2cmの礫を含む。径0.5～1cmの鉄分ブロックを多く含む。
11　褐灰色シルト～粘土(7.5YR4/1)。シルト主体。木製品を含む。径0.2～0.5cmの礫を少し含む。径1～2cmの鉄分ブロックを少し含む。
12　褐灰色シルト(7.5YR5/1)。径1～5cmの植物遺体を多く含む。径0.2～0.5cmの礫を含む。径0.2～0.5cmの炭化物を含む。
13　褐灰色シルト(5YR4/1)。木製品を含む。自然木を含む。径0.5～1cmの植物遺体を少し含む。径0.5～1cmの礫を少し含む。径5～10cmの石あり。
14　褐灰色シルト(7.5YR4/1)。粘性やや強い。自然木を含む。径0.5～3cmの植物遺体を少し含む。径0.5～2cmの礫を含む。径0.2～0.5cmの炭化物を含む。
15　褐灰色シルト(7.5YR4/1)。粘性やや強い。自然木を含む。径0.5～3cmの植物遺体を少し含む。径0.5～3cmの礫を多く含む。径5～20cmの石あり。径0.2～0.5cmの炭化物を含む。
16　灰色砂混シルト(7.5Y4/1)。粘性弱い。砂主体。径0.5～5cmの植物遺体を少し含む。径0.5～3cmの礫を少し含む。径0.2～2cmの炭化物を含む。
17　オリーブ黒砂混シルト(7.5Y3/1)。粘性弱い。砂主体。木製品含む。径0.5～5cmの植物遺体を含む。径0.5～3cmの礫を含む。径5～20cmの石あり。径0.2～3cmの炭化物を含む。
盛土13
18　黄灰色シルト～粘土(2.5Y5/1)。しまり弱い。シルト主体。径0.5～3cmの植物遺体含む。径0.5～1cmの礫を少し含む。
19　灰黄色シルト～粘土(2.5Y6/2)。シルト主体。しまり弱い。もろい。径0.5～2cmの植物遺体を含む。径0.2～0.5cmの黄灰色砂混シルト(2.5Y6/1)。径0.5～1cmの植物遺体を少し含炭化物を少し含む。径0.5～3cmの鉄分ブロックを多く含む。
20　黄灰色砂混シルト(2.5Y6/1)。径0.5～1cmの植物遺体を少し含む。径0.5～1cmの礫を少し含む。径0.5～3cmの鉄分ブロックを多く含む。
盛土16
21　灰黄褐色シルト(10YR5/2)。径0.5～3cmの鉄分ブロックを含む。径0.5～3cmの植物遺体を含む。径0.5～10cmの礫を少し含む。径0.2～1cmの炭化物を少し含む。

第120図　Ｐ６区盛土11・13・16土層注記

盛土14（第121図）

規模は上面幅が約2.1m、基底部幅が2.5 ～ 3.1mで、盛土の高さは43cmである。方位はN－10°－Wで、条里16より若干西に振る。自然地形の落ち込みの北端に当たる。調査区の南東側では両側に盛土としての立ち上がりをもつが、西側の肩は条里16に接続する。周囲の地形は河道６の東側の際にあたり、基盤となる層はシルト及び粘土である。

南東壁際で、表面が炭化した大木の一部が盛土中央から、軸に対して斜めの状態で出土した。盛土内では多数の自然木片が出土した。遺物は須恵器、土師器、木製祭祀具の人形・馬形・斎串が出土したものの、時期を特定し得る遺物はない。周囲は盛土下面の標高が0.5mと周囲の中では低く、調査時にも水の溜まりやすい箇所であり条里16に隣接することから、軟弱地盤に対応した造作ともみられるが、具体的な性格は明確にしえない。時期は条里16よりも新しく、盛土15と同時期の可能性がある。

盛土15（第121図）

Ｐ６区の東隅で検出した東西方向の盛土遺構である。検出面では肩部までⅣ層が堆積し、頂部はⅢ層に覆われていた。

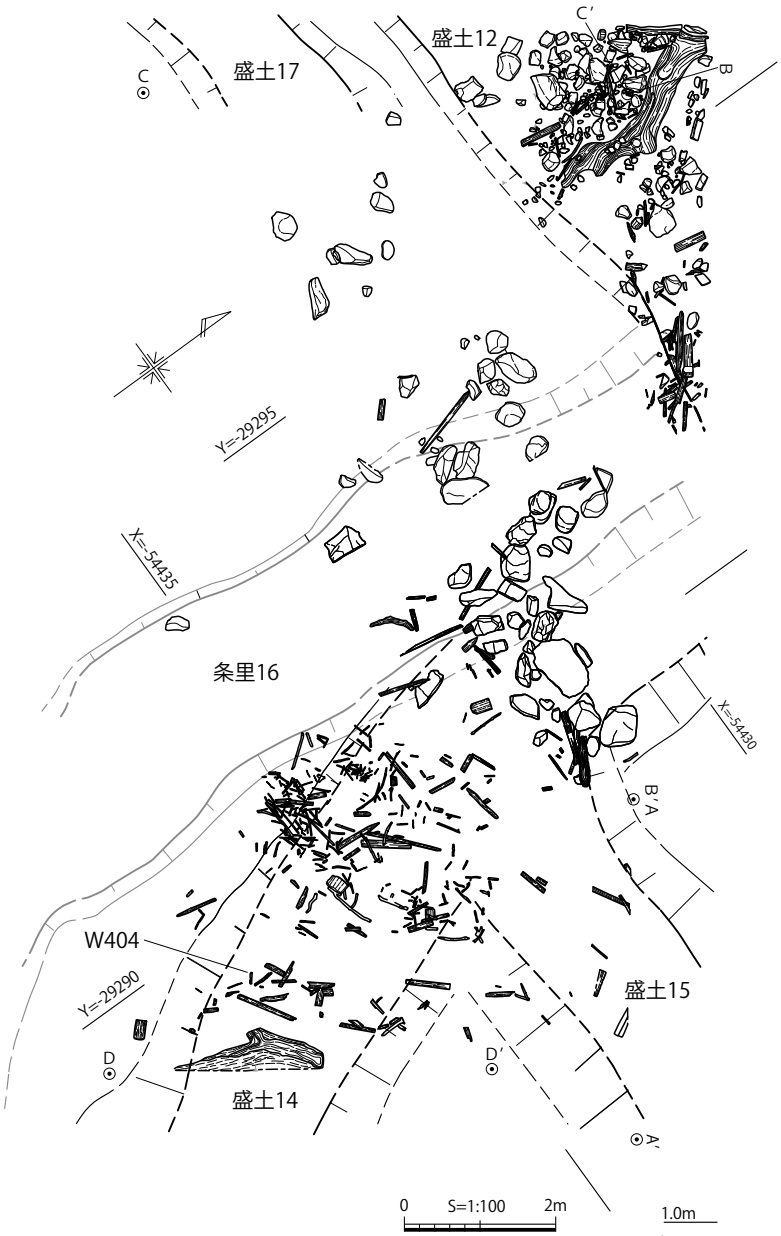
規模は上面幅が約1.7m、基底部幅が約3.5mで、盛土の高さは40cmである。方位はN－85°－Eで東西方向から若干南に振る。調査区の東隅から南北方向に延び、盛土14と接続するものの関係は確認できない。西側に東西方向に軸をもつ盛土17があるものの、主軸が異なるため別の遺構と判断した。

遺物は須恵器や土師器、木製祭祀具の人形・馬形・斎串、木製品の田下駄や建築部材等が出土したものの、時期を特定し得る遺物はない。放射性炭素年代測定では、盛土内から出土した資料番号55（PLD－32189）が557－639 cal AD（95.4%）で、紀元後６世紀中頃から７世紀前半の暦年代を示した。これは、古墳時代後期から飛鳥時代に相当する。ただし、最終形成年輪ではないため、古木効果の影響が少なくないほか、下層に位置する河道６に帰属する資料である可能性が高い。

条里16西側の延長部には対応する盛土は確認できないが、位置関係から一町方格内を12歩（約21m）に分割する条里地割をさらに細分する地割の可能性がある。

盛土16（第119・120図）

Ｐ６区の南端で検出した東西方の盛土遺構である。南側の立ち上がりは確認していない。規模は基底部幅が0.4m以上で、盛土の高さは11cmである。方位は検出範囲が狭く明確ではないが、概ねN－84

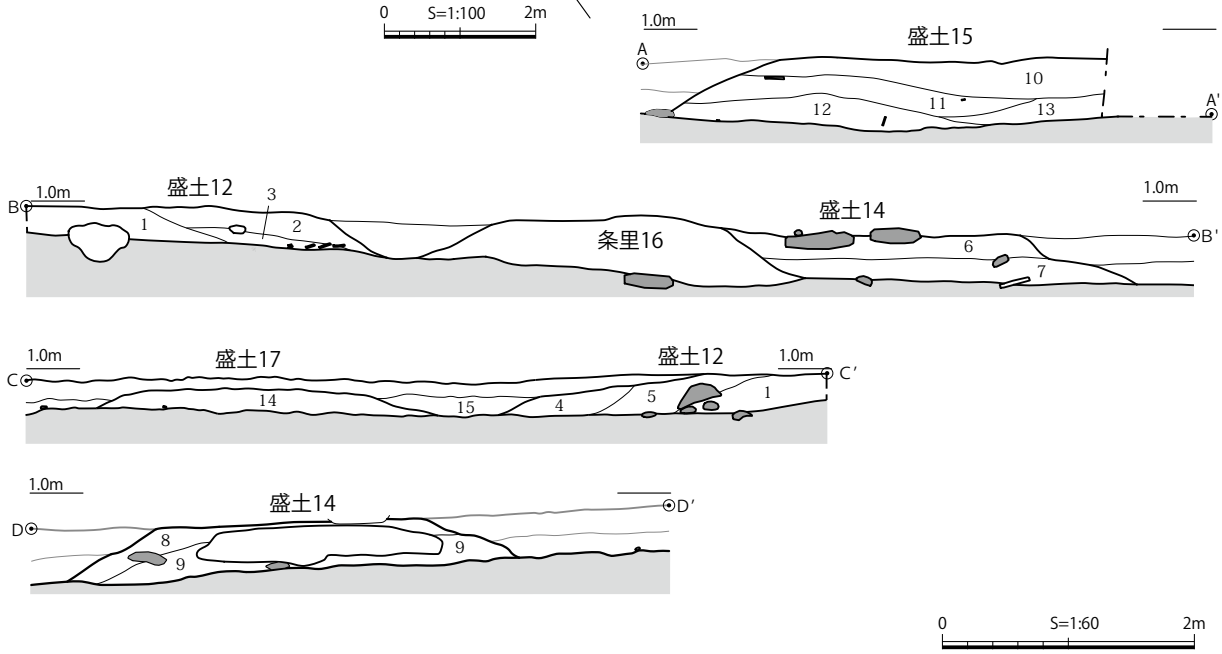


盛土12
1　褐灰色シルト(7.5YR5/1)。しまりやや弱い。自然木を含む。径0.5～5cmの植物遺体を含む。径1～10cmの礫を含む。径0.2～0.5cmの炭化物を少し含む。
2　褐灰色シルト(7.5YR4/1)。しまりやや弱い。径2～4cmの粗朶を少し含む。径0.5～5cmの植物遺体を含む。径0.5～1cmの礫を少し含む。径0.2～0.5cmの炭化物を少し含む。
3　褐灰色シルト(7.5YR6/1)。しまりやや弱い。木製品を含む。径0.5～2cmの植物遺体を含む。径0.2～0.5cmの炭化物を少し含む。
4　黄灰色シルト(2.5Y5/1)。粘性やや強い。径0.5～1cmの植物遺体を少し含む。径0.2～1cmの礫を少し含む。径0.2～1cmの炭化物を少し含む。
5　黄灰色シルト(2.5Y6/1)。径1～5cmの植物遺体を含む。径0.5～1cmの礫を少し含む。径10～30cmの石を含む。径0.5～1cmの炭化物を含む。

盛土14
6　灰黄褐色シルト(10YR5/2)。径0.5～3cmの植物遺体を含む。径 0.2～0.5cmの炭化物を少し含む。径0.5～5cmの礫を含む。径20 ～40cmの石を含む。
7　褐灰色シルト(10YR5/1)。径0.5～5cmの粗朶を含む。径0.5～3cmの植物遺体を含む。木製品を含む。径0.2～0.5cmの炭化物を含む。径0.5～3cmの礫を多く含む。径5～10cmの石あり。
8　褐灰色シルト(10YR6/1)。しまりやや弱い。径0.5～1cmの植物遺体を少し含む。径0.2～0.5cmの炭化物を少し含む。径0.2～0.5 cmの礫を少し含む。
9　灰黄褐色シルト～粘土(10YR6/2)。粘性やや強い。しまりやや弱い。シルト主体。径0.2～5cmの植物遺体を含む。炭化木を含む。径0.2～0.5cmの炭化物を含む。径0.2～1cmの礫を含む。

盛土15
10　黄灰色シルト(2.5Y6/1)。粘性弱い。しまりやや弱い。径0.5～10cmの植物遺体を含む。径1～5cmの礫を少し含む。径0.2～1cmの炭化物を少し含む。
11　灰黄色シルト(2.5Y6/2)。しまりやや弱い。径1～5cmの植物遺体を多く含む。木製品を含む。径0.5～5cmの礫を多く含む。径10～20cmの石あり。径0.2～1cmの炭化物を少し含む。
12　黄灰色シルト(2.5Y5/1)。径0.5～5cmの植物遺体を多く含む。木製品を含む。径0.5～5cmの礫を多く含む。径0.2～0.5cmの炭化物を少し含む。
13　灰黄褐色シルト(10YR5/2)。しまりやや強い。径0.5～10cmの植物遺体を含む。木製品を含む。径1～5cmの礫を多く含む。径10～50cmの石を含む。径0.2～0.5cmの炭化物を少し含む。

盛土17
14　灰黄褐色砂質シルト(10YR4/2)。シルト主体。粘性やや弱い。径３～10㎝の灰色砂質シルトブロック(N/4)シルト主体、を多く含む。径0.2～３㎝の植物遺体を少し含む。径0.2～0.5㎝の礫を含む。径１～５㎝の鉄分ブロックを含む。
15　灰黄褐色シルト(10YR5/2)。径1～3cmの鉄分ブロックを多く含む。径0.5～5cmの植物遺体を含む。径0.5～1cmの礫を含む。径0.2～0.5cmの炭化物を少し含む。溝埋土か。



第121図　Ｐ６区盛土12・14・15・17

°－Ｗである。

南隅付近からは若干の粗朶や木製品が出土した。条里16や盛土15との位置関係から条里地割である可能性もあるが、調査範囲のみで判断することは難しい。

盛土17（第121図）

Ｐ６区の北西側で検出した。盛土12の南側1.1ｍでほぼ平行する。規模は基底部幅が2.4 ～ 2.7ｍで、盛土の高さは北西壁面で19㎝である。方位はＮ－88 ～ 90° －Ｗでほぼ東西方向である。

条里16の方向に延びているが、遺存状況が悪く東側では確認できていない。盛土12との間は灰黄褐色砂混シルトを主体とする15層がみられ、Ⅳ－1・2層と判断したが、本遺構や盛土12からの流出土が主体であると考えられる。その場合は15層が盛土12と盛土17の間に形成された溝状遺構の可能性もあるだろう。

遺物は須恵器の坏や土師器、木製祭祀具の馬形、木製品の蓋板・曲物・田下駄が出土したが、時期を特定し得ない。性格は不明である。

第３項　Ｖ層上面の遺構（古墳時代中期～後期）

１　概要（第122図）

古代の盛土遺構を除去したところ、調査区のほぼ全域で厚さ 10 ～ 30㎝程の細砂層を検出した。砂層の上面を除去したところ、調査区中央を南東から北西方向に流れる河道６を検出した。河道の北東側には石を貼り付けた大規模な護岸遺構が構築され、南西側には杭列９がある。

河道からの出土遺物は僅かであるが、護岸の盛土からは大量の木製品とともに須恵器や土師器、獣骨等が出土した。

２　河道

河道６（第123・125・126図　ＰＬ.31－２・32）

Ｐ６区中央を南東から北西方向に横断する河道である。Ｖ層上面で砂層の広がりを検出した。盛土18は本河道に対する護岸施設と考えられる。

堆積はシルト主体、細砂主体、粗砂や小礫を主体とする層が互層状に堆積する。河道の両肩部付近にはシルト主体の堆積がみられ、堆積過程で何度か水量の少ない段階があることが分かる。その段階でシルト層が発達して幅は次第に狭くなり、最終的には砂が周囲にまで溢流して堆積する。

古段階　底面での主軸はＮ－25° －Ｗで新段階よりも10° 東に振る。幅は約9.2ｍ、深さは最大で約0.9ｍを測る。河道の底部中央付近のみ、最小幅約2.1ｍ程の二段下がりに狭まる。砂層からは自然木や整地土から崩れたとみられる拳から人頭大までの礫が出土した。下層との境から出土した木製品の平鍬は本来、盛土18に帰属する資料と考えられる。

新段階　底面での主軸はＮ－35° －Ｗで西に振る。幅は約11.1ｍで、深さは最大で約1.3ｍを測る。遺物は最上層から人形・馬形・刀形・斎串等の木製祭祀具、木製品の経送具・匙が出土した。その他砂層中から須恵器や土師器、獣骨が出土した。B37はウマの上腕骨右部骨幹である。須恵器は坏蓋と坏身、土師器には埦と甕がみられる。このうち284 ～ 286はいずれも完形に近い埦で、287は甕である。

出土遺物と他の調査区との関係から、時期は岡田・八峠編年ＫⅠ～ＫⅡ期で、７世紀前半から７世紀後半頃に最終的に埋没したと考えられる。

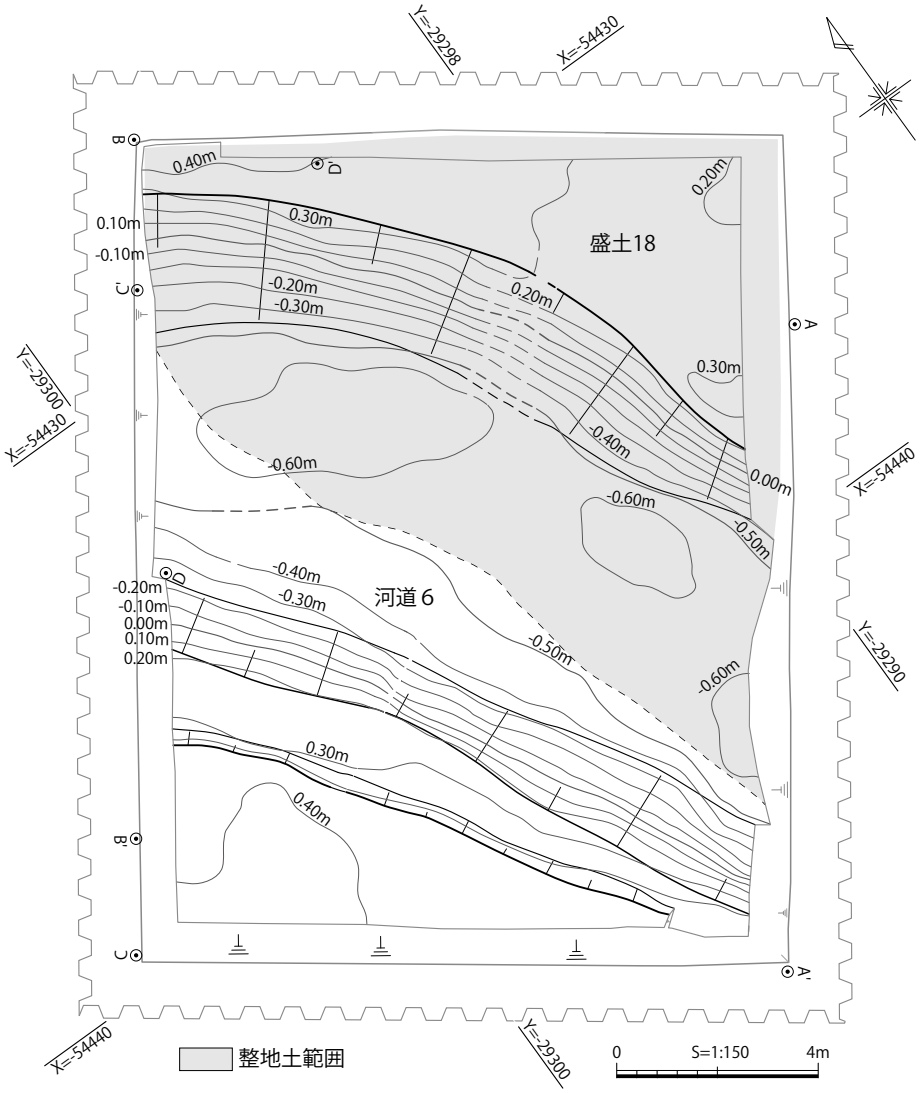
３　盛土

盛土18（第124 ～ 126図　PL.33・34－２）

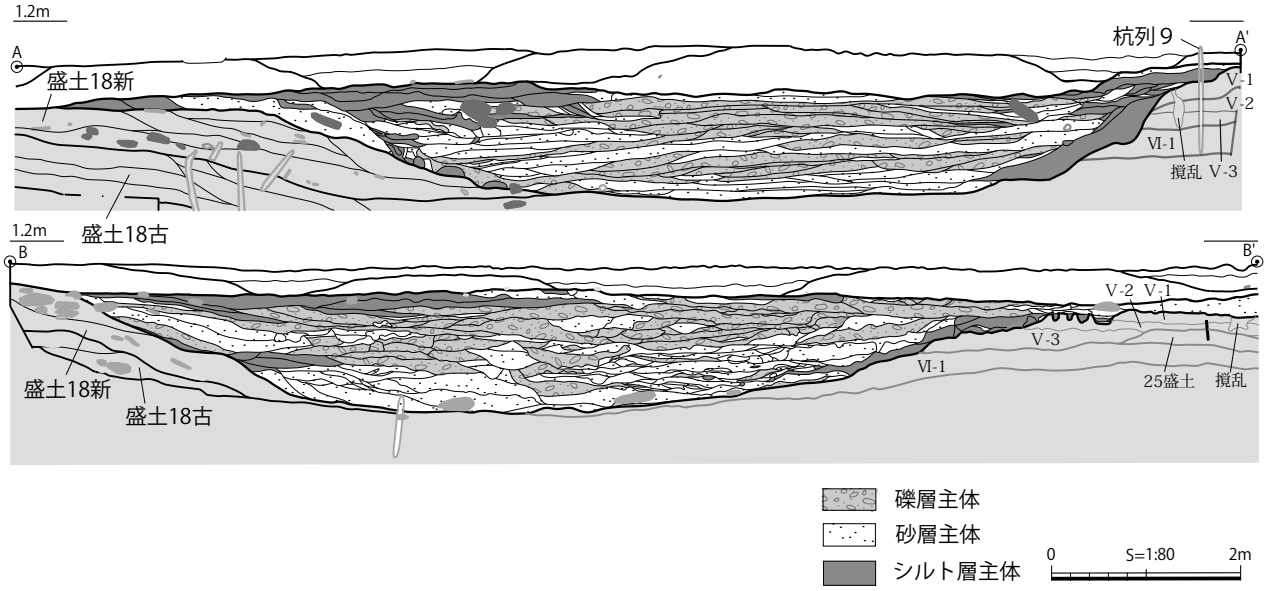
古段階　Ｐ６区中央を南東から北西方向に横断する河道６の北東岸に位置する。盛土の立ちがりは南東壁はⅧ層、北西壁ではⅨ層（第115図）、北西壁からやや東側のトレンチではⅦ層の上（第124図）に構築されており、一定しない。これは古墳時代後期に埋没した12流路が北東岸を不規則に侵食しているためと考えられるが、盛土18が形成されたのはⅦ層上面より新しい時期とみられる。

規模は基底部幅が10.5m以上で、盛土の高さは新段階を含め118㎝である。盛土内からは木製品や自然木、拳大から人頭大までの礫が出土した（第125図）。規則性はみられないが、細長い加工木を主体とし、河道の肩に平行、直交するというよりもむしろ斜行するものが多く、盛土内に混和された礫とともに無秩序に入れられていたようである。

新段階　河道の北東岸に沿って、古段階の盛土を覆う。河道の北東側立ち上がり付近から丘陵側は調査範囲外まで表面に人頭大の礫を貼る。北側と南側は密であるのに中央付近では礫はまばら（第126図）



第122図　Ｐ６区Ⅴ層上面遺構分布図



第123図　Ｐ６区河道６土層断面図・杭列９

である。これは、屈曲部分が河道の攻撃面にあたり、護岸の流出が激しかったことを示唆してる。

盛土内には貼石の下に自然木や木製品を乱雑に入れ、小礫や細砂、シルトの混和層を充填する。最終段階では河道６の細砂が堆積し、本遺構の頂部までを覆い、北東側の石敷の一部を除き埋没する。

盛土内の遺物は大量に木材が出土した。多くは建築部材、田下駄や平鋤、穂摘具を含む農具、アカ取り等の漁撈具、鞘、腰掛け、丸太や用途不明の加工木も多く含まれていた。この中に僅かではあるが須恵器や土師器､弥生土器が含まれていた｡主体をなすのは古墳時代中期から後期の須恵器である。290は有蓋高坏の脚部で５世紀後半のものである。古段階の盛土中から出土し、遺構の構築時期を示す。再度盛り上げられた新段階の形成時期は不明確であるが、少なくとも古墳時代中期から後期にかけて機能したと考えられる。

性格は河道６の護岸施設である。

４　杭列

杭列９（第123・126図）

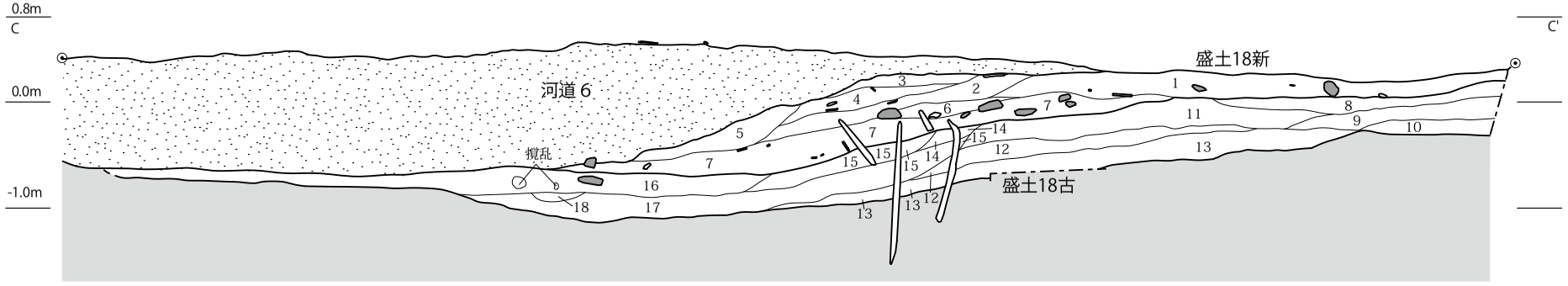
Ｐ６区の南端、河道６の南岸肩部で検出した。河道の落ち際に沿うように７本の杭と周辺から自然木や板状の木製品が出土した。杭列の方位はＮ－38°－Ｗで南北方向から西に振る。調査区の南側には杭列が延びる可能性もあるが、調査範囲外となる。主軸は河道６の新段階に近いため、護岸施設としての性格が考えられる。

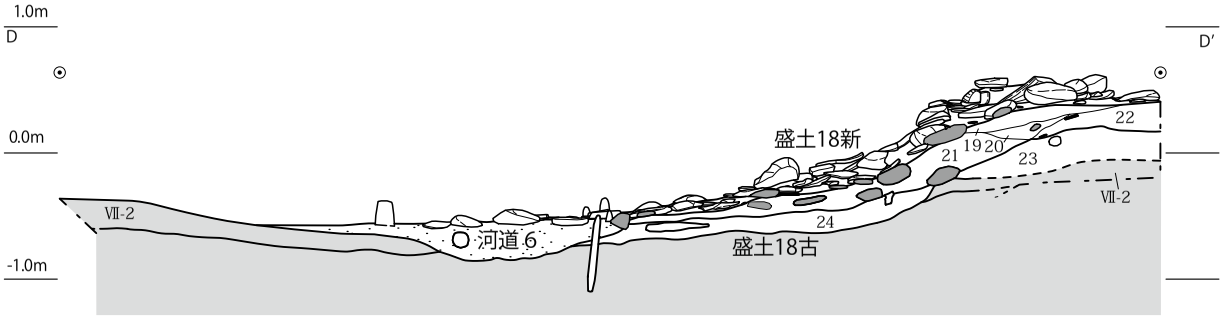
第４項　Ⅵ層上面の遺構（弥生時代後期～古墳時代前期）

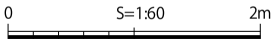
１　概要（第127図）

Ⅵ層は12流路の最深部を除き調査区のほぼ全域で確認した植物遺体を比較的多く含む層である。Ｐ６区の南と北際では標高値0.1 ～ 0.2mあるが、中央を南北に延びる最深－0.7 ～ 0.8mに及ぶ谷状の地形により分断される。

谷地形の南西側で盛土遺構１基とこれに伴う杭群１基を検出した。



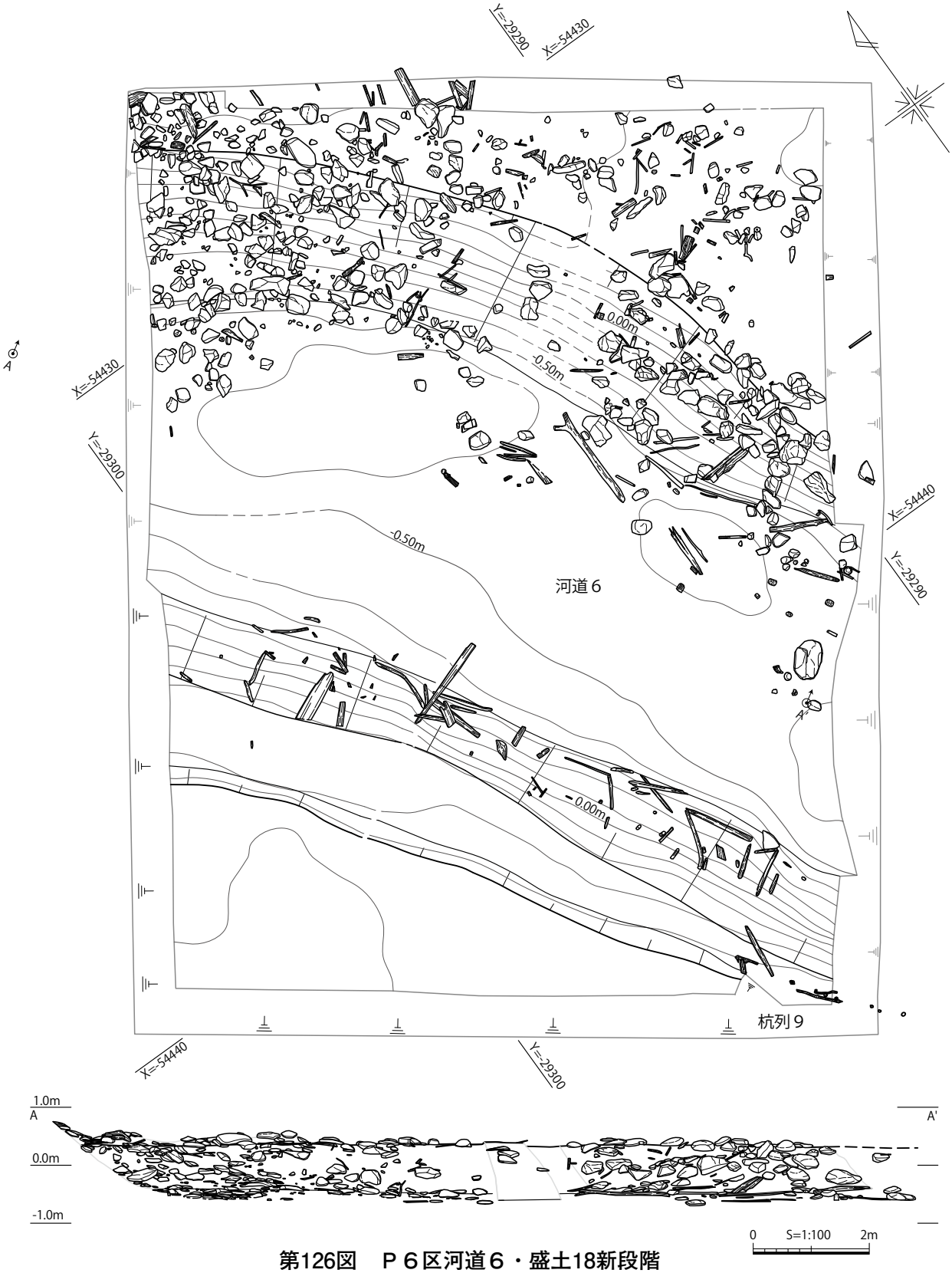




盛土18新段階
1　褐灰色シルト(7.5YR6/1)。木製品を多く含む。径0.5～20cmの植物遺体を多く含む。径1～10cmの礫を含む。径10～30cmの石を多く含む。径0.2～2cmの炭化物を含む。
2　灰黄褐色シルト(10YR5/2)。木製品を含む。自然木を含む。径0.5～5cmの植物遺体を含む。径0.5～5cmの礫を含む。径0.2～5cmの炭化物を含む。
3　黄灰色シルト(2.5Y4/1)。自然木を含む。径0.5～10cmの植物遺体を含む。径0.5～10cmの礫を含む。径10～30cmの石を含む。径0.2～5cmの炭化物を含む。
4　褐灰色細砂～シルト(7.5YR5/1)。粘性やや弱い。シルト主体。自然木を含む。径0.5～10cmの植物遺体を含む。径0.5～5cmの礫を含む。径0.2～2cmの炭化物を含む。
5　褐灰色細砂～シルト(7.5YR6/1)。粘性やや弱い。シルト主体。径5～10cmの中砂ブロックを含む。自然木を多く含む。径0.5～10cmの植物遺体を含む。径0.5～10cmの礫を含む。径0.2～5cmの炭化物を含む。
6　明褐灰色シルト(7.5YR7/2)。土器を含む。径0.5～5cmの植物遺体を含む。径0.5～10cmの礫を含む。径10～30cmの石を含む。径0.2～2cmの炭化物を含む。
7　褐灰色シルト(7.5YR4/1)。土器を含む。自然木を含む。径0.5～10cmの植物遺体を含む。径0.5～10cmの礫を含む。径10～30cmの石を多く含む。径0.2～5cmの炭化物を含む。
盛土18古段階
8　灰黄褐色シルト(10YR5/2)。自然木を含む。径0.5～10cmの植物遺体を含む。径0.5～5cmの礫を少し含む。径0.2～10cmの炭化物を含む。
9　褐灰色シルト(7.5YR5/1)。径0.5～2cmの明褐灰色粘土ブロック(7.5YR7/1)を含む。径0.5～10cmの植物遺体を多く含む。径0.5～5cmの礫を少し含む。径0.2～2cmの炭化物を含む。
10　灰褐色シルト(7.5YR5/2)。径0.5～2cmの明褐灰色粘土ブロック(7.5YR7/1)を含む。径0.5～10cmの植物遺体を含む。径0.2～2cmの炭化物を含む。径0.5～2cmの鉄分ブロックを多く含む。
11　灰黄褐色シルト(10YR4/2)。径0.5～2cmの明褐灰色粘土ブロック(7.5YR7/1)を含む。径0.5～10cmの植物遺体を含む。径0.5～5cmの礫を少し含む。径0.2～3cmの炭化物を含む。
12　褐灰色シルト(10YR4/1)。径0.5～10cmの植物遺体を含む。径0.5～5cmの礫を少し含む。径0.5～3cmの炭化物を含む。
13　褐灰色シルト(5YR5/1)。径0.5～20cmの植物遺体を多く含む。径0.5～5cmの礫を少し含む。径0.2～3cmの炭化物を含む。
14　褐灰色シルト(5YR5/1)。木製品を含む。径0.5～10cmの植物遺体を含む。径0.5～10cmの礫を含む。径10～30cmの石を多く含む。径0.2～5cmの炭化物を含む。
15　黒褐色シルト(10YR3/1)。径0.5～5cmの木屑を含む。自然木を多く含む。径0.5～5cmの植物遺体を含む。径0.5～5cmの礫を含む。径0.2～2cmの炭化物を含む。
16　暗赤褐色細砂～シルト(5YR3/2)。粘性やや弱い。シルト主体。径5～15cmの細砂ブロック含む。径0.5～5cmの植物遺体を含む。径0.5～10cmの礫を少し含む。径0.2～2cmの炭化物を少し含む。
17　黒褐色シルト(7.5YR3/2)。径0.5～10cmの植物遺体を多く含む。径0.5～5cmの礫を少し含む。径0.2～2cmの炭化物を含む。
18　灰黄色細砂ブロック(2.5Y6/2)。粘性弱い。しまり弱い。径0.5～2cmの植物遺体を少し含む。径0.5～1cmの礫を少し含む。径0.2～1cmの炭化物を含む。
盛土18新段階
19　黄灰色細砂～シルト(2.5Y4/1)。粘性弱い。細砂主体。径0.5～5cmの植物遺体含む。径0.2～1cmの炭化物含む。径0.5～10cmの礫含む。10～40cmの石含む。
20　暗灰黄色細砂～シルト(2.5Y4/2)。粘性弱い。細砂主体。径0.5～3cmの植物遺体含む。径0.2～1cmの炭化物含む。径5～10cmの礫含む。
21　黒褐色細砂～シルト(2.5Y3/1)。粘性弱い。細砂主体。径0.5～10cmの植物遺体含む。自然木含む。径0.2～1cmの炭化物含む。径0.5～5cmの礫含む。径10～40cm石多く含む。
22　褐灰色シルト(10YR4/1)。径0.5～10cmの植物遺体多く含む。自然木含む。木製品含む。径0.2～2cmの炭化物多く含む。径0.5～10cmの礫含む。
盛土18古段階
23　灰黄褐色シルト(10YR4/2)。粘性ふつう。しまりふつう。径0.5～10cmの植物遺体多く含む。自然木含む。径0.2～1cmの炭化物含む。径0.5～10cmの礫含む。径10～40cmの石含む。
24　灰黄褐色砂混シルト(10YR4/2)。粘性やや弱い。シルト主体。径5～15cmの細砂ブロック含む。径0.5～10cmの植物遺体含む。径0.2～1cmの炭化物少し含む。径0.1～10cmの礫少し含む。径10～30cmの石あり。

第124図　Ｐ６区盛土18土層断面図

第125図　Ｐ６区河道６・盛土18古段階



第126図　Ｐ６区河道６・盛土18新段階

２　盛土遺構

盛土19（第128図）

Ｐ６区の西壁で断面を確認し、精査して盛土の一部を検出した。明瞭ではないものの盛土は幅約２ｍで杭群６の根元を覆うように北西から南東に延び、東側に向きを変えながら途切れていた。基盤の標高値は最大で0.1ｍ、東に向かい－0.3ｍまで下がる。盛土の高さは最大で0.5ｍを測る。

盛土内から土器は出土していない。盛土の向きや範囲が杭群６と重なることから、一体で機能したと考えられる。具体的な性格は明らかではない。

３　杭列・杭群

杭群６（第128図）

Ｐ６区の南西、北西壁の西隅付近に位置する。Ｎ－24°－Ｗと南東に向かう杭群と、そこからほぼ直角に向きを変え、Ｎ－64°－Ｅと北東に向かう杭群と板を組み合わせている。板材は幅0.3ｍから0.5ｍ、長さ1.5ｍから2ｍで、これを挟み込むように両側に杭を打ち込み、固定させていた。南東に向かう板材は短辺を垂直方向に立てるが、北東に向かう板材は、やや斜めではあるが水平方向に近い。杭の総数は33本を数える。

周辺から木製品の田下駄が出土しているものの、土器は出土していないため、杭の年代測定を行った。資料番号57（PLD－32191）は71－177 cal AD（89.7%）及び190－212 cal AD（5.7%）で、紀元後１世紀後半から３世紀前半の暦年代を示した。これは、弥生時代後期に相当する。最終形成年輪を含めて測定が行われているため、測定結果は枯死もしくは伐採年代を示す。

河道に関連する施設と推察するものの、具体的な性格は不明である。

杭列10（第127・128図）

Ｐ６区の東隅で検出した杭列である。根本で計測した方位はＮ－61°－Ｅである。11本の杭で構成され、横材を組み合わせた構造をもち、木造構造物とすべき遺構である。

土器が出土していないため、杭の年代測定を行った。資料番号56（PLD－32190）は399－357 cal BC（74.3%）及び285－235 cal BC（21.1%）で、紀元前４世紀初頭から３世紀後半の暦年代を示した。これは、弥生時代前期から中期に相当する。芯材を測定しており、古木効果の影響を受けている可能性がある。　河道６を挟み、杭群６と何らかの関係が考えられるものの、具体的な性格は不明である。

第５項　Ⅶ層上面の遺構（弥生時代中期～後期）

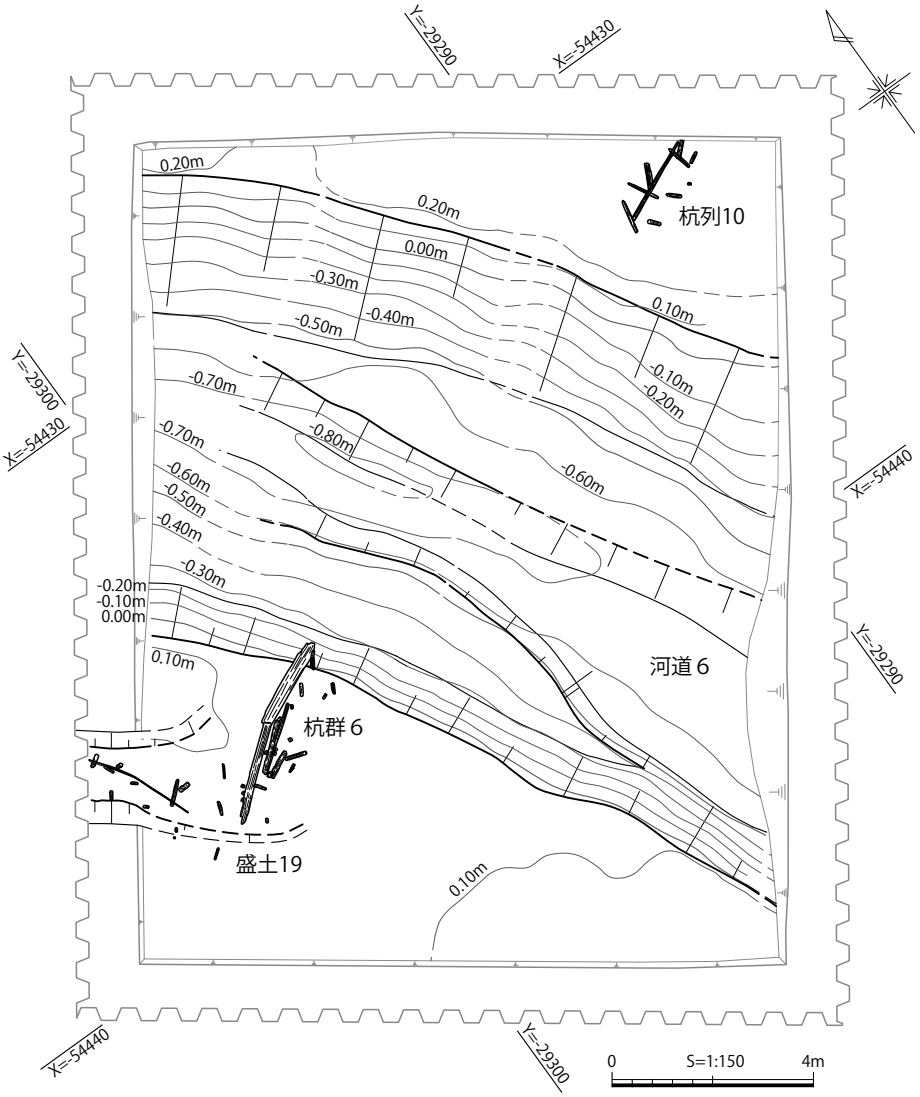
１　概要（第129図）

Ⅶ層は植物遺体が少なく粘土ブロックを含む層である。地形は調査区の北東から中央に向かい－0.1 ～－ 0.8m まで下がり、南西に向かい－ 0.2 ｍまで上がる谷地形で分断される。北東側の斜面で杭群を１基検出した。

２　杭群

杭群７（第130図　PL.34）

Ｐ６区の北東側で検出された大規模な杭群である。Ⅶ層上面から北東から南西に向けて標高－0.1ｍから－0.7ｍに下る斜面地に110本の杭が打設されている。



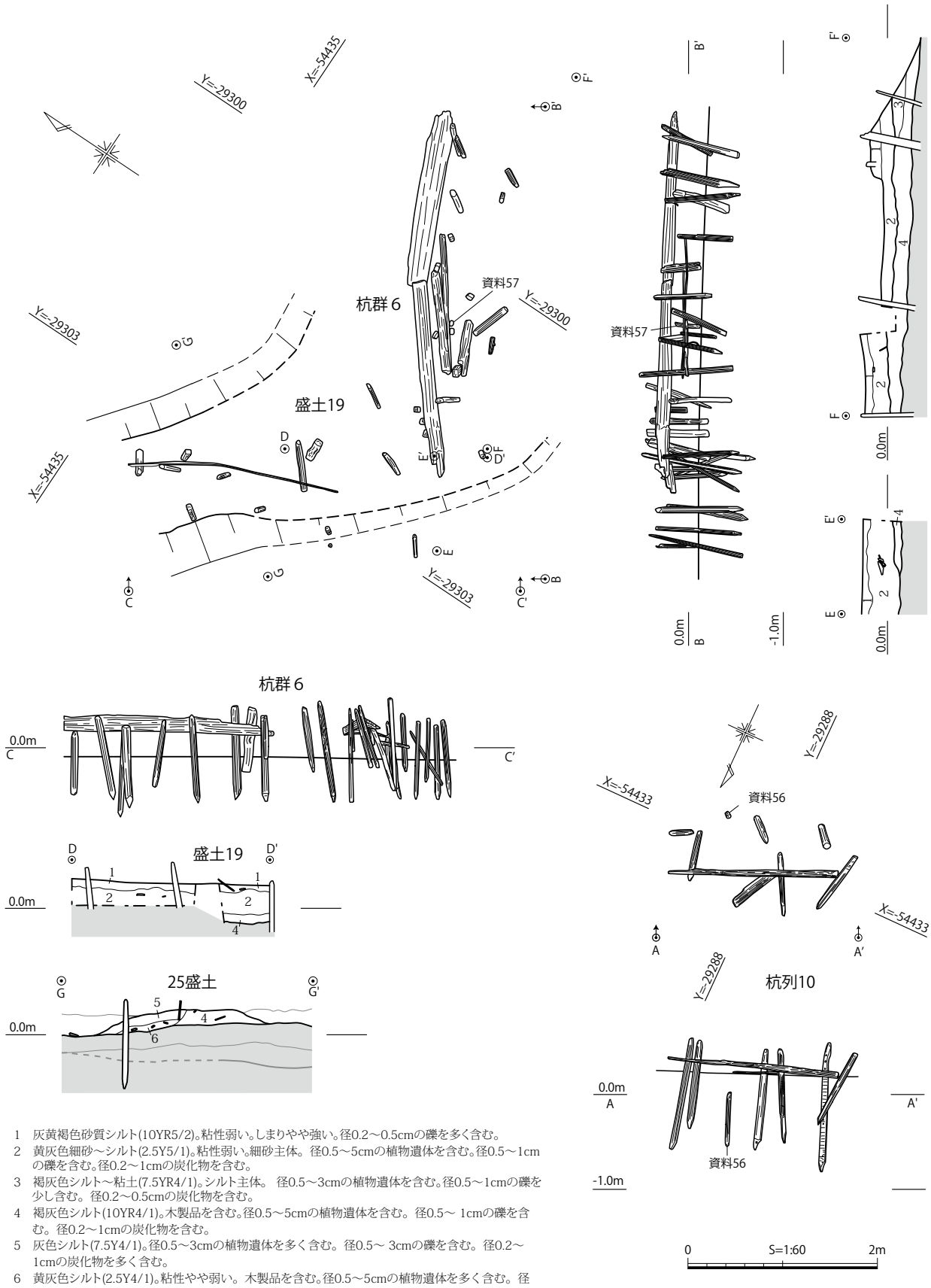
第127図　Ｐ６区Ⅵ層上面遺構分布図

杭の長さは0.5m未満の短いもの、0.5mから１mの中程度のもの、１mを越える長いものに分かれ、傾斜に直交もしくは先端を傾斜よりも上側に向けた状態で検出した。

杭のうち中程度から長いものの多くは両端を尖らせた楔状に加工され、丸太材よりも面取りされた転用材を主体とする。盛土中からは杭の加工片は出土していないこと、多くの杭の先端部には僅かではあるが打ち込まれたささくれ状の小平坦面があることから別の場所で尖らせたものを柔らかい地盤を利用して打ち込んだのであろう。

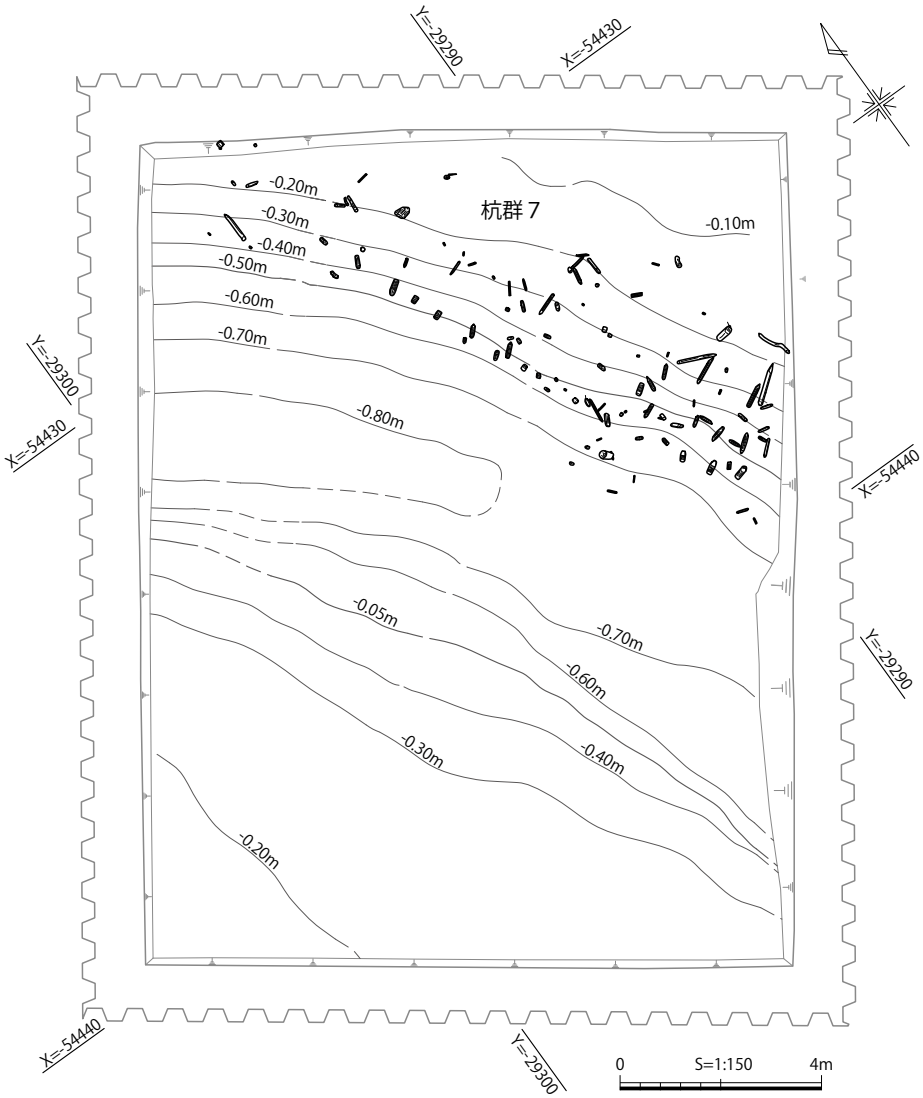
こうした杭は傾斜の方向とは必ずしも一致せず、南から北へ直線状に延びる。さらに並行する縦断方向、直交する横断方向に複数の杭列がある。

打設時期が不明確なため、複数の杭の年代測定を行った。資料番号58(PLD－32192)は360－273 cal BC (58.5%)及び262－199 cal BC(36.9%)、資料番号60(PLD－32194)は356－284 cal BC(59.2%)、256－249 cal BC(1.0%)、235－171 cal BC(35.2%)で、いずれも紀元前４世紀前半から２世紀前半の暦年代を示した。これらは、弥生時代中期に相当する。また、資料番号59(PLD－32193)は157－136 cal BC(4.2%)及び114 cal BC－4 cal AD (91.2%)で、紀元前２世紀中頃から紀元後１世紀初頭の暦年代を示した。これは、弥生時代中期から後期に相当する。これらの杭はいずれも芯材を測定しているため古木効果の影響を受けており、杭として使用された時期はやや下ると考えられる。



1　灰黄褐色砂質シルト(10YR5/2)。粘性弱い。しまりやや強い。径0.2～0.5cmの礫を多く含む。
2　黄灰色細砂～シルト(2.5Y5/1)。粘性弱い。細砂主体。径0.5～5cmの植物遺体を含む。径0.5～1cmの礫を含む。径0.2～1cmの炭化物を含む。
3　褐灰色シルト～粘土(7.5YR4/1)。シルト主体。 径0.5～3cmの植物遺体を含む。径0.5～1cmの礫を少し含む。 径0.2～0.5cmの炭化物を含む。
4　褐灰色シルト(10YR4/1)。木製品を含む。径0.5～5cmの植物遺体を含む。 径0.5～ 1cmの礫を含む。 径0.2～1cmの炭化物を含む。
5　灰色シルト(7.5Y4/1)。径0.5～3cmの植物遺体を多く含む。 径0.5～ 3cmの礫を含む。 径0.2～1cmの炭化物を多く含む。
6　黄灰色シルト(2.5Y4/1)。粘性やや弱い。 木製品を含む。径0.5～5cmの植物遺体を多く含む。 径0.5～ 5cmの礫を含む。 径0.2～1cmの炭化物を含む。

第128図　Ｐ６区杭列10・杭群６・盛土19



第129図　Ｐ６区Ⅷ層上面遺構分布図

杭の両端を尖らせていること、密度が高く、大型の杭が多いこと、何重にも打設されていることから東側の丘陵裾に何らかの施設が存在し、それを囲繞する区画施設としての性格が考えられる。

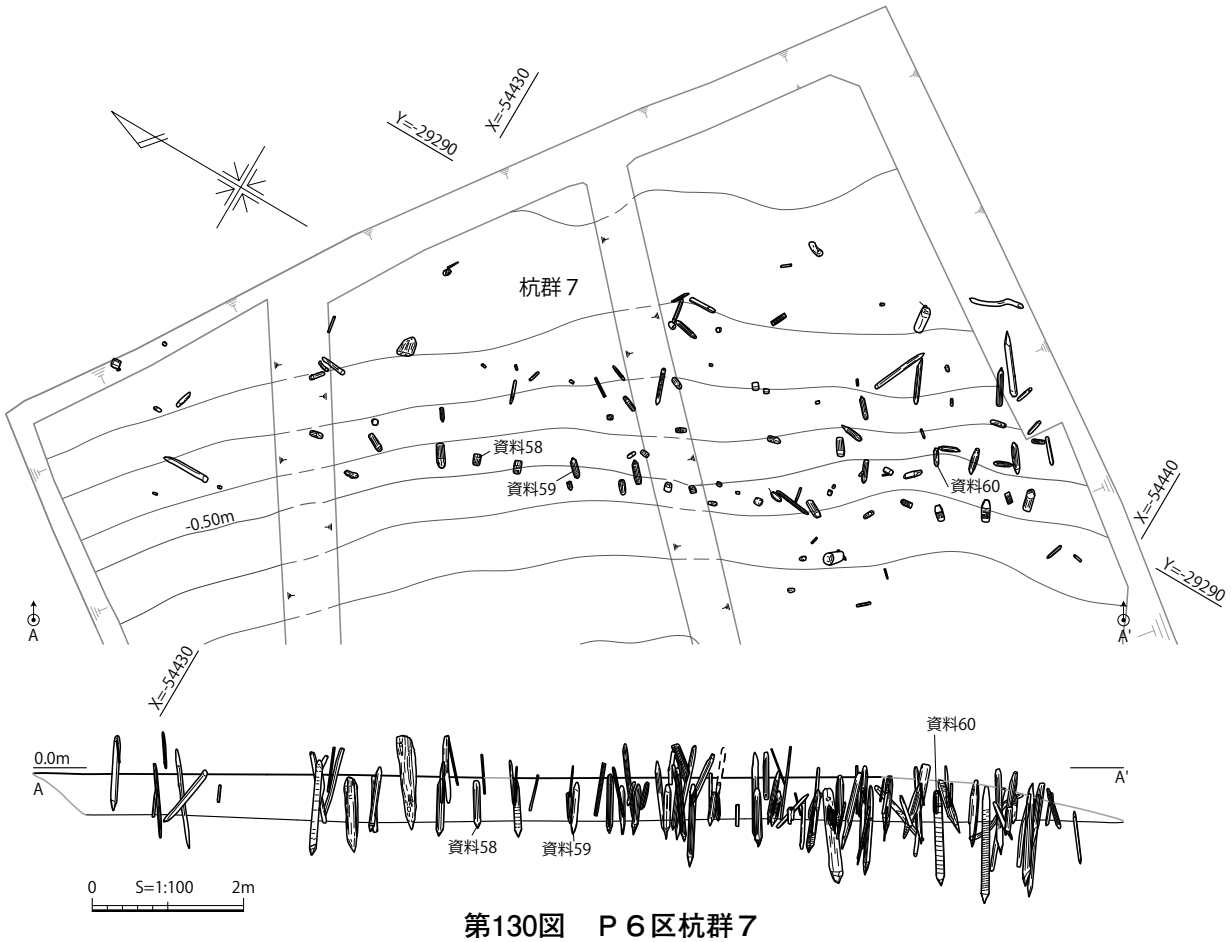
第６項　Ⅷ層上面～Ⅸ層の遺構（弥生時代前期以前）

１　概要（第131図）

Ⅷ層はＰ６区の南東側を中心に堆積するシルト主体で粘土ブロックを多く含む層である。Ⅸ層は粘土層で、灰色や灰白色、灰褐色等の薄い層が重複し、その間には貝を多量に含む、少なくとも上下２層がある（第115図）。上の貝層からは縄文土器等の遺物が出土するものの密度は低い。調査区西端の貝層の標高は－1.3m、西側のＰ５区では－1.2mであり、東に向かい僅かに高くなる。

Ⅷ層上面では河道に伴う砂層を検出したものの他に遺構は確認できない。

Ⅸ層は、調査区北隅が標高－0.15mと最も高い。このうち貝層上面では、他の調査区とは異なり杭群等は確認できないものの、北隅付近の傾斜面で等高線に斜行するように長さ４m程の丸太が出土した。自然木の枝を落としただけの丸太ではあるが、延長上にも丸太や礫が散在することから、丘陵から海へ向かう足場として人為的に設置されたものと考えられる。



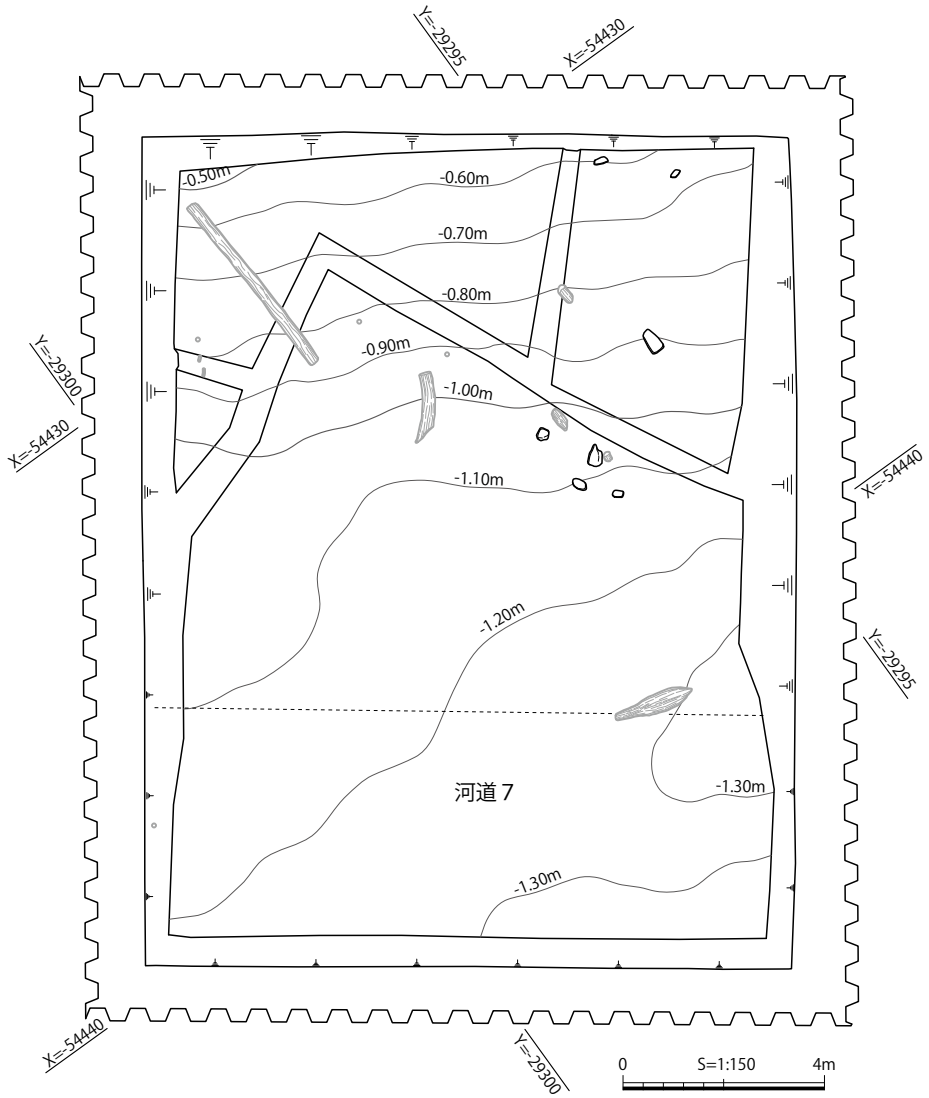
第130図　Ｐ６区杭群７

２　河道

河道７（第131図）

Ｐ６区の南西壁（第116図）に平行して検出された河道である。規模は幅５ｍ以上で、深さは最大45㎝程が遺存する。埋土は細砂を主体とし、礫や石、植物遺体も含まれていない均質な層である。南西側に向かい堆積は厚く（第115図）、底面の標高は南側で－0.8m、北側で－0.85mである。南東壁と北西壁（第115図）でいずれも南西側に向かい傾斜していることから、検出部分は南から北に緩やかに向かう河道の東肩部にあたるとみられる。ただし、周辺の地形をみると、河道７の中心はさらに南西にあり、河道から溢流した砂層を検出していると考えられる。

遺物は木製品の平鋤W1352を図化したが砂層上面であり盛土18から転落したと考える。下層にあたるⅨ層からは縄文土器の粗製の深鉢底部301が出土している。時期は検出層位から、縄文時代晩期から弥生時代前期の河道である。



第131図　Ｐ６区Ⅷ～Ⅸ層遺構分布図

第９節　６区の調査

第１項　調査区の概要（第 133 図）

６区は青谷横木遺跡のほぼ中央に位置する。調査年度は平成25年度で、調査面積は685.8㎡である。道路設計の変更や調査期間からⅣ層中の掘削で止めている。Ⅲ層上面まで重機により掘削し、Ⅲ層以下は人力により包含層掘削を行った。調査区全面はⅣ層検出段階で止め、下層の状況については、東西約11m、南北約23m範囲を再度設定して遺構の検出作業を行った。

Ⅰ・Ⅱ層は近現代の造成土と水田耕作土である。Ⅲ層は２層に細分できる。Ⅲ－１層は灰白色のブロックを含み、上層の影響を受けたものと考えられる。Ⅲ－２層は黒褐色を呈しており、撹乱の影響は少ないと思われる。Ⅳ層は木質を多く含んでいた。

第２項　Ⅴ層上面の遺構（古代）（第 132 図）

条里地割を示すとみられる盛土遺構を３基確認している。前述のように限定的な調査にとどまっているため、規模や構造について不明瞭さを残す。

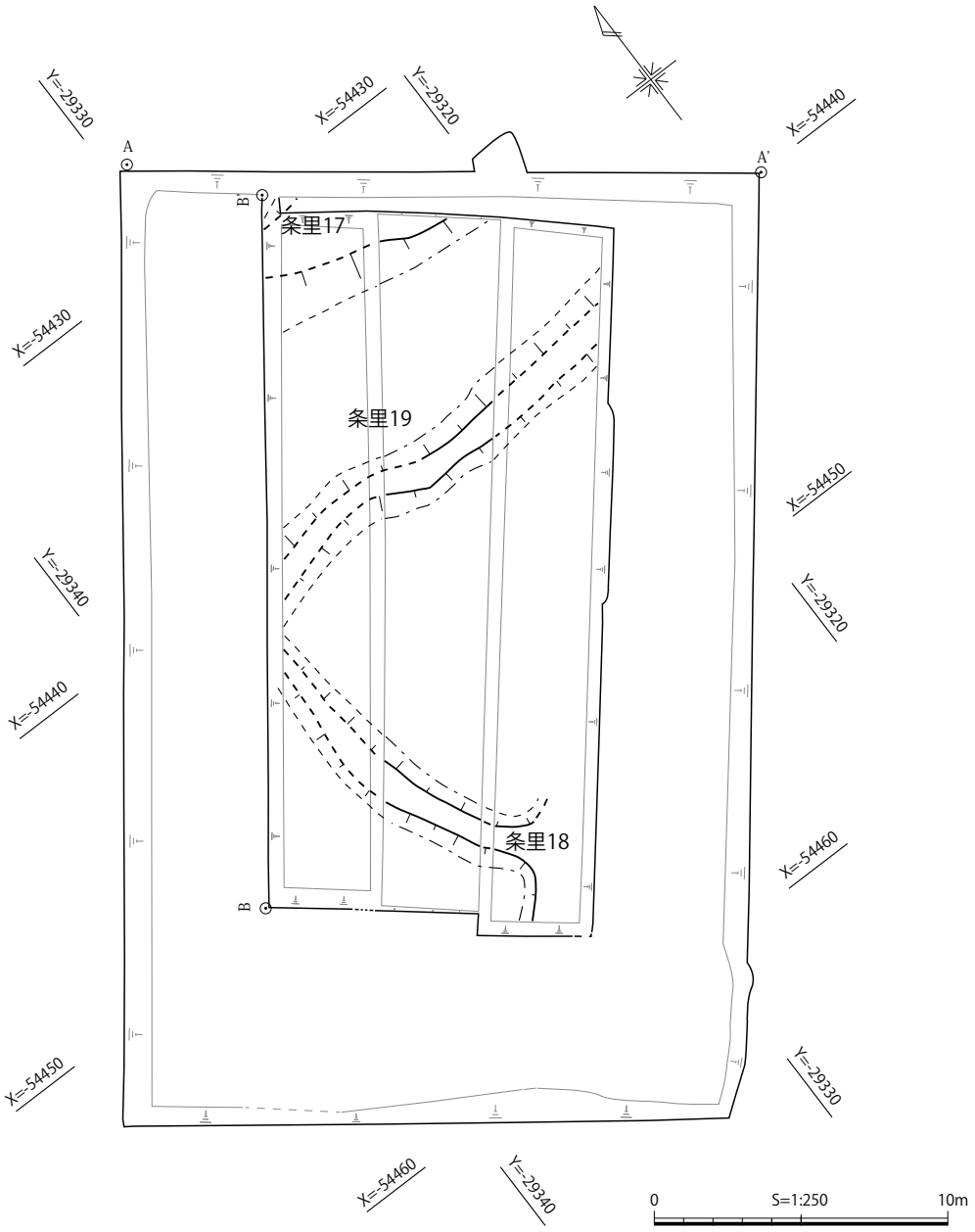
１　条里遺構

条里17（第132・133図）

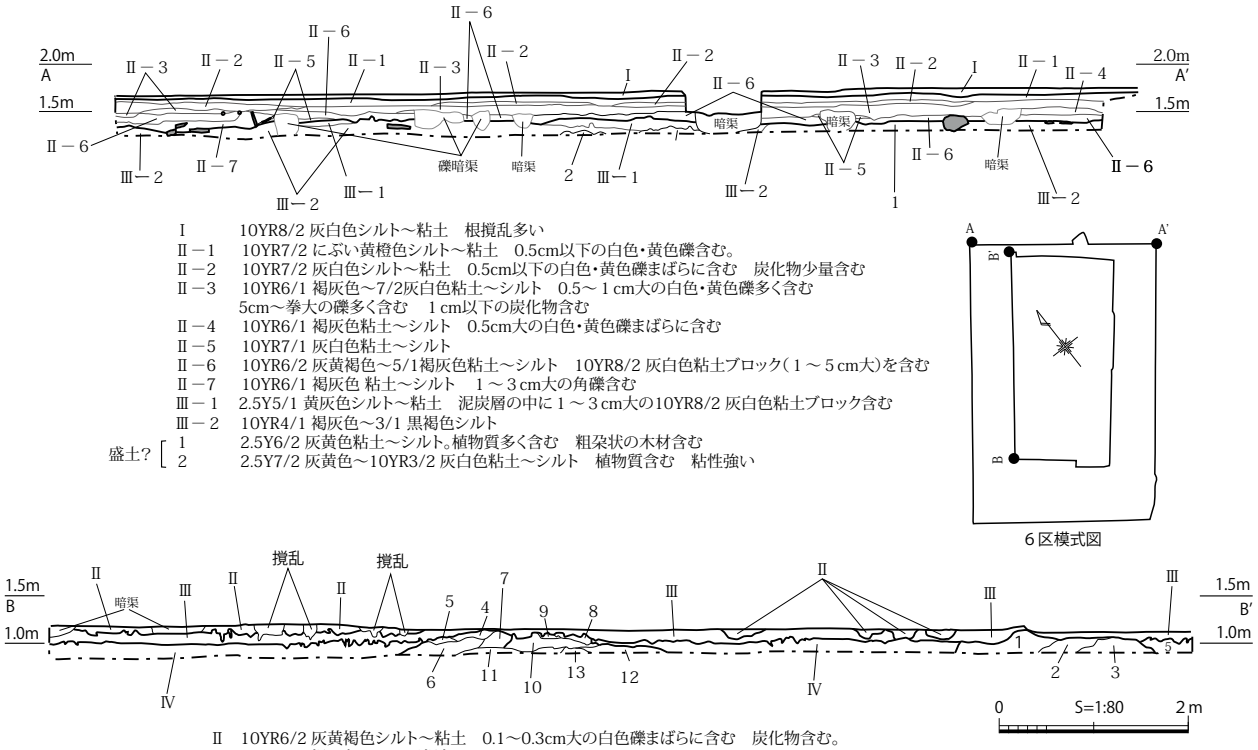
調査区の北西隅で検出した盛土遺構である。東西方向に延びると推定される。方位はＮ－73°－Ｅで、Ｐ７区の南東隅にて延伸部分を確認した。一町方格内を分割する条里地割と推定される。幅については大部分が調査区外であるため不明である。盛土の高さは約 10cm 分を確認したが、基底部まで掘削していないため不明である。詳細な時期は不明ながら、古代の遺構と考える。

条里 18（第 132・133 図）

南北方向に延びる盛土遺構で、一町方格内を分割する条里地割と推定される。盛土上面のみの検出である。検出した上面幅は約１ｍで、高さは約10cmほどを確認したが、基底部まで達していない。Ｐ７区にて延伸部分を確認している。方位はＮ－15°－Ｗである。



第132図　６区遺構分布図



Ⅰ　10YR8/2 灰白色シルト～粘土　根撹乱多い
Ⅱ－1　10YR7/2 にぶい黄橙色シルト～粘土　0.5cm以下の白色・黄色礫含む。
Ⅱ－2　10YR7/2 灰白色シルト～粘土　0.5cm以下の白色・黄色礫まばらに含む　炭化物少量含む
Ⅱ－3　10YR6/1 褐灰色～7/2灰白色粘土～シルト　0.5～１cm大の白色・黄色礫多く含む
5cm～拳大の礫多く含む　１cm以下の炭化物含む
Ⅱ－4　10YR6/1 褐灰色粘土～シルト　0.5cm大の白色・黄色礫まばらに含む
Ⅱ－5　10YR7/1 灰白色粘土～シルト
Ⅱ－6　10YR6/2 灰黄褐色～5/1褐灰色粘土～シルト　10YR8/2 灰白色粘土ブロック（１～５cm大）を含む
Ⅱ－7　10YR6/1 褐灰色 粘土～シルト　１～３cm大の角礫含む
Ⅲ－1　2.5Y5/1 黄灰色シルト～粘土　泥炭層の中に１～３cm大の10YR8/2 灰白色粘土ブロック含む
Ⅲ－2　10YR4/1 褐灰色～3/1 黒褐色シルト
盛土?
1　2.5Y6/2 灰黄色粘土～シルト。植物質多く含む　粗朶状の木材含む
2　2.5Y7/2 灰黄色～10YR3/2 灰白色粘土～シルト　植物質含む　粘性強い

６区模式図

Ⅱ　10YR6/2 灰黄褐色シルト～粘土　0.1～0.3cm大の白色礫まばらに含む　炭化物含む。
Ⅲ　10YR4/1 褐灰色～3/1 黒褐色シルト
Ⅳ　2.5Y7/2 灰黄色～2.5Y6/2 灰黄色粘土～シルト　植物質含む。
条里17
1　10YR7/2～7/3 にぶい黄橙色粘土～シルト　しまり強い　植物質含む　0.5cm以下の炭化物含む。
2　10YR7/2 にぶい黄橙色粘土～シルト　しまり強い　植物質含む
3　10YR6/2 灰黄褐色粘土～シルト　しまり強い　植物質含む。
条里18
4　2.5Y7/2～6/2 灰黄色シルト～粘土　しまり強い　植物質多く含む　径１cm以下のウツギ含む　0.5cm以下の炭化物含む
5　2.5Y6/2 灰黄色シルト～粘土　しまり強い　植物質、径0.5cm以下の炭化物多く含む　にごり強い。
6　2.5Y7/2 灰黄色粘土～シルト　しまり強い　径１～３cm大の木材、径１cm以下のウツギ、植物質含む
7　10YR7/2 にぶい黄橙色粘土～シルト　にごり強い　植物質含む　径１～３cm大の木材含む
8　10YR8/2 灰白色～7/2 にぶい黄橙色～シルト植物質多く含む10YR3/2 灰白色の粘土ブロック（１～３cm大）を含む
9　10YR8/2 灰白色粘土　0.5cm以下の炭化物、小礫わずかに含む
10　2.5Y7/2 灰黄色～10YR7/2 にぶい黄橙色粘土～シルト　しまり強い　0.5cm以下の炭化物、植物質含む
11　5Y7/1 灰白色～6/1 灰色粘土　植物質含む
12　5Y7/1 灰白色粘土　粘性強い　植物質含む

第133図　６区土層断面図

遺物の出土がなく、詳細な時期について不明であるが、古代に帰属する遺構である。

条里19（第132図）

東西方向に延びる盛土遺構である。一町方格内を分割する12歩に分割する条里地割をさらに細分する地割にあたる可能性がある。方位はＮ－71°－Ｗで、南北方向の条里18と接続する。盛土は上面幅約１ｍほどを検出している。高さは不明である。

遺物の出土がなく、詳細な時期について不明であるが、古代に帰属する遺構である。

第10節　Ｐ７区の調査

第１項　調査区の概要

１　地形と土層堆積（第134・135図）

Ｐ７区は青谷横木遺跡のほぼ中央に位置する。調査年度は平成27年度で、調査面積は328.4㎡である。本調査区は山側と平野部の変換点に立地している。丘陵斜面の一部を調査区とするため、鋼矢板は３方向のみ打設している。重機による掘削はⅢ層まで行い、人力による掘削はⅣ層から開始した。掘削は最深箇所で標高－0.9m付近まで行った。調査区背後の丘陵斜面の調査は斜面が急峻であり、かつ、巨石が点在していることから安全面に配慮し、石積２の調査を行うに留めた。

Ⅰ～Ⅱ層は近代までの造成土である。

Ⅲ層は調査区の中央より平野側でしか堆積は確認できない。山側に作られた石積２の基底面はⅢ層中か上面に位置すると推測されるが、層序によって明確にはしえなかった。

本調査区においてⅣ層は確認できていない。湧水対策として、調査当初に掘った排水溝より出土した遺物をⅣ層として取り上げたが、厳密には道路１道路外盛土あるいは道路１に帰属する。

道路遺構や条里遺構、外盛土は河道６埋没後に造成されたものであることから、便宜上、旧河道をⅤ層として調査を行った。本調査区のⅥ層は丘陵斜面を起源するとみられる角礫層で土石流等を起源とした堆積と考える。Ⅶ層は調査区南東のごく一部で確認した。Ⅸ層は調査区の南東隅を中心に確認した。貝類が密集する層の存在を考慮すると、当該期の入り江と丘陵間の汀線付近を確認したと判断できる。

２　遺構の概要

本調査区では中世から近世、飛鳥時代から平安時代、古墳時代後期から飛鳥時代、古墳時代、弥生時代から縄文時代の遺構を確認した。中世から近世期の遺構は石積２である。古代の遺構は道路１、道路１外盛土、条里遺構３基、盛土遺構１、溝３基、自然河道を確認した。自然河道には杭列が検出でき、護岸を意図したと思われる礫敷を確認している。古墳時代の遺構としては山側斜面に溝１基を確認したほか、自然河道からは加工痕のある大木も出土している。弥生時代の遺構は調査区南東隅で杭列を検出した。縄文時代には水場への移動手段として、大木を利用した足場状の遺構が確認できた。縄文時代から古墳時代後期までは水辺を利用した土地利用が窺われ、旧河道の埋没後は道路や耕地区画として機能していたことが分かる。

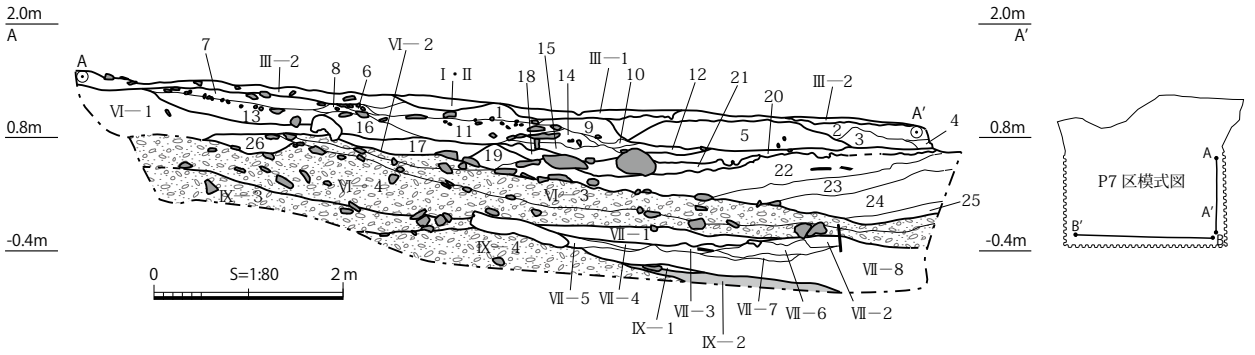
第２項　Ⅱ層相当の遺構（近世）

１　石積遺構

石積２（第136図　ＰＬ.35－１,２）

本調査区の山際と平野部分を画するように構築されていた。西側は本調査区の西側で一度途切れ、Ｐ９区付近にて再び確認できる。東側はＰ３、４区付近まで延びている。

石積２は平坦面からの高さは2.3mを測る。60～70㎝程度の礫を積み重ねて構築している。目地は高さ１m程度で大ぶりの石材を横位に用いていることからも、ある程度意識して構築している。石積の空隙には10㎝程度の礫により補填している。基礎となる一石目は一辺が最大1.5m程度の大きな石材を使用しているが、短辺を縦に利用しているため薄く、構造上の利点は見いだせない。裏込めには



Ⅰ・Ⅱ　灰褐色(7.5YR5/2)　巨礫～中礫　しまりなし　粘性なし
Ⅲ—1　黒褐色(10YR3/2)　細砂～シルト　植物未分解物多く含む　しまりなし　粘性あり
Ⅲ—2　暗褐色(10YR3/3)　細砂～シルト　植物未分解物多く含む　しまりなし　粘性あり
道路１側溝 1　黒褐色(10YR3/2)　細砂混中粒砂　小木片を多く含む　しまりなし　粘性なし
道路１外盛土
2　黒褐色(10YR3/2)　粗砂ごく少量混極細砂～細砂　わずかに炭化物含む　木質・木製品わずかに含む　ややしまる　粘性あり
3　黄灰色(2.5Y4/1)　中粒砂混細砂～極細砂　木質・木製品わずかに含む　しまりあり　粘性あり
4　黒褐色(10YR3/2)　礫混極細砂～細砂　炭化物・木質・木製品含む　しまりあり　粘性あり
条里18　5　灰黄褐色(10YR4/2)　中粒砂混細砂　わずかに粗砂含む　木質含む　しまりあり　粘性弱い
道路１
6　暗灰黄色(2.5Y5/2)　礫混細砂～極細砂　しまりあり　粘性なし
7　黄褐色(2.5Y5/4)　礫混中粒砂～粗砂　細砂含む　木質・木製品わずかに含む　しまりあり　粘性なし
8　灰黄褐色(10YR5/2)　礫混細砂～中粒砂　しまりあり　粘性なし
9　黒褐色(7.5YR3/1)　礫混中粒砂～粗砂　木質・木製品多く含む　しまりあり　粘性弱い
10　褐灰色(7.5YR5/1)　粗砂混細砂～極細砂　木質・木製品含む　しまりあり　粘性あり
11　暗灰黄色(2.5Y5/2)　細砂混礫～中粒砂　粗砂含む　木質・木製品わずかに含む　しまりややあり　粘性なし
12　褐灰色(10YR4/1)　中粒砂～細砂
13　黒褐色(7.5YR3/1)　礫混極細砂～細砂　木質・木製品わずかに含む　しまりあり　粘性あり
14　褐灰色(10YR4/1)　礫混中粒砂～細砂　木質・木製品多く含む　しまりあり　粘性なし
15　暗灰黄色(2.5Y5/2)　細砂混礫～中粒砂　粗砂含む　ややしまる　粘性なし
16　にぶい黄褐色(10YR4/3)　(中礫混)礫層　木質・木製品含む　しまりあり　粘性なし
溝８　17　明黄褐色(2.5Y7/6)　礫混細砂～中粒砂　木質・木製品多く含む　しまりなし　粘性なし
河道８　18　褐灰色(7.5YR5/1)　細砂～極細砂　木質・木製品多く含む　ややしまる　粘性弱い
盛土20　19　灰色(5Y4/1)　細砂､灰白色(5Y8/1)　粗砂がブロック状に混じる　木質・木製品多く含む　しまりあり　粘性なし
河道6上層
20　黄灰色(2.5Y5/1)　中粒砂､明黄褐色(2.5Y7/6)粗砂がブロック状に混　木質・木製品含む　しまりなし　粘性なし
21　暗灰黄色(2.5Y4/2)　粗砂～細砂　木質・木製品含む　しまりなし　粘性なし
河道６下層
22　明黄褐色(2.5Y6/6)　細砂混粗砂～中粒砂　しまりなし　粘性なし
23　浅黄橙色(10YR8/4)　粗砂　しまりなし　粘性なし
24　黄色(2.5Y7/8)　粗砂　木質含む　しまりなし　粘性なし
25　淡黄色(2.5Y8/2)　小礫混粗砂　木質含む　しまりなし　粘性なし
Ⅵ—1　黒褐色(10YR3/2)　中礫混中粒砂～粗砂　木質・木製品含む　しまりあり　粘性弱い
Ⅵ—2　暗灰黄色(2.5Y6/2)　細砂　木質・木製品含む　ややしまる　粘性あり
Ⅵ—3　浅黄色(2.5Y7/3)　中粒砂～細砂混礫層
溝９　26　褐灰色(10YR4/1)　礫混中粒砂～細砂　ややしまる　粘性あり
Ⅵ—4　暗灰黄色(2.5Y5/2)　小礫～礫層　木質・木製品含む　ややしまる　粘性なし　※鏡出土
Ⅶ—1　黄灰色(2.5Y4/1)　小礫混細砂～中粒砂　木質・木製品多く含む
Ⅶ—2　黒褐色(10YR3/2)　シルト～極細砂　ややしまる　粘性あり
Ⅶ—3　灰黄褐色(10YR4/2)　シルト～極細砂　ややしまる　粘性あり
Ⅶ—4　暗灰黄色(2.5Y4/2)　礫混シルト～極細砂　ややしまる　粘性あり
Ⅶ—5　黒褐色(10YR3/2)　シルト～極細砂　ややしまる　粘性あり
Ⅶ—6　黒褐色(7.5YR3/1)　細砂混シルト～極細砂　ややしまる　粘性あり
Ⅶ—7　黒褐色(2.5Y3/2)　中粒砂混細砂～極細砂　ややしまる　粘性あり
Ⅶ—8　黒褐色(2.5Y3/1)　中粒砂～細砂　ややしまる　粘性あり
Ⅸ—1　褐灰色(10YR5/1)　礫混シルト～極細砂　ややしまる　粘性あり
Ⅸ—2　黒褐色(10YR3/2)　中粒砂～細砂　多量に貝殻を含む　しまりなし　粘性弱い
Ⅸ—3　灰黄色(2.5Y6/2)　礫層　しまりあり　粘性弱い
Ⅸ—4　褐灰色(7.5YR4/1)　シルト混　礫層　しまりあり　粘性なし

第134図　Ｐ７区土層断面図（１）

20 ～ 30㎝程度の角礫を充填しており、石垣の構築と類似した特徴を持つ。

裏込めからは近世と推定される土師器皿が出土しており、構築の時期を示す可能性が高い。層序の連続性が確認できておらず、構築は不明確である。

山際を沿うように確認でき平坦地幅も広くないことから、農作物を育てるには不向きと考える。そのため、付近の集落との往来に利用されたと推定する。

第３項　Ｖ層上面の遺構①（飛鳥時代～平安時代）

１　概要（第137図）

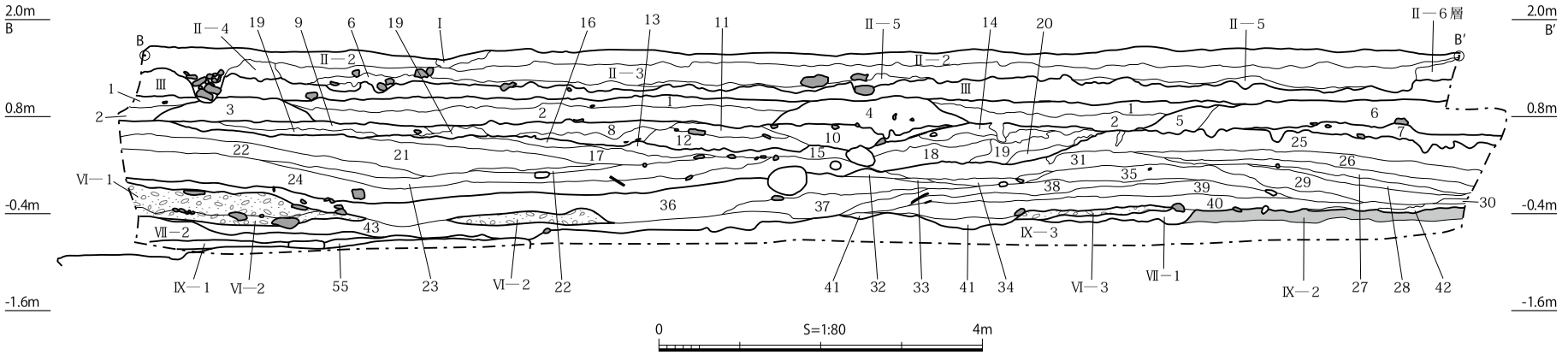
基本層序で確認したとおり、本調査区でＶ層は確認できない。遺構の基盤は埋没河道である。

Ｖ層相当上面に構築した遺構は、道路遺構１基、条里遺構３基を確認した。また、自然河道と自然河道が埋没した直後の遺構として、溝２基、盛土１基を確認している。

２　道路遺構

道路１（第138 ～ 141図　ＰＬ.35－３）

本調査区の道路遺構は山際付近に構築され、調査区東側にて延伸方向をやや北側に向けている。こ



Ⅰ　にぶい褐色(10YR6/3)　粗砂　しまりなし　粘性なし
Ⅱ—2　褐灰色(7.5YR4/1)　中礫混細砂～極細砂
Ⅱ—3　灰褐色(7.5YR5/2)　巨礫～中礫　わずかにシルト含む
Ⅱ—4　黒褐色(7.5YR3/1)　小礫混細砂～中粒砂
Ⅱ—5　褐灰色(7.5YR4/1)　細砂～中粒砂
Ⅱ—6　褐灰色(7.5YR5/1)　礫混細砂～中粒砂
Ⅲ　黒褐色(10YR3/2)　細砂～シルト(植物未分解物多く含む)　しまりなし　粘性あり

道路1外盛土
1　黒褐色(10YR3/2)　粗砂極少量混極細砂～細砂　わずかに炭化物含む　ややしまる　粘性あり
2　黒褐色(10YR3/2)　中礫混極細砂～細砂　炭化物・木質・木製品含む　しまりあり　粘性あり

条里18
3　灰黄褐色(10YR4/2)　粗砂混細砂～極細砂　木質・木製品含む　しまりあり　粘性あり

条里20
4　灰黄褐色(10YR4/2)　粗砂～中粒砂わずかに混細砂～極細砂　木質・木製品多く含む　しまりあり　粘性あり

条里17
5　黒褐色(10YR3/2)　粗砂混細砂～中粒砂　木質・木製品多く含む　ややしまる　粘性あり
6　黒褐色(10YR3/2)　極細砂混粗砂～中粒砂　木質・木製品多く含む　しまりあり　粘性ややあり
7　灰黄褐色(10YR5/2)　シルト～極細砂　しまりあり　粘性強い　(灰白色の粘土ブロック多く含む)

河道8
8　黄灰色(2.5Y5/1)　中粒砂、明黄褐色(2.5Y7/6)粗砂ブロック混じる　ややしまる　粘性なし
9　褐灰色(7.5YR5/1)　細砂～極細砂　ややしまる　粘性弱い

河道6上層
10　褐灰色(10YR4/1)　中粒砂混細砂～極細砂　ややしまる　粘性弱い

盛土20
11　黄橙色(10YR7/8)　細砂混粗砂～中粒砂(10YR6/1)中粒砂ブロック状に混じる　炭化物含む　よくしまる　粘性なし
12　黄橙色(10YR7/8)　細砂混粗砂～中粒砂

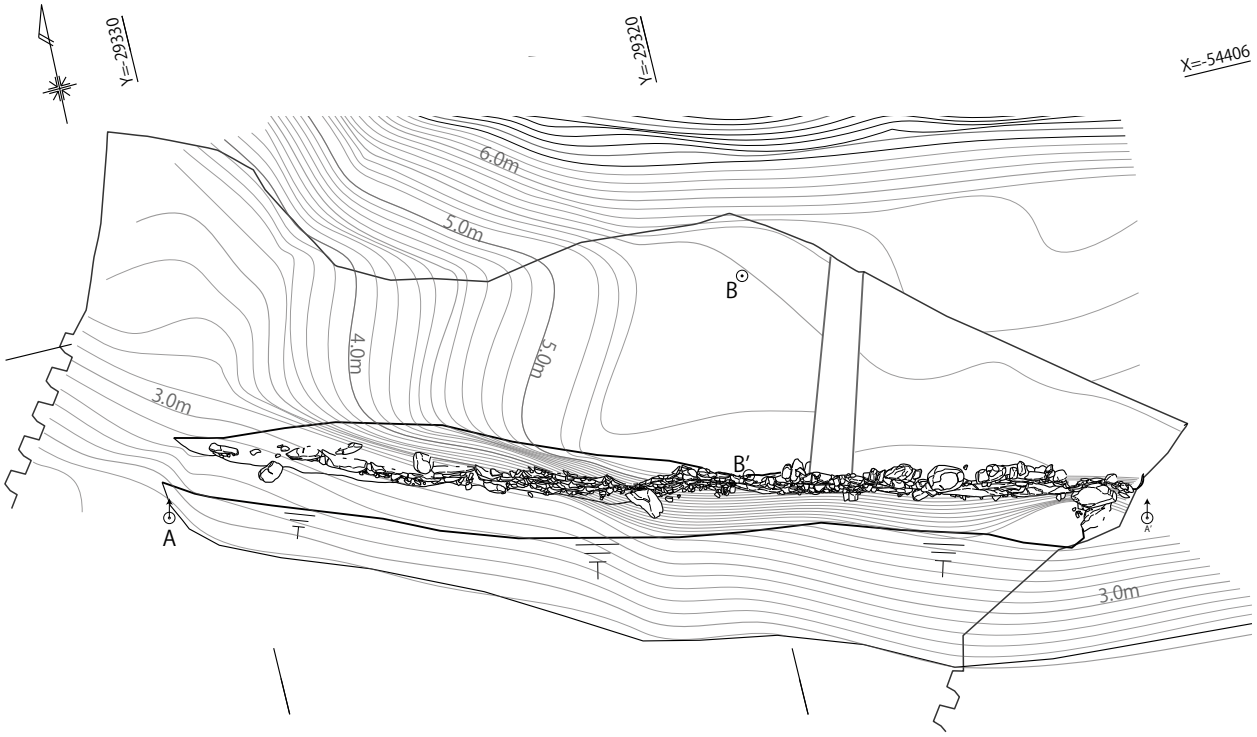
河道6上層
13　褐灰色(7.5YR4/1)　粗砂～中粒砂　ややしまる
14　灰黄色(2.5Y6/2)　細砂～中粒砂(木質含む)　ややしまる　粘性なし
15　灰黄褐色(10YR5/2)　極細砂～細砂　しまりあり　粘性弱い
16　褐灰色(10YR5/1)　粗砂～中粒砂　ややしまる　粘性なし
17　黄橙色(10YR8/6)　細砂混粗砂～中粒砂　小礫わずかに含む　しまりなし　粘性なし
18　にぶい黄橙色(10YR6/4)　細砂～粗砂　しまりなし　粘性なし
19　褐灰色(10YR5/1)　シルト～細砂(炭化物含む)　しまりあり　粘性あり

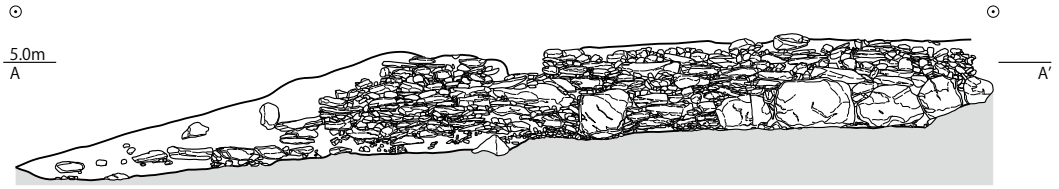
河道6下層
20　黄灰色(2.5Y4/1)　細砂～極細砂　しまりあり　粘性弱い
21　黄橙色(10YR8/6)　中粒砂～細砂　しまりなし　粘性弱い
22　褐灰色(10YR5/1)　細砂～中粒砂　しまりなし　粘性なし
23　黄橙色(10YR8/8)　細砂、礫混中粒砂～粗砂　しまりなし　粘性なし
24　黄橙色(10YR8/6)　小礫混細砂～中粒砂　しまりなし　粘性なし

河道9
25　灰色(5Y4/1)　細砂～中粒砂　しまりなし　粘性なし
26　黄灰色(2.5Y4/1)　極細砂～細砂　しまりなし　粘性なし
27　黄灰色(2.5Y6/1)　中粒砂混細砂～極細砂　しまりなし　粘性あり
28　黄灰色(2.5Y4/1)　中粒砂混細砂～極細砂　しまりなし　粘性なし
29　黄橙色(7.5YR7/8)　粗砂～中粒砂　しまりなし　粘性弱い
30　明黄褐色(2.5Y7/6)　粗砂～中粒砂　しまりなし　粘性なし
31　黄灰色(2.5Y4/1)　中粒砂混細砂(ラミナあり)　しまりあり　粘性弱い
32　黄橙色(10YR8/6)　中粒砂～細砂　しまりなし　粘性なし
33　黄灰色(2.5Y4/1)　中粒砂混細砂　しまりなし　粘性なし
34　黄灰色(2.5Y4/1)　細砂　ややしまる　粘性弱い
35　黄色(2.5Y8/8)　中粒砂と灰色(5Y4/1)中粒砂のマーブル　しまりあり　粘性弱い
36　明青灰色(10BG7/1)　細砂と黄色(5Y8/8)細砂の互層　しまりなし　粘性なし
37　黄橙色(7.5YR7/8)　細砂混粗砂～中粒砂　しまりなし　粘性弱い
38　灰色(5Y6/1)　中粒砂～細砂　ややしまる　粘性弱い
39　黄灰色(2.5Y6/1)　細砂と黄色(2.5Y8/8)粗砂のマーブル　しまりなし　粘性なし
40　褐灰色(10YR5/1)　粗砂と黄褐色(10YR7/8)粗砂の互層　しまりなし　粘性なし
41　褐灰色(10YR5/1)　粗砂～中粒砂　しまりなし　粘性なし
42　黒褐色(2.5Y3/2)　礫～細砂　ややしまる　粘性あり

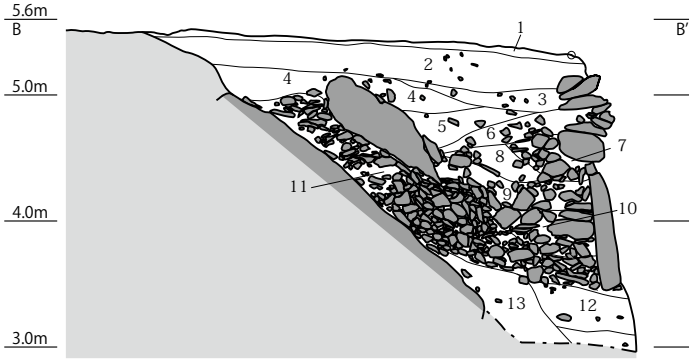
Ⅵ—1　浅黄色(2.5Y7/3)　中粒砂～細砂混礫　ややしまる　粘性なし
Ⅵ—2　暗灰黄色(2.5Y5/2)　小礫～礫　ややしまる　粘性なし
Ⅵ—3　暗灰黄色(2.5Y4/2)　粗砂混礫　しまりなし　粘性なし
Ⅶ—1　黄灰色(2.5Y4/1)　細砂混中粒砂～粗砂　しまりなし　粘性な
Ⅶ—2　黒褐色(2.5Y3/1)　中粒砂～細砂(植物質含む)　しまりあり　粘性強い
Ⅸ—1　灰白色(2.5Y7/1)　シルト～極細砂　ややしまる　粘性強い
Ⅸ—2　黒褐色(10YR3/2)　中粒砂～細砂　多量に貝殻を含む　しまりなし　粘性弱い
Ⅸ—3　褐灰色(7.5YR4/1)　シルト混礫　しまりあり　粘性なし

第135図　P7区土層断面図(2)





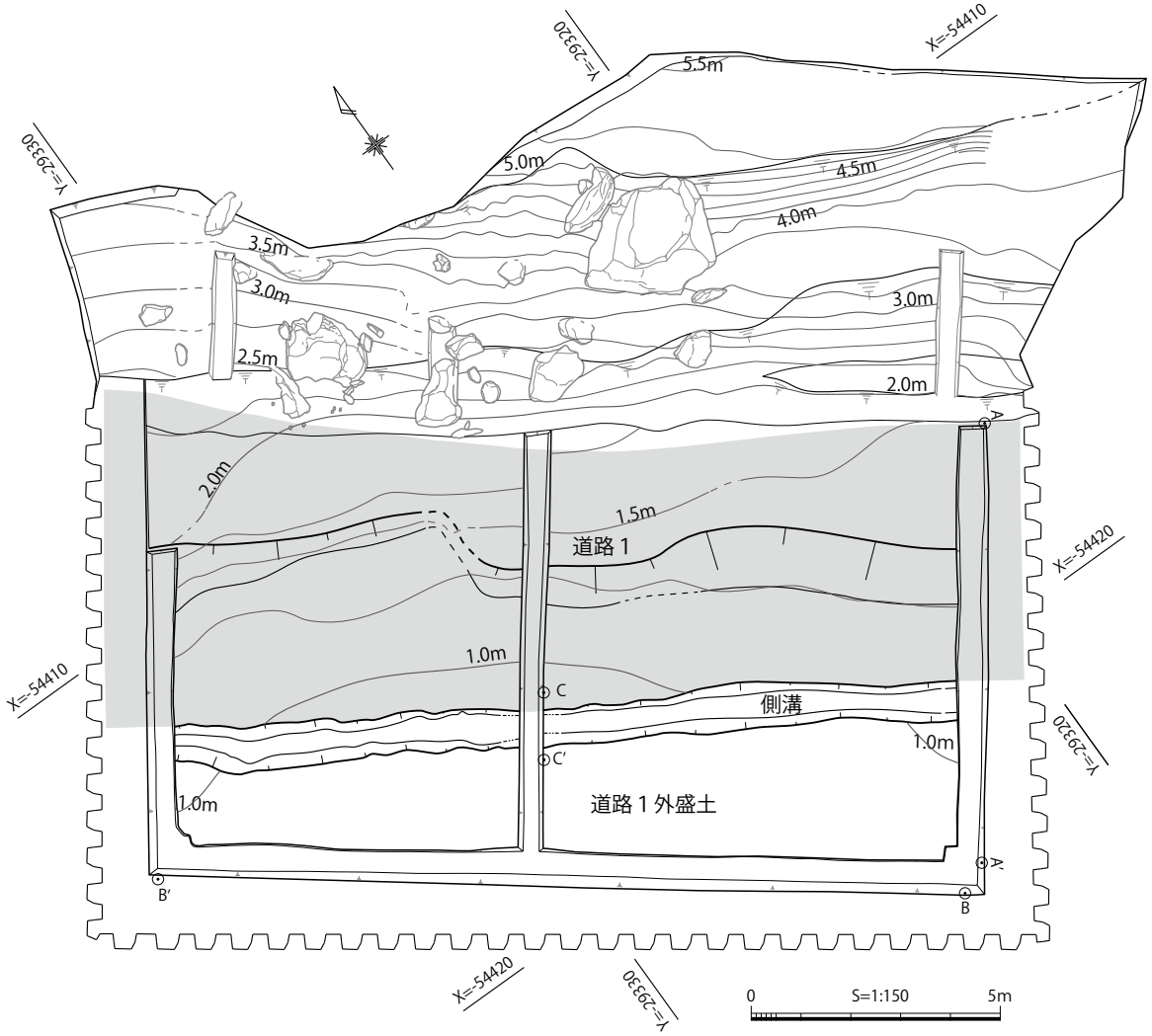
0　S=1:150　5m



0　S=1:60　2m

表土	1	灰褐色土 (7.5YR4/2)　細砂混粗砂～中粒砂
整地土	2	にぶい褐色土 (7.5YR5/4)　中粒砂～細砂
裏込土	3	褐色 (7.5YR4/4)　中粒砂混礫
	4	明褐色 (7.5YR5/6)　角礫混細砂～中粒砂
	5	にぶい黄褐色 (10TR4/3)　中粒砂混礫
	6	暗褐色 (10YR3/4)　礫
	7	にぶい黄褐色 (10YR5/3)　礫
	8	灰黄褐色 (10YR4/2)　小礫混中粒砂～粗砂
	9	灰黄褐色 (10YR4/2)　礫
	10	灰黄褐色 (10YR5/2)　礫
	11	にぶい黄橙色 (10YR7/3)　礫
造成土？	12	灰褐色土 (7.5YR5/2)　細砂～中粒砂
山際斜面崩落土	13	橙色土 (7.5YR6/6)　細砂～中粒砂　巨石含む

第136図　Ｐ７区石積２



第137図　Ｐ７区Ⅴ層上面遺構分布図（１）

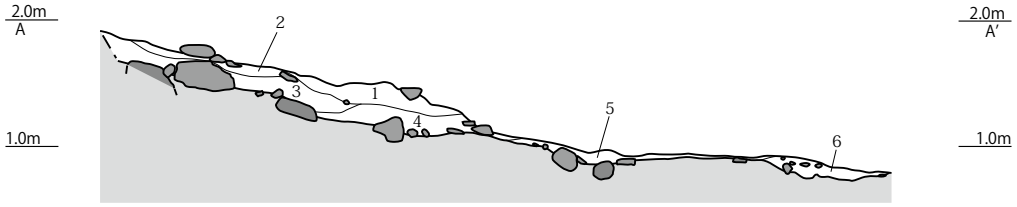
れは、道路遺構を調査区北側の丘陵地形に沿わせたためと推測され、Ｐ７区より東側の未調査部分についても同様な配置であった可能性が高い。

本調査区北側の山際を東西方向に延びる。方位はＥ－53°－Ｗを測る。東側では方位を若干北側に向けており､背後の丘陵地形に沿わせたものと考える｡調査区の中央は山斜面がやや張り出しており、道路の盛土もやや薄くなっていた。

道路遺構は盛土により構築されている。規模は盛土幅約6.2m、盛土の高さは約30 ～ 60cmを測る。道路の山側については斜面を切り崩すことで造成したようであるが、自然の崩落であるか人工的な切り崩しかの認識が難しかった。このため、山側の道路遺構の路面範囲については不明瞭さを残す。

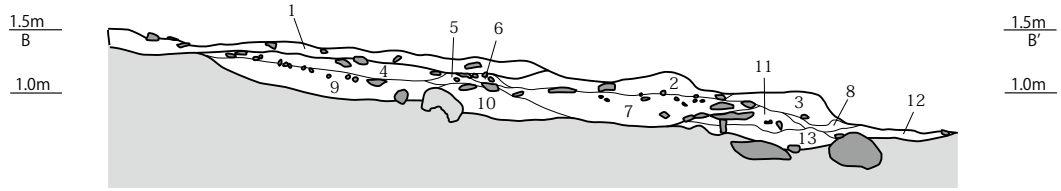
道路の盛土は構築から大きく３回ほど改修が行われている。まず、基本層序のⅢ層直下から確認できる路面に相当する部分である。改修土①としてとらえた。山側から平野部にかけて礫～中粒砂を主体とした埋土により構築される。改修土①の構築土は周辺の山斜面の切り崩しや旧河道の埋土により得られた可能性が高く、出土した土器には古墳時代前期の土師器や同後期の須恵器が混じっている。改修土①の混入品とみられる土器類を除くと、土師器の足高高台坏や坏類が出土しており、10世紀後半代と考えられる。改修土②の範囲は限定的であり、山側の北東隅にみられた。構築埋土は礫を主体としており、丘陵の構成土に類似している。改修土①と同様に弥生時代後期～古墳時代前期とみられる土器片を含んでいる他、10世紀代と推定される須恵器の皿が出土している。改修土③は山側から平

第138図　Ｐ７区道路１



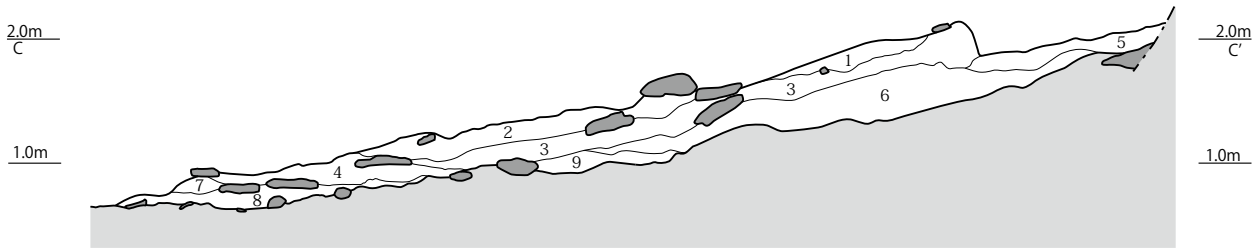
改修土①
1　褐灰色 (7.5YR4/1) 礫混極細砂～シルト　木質・木製品含む
2　暗褐色 (10YR3/3) 礫混細砂～シルト
3　黄褐色（2.5Y5/4）礫混中粒砂～粗砂

改修土①
4　明黄褐色（10YR7/6）礫混細砂～中粒砂　木質・木製品含む
構築当初土
5　褐灰色（10YR5/1）礫混細砂　僅かに中粒砂含む　木質・木製品を含む
6　浅黄色（2.5Y7/4）中粒砂～粗砂



Ⅲ層相当
側溝
1　暗褐色(10YR3/3)　細砂～シルト　植物未分解物多く含む
2　黒褐色(10YR3/2)　細砂混中粒砂　小木片を多く含む
改修土①
3　黒褐色(7.5YR3/1)　礫混中粒砂～粗砂　木質・木製品多く含む
4　黄褐色(2.5Y5/4)　礫混中粒砂～粗砂　細砂含む
5　灰黄褐色(10YR5/2)　礫混細砂～中粒砂
6　暗灰黄色(2.5Y5/2)　礫混細砂～極細砂
7　暗灰黄色(2.5Y5/2)　細砂混礫～中粒砂　粗砂含む

改修土③
8　褐灰色(7.5YR5/1)　粗砂混細砂～極細砂　木質・木製品含む
9　黒褐色(7.5YR3/1)　礫混極細砂～細砂　木質・木製品わずかに含む
10　にぶい黄褐色(10YR4/3)　礫層　木質・木製品含む
構築当初土
11　褐灰色(10YR4/1)　礫混中粒砂～細砂　木質・木製品多く含む
12　褐灰色(10YR4/1)　中粒砂～細砂
13　暗灰黄色(2.5Y5/2)　細砂混礫～中粒砂　粗砂含む

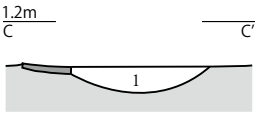


改修土①
1　褐灰色　(10YR4/1) 礫混細砂～極細砂　しまりあり　粘性あり
2　黒褐色 (10YR3/2)　粗砂わずかに混細砂～極細砂
3　褐灰色 (10YR5/1)　礫混細砂～極細砂　しまりあり　粘性あり
4　黄褐色 (10YR5/4) 細砂混礫～中粒砂　しまりあり　粘性弱い
改修土②
5　明黄褐色　(10YR6/6) 礫層

改修土②
6　明黄褐色　(2.5Y6/6) 細砂混礫層
構築当初土
7　黄灰色 (2.5Y4/1) 礫混細砂～中粒砂　木質・木製品多く含む
8　暗灰黄色 (2.5Y5/2)　細砂混礫～中粒砂　粗砂含む
9　黄色　(2.5YR6/3) 細砂混礫～中粒砂

0　S=1:60　2m

第139図　Ｐ７区道路１土層断面図



1　黒褐色（10YR3/2）　細砂混中粒砂
小木片を多く含む

0　S=1:40　1m

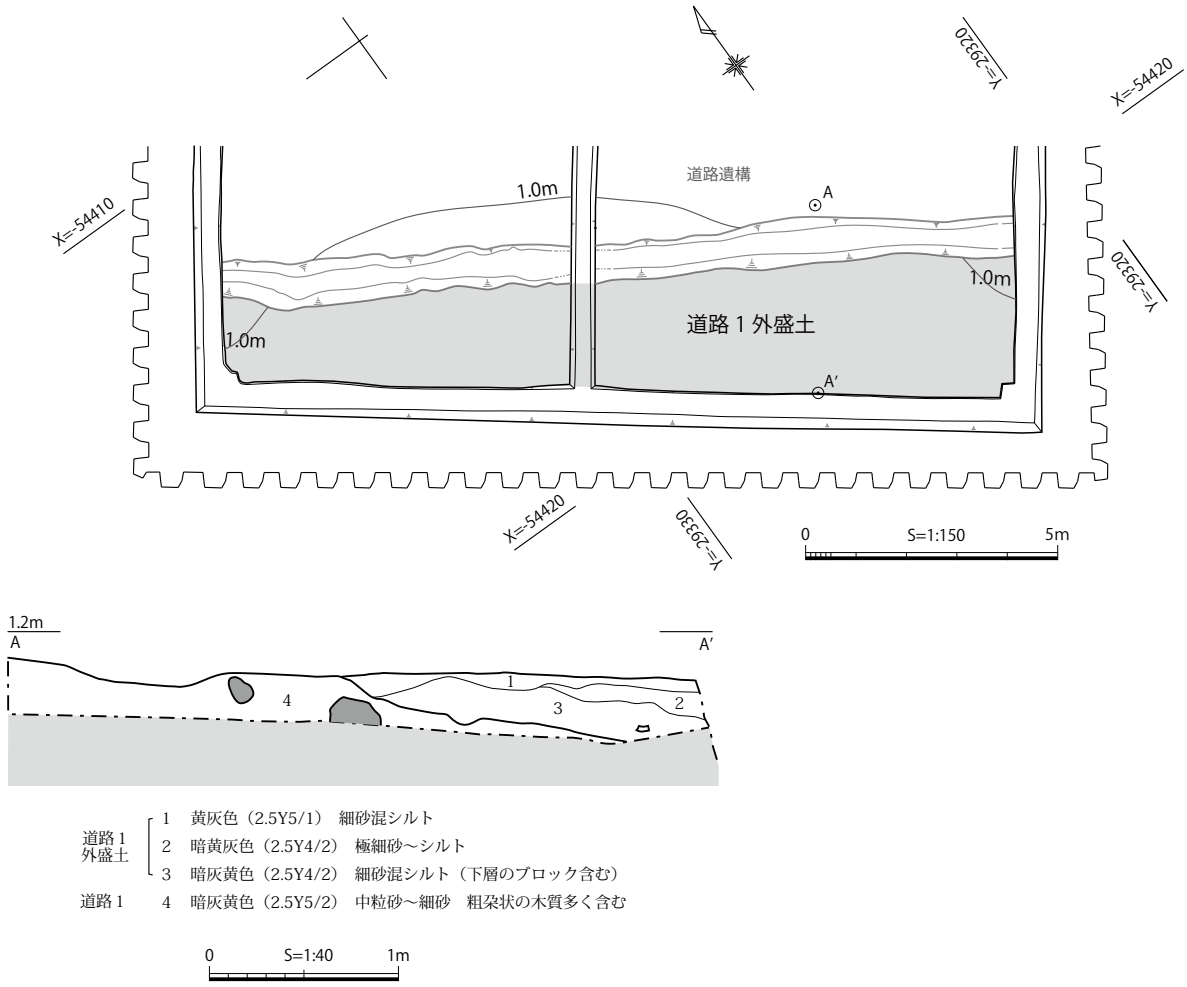
第140図　Ｐ７区道路１側溝土層断面図

野部にかけて広がっている。礫を含んだ細砂を基質とした盛土と礫を主体とした層に分かれる。土器類は須恵器の蓋、坏、高坏、土師器の坏が出土している。土師器と須恵器で若干の時期差を感じるものの、８世紀前葉～中葉頃と考えておきたい。

構築当初の盛土は道路遺構の平野側で確認している。平野側を一段高く盛り上げている。構築土の上面には人頭大の平石が散見でき、盛土とともに範囲を画したものと推測される。埋土は礫を含んだ中粒砂や細砂を主体に構築している。土器は須恵器や土玉が出土した。須恵器の年代から他の調査区と同様に７世紀末～８世紀初頭頃と考える。

側　溝

本調査区のほぼ中央で東西方向に延びる。平野側にのみ確認できた。道路遺構と並行して延伸していることから道路側溝と考える。側溝は幅約90



第141図　Ｐ７区道路１道路外盛土

cm、深さ12cmが残存している。断面の形状は皿状を呈する。側溝は本調査区西側に進むにつれ残存度が悪くなり、調査区西側の壁面ではほぼ確認できない状況であった。埋土は基本層序Ⅲ層に類似しており、植物の未分解物を多量に含んでいた。

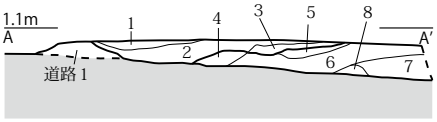
側溝の埋土からは10世紀後半～ 11世紀代とみられる土師器の坏類が出土しており、当該期までは側溝として機能していたものと考える。

道路外盛土

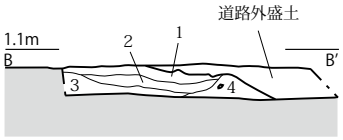
道路遺構に並行するように確認できる。道路裾を覆うように構築している。南側の盛土裾は調査区外となるため確認できていない。道路外盛土は確認できる範囲では幅約2.5m、高さ24cmが残存する。盛土の構築方法は中央に芯となる盛土を構築し、外側へ拡張するように盛土を行なっている。粗朶を密に敷いた状況はみられなかった。盛土内からは須恵器、土師器の坏類が出土している他、木簡が１点(25号木簡)出土している。出土した土師器から10世紀後半頃と考えられる。

３　条里遺構

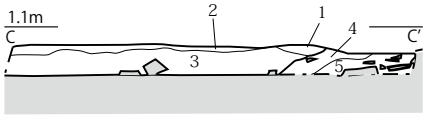
道路１外盛土に覆われており、道路遺構に接続する。断面の観察から道路外盛土より先に構築している。道路１外盛土との年代差については、粗朶類が少なく放射性炭素年代測定が行えていないこと、構築に伴うと考えられる土器類を欠いていることから不明確である。



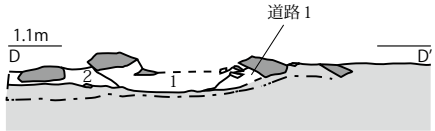
道路１外盛土
1　暗灰黄色（2.5Y5/2）　中粒砂混細砂～極細砂
2　暗灰黄色（2.5Y4/2）　中粒砂混細砂～極細砂　木質多く含む
3　灰黄褐色（10YR4/2）　細砂～極細砂　木質僅かに含む
4　褐灰色（10YR4/1）　細砂～極細砂　木質僅かに含む
5　黄灰色（2.5Y4/1）　中粒砂混極細砂～細砂
6　暗灰黄色（2.5Y4/2）　極細砂～シルト　木質僅かに含む
7　灰色（5Y4/1）　極細砂～シルト　木質僅かに含む
8　暗灰黄色（2.5Y4/2）　中粒砂混　細砂～極細砂



1　灰色（5Y4/1）　中粒砂混極細砂～細砂　炭化物 , 木質含む
2　黒色（2.5Y3/1）　中粒砂混細砂～極細砂　僅かに木質含む
3　黄灰色（2.5Y4/1）　中粒砂混極細砂～シルト　に木質含む
4　黒褐色（2.5Y3/2）　細砂混極細砂～シルト　径２㎝程度の礫含む

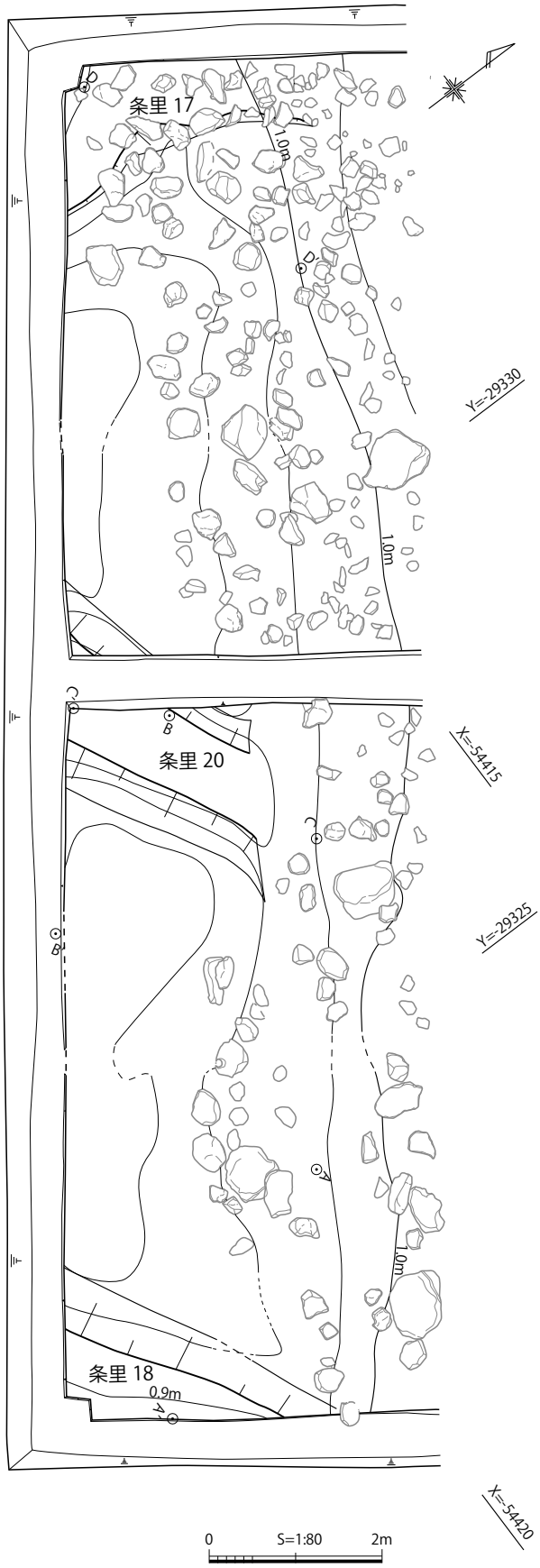


1　黄灰色（2.5Y4/1）　細砂～極細砂　木質含まない
2　灰色（5Y4/1）　中粒砂混　極細砂～細砂　炭化物・木質含む
3　黒色（2.5Y3/1）　中粒砂混　細砂～極細砂　僅かに木質含む
道路１
4　灰黄褐色（10YR4/2）　粗砂混　中粒砂～細砂　木質含む
5　黒褐色（10YR3/1）　細砂混　粗砂～中粒砂　礫･木質多く含む



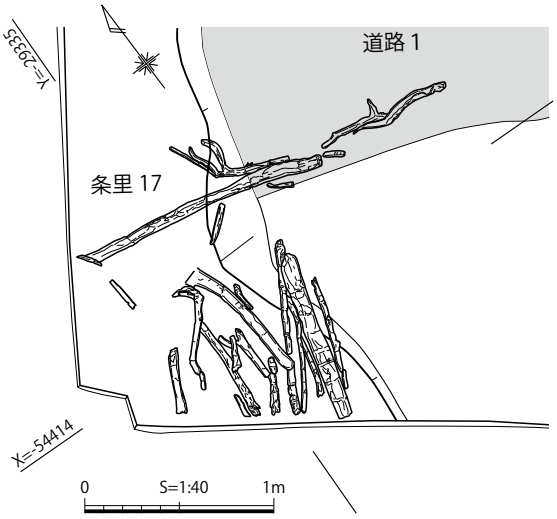
1.黄灰色(2.5Y4/1)粗砂混　細砂～中粒砂　木質(粗朶)多く含む
2.黒褐色(2.5Y3/1)粗砂～中粒砂　木質(粗朶)多く含む

0　S=1:60　2m



0　S=1:80　2m

第142図　P７区条里17・18・20



第143図　Ｐ７区条里17粗朶検出状況図

条里17（第142・143図　ＰＬ36－１,２）

調査区の西隅で確認した。12歩の条里地割をさらに細分する位置にあたる。盛土によって構築され、６区にて延伸部分と推定される盛土が検出されている。遺構の検出範囲が限定的であり、詳細な盛土の構築方法はわからなかった。道路遺構の接続箇所では粗朶が確認できた。道路１と並行するように敷かれた粗朶の下には、直交方向の粗朶列も出土している。粗朶のサンプルを上層①と下層②の２点選出し、放射性炭素年代を測定している。２σ暦年代範囲で①767 ～ 882calAD（88.8 %）、②768 ～ 884calAD（94.4%）の年代が得られた。

条里18（第142図　ＰＬ.36－１）

調査区の東隅で確認した。12歩の条里地割をさらに細分する位置にあたる。盛土により構築され、６区にて延伸部分と推定される盛土が検出されている。盛土は道路１平野側の裾部に取りつくように構築しており、その上に道路外盛土が覆っている。盛土の構築方法は中央に芯となる盛土をつくり、左右に拡張している。

出土遺物が少なく、詳細な時期は明確にしえない。

条里20（第142図　ＰＬ.36－１）

調査区のほぼ中央に位置する盛土遺構である。道路１の裾部を覆うように構築している。方位はＮ－65°－Ｅ構築方法は外側に小規模な盛土を造り、中央を充填する方法によっている。

出土遺物はなく、詳細な時期は明確にしえない。

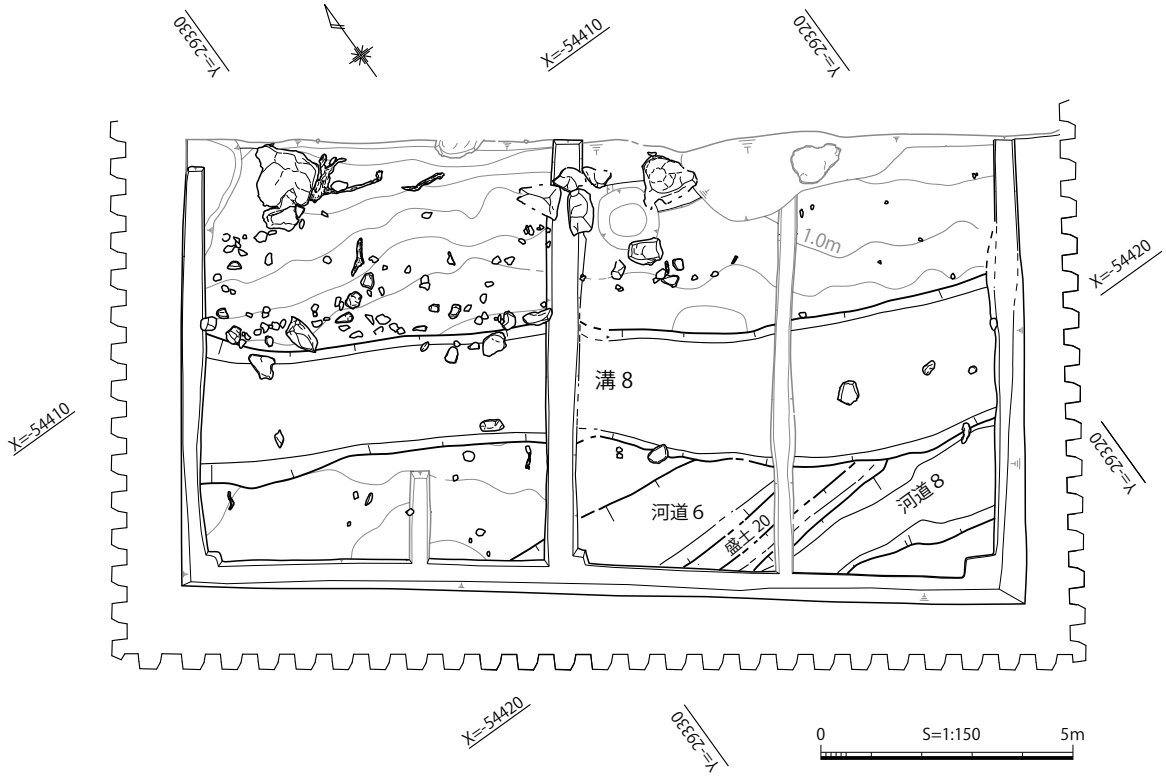
第４項　Ⅴ層上面の遺構②（古墳時代後期～飛鳥時代）（第 144 図）

溝や河道などの遺構を確認した。溝８、河道６、河道８、盛土20が該当する。溝８は河道６、８、盛土20とは方向が異なり、調査区を横断するように検出できた。河道６はＰ６区方面より流れてきた河道が大きく蛇行して、本調査区南東の一部に確認できたものと考えられる。遺構の新旧は溝８が最も新しく、河道８→盛土20→河道６の順となる。

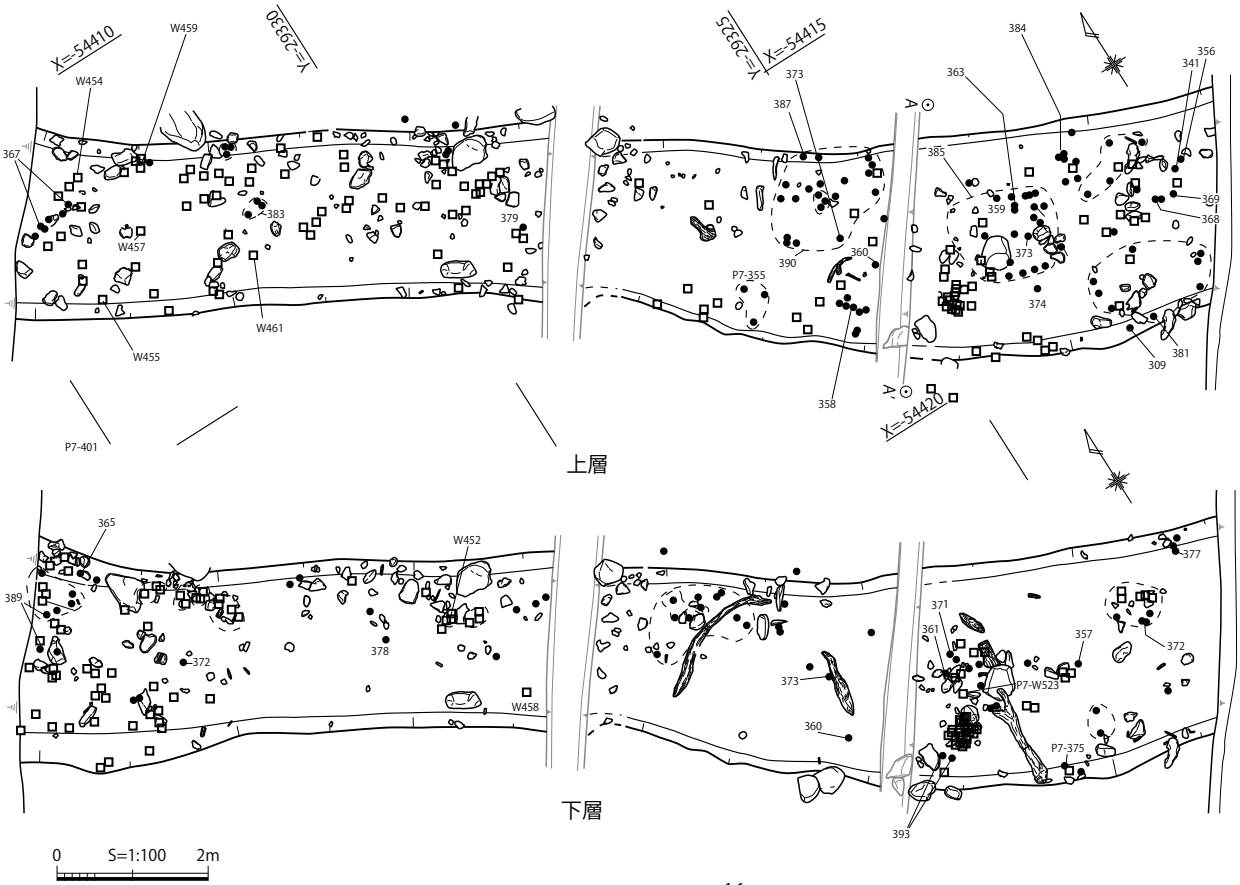
１　盛土遺構

盛土20（第147図）

盛土 20 は河道８と並行するように延びる。埋土は粗砂～中粒砂を主としており、細かい木質を多く含んでいた。遺物は土器類を中心に出土したが、盛り上げて構築したことを考慮し、本来は河道６に帰属するものと考える。時期は７世紀の後半代と推定する。

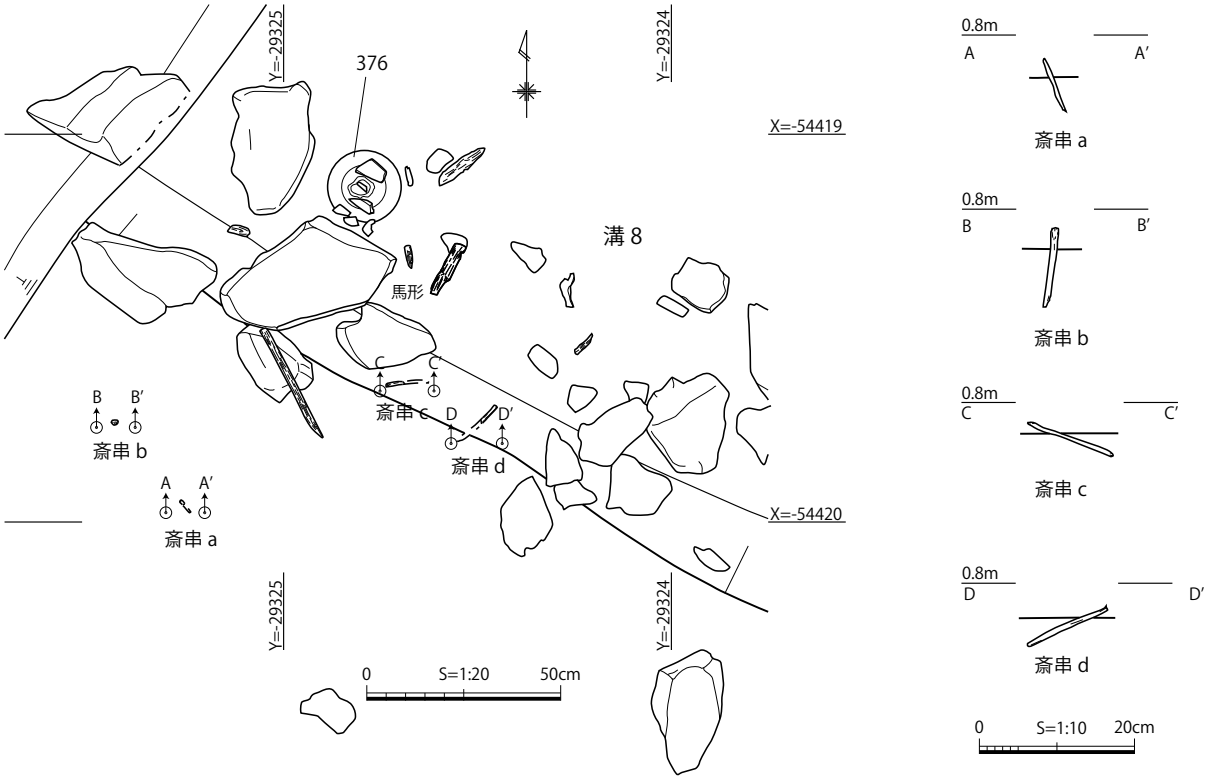


第144図　Ｐ７区Ⅴ層上面遺構分布図（２）



1. 淡黄色（2.5Y8/4）粗砂混　細砂～中粒砂　木質・木製品多く含む
2. 黄色（2.5Y8/6）粗砂と黄灰色（2.5Y4/1）細砂～中粒砂のマーブル
　粗朶状木質多く　木製品含む
3. 暗灰黄色（2.5Y4/2）細砂混　シルト

第145図　Ｐ７区溝８



第146図　Ｐ７区溝８肩部遺物出土状況図

２　溝・河道

溝８（第145・146図　ＰＬ.36－３・37－１）

道路１の直下にて確認した。道路１と同様の方向で延びる。溝８は幅約2.2m、深さ20mを測る。北側の傾斜はとくに緩やかに立ち上がり、断面は皿状を呈する。埋土は３層に細分できた。遺物を大量に含んでいることが判明したため、便宜上、上面と下面に分け遺物の取上げを行った。上面と下面とも出土した土器に年代差はなく、接合関係も認められることから、ほぼ同時期に埋没した溝と判断した。

遺物の出土は東側に土器類が多く、西側に木製品が多い傾向を示す。溝８の南東側では、溝の南肩部で斎串が刺さった状態で検出している。溝からは木製祭祀具の馬形が出土している他、須恵器の無蓋高坏が伏せた状態で出土しており、祭祀行為の存在が推測できる。年代は須恵器は坏蓋のかえりの存在するものが多く、土師器の坏には飛鳥土器分類の坏Cに類似した特徴を示す土師器坏が出土していることから、７世紀末頃と考えておきたい。

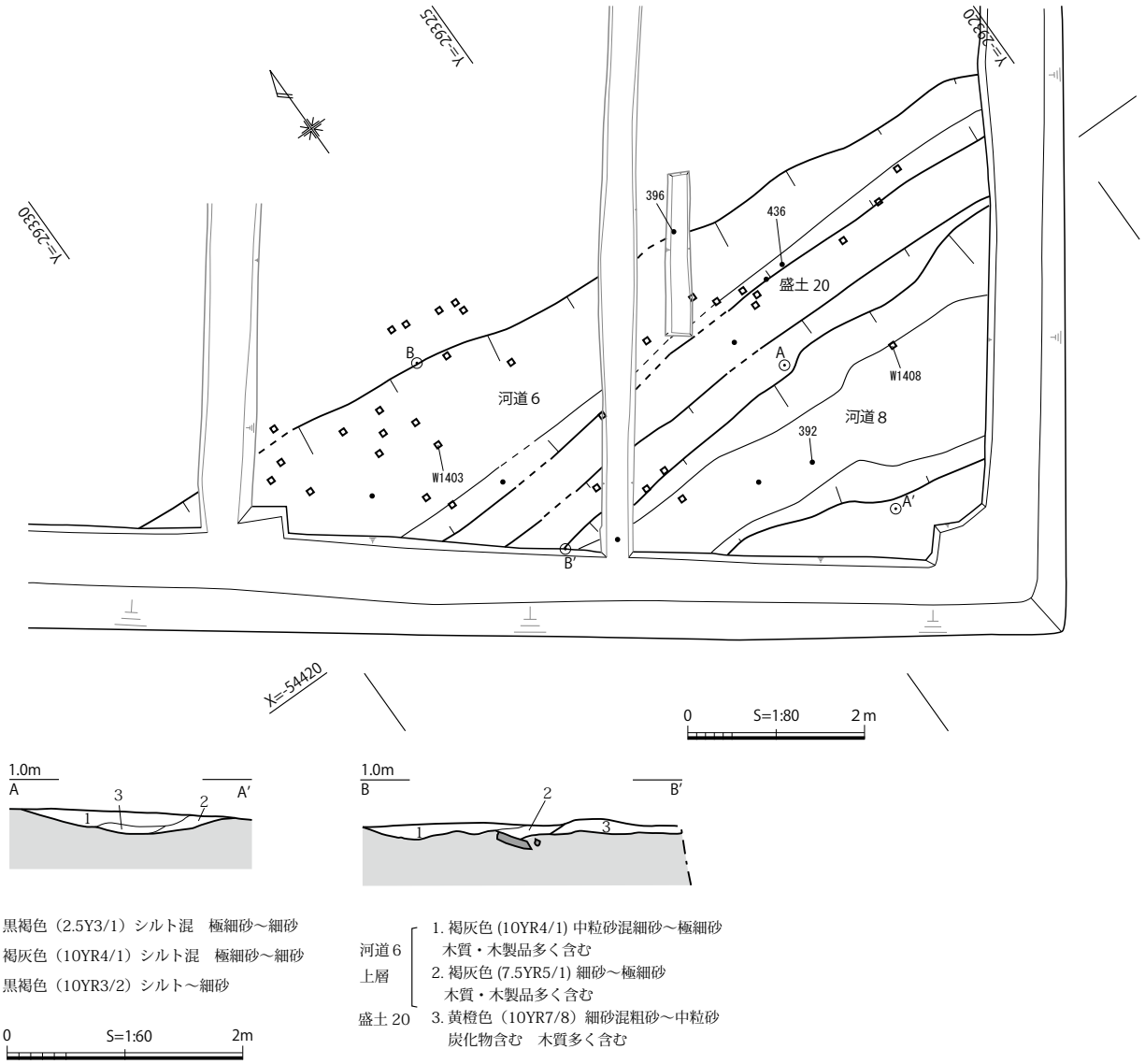
河道８（第144図）

東西方向に延びる溝であり、幅1.75m、深さ20cmを測る。断面は皿状を呈する。埋土は極細砂～細砂を主としており、緩やかな堆積が想定できる。出土遺物が少なく詳細な時期比定について不明であるが、７世紀後半代と考えておきたい。

河道６（第147 ～ 149図　ＰＬ.37－２・38－１）

河道６は調査区の南東隅で検出しており、河道の山側立ち上がり部分に相当すると考えられる。河道の平野側の立ち上がりはもう少し南に存在していたと推定されることから、河道６の流れは本調査区からＰ８区にかけて大きく蛇行しているものと判断される。

Ｐ７区の河道６には角礫で構成した護岸状施設を基に上層と下層に分けて調査を行った。



1. 黒褐色（2.5Y3/1）シルト混　極細砂～細砂
2. 褐灰色（10YR4/1）シルト混　極細砂～細砂
3. 黒褐色（10YR3/2）シルト～細砂

河道６上層
1. 褐灰色 (10YR4/1) 中粒砂混細砂～極細砂
木質・木製品多く含む
2. 褐灰色 (7.5YR5/1) 細砂～極細砂
木質・木製品多く含む

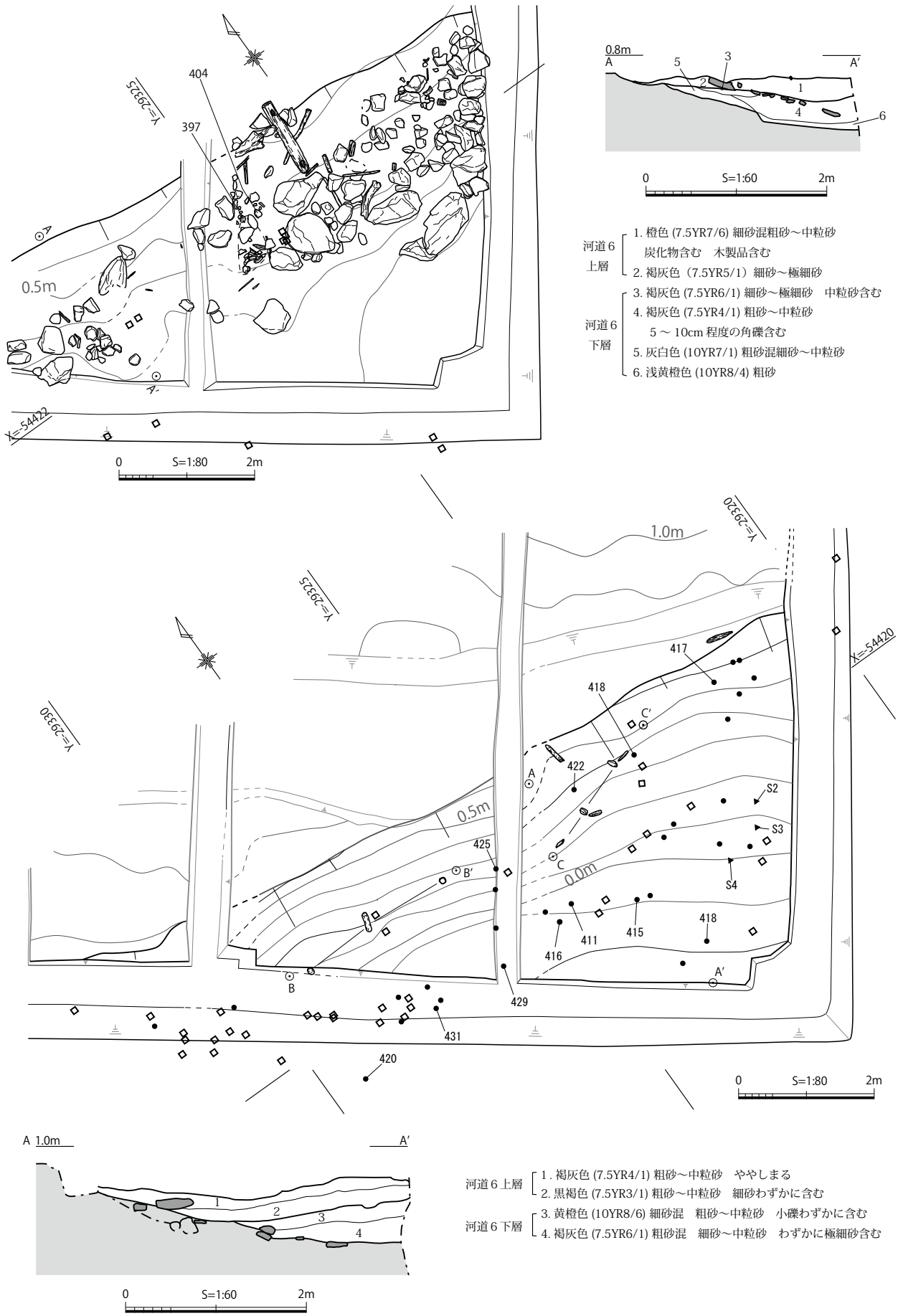
盛土 20
3. 黄橙色（10YR7/8）細砂混粗砂～中粒砂
炭化物含む　木質多く含む

第147図　Ｐ７区盛土20

河道６上層　河道６上層では立ち上がり部分に30 ～ 50cm程度の角礫が検出できた。一面に敷き詰めた様子ではないが、河道の肩部で密に検出できることから護岸といった機能が推定できる。礫の隙間には土器類が出土する他､木製品も出土している｡出土した須恵器の年代から７世紀後半頃と考える。本層の下面にて出土した自然木をサンプルに放射性炭素年代測定を行った。２σにて651－695calAD (87.9%)の年代を得ており、出土した土器の年代とも調和的である。

河道６下層　河道６下層は上層で検出した角礫を除去し検出を行った｡a杭列と b杭列が確認できた。ともに河道の方向に平行している。a杭列は角材を利用しており、上下ともに尖らせている。やや大ぶりの杭に小ぶりの杭が斜めに打設されていた。機能は不明であるが、このセットにて何らかの機能を果たしていた可能性が高い。b杭列は径が５～ 10cm程度の丸材を利用している。

遺物は須恵器、土師器が出土した。東隅にて勾玉３点(Ｓ２～４)が出土している。須恵器の年代から６世紀後半から７世紀前半頃と考える。



第148図　Ｐ７区河道６

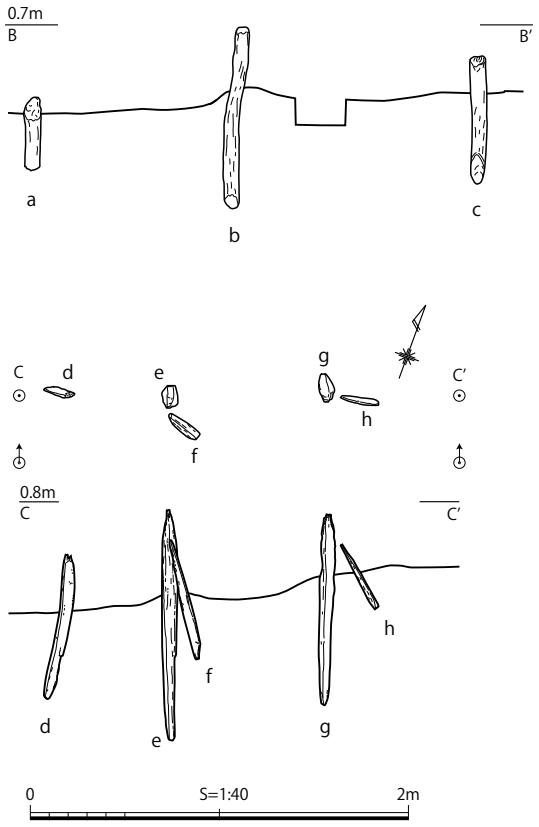
第５項　Ⅵ層上面の遺構（古墳時代）

１　概　要

Ⅵ層では河道６の前身となる河道９を検出したほか、山際に溝９を確認している。

本層の形成過程では丘陵斜面の崩落が相次いだようで、複数回にわたり土砂の崩落の痕跡が確認できた。Ⅵ層の掘り下げ中には弥生時代終末期から古墳時代前期頃とみられる青銅鏡Br ２が出土した。河道９の流路肩部より若干斜面寄りを掘削中に確認した。鏡は巨礫に三方を囲まれて、鏡面を正位置にして出土した。付近を精査したが埋納した痕跡や、供献されたような土器の出土は確認できなかった。

鏡の出土状況から、何らかの祭祀行為は否定できないが、丘陵斜面にあった集落や古墳に存在したものが、土砂崩れにより流出した可能性も残る。



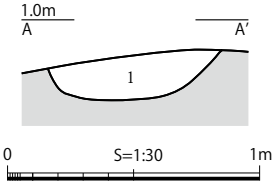
第149図　Ｐ７区河道６杭

２　河道・溝

溝９（第150図）

調査区の山際東側で検出した。小規模な溝で、幅70㎝、深さ18㎝を測る。山際全体に延びるわけではなく、東側の一部で途切れるようである。河道９とも近接していることから、山側から河道への排水路としての機能が考えられる。

遺物は図化できるものはなかったが、土師器片が出土している。詳細な時期は不明であるが、古墳時代前期から中期頃と考えられる。

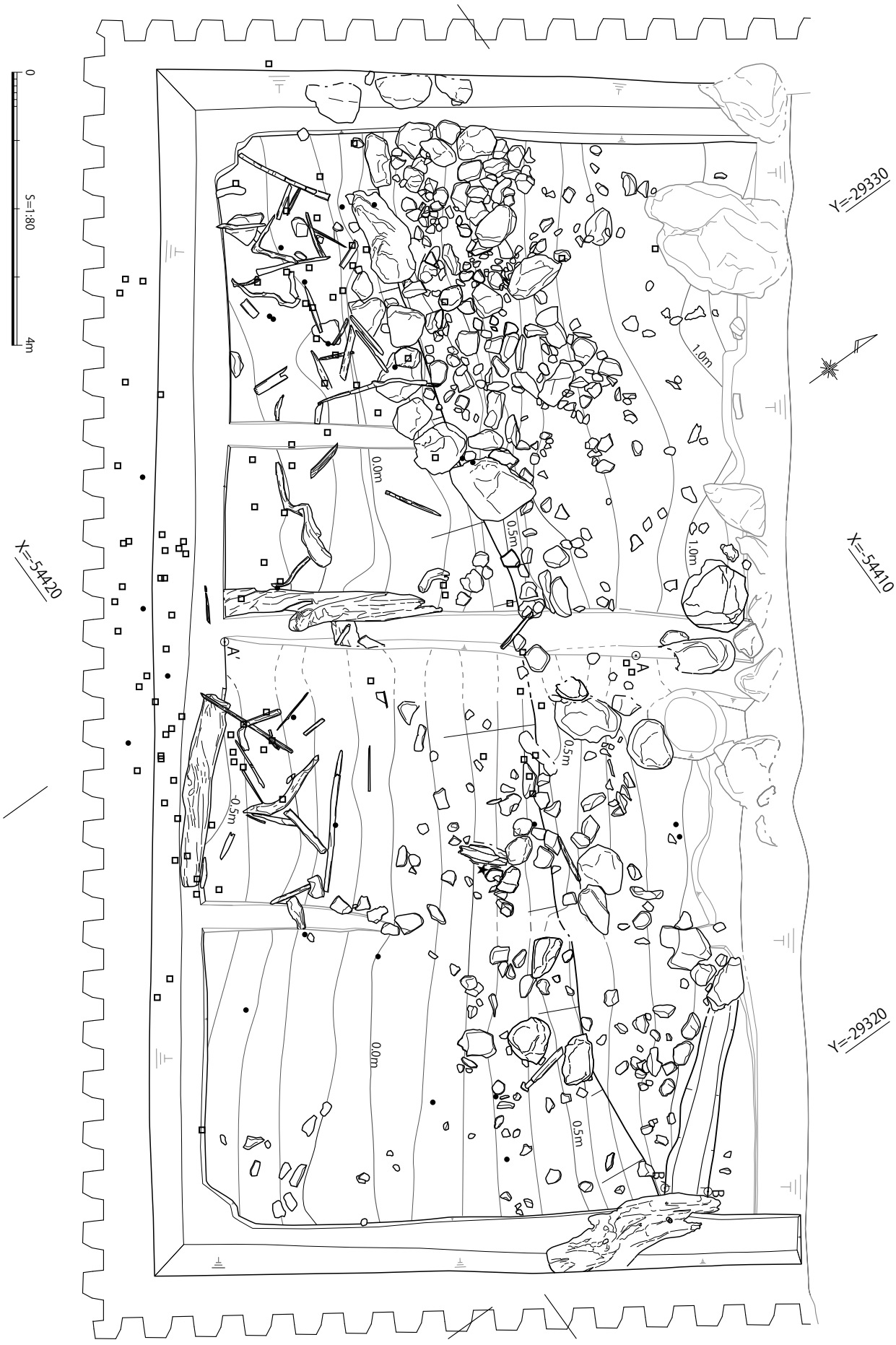


1　褐灰色 (10YR4/1)　礫混　中粒砂～細砂

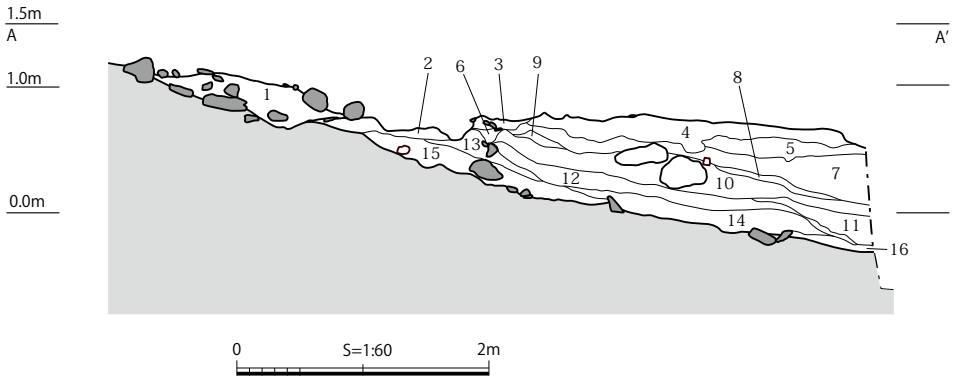
第150図　Ｐ７区溝９土層断面図

河道９（第151・152図　ＰＬ.37－３）

本調査区を横断して流れる。河道６の前身となる河道である。流路の山側の肩部を確認したのみで、平野側は本調査区より南に存在する。検出できた最大幅は約６ｍで、深さは約１ｍである。埋土は細砂から中粒砂を主としており、ラミナも発達している。埋土からは比較的大型の木材が出土している。木材は流水方向と直交するような配置をとるものが多い。木材は自然木に近いが、加工痕は確認できることから人為的に伐採されたと考えている。木材は全容が判明したもので長さ約2.8m、径が約50㎝であった。木材としては利用前の状況と推測されることから、このような状況で何らかの機能を果たしていたのか、利用を予定して貯木を意図していたのか判然としなかった。河道９の北西肩部では大型の礫が集中して出土した。礫は平滑な面を上にして配置したような状況であったことから、人為的な作為があった可能性は残る。礫の集中部では礫を据えるために掘ったような形跡は見られなかった。この付近の河道９では流木を含めて木材が比較的多く出土したことからも、水辺を利用した活動の可能性が示唆される。



第151図　Ｐ７区河道９



山際崩落土
1　褐灰色 (10YR4/1)　礫混細砂～中粒砂
2　黒褐色 (7.5YR3/1) 小礫混細砂　中粒砂含む　木質含む

河道９
3　にぶい黄色 (2.5Y6/3) 中礫混細砂～中粒砂
4　褐灰色 (7.5YR5/1) 細礫混細砂～中粒砂
5　黒褐色 (10YR3/1) 細砂～極細砂
6　黄灰色 (2.5Y5/1) 細砂～極細砂
7　褐灰色 (10YR5/1) 極細砂混細砂～中粒砂
8　褐灰色 (10YR4/1) シルト

河道９
9　灰黄褐色 (10YR5/2) 中粒砂混細砂
10　黄灰色 (2.5Y5/1) 極細砂　大木含む
11　黒色 (5Y2/1) シルト～細砂
12　灰色 (5Y4/1) 極細砂
13　暗灰黄褐色 (2.5Y5/2) 細砂～極細砂
14　黄灰色 (2.5Y5/1) 細砂～粗砂
15　暗灰黄色 (2.5Y4/2) 細礫～巨礫混極細砂～細砂
16　黄灰色 (2.5Y5/1) 極細砂～細砂

第152図　Ｐ７区河道９土層断面図

遺物は前述のとおり木製品や土師器が出土している。土師器の年代から古墳時代前期から中期頃と考えられる。

第６項　Ⅶ層上面の遺構（弥生時代中期～後期）

１　概　要

Ⅶ層に相当する層序は本調査区の南東にのみ確認した。Ⅶ層の堆積範囲は山側の傾斜範囲では検出できず、平野部との地形変換点付近にて確認できる。Ⅶ層の基質はシルトや極細砂といった粒径の細かい埋土であり、本層の形成には河道９の前身となる自然河道の影響による、比較的緩やかな滞水状況下での堆積が考えられる。本層からは弥生時代中期から縄文晩期の土器片が出土している。

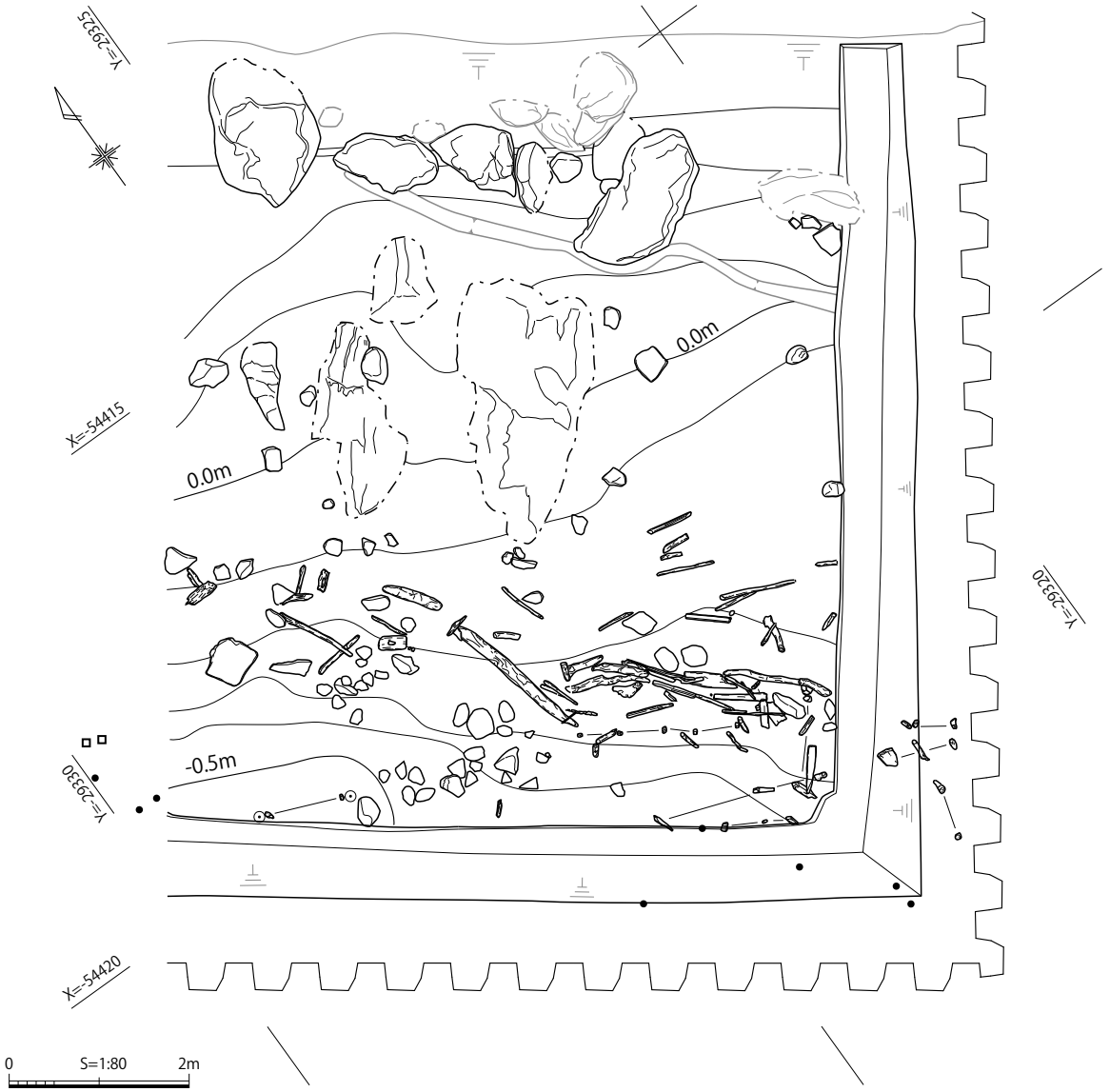
Ⅶ層の上面からは杭列 11 を確認した。上層は角礫を主とした斜面崩落土が堆積していたが、崩落土上面から杭を打設した痕跡はなく、本層に伴う杭列と判断し調査を行った。

２　杭列

杭列11（第154図）

杭列11は杭33本で構成される。杭列の方向からＡ～Ｊの10列に分けて調査した。杭は地形に沿うように列をなすＡ・Ｂ・Ｃ・Ｄ・Ｅ・Ｆと、直交するように列をなすＧ・Ｈ・Ｉに分けられる。Ｊは一本のみの検出であったことから、どちらの帰属か不明である。さらに、杭は丸杭と角杭の二種類を確認している。丸杭を使用した杭列はＡ・Ｂ・Ｇ列で、角材はＣ・Ｄ・Ｅ・Ｆ・Ｈ・Ｉとなる。使用した材と方向性によりグループを分けると、Ａ・Ｂ・Ｇ列とＣ・Ｄ・Ｅ・Ｆ・Ｈ・Ｉ列となる。このことから、地形に沿った杭列と直交する杭列のセットにより機能していた可能性が高い。丸材と角材で機能した年代差があるかについては不明である。

時期は検出層位から弥生時代中期から後期頃と推定しておきたい。



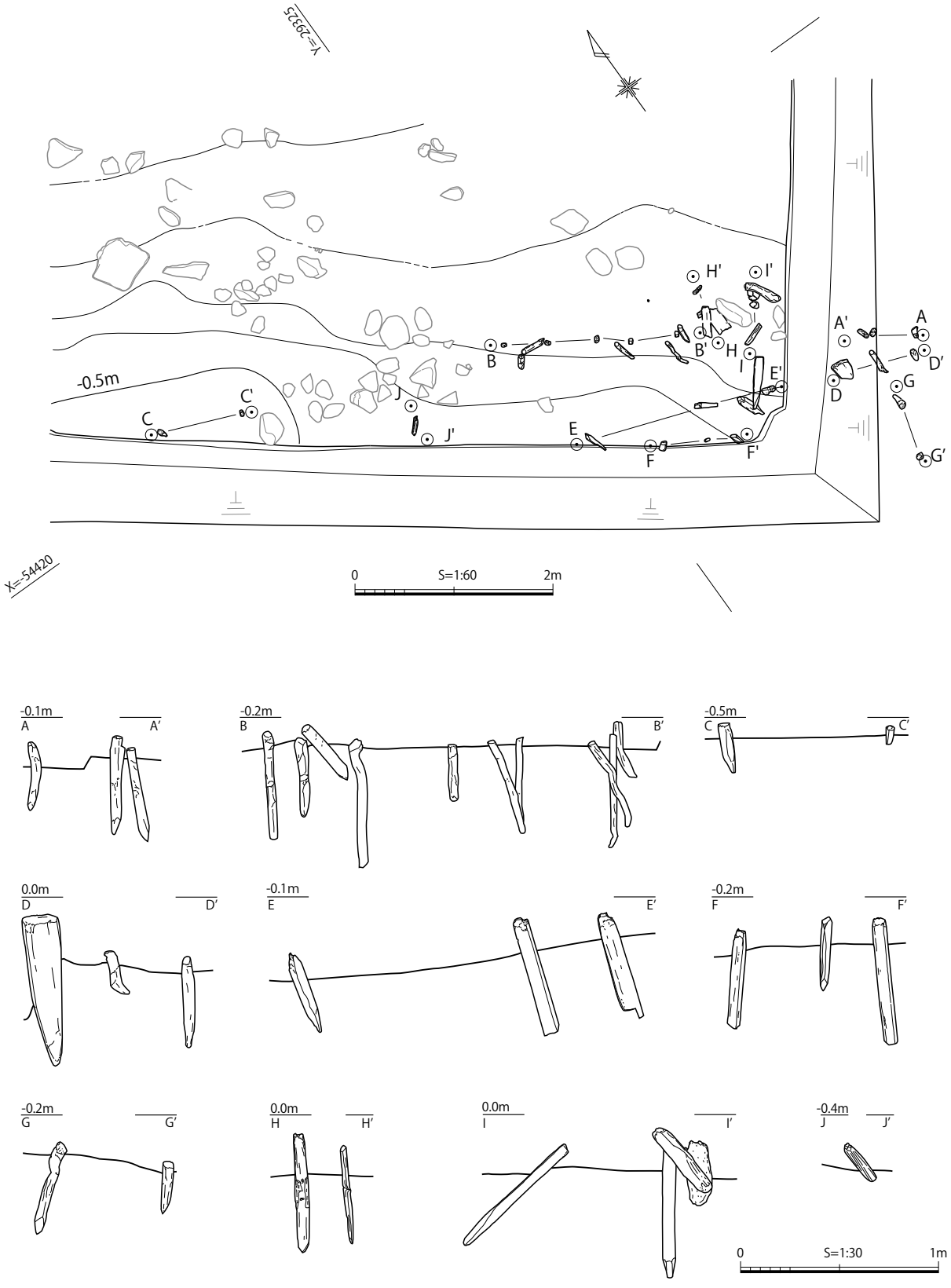
第153図　Ｐ７区Ⅸ層上面遺構分布図

第７項　Ⅸ層上面の遺構

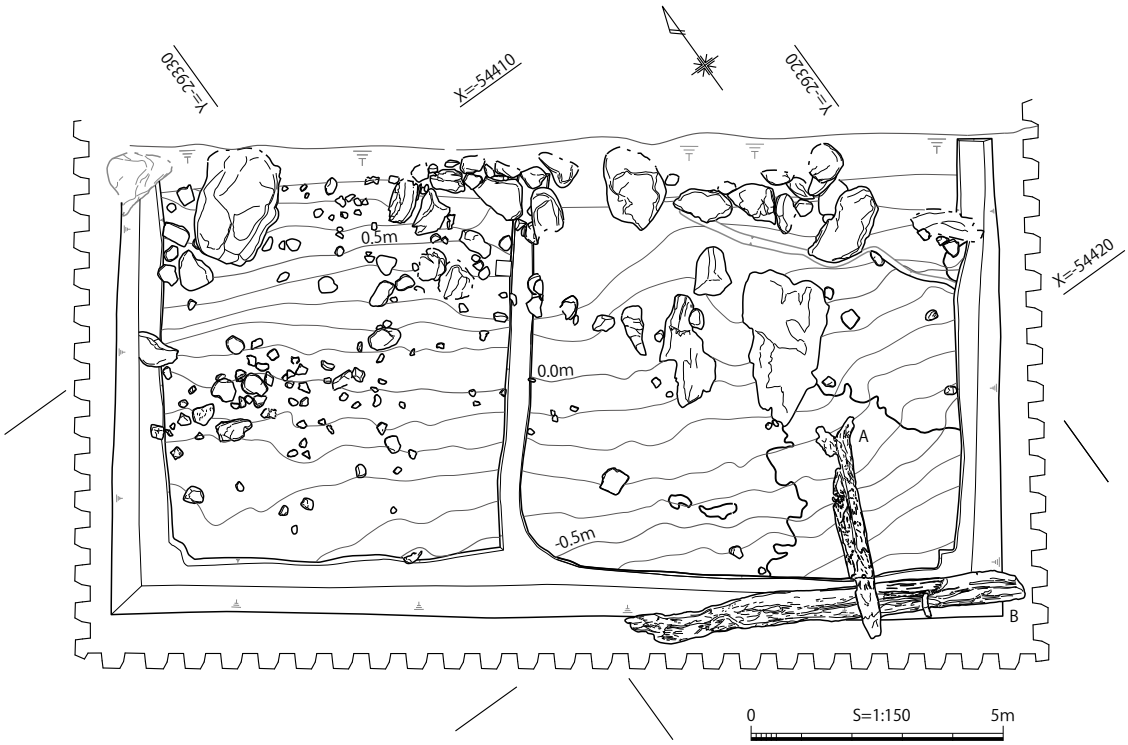
１　概　要

Ⅸ層はⅦ層の分布範囲とほぼ重複した範囲となるが、所々に飛び地状に堆積が確認できた。Ⅸ層には貝類を大量に含んでいる。貝類ではカキ類の貝殻が多い。このため、当該地まで海水が入り込んでいたことがわかる。

本調査区の南東隅にて大型の木製品を検出した。AとBの２本が丁字状に組み合わせた状態で出土した。Aは長さ約4.4mで幅約25 ～ 30ｃｍであった。山側斜面と平行するように出土している。Bは長さ約８ｍで、幅は約60ｃｍが残存していた。東側は鋼矢板により切断されている事から、全長は不明である。地形に沿うように配置されている。樹種についてはスダジイであった。出土はW1257の上部にW1176が乗せられていた。付近の埋土はⅨ層の分布範囲でもあり、常に滞水した環境が想定される。木材にもカキ類の貝が付着していた。よって、これらを配置した段階では、この付近には海水が入りこんでいたと推測される。Aは地形に直交するような配置をとることからも、山側から水辺への接近路として配置された可能性が考えられる。



第154図　Ｐ７区Ⅶ層上面遺構分布図・杭列出土状況図



第155図　Ｐ７区Ⅸ層上面遺構分布図

第 11 節　Ｐ８区の調査

第１項　調査区の概要

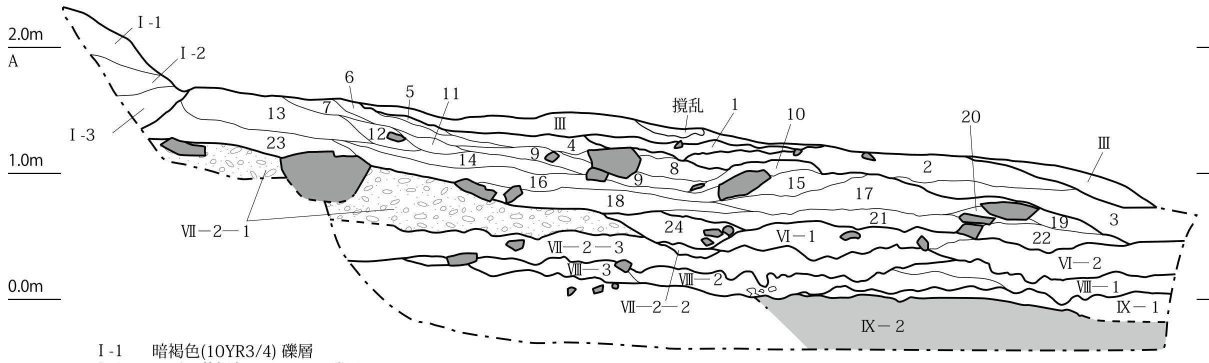
１　地形と土層堆積（第156図）

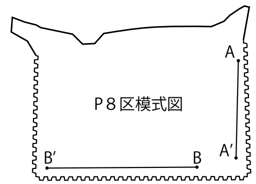
Ｐ８区は青谷横木遺跡のほぼ中心に位置する。調査年度は平成27年度で、調査面積は257.1㎡である。長尾鼻丘陵の西側斜面が平野部へと緩く張り出した部分に立地している。そのため、調査範囲は丘陵裾の斜面部がほとんどであり、平野部は調査区西側のごく一部分である。重機による掘削を行う前は、高さ約１ｍ程度の盛土により平坦地が形成されていた。重機掘削後は西の平野へ向けてなだらかに傾斜している。丘陵斜面は巨石が点在しており、過去幾度も落石したようで、調査区内部にも巨石が複数出土した。調査の支障となる巨石は各段階で除去を行った。Ｐ８区も調査範囲に丘陵斜面が含まれたが、安全面に配慮して重機による掘削以後、人力による掘り下げは行っていない。

Ⅰ～Ⅱ層は平野部でのみ確認した。Ⅲ層は丘陵斜面まで堆積している。基本層序で確認されるⅣ層及びⅤ層は本調査区では確認していない。Ⅵ層は２層に細分できる。山側からの崩落土の影響により、人頭大の礫を多数含んでいる。Ⅶ層も２層に大別できる。Ⅶ－１層は下層に比して粒径が細かく、角礫も少ない。Ⅶ－２層は山側の崩落土とみられ角礫を主体とした層である。Ⅷ層はさらに３層に分かれる。植物質を多量に含んだ層である。Ⅸ層は調査区の中央付近から平野側に堆積し、層厚も増していく。Ⅸ層はカキ殻を含んだ貝類が多量に含まれている。Ⅸ層の途切れは当該期の入り江と丘陵の汀線付近と考えられる。

２　遺構の概要

本調査区では、飛鳥時代から平安時代、弥生時代前期から中期、縄文晩期の遺構を確認している。また、遺構には伴わないが、縄文晩期から弥生時代前期頃の土器が多数出土している。

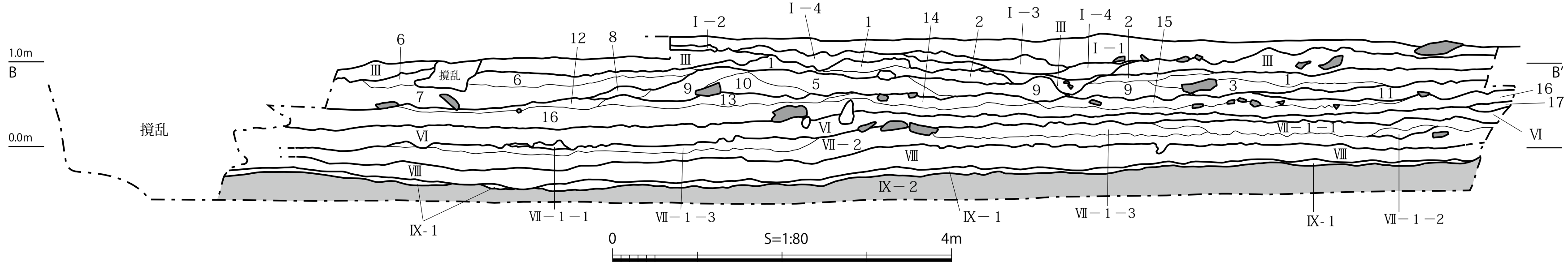




I -1　暗褐色(10YR3/4) 礫層
I -2　にぶい黄褐色(10YR4/3) 礫層
I -3　暗灰黄色(2.5Y4/2)　礫層
Ⅲ　黒褐色(10YR3/2)　細砂～シルト
道路１側溝　1　灰黄褐色(10YR4/2)細砂～極細砂　中粒砂、礫わずかに含む
道路１外盛土
2　褐灰色(10YR5/1)　極細砂～シルト
3　灰黄褐色(10YR4/2)粗砂混細砂～中粒砂　木質・木製品混じる
道路１
4　黒褐色(10YR3/1)礫混細砂～極細砂
5　灰白色(7.5YR4/1)　礫混細砂～極細砂
6　褐灰色(5YR5/1)礫混細砂～極細砂
7　灰黄色(2.5Y5/1)礫層
8　褐灰色(10YR4/1)　細砂～中粒砂

道路１
9　暗灰黄色(2.5Y4/2)　礫混粗砂～中粒砂
10　褐灰色(10YR4/1)　中粒砂～細砂　礫僅かに含む
11　黒褐色(2.5Y3/2)　礫層
12　黄灰色(2.5Y5/1)　礫層
13　暗灰黄色(2.5Y5/2)中粒砂混礫層
14　黄灰色(2.5Y4/1)　礫混粗砂～中粒砂
15　褐灰色(10YR6/1)極細砂～シルト　僅かに中粒砂含む
16　褐灰色(10YR6/1)礫混極細砂～シルト
17　黒褐色(10YR3/1)　中粒砂混シルト～極細砂　(木質多い)
18　黄灰色(2.5Y5/1)　細砂～極細砂　木質・木製品混じる

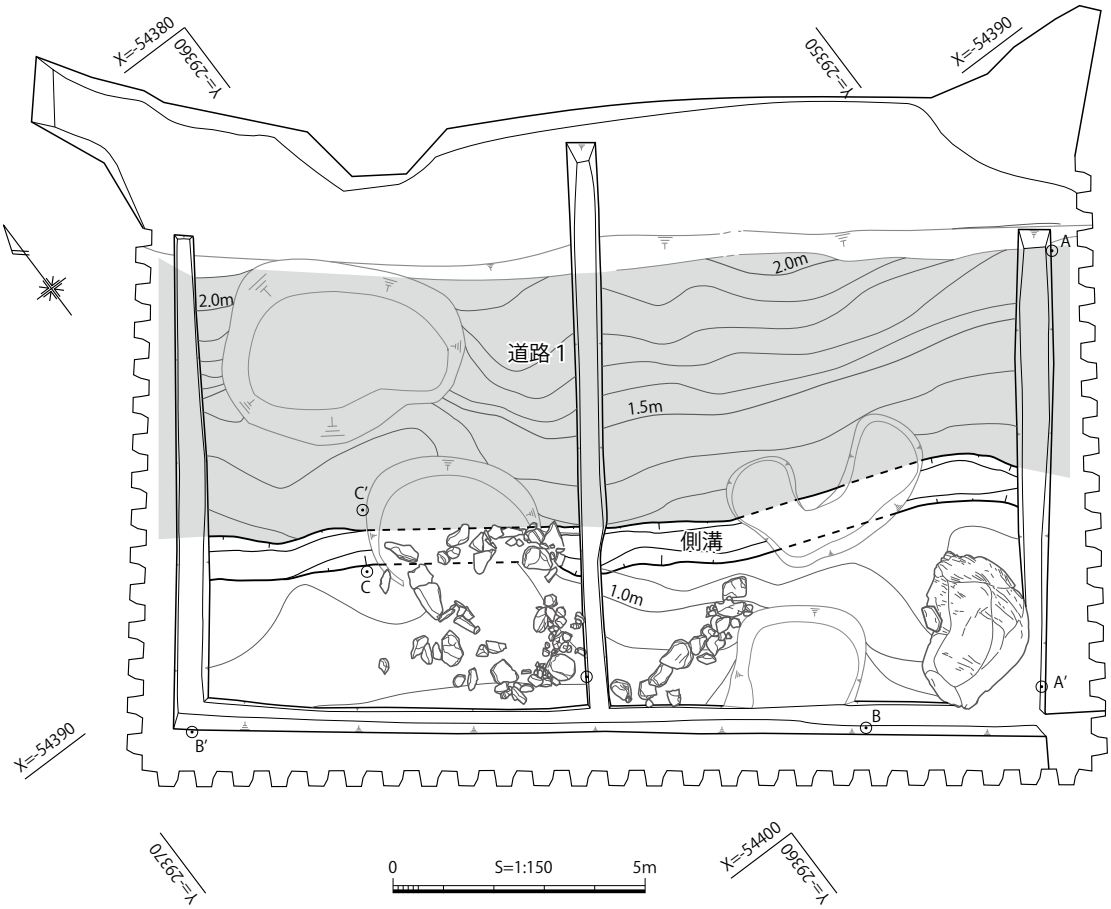
道路１
19　暗灰黄色(2.5Y5/2)　小礫・中粒砂混シルト～極細砂
20　灰黄褐色(2.5Y6/2)　中粒砂混シルト～極細砂
21　褐灰色(10YR4/1)　礫混極細砂～細砂　木質・木製品含む
22　灰黄褐色(10YR5/2)　粗砂混細砂～中粒砂
23　にぶい黄色(2.5Y6/3)　細砂混礫～中粒砂　木質多く含む
溝10　24　暗灰黄色(2.5Y5/2)礫層　木質多く含む
VI-1　黒褐色(2.5Y3/1)　礫混極細砂～細砂　木質・木製品多く含む
VI-2　オリーブ黒色(5Y3/1)シルト混細砂～極細砂
Ⅶ-2-1　黒褐色(2.5Y3/1)礫層
Ⅶ-2-2　黒褐色(7.5Y3/2)細砂混シルト～極細砂
Ⅶ-2-3　暗褐色(7.5YR3/3)細砂混シルト～極細砂　木質多く含む
Ⅷ-1　黒褐色(2.5Y3/1)極細砂～細砂　(植物未分解物含む)
Ⅷ-2　黄灰色(2.5Y5/1)極細砂～細砂　(植物未分解物含む)
Ⅷ-3　灰色(5Y4/1)中粒砂混　細砂～極細砂　木質多く含む
Ⅸ-1　褐灰色(7.5YR6/1)細砂混シルト～極細砂
Ⅸ-2　黒褐色(10YR3/2)　中粒砂～細砂　多量に貝殻を含む



I -1　にぶい黄褐色 (10YR5/4)　礫混細砂～中粒砂　木種・木製品含む　しまりあり　粘性弱い
I -2　黄灰色 (2.5Y4/1)　礫混粗砂
I -3　にぶい黄褐色 (10YR5/3)　細砂～シルト
I -4　黄灰色 (2.5Y4/1)　礫混粗砂～中粒砂
Ⅲ　黒褐色 (10YR3/2)　細砂～シルト　植物未分解多く含む
道路１外盛土
1　黒褐色 (2.5Y3/1)　細砂～中粒砂　木質あまり含まない　ややしまる　粘性弱い
2　灰黄色 (2.5Y3/2)　中粒砂～細砂　木質あまり含まない　ややしまる
3　暗灰黄色 (2.5Y4/2)　細砂～中粒砂　しまりなし　粘性なし
条里 22　4　黒褐色 (10YR3/2)　細砂～中粒砂　中礫含む　木質・木製品含む　しまりややあり　粘性弱い
条里 21　5　灰黄褐色 (10YR4/2)　細砂～中粒砂　わずかに小礫含む
条里24
6　暗灰黄色 (2.5Y5/2)　中粒砂混　細砂～極細砂　木質・木製品わずかに含む　しまりあり　粘性強い
7　黄灰色 (2.5Y4/1)　中粒砂混　細砂～極細砂　木質・木製品やや多い　しまりあり　粘性強い
条里 21
8　褐灰色 (10YR4/1)　中粒砂混　細砂～極細砂　しまりややあり　粘性砂
9　黒褐色 (2.5Y3/1)　粗砂混細砂～中粒砂　木質・木製品多く含む　しまりあり　粘性あり
10　黒褐色 (10YR4/1)　細砂～粗砂　粗朶・木質多く含む　ややしまる　粘性弱い
条里 23　11　黒褐色 (2.5YR3/1)　極細砂混粗砂～中粒砂　木質・木製品多く含む　しまりあり　粘性弱い

河道６埋土
12　灰色 (5Y4/1)　細砂～極細砂　木質・木製品含む　ややしまる　粘性弱い
13　灰色 (5Y4/1)　中粒砂混細砂～極細砂　木質含む　ややしまる　粘性弱い
14　灰色 (5Y5/1)　中粒砂混細砂～極細砂　木質含む　ややしまる　粘性弱い
15　灰色 (5Y4/1)　極細砂～細砂　木質含む　ややしまる　粘性弱い
16　灰色 (5Y5/1)　細砂～極細砂　(水平に近いラミナあり)　木製品・木質含む　しまりあり　粘性弱い
17　灰色 (5Y4/1)　細砂混シルト～極細砂　木質多く含む　ややしまる　粘性あり
Ⅵ　灰色 (5Y4/1)　細砂混シルト～極細砂　木質多く含む　ややしまる　粘性あり
(下層ブロックを含み全体に撹拌される)
Ⅶ-1-1　黒褐色 (7.5YR3/1)　シルト混極細砂
Ⅶ-1-2　黒褐色 (7.5YR3/1)　細砂混シルト～極細砂に暗褐色 (7.5YR3/3) シルト～極細砂ブロック混じる
木質多く含む　ややしまる　粘性あり
Ⅶ-1-3　黒褐色 (7.5YR3/1)　細砂混　シルト～極細砂
Ⅶ-2　暗褐色 (7.5YR3/3)　細砂混シルト～極細砂　木質多く含む　ややしまる　粘性あり
Ⅷ　暗灰黄色 (2.5Y5/2)　細砂混シルト～極細砂　(植物未分解物含む)　木質・木製品含む　ややしまる
Ⅸ-1　灰白色 (5YR8/1)　シルト～極細砂　木質・木製品僅かに含む　しまりなし　粘性強い
Ⅸ-2　黒褐色 (10YR3/2)　中粒砂～細砂　多量に貝殻を含む　しまりなし　粘性弱い

第156図　Ｐ８区土層断面図



第157図　Ｐ８区Ｖ層上面遺構分布図

第２項　Ｖ層上面の遺構（飛鳥時代～平安時代）

１　概要（第157図）

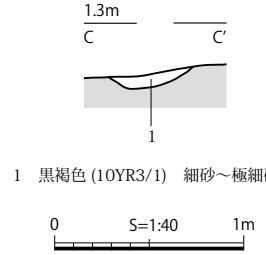
Ｖ層を基盤とした盛土としては、まず道路１が構築される。道路１の平野側裾部に条里21 ～ 24が接続する。これらを覆うように道路１道路外盛土が構築されている。道路１と道路１道路外盛土の間には側溝が確認できる。

２　道路遺構

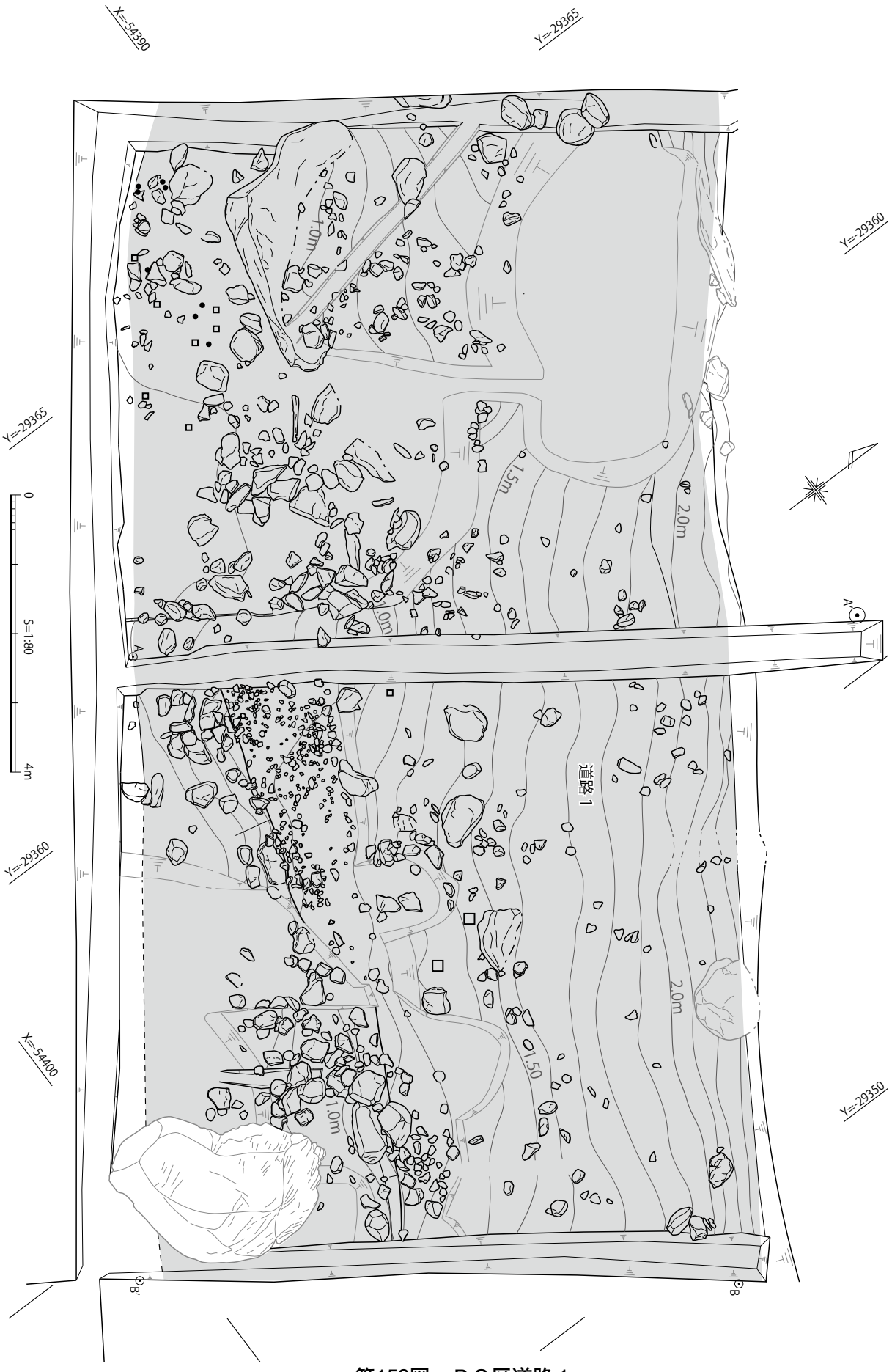
道路１（第158 ～ 160図　ＰＬ.39－２）

本調査区の丘陵斜面に構築している。方位はN－65°－Wである。道路１の丘陵付近の構築土と丘陵斜面では同様の礫層で構築されるため、境について明確にできていない。そのため、道路の盛土幅は不明確ながら最大で８ｍ程度と推定している。

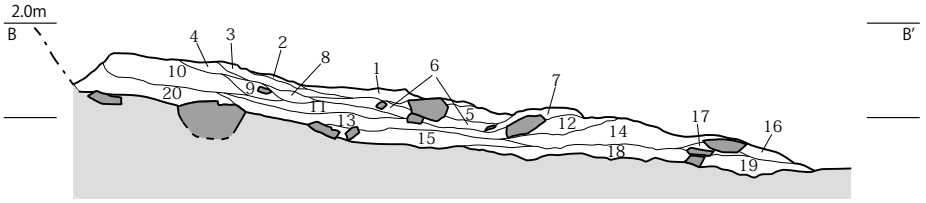
道路１は構築当初から２回程度改修が行われたと考えている。改修土①は丘陵を起源とする礫を部分的に盛り上げている。道路の上層部分や肩部には礫の混じった細砂や極細砂により構築している。出土した土師器の年代から10世紀後半頃と考える。改修土②は道路の平野裾を盛り上げたのち、内部を充填する工法で行っている。出土した須恵器の年代から９世紀代と考える。構築当初の盛土と思われる埋土は、道路１の平野側裾で確認した。出土した土器類により７世紀末～８世紀初頭頃と推定する。



第158図　Ｐ８区道路１側溝土層断面図



第159図　Ｐ８区道路１

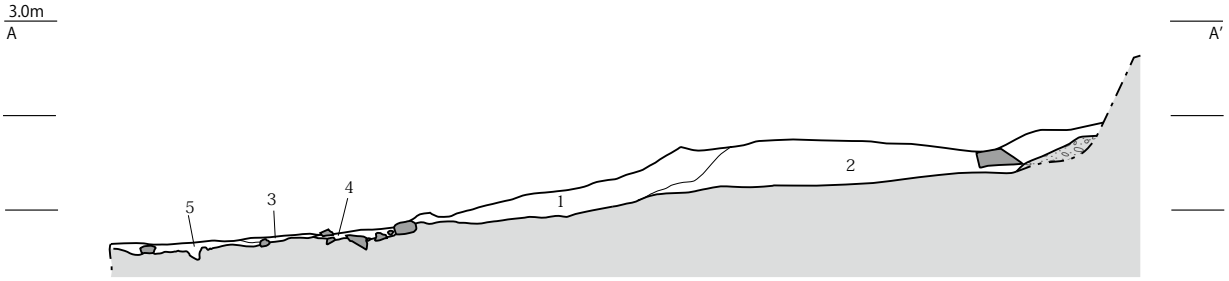


改修土①
1　黒褐色(10YR3/1)　礫混細砂～極細砂　ややしまる　粘性あり
2　灰白色(7.5YR4/1)　礫混細砂～極細砂　ややしまる　粘性あり
3　褐灰色(5YR5/1)　礫混細砂～極細砂　ややしまる　粘性あり
4　灰黄色(2.5Y5/1)　礫層　ややしまる　粘性なし
5　褐灰色(10YR4/1)　細砂～中粒砂　ややしまる　粘性弱い

改修土②
6　暗灰黄色(2.5Y4/2)　礫混粗砂～中粒砂　ややしまる　粘性弱い
7　褐灰色(10YR4/1)　中粒砂～細砂　礫僅かに含む　しまりあり　粘性弱い
8　黒褐色(2.5Y3/2)　礫層　しまりあり　粘性なし
9　黄灰色(2.5Y5/1)　礫層　しまりあり　粘性なし
10　暗灰黄色(2.5Y5/2)　中粒砂混礫層　しまりあり　粘性なし

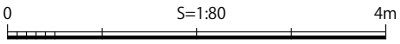
改修土②
11　黄灰色(2.5Y4/1)　礫混粗砂～中粒砂　しまりあり　粘性なし
12　褐灰色(10YR6/1)　極細砂～シルト　僅かに中粒砂含む　しまりあり　粘性あり
13　褐灰色(10YR6/1)　礫混極細砂～シルト　しまりあり　粘性あり
14　黒褐色(10YR3/1)　中粒砂混シルト～極細砂　(木質多い)　しまりあり　粘性あり
15　黄灰色(2.5Y5/1)　細砂～極細砂　木質・木製品混じる　しまりあり　粘性あり
16　暗灰黄色(2.5Y5/2)　小礫・中粒砂混シルト～極細砂　しまりあり　粘性あり
17　灰黄褐色(2.5Y6/2)　中粒砂混シルト～極細砂　しまりあり　粘性強い

構築当初土
18　褐灰色(10YR4/1)　礫混極細砂～細砂　木質・木製品含む　しまりあり　粘性あり
19　灰黄褐色(10YR5/2)　粗砂混細砂～中粒砂　ややしまる　粘性弱い
20　暗灰黄色(2.5Y5/2)　礫層　木質多く含む　しまりなし　粘性なし



改修土①
1　黄灰色 (2.5Y4/1)　礫混中粒砂～細砂　しまりあり　粘性あり
2　黄灰色 (2.5Y5/1)　礫混中粒砂～細砂　しまりなし　粘性なし
構築当初土 3　黄灰色 (2.5Y4/1)　シルト混礫層　しまりなし　粘性なし

構築当初土
4　灰黄色 (2.5Y6/2)　礫混細砂～中粒砂
5　黄褐色 (2.5Y5/3)　礫層　しまりあり　粘性なし



第160図　Ｐ８区道路１土層断面図

道路１側溝

道路１と道路外盛土を画するように検出される。溝の幅は約40cm、深さは10cm程度を測る。溝からは完形の土師器坏や木製品が出土している。埋土は基本層序のⅢ層に類似している。

埋没した年代は10世紀後半～ 11世紀頃と考える。

道路外盛土

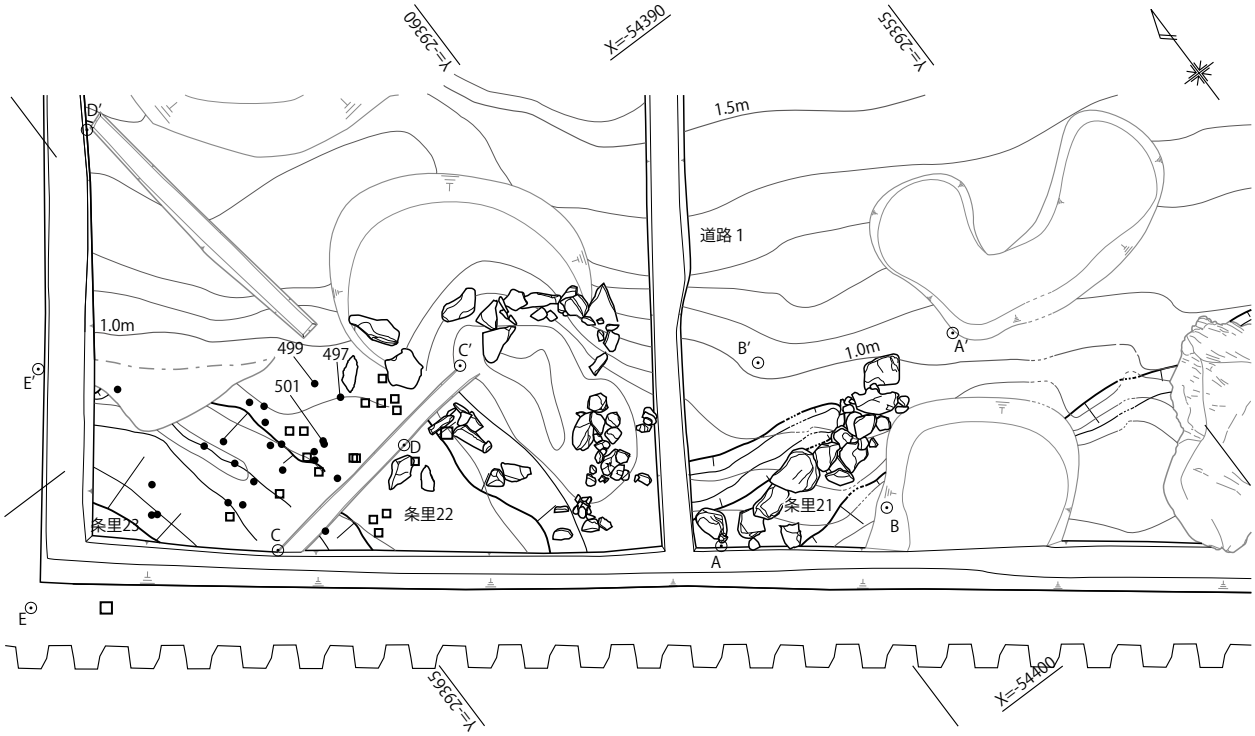
道路１の平野側で確認した盛土である。道路１や条里盛土を覆うように構築したと考えられる。構築土には粗朶や草木類を含まず、細砂を主とした比較的良くしまった埋土であった。

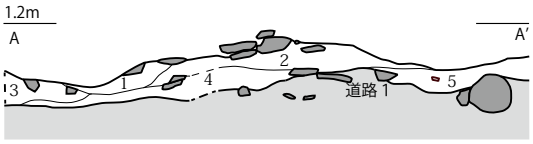
年代は出土した土器類から10世紀後半頃と考える。

２　条里遺構

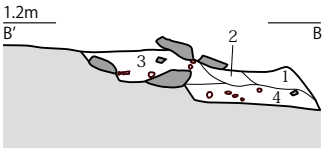
条里21（第161図）

東西に延びる盛土遺構で、南北方向に延びる。12歩の条里地割をさらに細分する地割の可能性がある。方位はN－84°－Eである。盛土の上面に盛土と同方向に延びる石列を検出した。盛土の構築土は４層確認したが、調査範囲から構築方法を理解するには至らなかった。道路１との接続部には粗朶状の木片が多数出土している。遺物は少数ながら須恵器や木製品が出土した。盛土内から採取した粗朶をサンプルとして放射性炭素年代測定を実施した。樹種はクスノキ科で２σ774－886calAD（95.4%）の年代が得られている。土器の出土が少量であることから、年代については不明確ながら９世紀後半以降と推定される。

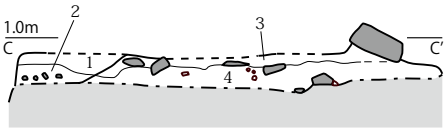


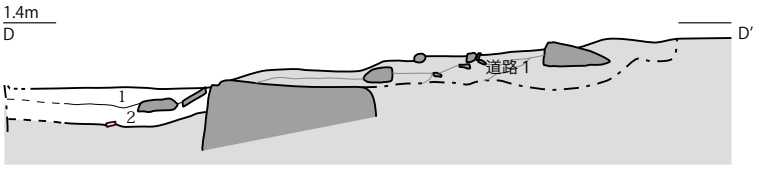


1　褐灰色 (10YR4/1)　細砂～中粒砂　木質含む
2　黒褐色 (10YR3/1)　中粒砂～細砂　木質 (粗朶) 多く含む
3　黒褐色 (10YR3/2)　細砂～中粒砂　木質多く含む
4　褐灰色 (10YR4/1)　礫混 細砂～極細砂　木質含む
5　黒褐色 (2.5Y3/1)　中粒砂混 礫層　木質含む



1　褐灰色 (10YR4/1)　中粒砂～細砂　木質ごく僅かに含む
2　黒褐色 (10YR3/1)　中粒砂混　細砂～極細砂　木質ごく僅かに含む
3　褐灰色 (10YR4/1)　細砂混　中粒砂～粗砂　木質 (粗朶) 多く含む
4　黄灰色 (2.5YR4/1)　中粒砂混　細砂～極細砂　木質多く含む

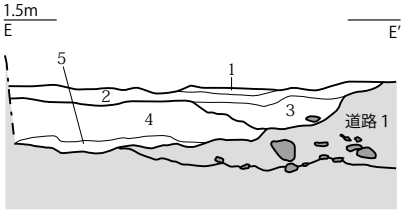




道路1 外盛土
1　黒褐色 (2.5Y3/1)　中粒砂混 極細砂～細砂　木質含む
2　黒褐色 (2.5Y3/2)　細砂混 粗砂～中粒砂　木質含む
条里22
3　黒褐色 (10YR3/2)　粗砂混 中粒砂～細砂　木質含む
4　褐灰色 (10YR4/1)　粗砂混 中粒砂～細砂
木質 (粗朶) 多く含む

条里22
1　褐灰色 (7.5YR4/1)　粗砂混 細砂～極細砂　木質僅かに含む
2　褐灰色 (7.5YR4/1)　中粒砂混 粗砂～細砂　木質 (粗朶) 多く含む

0　S=1:60　2m



道路1 外盛土
1　黄灰色 (2.5Y5/1)　細砂～極細砂
2　灰黄褐色 (10YR4/2)　粗砂混細砂～中粒砂　木質・木製品含む
3　褐灰色 (10YR4/1)　粗砂混細砂～中粒砂
条里23
4　黒褐色 (10YRY3/2)　中礫混中粒砂～粗砂　木質・木製品多く含む
5　灰黄褐色 (10YR4/2)　粗砂混細砂～中粒砂　粗朶・木質・木製品含む

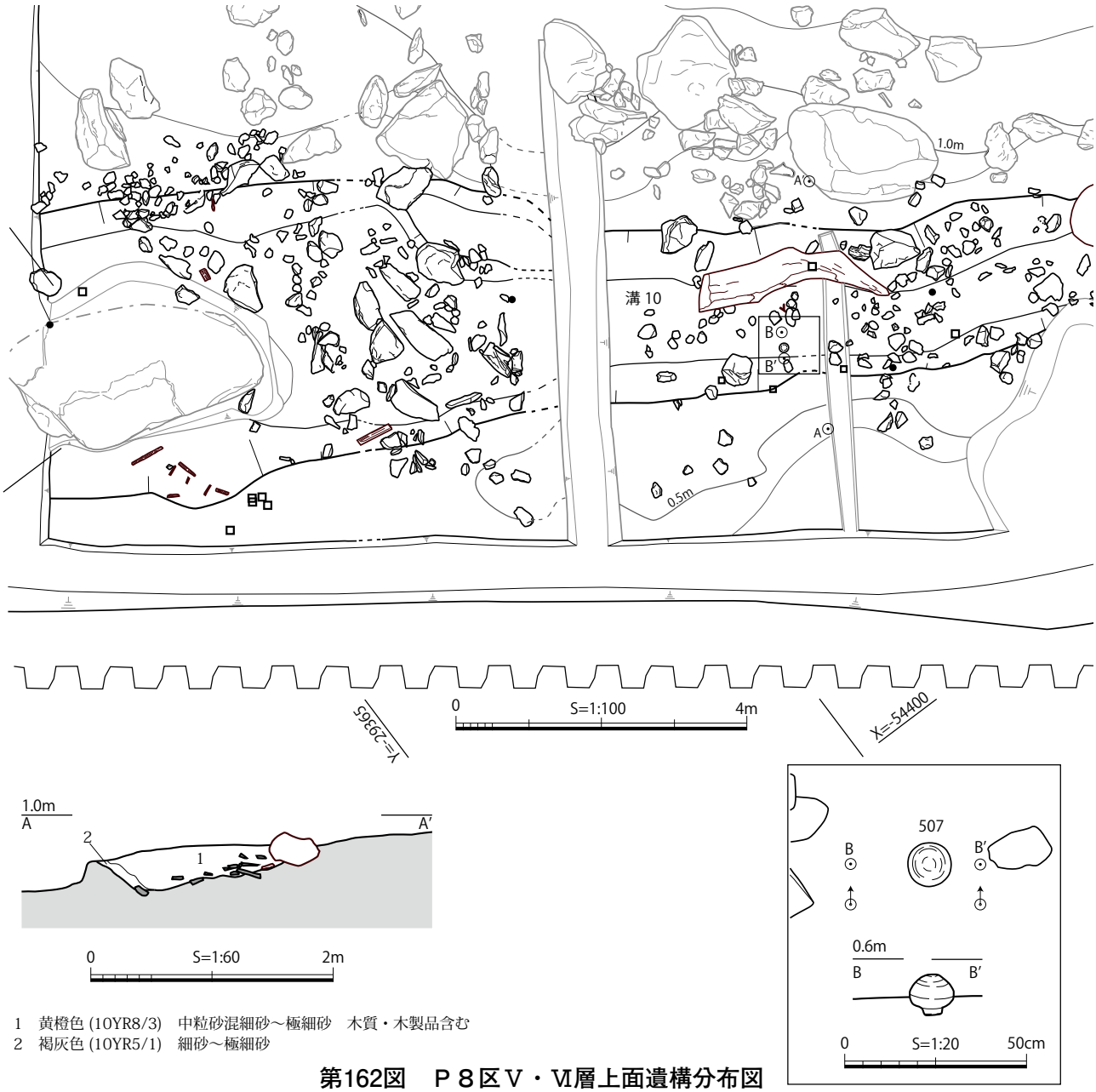
第161図　Ｐ８区条里21 ～ 23

条里22（第161図）

南北方向に延びる盛土遺構である。復元される条里地割の12歩区画に相当する。方位はN－５°－Wである。盛土は幅約2.8mで、高さは約25cmを測る。巨石を除去したこともあるが、盛土の東側は不明瞭である。道路１との接続部では木片が多数確認できた。遺物も道路遺構との接続部に集中して出土している。盛土の構築土として利用した埋土は本来道路1の構築土であった可能性が残る。遺物は墨書土器や須恵器、土師器が出土している。土器の年代から９世紀頃と考える。また、盛土内に含まれる粗朶をサンプルとして放射性炭素年代測定を実施した。樹種はヤナギ属で、２σ暦年代範囲で766－882calAD（82.4%）の年代が得られている。

条里23（第161図）

本調査区の西隅にて検出した。南北方向に延びる盛土遺構である。復元される条里地割の 12 歩の区画をさらに細分する位置に相当する。調査区際であることから、詳細について不明である。盛土からは土器類の他に木製品が出土した。



1　黄橙色（10YR8/3）　中粒砂混細砂～極細砂　木質・木製品含む
2　褐灰色（10YR5/1）　細砂～極細砂

第162図　Ｐ８区Ⅴ・Ⅵ層上面遺構分布図

出土した土器の年代から９～10世紀頃と考える。

条里24（第156図）

本調査区の東隅に位置する。調査区への延伸推定箇所には巨石が位置しており、条里24は本調査区の西壁の断面でのみ確認している。方向性については不明である。

３　溝

溝10（第162図　ＰＬ.39－３）

本調査区を横断する溝である。調査区の西側に位置する巨石付近で大きく広がっている。幅は最大で約2.3m、深さは約25cmであった。埋土からは木製品とともに木製祭祀具も出土している。溝からは須恵器の短頸壺が逆位で出土している。時期は７世紀末～８世紀初頭頃と推定される。

第３項　Ⅵ層上面の遺構（古墳時代）

１　概　要（第163図）

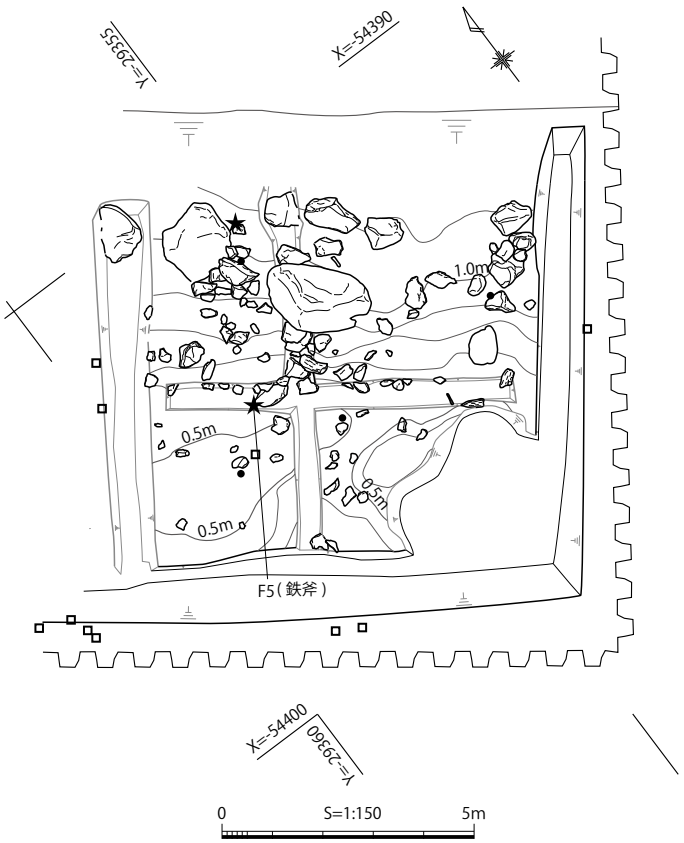
Ⅵ層に帰属する遺構は確認していない。本層の確認のため設定したトレンチより袋状鉄斧Ｆ５が出土した。また、本層掘り下げ中にも鉄製品が出土している。

第４項　Ⅶ層上面の遺構（弥生時代中期～後期）

１　概　要（第164・165図）

Ⅶ層はⅦ－１層とⅦ－２層に大別できた。Ⅶ－１層は下層のⅦ－２層に比べて土壌化が進んでおり、夾雑物も少ない傾向にあった。Ⅶ－１層上面では杭列を確認した。杭列Ａ－Ａ’は小規模な杭材を使用している。Ｂ－Ｂ’は２本を一対として利用していたようで隣接した位置に打設されていた。両者とも具体的な用途は明確にできなかった。

Ⅶ－２層の断面を観察したところ、複数の箇所で盛り上がりを確認した。盛り上がりは場所によっては拳大程度の礫も出土したことから、畦畔の可能性を考慮し検出作業を行った。

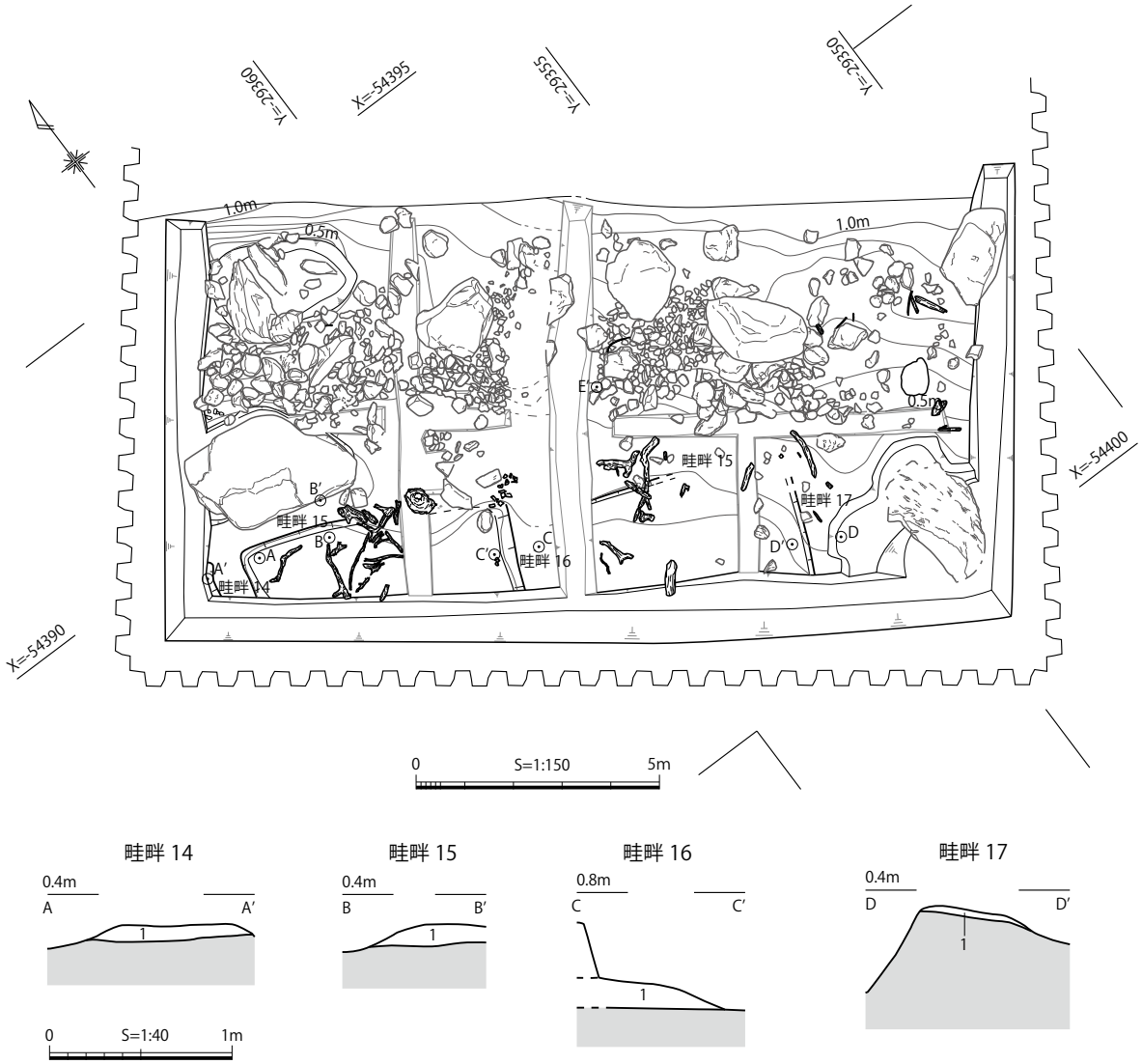


第163図　Ｐ８区Ⅴ・Ⅵ層遺物出土状況図

２　畦畔

畦畔14～17（第164図　ＰＬ.40－１,２）

畦畔14は南北方向に延び、畦畔15に連結する。幅は約50cm、高さ８～10cmを測る。畦畔15は東西方向に延びる。丘陵裾部から延びる礫層との間を区画する。中央トレンチ付近で不明瞭となるが西側まで連続する



1　褐色 (10YR4/4) ～灰黄褐色 (10YR4/2)　細砂～極細砂　わずかに中粒砂含む　植物未分解物多く含む

第164図　Ｐ８区Ⅷ層上面遺構分布図

ようである。高さは10cm程度が残存している。畦畔16は南北方向に延びる。中央に配置したトレンチにより全幅については不明である。

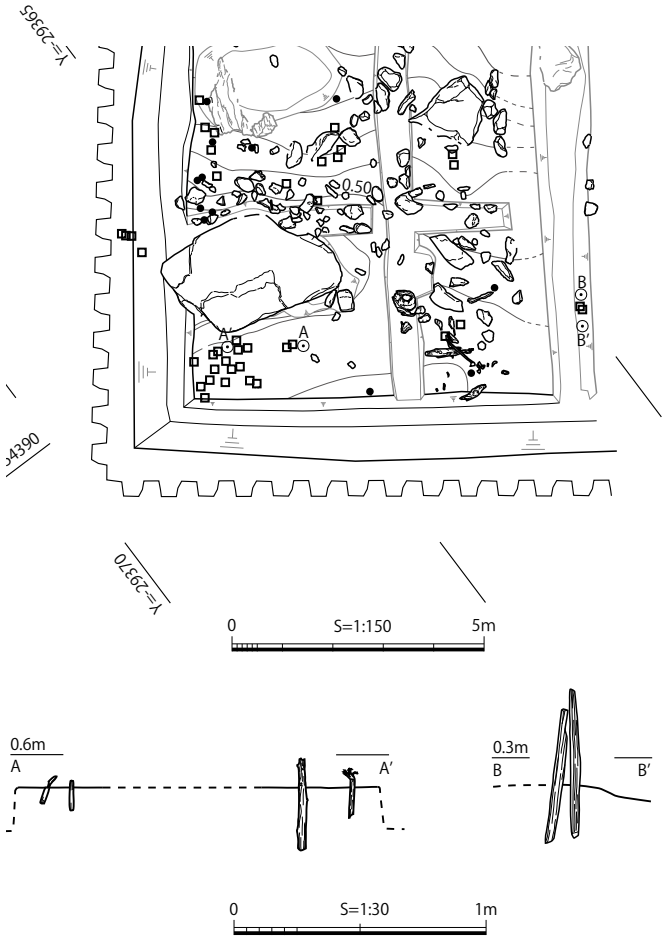
高さは10 ～ 16cmを測る。畦畔17は調査区の西端に位置する。巨石を除去した撹乱により一部を検出したのみである。高さは４～５cmが残存する。これらが水田に伴う畦であるとすると上層は耕作土ともなり得る。

時期は年代の根拠となる土器の出土が無かったことから明確にしえない。基本層序のⅧ層が弥生時代中期以降の堆積であるとすると、これ以降であり基本層序Ⅵ層より以前といった時期幅と考えられる。

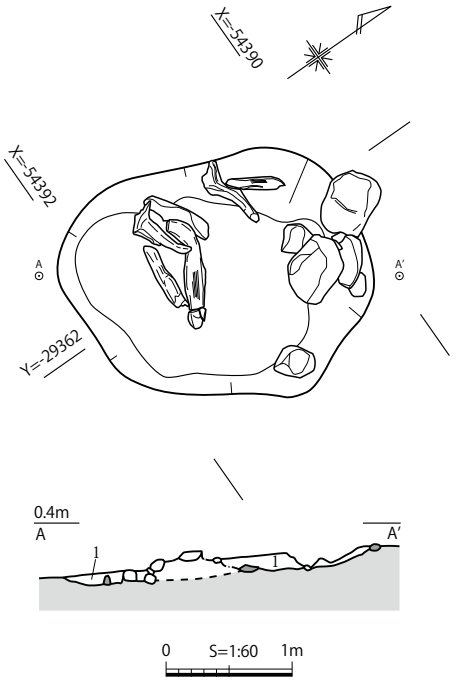
第５項　Ⅷ層上面の遺構（弥生時代前期～中期）

１　概　要（第167図）

Ⅷ層に帰属する遺構は確認していない。Ⅷ層は植物の未分解物が多く、木の根等を多数確認した。Ⅷ層中からは縄文時代晩期から弥生時代前期頃の土器が散見された。とくに調査区の北西に位置する巨石の周辺からはまとまった出土が確認できる。

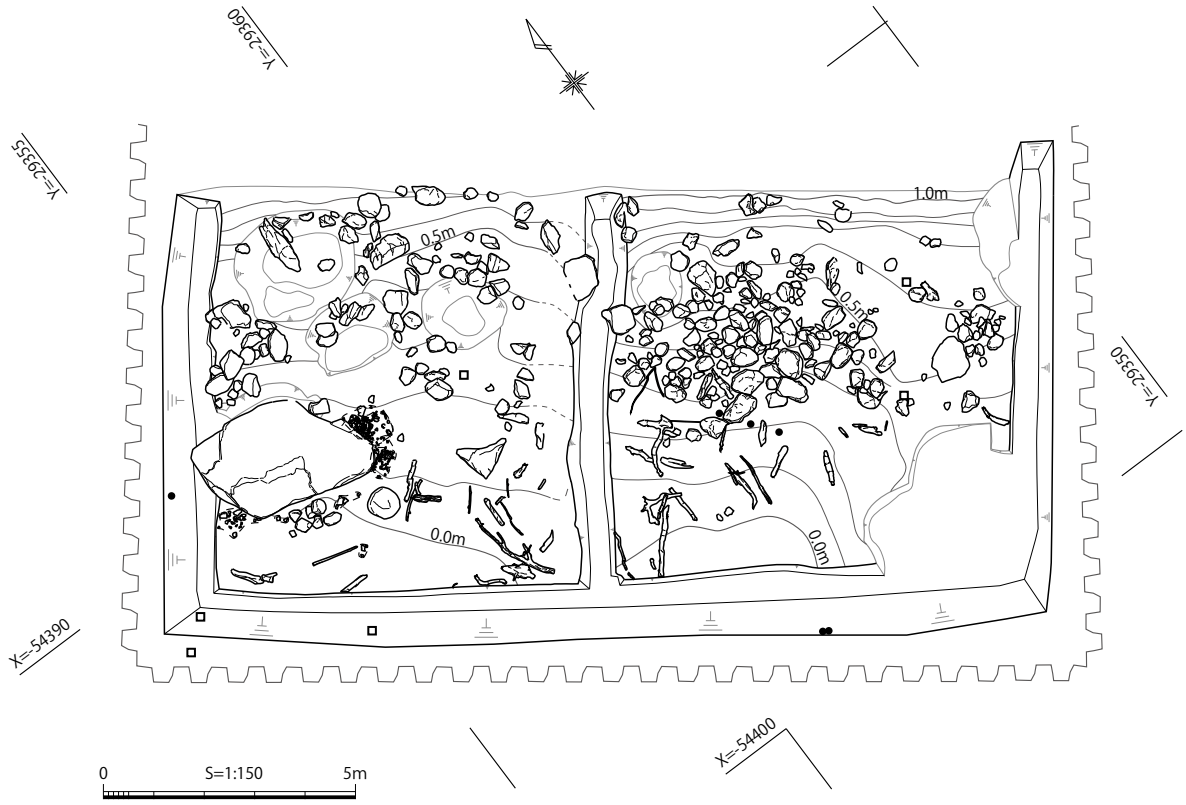


第165図　Ｐ８区Ⅶ層上面杭検出状況図

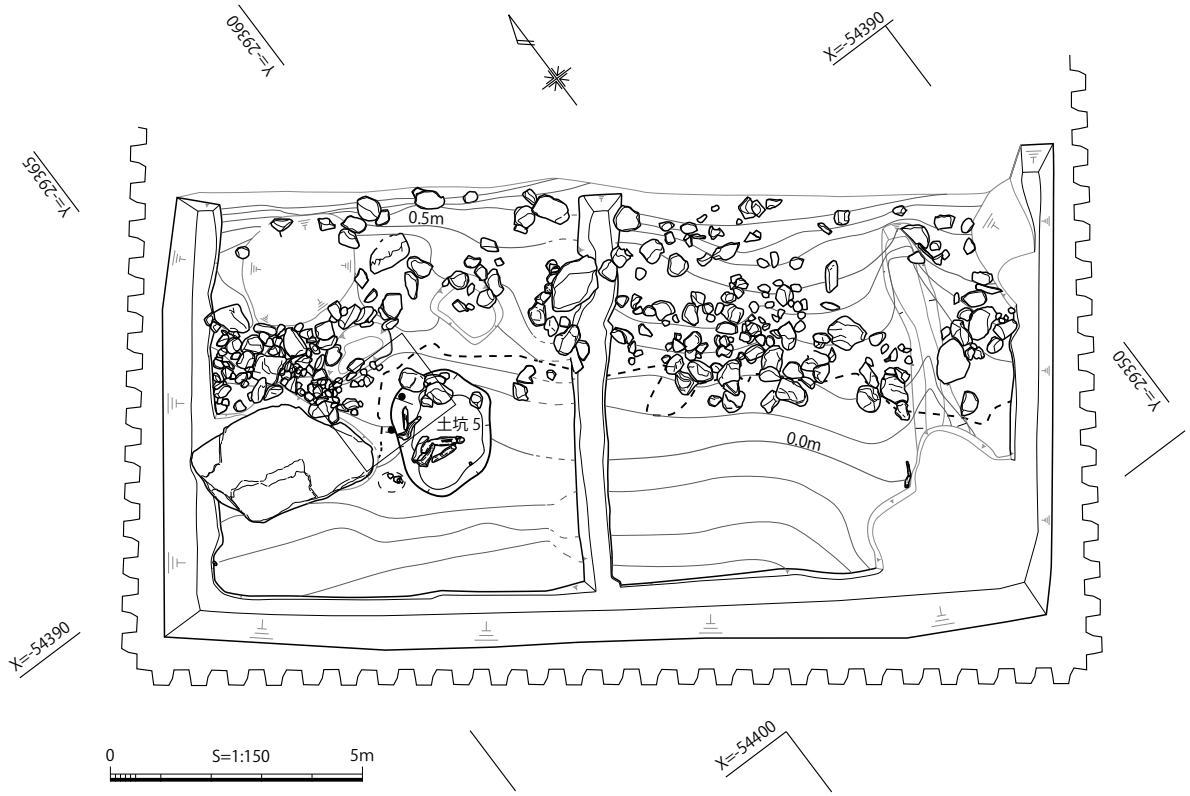


1. 黄灰色 (2.5Y4/1)　細砂混シルト～極細砂 植物未分解物多く含む

第166図　Ｐ８区土坑５



第167図　Ｐ８区Ⅶ層上面遺構分布図



第168図　Ｐ８区Ⅸ層上面遺構分布図

土器の出土は大きく６箇所に分かれている。土器は一個体に復元できないことから、一括での廃棄や埋納といった行為は想定できない。

第６項　Ⅸ層上面の遺構（縄文時代晩期）

１　概　要（第168図）

Ⅸ層は調査区の平野側で確認した。薄い極細砂からシルト層以下は貝類を密に含んだ層となる。土器はⅨ層上面でまばらに散見する状況であった。時期は出土した土器から縄文時代晩期と考えられる。

２　土坑

土坑５（第166図　ＰＬ.40－３）

Ⅸ層上面にて確認した。規模は長軸が約 2.5 ｍ、短軸が約 1.8 ｍの楕円形を呈し、深さは約 10cm であった。人為的なものではなく、浅い窪地であった可能性は残る。

第12節　５区の調査

第１項　調査区の地形と土層堆積（第169図）

５区は青谷横木遺跡のほぼ中央、P8区の南西に位置する。調査前の地形は、水田として利用されていた平地である。一辺約27mの方形の調査区を設置し、平成25年度に調査を行った。調査面積は712.7㎡を測る。道路設計の変更から、Ⅴ層上面までの調査で終了しているが、調査区四周の側溝部分はⅤ層以下まで掘削している。当初、Ⅲ層まで重機による掘削を行う予定であったが、条里25に伴う人頭大、またはそれ以上の礫が数多く出土したため、重機による掘削はⅢ層途中までとし、それ以下を人力によって掘削している。なお､最終的にはⅤ層上面全体を保護して､埋め戻しを行っている。

調査地全域で、基本層位であるⅠ～Ⅴ層を確認している(第169図)。各層がほぼ水平に堆積している。Ⅰ・Ⅱ層は近現代の造成土と水田耕作土である。Ⅲ層はいわゆる泥炭層であるが、一部撹拌された部分(Ⅲ－1)もある。Ⅳ層は複数層に分かれており、条里遺構や盛土遺構が時期差をもってつくられた可能性を示す堆積状況である。Ⅴ層は下の層まで抜いておらず層厚等で不明な部分もあるが、粗砂を若干含む箇所があり、後述する砂層と混ざった堆積層の可能性がある。遺物も古代から古墳時代前期(562・563)の土器を含んでおり、盛土が存在した可能性がある。条里25の構築面となっている。

Ⅳ層からⅤ層にかけて、特にⅣ層では、土器や木簡(26・27号)、木製祭祀具を含む木器が数多く出土している。本来は条里遺構や盛土遺構に含まれていたものの可能性がある。

北西壁の断面(第169図A－A')では、条里25とは異なる盛土状の堆積層(盛土？１～12)を確認したが、平面で検出しきれず、遺構と断定していない。また、調査地北側のⅤ層以下では、粗砂や細砂で構成される層(Ⅴ－5～7)を確認している。T26グリッド南東の北西壁断ち割り内では、この砂層から、刀形や斎串(W521・523)が数点まとまって出土している。砂層は、河道６、もしくは河道９の埋土の可能性が高い。

第２項　Ⅳ層上面の遺構（平安時代～中世）

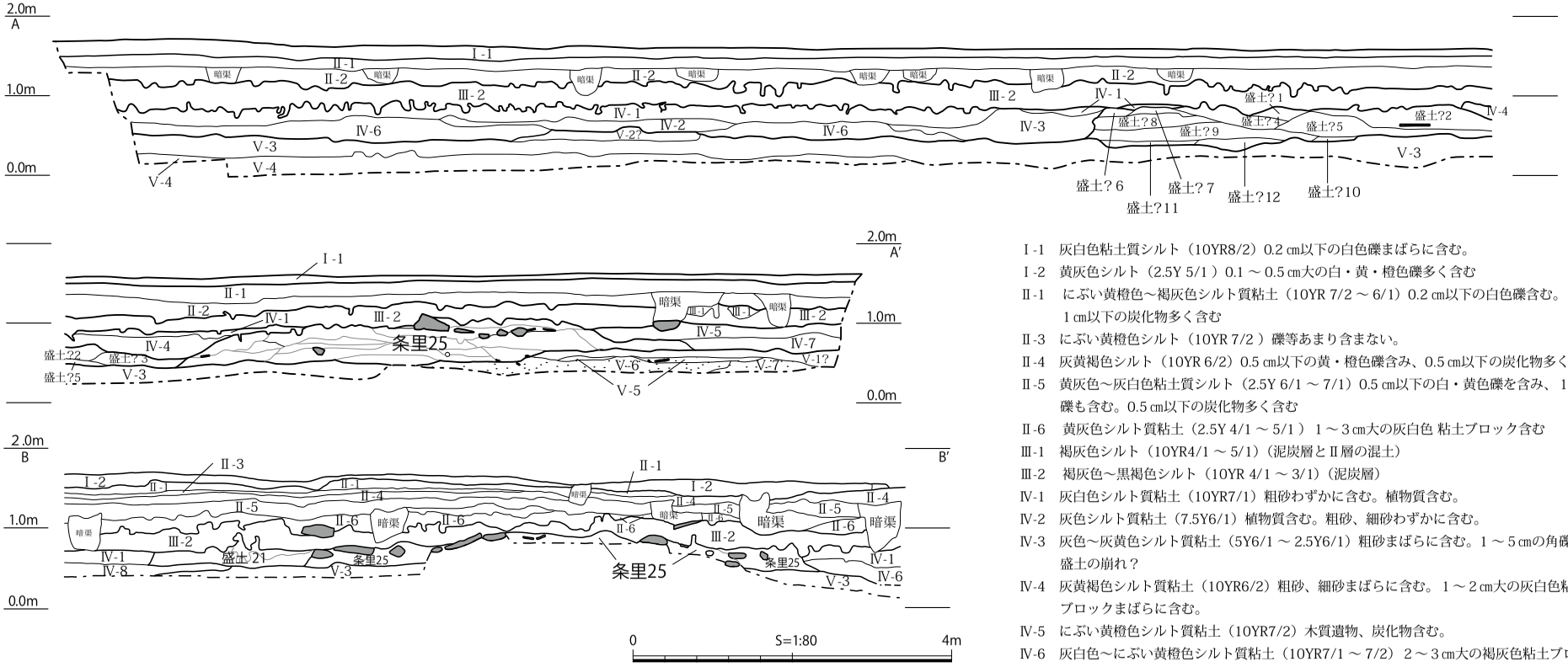
１　概要（第170図）

Ⅳ層上面では、条里26、盛土21～23の遺構を検出した(第170図)。いずれも平安時代以降の遺構と考えられる。遺構は、他の調査区でも見つかっている盛土遺構であるが、設置面はⅣ層上面であるため、比較的新しいと考えられる。後述する条里25の年代が10世紀後半と考えられるため、それよりも新しいと思われる。ただし、盛土とⅣ層の見分けが難しい部分もあり、Ⅴ層上面が構築面である可能性も否定できない。

２　条里遺構

条里26(第170・171図　ＰＬ.43－３)

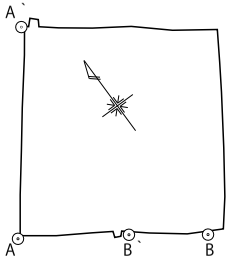
調査区南東壁中央から西方向へと伸びる条里遺構である。一町方格内(約109m四方)を12歩(約21m)に分割する条里地割と考えられる。ほぼ東西方向に伸びるが、V27グリッドの中央付近でやや北側へ方向が曲がる。さらにV27グリッド北西隅付近で二股に分かれており、条里25の盛土上面に乗りかかるようにして接続する。規模は、長さ約17m、幅2.4～3mで、盛土の厚さは10～20㎝ほどである。盛土内には粗朶や植物遺体が多く含まれる。



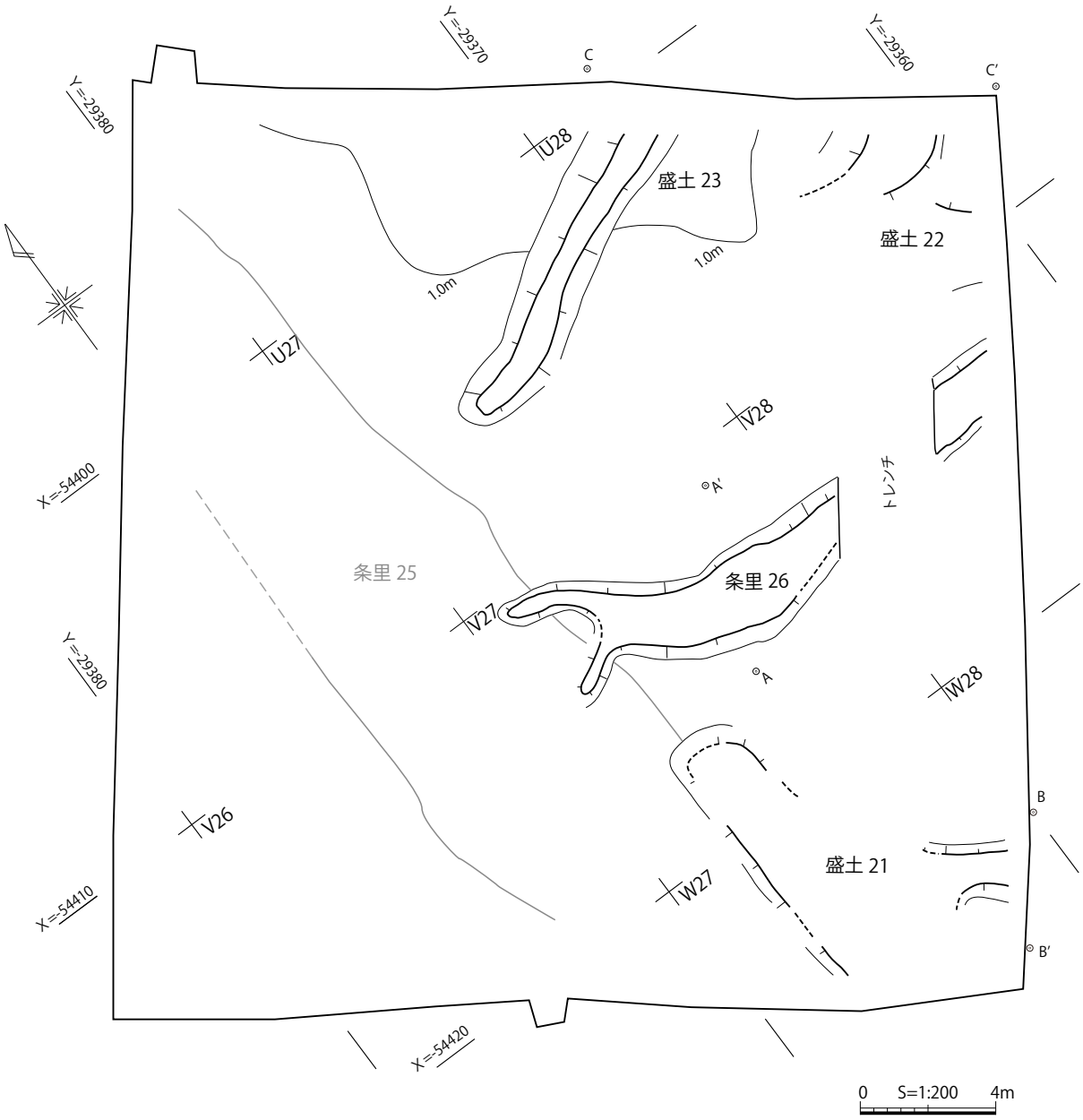
Ⅰ-1　灰白色粘土質シルト（10YR8/2）0.2 ㎝以下の白色礫まばらに含む。
Ⅰ-2　黄灰色シルト（2.5Y 5/1 ）0.1 ～ 0.5 ㎝大の白・黄・橙色礫多く含む
Ⅱ-1　にぶい黄橙色～褐灰色シルト質粘土（10YR 7/2 ～ 6/1）0.2 ㎝以下の白色礫含む。１㎝以下の炭化物多く含む
Ⅱ-3　にぶい黄橙色シルト（10YR 7/2 ）礫等あまり含まない。
Ⅱ-4　灰黄褐色シルト（10YR 6/2）0.5 ㎝以下の黄・橙色礫含み、0.5 ㎝以下の炭化物多く含む
Ⅱ-5　黄灰色～灰白色粘土質シルト（2.5Y 6/1 ～ 7/1）0.5 ㎝以下の白・黄色礫を含み、１㎝大の礫も含む。0.5 ㎝以下の炭化物多く含む
Ⅱ-6　黄灰色シルト質粘土（2.5Y 4/1 ～ 5/1 ）１～３㎝大の灰白色 粘土ブロック含む
Ⅲ-1　褐灰色シルト（10YR4/1 ～ 5/1）（泥炭層とⅡ層の混土）
Ⅲ-2　褐灰色～黒褐色シルト（10YR 4/1 ～ 3/1）（泥炭層）
Ⅳ-1　灰白色シルト質粘土（10YR7/1）粗砂わずかに含む。植物質含む。
Ⅳ-2　灰色シルト質粘土（7.5Y6/1）植物質含む。粗砂、細砂わずかに含む。
Ⅳ-3　灰色～灰黄色シルト質粘土（5Y6/1 ～ 2.5Y6/1）粗砂まばらに含む。１～５㎝の角礫含む。盛土の崩れ？
Ⅳ-4　灰黄褐色シルト質粘土（10YR6/2）粗砂、細砂まばらに含む。１～２㎝大の灰白色粘土ブロックまばらに含む。
Ⅳ-5　にぶい黄橙色シルト質粘土（10YR7/2）木質遺物、炭化物含む。
Ⅳ-6　灰白色～にぶい黄橙色シルト質粘土（10YR7/1 ～ 7/2）２～３㎝大の褐灰色粘土ブロック含む。植物質含む。

Ⅳ-7　灰白色シルト質粘土（10YR7/1）Ⅳ-5 より粘性強い。木質遺物、炭化物含む。
Ⅳ-1　灰白色シルト質粘土（10YR 7/1 ）植物質を少量含む
Ⅳ-8　灰白色シルト質粘土（10YR 8/1 ）Ⅳ-1 より粘性強い。植物質少量含む
Ⅳ-6　10YR 7/1 灰白色～ 7/2 にぶい黄橙色　シルト質粘土（Ⅳ-1 より粘性強い。２～３㎝大の褐灰色 粘土ブロック含む。
盛土？1　にぶい黄橙色粘土質シルト（10YR7/2）細砂をまばらに含む。３㎝大の灰白色粘土ブロック含む。
盛土？2　にぶい黄橙色～灰黄褐色シルト質粘土（10YR7/2 ～ 6/2）粗砂、細砂を含む。木材を含む。
盛土？3　灰黄色粗砂混じり粘土（2.5Y6/2）粗砂～細砂を多く含み、炭化物、ウツギを含む。
盛土？4　灰黄色シルト質粘土（2.5Y6/2）粗砂～細砂を含み、径１～３㎝大の木材やウツギを多く含む。
盛土？5　灰黄色シルト質粘土（2.5Y7/2）粗砂、細砂を含む。植物質少量含む。
盛土？6　灰褐色粘土質シルト（7.5YR6/2）粗砂まばらに含む。植物質、ウツギ含む。
盛土？7　にぶい黄橙色粗砂混じりシルト（10YR7/2）粗砂～細砂を非常に多く含む。径１～３㎝のウツギが密集して並んでいる。
盛土？8　灰黄褐色シルト質粘土（10YR4/2）細砂まばらに含む。径１～３㎝大の木材多く含む。
盛土？9　灰黄色～黄灰色シルト質粘土（2.5Y6/2 ～ 6/1）径１㎝ほどの木材含む。
盛土？10　褐灰色粗砂混じりシルト（10YR5/1）　５㎝大の角礫含む。
盛土？11　灰色シルト質粘土（5Y6/1）粗砂、炭化物含む。
盛土？12　灰色粗砂混じり粘土（5Y6/1）粗砂～細砂を多く含む。植物質わずかに含む。

Ⅴ-1？　灰黄色～黄灰色シルト質粘土（2.5Y6/2 ～ 6/1）粗砂まばらに含み、植物質、炭化物含む。
Ⅴ-2？　にぶい黄橙色シルト質粘土（10YR7/2）粗砂まばらに含み、植物質含む。１～３㎝大の褐灰色粘土ブロック含む。
Ⅴ-3　黄灰色シルト質粘土（2.5Y5/1 ～ 6/1）撹拌された土層。Ⅴ-2 との境で木材多く出土。
Ⅴ-4　褐灰色シルト質粘土（10YR4/1 ～ 5/1）Ⅴ-3 より粘性強い。撹拌されている土層。植物質多く含む。
Ⅴ-5　浅黄橙色～灰白色粗砂～細砂（10YR8/4 ～ 8/1）ラミナあり。イグシ等の木器含む。流路埋土？
Ⅴ-6　灰色～浅黄橙色細砂（N6/0 ～ 10YR8/4）１～３㎝のウツギや木材多く含む。斎串等の木器含む。流路埋土？
Ⅴ-7　灰色～浅黄橙色細砂～粗砂（N6/0 ～ 10YR8/4）流路埋土？



第169図　５区土層断面図



第170図　５区Ⅳ層上面遺構分布図

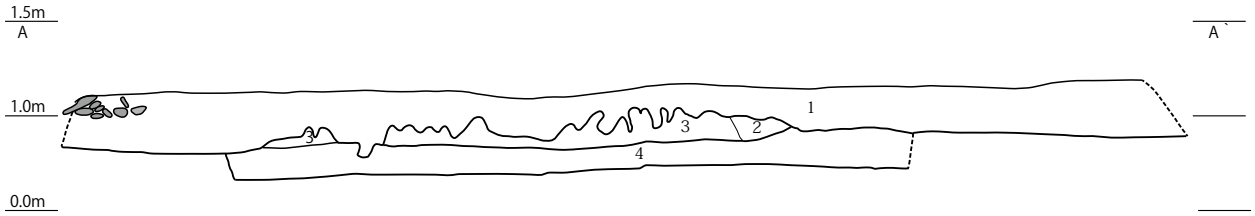
３　盛土遺構

盛土21（第170・171図）

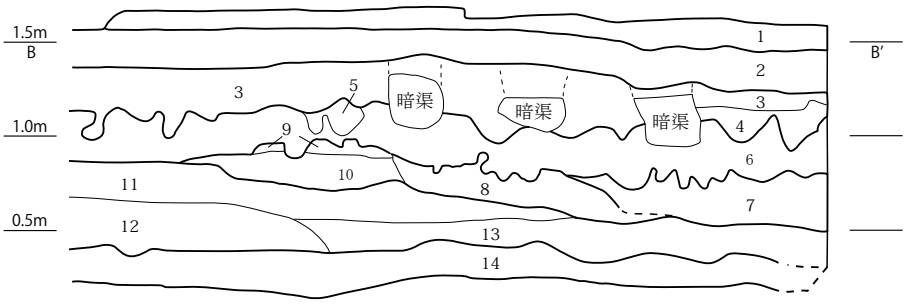
調査区南隅で検出した盛土遺構である。調査区南西壁と南東壁から派生しており、前者は条里25の東側縁に沿うような形で北方向へ伸びている。後者は南東－北西方向へ伸び、前者と合流するが、南側へ屈曲するようにもみえる。設置面はⅣ－2層上面であるが､条里25の盛土の一部の可能性もある。規模は、南北が長さ９ｍ、幅2.5ｍで、盛土の厚さは20㎝である。南東から北西方向が長さ3.2ｍ、幅2～2.5ｍで、盛土の厚さは20㎝を測る。植物遺体や粘土ブロックを多く含む盛土である。

盛土22（第170・171図）

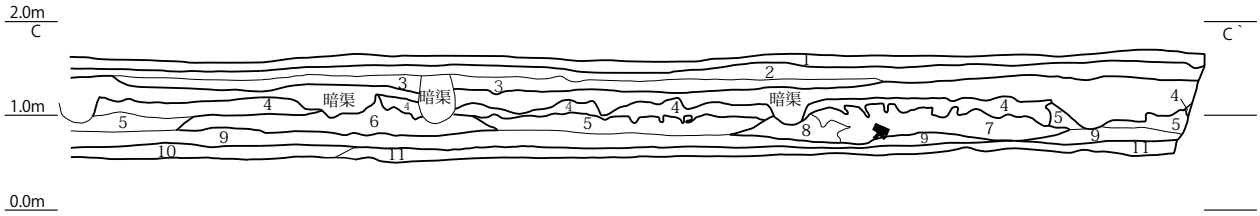
調査区東隅で検出した盛土遺構である。北東－南西方向へのびるようであるが、平面での確認が困難であり、長さ３～４ｍほどしか確認できていない。調査区北東壁と南東壁からそれぞれ盛土遺構が派生して、U28グリッド南東部分で合流するようである。幅は3～3.4ｍで、盛土の厚さは30㎝ほどである。構築面はⅣ－2層であり、盛土にはウツギや植物遺体が多く含まれる。



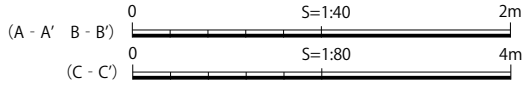
Ⅲ層　1. 褐灰色～黒褐色シルト（10YR4/1 ～ 3/1）（泥炭層）
条里 26［2. 灰色粘土質シルト（7.5Y 5/1）植物遺体を多く含む
3. 灰色～灰オリーブ粘土質シルト（7.5Y 5/1 ～ 6/2 ）植物遺体、粘土ブロック多く含む
Ⅳ層　4. 灰オリーブシルト質粘土（7.5Y 6/2）植物遺体、炭粒含む



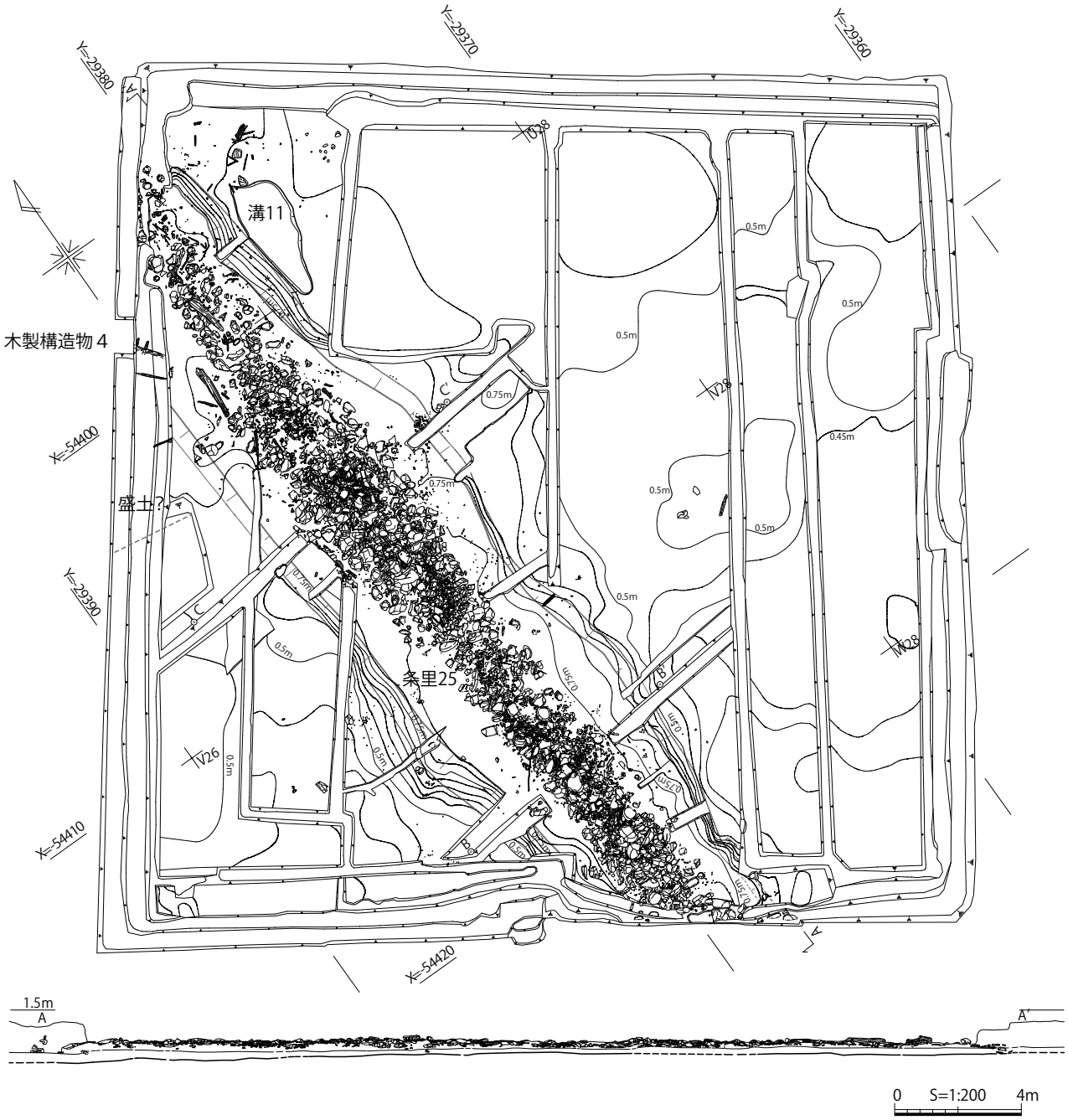
Ⅰ層　1　灰白色粘土質シルト（10YR 8/2）0.2cm 以上の白色礫まばらに含む
Ⅱ層［2　にぶい黄橙色 褐灰色シルト質粘土（10YR 7/2 ～ 6/1）0.2cm 以下の白色礫含む。 1 cm 以下の炭化物多く含む
3　灰黄褐色シルト（10YR 5/2 ）0.1 ～ 0.2cm の黄・白色礫、炭化物をまばらに含む
4　灰褐色粘土質シルト（7.5YR 5/2 ） 1 cm 以下の白・黄・橙色礫多く含む。３～５cm 大の角礫を多く含む。 1 cm 以下の炭化物多く含む
Ⅲ層［5　灰黄褐色粘土質シルト（10YR 5/2）0.1 ～ 0.2cm 大の黄色礫含む。0.5cm 以下の炭化物含む。泥炭との混土
6　褐灰色 ～黒褐色シルト（10YR 4/1 ～ 3/1）（泥炭層）
Ⅳ-1 層　7　にぶい黄橙色シルト質粘土（10YR 7/2 ）0.5cm 以下の炭化物、植物質含む
盛土 23［8　灰白色シルト質粘土（10YR 7/1）均質でない。炭化物、植物質（小型）を７層より含む
9　灰白色シルト質粘土（10YR 8/1）植物質多く含む。10 層境に炭化粒多く含む
10　にぶい黄橙色～灰黄褐色シルト質粘土（10YR 7/2 ～ 6/2 ）しまり強い。植物質を多く含む。0.5cm 以下の炭化物含む。 1 cm 大の 10YR 8/1 灰白色 粘土ブロック含む
Ⅳ-2 層　11　にぶい黄橙色シルト質粘土（10YR 7/2）木質遺物、炭化物含む
Ⅳ層？盛土？　12　灰黄色 ～黄灰色シルト質粘土（2.5Y 6/2 ～ 6/1）植物質、炭化物含む。
Ⅳ-3 層　13　灰白色シルト質粘土（10YR 7/1 ） 1 ～３cm 大の角礫、木器含む。0.5cm 以下の炭化物、わずかに粗砂含む。
Ⅴ層　14　灰白色～ 褐灰色シルト質粘土（10YR 7/1 ～ 6/1）植物質を含む



Ⅰ層　1　灰白色粘土質シルト（10YR 8/2）0.2cm 以上の白色礫まばらに含む
Ⅱ層［2　にぶい黄橙色～褐灰色シルト質粘土（10YR 7/2 ～ 6/1 ）0.2cm 以下の白色礫含む。炭化物含む
3　褐灰色粘土質シルト（10YR 5/1）0.2cm 大の白色礫、0.3cm 以上の赤・黄色礫多く含む。炭化物多く含む
Ⅲ層　4　褐灰色黒褐色シルト（10YR 4/1 ～ 3/1 ）（泥炭層）
Ⅳ-1 層　5　にぶい黄橙色シルト質粘土（10YR 7/2 ）木質遺物含む。炭化物含む
盛土 22　6　灰褐色～褐灰色シルト質粘土（7.5Y 6/2 ～ 6/1）植物質多く含み、0.5cm 以下の炭化物含む
盛土 23［7　にぶい黄褐色粘土質シルト（10YR 5/3 ） 1 cm 大の炭化物含む
8　灰褐色粘土質シルト（7.5YR 5/2 ）径 1 cm 以下のウツギ、 1 cm 以上の木材多く含む。径 1 cm 大の灰白色粘土ブロック含む。全体的に植物質含む
Ⅳ-2 層　9　灰白色シルト質粘土（10YR 7/1）５層より粘性強い。木質遺物、炭化物含む
Ⅴ層［10　灰黄色～黄灰色シルト質粘土（2.5Y 6/2 ～ 6/1）粗砂をまばらに含み、植物質を含む。0.5cm 以下の炭化物含む。層東方ほど層厚がうすく、砂の含みも少なくなる
11　にぶい黄橙色シルト質粘土（10YR 6/3 ）10 層よりシルト質強く、粗砂をほとんど含まない。炭化物や植物質含む



第171図　５区盛土21 ～ 23、26土層断面図

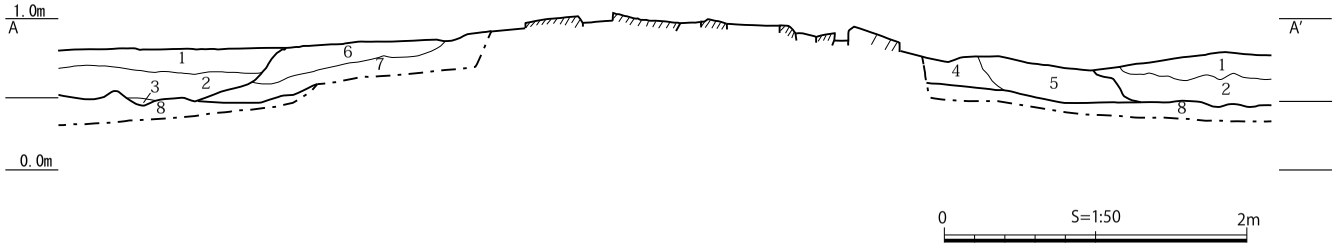


第172図　５区Ⅴ層上面遺構分布図

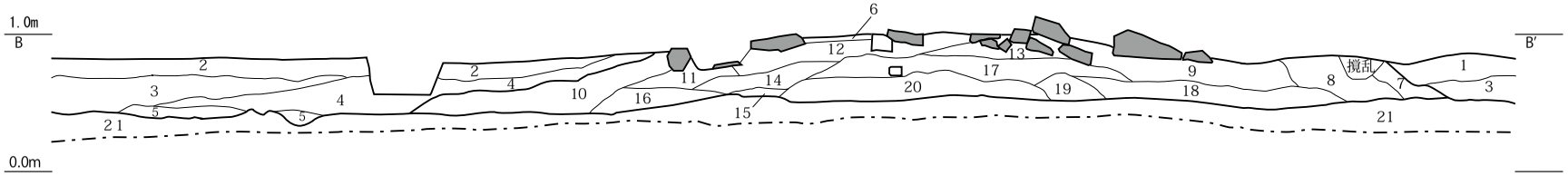
盛土内出土の粗朶（ウツギ）の放射性炭素年代測定では、２σ暦年代範囲で766calAD － 886 calAD（87.3%）の結果を得た。ただし、盛土内で木材が密集していたり並べられた状況での出土でないため、盛土構築の際にⅣ層以下の土に含まれていたものが混入した可能性が高い。

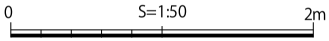
盛土23（第170・171図）

調査区北東壁中央から調査区中央あたりまで、南西方向に伸びる盛土遺構である。長さ11m、幅２～ 2.5m、盛土の厚さは30㎝を測る。条里25とは直接接続しない。構築面は条里22と同じくⅣ－２層である。盛土内には植物遺体を多く含んでいる。



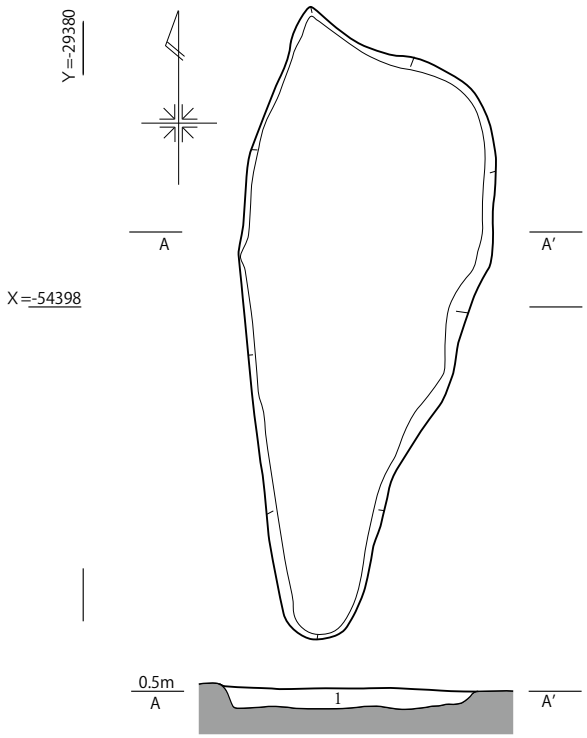
Ⅳ－１	1	灰黄褐色 粘土質シルト（10YR 6/2） 0.5ｃｍ大の炭化物５Y6/2灰オリーブ色のブロック土含む
Ⅳ－２	2	灰黄褐色～にぶい黄橙色シルト質粘土（10YR 6/2～10YR7/2） 植物質含む 0.5cm大の炭化物含む 5Y6/2灰オリーブ色のブロック土を下方に多く含む 細砂含む
Ⅳ－3?	3	にぶい黄橙色(10YR７/3)とオリーブ灰色(2.5GY６/1)の混土 0.5ｃｍ以下の炭化物含む 細砂をわずかに含む
条里 25	4	灰黄褐色 粘土質シルト（10YR 6/2） 植物質を多く含み径１ｃｍ以下のウツギや木材含む 細砂含む
	5	灰黄色 粘土質シルト（2.5Y７/２） 植物質を多く含み 細砂も含む
	6	灰白色 ～にぶい黄橙色 粘土質シルト（10YR７/1～７/2）植物質を多く含む 小礫（２～３ｍｍ大）をまばらに含む しまり強い
	7	灰白色～ 灰黄色 粘土質シルト(10YR７/１～2.5Y７/２）植物質を多く含む 6層より粘性あり しまり強い
Ⅴ－１	8	灰黄色 シルト質粘土（2.5Y 6/2） 0.5ｃｍ以下の炭化物や小型の植物質を含む





Ⅳ－１	1	灰黄褐色粘土質シルト（10YR6/２）0.5㎝大の炭化物含む。５Y6/2灰オリーブ色のブロック土含む。
	2	１層とはぼ同じだが粘性強い
Ⅳ－２	3	灰黄褐色～にぶい黄橙色シルト質粘土（10YR6/2～10YR7/2）植物質含む。0.5㎝大の炭化物含む。
Ⅳ－３	4	灰黄褐色シルト質粘土（10YR6/2）３よりも細砂多く含む。植物遺体含む。盛土のくずれ土か?
Ⅳ－3?	5	にぶい黄橙色（10YR7/3）とオリーブ灰色（2.5GY6/1）の混土 0.5㎝以下の炭化物含む。細砂をわずかに含む。
条里 25	6	灰黄褐色粘土質シルト（10YR6/2）２層と混じっており、植物質含む。
	7	にぶい黄橙色粘土質シルト（10YR6/3）径１㎝ほどの木材少量含む。
	8	灰黄褐色粘土質シルト（10YR5/2）７層よりシルト質強い。径１㎝ほどの木材、ウツギ含む。細砂含む。１㎝以下の炭化物含む。
	9	暗灰黄色シルト質粘土（2.5Y5/2）径１～３㎝大の木材、ウツギを多く含む。人頭大~拳大の礫含む。細砂含む。木材は条里方向に平行・直角方向に向く２種あり。
	10	にぶい黄橙色粘土質シルト（10YR6/3）細砂含む。径１㎝以下のウツギ、径２～３㎝大の木材含む。
	11	灰オリーブ色粘土質シルト（５Y6/2）細砂を10層より多く含む。径１㎝以下のウツギ、２～３㎝の角材含む。１㎝大の炭化物含む。
	12	灰黄色シルト質細砂（2.5Y7/2）細砂を多く含む。径0.5㎝大のウツギ、径２～３㎝大の木材を多く含む。南北方向に向く木材が多い。
	13	灰黄褐色粘土質シルト（10YR5/2）径２㎝大の木材を含む。
	14	灰オリーブ色～灰白色粘土質シルト（５Y6/2～５Y7/2） 径１~５㎝丸太材を多く含む。板石含む。15層より多く細砂含む。
	15	灰白色粘土質シルト（５Y7/2）16層よりしまり強い。径１㎝ほどの木材少量含む。
	16	灰白色粘土質シルト（５Y7/2）11層より粘性あり。細砂含む。2.5Y6/1オリーブ灰色の粘土ブロック含む。
	17	暗灰黄色灰黄色シルト質粘土（2.5Y5/2～5/1） 径１㎝以下のウツギ、径３㎝ほどの木材含む。板材や細砂含む。20層より多く2.5GY6/1オリーブ灰色のブロック土含む。
	18	暗灰黄色シルト質粘土（2.5Y5/2～4/2）中央部ほど暗色。径１㎝大の木材少量含む。細砂をわずかに含む。
	19	灰黄色シルト質粘土（2.5Y6/2）わずかに細砂を含む。
	20	黄灰色シルト質粘土（2.5Y4/1）17層より粘性弱い。細砂含む。径１㎝以下のウツギ、径３㎝ほどの木材含む。2.5GY6/1オリーブ灰色のブロック土含む。
Ⅴ－１	21	オリーブ灰色シルト質粘土（2.5GY6/1）植物質多く含む。0.5㎝以下の炭化物多く含む。遺構埋土の可能性あり。

第173図　５区条里25土層断面図



第174図　５区溝11

第３項　Ｖ層上面の遺構（飛鳥時代～平安時代）

１　概要（第172図）

Ｖ層上面では、条里25と溝11を検出した。また、条里25に接続する盛土遺構の可能性をもつものも検出した（第172図）。いずれも奈良時代から平安時代の遺構である。条里25は他の調査区でも見つかっているＶ層上面検出の条里遺構と同様のものであり、一町方格（約109m四方）を区切る大条里遺構となる。規模も大きく、上面に石敷が認められる。

２　条里遺構

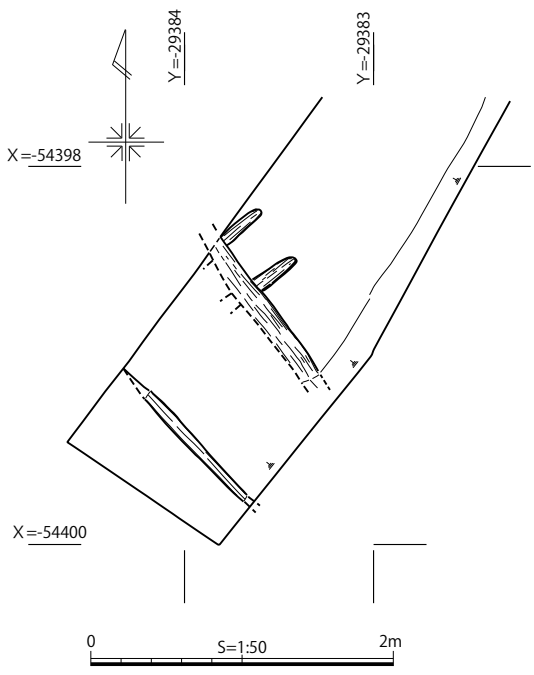
条里25（第172・173図　巻頭図版５・ＰＬ.41・42・43－１,２）

調査区の南東壁中央から北西壁北隅にかけて、ほぼ南北方向にのびる条里遺構である。調査区内での規模は、長さ29m、基底部幅６～７ｍ、高さ30～50㎝を測る。条里中央の幅２～４ｍの範囲で人頭大～２㎝大の礫が密集して帯状に南北方向へ伸びている。礫は丘陵斜面で散見される板状安山岩である。盛土上面にまず２～３㎝大の小礫が敷き詰められ、その上に人頭大の礫を設置している。またこの人頭大の礫の間に充填するように小礫が敷き詰められている箇所もある。また北側では、長さ１～２ｍほどの木材が盛土上面もしくは盛土内で散見され、それらは南北方向へ長軸が向くものが多い。遺構上面は、標高1.1～１ｍほどで、南北で標高差はほとんどない。

条里遺構の盛土はＶ層上面から構築されている。土層断面からみると、最初に中央部分に土を盛っていき、ある程度盛った後、両側面にさらに土を盛って成形している。また、盛土上層では、多量の砂を混入させたり、丸太材や角材、木製品等（W517、W1430）を入れたり、粗朶を束状にして盛土の上面に敷くなどして、その上に礫を設置している。

また、条里25の西側、U26グリッドでは盛土遺構の可能性のある箇所が見つかっている。条里25の土層断面Ｃ－Ｃ’ラインより北側で西方向へコンタラインが伸び、この箇所は、北西壁の土層断面でも盛土の可能性をもつ土層が確認できているが、平面で明確に検出できず、遺構と断定できていない。もしあるとすれば、コンタラインなどから条里25に接続する西方向へのびる盛土遺構であり、土層断面から、条里25と同時もしくは後につくられたものである。若干、位置がずれるが、一町方格内（約109m四方）を12歩（約21m）に分割する条里遺構の可能性がある。

条里25の築造された年代については、北西壁の盛土内から採取した２点の放射性炭素年代測定で、２σ暦年代範囲で887calAD－987 calAD（95.4％）、889calAD－994 calAD（95.4％）の結果を得た。２点とも盛土内で並べて敷き詰められた粗朶から採取したものであり、築造年代を示していると考えら



第175図　５区木造構造物４

れる。盛土内、または盛土上面からも土器が出土しており(542 ～ 544)、これらからも、概ね10世紀後半の構築と考えられる。また、北西壁で確認した盛土遺構の可能性のあるものについても、北西壁内で密集した粗朶(ウツギ)１点で放射性炭素年代測定を行っている。２σ暦年代範囲で876calAD－983 calAD(94.7％)の結果を得ており、条里25と同時期の築造と考えられる。

なお、条里 25 は、調査区四周や土層断面観察用の断ち割り部分以外は、盛土上面で発掘調査を止めており、最終的に、盛土上面を保護して埋め戻している。

２　溝

溝11(第174図　PL.41－1)

調査区北側の条里25のすぐ東脇に位置する。条里25に沿っている南北に長い溝状遺構で、長さ4.2m、幅1.7m、深さ10㎝を測る。当初条里25を道路状遺構と考えていたため、側溝の可能性も考えたが、すぐ脇に接していることや深さがかなり浅いため、水溜り状のものの可能性が高い。

第４項　Ⅴ層以下の遺構（飛鳥時代以前）

１　木造構造物

木造構造物４(第175図　ＰＬ.41－１)

調査区北西壁の幅約1.3mの断ち割り内で検出した。U26グリッドに位置し、南北２m、東西1.5mほどの範囲で組み合った木材を確認している。北側では幅0.1mの板材を使った杭が、２本斜めに打ち込まれ、そこに南東－北西方向に長さ1.5m以上、幅0.1m以上の板材が横たわっており、さらにそこから南西へ１m離れた場所でも、長さ１m以上、幅0.1m以下の角材が同じような方向に横たわっていた。これらの木材はⅤ－3層より出土しており、この位置以南にあった河道のために設置された護岸施設等の可能性が考えられる。

最終的にこれらの木材は取り上げず、保護をして埋め戻している。

第13節　４区・Ｐ９区の調査

第１項　調査区の概要

１　地形と土層堆積（第176図）

Ｐ９区は青谷横木遺跡のやや西寄りに位置する。調査年度は平成27年度で、調査面積は278.6㎡である。調査区背後の丘陵斜面と平野部分とを調査範囲とする。平成25年度に実施した４区の西側半分と調査範囲が重複する。調査区の丘陵側は石積遺構により、一段高い平坦地が造成されている。４区は丘陵際に設定された調査区で、石積２の平坦面に位置する。調査は旧表土を人力により掘削し、下面の状況を確認して終了した。石積２より平野側の現況はほぼ平坦であったが、用水路の影響により低湿な状態であった。山側の石積みの調査後は、重機による表土掘削を実施した。Ⅳ層以降は人力による掘削を基本としたが、山側の埋土が礫層であったため、調査の円滑化を図り小型重機を併用して調査した。Ⅳ層以下は丘陵裾部から平野部へ向けてなだらかに下がっていた。調査は標高－0.8m付近まで行った。

Ⅰ～Ⅱ層は近代までの造成土である。前述のように山側に石積２が構築されている。Ⅲ層は調査区の中央付近まで確認した。Ⅳ層は調査区内ではほぼ確認できておらず、西壁の断面中にて僅かに認識できた。Ⅴ層は平野側の細砂～シルトで構成された埋土と、丘陵を起源とした礫層に大別できる。Ⅵ層は層厚が約10cm程度しかなく、旧河道の影響もあり確認できる範囲は限られる。Ⅵ層もⅢ層と同様に山側へ向けて層が収斂していくものと推測される。Ⅶ層はシルトを主とした堆積である。灰白色のブロックの有無により２層に細分している。Ⅶ－１層の灰白色粘土ブロックは平面的に広がり、人為層である可能性も残る。Ⅷ層は植物の未分解物を多量に含む層でオリーブ褐色を呈する。Ⅷ層は植物質の多寡や埋土のしまりから４層に細分している。

Ⅸ層は丘陵裾から延びる礫層と水成堆積と推定される層とに大別できる。特に平野側のⅨ層は貝の密集度や土質により、９層に細分している。貝の密集する層位は海水あるいは汽水による環境が想定でき、貝を含まない層も土質がシルト質であることから緩やかな滞水環境であった可能性が高い。Ⅸ－８層は丘陵裾から延びる亜円礫を主体とした層である。本層は平野側に沈み込んでおり、他のⅨ層細分層も上層へ堆積していくことから、日置川下流域の基盤となる層の一部と推定される。

２　遺構の概要

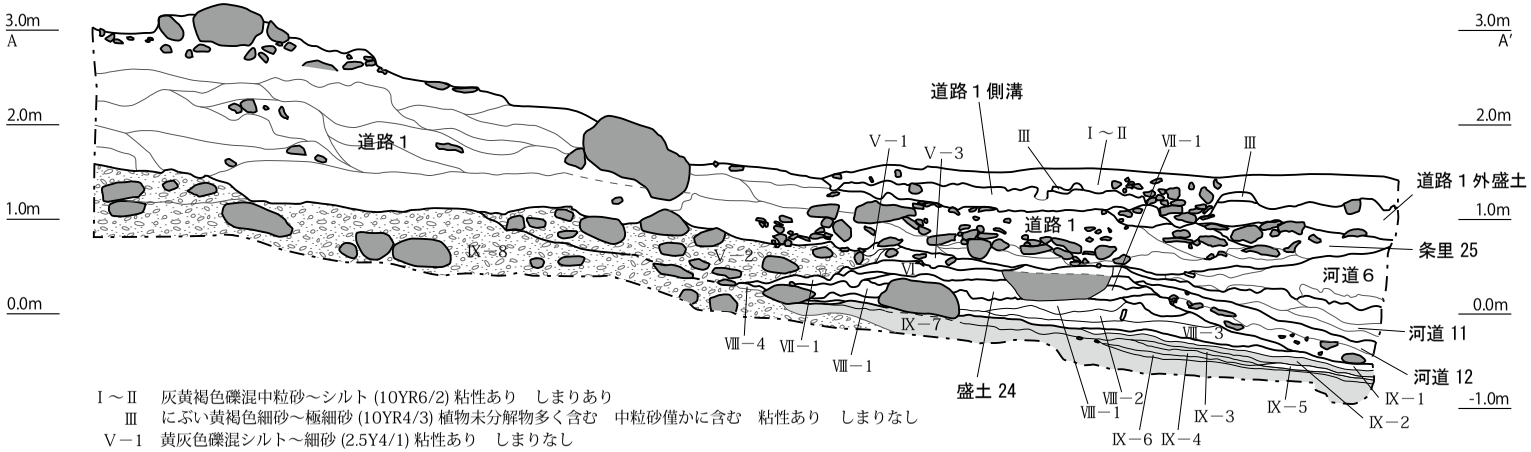
本調査区では中世から近世、飛鳥時代から平安時代、古墳時代後期から飛鳥時代、古墳時代、弥生時代の遺構、遺物を確認した。中世から近世期の遺構は石積２である。古代の遺構は、道路１、道路１外盛土、条里25、河道10、河道６を確認した。古墳時代には河道11を確認し、河道11の前身となる河道12も確認している。Ⅷ層上面では自然河道の護岸状施設として24盛土を検出している。よって河道11の埋没頃から積極的な土地利用がみられ、道路や条里といった盛土遺構が構築されるようになる。

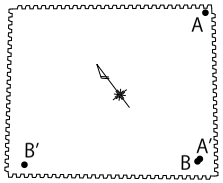
第２項　Ⅱ層相当の遺構

１　石積遺構

石積２（第177図　ＰＬ.44－１）

本調査区の山際と平野部分を画するように構築されている。調査区の北半を東西方向に延伸している。西側のＰ８区では石積みは確認できないが、削平されたと考えられる。東側にも延びるようであ

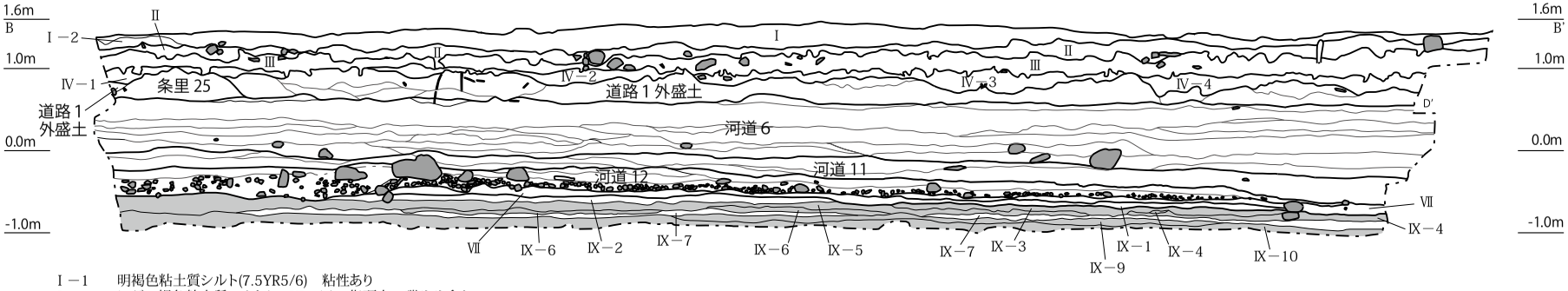




P9 区模式図

Ⅰ～Ⅱ　灰黄褐色礫混中粒砂～シルト (10YR6/2) 粘性あり　しまりあり
Ⅲ　にぶい黄褐色細砂～極細砂 (10YR4/3) 植物未分解物多く含む　中粒砂僅かに含む　粘性あり　しまりなし
Ⅴ－1　黄灰色礫混シルト～細砂 (2.5Y4/1) 粘性あり　しまりなし
Ⅴ－2　褐色シルト～細砂混礫 (2.5Y3/1) 粘性あり　しまりなし
Ⅴ－3　褐色細砂～中粒砂 (10YR3/2) 粘性あり　しまりなし
Ⅵ　褐灰色～灰黄褐色礫まじりシルト(10YR4/1～10YR5/2)粘性強い　しまりやや弱い
Ⅶ－1　灰黄褐色粘土質シルト(10YR5/2)灰白色粘土ブロック多含む　粘性強い　しまりやや弱い
Ⅶ－2　灰黄褐色～褐灰色粘土質シルト(10YR5/2～2.5Y4/1)　粘性強い　しまりやや弱い
Ⅷ－1　暗灰黄色粘土質シルト(2.5Y4/2)粘性強。しまり弱。
Ⅷ－2　オリーブ褐色-暗灰黄色粘土質シルト(2.5Y4/3-2.5Y4/2)粘性強。しまり弱。植物遺体多含。
Ⅷ－3　灰オリーブ色粘土質シルト(5Y5/2-5Y4/2)粘性強。しまり弱。植物遺体多含。
Ⅷ－4　オリーブ褐色粘土質シルト(2.5Y4/3)粘性強。しまり弱。山土か。

Ⅸ－1　黒褐色～暗灰黄色シルト(2.5Y3/2-2.5Y4/2)　扁平な牡蠣を密に含。人為層の可能性あり。
Ⅸ－2　オリーブ黒色シルト(5Y3/1)粘性強。しまり弱。
Ⅸ－3　オリーブ黒色シルト(5Y3/2)有機質腐食堆積層。シルトやや貝A層より多含。(※割合多)
Ⅸ－4　灰褐色粘土質シルト(7.5YR4/2)粘性強。しまり弱。
Ⅸ－5　オリーブ黒色シルト(5Y3/2)(貝B層直上層：貝＋シルトが１：１)
Ⅸ－6　オリーブ黒色シルト(5Y3/1)粘性強。しまり弱。
Ⅸ－7　オリーブ色黒色シルト(5Y3/1)粘性強。しまり弱。ドブガイ・サルボウの多含。山側より卵大礫多含。
Ⅸ－8　青灰色礫層(5BG5/1)粘性なし。しまりあり。

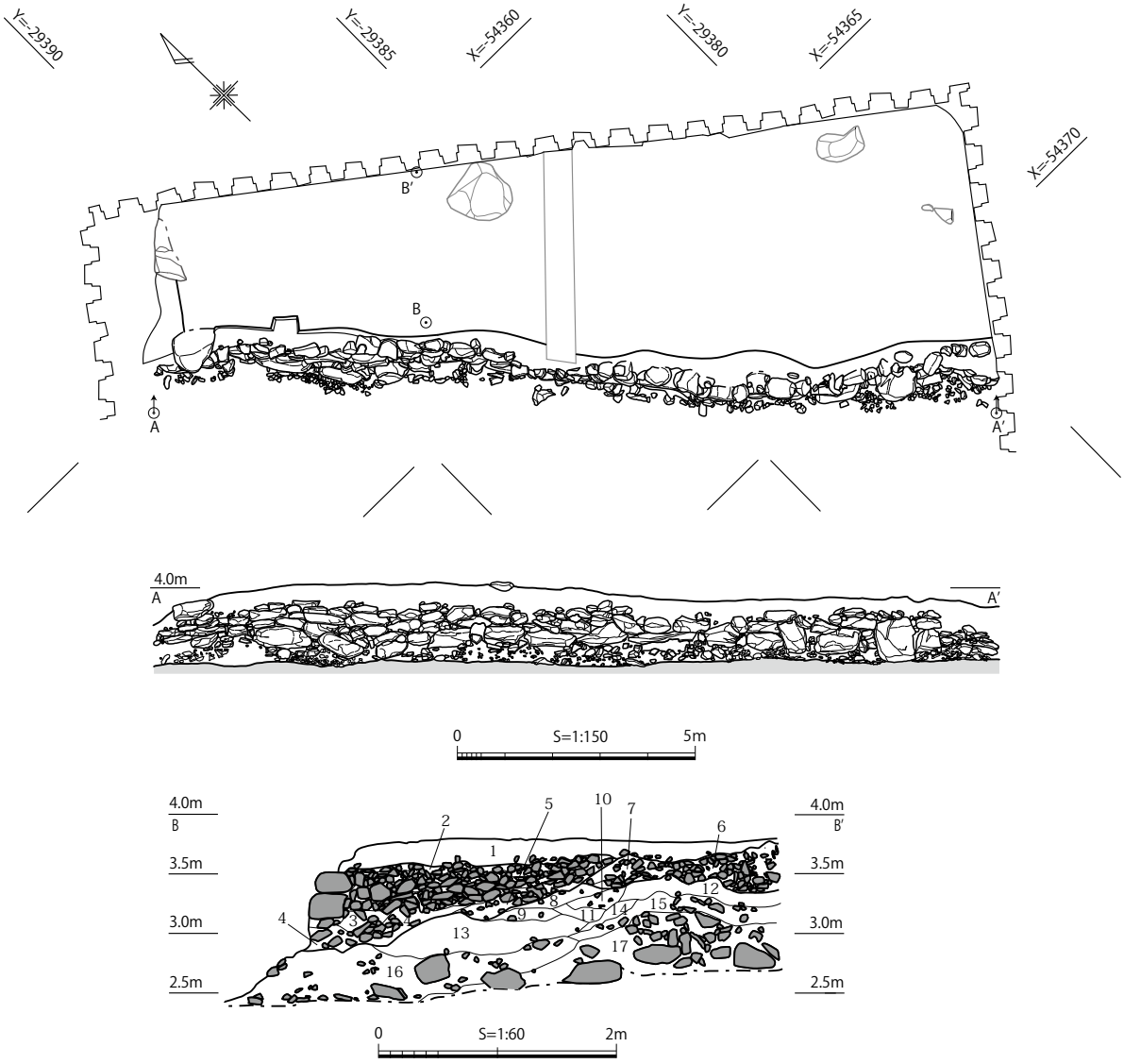


Ⅰ－1　明褐色粘土質シルト(7.5YR5/6)　粘性あり
Ⅰ－2　にぶい褐色粘土質シルト(7.5YR5/4)　指頭大の礫やや含む
Ⅱ　褐灰色粘土質シルト(7.5YR4/1)　指頭大の礫やや含む
Ⅲ　黒褐色粘土質シルト(10YR3/1-7.5YR3/1)植物遺体多く含む　粘性強い　しまり弱い
Ⅳ－1　黄灰色粘土質シルト(2.5Y4/1)
Ⅳ－2　暗灰黄色粘土質シルト(2.5Y5/2)　粘性強い　しまり下層より弱い
Ⅳ－3　黄褐色粘土質シルト(2.5Y5/3)粘性やや強。粗朶含む。
Ⅳ－4　暗灰黄色粘土質シルト(2.5Y4/2)　ややしまる　粗朶・草本類はⅣ-3層より少ない
Ⅶ　灰オリーブ色粘土質シルト (5Y4/2) 植物遺体ややや含む　粘性強い　しまり弱い
Ⅸ－1　暗灰黄色粘土質シルト (2.5Y5/2)　粘性強い　しまり弱い　にぶい黄褐色シルトが不定形に堆積

Ⅸ－2　オリーブ黒色シルト (5Y3/1)
Ⅸ－3　オリーブ黒色シルト (5Y4/1-5Y3/1)　粘性強い　しまり弱い　有機質が一部腐植して堆積
Ⅸ－4　黒褐色有機質腐食層 (貝の堆積は少ない。)
Ⅸ－5　オリーブ黒色シルト (5Y3/2)　粘性強い　しまり弱い　貝は上層より割合減じる
Ⅸ－6　オリーブ黒色シルト (5Y3/1) 粘性強い　しまり弱い
Ⅸ－7　オリーブ黒色シルト (5Y3/2) 貝密に含む
Ⅸ－9　灰褐色粘土質シルト (7.5YR4/2)　粘性強い　しまり弱い
Ⅸ－10　オリーブ黒色シルト (5Y3/1) 中型の貝類密に含む　粘性弱い　しまり弱い

0　S=1:80　2m

第176図　Ｐ９区土層断面図



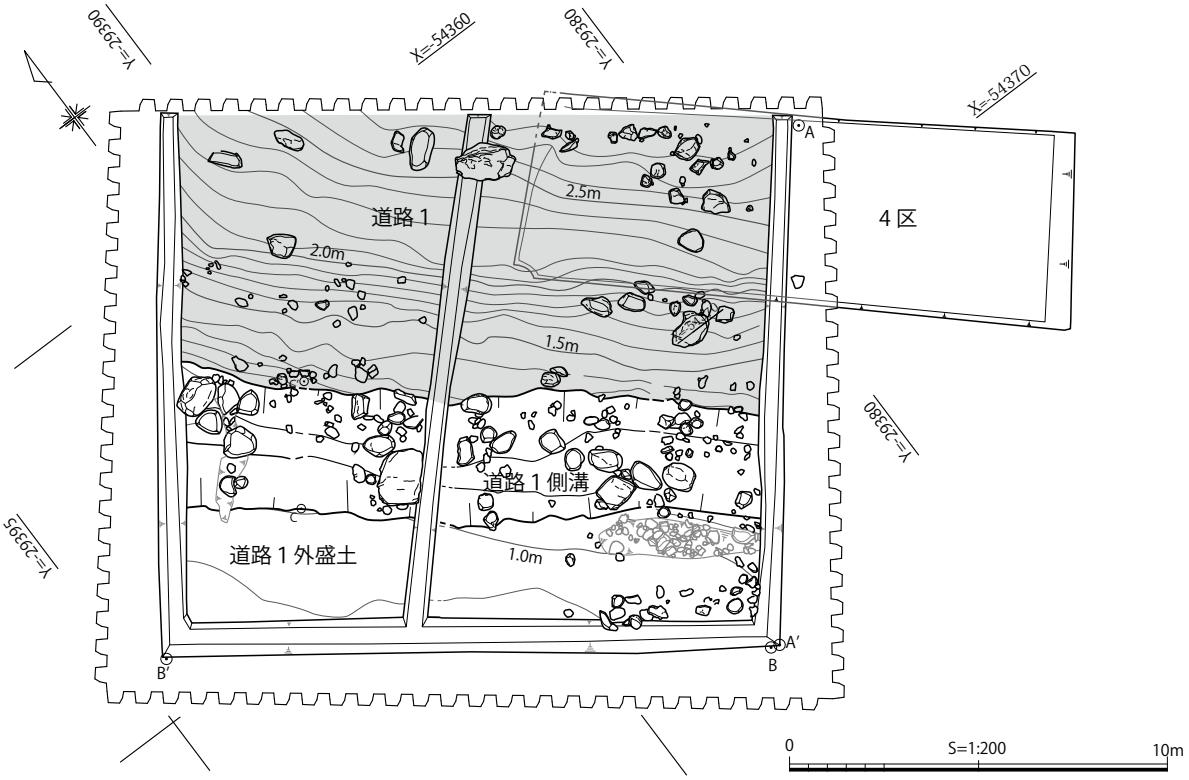
1　にぶい黄褐色粘土質シルト (10YR5/4)　φ5mm 程度の粘土ブロック含む　粘性あり　しまり強い
2　にぶい黄褐色シルト含む礫層 (10YR5/4)
3　にぶい黄褐色礫まじりシルト (10YR4/3)　しまりやや強い　粘性弱い
4　にぶい黄褐色礫まじりシルト (10YR5/4)　しまりやや強い　粘性弱い
5　にぶい黄褐色礫まじりシルト (10YR5/4)　黄褐色粘土ブロック多く含む　しまりやや強い。
6　にぶい黄褐色シルトまじり礫層 (10YR4/3)　しまりやや強い　粘性弱い。
7　にぶい褐色礫まじりシルト (7.5YR5/3)　しまりあり　粘性弱い
8　にぶい黄褐色シルト (10YR5/4)　しまりあり　粘性やや強い
9　にぶい褐色シルト (7.5YR5/3)　しまり強い　粘性あり
10　にぶい黄褐色シルト (10YR5/4)　しまりあり　粘性あり
11　にぶい黄褐色シルト (10YR5/4)　しまりあり　粘性弱い
12　にぶい褐色粘土質シルト (7.5YR5/4)　しまりあり　粘性弱い
13　にぶい褐色～明褐色粘土質シルト (7.5YR5/4 ～ 5/6)　　しまり強い　粘性あり
14　にぶい黄褐色粘土質シルト (10YR5/4)
15　にぶい褐色粘土質シルト (7.5YR5/4 ～ 5/6)
16　にぶい褐色粘土質シルトまじり礫層 (7.5YR5/4)　しまりあり　粘性弱い
17　にぶい黄褐色シルトまじり礫層 (10YR5/4)　しまりあり　粘性弱い

第177図　Ｐ９区石積２

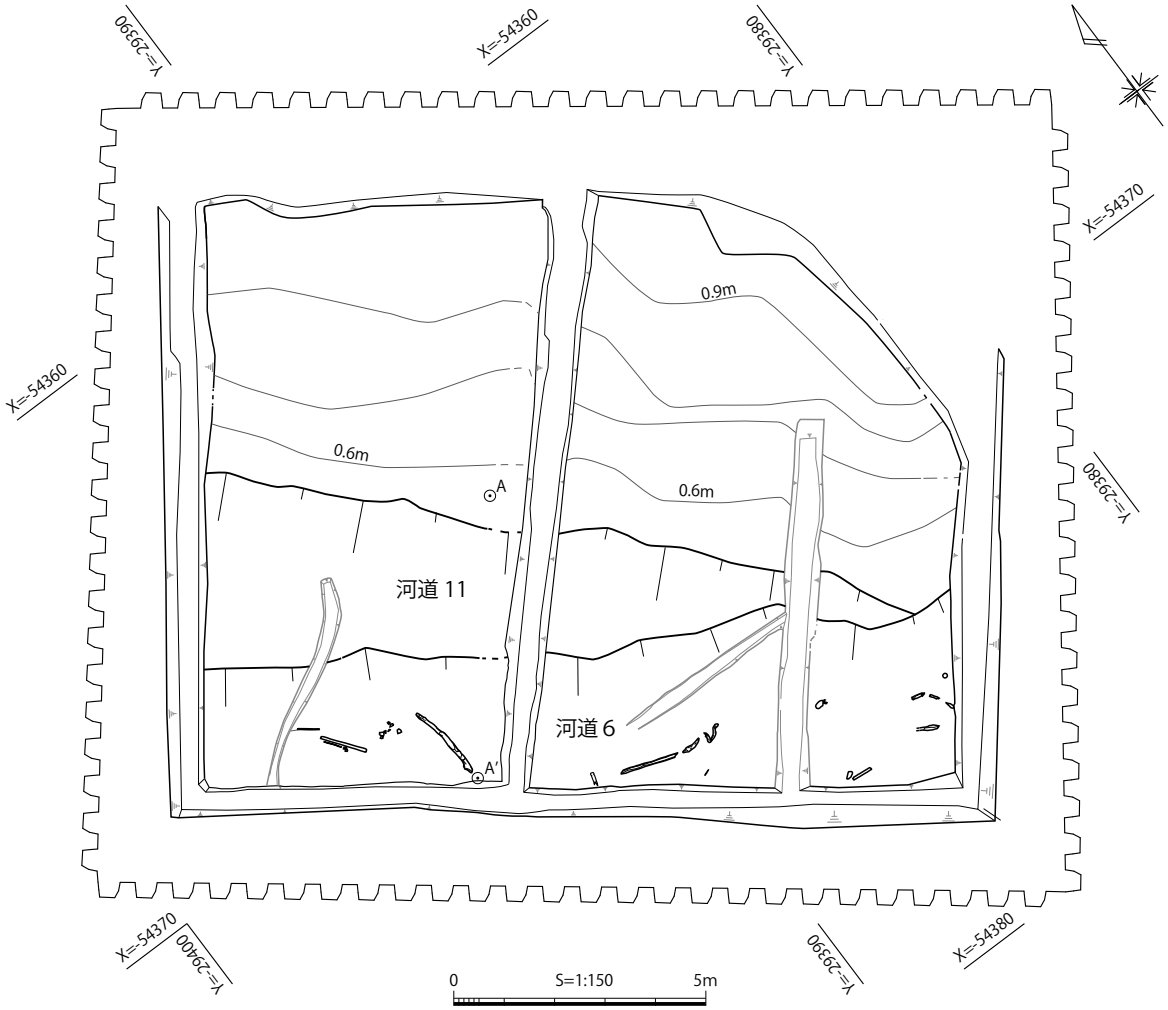
るが、調査地の範囲外となる。全長約12mを検出した。石の長辺を面として積まれている。石材の短辺は10cm程度のものが多い。東側では、長辺約90cmの石材を立てている箇所もみられた。石材は、長尾鼻丘陵斜面から産出される板状安山岩である。石積２は裏込めに円礫を利用しており、石積みの近辺にはやや大ぶりの礫を用いている。裏込め内での遺物は出土しなかった。

西側では右肩下がりに、中央部では左肩下がりに落とし込んで積まれることから、近代以降に築かれた可能性が高く、改修された可能性も残る。

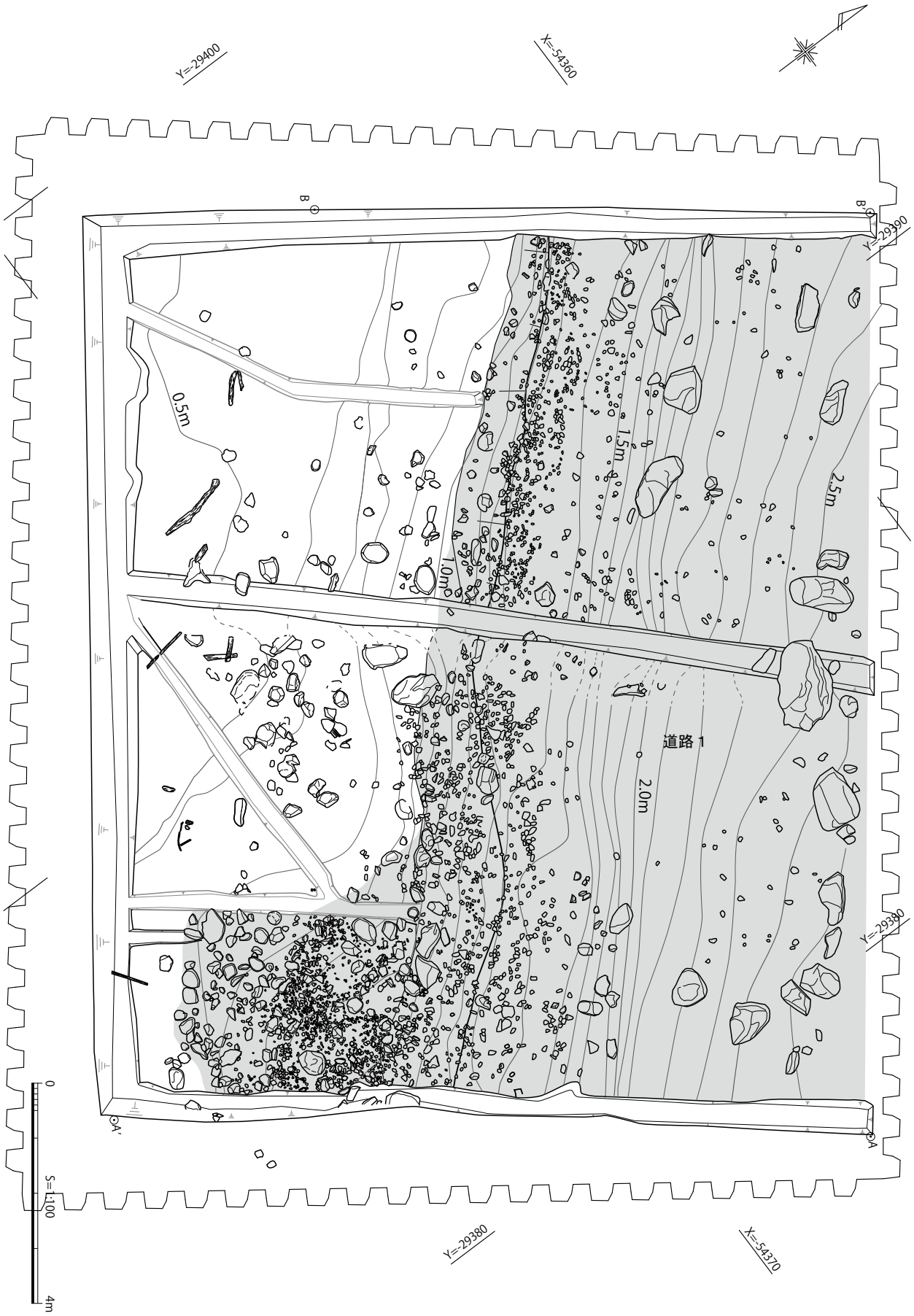
よって、時期は不明確ながら近世から近代頃と推定される。



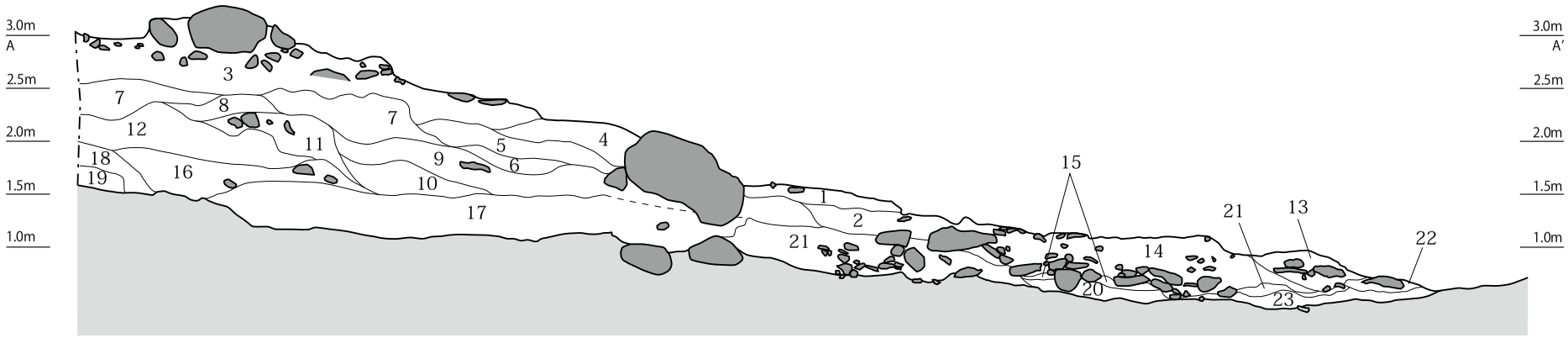
第178図　４区・Ｐ９区Ⅴ層上面遺構分布図（１）



第179図　Ｐ９区Ⅴ層上面遺構分布図（２）



第180図　Ｐ９区道路１

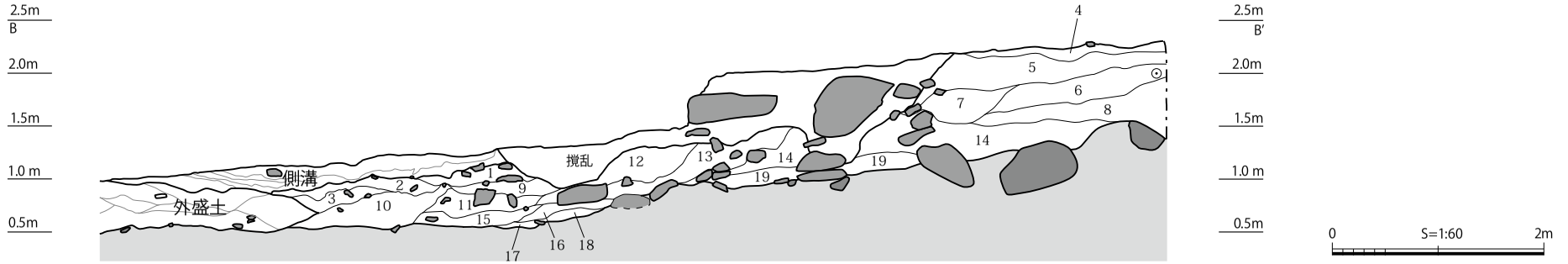


改修土①
1　黒褐色礫混じり粘土質シルト層 (10YR3/1) 粘性やや強　よくしまる　上の撹乱の削平を受ける　修復層　指頭大の礫含む
2　灰黄褐色シルト混じり礫層 (10YR5/2) 粘性やや強　よくしまる　修復層　指頭大の礫密に含む
3　褐灰色シルトまじり指頭大礫層(7.5YR4/1)5cm大の亜角礫を密に含む
4　褐灰色シルトまじり礫層(10YR5/1)5-10cm大の角礫を密に含む

改修土①
5　褐灰色シルトまじり礫層(7.5YR5/1)２層よりしまる　明赤褐色(5YR5/8)の鉄分沈着層あり　5cm大の角礫多く含む
6　褐灰色シルトまじり礫層(10YR5/1)３層と同一単位　下層との漸移層指頭大の礫やや多く含む
7　にぶい黄褐色シルトまじり礫層(10YR5/3)5cm大の角礫密に含む
8　明褐色シルトまじり礫層(7.5YR5/6)5cm大の角礫密に含む
9　にぶい黄褐色シルトまじり礫層(10YR5/4)3-10cm大の角礫密に含む
10　灰黄色粘土質シルトまじり礫層(10YR6/2) φ-20cm大の角礫密に含む　大型の礫が含まれる
11　灰褐色礫～粗砂 (7.5YR5/2) 粘性なし　ややしまる　細砂混　人頭大の礫多く含む
12　赤灰色 (2.5YR 4/1) 細砂混礫層

改修土②
13　灰褐色細砂砂 (7.5YR5/2) 粘性なし　ややしまる　粗砂～中粒砂混　人頭大の礫含む
14　灰褐色礫～粗砂 (7.5YR5/2) 粘性なし　ややしまる　中粒砂混　人頭大の礫含む
15　灰黄褐色細砂～中粒砂 (2.5Y5/2) 粘性弱い　しまりあり　礫わずかに含む
16　明黄褐色 (10YR 7/6) 細砂混礫層　しまりあり　粘性あり
17　灰色 (N51) 細砂混礫層　しまりあり　粘性あり
18　明黄褐色シルト混じり礫層 (10YR 7/6)　しまりあり　粘性あり
19　明黄褐色礫層 (10YR 7/6)　しまりあり　粘性あり

構築当初土
20　黄灰色中粒砂混細砂～極細砂 (2.5Y4/1) 粘性あり　ややしまる
21　にぶい黄色中粒砂混細砂 (2.5Y6/3) 粘性なし　しまりあり
22　灰黄色粗砂～中粒砂 (2.5Y6/2) 粘性なし　ややしまる　細砂混　拳大の礫含む
23　褐灰色中粒砂～粗砂 (10YR6/1) 粘性なし　しまりなし　細砂混　粗朶状の木質多く含む



改修土①
1　黒色～黒褐色シルトまじり礫層(10YR2/1-10YR3/2))粘性やや強い　黄褐色細砂まじり拳大礫層多く含む
2　黄灰色粘土質シルト(2.5Y4/1)極細砂やや含む　5cm大の角礫含む
3　灰黄褐色粘土質シルト(10YR4/2)

改修土②
4　褐灰色粘土質シルトまじり角礫層(10YR4/1)
5　褐灰色粘土質シルトまじり角礫層(7.5YR5/1)黄褐色粘土ブロック含む
6　褐灰色粘土質シルトまじり角礫層(7.5YR4/1)

改修土②
7　灰黄褐色粘土質シルトまじり礫層(10YR5/2)
8　灰黄褐色粘土質シルトまじり礫層(10YR5/2)
9　灰黄褐色粘土質シルト(10YR5/2)角礫含む
10　灰黄褐色粘土質シルト(10YR4/2)5cm大の角礫・粗朶含む
11　褐灰色粘土質シルト(10YR4/1)極細砂やや含む　10cm大の角礫含む　粗朶少量含む
12　褐灰色シルトまじり礫層(10YR4/1)

改修土②
13　褐灰色粘土質シルトまじり礫層(7.5YR4/1)
14　褐灰色粘土質シルトまじり礫層(7.5YR4/1)

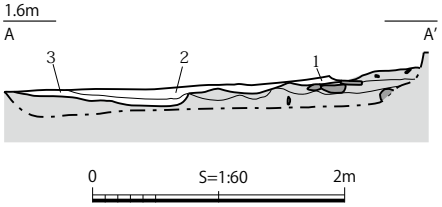
構築当初土
15　褐灰色粗朶まじり粘土質シルト(10YR4/1)粗朶多く含む
16　黄灰色礫混シルト～極細砂 (2.5Y4/1) 粘性強い　しまりあり
17　黄灰色シルト～細砂（2.5Y４/１）粘性あり　しまりあり
18　黄灰色細砂混シルト～極細砂（2.5Y4/1）粘性強い　しまりあり
19　灰色シルト～極細砂（N5/ ）粘性強い　しまりあり　礫わずかに含む

第181図　Ｐ9区道路１土層断面図

第３項　Ｖ層上面の遺構（飛鳥時代～平安時代）

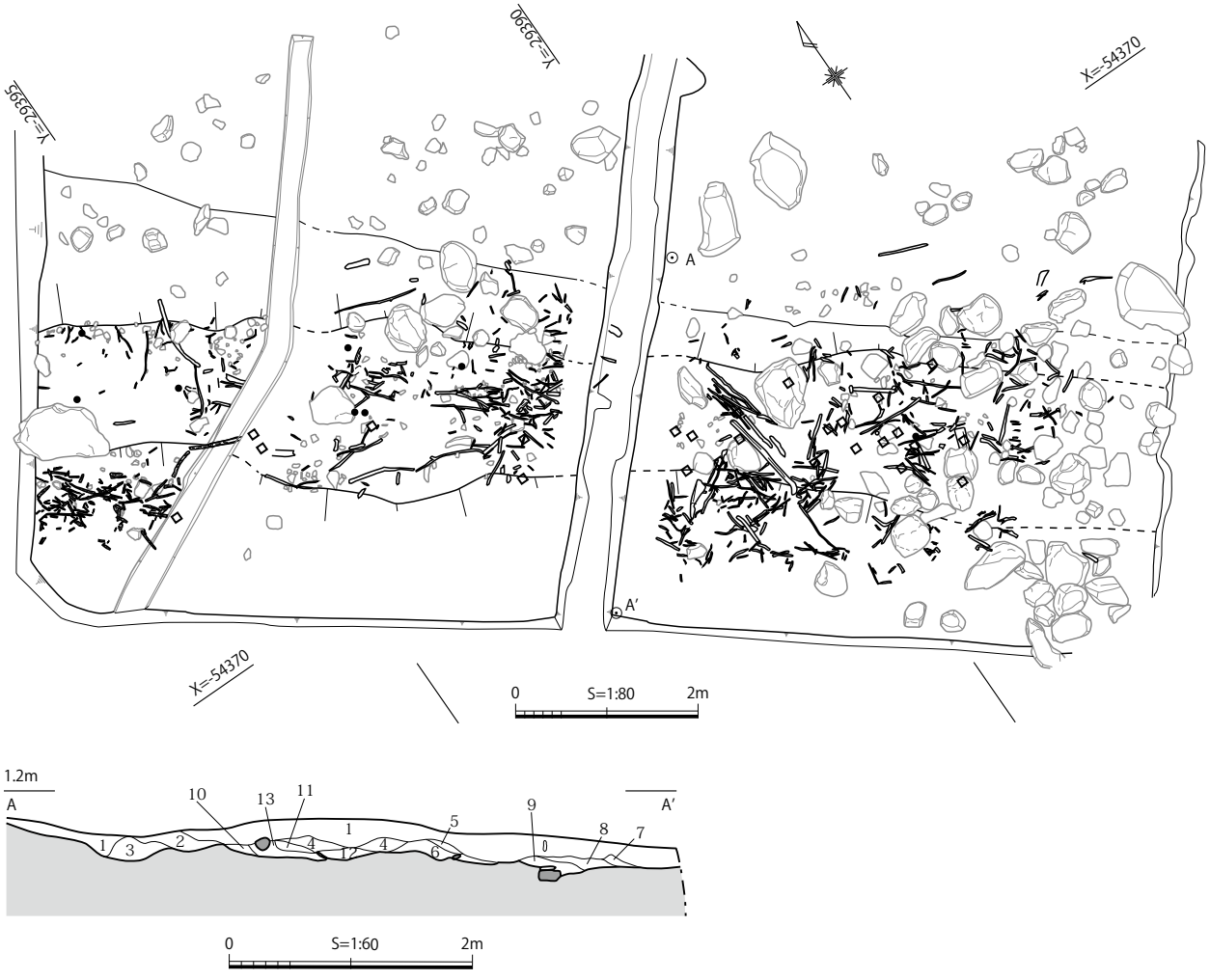
１　概要

Ｖ層上面で検出した遺構は、道路遺構、条里遺構である。構築された順序は道路１→条里 25、道路１外盛土→道路１側溝となる。構造としては条里 25 が道路１の裾部に取り付き、道路１外盛土が覆っている。条里 25 と道路１外盛土から出土した土器類からは構築に年代差があったとは考えにくい。河道 10 は河道６の最終埋没後に形成したもので、構築当初の道路１と共存していた可能性が高い。



1　にぶい褐色細砂混じり粘土質シルト(10YR4/3)草本類やや含む
2　オリーブ褐色粘土質シルト(2.5Y4/3)土器・礫(１cm大)わずかに含む
3　黒褐色シルト混じり礫層(2.5Y3/1) φ - 5 cm大の白色礫多く含む

第182図　P9区道路１側溝土層断面図

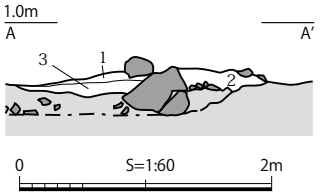


道路１外盛土
- 1　暗灰黄色～灰黄褐色粘土質シルト(2.5Y4/2-2.5Y5/2～10YR6/2)草本類含む
- 2　暗灰黄色細砂混じり粘土質シルト(2.5Y5/2)粘性強い 草本類少量礫少量含む
- 3　黄褐色細砂混じり粘土質シルト(2.5Y5/3) 粗朶多く含む 礫含む
- 4　褐灰色細砂混じりシルト(10YR4/1)草本類・炭化物少量含む
- 5　褐灰色細砂混じりシルト(10YR4/1)草本類・炭化物少量含む
- 6　褐灰色細砂混じりシルト(10YR4/1)草本類・炭化物少量含む
- 7　暗灰黄色中細砂混じり粘土質シルト(2.5Y4/2)草本類少量
- 8　暗灰黄色細砂混じり粘土質シルト(2.5Y4/2) 7 層より粒子細かい
- 9　暗灰黄色細砂-シルト(2.5Y4/2)

外盛土（芯部）
- 10　褐灰色粘土質シルト(10YR4/1) 白色礫やや多く含む。
- 11　暗灰黄色細砂混じりシルト(2.5Y5/2) 10層より礫少
- 12　暗灰黄色粗朶混じり細砂(2.5Y5/2)
- 13　暗灰黄色細砂(2.5Y5/2)　粗朶多く混じる

第183図　P９区道路１道路外盛土

第184図　Ｐ９区河道10



1　オリーブ黒色粗砂混細砂～中粒砂 (5Y3/1)
　植物質わずかに含む
2　暗灰黄色細砂混粗砂～中粒砂 (2.5Y4/2) 礫含む
　植物質含む
3　黄灰色細砂～中粒砂 (2.5Y4/1)
　(にぶい黄色 2.5Y6/4 粗砂ブロック含む) 植物質含む

第185図　Ｐ９区河道10土層断面図

２　道路遺構

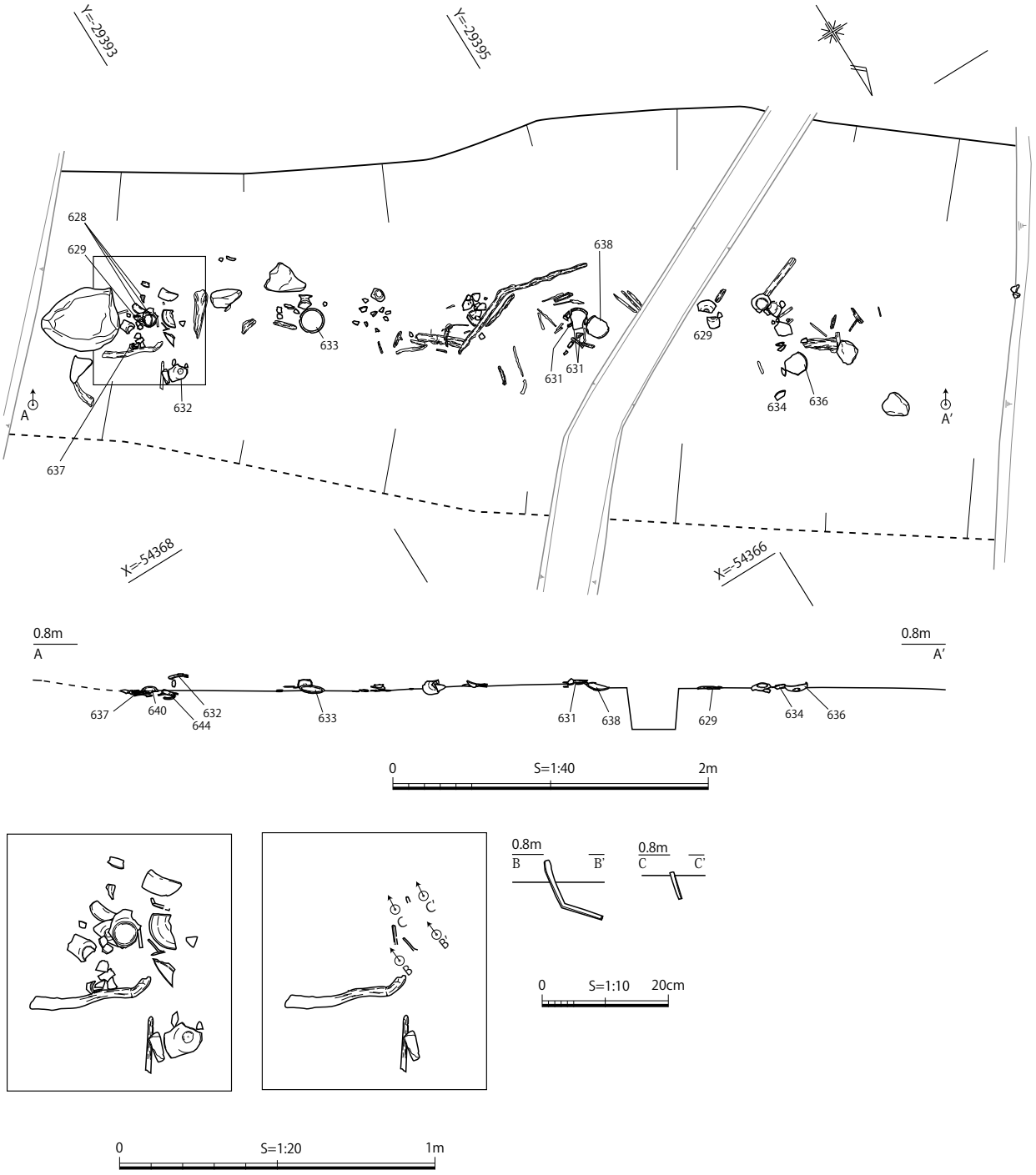
道路１（第180 ～ 183図　ＰＬ.44－２・45・46－１,２・47－２）

道路遺構は山際付近に構築され、東西方向に調査区を横断している。他調査区と同様に背後の丘陵に沿って延伸している。

道路盛土と道路外盛土との間には側溝を確認しており、側溝までの盛土幅は約7.5mを測る。道路は盛土により構築され、盛土の高さは最大1.9mである。近世の石積み２の直下にて検出しており、上面は石積み２により若干の撹乱を受ける。

道路１は10世紀代(改修①)と９世紀後半代(改修②)の二度の改修が確認できる。改修①の構築土は大きく２層に大別できる。丘陵斜面付近から道路遺構の中程までの礫を主体とした盛土と、道路肩に検出したシルト質の盛土である。礫を主体とした盛土は層厚が最大で1.2mを測る箇所もある。また、１mを超すような大ぶりの礫も含まれていた。このような埋土を大量に手近で求めるとすると、背後の丘陵斜面が想定される。丘陵斜面を削平し平野側に向けて押し出すように造成して構築したものと考える。さらに、礫を含んだシルト質の盛土を道路１の肩部に貼って整形したとみられる。

改修①からは岡田・八峠編年のＫＶ期頃の回転糸切りの土師器や須恵器の椀とみられる口縁部が出土した。埋土からは様々な時期の遺物が混入している。改修②は道路１の裾部を中心に確認した。道路１の平野側の高さを増すのと同時に、礫を主体とした盛土により部分的に造成している。改修②の年代は高台の退化が進んだ須恵器の坏や黒色土器が出土したことから、岡田・八峠編年ＫⅣ期頃と理解した。構築当初の盛土は平野側に人頭大の礫を含んだ細砂から極細砂により一段高くし、基盤となった礫層の上面に精良な灰色シルトを敷いている。遺物は須恵器、土師器の他、土製支脚の破片が出土した。斎串等の木製祭祀具も出土している。出土遺物から７世紀末～８世紀初頭頃と考える。



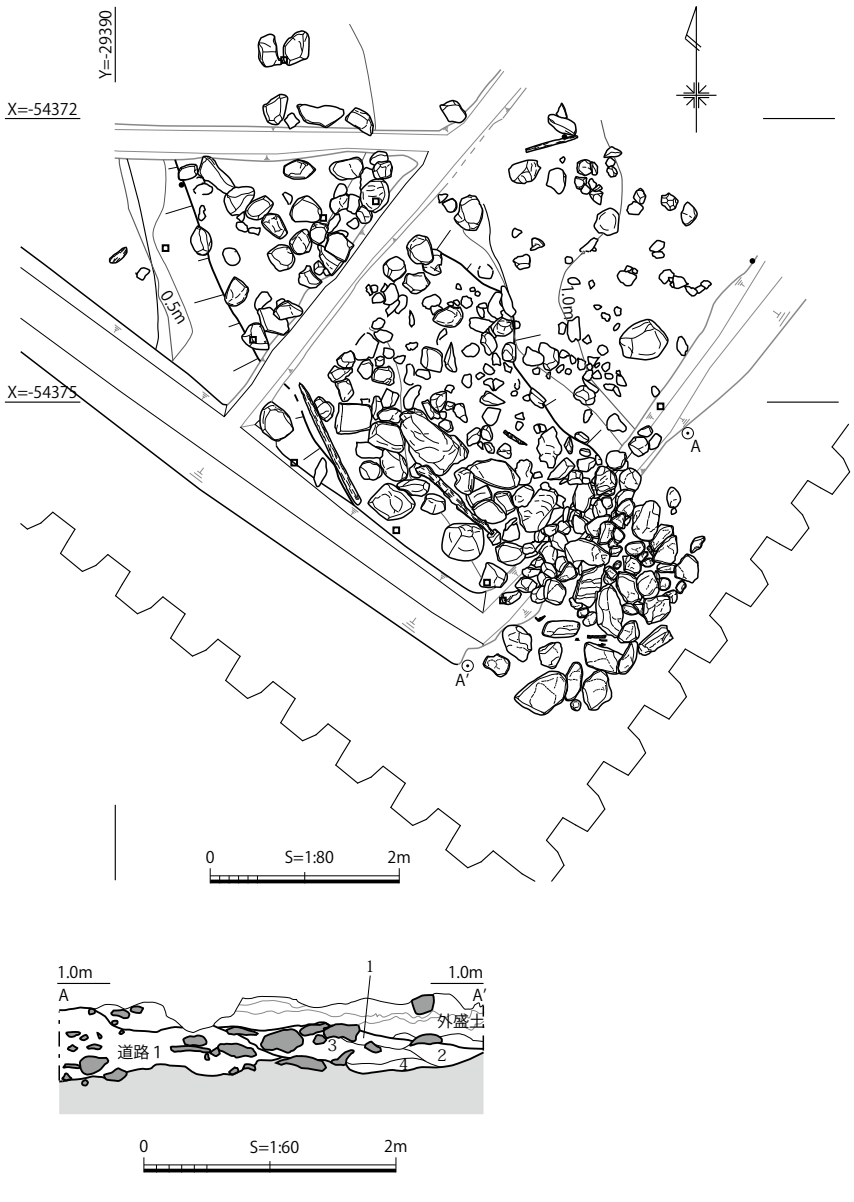
第186図　Ｐ９区河道10遺物出土状況図

道路１側溝

本調査区のほぼ中央で東西方向に延びる。平野側にのみ確認できた。側溝は幅３m、深さ20～30cmが残存する。断面の形状は浅い皿状を呈する。側溝の埋土は３層に細分できる。上層の１層はⅢ層とも類似しており、草本類の植物遺体を多量に含んでいた。側溝の埋土からは岡田・八峠編年ＫⅤ期～Ｃ１期頃とみられる土師器の坏類が出土しており、当該期までは側溝として機能していたと考える。

道路１外盛土

道路遺構に並行するように確認できる。道路裾を覆うように構築される。平野側の裾部は調査地外となるようで正確な幅については把握できでいない。確認している幅は約３m、高さは最大で40cm



第187図　Ｐ９区条里25

が残存する。

盛土の構築方法は中央に芯となる部分を構築し、外側へ拡張するように造成している。盛土の上面には粗朶とみられる木片を確認している。集中して列を成すようには検出できておらず、粗朶を密に敷いた状況はみられなかった。遺物は土器類が出土したほか、木簡が２点(28・29号木簡)出土している。

出土した土師器から10世紀後半頃と考える。

２　条里遺構

条里25(第187図　ＰＬ.48－１)

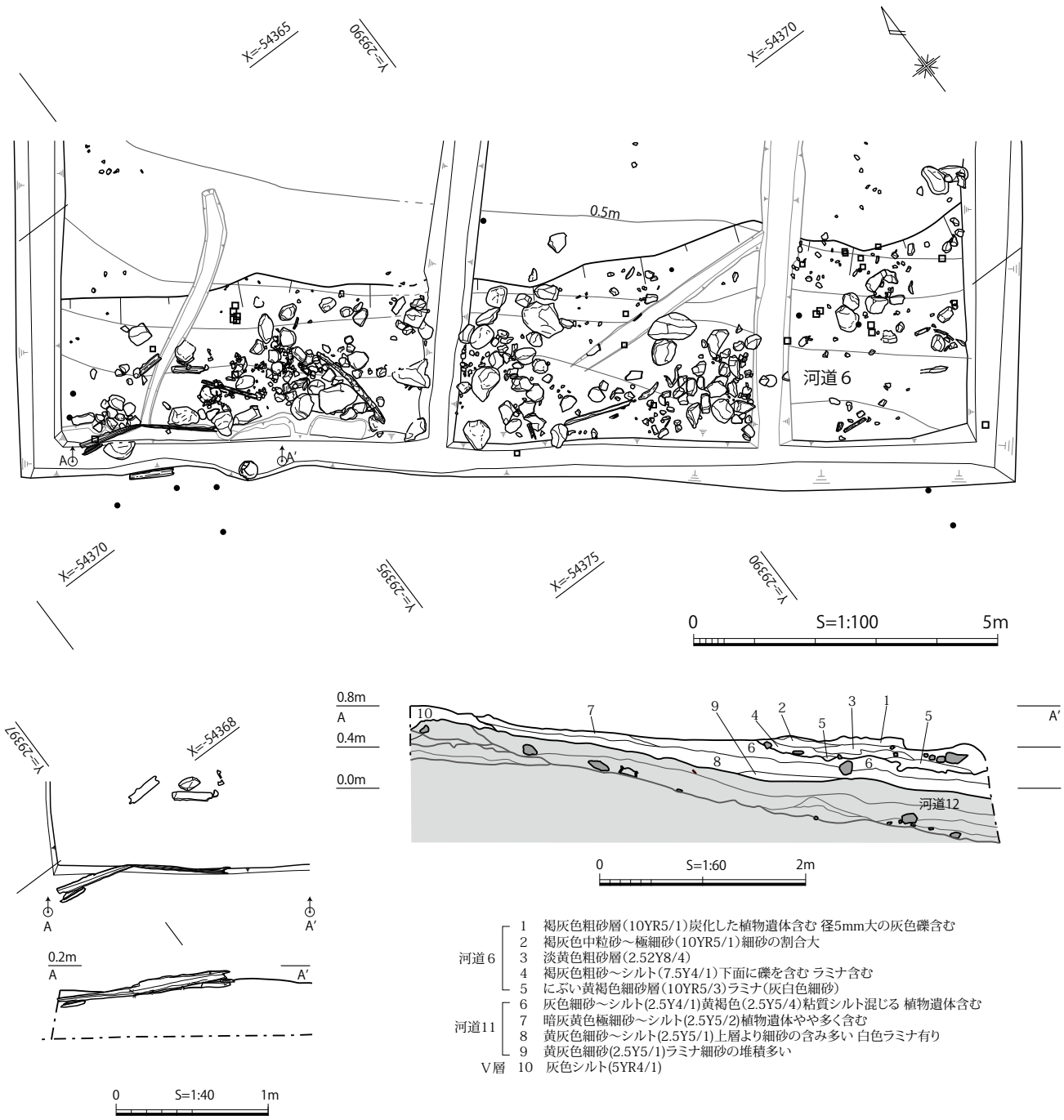
本調査区の西隅にて確認した。平成25年度の５区にて確認された一町方格に相当する条里盛土の北側延伸部分と理解している。条里25は道路１に取り付いており、拳大から人頭大の角礫を多量に含んだ埋土により構築されていた。盛土は道路１に取り付くように構築されている。遺物は土器類の他、木製品が出土した。出土した土師器は岡田・八峠編年のＫＶ期頃とみられることから、10世紀代の構築と推定される。５区で検出した部分とも年代に齟齬はないと考える。

特筆すべき遺物として『女子群像』が描かれた板絵が出土している。板絵の出土地点は道路１と条里25、道路１外盛土が交差する箇所である。本遺構の出土としたが、盛土下面の道路盛土とのちょうど境目から出土しており、いずれに帰属するかは明確ではない。仮に、道路１に帰属した場合は、当初の盛土に帰属するといえる。

３　河道

河道10(第184 ～ 186図　ＰＬ.47－３)

本調査区の平野側を横断するように確認した。道路１や道路１外盛土の範囲と重複したため、北側の肩部については不明確である。断面形状は浅い皿状を呈している。埋土は中粒砂が主体であり、３



第188図　P9区河道６

層に細分できる。２、３層は草本類をよく含んでいた。埋土にはラミナは確認できず、３層にはブロックも認められることから人為的に埋められた可能性がある。河道10の西側では土器類や斎串などが集中して出土した。遺物は遺構の中央付近に列状に並んで出土している。土器類は須恵器が多数を占める。器種は蓋坏、坏部のみの高坏、長頸壺などが出土した。須恵器蓋のほとんどが逆位で出土しており、須恵器蓋類の天井部には黒漆にて点や「×」といった記号を付している。西側では、須恵器の近辺に斎串が刺さった状況で出土していることなどから、土器類を供献した何らかの祭祀行為があったと推測される。

河道６（第188図　ＰＬ.48－３）

河道６と河道11はⅤ層にて検出できる旧河道である。丘陵裾部を北流する旧河道の肩部を検出したと考えられ、旧河道の最深部や平野側（逆側）の肩部については調査区外となる。河道中からは人

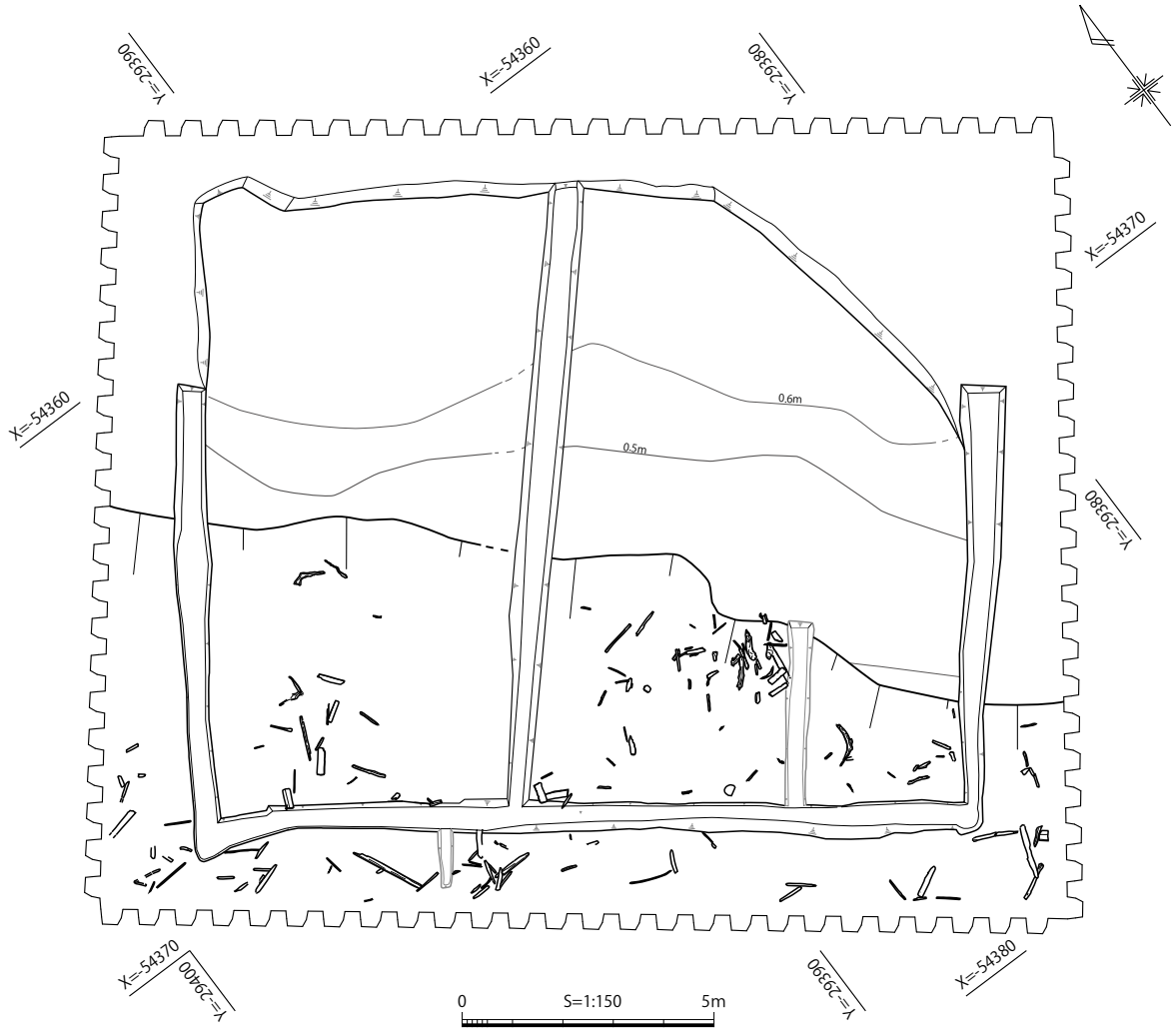
頭大の亜角礫が多数出土していることからも、人的営為があった可能性は高い。

河道６は調査区の中央から平野側よりを横断する。確認した最大幅は約 2.5 ～ 3.0 ｍを測る。上層は肩部を除き粗砂を主とした埋土である。下方に細砂が認められることから上方へ逆級化が起こっており、河道に生じた急激な増水を示す。

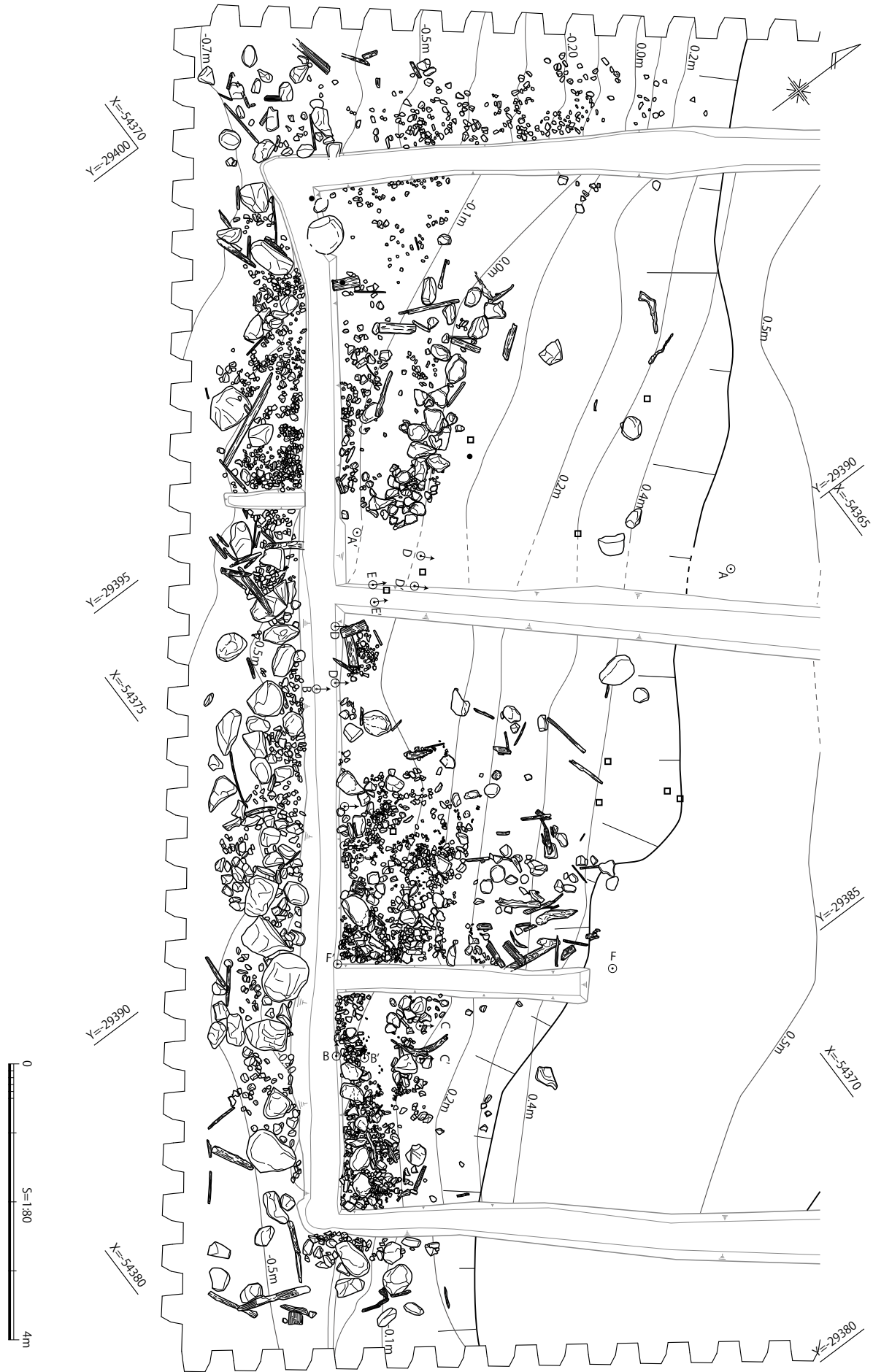
遺物は須恵器の甕が完形で出土するなど、６世紀後半から７世紀にかけての土器類が出土した。

河道11（第179図）

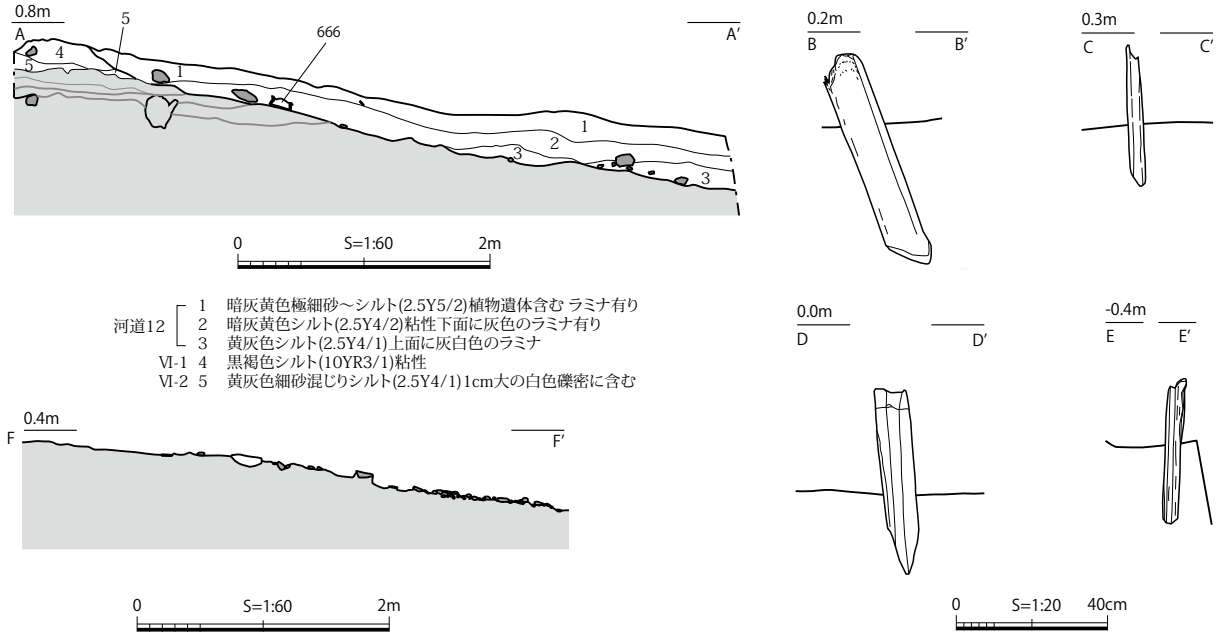
河道６に先行する旧河道である。調査区東側では河道６と重複し、西側に進むにつれて丘陵部分まで入り込んでいる。幅は東側で約3m、西側にて約６ｍを測る。埋土は植物遺体を多く含んだ細砂質シルトからなる。遺物は埋土からは古墳時代中期頃の土師器甕、小型丸底壺が出土した。



第189図　Ｐ９区Ⅵ層上面遺構分布図



第190図　Ｐ９区河道12



第191図　Ｐ９区河道12土層断面図・杭

第４項　Ⅵ層上面の遺構

１　概　要（第189図）

調査区の中央から平地側に河道を確認した。

２　河道

河道12（第190・191図　ＰＬ.49－１）

河道 12 は幅約４～８ｍを測る。河道 12 は河道 11 より約２ｍ丘陵裾側へ寄っており、西に進むにつれて丘陵側へ入り込んでいる。断面は丘陵裾に向けて緩やかに立ち上がる。埋土は３層に細分される。３層ともシルトを主とした埋土である。２、３層にはラミナが確認できた。河道 12 の底面から立ち上がり付近では拳大から人頭大、60cm を超える礫が検出された。

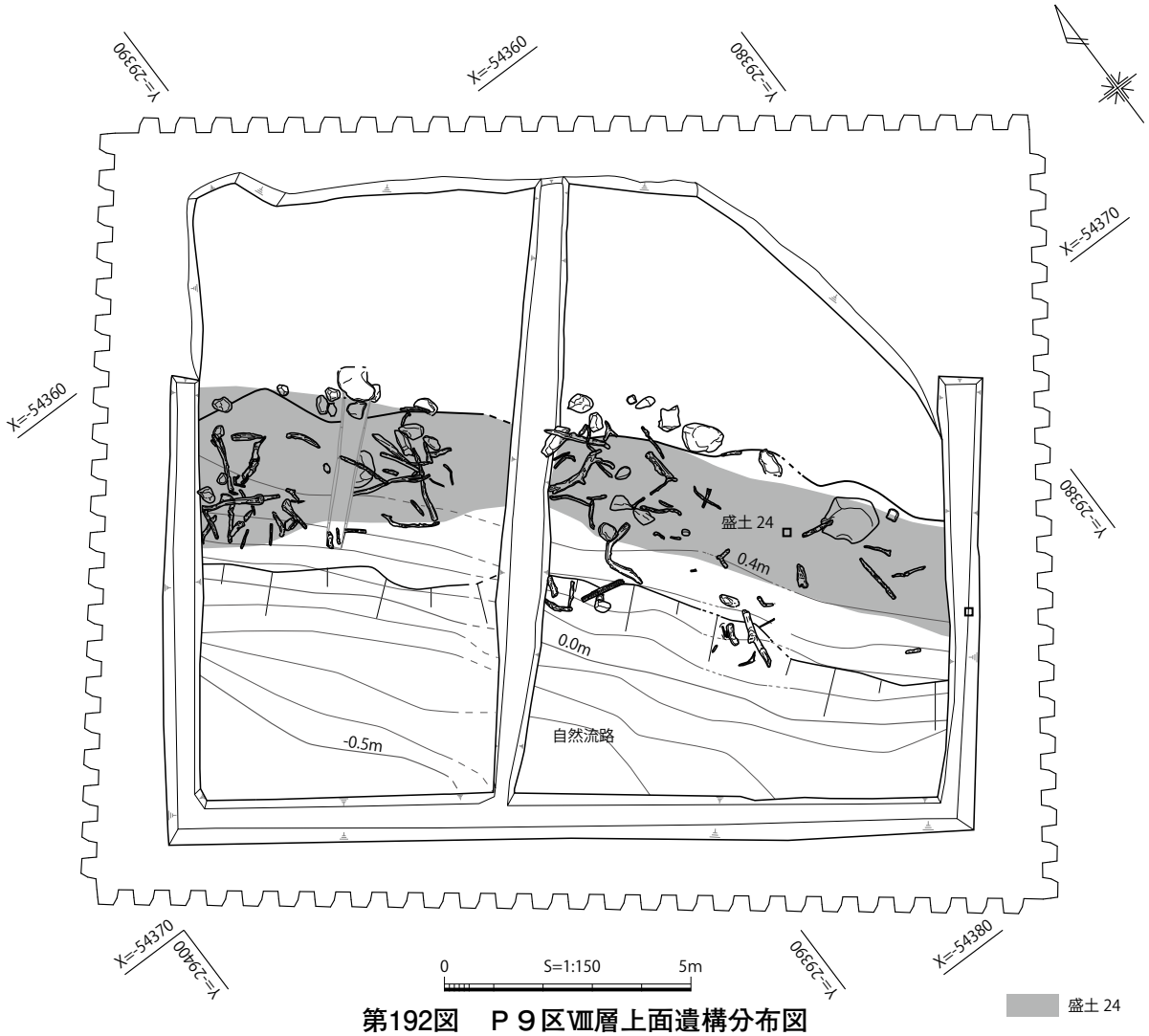
礫層は丘陵裾に確認できるが、河道付近まで層が延びていないことから人為的な盛土と推測される。礫敷は河道の立ち上がり付近では拳大のものが多く、河道 12 の底面付近では大ぶりの礫が目立つ。また、河道の底面付近では杭が散見された。杭は密集せず、方向性が確認できるものではない。杭材は角材を利用しており、転用材の可能性が高い。杭と礫敷の関係については不明である。

礫敷の具体的な機能については明確にし得ないものの、護岸施設と推定しておきたい。埋土から古墳時代中期の土師器甕が出土したほか、角材や板材といった木製品が多数出土している。

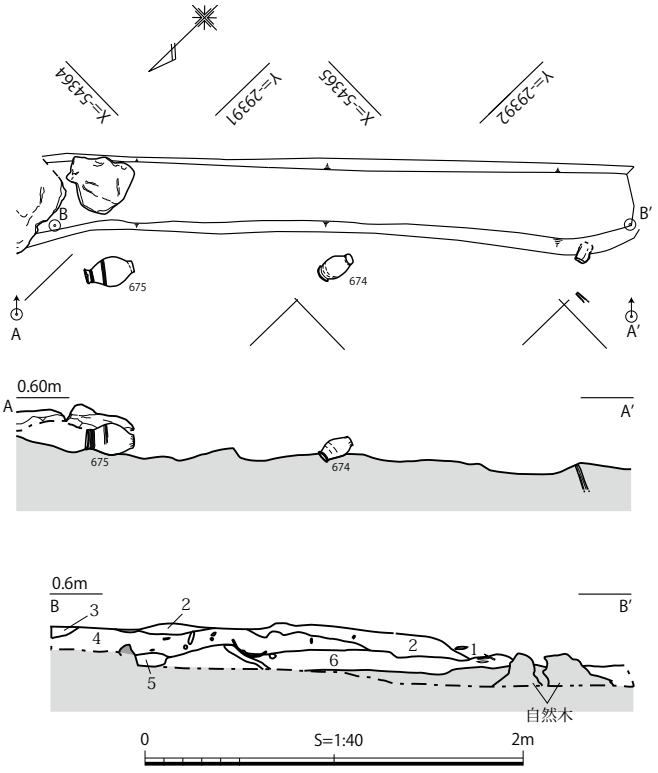
第５項　Ⅷ層上面の遺構（弥生時代中期）

１　概　要（第192図）

調査区の中央付近まで河道12の前身となる旧河道が北流している。河道の肩部には盛土24を検出した。盛土24の底面からは弥生時代中期前葉頃の壺が２個体出土しており、Ⅷ層の形成年代の下限を示すと考えられる。



第192図　Ｐ９区Ⅷ層上面遺構分布図



第193図　Ｐ９区盛土24土層断面図

1　灰黄褐色粘土質シルト (10YR5/2) 植物遺体・木質多く含む。
　灰オリーブ色 (5Y5/2) 粘土ブロック含む
2　黄灰色粘土質シルト (2.5Y4/1) 植物遺体堆積層
3　暗灰黄色粘土質シルト (2.5Y5/2) 橙色 (7.5YR6/6) の木質遺物混じる
　木質遺体多量
4　灰オリーブ色粘土質シルト (5YR5/2)　植物遺体多く含む
5　灰オリーブ色粘土質シルト (5YR5/2) 木質遺体やや多く含む
6　灰色粘土質シルト (5Y4/1) 木質遺物含む

２　盛土遺構

盛土24（第192・193図　ＰＬ.49－２）

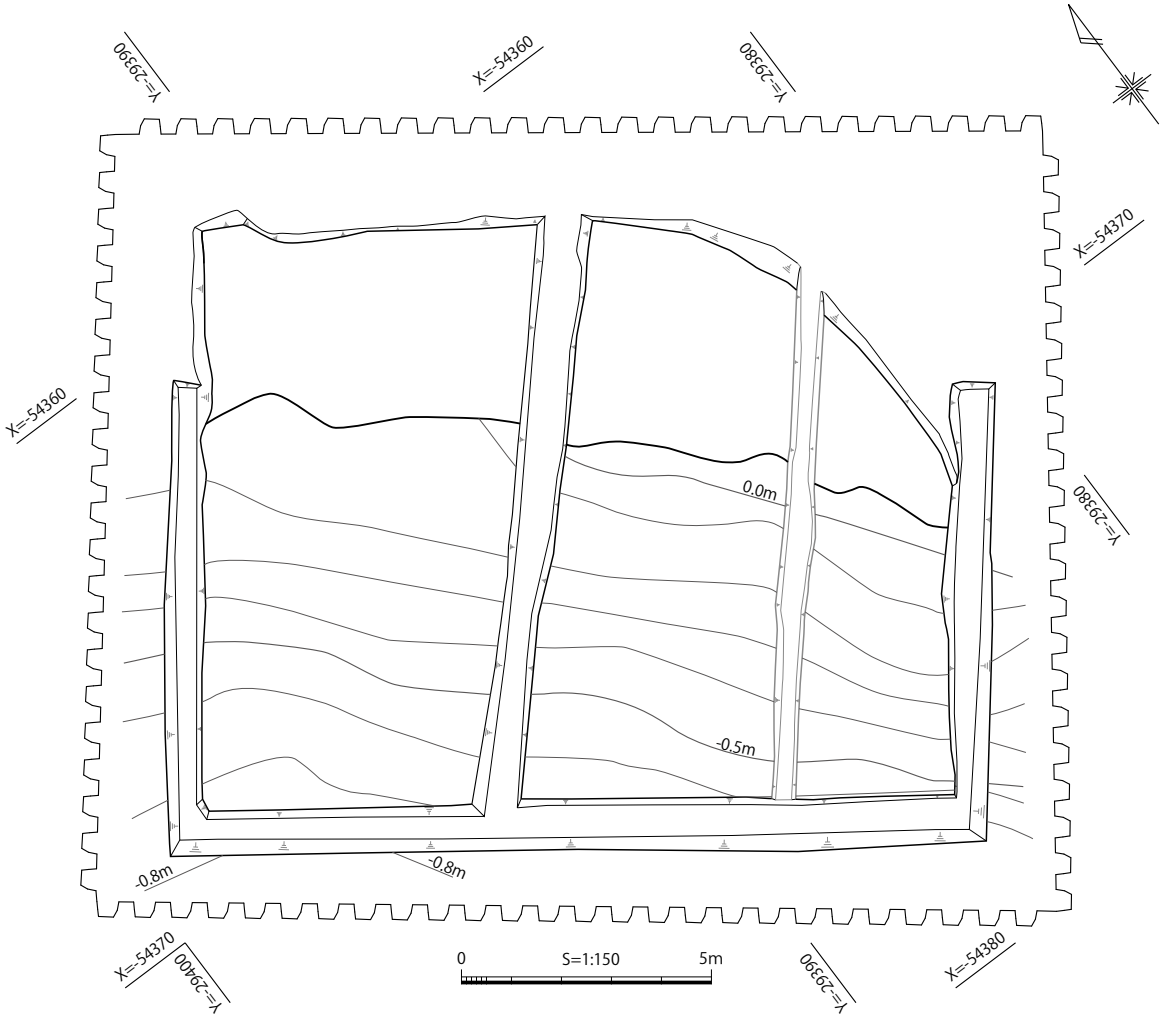
調査区のほぼ中央に旧河道と平行して構築された盛土である。幅は約1.6 ～ 1.8mで、高さは約20cmが残存する。埋土はシルトを主体とするが、Ⅷ層中の植物遺体を多く含んでいる。盛土は自然木の枝類を芯としたようで、盛土下層で出土している。盛土内から出土した弥生土器から時期は弥生時代中期と考えられる。盛土から出土した木材をサンプル

とし、放射性炭素年代測定を行っている。測定結果はスギ材で２σ暦年代範囲で407－381BC(95.4%)であり、土器の年代観とは齟齬がある。

第６項　Ⅸ層上面の遺構（縄文時代晩期）

１　概　要(第194図)

Ⅸ層は灰白色や黒色を呈したシルトの薄層下に、貝を大量に含んだ層を検出している。このシルト質の薄層と貝を多く産出する層は互層上に確認できる。貝は標高 0.2 m付近まで出土しており、丘陵の裾部の礫層に収斂する。遺物は縄文晩期頃と推定される浅鉢や深鉢が出土した。



第194図　Ｐ９区Ⅸ層上面遺構分布図

第14節　P 10区の調査

第1項　調査区の概要

1　地形と土層堆積（第195・196図）

P10区は遺跡中央よりやや北西側に位置し、山裾の平野部にあたる。本調査区付近では東側の丘陵斜面に狭隘な谷が開析されており、平野部が僅かに山裾側に入り組んでいる。調査区はこの谷の出口にあたり、遺跡内でも湧水が著しい。発掘調査は平成27年度に実施し、調査区の平面積は278.6㎡である。

基本層序のうち、Ⅰ～Ⅳ層は基本的に他の調査区と同じである。Ⅱ層は黒褐色礫混じりシルトで、近世以降の造成土である。おそらく、P７・８区の山裾で検出された石積遺構の構築時に伴うものであろう。山側にかけてより小礫を密に含むことから古代の道路１上面の一部が削平され、平野側の造成に利用されたと考えられる。Ⅳ層はP11･12区と同様に２層に細分される。

Ⅴ～Ⅸ層の堆積状況は他の調査区とは大きく異なり、包含層が確認できた部分は極めて少ない。平野側には河道６・15など弥生時代から古墳時代にかけて自然河道が連綿と形成され、山側も自然河道の護岸施設と考えられる８・10盛土などの遺構が塁重する。

Ⅴ層に相当する層は黒褐色シルトから粘土が主体で、砂や溢流堆積に起因する泥塊を含んでいる。出土遺物は須恵器が僅かに出土しており、古墳時代後期の堆積層と考えられる。Ⅵ層に相当する層はない。

Ⅶ層に相当する層は枝葉などの植物遺体を多く含み、層厚は最大70㎝と厚い。自然河道の氾濫原における堆積層と捉えたが、細粒から粗粒砂のラミナが多く入ることから巨視的にみれば、自然河道内の堆積となる可能性もある。Ⅷ層に相当する層も同様の様相を呈し、基本層序のⅧ層が確認されたのは南東壁付近のみである。なお、Ⅶ層相当のＡ－Ａ’21層は均質な粘土層で、平面では検出できなかったが、やや凸状の断面形から盛土遺構である可能性が高い。その場合、盛土25と同様に護岸施設としての性格が考えられる。

Ⅸ層は貝層である。粗粒砂や枝葉をラミナ状に含んでおり、他の調査区に比べ流水作用を受けている。また、山側のＢ－Ｂ’22層や25層では指頭から拳大程の小礫を多く含んでおり、東側の丘陵斜面から土砂が流入していると考えられる。Ⅸ層から遺物は出土していない。

2　遺構の概要

P10区では、弥生時代前期から中期初頭の石敷遺構１基、弥生時代中期から後期の盛土遺構２基、自然河道１基、古墳時代の土坑１基、自然河道１基、古代の道路遺構１基、条里遺構３基、自然河道２基を確認した。遺跡内でも遺構密度が高く、遺物の出土量も各時代を通じて突出する調査区の一つである。P10～12区における遺物の出土量の多さは、近接する丘陵裾、もしくは丘陵斜面に集落や官衙などの施設が存在していた可能性を示唆している。

第3項　Ⅴ層相当層上面の遺構（古墳時代後期～平安時代）

1　概要（第197～199図）

Ⅴ層相当層上面が古墳時代後期から平安時代にかけての遺構検出面となる。Ⅴ層相当層上面の標高は0.25～0.60m前後である。遺構は道路遺構１基、条里遺構３基、自然河道３基、土坑１基を検出し

第195図　Ｐ10区土層断面図（１）

Ⅰ　灰黄褐色シルト (10YR4/2) 耕作土。
Ⅱ　黒褐色礫混じりシルト (10YR3/2) 拳大までの礫を多く含む、有色砂礫を密に含む。
Ⅲ-1 黒褐色シルト (10YR3/1) いわゆるマコモ層、植物未分解層 (草本類主体)。
Ⅲ-2 黒褐色シルト (10YR3/1) いわゆるマコモ層、草本類がⅢ-1 層より多く含む、粗朶片を含む。
Ⅳa　黒褐色粘土質シルト (10YR2/2)
Ⅳb-1 黒褐色粘土質シルト (10YR2/2) 草本類を少量含む。
Ⅳb-2 黒褐色粘土質シルト (10YR2/2) 草本類を少量含む、Ⅳb-1 よりしまり、粘性やや強
Ⅷ　暗褐色粘土質シルト (10YR3/3) 植物未分解層。

A－A'

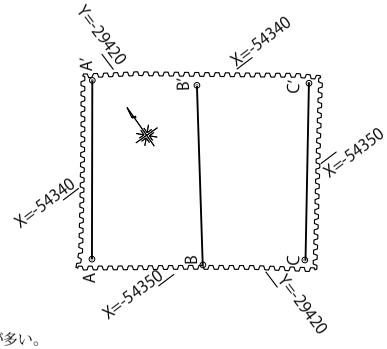
1 褐灰色粘土 (10YR4/1)15 層に類似するが、草本類がやや目立つ。
Ⅴ層相当
2 黒褐色シルト質粘土 (10YR3/2) 溢流堆積のブロック土が目立つ、枝葉を少量含む。
3 灰褐色粘土 (7.5YR6/2) 溢流堆積層だが一定しない。
4 黒褐色シルト質粘土 (10YR3/1) 草本類を多く含む、砂をやや含む、炭がやや目立つ。
Ⅷ層相当
5 黒褐色粘土質シルト (10YR3/2) 枝を多量に含む、細粒砂をブロック状に含む。
6 灰褐色粘土 (7.5YR6/2) 溢流堆積層か、均質な粘土、粘性強。
7 黒褐色シルト質粘土 (10YR3/2) 枝葉をほとんど含まない、細粒砂、砂をわずかに含む。
8 暗褐色シルト質粘土 (10YR3/2) 枝葉を多量に含む、7 より粘性、しまり強。
9 黒褐色シルト質粘土 (10YR2/3) 枝葉をわずかに含む、8よりしまり、粘性強。
10 暗褐色シルト質粘土 (10YR3/3) 枝葉を一定量含むが、8より少ない、7 層より粘性強。
11 暗褐色粘土混じりシルト (10YR3/4) 細粒砂のラミナを含む。
12 暗褐色粘土質シルト (10YR3/4) 枝葉を多く含む、砂はほとんど含まない。
13 黒褐色シルト (10YR3/2) 草本類を多く含む、枝葉はほとんど含まない。
14 黒褐色シルト質粘土 (10YR3/2) 草本類を一定量含む、砂のラミナあり、枝葉は少量。
15 黒褐色シルト質粘土 (10YR3/2) 草本類を多く含む、しまりやや弱。
16 黒褐色シルト質粘土 (10YR3/2) 草本類は少ない、15 より粘性強。
17 褐灰色粘土 (10YR4/1) 均質な粘土、しまり、粘性強、下面に拳～手のひら大の礫を含む。
18 褐灰色粘土 (10YR4/1)55 層に類似するが、粗粒砂を少量含む。
19 暗褐色シルト質粘土 (10YR3/3)X 層、貝層を撹拌した堆積、枝葉を一定量含む、
粘性強、粗粒砂混じり。
20 暗褐色砂混じり粘土 (10YR3/3) 枝葉を一定量含む、粘性やや強。
21 褐灰色粘土 (10YR4/1) 均一な粘土層、粘土ブロック主体、しまり、粘性強。
22 暗褐色シルト質粘土 (10YR3/3) 枝葉を一定量含む (葉主体)、砂を含む。
23 暗褐色粘土質シルト (10YR3/3) 枝葉を少量含む、砂のラミナを含む。
24 暗褐色シルト混じり粗粒砂 (10YR3/4) 枝葉を含む、ラミナあり。
25 暗褐色砂混じりシルト (10YR3/4) 枝葉を含む (葉主体)、しまり弱。
Ⅸ層相当
26 黒褐色シルト (10YR3/1) 貝層、しまり弱。
27 褐灰色粘土 (7.5YR5/1) 枝葉を一定量含む、下面に粗砂、枝葉の順で水平に堆積、貝を含む。
28 褐灰色粘土 (7.5YR5/1) 枝葉を一定量含む、下面に粗砂、枝葉の順で水平に堆積、貝を含む。
29 褐灰色粘土 (10YR4/1) 均質な粘土、混和物少ない。
30 褐灰色粘土 (7.5YR5/1) 枝葉を一定量含む、貝を含む。

B－B'

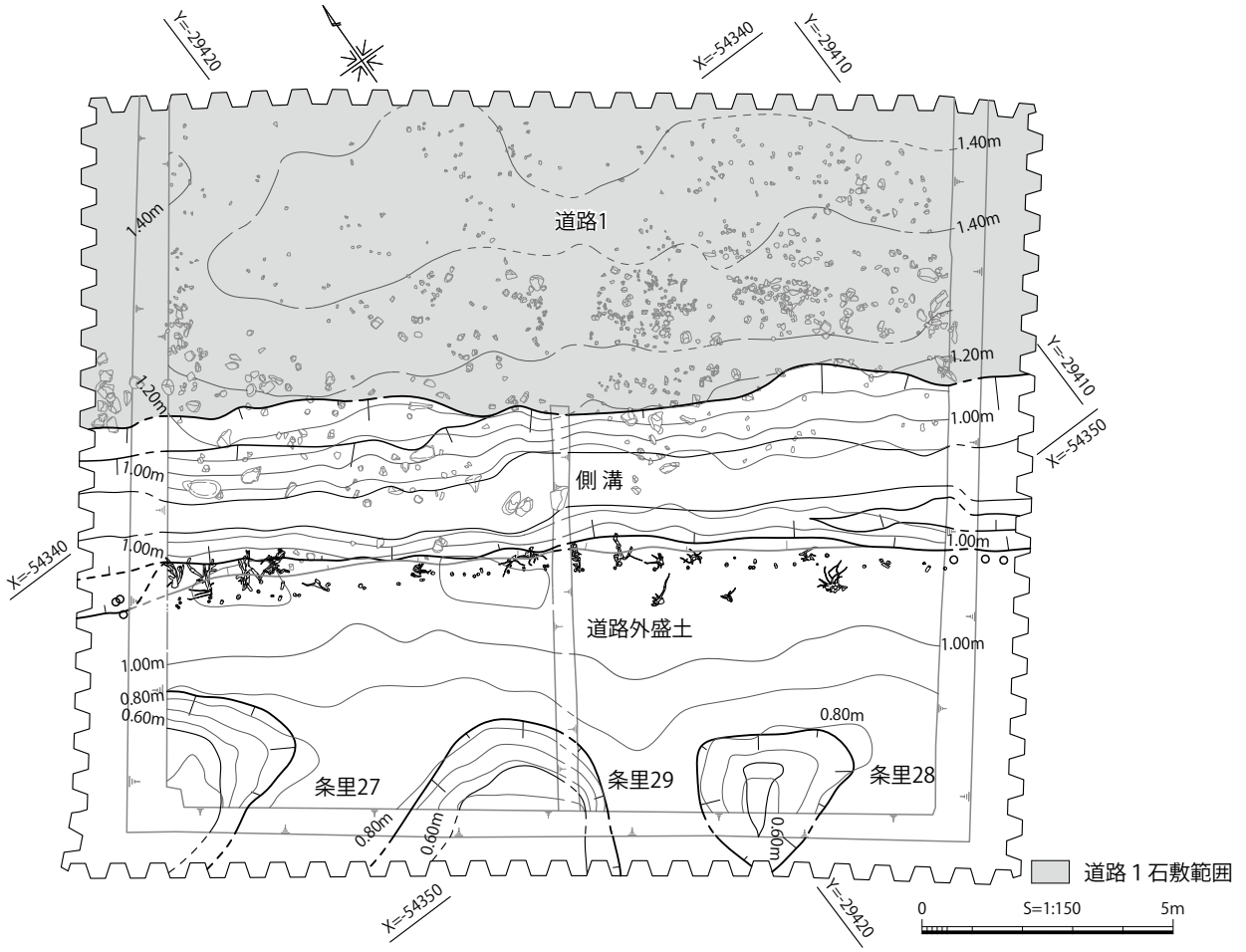
Ⅴ層相当
1 黒褐色シルト質粘土 (10YR3/ 1) 基本的に 2 に類似するが、わずかに砂を含む。
2 黒褐色シルト質粘土 (10YR3/1) 枝を一定量含む、褐灰色の泥塊を含む、拳大の礫を含む。
3 黒褐色シルト質粘土 (10YR3/1) 枝を一定量含む、褐灰色の泥塊を含む、指頭大の礫を少量含む。
4 黒褐色シルト (10YR3/1) 草本類を多く含む、やや砂混じり、枝葉を一定量含む。
5 暗褐色シルト (10YR3/3) 枝葉を一定量含む、6よりしまりやや弱。
6 暗褐色粘土質シルト (10YR3/3) 枝葉を多く含む、やや砂混じり。
Ⅶ層相当
7 暗褐色シルト質粘土 (10YR3/3) 枝葉を一定量含む、やや粘土質。
8 暗褐色粘土質シルト (10YR3/4) 枝葉を一定量含む、泥塊を多く含む、ややしまり弱。
9 暗褐色粘土質シルト (10YR3/4) 枝葉を一定量含む、やや砂混じり、しまりやや弱。
10 暗褐色粘土質シルト (10YR3/4) 葉を中心とした植物遺体を含む、粘性、しまりやや強。
11 暗褐色砂混じりシルト (10YR3/4) 褐灰色粗粒砂のラミナを含む、粘性やや強、葉がラミナ状に入る。
12 暗褐色砂混じりシルト (10YR3/4) 枝葉を一定量含む。ラミナあり。
13 暗褐色砂混じりシルト (10YR3/4) 褐灰色粗～極粗粒砂のラミナは一定せず、斑状に含む、11 より枝が多い。
14 暗褐色シルト質粘土 (10YR3/4) 枝葉を多く含む、粘性、しまり強。
15 暗褐色粘土質シルト (10YR3/4) 枝をほとんど含まず、葉をラミナ状に含む、わずかに砂がラミナに入る。
Ⅷ層相当
16 暗褐色砂混じりシルト (10YR3/4) 枝葉を多量に含む、13 と類似するが、ややシルト質、ラミナあり。
17 暗褐色砂混じりシルト (10YR3/4) 枝葉を多量に含む、16 より粘土質、ラミナあり。
18 暗褐色砂混じりシルト (10YR3/4) 枝葉を多く含む、しまりやや弱。
19 暗褐色砂混じりシルト (10YR3/4) 砂が卓越する、ラミナあり、しまり、粘性弱、枝葉を多く含む。
20 暗褐色砂混じりシルト (10YR3/3) 枝葉を多量に含む、ラミナあり、粘性ややあり。
Ⅸ層相当
21 褐灰色粘土 (10YR5/1) 均質な粘土層、枝葉を含む。
22 黒褐色砂混じり礫 (10YR3/1) 指頭～拳大の礫を密に含む、粗粒砂を多量、貝を一定量含む。
23 灰褐色粘土 (7.5YR5/1) 枝葉を一定量含む (ラミナ状)、貝を一定量含む。
24 灰褐色粘土 (7.5YR5/1) 枝葉を一定量含む (ラミナ状)、貝を一定量含む、23 より粘性やや強。
25 黒褐色礫混じり粗粒砂 (10YR3/1) 枝葉を多く含む、指頭～拳大の礫を多量に含む、貝を一定量含む。
26 灰褐色粘土 (7.5YR5/1) 枝葉を一定量含む (ラミナ状)、貝を一定量含む。
27 褐灰色粘土 (7.5YR5/1) 均質な粘土層、貝を少量含む、枝葉をわずかに含む。
28 暗褐色シルト質粘土 (10YR3/3) 枝葉を多く含む (ラミナ状)、上面が波状。

C－C'

Ⅴ層相当
1 黒褐色粘土 (10YR3/1) 枝を少量含む、指頭～拳大の礫をわずかに含む、しまり、粘性やや強。
2 黒褐色砂混じりシルト (10YR2/2)19 層に類似する、木枝、炭化物がやや目立つ。
3 黒褐色シルト質粘土 (10YR3/1) 枝、葉を少量含む、炭がやや目立つ、粘土ブロックを一定量含む
4 暗褐色砂混じりシルト (10YR3/4) 枝、葉を多量に含む、植物未分解層、細粒砂を一定量含む、しまりやや弱。
Ⅷ層相当
5 暗褐色砂混じりシルト (10YR3/3) 砂が多い (灰色粗粒砂)、枝葉を多量に含む。
6 暗褐色砂混じりシルト (10YR3/3) 砂が卓越する、植物未分解土が主体。
Ⅸ層相当
7 褐灰色粘土 (10YR5/1) 均質な粘土層。
8 黒褐色シルト質粘土 (10YR3/1) 貝主体、指頭～拳大の礫を多く含む、中～粗粒砂混じり。



第196図　P10区土層断面図（2）



第197図　Ｐ10区Ｖ層上面遺構分布図（１）

ている。遺構の構築順は大きく河道６→河道14→道路１→条里27 ～ 29の順である。大規模な自然河道である河道６が埋没した後、７世紀末から８世紀初頭に道路１が敷設され、10世紀後半になると道路外盛土と条里27 ～ 29が一体で構築される。道路１はその規模や構造から古代山陰道と考えられ、P10・11区では10世紀後半に街路樹として柳が植えられていたことが判明している。

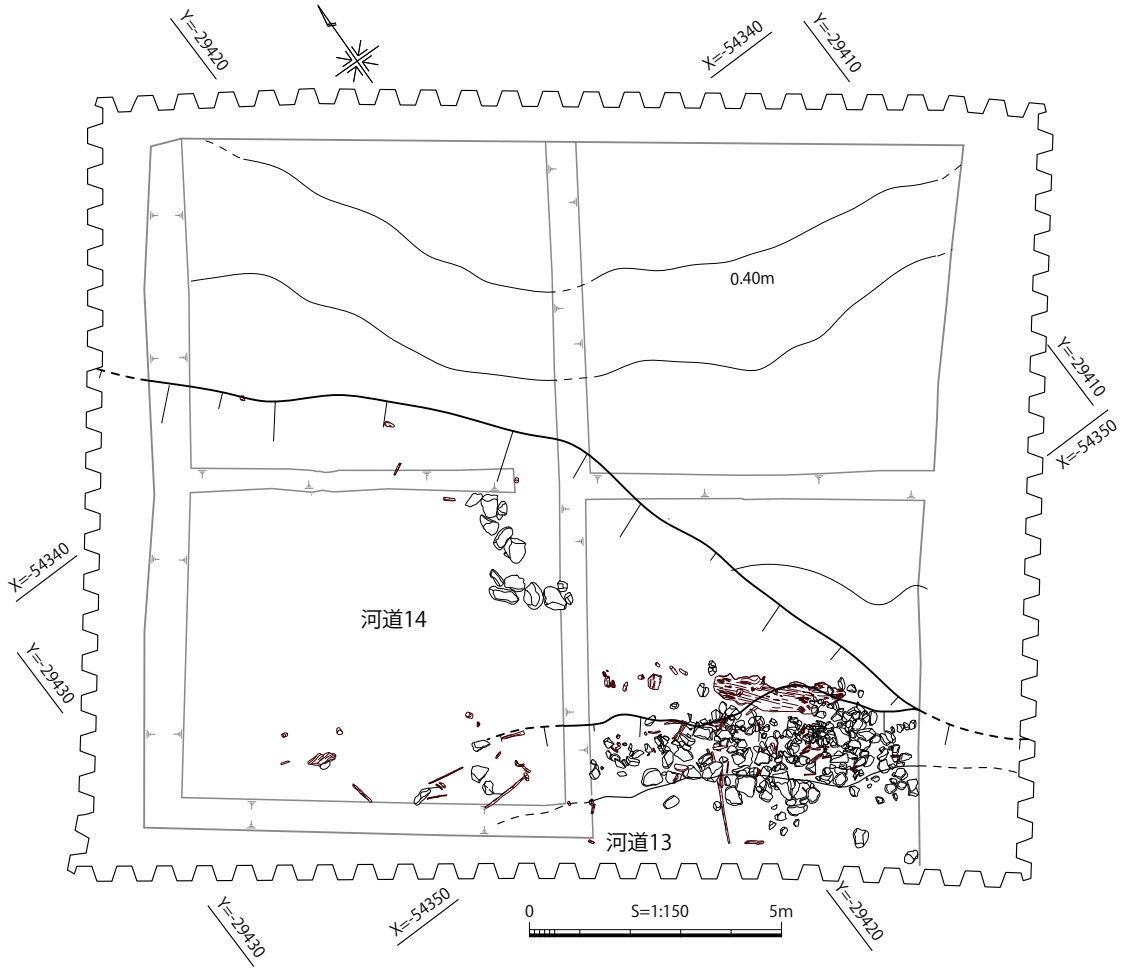
遺物は多量の須恵器や土師器に加え、緑釉陶器や墨書土器、転用硯、陶製権、木簡、木製祭祀具、銅板などが出土している。土器は道路１の道路盛土内、木製祭祀具は１道路の敷葉・敷粗朶層及び河道14からの出土が大部分を占めている。

２　道路遺構

道路１（第200 ～ 207図　ＰＬ.50 ～ 57）

Ｐ７～ 14区にかけて確認された大規模な道路遺構である。方位はN－53°－Wで、丘陵裾に沿って直線的に延びる。道路盛土は表土、または耕作土（Ⅰ層）下面が、側溝や道路外盛土はⅢ層下面が検出面となる。道路盛土の大部分が遺存し、遺存状態は極めて良好である。

遺構は盛土で構築され、本体である道路盛土の他に、側溝と道路外盛土が付随する。検出した幅は、路面にあたる石敷部分が5.1 ～ 6.3m、盛土裾が6.9 ～ 7.8mである。盛土の高さは最大約1.2mを測る。石敷上面の標高は、北西端が1.45m、南東端が1.47mであり、高低差はほとんどない。ただし、南東側では後述する第５次盛土の路面が確認できないことから、上面が僅かながら削平された可能性があり、本来の路面は南東側へ緩やかに登っていくものと推察される。道路盛土下面の標高も0.25m前後



第198図　P10区Ⅴ層上面遺構分布図（2）

であるが、南東側が僅かに高い。

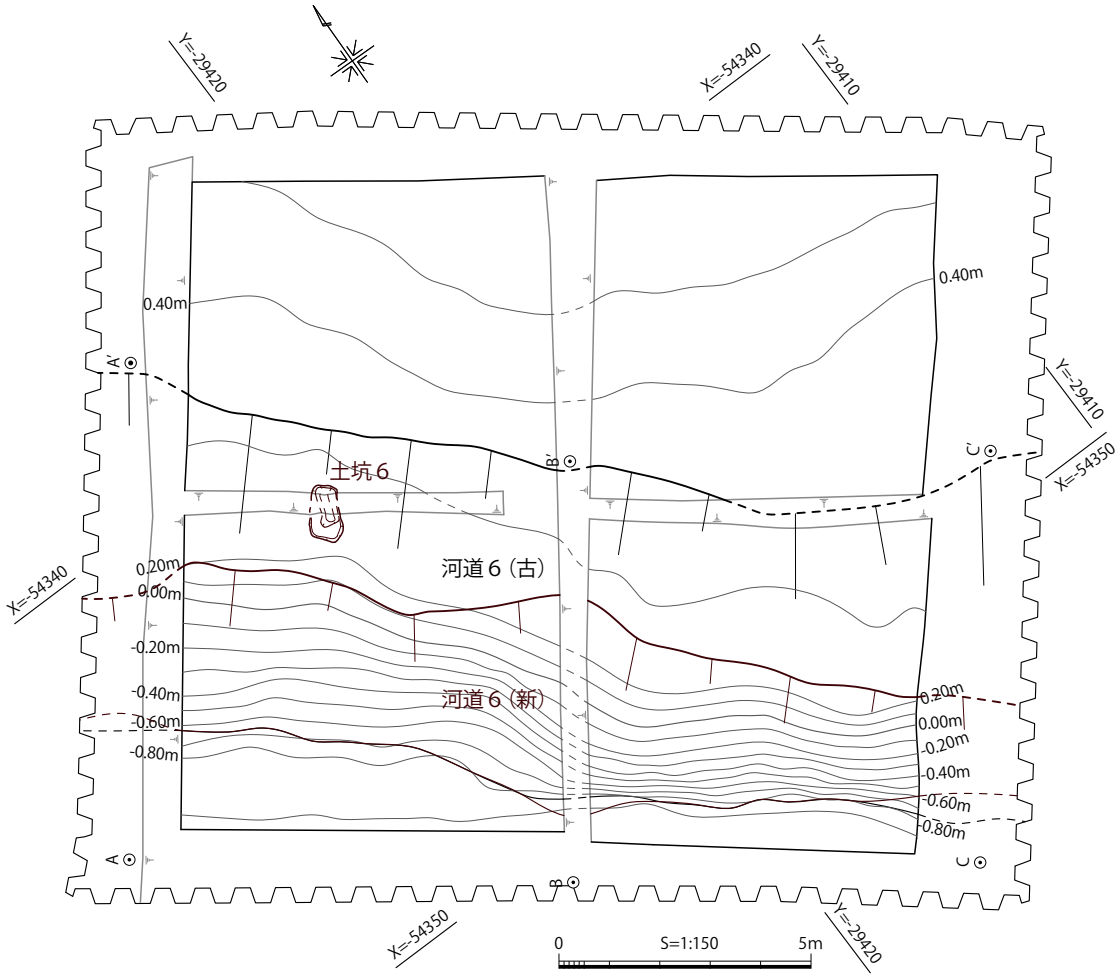
道路盛土

道路盛土は出土土器から５時期に分けられ、第１次盛土が道路敷設時、第２～５次盛土が道路改修に伴う盛土である。本調査区では第３次盛土は確認できない。時期は、第１次盛土が７世紀末から８世紀初頭、第２次盛土が８世紀後半、第４・５次盛土が10世紀後半から11世紀と推定される。検出された側溝や道路外盛土は第４・５次盛土に伴う遺構である。

第１次盛土　道路を敷設した当初の盛土で、A－A’57 ～ 67層、B－B’53 ～ 64層、C－C’12 ～ 22層が該当する。下層から褐灰色粘土、敷葉・敷粗朶層、褐灰色礫混じり粘土の３層に大別できる。褐灰色粘土層と敷葉・敷粗朶層が路床、褐灰色礫混じり粘土層が路盤にあたる。

最下層の褐灰色粘土層は緻密な粘土で、混和物が少ない（A－A’66層、B－B’63･64層、C－C’22層）。基盤となるⅤ層相当層が草本類を多く含み、含水率が高い湿地堆積であることから、基盤との分離をはかり、混合を防ぐ目的で施されたと考えられる。道路基盤は僅かに凹状を呈することから、地盤改良が行われ、土を入れ替えた可能性もあるが、明確にしえない。道路盛土の自重で基盤が沈下し、凹状を呈する可能性もある。なお、B－B’をみると、64層が堆積した後、河道14が形成されている。このことから、64層は道路盛土ではない可能性もあるが、上層の63層と酷似すること、堆積構造からも盛土と判断されることなどから道路盛土の一部と考えられる。

敷葉・敷粗朶層は厚さ10 ～ 20cm前後である（A－A’59・63層、B－B’60層、C－C’13層）。５㎜以



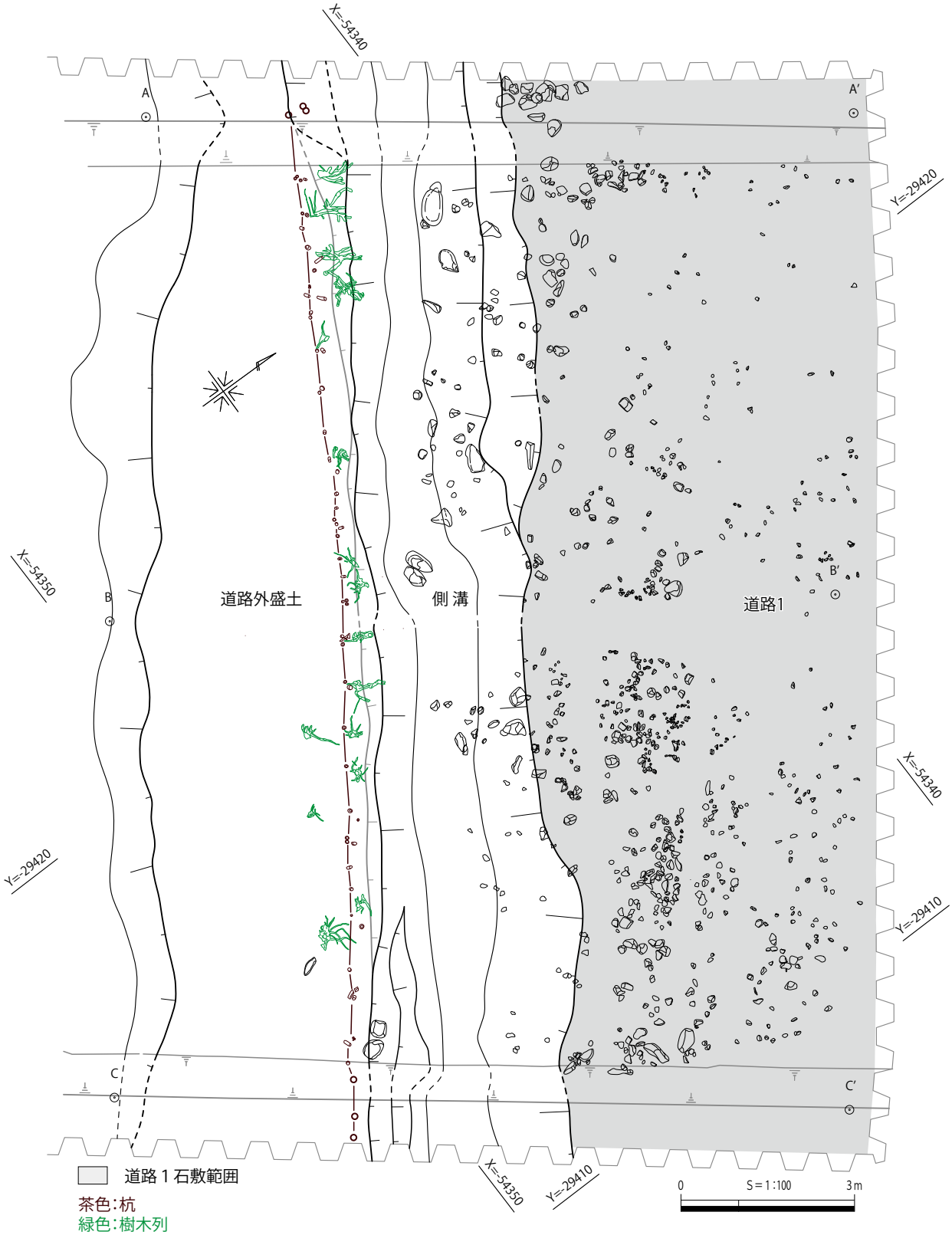
第199図　Ｐ10区Ｖ層上面遺構分布図（３）

下と薄く、断面図では表現できない箇所もみられるが、検出範囲は道路敷の中央全体に及ぶ。敷葉・敷粗朶の内部構造をみると、まず、初めに最下位に伐採された葉付きの枝を道路の方向に沿って乱雑に敷く。ただし、中央付近のｂでは道路に直交する方向の粗朶がみられ、井桁状に重層する（第203図）。また、ａでは草本類が筵状に丁寧に敷かれた箇所や木っ端が集中する箇所もみられる。

次に、敷粗朶を行った範囲の端部を中心に人頭大から一抱え程の礫を敷き並べている。これらは敷葉・敷粗朶を抑えるとともに層内を堅固にし、流出を防ぐ目的があったものと考えられる。最終的にその上部に、木っ端や土器細片、指頭大ほどの小礫を多量に混和した植物遺体を充填している。樹種は葉がイヌガヤやヤブニッケイ、粗朶がクスノキ科、ムクノキ、クマノミズキ、カヤ、ヤナギ属、木っ端はスギ、モミ属などがみられ、遺跡近傍で採取できる雑多な樹木を利用していることが窺える。最下位に敷かれた葉付きの枝はヤブニッケイが主体であり、花や実が付いていないことから冬から春にかけて伐採されたと考えられる。また、葉が巻いていないことから、伐採後、時間を置かずに敷設した可能性が高い。葉は発掘当初は鮮やかな緑色を保っていた。

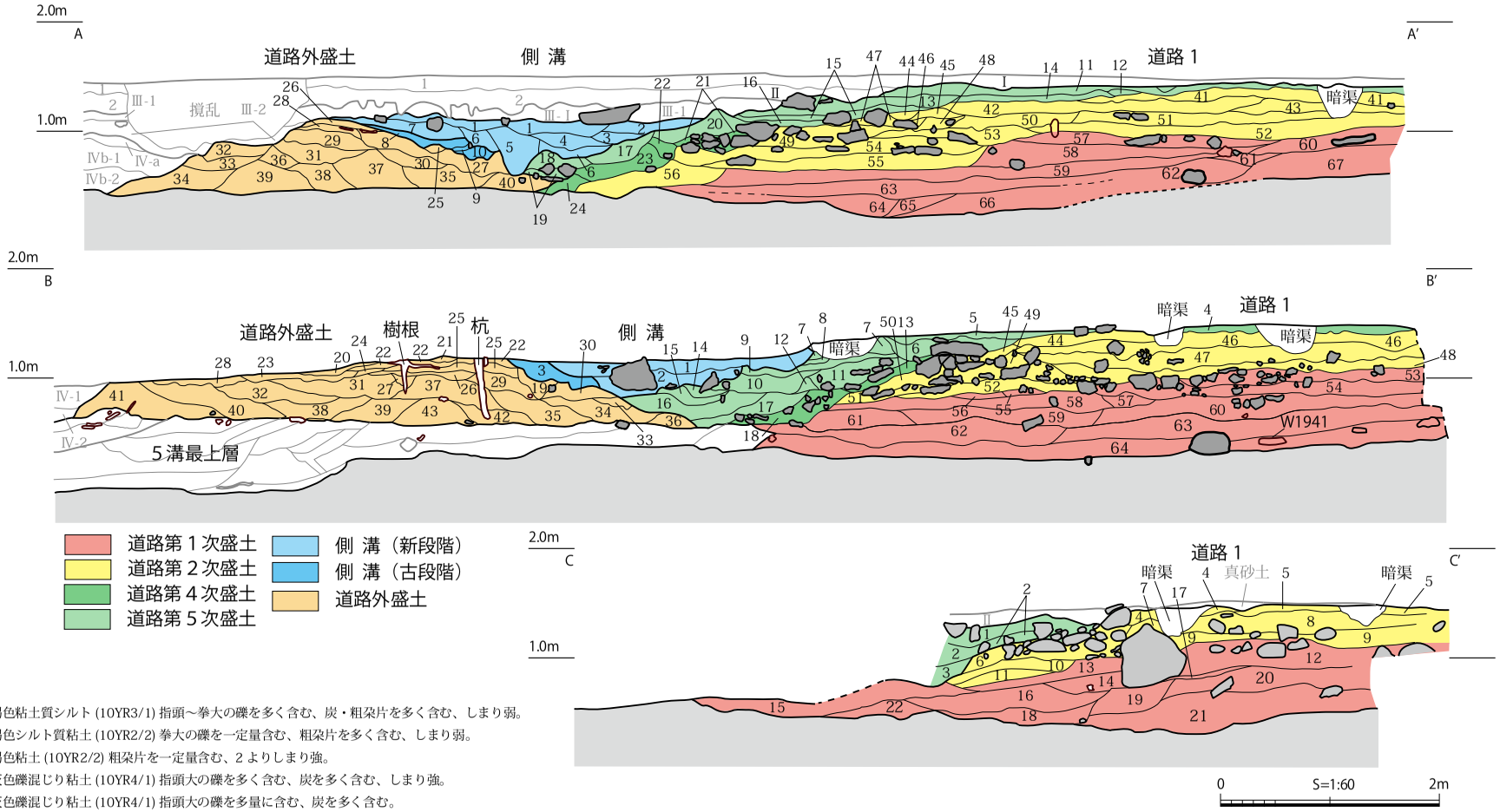
上層の灰褐色礫混じり粘土は、指頭大から拳大までの礫を密に含み、しまりが強い（Ａ－Ａ’57・58層、Ｂ－Ｂ’53・54層、Ｃ－Ｃ’13層）。痕跡は確認できないが、丁寧に搗き固められた可能性が高い。層を構成する粘土のみ見れば、下層の褐灰色粘土に類似する。

第１次盛土の出土遺物は、須恵器や土師器に加え、製塩土器、木簡、木製祭祀具、木製品、山岳紋様のある銅板、獣骨などがある。土器は灰褐色礫混じり粘土からの出土が多いが、木簡や木製祭祀具



第200図　P10区道路１

は敷葉・敷粗朶層が大部分を占めている。木簡は調査時に敷葉・敷粗朶層から出土し、木っ端の中に木簡の削り屑が含まれている可能性が考えられたため、土壌を全量回収し、水洗選別を実施している。その結果、召文木簡など木簡が８点出土した。木製祭祀具は人形や馬形などの完形品が多く、器種が一通り揃うことから、道路施工時における地鎮など何らかの祭祀行為に伴うものであった可能性が高い。



C—C′

1 黒褐色粘土質シルト (10YR3/1) 指頭～拳大の礫を多く含む、炭・粗朶片を多く含む、しまり弱。
2 黒褐色シルト質粘土 (10YR2/2) 拳大の礫を一定量含む、粗朶片を多く含む、しまり弱。
3 黒褐色粘土 (10YR2/2) 粗朶片を一定量含む、2 よりしまり強。
4 褐灰色礫混じり粘土 (10YR4/1) 指頭大の礫を多く含む、炭を多く含む、しまり強。
5 褐灰色礫混じり粘土 (10YR4/1) 指頭大の礫を多量に含む、炭を多く含む。
6 褐灰色礫混じり粘土 (10YR4/1) 拳～人頭大を超える程度の礫を密に含む、しまり、粘性強。
7 褐灰色粘土 (10YR4/1) 拳大の礫を少量含む、しまり、粘性強、炭もやや目立つ。
8 褐灰色礫混じり粘土 (10YR4/1) 拳～人頭大の礫を多く含む、炭、焼土粒を多く含む、粘性やや強。
9 褐灰色礫混じり粘土 (10YR4/1) 拳～人頭大の礫を多く含む、炭を一定量含む、しまり、粘性強。
10 褐灰色粘土 (10YR4/1) 指頭大の礫を少量含む、6 より粘性強、粗朶、木片を一定量含む。
11 黒褐色粘土 (10YR2/2) 粗朶を一定量含む、指頭大の礫も少量含む。
12 褐灰色礫混じり粘土 (10YR4/1) 色調が明るい、指頭～拳大の礫を多く含む、粘性強、炭を少量含む。
13 黒色粘土質シルト (10YR2/1) 有機物層、粗朶、木片を多量に含む、黒褐色粘土が混ざる、しまりやや弱。
14 黒褐色粘土 (10YR2/2) 木片、有機物も一定量含む、粘性強。
15 黒褐色シルト質粘土 (10YR3/2) 褐灰色粘土ブロックを多く含む、枝葉を多量に含む、しまりやや強。
16 黒褐色シルト質粘土 (10YR3/2) 粗朶をわずかに含む、炭は少量、指頭～拳大の礫がやや目立つ、粘性やや強。
17 黒褐色シルト質粘土 (10YR3/3) 指頭～拳大の礫が散在する、粗朶を少量含む、しまりやや弱。
18 黒褐色粘土 (10YR2/2) 粗朶を一定量含む、指頭大の礫も少量含む。
19 黒褐色シルト質粘土 (10YR2/2) 拳大の礫を一定量含む、粗朶片を多く含む、しまり弱。
20 黒褐色粘土質シルト (10YR3/1) 指頭～拳大の礫を多く含む、炭を多く含む、しまり弱、粗朶片を多く含む。
21 黒褐色粘土 (10YR2/2) 粗朶片を一定量含む、19 よりしまり強。
22 褐灰色粘土 (10YR4/1) 拳大の礫を含むが、均質な粘土、しまり・粘性強。

第201図　Ｐ10区道路１土層断面図（１）

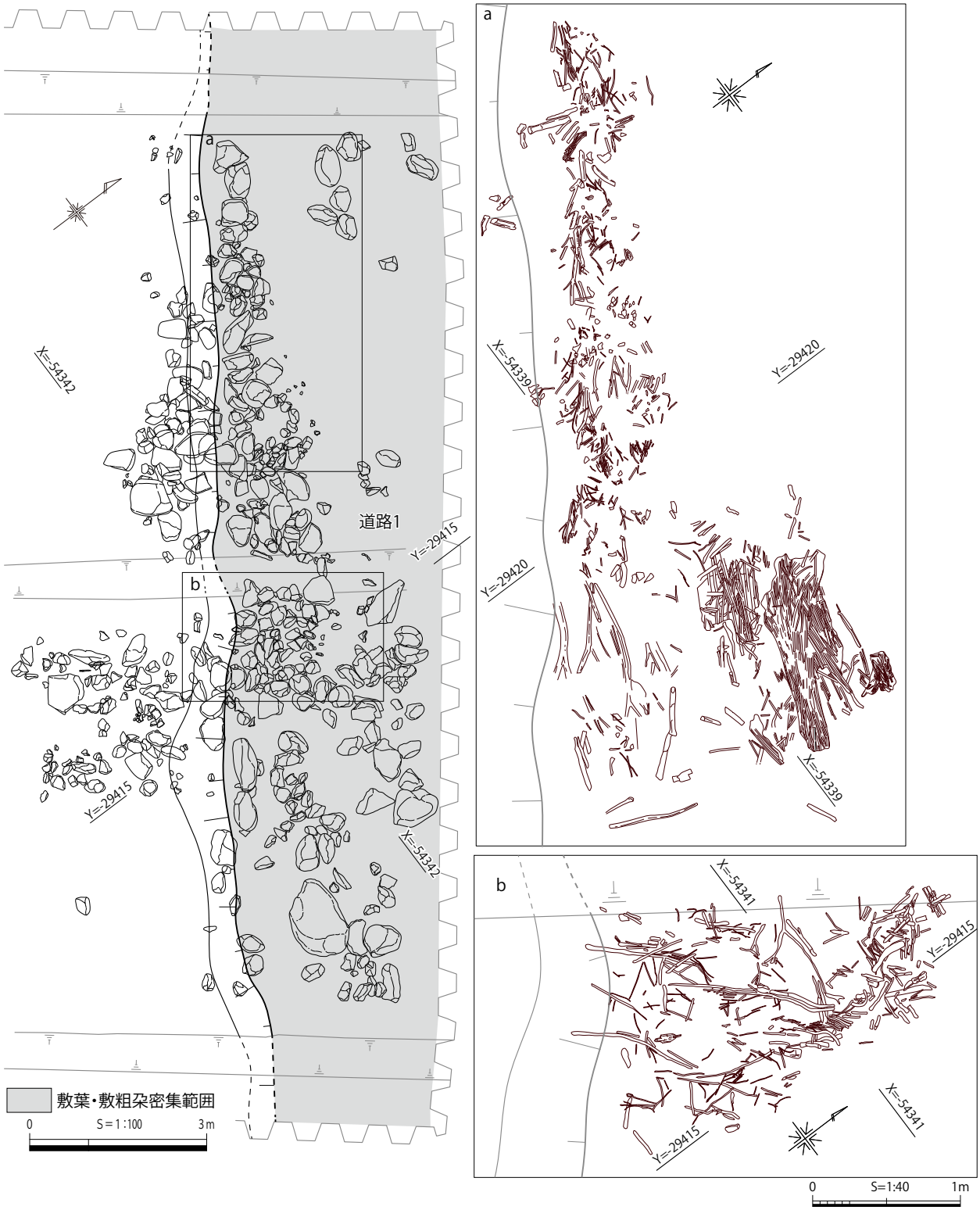
A－A'

1 黒褐色シルト (10YR3/1) 粗朶片を多く含む、Ⅲ層より砂質。
2 黒色砂質シルト (10YR2/1) 炭、灰密集層、粗朶片を一定量含む、4と類似。
3 黒褐色粘土質シルト (10YR2/2) 粗朶を少量含む、しまり、粘性弱、炭を多く含む。
4 黒色砂質シルト (10YR2/1) 炭、灰密集層、細粒砂を含む、粗朶片も多い、焼土粒もあり。
5 黒褐色粘土質シルト (10YR3/1) 粗朶片を多く含む、しまり粘性６・７より強。
6 黒褐色粘土質シルト (10YR3/1) 粗朶片を多く含む、７より炭層のブロック土を多く含む。
7 黒褐色粘土質シルト (10YR3/1) 粗朶片を多く含む、１より粘性強、炭層をブロック状に含む。
8 黒色砂質シルト (10YR2/1) 粗朶片を一定量含む、炭層主体、細～中粒砂を多く含む。
9 黒褐色粘土質シルト (10YR2/2) 粗朶を一定量含む、炭層をブロック状に含む。
10 黒褐色粘土質シルト (10YR2/2) 粗朶を含む、炭層をブロック状に含む、９よりしまり強。
11 黒褐色礫混じり粘土 (10YR3/1) 指頭～拳大の礫を密に含む、しまり強、路面。
12 黒褐色礫混じり粘土 (10YR3/1)11 に類似するが、しまり、粘性やや弱。
13 黒褐色礫混じり粘土 (10YR3/1) 粗朶を多く含む、指頭～拳大の礫を多く含む、しまり弱。
14 黒褐色礫混じり粘土 (10YR3/1) 指頭～拳大の礫を密に含む、しまりやや弱、炭多い。
15 黒色シルト (10YR2/1) 炭層、灰を含む、しまりやや強。
16 黒褐色シルト質粘土 (10YR2/2) やや砂質、粗朶を一定量含む。
17 黒褐色シルト質粘土 (10YR2/2) 指頭～拳大の礫を少量含む、粗朶を一定量含む。
18 黒褐色粘土 (10YR2/2) 粗朶を少量含む、粘性、しまり強。
19 黒褐色粘土 (10YR2/2) 粗朶を一定量含む、拳大の礫を含む、しまり、粘性やや強。
20 黒褐色シルト質粘土 (10YR2/2) 粗朶を含む、指頭～拳大の礫を少量含む、しまりやや強。
21 黒褐色シルト質粘土 (10YR2/2) 拳～人頭大の礫を密に含む。粗朶を含む、しまりやや強。
22 黒褐色シルト質粘土 (10YR2/2) 粗朶、砂を一定量含む、しまりやや弱。
23 黒褐色粘土 (10YR2/2) 粗朶を一定量含む、しまり、粘性強、17 より粘性強。
24 黒褐色粘土 (10YR2/2) 粗朶片を一定量含む、粘性強。
25 黒褐色粘土質シルト (10YR2/2) 粗朶をわずかに含む、27 に類似する。
26 黒褐色粘土質シルト (10YR3/1) マコモ層による浸食が著しい、粗朶層 (長軸方向主体)
27 黒褐色シルト質粘土 (10YR2/2) 粗朶を一定量含む、炭層をラミナ状に含む。
28 黒褐色シルト質粘土 (10YR2/2) しまり、粘性強、粗朶片を一定量含む。
29 黒褐色粘土 (10YR2/2) 粗朶を少量含む、しまり、粘性強、やや白味がかる。
30 黒褐色シルト質粘土 (10YR2/2) 粗朶片を少量含む、やや炭を含む。
31 黒褐色粘土 (10YR2/2) 粗朶を 29 より多く含む、29 よりしまり、粘性弱。
32 黒褐色シルト質粘土 (10YR2/2) 粗朶を含まない。
33 黒褐色シルト質粘土 (10YR2/2) 粗朶片を含まない、32 より粘性強。
34 黒褐色粘土 (10YR2/2)32・33 より粘性強、粗朶をわずかに含む。
35 黒褐色粘土 (10YR2/2) 粗朶を少量含む、30 より粘性強。
36 黒褐色粘土 (10YR2/2) 粗朶を含まない、31 より粘性強。
37 黒褐色粘土 (10YR2/2) 粗朶を少量含む、31 よりしまり、粘性強。
38 黒褐色粘土 (10YR2/2) 粗朶を含まない、36 より粘性強だが 39 よりは弱。
39 黒褐色粘土 (10YR2/2) 粘性・しまり強、粗朶をわずかに含む。
40 黒褐色粘土 (10YR2/2) 粗朶片を一定量含む、しまり、粘性強。
41 褐灰色礫混じり粘土 (10YR4/1) 指頭大の礫を密に含む、しまり強、炭を多量に含む。
42 褐灰色礫混じり粘土 (10YR4/1) 指頭～拳大の礫を多量に含む、しまり強、炭多い。
43 褐灰色礫混じり粘土 (10YR4/1) 指頭大の礫を多量に含む、42 よりしまりやや強。
44 褐灰色礫混じり粘土 (10YR4/1) 指頭大の礫を密に含む、粘性やや強、炭多い。
45 褐灰色礫混じり粘土 (10YR4/1) 指頭～拳大の礫を多く含む、炭多い。
46 褐灰色礫混じり粘土 (10YR4/1) 拳～人頭大の礫を多く含む、炭多い。
47 褐灰色礫混じり粘土 (10YR4/1) 拳～人頭大の礫を多く含む、44 より粘性やや強、炭多い。
48 褐灰色礫混じり粘土 (10YR4/1) 指頭大の礫を含む、炭、焼土粒を多く含む。
49 褐灰色礫混じり粘土 (10YR4/1) 拳～人頭大の礫を多量に含む、しまり強、炭を多く含む。
50 黒褐色礫混じり粘土 (10YR3/1) 炭と焼土粒を多量に含む、指頭大の礫を含むが少なめ、しまり 42、51 よりやや弱、炭を多く含む。
51 褐灰色礫混じり粘土 (10YR4/1) 指頭～拳大の礫を多量に含む、しまり強、炭を多く含む。
52 褐灰色礫混じり粘土 (10YR4/1) 指頭～拳大の礫を多量に含む、しまり強、51 より粘性強、炭多い。
53 褐灰色粘土 (10YR4/1) 拳～人頭大の礫を少量含む、粘性やや強、炭を多量に含む。
54 褐灰色粘土 (10YR4/1) 拳大の礫を少量含む、しまり、粘性強。
55 褐灰色シルト質粘土 (10YR4/1) 粗朶を含まない、粘性強、しまりやや弱。
56 黒褐色粘土 (10YR2/2) 色調がやや暗い、粗朶、植物遺体を一定量含む、しまりやや弱。
57 褐灰色礫混じり粘土 (10YR4/1) 指頭大の礫を密に含む、炭を含む量が少ない。
58 褐灰色礫混じりシルト (10YR4/1)φ5 ～ 20cm の礫を含む、粘性、しまり強、炭を含む。
59 黒色シルト (10YR1.7/1) 小枝、葉を多量に含む、粘土ブロック、拳大の礫を多量に含む。
60 褐灰色粘土 (10YR4/1) しまり、粘性強、炭を少量含む。
61 褐灰色シルト質粘土 (10YR4/1)60 より粘性、しまり弱。
62 褐灰色粘土質シルト (10YR4/1) 草本類、木片を多く含む。
63 暗褐色粘土質シルト (10YR3/3) 敷葉層か、粗朶、葉を多量に含む、小礫を含む。
64 黒褐色シルト質粘土 (10YR3/2) 指頭～拳大の礫を多量に含む、粗朶、葉を一定量含む。
65 褐灰色砂混じりシルト (10YR4/1) 細粒砂を含む、指頭大の礫を少量含む、炭混じり。
66 褐灰色粘土 (10YR4/1) 均質な粘土、ブロック土を多量に含む、しまり、粘性強。
67 黒褐色シルト質粘土 (10YR3/1) 草本類、木片を多く含む、上面に拳大ほどの礫を多量に含む。

B－B'

1 黒褐色シルト (10YR3/1) 粗朶を一定量含む、Ⅲ層由来、砂礫を少量含む。
2 黒褐色シルト (10YR3/1) 粗朶を一定量含む、指頭大～拳大程の礫を少量含む、炭を多く含む、１よりやや砂質。
3 黒褐色粘土質シルト (10YR3/1) 粗朶を少量含む、２りしまり・粘性やや強。
4 黒褐色礫混じり粘土 (10YR3/1) 指頭大～拳大の礫を密に含む、しまり強、炭を多く含む。
5 黒褐色礫混じり粘土 (10YR3/2) 指頭大～拳大の礫を多量に含む、炭を多い。しまり強
6 黒色粘土質シルト (10YR2/1) 指頭大～人頭大の礫を含む、粗朶、炭、灰のブロック土を含む。
7 黒色シルト質粘土 (10YR2/1) 粗朶を少量含む、やや砂質、炭多い、φ1cm 以下の礫を含む。
8 黒色シルト (10YR2/1) 炭、灰密集層、7 より砂質、粗朶はほとんど含まない。
9 黒褐色シルト質粘土 (10YR2/2) 粗朶片を少量含む、φ1cm などの礫を少量含む。
10 黒褐色粘土質シルト (10YR3/1) 粗朶を多く含む、炭をブロック状に含む、しまりやや弱。
11 黒褐色粘土質シルト (10YR3/1) 拳大程の礫を多量に含む、しまりやや弱。
12 黒褐色シルト質粘土 (10YR2/2) 粗朶、炭を多く含む、10 よりしまり、粘性強。
13 黒褐色粘土 (10YR2/2) 拳大～人頭大の礫を密に含む、粗朶を含まない、しまり・粘性やや強。
14 黒褐色粘土質シルト (10YR3/1) 粗朶を一定量含む、やや砂質、炭をブロック状に含む。
15 黒褐色シルト質粘土 (10YR2/2) 粗朶を少量含む、炭はやや少ない。
16 黒褐色シルト質粘土 (10YR2/2) 粗朶を少量含む、15 より粘性、しまり強。
17 黒褐色シルト質粘土 (10YR2/2)16 に類似。指頭大の礫を少量含む、粗朶は 16 より多い。
18 黒褐色粘土 (10YR2/2) 拳～人頭大の礫を密に含む。粗朶を少量含む、13 より粘性・しまり弱。
19 黒褐色粘土質シルト (10YR2/2) 粗朶、指頭大～拳大の礫を少量含む、炭層がラミナ状に入る。
20 黒褐色シルト質粘土 (10YR3/2) 粗朶をわずかに含む、しまり・粘性やや強。
21 黒褐色粘土質シルト (10YR2/3) 敷粗朶層、長軸方向の小枝主体、炭を含む、22 よりしまり強。
22 黒褐色粘土質シルト (10YR2/3) 敷粗朶層、長軸方向の小枝主体、炭、砂を含む、21 より粘性弱。
23 黒褐色粘土質シルト (10YR2/3) 敷粗朶層、小枝を含むが、木片主体、炭も多く含む。
24 黒褐色粘土質シルト (10YR2/2) 粗朶片を一定量含む、炭ももやや目立つ。
25 黒褐色シルト質粘土 (10YR2/2) 粗朶片をわずかに含む、しまり、粘性強。
26 黒褐色シルト質粘土 (10YR2/2) 粗朶片を少量含む、25 よりしまり弱、炭を少量含む。
27 黒褐色シルト質粘土 (10YR2/2) しまり・粘性やや弱。
28 黒褐色シルト質粘土 (10YR2/2) 表層に小枝、小片を敷くが少ない、しまり・粘性強。
29 黒褐色シルト質粘土 (10YR2/2) 粗朶片をわずかに含む、26 よりしまり・粘性強。
30 黒褐色シルト質粘土 (10YR2/2) 粗朶を少量含む、炭がやや目立つ。
31 黒褐色シルト質粘土 (10YR2/2) 粗朶片をわずかに含む、炭をわずかに含む。
32 黒褐色シルト質粘土 (10YR2/2)31 に類似するが、粘性やや強。
33 黒褐色シルト質粘土 (10YR2/2)27 層に類似するが、粘性やや強。
34 黒褐色シルト質粘土 (10YR2/2) 粗朶を一定量含む、炭をやや多く含む。
35 黒褐色シルト質粘土 (10YR2/2) 粗朶片を少量含む、29 より粘性やや強。
36 黒褐色粘土 (10YR2/2) 粗朶をほとんど含まない、29 層よりしまり、粘性強。
37 黒褐色粘土 (10YR2/2) 粗朶をほとんど含まない、しまり・粘性強。
38 黒褐色粘土 (10YR2/2) 粗朶をほとんど含まない、しまり・粘性強。
39 黒褐色粘土 (10YR2/2) 粗朶を含まない、42 と類似するが、しまりやや弱。
40 黒褐色粘土 (10YR2/2) 粗朶を含まない、38 よりしまり・粘性やや強。
41 黒褐色粘土 (10YR2/2) 粗朶を含まない、40 よりもしまり、粘性強、43 に類似するが、礫は含まない。
42 黒褐色粘土 (10YR2/2) 粗朶を含まない、37 より粘性強・しまりやや弱。
43 黒褐色粘土 (10YR2/2) 粗朶を含まない、42、39 よりもしまり・粘性強、指頭大～拳大の礫を少量含む。
44 黒褐色礫混じり粘土 (10YR3/1) 指頭～拳大の礫を密に含む、しまり強、炭多い。
45 黒褐色礫混じり粘土 (10YR3/1) 指頭大の礫を含む、粗朶を一定量含む、しまり強。
46 褐灰色礫混じり粘土 (10YR4/1) 指頭～拳大の礫を密に含む、しまり強、炭を 4 より多い。
47 褐灰色礫混じり粘土 (10YR4/1) 指頭～拳大の礫を密に含むが、46 よりやや大きめ、炭も 46 より多量、しまり強
48 褐灰色礫混じり粘土 (10YR4/1) 指頭～拳大の礫を密に含む、47 より炭が少なく、しまり強。
49 褐灰色礫混じり粘土 (10YR4/1) 指頭～人頭大以上の礫を密に含む、しまり強、炭化物多い。
50 褐灰色礫混じり粘土 (10YR4/1) 拳大の礫を多く含む、粘性強、炭がやや目立つ
51 褐灰色礫混じり粘土 (10YR4/1) 人頭大以上の礫を含む、62 よりしまり強、炭化物目立つ。
52 褐灰色礫混じり粘土 (10YR4/1) 指頭～拳大の礫を含むが少ない、しまりやや弱、粘性やや強、炭はやや目立つ。
53 褐灰色礫混じり粘土 (10YR4/1) 指頭～拳大の礫を密に含む、しまり強、盛土上層までに比べ炭 が少なく、色調もやや明るい
54 褐灰色礫混じり粘土 (10YR4/1) 指頭～拳大の礫を密に含む、しまり強、53 より炭が少なく、粘性強
55 黒褐色シルト質粘土 (10YR3/1) 礫を含むが少ない、しまりやや弱。
56 黒褐色シルト質粘土 (10YR3/1) 礫を含まない、55 より粘性やや弱。
57 褐灰色礫混じり粘土 (10YR4/1) 指頭～拳大の礫を密に含む、しまりやや弱、炭を少量含む。
58 黒褐色シルト質粘土 (10YR3/1) 拳大の礫をわずかに含む、粗朶片を少量含む。
59 黒褐色シルト質粘土 (10YR3/2) 指頭～拳大の礫を少量含む、粗朶、葉を一定量含む、しまり・粘性やや弱。
60 暗褐色シルト (10YR3/3) 敷葉層、粗朶、葉主体、下面に葉を敷き、上部に指頭大～拳大の礫を敷く、砂も少量含む。
61 黒褐色粘土 (10YR2/2) 指頭大の礫をわずかに含む、粘性強。
62 黒褐色粘土質シルト (10YR3/1) やや砂混じり、指頭～拳大の礫を多く含む、粗朶、葉を一定量含む、炭も多い。
63 褐灰色粘土 (10YR4/1) 均質な粘土層、粘性、しまり強、枝をわずかに含む、炭がやや目立つ。
64 褐灰色粘土 (10YR4/1)63 に類似するが、指頭大ほどの礫を含む、枝をわずかに含む、炭がやや目立つ。

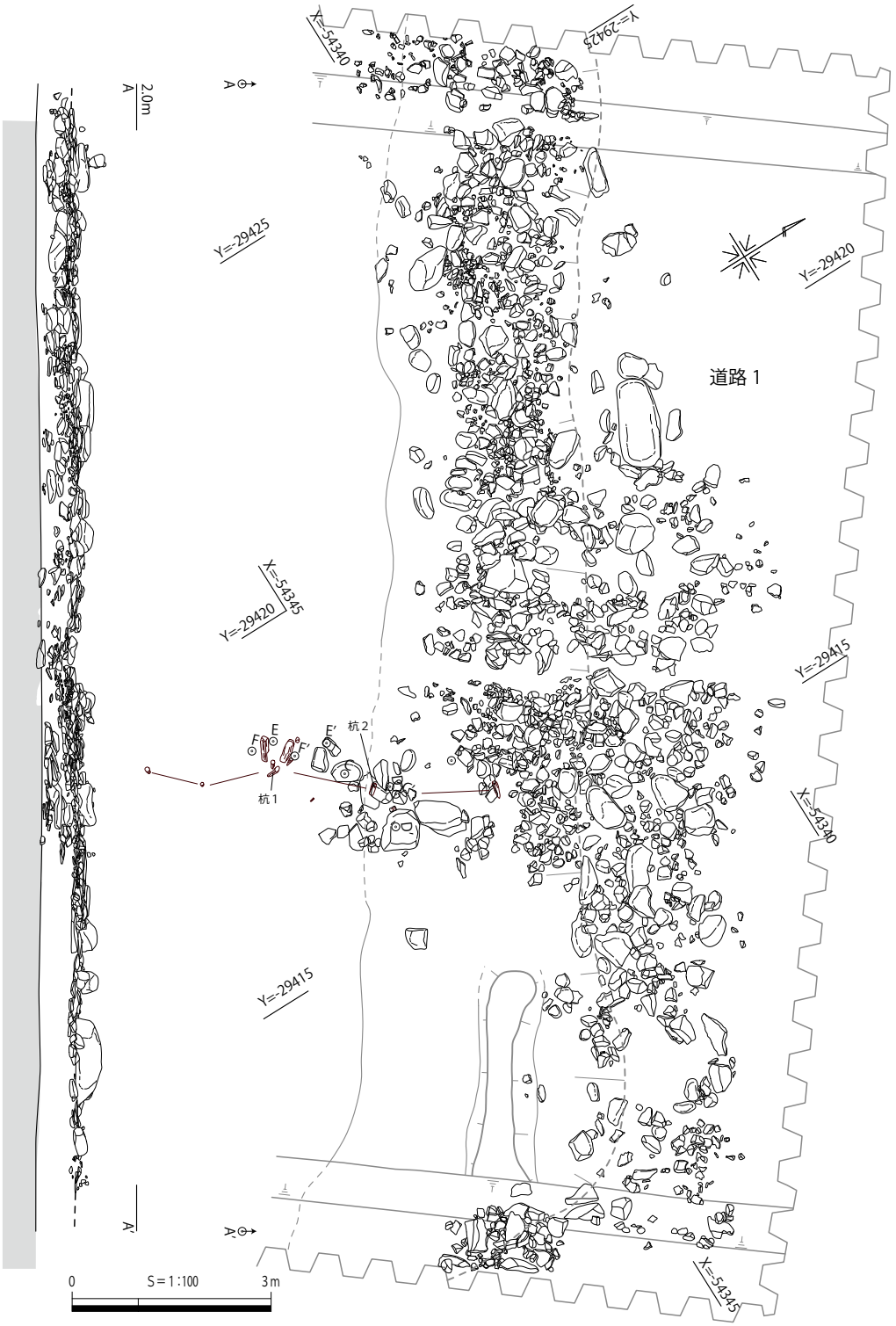
第202図　P10区道路１土層断面図（２）



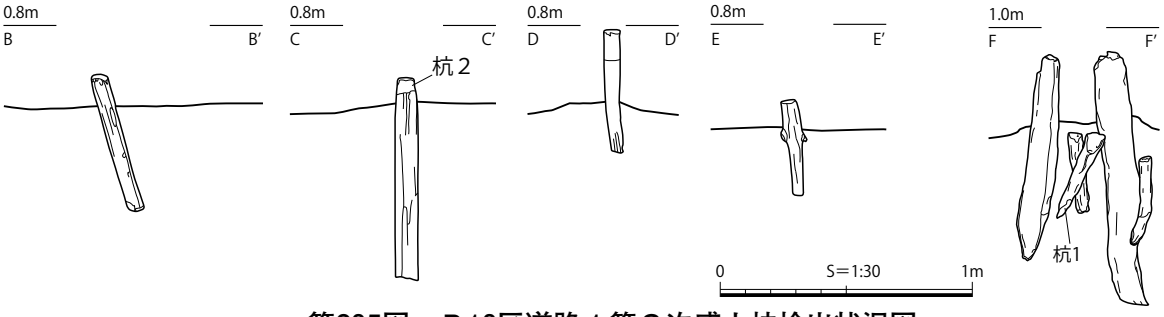
第203図　Ｐ10区道路１第１次盛土敷葉・敷粗朶検出状況図

第１次盛土の時期は、須恵器が岡田編年出雲Ⅱ～Ⅲ期に、土師器が飛鳥Ⅳ～Ⅴに比定され、７世紀後葉から８世紀初頭と考えられる。放射性炭素年代測定では２σ暦年代範囲で敷葉が666－723calAD（61.1％）、粗朶が651－701calAD（87.0％）、木っ端が544－620 calAD（95.4％）の値を示しており、概ね齟齬はない。

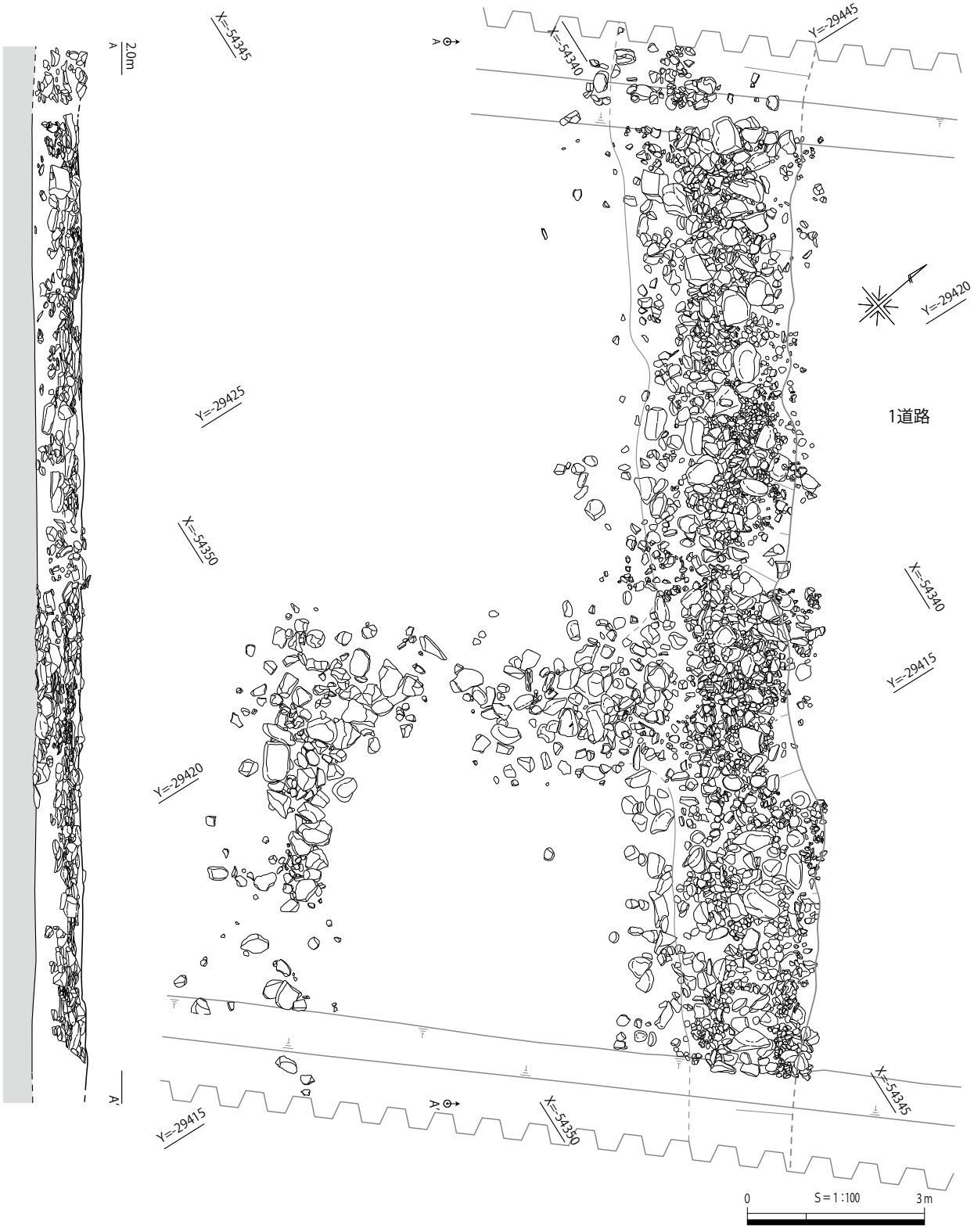
第２次盛土　　道路改修に伴う盛土で、A－A’41 ～ 56層、B－B’44 ～ 52層、C－C’4 ～ 11層が該当する。路盤にあたる盛土が遺存し、基本的に黒褐色を呈する礫混じり粘土を主体とする。第１次盛土



第204図　P10区道路１第２次盛土路肩改修礫検出状況図

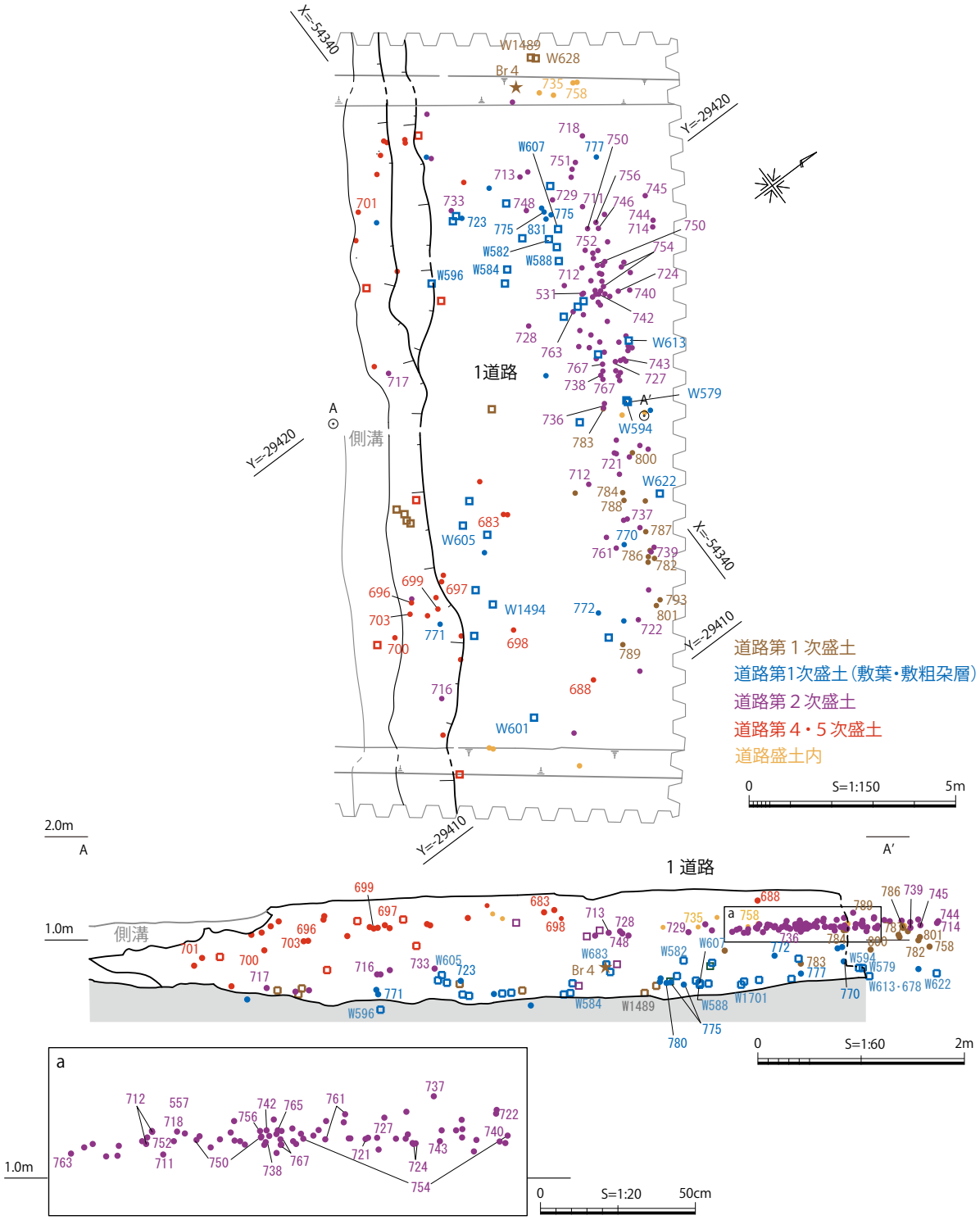


第205図　P10区道路１第２次盛土杭検出状況図



第206図　Ｐ10区道路１第４・５次盛土路肩改修礫検出状況図

の路盤にあたる褐灰色礫混じり粘土層と酷似するが､礫の密度がやや薄く､炭を多く含む点が異なる。各層とも堅固にしまり、痕跡は確認できないが、搗き固めながら盛り上げられたことが窺える。Ｂ－Ｂ’をみると、法面付近の49～52層が凸状をなしており、両端に土手を築いた後、その内部を充填する盛土工法が採られていた可能性が高い。南東側で検出された長さ３ｍ、幅１ｍ程の細長い盛土も、これを示唆するものとみられる（第204図）。



第207図　P10区道路１盛土内遺物出土状況図

盛土法面には拳大から一抱え大の角礫が貼り付けられている。路肩や法面を保護、補強する役割を果たしたと考えられる。第４・５次盛土における貼石もほぼ同じ位置に重複するため、遺存状況は良好である。道路改修に伴い盛土内に一括廃棄されたと考えられるが、完形の個体が多く、赤彩の土師器杯・皿が目立つことから、何らかの祭祀行為が行われた可能性も考えられる。

第２次盛土の時期は、須恵器が岡田編年出雲Ⅳ A ～Ⅳ B 期に、土師器が伯耆国庁第１段階に比定されることから８世紀後半と考えられる。放射性炭素年代測定では杭１が 563 － 641calAD（95.4％）、杭２が 543 － 621calAD（95.4％）の値を示し、齟齬がみられる。

第４・５次盛土　　道路改修に伴う盛土である。道路外盛土との重複関係からＡ－Ａ’21 ～ 24層、Ｂ－Ｂ’13・18層が第４次盛土、Ａ－Ａ’11 ～ 20層、Ｂ－Ｂ’ ４～ 12・14 ～ 17層が第５次盛土である。

Ａ－Ａ’11層、Ｂ－Ｂ’４・５層は路面に相当する。黒褐色礫混じり粘土を主体とし、指頭大から拳大程の礫を密に含む。層厚５～ 10㎝程である。下層の路盤に相当する盛土に比べ小礫が主体で、粒径も揃う。土器細片も多く含まれており、破砕し意図的に混和したと考えられる。上面には近世以降の暗渠が縦横に走っていることもあり、凹凸面などの明確な通行痕跡は確認できていない。ただし、層全体が非常に堅く締まっている。

Ａ－Ａ’13 ～ 24層、Ｂ－Ｂ’６～ 18層は路肩から法面にかけて拡充された盛土である。拳大から一抱え大程の角礫が密に貼り付けられた後に、盛土で被覆している。貼石は第４・５次盛土のものが重複しているとみられ、帰属を明確に区別できないものが多い。第２次盛土同様に、礫は路肩や法面を保護、補強する目的と考えられる。図化していないが、僅かながら細い丸太杭で礫を固定している箇所もみられる。ただし、南東側では貼石に取り付くように幅１.５～２ｍ前後の石敷がＬ字状に検出されている。この部分については盛土の保護や補強とは別の機能を果たしていたと考えられるが、明確にしえない。貼石を被覆する盛土は黒褐色シルトから粘土を主体とし、小礫や砂、粗朶を混和させている。Ａ－Ａ’15層やＢ－Ｂ’８層は炭や灰を密に含み、特徴的な盛土であるが、土木工学的な機能は明らかにしえない。

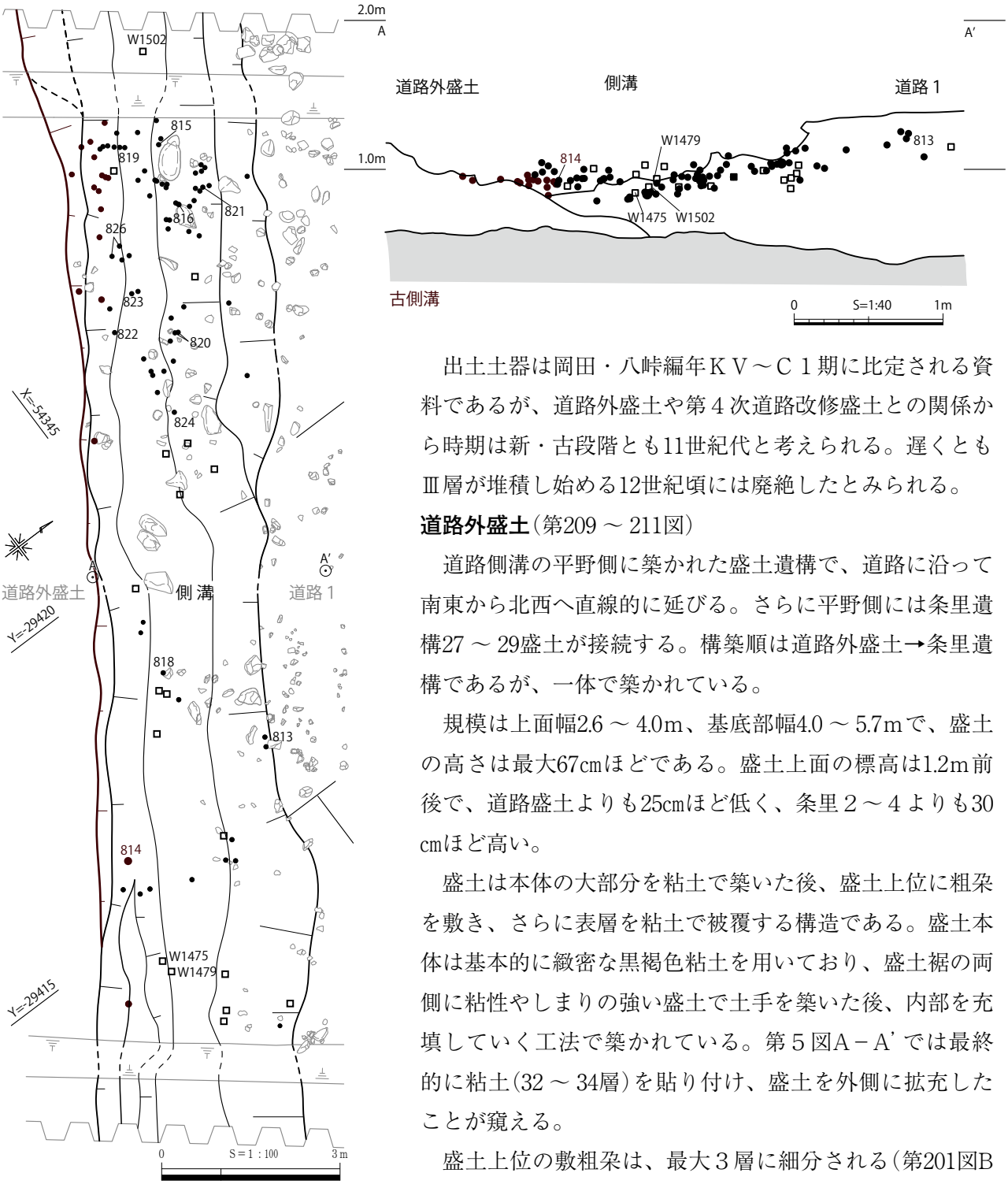
第４・５次盛土の出土遺物は須恵器や土師器、緑釉陶器、木製品、木製祭祀具などがある。土器は土師器の杯・皿の出土が目立つ。第４・５次盛土の時期は、須恵器・土師器が岡田・八峠編年ＫⅤ～Ｃ１期に比定されることや、道路外盛土との先後関係から第４次盛土が10世紀後半、第５次盛土が11世紀代と考えられる。

側　溝（第208図　ＰＬ.50・51－１）

平野側の道路側溝にあたり、道路本体に沿って直線的に延びている。道路盛土の外側に道路外盛土を築くことで、その間の窪地が側溝として作出されたと考えられる。道路の第５次盛土に伴う側溝であり、重複関係から古段階と新段階の２時期に分けられる。

古段階は、新段階の側溝が重複するため、道路外盛土側の肩部付近しか確認できない。幅は明確ではないが、深さは最大35㎝ほどである。埋土は黒褐色粘土質シルトを主体とし、溝内は基本的に乾燥した環境であったことが窺える。第５図Ａ－Ａ’では３層に細分され、８層は炭粒が主体となる特異な層である。いわゆる粉炭層に近く、道路の第５次盛土に類似した盛土がみられる。10層は道路外盛土からの流入土で、その盛土内に含まれていた粗朶片がみられる。遺物は須恵器や土師器、木製品が少量出土している。

新段階は、古段階とほぼ同じ位置に掘削し直されている。規模は幅2.5 ～ 3.4m、深さ最大50㎝ほどである。底面レベルは0.82m～ 0.83mを測り、北西端と南東端で高低差はほとんどみられない。断面形は皿状で、壁面の立ち上がりは比較的緩やかである。埋土はⅢ層に類似する黒褐色シルトからなり、溝内は基本的に乾燥した環境下にあったと考えられる。ただし、埋土には砂を多く含んでおり、ラミナはみられないが、一時的に滞水や弱い水流が存在した可能性がある。溝内からは指頭大から人頭大に至る角礫が出土しているが、これらは道路改修時に路肩に貼り付けられた礫が流出したものと考えられる。遺物は須恵器や土師器、木製品が一定量出土している。とくに北西端付近では溝底を中心に完形に近い土師器杯、皿が集中している。



第208図　P10区道路１側溝

出土土器は岡田・八峠編年ＫⅤ～Ｃ１期に比定される資料であるが、道路外盛土や第４次道路改修盛土との関係から時期は新・古段階とも11世紀代と考えられる。遅くともⅢ層が堆積し始める12世紀頃には廃絶したとみられる。

道路外盛土（第209 ～ 211図）

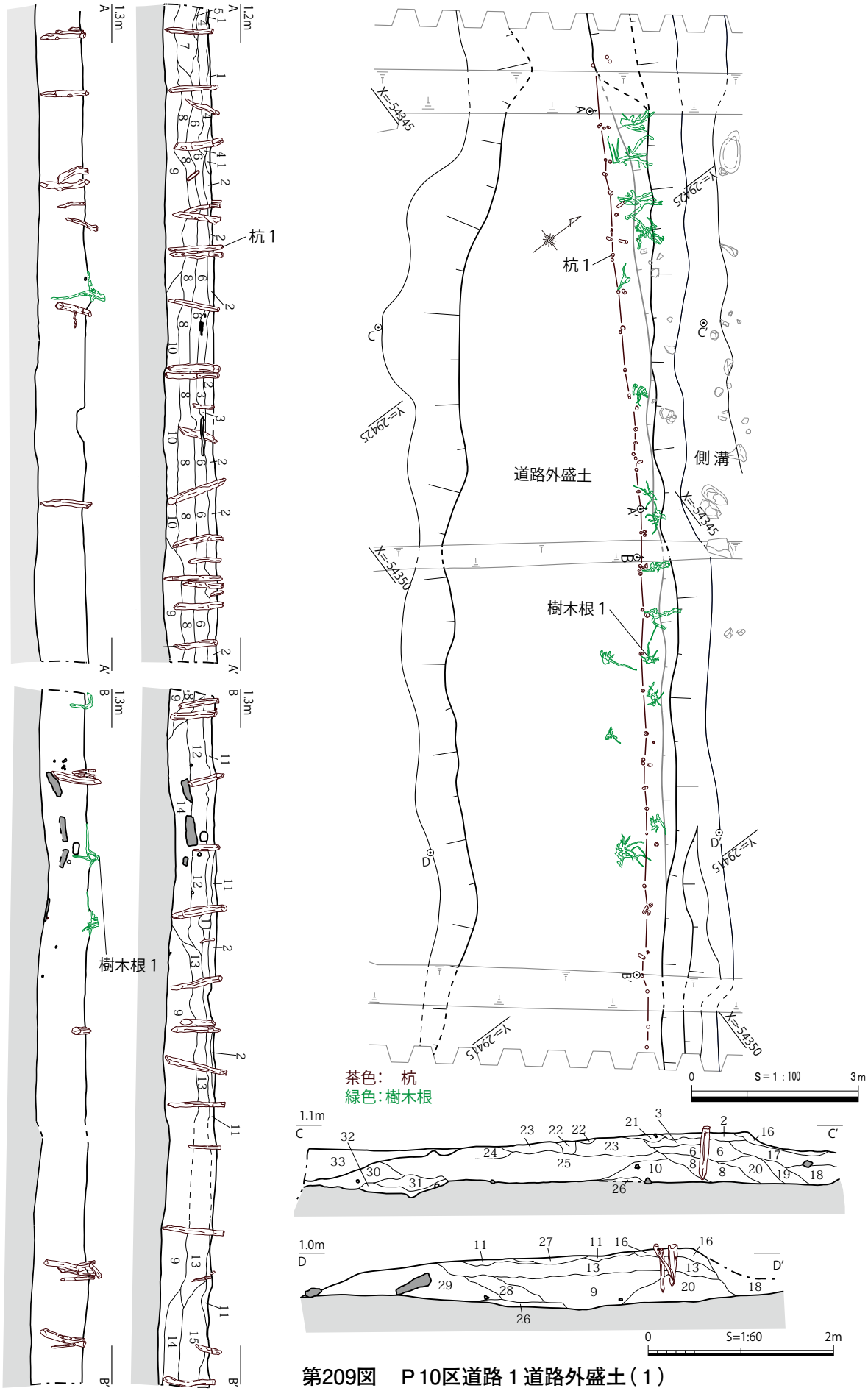
道路側溝の平野側に築かれた盛土遺構で、道路に沿って南東から北西へ直線的に延びる。さらに平野側には条里遺構27 ～ 29盛土が接続する。構築順は道路外盛土→条里遺構であるが、一体で築かれている。

規模は上面幅2.6 ～ 4.0m、基底部幅4.0 ～ 5.7mで、盛土の高さは最大67cmほどである。盛土上面の標高は1.2m前後で、道路盛土よりも25cmほど低く、条里２～４よりも30cmほど高い。

盛土は本体の大部分を粘土で築いた後、盛土上位に粗朶を敷き、さらに表層を粘土で被覆する構造である。盛土本体は基本的に緻密な黒褐色粘土を用いており、盛土裾の両側に粘性やしまりの強い盛土で土手を築いた後、内部を充填していく工法で築かれている。第５図A－A’では最終的に粘土（32 ～ 34層）を貼り付け、盛土を外側に拡充したことが窺える。

盛土上位の敷粗朶は、最大３層に細分される（第201図B－B’21 ～ 23層）。層厚は最大でも10cmほどと薄い。粗朶は径１～３cmの枝が用いられているが、南東半では粗朶の代わりに削り屑が４m×１m程の範囲で集中して敷設されている。これら削り屑には墨書は見られないことや破片が大きいことから木簡の削り屑ではなく、建築部材等を加工した際に生じた端材が主体と考えられる。一方で、北西半を中心として粗朶の上に掌大から人頭大程度の礫が散在しており、敷粗朶を押さえ、拘束する目的があったと考えられる。敷粗朶を覆う粘土は薄く、緻密で白みがかる粘土である（２層）。

盛土上では側溝側の肩部で杭列と樹木根が並行するように検出されている。まず、杭列は１列、ないしは２列に並んでいる。打設間隔は30 ～ 80cmと、ややばらつきがある。基本的に密に打設されて



第209図　Ｐ10区道路１道路外盛土（１）

1　黒褐色シルト質粘土 (10YR2/2) 粗朶をほとんど含まない。しまりやや強。
2　黒褐色粘土 (10YR2/2) 粗朶を含まない。1より白色を帯びる。しまり強。
3　黒褐色シルト質粘土 (10YR2/2) 1～3cmまでの粗朶(長軸方向)が密集する。砂を含まない。
4　黒褐色粘土 (10YR2/2) 粗朶を少量含む。しまり粘性やや強。
5　黒褐色粘土 (10YR2/1) 炭灰密集層。黒褐色粘土を含む。
6　黒褐色粘土 (10YR2/2) 僅かに細砂を含む。粗朶を僅かに含む。2･4より粘性やや強。
7　黒褐色粘土 (10TR2/2) 粗朶が散在する。6よりしまり粘性強。
8　黒褐色粘土 (10YR2/2) 粗朶をほとんど含まない。しまり粘性強。
9　黒褐色粘土 (10YR2/2) 粗朶をほとんど含まない。6～8よりしまり粘性強。
10 黒褐色シルト質粘土(10YR2/2) 粗朶を少量含む。9よりしまり粘性強。
11 黒褐色シルト質粘土(10YR2/2) 粗朶、草木類を少量含む。粗粒砂を少量含む。しまり弱。
12 黒褐色粘土 (10YR2/2) 粗朶をほとんど含まない。6･8より粘性やや弱。
13 黒褐色粘土 (10YR2/2) 粗朶を僅かに含む。12より粘性しまり強。
14 黒褐色粘土 (10YR2/2) 粗朶が散在する。12よりしまりやや弱。
15 黒褐色粘土 (10YR2/2) 粗朶をほとんど含まない。13よりしまりやや強。
16 黒褐色シルト質粘土(10YR2/2)炭と灰が混ざる土を含む。細粒砂を定量含む。
　粗朶は少量。
17 黒褐色シルト質粘土 (10YR2/2) 炭と灰が混ざる土を含む。細粒砂を定量含む。
　粗朶は 16 よりさらに少ない。
18 黒褐色シルト質粘土 (10YR2/2) 炭と灰が混ざる土をわずかに含む。
　粗朶を少量含む。16・17 より粘性強だがしまりは弱。
19 黒褐色シルト質粘土 (10YR2/2) 炭と灰が混ざる土をわずかに含む。
　18 より粘性やや強。
20 黒褐色粘土 (10YR2/2) 粗朶を含まない。8 より粘性。しまりやや強。
22 黒褐色粗朶層 (10YR2/3) φ0.5 ～ 2cm ほどの長軸方向の粗朶を密に敷く。
　21 に比べ木片を多く含む。
23 黒褐色粘土 (10YR2/2) 粗朶をわずかに含む。しまり。粘性強。
24 黒褐色粘土 (10YR2/2) 粗朶をわずかに含む。しまり。粘性強。
　23 よりやや粘性は弱だが、しまりは強。
25 黒褐色粘土 (10YR2/2) 粗朶をほとんど含まない。10 に類似するが、
　さらにしまり・粘性強。
26 黒褐色シルト質細粒砂 (10YR3/2) 5 溝の最上層。
27 黒褐色粗朶層 (10YR2/3) φ0.5 ～ 2cm 程の長軸方向の粗朶主体、
　木片を少量含む。
28 黒褐色粘土 (10YR2/2) 粗朶を含まない。しまり 29 より弱。
29 黒褐色粘土 (10YR2/2) 粗朶を含まない。芯に人頭大以上の礫を充填する。
　粘性・しまり強。
30 黒褐色砂質シルト (10YR2/3) 粗朶を一定量含む。細粒砂を多く含む。
31 黒褐色砂質シルト (10YR2/3) 粗朶を一定量含む。細粒砂を多く含む。
　30 よりしまりやや強。
32 黒褐色砂質シルト (10YR3/2) 粗朶を一定量含む。30・31 より砂が卓越する。
　炭化物・砂がラミナ状に入る。
33 黒褐色粘土質シルト (10YR2/2) 粗朶をほとんど含まない。：条里 27

第210図　P10区道路１道路外盛土（２）

いるが､ほぼ同じ位置に杭が２～３本重複している箇所もあり､打設が複数時期に亘る可能性が高い。杭の大半は尖端が盛土内で収まっており、杭が盛土構築後に打設されたことは明らかである。杭には径５～ 10cmの芯持丸木が用いられ、長さは40 ～ 70cmほどである。樹種はクリやスダジイなどであることが判明している。杭列は木柵などの区画施設としての性格が考えられ、密に打設されていることから盛土を補強する役割も兼ね備えた可能性もあろう。

樹木根は杭列に沿って列状をなし、植栽されたと考えられる。本調査区では16本を数え、間隔は0.3 ～ 1.2mとばらつきが大きい。樹木根は１列、ないしは２列に並び、杭列より側溝側に位置するものが多いが、南西半では杭列よりも外側で４本検出されている。樹木根の径は10cmと細く、根が盛土内に深く張るようすは窺われない。樹種は５点について同定した結果、すべてヤナギ属であることが判明している。道路側溝に沿って植栽されていること、樹種がヤナギ属であることから樹木根は道路１の街路樹であったと考えられる。

遺物は盛土内から須恵器や土師器、緑釉陶器、木製祭祀具、木簡などが出土している。盛土の構築時期は出土土器が岡田・八峠編年ＫＶ期に比定されることから10世紀後半と考えられる。放射性炭素年代測定では２σ暦年代範囲で杭１が773－884calAD(95.4%)、樹木根１が875－976calAD(94.3%)という値を示しており、概ね矛盾はない。

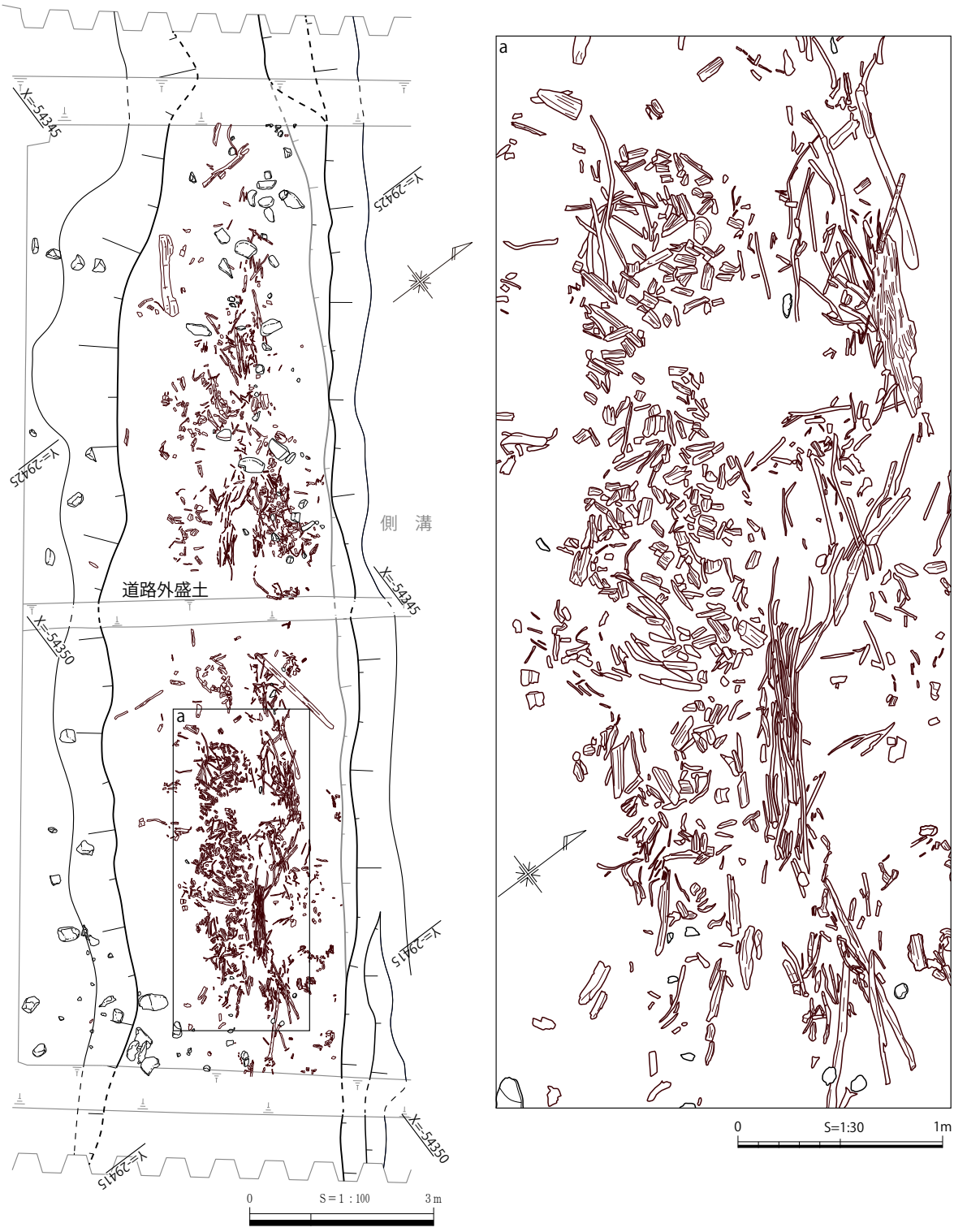
道路外盛土は道路本体の盛土を補強するとともに、道路空間と条里による耕地空間を明瞭に区別する区画施設としての性格が考えられる。

３　条里遺構

条里27(第212図)

調査区西側で確認された､東西方向に直線的に延びる盛土遺構である。方位はN－85°－Wである。東端は道路外盛土に接続し、道路外盛土→条里27の順で構築される。

規模は上面幅2.6m、基底部幅4.0mで、盛土の高さは最大48cm程である。盛土上面の標高は0.9m前後である。盛土は８層に細分され、粗朶をほとんど含まない黒褐色粘土やシルトを主体とする。盛土



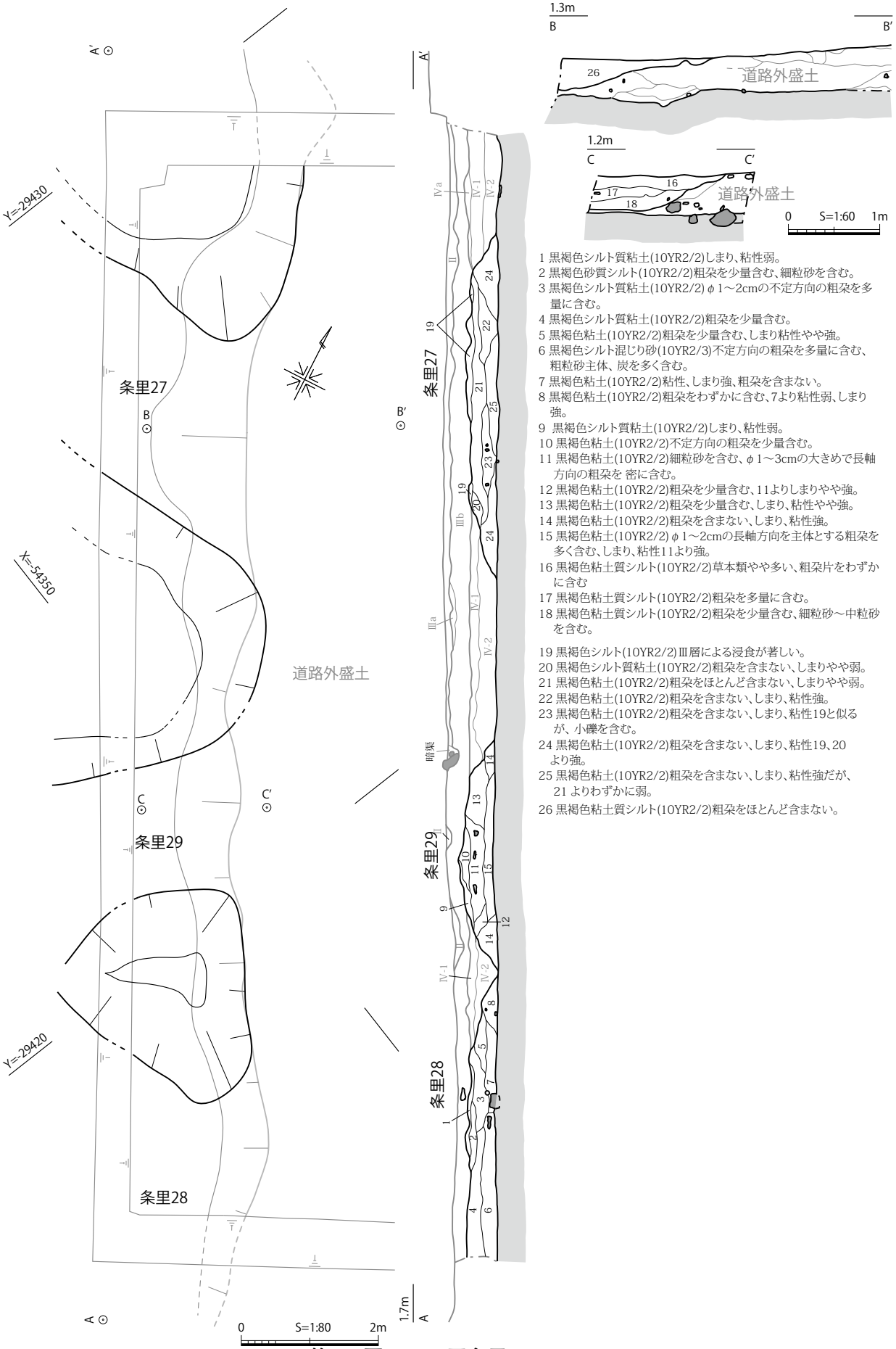
第211図　Ｐ10区道路１道路外盛土粗朶検出状況図

は両裾に均質で粘性の強い粘土(24層)で土手を築き、その内側を充填していく工法で築かれている。遺物は少量ながら、須恵器や土師器、馬形など木製祭祀具が出土している。

出土土器は岡田・八峠編年ＫⅤ期に比定され、道路外盛土の時期も考慮すると、構築時期は10世紀後半と推定される。遺構は一町方格内を12歩(約21m)に分割する条里地割と考えられる。

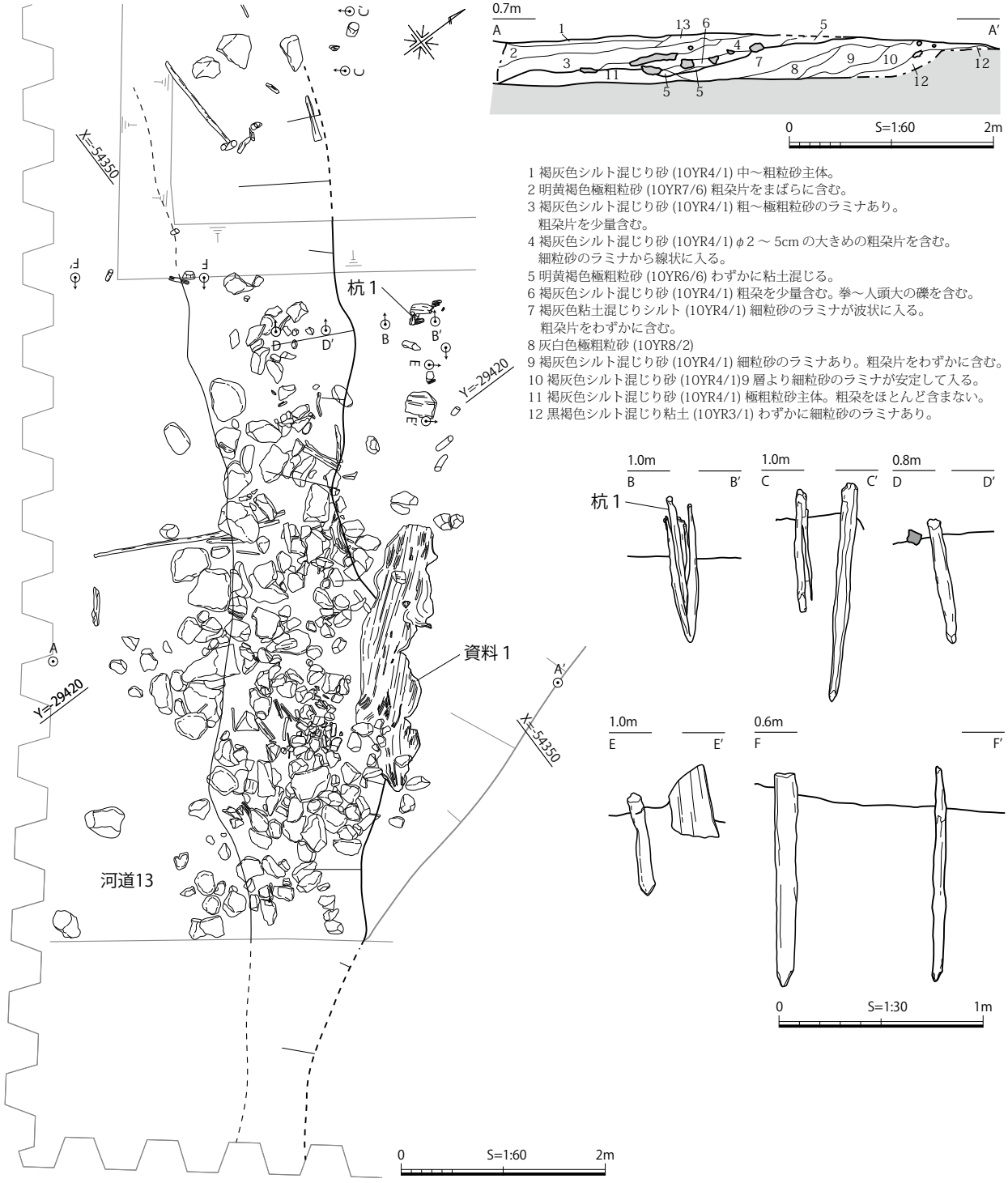
条里28(第212図)

調査区南端で検出された、東西方向に直線的に延びる盛土遺構である。方位はＮ－85°－Ｗである。東端は道路外盛土に接続し、道路外盛土→条里28の順で構築される。



1 黒褐色シルト質粘土(10YR2/2)しまり、粘性弱。
2 黒褐色砂質シルト(10YR2/2)粗朶を少量含む、細粒砂を含む。
3 黒褐色シルト質粘土(10YR2/2)φ1～2cmの不定方向の粗朶を多量に含む。
4 黒褐色シルト質粘土(10YR2/2)粗朶を少量含む。
5 黒褐色粘土(10YR2/2)粗朶を少量含む、しまり粘性やや強。
6 黒褐色シルト混じり砂(10YR2/3)不定方向の粗朶を多量に含む、粗粒砂主体、炭を多く含む。
7 黒褐色粘土(10YR2/2)粘性、しまり強、粗朶を含まない。
8 黒褐色粘土(10YR2/2)粗朶をわずかに含む、7より粘性弱、しまり強。
9 黒褐色シルト質粘土(10YR2/2)しまり、粘性弱。
10 黒褐色粘土(10YR2/2)不定方向の粗朶を少量含む。
11 黒褐色粘土(10YR2/2)細粒砂を含む、φ1～3cmの大きめで長軸方向の粗朶を 密に含む。
12 黒褐色粘土(10YR2/2)粗朶を少量含む、11よりしまりやや強。
13 黒褐色粘土(10YR2/2)粗朶を少量含む、しまり、粘性やや強。
14 黒褐色粘土(10YR2/2)粗朶を含まない、しまり、粘性強。
15 黒褐色粘土(10YR2/2)φ1～2cmの長軸方向を主体とする粗朶を多く含む、しまり、粘性11より強。
16 黒褐色粘土質シルト(10YR2/2)草本類やや多い、粗朶片をわずかに含む
17 黒褐色粘土質シルト(10YR2/2)粗朶を多量に含む。
18 黒褐色粘土質シルト(10YR2/2)粗朶を少量含む、細粒砂～中粒砂を含む。
19 黒褐色シルト(10YR2/2)Ⅲ層による浸食が著しい。
20 黒褐色シルト質粘土(10YR2/2)粗朶を含まない、しまりやや弱。
21 黒褐色粘土(10YR2/2)粗朶をほとんど含まない、しまりやや弱。
22 黒褐色粘土(10YR2/2)粗朶を含まない、しまり、粘性強。
23 黒褐色粘土(10YR2/2)粗朶を含まない、しまり、粘性19と似るが、小礫を含む。
24 黒褐色粘土(10YR2/2)粗朶を含まない、しまり、粘性19、20より強。
25 黒褐色粘土(10YR2/2)粗朶を含まない、しまり、粘性強だが、21 よりわずかに弱。
26 黒褐色粘土質シルト(10YR2/2)粗朶をほとんど含まない。

第212図　P10区条里27 ～ 29



第213図　Ｐ10区河道13

規模は上面幅1.6m以上で、盛土の高さは最大44㎝である。盛土上面の標高は0.9m前後である。盛土は８層に細分され、黒褐色粘土やシルトを主体とする。盛土は両裾に粘性の強い粘土（５・７・８層）で土手を築き、その内側を充填していく工法で築かれたと考えられる。内側には粗朶を一定量含む土が施され、最下層にあたる６層は砂を主体し、粗朶を混和した盛土である。遺物は少量ながら須恵器や土師器、馬形や斎串の木製祭祀具、木簡、漆器、田下駄が出土している。49号木簡は勧請板で、田下駄に転用されている。承和12年（845年）の年号が記されている。45号木簡は「須留女」と記されており種子札と考えられる。

出土土器は岡田・八峠編年ＫⅤ期に比定され、道路外盛土の時期も考慮すると、10世紀後半と推定される。位置や規模から、一町方格内を12歩(約21m)に分割した小区画をさらに細分する条里地割と考えられる。

条里29(第212図)

調査区西側で検出された、南北方向に直線的に延びる盛土遺構である。方位はN－５°－Wである。北端は道路外盛土に接続し、道路外盛土→条里29の順で構築される。

規模は上面幅1.8m、基底部幅3.2mで、盛土の高さは最大52cmである。盛土上面の標高は1.06m前後である。盛土は10層に細分され、黒褐色粘土やシルトを主体とする。盛土は両裾に土手を築き、その内側を充填していく工法で築かれている。盛土裾の13･14層が比較的均質な粘土であるのに対して、内側に充填された11・15層は粗朶を多く含んでいる。粗朶は盛土の方向に沿うものが多いが、丁寧に敷き並べられた様子は窺われない。遺物は少量ながら須恵器や土師器、人形、馬形、斎串などの木製祭祀具が出土している。W654は側面人形である。

出土土器は岡田・八峠編年ＫⅤ期に比定され、道路外盛土の関係も考慮すると、10世紀後半と推定される。条里27よりも規模が小さく、一町方格内を12歩(約21m)に分割した小区画をさらに細分する条里地割と考えられる。

４　河道

河道13(第198・213・214図)

調査区南隅、河道14に重複する位置に形成された小規模な河道である。南東から北西に流下し、河道底面から山側の肩部にあたる部分のみを検出している。

規模は幅が3.5m以上で、深さは最大48cmほどである。埋土はシルト混じり砂が主体で、緩やかな流水環境にあったと考えられる。壁面から肩部にかけては、貼石と杭による護岸施設がみられる。とくに、肩部では草本類を筵状に敷き、礫が貼り付け杭で固定する部分がみられ、丁寧なつくりといえる。遺存する草本類資料１は長さ2.6m、幅50cmの帯状を呈し、貼石には掌大から人頭大の角礫が用いられている。杭は角材や棒材など様々で、概ね肩部に列状に打設されている。杭１では同じ位置に打設され、２本の杭は入れ子状になっている。

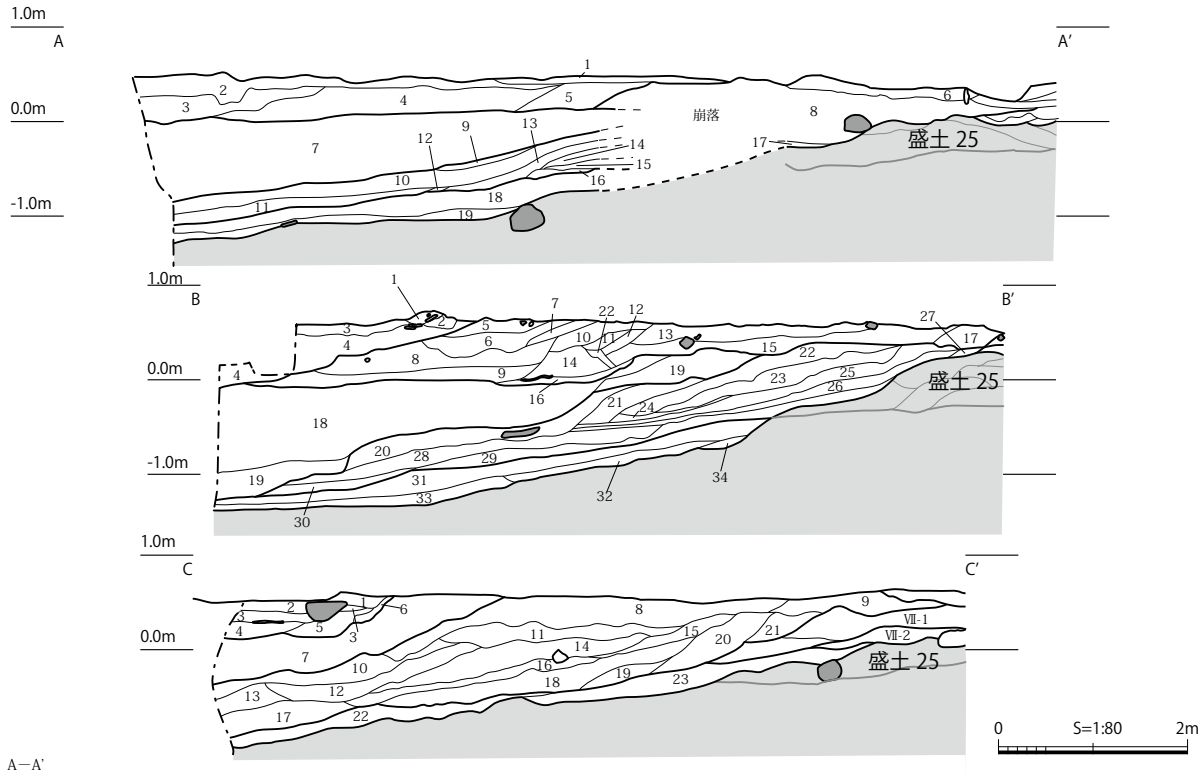
遺物は須恵器や土師器、人形、馬形などの木製祭祀具が一定量出土している。河道の形成時期は出土土器や層位から７世紀後葉から８世紀前葉と考えられる。敷設された草本類資料１の放射性炭素年代測定では、２σ暦年代範囲で581－647calAD(95.4%)の値を示しており、出土遺物とやや齟齬が認められる。

本河道は道路１の第１次盛土とほぼ同時期に形成されたとみられる。道路敷設に際し、河道からの浸食を防ぎ、道路敷部分を保護するために堅固な護岸施設が構築された可能性がある。

河道14(第198・214図　PL.58－２,３)

調査区南西半を、南東から北西に流下する河道である。河道６と重複する位置に形成され、後身的な河道と捉えることができる。検出したのは、河道底面から山側の肩部にかけてのみである。

規模は幅９m以上で、深さは最大80cm程である。埋土は褐灰色砂混じりシルトからシルト質砂が主体で、比較的緩やかな流水環境にあったことが窺われる。肩部付近では人頭大の礫や杭が散見され、護岸施設が流水により流出した可能性がある。遺物は須恵器や土師器、人形や馬形などの木製祭祀具



A－A'

河道14
1 灰褐色粘土 (7.5YR6/2) 溢流堆積層か、均質な粘土、粘性強。
2 黒褐色シルト質粘土 (10YR3/2) 枝葉をほとんど含まない、細粒砂、砂をわずかに含む。
3 にぶい黄褐色極粗粒砂 (10YR7/3) 主体、粗朶をわずかに含む。
4 にぶい黄褐色中～極粗粒砂 (10YR7/3) ラミナあり。
5 にぶい黄褐色中～極粗粒砂 (10YR6/3) シルトのラミナが目立つ、枝をわずかに含む。

河道6（古）
6 褐灰色シルト混じり細粒砂 (10YR4/1) ラミナあり、粗朶を少量含む。
7 にぶい黄褐色極粗粒砂 (10YR7/3) φ1 ～ 3cm の円礫を多く含む。

河道6（新）
8 褐灰色シルト混じり細粒砂 (10YR4/1) 枝、加工木片を一定量含む。
9 褐灰色シルト質細粒砂 (10YR4/1) ラミナあり。
10 褐灰色砂混じりシルト (10YR4/1) 枝を多く含む、粘性強、細粒砂のラミナあり。
11 にぶい黄褐色極粗粒砂 (10YR7/4) ラミナあり。

河道6（古）
12 褐灰色粘土質シルト (10YR4/1) ラミナあり、枝葉を少量含む。
13 褐灰色砂質シルト (10YR4/1) 枝葉はわずか、ラミナあり。
14 褐灰色シルト質細粒砂 (10YR4/1) 枝葉 (枝主体) を多量に含む、ラミナあり。
15 褐灰色細～極粗粒砂 (10YR4/1) シルト混じり、枝葉はほとんど含まない。
16 褐灰色砂混じりシルト (10YR4/1) 拳大の礫を少量含む、やや粘性あり。
17 褐灰色砂混じり粘土 (10YR4/1) 粘性強、ラミナ (粗粒砂) あり。

河道15
18 暗褐色砂質シルト (10YR3/3) 細粒砂のラミナを含むが明瞭ではない、粘性やや強。
19 暗褐色砂混じりシルト (10YR3/4) 極粗粒砂のラミナを含むが一定ではない。

B－B'

河道13
1 黒褐色粘土 (10YR2/2) 粗朶を含まない、粘性強、しまりやや弱
2 黒褐色砂質シルト (10YR2/2) 細粒砂を含むがラミナはない、26 よりもやや粘土質
3 褐灰色シルト混じり細粒砂 (10YR4/1) 粗朶を少量含む、粗粒砂混じり、ラミナが一定しない。
4 褐灰色シルト混じり細粒砂 (10YR4/1) 中～粗粒砂を含む、粗朶を多く含む、ラミナあり。

河道14
5 褐灰色シルト混じり細粒砂 (10YR4/1) ラミナあり、粗朶はわずか。
6 褐灰色シルト混じり細粒砂 (10YR4/1)4 層に類似するが、粗朶をより多く含む。
7 暗褐色粘土質シルト (10YR3/4) 葉を中心とした植物遺体を含む、粘性、しまりやや強。
8 にぶい黄褐色極粗粒砂 (10YR6/4) 木片（自然木）を少量含む、ラミナあり。
9 にぶい黄褐色極粗粒砂 (10YR7/3) φ1 ～ 2 ㎝の角礫を一定量含む。
10 褐灰色シルト混じり中粒砂 (10YR4/1) 粗朶をわずかに含む、ラミナあり。
11 褐灰色シルト混じり中粒砂 (10YR4/1) 粗朶をわずかに含む、シルト質、ラミナあり。
12 褐灰色シルト混じり中粒砂 (10YR4/1) 粗朶をわずかに含む、11 よりシルトが少ない、ラミナあり。
13 褐灰色シルト質細粒砂 (10YR4/1) 粗朶を少量含む、炭を少量含む、ラミナが一定しない。
14 にぶい黄褐色中～粗粒砂 (10YR7/3) 木片（自然木）を含む、ラミナあり。
15 褐灰色シルト質細粒砂 (10YR4/1) 粗朶を少量含む、炭を少量含む、ラミナが一定しない、斑状に入る。シルト質で、粘性あり。
16 褐灰色シルト質細粒砂 (10YR4/1) ラミナあり。
17 褐灰色砂質シルト (10YR4/1) 粗朶を少量含む、炭、小礫を含む。

河道6（古）
18 にぶい黄褐色極粗粒砂 (10YR7/3) 自然木をわずかに含む、ラミナあり、φ1 ～ 2 ㎝の角礫を一定量含む。
19 にぶい黄褐色極粗粒砂 (10YR7/6)17 層よりも粒径が小さい。

河道6（古）
20 褐灰色砂混じりシルト (10YR4/1) 枝を少量含む、粘性の強いシルトを多く含む。
21 にぶい黄褐色粗粒砂 (10YR7/3) ラミナあり。
22 褐灰色シルト質細粒砂 (10YR4/1) 枝を少量含む、ラミナあり。
23 褐灰色シルト質細粒砂 (10YR4/1) 枝を少量含む、24 層よりシルト質、ラミナあり。
24 にぶい黄褐色極細粒砂 (10YR7/3) ラミナあり。
25 褐灰色シルト質細粒砂 (10YR4/1) 枝を少量含む、25 層より砂質、ラミナあり。
26 褐灰色シルト質細粒～粗粒砂 (10YR4/1) 肩部ほどシルト質、ラミナあり。
27 褐灰色砂混じりシルト (10YR4/1) ラミナは一定しない。
28 褐灰色砂混じりシルト (10YR4/1) 粗粒砂のラミナを含む、枝をわずかに含む。
29 黒褐色砂混じりシルト (10YR3/1) ラミナなし、細粒砂や褐灰色の泥塊を斑状に含む。
30 褐灰色砂混じりシルト (10YR4/1)31 層より砂を多く含む。

河道15
31 暗褐色砂混じりシルト (10YR3/4) 枝葉を一定量含む、粘性やや強、ラミナなし。
32 暗褐色砂混じりシルト (10YR3/4) 褐灰色中粒砂のラミナが一定せず、波状に入る。
33 暗褐色砂混じりシルト (10YR3/4) 褐灰色中～粗粒砂のラミナがわずかに入る。
34 暗褐色粘土質シルト (10YR3/3) わずかに砂を含む、粘性強。

C－C'

河道14
1 褐灰色シルト混じり細粒砂 (10YR4/1) φ2 ～ 5cm の粗朶片を多く含む。
2 にぶい黄橙色極粗粒砂 (10YR7/4) 褐灰色細粒砂のラミナを含む。
3 褐灰色細粒砂 (10YR4/1) わずかにシルト混じり、粗粒砂も含む。
4 にぶい黄橙色極粗粒砂 (10YR6/4) φ1 ～ 2cm の砂粒を多く含む、細粒砂のラミナが入る、粗朶片を少量含む。
5 褐灰色シルト混じり細粒砂 (10YR4/1) 黄褐色中粒砂のラミナが入る、φ5cm 以下の粗朶を一定量含む。
6 褐灰色シルト質細粒砂 (10YR4/1)

河道6（新）
7 にぶい黄橙色極粗粒砂 (10YR7/3) 細～中粒砂のラミナが入る。
8 黒褐色砂質シルト (10YR2/2) 黄褐色細粒砂のラミナを含む。
9 黒褐色シルト質粘土 (10YR3/1) 細砂がわずかに混ざる、しまり、粘性ややあり。
10 にぶい黄橙色極粗粒砂 (10YR6/6)38 層より粒径がやや小さい。
11 黒褐色砂質シルト (10YR3/1) 草本類を少量含む、しまり、粘性やや強。

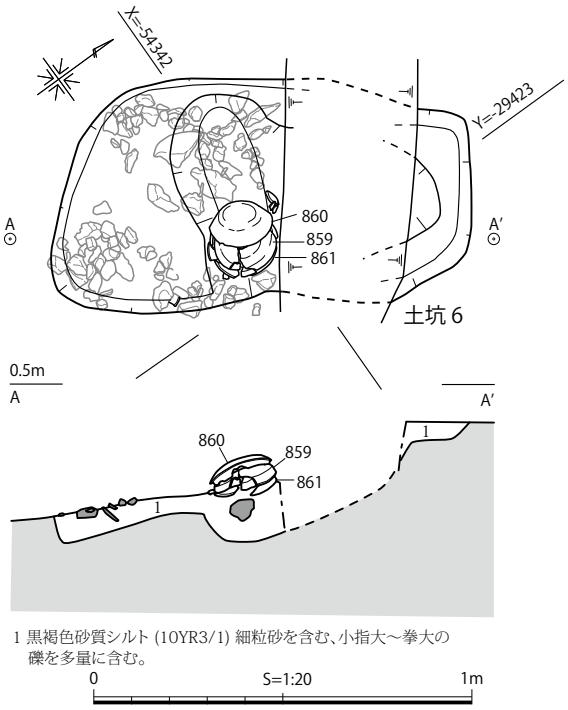
河道6（古）
12 褐灰色シルト質細粒砂 (10YR4/1) 中粒砂のラミナが入る、ややしまり強。
13 褐灰色砂質シルト (10YR4/1) 枝を少量含む、細粒砂のラミナが入る。
14 褐灰色シルト質細粒砂 (10YR4/1) ラミナあり。
15 褐灰色シルト質細粒砂 (10YR4/1 草本類が目立つ。
16 褐灰色シルト質細粒砂 (10YR4/1) 黄褐色細～中粒砂のラミナが入る。
17 褐灰色シルト混じり細粒砂 (10YR4/1) 草本類をやや多く含む。
18 褐灰色砂混じりシルト (10YR4/1) 中～粗粒砂のラミナが入る。
19 褐灰色粘土質シルト (10YR4/1) わずかに砂を含む、しまり・粘性強、枝を少量含む。

河道15
20 黒褐色砂質シルト (10YR3/1) 草本類を多く含む、枝も散在、しまり・粘性やや強。
21 黒褐色砂混じりシルト (10YR2/2) ラミナなし、細粒砂が混ざる。
22 黒褐色砂混じりシルト (10YR3/2) 褐灰色細粒砂のラミナが入る、粘性強。
23 暗褐色砂混じりシルト (10YR3/3) 植物未分解層主体。

第214図　P10区河道６・13 ～ 15

が出土しているが、出土量は少ない。

河道の形成時期は最も新しい時期を示す須恵器が岡田・八峠編年KⅡ期に比定され、木製祭祀具の年代観も考慮すると、７世紀後半から８世紀前半と推定される。明確にしえないが、断面観察から小規模な河道の集合体であると考えられ、遺構の重複関係では道路１の第１次盛土や河道14に先行するものの、それらの遺構と同時期、もしくは新しい時期の河道も存在していた可能性が高い。



第215図　P10区土坑６

河道６（第199・214図）

調査区南西半を、南東から北西へ流下する大規模な河道である。河道底面から山側の肩部にあたる部分を検出している。調査区内で護岸施設はみられない。新旧があり、古段階と新段階に分けられる。

古段階は幅が7.5m以上で、深さは最大1.6m程である。底面の標高は最深部で－1.2m前後を測る。埋土は砂混じりシルトや細粒砂が互層状に堆積しており、流水と滞水を繰り返しながら埋没したことが窺える。

新段階は幅が４m以上で、位置関係から古段階から幅が縮小、もしくは平野側に僅かに移動したと考えられる。深さは最大1.6m程であるが、基本的には古段階よりも浅くなる。埋土は粗粒から極粗粒砂を主体としており、古段階とは対照的に短期間のうちに埋没したと考えられる。

遺物は埋土から須恵器や土師器、製塩土器、木製品が少量出土している。河道の形成時期は、出土遺物から古墳時代後期から終末期にかけてと推定される。

５　土坑

土坑６（第215図　ＰＬ.58－４）

P10区中央、北壁寄りで検出された土坑である。河道６新段階の肩部に位置し、河道６古段階の埋土上面で検出されている。掘方は長軸1.1m、短軸0.5mの楕円形状を呈する。深さは最大23㎝で、底面には凹凸があり、地形に沿って傾斜している。埋土は黒褐色砂質シルトの単層である。埋土には指頭大から拳大前後の礫を密に含んでいるが、配置等に規則性を見出すことはできない。

遺物は底面から10㎝ほど浮いた位置で、須恵器杯が３枚重なり、伏せられた状態で出土している。須恵器は意図的に埋納されたと考えられ、水辺における何らかの祭祀行為に伴うものであった可能性が高い。時期は須恵器がTK43並行期に比定されることから、古墳時代後期と考えられる。

第４項　第Ⅶ・Ⅷ層上面の遺構（弥生時代中期～後期）

１　概要（第216図）

Ⅶ層上面が弥生時代後期の遺構検出面、Ⅷ層上面が弥生時代中期の遺構検出面となる。標高はⅦ層相当層上面が－0.3m前後、Ⅷ層相当層上面が－0.8m前後で、地形は北東から南西方向に緩やかに傾

斜している。遺構は盛土遺構２基、河道１基、土坑１基を確認している。構築順は盛土26→盛土25・河道15→土坑７である。河道15は河道６の前身的な河道であり、盛土25はその護岸施設と考えられる。盛土26も対応する河道を明確に確認できていないが、堆積環境から平野側に形成されていた河道の護岸施設として機能していた可能性が高い。

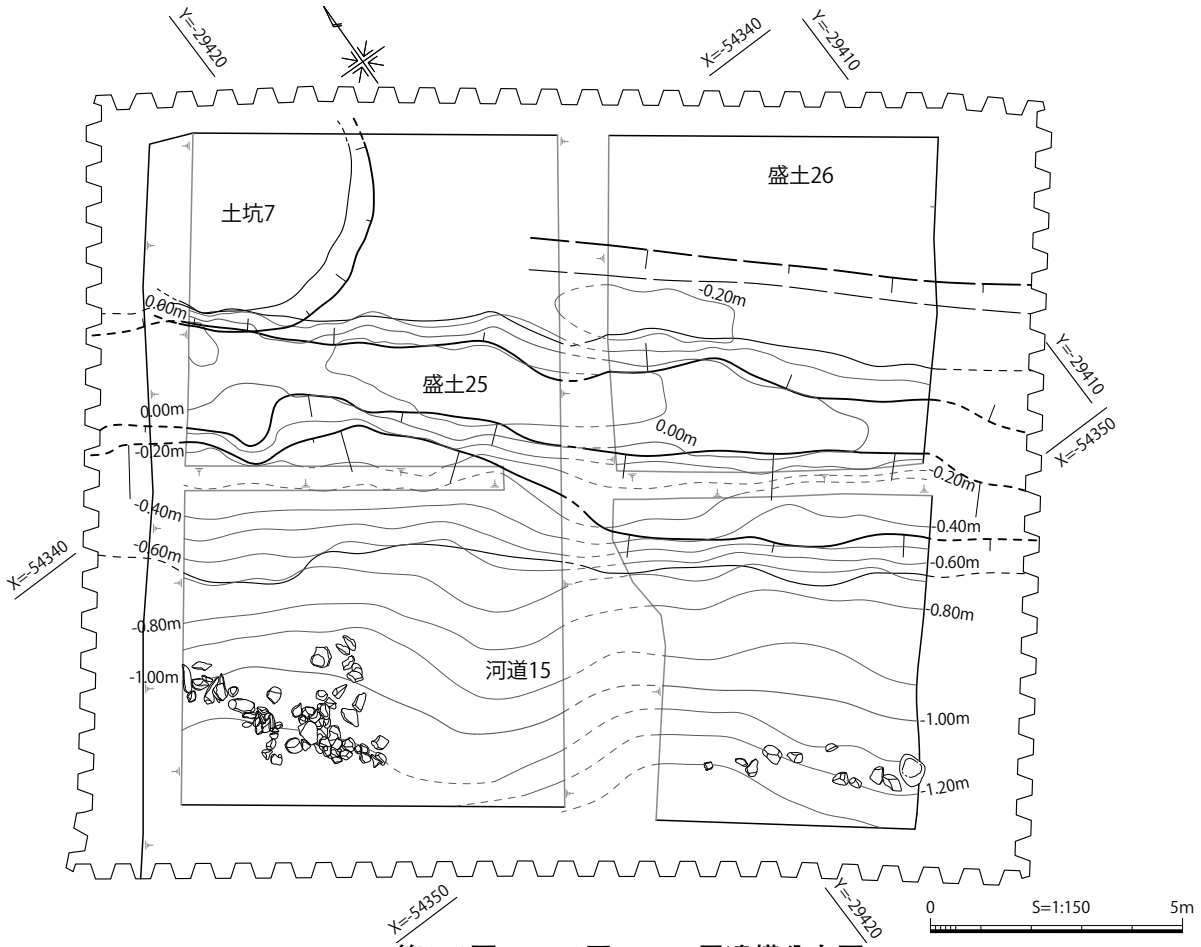
出土遺物は弥生土器に加え、花弁高杯や木包丁や田下駄などの木製品、石包丁などの石器がある。とくに、盛土25の盛土内では盛土芯として木製品が多量に廃棄された状態で出土している。

２　盛土遺構

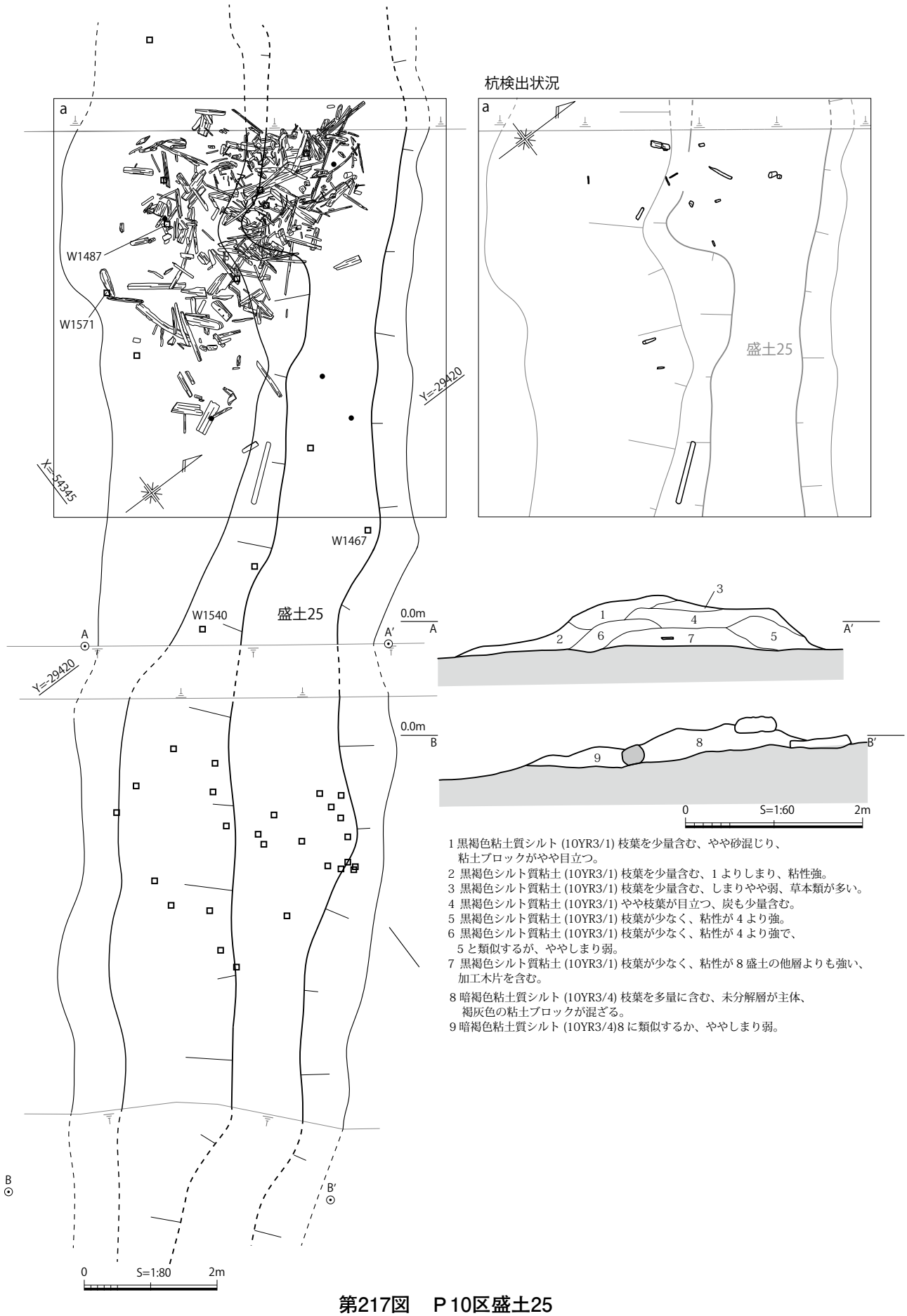
盛土25（第217図　ＰＬ.59－１,２）

調査区中央を、南東から北西へ直線的に延びる盛土遺構である。盛土はⅧ層上に構築されている。方位はN－50°－Wである。

規模は上面幅1.8 ～ 2.2m、基部幅4.0 ～ 5.4mで、盛土高は最大で60㎝である。盛土上面の標高は0.3m前後である。地形は北西に向かって低くなっているため、盛土は北西側にかけて厚くなる。埋土は粘性が強い黒褐色シルトやシルト質粘土を主体とし、９層に細分される。盛土はA－A’を見る限り、中央に盛土芯を築き、拡充していく工法で構築されている。北西端では径３mほどの範囲で木製品や加工木を集積させ、盛土芯としている。これら集積された材は加工木片を杭として打ち込むことで固定させている。杭に規則的な配置は窺われず、樹種は杭１点がモミ属である。遺物は盛土内から弥生土器や土玉、木製花弁高杯、田下駄、木庖丁、石庖丁などが出土し、軽石や瓢箪などもみられる。

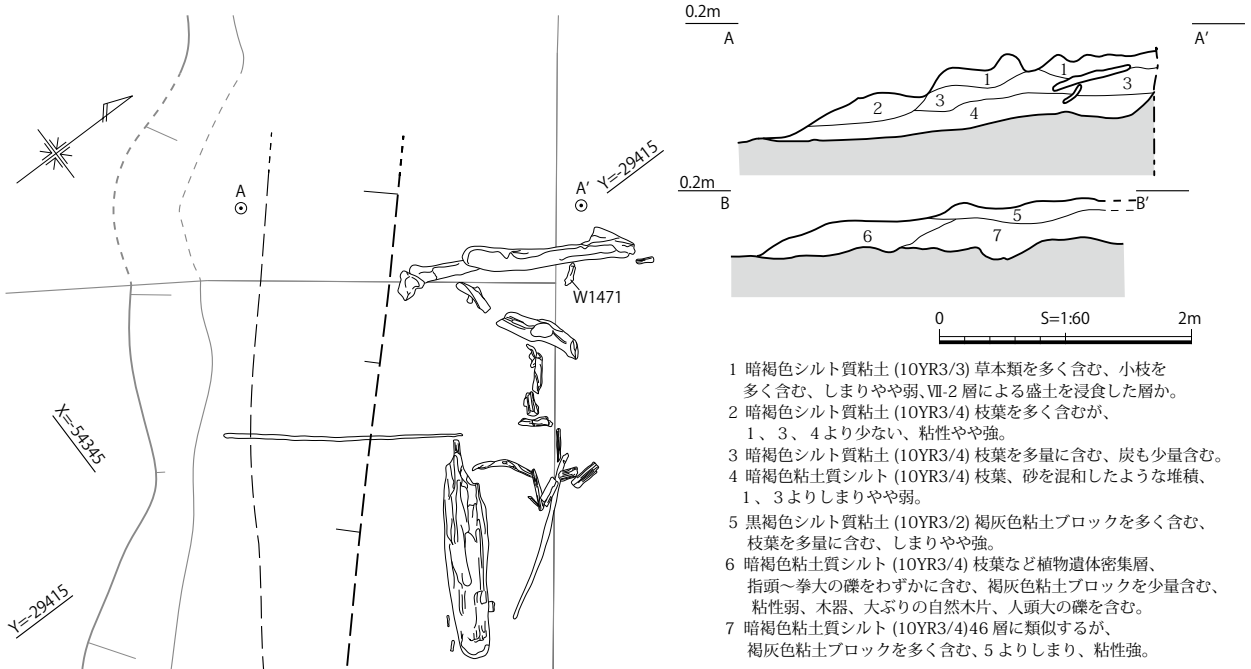


第216図　Ｐ10区Ⅶ・Ⅷ層遺構分布図



1 黒褐色粘土質シルト (10YR3/1) 枝葉を少量含む、やや砂混じり、
粘土ブロックがやや目立つ。
2 黒褐色シルト質粘土 (10YR3/1) 枝葉を少量含む、1 よりしまり、粘性強。
3 黒褐色シルト質粘土 (10YR3/1) 枝葉を少量含む、しまりやや弱、草本類が多い。
4 黒褐色シルト質粘土 (10YR3/1) やや枝葉が目立つ、炭も少量含む。
5 黒褐色シルト質粘土 (10YR3/1) 枝葉が少なく、粘性が 4 より強。
6 黒褐色シルト質粘土 (10YR3/1) 枝葉が少なく、粘性が 4 より強で、
5 と類似するが、ややしまり弱。
7 黒褐色シルト質粘土 (10YR3/1) 枝葉が少なく、粘性が 8 盛土の他層よりも強い、
加工木片を含む。
8 暗褐色粘土質シルト (10YR3/4) 枝葉を多量に含む、未分解層が主体、
褐灰色の粘土ブロックが混ざる。
9 暗褐色粘土質シルト (10YR3/4)8 に類似するか、ややしまり弱。

第217図　P10区盛土25



第218図　Ｐ10区盛土26

盛土の構築時期は出土遺物から弥生時代中期後葉、もしくは後期前葉と考えられる。杭の放射性炭素年代測定では、２σ暦年代範囲で84－216calADの値が得られており、出土遺物の年代観と矛盾しない。本遺構は同時期に機能していたと考えられる河道15の肩部に構築されていることから、護岸施設としての機能が考えられる。

盛土26（第218図）

調査区北東側を、南東から北西方向に延びる盛土遺構である。平面での検出では確認できず、断面で確認された遺構である。大部分はⅨ層相当層の上に構築されているが、Ａ－Ａ’では下層に僅かながらⅧ層相当層を挟む。

規模や形状は明確ではないが、盛土幅は３ｍ以上で、盛土高は最大50cmほどである。盛土は暗褐色シルトやシルト質粘土を主体とし、Ⅷ層に比べ植物遺体を密に含み、ややしまりが良い。

遺物は盛土内から弥生土器や土玉、木製品、加工木が少量出土している。盛土の構築時期は出土した弥生土器から弥生時代中期中葉と考えられる。盛土内から出土した加工木片１点の放射性炭素年代測定では、２σ暦年代範囲で204－91calBC（94.1％）の値が得られており、土器の年代観とも矛盾はない。本遺構は平野側に形成されたとみられる河道の護岸施設である可能性が高く、位置はややずれるものの、盛土25の前身的な遺構と考えられる。

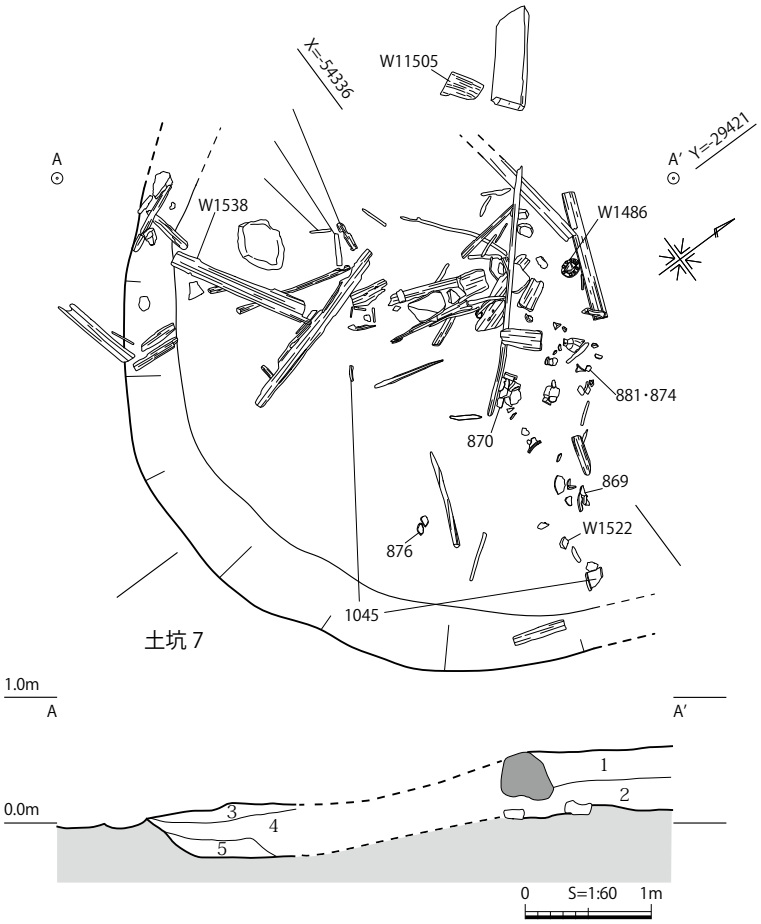
３　河道

河道15（第216図　ＰＬ.59－１）

調査区南西半を、南東から北西へ流下する河道である。肩部には盛土25が築かれており、本河道の護岸施設として機能していた可能性が高い。

規模は平野側の立ち上がりを確認できていないが、幅は７m以上で、深さは盛土25の頂部から計測すると最大2.0mを測る。最深部での標高はA－A’で－1.4m程である。山側の壁面は盛土25の肩部にかけて緩やかに立ち上がっている。底面付近の壁面には部分的に礫の集中箇所がみられ、本来は護岸施設などの人為的な構造物が存在していた可能性もある。埋土は最大で40cmほど遺存しており、暗褐色砂混じりシルトを主体とする。砂のラミナが入り、枝や葉などの植物遺体が水平堆積するなど、緩やかな流水と滞水を繰り返す環境下にあったと考えられる。遺物は弥生土器、木製品が少量出土している。

河道の形成時期は出土遺物や盛土25との重複関係から弥生時代後期から古墳時代前期初頭と推定される。形成位置から河道６の前身的な自然河道と考えられる。



１黒色礫混じりシルト (10YR2/1) 中～粗粒砂をブロック状に含む。指頭～拳大以下の礫を密に含む。
２黒色礫混じりシルト (10YR2/1)2 層に類似するが、１より礫が少なく、砂質が強い。１より粘性弱。
３黒褐色粘土質シルト (10YR3/2) 砂を一定量含む。枝葉を少量含む。
４黒色礫砂礫混じりシルト (10YR2/1) 砂が卓越する。指頭～拳大の礫を含む。
５黒色礫混じりシルト (10YR3/1) 礫を少量含む。４より粘性強。

第219図　P10区土坑７

４　土坑

土坑７（第219図　ＰＬ.59－３）

調査区北隅で検出された、大型の土坑である。遺構検出面はⅤ層相当層下面である。遺構全体を検出していないため、不明な点も多い。規模は掘方が長軸5.5m以上、短軸４m以上で、楕円形を呈すると考えられる。深さは最大50cmで、底面は平坦ではなく、凹凸がある。埋土は黒褐色礫混じりシルトを主体とし、５層に細分される。

土坑内からは弥生土器や木製品、加工木片が多量に出土し、木製品には高杯や田下駄、木包丁などが含まれる。出土した弥生土器は、弥生時代中期後葉のⅣ－３から後期前葉Ⅴ－１に比定される資料であるが、盛土25に後出することから弥生時代後期前葉と考えられる。出土した加工木片１点の放射性炭素年代測定では、２σ暦年代範囲で41calBC－55calADの値を示している。

遺構の性格は廃棄土坑と考えられる。

第５項　Ⅸ層上面の遺構（弥生時代前期末～中期初頭）

１　概要（第220・221図）

Ⅸ層相当層上面は弥生時代前期末から中期初頭の遺構検出面である。Ⅸ層相当層上面の標高は

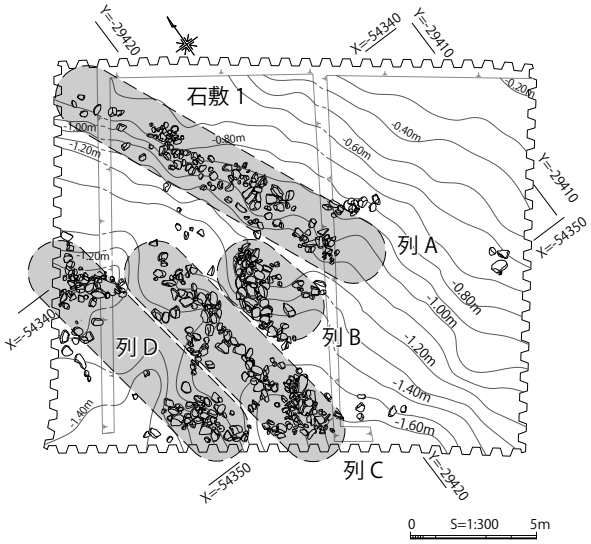
－0.4ｍ～－1.6ｍ前後で地形は東から西へ傾斜している。遺構は石敷遺構１基のみで、調査区のほぼ全域に広がっている。

２　石敷遺構

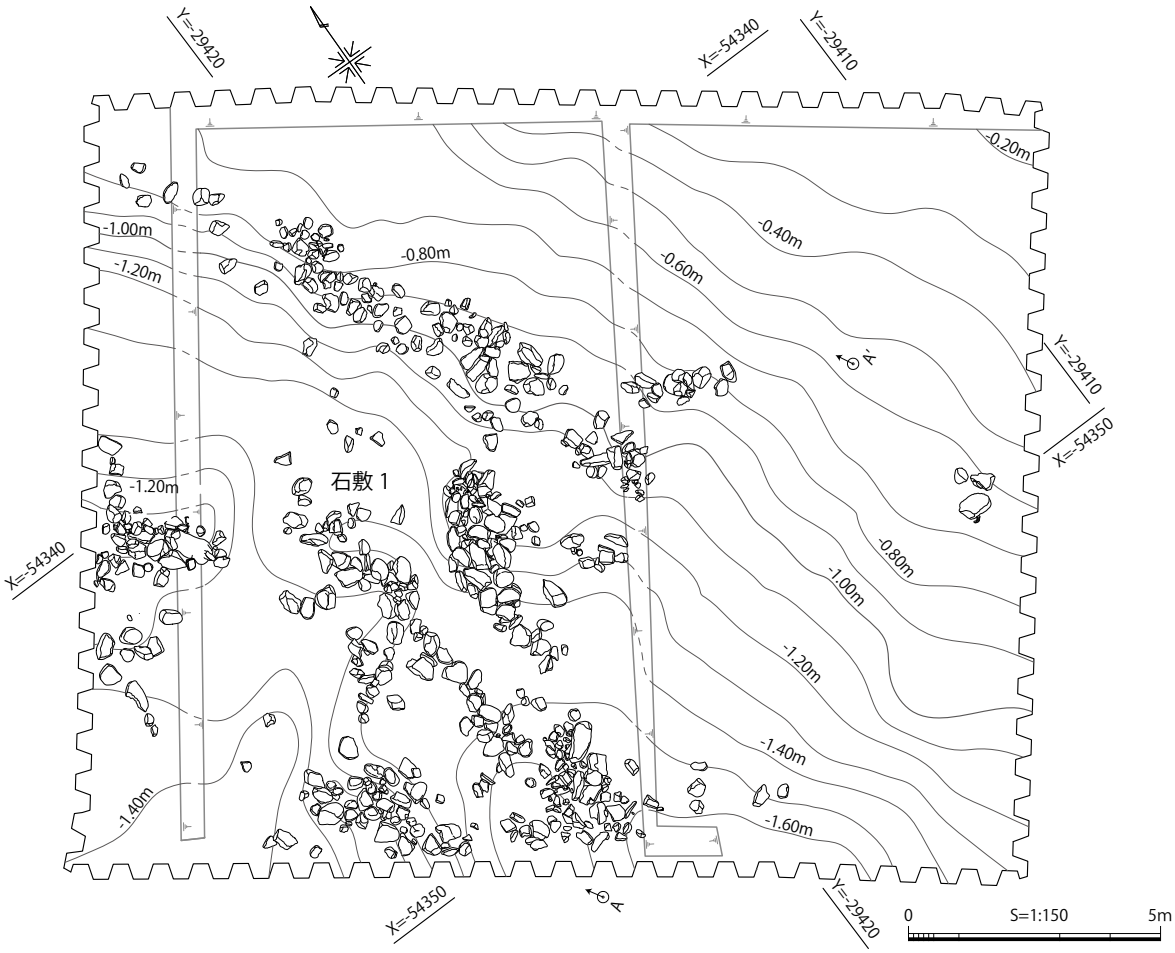
石敷１（第220～222図　ＰＬ.60－１,２）

調査区のほぼ全域にわたって検出された石敷遺構である。調査区外へ展開する大規模な遺構で、全容は明らかにしえない。遺構の大部分は貝層であるⅨ層上面に構築されているが、第195図B－B'をみると、Ⅷ層相当層うち、下層にあたる16・17・20層を基盤としていることが分かる。16・17・20層も包含層と捉えたが、本遺構の盛土となる可能性もある。

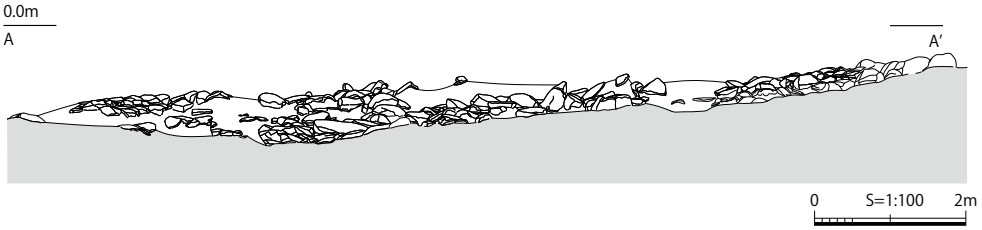
礫は掌大から人頭大程度の角礫が用いられ、等高線に沿って南北方向に列状に配されている。このことから便宜的に列A～Dの４つに分けてみると、列Aと列Cの間がやや窪地を呈し、列Bが島状に取り残される形状をなすことが分かる。窪地には砂混



第220図　Ｐ10区石敷１概念図



第221図　P10区Ⅸ層上面遺構分布図



第222図　P10区石敷１立面図

じりシルト(第195図B－B'13層)が堆積することから石列間が流路として機能していたと考えられる。

したがって、遺構は河道の護岸施設と考えられ、調査区東側の丘陵斜面に入り組む狭隘な谷地形からの湧水や流水を制御する機能があったと考えられる。その一方で、本調査区で確認できないが、平野部側には大規模な河道が形成されており、その河道との接点に築かれていることから、舟着き場など接岸施設としての性格も想定しうる。

時期は基盤となるⅧ層相当層から出土した弥生土器がⅠ－3様式に比定されることから、弥生時代前期末から中期初頭と考えられる。

第15節　3区の調査

第１項　調査区の概要

１　地形と土層堆積(第223図)

３区はＰ11区やＰ10区の南西に隣接する平野部に位置する。平成25年度に発掘調査を行い、調査区の平面積は563.4㎡である。

基本層序はⅠ～Ⅳ層までを確認している。Ⅳ層は調査区壁面のトレンチなどで25cmほど掘削し、平面的な掘り下げはⅣ層上面にとどまっている。

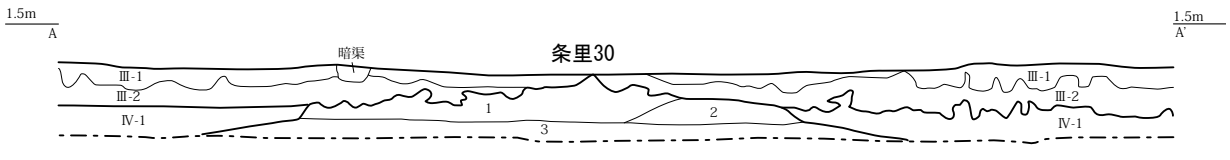
２　遺構の概要

３区では平安時代の条里遺構３基を確認している。Ⅴ層上面まで掘り下げていないが、これらの遺構はすべてⅤ層上面に盛土により構築された遺構と考えられる。出土遺物は僅かで、Ⅰ～Ⅲ層から須恵器、土師器、緑釉陶器、漆器などの木製品が出土している。

第２項　Ⅴ層上面の調査（古代）

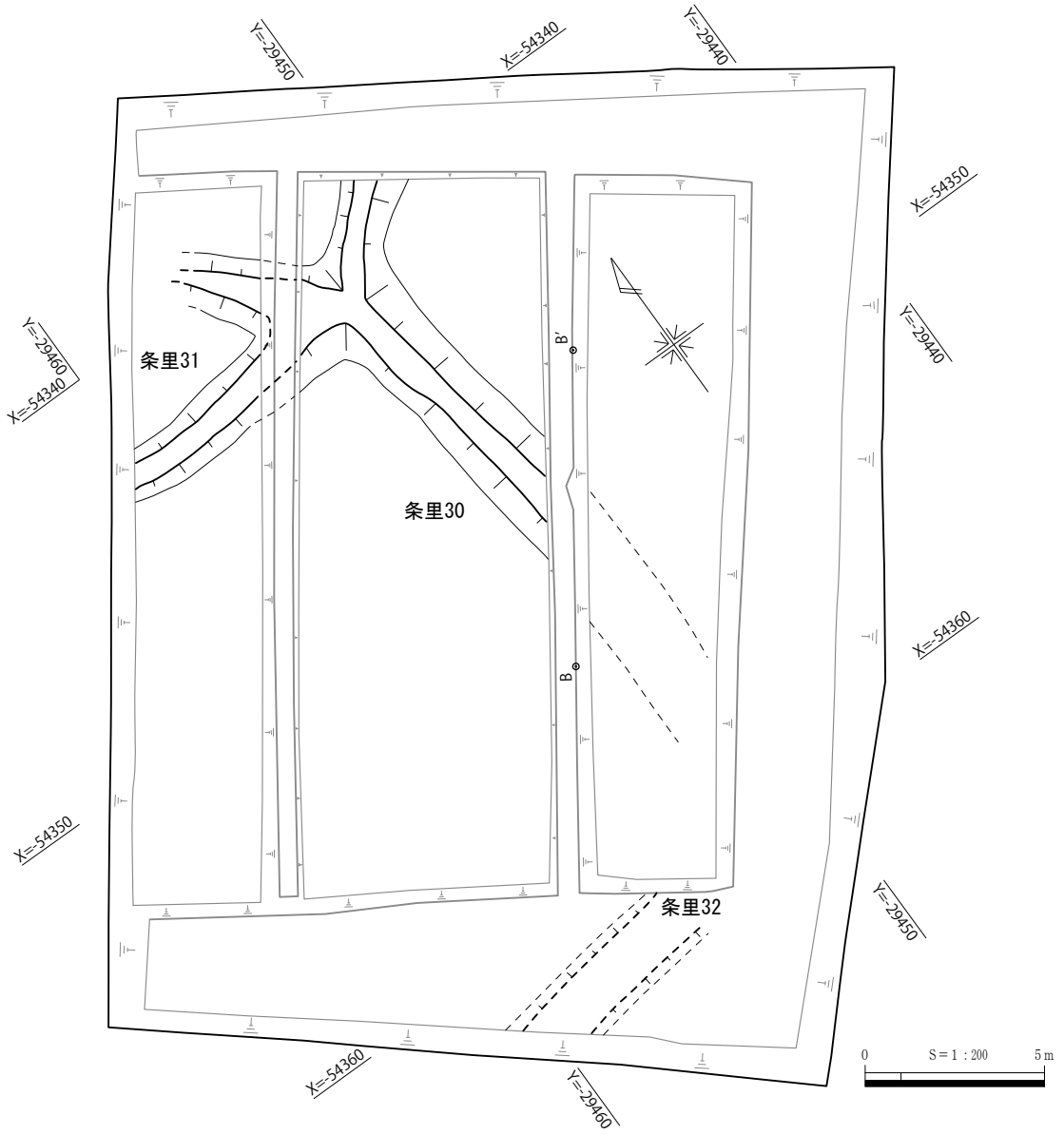
１　概要(第224図)

Ⅴ層上面が古代の遺構検出面である。遺構は条里遺構３基を確認し、条里１は条里２、３と直交す



Ⅲ-1　灰黄褐色粘土～シルト(10YR5/2)と褐灰色～黒褐色シルト(泥炭層)(10YR4/1～3/1)との混土
Ⅲ-2　褐灰色～黒褐色シルト(10YR4/1～3/1)　泥炭層。未分解の植物質多く含む。黄橙色の粘土ブロック含む。
Ⅳ-1　灰白色粘土～シルト(10YR7/1～8/1)植物質含む。
1　灰白色～にぶい黄橙色粘土－シルト(10YR7/1～7/2)　植物質を多く含む。0.5cm以下の炭化物含む。全体に攪拌されている。
2　灰白色粘土～シルト(10YR7/1)植物質含む。1より粘性強い。
3　黄灰色粘土～シルト(2.5Y6/1)粘性が非常に強い。

第223図　3区土層断面図



第224図　3区遺構分布図

２　条里遺構

条里30（第224図　ＰＬ.60－３）

調査区の対角線上に位置し、南北へ延びる盛土遺構である。Ｐ11区で延長部分を確認している。調査区北隅でやや西寄りに屈曲するような平面形であるが、本来直線的に延びていたと考えられる。方位はＮ－５°－Ｗである。検出長は10mほどで、上面幅は1.5m前後、基底部幅は不明である。ただし、上面幅もⅣ層を掘り下げていないため不確定であり、検出状況やＰ11区での規模を考慮すると、２ｍ前後はあった可能性が高い。盛土の高さは不明ながら40cm以上で、盛土上面の標高は1.0m前後である。盛土は粘性の強い灰白色粘土からシルトである。基本的に敷粗朶はみられないが、南隅の土層断面では盛土上部を覆うⅢ層下面沿いに粗朶が確認でき、部分的に敷粗朶が施されていた可能性がある。

本調査区での出土遺物はないが、時期は10世紀後半と推定される。一町方格内を12歩（約21m）に分割する条里地割と考えられる。

条里31（第224図　ＰＬ.60－３）

調査区北隅で確認された、東西方向に延びる盛土遺構である。条里30とほぼ直交する。平面形は条里１との交点を境に屈折する観があるが、本来は直線的に延びているとみてよい。方位はＮ－85°－Ｗである。検出長は10ｍほどで、上面幅は1.5ｍ前後で、基底部幅は不明である。盛土の高さは不明である。盛土は粘性の強い灰白粘土からシルトで、敷粗朶はみられない。

出土遺物は木製品が僅かである。時期は10世紀後半と推定され、位置や条里30より規模が小さいことから、一町方格内を12歩（約21ｍ）に分割した小区画をさらに細分する条里地割と考えられる。

条里32（第224図）

調査区南隅で確認された、東西方向に延びる盛土遺構である。条里30とほぼ直交する。断面のみの確認にとどまったが、直線的に延びているとみてよい。規模は不明ながら、上面幅は1.5ｍ前後で、盛土の高さは少なくとも30㎝以上である。盛土は粘性の強い灰白粘土からシルトで、敷粗朶は確認できない。

出土遺物は木製品が僅かである。時期は10世紀後半と推定される。位置や規模から、一町方格内を12歩（約21ｍ）に分割した小区画をさらに細分する条里地割と考えられる。

第16節　２区・Ｐ11区の調査

第１項　調査区の概要

１　地形と土層堆積（第225・226図）

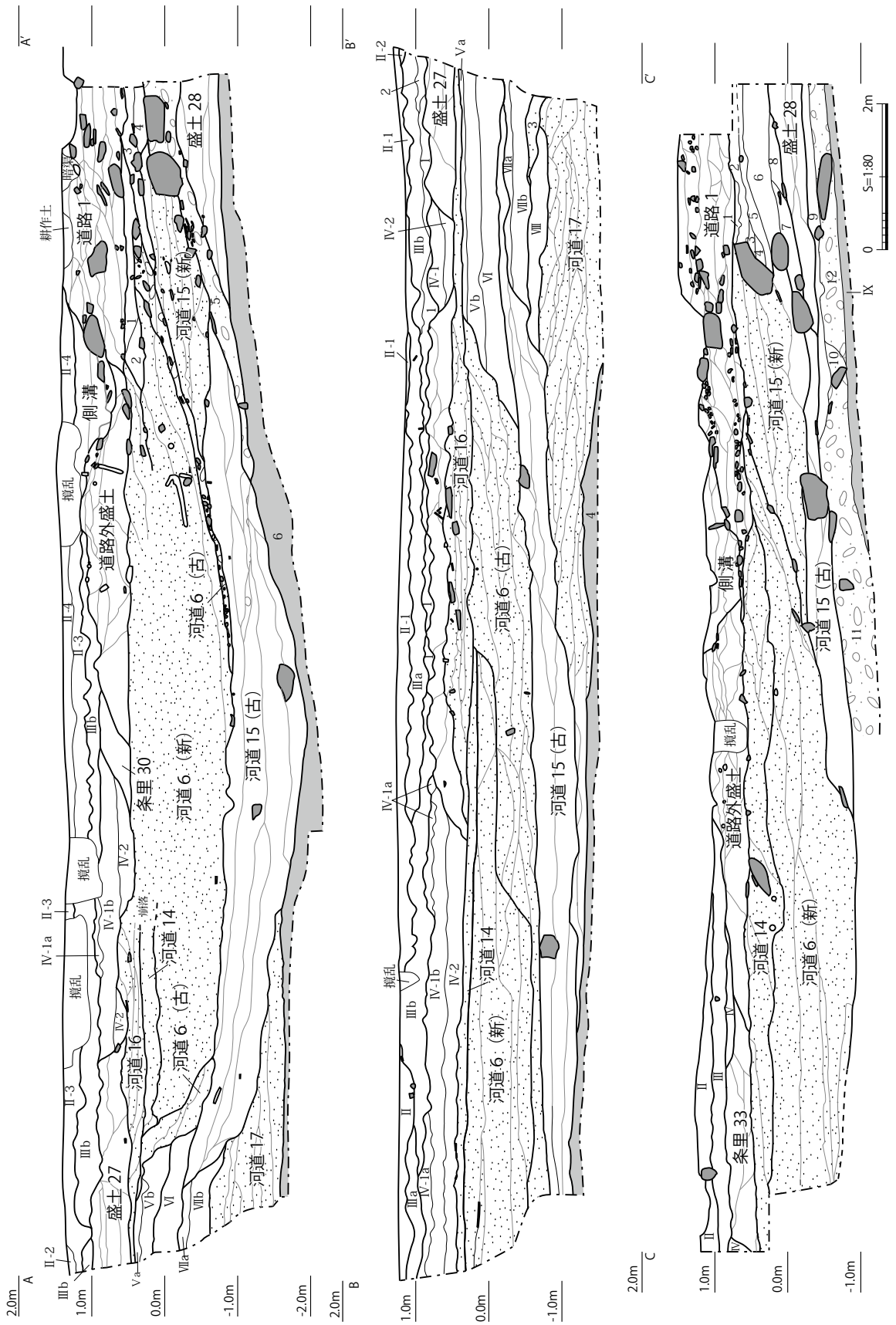
平成25年度に実施した２区と、平成27度に実施したＰ11区は調査範囲が重複しており、本節では合わせて報告する。また、P11区の北西側は2012年度に鳥取市教育委員会が実施した第21トレンチと重複している。調査区の平面積は２区が400㎡、P11区が323.5㎡である。なお、平成25年度における２区の調査はⅢ層まで掘り下げ、道路１の検出、側溝の調査のみに留まっている。

調査区は遺跡中央よりやや北西側にあたり、山裾の平野部に位置する。東側に隣接する丘陵斜面には狭小な谷筋がみられ、平野部が僅かに山側に入り組んでいる。調査区はその谷の出口にあたるが、Ｐ10区のような著しい湧水はみられない。

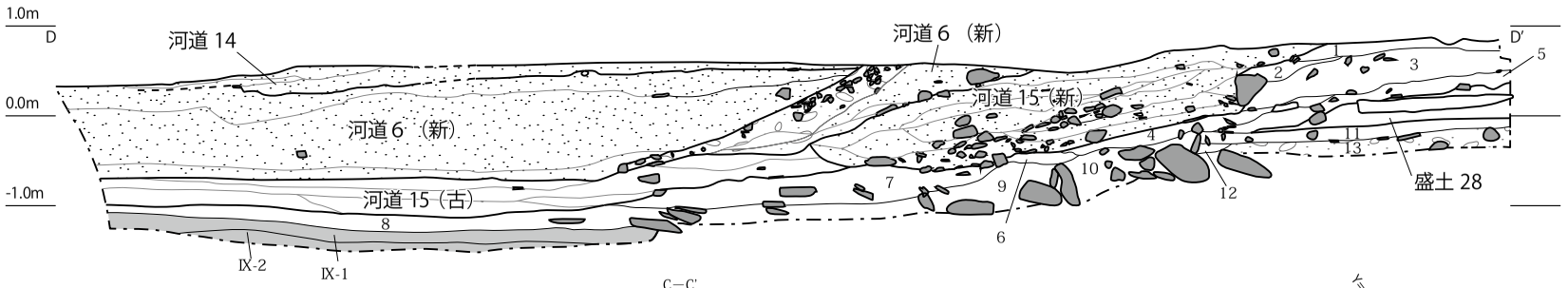
基本層序はⅠ～Ⅸ層まで一通り確認できる。Ⅱ層はＰ10区と同様に近世以降の造成土である。山側の方がより小礫を密に含むことから、古代の道路１の路面が一部削平し、平野側を整地したと考えられる。Ⅳ層はＰ10、12区と同様に２層に細分される。

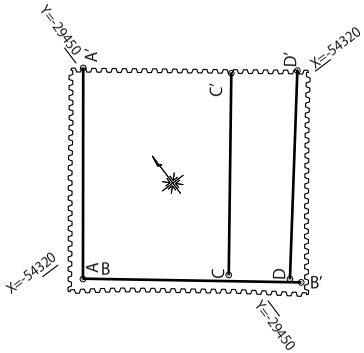
Ⅴ層以下は、自然河道である河道６を挟んで堆積状況が大きく異なる。基本層序のⅤ～Ⅷ層は河道６より平野側でしか確認できない。それに対して、山側の堆積は基本的に丘陵斜面に露頭する板状安山岩の崩落土をベースとするが、明確に自然堆積といえるものは少ない。断面のみの確認にとどまったものが大半であるが、堆積構造などから人為的な造成や埋め立てを繰り返したことが窺われる。

山側の各層をみていくと、まず、Ⅴ層はＡ－Ａ１、２層が相当する。黒褐色礫混じり粘土で、炭が多く含まれるなど整地土の可能性がある。古墳時代前期の土器しか出土いないが、時期は河道６を覆うことから古墳時代終末期と考えられる。Ⅵ層はＡ－Ａ’３・４層、Ｃ－Ｃ’１層、Ｄ－Ｄ’１・２層が相当する。砂を多く含むが、ラミナがみられず、炭や木材を加工した際の木っ端を多量に含むことなどから人為的な堆積の可能性もある。多量の土師器に加え木製品も一定量含んでおり、古墳時代前期に帰属する。



第225図　2区・P11区土層断面図（1）





Ⅱ-1　黒褐色礫混じりシルト (10YR3/1) 指頭大の小礫を含む、しまり、粘性弱、褐灰色がかる。
Ⅱ-2　黒褐色礫混じりシルト (10YR2/3)Ⅱ-1 層と似るが、礫が少ない。
Ⅱ-3　黒褐色礫混じりシルト (10YR2/3) 上位に指頭大の小礫を含む。
Ⅱ-4　黒褐色礫混じりシルト (10YR2/3) 褐灰色がかる、指頭大の小礫を密に含む。
Ⅲa　黒褐色シルト (10YR2/2) マコモ層、植物遺体層、Ⅱ層由来の指頭大礫が混ざる。
Ⅲb　黒褐色シルト (10YR2/2) マコモ層、植物遺体層。
Ⅳ-1a 黒褐色粘土質シルト (10YR2/2)Ⅲ層による浸食を受ける、草本類を多く含む。
Ⅳ-1b 黒褐色粘土質シルト (10YR2/2) 草本類を多く含む。
Ⅳ-2　褐色シルト質粘土 (10YR2/2) 草本類含むがⅣ-Ⅰb 層より少ない、Ⅳ-Ⅰb 層より粘性強。
Ⅴa　黒褐色シルト (10YR3/1) 草本類を多く含む、砂をわずかに含む。
Ⅴb　黒褐色粘土質シルト (10YR3/1)Ⅵ層より砂をやや多く含む。
Ⅵ　黒褐色粘土質シルト (10YR3/1) 草本類を多く含む。
Ⅶa　暗褐色シルト (10YR3/4) 砂をわずかに含む、草本類が多い。
Ⅶb　暗褐色粘土質シルト (10YR3/3) 砂をわずかに含む。
Ⅷ　暗褐色粘土質シルト (10YR3/3)Ⅶ層より粘性強、わずかに砂混じり。
Ⅸ-1　褐灰色粘土 (10YR4/1)Ⅸ層か、やや貝混じり。
Ⅸ-2　黒褐色粘土 (10YR3/1) 貝層。

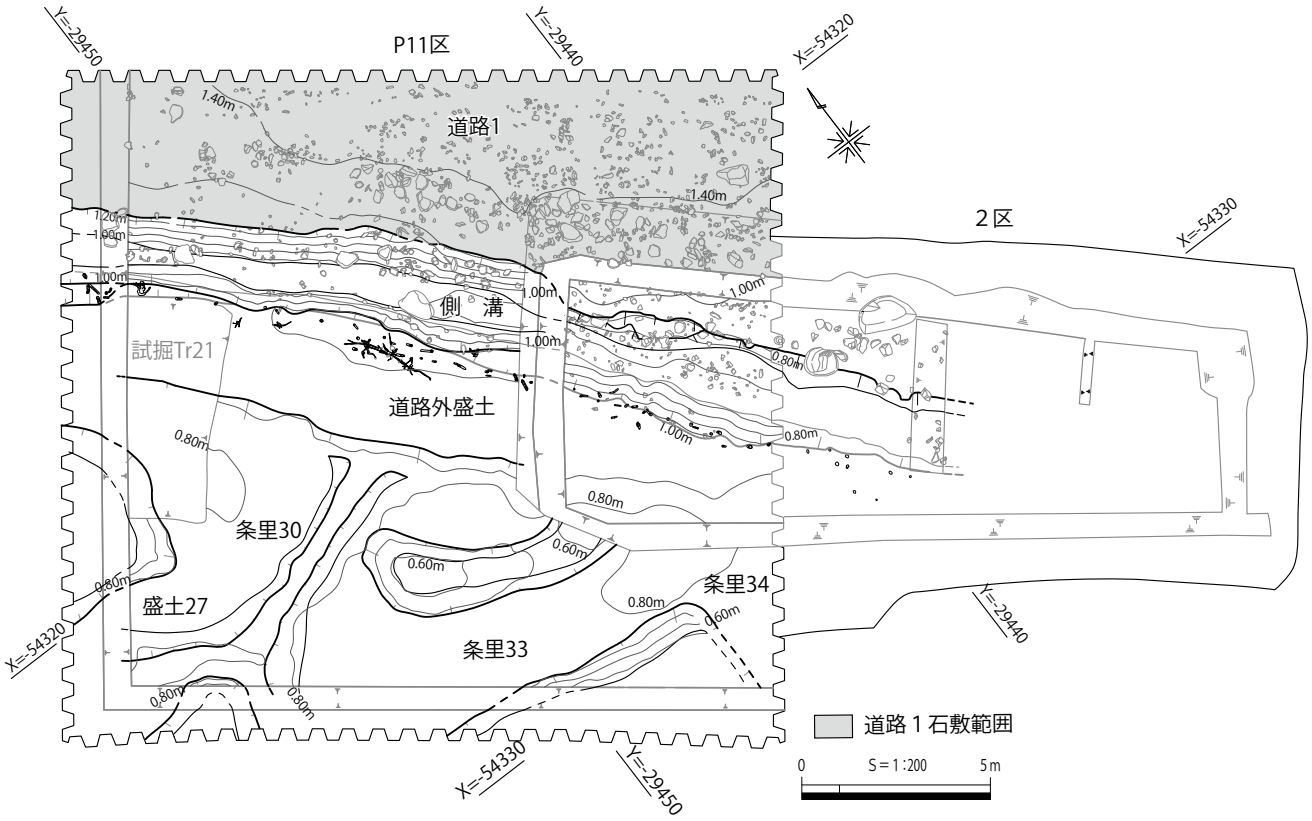
A－A'
1　黒褐色礫混じり粘土 (10YR3/2) 指頭～拳大の礫が少量含む、炭混じり。
2 黒褐色礫混じり粘土 (10YR3/2)85 層に類似するが、粘性やや弱、炭が目立つ。
3 黒褐色礫混じり砂質シルト (10YR3/1) 指頭～掌大の礫を一定量含む、木端も多量に含む、ラミナなし。
4 黒褐色砂質シルト (10YR3/2) 木端や枝を多量に含む、炭を多く含む、ラミナなし。
5 黒褐色礫混じり粘土 (10YR3/1) 拳～掌大の礫主体層、しまりなし。
Ⅸ層相当　6 黒褐色礫混じり粘土 (10YR3/1) 貝層主体、枝葉を多く含む、指頭大の礫を密に含む。

B－B'
Ⅳa 層相当　1 黒褐色粘土質シルト (10YR2/2) 粗朶片を含む、Ⅲ層による浸食が著しい、盛土最上層が土壌化。
2 黒褐色粘土質シルト (10YR2/2)1 層と類似するがⅢ層の浸食がさらに著しい、粗朶片が目立つ。
3 暗褐色砂混じりシルト (10YR3/4) ラミナは入るが一定せず、枝葉を多く含む。
Ⅸ層相当　4 褐灰色シルト質粘土 (10YR5/1)Ⅸ層に枝葉が混ざる。

C－C'
1 灰黄褐色砂混じりシルト (10YR5/2) 砂を含むが、ラミナなし、炭が目立つ、シルトブロック主体、礫をわずかに含む。
2 にぶい黄褐色粘土 (10YR5/4) 単一色粘土層、わずかに炭を含む。
3 灰黄褐色砂混じりシルト (10YR4/2)65 層に砂が混ざる、ラミナはなし、炭がやや目立つ。
4 灰黄褐色シルト混じり細～中粒砂 (10YR4/2) シルトブロックが目立つ、炭もやや含む。
5 褐色砂混じりシルト (7.5YR5/2) 細粒砂を多量に含む、ラミナほとんどなし、指頭～拳大の礫を一定量含む、炭が多い。
6 褐灰色礫混じり粘土 (10YR4/1) 指頭～拳大の礫を多量に含む、砂を含まない、炭がやや目立つ、しまり粘性強。
7 灰黄褐色シルト混じり細～中粒砂 (10YR4/2) 枝、木端を含む、指頭～拳大の礫が散在、ラミナほとんどなし。
8 灰黄褐色礫混じりシルト (10YR4/2) 指頭～拳大の礫を密に含む、枝を含む、砂を含むがラミナなし。
9 灰褐色礫混じり粘土 (7.5YR6/2) 拳大以下の礫を密に含む、枝、葉を一定量含み、炭もやや目立つ、粘性、しまり強、貼床に類似する土。
10 灰褐色粘土混じり礫 (7.5YR6/2) 指頭～拳大の礫主体、やや砂混じり、11、12 層に比べ礫の密度がわずかに疎、しまりやや弱。
11 灰褐色粘土混じり礫 (7.5YR6/2)12 中の礫よりやや大きい礫主体、9が混ざる、しまりやや弱。
12 灰褐色粘土混じり礫 (7.5YR6/2) 指頭大～拳大の礫主体、人頭大以上の礫も散在する、砂を含む、しまりなし。

D－D'
1 灰黄褐色砂礫混じり粘土 (10YR5/2) 指頭大の礫を一定量含む、炭を多く含む、粘性強。：C-C' 1 に対応。
2 褐灰色礫混じり粘土（10YR4/1) 基本的に 1 に類似するが、やや砂が多い、しまり 1 より弱。
3 褐灰色礫混じり粘土 (10YR4/1) 指頭～拳大の礫を多量に含む、炭が目立つ、やや砂混じり、ブロック状。：C-C' 6 に対応。
4 褐色礫混じりシルト (10YR3/3) 指頭～拳大の礫を多く含む、砂を一定量含み、ラミナはわずか。
5 灰黄褐色シルト混じり中～細粒砂 (10YR4/2) 指頭大～拳大の礫を密に含む、ラミナややあり、木端も含む。：C-C' 7 に対応。
6 暗褐色礫混じりシルト (10YR3/3) 指頭～拳大の礫を密に含む、しまりなし、4 より礫を多く含む。
7 褐色シルト混じり礫 (7.5YR6/2) 指頭～拳大の礫主体、9 より砂を多く含む、9 より礫密度がやや疎、しまり弱。
8 灰黄褐色粘土混じり礫 (10YR5/2) 拳～人頭大の礫の礫を密に含む、しまりなし、やや砂混じり。
9 灰褐色シルト混じり礫 (7.5YR6/2) 拳～掌大の礫主体、やや砂混じり、しまり弱。
10 灰褐色シルト混じり礫 (7.5YR6/2) 指頭～拳大の礫主体、やや砂混じり、しまり弱。
11 灰褐色礫混じり粘土 (7.5YR6/2) 指頭大の礫を密に含む、枝葉を含む、ややしまり強。：C-C' 9 に対応。
12 灰褐色シルト混じり礫 (7.5YR6/2) 13 に類似するが 11 が混ざる、しまり 13 よりやや弱。
13 灰褐色粘土混じり礫 (7.5YR6/2) 指頭～拳大の礫主体、しまりなし。：C-C' 12 層に対応。

第226図　2区・P11区土層断面図（2）

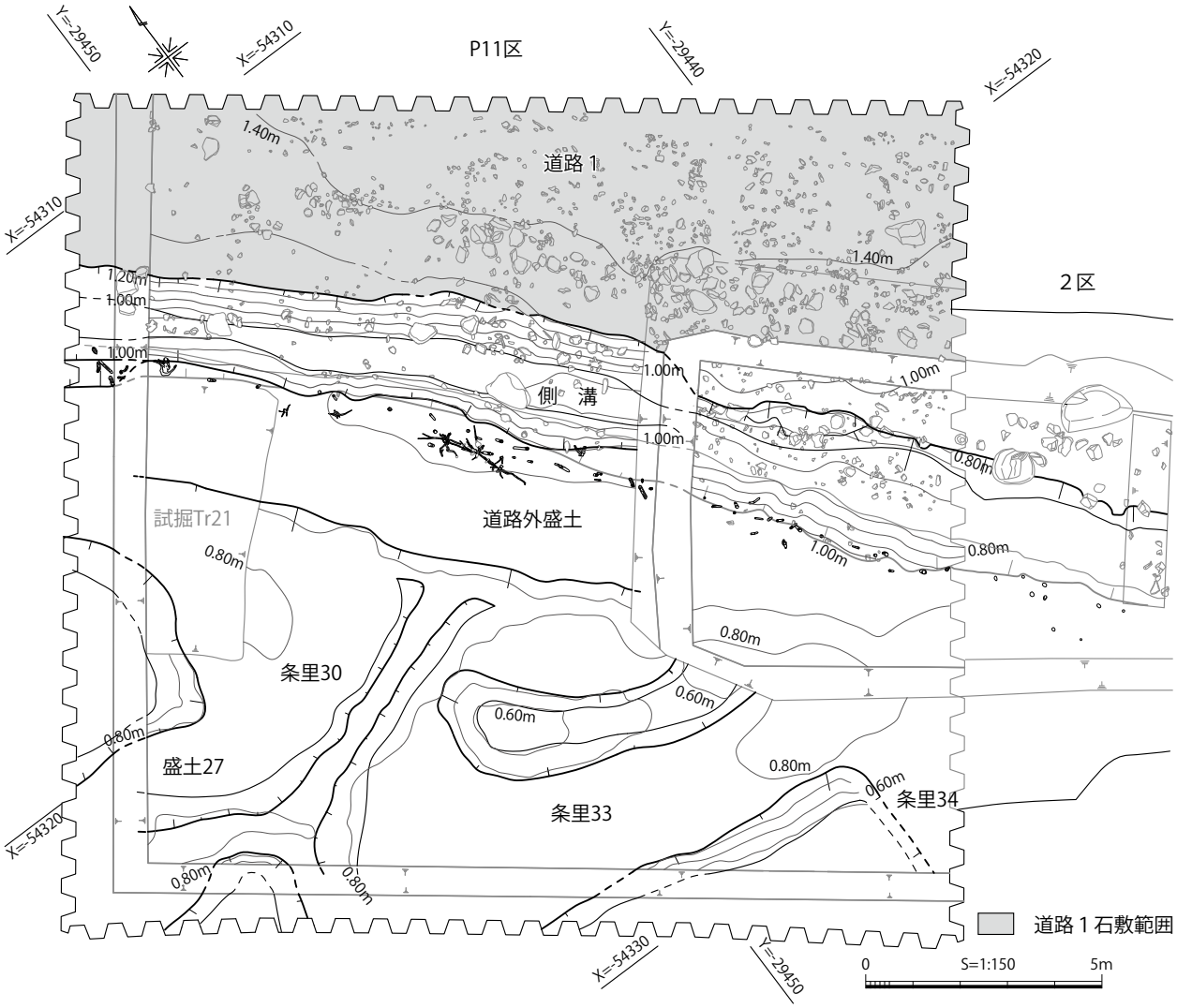


第227図　２区・Ｐ11区Ⅴ層上面遺構分布図（１）

Ⅶ層はＡ－Ａ’５層、Ｃ－Ｃ’３～８層、Ｄ－Ｄ’３～６層が相当する。Ａ－Ａ’５層は拳大から掌大程の角礫層で、自然堆積である。この礫層は弥生時代中期後葉の遺物包含層であり、Ｐ12区でも確認されている。それに対してその他の層は、炭やシルトブロックなど混在物の多い堆積構造や層全体が堅固に締まることなどから盛土など人為的な堆積の可能性がある。Ⅷ層はＣ－Ｃ’９～12層、Ｄ－Ｄ’７～13層が相当し、礫層が主体である。最上層のＣ－Ｃ’９層、Ｄ－Ｄ’11層は灰褐色礫混じり粘土で、礫層上面を成形し、施された整地土である可能性が高い。また、Ｄ－Ｄ’９・10層などは、人頭大以上の大型礫が堆積を堰き止めるような石積部分も散見されることから、護岸などの構造物である可能性もある。最下層にあたるＣ－Ｃ’12層、Ｄ－Ｄ’13層は礫層で自然堆積である。Ⅷ層相当層から遺物は出土していない。Ⅸ層は貝層であるが、山側では礫を密に含む傾向にある。

２　遺構の概要

２区とP11区では、弥生時代前期末から中期初頭の自然河道１基、弥生時代中期の盛土遺構１基、杭列１基、弥生時代中期から後期の土坑１基、自然河道１基、杭列２基、木造構造物３基、古墳時代の自然河道１基、木造構造物１基、古代の道路遺構１基、条里遺構３基、盛土遺構１基、自然河道２基、木造構造物１基を確認した。遺跡の中でも各時代を通じて遺構密度が高く、遺物の出土量も突出する調査区の一つである。Ｐ10～12区における遺物の出土量の多さは、近接する丘陵裾もしくは、丘陵斜面に集落や官衙など何らかの施設が存在していた可能性を示唆している。



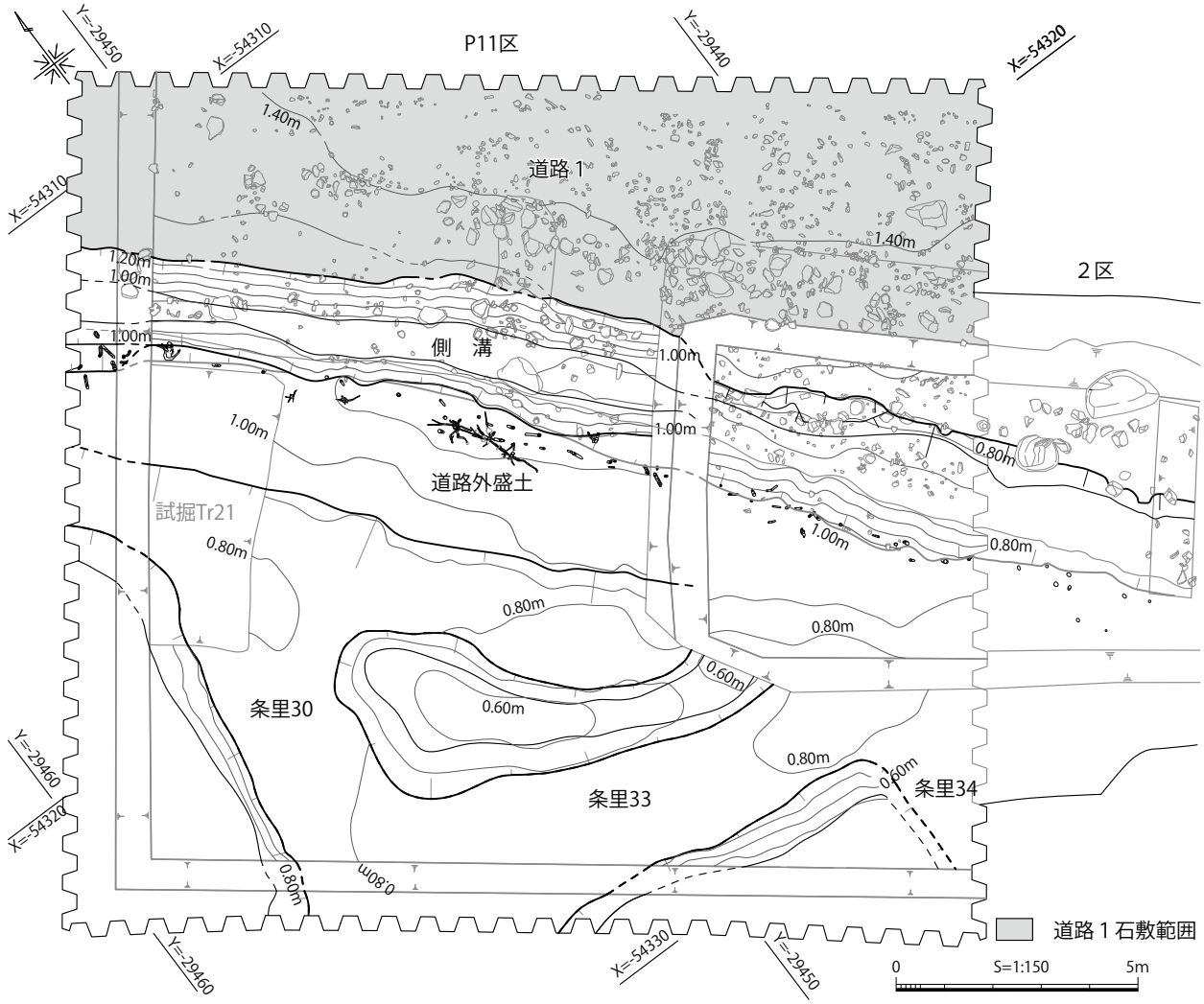
第228図　２区・Ｐ11区Ｖ層上面遺構分布図（２）

第３項　Ｖ層上面の遺構（古墳時代～平安時代）

１　概要（第227 ～ 230図）

Ｖ層、及び相当層上面が古墳時代後期から平安時代にかけての遺構検出面となる。Ｖ層上面の標高は0.5 ～ 0.7m前後である。道路遺構１基、条里遺構３基、盛土遺構１基、自然河道３基、木造構造物２基、整地土を検出している。遺構の構築順は大きく河道６→河道14・河道16→道路１→条里30、33、34の順である。遺跡を縦断する大規模な自然河道である河道６が古墳時代後期に形成され、埋没した後、７世紀末から８世紀初頭に道路１が築かれる。その後、10世紀後半に条里30、33、34が道路遺構に接続し構築される。道路１についてはその規模や構造から古代山陰道と考えられ、P10・11区では10世紀後半に街路樹として柳が植えられていたことが判明している。

遺物は多量の須恵器や土師器に加え、緑釉陶器、墨書土器、転用硯、木簡、木製祭祀具、鉄製品（鍬鋤先）、銅製品（鈴具）などが出土している。土器は道路１の道路盛土内、木製祭祀具は河道14や河道16からの出土が大部分を占めている。



第229図　２区・Ｐ11区Ｖ層上面遺構分布図（３）

２　道路遺構

道路１（第232 ～ 237図　ＰＬ.61・63 ～ 65）

Ｐ７～ 14区にかけて確認された大規模な道路遺構である。丘陵裾に沿って直線的に延びる。方位はＮ－45°－Ｗで、本調査区ではP7 ～ 10区までと比べると軸がやや東偏し、２区とP10区の区間で僅かに屈折したことが窺える。道路盛土は表土、または耕作土（Ⅰ層）下面が、側溝や道路外盛土はⅡ～Ⅲ層下面が検出面となる。道路盛土の大部分が遺存し、遺存状況は良好である。

遺構は盛土で構築され、本体である道路盛土の他に、側溝と道路外盛土が付随する。検出した幅は、路面にあたる石敷部分の幅が3.3 ～ 5.0m、盛土裾が3.8 ～ 6.3mで、盛土の高さは最大約85㎝程である。上面の標高は、北西端が1.4m、南東端が1.5mであり、南東に向かって僅かに登る。ただし、P10区に比べ表面に露出する礫の粒径が大きいことから路面は僅かながら削平されている可能性がある。道路盛土下面の標高は北西端が0.56m、南東端が0.76m前後で、南東側が20㎝ほど高い。

道路盛土

道路盛土は出土土器から５時期に分けられ、第１次盛土が道路敷設時、第２～４次盛土が道路改修に伴う盛土である。本調査区では全ての盛土が確認されている。時期は第１次盛土が７世紀末から８世紀初頭、第２次盛土が８世紀後半、第３次盛土が９世紀、第４・５次盛土が10世紀後半から11世紀

第230図　２区・P11区Ⅴ層上面遺構分布図（４）

と推定される。検出された側溝や道路外盛土は第４・５次盛土に伴う遺構である。

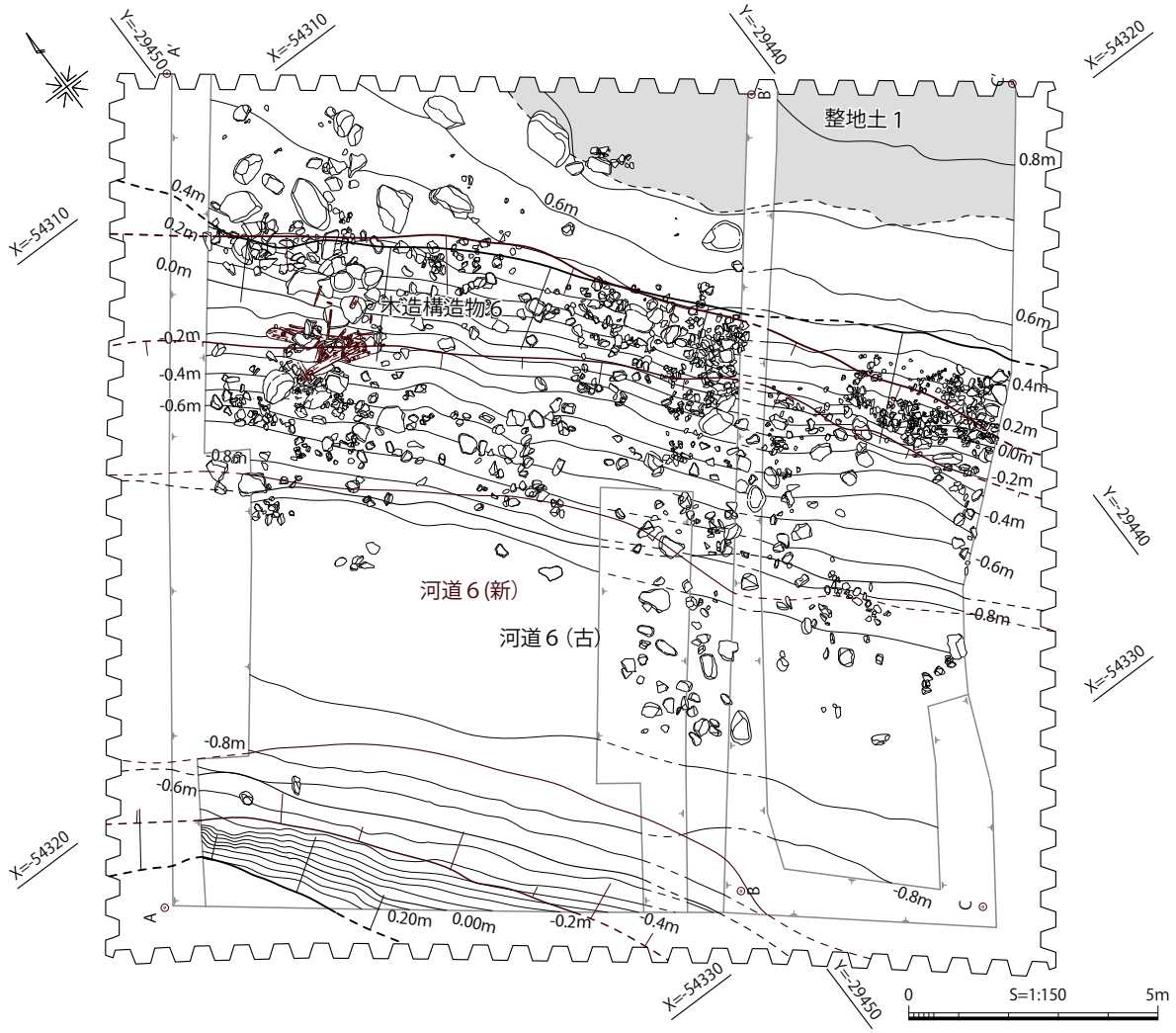
第１次盛土　　道路を敷設した当初の盛土で、A－A’36 ～ 40層、B－B’42 ～ 51層が該当する。下層からシルトや粘土を主体とする層、敷葉・敷粗朶層、褐灰色礫混じり粘土の３層に大別される。前２層が路床、褐灰色礫混じり粘土層が路盤にあたると考えられる。

最下層のうち、A－A’39層は均質な褐灰色粘土で、P10区でも敷葉・敷粗朶層の下層で確認されている。本調査区でも敷葉・敷粗朶層（A－A’38層）とセットで施され、道路敷部分を整地した盛土とみられる。道路盛土と基盤層の分離をはかり、混合を防ぐ目的があったものと考えられる。

敷葉・敷粗朶層は、調査区北西側のみ部分的に敷設されている。層厚は10 ～ 15㎝であり、粗朶は道路に沿って長軸方向に敷設されている。上層の灰褐色礫混じり粘土は、指頭大から拳大までの礫を密に含み、しまりが強い（A－A’36・37層、B－B’42・43層）。痕跡は確認できないが丁寧に搗き固められた可能性が高い。

第１次盛土の出土遺物は少ないが、須恵器や土師器などがある。時期は須恵器が岡田編年出雲Ⅱ～Ⅲ期に比定されることから、第１次盛土の時期は７世紀後葉から８世紀初頭と考えられる。

第２次盛土　　道路改修に伴う盛土で、A－A’30 ～ 35層、B－B’37 ～ 41層が該当する。A－A’30 ～ 35層は路肩を補強、拡充した際の盛土である。一方で、B－B’37 ～ 41層は路盤にあたる盛土と考えられる。37層は褐灰色礫混じり粘土で、第１次盛土の上層と類似するが、炭を多く含む。



第231図　２区・Ｐ11区Ⅴ層上面遺構分布図（５）

盛土法面には拳大から一抱え大の角礫が密に貼り付けられている。路肩や法面を保護、補強する役割を果たしたと考えられる。第４・５次盛土における貼石と重複するため、遺存状況は良好とはいえない。第１次盛土の遺存状況から少なくともこの段階で路肩が５ｍ以上にわたり大きく崩落したことが窺え、とくに北西端付近の崩落が著しかったとみられる。

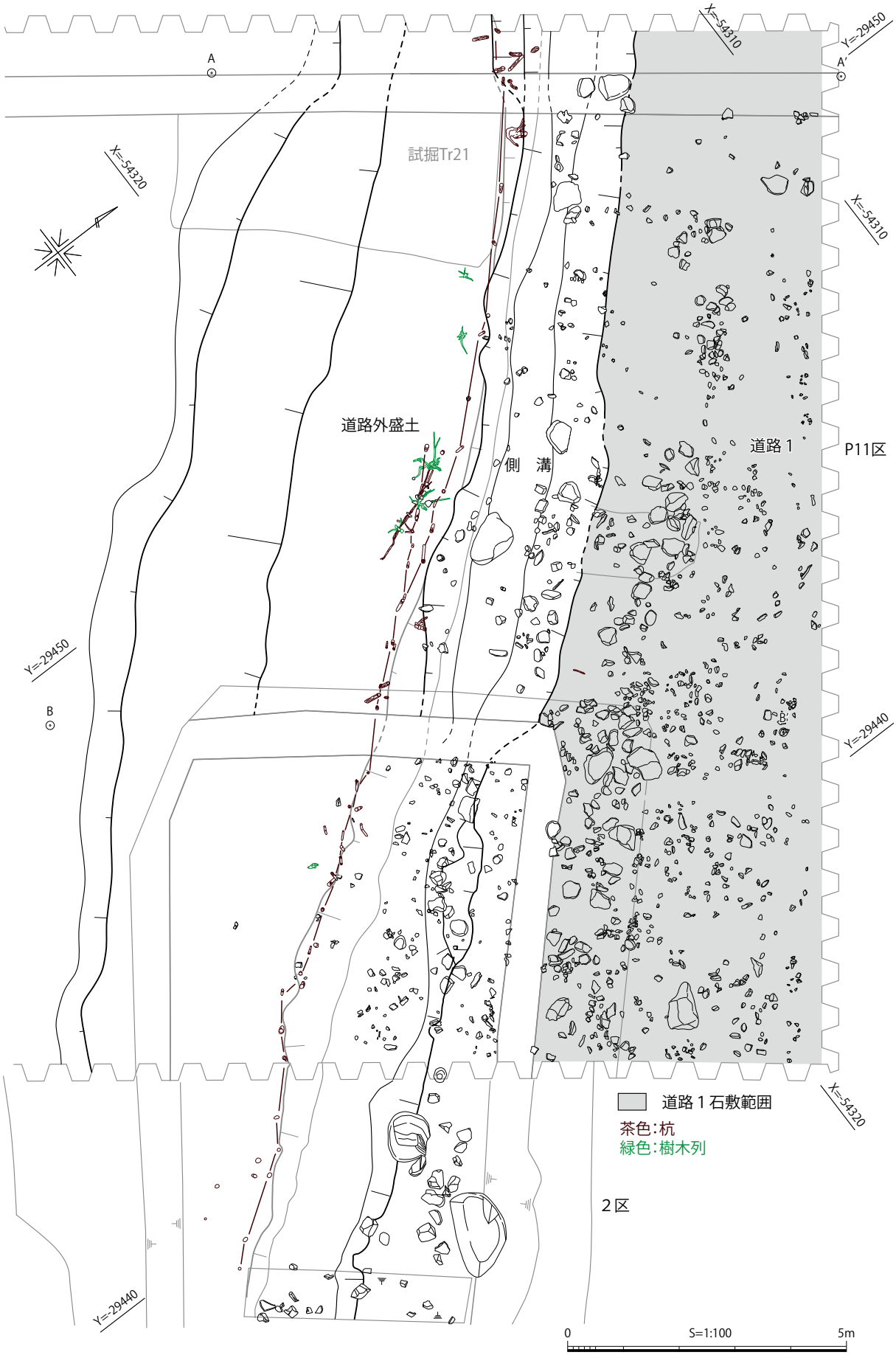
第２次盛土の出土遺物は須恵器や土師器などがある。ただし、土器の多くは第１次盛土に由来する資料で、第２次盛土に確実に供伴する資料はない。ただし、第４・５次盛土や帰属は不明ながら道路盛土内から出土資料、及びＰ10区との対応関係から時期は８世紀後半と考えられる。

第３次盛土　　道路改修に伴う盛土で、Ａ－Ａ’28・29層、Ｂ－Ｂ’35・36層が該当する。第３次盛土は他の調査区では確認されていない。僅かしか遺存していないが、路盤にあたる可能性がある。Ａ－Ａ’29層は黒褐色シルト質粘土で、粗朶が少量混和されている。

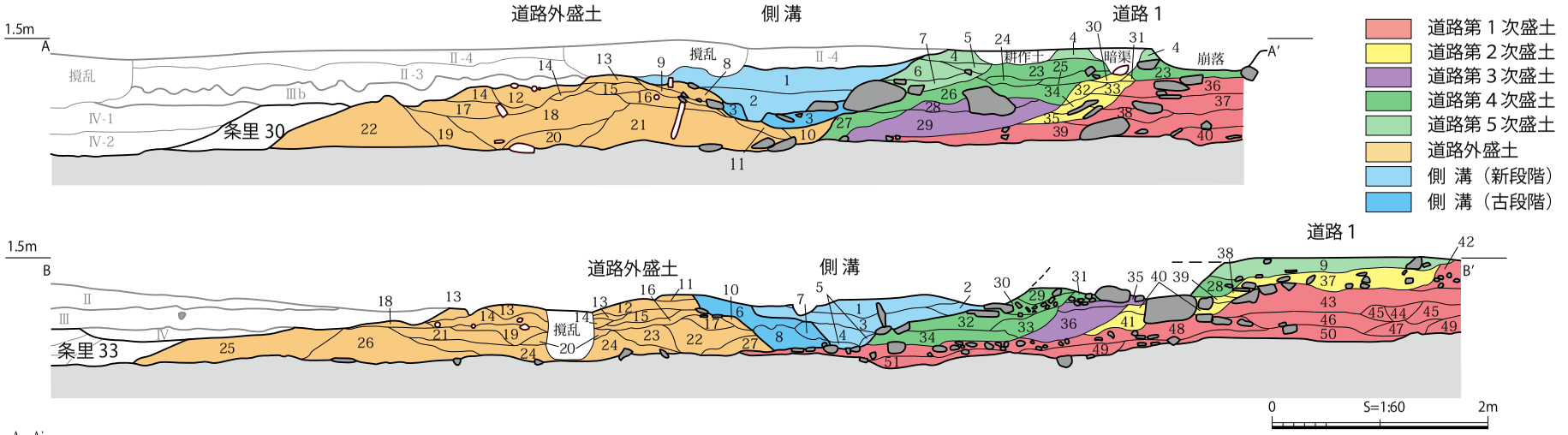
第３次盛土の出土遺物は須恵器や土師器が僅かにある。出土した土師器が伯耆国庁第２段階に比定されることから９世紀代と推定される。

第４・５次盛土　　道路改修に伴う盛土で、Ａ－Ａ’23 ～ 27層、Ｂ－Ｂ’28 ～ 34層が第４次盛土、Ａ－Ａ’４～７層、Ｂ－Ｂ’９層が第５次盛土にあたる。

Ａ－Ａ’４層、Ｂ－Ｂ’９層が路面に相当する。路面は黒褐色礫混じり粘土を主体とし、指頭大から拳大前後の礫を密に含む。層厚は８～ 15㎝程である。下層の路盤に相当する盛土に比べ小礫が主体で、



第232図　２区・Ｐ11区道路１



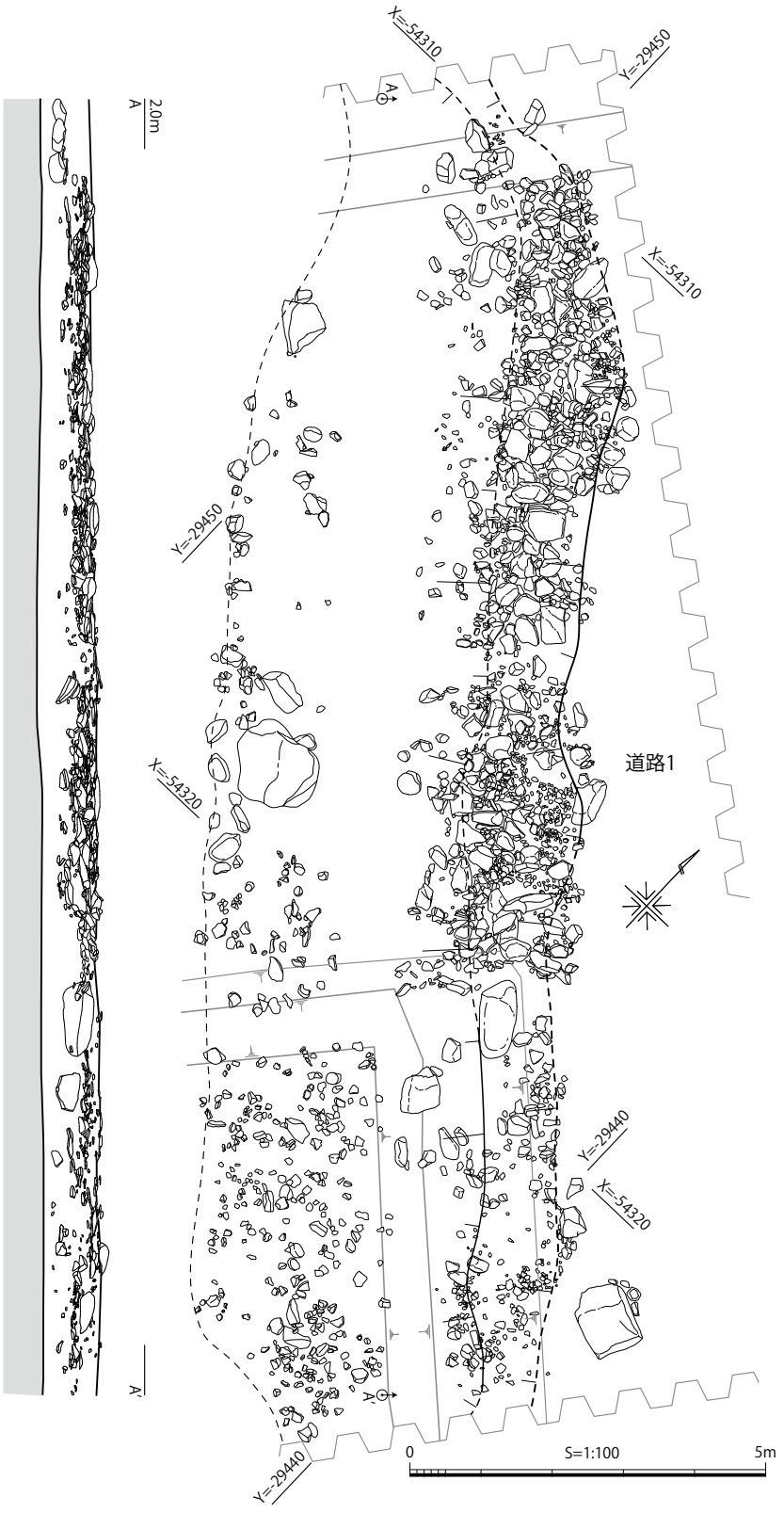
A－A′

1 黒褐色粘土質シルト (10YR3/1) 指頭大の礫を少量含む。
2 黒褐色粘土質シルト (10YR3/1) 粗砂片を少量含む、１に類似するが、しまりやや強。
3 黒褐色砂混じり粘土 (10YR2/2) 粗砂を一定量含む、細粒砂を含む。
4 黒褐色礫混じり粘土 (10YR3/1) 指頭大の礫を密に含む、しまり強、炭を多く含む。
5 黒褐色礫混じり粘土 (10YR3/1) 指頭大の礫を多く含む、粗砂片を少量含む。
6 黒褐色粘土 (10YR3/1) 指頭大の礫を少量含む、粗砂片を一定量含む。
7 黒色炭層 (10YR2/1) 炭と灰の密集層。
8 黒褐色シルト質粘土 (10YR2/2) 拳大の礫を含む、粗砂を少量含む、しまりやや強。
9 黒褐色シルト質粘土 (10YR2/2) 8に類似するが、粗砂がやや多く、しまりも強。
10 黒褐色粘土 (10YR2/2) 粗砂を一定量含む、11より粗砂が多い。
11 黒褐色粘土 (10YR2/2) 粗砂を一定量含む、21に類似するが粘性やや弱。
12 黒褐色粘土質シルト (10YR2/2)φ0.5 ～ 5cmの粗砂層（長軸方向）、砂を多く含む。
13 黒色粘土質シルト (10YR2/1) 粗砂を少量含む、Ⅲ層による浸食が著しい。
14 黒褐色粘土質シルト (10YR2/2) 粗砂を多く含むが12より少ない、しまりやや強。
15 黒褐色粘土 (10YR2/2) 粗砂を少量含む、しまり、粘性強、白色味を帯びる。
16 黒褐色粘土 (10YR2/2) 粗砂を少量含む15よりしまり、粘性弱。
17 黒褐色シルト質粘土 (10YR2/2) 粗砂を少量含む、しまり、粘性やや弱。
18 黒褐色粘土 (10YR2/2) 粗砂をわずかに含む、17よりしまりやや強。
19 黒褐色粘土 (10YR2/2) 粗砂を含まない、しまり、粘性強、20･22よりしまりやや弱。
20 黒褐色粘土 (10YR2/2) 粗砂を含まない、しまり、粘性強。
21 黒褐色粘土 (10YR2/2) 粗砂をほとんど含まない、16よりしまり、粘性強。
22 黒褐色粘土 (10YR2/2) 粗砂を含まない、しまり、粘性強。
23 黒褐色礫混じり粘土 (10YR3/1) 指頭大の礫を密に含む、炭、焼土粒を含む、
24 黒褐色礫混じり粘土 (10YR3/1)23とよく似るが、粘性やや強。
25 黒褐色シルト質粘土 (10YR3/1) 指頭～拳大の礫を一定量含む、炭を多く含む。
26 黒褐色シルト質粘土 (10YR3/1) 粗砂を一定量含む、しまり弱、炭を多く含む。
27 黒褐色シルト質粘土 (10YR2/2) 粗砂を一定量含む、26より粘性やや強。
28 暗褐色粘土 (7.5YR3/4) 単一な粘土層、粘性強。
29 黒褐色シルト質粘土 (10YR2/2) 粗砂を少量含む、指頭大の礫をわずかに含む。
30 褐灰色礫混じり粘土 (10YR4/1) 指頭～拳大の礫を含む、しまりやや強、炭を多く含む。
31 灰色粘土 (10YR4/1) 粘性、しまり強い。
32 灰色礫混じり粘土 (10YR4/1)31に類似するが、礫がやや少ない。
33 褐灰色礫混じり粘土 (10YR4/1) 指頭～拳大の礫を含む、しまり、粘性強、炭を含まない。
34 褐灰色粘土 (10YR4/1) 指頭～拳大の礫を含む、33よりしまり強、炭を含まない。
35 褐灰色礫混じり粘土 (10YR4/1) 指頭～拳大の礫を多く含む、34よりしまりやや弱。
36 褐灰色礫混じり粘土 (10YR4/1) 指頭～拳大の礫を密に含む。
37 褐灰色礫混じり粘土 (10YR4/1) 指頭～拳大の礫を密に含む。36よりしまり粘性弱
38 極暗褐色植物質層 (7.5YR2/3) 粗朶、木片を多く含む、植物遺体を密に含む、粗朶は長軸方向。
39 褐灰色粘土 (10YR4/1) 粘性強、均質な粘土、指頭～拳大の礫を下位に含む。
40 黒褐色粘土 (10YR2/2) 粗朶をほとんど含まない、しまり強、拳大程の礫を下面を中心に含む。

B－B′

1 黒色シルト (10YR2/1) 粗砂片を少量含む、砂礫、炭を多く含む、拳大の礫を含む。
2 黒褐色シルト質粘土 (10YR3/1) 1に類似するがやや小礫が多い。
3 黒色シルト (10YR2/1) 粗砂片を少量含む、指頭～拳大の礫を少量含む、炭を多く含む。
4 黒色シルト (10YR2/1) 粗砂片を少量含む、炭、灰を多量に含む。
5 黒褐色シルト質粘土 (10YR2/2) 粗砂片を少量含む。
6 黒褐色シルト質粘土 (10YR2/2) 粗砂片を少量含む、砂礫を含む、7よりしまり弱。
7 黒褐色シルト質粘土 (10YR2/2) 粗砂片を一定量含む、細粒砂を含む、炭が目立つ、
8 黒褐色砂混じりシルト (10YR2/2) 粗砂片を一定量、炭・焼土粒を多量に含む、細～中粒砂を含む。
9 黒褐色礫混じり粘土 (10YR3/1) 指頭～拳大の礫を多く含む、炭も多く含む、しまり強。
10 黒褐色砂混じり粘土 (10YR2/2) 炭を多く含む、8に類似するが、しまりやや強。
11 黒色シルト質粘土 (10YR2/1) 粗朶を少量含む、砂、炭粒を多く含む。
12 黒褐色粘土 (10YR2/2) 粗朶をわずかに含む、しまり粘性強、指頭大の礫を含む、炭も多い。
13 黒色粘土質シルト (10YR2/1)Ⅲ層による浸食が著しい、粗朶を一定量含む。
14 黒褐色粘土質シルト (10YR2/2) 粗朶層、長軸方向のφ0.5~2cmほどの粗朶を密に含む、粗朶間に砂が目立つ。
15 黒褐色粘土 (10YR2/2) 粗朶をわずかに含む、しまり粘性強、白色味を帯びる粘土層。
16 黒褐色シルト質粘土 (10YR2/2) 粗朶を一定量含む、指頭大の礫を少量含む、しまりやや弱。
17 黒褐色粘土 (10YR2/2) しまり粘性強、粗朶を含まない。
19 黒褐色シルト質粘土 (10YR2/2) 粗朶を少量含む、しまり粘性やや強。
20 黒褐色粘土 (10YR2/2)17層に類似するが、しまり粘性やや弱。
21 黒褐色粘土 (10YR2/2) 粗朶をほとんど含まない、24よりしまり粘性弱。
22 黒褐色シルト質粘土 (10YR2/2) 粗朶片を一定量含む。
23 黒褐色粘土 (10YR2/2) 粗朶片をわずかに含む、24より粘性弱。
24 黒褐色粘土 (10YR2/2) 粗朶をほとんど含まない、26に類似するが粘性やや弱。
25 黒褐色粘土 (10YR2/2) 粗朶を含まない、26より粘性、しまり弱。
26 黒褐色粘土 (10YR2/2) 粗朶をほとんど含まない、しまり粘性強、炭粒がやや目立つ。
27 黒褐色粘土 (10YR2/2) 粗朶を少量含む、しまり粘性強。
28 黒褐色礫混じり粘土 (10YR3/1) 指頭大の礫が密集し、炭多い。9よりもしまり弱。
29 黒褐色礫混じり粘土 (10YR3/1) 指頭の礫を一定量含む。
30 黒褐色礫混じり粘土 (10YR3/1) 指頭～拳大の礫を密に含む。
31 黒褐色礫混じり粘土 (10YR3/1)30と類似するが、しまり強。
32 黒褐色シルト質粘土 (10YR3/1) 指頭～拳大の礫を少量含む、30よりしまりやや弱。
33 黒褐色粘土 (10YR2/2) 粗朶をほとんど含まない、粘性強。
34 黒褐色粘土 (10YR2/2) 粗朶片を一定量含む、拳大の礫をわずかに含む、炭を少量含む。
35 褐灰色粘土 (10YR4/1) 礫をほとんど含まない、粘性強。
36 黒褐色シルト質粘土 (10YR2/2) 指頭大の礫、砂を少量含む、炭粒やや目立つ。
37 褐灰色礫混じり粘土 (10YR4/1) 指頭大の礫を密に含む、炭を多く含む。
38 褐灰色礫混じり粘土 (10YR4/1) 指頭大の礫を密に含む、炭多い、37よりしまり弱。
39 暗褐色粘土 (7.5YR3/4) 粘性強、炭化物を層状に含む。
40 褐灰色粘土 (10YR4/1) しまり粘性強、指頭大の小礫を一定量含む。
41 褐灰色粘土 (10YR4/1)56層よりしまり弱、礫をほとんど含まない。
42 褐灰色礫混じり粘土 (10YR4/1) 指頭大の礫を密に含む、炭を含まない。
43 褐灰色粘土 (10YR4/1) 指頭～拳大の礫を一定量含む、しまり粘性やや強。
44 褐灰色粘土 (10YR4/1) 指頭大の礫を少量含む、しまりやや弱、炭がやや目立つ。
45 褐灰色粘土 (10YR4/1) 指頭大の礫を少量含む、44よりしまりやや強。
46 褐灰色砂混じり粘土 (10YR4/1) 指頭大の礫を一定量含む、砂を含む、炭がやや目立つ。
47 褐灰色砂混じり粘土 (10YR4/1) 指頭大の礫を一定量含む、46より砂を多く含む。
48 黒褐色粘土 (10YR2/2) 指頭～拳大の礫を密に含む、しまり粘性強。
49 褐灰色砂 (10YR4/1) 中粒砂主体、炭を一定量含む。
50 褐灰色砂混じり粘土 (10YR4/1) 拳大の礫を多く含む、46より粘性強。
51 黒褐色粘土質シルト (10YR3/1) 粗朶を少量含む、細粒砂を含む。

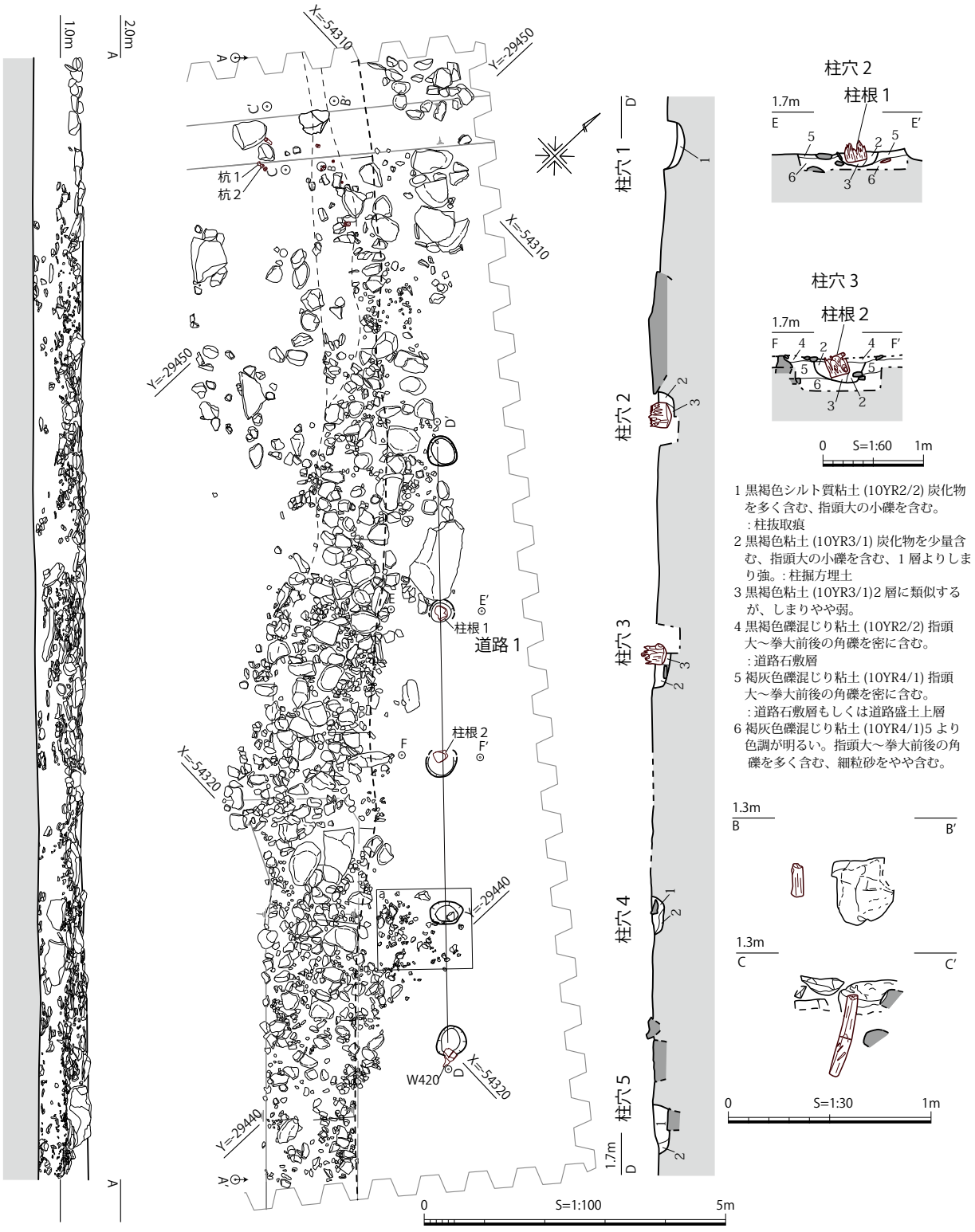
第233図　２区・Ｐ11区道路１土層断面図



第234図　２区・P11区道路１第２次盛土路肩礫改修状況図

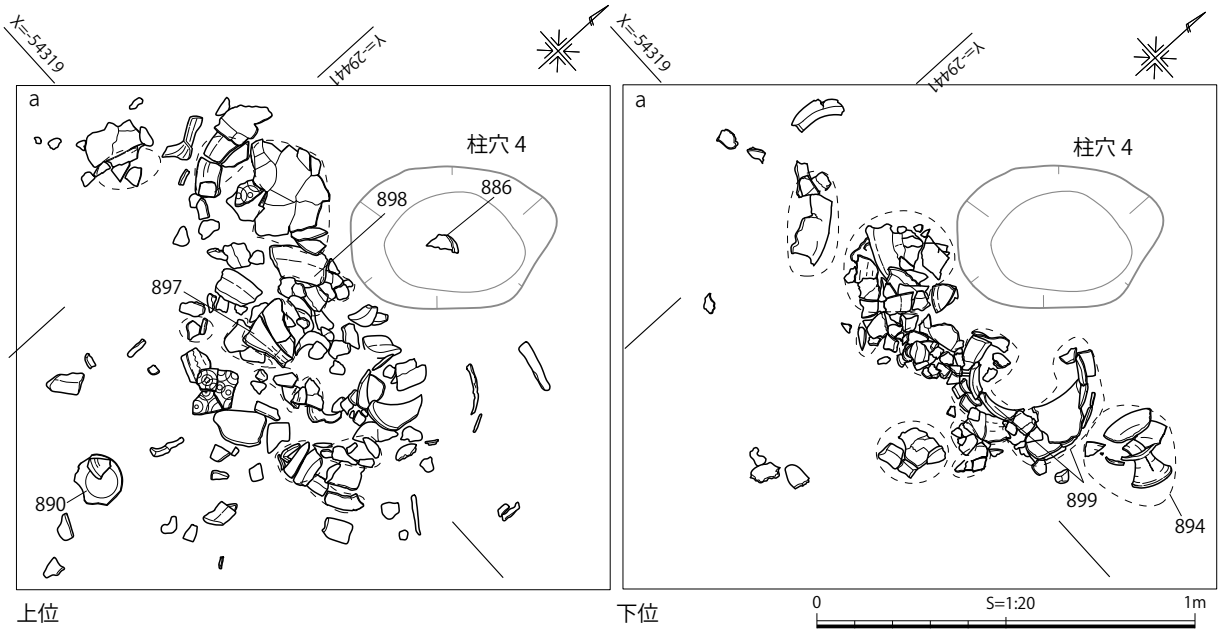
粒径も揃う。土器細片も多く含まれており、破砕し意図的に混和したと考えられる。上面には近世以降の耕作地に伴う暗渠が縦横に走っていることもあり、凹凸面などの明確な通行痕跡は確認できていない。ただし、層全体が堅く締まっている。

Ａ－Ａ’５～７層、23～27層、Ｂ－Ｂ’29～34層は路盤、もしくは路肩から法面にかけて充填された盛土である。崩落した法面に拳大から一抱え大程の角礫を密に貼り付けた後に、盛土を施したと考え



第235図　２区・Ｐ11区道路１第４・５次盛土路肩礫改修状況図

られる。法面に貼られた礫は第４・５次盛土のものが重複し、帰属を明確に区別できなが、南東半にかけては第4次盛土がみられないことから大半は第５次盛土に伴うとみてよい。北西端付近では改修に伴う細い丸太杭が10本確認されている。ちょうど路肩の崩落が著しい部分にあたり、杭で礫を補強しながら盛土が拡充されたことが窺われる。樹種はスダジイなどである。盛土は黒褐色礫混じりやシルト質粘土で、粗朶を混和させたものもみられる。Ａ－Ａ’７層は炭や灰が密集する薄層で、P10区でも確認されているが、盛土としての機能は明らかにしえない。



第236図　２区・Ｐ11区道路１柱列周辺遺物出土状況図

路面直下からは柱列１基が確認されている。柱穴が調査区外へ展開し、掘立柱建物となる可能性もある。方位はN－50°－Wで、路肩に沿う。規模は４間(9.8m)で、柱間寸法は2.2 ～ 2.4mとややばらつきがある。柱堀方は径50cmほどの円形を呈し、深さは10 ～ 20cmと浅い。柱穴２、３では柱根が遺存しており、柱は径20cmの角材である。柱穴５の掘方肩部でも柱材もしくは礎板とみられる材が出土している。樹種はスギである。柱穴１・４・５では柱抜取痕跡が確認でき、柱材は切断された後に、第５次の路面が舗装されたと考えられる。柱列の性格は特定できないが、特徴から恒常的な施設とは考えにくいことから、改修等に伴う仮設的な構造物であった可能性が高い。放射性炭素年代測定でも柱穴２の柱根１が774－893calAD(95.4%)、柱穴３の柱根２が889－975calAD(95.4%)の値を示しており、柱穴がこの段階に伴うのは確実である。なお、柱列の柱穴４堀方周辺では第５次の路面から土師器や須恵器が集中して出土している。とくに土師器甕が少なくとも２個体以上伏せられた状態で出土しているが、出土土器は全て第１次、ないしは第２次盛土に伴う時期の資料であることから、柱列との関連性は低く、その性格は明らかにしえない。

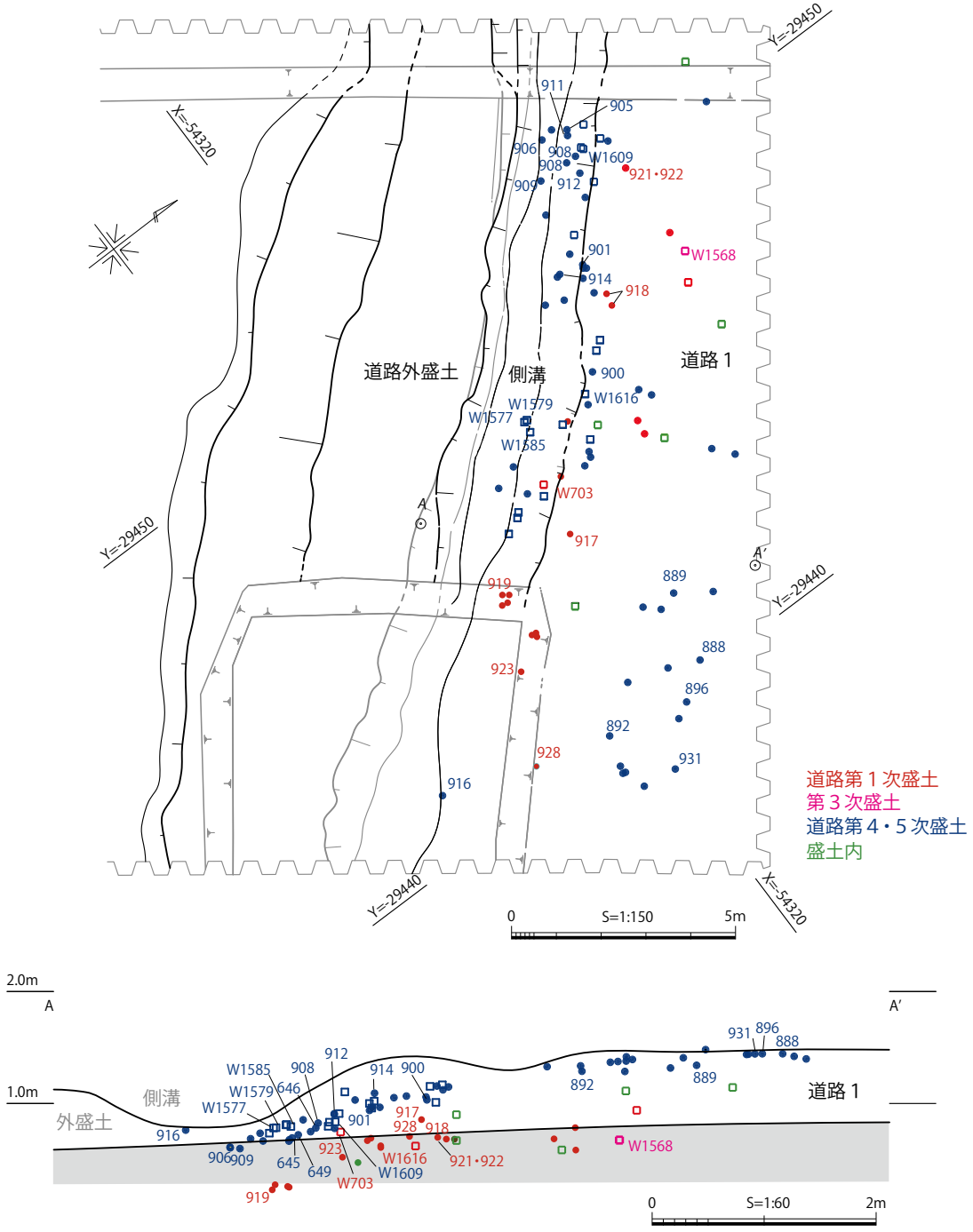
第４・５次盛土の出土遺物には、須恵器や土師器、緑釉陶器、木製品、木製祭祀具、獣骨などがある。土師器の杯･皿の出土が目立ち、調査区中央付近の法面付近からは土錘がまとまって出土している。

構築時期は、須恵器・土師器が岡田・八峠編年ＫⅤ～Ｃ１期に比定されること、P10区との対応関係から第４次盛土が10世紀後半、第５次盛土が11世紀代と考えられる。放射性炭素年代測定では、２σ暦年代範囲で杭１が775－889calAD(95.4%)、杭２が775－898calAD(87.0%)の値を示し、概ね齟齬はない。

側　溝(第238図　ＰＬ.62)

平野側の道路側溝にあたり、道路本体に沿って直線的に延びている。道路盛土の外側に道路外盛土を築くことで、その間の窪地が側溝として作出されたと考えられる。道路の第５次盛土に伴う側溝であり、重複関係から古段階と新段階の２時期に分けられる。

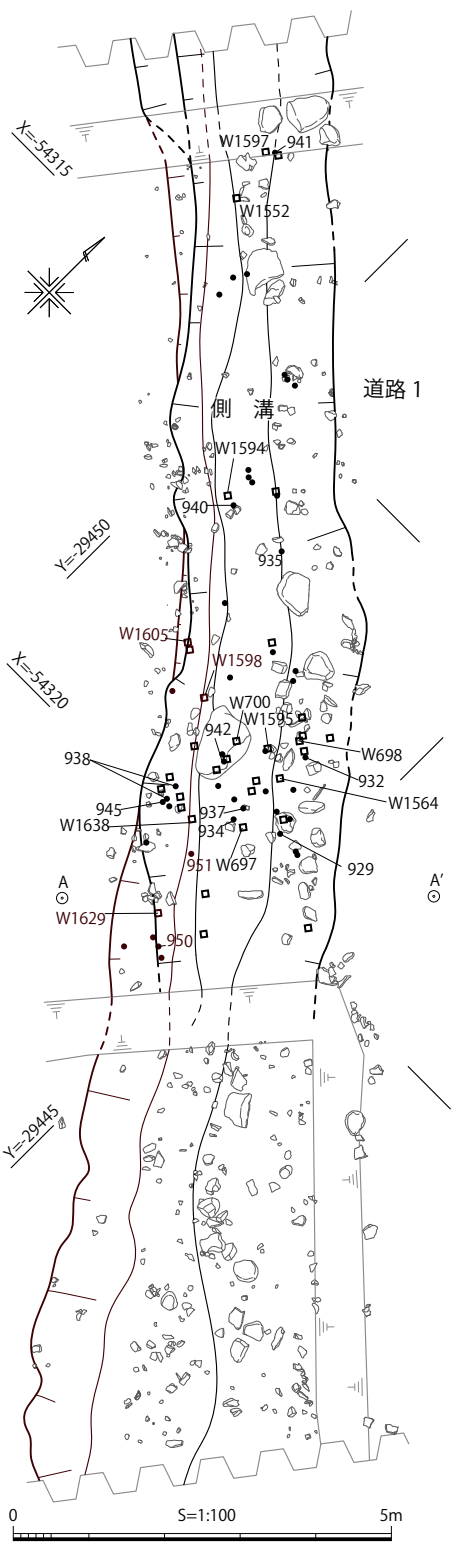
古段階は、新段階の側溝が重複するため、道路外盛土側の肩部付近しか確認できない。幅は明確ではないが、深さは最大55cm程である。埋土は黒褐色砂混じり粘土やシルトである。粗朶片を含んでい

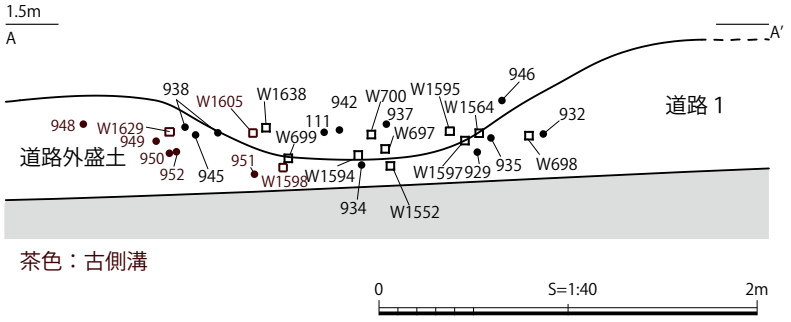


第237図　２区・Ｐ11区道路１盛土内遺物出土状況図

るが、本来、道路外盛土や道路盛土の帰属するものが流入した可能性が高い。ラミナはみられないものの、砂を比較的多く含むことから一時的な流水が存在した可能性がある。遺物は須恵器や土師器、木製品が少量出土している。

新段階は、古段階とほぼ同じ位置に掘削し直されている。規模は幅1.9 ～ 2.2m、深さ最大45cmほどである。底面レベルは0.80m前後で、北西端と南東端で高低差はほとんどみられない。断面形は皿状で、壁面の立ち上がりは比較的緩やかである。埋土はⅢ層に類似する黒褐色シルトからなる。溝内は古段階に比べ乾燥した環境下にあったことが窺える。指頭大から人頭大に至る角礫が含まれているが、これらは道路改修時に路肩に貼り付けられた礫が流れ込んだものと考えられる。遺物は須恵器や土師器に加え、下駄や曲物など木製品が一定量出土している。Ｐ10区と同じく溝の底面付近から完形





第238図　２区・Ｐ11区道路１側溝

に近い土師器の杯皿が調査区全域にわたって出土している。

側溝の時期は、出土土器が須恵器・土師器が岡田・八峠編年ＫＶ～Ｃ１期に比定されるが、道路の改修盛土や道路外盛土との関係から新古段階とも11世紀代と考えられる。遅くともⅢ層が堆積し始める12世紀頃には廃絶したとみられる。

道路外盛土（第239～242図　ＰＬ.66・67－１,２）

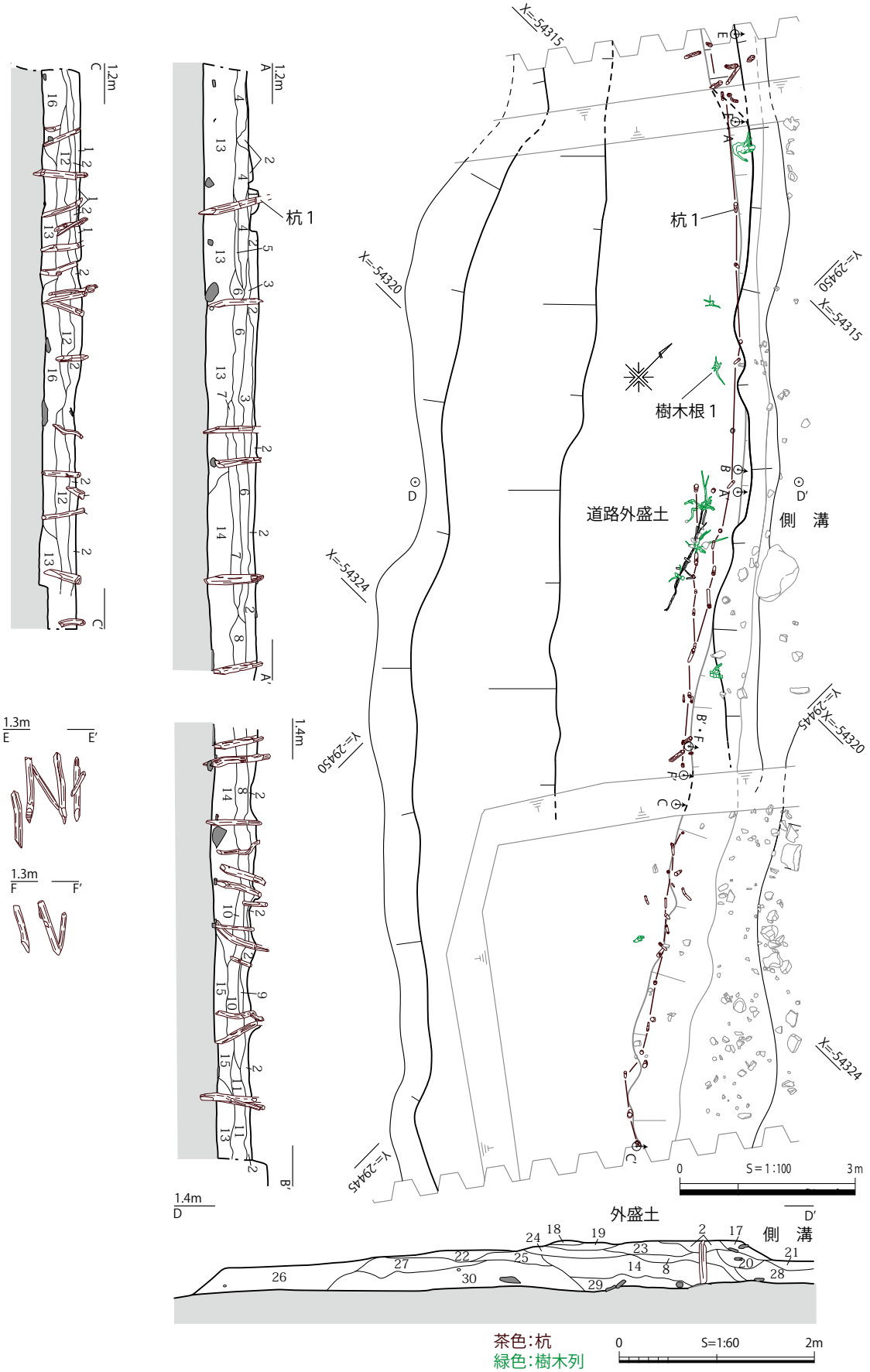
道路１の外側に築かれた盛土遺構で、道路に沿って南東から北西方向に直線的に延びている。平野側には条里遺構や盛土遺構が接続し、構築順は道路外盛土→条里遺構→盛土遺構である。

盛土の規模は、上面幅2.3～2.9m、基底部幅5.0～5.9m程で、盛土の高さは最大70cm程である。盛土上面の標高は1.1～1.2m前後で、道路上面よりも30cmほど低く、条里遺構上面よりも30cmほど高い。盛土は基本的に緻密な黒褐色粘土を用いており、盛土裾の両側に粘性やしまりの強い盛土で土手を築いた後、内部を盛土で充填していく工法で築かれている。ただし、Ｄ－Ｄ'をみると最終的に外側に粘土を貼り付け、盛土を拡充している様子が窺える。

盛土中位では中央付近で粗朶や木製品が帯状に集中する箇所がみられた。範囲は幅２m程で、粗朶は盛土に直交する方向に敷設されている。盛土中位における敷粗朶は他に確認できないが、盛土内の排水などの機能が考えられる。

盛土上位では敷粗朶が確認されている。Ａ－Ａ'12層、Ｂ－Ｂ'14層が敷粗朶層にあたり、層厚は10～18cmほどである。粗朶は径0.5～２cmの枝が長軸方向に敷設され、葉付きではない。樹種はエノキ属やクスノキ科などである。方向が揃い密に敷かれた部分もあることから痕跡は確認できないが、いくつかの単位で結束されていた可能性もある。敷粗朶の上には掌大から人頭大程度の扁平な礫が置かれており、粗朶を押さえ固定する目的があったと考えられる。粗朶層を覆う第233図Ａ－Ａ'８～10層は道路の第４次盛土に後出し、礫や炭などの混和物が多いことから、改修時の盛土と考えられる。

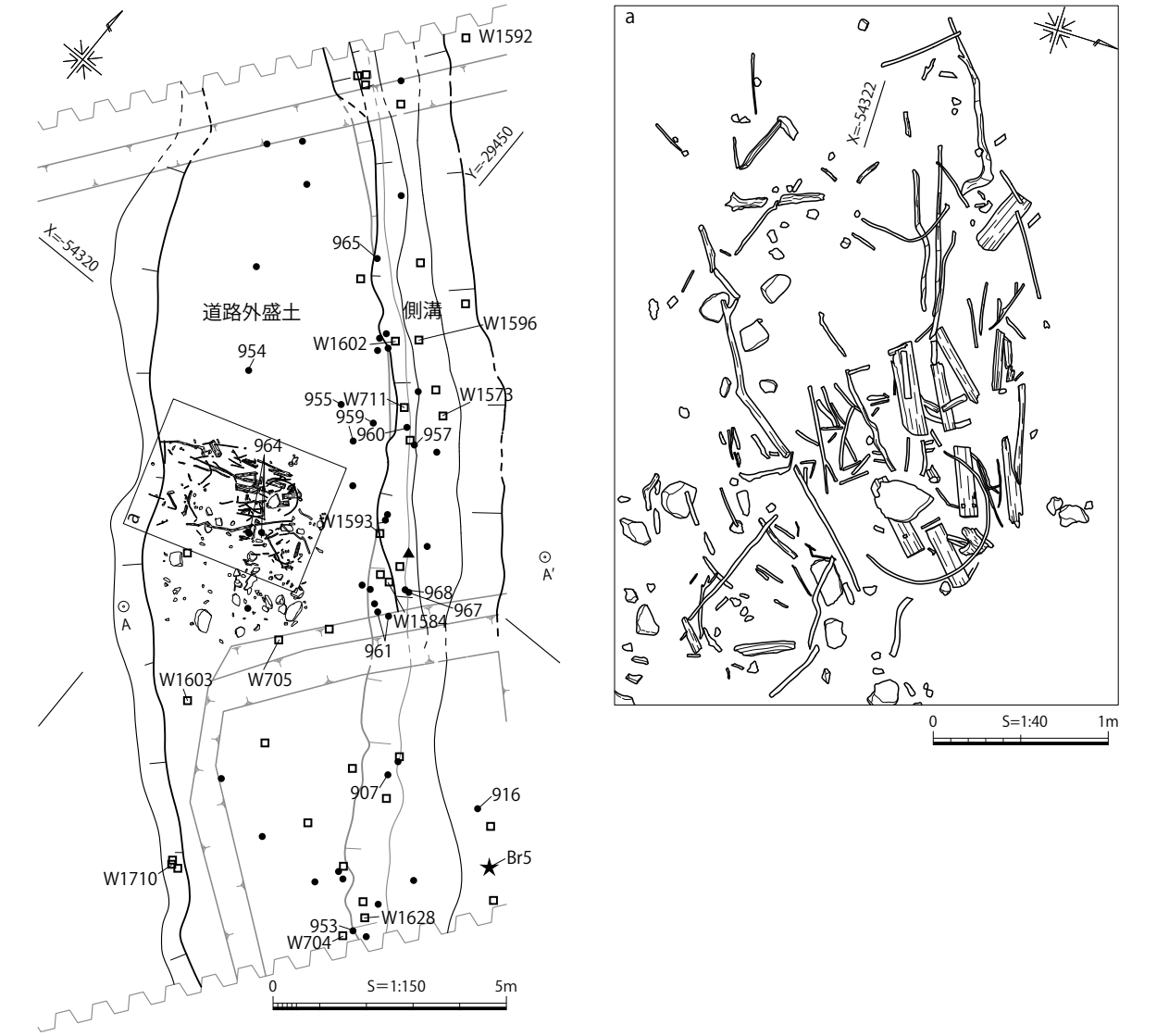
側溝側の肩部にはＰ10区と同様に盛土上で杭列と樹木根が検出されている。まず、杭列は１列、ないしは２列で、中央付近では２列並行することが明瞭である。間隔は0.1～1.2mと、ばらつきがあ



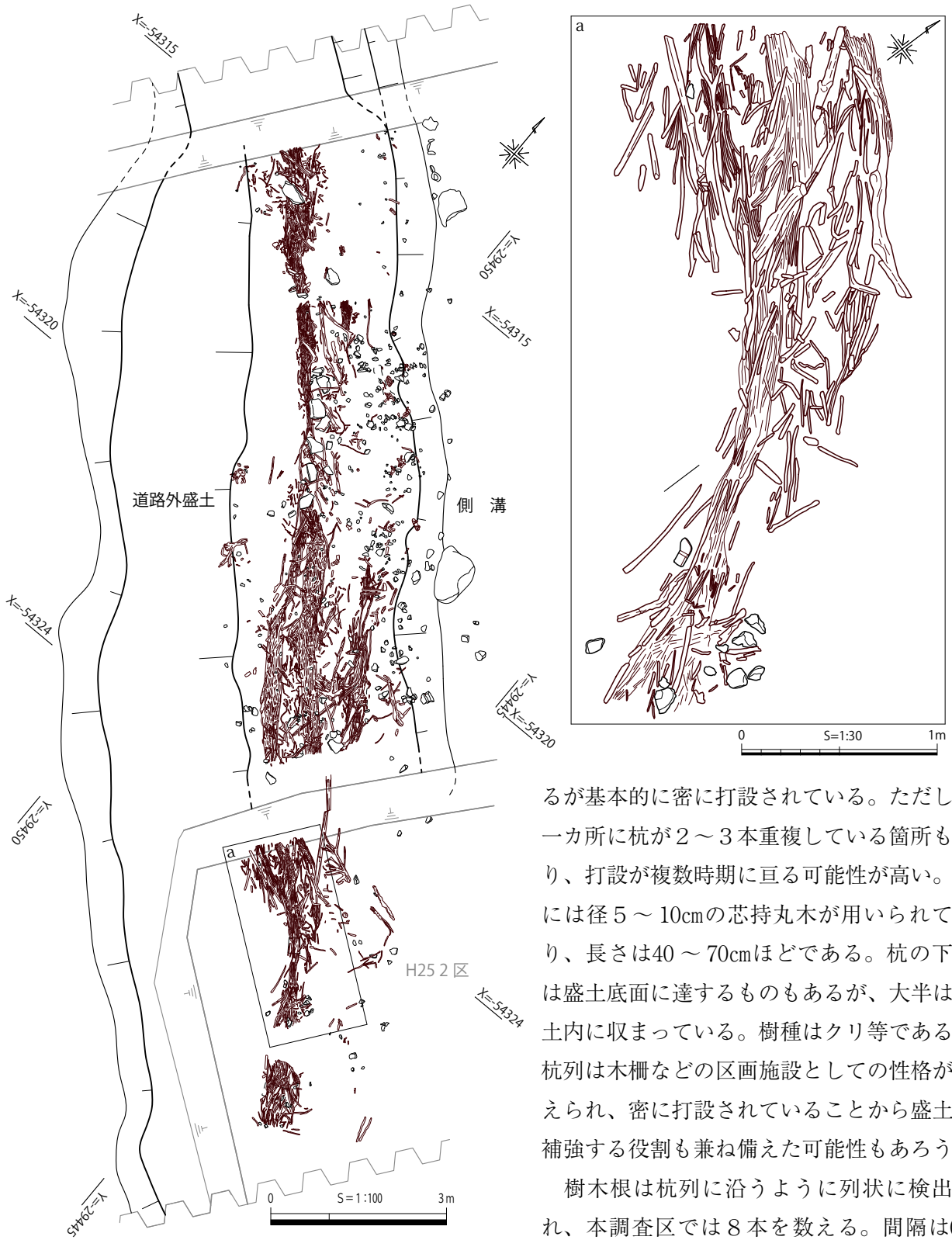
第239図　２区・Ｐ11区道路１道路外盛土（１）

1 黒褐色粘土 (10YR2/2) 粗朶をほとんど含まない。しまり強。
2 黒褐色シルト質粘土 (10YR2/2) 粗朶片を一定量含む。炭化物を多く含む。
3 黒褐色シルト質粘土 (10YR2/2) 粗朶片を少量含む。
4 黒褐色粘土 (10YR2/2) 粗朶片を少量含む。3 より粘性しまりやや強。
5 黒褐色シルト質粘土 (10YR2/2) 粗朶を多く含む。細粒砂を一定量含む。
6 黒褐色粘土 (10YR2/2) 粗朶をほとんど含まない。しまり粘性強。
7 黒褐色粘土 (10YR2/2) φ1 ～ 2cm のやや大きめの粗朶 (長軸方向の) を一定量含む。
8 黒褐色粘土 (10YR2/2)6 に類似するが、粘性やや弱。粗朶片をわずかに含む。
9 黒褐色シルト質粘土 (10YR2/2) 細粒砂が卓越する。粗朶片を一定量含む。
10 黒褐色シルト質粘土 (10YR2/2) 短軸方向の粗朶片を多く含む。細粒砂を含む。
11 黒褐色粘土 (10YR2/2) 粗朶片をわずかに含む。6 に類似する。10 より粗朶は少ない。
12 黒褐色粘土 (10YR2/2) 粗朶をほとんど含まない。
13 黒褐色粘土 (10YR2/2) 粗朶を含まない粘土層。しまり・粘性強。
14 黒褐色粘土 (10YR2/2) 粗朶片が散在する。13 よりしまり・粘性弱。
15 黒褐色粘土 (10YR2/2) 粗朶片を少量含む。10 に類似するが粘性やや強。
16 黒褐色粘土 (10YR2/2)4 層と類似するが粗朶・細粒砂を少量含む。しまり・粘性強。4 より粘性弱。
17 黒褐色シルト質粘土 (10YR2/2) 側溝埋土の浸食あり。粗朶を定量含む。
18 黒褐色粘土 (10YR2/2) しまり粘性強。粗朶をわずかに含む。
19 黒褐色シルト質粘土 (10YR2/3) 粗朶数層。(長軸方向) φ1 ～ 2cm の粗朶・砂を含む。
20 黒褐色粘土 (10YR2/2)10 層に類似するが、やや砂質。
21 黒褐色シルト質粘土 (10YR2/2) 不定方向の粗朶を多く含む。しまり弱。側溝埋土と混ざる。
22 黒褐色粘土 (10YR2/2) 粗朶を少量含む。Ⅲ層による浸食あり。
23 黒褐色粘土 (10YR2/2) しまり粘性強 (長軸方向)。粗朶をわずかに含む。
24 黒褐色粘土 (10YR2/2) 粗砂を少量含む。やや細粒砂を含む。23 よりしまり弱。
25 黒褐色粘土 (10YR2/2) 粗朶をほとんど含まない。しまり・粘性強。
26 黒褐色粘土 (10YR2/2) 粗朶を含まない。しまり・粘性は 25・27 層より強だが、30 より弱。
27 黒褐色粘土 (10YR2/2)25 に類似するが、しまりやや弱。
28 黒褐色砂混じりシルト (10YR2/2) 粗朶 (不定方向) を多量に含む。炭を多量に含む。21 よりしまり・粘性やや強。
29 黒褐色粘土 (10YR2/2) 指頭大の礫を含む。粗朶は少量。粘性やや強。
30 黒褐色粘土 (10YR2/2) 粗朶を含まない。25・27 よりしまり・粘性強。

第240図　２区・Ｐ11区道路１道路外盛土（２）



第241図　２区・Ｐ11区道路１道路外盛土遺物出土状況図



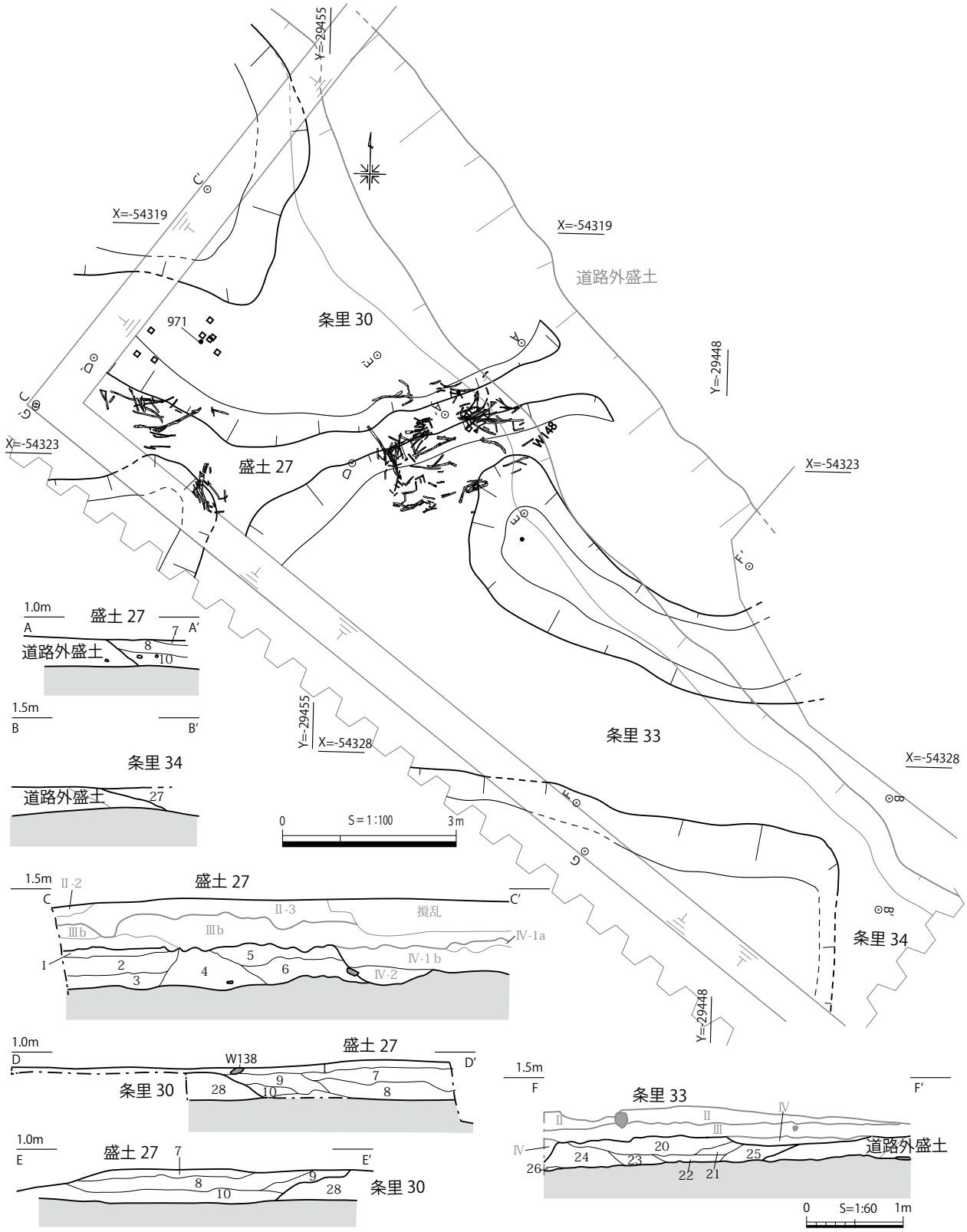
第242図　２区・Ｐ11区道路１道路外盛土敷粗朶検出状況図

るが基本的に密に打設されている。ただし、一カ所に杭が２～３本重複している箇所もあり、打設が複数時期に亘る可能性が高い。杭には径５～10cmの芯持丸木が用いられており、長さは40～70cmほどである。杭の下端は盛土底面に達するものもあるが、大半は盛土内に収まっている。樹種はクリ等である。杭列は木柵などの区画施設としての性格が考えられ、密に打設されていることから盛土を補強する役割も兼ね備えた可能性もあろう。

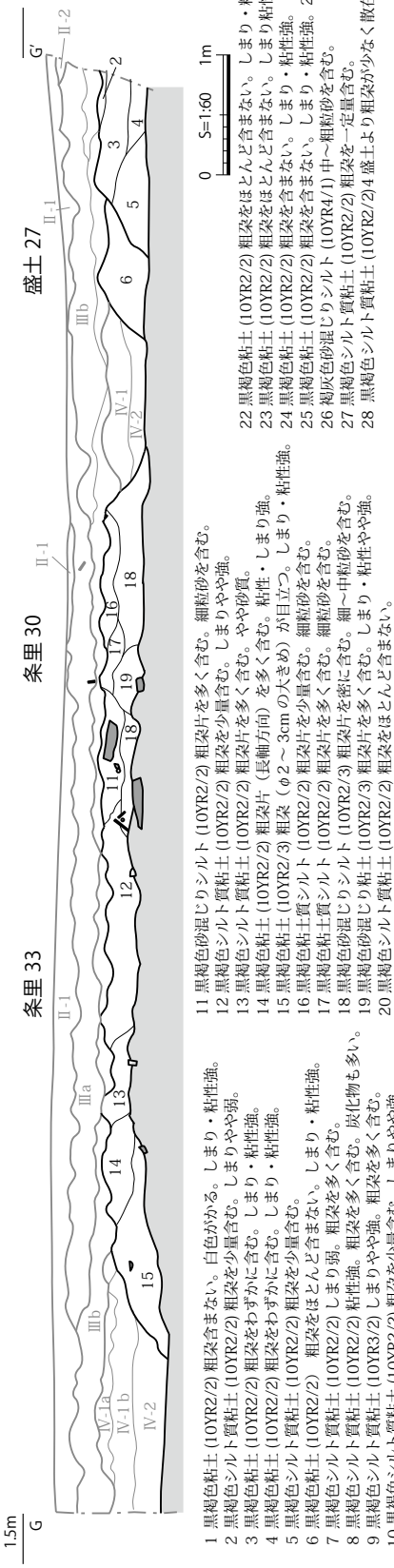
樹木根は杭列に沿うように列状に検出され、本調査区では８本を数える。間隔は0.5～4.7mとばらつきがあり、Ｐ10区に比べ散漫である。樹木根の径は10cmと細く、盛土内に深く根が張る様子は窺われない。これらの樹木根３点について樹種同定した結果、ヤナギ属であることが判明している。道路沿って植栽されており、ヤナギが選択されていることから樹木根は道路１の街路樹であったと考えられる。

遺物は須恵器や土師器、緑釉陶器、木製祭祀具、木簡、銅製鉸具などが出土している。他の調査区

に比べ遺物の出土量は多い。盛土の構築時期は出土土器が岡田・八峠編年ＫⅤ期に比定されること、敷粗朶層から『天慶十年』と記された題箋軸が出土していることから、10世紀後半と考えられる。放射性炭素年代測定では２σ暦年代範囲で杭１が862－972calAD(84.5%)、樹木根１が868－975calAD(93.1%)、粗朶が881－978calAD(95.4%)という値を示しており、矛盾はない。



第243図　２区・Ｐ11区条里30・33・34、盛土27（１）



第244図　２区・P11区条里30・33・34、盛土27(２)

道路外盛土は道路本体の盛土を補強するとともに、道路空間と耕地空間を明瞭に区別する区画施設としての性格が考えられる。

３　条里遺構

条里33（第243 ～ 245図）

調査区南側で確認された、東西方向に直線的に延びる盛土遺構である。方位はN－85°－Wである。東端は道路外盛土に接続し、道路外盛土→条里33の順で構築される。

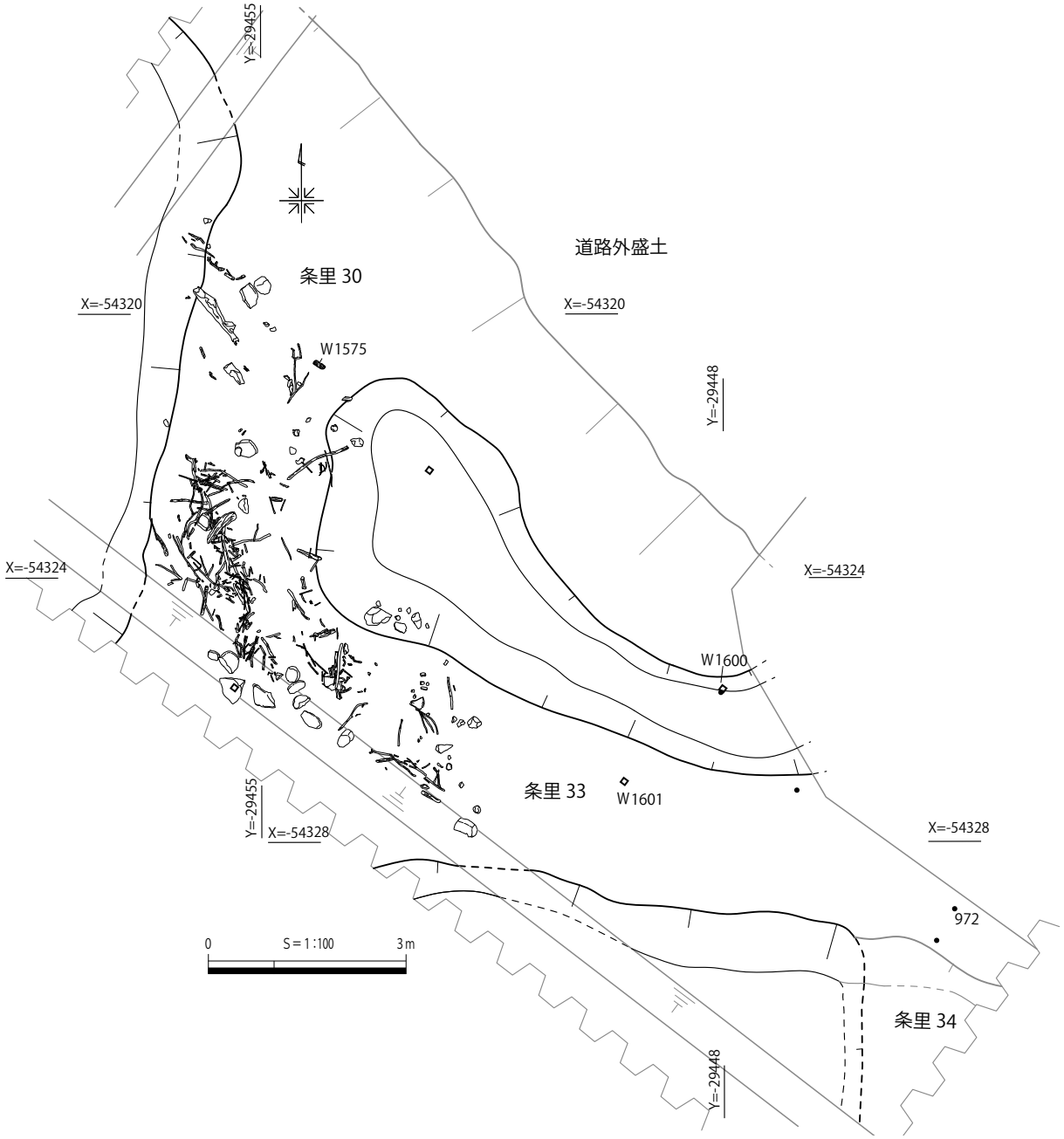
規模は上面幅2.4m、基底部幅3.4mで、盛土の高さは最大40cm程である。盛土上面は平坦で、標高は0.9m前後である。盛土はF－F'をでは７層に細分され、粗朶をほとんど含まない均質な粘土やシルトを主体とする。ただし、条里30との交点付近では少量ながら粗朶や人頭大程度の礫が充填されている。盛土は盛土裾の両端に土手を築き、その内側に盛土を充填していく工法で築かれたと考えられる。G－G'を見る限り、直交する条里30の盛土と一体で構築されたとみられる。遺物は須恵器や土師器、馬形など木製祭祀具、曲物などが出土している。ただし、出土遺物の多くは、本来、下層に位置する河道16に帰属するものとみられる。

盛土の構築時期は出土土器が岡田・八峠編年ＫＶ期に比定され、道路外盛土の時期も考慮すると10世紀後半と推定される。遺構は一町方格内を12歩（約21m）に分割する条里地割と考えられる。

条里30（第243 ～ 245図　ＰＬ.67－４）

調査区西側で検出された、南北方向に直線的に延びる盛土遺構である。本遺構は３区でも確認されており、方位はN－５°－Wである。東端は道路外盛土に接続し、道路外盛土→条里30の順で構築される。南西壁の調査区際では条里33と直交する。

規模は上面幅2.5mで、基底部幅3.7m、盛土高は最大37cm程である。盛土上面の標高は0.9m前後である。盛土は黒褐色粘土質シルトを主体とするが、砂を一定量含む。盛土下半にあたる17 ～ 19層は粗朶を多く混和させている。条里33の交点付近では、盛土の方向に沿う粗朶や人頭大の礫を芯に充填させている。G－G'を見る限り、直交する条里33の盛土とは明確に分けられず、一体で構築された可能性が高い。遺物は須恵器や土師器、人形や馬形などの木製祭祀具、木製品が



第245図　２区・Ｐ11区条里30・33

出土している。

盛土の構築時期は出土土器が岡田・八峠編年ＫⅤ期に比定され、道路外盛土の時期も考慮すると10世紀後半と推定される。盛土内の粗朶１点の放射性炭素年代測定では、２σ暦年代範囲で675－775calAD(95.4%)の値を示しており、齟齬が認められる。ただし、これは条里33と同様に出土遺物の多くが、本来は下層に位置する河道16に帰属することが要因とみられる。本遺構は一町方格内を12歩(約21m)に分割する条里地割と考えられる。

条里34(第243・244図)

本調査区南端で検出された、南北方向に直線的に延びる盛土遺構である。方位はN－５°－Wである。北端は道路外盛土に接続し、道路外盛土→条里34の順で築かれる。

検出範囲が狭く、規模は明確にしえないが、上面幅1.5m以上、盛土高は最大26㎝程である。盛土上

面の標高は0.8m前後である。盛土は黒褐色シルト質粘土で、粗朶を一定量含んでいる。遺物は僅かに土師器、木製品が出土している。

盛土の構築時期は条里30・33や道路外盛土と同じ、10世紀後半と推定される。規模が条里30・33土よりも小さく、一町方格内を12歩（約21m）に分割する小区画をさらに細分する条里地割と考えられる。

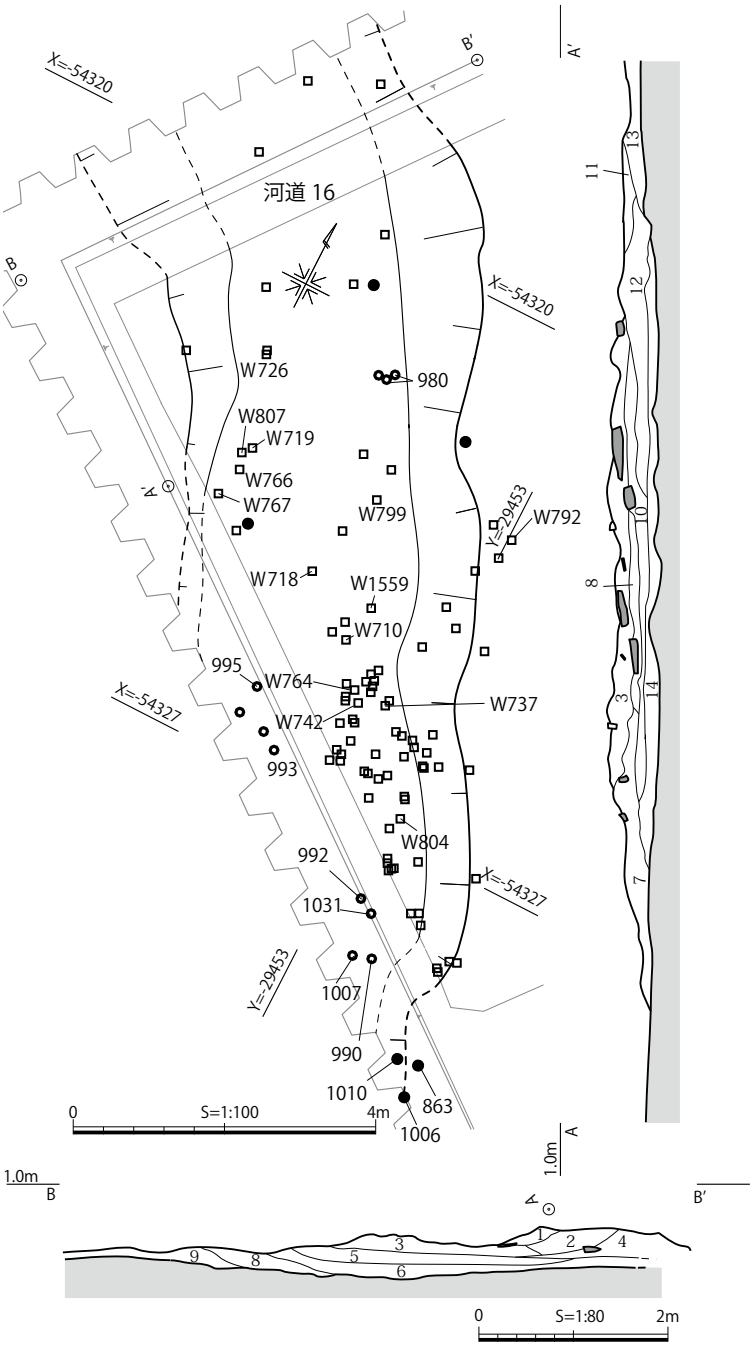
４　盛土遺構

盛土27（第243・244図　ＰＬ.67－３）

調査区西側で検出された、南西から北東方向に延びる盛土遺構である。重複関係から道路外盛土や条里30・33・34に後出する。条里30と重複する部分ではその上部に細長い盛土が施され、道路外盛土に向かって弧状に延びている。

規模は条里30より西側では、上面幅3.5m、基底部幅4.3mで、盛土高部分は最大45cm程を測り、条里30を覆う盛土部分は上面幅0.6mほどである。盛土部分は７層に細分され、黒褐色粘土やシルトを主体とする。盛土内には部分的に粗朶が集中する部分がみられ、条里30・33と道路外盛土と重複する箇所では顕著となる。盛土はC－C'やG－G'をみると、盛土裾の両端に土手を築き、その内側に土を充填して築かれたことが分かる。遺物は須恵器や土師器、馬形や斎串などの木製祭祀具、下駄、田下駄、曲物などの木製品が出土している。

盛土の構築時期は道路外盛土や条里30・33・34の条里遺構に後出し、10世紀後半から11世紀代と推定される。遺構の性格は特定しえないが、丘陵裾の地形に沿って構築された盛土で、条里地割とは



1 暗褐色シルト混じり砂 (10YR3/4) 粗朶を少量含む、粗粒砂主体。
2 暗褐色シルト混じり砂 (10YR3/4) 粗朶を多く含む、粗粒砂をブロック状に含む。
3 黒褐色シルト混じり砂 (10YR2/2) 細～中粒砂主体、粗朶片を多量に含む、粗朶は不定方向。
4 褐灰色中～極粗粒砂 (10YR4/1) 粗朶はほとんど含まない、しまりやや強。
5 灰黄褐色シルト質細～中粒砂 (10YR4/2) 粗朶を一定量含む、ラミナあり。
6 褐灰色細～粗粒砂 (10YR4/1) ラミナあり、粗朶を一定量含む、炭がやや目立つ。
7 黒褐色シルト質粘土 (10YR2/3) 粗朶を多く含む、細～中粒砂を含む。
8 褐灰色砂 (10YR4/1) 細粒～中粒砂主体、粗朶を多量に含む、炭も多い、ラミナあり。
9 褐灰色シルト質細粒砂 (10YR4/1) 粗朶はほとんど含まない、ラミナは一定しない。
10 褐灰色砂 (10YR4/1) 粗朶を多く含む。しまりやや強。
11 灰黄褐色シルト質細粒砂 (10YR4/2) 粗朶を少量含む。
12 灰黄褐色シルト混じり細～粗粒砂 (10YR4/2) 粗朶を一定量含む。
13 褐灰色砂質シルト (10YR4/1) 細粒砂を含むがラミナはわずか、粗朶を一定量含む。
14 灰黄褐色シルト混じり粗粒砂 (10YR4/2) 粗朶片、炭がやや目立つ、しまりややあり。

第246図　２区・Ｐ11区河道16

異なる性格が考えられる。

5　河道

河道16（第246図　PL.68－1）

調査区の西隅で確認された、小規模な河道である。河道6の肩部に重複するように形成され、南東から北西方向にやや蛇行しながら流下している。

規模は幅4m前後で、深さは最大60cm程である。底面の標高は0.2m前後で、北西端と南東端で高低差はほとんどみられない。断面形は浅い皿状で、壁面は緩やかに立ち上がる。とくに西壁は立ち上がりが不明瞭となり、埋土は溢流して調査区外へと続いている。埋土はシルト混じり砂が主体で緩やかな水流が常時存在していたと考えられる。ただし、粗朶片を多く含み、炭やシルトブロックが目立つことから人為的に埋め戻された可能性が高い。

遺物は埋土中から土器や木製祭祀具、獣骨がまとまって出土している。木製祭祀具が多量に出土する点は、ほぼ同じ時期に形成された河道14上層と変わらないが、土器の出土量が多い点が異なる。土器は須恵器の蓋･杯を中心とし､完形の資料が目立つ。獣骨はウシやウマが少量出土している。

河道の形成時期は出土した須恵器が岡田編年出雲Ⅱ～Ⅲ期に比定されることから、7世紀後葉から8世紀前葉と推定される。出土した加工木の放射性炭素年代測定では、2σ暦年代範囲で660－715 calAD（74.1%）の値を示しており、齟齬はない。

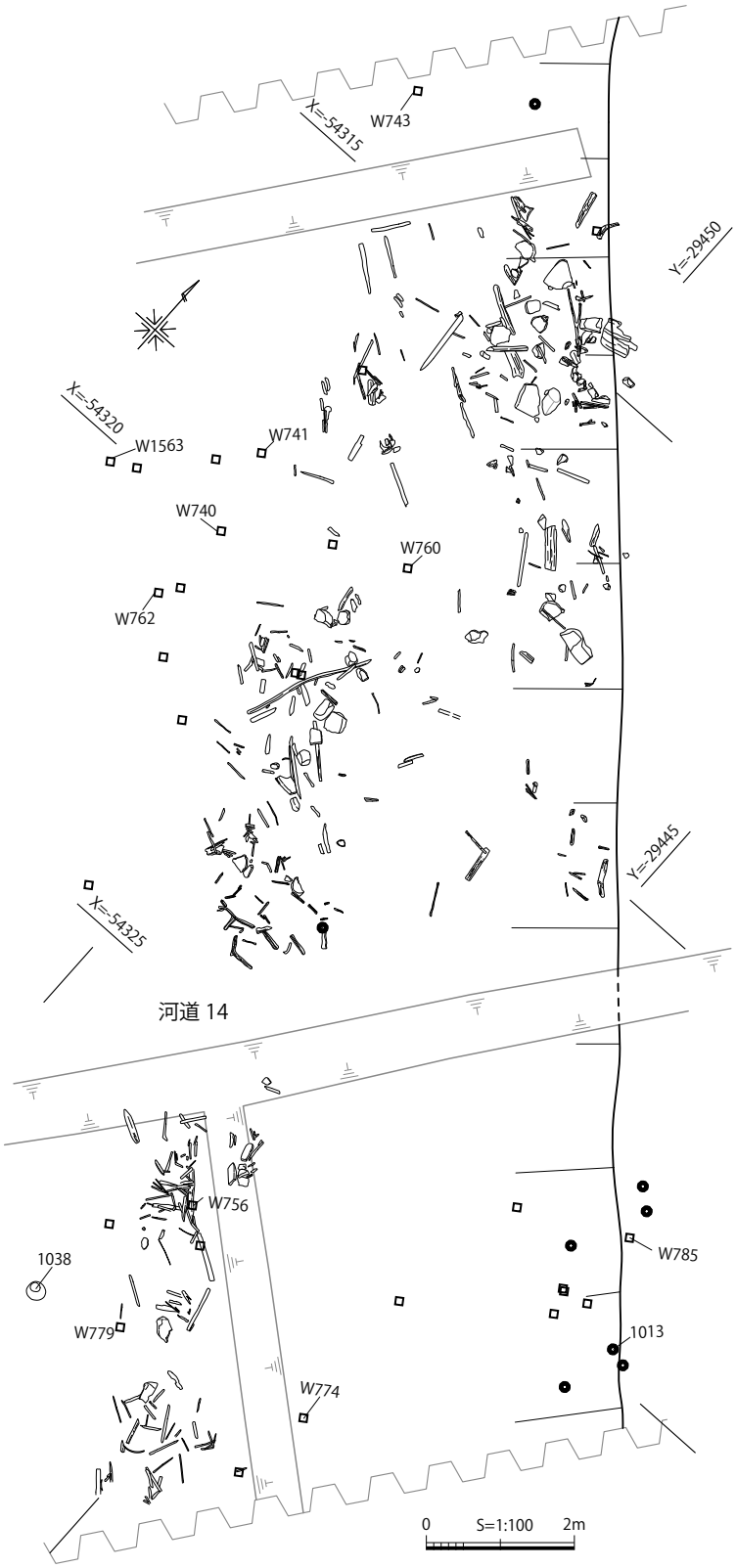
第247図　2区・P11区河道16下層遺物出土状況図

本遺構は河道6の後身的な自然河道と考えられ、祭祀的性格が強い。

河道14（第248・250・251図　PL.68－2）

調査区の南西半を、南南東から北北西に流下する河道である。下層にある河道6とほぼ同じ位置に重複する。

規模は幅12.5m以上で、深さは最大50cm程である。底面の標高は北西端が0.02mで、南東端が0.2mで、北西端が低い。埋土は褐灰色砂混じりシルトからシルト質砂が主体で、比較的緩やかな流水環境にあったことが窺われる。山側の肩部付近では埋土中から掌大から人頭大程の礫が多く出土してお



第248図　２区・Ｐ11区河道14

り、何らかの護岸施設が存在した可能性がある。木造構造物５も肩部に近接し、方向も揃うことから本遺構に伴う護岸施設であったと考えられる。

遺物は溝中央付近で、木製祭祀具が帯状に集中して出土している。幅は２ｍ前後で、土層断面では捉えきれなかったが、一時期における本来の流路幅を示している可能性が高い。木製祭祀具は人形や馬形、刀形、斎串、農具形などで構成される。土器は須恵器や土師器が僅かに出土し、その他にウマなどの獣骨が出土している。

河道の形成時期は出土した須恵器が岡田編年出雲Ⅱ～Ⅲ期に比定され、木製祭祀具を考慮すると、７世紀後葉から８世紀前葉と推定される。検出した溝幅は広いものの、木製祭祀具の出土状況が示す通り、小規模な河道の集合体であったと考えられる。そのため、土層断面のみをみれば河道16に先行するように見えるが、後出する河道も含まれている可能性が高いと推察される。

河道６（第231・250・251図　ＰＬ.68－３・69－２）

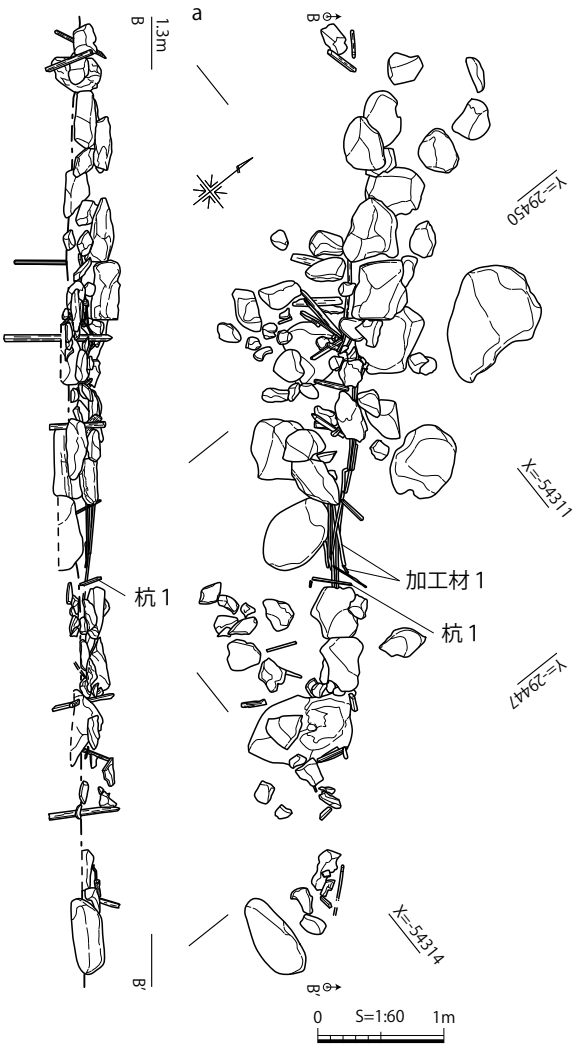
Ｐ６～16区にかけて確認された大規模な河道である。調査区のほぼ中央を横断し、南東から北西に流下する。新旧があり、古段階と新段階に分けられる。護岸施設として木造構造物６を伴う。

古段階は幅が13.5m前後で、深さは最大1.4m程である。最深部付近の底面は新段階の河道により削られているが、標高は－1.0m前後とみられる。埋土は砂混じりシルトを主体とし、緩やかな流水環境にあったことが窺われ

る。山側に堆積するＡ－Ａ’13～15層、Ｃ－Ｃ’７層は礫混じりシルトで、いわゆる礫層である。丘陵から流入した土砂とみられ、拳大から掌大の礫を主体とするが、人頭大から一抱え大程の礫も多く含む。この礫層には木造構造物６が伴い、図化していないが、肩部付近の数か所に杭が打設されている。これらのことから山側の法面には崩落中の礫を利用し、護岸施設として貼石が施されていた可能性もある。

新段階は古段階とほぼ同じ位置に形成され、平野側の肩部がやや狭くなっている。規模は幅12.5m、深さは最大1.4m程である。埋土は粗粒、もしくは極粗粒砂を主体としており、古段階とは対照的に短期間のうちに埋没したことが窺われる。

遺物は埋土から須恵器や土師器、木製品、獣骨が数多く出土している。とくに、須恵器や土師器が古段階における山側の法面では礫層上面で完形に近い出土している。上流から漂着したものとは考えにくく、隣接する山側に何らかの施設が存在し、祭祀儀礼等に伴い河道内に投棄された可能性が考えられる。木製品は刀形木製品や櫂などが出土している。新段階の上層から木製祭祀具が僅かに出土しているが、本来は河道14に帰属するものと考えられる。獣骨はウマ、イノシシ、マグロ属などがある。



第249図　２区・Ｐ11区木造構造物５

河道の形成時期は古段階から出土した須恵器から、古段階が古墳時代後期、新段階が古墳時代後期から終末期にかけてと推定される。

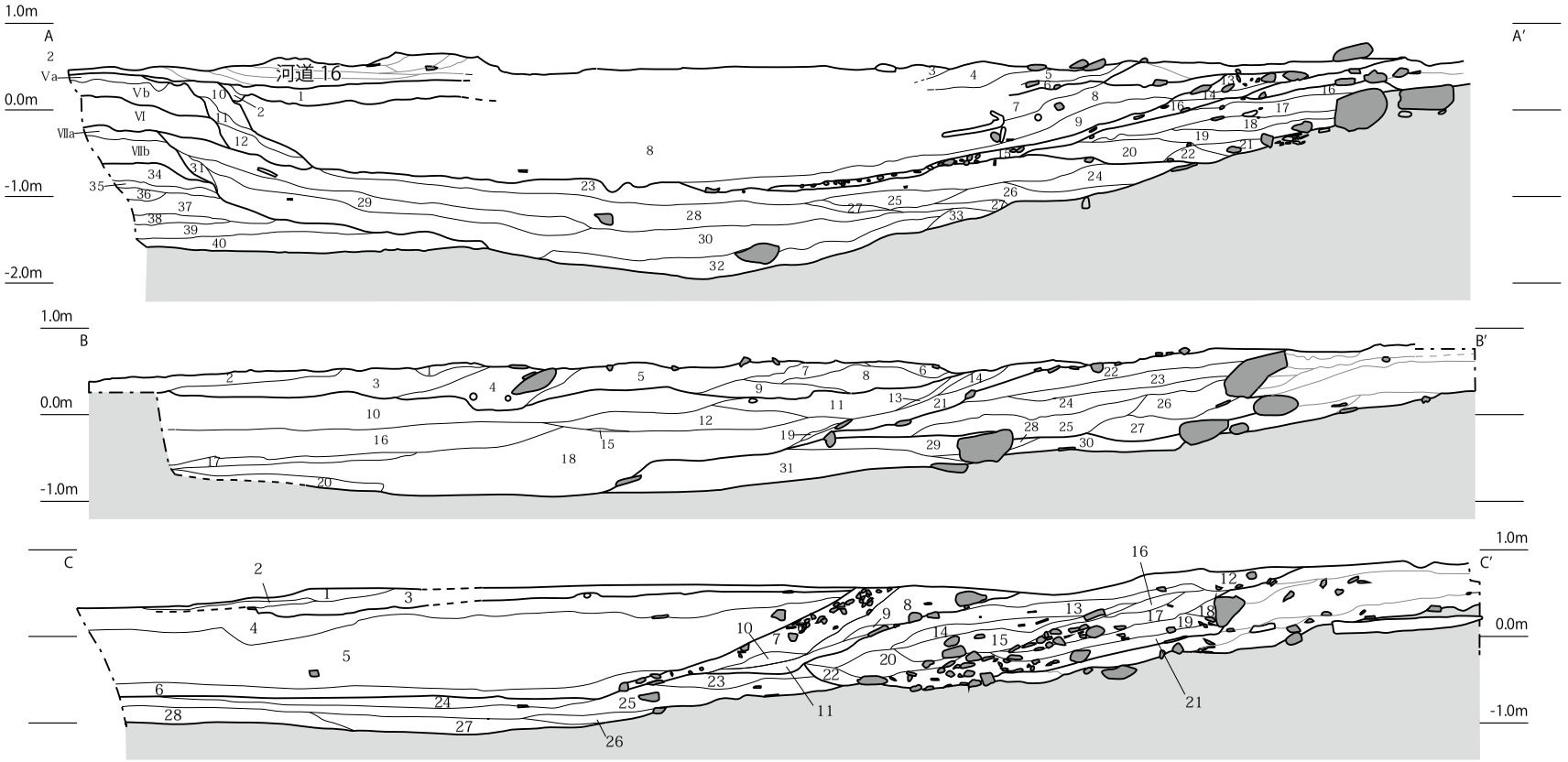
６　木造構造物

木造構造物５（第249図）

P11区北隅で確認された木造構造物である。河道14の肩部に沿って位置し、道路１の盛土下面で検出された、礫としがらみによる護岸施設である。

規模は長さ7.5m、幅は２m前後である。杭は２～３㎝角の角材で、打設間隔は概ね50～70㎝前後である。しがらみは１～２㎝角の細い角材を杭に編み込んでいる。礫は掌大から一抱え大程の角礫で、しがらみとの関係は必ずしも明確ではない。近接した山側で長さ６mの建築部材が道路１の盛土内から出土しているが、本来、本構造物に用いられていた可能性がある。

遺構の位置関係から河道14に伴う護岸施設と考えられるが、道路１に伴う木造構造物で、路床を保護し、補強するものであった可能性もある。出土土器はないが、時期は遺構の相互関係から７世紀後葉から８世紀初頭と推定される。放射性炭素年代測定では、しがらみの加工材１が２σ暦年代範囲で551－631calAD(95.4％)、杭１が424－539calAD(95.4％)の値を示し、齟齬が認められる。



C－C′

河道14
1 褐灰色シルト質細粒砂 (10YR4/1) 粗朶を多量に含む、ラミナあり。
2 にぶい黄橙色極粗粒砂 (10YR7/3) φ1 ～ 2cm の礫を多く含む。
3 褐灰色シルト細粒砂 (10YR4/1) ラミナは一定せず。粗朶を一定量含む。

河道6(新)
4 にぶい黄橙色極粗粒砂 (10YR7/4)2 より粒子がやや小さい。
5 にぶい黄橙色極粗粒砂 (10YR7/3) シルト～細粒砂のラミナが多く入る。
6 褐灰色シルト質細粒砂 (10YR4/1) ラミナは安定。

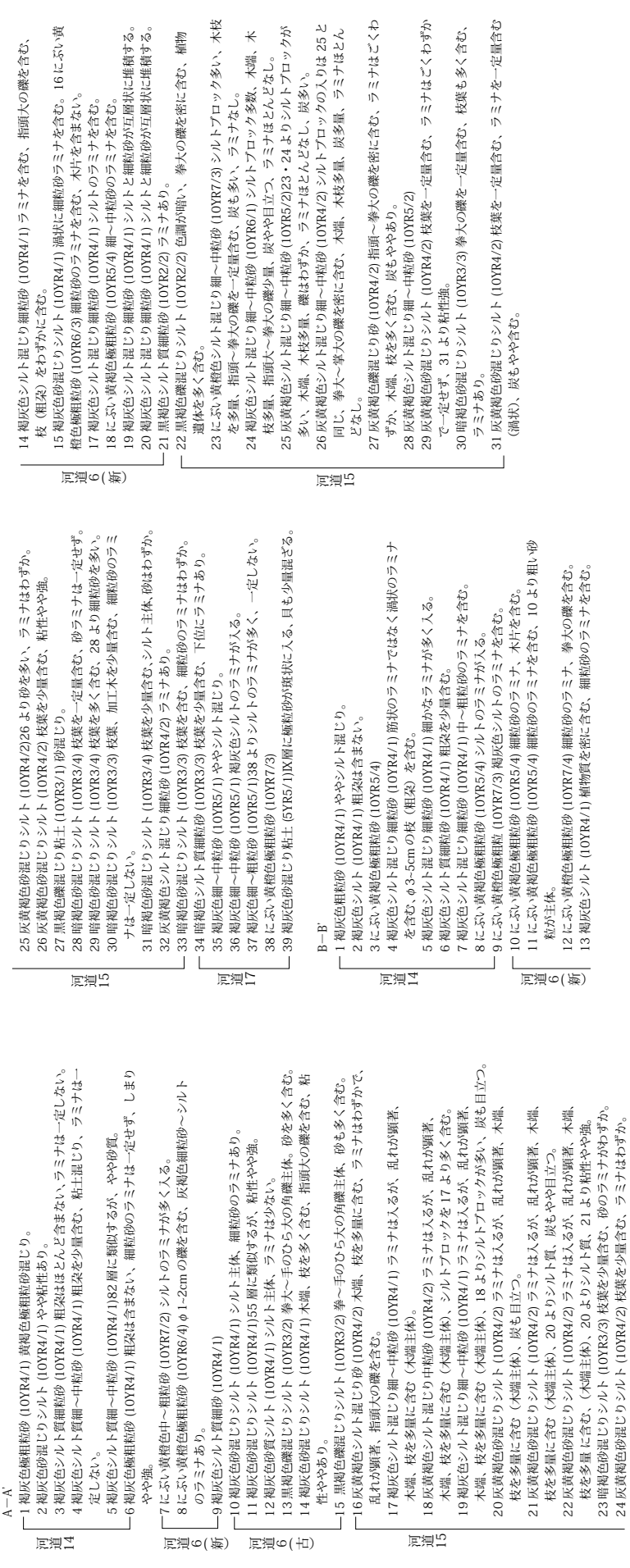
河道6(古)
7 褐灰色礫混じりシルト (10YR4/1) 枝を一定量含む、指頭大～拳大の礫を密に含む。
8 褐灰色シルト質細粒砂 (10YR4/1) ラミナは比較的安定、枝を少量含む。
9 灰黄褐色砂混じりシルト (10YR4/2)10 に類似するが、粘性やや強。
10 灰黄褐色礫混じりシルト (10YR4/2) 拳大～掌大の礫を多く含む、砂のラミナあり。
11 灰黄褐色シルト混じり礫 (10YR5/2) 拳大程の礫主体、しまりなし。

河道15
12 黒褐色砂混じりシルト (10YR2/2) 木端を多く含む、拳大の礫も一定量、炭も目立つ、ラミナはごくわずか。B-B′ 22 に類似。
13 褐灰色シルト混じり細～中粒砂 (10YR4/1) 木端を多量に含む、シルトブロック多い、炭も目立つ、 ラミナはごくわずか、B-B′ 23 に類似。

河道15
14 褐灰色シルト混じり細～中粒砂 (10YR6/1) 木端を多量に含む、13 よりシルトブロックが多い、炭も目立つ、ラミナはごくわずか、B-B′ 24 に類似。
15 灰黄褐色シルト混じり細～中粒砂 (10YR5/2) 木端を多量に含む、13，14 よりもシルトブロックが多い、拳大の礫を少量含む、ラミナはごくわずか。B-B′ 25 に類似。
16 灰黄褐色シルト混じり細～中粒砂 (10YR6/2) 木端を多量に含む、指頭～拳大の礫を多量に含む、ラミナはわずか、炭がやや目立つ。
17 灰黄褐色砂混じり礫 (10YR5/2) 指頭～拳大の礫主体、細～中粒砂混じり、木端も多く含む。
18 褐灰色砂混じりシルト (10YR4/1) 粘性ややあり、ラミナはほとんどなし、15 層に類似する。
19 灰黄褐色礫混じり細～中粒砂 (10YR4/2) 指頭～拳大の礫を多く含む、木端も多く含む、シルトブロックが多量、ラミナほとんどなし。B-B′ 27 に類似。
20 灰黄褐色砂混じりシルト (10YR5/2) 木端、枝を多量に含む、ラミナは多く入るが一定ではない。
21 褐灰色礫混じり中～粗粒砂 (10YR6/1) 指頭～拳大の礫を密に含む、木端、枝を多く含む、ラミナほとんどなし。

河道15
22 褐灰色砂混じりシルト (10YR4/1) 枝葉を少量含む、粘性やや強、ラミナはわずか。
23 灰黄褐色砂混じりシルト (10YR4/2) 枝、葉を一定量含む、ラミナは、わずか。
24 灰黄褐色砂混じりシルト (10YR4/2) 中～粗粒砂のラミナが安定。
25 灰黄褐色砂混じりシルト (10YR4/2) 枝を少量含む、ラミナは安定、炭がやや目立つ、下面に拳大の礫が入る。
26 暗褐色礫混じりシルト (10YR3/3) 指頭大～拳大の礫を多く含む。
27 暗褐色砂混じりシルト (10YR3/4) 中粒～粗粒砂を多く含む、枝葉を一定量含む。
28 褐灰色シルト混じり細～中粒砂 (10YR4/1) 暗褐色シルト混じり、枝葉を一定量含む、ラミナは安定。

第250図　２区・Ｐ11区河道６・15・17土層断面図（１）



第251図　2区・P11区河道6・15・17土層断面図（2）

木造構造物6（第252図　PL.69－1）

調査区北隅、河道6の山側壁面の中腹に位置する木造構造物である。河道6の護岸施設と考えられ、礫や杭、横板によって構築されている。長さ1.4 ～ 2.0m前後の横板2枚がV字状に重なり、それぞれが丸太杭によって固定されている。両者に時期差が存在する可能性もある。横板は建築部材の転用材で、枘穴を利用して杭が打ち込まれている。礫は杭で固定されたものもみられるが、その関係性は明確ではない。その他に周囲に角材の杭が複数検出されているが、規則性は窺われない。

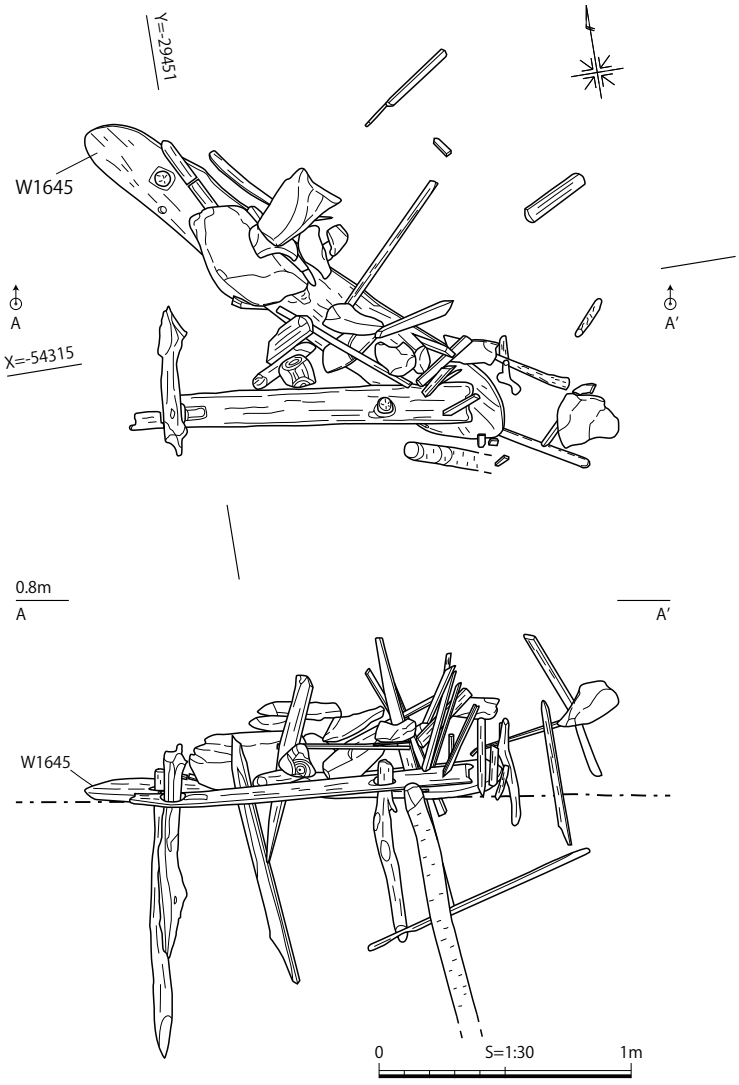
杭1点の放射性炭素年代測定では、2σ暦年代範囲で428－495calAD（50.1％）の値を示している。構築時期は古墳時代後期と考えられる。

7　整地土

整地土1（第231図）

調査区東隅付近で検出された整地土である。Ⅴ層相当層の第225・226図C－C'、D－D'の1層の下層で検出している。にぶい黄褐色を呈する単一の粘土層からなり、いわゆる貼床に類似する。検出範囲は長軸10m以上、短軸2.5m以上で、層厚は最大16cm前後である。上面の標高は0.8m前後で、調査区内では最も高い位置に施され、調査区外北東の広範囲に広がっていた可能性が高い。

時期は詳細には特定できないが、河道15との関係や上層を覆う第225・226図C－C'、D－D'1層から出土した土器から古墳時時代前期頃と考えられる。



第252図　２区・Ｐ11区木造構造物６

第４項　第Ⅶ層上面の遺構（弥生時代中期後葉～後期）

１　概要（第253図）

Ⅶ層、及び相当層上面が弥生時代中期後葉から後期の遺構検出面である。標高は山側が0.2 ～ 0.75m、平野側が－0.2m前後となる。遺構は自然河道１基、杭列２基、木造構造物３基、土坑１基を確認している。河道15は河道６の前身的な自然河道とみられ、木造構造物や杭列もこの河道に伴うものと考えられる。遺物には弥生土器や木製品などが少量出土している。

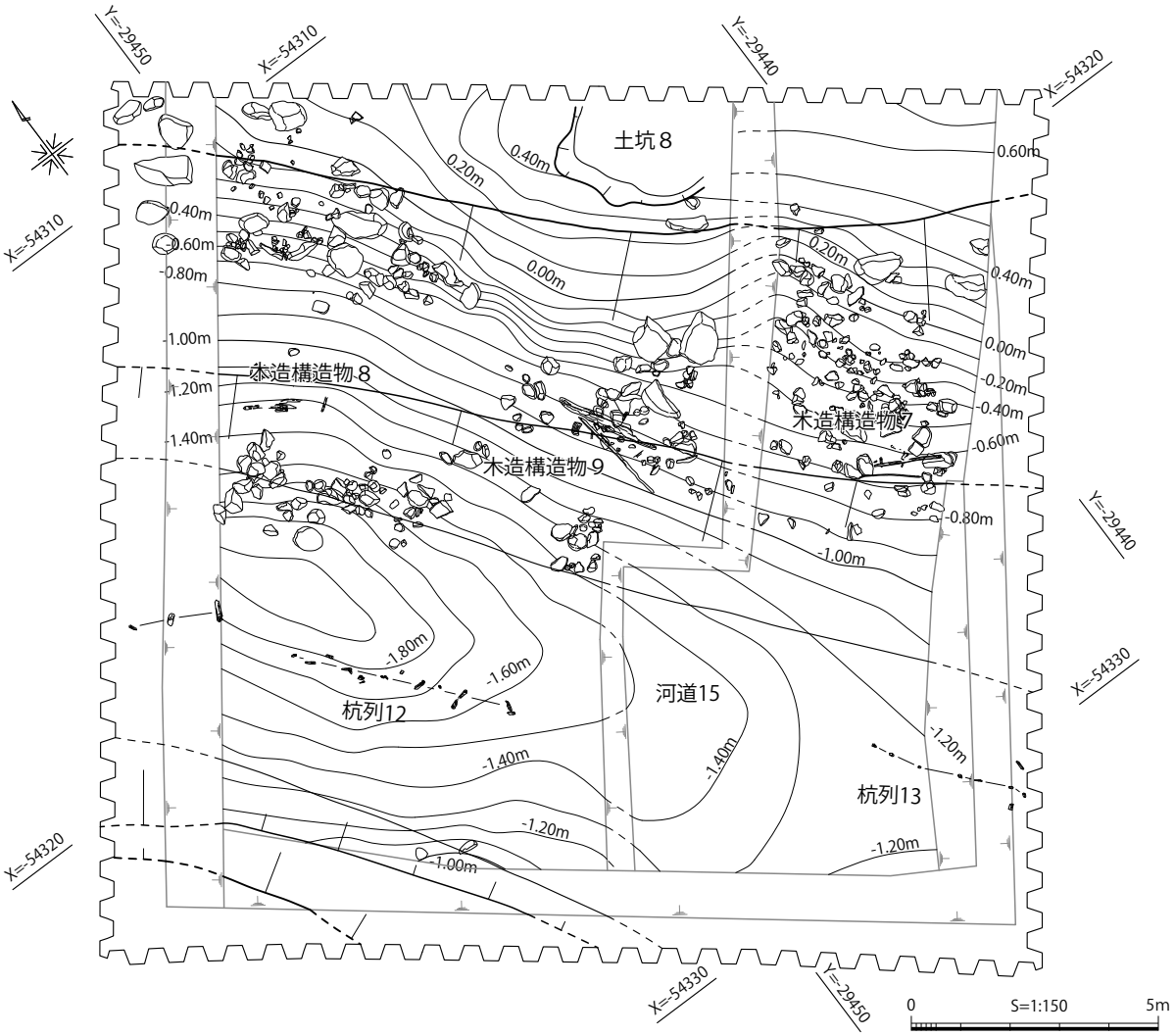
２　河道

河道15（第250・251・253図）

調査区を横断し、南東から北西へ流下する河道である。山側の壁面には護岸施設とみられ、木造構造物７・８・９が築かれており、底面では杭列12・13が検出されている。

規模は幅が13.5m前後、深さは最大1.6mほどである。底面の標高は最深部で－1.9m程を測り、北西端付近が大きく窪んでいる。壁面は平野側が急激に立ち上がるのに対して、山側は比較的緩やかに立ち上がる。埋土は大きく２つに分けられ、２時期の変遷が想定される。古段階はA－A'23 ～ 32層、Ｂ－Ｂ'29 ～ 31層、Ｃ－Ｃ'23 ～ 28層が該当する。植物遺体を多く含む砂混じりシルトが主体であるが、砂のラミナが入り、緩やかな流水と滞水を繰り返す環境にあったことが窺える。新段階はA－A'16 ～ 22層、Ｂ－Ｂ'22 ～ 28層、Ｃ－Ｃ12 ～ 22層が該当する。埋土はシルト混じり砂が主体で、小礫も多く含まれていることから、古段階とは対照的に常時、水流が存在していたと考えられる。ただし、各層ともシルトブロックや炭化物を多く含み、ラミナの乱れが顕著であること、枝葉に加え木っ端を密に含むことから、新段階の河道は埋め立てられた可能性が高い。堆積状況からみると、短期間に埋め立てられたのではなく、流水と埋め立てを繰り返しながら埋没したと考えられる。出土した木っ端は1㎝角ほどの角材で、長さ20 ～ 30㎝のものがほとんどであり、付け木を多く含んでいる点が特筆される。

遺物は弥生土器や木製品が少量出土している。遺構の時期は出土土器から弥生時代中期後葉から古墳時代前期初頭にかけてと考えられる。古段階と新段階の遺物を明確に分離できていないが、古段階が他の調査区における河道15にあたることから、古段階が弥生時代中期後葉から後期、新段階が弥生時代後期から古墳時代前期初頭と捉えておきたい。



第253図　2区・P11区Ⅶ層上面遺構分布図

3　杭列

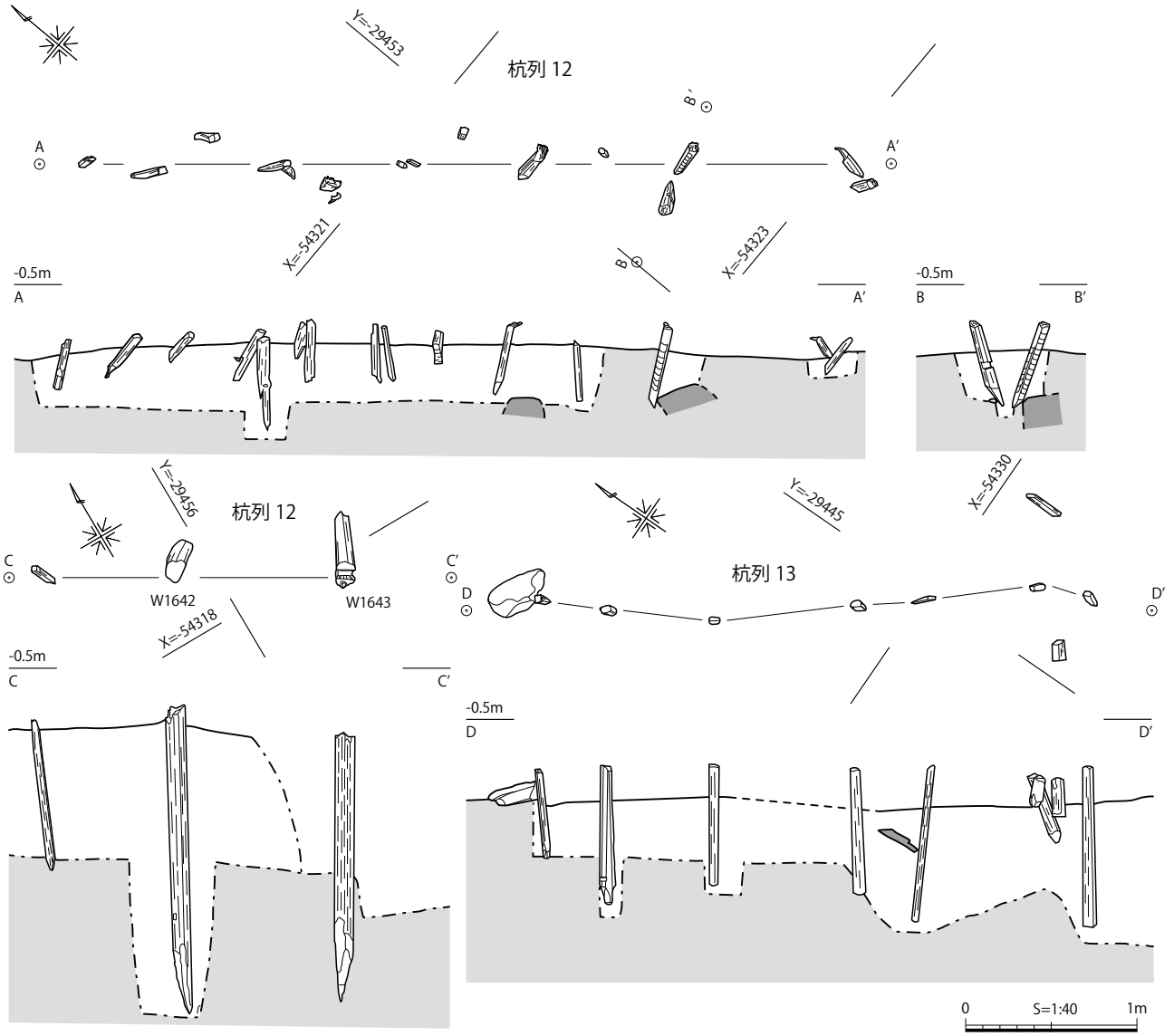
杭列12・13（第254図　PL.69－4・70－1）

河道15に伴う杭列である。河道15の底面中央に位置し、溝の方向に沿って南東から北西方向に打設されている。便宜的に杭列12－1、杭列12－2、列13の3つのまとまりに分けたが、ほぼ一直線に配置されており、一体の遺構である可能性が高い。杭列12－1と杭列12－2は1.2m、杭列12－2と列13は7.4m程の間隔が開く。

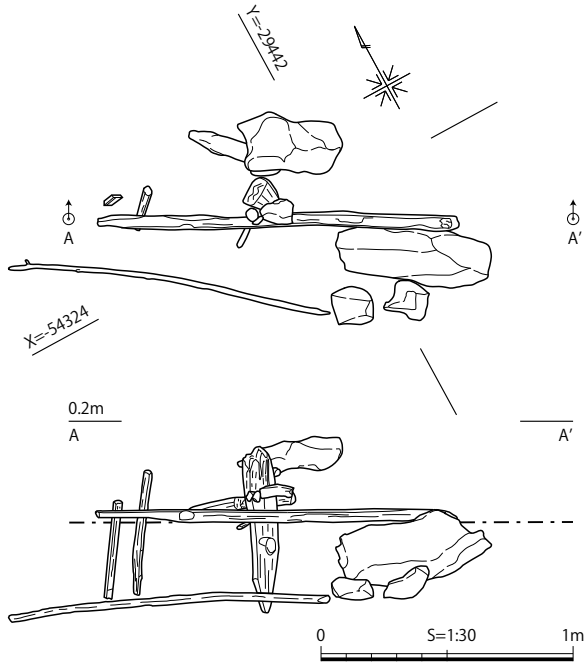
杭列12－1は2本が12㎝角の太い角材が使用され、長さは1.6～1.8mほどと非常に長い。杭下端の標高は－1.5m前後で、15溝の底面付近まで達している。2本は枘穴が開けられ、建築部材の転用材とみられる。

杭列12－2は5～6㎝角の、短い杭が用いられる。杭の間隔は0.3～1.0m前後とまちまちである。ほぼ同じ位置に重複する杭もみられ、打設時期が一時期ではない可能性がある。なかには枘穴がみられるものがあり、建築部材の転用材も使用されている。杭の下端が河道15下端まで達するものはなく、河道15の埋没過程で構築されたことが窺える。

杭列13は杭列12よりやや長めの杭材が利用されている。杭の間隔は杭列12－2と同様に0.3～1.0m前後とまちまちである。



第254図　２区・Ｐ11区杭列12・13



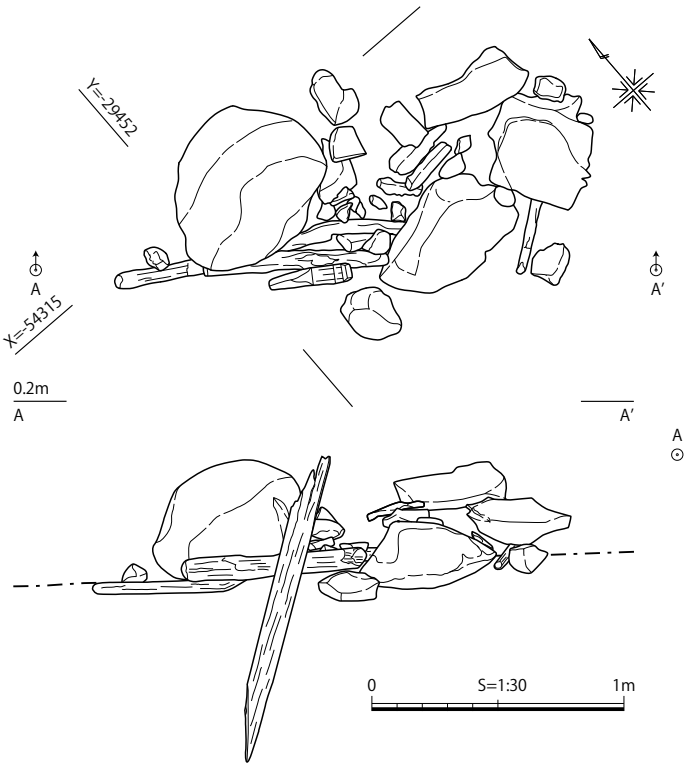
第255図　２区・Ｐ11区木造構造物７

時期は河道15がある程度埋没した後に打設されていることから弥生時代後期から古墳時代前期初頭と考えられる。杭列12の杭１点について放射性炭素年代測定した結果、196－88calAD(88.9%)、弥生時代中期中葉の値を示し、齟齬が認められる。遺構の性格は特定しえないが、河道15の流水方向に沿って打たれていることから、水流を制御し、調整する機能を果たしていたと考えられる。

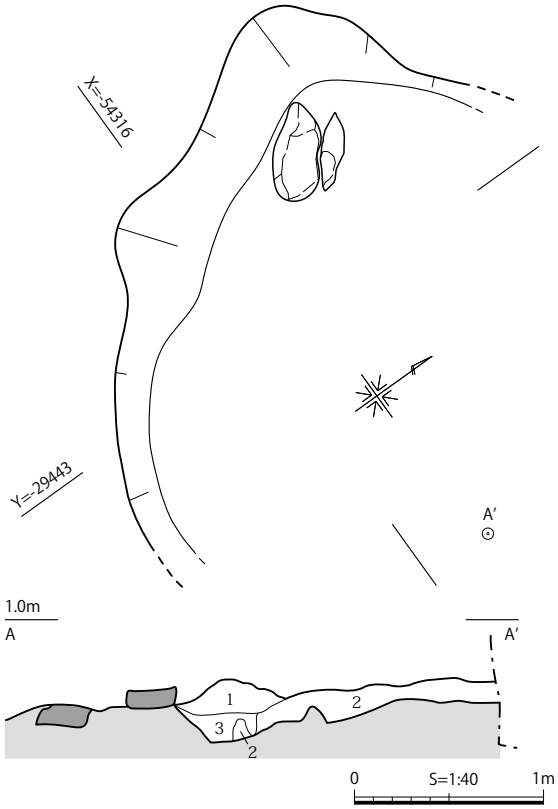
４　木造構造物

木造構造物７・８・９(第255･256･258図　ＰＬ.70－２)

河道15に伴う護岸施設である。河道15の溝底面から山側に向かい緩やかに立ち上がる、壁面で木造構造物が３カ所確認されている。いずれも河道15があ

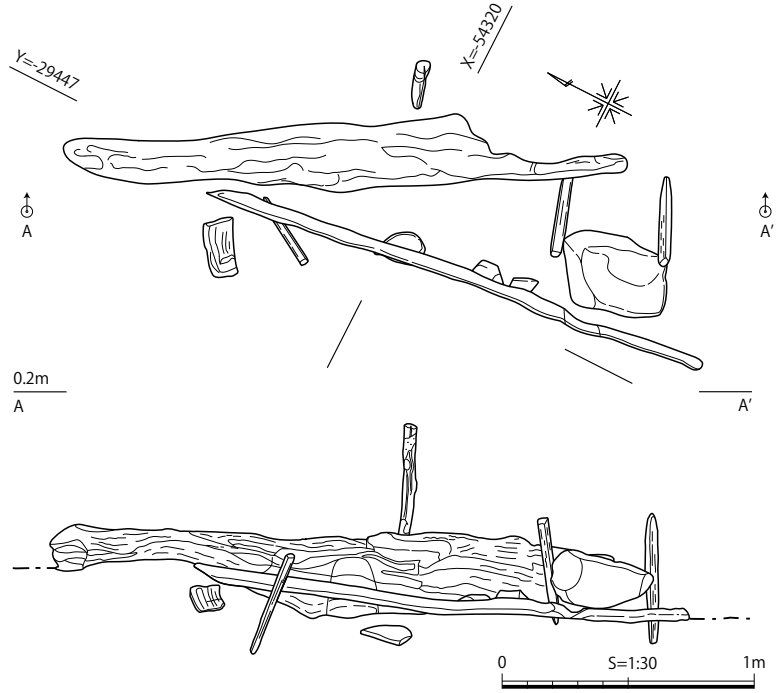


第256図　2区・P11区木造構造物８



1　灰褐色砂混じり粘土 (7.5YR6/2)
2　褐灰色シルト混じり細～中粒砂 (10YR4/1) 炭を多く含む、ラミナほとんどなし。
3　灰褐色砂混じり粘土 (7.5YR5/2) 1 に類似するが、砂が卓越。

第257図　2区・P11区土坑８



第258図　2区・P11区木造構造物９

る程度埋没したのちに構築されており、位置や検出レベルから護岸施設として一体のものである可能性が高い。横木を杭で止める構造で、使用された杭は角杭が主体であるが、一部、丸杭も使用されている。

遺構の時期は河道15との関係から弥生時代中期後葉から古墳時代前期初頭と考えられる。木造構造物７の杭を放射性炭素年代測定した結果、２σ暦年代範囲で48calBC－30calAD(89.9%)の値を示している。

５　土坑

土坑８（第257図）

調査区区北東壁際で確認された、大型の土坑である。第225図C－C’２層の造成土下面が遺構検出面とな

る。全体の形状は調査区外に延びるため不明ながら、長軸3.0m、短軸1.5m以上である。深さは最大20㎝前後で、底面は平坦ではない。北西隅の底面では大型の礫が出土している。出土遺物はない。

遺構の詳細な時期は明らかにできないが、層位から弥生時代後期から古墳時代前期までの範疇に収まる。性格は不明である。

第４項　第Ⅷ層上面の遺構（弥生時代中期）

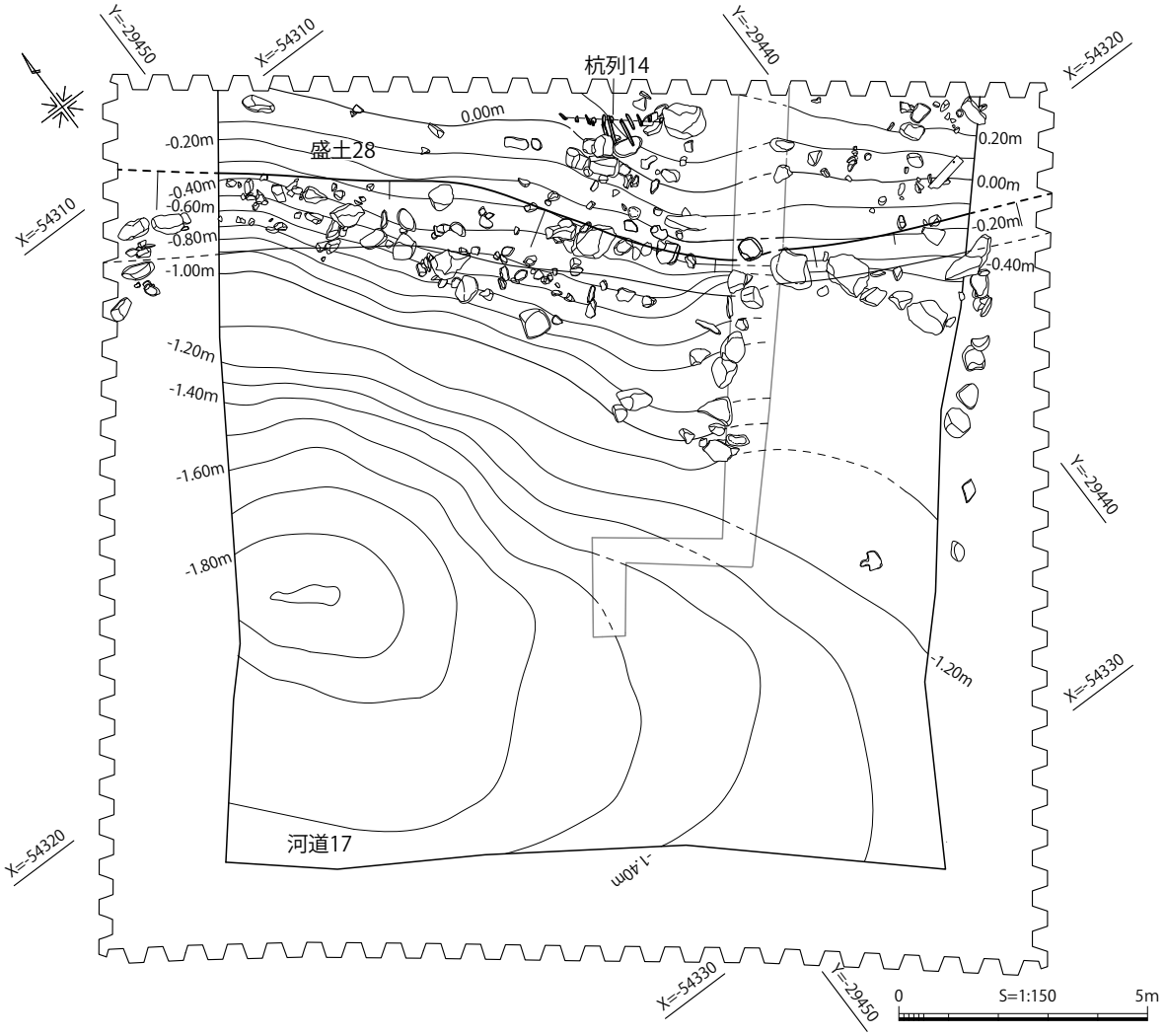
１　概要（第259図）

Ⅷ層、及び相当層上面が弥生時代中期の遺構検出面である。標高は平野側で－0.4m前後となる。遺構は盛土遺構１基、杭列１基、自然河道１基を確認している。河道17は河道15の前身的な自然河道とみられ、盛土28はその護岸施設となる可能性が高い。出土遺物には弥生土器や木製品などが少量みられる。下層のⅨ層上面では遺構は検出されず、杭もみられない。

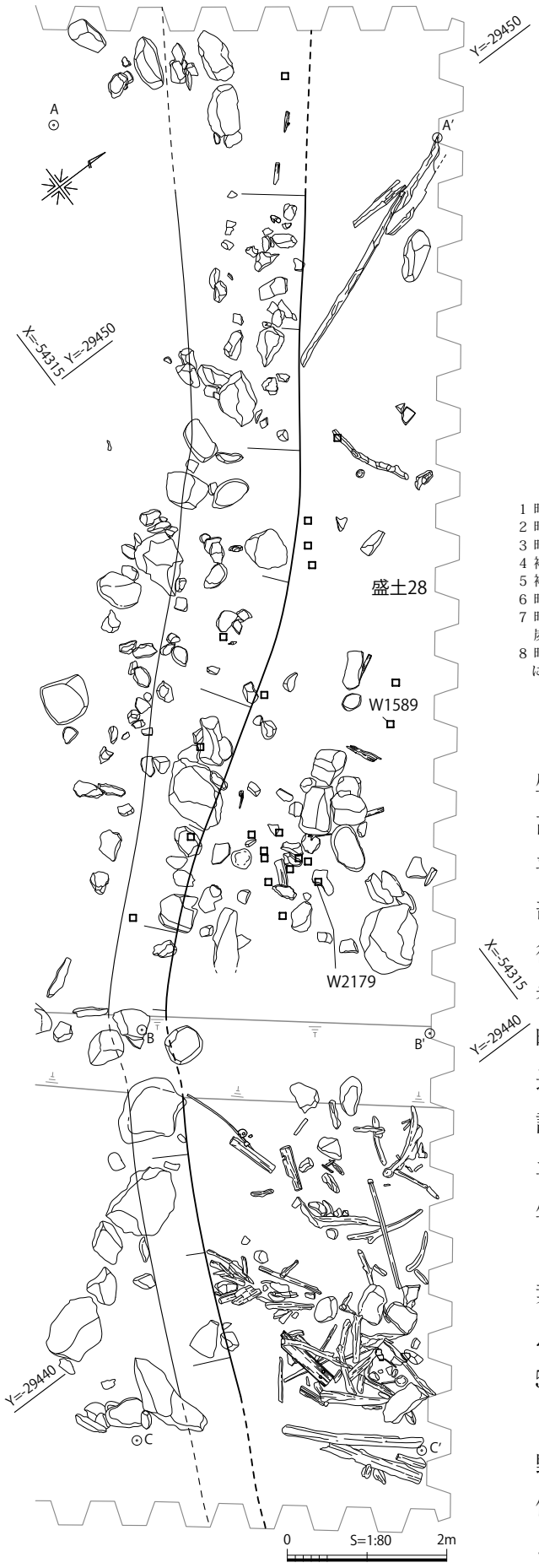
２　盛土遺構

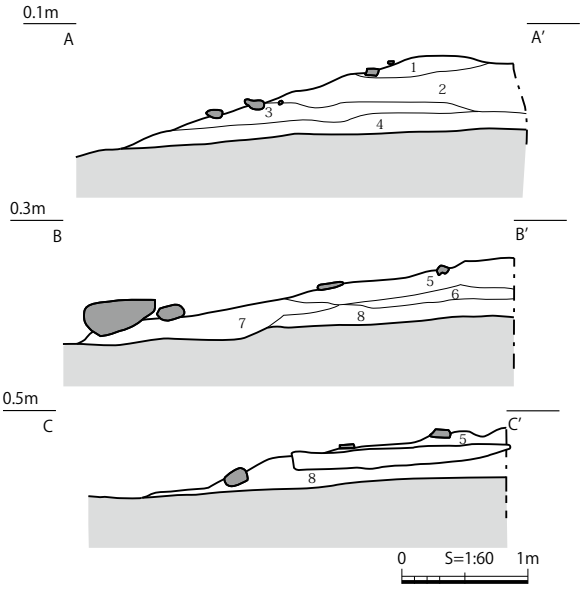
盛土28（第260図　ＰＬ.70－３・71－１）

調査区北東壁に沿って検出された盛土遺構である。盛土は北東の調査区外に広がっていることから、凸状を呈するのか、広範囲に形成された造成土となるかは判断できない。



第259図　２区・Ｐ11区Ⅷ層上面遺構分布図



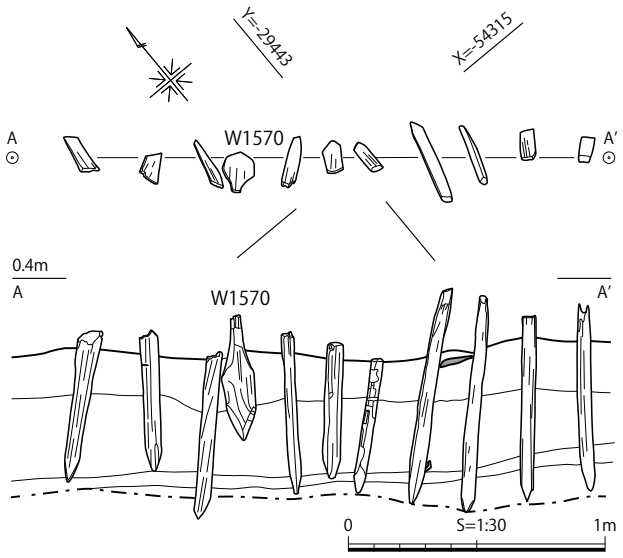


1 暗褐色砂質シルト (10YR3/3) 枝葉を多量に含む。
2 暗褐色シルト質粘土 (10YR3/3) 枝葉を密に含む、粘性強、しまりやや強。
3 暗褐色粘土 (10YR3/3)X 層をベースに枝葉を多量に含む、２より粘性強。
4 褐灰色粘土 (5YR5/1)X 層に枝葉がやや混ざる。
5 褐灰色粘土 (10YR4/1) 混和物が少ない、粘性強、加工木がごくわずか。
6 暗褐色粘土質シルト (10YR3/3) 枝葉を多く含む、しまり粘性ややあり。
7 暗褐色粘土質シルト (10YR3/4) 枝葉多い、木端も含む、指頭大以下の礫が散在する、炭もやや目立つ。
8 暗褐色シルト (10YR3/4) 枝葉を多量に含む、木端もあり、砂をわずかにブロック状に含む、炭もやや目立つ。

規模は上面幅3.6m以上、基底部幅4.0m以上、盛土の高さは40 ～ 60cm程である。盛土上面の標高は－0.15 ～ 0.4m前後で、上面は平坦ではなく、平野側に向かって緩やかに傾斜している。盛土肩部から法面にかけては掌大から一辺60 ～ 80cm前後の角礫が貼り付けられ、盛土を補強していたと考えられる。盛土はA－A’では４層に細分され、暗褐色粘土やシルトを主体とし、枝葉などの植物遺体を多量に混和させている。盛土内の、とくに調査区東隅付近では木製品や自然木、礫などが盛土芯として充填されている。遺物は盛土内から弥生土器、木製品が出土している。

盛土の構築時期は出土土器から弥生時代中期後葉と推定される。盛土内から出土した加工木１点の放射性炭素年代測定では２σ暦年代範囲で56calBC－30calAD（90.5％）という値を示しており、考古学的な年代観と矛盾はない。21溝など平野側に想定しうる自然河道による洗掘を防ぎ、山側の敷地を保護するための護岸施設と考えられる。

第260図　２区・P11区盛土28



第261図　２区・Ｐ11区杭列14

３　杭列

杭列14（第261図　ＰＬ.71－３）

調査区北東壁沿い、盛土28の盛土上に打設された杭列である。11本の杭が10～20㎝と短い間隔で２ｍの長さで並んでいる。杭は長さ50～86㎝程の角杭が用いられ、W1570 １点のみ木製品の櫂が転用されている。杭の下端は盛土28の底面に達している。

遺構の時期は盛土28や河道15との先後関係から弥生時代中期中葉から後葉と考えられる。杭１点の放射性炭素年代測定では321calBC－206calBC（77.3％）の値を示し、考古学的な年代観とは齟齬がみられる。杭列は打設間隔の短さから土留めとしての性格が考えられ、盛土28と一体で機能していた可能性が高い。

４　河道

河道17（第259図）

調査区西隅で確認された河道である。土層断面でのみ確認している。河道15によって山側の肩部は遺存しておらず、平野側は調査区外に展開するため規模や構造は明らかではない。埋土は暗褐色シルト質砂や褐灰色砂を主体とし、流水環境にあったと考えられる。

出土遺物はなく、詳細な時期は特定できないが、層位から弥生時代前期末から中期初頭と推定される。河道15の前身的な河道の一つと考えられる。

第 17 節　Ｐ 12 区の調査

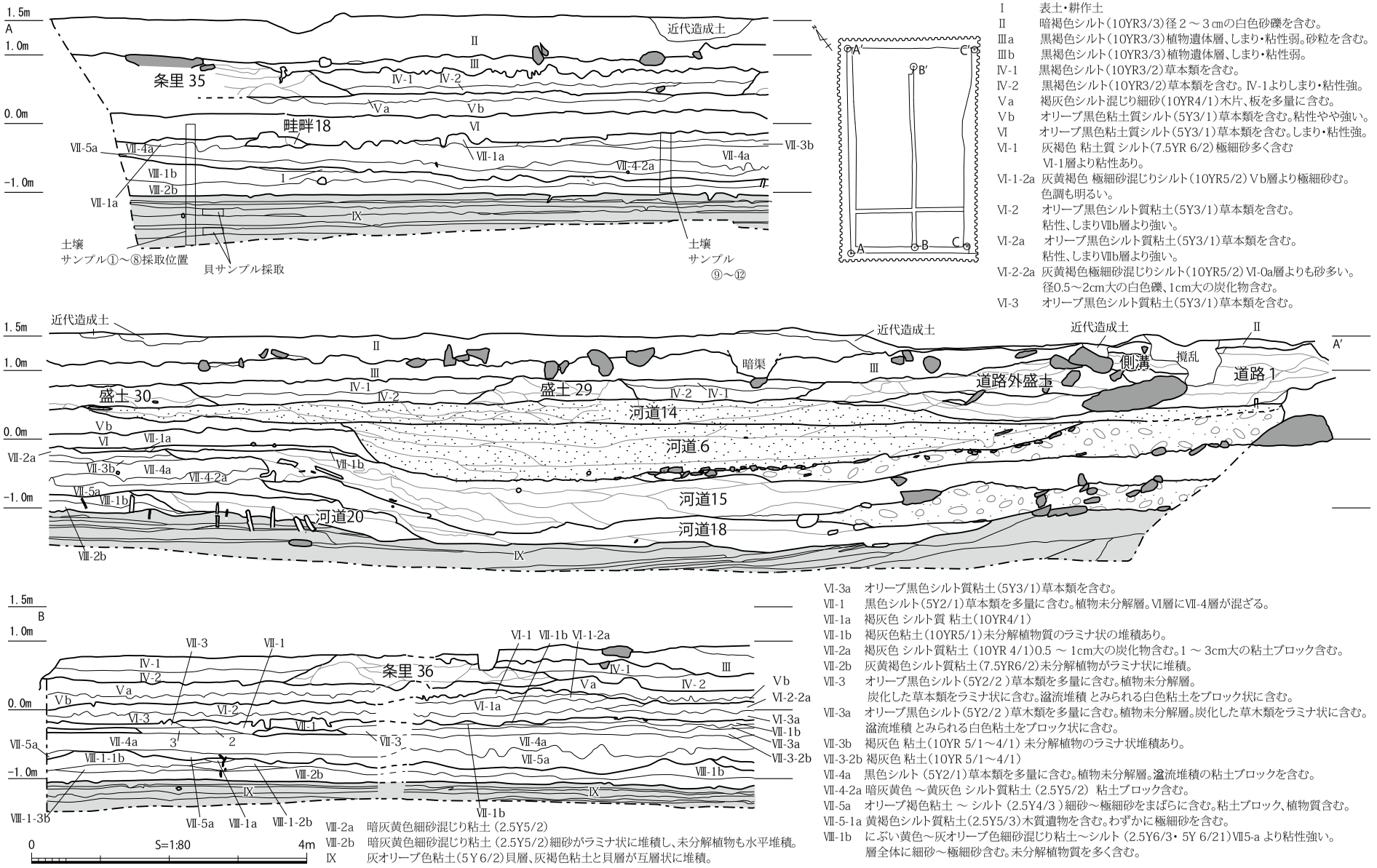
第 1 項　調査区の概要

１　地形と土層堆積（第262・263図）

遺跡中央より北西側にあたり、山裾に位置する。Ｐ10・11区に比べると山裾に近接し、湧水は比較的少ない。発掘調査は平成26・27年度の２年にわたり実施し、調査区の平面積は559.1㎡である。

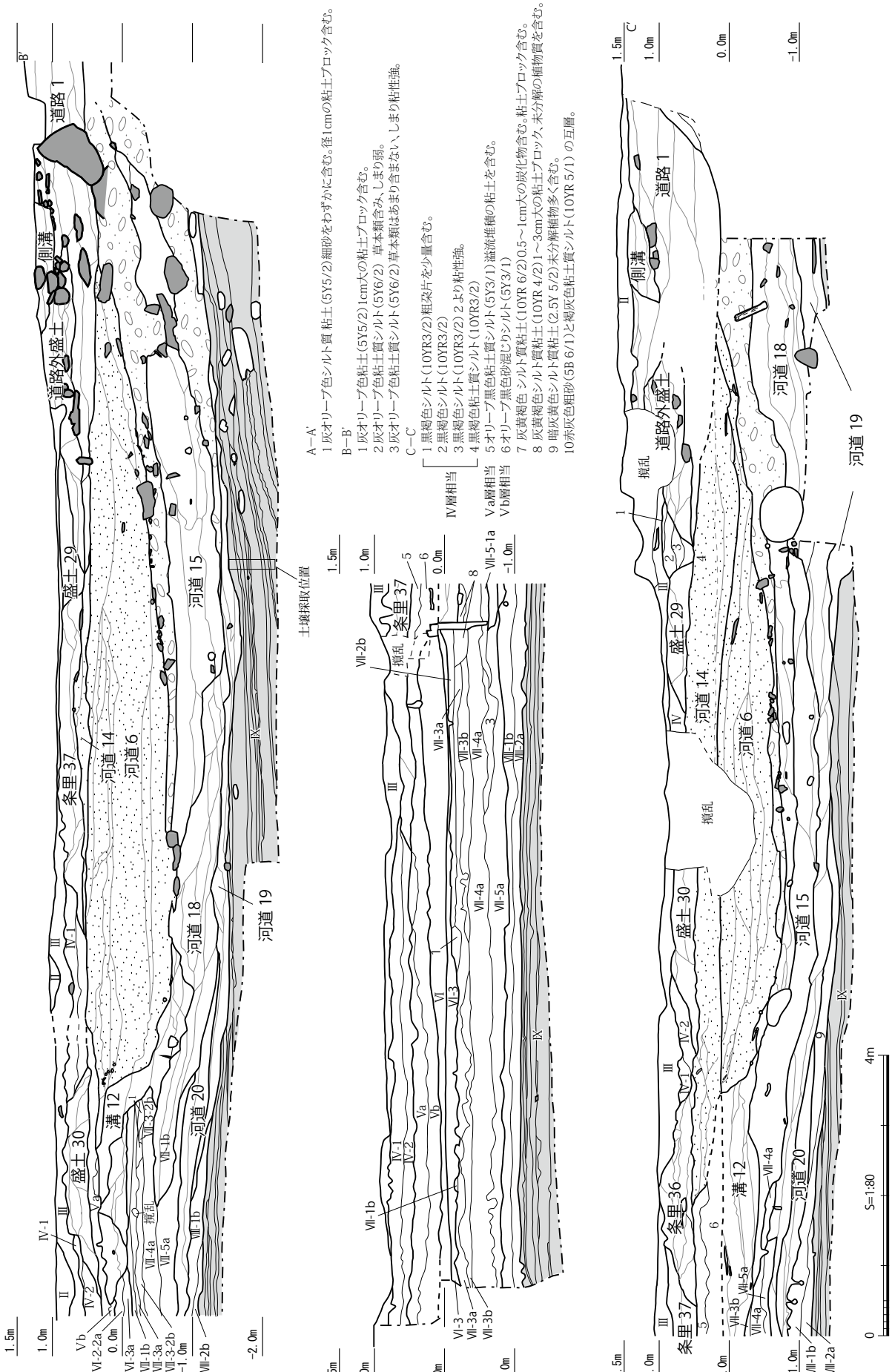
基本層序はⅠ～Ⅸ層まで安定して確認されている。Ⅰ～Ⅳ層までは他の調査区とほぼ同じで、Ⅳ層はＰ10・11区と同じく２層に細分されるが時期差は認められない。Ⅴ～Ⅷ層は山側では河道６など連綿、かつ重層的に形成される自然河道によって山際まで大きく削られており、遺存していない。平野側では、Ⅴ層は古墳時代前期の土師器を少量包含するが、a層中には木製祭祀具を多く含む。これらの木製祭祀具は本来､河道14に帰属する資料と考えられ､溢流したものが混入している可能性が高い。

Ⅶ層は５層に大別され、層厚は最大80㎝に及んでいる。Ⅶ・Ⅷ層中では河道15・18・20などの肩部付近を中心に砂や溢流堆積に由来する粘土が目立ち、低湿地で、河道が頻繁に溢流するような環境下にあったことが窺える。Ⅸ層は潟湖の堆積物で、貝層と灰褐色粘土が互層状に水平堆積している。最上層の貝層中からは僅かながら縄文時代晩期の土器が出土している。

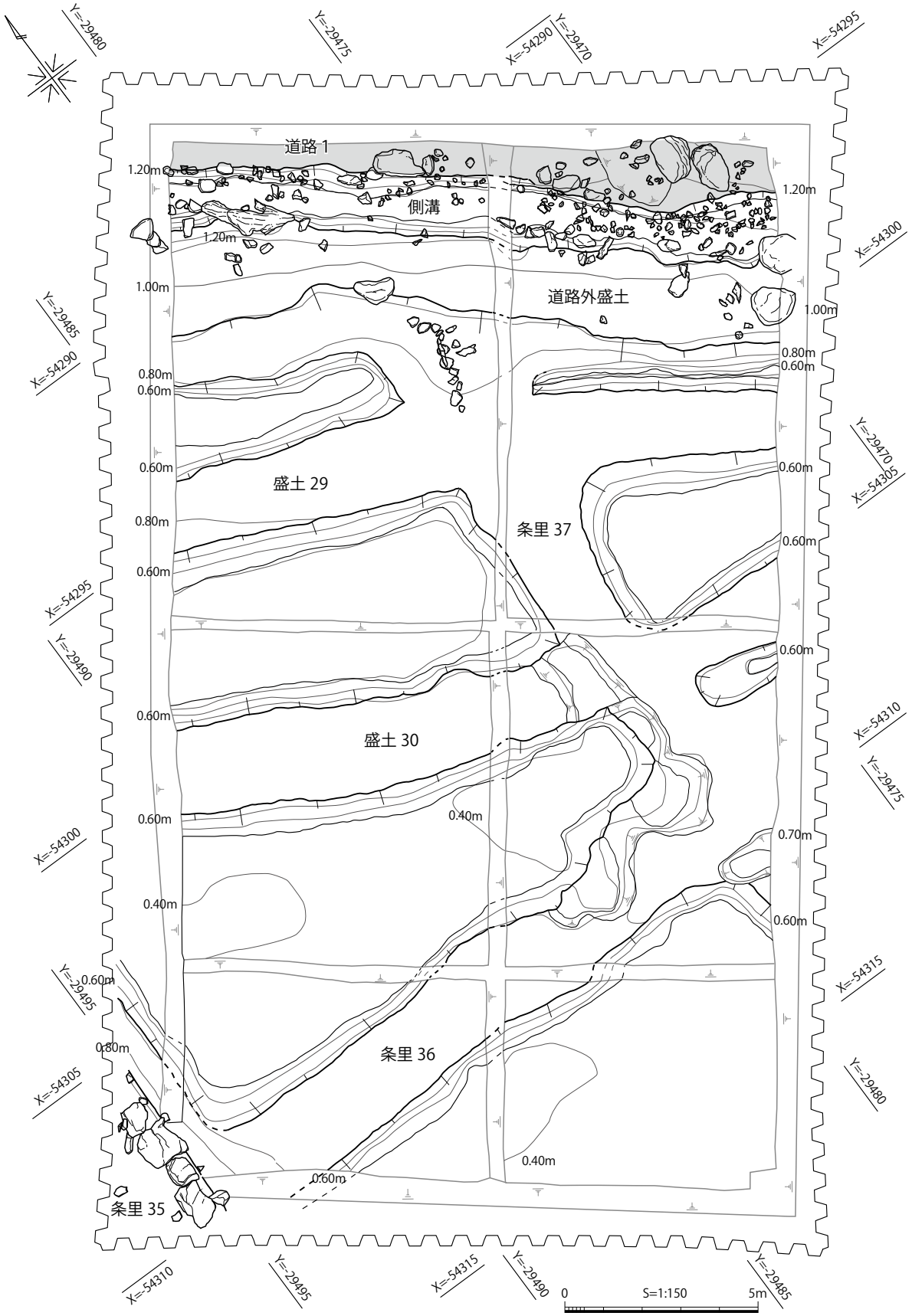


Ⅰ　表土・耕作土
Ⅱ　暗褐色シルト（10YR3/3）径２～３㎝の白色砂礫を含む。
Ⅲa　黒褐色シルト（10YR3/3）植物遺体層、しまり・粘性弱。砂粒を含む。
Ⅲb　黒褐色シルト（10YR3/3）植物遺体層、しまり・粘性弱。
Ⅳ-1　黒褐色シルト（10YR3/2）草本類を含む。
Ⅳ-2　黒褐色シルト（10YR3/2）草本類を含む。Ⅳ-1よりしまり・粘性強。
Va　褐灰色シルト混じり細砂（10YR4/1）木片、板を多量に含む。
Vb　オリーブ黒色粘土質シルト（5Y3/1）草本類を含む。粘性やや強い。
Ⅵ　オリーブ黒色粘土質シルト（5Y3/1）草本類を含む。しまり・粘性強。
Ⅵ-1　灰褐色 粘土質 シルト（7.5YR 6/2）極細砂多く含む
Ⅵ-1層より粘性あり。
Ⅵ-1-2a　灰黄褐色 極細砂混じりシルト（10YR5/2）Vb層より極細砂む。
色調も明るい。
Ⅵ-2　オリーブ黒色シルト質粘土（5Y3/1）草本類を含む。
粘性、しまりⅧb層より強い。
Ⅵ-2a　オリーブ黒色シルト質粘土（5Y3/1）草本類を含む。
粘性、しまりⅧb層より強い。
Ⅵ-2-2a　灰黄褐色極細砂混じりシルト（10YR5/2）Ⅵ-0a層よりも砂多い。
径0.5～2cm大の白色礫、1cm大の炭化物含む。
Ⅵ-3　オリーブ黒色シルト質粘土（5Y3/1）草本類を含む。
Ⅵ-3a　オリーブ黒色シルト質粘土（5Y3/1）草本類を含む。
Ⅶ-1　黒色シルト（5Y2/1）草本類を多量に含む。植物未分解層。Ⅵ層にⅦ-4層が混ざる。
Ⅶ-1a　褐灰色 シルト質 粘土（10YR4/1）
Ⅶ-1b　褐灰色粘土（10YR5/1）未分解植物質のラミナ状の堆積あり。
Ⅶ-2a　褐灰色 シルト質粘土 （10YR 4/1）0.5 ～ 1cm大の炭化物含む。1 ～ 3cm大の粘土ブロック含む。
Ⅶ-2b　灰黄褐色シルト質粘土（7.5YR6/2）未分解植物がラミナ状に堆積。
Ⅶ-3　オリーブ黒色シルト（5Y2/2 ）草本類を多量に含む。植物未分解層。
炭化した草本類をラミナ状に含む。溢流堆積 とみられる白色粘土をブロック状に含む。
Ⅶ-3a　オリーブ黒色シルト（5Y2/2 ）草本類を多量に含む。植物未分解層。炭化した草木類をラミナ状に含む。
溢流堆積 とみられる白色粘土をブロック状に含む。
Ⅶ-3b　褐灰色 粘土（10YR 5/1～4/1）未分解植物のラミナ状堆積あり。
Ⅶ-3-2b　褐灰色 粘土（10YR 5/1～4/1）
Ⅶ-4a　黒色シルト（5Y2/1）草本類を多量に含む。植物未分解層。溢流堆積の粘土ブロックを含む。
Ⅶ-4-2a　暗灰黄色 ～黄灰色 シルト質粘土（2.5Y5/2） 粘土ブロック含む。
Ⅶ-5a　オリーブ褐色粘土 ～ シルト（2.5Y4/3 ）細砂～極細砂をまばらに含む。粘土ブロック、植物質含む。
Ⅶ-5-1a　黄褐色シルト質粘土（2.5Y5/3）木質遺物を含む。わずかに極細砂を含む。
Ⅷ-1b　にぶい黄色～灰オリーブ色細砂混じり粘土～シルト（2.5Y6/3・5Y 6/21）Ⅶ5-a より粘性強い。
層全体に細砂～極細砂含む。未分解植物質を多く含む。
Ⅷ-2a　暗灰黄色細砂混じり粘土（2.5Y5/2）
Ⅷ-2b　暗灰黄色細砂混じり粘土（2.5Y5/2）細砂がラミナ状に堆積し、未分解植物も水平堆積。
Ⅸ　灰オリーブ色粘土（5Y 6/2）貝層、灰褐色粘土と貝層が互層状に堆積。

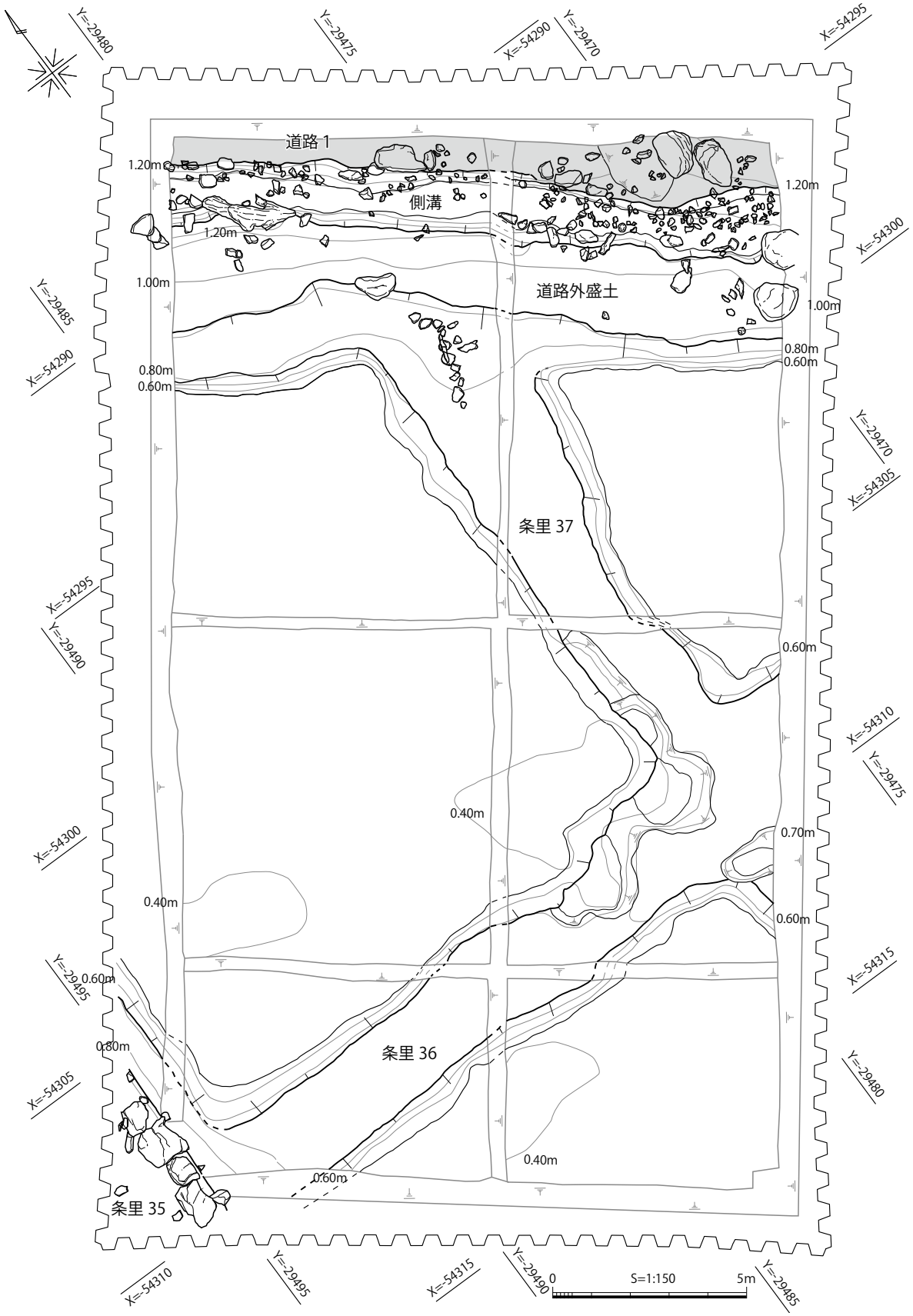
第262図　P12区土層断面図（1）



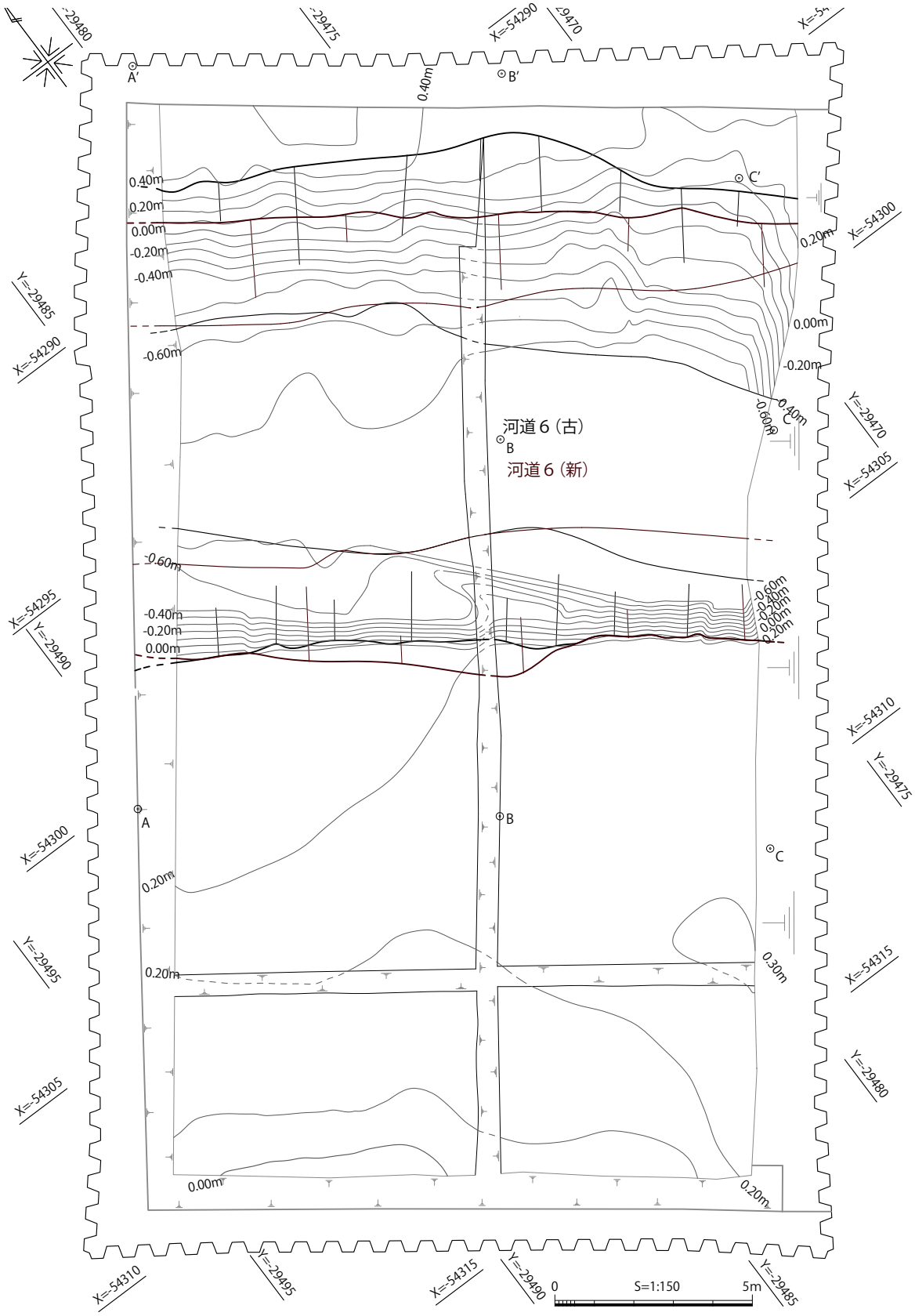
第263図　P12区土層断面図(2)



第264図　P12区Ⅴ層上面遺構分布図（1）



第265図　Ｐ12区Ｖ層上面遺構分布図（２）



第266図　Ｐ12区Ｖ層上面遺構分布図（３）

２　遺構の概要

Ｐ12区では、縄文時代晩期の杭列、弥生時代前期末から中期初頭の自然河道２基、耕地段差、弥生時代中期の自然河道１基、畦畔、弥生時代中期後葉から古墳時代前期の自然河道１基、流路１基、木造構造物２基、古墳時代後期から平安時代の道路遺構１基、条里遺構３基、盛土遺構２基、自然河道２基を確認した。

遺跡の中でも平野側の調査面積が広く、古代では古代山陰道と考えられる道路遺構と条里遺構の関係、さらには条里遺構も一町方格とその内部区画の関係を明確にできた調査区である。Ｐ10 ～ 12区における遺物の出土量の多さは、近接する丘陵裾もしくは、丘陵斜面に集落や官衙などの施設が存在していた可能性を示唆している。

第２項　Ｖ層上面の遺構（古墳時代後期～平安時代）

１　概　要（第264 ～ 266図）

Ｖ層上面が古墳時代後期から平安時代にかけての遺構検出面となる。Ｖ層上面の標高は0.4m前後である。道路遺構１基、条里遺構３基、盛土遺構２基、自然河道２基を検出している。遺構の構築順は大きく河道６→河道14→道路１→条里35 ～ 37→盛土29・30の順である。遺跡を縦断する大規模な自然河道である河道６が古墳時代後期に形成され、終末期にかけて埋没した後、７世紀後葉から８世紀初頭に道路１が築かれる。その後、10世紀後半に条里35 ～ 37が道路遺構に接続し構築され、ほどなく盛土29・30が形成される。道路１についてはその規模や構造から古代山陰道と考えられる。

遺物は須恵器や土師器に加え、黒色土器、墨書土器、転用硯、木簡、木製祭祀具などが出土している。土器は道路１の道路盛土内から多量に出土し、木製祭祀具は河道14に集中する。

２　道路遺構

道路１（第267 ～ 269図　ＰＬ.72・73－１,２）

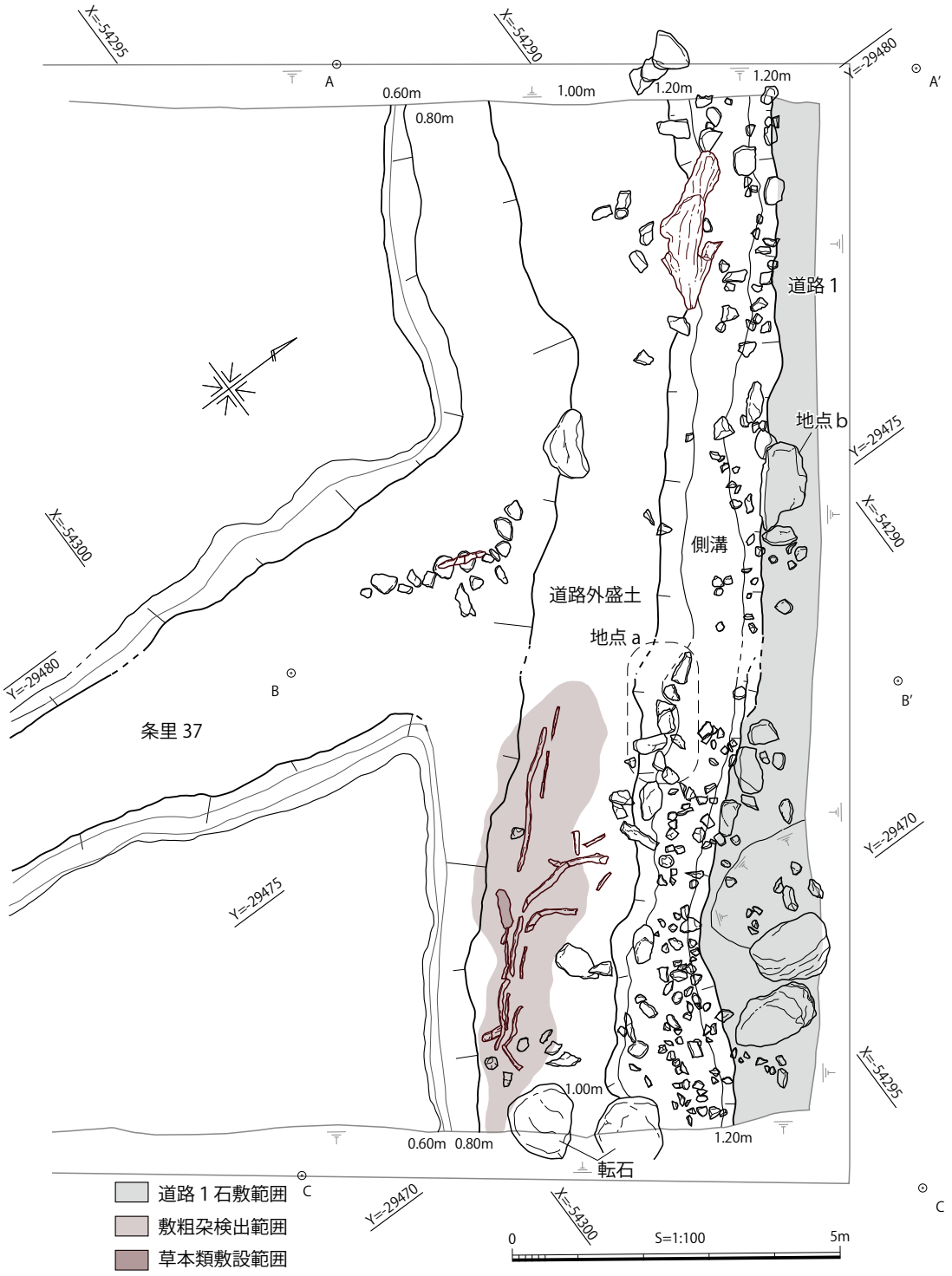
Ｐ７～ 14区にかけて確認された大規模な道路遺構である。丘陵裾に沿って直線的に延びる。方位はＮ－54°－Ｗで、P11区に比べると軸が僅かに西偏する。道路盛土はⅡ層下面が、側溝や道路外盛土はⅡ～Ⅲ層下面が検出面となる。本調査区では道路敷の大部分が埋没した自然河道の河道６上にあたる。

遺構は盛土で構築され、本体である道路盛土の他に、側溝と道路外盛土が付随する。検出した幅は、路面にあたる石敷部分が1.1 ～ 2.3m、盛土基底部が6.2 ～ 7.3mで、路面に対して基底部が著しく広い。これは、路肩が大規模に崩落したことを示しており、道路敷設当初は路幅がさらに幅広かったと考えられる。盛土の高さは最大1.05m程である。上面の標高は、北西端が1.35m、南東端が1.5mで、南東が僅かに高い。それに対し、道路盛土下面の標高は北西端が0.5m、南東端が0.15m前後で、南東側が低い。

道路盛土

道路盛土は出土土器から５時期に分けられ、本調査区では第１・４・５次盛土が確認されている。第１次盛土が道路敷設時、第４・５次盛土が道路改修に伴う盛土である。時期は、第１次盛土が７世紀後葉から８世紀初頭、第４・５次盛土が10世紀後半から11世紀と推定される。検出された側溝や道路外盛土は第４・５次盛土に伴う遺構である。

第１次盛土　　道路を敷設した当初の盛土で、Ａ－Ａ’23 ～ 39層、Ｂ－Ｂ’18 ～ 28層、Ｃ－Ｃ’23 ～ 29

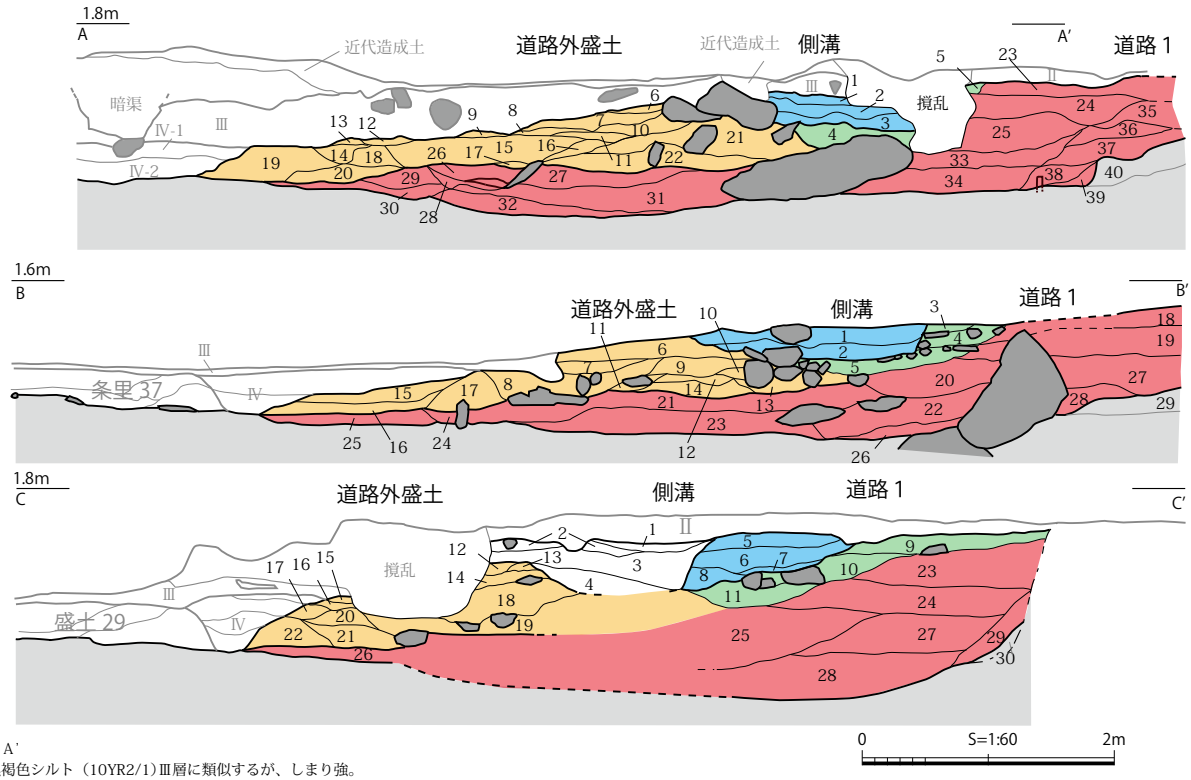


第267図　P12区道路 1

層が該当する。A－A’23層、B－B’18層が路面、それ以外が路床から路盤にあたる盛土と考えられる。この段階の路肩は遺存しておらず、大規模な崩落により法面は地滑りの崩落ラインを示している。

路面は褐灰色シルト混じり礫で、１～３㎝角の小礫を密に含む。層全体が堅固にしまり、表層はやや硬化している。検出範囲が狭いこともあり、上面で凹凸面など通行痕跡は確認されていない。

路床の基底面は凹状を呈し、一抱え大から１ｍ角を越えるほど巨礫が散在する。路床が自然河道上の砂層上にあたるために、丘陵斜面から礫が落とし込み、道路施工時の足場を確保する狙いがあったものと推測される。A－A’、B－B’をみると、この巨礫を挟んで平野側と山側では盛土が大きく異な



A－A'
1 黒褐色シルト（10YR2/1）Ⅲ層に類似するが、しまり強。
2 黒褐色シルト（10YR2/1）１よりしまり強。B-B'１に対応。
3 黒褐色砂混じりシルト（10YR2/1）小礫を含む、粗粒片を少量含む。B-B'２に対応。
4 褐色礫混じり砂（10YR4/4）中粒砂主体、拳大までの礫を含む。B-B'５に対応。
5 黒褐色シルト混じり礫（10YR2/1）炭化物多い。
6 黒褐色シルト（10YR2/1）Ⅲ層による侵食あり。
7 黒褐色シルト（10YR2/1）細粒砂、粗粒を含む。
8 黒褐色シルト（10YR2/1）粗粒がやや少ない。
9 黒褐色シルト（10YR2/1）粗粒をほとんど含まない。
10 黒褐色シルト（10YR2/1）粗粒を多量に含む。
11 黒褐色シルト（10YR3/2）粗粒を多く含む、細粒砂を含む。
12 黒褐色シルト（10YR3/2）粗粒をほとんど含まない、しまり弱。
13 黒褐色シルト（10YR3/2）粘性やや強。
14 黒褐色粘土質シルト（10YR3/2）粗粒はほとんど含まない、しまりやや弱。
15 黒褐色粘土質シルト（10YR3/2）粗粒を一定量含む、細粒砂を含む。炭化物が目立つ。
16 黒褐色シルト質粘土（10YR3/2）粗粒はほとんど含まない、しまりやや強。
17 黒褐色粘土質シルト（10YR3/2）砂質が強い。
18 黒褐色シルト質粘土（10YR3/2）粗粒はほとんど含まない、しまり強。
19 黒褐色シルト質粘土（10YR3/2）粗粒をわずかに含む、しまり強。
20 黒褐色シルト質粘土（10YR3/2）粗粒をほとんど含まない、しまり強。
21 黒褐色粘土（10YR3/2）粗粒を含まない、しまり・粘性強。B-B'６　に対応。
22 黒褐色シルト質粘土（10YR3/2）粗粒をほとんど含まない、しまり強。
23 褐灰色シルト混じり礫（10YR4/1）１～２㎝程の礫を密に含む。炭化物多い。
24 灰黄褐色シルト混じり礫（10YR4/2）１～５㎝角の礫主体、しまり強。B-B'19に対応。
25 黒褐色礫混じりシルト（10YR3/1）１～５㎝角の礫、粗粒を多く含む、やや細粒砂混じり。
26 褐灰色シルト混じり砂（10YR4/1）粗粒を多く含む。43より礫が密。
27 褐灰色シルト混じり砂（10YR4/1）中～粗粒砂主体。粗粒・拳大までの礫を含む。
B-B'21対応。
28 黒褐色砂混じりシルト（10YR3/2）粗粒を含む、細粒砂混じり。
29 黒褐色砂混じりシルト（10YR3/2）41に類似するが、しまり・粘性やや強。
30 黒褐色粘土質シルト（10YR3/2）13に類似するが、粘性やや弱。
31 褐灰色シルト混じり砂（10YR4/1）極粗粒砂主体、粗粒を含み、炭化物が目立つ。
B-B'23に対応。
32 褐灰色シルト混じり砂（10YR4/1）31に類似するが、ややシルトがラミナ状に入る。
33 黒褐色礫混じりシルト（10YR4/1）粗粒・葉を多量に含む。拳大までの礫を含む、しまり弱。
34 褐灰色礫混じりシルト（10YR4/1）拳大までの礫、細粒砂を多く含む。
35 褐灰色礫混じりシルト（10YR4/1）24に類似するが、しまり弱。
36 黒褐色礫混じりシルト（10YR2/1）粗粒片・葉を含む。
37 褐灰色礫混じりシルト（10YR4/1）拳大までの礫を含む。炭化物が多い。
38 褐灰色礫混じりシルト（10YR4/1）37に類似するが、粘性強。
39 褐灰色礫混じりシルト（10YR4/1）27と類似するが、29を多く含む、粘性強。
B-B'28層に対応。
40 褐灰色礫混じりシルト（7.5YR4/1）拳大までの礫を多く含む、しまり・粘性強、
土師器を多く含む、炭化物多い。B-B'29に対応。

道路第１次盛土
道路第４・５次盛土
道路外盛土
側　溝

B－B'
1 黒褐色シルト（10YR2/1）Ⅲ層に類似する。
2 黒褐色砂混じりシルト（10YR2/1）Ⅲ層に類似する、径３㎝までの礫を多く含む。
3 黒褐色礫混じりシルト（10YR2/1）小礫を多く含む、しまりやや強、炭化物多い。
4 黒褐色礫混じりシルト（10YR2/1）拳大までの礫を多く含む、３よりしまり弱。
5 褐色礫混じり砂（10YR4/4）粗粒砂主体、拳大までの礫を含む。
6 黒褐色粘土（10YR3/2）粗粒を含まない、しまり・粘性強
7 黒褐色シルト質粘土（10YR3/2）粗粒を僅かに含む、６よりしまりやや弱。
8 黒褐色砂混じりシルト（10YR3/2）粗粒をほとんど含まない。
9 黒褐色シルト質粘土（10YR3/2）粗粒をほとんど含まない、８よりしまりやや強。
10 黒褐色シルト（10YR3/2）粗粒をほとんど含まない、炭化物目立つ。
11 黒褐色粘土質シルト（10YR3/2）粗粒を含まない。
12 褐色シルト（10YR3/2）粗粒を一定量含む、炭化物が密集する。
13 黒褐色シルト（10YR3/2）石積の裏込め土、しまり弱。
14 褐灰色シルト混じり砂（10YR4/1）細粒砂主体、粗粒片、拳大までの礫を含む。
15 黒褐色粘土質シルト（10YR3/2）粗粒を僅かに含む。
16 黒褐色粘土質シルト（10YR3/2）粗粒を僅かに含む、15より粘性やや強。
17 黒褐色シルト質粘土（10YR3/2）粗粒を少量含む、僅かに砂混じり、しまりやや強。
18 褐灰色礫混じり粘土（10YR4/1）２～３㎝角の礫を密に含む、しまり強、長層は硬化。
19 灰黄褐色シルト混じり礫（10YR4/2）１～５㎝角の礫主体、しまり強。
20 黒褐色礫混じりシルト（10YR3/1）10～20㎝角の礫、粗粒を多く含む、しまりやや弱。
21 褐灰色シルト混じり砂（10YR4/1）中～粗粒砂主体、粗粒片、拳大までの礫を含む。
22 黒褐色礫混じりシルト（10YR3/1）20と類似するが、粗粒砂、粗粒片を多く含む。
23 褐灰色シルト混じり砂（10YR4/1）極粗粒砂主体、粗粒を多く含む、25よりシルト質。
24 褐灰色シルト混じり砂（10YR4/1）21より黒褐色シルトが多く混ざる。
25 褐灰色シルト混じり砂（10YR4/1）極粗粒砂主体、粗粒、炭化物を含む、しまり強。
26 黒褐色砂混じりシルト（10YR3/1）１～５㎝角の礫、粗粒片を多く含む、細粒砂を含む。
27 褐灰色礫混じりシルト（10YR4/1）拳大までの礫を多く含む、炭化物多い、粘性強。
28 褐灰色礫混じりシルト（10YR4/1）27と類似するが、29を多く含む、粘性強。
29 褐灰色礫混じりシルト（7.5YR4/1）拳大までの礫を多く含む、しまり・粘性強、
土師器を多く含む、炭化物多い。

第268図　Ｐ12区道路１土層断面図（１）

る。平野側ではB－B'21、23層などシルト混じり砂が主体であるのに対して、山側では礫混じりシルトが主体となる。これは、平野側では道路施工時に未だ河道14が機能しており、礫や粗粒を混和した粘土を河道内に投入することで埋め立てたことに起因する可能性がある。また、調査南東半の最下層

C－C’
1黒褐色シルト（10YR2/1）Ⅲ層に類似。
2黒褐色シルト（10YR2/1）Ⅲ層に類似、1よりしまり強。
3黒褐色シルト（10YR2/1）Ⅲ層に類似、1・2よりしまり弱。
4黒褐色シルト（10YR2/1）Ⅲ層に類似、1・3より細粒砂を多く含む。
5黒褐色シルト（10YR2/1）1～5㎝角の礫を多く含む。
6黒褐色シルト（10YR2/1）僅かに砂礫を含む、B-B’1に対応。
7黒褐色シルト（10YR2/1）礫を少量含む、粗朶片、細粒砂を含む、B-B’2に対応。
8黒褐色シルト（10YR2/1）粗朶を含む、6・7よりしまりやや強。
9黒褐色礫混じりシルト（10YR2/1）1～5㎝角の礫を多量に含む、炭化物多い。
10黒色礫混じりシルト（10YR2/1）粗朶片、炭化物を多く含む、しまり弱。
11褐灰色礫混じり砂（10YR4/1）拳大までの礫を多く含む。
12黒褐色シルト（10YR2/1）粗朶を多量に含む。
13黒褐色シルト（10YR2/1）粗朶を少量含む。
14黒褐色シルト（10YR2/1）粗朶を含む、炭化物を密に含む。
15黒褐色シルト（10YR2/1）粗朶を多く含む。
16黒褐色シルト（10YR2/1）粗朶を多く含むが、15より少ない。
17黒褐色粘土質シルト（10YR3/2）粗朶を僅かに含む、しまりやや強。
18黒褐色粘土質シルト（10YR3/2）粗朶をあまり含まない、しまり・粘性やや強。
19黒褐色砂混じりシルト（10YR3/2）粗朶をあまり含まない、細粒砂を含む。
20黒褐色粘土質シルト（10YR3/2）粗朶を僅かに含む、17よりしまりやや強。
21黒褐色シルト質粘土（10YR3/2）粗朶を僅かに含む、22よりしまりやや弱。
22黒褐色シルト質粘土（10YR3/2）粗朶を含まない、しまり・粘性強。
23灰黄褐色シルト混じり礫（10YR4/2）1～5㎝角の礫主体、しまり強。B-B’20に対応。
24黒褐色礫混じりシルト（10YR3/1）拳大の礫を密に含む、粗朶・葉を多量に含む。
25褐灰色シルト混じり砂（10YR4/1）細～中粒砂主体、拳大までの礫を多量に含む、粗朶片を少量含む。
26褐灰色シルト混じり砂（10YR4/1）極粗粒砂主体、粗朶片を僅かに含む。
27褐灰色礫混じりシルト（10YR4/1）拳大までの礫を多量に含む、炭化物多い。
28褐灰色シルト混じり砂（10YR4/1）粗朶・葉などの植物遺体を多量に含む、細粒砂主体、拳大までの礫を多く含む。
29褐灰色礫混じりシルト（10YR4/1）27と類似するが、29を多く含む、粘性強。B-B’28に対応。
30褐灰色礫混じりシルト（7.5YR4/1）拳大までの礫を多く含む、しまり・粘性強、土師器を多く含む、炭化物多い。B-B’29に対応。

第269図　P12区道路１土層断面図（２）

の褐灰色シルト混じり砂(B－B’23層など)からは、４ｍ×２ｍ程の範囲で獣骨がまとまって出土している。獣骨はウシ31点とウマ４点が出土しており、ウシが５個体以上と多い。ウシはいずれも解剖学的位置を保たず、年齢的に若い個体を含むことから解体されていた可能性が高い(第６章第10節)。B－B’19・27層、C－C’23・24層などが路盤に相当し、路面よりもやや大きめの礫を密に含む。P10・11区の路盤相当の盛土と異なるのは、粗朶片や葉を混和させている点である。

出土遺物は須恵器や土師器、木製祭祀具、木製品などがある。須恵器が岡田編年出雲Ⅱ～Ⅲ期に比定されることから、第１次盛土の時期は７世紀後葉から８世紀初頭と推定される。なお、古墳時代後期の須恵器を多量に含んでいるが､それらは本来､下層にある河道６に帰属する資料の可能性が高い。

第４・５次盛土　　道路改修に伴う盛土で、A－A’４・５層、B－B’３～５層、C－C’９～11層が該当する。第４・５次盛土の細分はできていない。

C－C’９層は路面にあたり、黒褐色礫混じりシルトである。１～５㎝角の小礫を密に含み、第１次盛土の路面相当層と比べると炭を多く含む。A－A’４層、B－B’５層、C－C’11層は同一層で、砂層で拳大までの小礫を多く含んでおり、本調査区でのみ確認された特異な盛土である。道路盛土内における排水などの機能を果たしていたと考えられる。また、第５次盛土に伴う側溝の直下にあたり、断面形が凹状を呈することから本来、第４次盛土に伴う側溝であった可能性もある。

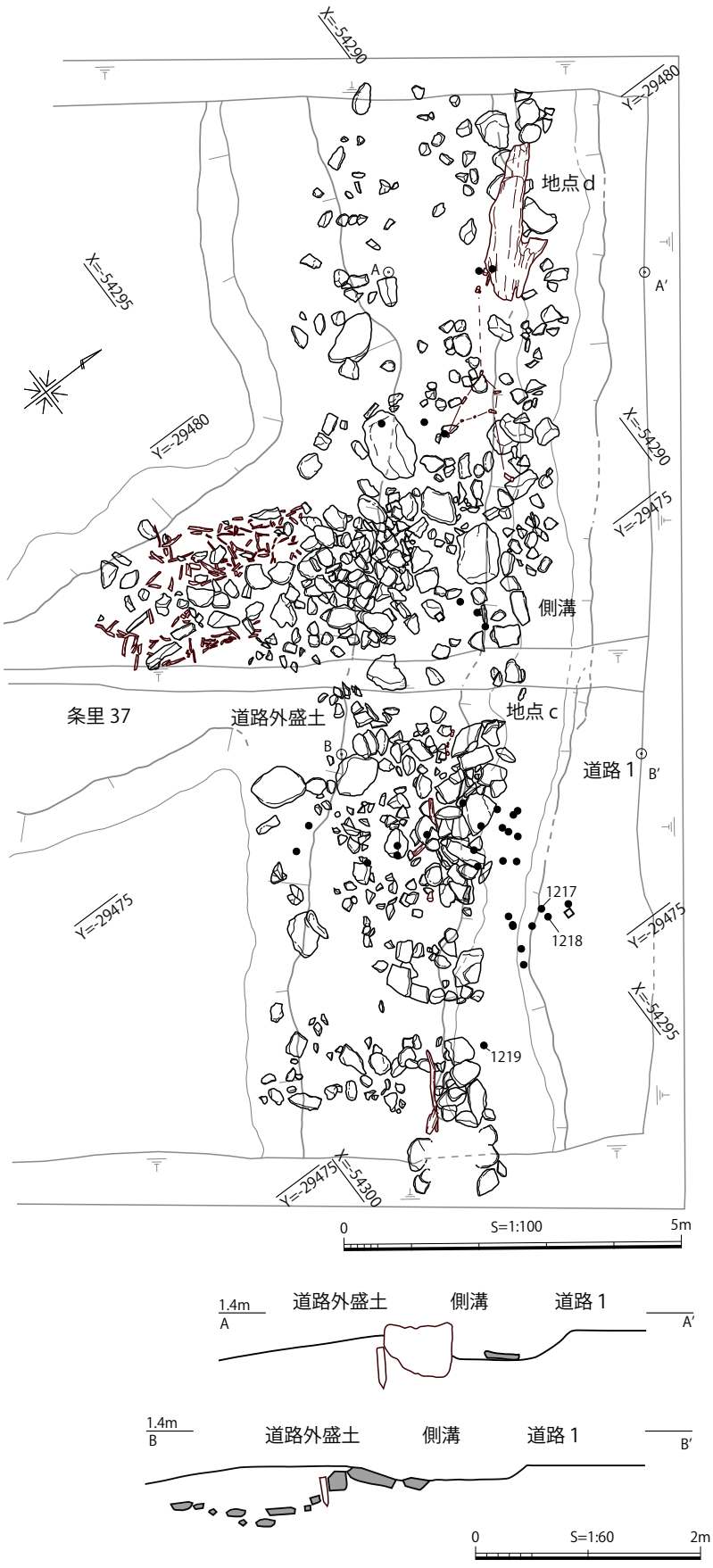
遺物は須恵器や土師器、木製祭祀具などが少量出土している。時期は出土土器から岡田・八峠編年ＫⅤ～Ｃ１期、10世紀後半から11世紀代と考えられる。なお、先述したA－A’４層、B－B’５層、C－C’11層では他の調査区では見られない岡田・八峠編年KⅢ－３期、８世紀末から９世紀前半に帰属する資料がまとまって出土しており、この段階における道路改修の可能性も示唆している。

側　溝

検出された側溝は平野側のみで、道路本体に沿って直線的に延びる。道路盛土の外側に道路外盛土を築くことで、その間の窪地が側溝として作出されている。道路１の第５次盛土に伴う側溝である。

規模は幅1.1 ～ 1.5m、深さ最大45㎝ほどである。底面の標高は1.0m前後で、北西端と南東端で高低差はほとんどみられないが、P11区に比べると20㎝ほど高い。断面形は皿状で、壁面の立ち上がりは路肩側がやや急である。第267図地点aでは道路外盛土側の壁面に沿って扁平な礫が貼り付けられ、第267図地点ｂでは1.4m×0.7mほどの大型礫が路肩に据えられ、礫の平滑な側面が側溝の壁面をなしている。埋土はⅢ層に類似する黒褐色シルトで、下層には細粒砂を含む。溝内は基本的に乾燥した環境下にあったとみられるが、一時的な流水が存在したことが窺える。

遺物は須恵器や土師器が少量出土しているが、P10・11区に比べると少ない。時期は出土土器が須



第270図　Ｐ12区道路１道路外盛土内礫・粗朶検出状況図

恵器・土師器が岡田・八峠編年ＫⅤ～Ｃ１期に比定されること、道路の改修盛土や道路外盛土との重複関係から11世紀代と考えられる。遅くともⅢ層が堆積し始める12世紀頃には廃絶したとみられる。

道路外盛土（第270図　ＰＬ.73－３・74）

道路側溝の外側に位置する盛土遺構で、南東から北西方向に直線的に延びている。平野側には条里遺構が接続しており、条里37とは礫や粗朶による盛土芯を共有し一体で構築されている。本調査区では他の調査区とは異なり、崩落した道路の第１次盛土上に築かれており、盛土の敷設範囲は道路敷内にほぼ収まる。

盛土の規模は、上面幅1.6 ～ 2.5ｍ、基底部幅3.8 ～ 4.9ｍ前後で、盛土の高さは最大60㎝程である。盛土上面の標高は1.2ｍ前後で、道路上面よりも30㎝ほど低く、条里遺構の上面よりも30㎝ほど高い。盛土は基本的に緻密な黒褐色シルトから粘土を用いているが、Ｂ－Ｂ’８・14層など礫混じり砂や砂混じりシルトもみられる。Ａ－Ａ’をみると、盛土裾の両側に19 ～ 21層の粘性やしまりの強い粘土で土手を築き、内部を15層など粗朶片や砂を混和した土で充填していく工法で築かれている。盛土内では条里37との交点を中心に拳大から一抱え大ほどの礫が充填されている。礫は交点から遠ざかるほど散漫になる。第270図ｃ地点では乱雑に礫を積み、丸太杭で固定されている。その一方で、ｄ地点では長さ2.5ｍ、径50㎝程の大木を横木と

し、丸太杭で固定している。杭列はさらに南東へ３ｍほど延び、条里37との交点付近では条里37の方向にT字状に僅かに分岐して打設されている。ｃ・ｄ地点とも側溝の肩部に位置し、杭は平野側から打ち込まれていることから、道路外盛土の盛土芯というよりは、むしろ、側溝の壁面を補強し、その流出等を防ぐための構造物であった可能性が高い。

盛土上位で敷粗朶が確認されている。検出範囲は南東半のみで、幅１～1.5程の帯状を呈する。粗朶は径0.5～５㎝の枝が長軸方向に敷設され、葉付きではない。草本類が敷設された部分も１カ所みられる。

遺物は須恵器や土師器、黒色土器、木製祭祀具、木簡などが出土している。構築時期は出土土器などから岡田・八峠編年KV期、10世紀後半と推定される。盛土内の杭１点の放射性炭素年代測定では２σ暦年代範囲で、860－970calAD(81.5％)の値が得られており、矛盾はない。

本遺構は道路盛土を補強するとともに、道路空間と条里による耕地空間を明瞭に区別する区画施設としての性格が考えられる。

３　条里遺構

条里35(第271・272図　ＰＬ.75－１・76・77－１)

調査区西隅で検出された、南北方向に直線的に延びる盛土遺構である。方位はN－５°－Wである。条里36と直交し、一体で構築されている。

規模は検出範囲が狭く、不明ながら、上面幅3.2m以上、基底部幅5.9m以上である。盛土の高さは最大63㎝程である。盛土上面の標高は１ｍ前後を測り、条里36の上面より10～15㎝ほど高い。

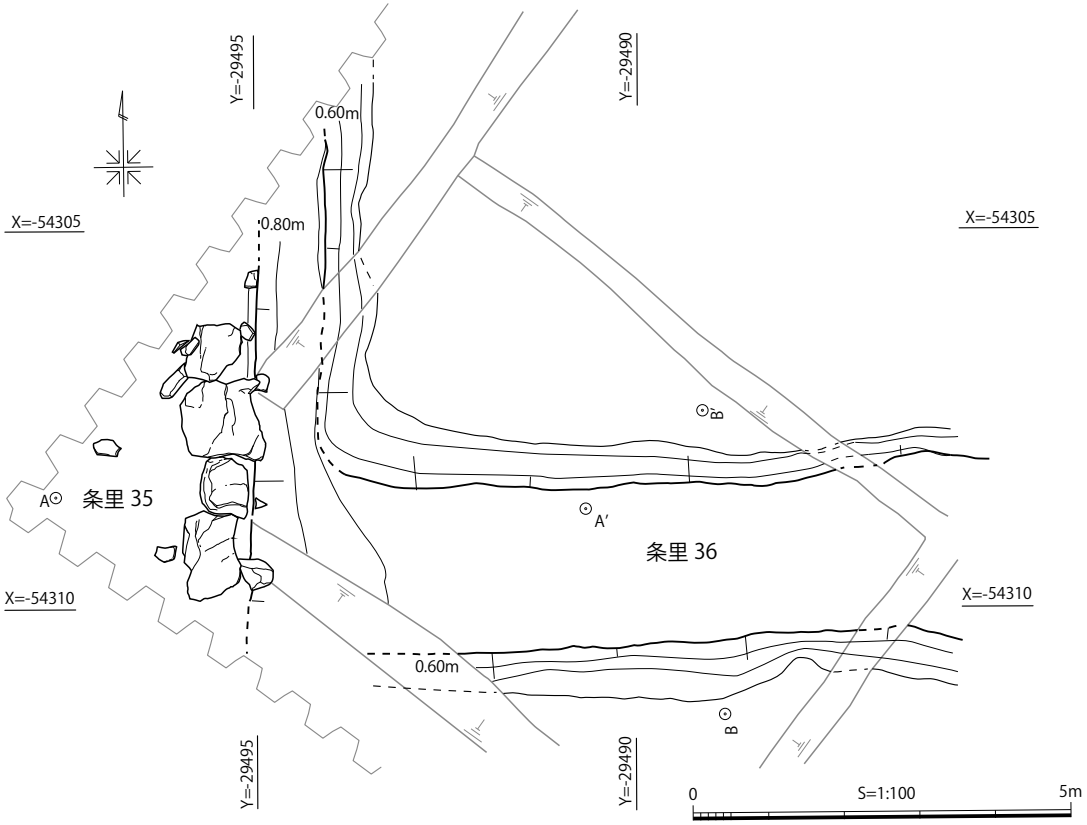
盛土の構築方法は、まず、盛土裾の両端に粗朶を含まない土(15･16･18層)で土手を築く。その後、土手の内側に敷粗朶層や粗朶を多く含む盛土(４～17層)を充填していき、上部に一辺0.7～1.0ｍの大型で扁平な礫が載せられている。礫は盛土上面全体ではなく、盛土肩部に敷き並べられている。礫は盛土上面に露出して検出されているが、土層断面の観察から本来は薄い盛土で被覆されていたと考えられる。敷粗朶層は５・６・10層で、全体として粗朶の大きさや方向を変えながら丁寧に敷設されている。最下層の10層ではやや太めの粗朶を盛土に沿う南北方向を主体に敷くのに対して、６層では南北方向ながらやや細めの粗朶を敷く。また、６層と10層の間には断面図では示せないほどの薄い砂層を挟む。最上層の５層では、６層よりもさらに細い粗朶を盛土に直交する東西方向に密に敷設している。粗朶には樹種同定によりウツギ属、ツバキ属、サカキなどが利用されていることが判明している。遺物は須恵器や土師器、木製祭祀具、下駄、田下駄、曲物などの木製品が出土している。

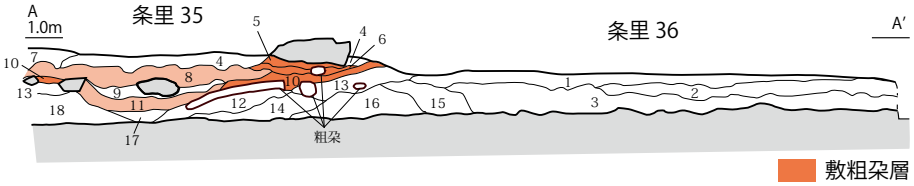
構築時期は出土土器を図化しえなかったが、岡田・八峠編年KV期に比定され、10世紀後半と推定される。粗朶２点の放射性炭素年代測定では、２σ暦年代範囲で775－897calAD(87.8％)、864－974calAD(90.1％)の値を示し、考古学的な年代観と概ね齟齬はない。遺構は坪境を示す、一町方格(109m)の条里地割と考えられる。

条里36(第271～273図　ＰＬ.72－２・75－１・77－２)

調査区南側で確認された、東西方向に直線的に延びる盛土遺構である。方位はN－85°－Wである。調査区西端では条里35と南東壁付近では条里36と直交し、構築順は条里35・36→条里37である。条里37との交点付近では攪乱により一部、盛土上半が遺存していない。

規模は上面幅2.1～2.2m、基底部幅2.7～3.5ｍで、盛土の高さは最大34㎝程である。盛土上面は平



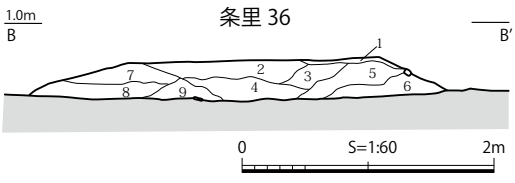


A-A’

条里 36
1　黒褐色シルト（10YR3/2）粗朶を多く含む。
2　黒褐色粘土質シルト（10YR3/2）草本類を少量含む。
3　黒褐色粘土質シルト（10YR3/2）粗朶をほとんど含まない、２より粘性強。

条里 35
4　黒褐色シルト（10YR2/1）粗朶は含まない、８よりしまり強、Ⅲ層の侵食あり。
5　黒褐色シルト質粘土（10YR2/2）東西方向の径１～２cm の粗朶が密集する。
6　黒褐色シルト質粘土（10YR2/2）南北方向の径２～３cm の粗朶が密集する。
7　黒褐色シルト（10YR2/1）４よりしまり弱、植物腐食土を多量に含む。
8　黒褐色シルト（10YR2/3）粗朶を多く含む。粗朶は南北方向が主体だが、不定方向のものも多い。
9　黒褐色シルト（10YR2/3）粗朶が少ない。９より粘性やや強。
10　黒褐色シルト（10YR2/3）径２～５cm の粗朶を多量に含む。粗朶は南北方向が主体だが、不定方向のものも含む。６との間に砂の薄層を挟む。

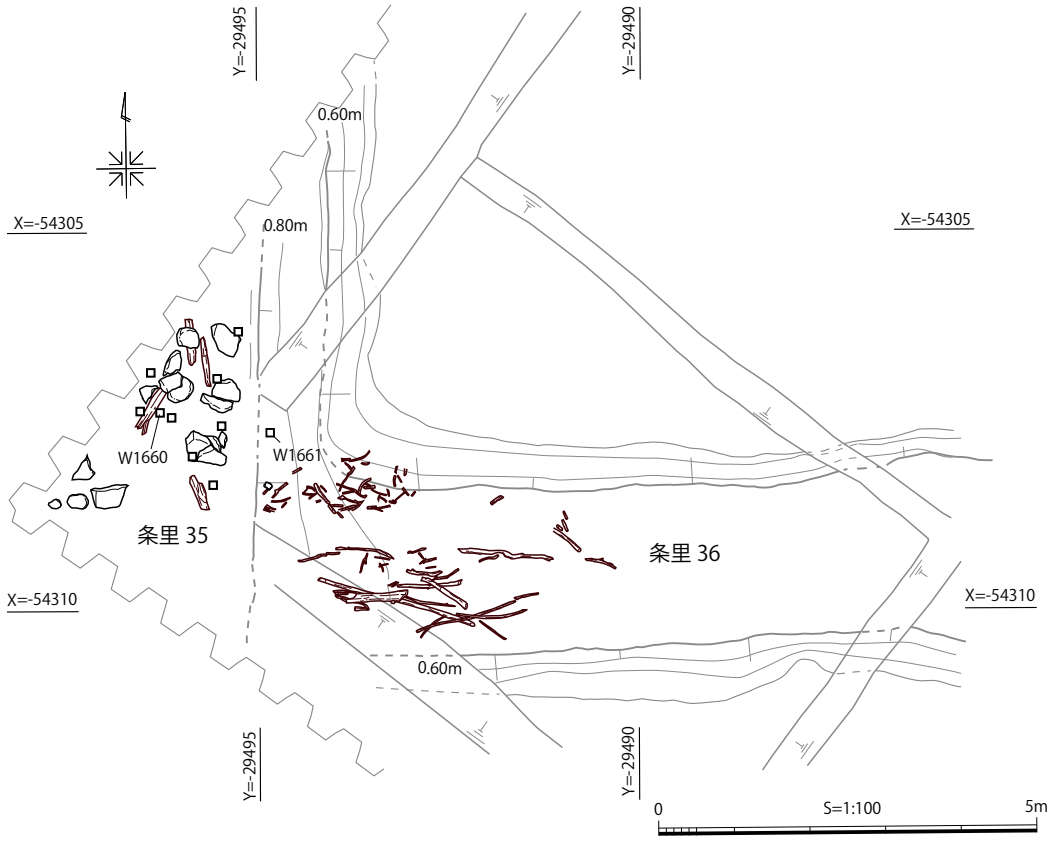
条里 35
11　黒褐色粘土質シルト（10YR2/3）粗朶を一定量含む。しまりやや弱。
12　黒褐色粘土質シルト（10YR2/3）径３～５cm の粗朶を少量含む。しまり・粘性強。
13　黒褐色粘土質シルト（10YR2/3）径３～10cm の粗朶を少量含む。
14　黒褐色シルト質粘土（10YR2/3）粗朶をわずかに含む、しまり・粘性強。
15　黒褐色シルト質粘土（10YR2/3）粗朶をわずかに含む、15 より粘性やや弱。
16　黒褐色シルト質粘土（10YR2/3）粗朶をほとんど含まない、15、16 よりしまり・粘性強。
17　黒褐色シルト質粘土（10YR2/3）粗朶をほとんど含まない、17、19 よりしまり・粘性やや弱。
18　黒褐色シルト質粘土（10YR2/3）粗朶をほとんど含まない、しまり・粘性強



B-B’
1　黒褐色シルト（10YR3/2）草本類を含む、しまりなし、Ⅲ層による侵食あり。
2　黒褐色シルト（10YR3/2）草本類を少量含む。
3　黒褐色シルト（10YR3/2）２より粘性強、草本類を少量含む。
4　黒褐色粘土質シルト（10YR3/2）草本類を少量含む。
5　黒褐色シルト質粘土（10YR3/2）草本類をあまり含まない。
6　黒褐色シルト質粘土（10YR3/2）草本類をあまり含まない。５よりしまり・粘性強
7　黒褐色シルト質粘土（10YR3/2）草本類を上位に少量含む。
8　黒褐色シルト質粘土（10YR3/2）草本をあまり含まない、７よりしまり・粘性強。
9　黒褐色シルト質粘土（10YR3/2）草本をあまり含まない、８より粘性強。

第271図　Ｐ12区条里35・36

坦で、標高は0.8m前後である。盛土はB－B’でみると ９層に細分され、粗朶を含まない黒褐色シルト質粘土を主体とする。ただし、条里35との交点近くの盛土上位では、盛土方向に沿った粗朶が敷設されている。盛土は盛土裾の両端に土手を築き（５～９層）、その内側に盛土（１～４層）を充填していく工法で築かれている。A－A’を見ると、まず、条里35の盛土裾の15・16層を盛り上げ、条里36を



第272図　P12区条里35・36粗朶検出状況図

施した後に、条里35の中央部を充填している。このことから、条里36は条里35と一体で構築されていることが分かる。出土遺物は須恵器や土師器、木製祭祀具などが少量出土している。

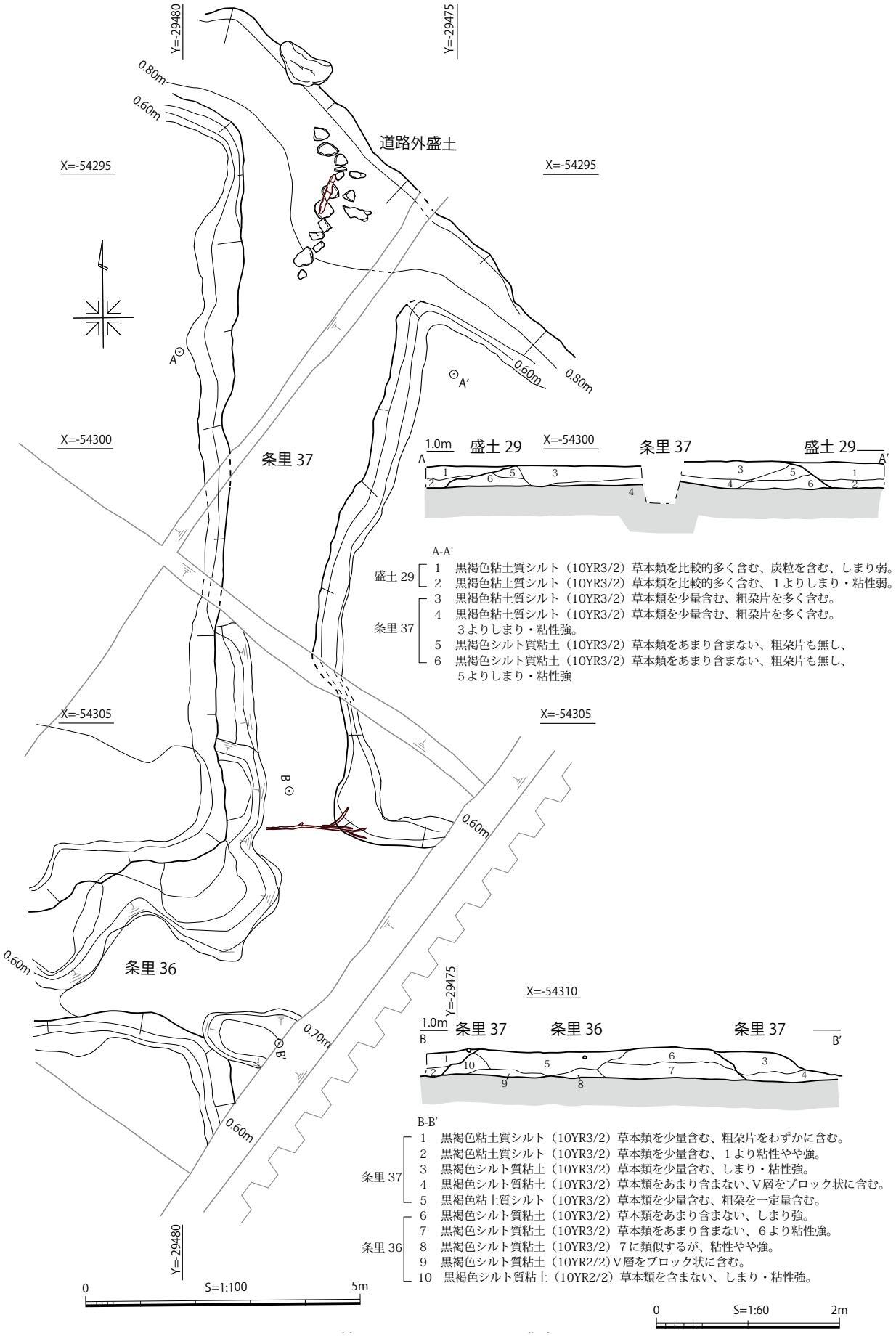
構築時期は出土遺物や条里35と一体で築かれていることから、10世紀後半と推定される。一町方格内を12歩(約21m)に分割する条里地割と考えられる。

条里37(第273図　PL.72－2・73－3・74－1・75)

調査区西側で検出された、南北方向に直線的に延びる盛土遺構である。方位はN－5°－Wである。北端は道路外盛土に斜交して接続し、南東壁付近では条里36と直交する。道路外盛土と条里36との間では盛土29・30とも交差している。盛土29・30に先行する。

規模は上面幅２～３m、基底部幅2.6～4.4mで、道路外盛土との交点付近ではやや幅広となる。盛土の高さは最大35cm程で、上面の標高は0.8m前後である。盛土は基本的に粗朶を含まない黒褐色粘土質シルトを主体とする。ただし、道路外盛土との交点付近のみ長さ４mにわたり、盛土芯に掌大から人頭大の角礫や粗朶が充填されている。礫は基本的に粗朶の上に敷かれており、道路外盛土内の礫と一体で構築されている。粗朶はいずれも短い小片で、敷設方向はばらばらである。樹種同定ではウツギ属が粗朶として利用されていることが判明している。盛土はA－A'でみると、盛土裾の両端に土手を築き(５・６層)、その内側に盛土(３・４層)を充填していく工法で築かれている。遺物は須恵器や土師器、木製祭祀具、木製品が少量出土している。

構築時期は出土遺物や道路外盛土と一体で築かれていることから、10世紀後半と推定される。粗朶片１点を放射性年代測定したところ２σ暦年代範囲で764－882calAD(73.1%)の値を示しており、考古学的な年代観とはやや齟齬が認められる。隣接する道路遺構の改修土に使用された古い粗朶を測定した可能性があろう。遺構は一町方格内を12歩(約21m)に分割する条里地割と考えられる。道路外盛



第273図　P12区条里36・37

土とも交点に充填された礫は条里地割を施工する際の基準線としての役割も果たしていたと考えられる。

4　盛土遺構

盛土29（第264・274図）

調査区北東側で検出された、南西から北東方向に延びる盛土遺構である。丘陵裾の地形に沿って盛土30に並行するように弧状に延びている。重複関係から道路外盛土や条里37に後出する。

規模は上面幅1.7～2.5m、基底部幅2.4～3.5m、盛土の高さは最大38㎝程である。盛土上面は平坦で、標高は0.8m前後である。盛土はA－A'では８層に細分され、基本的に粗朶を含まない黒褐色粘土質シルトを主体とする。盛土は盛土裾の両端にやや粘性の高い盛土（11・12層）で土手を築き、その内側に盛土（７～10層）を充填していく工法で築かれている。図示していないが、盛土底面には拳大から掌大程度の礫が散在して検出されており、意図的に敷かれた可能性が高い。遺物は少量ながら須恵器や土師器、木製祭祀具が出土している。

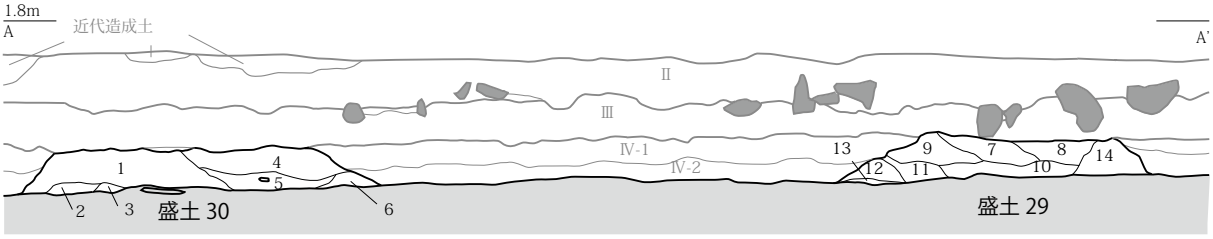
遺構の時期は道路外盛土や条里37に後出することから10世紀後半から11世紀にかけてと推定される。遺構の性格は不明である。

盛土30（第264・274図）

調査区中央付近で検出された、南西から北東方向に延びる盛土遺構である。丘陵裾の地形に沿って盛土29に並行するように弧状に延びている。重複関係から条里37に後出する。

規模は上面幅1.3～2.4m、基底部幅2.4～3.5m、盛土の高さは最大30㎝程である。盛土上面は平坦で、標高は0.8m前後である。盛土は基本的に粗朶を含まない黒褐色シルト質粘土を主体とする。盛土は盛土芯に土手を築き、上部や外側に盛り土を貼り付け拡充していく工法で築かれている。A－A'では１～３層が盛土芯にあたる。図示していないが、盛土底面には拳大から掌大程度の礫が散在して検出されており、意図的に敷かれた可能性が高い。遺物は少量ながら須恵器や土師器、木製祭祀具が出土している。

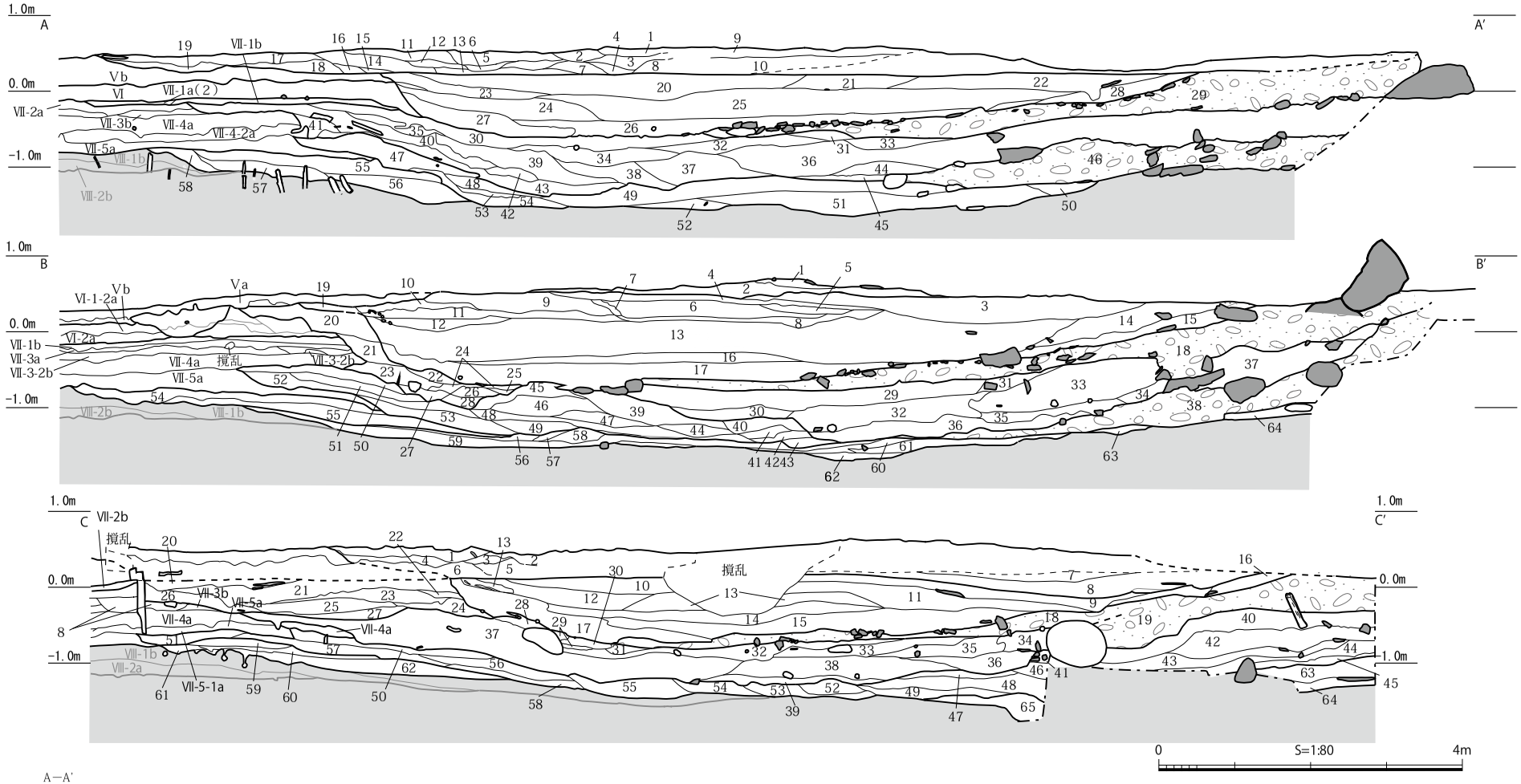
遺構の時期は条里37に後出することから10世紀後半から11世紀にかけてと推定される。遺構の性格は不明である。



1 黒褐色粘土質シルト（10YR3/2）しまり強
2 黒褐色シルト質粘土（10YR3/2）1よりしまり・粘性強。
3 黒褐色シルト質粘土（10YR3/2）2より粘性強。
4 黒褐色粘土質シルト（10YR3/2）1よりしまり弱。
5 黒褐色粘土質シルト（10YR3/2）4より粘性やや強。
6 黒褐色シルト質粘土（10YR3/2）しまり・粘性やや強。
7 黒褐色シルト（10YR3/2）
8 黒褐色シルト（10YR3/2）7より炭化物多い。
9 黒褐色シルト（10YR3/2）7、8よりも粘性やや強。
10 黒褐色シルト（10YR3/2）7～9よりもしまりやや強。
11 黒褐色粘土質シルト（10YR3/2）
12 黒褐色粘土質シルト（10YR3/2）11 よりしまり・粘性強。
13 黒褐色砂混じりシルト（10YR3/2）
14 黒褐色粘土質シルト（10YR3/2）13 に類似するが、粘性やや弱。

0　S=1:60　2m

第274図　P12区盛土29・30



A－A′

河道14
- 1 灰黄褐色シルト質砂（10YR4/2）極細粒砂主体、粗粒片多い、ラミナあり。
- 2 灰黄褐色シルト質砂（10YR4/2）極細粒砂主体、粗粒片を多く含む、粗粒砂のブロックを含む。
- 3 灰黄褐色シルト質砂（10YR4/2）中粒砂主体、粗粒片を多く含む、ラミナあり。
- 4 灰黄褐色シルト質砂（10YR4/2）中粒砂主体、粗粒砂少ない、粗粒片を多く含む。
- 5 褐色砂（10YR4/6）中粒砂主体、シルトのラミナあり。
- 6 褐色砂（10YR4/6）中粒砂主体、黒褐色砂混じりシルト混じり、粗粒を多量に含む。
- 7 にぶい黄褐色砂（10YR4/6）粗粒砂主体、下位に粗粒片密に含む。
- 8 にぶい黄褐色砂（10YR6/3）極粗粒砂主体、シルトブロックを含む。
- 9 黒褐色粘土質シルト（10YR3/2）
- 10 黒褐色粘土質シルト（10YR3/2）しまり・粘性強。

河道14
- 11 灰黄褐色シルト質砂（10YR4/2）粗粒片を多量に含む、肩部付近はシルト質。
- 12 灰黄褐色砂混じりシルト（10YR4/2）粗粒片を多量に含む、炭化した木材多い。
- 13 にぶい黄褐色砂（10YR6/4）極粗粒砂主体。
- 14 灰黄褐色砂混じりシルト（10YR4/2）粗粒片を多量に含む、シルト質。
- 15 褐色砂（10YR4/1）
- 16 灰褐色砂混じりシルト（10YR4/2）粗粒を少量含む、粘性やや強。
- 17 黒褐色砂混じりシルト（10YR3/1）粗粒片、炭化材を多量に含む。
- 18 黒褐色シルト（10YR3/2）僅かに細粒砂を含む、粘性強。
- 19 黒褐色シルト（10YR3/2）粘性強。
- 20 灰白色粗砂～細砂（7.5Y8/1 ～ 2.5Y8/2）未分解木質のラミナあり。

河道6
- 21 灰白色細砂～粗砂（10YR8/1・8/2）
- 22 灰白色粗砂～細砂（10YR8/1・8/2）1 ～ 3cm 大の礫、円礫を含む。
- 23 灰黄色細砂～粗砂（2.5Y7/2・7.5Y8/1）
- 24 灰白色細砂～粗砂（7.5Y8/1）
- 25 浅黄橙色粗砂～細砂（10YR8/2・8/4）ラミナ顕著。
- 26 灰白色細砂（7.5Y8/1）一部粗砂混じるが、粒の大きさがよく揃う。
- 27 黄灰色シルト質粘土（2.5Y5/1・6/1）極細砂を含み、ラミナあり。
- 28 黄灰色極細砂混じりシルト（2.5Y5/1）一部ラミナあり。0.5cm 以下の炭化物含む。
- 29 淡黄色粗砂混じり礫層（2.5Y2/3）1cm ～人頭大の礫を多く含む。
- 30 黄灰色－黒褐色シルト質粘土（2.5Y4/1 ～ 3/1）

第275図　P12区河道６・15・18・19・20土層断面図（１）

第276図　P12区河道６・15・18・19・20土層断面図（２）

５　自然河道

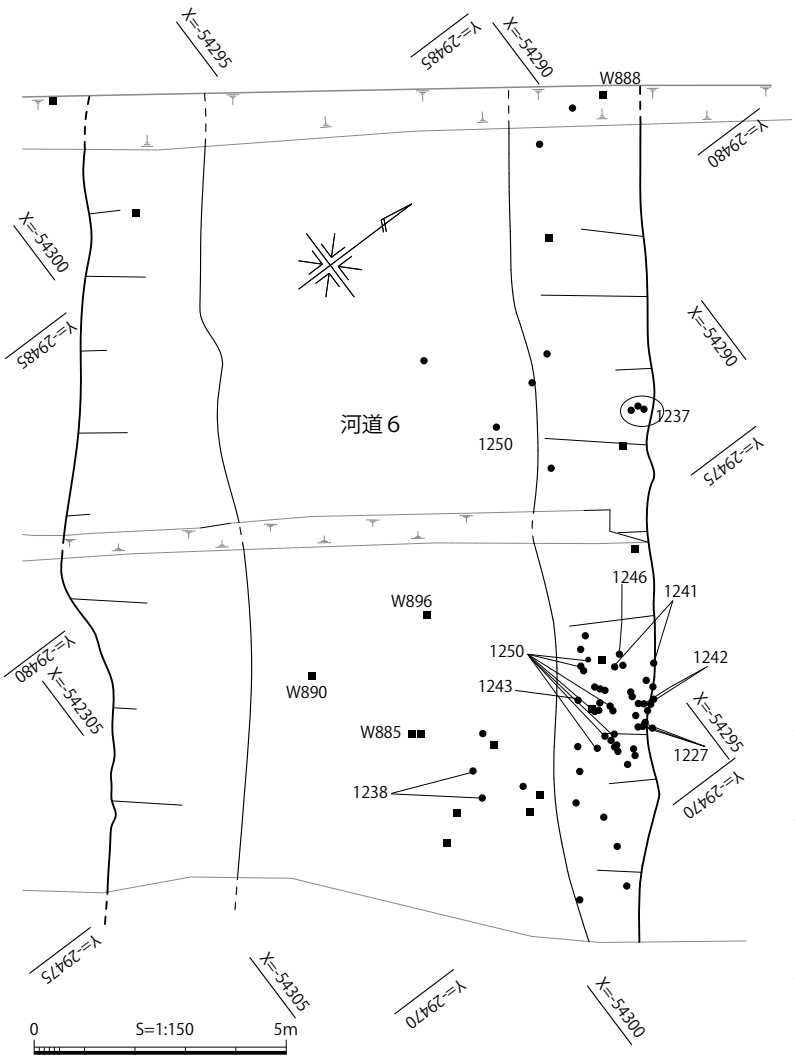
河道14（第275・276図）

調査区北東半を南東から北西へ流下する自然河道である。河道６と重複する位置に形成され、後身的な河道と考えられる。規模は幅15m以上、深さ40cm前後と浅い。壁面の立ち上がりは緩やかで、明確にしえない部分もある。埋土はシルトからシルト混じり砂が主体で、緩やかな流水と滞水を繰り返すような環境にあったことが窺える。

遺物は人形、馬形などの木製祭祀具が多量に出土している。出土状況を図化しえなかったが、流水方向に帯状に集中する箇所が複数確認され、本来の河道単位を示している可能性がある。形成時期は、土器が出土していないが、層位や木製祭祀具の年代観から７世紀後半から８世紀前半頃と考えられる。検出した溝幅は広いが、木製祭祀具の出土状況が示す通り、小規模な河道の集合体であったと考えられる。そのため、道路１の第１次盛土に後出する河道も含まれているものと推察される。

河道６（第266・275 ～ 277図　ＰＬ.77－３・78－１）

Ｐ６～ 16区にかけて確認された大規模な自然河道である。本調査区では北東半を、南東から北西に流下する。新旧があり、古段階と新段階に分けられる。



第277図　Ｐ12区河道６遺物出土状況図

古段階は幅が13m前後で、深さは最大1.5m程である。最深部付近における底面の標高は－0.8m前後である。埋土は山側の立ち上がり部分のみで確認され、粗粒砂混じり礫で、いわゆる礫層に近い。拳大から掌大の礫を主体とするが、人頭大から一抱え大程の礫も多く含み、河道が丘陵裾を攻撃することで角礫層が崩落し、流入したものと考えられる。

新段階は古段階とほぼ同じ位置に形成され、山側の肩部がやや狭くなっている。規模は幅11.5m、深さは最大1.0m程である。埋土は粗粒から極粗粒砂を主体としており、短期間のうちに埋没したことが窺われる。図化していないが、山側の肩部付近では杭が数カ所に点在し、周囲に護岸施設が存在していた可能性もあるが、新古どちらに帰属するかは不明である。

遺物は須恵器や土師器、木製品、獣骨などが出土している。とくに古段階の礫層内や上面では、完形に近

い須恵器や土師器が集中して出土している。上流から運ばれたとは考えにくく、山裾に何らかの施設が存在した、もしくは祭祀行為に伴い岸辺に投棄された等の可能性が考えられる。新段階の粗砂層中からは木製祭祀具が僅かに出土しているが、本来は河道14に帰属するものであろう。獣骨はウマなどがみられる。

形成時期は出土した須恵器から、古墳時代後期から終末にかけてと推定される。肩部に打設された杭の放射性炭素年代測定では２σ暦年代範囲で419－537calAD（95.4％）と齟齬のない値が示されている。

第３項　Ⅶ層上面の遺構（弥生時代中期後葉～古墳時代前期）

１　概要（第278図）

Ⅶ層上面が弥生時代中期後葉から古墳時代前期の遺構検出面である。標高は平野側で－0.1 ～－0.2ｍ前後となり、ほぼ平坦である。遺構は自然河道１基、流路１基、木造構造物２基を確認している。河道15は河道６の前身的な自然河道とみられ、杭列15・16はその水流を制御する施設と考えられる。平野側で畦畔は確認されていないが、耕作地であった可能性が高く、溝12はこうした耕作地における灌漑用の水路であると考えられる。出土遺物は河道15や溝12から木製品が一定量出土している。

２　自然河道

河道15（第275・276・278図）

調査区北東半を、南東から北西へ流下する自然河道である。河道６とほぼ同じ位置に形成された、前身的な河道と考えられる。規模は遺存状況が悪く不明瞭ながら、幅が10ｍ以上で、深さは１ｍ前後である。最深部における底面の標高は－1.5ｍ前後である。埋土はシルト質粘土や細粒砂が主体で、緩やかな流水環境にあったことが窺える。

杭列15・16は本河道に伴う可能性が高い。17杭列は底面に打設され、流水方向に対して斜交するのに対して、杭列16は壁面に打設され、直交する方向に打設されている。堰など水流を制御する構造物が設けられていたと考えられる。

遺物は弥生土器や土師器、木製品が少量出土している。詳細な時期を示す遺物はないが、層位から弥生時代中期後葉から古墳時代前期初頭と推定される。

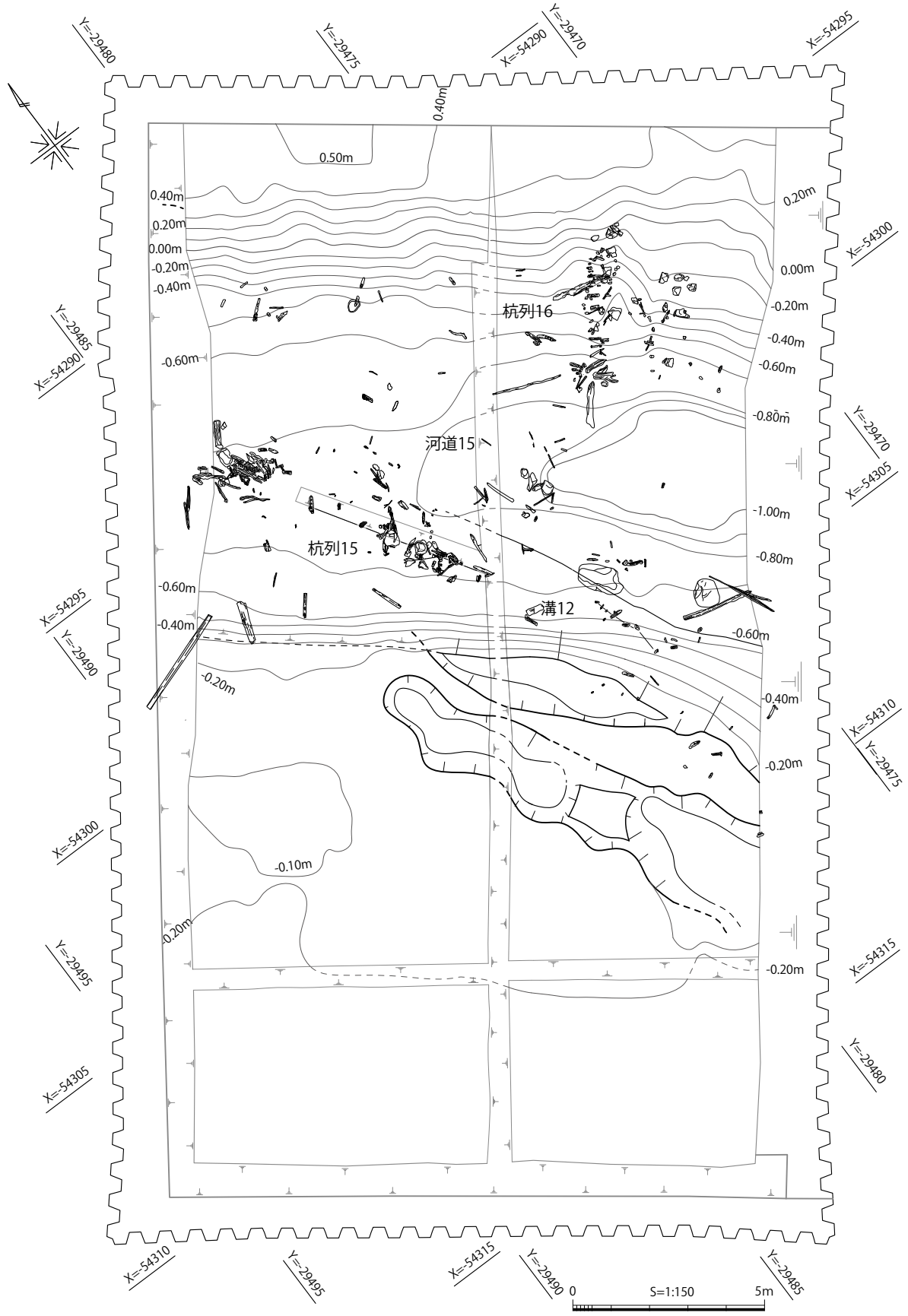
３　溝状遺構

溝12（第279図　ＰＬ.78－３）

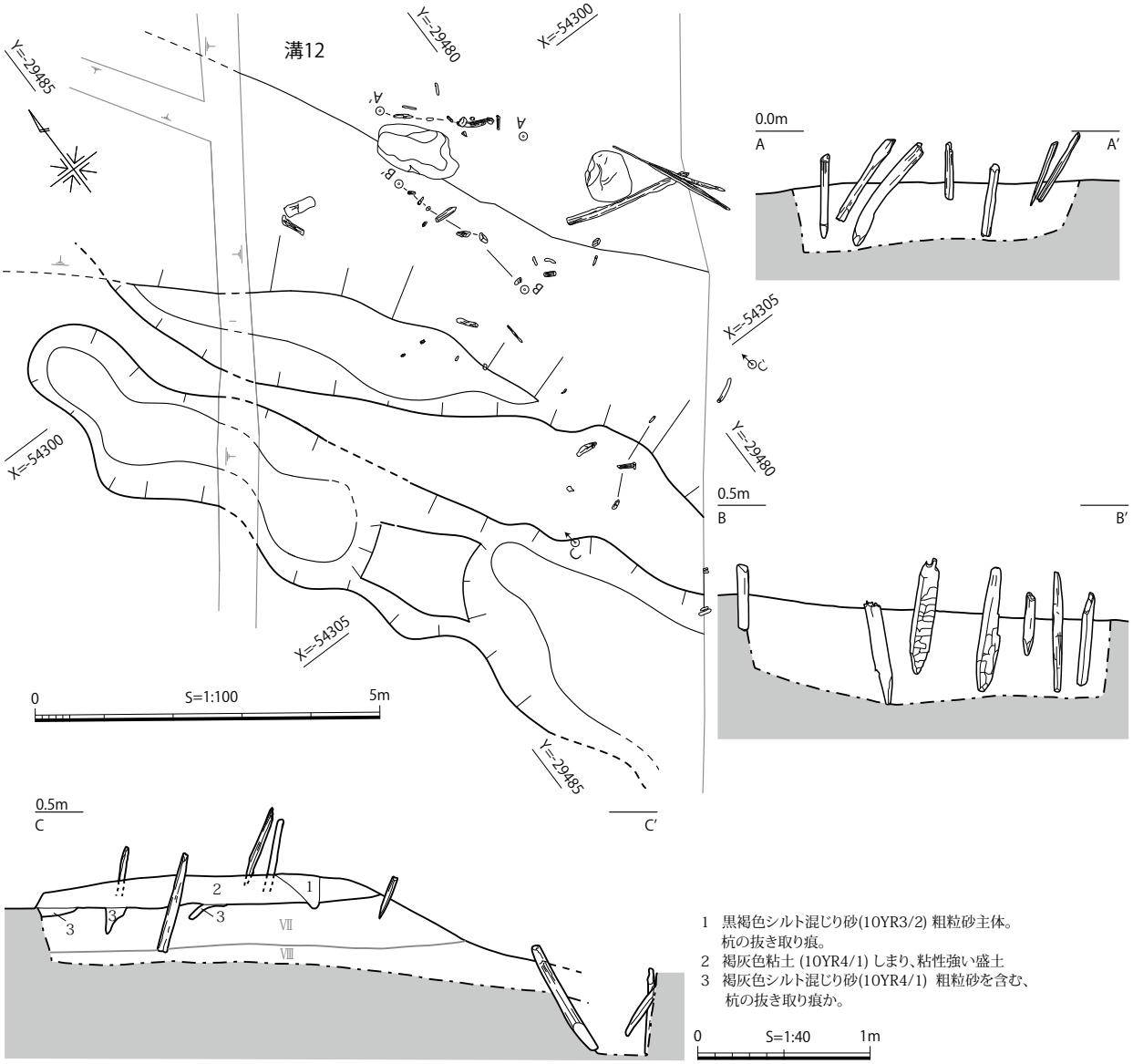
調査区中央付近に位置し、南から北へ流下する流路である。北端は河道15と接続する。

規模は西側の肩部のみしか確認できていないが、幅3.8ｍ以上、深さ1.2ｍである。底面の標高は南東端が－0.4ｍで、河道15との交点付近が－1.0ｍで、底面は北へ向かって比較的急に下っている。

西側の肩部には盛土が構築され、本流路の護岸施設と考えられる。盛土の規模は上面幅が1.5ｍ、基底部幅2.0ｍ前後であるが、一定しない。盛土の高さは最大30程である。壁面の立ち上がり付近では杭列が２基確認されている。いずれも流水方向と並行に打設され、流水を制御する役割を果たしていたと考えられる。杭は角材が用いられており、打設間隔は15 ～ 70㎝ほどとばらつきがある。その他に肩部の盛土上でも杭が複数検出されている。埋土は砂と粘土、もしくはシルト質粘土が互層状に



第278図　Ｐ12区Ⅶ層上面遺構分布図



第279図　P12区溝12

堆積しており、緩やかな流水と滞水を繰り返す環境であったことが窺える。

遺物は埋土上層から土師器や腰掛けなどの木製品などが出土している。時期は出土土器から古墳時代前期初頭と推定される。甕1264は河道６と溝12との重複部分で出土しており、河道６に帰属する可能性が高い。杭の放射性炭素年代測定では２σ暦年代範囲で231－156calAD(52.5％)という年代を示し、齟齬がみられる。

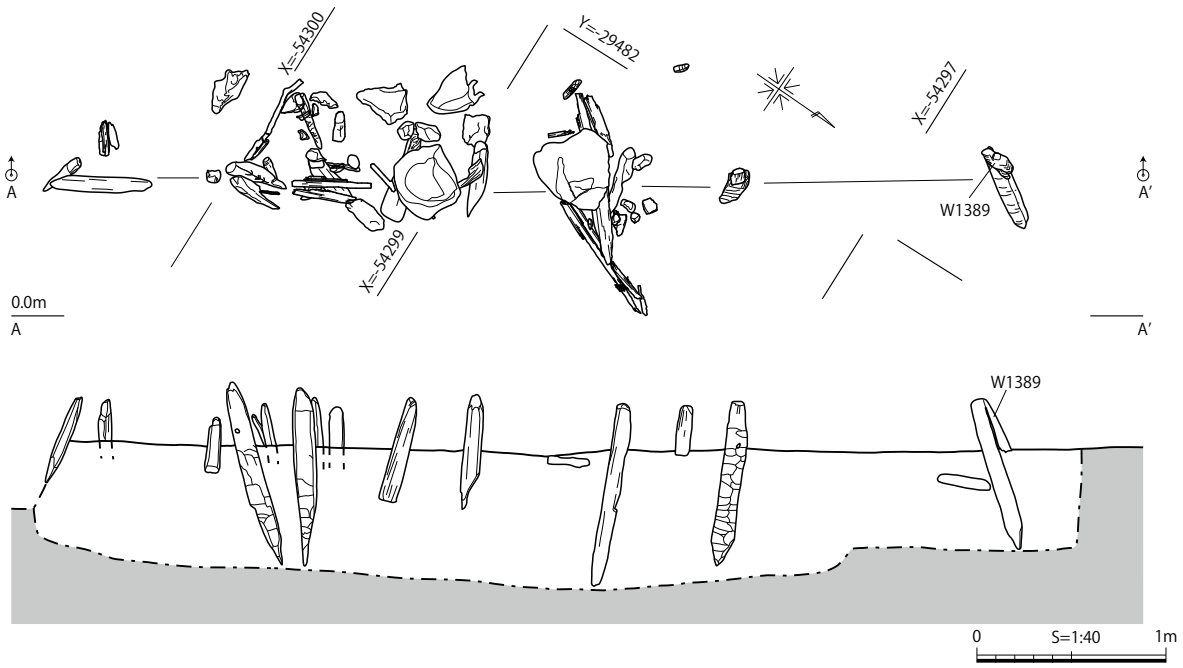
水田等に伴い、人工的に開削された水路と考えられ、河道15への排水路であった可能性がある。

３　杭列

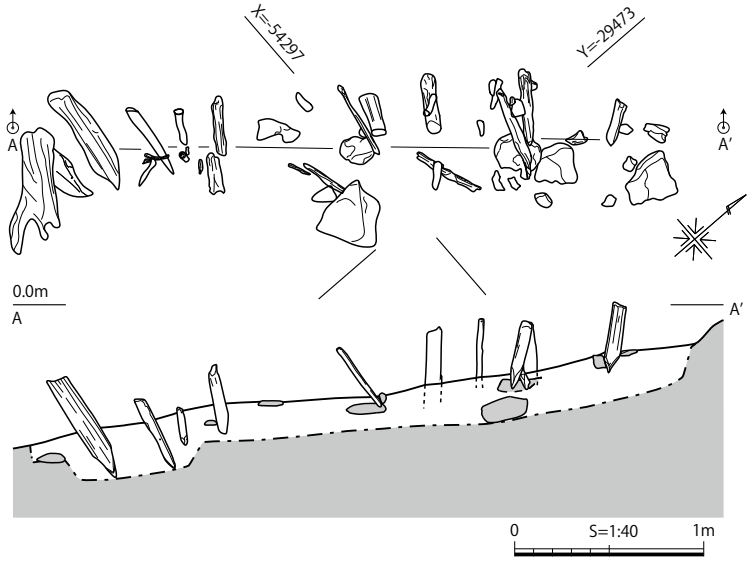
杭列15(第280図　ＰＬ.78－２)

河道15の底面で検出された杭列である。杭は14本からなり、南東から北西方向に１列ないしは２列で打設されている。打設間隔は0.3 ～ 1.3mとばらつきがある。杭はいずれも角材で、枘穴がみられるなど建築部材等の転用材が用いられている。周囲で人頭大程度の礫が検出されているが、杭列との関係は不明である。

時期は河道15に伴うことから弥生時代中期後葉から古墳時代前期初頭と考えられる。杭１点の放射



第280図　Ｐ12区杭列15



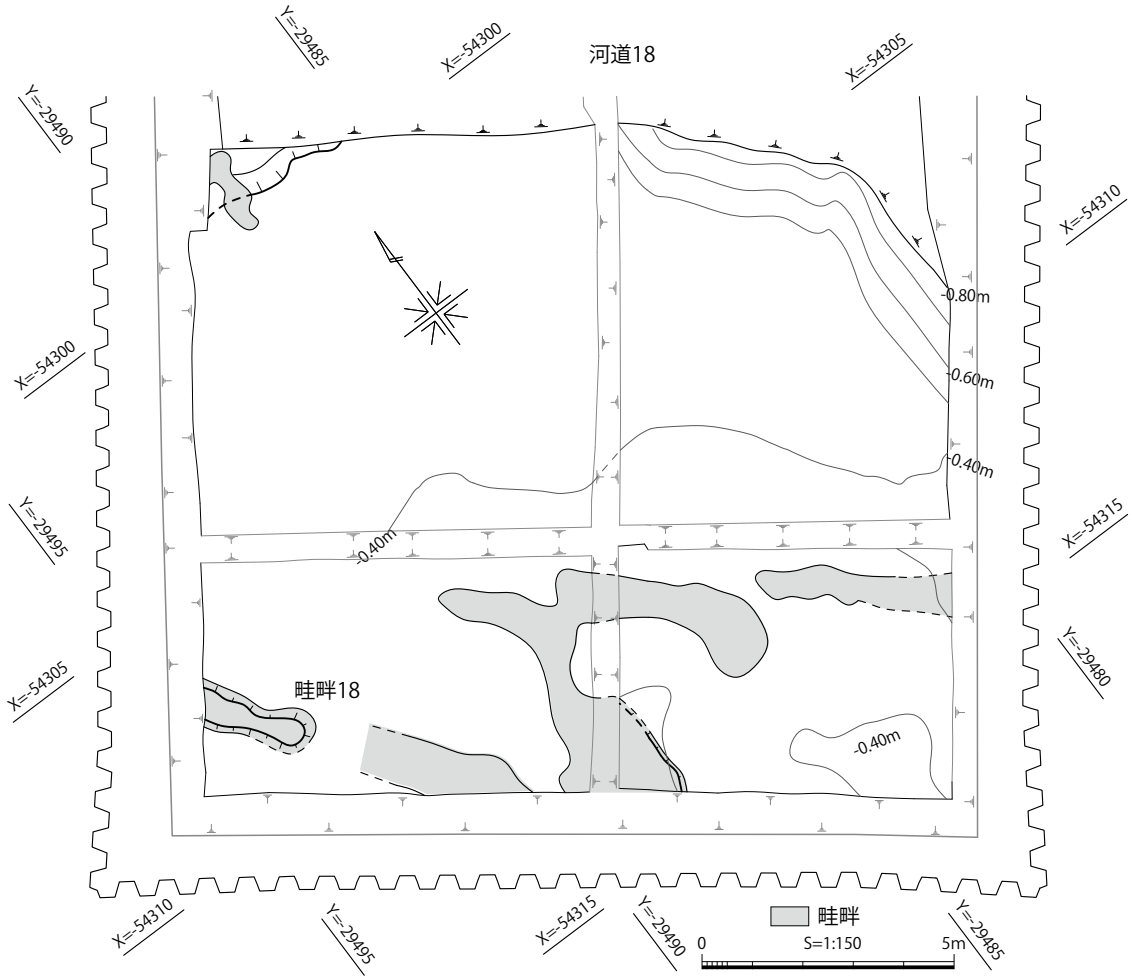
第281図　Ｐ12区杭列16

性炭素年代測定では２σ暦年代範囲で166－42calAD（95.4％）という値を示している。河道15の流水を制御する構造物と考えられる。

杭列16（第281図）

河道15の山側壁面で検出された杭列である。杭は10本からなり、１列ないしは２列に打設されている。打設間隔は20 ～ 80cmとばらつきがある。杭はいずれも角材で、周囲で人頭大程度の礫も検出されているが、杭列との関係は明らかではない。

時期は河道15に伴うことから弥生時代中期後葉から古墳時代前期初頭と考えられる。河道15の流水を制御する構造物と考えられる。



第282図　P12区Ⅶ－４・５層上面遺構分布図

第４項　Ⅶ－４・５層上面の遺構（弥生時代中期）

１　概要（第282図）

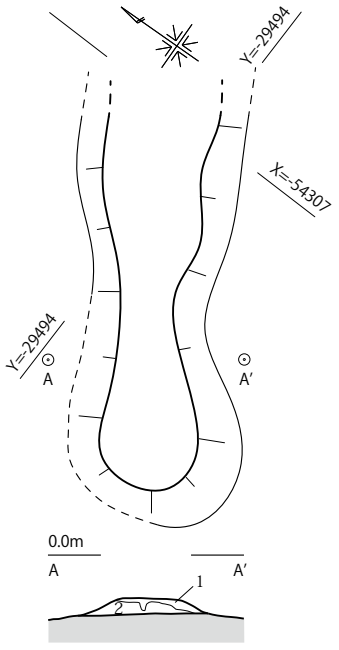
Ⅶ－４層、またはⅦ－５層上面が弥生時代中期の遺構検出面である。標高は平野側で－0.4m前後となり、ほぼ平坦である。遺構は自然河道１基、畦畔を確認している。河道18は河道15の前身的な自然河道とみられる。平野側は基本的に湿地であるが、畦畔18が検出されており、水田など耕作地としての土地利用が窺える。出土遺物は木製品が出土しているが、ごく少ない。

３　自然河道

河道18（第275・276・282図）

調査区北東半を南東から北西へ流下する自然河道である。遺構検出面はⅦ－5層上面で、断面図でのみ図示している。河道15と重複し、前身的な河道と考えられる。規模は、幅10m以上で、深さ80cm程度である。最深部における底面の標高は－1.6m前後である。護岸施設等は付随していない。

埋土は砂とシルト質粘土などが互層状に堆積しており、堆積構



第283図　P12区畦畔18

造から上層の河道15に比べ一定量の流水環境にあったことが窺える。

遺物は弥生土器、木製品が少量出土している。出土した弥生土器や層位から弥生時代中期中葉から後葉と考えられる。

２　畦畔

畦畔18（第283図）

Ⅶ－4層上面に構築された畦畔である。遺存状況は悪く、凸状の盛土として検出した部分は北西壁沿いのみである。規模は上面幅50㎝、基部幅90㎝で、盛土の高さは最大でも20㎝程度である。上面の標高は－0.5m前後である。盛土は基盤となるⅦ層を基本とするが、上層はしまりが強い。

出土遺物は無い。本遺構の詳細な時期は不明ながら、層位から弥生時代中期の範疇に収まると考えられる。畦畔による耕地の規模や形状は明らかにしえない。

第５項　Ⅷ層上面の遺構（弥生時代前期末～中期初頭）

１　概要（第284図）

Ⅷ層上面が弥生時代前期末から中期初頭の遺構検出面である。標高は平野側で－0.8m前後となり、ほぼ平坦である。遺構は自然河道２基、木造構造物１基、耕地段差を確認している。河道19・20は河道18の前身的な自然河道とみられ、木造構造物10はその護岸施設とみなしうる。平野側では耕地段差が検出され、河道20からは田下駄が出土しており、水田など耕作地としての土地利用が窺える。出土遺物は木製品など僅かである。

２　自然河道

河道19（第275・276図）

調査区北東半を南東から北西へ流下する自然河道である。河道20の下層にあたり同一河道である可能性もある。河道18の下層にあたることから、その前身的な河道と考えられる。規模は堆積層が僅かしか確認できないため不明ながら、幅10m以上、深さは最大70㎝ほどである。最深部における底面の標高は－1.6m前後を測る。埋土は砂礫を主体としており、一定量の流水環境にあったことが窺える。

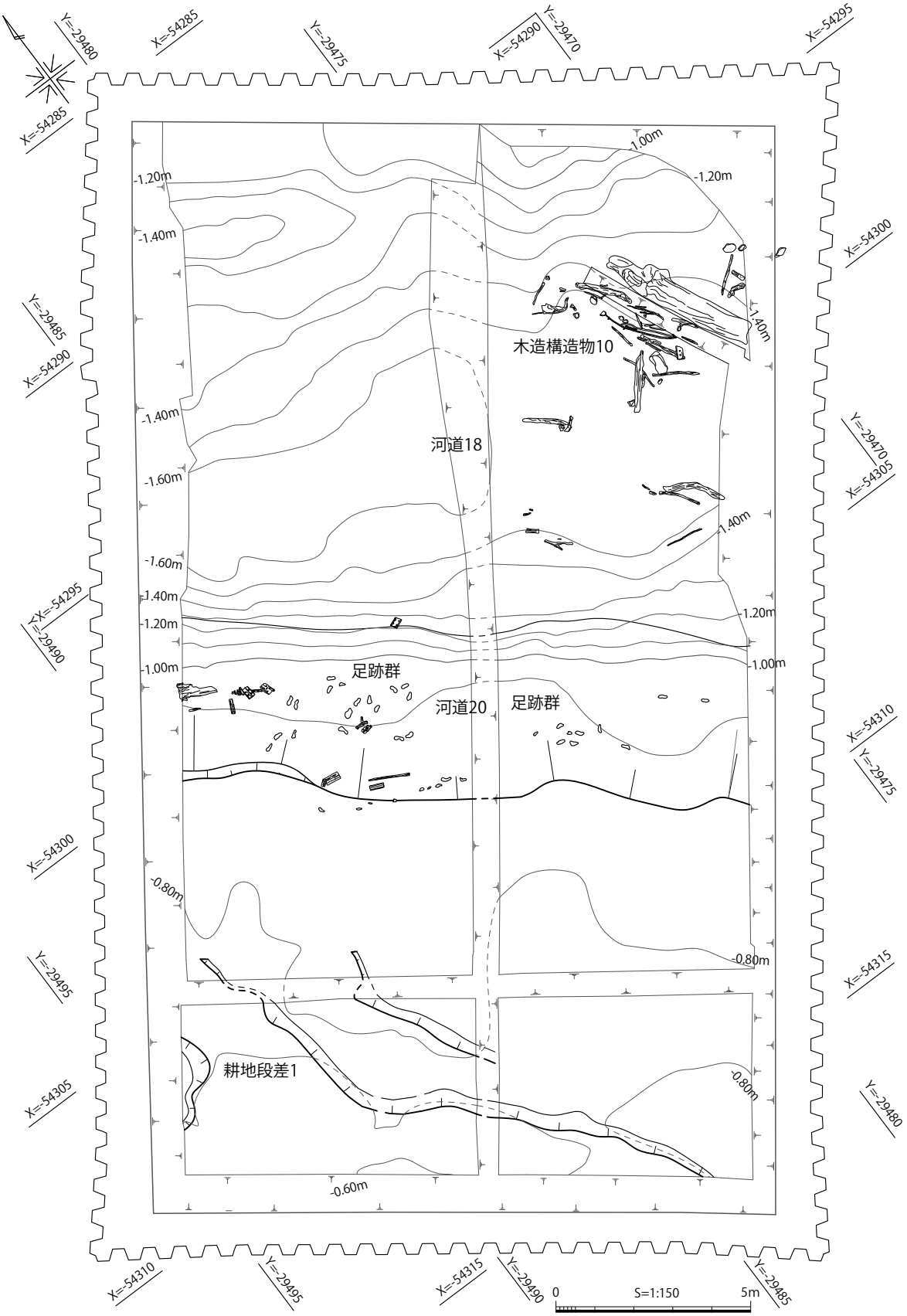
遺物は木製品が少量出土している。詳細な時期は明確にしえないが、層位から弥生時代前期末から中期初頭と考えられる。

河道20（第275・276・284図）

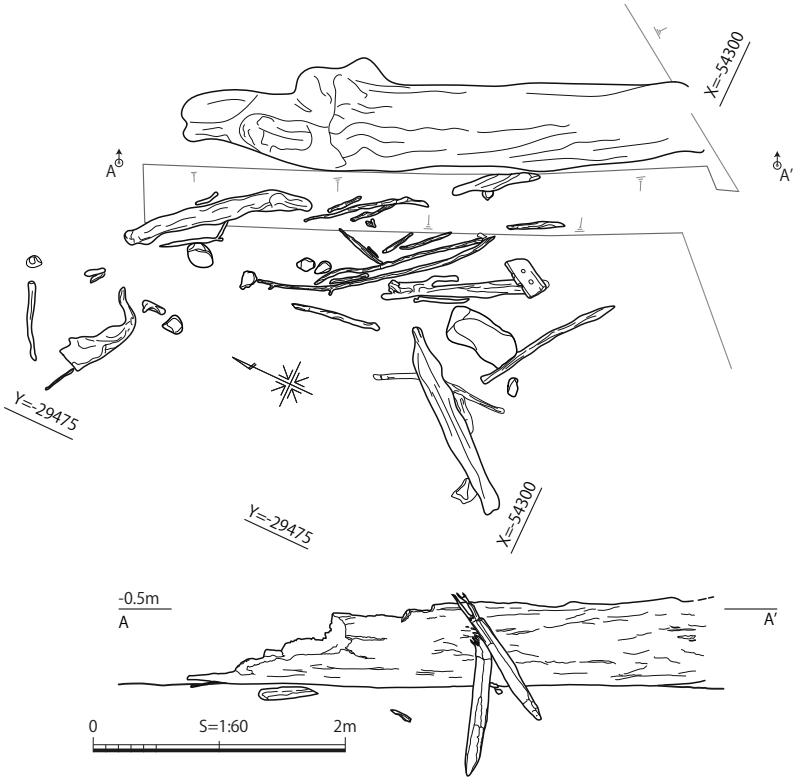
調査区北東半を南東から北西へ流下する自然河道である。河道 18 とほぼ同じ位置に重複するが、やや南西にずれている。遺構検出面はⅧ－１b 層上面である。規模は北東半が河道 18 によって切られているため明確ではないが、幅５m以上、深さは最大 50㎝ほどである。最深部における底面の標高は－ 1.4 m前後を測る。埋土はシルト質粘土や砂、植物の未分解層が互層状に堆積し、緩やかな流水と滞水を繰り返す環境下にあったと考えられる。

南西壁の立ち上がり部分では底面に足跡が複数検出されている。平野側に水田などの耕地が形成されていたことから、河道と耕地を頻繁に行き来していたようすが垣間見える。遺物は縄文土器の他に足跡が密集する区域付近から田下駄がまとまって出土している。

詳細な時期を示す土器はないが、層位等から時期は弥生時代前期末から中期初頭と推定される。



第284図　P12区Ⅷ層上面遺構分布図



第285図　Ｐ12区木造構造物10

３　木造構造物

木造構造物10（第285図）

河道20の底面で確認された木造構造物である。大木の丸太材を置き、杭で固定している。丸太は径58㎝ほどで、長さは４ｍ以上あり、調査区外へと続いている。杭は２本のみ確認され、いずれも角材が用いられている。

河道20の護岸施設と考えられ、時期は弥生時代前期末から中期初頭と推定される。杭１点の放射性炭素年代測定では２σ暦年代範囲で211－147calAD（59.2％）という値を示し、概ね齟齬はない。

４　耕地段差

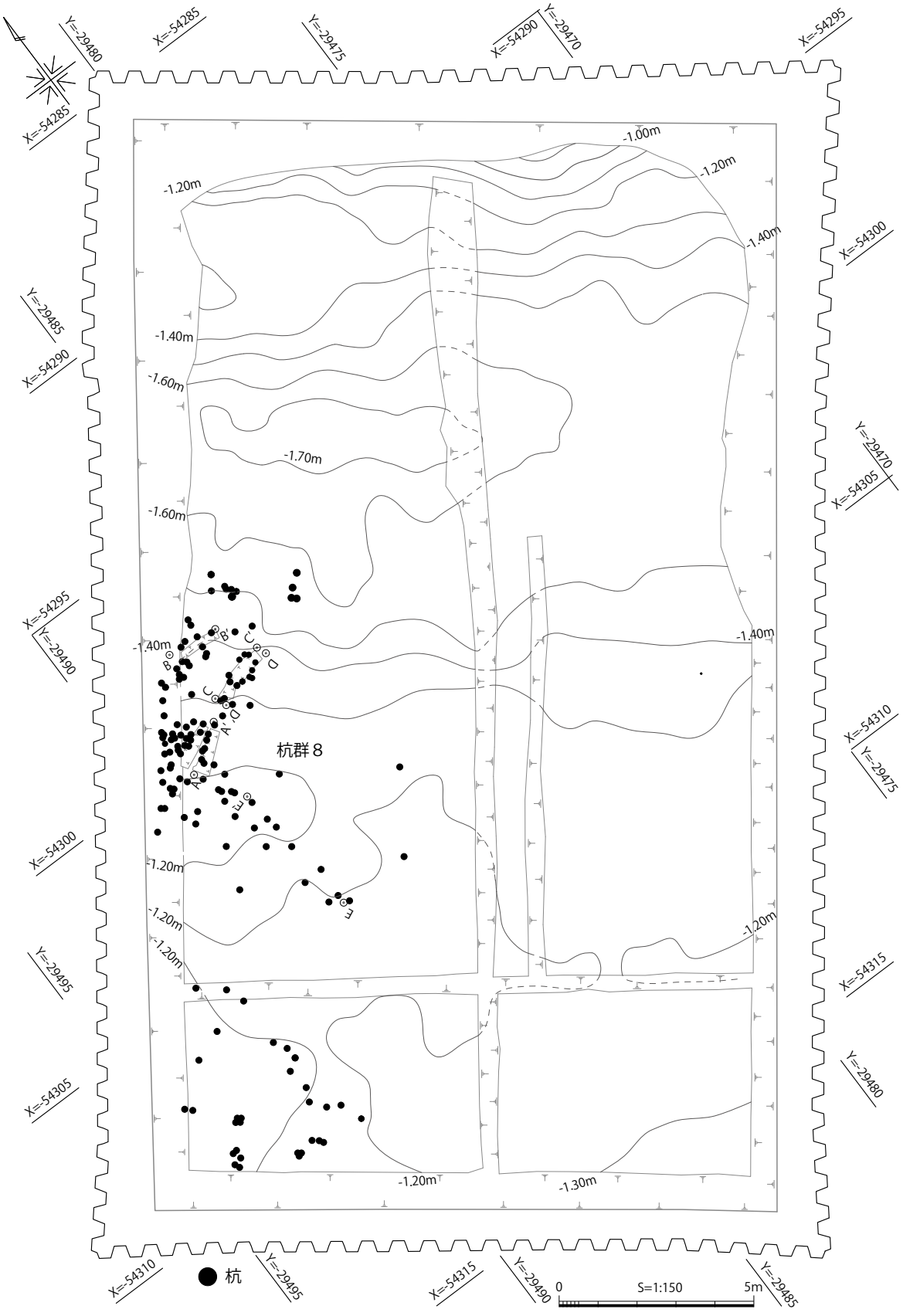
耕地段差１（第284図）

調査区南西で検出された耕作に伴う段差である。段差は２段みられ、西から東へ、つまり自然河道である河道20に向かって下っている。検出範囲が限られていることもあり、範囲や規模を明確にすることはできない。出土遺物は無い。詳細な時期は不明ながら、層位から弥生時代前期末から中期初頭と考えられる。

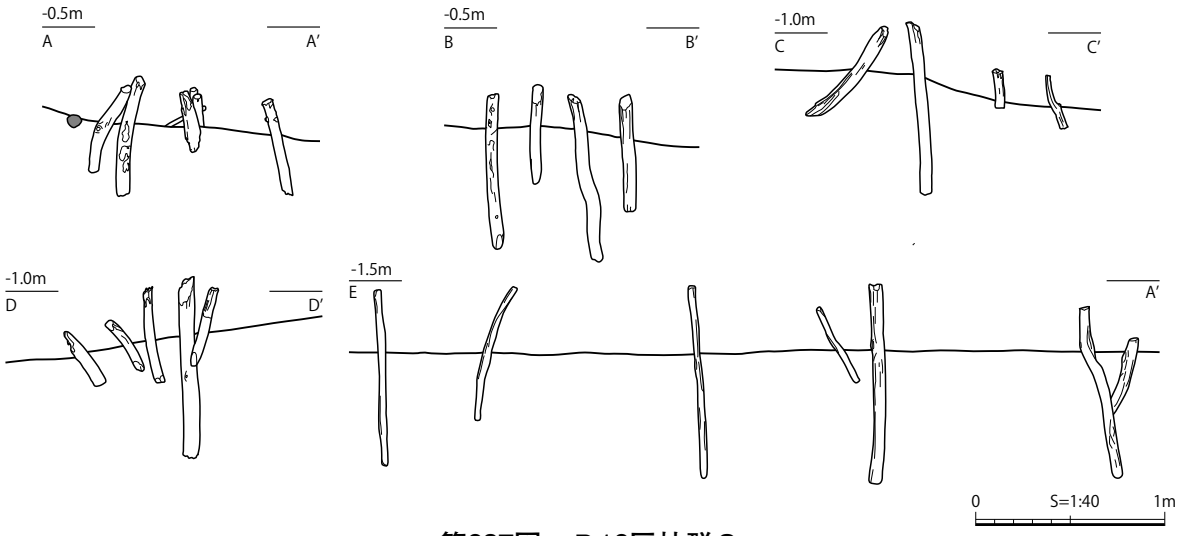
第６項　Ⅸ層上面の遺構（縄文時代晩期）

１　概要（第286図）

Ⅸ層上面が縄文時代晩期の遺構検出面である。標高は平野側で－1.2m前後となり、地形はほぼ平坦であるが、僅かに山際が高い。遺構は他の調査区と同様に杭列のみが確認されている。



第286図　P12区Ⅸ層上面遺構分布図



第287図　Ｐ12区杭群８

２　杭群

杭群８（第286・287図　ＰＬ.79－２）

調査区北西壁沿いを中心に確認された杭列である。調査区南東半では全くみられない。杭は100本近くを数え、とくに北西壁沿いの中央付近で密に打設されている。南北や東西に列状をなす部分もあるが、列をなさず群集する部分も見受けられる。同一位置に重複するように打設されているものもあり、打設は複数時期にわたる可能性が高い。杭は径４～５㎝ほどの丸太材で、先端は尖らせているものと平坦のものの両方がある。樹種はスギ、ツバキ、スダジイなどがあり、多様な材が利用されたことが窺える。

時期は層位から縄文時代晩期と推定される。杭２点の放射性炭素年代測定では２σ暦年代範囲で768－538calAD(95.4%)、920－831 calAD(95.4%)という値を示しており、矛盾はない。

第 18 節　１区・P13 区の調査

第１項　調査区の概要

１　地形と土層堆積（第288・289図）

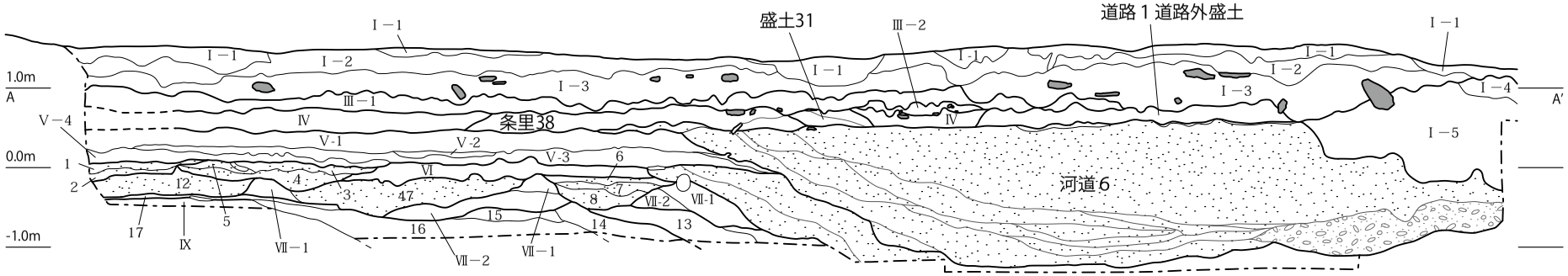
P13区は平成25年度調査の１区と調査地が一部重複している。したがって本節では、１区と合わせて調査成果を記述する。Ｐ13区の調査年度は平成26年度で、調査面積は596.7㎡である。

P13区の丘陵斜面は巨礫が露頭し、斜面も急峻となることから安全を考慮して一部分掘削を行うに留めた。１区は道路工事に伴う事前計画の変更により、Ⅳ層中にて掘削を終了し記録作業を行った。

調査前の本調査区周辺は日置川に向かってごく緩く傾斜しており、低湿な状況であった。P13区は山側を除く三方向のみ鋼矢板を打設した。掘削は標高－0.6m付近まで行い、それ以下はトレンチ調査により下層の状況確認を行った。

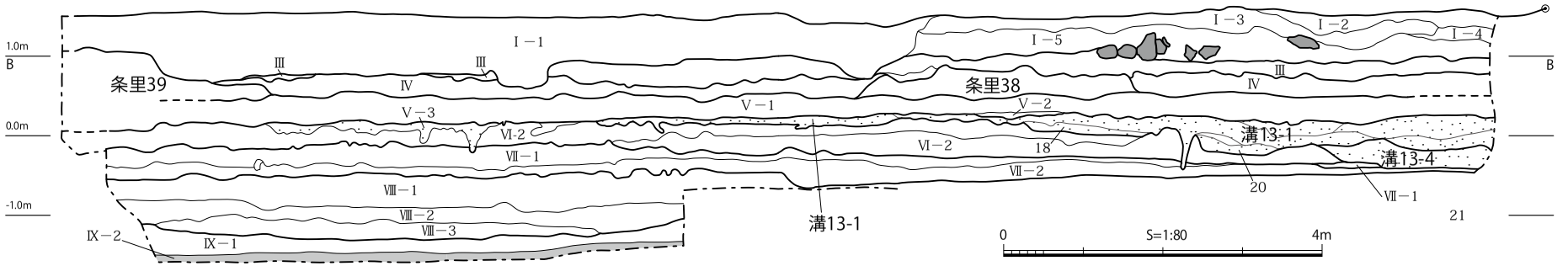
Ⅰ～Ⅱ層は近代までの造成土や耕作土である。

Ⅲ層は細砂から極細砂で植物遺体の未分解物を多く含む。本層は山斜面との傾斜変換付近まで堆積していた。層の厚さは約20cm程度で山側に向かうにつれて層厚は薄くなる。P13区では上層の撹拌を受けており、拳大から人頭大の礫も混入していた。調査区の北東からはほぼ完形の鉄鍋が伏せた状況



Ⅰ－1　黄橙色(10YR7/8)粗砂
Ⅰ－2　黒褐色(7.5YR3/2)粗砂混細砂 径5～10cm大の角礫含む
Ⅰ－3　暗褐色(10YR3/3)粗砂混細砂 径30～50cm大の角礫含む
Ⅰ－4　灰色(5Y4/1)細砂混粗砂～中粒砂
Ⅰ－5　明黄褐色(2.5Y7/6)中粒砂 径30～50cm大の角礫含む
Ⅲ－1　黒褐色(7.5YR3/2)礫混細砂～極細砂
Ⅲ－2　黒褐色(7.5YR3/2)極細砂 植物未分解を多く含む
Ⅳ　黄灰色(2.5Y4/1)シルト～極細砂 木質・木製品含む しまりなし、粘性強い
Ⅴ－1　灰オリーブ色(5Y5/2)シルト混細砂～中粒砂 木質・木製品含む しまりあり、粘性あり
Ⅴ－2　緑灰色(10GY5/1)粗砂～中粒砂
Ⅴ－3　灰黄褐色(10YR5/2)中粒砂混細砂 2.5Y5/6中粒砂ブロック含む ややしまる、粘性なし
Ⅴ－4　灰黄褐色(10YR5/2)中粒砂混細砂 10GY5/1細砂ブロック含む
Ⅵ　灰黄褐色(10YR5/2)中粒砂混細砂～極細砂 径5mm～1cm程度の炭化物含む しまりあり、粘性あり
Ⅶ－1　黒褐色(2.5Y3/1)中粒砂混細砂～極細砂 植物未分解物多く含む ややしまる、粘性あり
Ⅶ－2　黒褐色(2.5Y3/2)細砂～極細砂　ややしまる、粘性あり
Ⅸ　黄灰色(2.5Y6/1)粗砂～中粒砂　しまりあり、粘性なし

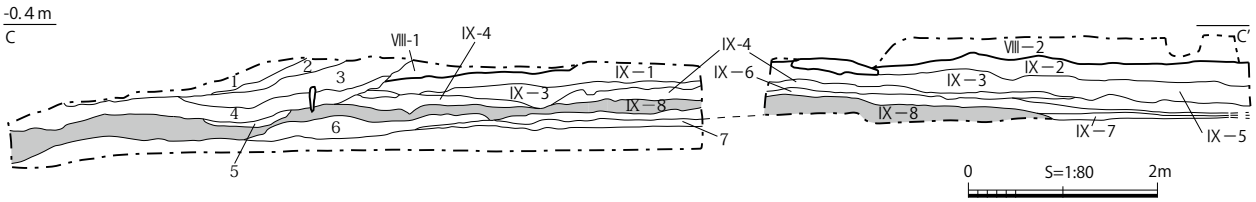
溝13-1
1　緑灰色(10GY5/1)中粒砂混細砂～極細砂 10YR5/2細砂をブロック状に含む ややしまる、粘性なし
2　暗オリーブ灰色(2.5GY4/1)中粒砂～細砂 僅かに木質含む ややしまる、粘性なし
溝13-2
3　黄色(5Y8/8)中粒砂混粗砂(部分的に5Y5/1細砂と互層状になるラミナ)しまりあり、粘性なし
4　褐灰色(10YR5/1)中粒砂～細砂 2.5Y8/1細砂ブロックを含む ややしまる、粘性なし
5　暗灰黄色(2.5Y5/2)中粒砂混細砂 2.5Y3/1のラミナあり しまりあり、粘性弱い
自然流路
6　黒褐色(10YR3/1)細砂混シルト～極細砂 10YR6/1シルトブロック含む しまりあり、粘性あり
7　灰黄色(2.5Y7/2)中粒砂混細砂(一部に2.5Y4/1ラミナあり)
8　褐灰色(10YR4/1)シルト　ややしまる、粘性あり
溝13-3
9　黒褐色(2.5Y3/2)細砂混極細粒砂
(2.5Y6/4シルトをブロック状に含み、径1cm程度の炭化部含む)しまりあり、粘性あり
10　褐灰色(10YR5/1)粗砂混中粒砂～細砂　ややしまる、粘性なし
11　黄灰色(2.5Y4/1)極細砂混細砂～中粒砂 木製品多く含む
溝13-4
12　褐灰色(10YR4/1)中粒砂混細砂　ややしまる、粘性弱い
自然流路
13　灰黄褐色(10YR5/2)細砂～中粒砂 10YR6/2のラミナ含む しまりあり、粘性なし
14　灰黄褐色(10YR5/2)極細砂～シルト　ややしまる、粘性あり
15　黒褐色(2.5Y3/1)細砂混粗砂～中粒砂 しまりあり、粘性なし
16　黄灰色(2.5Y4/1)中粒砂混細砂～極細砂　しまりなし、粘性あり



Ⅰ－1　オリーブ色(5Y5/4)粗砂～細礫 しまりなし、粘性なし
Ⅰ－2　黄橙色(10YR7/8)粗砂
Ⅰ－3　褐灰色(7.5YR4/1)細砂(マンガン沈着あり)ややしまる、粘性なし
Ⅰ－4　灰オリーブ黒色(5Y5/2)粗砂～中粒砂
Ⅰ－5　褐灰色(10YR5/1)粗砂混細砂 径15cm～50cm程度の角礫含む しまりあり、粘性ややあり
Ⅲ　黒褐色(7.5YR3/2)極細砂　植物未分解物多量に含む
Ⅳ　黄灰色(2.5Y4/1)シルト～極細砂　木質・木製品多く含む　しまりなし、粘性強い
Ⅴ－1　灰オリーブ色(5Y5/2)シルト混細砂～中粒砂(木質・木製品含む)しまりあり、粘性あり
Ⅴ－2　灰色(5Y5/1)細砂～中粒砂　しまりなし、粘性なし
Ⅴ－3　灰黄色(2.5Y6/2)極細砂～シルト しまりなし、粘性弱い

Ⅵ－1　灰黄褐色(10YR5/2)中粒砂混細砂～極細砂(径5mm～1cm程度の炭化物含む)しまりあり、粘性なし
Ⅵ－2　暗灰黄色(2.5Y5/2)極細砂～シルト　中粒砂僅かに含む(5Y3/1細砂～極細砂ブロック、炭化物含む)ややしまる、粘性あり
Ⅶ－1　黒褐色(2.5Y3/1)中粒砂混細砂～極細砂 植物未分解物多量に含む ややしまる、粘性あり
Ⅶ－2　黒褐色(2.5Y3/1)細砂混粗砂～中粒砂　しまりあり、粘性なし
Ⅷ－1　黄灰色(2.5Y6/1)粗砂～中粒砂　　しまりあり、粘性あり
Ⅷ－2　黒褐色(2.5Y3/1)細砂～中粒砂 2.5Y4/1粗砂ブロック含む 植物未分解物多量に含む ややしまる、粘性なし
Ⅷ－3　灰色(5Y6/1)粗砂～中粒砂　ややしまる、粘性あり
Ⅸ－1　褐灰色(10YR4/1)粗砂混細砂～中粒砂　ややしまる、粘性あり
Ⅸ－2　オリーブ黒色(5Y3/1)細砂～シルト　ややしまる、粘性あり)

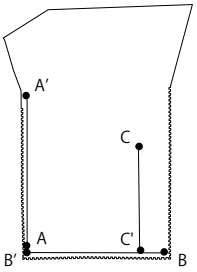
第288図　1区・Ｐ13区土層断面図(１)



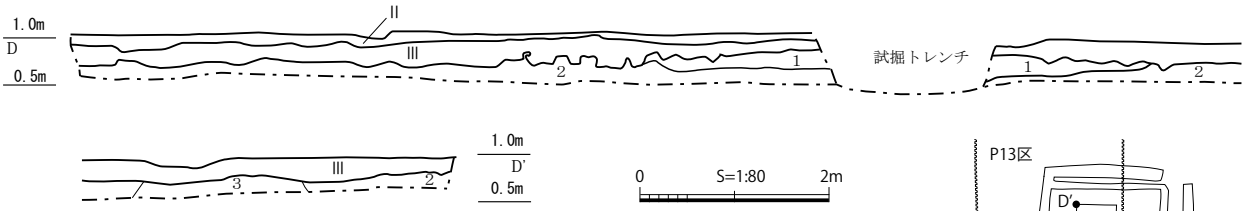
自然流路
1　褐灰色(7.5YR4/1)粗砂混細砂～中粒砂　ややしまる
2　黒褐色(7.5YR3/1)粗砂混中粒砂　ややしまる
3　灰色(10YR4/1)粗砂混細砂～中粒砂　褐灰色(10Ｙ Ｒ5/1)中粒砂葉理含む
4　褐灰色(7.5YR5/1)粗砂～中粒砂
5　黒褐色(10YR3/2)シルト～極細砂　わずかに粗砂混じる

自然堆積層
6　オリーブ黒色(5Y3/1)シルト～極細砂
7　灰白色(10YR8/1)シルト～極細砂　粘性あり　ややしまる

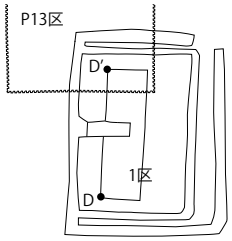
Ⅷ－1　黒褐色(10YR3/1)中粒砂混シルト～極細砂
Ⅷ－2　灰色(5Y5/1)細砂混粗砂～中粒砂　ややしまる　分粒がやや悪い　ややしまる
IX－1　褐灰色(10YR4/1)細砂混シルト～極細砂(一部)　灰白色(7.5Ｙ8/1)葉理を含む　粘性あり　しまり弱い
IX－2　褐灰色(10YR4/1)粗砂混細砂～中粒砂(含まれる粗砂はブロック状にある)
IX－3　黒褐色(10YR3/1)粗砂混シルト～細粒砂
IX－4　灰白色(10YR8/1)シルト～極細砂　粘性強く　ややしまる
IX－5　黒褐色(2.5Y3/1)粗砂混シルト～極細砂
IX－6　灰白色(10YR8/1)シルト～極細砂　粘性あり　ややしまる
IX－7　黒褐色(2.5Y3/1)細砂混シルト～極細砂
IX－8　黒褐色(10YR3/1)細砂混シルト～極細砂　貝は小破片から完形のものあり　粘性あり　しまり弱い



P13区模式図



Ⅱ　10YR5/2～6/2 灰褐色シルト～粘土(１cm以下の白・橙色礫含む。１cm以下の炭化物含む。木質もまばらに含む)
Ⅲ　2.5Y7/2 灰黄色粘土と10YR4/1 褐灰色シルト(泥炭)の混土。(１～５cm大の粘土ブロック含む)
条里38　1　10YR6/2 灰黄褐色～10YR7/2 にぶい黄橙色粘土～シルト。４層より粘性低い。ウツギ、植物質含む。
Ⅳ層　2　10YR7/1 灰白色粘土～シルト。１cm以下の炭化物、植物質まばらに含む。粘性強い。
条里40　3　10YR7/2 にぶい黄橙色粘土～シルト。径１cm以下のウツギ、植物質多く含む。全体的に攪拌を受ける



1区模式図

第289図　1区・Ｐ13区土層断面図(２)

で出土した。遺構の可能性を考慮し確認したが、明確な堀方は検出できなかった。

写真３　Ｐ13区噴砂痕跡

Ⅳ層は40cm程度確認でき、木製品や木製祭祀具が出土した。古代の遺物包含層である。本層の調査区山側では脱水構造が認められるほか、下層の大溝埋土を起源とした液状化が確認できる。１区ではⅣ層上面にて盛土を検出しているが、盛土の基底部分まで確認しておらず本層に帰属するかは不明である。遺物はⅣ層からは土器の小破片が少量出土した。木製品は木簡がP13区南東隅から１点(70号木簡)、さらにⅣ層下面で１点(71号木簡)が出土している。

Ⅴ層はⅣ層下に確認した盛土の基盤となる層である。層厚は約60cm程度である。３層に細分できる。木製品が多量に出土したが、土器等の堆積時期を示す資料は得られていない。Ⅵ層までの間に７溝の溢流により堆積したと推定している粗砂から中粒砂が部分的に確認できた。

Ⅵ層は約40cm程度の堆積を確認した。灰黄色を呈し、中粒砂を部分的に含んでいた。本層では大溝から支流を分けるように溝13が開削されている。

Ⅶ層は植物遺体を多く含んだ層であり、まばらに中粒砂を含んでいた。２層に細分が可能であり、下層の方がより主体を占める粒径が細かい。

Ⅷ層は細砂を主体としながら、Ⅶ層同様に植物遺体を多く含んだ層で、約80cm程度確認できる。

本層は３層に細分ができ、標高が下がるにつれて植物遺体の割合を減じていく。
Ⅸ層は貝遺体を多量に含む層が確認できる。本層以下では貝を多く含む層（通称貝層）と粘質シルト層が互層状に連続して堆積する。Ⅸ層では縄文晩期と推定できる土器片が出土した。

２　遺構の概要

本調査区では奈良時代から平安時代、古墳時代、弥生時代から縄文時代の遺構を確認した。古代の遺構は道路遺構１基、条里遺構２基、盛土遺構２基、自然河道１基を確認している。道路遺構は他調査区と同様に長尾鼻丘陵の裾を沿うように延びている。盛土遺構は条里遺構を覆うように構築しており、条里盛土に後出する。方向はP13区を横切るように確認でき、隣接するP12・14区へと延伸する可能性が高い。古墳時代の遺構は溝１基と、溝に伴う木製構造物を確認した。溝13は河道６に接続しており、大溝から水を引く水路と考えられる。溝13からは木製品とともに打設された杭や、木製構造物が出土している。弥生時代から縄文時代の遺構では杭列を点的に確認している。

第２項　Ⅴ層上面の遺構（古墳時代後期～平安時代）

１　概要（第290・291図）

Ⅴ層上面は盛土により構築した遺構として、道路遺構１、条里遺構２、道路外盛土１、盛土１基を確認した。また、Ⅴ層上面から掘り込まれる遺構として河道６が確認できる。河道６は自然流路を起源としているが、人為的に開削した箇所も窺える。構築遺構は道路→条里、道路外盛土→盛土の順と推定される。道路遺構の範囲は河道６と一部重複し、河道６が埋没した後に構築されたと考えられる。

１区はⅤ層以下の調査は行っておらず、規模や構造について不明であるものの、盛土遺構２基を検出した。いずれも盛土上部のみであるが、土層断面の観察から盛土の方向性等を確認している。

２　道路遺構

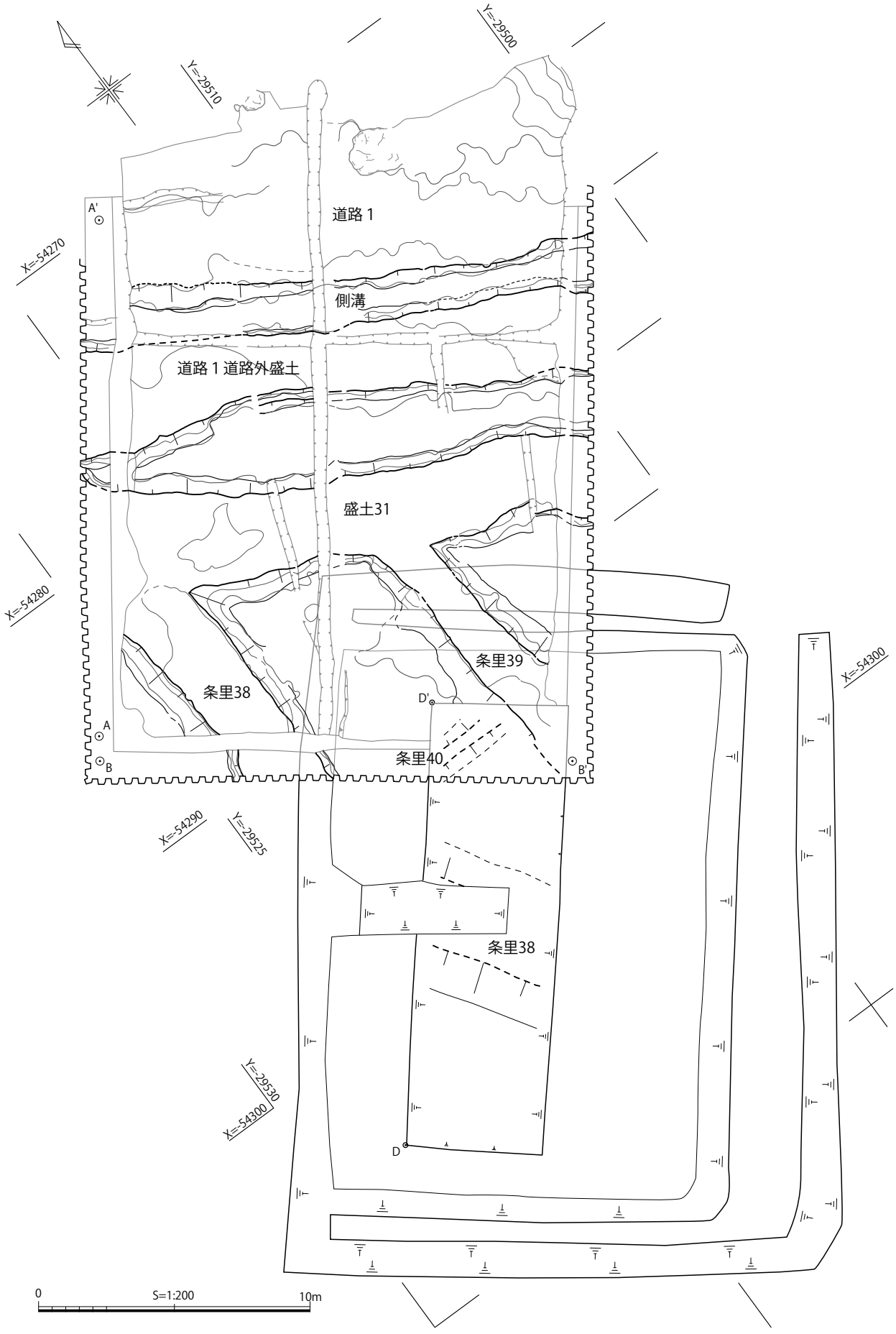
道路１（第292 ～ 295図　ＰＬ.80・81－１）

P14区からＰ７区の山裾を沿うように確認できる。本調査区はP12区に向けて背後の丘陵がやや北側に入り込んでおり、道路遺構も同じく東側の一部を屈曲させて延伸している。

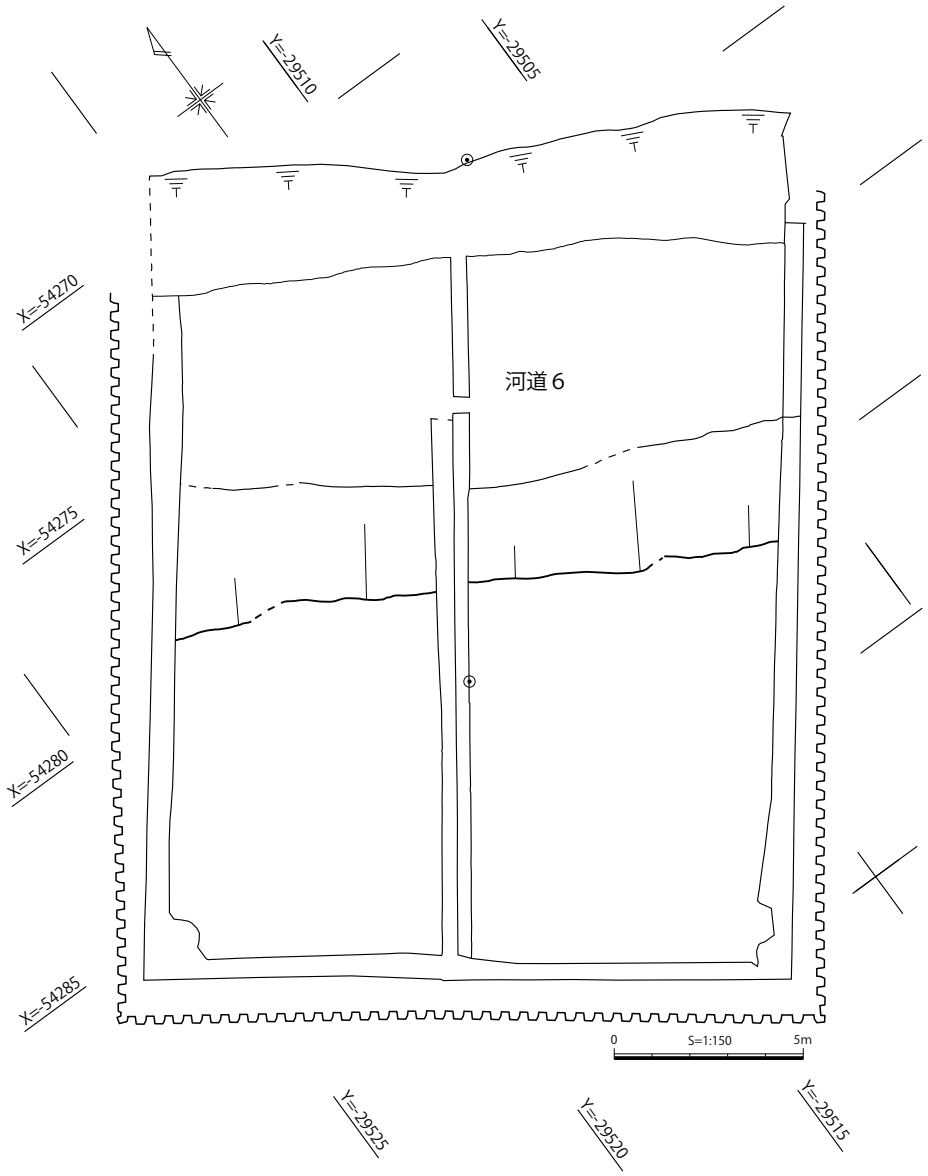
道路盛土

道路１は盛土で構築され、平野側で側溝が確認されている。山側については盛土と自然堆積との境界が不明瞭であり、範囲を明確にすることができなかった。道路盛土は幅約４ｍで、高さは約60cmが残存する。方位はＮ－59°－Ｗである。

盛土は９層に細分できるが、大きく３層に分けられる。改修土①は１、２層で細砂を主体とした層で、基本層序のⅢ層と類似する。２層の南東部分からは自然木が粗朶状に組まれており、サンプルを持ち帰って放射性炭素年代測定を行った。結果として、２σ暦年代範囲で938 ～ 991calAD（57.6%）の年代が得られている。道路遺構が機能した年代の一端を示すものと考えられる。改修土②は３～６層であり、拳大から人頭大の礫を多く含んだ層で、一部山側斜面を切り崩し、盛土とした可能性が考えられる。出土遺物は10世紀後半頃の土師器坏が出土している。構築当初土は７～９層である。下層に位置する河道６の上面に大ぶりの礫を落とし込み、その上に盛土を行っている。盛土内から７世紀末から８世紀初頭の須恵器が出土している。



第290図　1区・Ｐ13区Ｖ層上面遺構分布図（１）



第291図　1区・Ｐ13区Ⅴ層上面遺構分布図（２）

側　溝

側溝は道路遺構の平野側で検出した。幅は最大で約1.8 ～ 1.9m、深さは約40cmを測る。断面は逆台形状を呈する。道路盛土側の立ち上がりはやや急になる。埋土は単層で黄灰色の細砂から極細砂である。地震による脱水構造により白色の粘土～シルトが斑状に混じる。

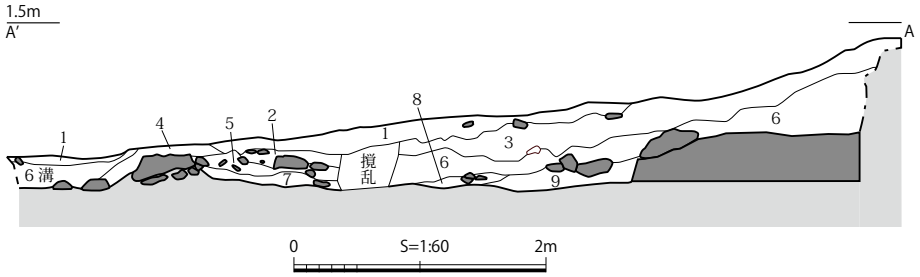
遺物は木製品を多く確認したものの、土器の出土はなかった。

道路外盛土

山際の道路盛土、道路側溝に並行するように検出され、東西に延伸する。P13区では幅が約3.7mで、高さが約24cm残存していた。道路遺構間には道路側溝があり、道路盛土とは重複する位置関係ではない。盛土の細かい単位の認識はできず、盛土の構築方法は不明瞭である。敷粗朶等による補強工法は見られないが、上面が削平されている可能性がある。

遺物は木製祭祀具や木製品が出土したものの、明確な時期を示す土器等の出土はない。詳細な時期は不明であるが、他の調査区の成果から10世紀後半頃と推定される。

第292図　1区・Ｐ13区道路１



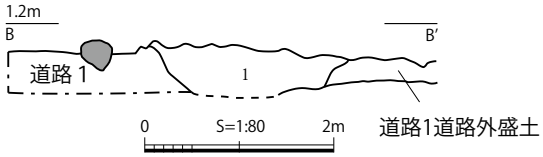
改修土①
1　黒褐色（10YR3/1）細礫混中粒砂～細砂 木製品含む
2　黄灰色（2.5Y5/1）中礫混中粒砂～粗砂 木製品含む

改修土②
3　灰黄褐色（10YR5/2）細砂混中礫～細礫
4　黒褐色（10YR3/1）中粒砂混細砂 木製品多く含む
5　褐灰色（10YR4/1）中粒砂混細砂～極細砂 木製品含む

改修土②
6　黒褐色（10YR3/2）細砂混細礫～中礫 木製品含む

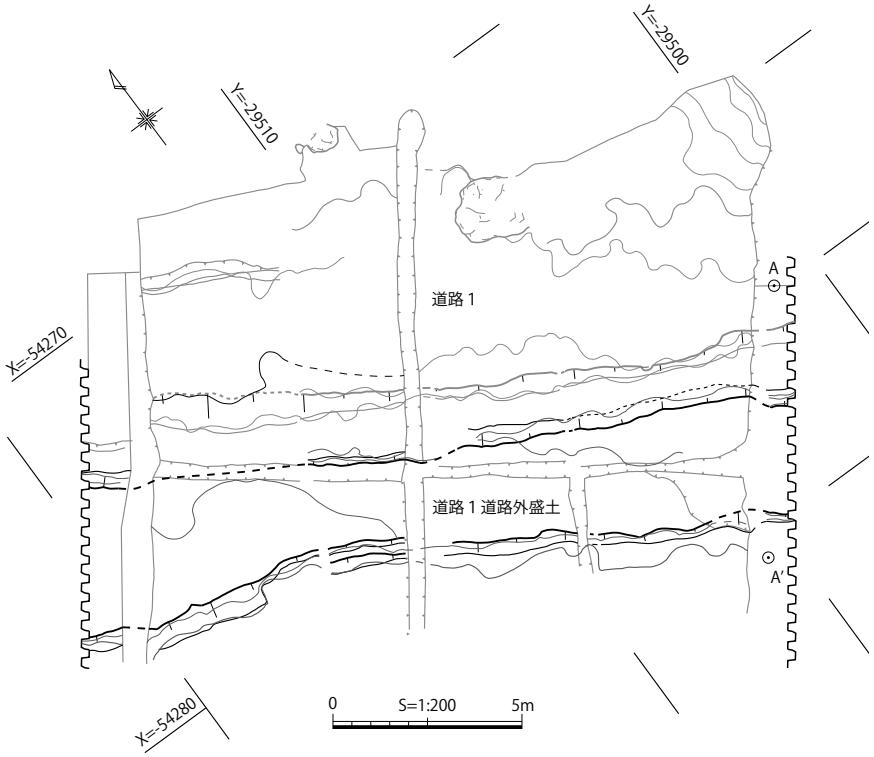
構築当初土
7　褐灰色（10YR5/1）粗砂～中粒砂 木製品含む
8　褐灰色（10YR4/1）細礫混細砂～中粒砂 木製品含む
9　黄灰色（2.5Y4/1）細砂～極細砂 木製品僅かに含む

第293図　1区・P13区道路 1 土層断面図



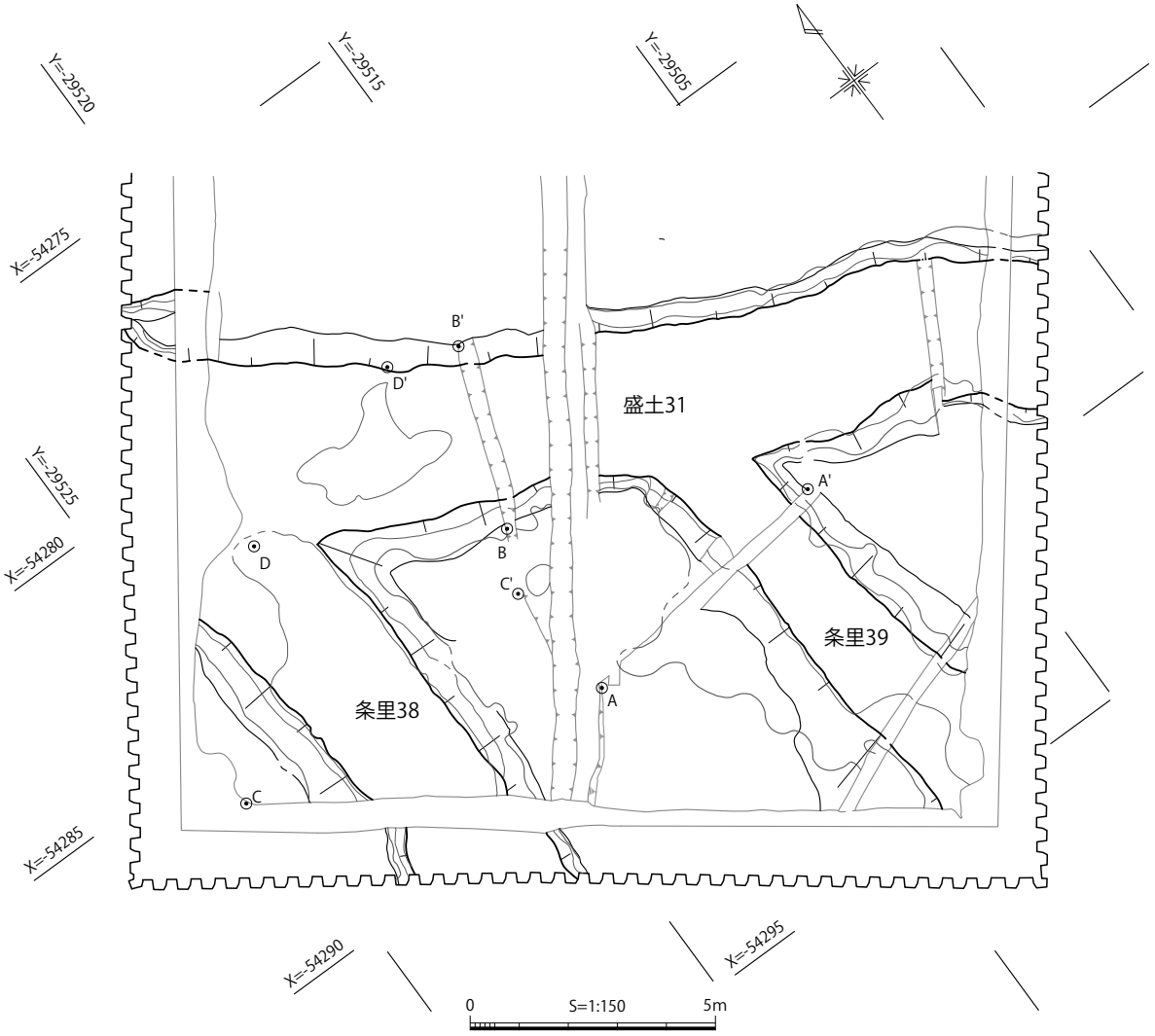
1　黄灰色(2.5Y4/1)細砂～極細砂　中粒砂含む
　灰白色(2.5Y7/1)ブロックをごくわずかに含む　しまりなし　粘性あり

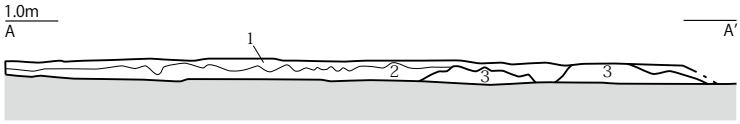
第294図　1区・P13区道路 1 側溝断面図



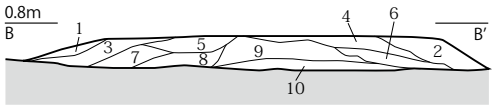
1　灰白色(2.5Y7/1)シルトと黄灰色(2.5Y4/1)極細砂のマーブル(わずかに粗砂～中粒砂)が含まれる

第295図　1区・P13区道路 1 道路外盛土

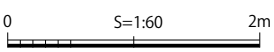




Ⅳ層
1　灰オリーブ（5Y4/2）細砂～中粒砂
2　灰色（5Y5/1）極細砂 木質含む
条里 39　3　灰色（5Y5/1）極細砂と暗緑灰色（7.5Y4/1）が混じる



1　黒褐色（10YR3/2）シルト～極細砂
2　黒褐色（10YR3/2）極細砂
3　黒褐色（7.5YR3/2）極細砂
4　黒褐色（10YR3/1）シルト～極細砂 木質・木製品僅かに含む
5　黒褐色（10YR3/2）シルト～極細砂 木質・木製品僅かに含む
6　黒褐色（10YR2/2）極細砂　木質・木製品含む
7　黒褐色（10YR3/2）細砂 木質・木製品僅かに含む
8　黒褐色（2.5Y3/1）極細砂 木質・木製品含む
9　暗褐色（10YR3/3）細砂混シルト　木質・木製品含む
10　オリーブ黒色（5Y3/1）細砂混シルト 木質・木製品含む



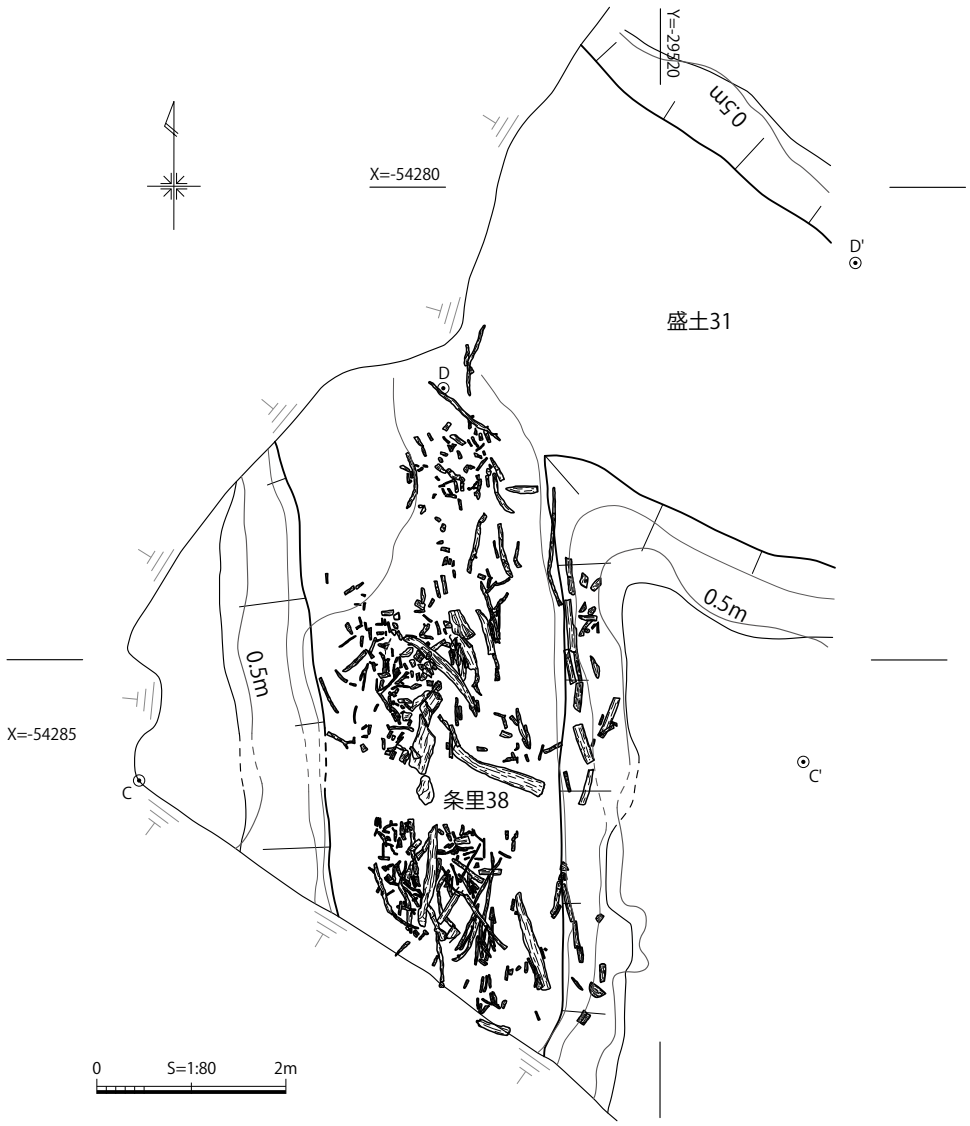
第296図　1区・Ｐ13区条里38・39

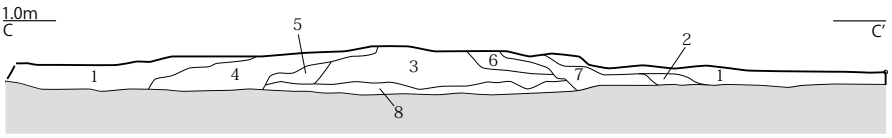
３　条里遺構

条里38（第296・297図　ＰＬ.80－１・81－２）

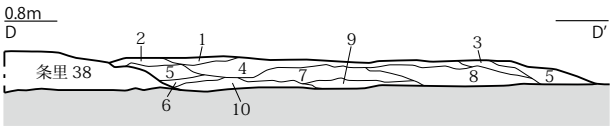
P13区の南西隅で検出した、南北方向に延びる盛土遺構である。一町方格内を12歩に分割する地割と考えられる。P13区では長さ約12m確認し、南側の１区で延伸部分を確認している。

規模は上面幅が2.5m、基底部幅が約4.4mで盛土の高さは約40ｃｍである。方位はN－２°－Wである。北端は盛土31と交差している。盛土の構築順序は条里38に盛土38が被覆するため、本遺構が先行する。盛土の構築方法は中央に芯となる盛土を構築し、外側へ拡充させて成形している。芯となる盛土には、敷粗朶による補強土工法が確認





1　灰色 (5 YR 5 /1) 極細砂 木質含む
2　黒褐色（10YR 5 /2）細砂
3　黒褐色（10YR 3 /1）極細砂混細砂 木質多く含む
4　黒褐色（2.5Y3/2）細砂～極細砂 木質・木製品が多く含む
5　黒褐色（2.5Y3/2）細砂 木質僅かに含む
6　黒褐色（7.5YR3/1）細砂～極細砂　木質・木製品含む
7　黒褐色（10YR3/2）細砂 木質やや含む
8　オリーブ黒色（5Y3/1）細砂 木質・木製品多く含む



1　黒褐色（7.5YR3/1）シルト～極細砂
2　黒褐色（7.5YR3/2）極細砂 木質・木製品僅かに含む
3　黒褐色（10YR3/2）極細砂 木質・木製品僅かに含む
4　黒褐色（10YR3/1）シルト～極細砂 木質・木製品僅かに含む
5　黒褐色（10YR3/2）シルト～極細砂 木質・木製品含む
6　黒褐色（10YR2/2）極細砂 木質・木製品僅かに含む
7　暗褐色（10YR3/3）細砂混シルト 木質・木製品僅かに含む
8　黒褐色（10YR3/2）極細砂 木質・木製品僅かに含む
9　黒褐色（2.5Y3/1）細砂混シルト 木質・木製品含む
10　オリーブ黒色（5Y3/1）細砂混シルト 木質・木製品含む

0　S=1:60　2m

第297図　1区・P13区条里38

できた。粗朶は自然木(枝)だけでなく、加工木も転用されており、木材の廃棄も兼ねて施工された可能性が高い。さらに盛土東側には平滑な板材が並んで検出できており、盛土構築時の足場、あるいは盛土を規定する基準とした可能性がある。盛土内からは木製品や木製祭祀具が出土している。土器は須恵器や土師器の小破片が出土し、図示できなかったが、８～９世紀代とみられる。

盛土内の粗朶の放射性炭素年代を測定したところ、２σ暦年代範囲で766－885calAD(88.8%)の結果を得ている。

条里39(第296図　ＰＬ.80－１)

P13区の南東隅で検出した。条里38との位置関係から12歩の条里地割をさらに細分する地割の可能性がある。南北方向に延びる盛土遺構、条里38に並行して延びる。方位はＮ－２°－Ｗである。P13区では長さ約10m分を検出し、北端は盛土31と接続している。盛土31が本遺構に後出する。北端は盛土31で途切れると考えたが、道路外盛土まで延伸していた可能性は残る。

規模は上面幅が1.4m、基底部幅が約2.3mで、盛土の高さは18cmほど残存する。残存状況が悪く、盛土は単層である。遺物は木製品とごく少量の土器片が出土した。構築した年代は不明確ながら、瓦質羽釜の破片が盛土の上面付近から出土しており、12世紀後半代まで機能していた可能性がある。

条里40(第290図)

１区にて検出した盛土遺構である。東西方向と推定される。条里38・39との位置関係から条里遺構と考えられる。盛土の幅は約1.5mで、高さ20cm分を確認している。

遺物は出土しておらず、詳細な時期は不明である。

４　盛土遺構

盛土31(第290・296図)

P13区の中央付近で東西方向に延びる盛土遺構である。条里38・39と接続しているが、本遺構が後出する。推定されている条里地割の方向性には合わない。規模は上面幅３ｍ、基底部幅が約3.7mで、盛土の高さは約28cmが残存する。盛土の構築方法は中央に芯となる盛土を構築し、外側へ拡充させて成形している。敷粗朶による補強土工法は確認できなかった。

遺物は木製品や木製祭祀具が出土したが、土器の出土は無かった。時期は条里38に後出することから、10世紀後半以降と推定しておきたい。

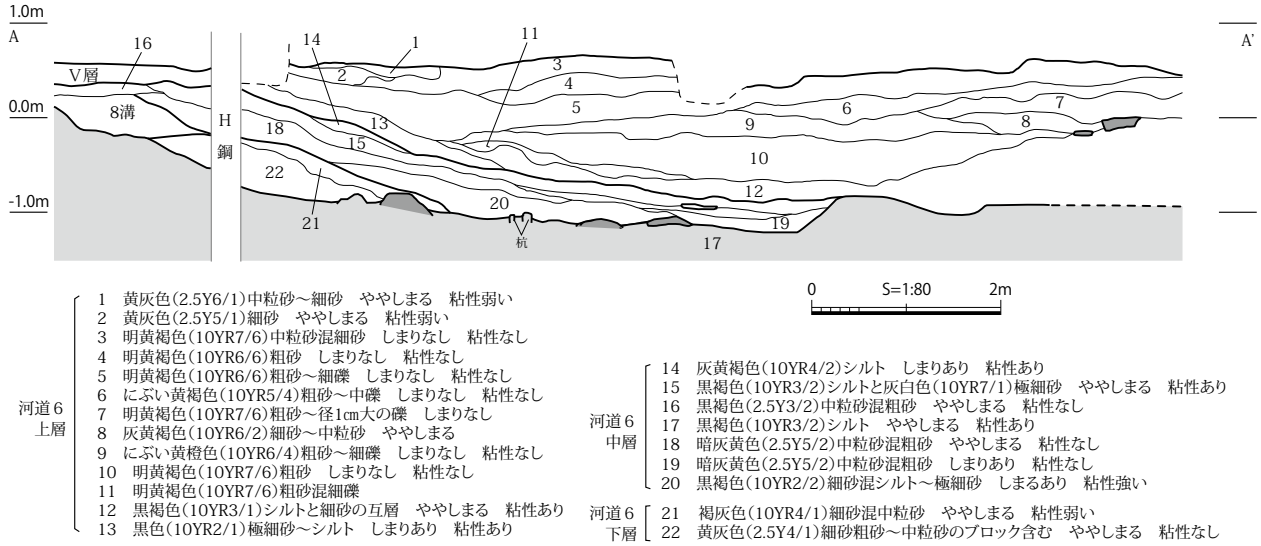
５　自然河道

河道６(第291・298図　ＰＬ.81－３)

P13区の中央から北側に位置し、調査区を横断する自然河道である。縄文時代晩期のⅨ層が堆積した後に、陸地化して以来、自然河道として流下し続けたと推定できる。自然河道は対応する基本層序と埋没状況から上・中・下層に分かれる。上層は基本層序Ⅴ層に対応し、中層はⅥ層に対応する。下層はⅦとⅧ層に対応すると理解できる。山側の肩部分は丘陵裾部まで到達し、山側には河川敷等の平地は形成されていなかった可能性が高い。

Ⅴ層段階で検出した河道の幅は約11m、深さは上層段階で約1.4m～1.5mを測る。

上層は１～13層が該当する。１、２層は細砂を主とした堆積で、比較的穏やかな水流が想定できる。３～５層は黄褐色を呈した小礫や粗砂、中粒砂を基質とした洪水堆積層である。下方から上方に向かっ



第298図　1区・P13区河道６土層断面図

て逆級化を繰り返している。MT15 ～ TK10型式頃の須恵器や土師器片が出土しており、古墳時代後期頃の堆積と推定できる。

中層は14 ～ 20層が該当する。シルトや極細砂、細砂と粗砂、中粒砂が互層状に堆積しており、緩やかな状況と流速のある状況を繰り返したと考えられる。自然河道の平野側の肩部ではラミナが確認できる。中層段階では後述する溝13を開削しており、平地側へ水を供給していたとみられる。土師器の甕が出土しており、古墳時代前期頃と考えられる。

下層は 21，22 層が該当し、細粒砂を含んだ中粒から粗粒砂である。遺物は少なく時期比定は難しいが、弥生時代中期から後期と考えられる。

第３項　Ⅵ層上面の遺構（古墳時代）

１　概　要（第299図）

Ⅵ層上面では溝 13 を確認している。溝 13 は最終的に粗砂、中粒砂により一気に埋没している。最終埋没時には溢流が発生していたようで、付近へと粗砂帯が確認できている。溝 13 付近からは足跡が検出できている。足跡は一人分であり、西から東へ歩いている。足跡は溢流堆積と考えられる粗砂により埋没していた。

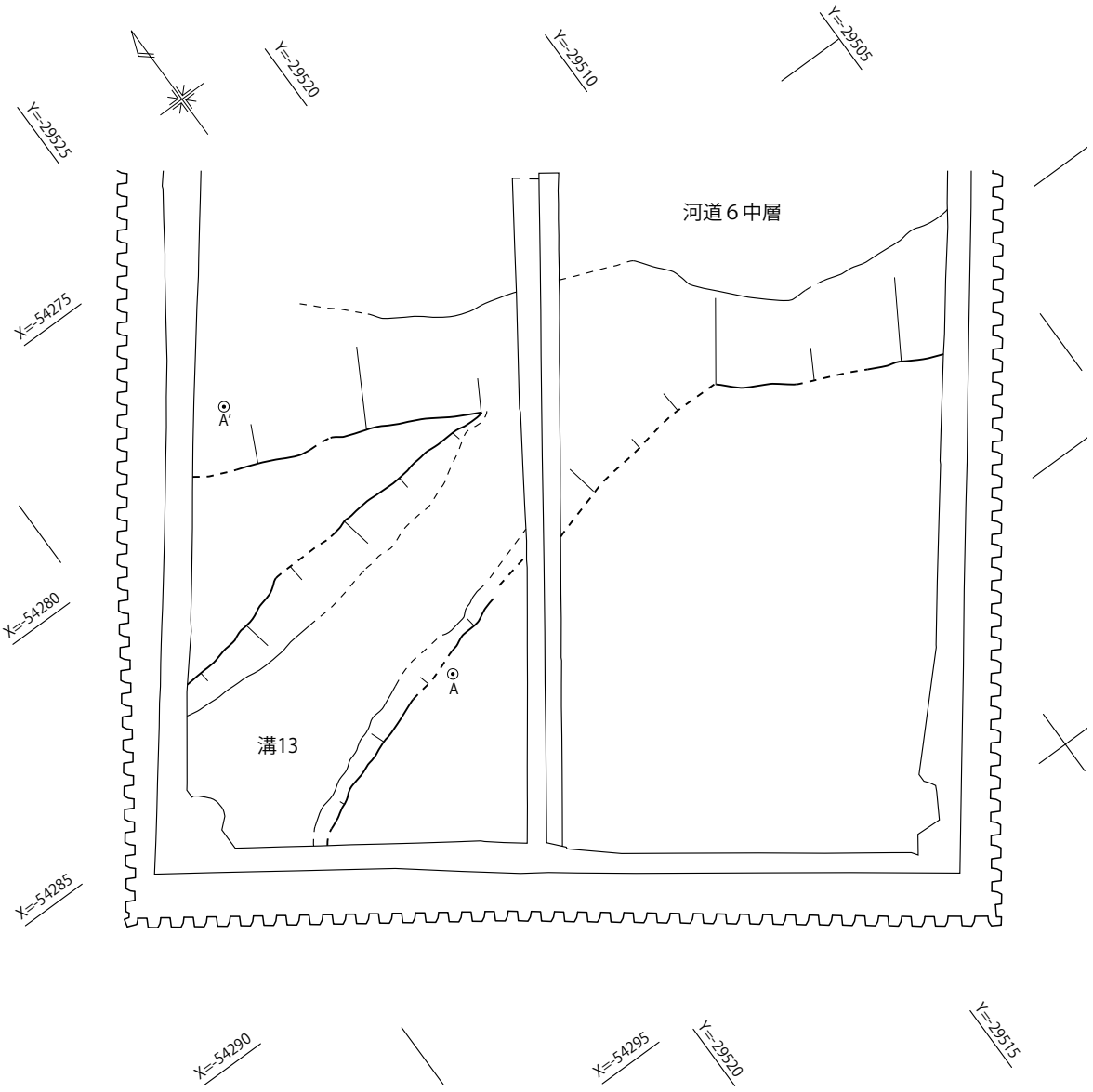
調査区南東では杭列を確認している。杭の打設はどの層位で行われたかはは不明である。

２　溝

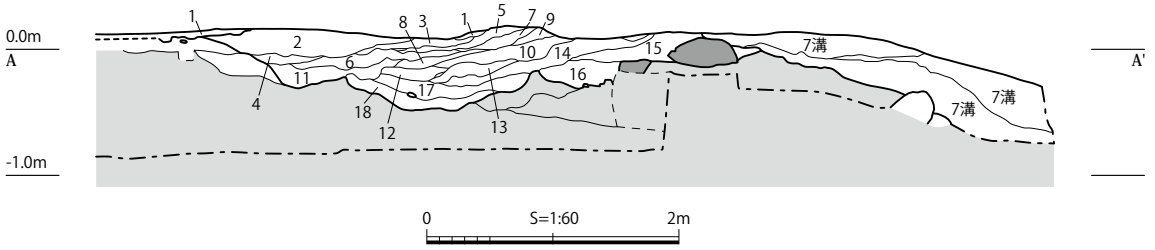
溝13（第300・301図　ＰＬ.82－１,２）

調査区の西半で、北東から南西方向に向かって延びる。北側では河道６に接続しており、一体で機能していたと考えられる。溝は４段階ほどに分けられ、位置を多少ずらしながら営まれている。埋土は粗砂から中粒砂であり、ラミナも確認できることから、ある程度の流れが存在していたようである。土砂により埋没する度に開削し直されていた可能性が指摘できる。

遺物は埋土からやや大きい加工木材が出土し、木製品は一定の位置にまとまって出土している。また、杭が溝に直交するように打設されていた他、やや厚手の板材も利用されていた。また、木造構造

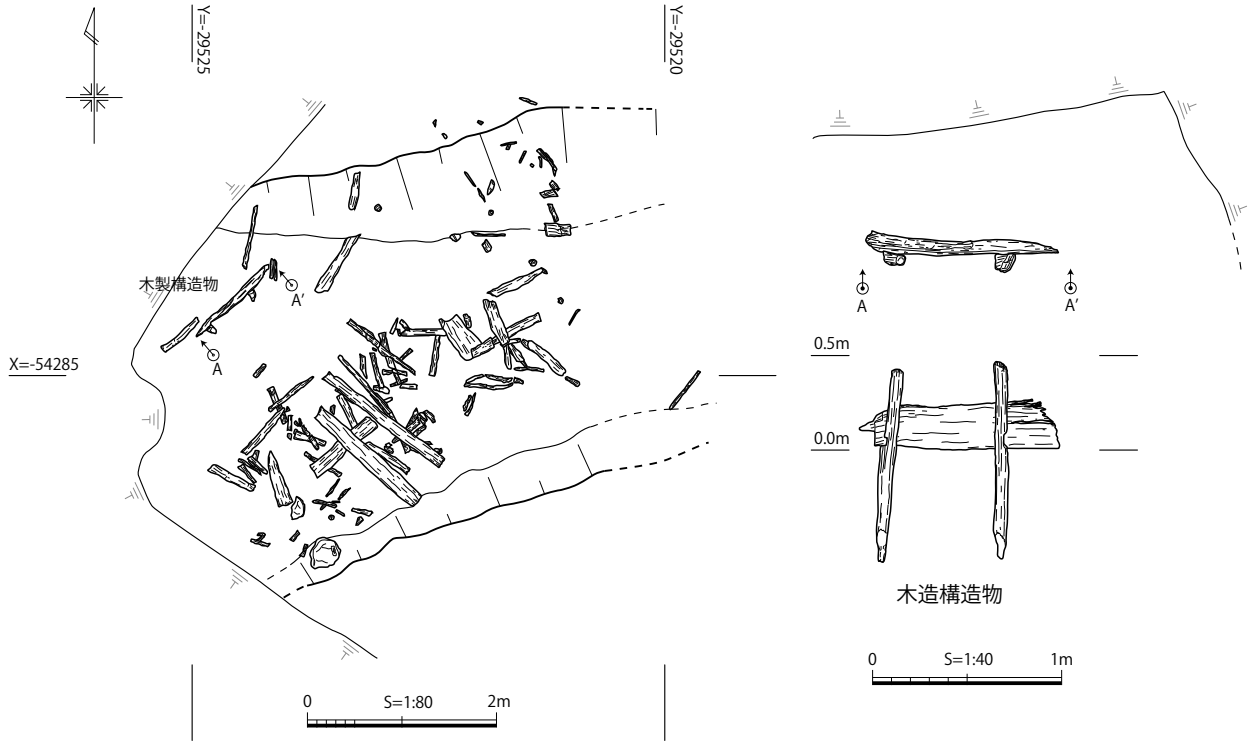


第299図　1区・Ｐ13区Ⅵ層上面遺構分布図



1　灰黄褐色(10YR4/2)中粒砂混極細砂～細砂　ややしまる
2　黒褐色(2.5Y3/2)中粒砂混細砂～極細砂　ややしまる
3　褐灰色(10YR4/1)中粒砂混細砂～極細砂　ややしまる　木製品含む
4　黄灰色(2.5Y6/1)粗砂～中粒砂　ややしまる
5　褐灰色(10YR6/1)中粒砂～粗砂　ややしまる　木製品含む
6　褐灰色(10YR4/1)粗砂混中粒砂～細砂　ややしまる　木製品含む
7　黒褐色(10YR3/1)極細砂　ややしまる　木製品含む
8　黄灰色(2.5Y6/1)粗砂～中粒砂　ややしまる　木製品含む
9　灰白色(2.5Y7/1)粗砂～中粒砂　ややしまる　木製品含む
10　褐灰色(10YR4/1)細砂混中粒砂～粗砂　ややしまる　木製品含む
11　黒褐色(10YR3/1)粗砂混細砂　ややしまる　木製品含む
12　褐灰色(10YR4/1)細砂～中粒砂　ややしまる　木製品含む
13　黄灰色(2.5Y5/1)粗砂～中粒砂　ややしまる　木製品含む
14　褐灰色(10YR4/1)粗砂混細砂～中粒砂　ややしまる　木製品含む
15　灰黄褐色(10YR4/2)細砂～極細砂　しまりあり
16　黒褐色(2.5Y3/2)細砂～中粒砂　混入物多い　ややしまる　木製品含む
17　黒褐色(2.5Y3/1)極細砂混中粒砂～粗砂　ややしまる　木製品含む
18　黒褐色(10YR2/3)粗砂混細砂～中粒砂　炭化物混じる　ややしまる　木製品含む

第300図　1区・Ｐ13区溝13土層断面図



第301図　1区・P13区溝13木造構造物

物もみられ、杭と矢板により構築される。向きは流路におよそ並行するように認められる。木造構造物や杭、矢板列は護岸状あるいは堤状の何らかの構造物であり、流れをコントロールするような機能を持っていた可能性がある。しかし、出土した木製品や出土状況からどのような施設となるかの復元は困難であった。

遺物は木製品の他に、土師器の小片や土玉等が出土している。時期は出土土器から古墳時代前期と考えられる。

第４項　Ⅶ層上面の遺構（弥生時代中期～後期）

１　概要

調査区の山際を同じく旧河道が流れる。調査区の南東に杭列を確認した。

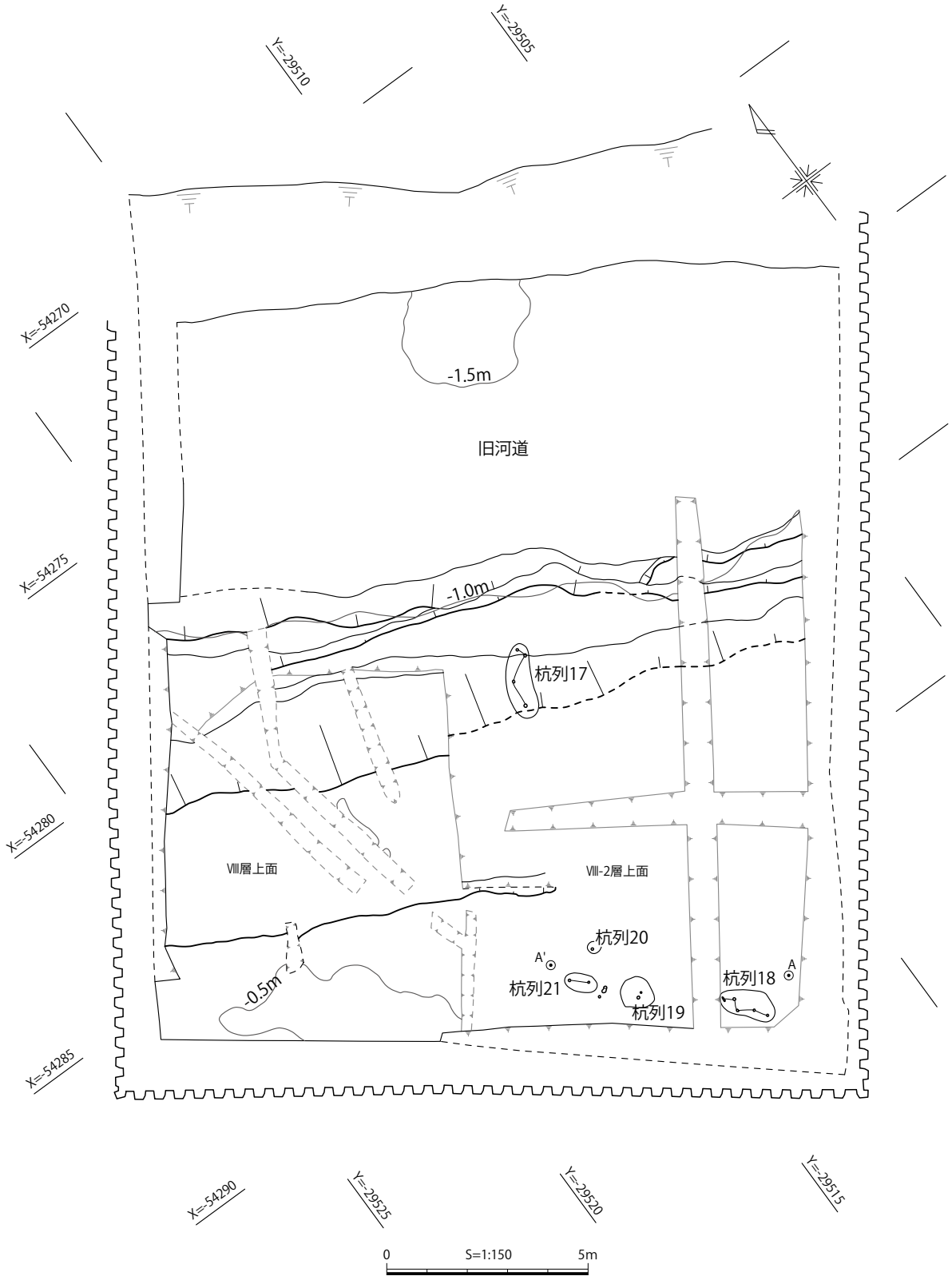
２　杭列

調査区南東の隅に北東方向に続く杭列を確認した。杭は径５㎝～ 10㎝程度の丸杭で、長さは 10 ～ 20㎝が残存していた。杭が打設された面は不明であり、時期については不明である。調査都合から写真記録のみ残した。

第５項　Ⅷ・Ⅸ層の遺構（縄文時代晩期～弥生時代前期）

１　概要（第302図）

本調査区では調査期間と遺構の検出状況から、平面的な調査はⅦ層中にて終了した。調査は北半分を河道６の前身となる旧河道が北流する。調査区の南半の内、西側は溝 13 の調査経過によりⅦ層上面で留めた。東半はさらに掘削を進め、Ⅶ－２層まで掘削している。Ⅶ層中からは杭列あるいは杭群を検出している。これより下層の状況はトレンチ調査により確認した。

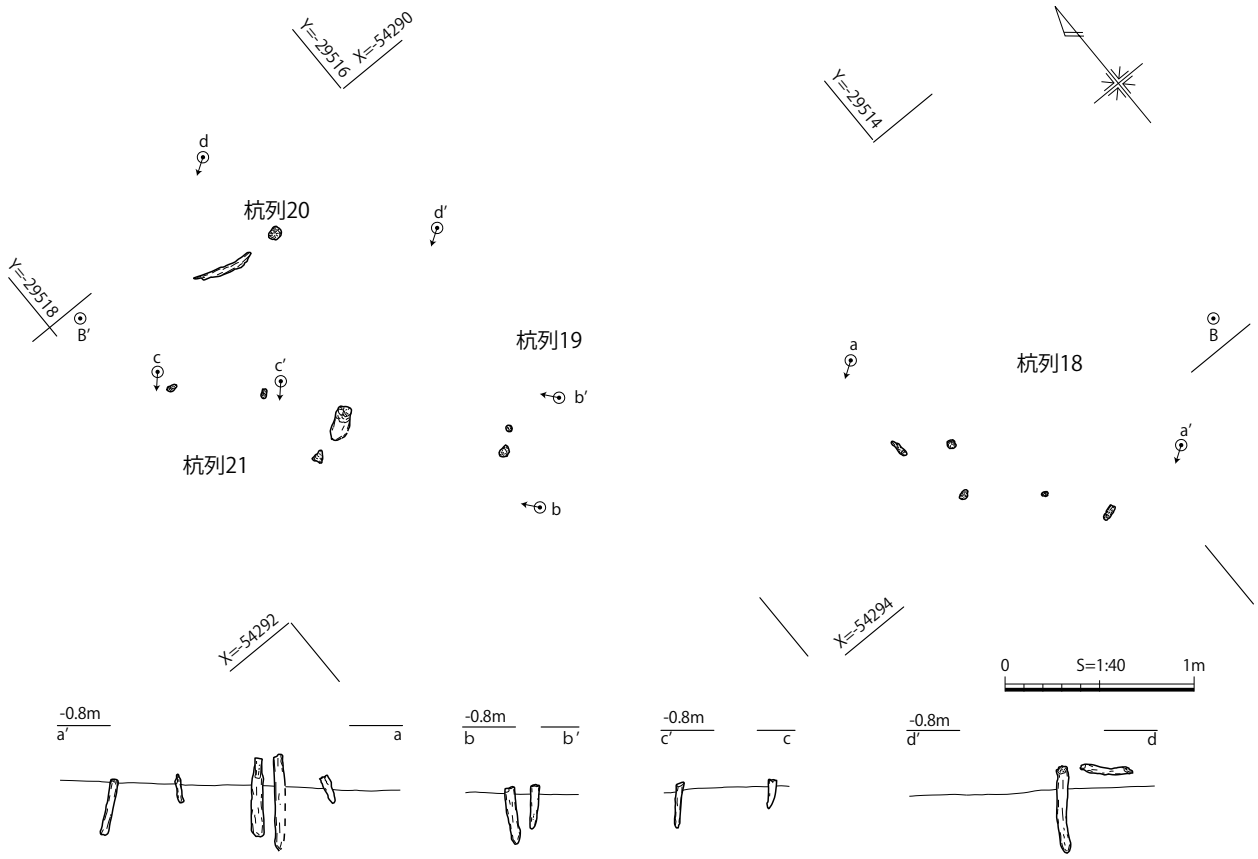


第302図　1区・Ｐ13区Ⅷ・Ⅸ層遺構分布図

２　杭列

杭列17（第302図）

河道６の前身となる旧河道の肩部で確認した。杭４本を検出し、流路に直交するように打設されている。機能についての詳細は不明である。



第303図　1区・P13区杭列17 ～ 21

杭列 18（第 303 図）

杭列18 ～ 21は本調査区の南東に点在する。複数本がまとまって検出している。杭列の具体的な機能は明らかにし得なかった。

杭列18は杭５本を確認している。杭は丸材を用いているが、径の太さや残存している長さに規格性は認められない。杭の打設された深さがW1462とW1454が近似し、W1461とW1460も近似する。W1463と対になるような深さの杭は確認していないが、杭は２本一対である可能性がある。

杭列19（第303図）

杭は２本確認している。丸材を使用しおり、先端も比較的尖らせている。径は約10cmで、長さは30cm程度が残存していた。

杭列20（第303図）

検出した杭は一本のみである。長さ50cm程度が残存していた。

杭列21（第303図）

杭は２本確認している。W1466は最も残存している杭で、長さ20cmが確認できた。W1467とW1468は杭列19と同様に一対となると考えられる。やや細めの材を使用している。

第19節　Ｐ14区の調査

第１項　調査区の概要

１　地形と土層堆積（第304・305図）

Ｐ14区は遺跡内の北西寄りに位置する。調査は平成26年度で、調査面積は518.1㎡である。調査区北東部分は山裾の急傾斜の斜面で、南西部分は近年まで水田として利用されており、現況ではほぼ平坦な地形である。南東方向の谷が供給源と思われる湧水が多量で枯渇することがない。

土層の堆積状況は、調査区中央付近より南西側は河道に侵食されている部分を除くと基本層序Ⅰ～Ⅶ層までは概ね対応する。Ⅷ層では調査区西寄り部分で粗砂が主体となる盛り上がりのある堆積が見られ、河口部付近に三角州状の地形が発達していたことが窺える。

２　遺構の概要

Ｐ14区では、縄文時代後期から晩期の杭群１基、弥生時代中期から後期の杭群１基、弥生時代後期から古墳時代前期の杭列１基、古墳時代中期から後期の河道１基、飛鳥時代から奈良時代前期の河道１基、飛鳥時代から平安時代の道路遺構１基、平安時代の条里遺構２基を確認した。

縄文時代後期から晩期の杭群10は自然木を利用した杭がかなり広範囲に高密度で広がる。古墳時代中期から後期の河道６は、Ｐ６区以西の調査区で確認されている河道と一連の遺構と推定される。飛鳥時代から平安時代の道路遺構は、Ｐ７区以西の調査区で確認されている道路遺構と同一の遺構である。道路に付随する側溝は明確に確認できていないが、道路外盛土は検出している。他の調査区同様、平安時代の条里遺構も検出され、敷粗朶などの構造を確認している。

なお、時期は不明ながら、斜面部の調査区際では楔の痕跡を持つ、径１ｍを超える巨礫が露出した状態で確認されている（ＰＬ.86－３）。

第２項　Ｖ層上面の遺構（古墳時代中期～平安時代）

１　概要（第306・307図）

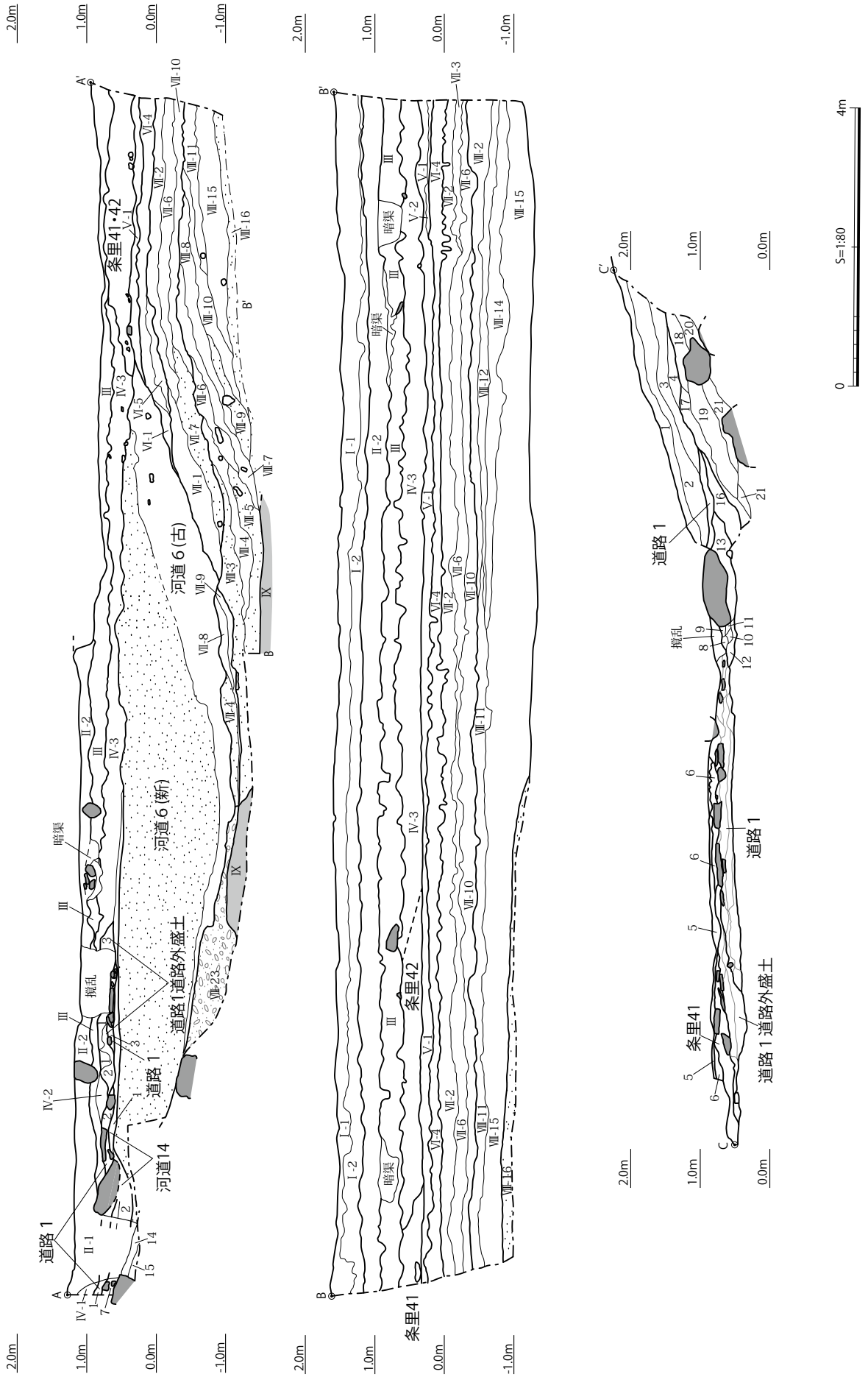
Ｖ層上面では河道２基、道路遺構１基、条里遺構２基を検出した。自然流路の河道14は、古墳時代の河道６がほぼ埋まりきった上層に存在し、河道６に後出する小規模な河道である。道路盛土は既述山裾に沿って構築され、これにほぼ並行するように道路外盛土が築かれている。条里遺構は南北方向に延びる条里41とそれに直交し東西方向に延びる条里42の２基である。条里41は道路外盛土の構築後に、それに接続するように築かれている。

遺物は加工木材、木製祭祀具などの木製品が多い。条里遺構の条里41・42と、道路1外盛土では、盛土中に自然木や加工木が多く混入している。道路１や河道14では斎串、馬形などの木製祭祀具の出土が目立つ。土器は須恵器や土師器が出土しており道路遺構からの出土が半数以上を占める。

２　道路遺構

道路１（第304・305・308・309図　ＰＬ.83）

Ｐ７～Ｐ14区で検出された大規模な道路遺構で、Ｆ９、Ｆ10・11、Ｇ10・11グリッド、北東斜面裾をほぼ直線的に調査区を横切る位置で検出された。方位はＮ－60°－Ｗである。道路盛土、道路外盛土はＶ層上面が検出面となる。本調査区では道路盛土大部分の範囲は、埋没した自然河道である河道



第304図　P14区土層断面図(1)

Ⅰ-1　黒褐色砂礫混シルト (2.5Y3/1) 粘性やや弱。締まりやや強。径 5~10mm 以下黒色及び灰色シルトブロック混。径 10cm 以下礫少混。表土及び客土。
Ⅰ-2　灰色砂混シルト (5Y4/1) 締まりやや強。径 10cm 以下礫混。近現代耕作土。
Ⅰ-3　黄灰色粘土質シルト (2.5Y4/1) 植物遺体 (草本) 多混。近現代耕作関連か。
Ⅱ-1　黄灰色粘土質礫混シルト (2.5Y4/1) 粘性やや強。拳大礫多混。近世造成土。
Ⅱ-2　黄灰色粘土質シルト (2.5Y4/1) 粘性やや強。部分的に層状に径 10cm 以下礫混。近世造成及び耕作土。
Ⅲ　黒褐色泥炭 (10YR2/2) と黒褐色粘土質シルト (10YR3/2) の混土　粘性やや強。締まりやや弱。植物遺体多混。攪拌部分あり。疎らに径３~20cm 礫混。中世。
Ⅳ-1　暗褐色シルト (10YR3/3) 粘性やや弱。締まりやや弱。径 5~50mm 礫混。径 5cm 以上平形礫混。道路遺構一部の可能性あり。
Ⅳ-2　黒褐色粘土質シルト (10YR2/2) 粘性強。締まりやや弱。灰黄褐色粘土ブロック混。径 2mm 以下の砂粒混。道路側溝埋土の可能性あり。
Ⅳ-3　黒褐色粘土質シルト (10YR3/2) 粘性強。植物遺体混。13 溝上部に灰黄褐色粘土ブロック・径 1~2mm 粗砂混。地震の影響か。

Ⅰ~Ⅳ層相当
1　礫多混暗褐色シルト (10YR3/3) 粘性やや弱。締まりやや弱。径 5~50mm 礫多混。径 5~20cm 礫少混。
2　礫多混暗褐色シルト (10YR3/4) 粘性やや弱。径 5~20mm 礫多混。径 2~5cm 礫混。径 5~20cm 礫少混。
3　灰褐色粘土質シルト (7.5YR4/2) 締まりやや弱。径 5~20mm 礫多混。径 2~5cm 礫混。
4　褐灰色粘土質シルト (5YR4/1) 粘性やや強。径 5~20mm 礫多混。径 2~10cm 平形礫少混。

Ⅲ層
5　黒褐色泥炭 (10YR2/2) と黒褐色粘土質シルト (10YR2/3) の混土。粘性やや弱。締まりやや弱。植物遺体多混。泥炭。

Ⅳ層相当
6　黒褐色粘土質シルト (7.5YR3/2) 粘性やや強。締まりやや弱。植物遺体混。径 1~5mm 礫粒少混。径 1~2cm 礫粒微混。

道路外盛土
1　黒褐色砂礫混粘土 (10YR2/3) 粘性強。締まりやや弱。径 2~5mm 程度 礫粒・粗砂混。植物遺体少混。
2　にぶい黄褐色砂礫混粘土 (10YR5/3) 粘性強。径 2~10mm 礫粒・粗砂混。径 3~10cm 礫少混。
3　黒褐色シルト質砂壌土 (10YR3/2) 粘性やや弱。締まりやや強。径 1~2mm 粗砂多混。植物遺体混。
4　にぶい黄褐色砂礫混粘土 (10YR5/3) 粘性強。径 2~10mm 礫粒・粗砂混。　径 3~10cm 礫少混。径 10~30cm 礫混。

道路 1
1　褐灰色シルト質粘土 (10YR4/1) 粘性やや強。締まりやや弱。径 5 mm 以下炭粒少混。有機物混。
2　黒褐色シルト質粘土 (7.5YR3/2) 粘性強。締まりやや強。径 2mm 以下粗砂少混。径 1~3cm 礫混。有機物少混。

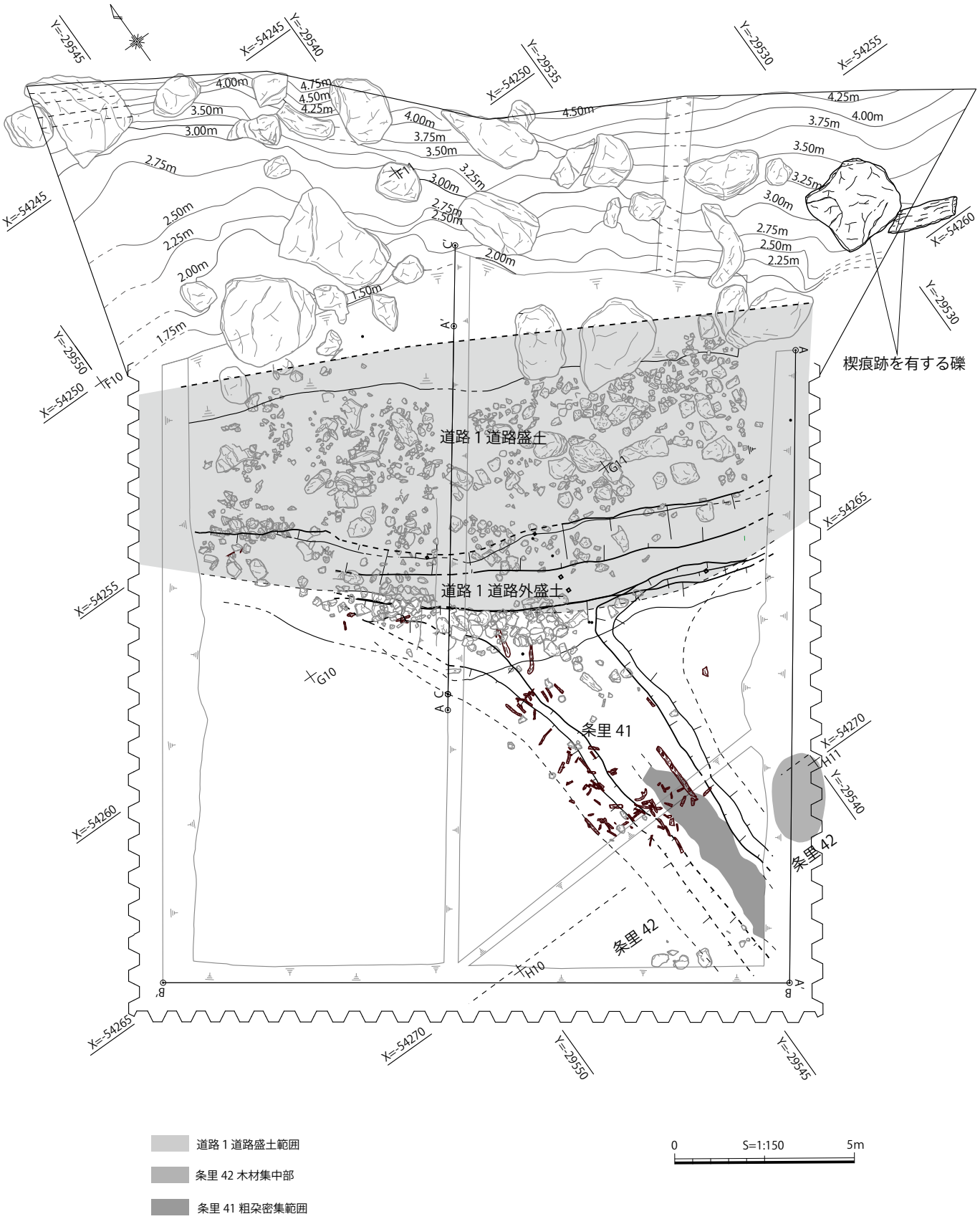
河道 14
1　黒褐色砂質シルト (10YR2/2) 締まりやや強。径 2mm 以下粗砂混。径 10~30cm 平形礫混。径 5~30mm 板状木混。
2　黒褐色シルト質細砂 (10YR2/2) 締まりやや強。径 2mm 以下少混。径 5~10mm 有機物少混。

Ⅳ層相当
7　黒褐色シルト質粗細砂 (10YR3/1) 粘性弱。締まりやや強。径 2mm 以下粗砂混。径 5~15cm 平形礫混。径 1~2cm 丸棒状有機物少混。斜面流土及び流水埋土。
8　黒褐色シルト質砂礫 (10YR3/1) 粘性やや弱。締まりやや弱。径 1~5 mm 礫粒混。径 1~2cm 粗朶状木片少混。
9　黒褐色砂質シルト (7.5YR3/1) 粘性やや弱。締まりやや強。径 1~5 mm 礫粒微混。
10　黒褐色砂質シルト (7.5YR3/1) 粘性やや弱。径 1~5mm 礫粒混。
11　黒褐色砂質シルト (7.5YR3/1) 粘性やや弱。締まりやや強。径 1~5 mm 礫粒混。径 5cm 以下礫少混。径 1~2cm 粗朶状木片少混。
12　褐灰色シルト質砂礫 (7.5YR4/1) 粘性弱。締まりやや強。径 5mm 以下礫粒多混。径 1~2cm 程度木片少混。13 溝名残部分。斜面流土及び流水埋土。
13　灰黄褐色シルト質細砂 (10YR4/2) 粘性やや弱。褐灰色シルト混。径 5~30mm 棒状・板状有機物多混。径 2cm 以下炭化物少混。木質繊維少混。径 1~3cm 礫混。径 3~20cm 礫少混。13 溝名残部分。斜面流土及び流水埋土。

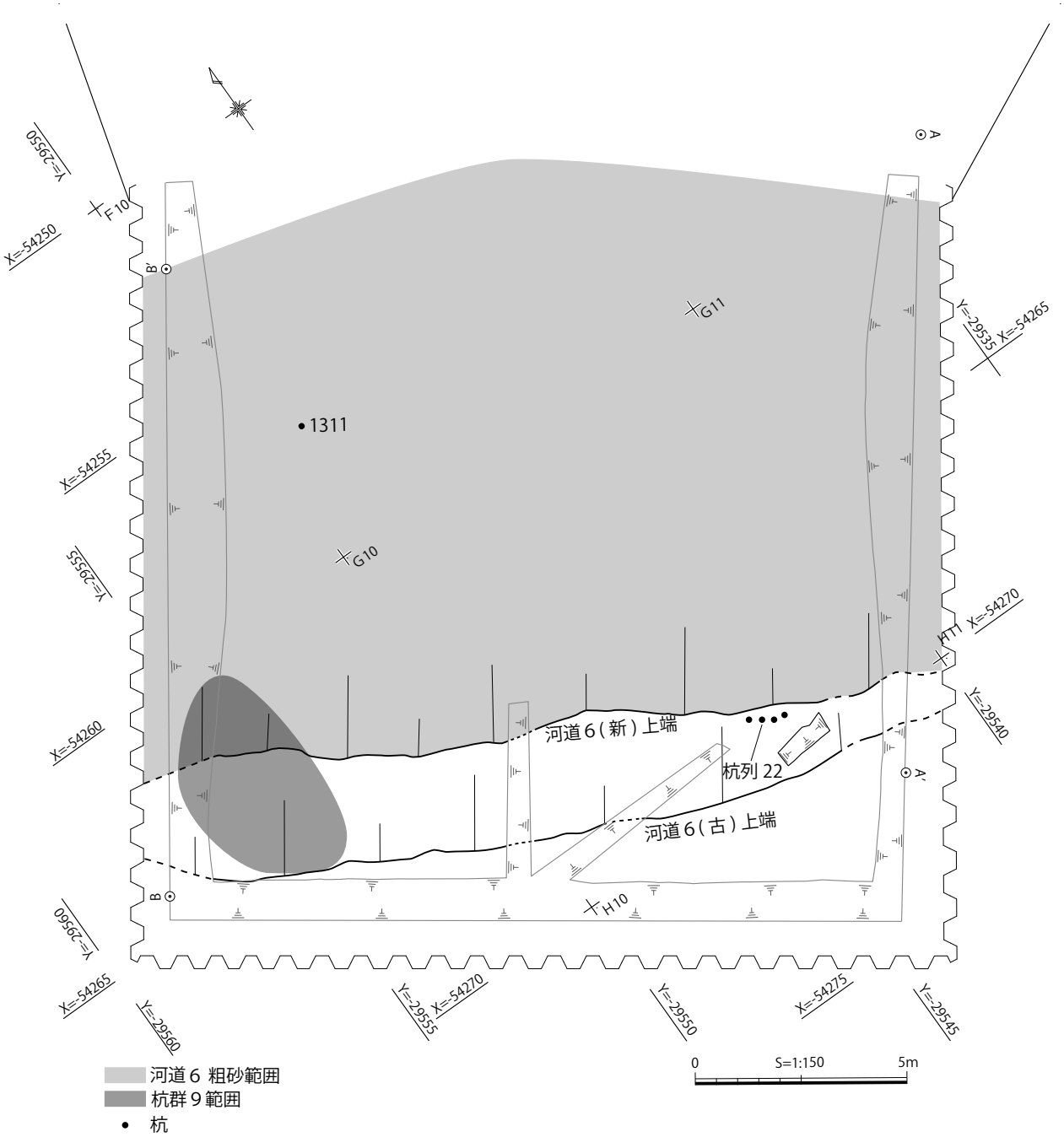
Ⅴ層以下相当
14　黒褐色粘土 (10YR3/2) 粘性強。締まり弱。径 5cm 以下礫少混。斜面流土混。13 溝の一部か。
15　灰色粗砂 (5Y5/1) 粘性なし。径 2mm 以下粗砂主体。径 3cm 以下礫混。13 溝の一部か。
16　黒褐色シルト質細砂 (10YR3/2) 粘性弱。締まり強。径 1~5cm 礫多混。径 5~10cm 平形礫混。13 溝 (大溝) の端部か。
17　暗褐色粘土質シルト (7.5YR3/3) 締まり強。径 1~3cm 礫主体。径 2~5cm 礫混。径 5~15cm 平形礫少混。
18　灰褐色粘土質シルト (5YR4/2) 粘性やや強。締まりやや強。径 1~5 cm 礫多混。径 5~10cm 平形礫混。
19　黒褐色砂質シルト (10YR2/2) 粘性やや弱。径 5cm 以下礫混。径 5~20cm 程度平形礫少混。径 1~3cm 程度板状木片少混。
20　灰褐色粘土 (5YR4/2) 粘性強。締まり強。径 2mm 以下礫粒少混。
21　黒褐色粘土質シルト (10YR3/2) 粘性やや強。径 5cm 以下礫多混。径 5~20cm 程度平形礫少混。

Ⅴ-1　褐灰色砂質シルト (7.5YR4/1) 締まりやや強。径 1mm 以下粗砂細砂混。径 5~10mm 程度有機物混。
Ⅴ-2　黒褐色粘土質シルト (10YR3/1) 粘性やや強。径 3cm 以下丸形棒状木少混。径 1cm 以下有機物混。径 5mm 以下炭粒少混。径 2mm 以下礫粒少混。
Ⅵ-1　褐灰色砂質シルト (10YR4/1) 粘性やや弱。径 1mm 程度粗砂細砂混。径 5cm 以下礫微混。
Ⅵ-2　黒褐色シルト (10YR3/1) 締まりやや強。径 2mm 以下粗砂細砂多混。径 2~10mm 礫混。径 1cm 以下有機物混。
Ⅵ-3　黒褐色シルト質粗細砂 (7.5YR3/1) 締まりやや強。径 1~2cm 程度有機物混。径 2mm 以下灰白色粗砂混。
Ⅵ-4　褐灰色粘土質シルト (10YR5/1) 粘性強。締まりやや強。径 1~2cm 有機物混。植物遺体混。水性堆積か。
Ⅵ-5　褐灰色粘土質シルト (10YR4/1) 粘性強。締まりやや強。径 2~3cm 程度有機物混。植物遺体混。水性堆積か。
Ⅶ-1　黒褐色シルト質粗細砂 (7.5YR3/1) 締まりやや強。径 1~2cm 程度有機物混。径 2mm 以下灰白色粗砂混。
Ⅶ-2　黒色粘土質シルト (10YR2/1) 粘性やや強。締まりやや弱。径 5mm 以下炭粒混。植物遺体多混。耕作土か。
Ⅶ-3　黒褐色粘土質シルト (10YR3/1) 粘性やや強。締まりやや強。径 1cm 以下炭粒混。径 3cm 以下有機物小片少混。径 1~2cm 程度灰褐色粘土ブロック混。
Ⅶ-4　灰白色粗砂 (2.5Y7/1) 粘性なし。締まり弱。径 1~2mm 粗砂主体。流水堆積。
Ⅶ-5　黒褐色シルト質粗細砂 (7.5YR3/1) 粘性弱。締まりやや強。径 1~2cm 程度有機物混。灰白色粗砂細砂混。ラミナか。
Ⅶ-6　黒褐色粘土質シルト (10YR2/2) 粘性やや強。径 5mm 以下炭粒混。植物遺体混。耕作土か。
Ⅶ-7　黒褐色シルト質粗細砂 (7.5YR3/1) 粘性弱。径 1~2cm 程度有機物混。灰白色粗砂細砂混。ラミナ。
Ⅶ-8　黒色粘土質シルト (10YR2/1) 粘性強。締まりやや弱。径 1~2mm 程度粗砂混。
Ⅶ-9　黒色粘土質シルト (7.5YR2/1) 径 1~2mm 礫粒混。
Ⅶ-10 黒褐色粘土質シルト (10YR3/2) 粘性やや強。径 5~10mm 有機物・植物遺体混。
Ⅷ-1　黒褐色粘土混砂礫 (7.5YR3/1) 粘性やや弱。径 2mm 以下粗砂細砂多混。1cm 以下有機物小片混。
Ⅷ-2　黒褐色砂質粘土 (7.5YR3/2) 粘性やや強。締まりやや強。径 1cm 以下有機物小片混。植物遺体混。所々筋状に灰白色細砂混。
Ⅷ-3　灰色粗砂 (5Y4/1) 粘性なし。締まりやや弱。径 1mm 程度粗砂主体。径 1cm 以下有機部小片少混。流水堆積。
Ⅷ-4　黒褐色シルト質粗細砂 (7.5YR3/1) 締まりやや強。径 1mm 程度粗砂多混。径 1~5mm 程度礫粒少混。灰白色細砂混。ラミナ。
Ⅷ-5　灰色粗砂 (5Y4/1) 粘性弱。締まりやや弱。1mm 程度粗砂主体。径 1~2cm 有機物少混。角棒状木材・板材少混。
Ⅷ-6　褐灰色砂質シルト (7.5YR4/1) 締まりやや弱。径 1mm 以下粗砂混。径 1~2cm 有機物少混。径 3cm 程度丸状木少混。
Ⅷ-7　黒褐色砂質シルト (7.5YR3/1) 締まりやや弱。径 1mm 以下粗砂混。径 1~2cm 有機物混。角棒状木微混。
Ⅷ-8　褐灰色砂質シルト (7.5YR4/1) 粘性やや弱。径 1mm 以下粗砂少混。
Ⅷ-9　灰色粗砂 (5Y5/1) 粘性弱。締まりやや強。径 1mm 以下粗砂主体。径 7cm 以下丸形棒状木微混。
Ⅷ-10 黒褐色砂質シルト (7.5YR2/2) 粘性やや弱。径 1~2mm 程度有機物少混。径 2mm 以下粗砂細砂混。ラミナ。
Ⅷ-11 黒褐色粘土 (7.5YR3/2) 粘性強。締まりやや強。植物遺体多混。径 5cm 以下丸形棒状木微混。溢流か。
Ⅷ-12 褐灰色シルト質細砂 (10YR4/1) 径 2cm 以下有機物小片混。径 1cm 以下炭粒少混。筋状に灰白色細砂多混。ラミナ。
Ⅷ-13 黒褐色砂礫混粘土 (7.5YR3/2) 粘性強。締まりやや強。径 2mm 以下粗砂細砂混。
Ⅷ-14 黒褐色砂質シルト (7.5YR3/1) 締まりやや強。径 5cm 以下有機物小片少混。径 5mm 以下粗砂少混。部分的筋状に灰白色細砂混。ラミナ。
Ⅷ-15 暗褐色粘土 (7.5YR3/3) 粘性強。締まりやや強。植物遺体少混。径 5cm 以下丸形棒状木少混。干潟か。
Ⅷ-16 灰色粗砂 (5Y4/1) 粘性なし。締まり弱。径 2mm 以下粗砂主体。径 5~7cm 程度丸形棒状木少混。径 1cm 以下有機物小片少混。
Ⅷ-17 灰色粘土混砂礫 (5Y6/1) 粘性なし。締まり弱。径 1~2mm 粗砂主体。黒褐色粘土少混。
Ⅷ-18 褐灰色砂礫混粘土 (7.5YR4/1) 締まりやや強。径 1~2mm 粗砂混。径 5mm 以下炭粒少混。
Ⅷ-19 黄灰色粘土質砂礫 (2.5Y5/1) 粘性やや弱。締まりやや弱。径 1~2mm 粗砂主体。
Ⅷ-20 黒褐色粘土 (7.5YR2/2) 粘性強。締まりやや弱。径 1mm 程度粗砂少混。
Ⅷ-21 灰色粗砂 (5Y4/1) 粘性なし。締まりやや弱。径 1mm 程度粗砂主体。径 3cm 以下礫混。径 1~2cm 有機物少混。
Ⅷ-22 黒色砂質粘土 (7.5YR2/1) 粘性強。締まりやや弱。径 1~5mm 礫・有機物混。
Ⅷ-23 黒褐色粘土質砂礫 (7.5YR2/2) 粘性やや強。締まり強。径 10~30cm 礫多混。径 10cm 以下礫・砂礫多混。斜面崩落土。
Ⅸ　黒褐色粘土質シルト (10YR2/2) 粘性やや強。締まりやや弱。赤貝・巻き貝等、貝殻多混。径 1~3cm 程度木片、微細有機物混。径 1~2mm 砂礫少混。

第305図　Ｐ14区土層断面図（２）



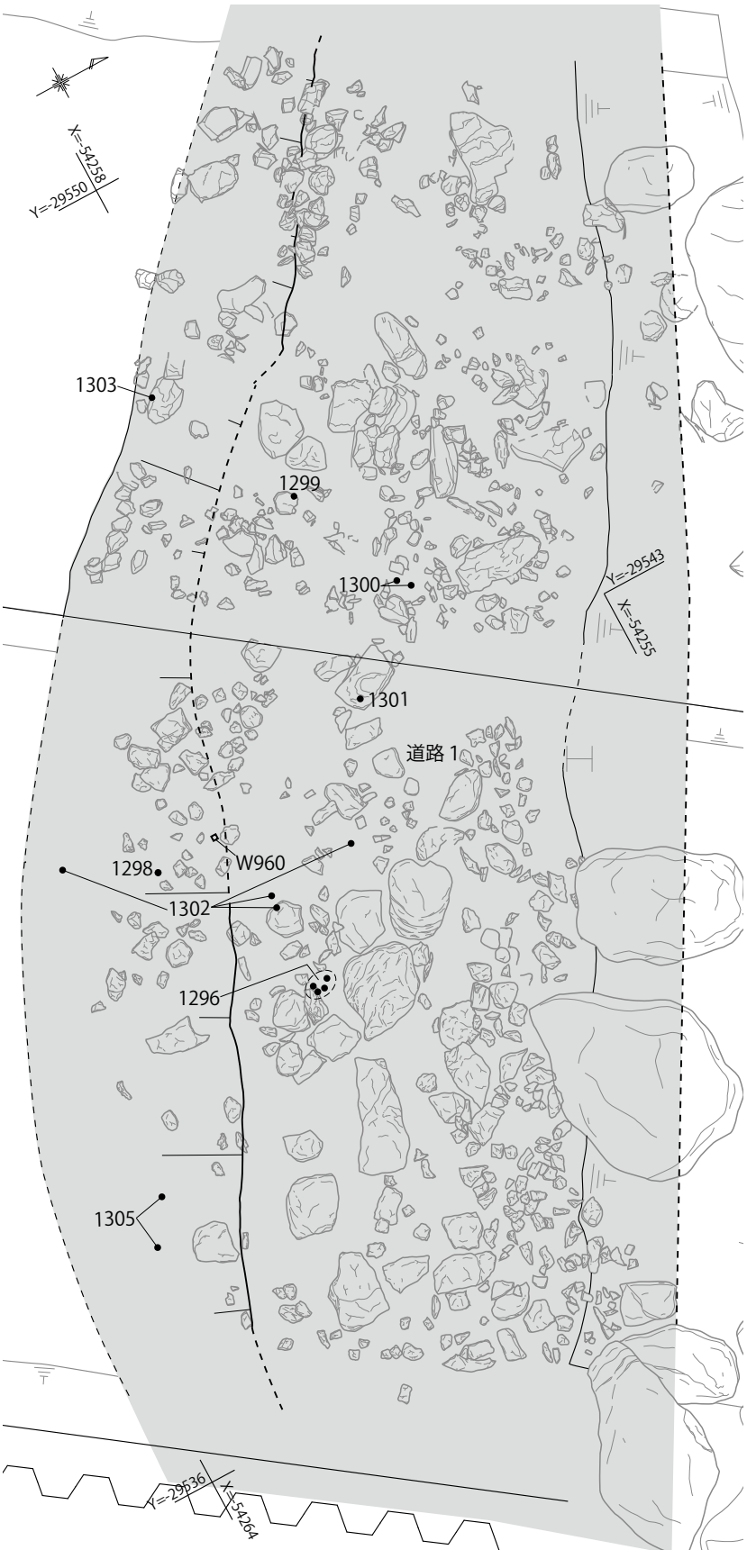
第306図　P14区Ⅴ層上面遺構分布図



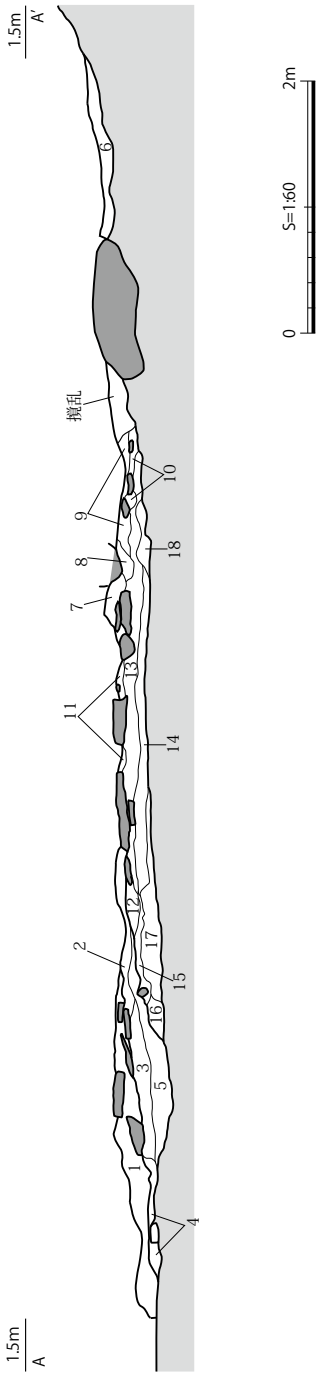
第307図　Ｐ14区Ⅴ層上面～Ⅶ層遺構分布図

６の上に位置する。

遺構は盛土で構築され、本体である道路盛土の他に道路外盛土が付随する。他調査区では側溝を検出しているが、明瞭に確認することができなかった。ただし、南東壁の土層断面では側溝の可能性がある凹状の堆積が確認できる。道路本来の路面は北東斜面の崩落や後世の改変等によって削平されている。原形を留めている箇所は少ないものの、残存部分からその構造などが窺える。盛土の規模は残存値で、上面幅が3.2 ～ 4.5m、盛土基底部幅が6.4 ～ 7.4mで、上面対して基底部幅は幾分広く、路肩の崩落が推測される。盛土の高さは最大約35cmで、盛土上面の標高は北西端が約1.05m、南東端が約0.85mで、北西がやや高い。それに対し、道路盛土下面の標高は北西端が約0.40m、南東端が約0.65mで北西がやや低い。



第308図　P 14区道路 1



条里 41
1　黒褐色粘土質シルト (7.5YR3/1) 粘性やや強。植物遺体少混。径 1~5mm 礫粒少混。径 20mm 以下粗朶状有機物混。

道路 1 道路外盛土
2　黒褐色砂質シルト (10YR3/1) 粘性弱。締まりやや強。植物遺体微混。径 1~5mm 礫粒多混。径 1~2cm 礫粒混。
3　黒褐色砂質シルト (7.5YR3/1) 粘性やや弱。植物遺体微混。径 1~5mm 礫粒混。径 5cm 以下灰褐色粘土ブロック少混。
4　黒褐色粘土質シルト (7.5YR3/1) 粘性やや強。締まりやや弱。植物遺体微混。径 1~5mm 礫粒少混。
5　黒褐色砂質シルト (10YR3/1) 径 1~2cm 粗朶状木少混。径 1~5mm 礫粒混。径 5cm 以下灰褐色粘土ブロック少混。

道路 1
6　灰褐色シルト質粘土 (7.5YR4/2) 粘性強。締まり強。径 1~2cm 礫主体。径 2~5cm 程度平形礫少混。道路面。
7　黒褐色粘土質シルト (7.5YR3/1) 粘性やや強。締まりやや強。植物遺体混。径 1~5mm 礫粒少混。径 5~30mm 礫少混。径 1~2cm 粗朶状木片混。
8　黒褐色粘土質シルト (10YR3/1) 粘性やや強。植物遺体少混。径 1~5mm 礫粒少混。径 1~2cm 粗朶状木片少混。
9　黒褐色粘土質シルト (7.5YR3/1) 粘性やや強。植物遺体混。径 1~5mm 礫粒少混。径 5~30mm 礫少混。径 1~2cm 粗朶状木片混。
10　褐灰色シルト質砂礫 (10YR4/1) 粘性弱。締まり強。径 1~5mm 礫粒多混。径 10cm 以下礫混。
11　黒褐色粘土質シルト (7.5YR3/2) 粘性やや弱。締まりやや弱。植物遺体少混。径 1~5mm 礫粒多混。道路の一部。
12　褐灰色砂礫 (10YR4/1) 粘性弱。締まり強。径 1~2cm 粗朶状木片混。径 10cm 以下礫混。加工木・木製祭祀遺物混。
13　灰黄褐色砂礫 (10YR4/2) 粘性弱。締まり強。径 1~2cm 粗朶状木少混。径 10cm 以下礫多混加工木・木製祭祀遺物混。
14　褐灰色砂礫 (7.5YR4/1) 粘性弱。締まりやや強。径 1cm 以下炭化物少混。径 1cm 以下礫粒多混。径 1~2cm 木片少混。
15　褐灰色砂質シルト (7.5YR4/1) 締まりやや弱。径 5mm 以下礫粒混。
16　暗灰黄色砂礫 (2.5Y5/2) 粘性なし。締まり強。径 5mm 以下礫粒多混。径 2cm 以下礫少混。径 1~2cm 程度の木片少混。黄灰色砂礫が斑状に混。
17　黄褐色砂礫 (2.5Y5/3) 粘性なし。締まり強。径 5mm 以下礫粒多混。径 2cm 以下礫混。黄灰色砂礫がブロック状に混。
18　黒褐色砂質シルト (10YR3/1) 径 5mm 以下礫粒混。植物遺体・木質繊維少混。

第309図　P14区道路１土層断面図

道路盛土

盛土の構築は概ね下位から上位へ順に土が盛られる構造だが、様相は上層、中層、下層で多少異なる。上層は、黒褐色の粘土質シルトと細礫、粗朶状の簡易な加工木が混ざる土質である。整った敷粗朶はみられない。北東斜面裾の一部では、道路面の一部と思われる多数の細礫と粘土の混ざる部分がみられた。

中層は、褐灰色ないし灰黄褐色の砂礫を主体とする土質で、拳大以下の礫や加工木を多く含んで締まりがよい。下層は、褐灰色の礫粒を主体とする土質で、加工木や板材を含む。そのほか、盛土中には径50cmを超える大型の礫が多数含まれていた。これらの礫は北東斜面からの崩落等に由来すると思われ、道路敷設位置やその周辺に存在したものを道路の盛土を補強するために利用したと考えられる。盛土は路面や路肩にかなり崩壊が認められ、上層と中層以下では含まれる土器に時期差があることから、上層部分は改修時の盛土と考えられる。盛土の南西端部にも構築時とは異なる土質の箇所があり、これも改修痕跡と考えられる。

また、道路盛土より平野側のⅢ層下部からⅣ層上部で径３～30cm程度の礫が多数散乱していたことから、道路が機能してい

た最終段階か、もしくは廃絶後に何らかの目的で意図的に道路盛土が破壊されていた可能性がある。

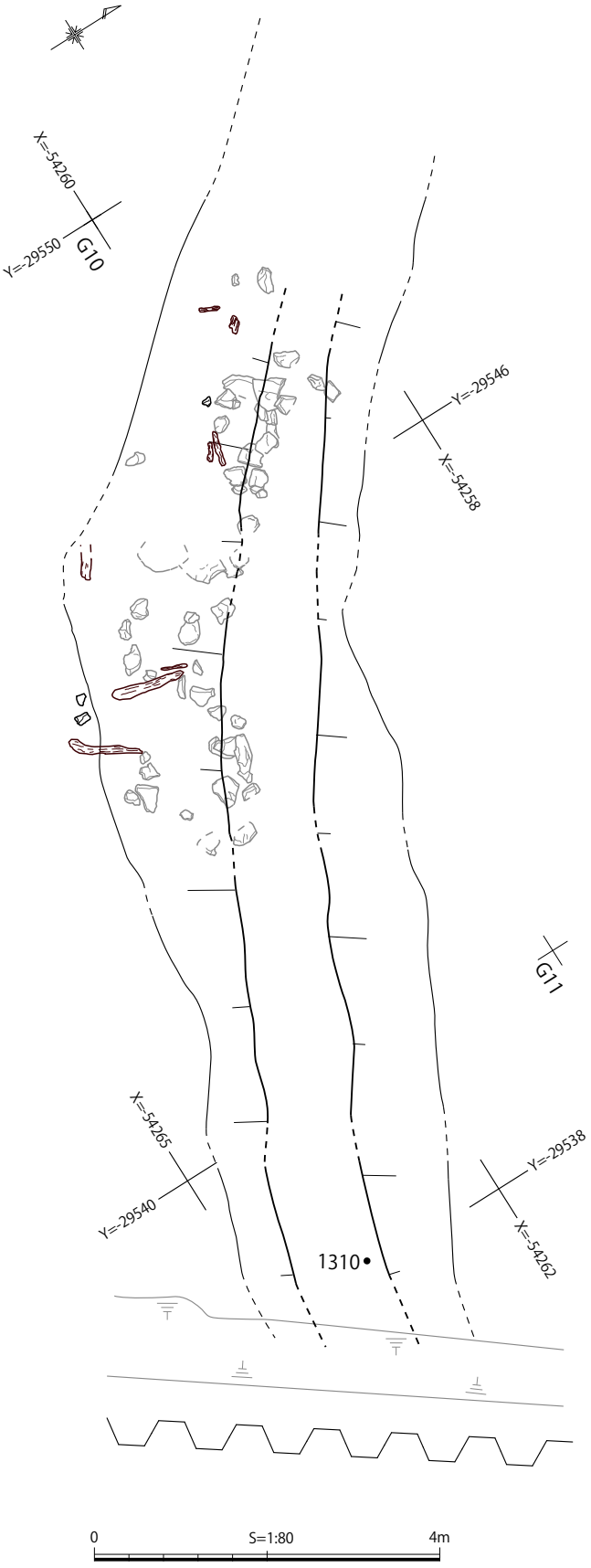
遺物は盛土内から馬形や人形などの木製祭祀具が多数出土しており、上層と下層で密度が高い。加工木や板材も多少含まれる。土器は、上層で８世紀中頃から後半の須恵器坏･高台付坏･蓋などが、中層以下で７世紀末から８世紀初頭の須恵器甕、壺、横瓶、高台付坏、蓋などが出土している。

本遺構は、出土遺物や他調査区道路１との比較から７世紀末から８世紀初頭に構築され、その後改修しつつ機能し、遅くともⅢ層が堆積し始める12世紀頃までには廃絶したものと推定される。盛土内から出土した粗朶について放射性炭素年代測定を行ったところ、２σ暦年代範囲 で678－778calAD(94.1%)、684－771calAD(95.4%)、768－882calAD(92.5%) の結果を得た。道路の敷設時期や改修時期を概ね示していると考えられる。

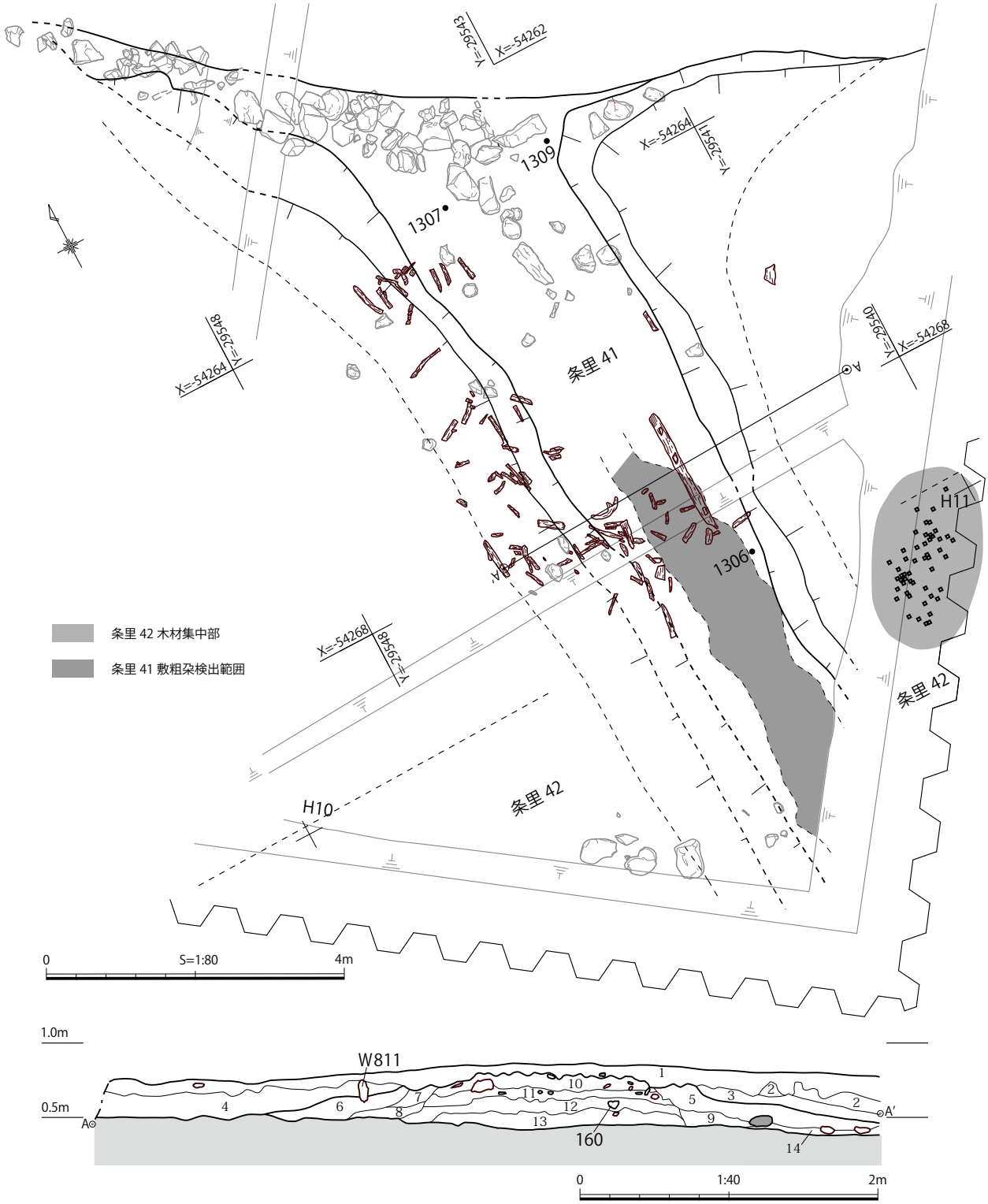
道路外盛土(第304・305・309・310図　ＰＬ.83－１・84－１)

道路盛土の外側に構築された盛土遺構で、北西－東西にほぼ直線的に延びる。道路盛土裾及び崩落部分に乗り上げるように築かれている。構築当時は道路盛土との間に側溝が存在したことが想定されるが、道路盛土や外盛土の崩落に伴って側溝もその形状を留めていないものと推測される。平野側には条里41が被覆し接続する。条里41との接続を意識してか、接続部付近の外盛土裾部分は平野側にやや張り出した形状となっている。

盛土の規模は、上面幅が約0.7 ～ 1.2m、基底部幅が約2.5 ～ 3.5mで、盛土の高さは最大約35cmである。盛土上面の標高は約0.7m前後で、残存している道路上面よりも30cm程度、条里遺構の上面より15cm程度低い。盛土は黒褐色の砂質シルトないし粘土質シルトを主体とし、



第310図　Ｐ14区道路１道路外盛土



Ⅲ層　1　黒褐色シルト質泥炭 (10YR2/2) 粘性やや弱。しまりやや弱。径 2~10 ㎜砂礫混。径 1 ㎝程度木片少混。植物遺体多混。著しい撹拌。泥炭。Ⅲ層。

Ⅳ層　2　黒褐色粘土質シルト (10YR3/1) 粘性強。径 2~5 ㎜礫粒微混。植物遺体少混。Ⅳ層。

Ⅳ層　3　黒褐色粘土質シルト (10YR3/1) 粘性強。径 2~5 ㎜礫粒微混。径 5~10 ㎜木片少混。植物遺体少混。Ⅳ層。

Ⅳ層　4　黒褐色粘土質シルト (10YR3/1) 粘性強。径 2~5 ㎜礫粒混。径 5~10 ㎜木片少混。植物遺体少混。径 1~5 ㎝灰黄褐色粘土ブロック混。Ⅳ層。

条里 41　5　黒褐色シルト質粘土 (10YR3/1) 粘性強。径 2~5 ㎜礫粒混。径 5~20 ㎜木片混。径 1~5 ㎝灰黄褐色粘土ブロック混。

条里 41　6　黒褐色シルト質粘土 (10YR2/2) 粘性やや強。径 2~5 ㎜礫粒混。径 5~20 ㎜木片少混。径 1~5 ㎝灰黄褐色粘土ブロック混。

条里 41　7　黒褐色シルト質粘土 (10YR2/2) 粘性やや強。径 2~5 ㎜礫粒混。径 5~20 ㎜木片多混。径 1~5 ㎝灰黄褐色粘土ブロック少混。

条里 41　8　黒褐色シルト質粘土 (10YR2/2) 粘性やや強。しまりやや弱。径 2~5 ㎜礫粒混。径 1~5 ㎝灰黄褐色粘土ブロック少混。

条里 41　9　黒褐色シルト質粘土 (10YR2/2) 粘性やや強。しまりやや弱。径 2~5 ㎜礫粒混。径 1~5 ㎝灰黄褐色粘土ブロック少混。

条里 41　10 黒色粘土質シルト (7.5YR2/1) 径 2~5 ㎜礫粒混。径 1~2 ㎝・長さ 5~30 ㎝程度木枝片多混、長さ 30 ㎝以上少混。盛土長軸方向にほぼ揃う敷粗朶層。

条里 41　11 黒褐色砂礫質シルト (7.5YR2/2) 粘性やや弱。しまり強。径 2~5 ㎜礫粒多混。径 1~2 ㎝木枝片混。長さ 5~30 ㎝程度木枝少混。盛土長軸方向に揃う粗朶層。

条里 41　12 黒色粘土質シルト (7.5YR2/1) 粘性やや強。径 2~5 ㎜礫粒多混。径 1~2 ㎝木枝片少混。径 1~5 ㎝灰黄褐色粘土ブロック少混。

条里 41　13 黒色粘土質シルト (10YR2/1) 粘性やや強。径 2~5 ㎜礫粒混。径 1~2 ㎝木枝片混。径 1~5 ㎝灰黄褐色粘土ブロック混。

条里 41　14 黒色砂質シルト (2.5Y2/1) しまりやや弱。径 1 ㎜以下細砂主体。径 1~2 ㎜粗砂微混。板状木片混。

第311図　P14区条里41・42

径５mm以下の礫粒、微細有機物、灰褐色粘土ブロックを含む。条里遺構と一体となった構造で構築されており、道路外盛土をある程度盛り上げた段階で条里41を道路外盛土の上部に被覆し接続されている。条里41との接続部付近の盛土内には、径５～30cm程度の礫が多く配されている。道路盛土の崩落土及び礫を再利用して接続部の盛土を補強する目的と推測される。同様の構造はP12区でも確認されている。盛土内には自然木の枝片などが含まれていたが、明確な敷粗朶は確認できていない。遺物は、馬形、斎串などの木製祭祀具や用途不明の加工木、土器では10世紀後半の土師器坏などが出土している。

出土遺物や他調査区の道路外盛土、条里遺構との比較から、本遺構は10世紀後半に構築されたものと推定される。道路盛土を補強するとともに、道路空間と条里による耕地空間を明瞭に区別する区画施設としての性格が考えられる。

３　条里遺構

条里41（第309・311図　ＰＬ.84－２,３・85－１,２）

Ｐ14区のＦ10、Ｇ10・11、Ｈ10グリッド、調査区中央付近から南隅にかけての範囲で検出された南北方向に延びる盛土遺構である。方位はＮ－１°－Ｗである。北端は道路１外盛土に接続し、接続部は本遺構が道路１道路外盛土に被覆するようにして接続する。

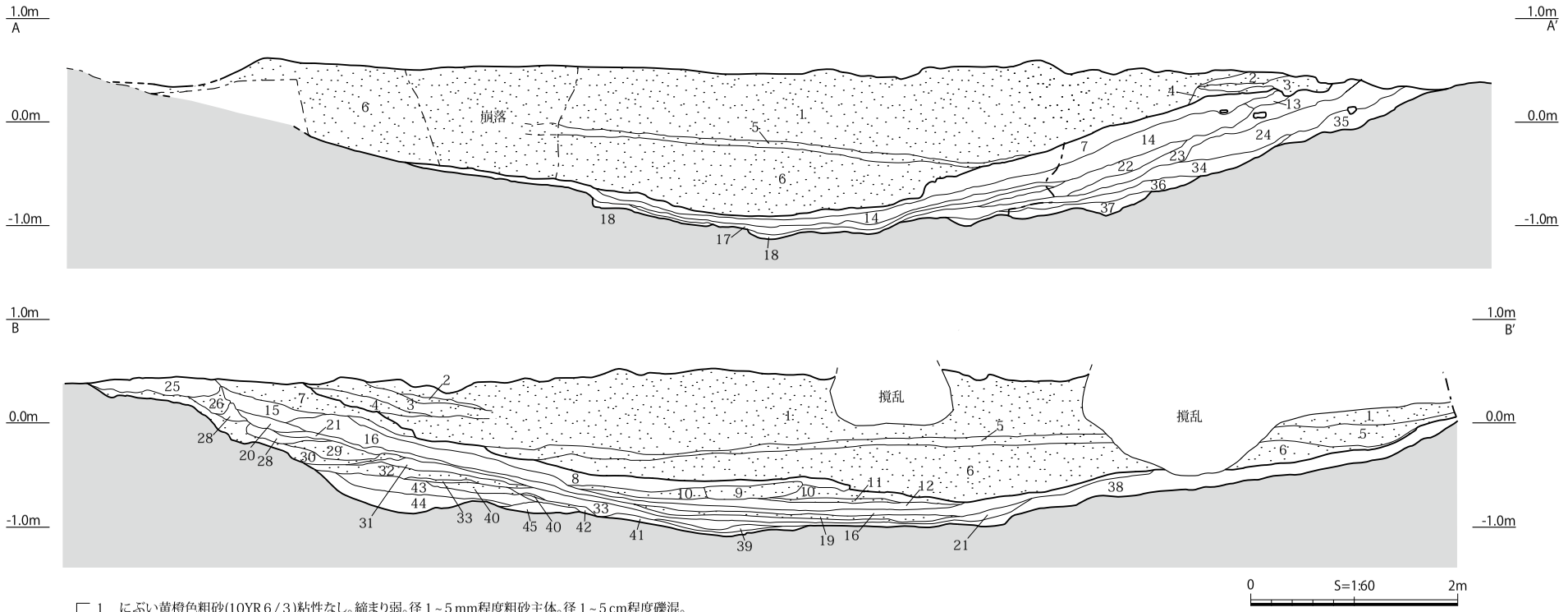
盛土の規模は、上面幅約1.9～2.4m、基底部幅は推定で約3.7～4.5m、盛土の高さは最大約40cmで、盛土上面の標高は0.8m前後である。盛土は黒褐色ないし黒色の粘土質シルトを主体とし、礫粒、炭化物、下層由来の灰黄褐色粘土ブロックなどを含む。盛土の構築は、概ね下位から上位へ順に土が盛り上げる構造で、土層断面では大きく４層に分かれる。Ａ－Ａ’断面の10～13層がそれに該当する。最上層の10層とその下位の11層で敷粗朶がみられる。10層は、枝をはらった程度の木枝を盛土の延伸方向に合わせて密に敷いた粗朶層で、小礫粒も混在している。11層も10層と同様に敷粗朶の一部で、10層に比して混和される小枝は少なく、砂礫質で締まりが強い。10・11層の敷粗朶は、盛土表層を補強し、排水性の向上を意図したと考えられる。12層には敷粗朶はみられないが、小礫粒を多く含む。13層が最下層で小礫粒や小枝、自然木などの木材がやや多い。

また、道路外盛土との接続部付近の盛土内には、径５～30cm程度の礫が多く充填されており、盛土芯を共有していると考えられる。したがって、本遺構と道路外盛土は一体で構築されたことが分かる。この他に盛土法面には、盛土構築以後の崩落、流出に伴い改修した盛土が確認できる。
遺物は盛土中から斎串、刀形などの木製祭祀具や紡織具、用途不明の加工木などが出土し、土器では10世紀の土師器杯、高台付坏などが出土している。

遺構の時期は、出土遺物や道路外盛土との関係から、10世紀後半に構築されたと推定される。盛土から出土の粗朶について放射性炭素年代測定を行ったところ、２σ暦年代範囲で801－904calAD（53.4%）、917－966calAD（32.7%）の結果を得た。一町方格内を12歩（約21m）に分割する条里遺構と考えられる。

条里42（第311図　ＰＬ.85－３・86－１）

Ｐ14区Ｈ10グリッド、調査区南隅で確認された。平面的な盛土の検出はできていないが、調査区南東壁の土層断面での確認と、加工木材が密に出土していること、Ⅲ層直下で本遺跡の一町方格に特有の石敷きとみられる礫が面的に出土していたことから、条里遺構と認識した。本遺構の存在が推定さ



河道６（新）
1　にぶい黄橙色粗砂(10YR６/３)粘性なし。締まり弱。径１~５mm程度粗砂主体。径１~５cm程度礫混。
2　灰黄褐色粗砂混細砂(10YR６/２)粘性なし。径１mm以下粗砂主体。褐灰色シルト混。
3　褐灰色細砂(7.5YR４/１)粘性なし。径５mm以下炭粒少混。径１cm以下有機物少混。灰白色渦状ラミナ。水滞留か。
4　にぶい黄橙色粗砂(10YR６/３)粘性なし。締まり弱。径１~５mm程度粗砂主体。一部褐灰色シルト混。有機物少混。
5　褐灰色細砂(7.5YR６/１)粘性弱。下層の一部で薄い層状に植物遺体・粘土混。
6　にぶい黄橙色粗砂(10YR６/３)粘性なし。締まり弱。径１~５mm程度粗砂主体。上層に最大厚30cm程度で細砂堆積。

河道６（古）
7　褐灰色シルト質細砂(7.5YR４/１)粘性弱。締まりやや弱。径５mm以下炭粒混。径１~３cm、長さ10~15cm程度小枝混。灰白色細砂混。
8　褐灰色砂質シルト(7.5YR４/１)粘性やや弱。径１cm以下有機物少混。灰白色細砂混。
9　にぶい黄橙色細砂(10YR６/３)粘性なし。締まり弱。径１~５mm粗砂主体。
10　黄灰色細砂(2.5Y６/１)粘性なし。締まりやや強。径１mm以下細砂主体。
11　褐灰色砂質シルト(7.5YR４/１)締まりやや強。径１mm以下灰白色細砂少混。一部微細有機物薄く堆積。ラミナ。
12　褐灰色砂質シルト(7.5YR５/１)粘性やや弱。締まりやや強。径１mm以下灰白色細砂混。一部微細有機物薄く堆積。ラミナ。
13　褐灰色シルト質細砂(10YR５/１)粘性弱。締まりやや弱。径５mm以下炭粒混。径・長さ１~３cm程度小枝混。灰白色細砂少混。
14　褐灰色シルト質細砂(7.5YR４/１)粘性弱。締まりやや弱。径５mm以下炭粒混。径１cm程度有機物少混。灰白色細砂混。ラミナ。
15　黒褐色砂質シルト(10YR３/１)粘性やや強。径１mm以下細砂混。径１cm以下有機物混。植物遺体混。
16　黒褐色砂質シルト(7.5YR３/１)粘性やや強。径１mm以下灰白色細砂少混。一部微細有機物薄く堆積。
17　灰黄褐色シルト質細砂(10YR５/２)粘性弱。締まりやや弱。径５mm以下炭粒少混。植物遺体少混。ラミナ。
18　黒褐色粘土質シルト(7.5YR３/１)粘性強。締まり弱。径１mm以下細砂少混。上層の一部に微細有機物混。
19　灰黄色細砂(2.5Y６/２)粘性なし。径１mm以下細砂主体。部分的に径１~２mm粗砂混。
20　黒褐色砂質シルト(7.5YR３/１)径１mm以下粗砂少混。
21　褐灰色砂質シルト(7.5YR４/１)粘性やや弱。径１cm以下有機物少混。所々で筋状に灰白色細砂混。ラミナ。
22　褐灰色砂質シルト(7.5YR４/１)締まりやや弱。径２~３mm程度有機物少混。灰白色細砂混。ラミナ。
23　褐灰色粘土質シルト(10YR４/１)粘性やや強。締まりやや弱。径３cm以下程度有機物混。径３cm以下灰褐色土ブロック混。
24　褐灰色砂質シルト(7.5YR４/１)締まりやや弱。径５mm以下炭粒少混。植物遺体少混。灰白色細砂混。ラミナ。

河道６（古）
25　褐灰色砂質シルト(7.5YR５/１)粘性やや弱。径５mm以下炭粒少混。径１cm以下有機物少混。
26　褐灰色粘土混粗砂細砂(10YR５/１)粘性やや弱。植物遺体少混。径５mm以下炭粒少混。径２mm以下粗砂多混。
27　褐灰色砂混粘土(10YR５/１)粘性強。径１cm以下有機物混。径５mm以下炭粒混。径１mm以下粗砂少混。
28　褐灰色砂質シルト(7.5YR４/１)締まりやや弱。径５mm以下炭粒少混。径２mm以下粗砂少混。
29　灰黄色粗砂(2.5Y６/２)粘性なし。締まりやや強。径１mm以下粗砂主体。
30　黒褐色シルト質細砂(7.5YR３/１)粘性弱。締まりやや弱。径１mm以下細砂主体。径２mm以下粗砂混。炭粒少混。
31　褐灰色砂質シルト(7.5YR４/１)締まりやや弱。径５mm以下炭粒少混。径２cm以下有機物少混。灰白色細砂少混。
32　褐灰色シルト質細砂(7.5YR４/１)粘性弱。締まり弱。細砂主体。
33　黄灰色粗砂(2.5Y６/１)粘性なし。締まり弱。径１mm程度粗砂主体。
34　褐灰色シルト質細砂(7.5YR４/１)粘性弱。締まり弱。径５mm以下炭粒・有機物少混。灰白色細砂多混。ラミナ。
35　黒褐色粘土質シルト(10YR３/１)粘性やや強。径１~５cm小枝・丸木混。径３cm以下灰褐色粘土ブロック混。
36　褐灰色粘土質シルト(7.5YR４/１)粘性やや強。締まりやや弱。径５mm以下有機物少混。灰白色細砂少混。ラミナ。
37　褐灰色粘土質シルト(7.5YR４/１)粘性やや強。締まりやや弱。灰白色細砂多混。ラミナ。
38　褐灰色粘土質シルト(10YR４/１)粘性やや強。締まりやや弱。径１cm以下有機物少混。径５mm以下炭粒少混。径１mm以下粗砂細砂少混。ラミナか。
39　褐灰色粘土混砂礫(7.5YR４/１)締まりやや強。径１cm以下炭粒・有機物少混。径１mm以下粗砂細砂多混。所々筋状に灰白色細砂少混。ラミナか。
40　褐灰色シルト質細砂(7.5YR４/１)粘性弱。締まり弱。径５mm以下有機物少混。
41　黒褐色砂礫混シルト(7.5YR３/１)粘性やや強。径１mm以下粗砂細砂多混。径５mm以下炭粒少混。
42　黄灰色細砂(2.5Y６/１)粘性なし。締まりやや弱。径１mm以下細砂主体。褐灰色シルト混。
43　褐灰色粘土質シルト(7.5YR４/１)粘性やや強。径１cm以下炭粒・有機物少混。灰白色細砂少混。ラミナ。
44　褐灰色砂質シルト(7.5YR４/１)粘性やや強。締まりやや弱。灰白色細砂多混。ラミナ。
45　黒褐色粘土質シルト(10YR３/１)粘性強。径１mm以下細砂少混。

第312図　Ｐ14区河道６土層断面図

れる調査区南隅は条里41と交差する部分にあたるが、その先後関係は掴めていない。

遺物は、主として調査区南東壁際付近からアカ取りなどの木製品や用途不明の加工木がまとまって出土しているが、土器は出土していない。

遺構の時期は、条里41との関係から、10世紀後半と推定される。位置や石敷きがみられることから、既述のように一町方格の条里遺構である可能性が高い。

４　河道

河道14（第304・305図　ＰＬ.86－２）

Ｐ14区Ｆ10・11、Ｇ10・11グリッド、調査区北東斜面裾付近から平野側中央付近で確認された。範囲としては道路１の範囲と重なる部分が多い。下位の河道６がほぼ埋没した後の埋土上面に形成された小規模な自然河道である。

詳細な規模の把握はできていない。調査区南東壁の断面からの参考値になるが、幅は約７m、深さは概ね５～10cm程度で底面は凹凸を成し、部分的に深さ20cm程度の窪みを有する。遺物は、馬形や斎串などの木製祭祀具が目立ち、用途不明の加工木や須恵器などが出土している。

遺構の時期は、出土遺物や他調査区河道14との関係から、７世紀後半から８世紀前半と推定される。土層断面の観察から一時期の河道ではなく、複数時期にわたる河道の集合体と考えられる。木製祭祀具の出土が多く、祓などの祭祀に用いられた河道と考えられる。

河道６（第307・312図）

Ｐ14区Ｆ・Ｇ９～11グリッド、調査区北東斜面裾から南西壁付近に至る平坦部のほぼ全域で検出した。Ｐ６～Ｐ16区で確認されている南東から北西へ流下する大規模な河道の一部である。北東斜面裾付近は崩落土に被覆されており、安全上の理由から端部を明確には確認できていない。河道には新旧があり古段階と新段階に分けられる。いずれの段階にも護岸施設は見当たらない。

古段階は、確認した範囲での幅が13m以上、深さは最大1.5m程である。底面の標高は最深部で－1.2m前後を測る。埋土は砂質及び粘土質のシルトや細粒砂が互層状に堆積しており、流水と滞水を繰り返しながら埋没したことが窺える。

新段階は、確認した範囲での幅が11m以上、深さは最大1.4m程である。底面の標高は最深部で－0.9m前後を測る。埋土は粗粒砂を主体としており、古段階とは対照的に短期間のうちに埋没したと考えられる。

遺物は、古段階の埋土から舟や工具の柄と思われる木製品、用途不明の加工木などが出土している。新段階の埋土からは、杭や用途不明の加工木が出土している。古段階の埋土と新段階の埋土の境目付近で古墳時代中期から後期の土師器が出土している。

遺構の時期は、出土遺物や他調査区の河道６との比較から、古段階が古墳時代中期から後期、新段階が古墳時代後期と推定される。新段階の埋土内から出土の木材について放射性炭素年代測定を行ったところ、２σ暦年代範囲で430－493calAD（35.5%）、530－593calAD（59.9%）の結果を得ており、概ね齟齬はない。

第３項　Ⅵ層の遺構（弥生時代後期～古墳時代前期）

１　概要（第307図）

Ⅵ層では杭列１基を検出した。用途や目的ははっきりしておらず、他に遺構は検出されていない。他の調査区においても類似する遺構は確認されていない。Ⅴ層上面で検出された河道６の前身的な河道は確認されていないが、本来、この段階の河道が存在していた可能性は高い。

遺物は、杭周辺から土師器片が出土しており、僅かに棒状や板状の加工木が出土している。

２　杭列

杭列22（第307図）

Ｐ14区Ｇ10グリッド、調査区南隅付近で４本からなる杭列が確認された。河道６の南西法面の埋土を除去したところで杭頂部を検出した。西側からの３本はほぼ鉛直方向に打設され直線的に並ぶ。東端の１本はかなり傾いており、他の３本とは直線的に並ばない位置にあることから原位置を保っていない可能性が高い。

杭の長さは約60 ～ 70cm、杭の径は約３～５cm、杭頂部と下端の標高はそれぞれ0.2m前後、－0.5m前後である。杭の間隔は約20 ～ 25cmである。杭は自然木を簡易に加工した程度のものである。

周辺から出土した遺物や河道６との関係等から、遺構の時期は弥生時代後期から古墳時代前期と推定される。護岸などの構造物の一部の可能性はあるが、極めて狭い範囲でしか認識できず、その用途や性格は判然としない。

第４項　Ⅶ層の遺構（弥生時代中期～後期）

１　概要（第307図）

Ⅶ層では杭群１基を確認した。明確な範囲は把握できておらず、用途や性格も明確ではない。Ｐ11区においてほぼ同時期と思われる杭列が確認されているが、類似するかは定かではない。同一面から他に遺構は確認されていない。遺物は、付近からわずかに弥生土器の小片が出土している。

２　杭群

杭群９（第307図）

Ｐ14区Ｇ９グリッド、調査区西隅付近で、河道６の古段階及びⅥ層の掘削終了時に杭上端が露出するかたちで検出した。杭は確認できただけでも10数本を数えるが、調査区壁面際で確認しきれなかったものがあると推測され、20本を超える可能性が高い。

杭の長さは約60 ～ 80cm、径は約４～５cmである。杭頂部の標高は0.5m前後である。杭周辺には径５～ 10cm程度の形状が歪な礫が散在し、杭材に類似する木材が横倒しになった部分がみられる。杭は基本的に乱雑に打設されているが、局所的には列をなす箇所もある。

遺物は杭の周辺から弥生土器小片が若干数出土している。

遺構の時期は、出土遺物と検出層位から弥生時代中期から後期と判断したが、杭の下端はⅨ層にまで達しているため時期が遡る可能性もある。漁撈に関する構造物や水量をコントロールする機能などが考えられるが、具体的な性格は明らかにしえない。

第６項　Ⅸ層の遺構（縄文時代後期～晩期）

１　概要（第313図）

Ⅸ層では杭群１基を確認した。明確な範囲や杭本数の把握はできていないが、Ⅸ層確認部分のほぼ全域に広がり、杭の本数は200を超える。用途や性格は明確ではないが、隣調査区のＰ13区においても類似した時期の杭列が確認されており関連性が窺える。杭以外の遺物としては、Ⅸ層から縄文時代晩期の深鉢が出土している。

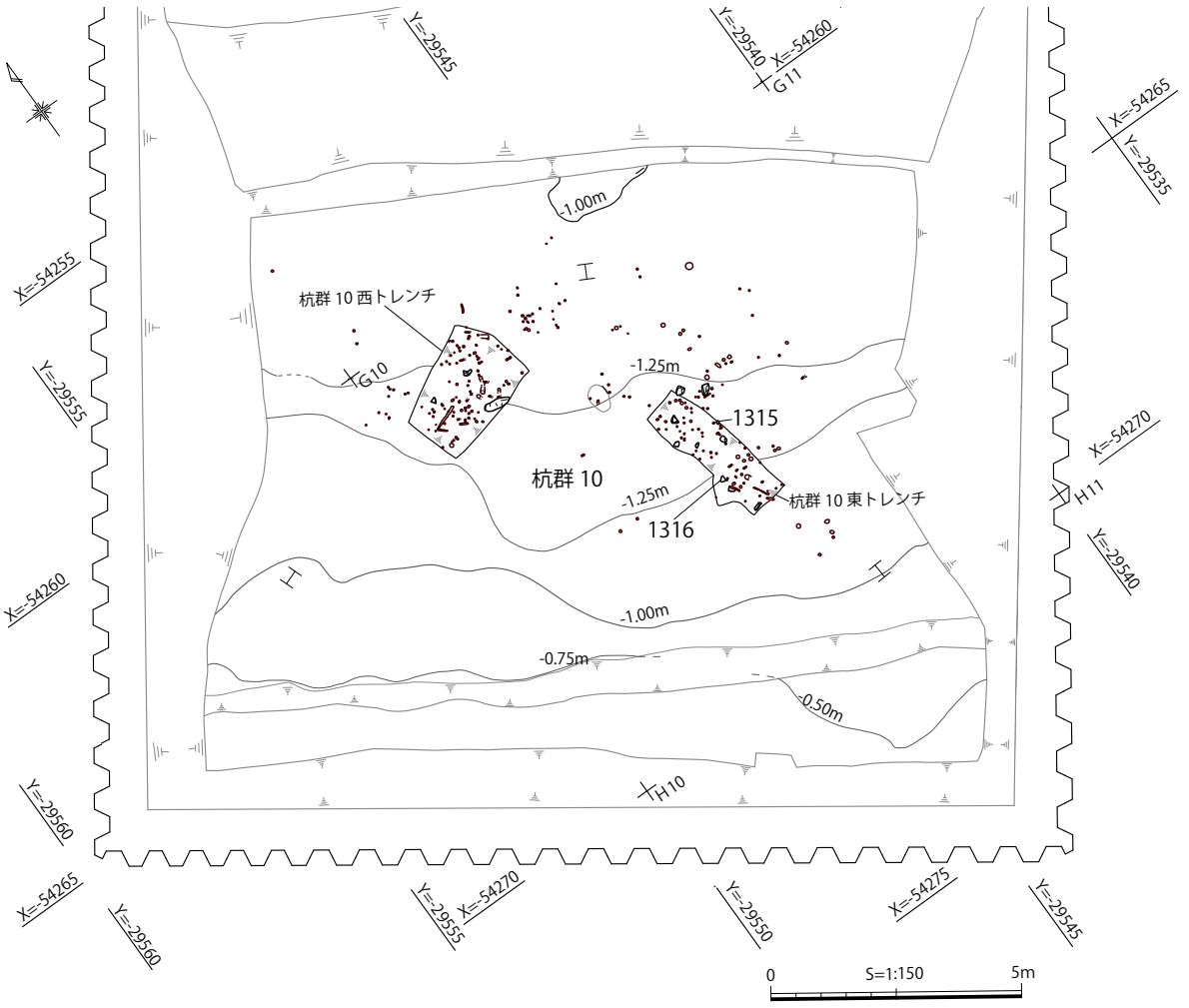
２　杭群

杭群10（第314図）

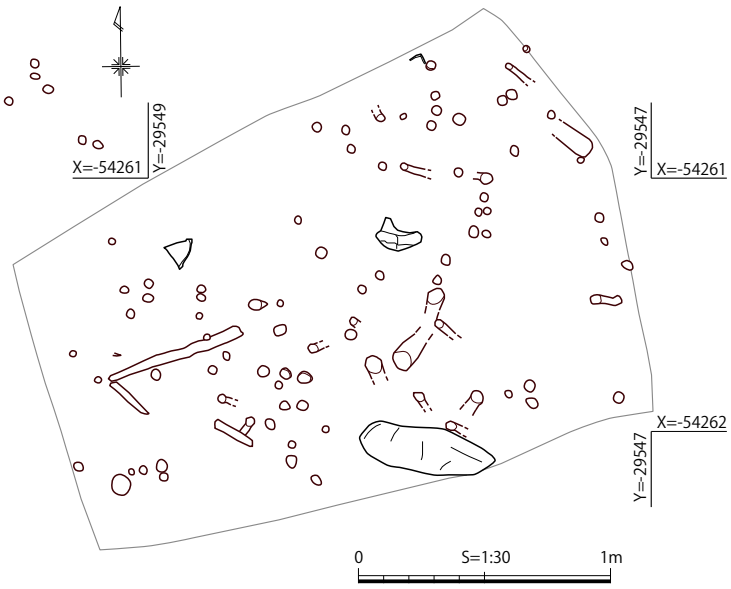
Ｐ14区Ｆ・Ｇ９～10グリッド、調査区北東斜面より南西のⅨ層上面で確認された。杭の分布は広範囲に広がるが、地形的に緩やかに撓んだ調査区中央付近でとくに密集している。

杭下端まで掘削が及んでいないため確認部分のみの数値になるが、杭の長さは概ね40cm以上、杭の径は３～10cm、杭頂部の標高は－1.3～－1.5mである。

確認された杭は、北西－南東が約12m、北東－南西が約７mの楕円を呈する範囲内に位置する。杭の密度が高い部分にトレンチを設定し、さらに10～15cm程度深くⅨ層を掘削したところ、杭が２本対になって列をなす部分や、対となる杭の間に杭と同程度の径の丸木が横たえた箇所が確認できた。



第313図　Ｐ14区Ⅸ層上面遺構分布図



第314図　Ｐ14区杭群10

また、杭が円形の配置を採る箇所や、杭の近辺に径５～ 20cm程度の礫が散在する箇所もある。

杭は規則的な配列が窺える箇所や雑然と密集する箇所があり、杭頂部の高さが一様でないことなどから、複数時期にわたり打設されたと考えられる。

遺構の時期は、Ⅸ層から出土した土器から縄文時代後期から晩期と推定される。杭１点について放射性炭素年代測定を行ったところ、２σ暦年代範囲で1388－1339calBC(25.3%)、1317－1217calBC(70.1%)の結果を得ており、考古学的な年代観と矛盾はない。性格は漁撈に関する構築物や水流をコントロールする機能などが考えられる。

第 20 節　Ｐ 15 区の調査

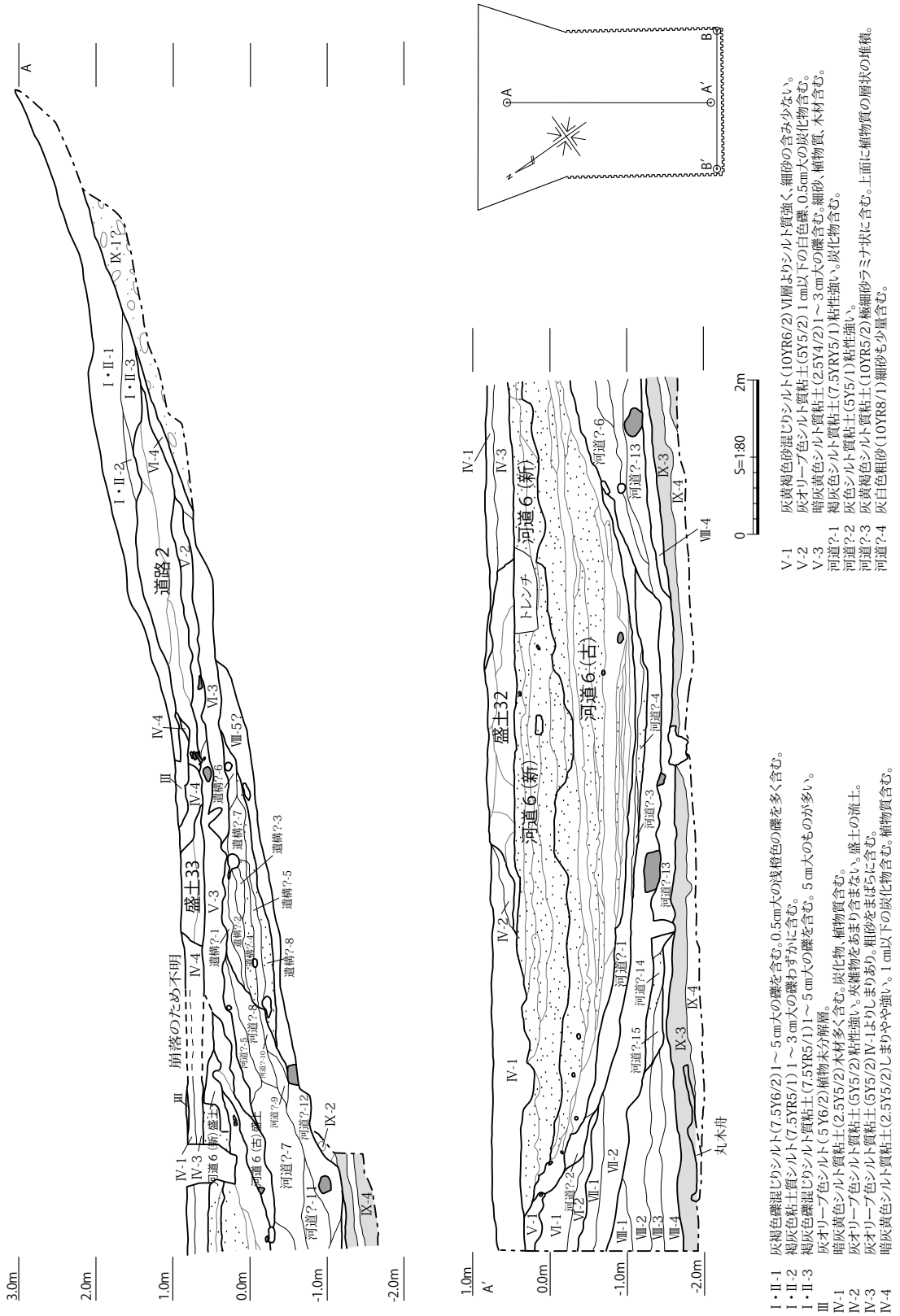
第１項　調査区の概要

１　地形と土層堆積

P15 区は青谷横木遺跡の西側、P14 区と P16 区の間に位置する。北東側の丘陵斜面地から平地にかけて調査区となっている。平地部分は水田として利用されている。調査区は、長辺が南西－北東で約 31 m、短辺が南東－北西で約 19 m、北東側の丘陵斜面部では短辺が約 27 mに広がる。また、東側の丘陵斜面地には、調査前から横穴式石室と思われる組み合った石材が露出していた。平成 26 年度に調査を行い、調査面積は 572㎡を測る。

調査区全域で、基本層位であるⅠ～Ⅸ層まで確認している（第 315 ～ 317 図）。全体的に、北東側の丘陵から平地にかけてやや堆積が下がっているが、Ⅴ層以下では南西側からも下がっている。これは、Ⅴ層以下では、河道が調査区を常に横断していたためと考えられる。Ⅰ・Ⅱ層は近世から現代の造成土と水田耕作土である。Ⅲ層はいわゆる泥炭層であるが、粘土質が強い部分や一部Ⅳ層との混じった土など土壌化した部分ある。また、南西壁では、Ⅲ層と類似した盛土の可能性のある土層も検出している。Ⅳ層は、層厚が 0.5 mほどでかなり厚く、底面もほぼ水平に近い。層内からは土器や木簡、木製祭祀具を含む木器などが出土しているが数は多くはない。Ⅴ層は南西壁で途切れ途切れに認めら

れるが、これは調査区境と河道６南側の立ち上がり部分とが重なっているためである。南側では砂を含んでおり、河道６の埋土との撹拌によって混じったものと考えられる。また、木製祭祀具（W999～W 1016）が多量に出土しているが、これらのほとんどが、主に調査区南西側のⅣ層、条里遺構、盛土遺構と河道６との境付近で出土しており、大半は河道６に帰属する。Ⅵ層はやや砂が混入するが、Ⅴ層ほどではない。Ⅵ層上面、もしくはⅥ層内で、南西壁の遺構？－１・２層や中央壁の河道？－１



第315図　P15区中央壁土層断面図（１）

Ⅵ-1　灰色細砂混じりシルト質粘土(5Y5/1)全体的に細砂を含む。炭化物含む。
Ⅵ-2　暗灰黄色粘土質シルト(2.5Y5/2)細砂を含みラミナあり。粘土ブロック含む。
Ⅵ-3　灰黄褐色シルト質粘土(10YR6/2)細砂わずかに含み、１～５㎝の粘土ブロック含む。木材、植物質多く含む。
Ⅵ-4　褐灰色礫混じり粘土(10YR6/1)１～５㎝大の礫含む。
Ⅶ-1　黄灰色シルト質粘土(2.5Y4/1)炭化物、植物含む。細砂含む。粘土ブロックあり。
Ⅶ-2　灰黄色シルト質粘土(2.5Y6/2)Ⅶ-1よりも粘性強い。ラミナ状に細砂含む箇所あり。
河道?-5　暗灰黄色粘土質シルト(2.5Y4/2)細砂多く含みラミナ顕著。木材、植物質多く含む。
河道?-6　褐灰色粘土質シルト(7.5YR4/1)粗砂、細砂を多く含み。木材、植物質多く含む。
河道?-7　灰黄褐色粘土質シルト(10YR5/2)粗砂、細砂を多く含む。ブロック状に含む箇所あり。木材、植物質も多く含み、盛土の可能性あり。
河道?-8　灰黄褐色粘土質シルト(10YR5/2)細砂を全体にまばらに含み、木材、植物質多く含む。３㎝大の礫含む。
河道?-9　灰褐色粘土質シルト(7.5YR5/2)細砂含み、ラミナあり。
河道?-10　灰黄褐色シルト質粘土(10YR5/2)細砂まばらに含む。木材含む。
河道?-11　灰褐色シルト質粘土(7.5YR4/2)と灰白色粗砂(10YR7/1)の互層
河道?-12　灰褐色シルト質粘土(7.5YR4/2)細砂をわずかに含む。木材、植物質を含む。
河道?-13　褐灰色粗砂(10YR5/1)細砂も含む。木材含む。
河道?-14　灰白色粗砂(2.5Y8/1)細砂も含む。
河道?-15　灰褐色シルト質粘土(7.5YR4/2)粗砂まばらに含む。木材含む。
遺構?-1　灰黄褐色粘土質シルト(10YR5/2)細砂を全体に含み、粘土ブロック含む。植物質含む。
遺構?-2　にぶい 黄橙色砂混じりシルト質粘土(10YR5/3)粗砂、細砂を多く含む。ラミナ状の箇所あり。木材、植物質多く含む。
遺構?-3　灰黄褐色砂混じりシルト質粘土(10YR6/2)粗砂、細砂含むが、遺構?-２より少ない。
遺構?-4　褐灰色粗砂(10YR5/1)中砂も含む。
遺構?-5　にぶい黄橙色シルト質粘土(10YR5/3)粗砂、細砂を全体に含む。木材含む。
遺構?-6　灰褐色シルト質粘土(7.5YR5/2)細砂含みラミナあり。植物質含み、層状になっている箇所あり。
遺構?-7　灰褐色砂混じりシルト質粘土(7.5YR5/2)粗砂、細砂を多く含み、ブロック状に含む箇所あり。木材含む。
遺構?-8　褐灰色粗砂(10YR5/1)中砂も含む。
Ⅷ-1　黄灰色粗砂(2.5Y5/1)粗砂、細砂を多く含み、シルトもあり。木材、炭化物含む。
Ⅷ-2　灰色粗砂(5Y5/1)粗砂、細砂を多く含み、シルトもあり。粘土ブロック含み、炭化物、木材多く含む。
Ⅷ-3　暗灰黄色細砂(2.5Y5/2)細砂、シルトで構成。ラミナあり。植物質を多く含み、層状に堆積する箇所あり。
Ⅷ-4　暗灰黄色粘土(2.5Y5/2)(ラミナ状に堆積する細砂含む)と厚さ１㎝以下の未分解植物層との互層
Ⅷ-5?　にぶい橙色シルト質粘土(7.5YR5/3)粗砂、中砂をラミナ状に含む箇所あり。木材、植物質多く含む。
Ⅸ-1?　浅黄橙色礫層(10YR8/4)Ⅸ-2と繋がるか不明。
Ⅸ-2　灰オリーブ色礫層(5Y5/2)５㎝～人頭大の礫含む。
Ⅸ-3　灰オリーブ色粘土(5Y4/2)層上方で粗砂含む。大量の貝類を含む。１～２㎝大の粘土ブロック含む。
Ⅸ-4　オリーブ黒色粘土(5Y3/1)１～２㎝大の粘土ブロック含む。
Ⅸ-5　暗灰黄色シルト質粘土(2.5Y5/2)大量の貝類を含む。木材含む。

第316図　P15区中央壁土層断面図(２)

～４層のように何らかの遺構があった可能性があるが、平面として確認できなかった。Ⅶ層は粘土質の層であり、ラミナもわずかに認められる。Ⅷ層は全体的に砂や木材、植物質を多く含み、ラミナも認められ、河道の堆積であった可能性が高い。また、Ⅷ層上面では、北西壁の河道？－５～15、遺構？－１～８のように河道とそれに伴う護岸施設のような遺構があった可能性があるが、平面として確認できていない。Ⅸ層は粘土層であり、巻貝やカキ、ハマグリなどの貝類を多量に含む層もある。貝類で放射性炭素年代測定を行った結果、上層の貝層では縄文時代後期前葉から後葉、下層の貝層では縄文時代後期初頭から前葉にあたる年代が示されている。

なお、河道６の埋土である粗砂層や丘陵側にあるⅥ～Ⅷ層、礫層については、調査期間の都合上、小型重機を使用して掘削している。

２　遺構の概要

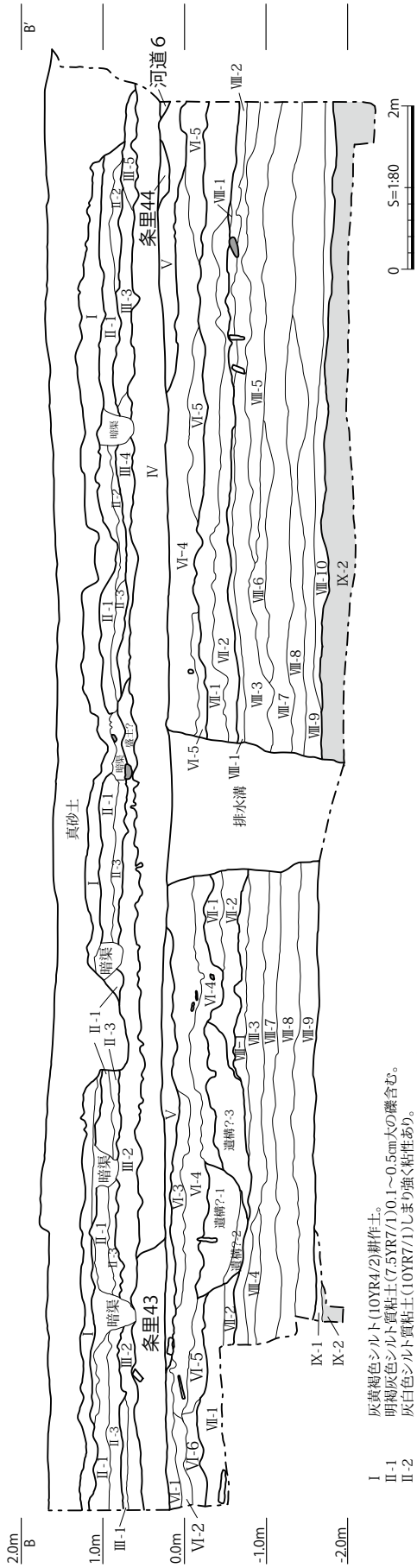
P15区では、縄文時代晩期の杭列２列と集石１基、古墳時代中・後期の自然河道１基、木造構造物２基、横穴式石室をもつ古墳１基、古代の道路遺構１基、条里遺構２基、盛土遺構３基、溝１基を確認した。この他にも、Ⅵ層からⅧ層（弥生時代前期から古墳時代前期）にかけて、河道や護岸の可能性がある堆積を断面でのみ確認している。

第２項　Ⅴ層上面の遺構（古墳時代中期～平安時代）

１　概要

Ⅴ層上面では、道路２、条里43・44、盛土32～34、河道６、木造構造物11・12、溝14、阿古山24号墳の遺構を確認した（第318･326･327図）。河道６、木造構造物11･12と阿古山24号墳以外は、平安時代の遺構と考えられ、河道６と木造構造物11･12は古墳時代中期から後期の遺構である。また、河道６は新段階と古段階に分けられ、それぞれ北東岸際に護岸状の盛土が認められ、木造構造物11・12を古段階の河道底面で検出している。阿古山24号墳は古墳時代後期のものと考えられる。

遺構の内、盛土32～34が直接繋がっている。土層断面から判断して、盛土33が最も古く、その後に盛土32・34が構築される。盛土32と盛土34は、盛土32の方が古いが、基本的に一体で構築さ



第317図　P15区南西壁土層断面図

れているため、同時に構築されたと考える。なお、道路２は、P14区から続く道路１とは様相が異なるため､別の遺構番号としている。

２　道路遺構

道路２（第319図　ＰＬ87－２）

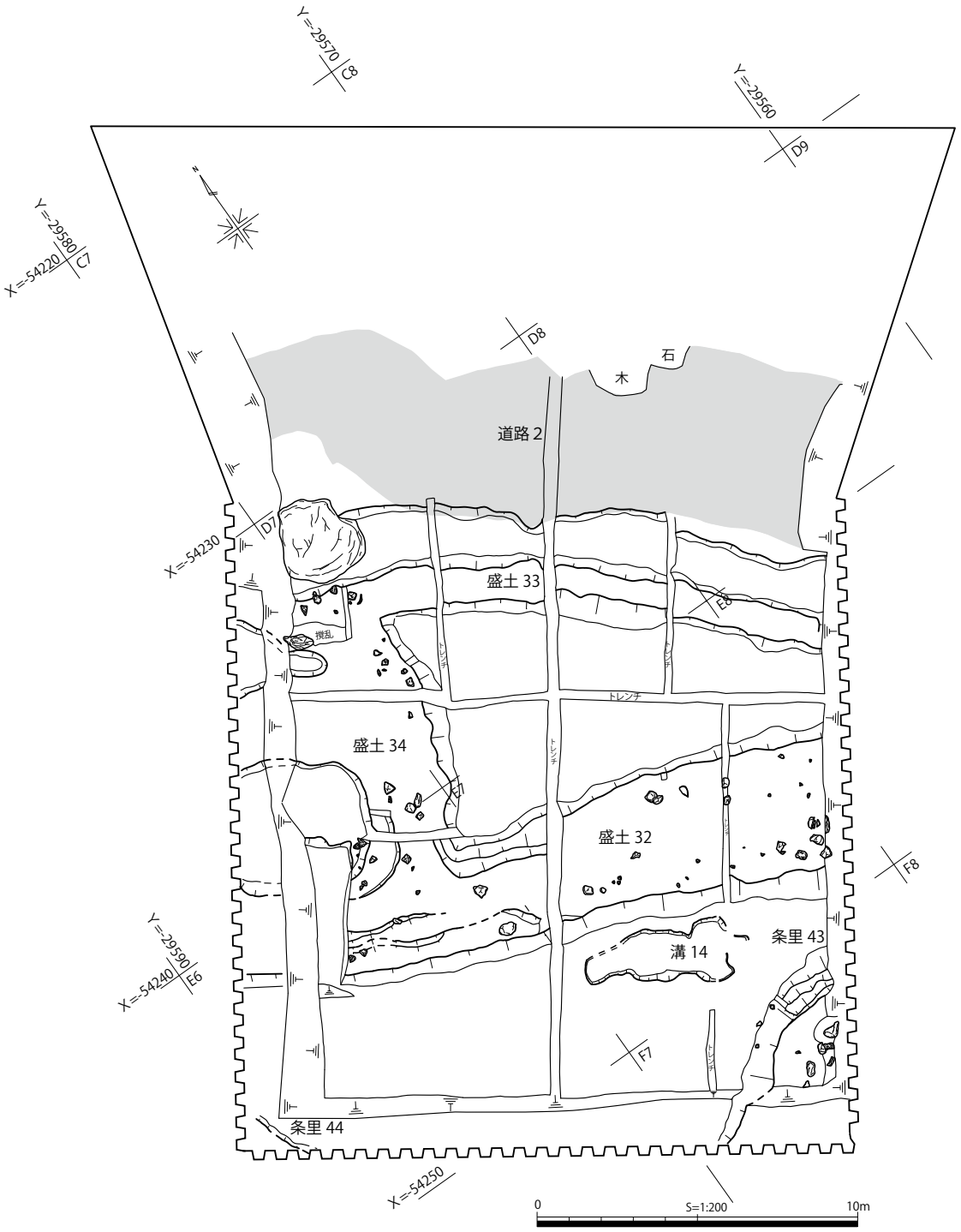
Ｄ７・Ｄ８グリッドの丘陵斜面から平地にかけて位置する。調査当初は、道路の存在を認識できておらず、幾つか上層の礫層を外しており、記録しているのは、ある程度掘り進んだ後の状況である。南東－北西方向にのびており、長さ17ｍ、最大幅5.5.ｍ、高さ45㎝を測る。道路盛土の上層には礫が多く含まれているが、大きさが１～３㎝大と比較的小型で揃っており、人為的に砕いたものと考えられる。下層は粘土質の土が用いられている。最も高い地点と低い地点で１ｍほどの比高差がある。Ｐ14区以東の調査区で確認された道路１と比較して、盛土に大型の礫を使っていない事や造りがあまり丁寧でない点で異なっている。

道路盛土から土器（1329、1330）が出土しているが、須恵器高坏（1329）については、道路の存在を認識していない状況の中、Ｅ８グリッドの礫層内で取り上げたものであり、この資料に関しては可能性に留まる。

３　条里遺構

条里43（第320図　ＰＬ88－1・2）

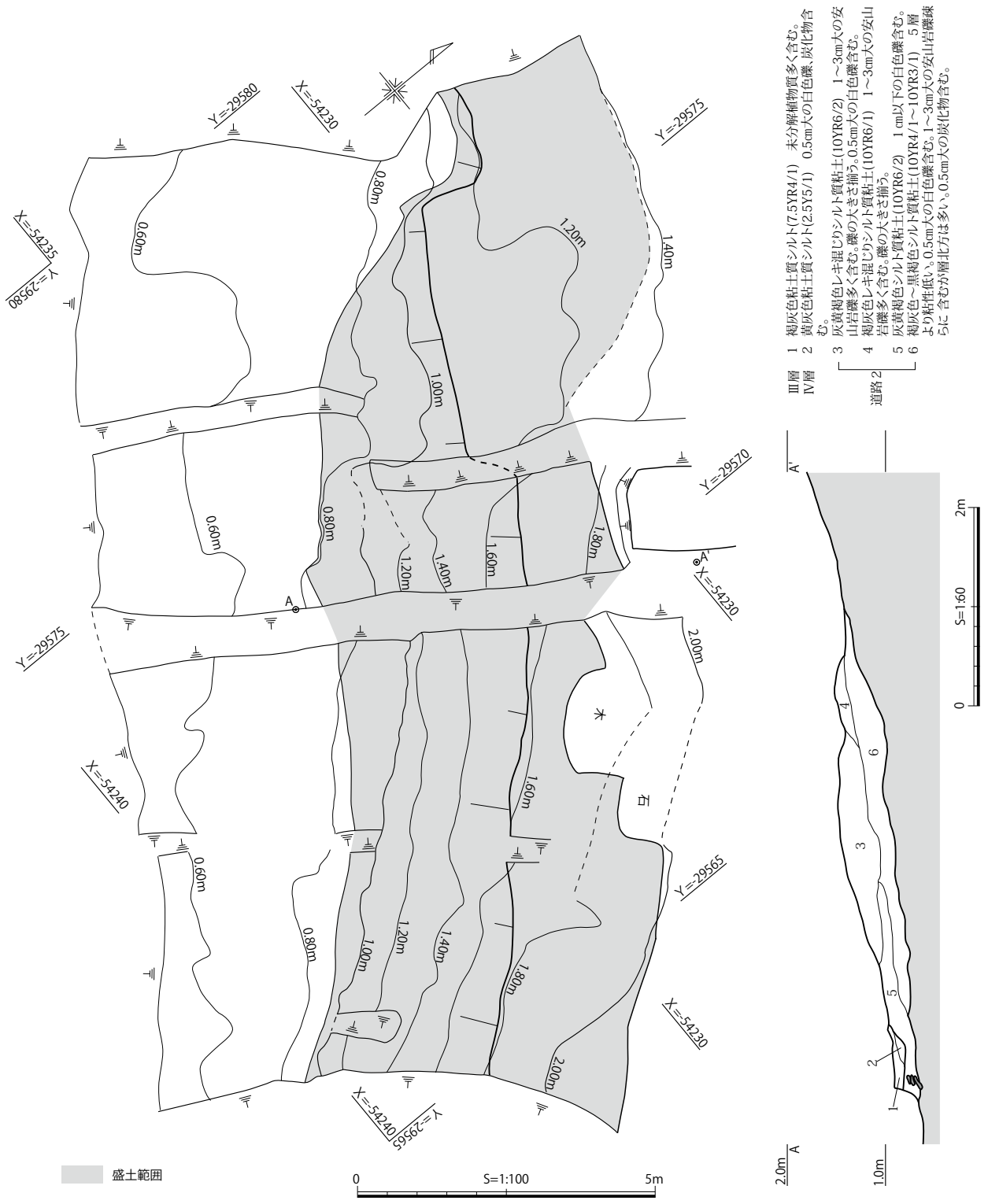
調査区南隅、Ｆ７グリッドに位



第318図　P15区Ⅴ層上面遺構分布図（１）

置し、南西－北東方向に伸びる条里遺構である。一町方格内（約 109 m四方）を 12 歩（約 21 m）に分割する条里地割と考えられる。調査区隅のため、全体の規模は分からないが、長さ 6.8 m、幅 2.4 m、高さ 20㎝を測る。盛土上面には人頭大以上の板石が敷かれていた。盛土は、粗朶などを含むが、細かい単位には分けることはできず、類似した層であった。ただし、盛土の最下面において、木材や人頭大の礫が一面に敷かれている状況があり、丁寧な造りといえる。

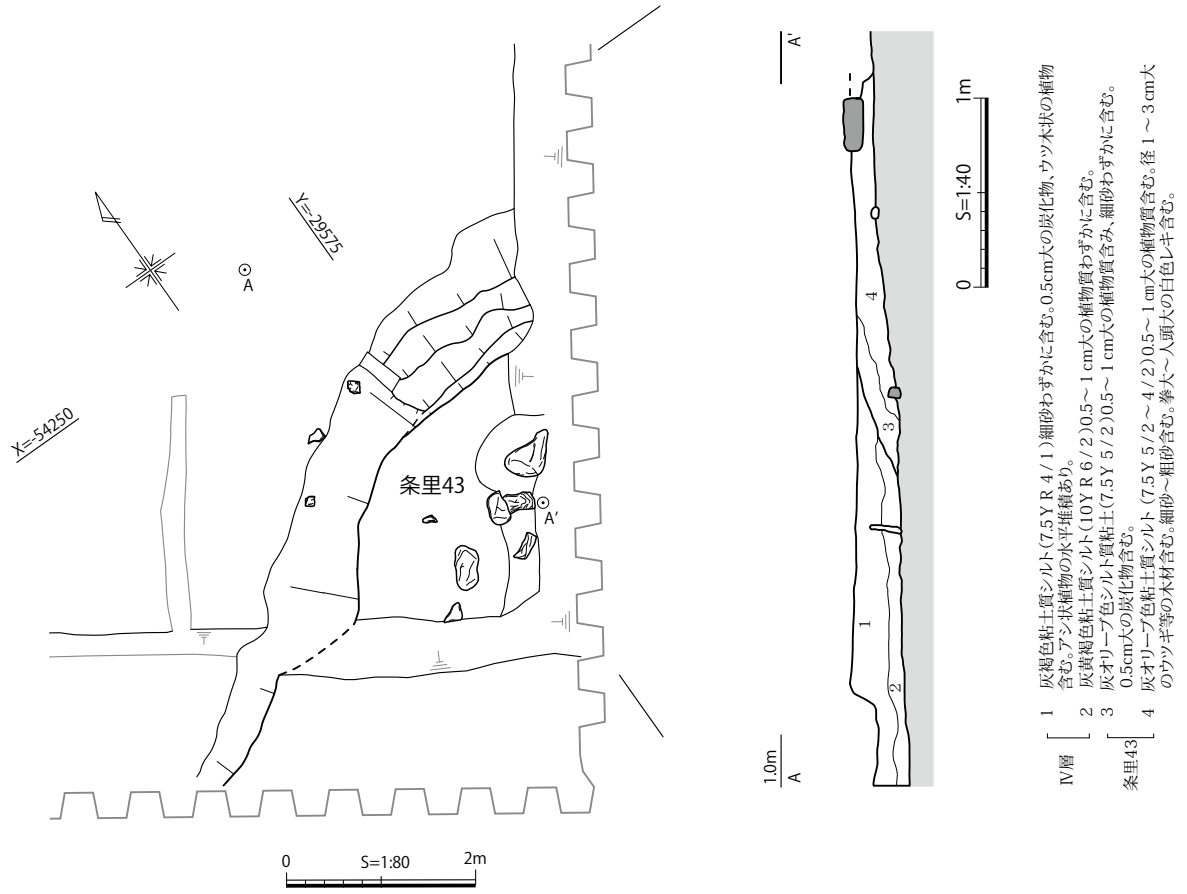
盛土内の粗朶の放射性炭素年代測定によると、２σ暦年代範囲で 686calAD － 779calAD（80.3％）の結果を得ているが、密集して出土した粗朶ではないので、古い年代がでている可能性がある。



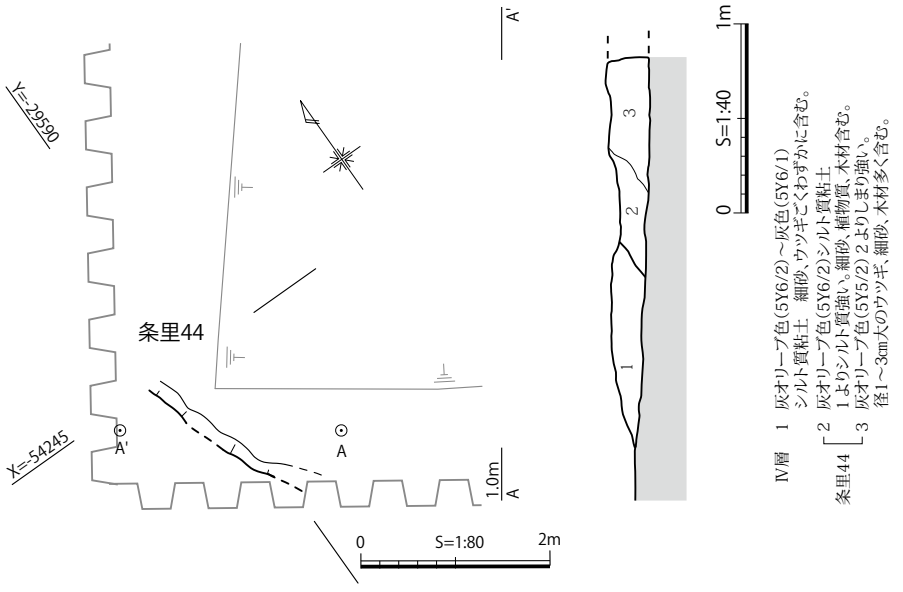
第319図　道路２

条里44（第321図）

調査区西隅、Ｅ６グリッドに位置し、南東－北西方向に伸びる条里遺構である。一町方格内（約109 m四方）を 12 歩（約 21 m）に分割する条里地割と考えられる。調査区隅のため、全体の規模は不明で、わずかに立ち上がり部分のみを確認できた。長さ 1.4 m、幅 1m、高さ 20㎝を測る。盛土には砂や木材等が多く含まれている。



第320図　P15区条里43



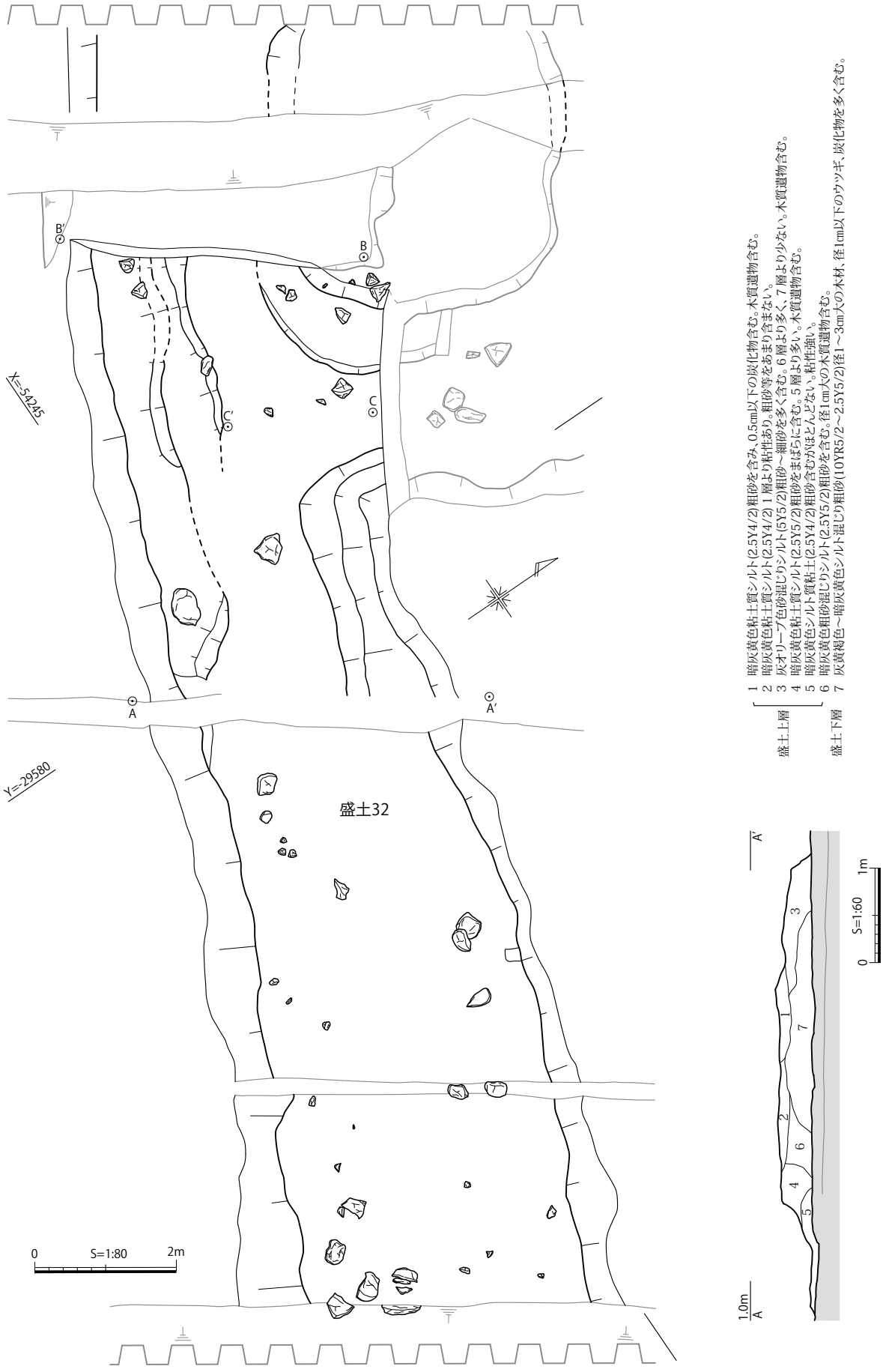
第321図　P15区条里44

４　盛土遺構

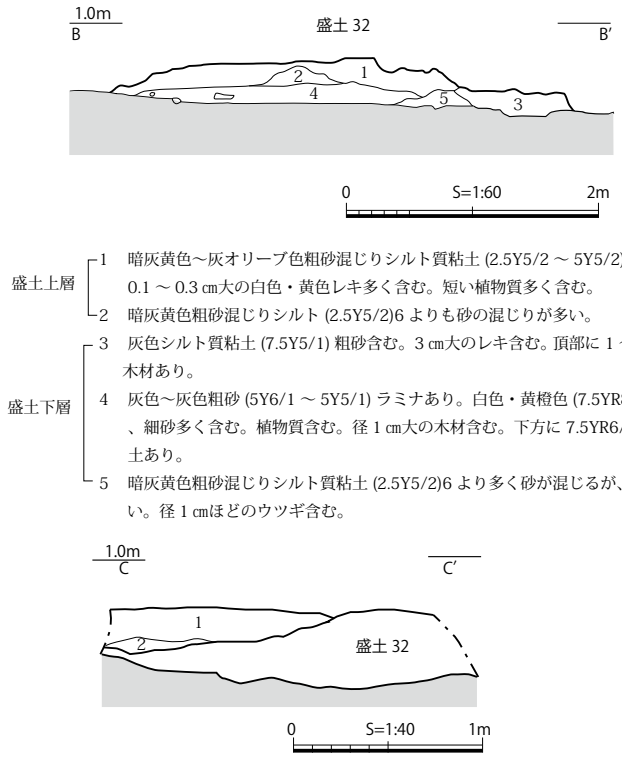
盛土32（第322・第323図　ＰＬ88－３・89－１）

調査区南西側のＥ６・Ｅ７グリッドに位置し、調査区を横断する形で存在する。東西に近い南東－北西方向に伸びる盛土遺構で、長さ19ｍ、最大幅5.4ｍ、高さ35㎝を測り、規模が大きい。盛土上面には人頭大の板石や礫が幾つか置かれている。条里43や盛土34に接続する箇所に多い傾向がある。盛土は大きく上層と下層に分かれており、上層からは、粗朶が密集している箇所が幾つかみつかっている。これは他の調査区の道路１道路外盛土などでもみられる特徴である。下層は、粗砂、細砂層の中に粗朶や木材などを多く入れた土層であり、盛土の芯である。この構造は、Ｐ16区の同遺構でも確認できる。

構築方法としては、まず砂や有機物を多く含ませた下層を芯として敷設し、その上に上層を盛って



第322図　P15区盛土32



第323図　P15区盛土32・34土層断面図

いき、その途中で粗粒をまとめて敷設している。この盛土下層は、Ｅ６グリッドで盛土 34 に一部のびており、その上に盛土 34 が構築されている（Ｃ－Ｃ′）。ただし、造りが一体的であるので、同時に構築された可能性が高い。

盛土内から土器（1323 ～ 1326）や墨書土器（1425）、木簡（73 号木簡）木器（W 1740、W 1741、W 1744、W1747）、木製祭祀具（W 979 ～ W982、W984）等数多く出土している。特に下層から遺物が多く出土しており、本来は砂の供給源である河道６に帰属するものもあると考える。また、須恵器長頸壺（1325）は、盛土 32 の直下にあった土坑状の窪み内から出土している。P16 区でも同様の土坑があるが、砂地の窪んだ部分に土や土器、木材を入れ込んで整地し、盛土 32 を構築したと思われる。

盛土下層の粗粒密集部の粗粒を使った放射性炭素年代測定によると、２σ暦年代範囲で 769calAD － 885calAD（95.4％）の結果を得ており、構築時期と考えられる。

盛土33（第324図　ＰＬ89－２）

Ｄ７・Ｄ８・Ｅ８グリッドに位置し、調査区を横断する。南東－北西方向に若干弧を描くように伸びる盛土遺構で、主軸は盛土 32 よりも北方向へ振っており、長さ 18 ｍ、最大幅２ｍ、高さ 30㎝を測る。盛土は、Ⅳ層とよく似た層であるが、木材や植物質の含みが多く、粗粒の集中部も確認できている。

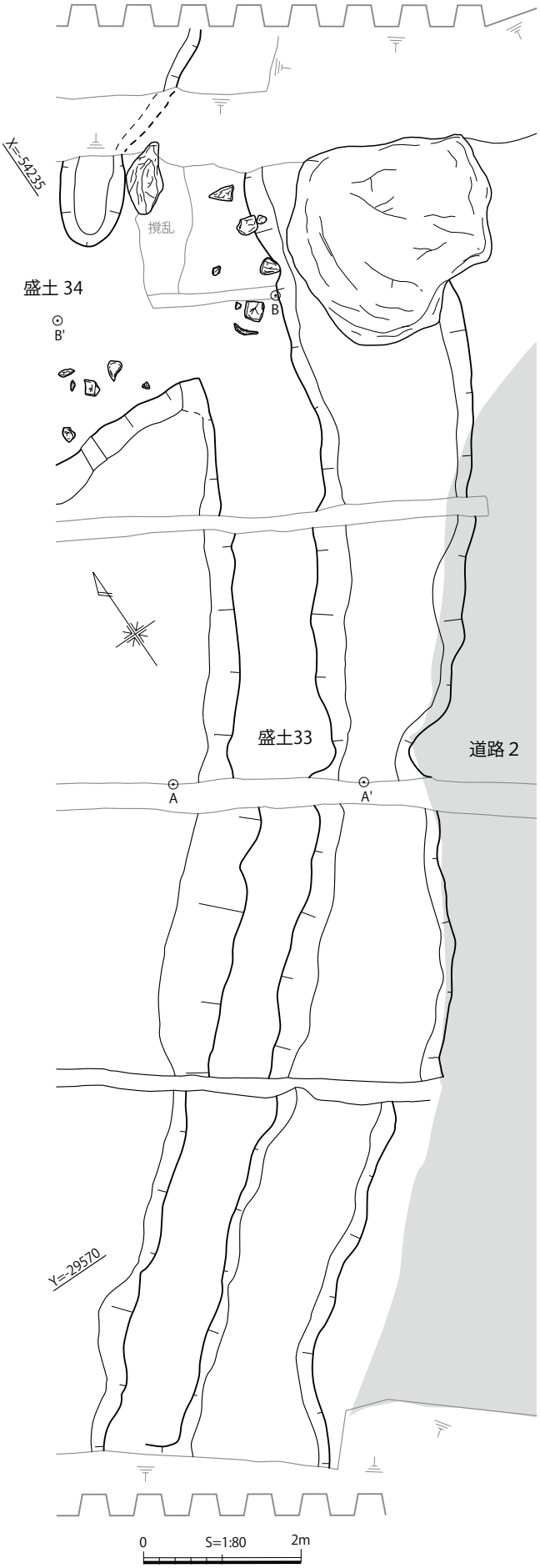
Ｄ７グリッドで盛土 34 と接続する。構築順序としては、盛土 33 の方が先であるが、大きな時期差はないと思われる。またこの接続部では、盛土上面で拳大から人頭大の礫が散見されている。さらに、盛土 33 の北東側は溝状の窪みが認められ、盛土 33 と併走している。Ⅲ・Ⅳ層が堆積しており、位置から考えると、P14 区から続く道路１と道路外盛土につながる可能性もある。

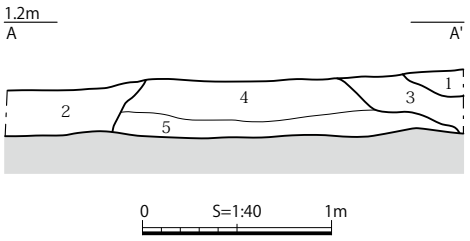
盛土内から土器（1327・1328）、木器（W1743、W1745、W1746）が出土している。

盛土34（第325図）

Ｄ６グリッドに位置する。ほぼ南北方向に伸びる盛土遺構である。盛土32と盛土33が繋がっており、土層断面から、盛土 32 と盛土 34 の後に構築されている。全長８ｍ、最大幅 3.2 ｍ、高さは低く 20㎝ほどである。また、盛土 32 と盛土 33 の間で、西方向にも伸びており、長さ 3.6m、最大幅３ｍを測る。盛土は、盛土 32 との接続部付近では、砂を多く含み、盛土 32 下層と類似しており、一体化している。それに対して、盛土 33 との接続部付近では、盛土 32 接続部付近ほど砂を含んでいないという特徴がある。

盛土内からは、あまり遺物は出土していないが、木製祭祀具（W983）が出土している。

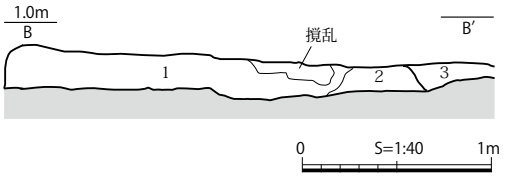




Ⅲ層　1　黄灰色粘土質シルト(シルト強)(2.5Y4/1)　植物質多く含み、0.1㎝大の礫を疎らに含む。

Ⅳ層
- 2　暗灰黄色シルト質粘土(2.5Y5/2)しまりやや強い。0.1～0.3㎝大の炭化物含む。植物質含む。
- 3　黄灰色～灰黄色シルト質粘土(2.5Y6/1～2.5Y6/2)植物質含む。1～3㎝大の礫を疎らに含む。

盛土33
- 4　灰色～灰オリーブ色粘土質シルト(5Y5/1～5Y5/2)　径1～3㎝大の白色粗砂を全体に含み、植物質を多く含む。粗朶状のウツギの集まりが上面部にある箇所がある。
- 5　灰色シルト質粘土(5Y5/1)白色粗砂を含むが4層より少ない。1～3㎝大の小レキを含む。植物質含む。



盛土33
- 1　暗灰黄色砂シルト質粘土(5Y5/2)細砂含む。植物質含む。層上面に南北方向に並ぶ粗朶束検出。
- 2　灰オリーブ色シルト質粘土(2.5Y5/1)1よりも細砂、植物質多く含む。

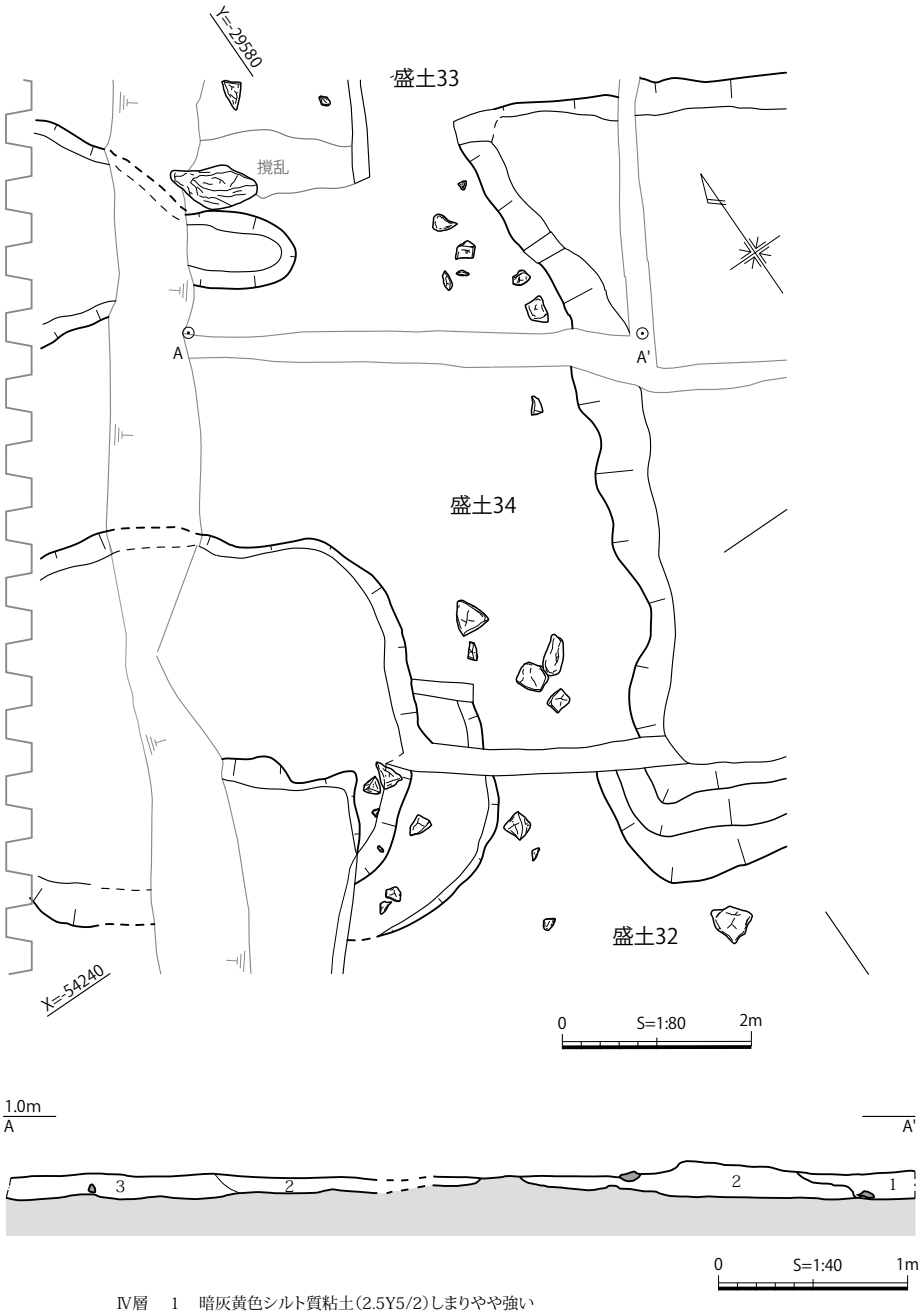
盛土34　3　灰色粘土質シルト(5Y4/1)粗砂を含み、木材を多く含む。

第324図　P15区盛土33

5　河道

河道６（第326～第328図　ＰＬ90－2・3）

調査区南西部の約半分を占め、調査区を横断する大型の自然河道である。土層断面から、河道６埋土上層から中層に対応する新段階と、下層に対応する古段階に分けられる。上層は粗砂層を主体とし、木製祭祀具などの木器等の遺物が出土している。特に最上層にはシルト混じりの層があり、この層から遺物が出土している。中層も遺物が若干出土しているが、量は少ない。シルト層が幾つか介在しながら、粗砂、細砂を主体とする層である。下層は、粘土またはシルト質の土が多く堆積しており、また木材や植物質も多く、河道の流れは緩やかなものであったと考えられる。遺物はほとんど出土していな



第325図　P15区盛土34

い。

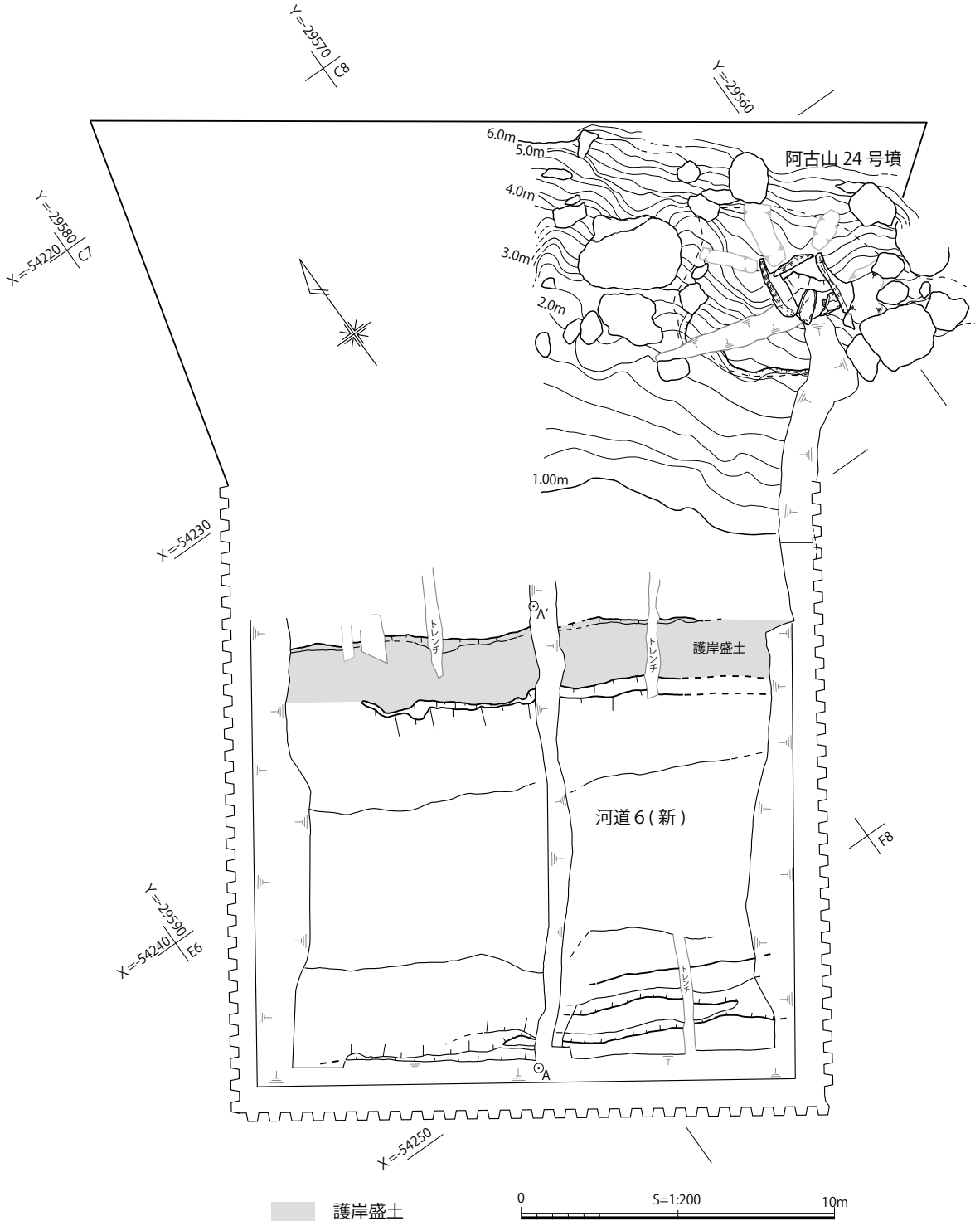
河道６新段階は、幅13.8ｍ、深さは50㎝を測る。北東岸全域で、幅２ｍ、深さ30㎝ほどの断面Ｌ字状の平坦面をつくり、そこに多量の砂や木材、植物質、拳大の礫で構成される盛土を施している。護岸を目的とした盛土と考えられる。この護岸盛土は、河道６下層の上に構築されており、時期差がある。

河道６古段階は、幅13.5ｍ､深さ1ｍを測る。新段階と同様、北東岸全域で、幅１ｍ、深さ20㎝ほどの断面Ｌ字状の平坦面をつくり、さらに下方に緩斜面をつくり、そこに砂、木材、草本類や拳大から人頭大の礫で構成される盛土を施している。また、この護岸盛土を掘り進めていくと、丸木材や角材を使った杭が９本出土した。立ったままのものもあるが、新段階の時に打ち込まれた可能性もある。これらも護岸を目的とした盛土であると考えられる。また、河道６古段階の底面には、木造構造物11・12が認められる。詳細は後述するが、木製構造物11の放射性炭素年代測定が古墳時代中期から後期の時期を示しており、河道６古段階と新段階の年代差はあまり大きくはないと考えられる。

６　木造構造物

木造構造物11（第329図）

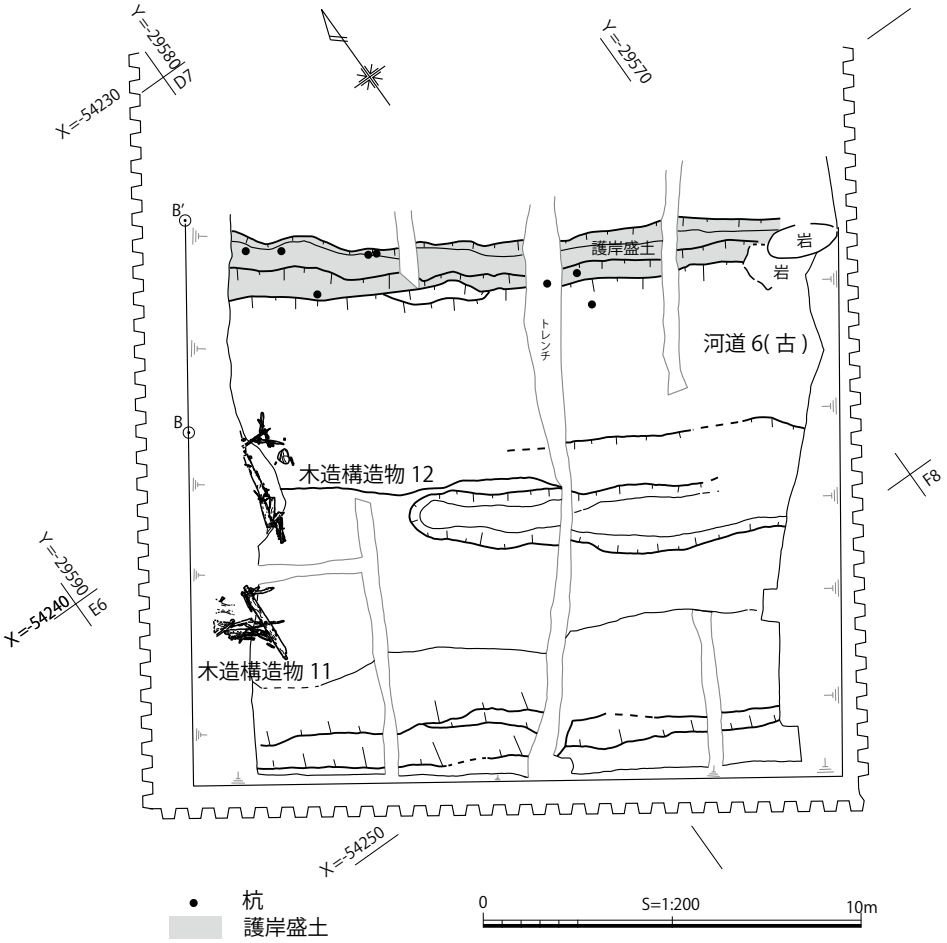
調査区南西壁沿いのＥ６グリッドに位置し、河道６古段階の底面で検出した。直径30～50㎝、長さ0.8～１ｍの丸木材でつくった杭が２本打ち込まれ、その西側に長さ2.2ｍ、幅0.2ｍの部材が長



第326図　P15区Ⅴ層上面遺構分布図（2）

軸を南北方向にして横たわっていた。杭も部材も西側に倒れた状況で出土しており、河道６の水流によって倒されたものと考えられる。部材の西側には長軸を南東－北西方向に向けて、部材や杭、自然木がまとまって出土している。元々は、後述する木造構造物 12 と共に堰状の構造物であった可能性が高い。

なお、木造構造物内の木材２点で放射性炭素年代測定を行ったところ、２σ暦年代範囲で 377calAD － 430calAD（88.4％）、427calAD － 562calAD（88.4％）の結果を得ており、構築時期と考えられる。



第327図　P15区河道６（古段階）

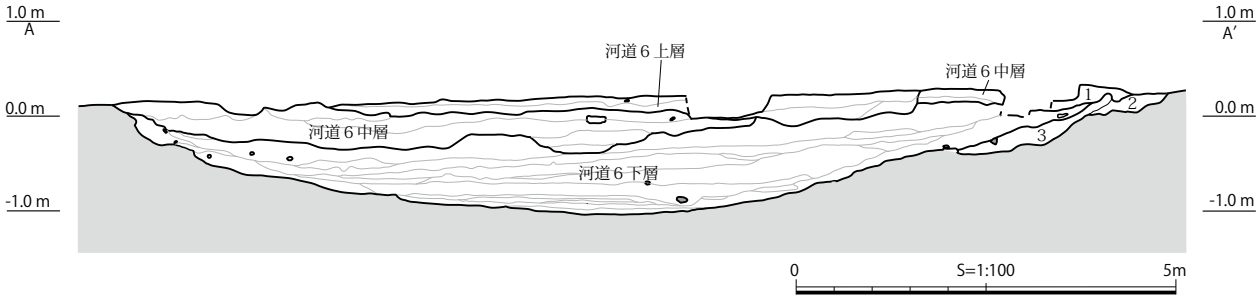
木造構造物12（第330図）

調査区南西壁沿いのＤ６グリッドに位置し、河道６古段階の底面で検出した。木造構造物 11 より北東へ約２m離れている。直径 50cm、長さ 0.8 ～１mの丸木材でつくった杭が２本打ち込まれ、また先端だけ立ったまま残存している杭も１本確認している。その西側には長さ 1.2 m、幅 15cmの板材が南北方向に横たわり、さらにその南側には長さ 60 ～ 70cm、幅 15cmほどの板材や棒状の材などが、長軸を南北方向に向けてまとまって出土している。大型の杭はいずれも西方向へ倒れており、河道６の水流によって倒されたと考えられる。元々は、先述した木造構造物 11 と共に堰状の構造物であったと思われる。

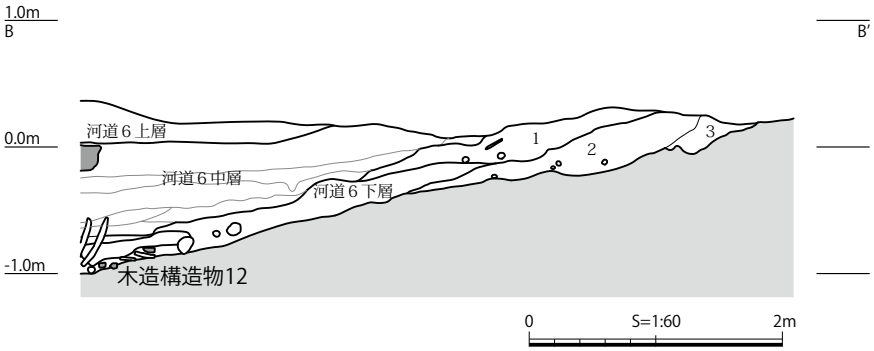
７　溝

溝14（第331図）

Ｅ７グリッドでも南側に位置する。南東－北西方向に長軸をもつ溝状遺構で、長さ５m、幅２m、深さ 10cmを測る。浅い小規模な溝であり、埋土はⅣ層が入り込んでいる。底面や土層などに特徴的なものはなく、人為的な造作かは不明である。

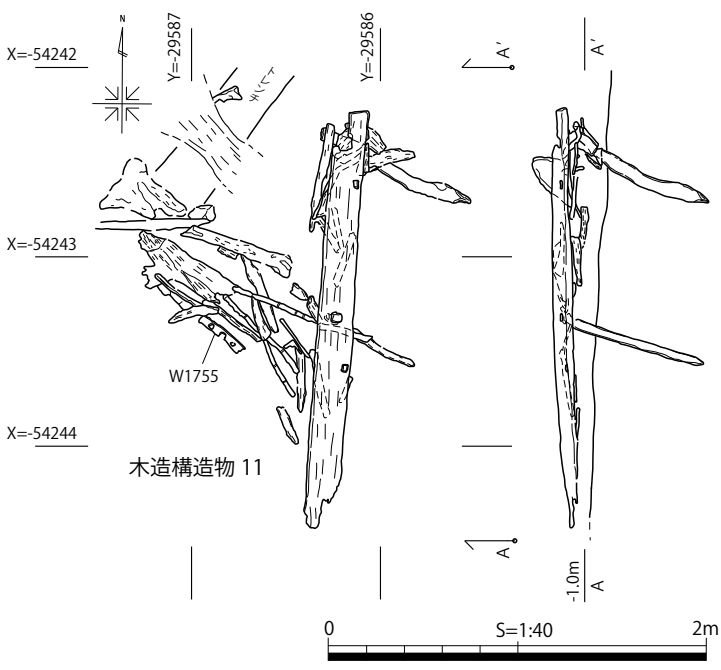


河道６上層　黄橙色粗砂（10YR8/6）と灰白色粗砂（10YR8/1）の互層　ラミナ顕著で木材含む。
河道６中層　最上層は褐灰色細砂混じりシルト（10YR5/1）で木材をわずかに含むが、以下は灰白色粗砂・細砂（2.5Y8/1）や淡黄色粗砂・細砂（2.5Y8/4）が主体で、間にシルト層が入る。木材等はほとんど出土しない。
河道６(新)護岸盛土　1　黄灰色細砂混シルト（10YR4/2）細砂を全体に含み、ブロック状の箇所あり、径１cm 内のウツギ、植物質、拳大のレキ多く含む
河道６下層　上層は褐灰色シルト（10YR6/1）や細砂層が互層状に堆積しており、所々で止水性の堆積が認められる。下層は、褐灰色シルト質粘土（10YR5/1）もしくは、シルト質粘土の層が多く、木材や植物質が認められる。
河道６(古)護岸盛土　2　灰オリーブ～灰色細砂混粘土質シルト（５Y4/1 ～５Y4/2）木質遺物、炭化物含む、拳大の礫を多く含む箇所あり、５cm 大の小型礫含む
3　褐灰色シルト質細砂（10YR5/1）細砂を多く含み、0.5cm 大の炭化物、木質遺物（草本か？）含む、拳大～人頭大、20 ～ 30cm 大の礫多く含む



河道６上層　黄橙色粗砂（10YR8/6）と灰白色粗砂（10YR8/1）の互層　ラミナ顕著で木材含む。
河道６中層　最上層は褐灰色細砂混じりシルト（10YR5/1）で木材をわずかに含むが、以下は灰白色粗砂・細砂（2.5Y8/1）や淡黄色粗砂・細砂（2.5Y8/4）が主体で、間にシルト層が入る。木材等はほとんど出土しない。
河道６(新)護岸盛土　1 灰褐色～灰黄褐色粘土～シルト(7.5YR5/2～10YR5/2) 細砂～極細砂を全体に含み、ブロック状の箇所あり。径１～３㎝大のウツギ含み、木質遺物も含む。
河道６下層　灰黄褐色粘土～シルト(10YR6/2) 極細砂含み、ラミナあり。
河道６(古)護岸盛土　2 褐灰色粗砂～細砂(10YR5/1) 灰黄褐色(10YR5/2)の粘土ブロック(１～５㎝大)多く含む。径１～３㎝の丸太含む。
3 灰黄褐色粘土～シルト(10YR6/2) 径１㎝以下のウツギ含む。植物質含む。全体に濁っている層。

第328図　P15区河道６土層断面図

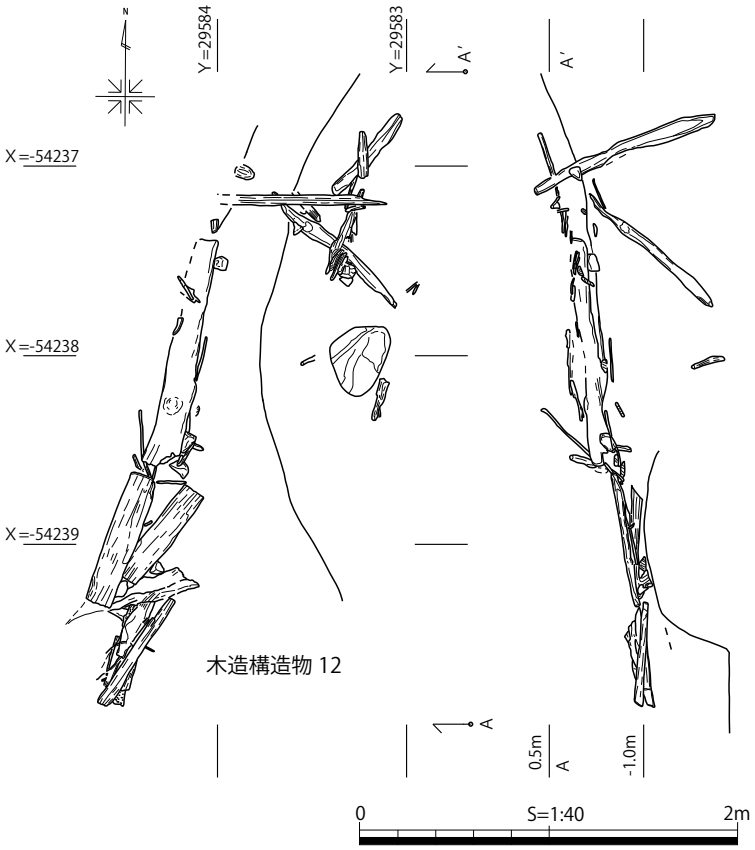


第329図　P15区木造構造物11

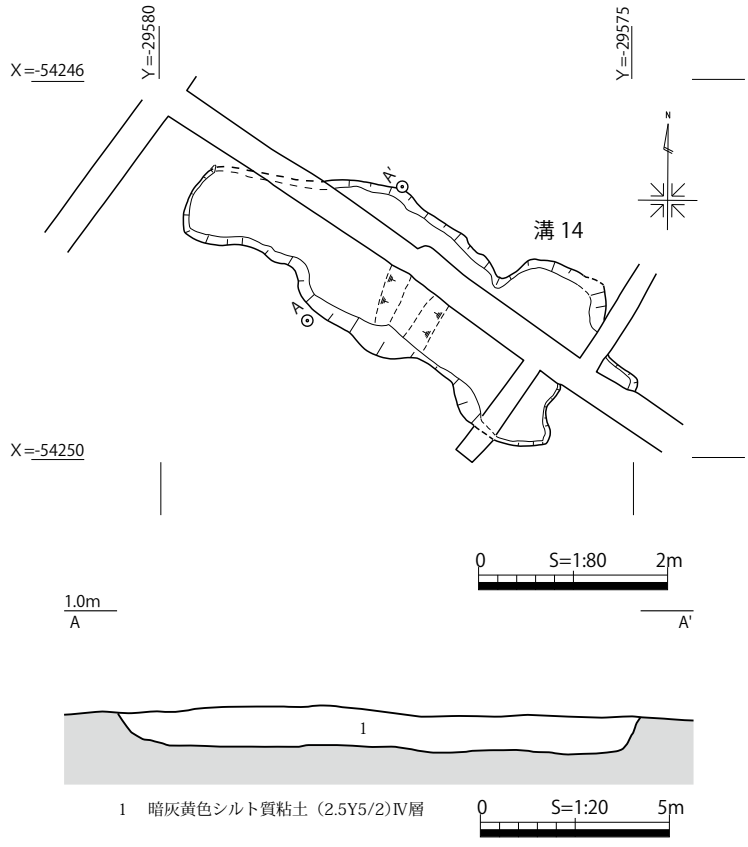
８　古墳

阿古山24号墳（第332 ～第335図　ＰＬ89－３・90－１）

調査区の西隅斜面のＤ８・Ｄ９グリッドに位置する。発掘調査開始前から、横穴式石室の奥壁と側壁と思われる板石が立った状態で露出しており、また土盛り状の高まりも確認でき、古墳の存在が想定された。露出した状態の石室の主軸はほぼ南北方向であり、これに従って東西、南北の断面観察用のトレンチを設定し、調査を行った。また、石室の南側には、P14 区と同様に楔痕跡が残っている石もみつかっている（第 333 図）。周辺にはその他にも大型の石が散見されるが、後述するように石室に使



第330図　P15区木造構造物12



第331図　P15区溝14

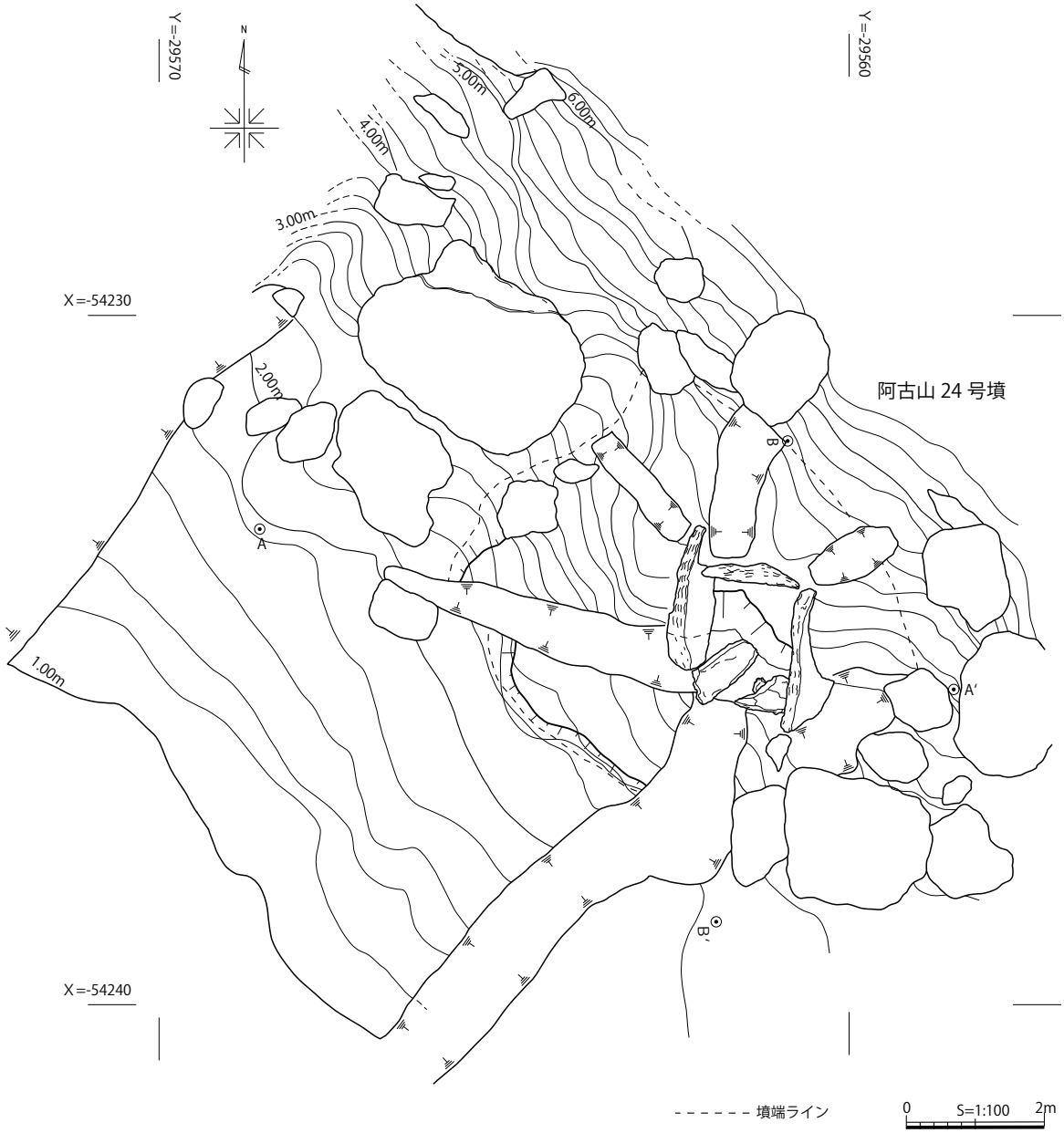
用する板石状の石よりもかなり厚いので、石室に使用した石材が残存しているというよりは、石室の石材を加工する途中で遺棄したものと考えられる。

墳丘

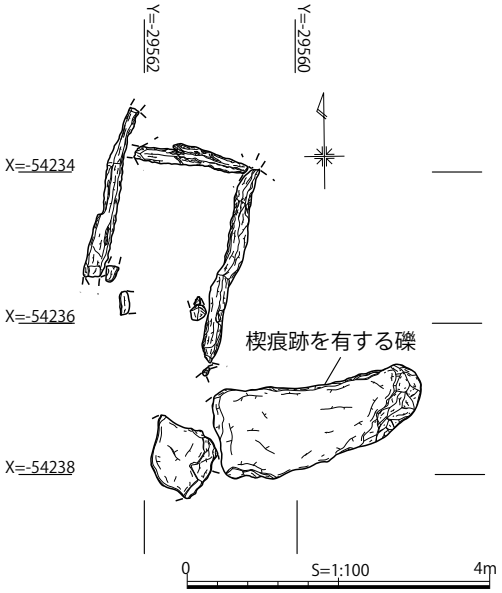
既に石室の天井石がないことから、墳丘の上部は失われている。周溝はなく、残存している盛土の範囲から、東西 6.4 m、南北６mの楕円もしくは円墳である。東西の横断面をみると、東から西へ地山面が傾斜している。元々の地形をあまり大きく変えず、古墳をつくったと考えられる。石室東側壁底面には、側壁設置のための掘り込みが認められたが、西側では明確な掘り込みは確認できていない。石室の両側壁が、土圧で西側へ大きく傾いているためと思われる。南北の断面では、奥壁の北側で裏込め土や盛土が確認できる。奥壁も土圧で石室入口側に倒れ込んでいる。石室内では、床面と思われる地山（39 層）の落ち込みが確認でき、人為的に削られたと考えられる。恐らくこの時に、さらに南側へ続いていた両側壁や天井石なども取り除かれたと思われる。

石室

奥壁１枚と両側壁１枚ずつが残存している横穴式石室である。両側壁は西側へ大きく傾いており、奥壁も石室入口側に向けて倒れ込んでいる。主軸はほぼ南北方向である。奥壁は、高さ 1.2 m、幅 1.5m、東側壁は長さ 2.4 m、幅 1m、西側壁は長さ 2.5 m、幅 90㎝を測り、いずれも厚さ 20 ～ 30㎝の板石である。奥壁を両側壁で挟み込む形である。石材は、肉眼観察であるが、丘陵斜面に露頭している安山岩である。



第332図　P15区阿古山24号墳

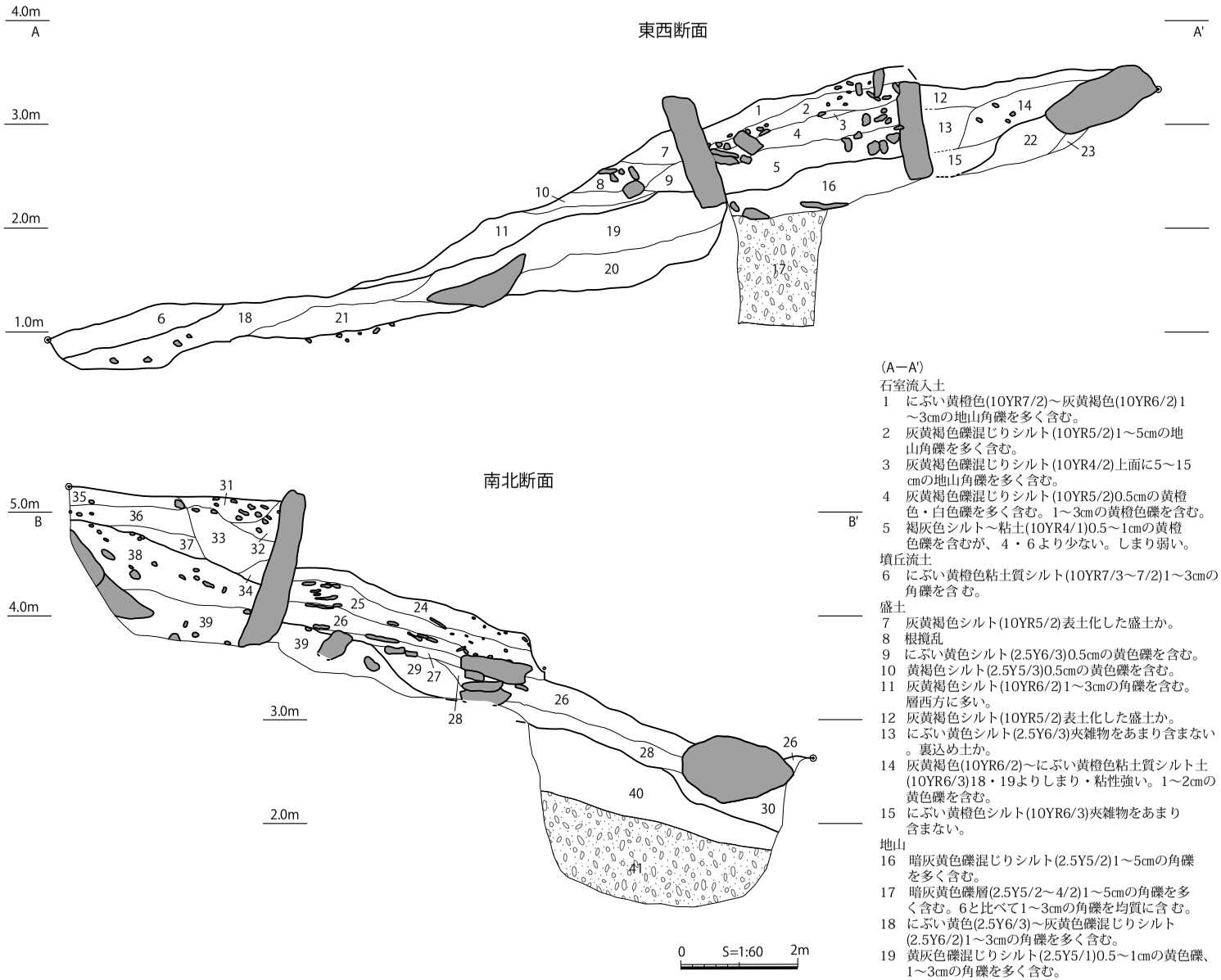


第333図　P15区阿古山24号墳調査前平面図

両側壁は､石室入口側に向かってかなり下がっているが､これは先述した古墳の破壊の際に石室内も掘り込まれ､それに伴い、側壁も石室入口側へずれてしまったためだと思われる。

石室内には多量の土が入り込み、安山岩の礫や板石などがみつかっている。特に落ち込みより南側では石室石材と思われる板石が数多く出土している。また、石室内の流入土を全て篩にかけたところ、鉄釘を回収している(F11 ～ F15)。石室に伴うものであるとすれば、木棺に使用されたと思われる。

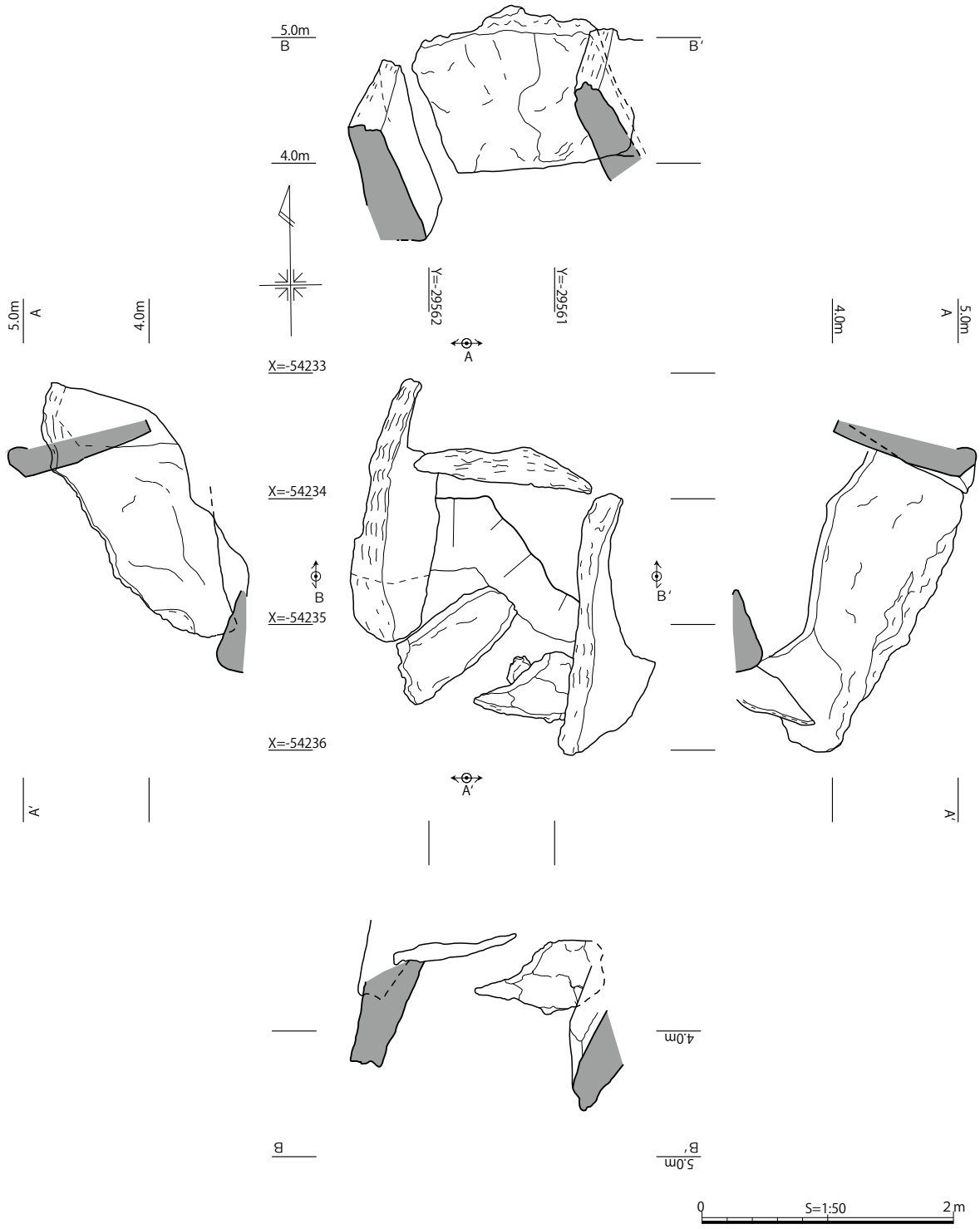
副葬品はなく、石室も破壊された状況であるが、同丘陵斜面に存在するその他の古墳と同様に、古墳時代後期



(A—A')
石室流入土
1　にぶい黄橙色(10YR7/2)～灰黄褐色(10YR6/2)1～3㎝の地山角礫を多く含む。
2　灰黄褐色礫混じりシルト(10YR5/2)1～5㎝の地山角礫を多く含む。
3　灰黄褐色礫混じりシルト(10YR4/2)上面に5～15㎝の地山角礫を多く含む。
4　灰黄褐色礫混じりシルト(10YR5/2)0.5㎝の黄橙色・白色礫を多く含む。1～3㎝の黄橙色礫を含む。
5　褐灰色シルト～粘土(10YR4/1)0.5～1㎝の黄橙色礫を含むが、4・6より少ない。しまり弱い。
墳丘流土
6　にぶい黄橙色粘土質シルト(10YR7/3～7/2)1～3㎝の角礫を含 む。
盛土
7　灰黄褐色シルト(10YR5/2)表土化した盛土か。
8　根撹乱
9　にぶい黄色シルト(2.5Y6/3)0.5㎝の黄色礫を含む。
10　黄褐色シルト(2.5Y5/3)0.5㎝の黄色礫を含む。
11　灰黄褐色シルト(10YR6/2)1～3㎝の角礫を含む。層西方に多い。
12　灰黄褐色シルト(10YR5/2)表土化した盛土か。
13　にぶい黄色シルト(2.5Y6/3)夾雑物をあまり含まない。裏込め土か。
14　灰黄褐色(10YR6/2)～にぶい黄橙色粘土質シルト土(10YR6/3)18・19よりしまり・粘性強い。1～2㎝の黄色礫を含む。
15　にぶい黄橙色シルト(10YR6/3)夾雑物をあまり含まない。
地山
16　暗灰黄色礫混じりシルト(2.5Y5/2)1～5㎝の角礫を多く含む。
17　暗灰黄色礫層(2.5Y5/2～4/2)1～5㎝の角礫を多く含む。6と比べて1～3㎝の角礫を均質に含 む。
18　にぶい黄色(2.5Y6/3)～灰黄色礫混じりシルト(2.5Y6/2)1～3㎝の角礫を多く含む。
19　黄灰色礫混じりシルト(2.5Y5/1)0.5～1㎝の黄色礫、1～3㎝の角礫を多く含む。
20　暗灰黄色礫層(2.5Y5/2)0.5～1㎝大の黄色礫を多量に含む。
21　灰黄褐色(10Y5/2)～暗灰黄色礫混じりシルト(2.5Y5/2)1～5㎝の角礫を多く含む。
22　にぶい黄橙色粘土質シルト(10YR6/3)20よりしまり強い。1～5㎝の黄色礫を多く含む。0.5㎝の炭化物を含む。
23　浅黄色シルト(2.5Y7/3)0.5～1㎝の黄色・橙色礫を含む。1～3㎝の黄色礫を含む

(B—B')
石室内流土
24　にぶい黄橙色(10YR7/2)～灰黄褐色礫混じりシルト(10YR6/2)1～3㎝の地山角礫を多く含む。
25　灰黄褐色礫混じりシルト(10YR5/2)1～5㎝の地山角礫、0.3～0.5㎝の黄橙色礫(10YR8/6)を多く含む。
26　灰黄褐色礫混じりシルト(10YR4/2)上面に5～15㎝の地山角礫を多く含む。
27　灰黄褐色歴混じりシルト(10YR5/2)0.5㎝の黄橙色・白色礫を多く含む。1～3㎝の黄橙色礫を含む。
28　褐灰色粘土質シルト(10YR4/1)0.5～1㎝の黄橙色礫を含むが、27・29より少ない。しまり弱い。
29　灰黄褐色(10YR5/2)～にぶい黄褐色礫混じりシルト(10YR5/3)27より黄橙色礫・白色礫少なく、しまりあり。
30　灰貴褐色粘土質シルト(10YR5/2)礫等の共雑物をあまり含まない。
裏込め
31　暗灰黄色シルト(2.5Y5/2)1～3㎝の角礫を多く含む。層北方は礫含みが少ない。
32　暗灰黄色礫混じりシルト(2.5Y5/2)1～5㎝の角礫を多く含む。
33　にぶい黄色シルト(2.5Y6/3)1～5㎝の黄色礫を含む。
34　浅黄色礫層(2.5Y7/3)3～10㎝の黄色礫を多く含む。
盛土
35　灰黄褐色シルト(10YR5/2)表土化した盛土か。
36　暗灰黄色シルト(2.5Y5/2)0.5㎝の黄色礫僅少含む。夾雑物をあまり含まない。
37　暗灰黄色シルト(2.5Y5/2)36より暗く、0.5㎝の黄色礫を36より多く含むが、あまり多くない。1㎝の角礫を含む。
地山
38　にぶい黄色礫混じりシルト(2.5Y6/3)0.5～1㎝、3～5㎝の黄色礫を多く含む。
39　浅黄色(2.5Y7/3)～にぶい黄色礫混じりシルト(2.5Y6/3)0.5～1㎝、3～5㎝の黄色礫を多量に含む。
40　暗灰黄色礫混じりシルト(2.5Y5/2)1～5㎝の角礫を多く含む。
41　暗灰黄色礫層(2.5Y5/2～4/2)1～5㎝の角礫を多く含む。40と比べて1～3㎝の角礫を均質に含む。

第334図　P15区阿古山24号墳土層断面図



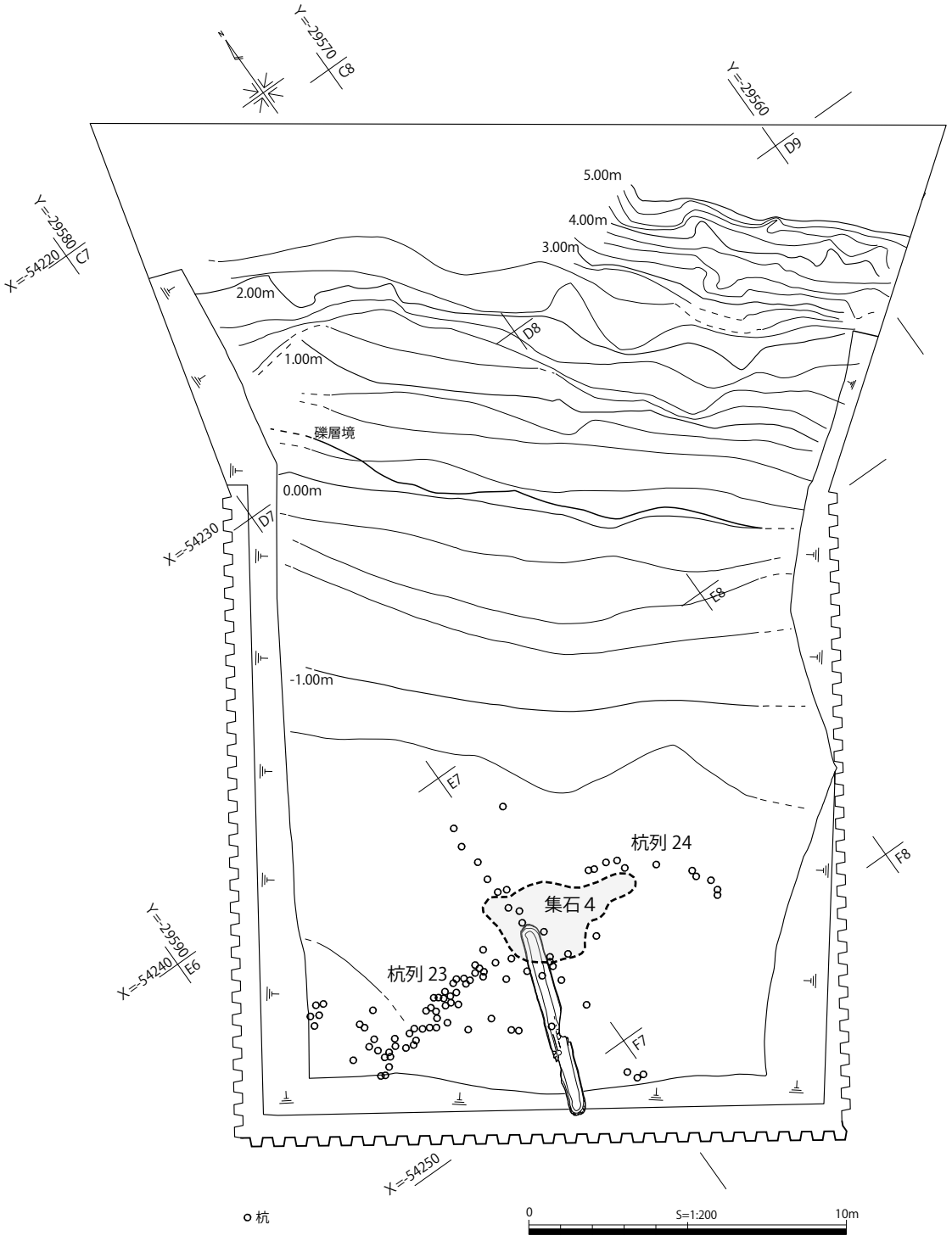
第335図　P15区阿古山24号墳石室

のものと考えられる。

第３項　Ⅸ層上面検出の遺構（縄文時代晩期）

１　概要

P15 区の最終遺構面は、Ⅸ層上面である。標高０ｍ付近から北側の丘陵斜面部が一面礫層で覆われている。それより南側では貝類を多く含むⅨ層が続く。標高－１ｍあたりから斜面の傾斜が緩やかになり、それより南側はほぼ平坦である（第 336 図）。Ⅸ層より上層で検出した河道のような状況で、

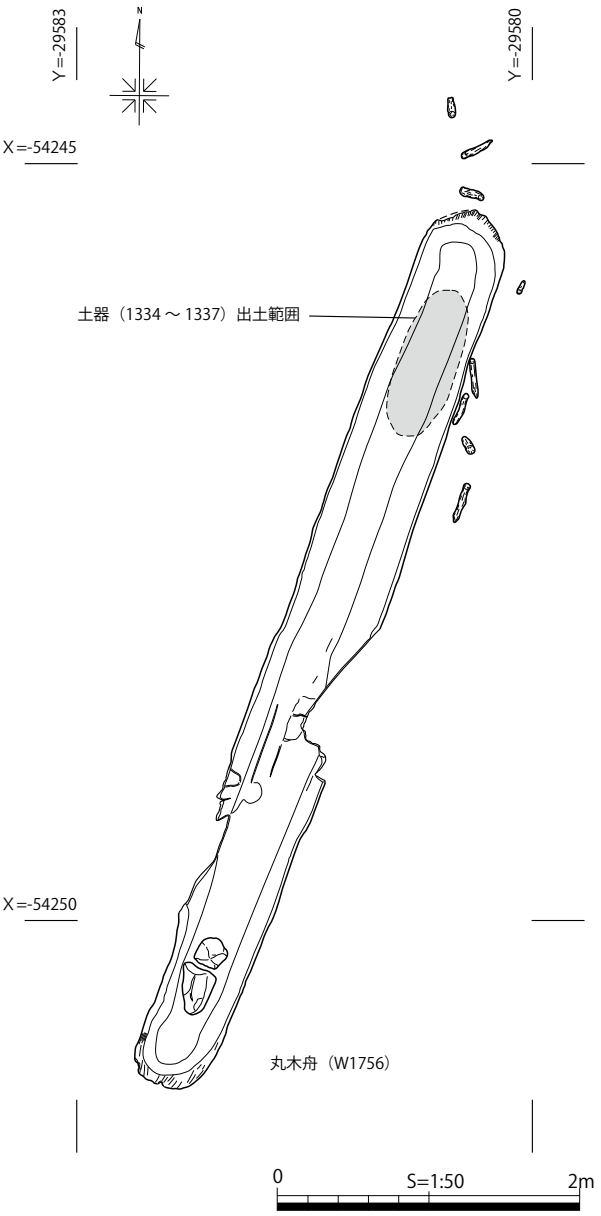


第336図　P15区Ⅸ層上面遺構分布図

貝類を多く含むことから、現在よりも南側へ入りこんだ内湾の河口付近であったと思われる。

Ⅸ層上面の遺構として集石４を検出した。また集石４を中心に放射状に伸びる杭列 23・24 を検出している。集石４の直上で土師器の甕（1332、1333）が出土しているが、集石と杭の出土状況が後述する P16 区でも確認されており、石がⅨ層上面に置かれていることから、この時期の遺構と考える。これらの集石と杭列については、その形状等から、梁（やな）や鮞（えり）のように漁に関する施設、または水流をコントロールする施設であった可能性がある。

特筆される出土遺物として丸木舟（W1756）が挙げられる。ほぼ完全な形で出土しているだけでな



第337図　P15区丸木舟出土状況図

く、丸木舟の内部には土器や礫が残されており、実際に使用していた時の状況をそのまま残していると思われ、貴重な資料と言える。

2　杭列

杭列23（第336図　ＰＬ91－４）

Ｅ６グリッドの中央よりやや南側で、集石４から西方向に伸びる杭列である。約50本で構成され、調査区境まで約10ｍ続く。南東壁付近で北西方向に角度を変えているようにもみえる。杭は全て径５㎝程度の丸木材の先端を尖らせたもので、樹皮のついたものが多い。杭は２～３本が接するほど密集するものが多く、これらが一つの単位のようにみえる。

この杭列の杭の放射性炭素年代測定では、２σ暦年代範囲で694calBC － 542calBC（75.8％）の結果を得ており、縄文時代晩期後葉から弥生時代前期の遺構と考えられる。

杭列24（第336図）

Ｅ７グリッドの中央付近、集石４の北東側より南東方向に伸びる杭列である。11本で構成され、約４ｍ続く。一直線ではなく、南東側ではやや湾曲するようにもみえる。杭は全て径５㎝程度の丸木材の先端を尖らせたもので、樹皮がついたものが多い。杭は２本が接するほど密集しているものが認められ、一つの単位のようにみえる。

年代測定は行っていないが、先述した杭列23と同様に縄文時代晩期後葉から弥生時代前期の遺構と考えられる。

3　集石

集石４（第336図　ＰＬ91－４）

調査区南側のほぼ中央、Ｅ７グリッド西側に位置する。東西4.4ｍ、南北2.8ｍの範囲で、人頭大から70㎝大の礫が集中している箇所があり、集石４とした。礫のほとんどは丘陵に露頭する板状の安山岩であり、特に範囲の中心付近で礫が集中する。礫の上面で土師器（1332、1333）を検出したが、礫はⅨ層上面に接しているので、土師器はその上の河道状の堆積（Ⅶ～Ⅷ層）内の資料と考えられる。なお、集石４は、後述する丸木舟よりも上位で検出している。

集石４内でも杭が幾つか出土しているが、北方向へ一直線に９本並ぶ杭列がみつかっている。その長さは４ｍほどである。さらに南側でも幾つか杭が出土しているが、これらは列状の配置ではない。いずれの杭も径５㎝程度の丸木材を使用し、ほとんどが樹皮がついているものである。

杭が集石４から放射状にのびていることから、杭列 23・24、さらには集石４の北側に並ぶ杭列と何らかの関連を持つ施設で、同時期と思われるが、具体的な性格は不明である。

４　その他

丸木舟（第337図　ＰＬ91－１～３）

ここでは、丸木舟の詳細な出土状況について述べる。 丸木舟はＥ６グリッドの南東隅で出土した。長軸は北東－南西方向を向き、船首と思われる方が北東側である。Ⅸ層（貝層）内から出土しており、集石４を取り外した後に検出した。またその際に丸木舟の上に立ったまま出土している杭も検出している。これらの出土状況から、丸木舟は集石４や杭列 23・24 と関連せず、それらよりも古いものであると考えられるが、各調査区での年代測定の結果をみると、杭群の年代に大きく幅があるので、少なくとも杭については関連する可能性は留めておきたい。また、丸木舟は、北東から南西方向へ向かって約 30㎝レベルが下がった状況で出土している。

規模は全長約 6.3 ｍ、幅約 70㎝、高さ約 20㎝のほぼ完全な形を残している。また丸木舟の船底には 16 箇所の小孔が確認され、補修孔と考えられる。

丸木舟の内部からは遺物が出土している。北東側では、３～５㎝ほどの多量の縄文土器の細片が、長さ１ｍ、幅 40㎝の範囲でみつかっている。意図的に土器を砕いて敷いたものか不明であるが、複数個体の深鉢（1334 ～ 1337）があったと考えられる。南西側では、人頭大の礫が２点並んで出土している。板状の安山岩ではなく 10 ～ 20㎝ほどの厚みがある。礫には、被熱痕跡や人為的な加工痕、縄を巻き付けた痕跡等はみつかっていないが、船のバランスをとるための重り、または錨の役割を果たしていたと考えられる。

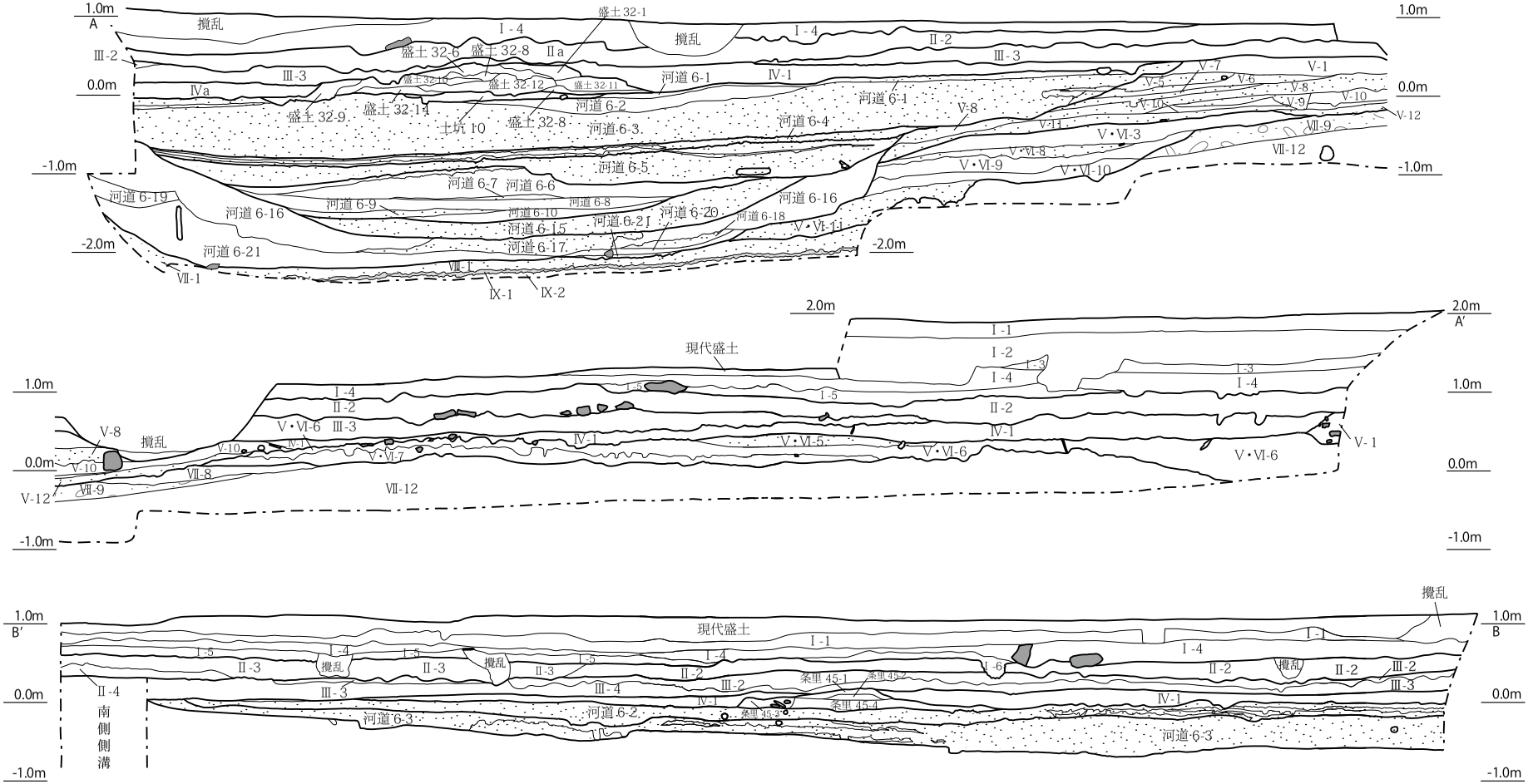
第 21 節　Ｐ 16 区の調査

第１項　調査区の概要

１　地形と土層堆積

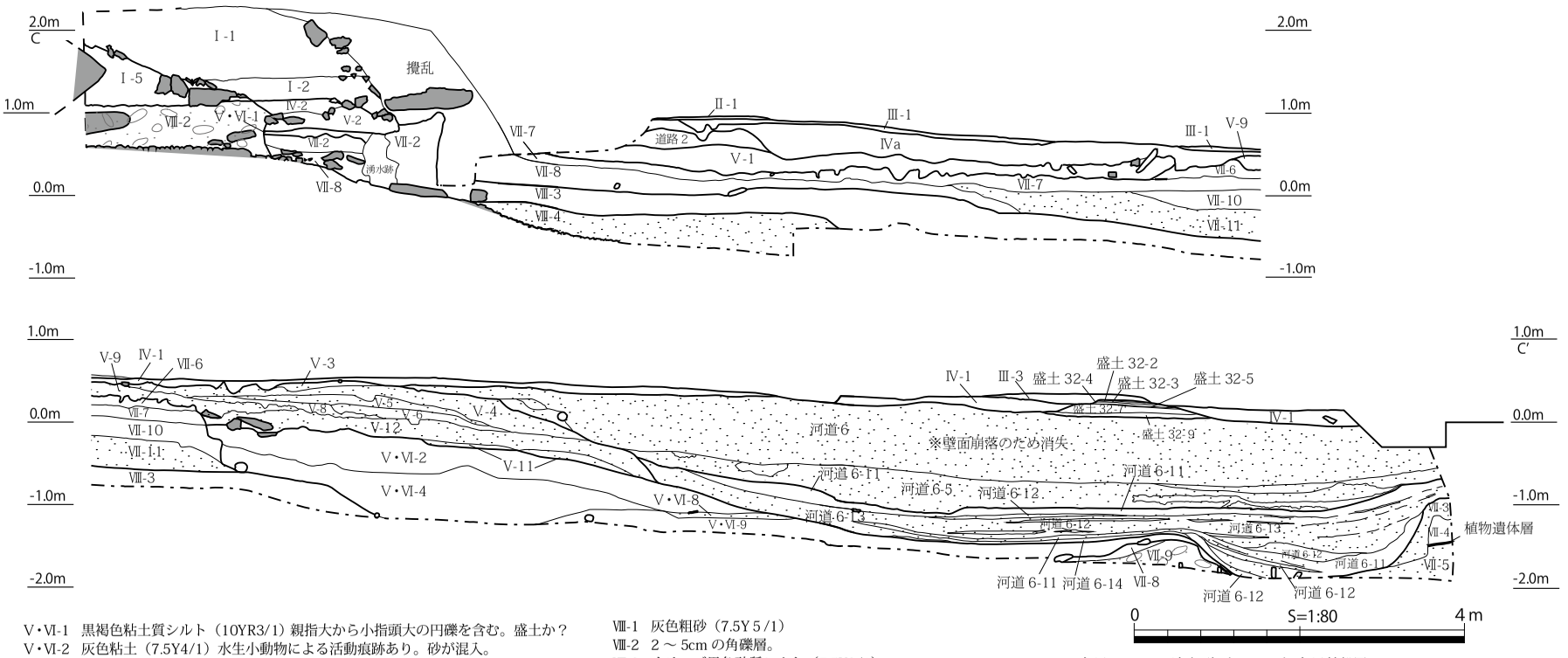
P16 区は青谷横木遺跡の最も西側に位置し、北東側の丘陵斜面地から平地にかけて調査区となっている。平地部分は水田として利用されている。調査区は、長辺が南西－北東で約 36 ｍ、短辺が南東－北西で約 19 ｍ、北東側の丘陵斜面部では短辺が約 21 ｍに広がる。平成 26 年度に調査を行い、調査面積は 697.9㎡を測る。

調査区全域で、基本層位であるⅠ～Ⅸ層まで確認している（第 338・339 図）。全体的に、北東丘陵から平地にかけてやや堆積が下がっている。Ⅰ・Ⅱ層は近・現代の造成土と水田耕作土である。Ⅲ層はいわゆる泥炭層であるが、粘土質が強い部分や水性堆積と思われる部分もある。Ⅳ層は、他の調査区と比較して堆積が薄いが、土器（1360 ～ 1365）や木簡（75 号）、木製祭祀具を含む木器などが数多く出土している。Ⅴ層は河道６の北東側の岸でみつかっている。細砂もしくは微砂層が多く、ラミナが認められる部分もあり、河道６以前の河道の堆積土であると思われるが、年代や後述する護岸を目的とした杭群との関係から、盛土の可能性もある。土器（1366 ～ 1368）や木製品が出土している。Ⅵ層相当と考えられる層については、出土遺物などから、明確に分けることができず、「Ⅴ・Ⅵ層」としている。砂層が認められるが、明確なラミナがなく、混入されたものの可能性もあるが、基本的



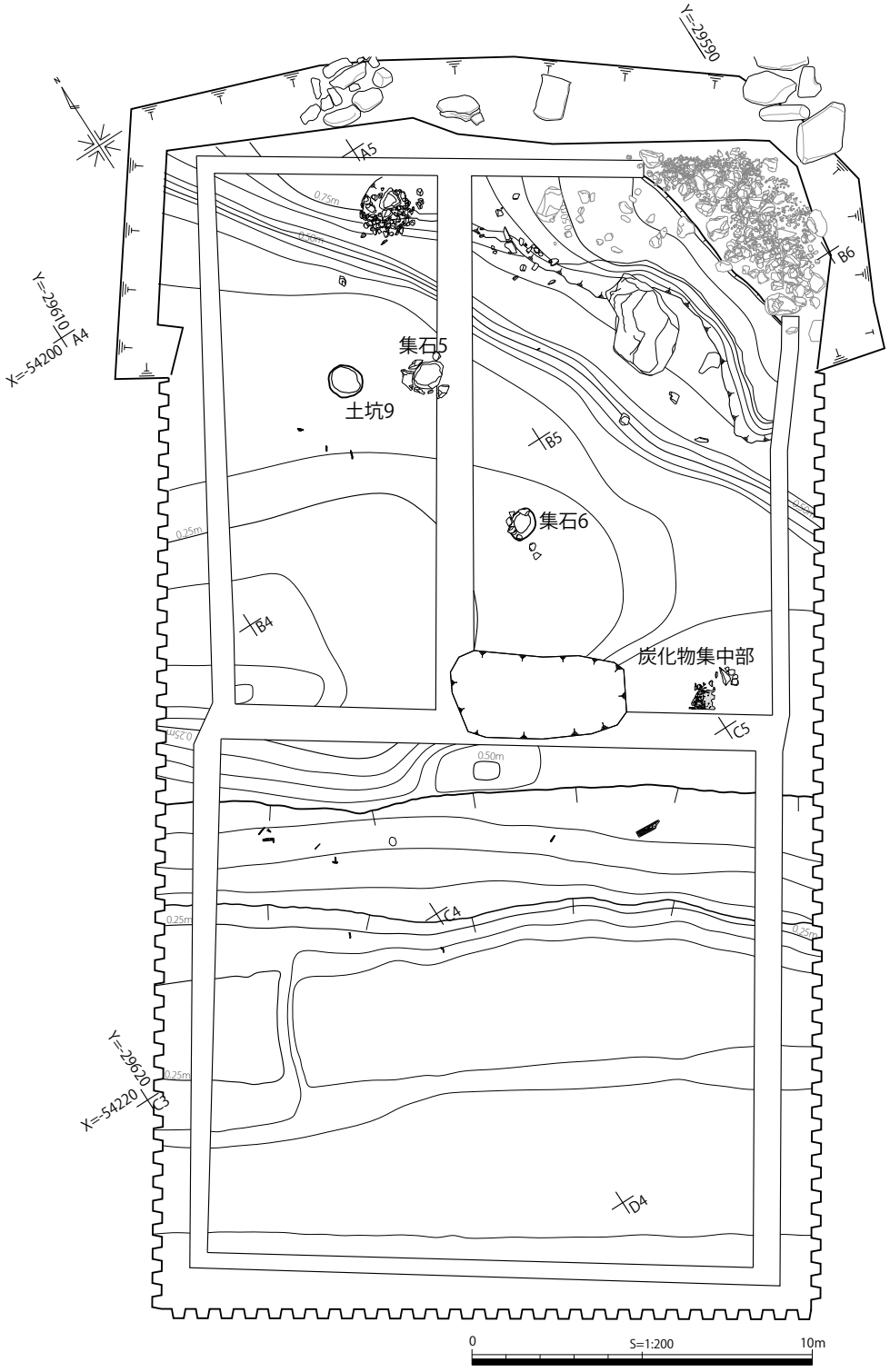
Ⅰ-1　暗褐色粘土質シルト（10YR3/3）小指頭大の角礫多く含む。
Ⅰ-2　黒褐色粘土質シルト（10YR3/2）を主体とし、拳大から人頭大の礫を多く含む。
Ⅰ-3　灰オリーブ粘質土がブロック状に混じる。人為的な盛土の可能性あり。
Ⅰ-4　灰オリーブ黒色粘質シルト（5Y 3/2）しまりあり。
Ⅰ-5　黒褐色粘土（10YR3/1）頭大の板礫を主体とする。
Ⅰ-6　黄褐色シルト（10YR5/6）まばらに板礫を含む。
Ⅱ-1　黒色粘土（10YR2/1）
Ⅱ-2　オリーブ黒色シルト（5Y 3/1）均一。植物遺体を多く含む。湿地性自然堆積。
Ⅱ-3　黒褐色粘土質シルト（2.5Y3/1）２㎝程度の礫多く含む。
Ⅱ-4　黒色粘土質シルト（2.5Y2/1）
Ⅲ-1　黒褐色粘土質シルト（2.5Y3/1）植物遺体を若干含む。
Ⅲ-2　オリーブ黒色粘質シルト（5Y 3/1）
Ⅲ-3　オリーブ黒色粘土（5Y 3/1）遺物を少量含む。水性堆積。
Ⅲ-4　灰色粘土（7.5Y4/1）
Ⅳ-1　黒灰色粘土質シルト（10YR 3/1）
Ⅳ-2　黒褐色粘土質シルト（10YR3/2）親指頭大から拳大の円礫を主体とする
Ⅴ-1　オリーブ黒色砂質シルト（7.5Y3/1）均一。微砂を多く含む。
Ⅴ-2　黒色粘土（10Y2/１）有機物を含む。盛土の礫が食い込む。
Ⅴ-3　オリーブ黒色微砂（10Y3/1）水性堆積。
Ⅴ-4　オリーブ黒色微砂（7.5Y3/1）
Ⅴ-5　オリーブ黒色微砂（5Y3/1）
Ⅴ-6　灰色微砂（5Y4/1）
Ⅴ-7　灰色微砂（5Y4/1）水平方向の摂理あり。
Ⅴ-8　灰色微砂（5Y4/1）
Ⅴ-9　灰オリーブ色細砂（5Y5/2）
Ⅴ-10　灰色シルト（7.5Y4/1）
Ⅴ-11　灰色粗砂（5Y4/1）
Ⅴ-12　オリーブ黒色細砂～微砂（5Y3/1）

第338図　P16区北西壁・南西壁断面図



第339図　P16区南東壁土層断面図

Ⅴ・Ⅵ-1　黒褐色粘土質シルト（10YR3/1）親指大から小指頭大の円礫を含む。盛土か？
Ⅴ・Ⅵ-2　灰色粘土（7.5Y4/1）水生小動物による活動痕跡あり。砂が混入。
Ⅴ・Ⅵ-3　オリーブ黒色粘土（5Y 3/2）
Ⅴ・Ⅵ-4　オリーブ黒色粘土（10Y3/1）
Ⅴ・Ⅵ-5　灰色微砂（10YR4/1）
Ⅴ・Ⅵ-6　灰色シルト（7.5Y4/1）
Ⅴ・Ⅵ-7　オリーブ黒色シルト（7.5Y3/1）
Ⅴ・Ⅵ-8　灰色粗砂（7.5Y 5/1）
Ⅴ・Ⅵ-9　黒色シルト（5Y 2/1）
Ⅴ・Ⅵ-10　オリーブ黒色粘土（5Y 3/1）
Ⅴ・Ⅵ-11　灰オリーブ色粗砂（5Y 5/2）
Ⅶ-1　灰色粗砂（7.5Y 5/1）
Ⅶ-2　黒褐色シルト（2.5Y3/1）
Ⅶ-3　オリーブ黒色微砂 (5Y3/1)
Ⅶ-4　灰色シルト（5Y4/1）
Ⅶ-5　灰オリーブ粗砂（5Y6/2）
Ⅶ-6　オリーブ黒色粘土（10Y3/1）多量の植物遺体を含む。
Ⅶ-7　オリーブ黒色シルト（10Y3/1）微砂を含む。若干の植物遺体を含む。
Ⅶ-8　オリーブ黒色砂質シルト（7.5Y3/1）砂含む。ゆるい流れ。流水堆積。
Ⅶ-9　黒褐色砂質シルト（10YR3/1）拳大から頭大の板石、角礫層。盛土？
Ⅶ-10　オリーブ黒色シルト（7.5Y3/1）湿地性堆積。
Ⅶ-11　オリーブ黒色微砂（5Y3/1）水性堆積。
Ⅶ-12　オリーブ黒色砂質シルト（7.5Y3/1）
Ⅷ-1　灰色粗砂（7.5Y 5 /1）
Ⅷ-2　２～ 5cm の角礫層。
Ⅷ-3　オリーブ黒色砂質シルト（7.5Y3/1）
Ⅷ-4　灰色粗砂（7.5Y6/1）
Ⅸ-1　巻貝を主にカキ・ハマグリ少量混じる。
Ⅸ-2　オリーブ黒色粘土（10Y 3/1）
盛土 32-1　オリーブ黒色粗砂（10Y 3/1）
盛土 32-2　オリーブ黒色細砂（5Y3/1）しまりあり。シルトを含む。
盛土 32-3　黒褐色粗砂（2.5Y3/2）
盛土 32-4　黒褐色細砂（2.5Y3/2）
盛土 32-5　暗灰黄色細砂（2.5Y4/2）
盛土 32-6　灰褐色砂質シルト（7.5YR 4/1）粗砂を多く含む。
盛土 32-7　オリーブ黒色細砂（7.5Y3/1）微砂を含む。
盛土 32-8　灰黄褐色粗砂（10YR 4/2）水平方向の堆積。
盛土 32-9　黒褐色砂質シルト（10YR 3/1）
盛土 32-10　黒褐色粘質シルト（2.5Y 3/1）多量の粗砂を含む。
盛土 32-11　黒褐色粘土質シルト（2.5Y 3/1）砂を含む。
盛土 32-12　黄灰色砂質シルト（2.5Y 4/1）多量の木の枝を含む。
盛土 32-13　暗褐色細砂（10YR 3/3）
盛土 32-14　黄灰色砂質シルト（2.5Y 4/1）多量の細砂を含む。
条里 45-1　黒褐色砂質シルト（2.5Y3/2）盛土。
条里 45-2　オリーブ黒色砂質シルト（5Y3/2）微砂含む。
条里 45-3　黒褐色粘土（10YR3/1）多量の粗朶を含む。
条里 45-4　灰色細砂（7.5Y4/1）条里基盤層。
河道 6-1　オリーブ黒色粗砂（5Y 3/1）上は粗砂下は粘土に移り変わる。旧表土面。
河道 6-2　灰白色粗砂（2.5Y 7/1）流水堆積。
河道 6-3　灰白色粗砂（5Y 8/2）
河道 6-4　灰白色細砂～微砂（2.5Y 8/1）選択が進む。
河道 6-5　黄灰色粗砂（2.5Y 6/1）微砂を含む。多量の礫を含む。
河道 6-6　灰色粘土（7.5Y 4/1）
河道 6-7　灰色粗砂（7.5Y 4/1）
河道 6-8　灰色粘土（10Y 5/1）有機物を含む薄い層が３枚からむ。
河道 6-9　灰色細砂（7.5Y 4/1）
河道 6-10　オリーブ黒色粘土（7.5Y 3/1）下部に有機物多量に含む。
河道 6-11　黒褐色粘土（10YR3/2）
河道 6-12　にぶい黄褐色粗砂（10YR5/3）
河道 6-13　にぶい黄褐色粗砂（10YR4/3）
河道 6-14　黒褐色シルト（10YR2/3）多量の植物遺体を含む。
河道 6-15　灰白色細砂（5Y 7/2）
河道 6-16　灰色粘質シルト（5Y 4/1）木材チップ、荒縄等集中出土。
河道 6-17　灰色粗砂 (5Y 5/1)
河道 6-18　灰黄色砂（2.5Y 7/2）
河道 6-19　灰色シルト（5Y 4/1）微砂との細かい互層状堆積。
河道 6-20　灰色粘土（5Y 4/1）
河道 6-21　オリーブ黒色粘土（7.5Y 3/1）古墳時代前期の土器出土。



第340図　P16区Ⅳ層上面遺構分布図

には河道 21 と呼称する､河道 6 以前の河道の堆積と考えられる。Ⅶ層についても砂層が認められる。これも河道 21 以前の河道の堆積である可能性が高い。ただし、（A － A’）（C － C’）で礫層であるⅦ -9 層のように、丘陵側からの山崩れによるものか、護岸等の盛土によるものかはっきりしないものもある。弥生時代中期の土器（1369・1370）が認められるが、Ⅷ層と混同している可能性もある。Ⅷ層でも砂層が認められる。粘土層などと互層状の堆積を示し、河道堆積の最下層と考えられる。Ⅸ

層は粘土層であり、巻貝やカキ、ハマグリなどの貝類を少量含んでいる。

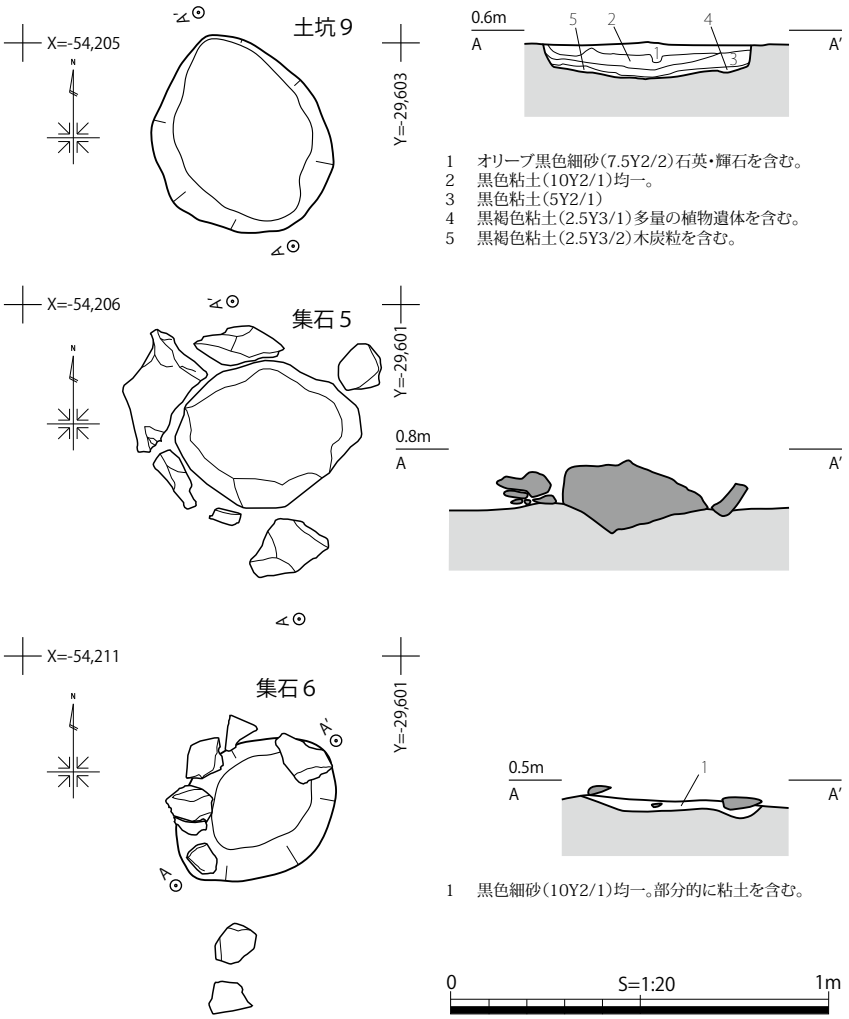
２　遺構の概要

Ｐ 16 区では、縄文時代晩期の杭列４列、集石１基、弥生時代中期～後期の自然河道１基、古墳時代中期～後期の自然河道１基、杭列２列、古墳時代の杭列２列、集石２基、奈良・平安時代の道路遺構１基、条里遺構１基、盛土遺構２基、土坑１基、平安時代以降の土坑１基、集石２基、炭化物集中部を１基確認した。

第２項　Ⅳ層上面の遺構（平安時代以降）

１　概要

Ⅳ層上面では、土坑９、集石５・６の遺構を確認した（第 340 図）。また、明確な遺構とは言えないが、



第341図　P16区土坑９　集石５・６

Ｂ４グリッドの南東隅で１×0.8ｍの範囲で炭化物集中部が認められ、隣接して礫の集中も認められた。いずれも平安時代以降の遺構と考えられる。遺構は調査区北東側に集中しているが、それぞれの関連性は見出せなかった。

２　土坑

土坑９（第341図）

調査区Ａ４グリッドに位置する。長径55cm、短径45cm、深さ10cmを測る、平面楕円形の土坑である。土層断面からは、柱穴等の遺構ではないと考えられる。

３　集石

集石５（第341図）

調査区Ａ４グリッドに位置する。長さ50cm、幅40cm、厚さ20cmの大型の礫を中心に拳大の礫が周囲を取り囲むように配置されている。集石の下には、土坑や落ち込み等は確認できていない。

集石６（第341図）

調査区Ｂ４グリッド北東隅に位置する。人頭大の礫が集中しており、下にある土坑状の落ち込みの縁に沿うように配置されている。土坑状の落ち込みは、長径50cm、短径40cmの平面楕円形であるが、深さが２～３cmと浅く、明確な土坑とは断定できない。

第３項　Ｖ層上面の遺構（古墳時代中期～平安時代）

１　概要

Ｖ層上面では、道路２、条里45、盛土32・35、河道６、土坑10、杭列25～27、集石７・８を検出した（第342・350・358図）。道路２、条里45、盛土32・35、土坑10は奈良・平安時代のものと考えられるが、河道６、杭列25～27、集石７・８は古墳時代のものと考えられる。奈良･平安時代は、道路と条里、盛土遺構が展開し、古墳時代は大規模な河道６が調査区を横断し、丘陵斜面を杭等で護岸する状況が確認されている。杭列は年代差があり、古墳時代前期から継続的に護岸を行っていた可能性がある。

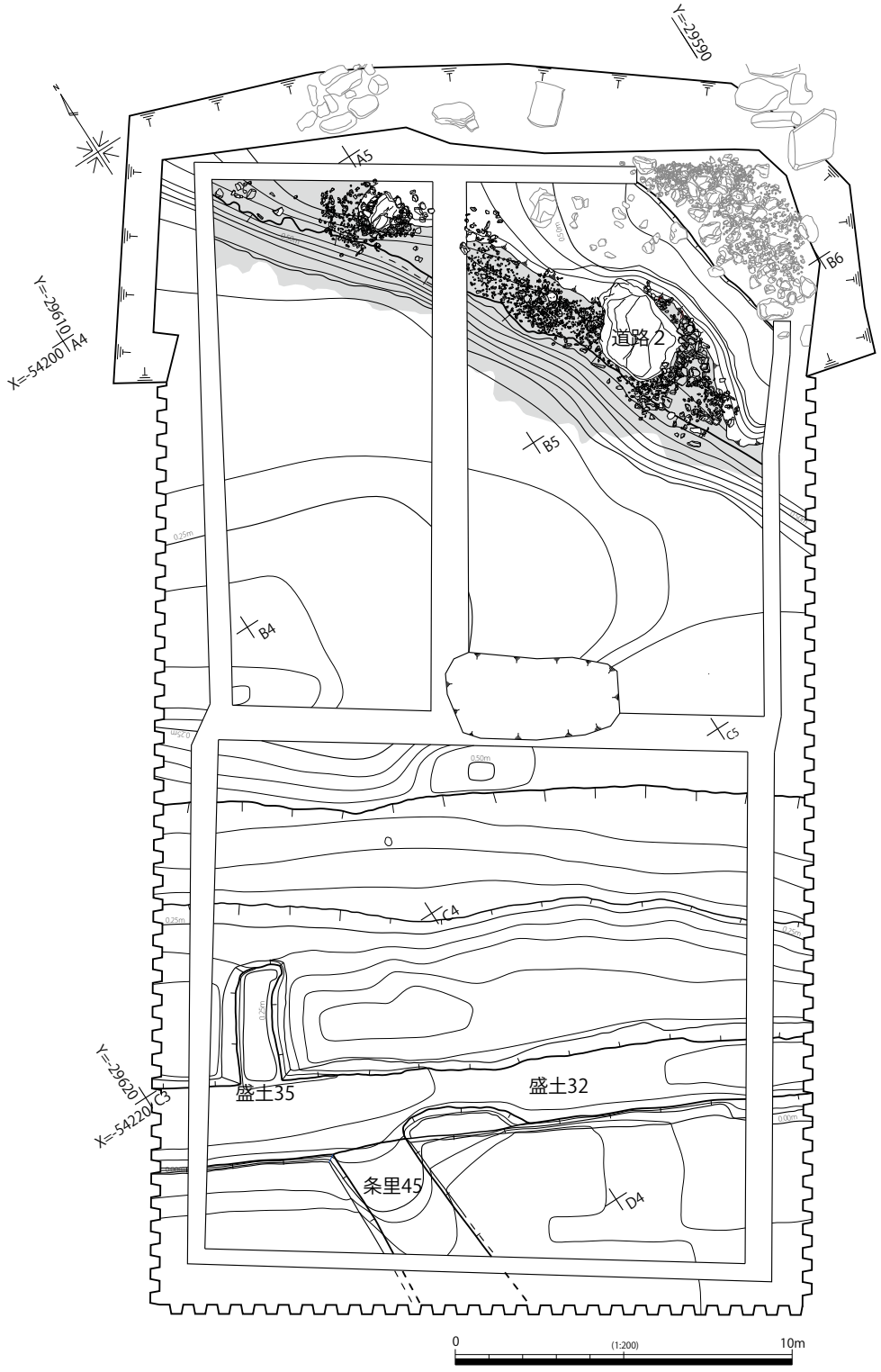
２　道路遺構

道路２（第343図　ＰＬ92－１）

調査区北東側の丘陵斜面と平坦地との境付近に存在する。１～10cm大の礫を多く含み、また木材も含む土が認められ、上面には人頭大の礫や板状の礫が帯状に敷かれている状況であった。Ａ４グリッドからＡ５･Ｂ５グリッドにかけて展開し、南西－北東方向に18ｍほど帯状にのびている。幅は２～2.6ｍをはかり、盛土の厚さは0.2～0.3ｍである。特に砂利状の礫が、丘陵斜面から平坦地への傾斜変換点で多く確認できる。北東側は現代の水路によって掘りこまれており、本来はこの砂利状の礫が丘陵側へもっと広がっていたと考えられる。

盛土内からは、須恵器長頸壺（1351）や人形（W1019）や蓋板（W1766）が出土している。また、道路２直上のⅣ層から木簡（75号木簡）も出土している。

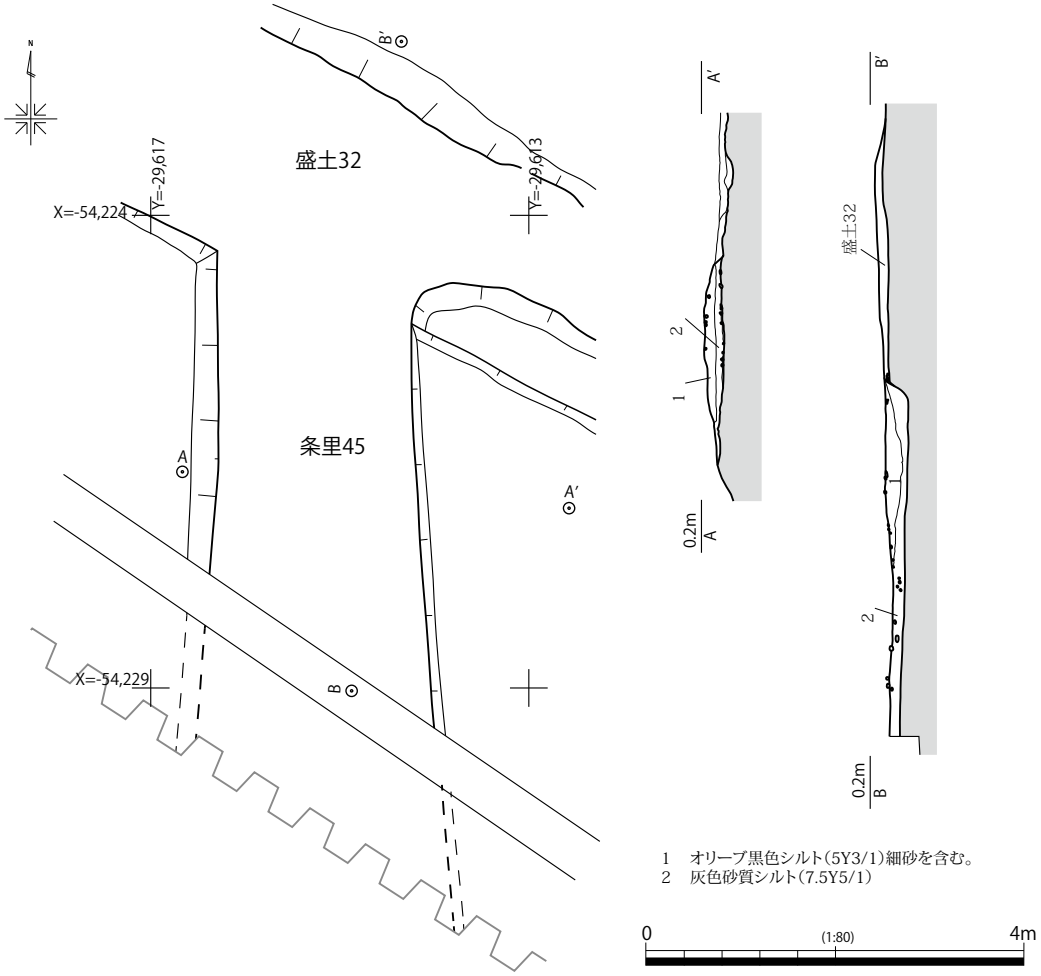
この遺構は、P15区で確認された道路２と繋がると考えられるが、P15区で述べたように、P14区



第342図　P16区Ⅴ層上面遺構分布図（１）

以東で確認された道路１とは、構造の違いや道路１道路外盛土が平行して存在しないことから、別の遺構としている。ただし、盛土中から出土した遺物の年代からも同時期に機能し、接続していた可能性もある。

第343図　P16区道路２



第344図　P16区条里45

３　条里遺構

条里45（第344図　ＰＬ92－２～93－１）

調査区南西壁より北方向にのびる条里遺構であり、盛土 32 と接続する。一町方格（約 109 m四方）の条里地割と考えられる。Ｃ３･Ｃ４グリッドに位置し、調査区内での規模は、長さ 5.6 m、基底部幅 2.5 ～ 2.8 m、厚さ 20㎝を測る。土層断面からは、盛土 32 の後に構築されている。

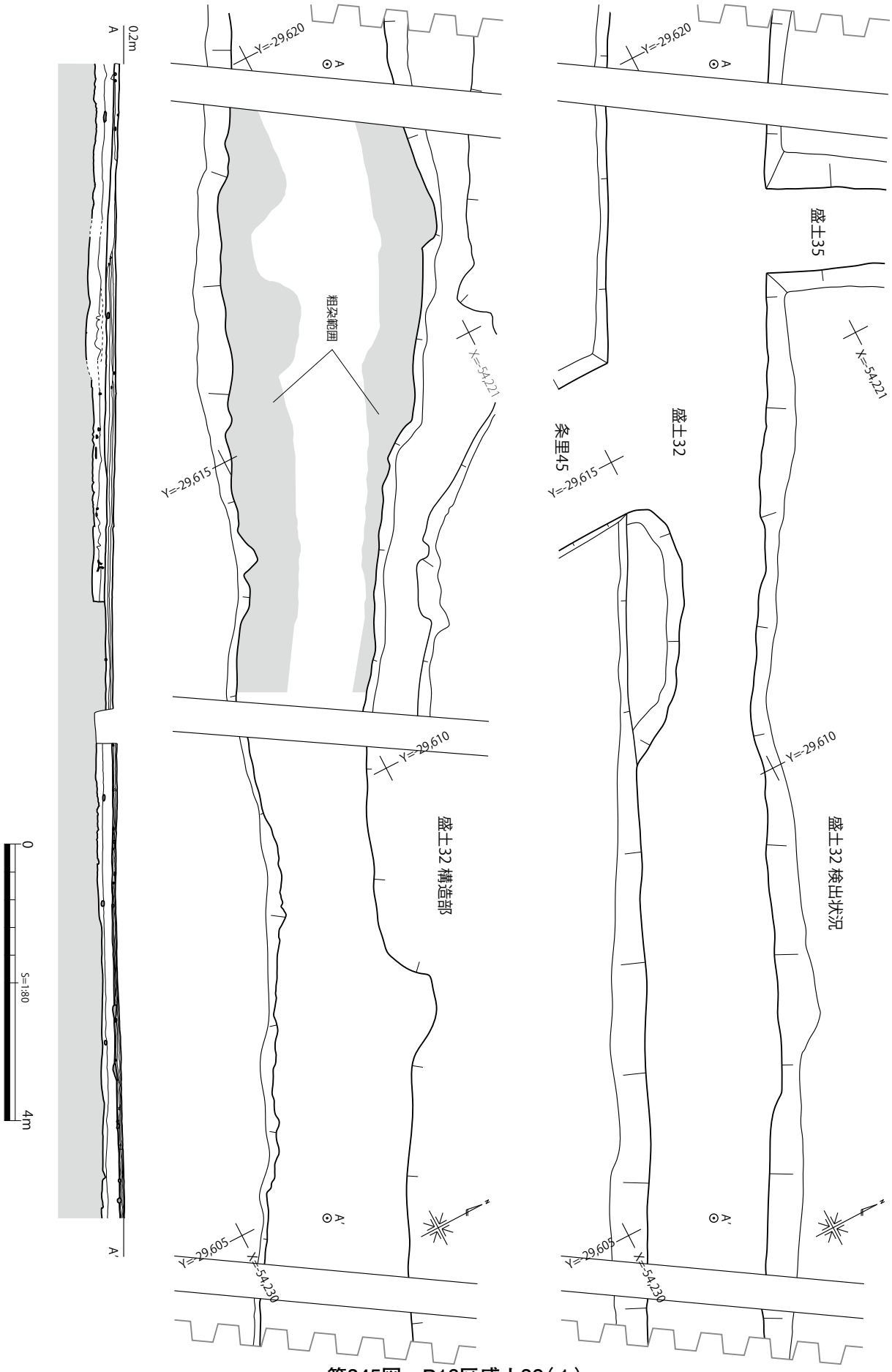
盛土は細砂を含み、木製祭祀具（W1021）などの木材も含む。後述する盛土 32 との接続部では、粗朶や木材、礫等が多く含まれている。

他の地区との関係から、一町方格（約 109 m四方）の条里地割にあたると考えられるが、他の地区でみられた、表面を礫で覆ったり、規模が大きいといった特徴がない。

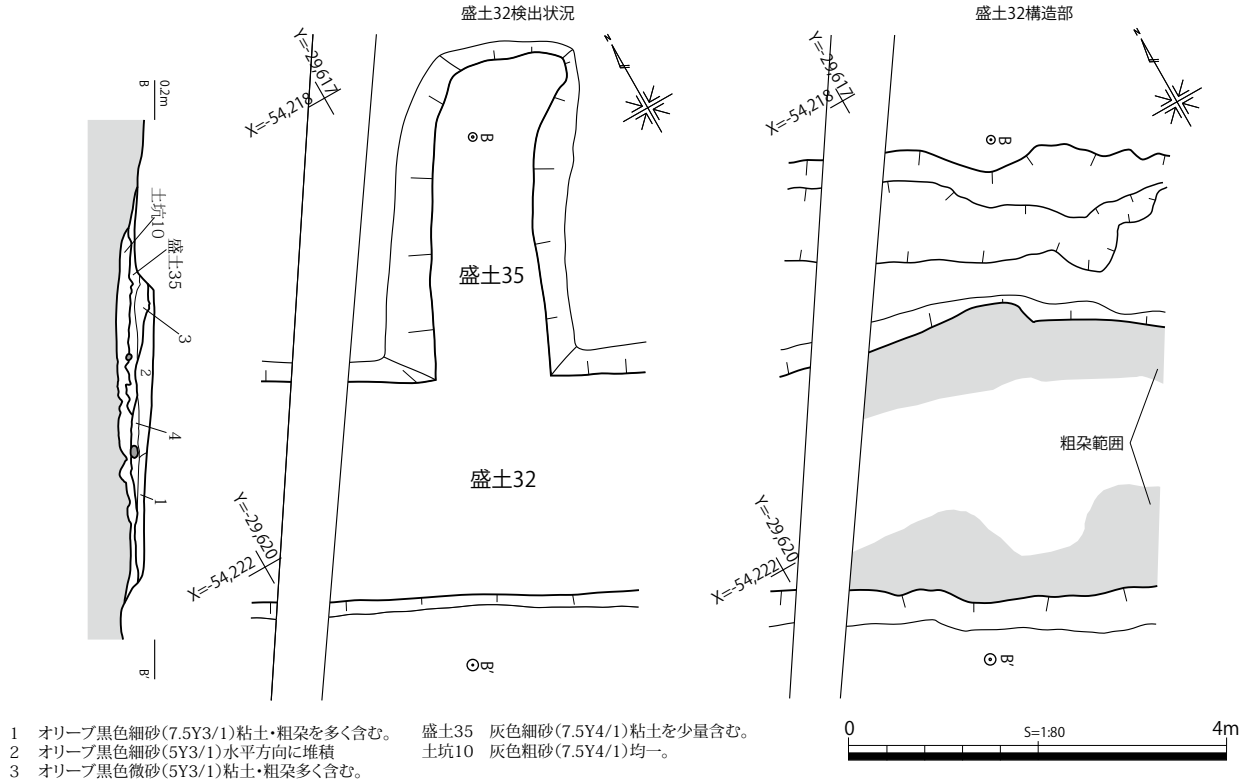
４　盛土遺構

盛土32（第345 ～ 348図　ＰＬ92－２・３・93－２）

調査区南東壁より南東－北西方向にのびる盛土遺構であり、条里 45、盛土 35 と接続する。Ｃ３・Ｃ４グリッドに位置し、調査区内での規模は、検出時で全長 19.2 m、基底部幅 2.7 ～ 3 m、高さ 30 ～ 40㎝を測る。盛土 32 の下面には、粗砂～微砂で埋まっている河道６が、ほぼ平行する形で存在しており、盛土には、その砂が多く含まれている。芯となる構造部は砂とシルトを混ぜ合わせた層といっ

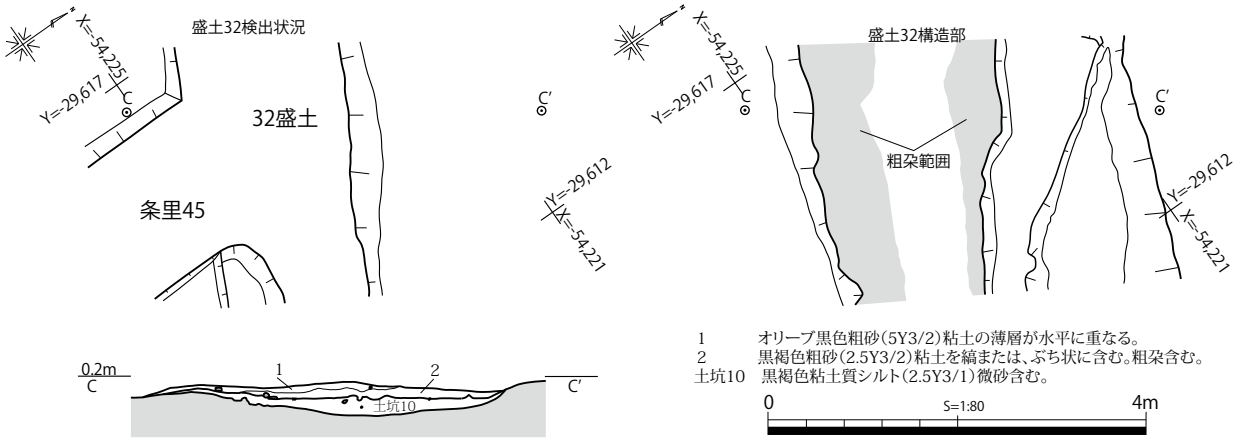


第345図　P16区盛土32（1）



1　オリーブ黒色細砂(7.5Y3/1)粘土・粗朶を多く含む。
2　オリーブ黒色細砂(5Y3/1)水平方向に堆積
3　オリーブ黒色微砂(5Y3/1)粘土・粗朶多く含む。
4　オリーブ黒色細砂(5Y3/1)
盛土35　灰色細砂(7.5Y4/1)粘土を少量含む。
土坑10　灰色粗砂(7.5Y4/1)均一。

第346図　P16区盛土32（２）



1　オリーブ黒色粗砂(5Y3/2)粘土の薄層が水平に重なる。
2　黒褐色粗砂(2.5Y3/2)粘土を縞または、ぶち状に含む。粗朶含む。
土坑10　黒褐色粘土質シルト(2.5Y3/1)微砂含む。

第347図　P16区盛土32（３）

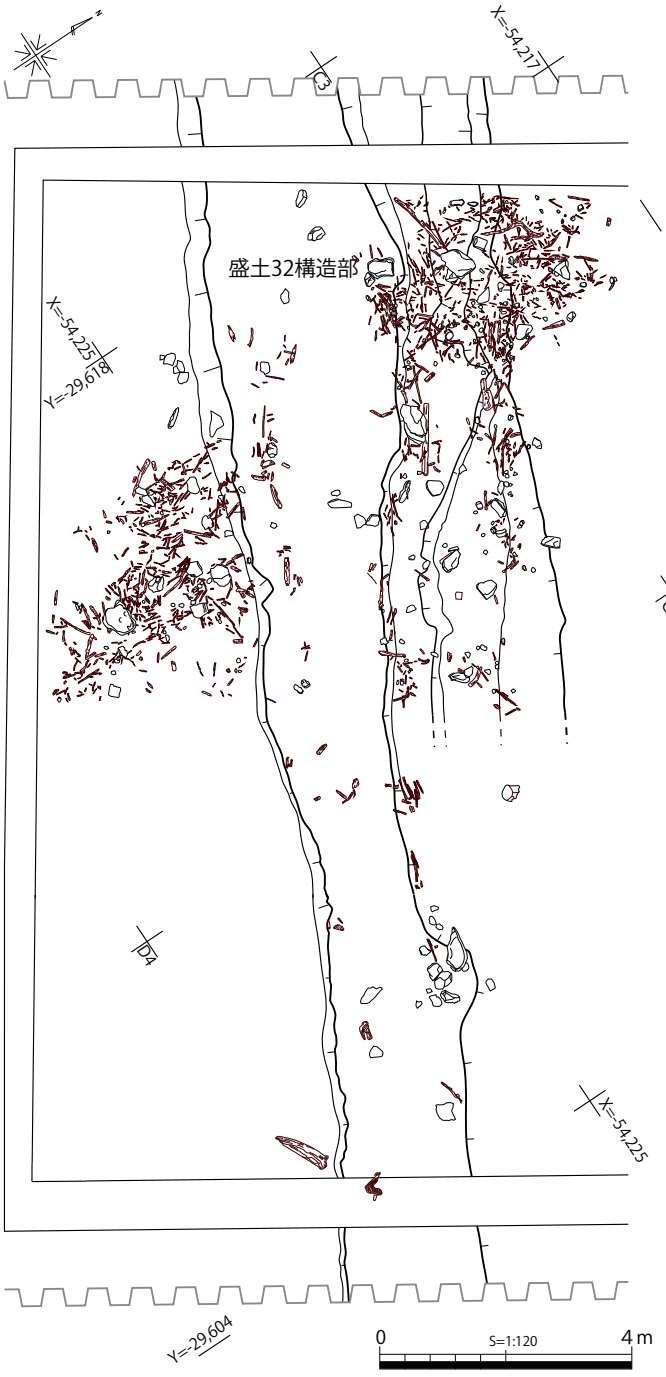
てよい状況である。その構造部の両側縁には、粗朶が集中して、長軸に沿って配置されており、他の盛土とは異なる特殊な構造である。芯となる部分に砂や粗朶、木材が多く含まれている点はP15区の32盛土と共通する。

盛土内からは、須恵器高坏（1347）や人形、馬形、斎串といった木製祭祀具（W1023 ～ W1045）をはじめ、木器（W1759・1762・1763）や木端などが多量に出土している。河道６の埋土である砂層を利用しているため、これら遺物、特に木製祭祀具は元々は河道６に由来する可能性がある。

P15区で述べているように、道路１とセット関係でないため、名称は別にしているが、盛土の規模や構造、構築時期など、他の地区の道路１道路外盛土と共通する点がある。

盛土35（第349図　ＰＬ92－２・３・93－３）

調査区北西壁近くの盛土32から北東方向に向かってのびる盛土遺構である。Ｂ３グリッドに位置



第348図　P16区盛土32構造部粗朶検出状況図

し、全長3.6ｍ、基底部幅1.9～２ｍ、高さ20㎝を測る。盛土32と同様に盛土内はほぼ砂層で構成されている。これも下面の河道６の埋土を利用したものと考えられ、基盤となるオリーブ黒色砂層（７層）には、粗朶を多量に含んでいる。土層断面より盛土32より先に構築されている。条里45と同様に盛土32との接続部で木材や人頭大の礫を多く含んでいる。

盛土内から人形や馬形といった木製祭祀具（W1017・1018・1020）などが出土している。

検出時は、条里45の続きと考えられたが、条里45の直線延長上よりずれていたり、走行する方向もずれていることから別遺構としている。

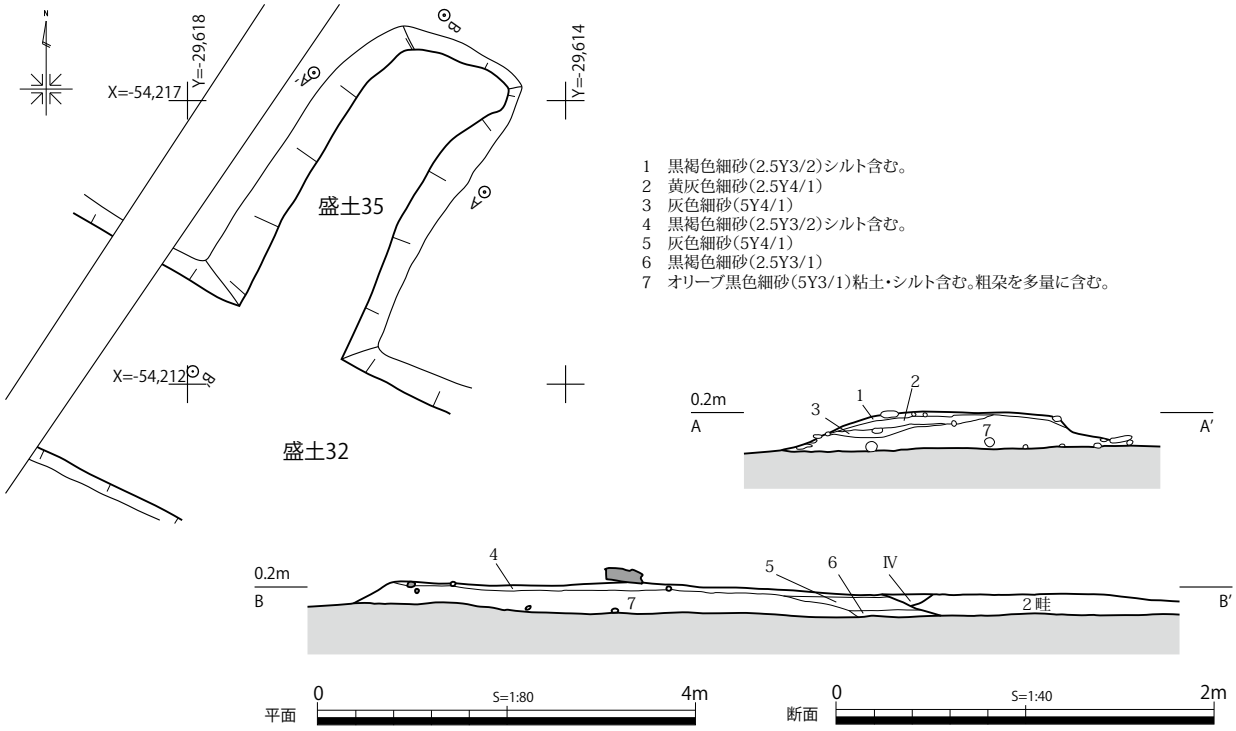
５　河道

河道６（第351図　ＰＬ94－１）

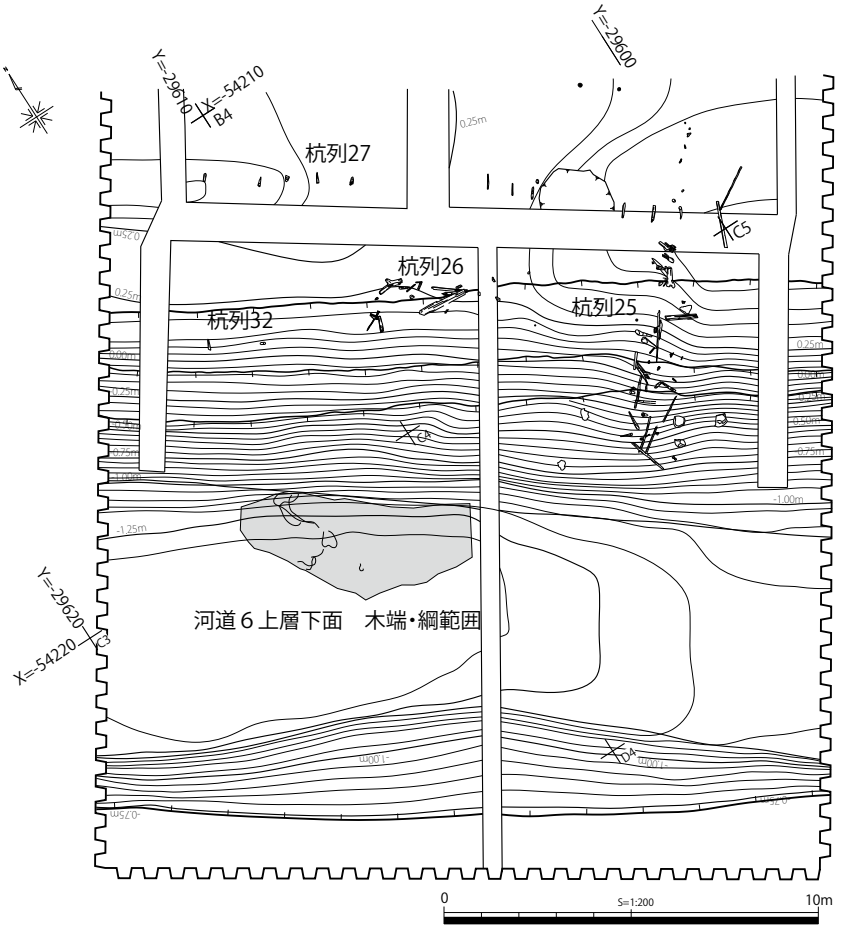
調査区南西半部を横断する河道である。調査区内で長さ19ｍ、幅14～16ｍを測る。埋土は大きく上層と下層に分けられ、上層で深さ約１ｍ、下層で1.7ｍである。上層は粗砂から微砂で構成されており、粗砂のみまたは細砂や微砂のみで水平堆積している層もあり、自然の中で淀みがない流れであったと考えられる。下層では、植物遺体を含み、粘土層と砂層が互層状になるなど､様相が異なる。

埋土からは古墳時代前期～中期の土師器（1352～1355）が出土している。上層から下層の年代は、後述する護岸を目的としたと考えられる杭列群の年代とも矛盾しない。よって河道６の北東側の岸では、古墳時代前期から後期まで護岸が行われていたと考えられるが、他の調査区における河道６の年代は、古墳時代中・後期であるので、この古墳時代前期の遺物や杭列については、河道６と重なっている別の河道に伴っている可能性がある。

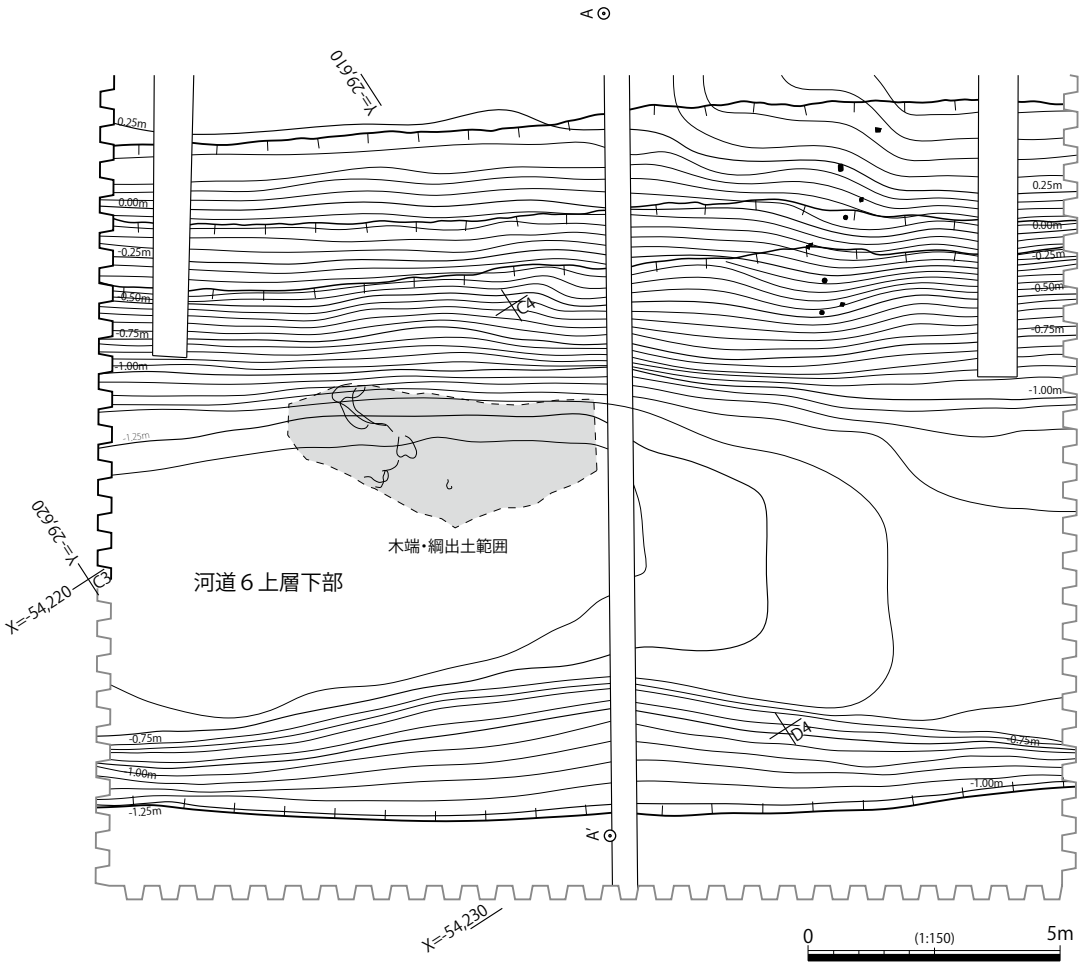
上層最下面の北東側下端付近、Ｃ３グリッド内で、綱と木端が６×2.5ｍの範囲で集中して出土した。北東岸付近にはき寄せられた状況と考えられる。綱は草本類をまとめてよったような形で、幅５㎝程度である。最長で1.6ｍ、ほとんどが１ｍ前後の長さの綱であり、北東側でまとまって見つかっている。木端は長さ10㎝前後、幅３～５㎝、厚さ１㎝以下の木片が主流を占める。製品類はなく、



第349図　P16区盛土35



第350図　P16区Ⅴ層上面遺構分布図（２）



第351図　P16区河道６上層下部平面図

粗い加工であり、木造構造物等をつくった際のチョウナ屑を廃棄したとみられる。なお、出土した綱の放射性炭素年代測定では、２σ暦年代範囲で 537calAD-615calAD（95.4％）の結果を得ており、年代的に矛盾はない。

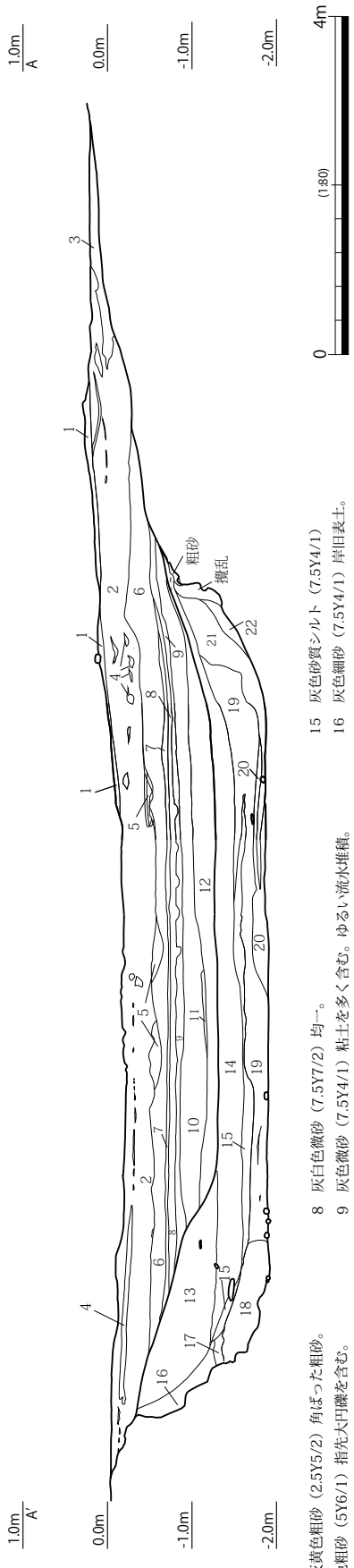
最下面では、集石７・８を検出した（第 359 図）。詳細は遺構個別の記載に譲るが、最下面ではＣ４グリッドの調査区南東壁付近で４×３ｍほどの平坦面がある。そこからさらに底へ向けて緩傾斜が認められ、この緩斜面上に集石７・８が認められる。平坦面と集石の関係や機能については不明であるが、後述する河道 21 段階での地形の影響と考えられる。

６　土坑

土坑10（第354図）

盛土 32 の掘削後､その直下の河道６の砂層上で検出した。調査区西隅のＣ３グリッドに位置する。長径約 7.6 ｍ、短径４ｍ、深さ 20㎝の東西に長い楕円形の土坑状の遺構である。埋土がシルト質の土であり、盛土 32 構造部の土と似ている。埋土からは、土師器の杯（1348・1349）が出土しており、埋没時期は盛土 32 と大きな差はないと考えられる。

同様に、盛土 32 直下の土坑状の窪みがＰ 15 区でも検出されており、盛土 32 を構築する前に、河道６上面の窪みを埋めたものの可能性が高い。



1　暗灰黄色粗砂（2.5Y5/2）角ぼった粗砂。
2　灰色粗砂（5Y6/1）指先大円礫を含む。
3　オリーブ黒色微砂（10Y3/1）粘土を含む。
4　灰白色細砂（5Y8/1）
5　黒褐色砂質シルト（2.5Y3/1）
6　灰白色粗砂（5Y7/2）角ぼった粗砂・細砂が水平堆積。
7　灰色微砂（7.5Y4/1）粘土を多く含む。ゆるい流水堆積。
8　灰白色微砂（7.5Y7/2）均一。
9　灰色微砂（7.5Y4/1）粘土を多く含む。ゆるい流水堆積。
10　灰白色粗砂（7.5Y7/2）
11　灰色微砂（5Y5/1）粘土を多く含む。
12　灰白色細砂（7.5Y7/2）
13　黒褐色微砂（2.5Y3/1）
14　黒褐色粘土（2.5Y3/1）と黄灰色微砂（2.5Y5/1）が水平交互に植物遺体を含む層が堆積。静水堆積。
15　灰色砂質シルト（7.5Y4/1）
16　灰色細砂（7.5Y4/1）岸旧表土。
17　灰色砂質シルト（7.5Y4/1）
18　オリーブ黒色粘土（10Y3/1）
19　黄灰色粗砂（2.5Y5/1）を主体に粘土・植物遺体を含む。
20　オリーブ黒色シルト（5Y3/1）
21　オリーブ黒色シルト（5Y3/1）
22　黒褐色粘土（2.5Y3/1）

第352図　P16区河道６土層断面図

７　杭列

杭列25（第355図　ＰＬ94－２・３）

杭列25は調査区東側のＣ４・Ｂ５グリッドに位置する。南西－北東方向に約９ｍのびる杭列で、河道６に直交する。樹皮のついた丸木材の他、角材や穴の空いた部材を転用して杭としている。45本で構成され、その多くが角材や転用材である。後述する杭列とは列の走行方向が異なるが、河道６の護岸を目的としたものと思われる。

この杭列の丸木材の放射性炭素年代測定では、２σ暦年代範囲で417calAD － 537calAD（95.4％）の結果を得ている。古墳時代中・後期の遺構と考えられる。

杭列26（第356図）

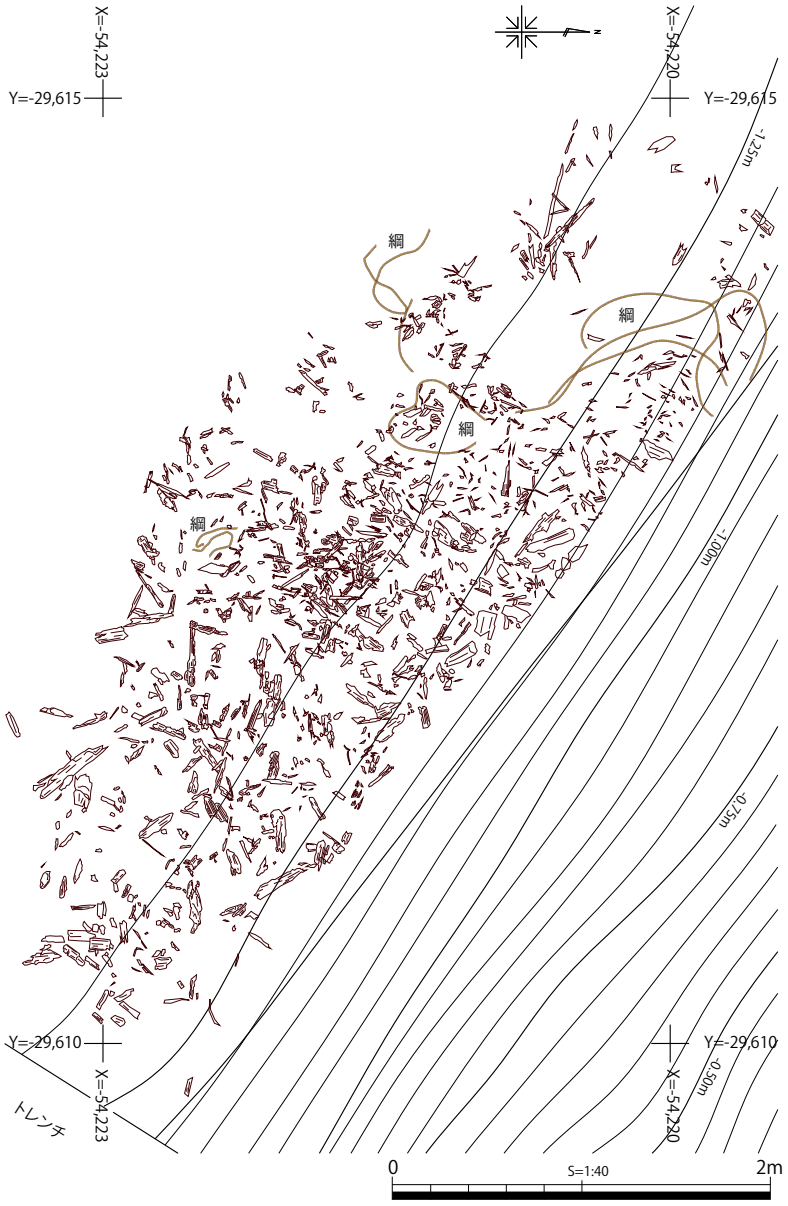
杭列26は、ほぼ河道６の上端に沿う形で検出している。Ｂ４グリッドに位置する。南東－北西方向に約8.8ｍのびる杭列で河道６に並行する。樹皮のついた丸木材の他、角材や部材を転用して杭としている。10本前後で構成され、その多くが角材や転用材である。河道６の護岸を目的としたものと思われる。

この杭列の丸木材の放射性炭素年代測定では、２σ暦年代範囲で420calAD － 537calAD（95.4％）の結果を得ている。先述した杭列25とほぼ同年代であり、古墳時代中･後期の遺構と考えられる。

杭列27（第357図）

杭列27は、河道６の上端よりも３ｍほど北東側にあり、Ｂ４グリッドに位置する。南東－北西方向に一直線に約10ｍのびる杭列で、河道６に平行する。樹皮のついた丸木材の他、角材や部材を転用して杭としている。10本で構成され、その多くが角材や転用材である。河道６の護岸を目的としたものと思われる。

この杭列の角材の放射性炭素年代測定では、２σ暦年代範囲で53calAD － 138calAD（95.2％）の結果を得ている。先述した杭列25・26とは年代差があるが、検出した面やレベル等から考えて、古墳時代のものと考えられる。



第353図　P16区河道６内網・木端出土状況図

杭列32（第350図）

杭列 32 は、杭列 26 の西にあるが、河道６の上端よりも南西側に下がった位置にあり、Ｂ３グリッドに位置する。南東－北西方向にのびる杭列で、河道６に並行する。丸木材と角材それぞれ１本ずつで構成され、杭間は 1.4 ｍである。河道６の護岸を目的としたものと思われる。

この杭列の角材の放射性炭素年代測定では、２σ暦年代範囲で 325calAD － 400calAD（85.8 %）の結果を得ている。杭列 25・26 とは年代差があり、位置も異なる。先述した杭列 27 と同様に古墳時代のものと考えられる。

８　集石

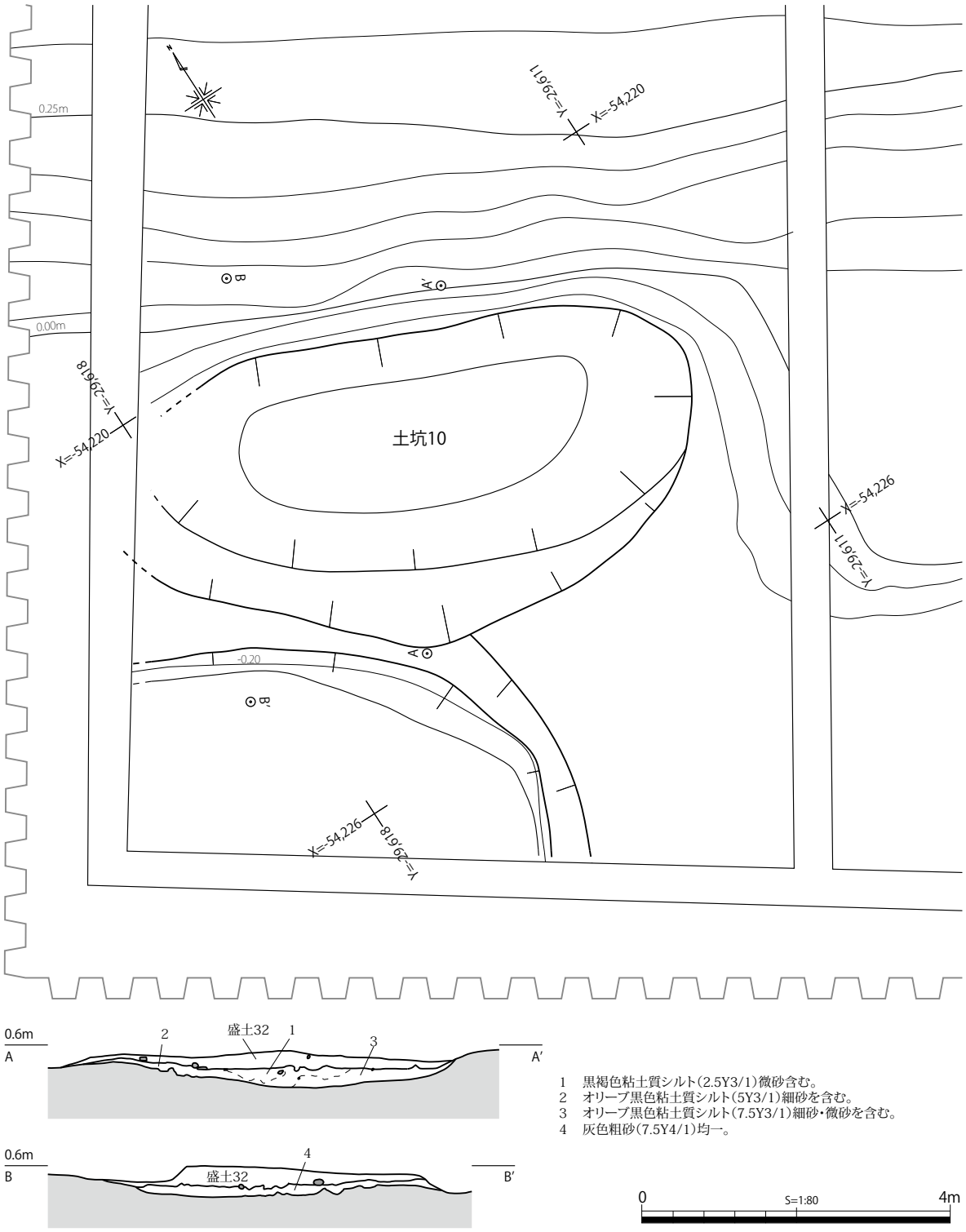
集石７（第359図）

河道６の最下面で検出した。Ｃ４グリッドの調査区南東壁付近で一部平坦面があり、さらに底へ向けての緩傾斜が認められ、この緩斜面上で集石７を確認した。人頭大ほどの礫が５つ、径 0.5 ｍの範囲で集中して見つかっている。礫の下には、同様に径 0.5 ｍ、深さ５㎝の土坑状の窪みがみつかっているが、遺構かどうかは不明である。

集石８（第359図　ＰＬ95－２・３）

河道６の最下面で検出した。Ｃ４グリッドの調査区南東壁付近で一部平坦面があり、さらに底へ向けての緩傾斜が認められ、この緩斜面上、集石７の南西約２ｍの位置で集石８を確認した。主に拳大から人頭大の礫で構成されており、特に拳大もしくはそれより小さな礫が多い。南東－北西方向に伸びる長径 2.8 ｍ、短径１ｍほどの楕円形の範囲であり、さらに北西側では、0.6 ｍ代の大型の板石や人頭大の礫によって北方向へ 0.8 ｍほど突出しており、平面形は二股に分かれているようにもみえる。

集石８からは古墳時代前期の土師器（1356 ～ 1358）が出土している。礫と共に廃棄されたものの可能性もあるが、礫の配置状況や南東側にある平坦面との関係から、人為的に配置された可能性もある。ただし、先述した集石７の規模や構造、礫の大きさが異なり、これらが関連するかどうかは不明である。

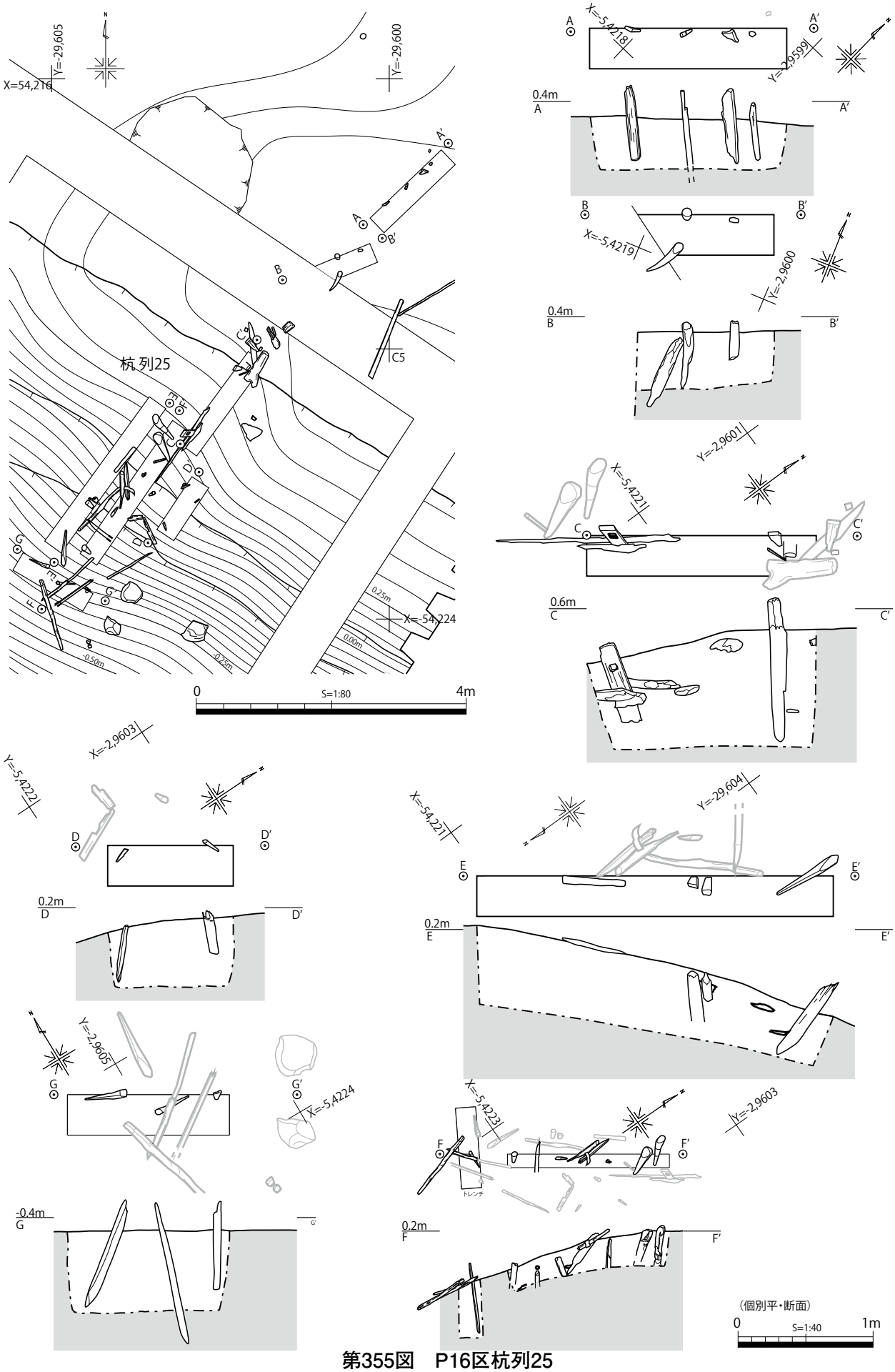


第354図　P16区土坑10

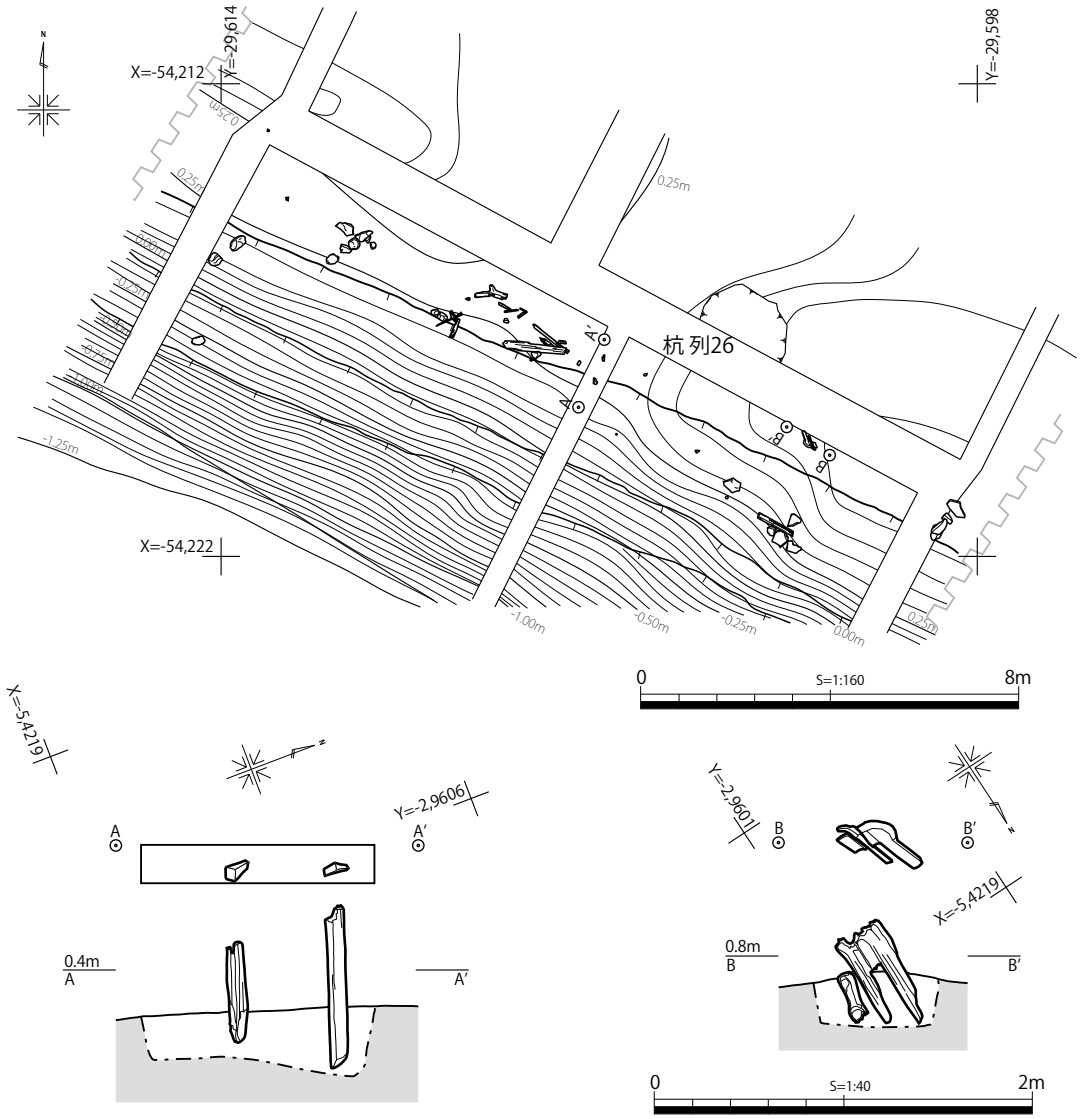
第４項　最終面検出の遺構（縄文時代晩期～弥生時代後期）

１　概要

P16区の最終面は、河道６完掘後に、第１項で示した「Ⅴ・Ⅵ層」を掘削した状況である。Ⅶ層以下については、明確な遺構や遺物がほとんど見られないことや調査期間の関係から、「Ⅴ・Ⅵ層」掘削後に検出した遺構、遺物について記録作成を行い、最終的には重機を使用して、Ⅶ・Ⅷ層を掘り下



第355図　P16区杭列25



第356図　P16区杭列26

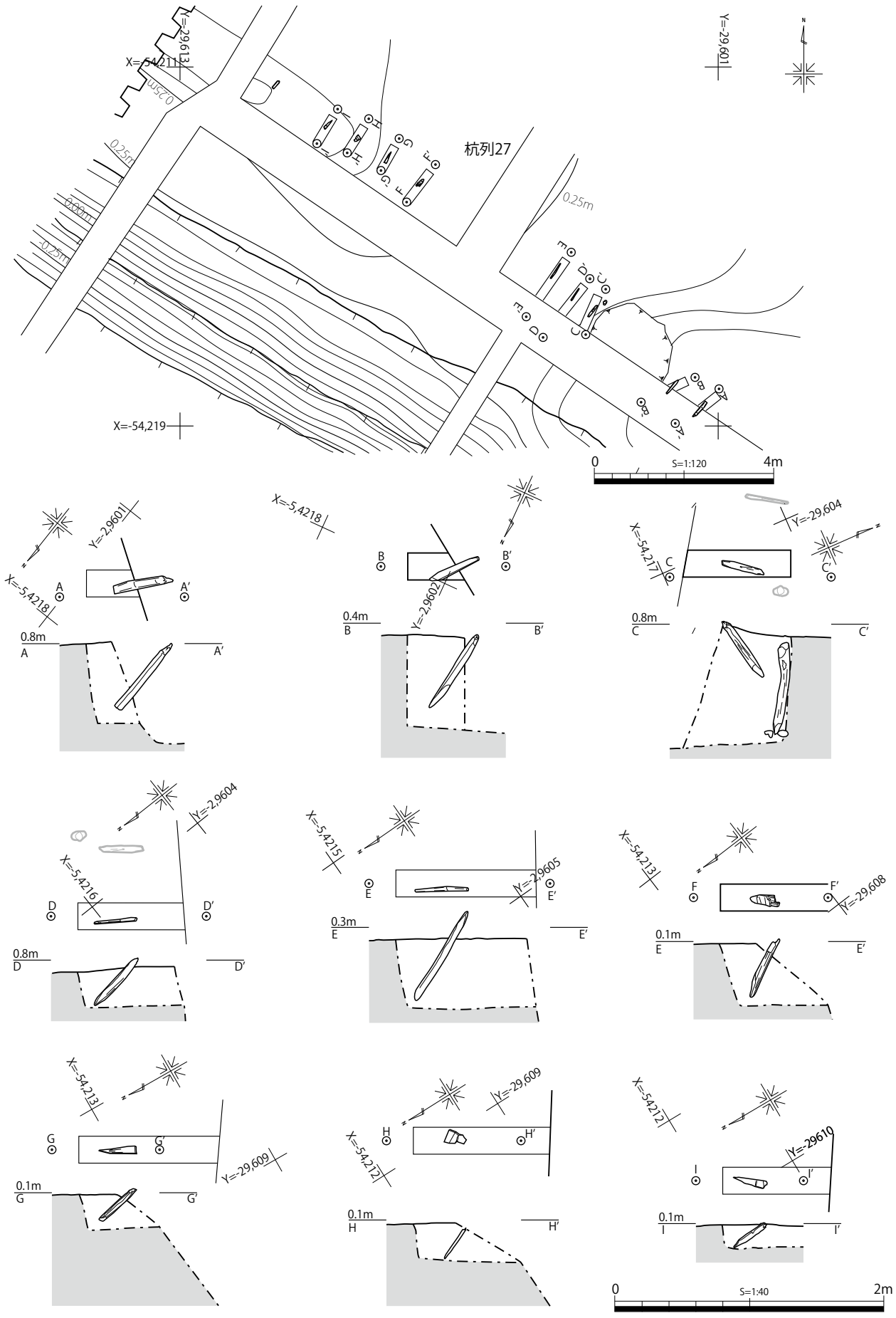
げて、調査を終了している。よって、ここで示した最終面の地形図については、ほぼⅦ層上面の地形を示している。

Ⅶ層上面の遺構として、河道 21 を検出した。河道６以前の自然河道と考えられる。また、河道６の調査区南西部の河道６の底部分では、集石９、杭列 28 ～ 31 を検出した。集石９と杭列群については、後述するように縄文時代晩期後葉から弥生時代前期の遺構と考えられ、河道21とは時期が異なる。集石と杭列については、その形状等から、梁（やな）や鮴（えり）のように漁に関する施設、または水流をコントロールする施設であった可能性がある。

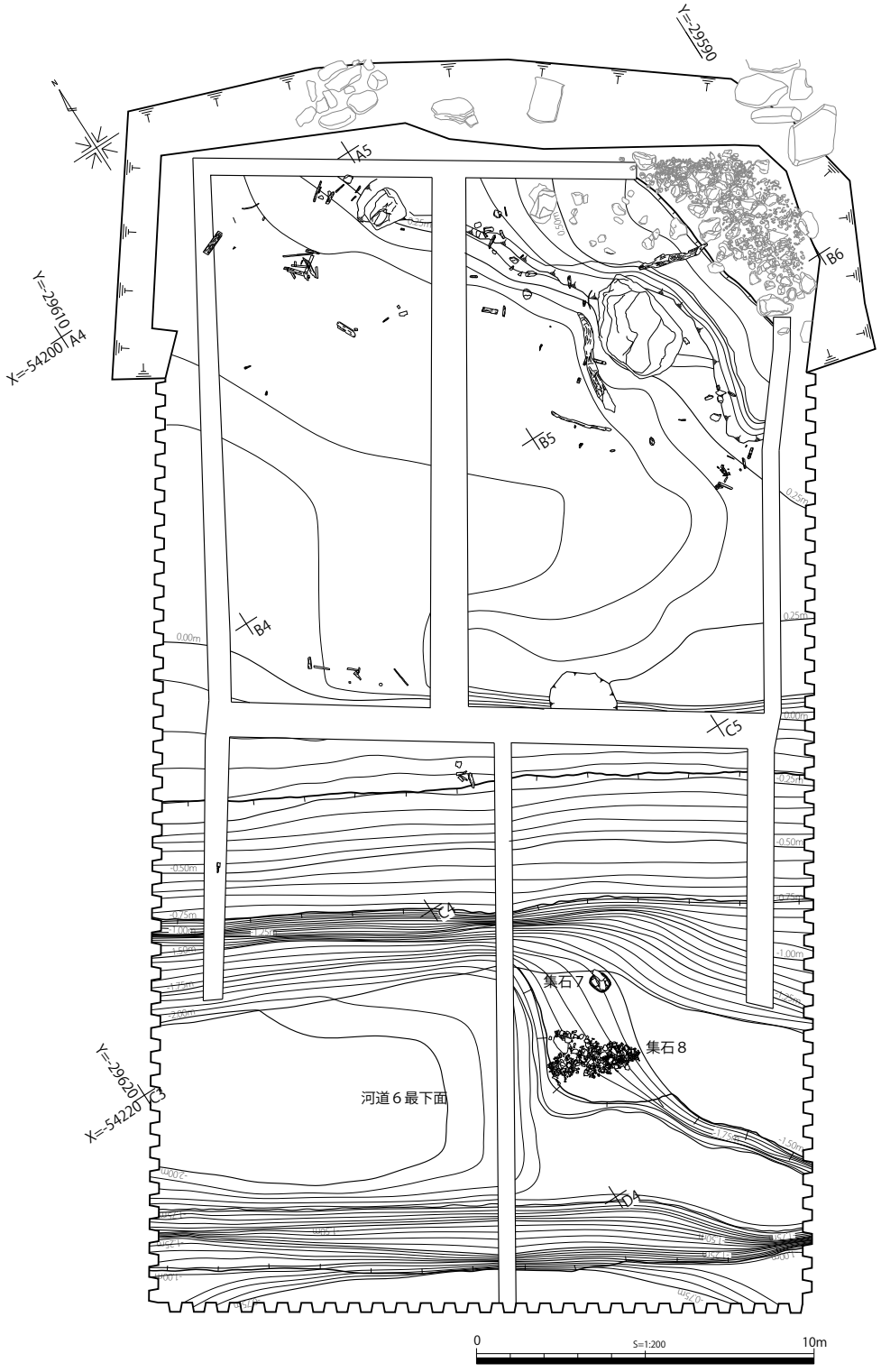
２　河道

河道21（第360図）

河道６と同様に調査区の南西半部を横断する河道である。調査区内で長さ 19 ｍ、幅 18 ～ 20 ｍをはかる。埋土は「Ⅴ・Ⅵ層」となっている。「Ⅴ・Ⅵ層」の中には、盛土の可能性をもつものもあり、護岸のような施設がつくられた可能性もあるが、河道６とは異なり、河道 21 に伴う杭群はみつかっ



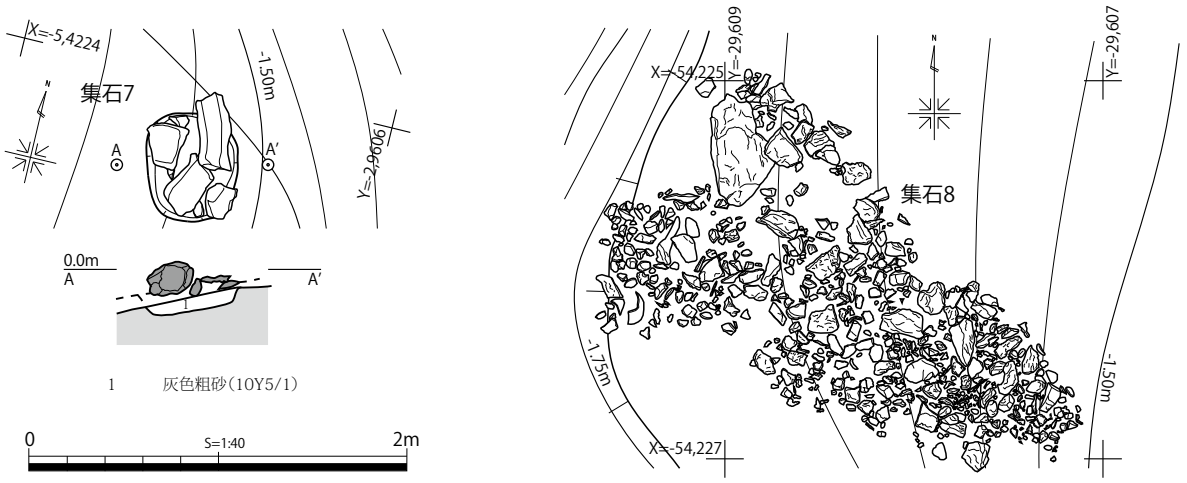
第357図　P16区杭列27



第358図　P16区Ⅴ層上面検出状況図（３）

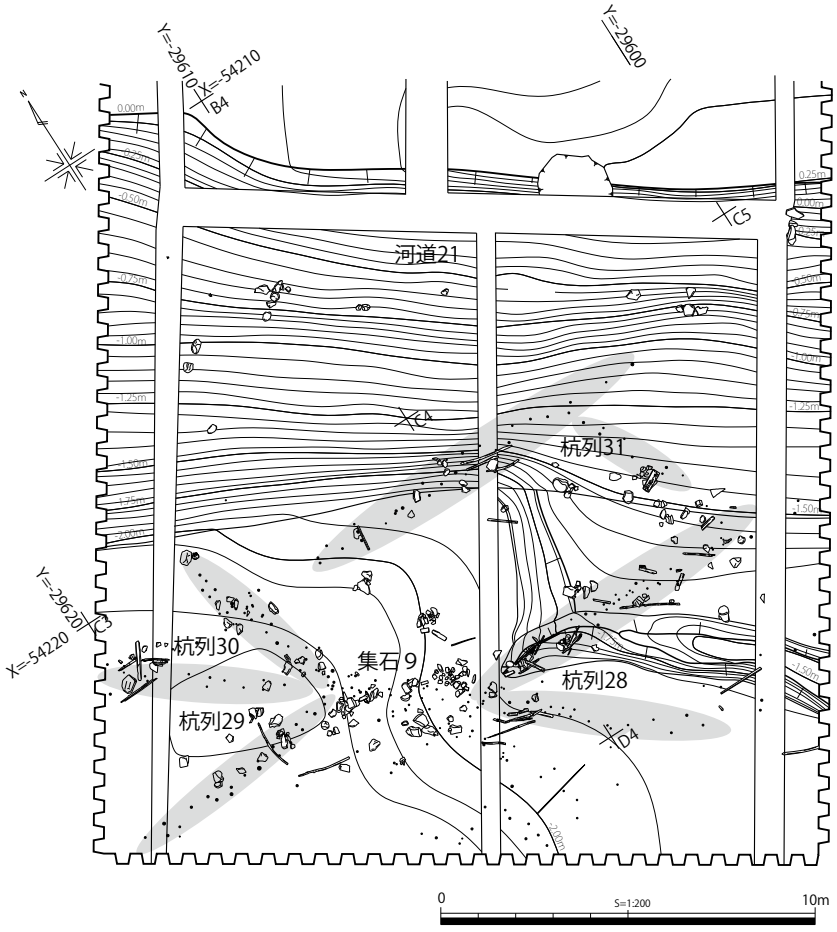
ていない。

Ｃ３グリッドの調査区北西壁付近では、－２ｍのコンタライン付近で傾斜が緩やかとなり、底面はかなり平坦な状況となるが、Ｃ４グリッドの調査区南東壁付近では西方向に突出する方形の緩斜面地が存在する。さらに、その南西端には、長さ8.8ｍ、幅1.6ｍ、高さ30㎝の北西方向に伸びる土手状の高まりが存在する。これは、先述した河道６の最下面で検出した平坦面とほぼ位置が同じで、この



第359図　P16区集石７・８

段階にできた地形がその後も継続していると理解できる。この土手状の高まり部分(第339図Ｃ－Ｃ'のⅦ-９層）は拳大から人頭大の板石を含む礫層であり、盛土状の施設であった可能性もあるが、集石や杭列は関連せず、詳細は不明である。河道21は弥生時代中期から後期に機能していた遺構と考えられる。



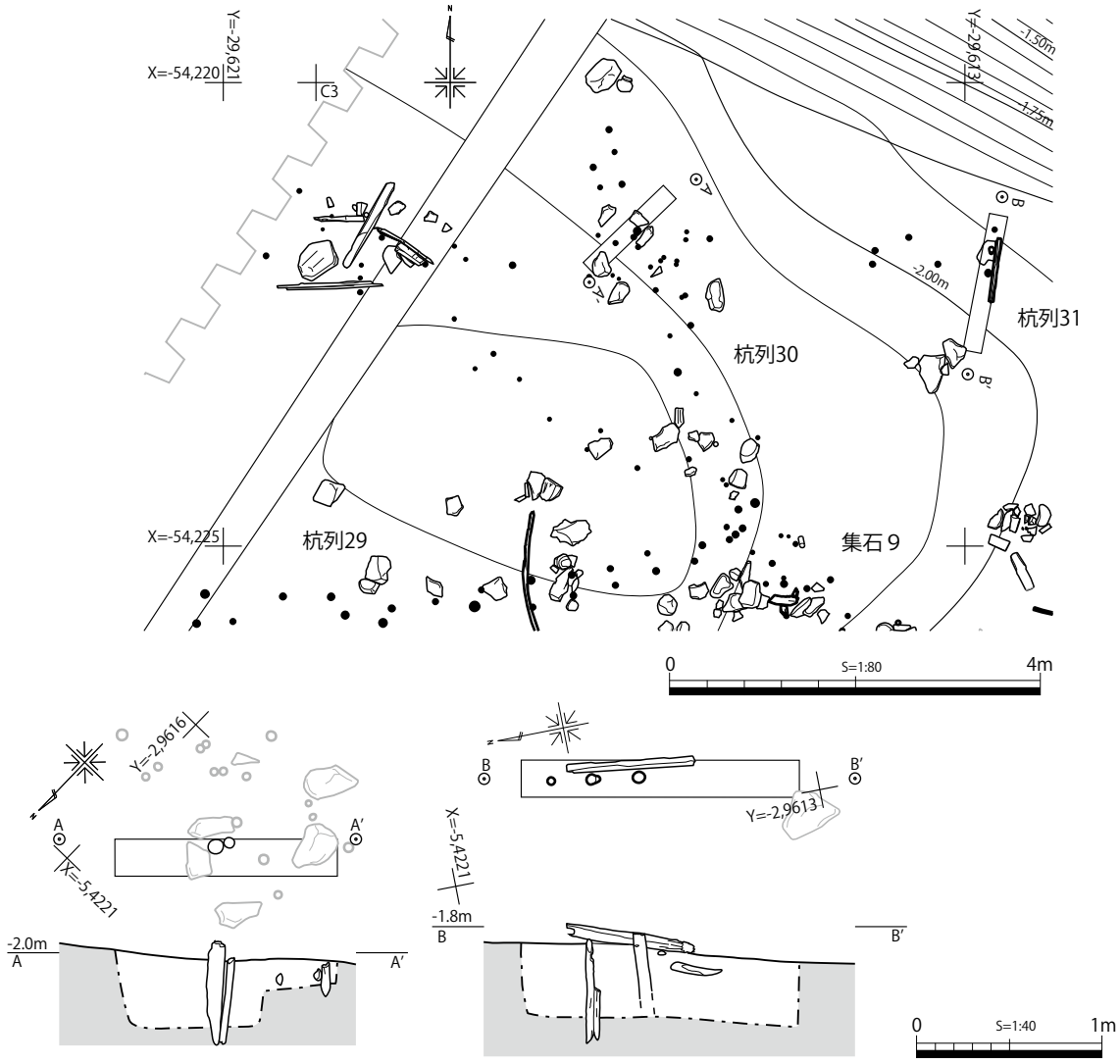
第360図　P16区最終遺構面遺構分布図

３　杭列

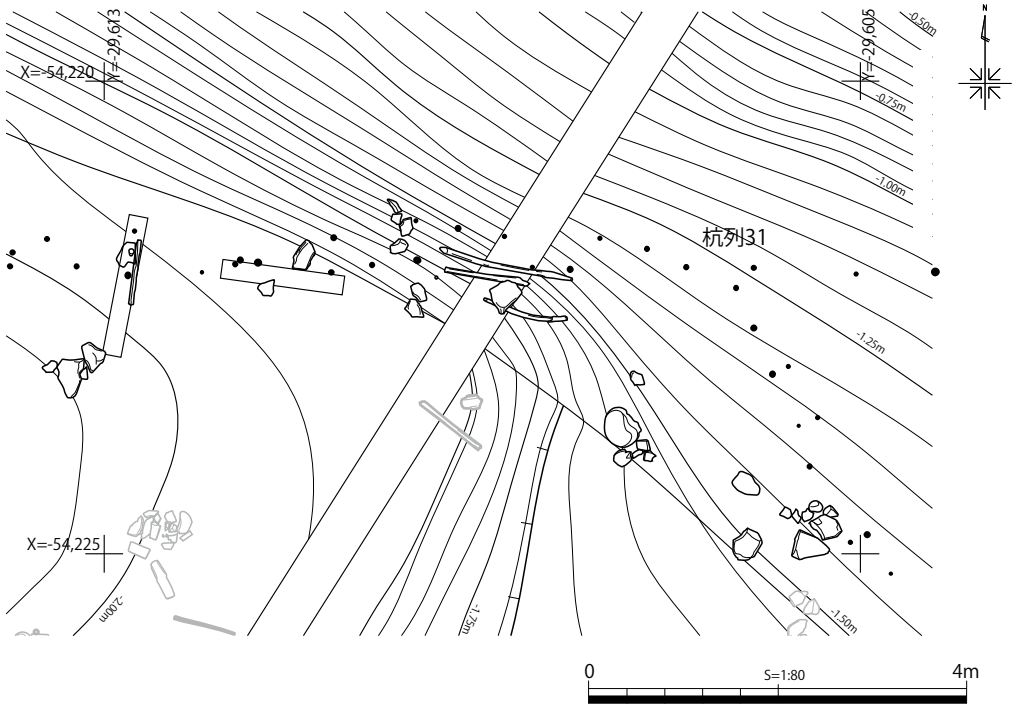
杭列28（第360図）

Ｃ３・C4グリッドの南側に位置し、一部D4グリッドにも認められる。集石９より大きく東方向と南東方向の２列にのびる杭列である。東方向にのびる杭列は33本で、調査区端まで約10ｍ続く。ほとんどが直径５㎝程度の丸木材の先端を尖らせたもので、樹皮のついたものもある。少数ながら角材を使用したものもある。長さは20～80㎝ほどである。南東方向にのびる杭列は25本で、約７ｍ続く。西方向のそれと同様に、ほとんどが直径５㎝程度の丸木材の先端を尖らせたもので、樹皮のついたものもある。長さは20～80㎝ほどである。

また、この杭列の丸木材の放射



第361図　P16区杭列29 ～ 31　集石９



第362図　P16区杭列31

性炭素年代測定では、２σ暦年代範囲で695calBC － 541calBC（73.8％）の結果を得ており、縄文時代晩期後葉から弥生時代前期の遺構と考えられる。

杭列29（第361図）

調査区南西隅、Ｃ２・Ｃ３グリッドに位置する。集石９より大きく西方向へ約６ｍ伸びる杭列である。杭は、集石15内のものも含むと57本で構成され、２列と思われる箇所もある。ほとんどが直径５㎝程度の丸木材の先端を尖らせたもので、樹皮のついたものもある。人頭大の礫も出土し、一部列状になっている。

この杭列の丸木材の放射性炭素年代測定では、２σ暦年代範囲で693calBC － 542calBC（75.1％）の結果を得ており、縄文時代晩期後葉から弥生時代前期の遺構と考えられる。

杭列30（第361図）

調査区南西隅、Ｃ３グリッドに位置し、杭列29の北側にある杭列である。集石９より北西方向と北方向の２列にのびる。北西方向へのびる杭列は23本で、調査区端まで約6.6ｍ続く。ほとんどが直径５㎝程度の丸木材の先端を尖らせたもので、樹皮のついたものもある。調査区端付近では、木材や礫が集中している。北方向へのびる杭列は33本で、約3.6ｍ続く。ほとんどが直径５㎝程度の丸木材の先端を尖らせたもので、樹皮のついたものもある。人頭大の礫も出土しており、これらも列状になっているようである。

放射性炭素年代測定は行っていないが、杭の状況等から縄文時代晩期後葉から弥生時代前期の遺構と考えられる。

杭列31（第361・362図）

調査区中央付近のＣ３・Ｃ４グリッドに位置し、杭列30の東側にある杭列である。東西方向と南北方向の２列が確認できる。東西方向へのびる杭列は25本で、杭列30より1.5ｍ東の位置から、Ｃ４グリッド中央まで約10ｍ続く。ほとんどが直径５㎝程度の丸木材の先端を尖らせたもので、樹皮のついたものもある。長さは20～60㎝ほどである。南北方向の杭列は10本で、東西方向の杭列の東端より約２ｍ西の付近から、南側へ約３ｍのびている。ほとんどが直径５㎝程度の丸木材の先端を尖らせたもので、樹皮のついたものもある。人頭大の礫や杭と同じくらいの径で長さ0.8～１ｍほどの丸木材もみつかっているが､斜面地部分はⅦ･Ⅷ層が残存していることから､同時期のものではない。

この杭列の丸木材の放射性炭素年代測定では、２σ暦年代範囲で644calBC － 551calBC（42.8％）の結果を得ており、縄文時代晩期後葉から弥生時代前期の遺構と考えられる。

４　集石

集石９（第360・361図）

調査区南西側のＣ３グリッド中央に位置する。拳大から人頭大の礫が幾つか集中している箇所があり、まとめて集石９とした。中央付近に人頭大の礫がまとまっており、杭列28・29側に拳大の礫が集中している傾向がある。また礫と共に、直径５㎝程度の丸木材の杭が20本程度みつかっているが、並んでいる状況ではない。

杭列28～30が、この集石９から放射状にのびていることから、これら杭群と何らかの関連を持つ施設と考えられるが、具体的な性格は不明である。

また、集石９の南側にも20本ほどの杭群がある。同じく直径５㎝程度の丸木材の杭であるが、列

状の配置ではない。

報告書抄録

ふりがな	あおやよこぎいせき
書名	青谷横木遺跡
副書名	一般国道９号（鳥取西道路）の改築に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	ＸＸＸⅦ
シリーズ名	鳥取県埋蔵文化財センター調査報告書
シリーズ番号	67
編著者名	濵隆造、下江健太、福島雅儀、八峠興、原田克美、坂本嘉和、梅村大輔、百橋明穂、渡辺晃宏、保坂善真、割田克彦、門脇隆志
編集機関	鳥取県埋蔵文化財センター
所在地	〒 680 － 0151　鳥取県鳥取市国府町宮下 1260 番地　TEL（0857）27 － 6711
発行年月日	2018（平成 30）年３月 26 日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
あおやよこぎいせき 青谷横木遺跡	とっとりけんとっとりし 鳥取県鳥取市 あおやちょうあおや 青谷町青谷	31201	18-0478	35° 30′ 31″	134° 0′ 34″	20130405 ～ 20151225	14,884.9㎡	一般国道９号（鳥取西道路）の改築

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
青谷横木遺跡	集　落	縄文時代	杭群、杭列	縄文土器、石器、木製品	・補修痕跡のある丸木舟が完形で出土
	集　落	弥生時代	盛土遺構、木造構造物、畦畔、石敷遺構、河道	弥生土器、石器、木製品、骨角器、玉類	
	古　墳 集　落	古墳時代	阿古山 24 号墳 盛土遺構、整地土、木造構造物、河道	土師器、須恵器、木製品、銅鏡、玉類	
	官　衙 交通遺跡 生産遺跡 祭祀遺跡	古　代	掘立柱建物跡、道路遺構、柱穴、条里遺構、盛土遺構、河道	土師器、須恵器、墨書・墨画土器、施釉陶器、製塩土器、権衡、木簡、木製祭祀具、木製品、獣骨、鉄製品、銅製品	・古代山陰道と考えられる道路遺構を条里遺構とセットで確認。 ・道路遺構では柳の街路樹を検出。 ・「女子群像」が描かれた板絵が出土。
	集　落	中・近世	石積遺構	陶磁器、鉄製品等	

要　約

青谷横木遺跡では縄文時代から中世に至る遺構や遺物を確認した。

縄文時代後･晩期では青谷平野に存在した潟湖での生業活動が窺え、丸木舟が完形で出土した。弥生時代から古墳時代にかけては、山裾に大規模な河道が形成され、護岸施設のあり方や出土遺物等からは山裾に小規模な集落が営まれていた可能性が高い。平野部には畦畔や水路が検出され、低湿地を利用した水田が営まれた。古墳時代後期では阿古山古墳 24 号墳を調査し、横穴式石室を持つ円墳であることが判明した。

飛鳥時代の７世紀末から８世紀初頭には古代山陰道と考えられる道路遺構が確認され、10 世紀後半の道路改修時には条里遺構が一体で構築されていることが判明した。また、道路の外側に築かれた道路外盛土では樹木列が検出され、10 世紀後半に街路樹として柳が植えられていたことが明らかになった。出土遺物では木簡や木製祭祀具が特筆され、２万点を超える木製祭祀具は大規模な律令的祭祀が執り行われたことを示唆し、木簡の内容からは官道沿いに官衙施設が造営されていたことが窺える。その他に、飛鳥時代の『女子群像』が描かれた板絵や山岳文様が描かれた銅板が出土し、国内のみならず東アジアにおける文化交流を示す資料といえる。

鳥取県埋蔵文化財センター調査報告書67
一般国道９号（鳥取西道路）の改築に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書ＸＸＸⅦ

鳥取県鳥取市青谷町

青谷横木遺跡Ⅰ

遺構編

発　行　2018年３月26日
編　集　鳥取県埋蔵文化財センター
〒680－0151　鳥取市国府町宮下1260番地
電　話(0857)27－6711
発行者　鳥取県埋蔵文化財センター
印　刷　有限会社米子プリント社
〒683 － 0045　米子市旗ヶ崎2218
電　話(0859)22－2155